

緋弾に迫りしは緋色の
メス

青二葵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人の少女がいた。その少女の事はジル。または、ジャックと呼ばれていた。だが、当の本人は名字も本当の名前すら知らない。ただ、家族はいた。そして、父親から一つの頼みごとを受ける。

一方、神奈川武偵付属中学の3年に在籍していた遠山キンジはヒステリアモードを利用され続ける日々を過ごしていた。鬱になりながらも、ある日キンジはその少女と出会う。

——彼女が殺人鬼であるとも知らずに。

目次

第1章：暗躍、接近、そして懐柔

プロローグ：Jill the Ripper

1：白野 霧と遠山 キンジ | 1

2：奇妙な関係の始まり | 8

3：パートナー | 27

4：間宮襲撃 | 47

5：リュパンとジル | 65

6：気まぐれの接触 | 95

7：因果応報 | 115

8：嫉妬と尾行 | 142

9：理子の決意 | 175

10：浸透していく闇 | 191

11：ロシアの人間兵器（ヒューム・ア
モ） | 215

12：小さな教授 | 247

13：新しい夜明け | 263

第2章：東京武偵高校 | 283

14：入学試験 | 314

15：春の異変 | 343

16：1-A組 | 363

17：武偵高の日常 | 380

18：嫉妬の巫女 | 400

19：勘違いから始まる決闘 | 417

20：毒の一撃（プワゾン） | 443

21	マタアイマシヨウ	482
22	折れゆく心	503
23	ポイント・オブ・ノーリターン	
524		
第3章：交錯する道（クロスロード）		
24	緋弾との出会い、そして帰還	
565		
25	濃い1日の終わり	598
26	火野ライカとの出会い	641
27	殺しの才能	671
28	武偵：白野霧	715
29	深まった溝	753
30	毒の牙	798

31	嵐の前の静けさ	831
32	フォーリング・ダウン	856
33	捕食者と観察者	905
34	嵐の終わりの夜	929
第4章：カゴノトリ		
35	白野式性教育	947
36	それぞれの恩惑	976
37	聖女の葛藤	1014
38	巫女が見た未来と東京湾	1042
39	整って行く舞台	1071
40	海面下のダンス	1113
41	深刻化した事態	1132

50	：巡る予感	—	1380
49	：決別	—	1357
1343			
48	：誰が為	：尽くす心は水の泡	1321
47	：前途多難	—	1283
46	：Who's Jack?	—	1255
45	：鏡に映る本性	—	1234
44	：巡り合わせ	—	1234
43	：次の舞台へ	—	1213
42	：銀幕の劇場	—	1157
第5章	：切り裂きと人斬り（リッパード・リッパード）	—	1157

62	：End of prologue	—	1797
61	：夢の狂宴	—	1779
60	：親娘	—	1716
59	：第二の可能性	—	1674
58	：観る者達	—	1646
57	：布石	—	1597
56	：ささやかな日	—	1560
55	：感情の板挟み	—	1530
54	：退屈しない夏の始まり	—	1530
53	：探偵と犯罪者（リバーシブル）	—	1489
52	：夜霧の摩天楼	—	1451
51	：嘆きの空	—	1405

e

第7章：裏側の役者達（アクター・オブ・

ロンドン）

63：数学者のチェス盤へ

64：盲目の歌姫

65：逆位置の死神

66：時は金なり

67：ライヘンバッハ

第8章：人形狂演劇（マリオネットパー

ティー）

68：ゲームの前座

69：路地裏のキャスト

70：修学旅行Ⅰ

1825

71：人形と人間の境界

72：雨のち晴れ

73：感情整理

74：時速140キロの開戦

75：呉越同舟

76：自らの意思

77：新しい人生

78：Next Stage

第9章：運命の天秤と輪（フォーチュン・

メッセージ）

79：エニグマ

80：灯台下暗し

81：過去のしがらみ

202067

21202067

215821

218321

220621

223622

225822

230222

236222

237423

246232

28

237423

92	：家族のために	2695
91	：物事の本質	2659
2637		
90	：ロシアより家族愛をこめて	2614
89	：人間と兵器の境界	2588
88	：ジーフオース	2588
2560		
87	：師団会議（ティーンカンフ）	2540
86	：アフターパーティー	2506
85	：文化祭1日目	2458
84	：希望を持たせるほど	2428
83	：目は口ほどに	2400
82	：気の長い話	2400

第10章	：幻想の日常（ア・ライフ・レス・	2952
100	：それぞれの日常	2917
99	：どうしようもない真実	2887
98	：Good for all	2854
97	：体育祭（ラ・リツサ）後編	2835
96	：体育祭（ラ・リツサ）前編	2802
95	：勝利の形	2764
94	：仮初の生活	2720
family		2720
93	：Welcome to the	

オリジナリー)

1 0 1	：ようこそ一般社会	—	3296
1 0 2	：空虚な日常	—	3299
1 0 3	：平和な日常	—	3303
1 0 4	：可能性の日常	—	3305
1 0 5	：楽しい日常	—	3308
1 0 6	：幻想の日常	—	3309
1 0 7	：離れてく日常	—	3313
1 0 8	：日常と非日常	—	3316
1 0 9	：変貌する日常	—	3343
1 1 0	：騒がしくも楽しい非日常	—	3394
3218			
1 1 1	：さようなら日常	—	3250

1 1 2	：移り行く日常	—	3272
1 1 3	：日常からいつもの非日常へ	—	3294

第1章：暗躍、接近、そして懐柔

プロローグ：Jill the Ripper

人生は楽しいことで溢れる。

私にとってはそう。

だって、こんなにもたくさんの人がいるのに楽しくない訳がない。

色んな人がいて、個性が違うのだから反応も違う。

さらに状況が違えばその人の違う反応が見れる。

だから――

「アナタの個性を見たいな〜ってね」

「お願いだ！お願いだ！待ってくれ！俺を殺さないでくれ！ Please! Wait! Don't kill me!

「ごめんね〜。今の私、日本じ〜ん。だから、英語ワカリマセ〜ン」

悲しいね〜。

言語が通じないが故の弊害、つまりは意思疎通が図れないって言うのはホント悲しいことだよ。

お父さんに言われて、緋緋色金だとか特別な金属を研究してる機関の職員の抹殺と施

設の破壊を頼まれてやってきたはいいけど、呆気ないもんだね。

警備はまあ、嚴重だったけど……職員と警備員の何人かを揺さぶればそれはないも同然だし。

そして、お役目ご苦労さんってことで揺さぶった人たちも他の職員と一緒に、永眠していただきました。

証拠は残さない意向なので、私をチラッとでも見たら死にます。

「さてと、大分満足したので、いつもなら楽しむところですがあつさり死んでもらいましょう」

私の身長のは半分はありそうな大きな鋏を片手で振り上げ、床にへたり込みながら壁にもたれている男性に向けて振り下ろす。

それは心臓を貫き、壁に鋏が当たるのを感じる。

貫いても少しは意識があつたみたいだけど、少し呻いた後、血を吐きながら動かなくなつた。

試しに左右に鋏を捻ってみるけど、肋骨と胸の肉の感触だけで反応はない。

そりや当然だよ、死んでるんだから。

「お仕事終了つと。ジルちゃん満足……してないな……」
ダメだ。

やっぱり、どれだけ殺しても完全には満足はしない。

すごく楽しくて、すごく興奮したけど……ダメ。

うくん、何がいけないんだろ。

ま……いつか。

楽しかったし、今日のところはいいかな？

ちらりと後ろを見れば、ストロボのように点滅しながら点灯する蛍光灯が私が来た部屋
の惨状を映し出す。

ある者は壁にキリストのように貼り付けられ、ある者はアルカナのハングドマンのよ
うに天井から逆さに釣るされている。

壁の白と人の赤、そして黒のコントラスト。

我ながら実に素晴らしい出来だね。

それから私は陽気に鼻歌を歌いながら研究所の外を目指す。

途中、暗闇の中ハザードランプが点いているだけの両側がガラス張りの廊下に差し掛
かり、横を見てみると別の部屋の様相が映る。

すると目に飛び込むのはガラスにべつとりと付いた赤。そして、頭部のない研究員た
ちが転がっている。

まるでホラー映画かサイコ映画だね。

自分でしといてなんだけど。

できればこの惨状を誰かにすぐ見せたいけど、生憎と録画機器やカメラとか持つてきてないんだよね。

理子なんかは喜んでくれそうだけど、ホント見せられなくて残念。そんなことを思いながらも研究所の外に出る。

しかしなんで、海辺になんかに研究所を立てるんだらうね。

夜だから、潮風に当たると寒いなくなて、崖つぶちに立ちながら思う。

小波さざなみの音だけで静かだね。

世界に私一人しかいないみたいな錯覚を受けそうだ。

なんて、センチメンタル臭いことを心の中で呟いてみる。

「さてと……帰りますか」

そして、私は崖から飛び降りる。

15メートルか20メートルはあるけど関係ない。

持つてたデカイ鋏を崖に突き立てて、勢いを少し殺したあと下の岩場に着地。そしてすぐに跳躍。

魚雷を改造した乗り物『オルクス』の近くまで飛んだ。

それから荷物をパツと入れる。

荷物と言っても鉢だけしかないから、それを入れて私も乗り込む。あゝ、潜水するのは少し後でいいや。

ハッチを開けたまま操縦し、岸から結構な距離を取る。

波に揺られながらも立ち上がり、研究所のある方へと振り返る。

そして、懐からスイッチを取りだして、ONつと。

その刹那、爆発。

夜の海辺に赤い火柱が立ち上り海面を照らす。そのあと、轟音が遅れてやってくる。

「Beautifui」

絶景だね。

これにて任務完了と……

ハッチを閉じ、すぐさま潜水モードに移行。

こうして私は帰路に就くのであった。

潜水すること数時間――

ガコンと、何かと接触する音がしたので目覚めてみれば、どうやら着いたみたいだね。

ハッチを開けるとオルクスがいくつも立ち並ぶ格納庫。

「よつと、I, m home!」

床に降り立って帰宅を知らせるけど、反応なし。

理子あたり待って来てくれるかと思っただけ……まあ、いいや。お父さんに報告して寝よう。

そして、移動すること数分。

誰とも接触せずにある扉の前で、立ち止まりノックしようとする——

「入りましたまえ」

ノックする前に扉の向こうから許可が出た。

別に驚くこともなくそのまま静かに入る。

「ただいま戻ったぞ親父」

と私は帰った時の女性の声とは違い、男性の声で答える。

外見は10代後半のラテン系アメリカ人の少年に似せてある。

「お帰り、ジャック君。そろそろ帰ってくるころだと推理していたよ。それと、しばらく

は誰も来ないから変装は解いて貰っても構わない」

「分かったよ、お父さん」

そう言ったあと、私は金髪のカツラを取り、結わえていた髪をほどくと、ピンクとブラウンのグラデーションをした長い髪が垂れ下がる。

カラーコンタクトは取らなくてもいいや。

どうせ部屋に戻るときに変装しないといけないし。

喉を数回たたいて、変声術をやめてボイスチェンジャーも取る。

「こんな感じでもいいかな？」

「ああ、それでいいとも。では、改めてお帰りジル君」

「うん、ただいま。お父さん」

私はお父さんに笑顔で言う。

英国紳士と言う印象がある、爽やかな顔をした青年。

武偵とか呼ばれる機関にとって理想の人物とされ、その起源となった人。

それが私のお父さん——シャーロック・ホームズその人である。

1：白野 霧と遠山 キンジ

それから私はお父さんに研究所の破壊と研究員を抹殺した旨を伝える。

一通り報告は済ませたし……今日は眠いし帰ろうかな？

そう思っておやすみ、と言ったあと、お父さんに背を向けた時だった。

「待ちたまえ、ジル君。もう一つ、君に頼みがある」

「うん？」

珍しいなあ。連続で任務なんて……でも待てよ、任務じゃなくて『頼み』だから別件なのかな？

なんて考えつつも、再びお父さんに向き合う。

「概ね君の予想通りで間違いないよおわひジル君」

「そうなんだ。で？ で？ どんな頼みなの？ 早く教えてよ」

お父さんが任務とは別に私に頼み事するなんて、治療以外なかつたから結構楽しみなんだ。

「はは。まあ、落ち着きたまえおわひジル君」

お父さんは、にこやかな微笑みで私にそう言った。

まあ、ちよつと楽しみにしすぎたかな？

「頼みと言つても、簡単な話だよ。君にある人物とパートナーになつて欲しい」

「パートナーか」

実際に組むのはいいけど、あまりつまらないと殺しちゃうかもれないけどいいのかな？

私について来れると言うか、気が合うのは理子だけだ。

そう言えば、理子も結構強くなつたな。

お姉ちゃんは鼻が高いよ。

「大丈夫だよジル君。君としても彼を気に入るはずだ」

「んん。お父さんがそう言うなら間違いないんだろうけど、資料とかあるの？」

「ああ、僕の手元にあるのがそうだ」

私はお父さんに近づき、机の上に置かれた資料を手にとつて見る。

えくと、名前は……『遠山 キンジ』か。

これはこれは。

「金一の弟さんか」

「その通りだよジル君。遠山 金一を勧誘した君なら当然、その弟も知っているだろう」

「うん。直接は会つてないけどね」

金一は私の中ではお気に入り部の部類だ。

だから、その弟である彼も気になってる訳なんだけど……

「ねえ、お父さん」

「なんだい？」

「キンジ君のパートナーになればいいんだよね？」

「その通りだよ」

「じゃあ、イ・ウーに勧誘するの？」

「勧誘ではないよ」

「じゃあ、どうやってパートナーになるの？」

私の疑問にお父さんはパイプを吸い、間を置いた。

一瞬の静寂が部屋を支配した後、お父さんは煙を吐きそれから答えを言った。

「君が彼のいる場所に行くのだよ。ジル君」

……彼のいる場所——まさかね。

答えは手元の資料にある訳なんだけど。

「……神奈川武偵付属中学」

「そう。君はこれから『武偵』として彼とパートナーになって貰いたい」

「……………」

再び静寂が訪れるが今度は長い。

今の私を感じているのは脱力感、もしくは虚脱感、そして絶望感。

武偵——武装探偵の略で、目の前にいるお父さんのような戦えて、犯人を追いつめることのできる探偵を育成する機関。

私のような殺人鬼を謳つてる者とは対極の存在のような感じ。

何よりも耐えがたいのは——

誰も殺せない……

武偵法9条に確か殺人の禁止を明記してたはず。

つまり、私の生き甲斐が奪われる。

もつと、色んな人を観察したいのにそれができなるとなると死活問題だよ。

でも限界まで我慢した後には誰かを殺したらすごく快感を得る事が出来るんじゃないか？　なんて、思ったりもしたけどやっぱり我慢は良くない。

でも、組織に属する以上その組織の規則を守らないと怪しまれるし、一体どうしたらいいんだろう……

と、私がうんうん悩んでるとお父さんが微笑みながらこちらを見ていることに気づく。

「えーと、なに？」

「ジル君が心配していることは自分の性質のことだろう。なら、心配はない。いつも通り定期的に君に任務を与える。それをこなせば君の殺人欲はある程度抑えられるだろう」

「そっか、じゃあ安心だね」

「それに、僕としてもそろそろ君には外の世界をもう少しゆつくり見て来て欲しくてね。これを親心と言えいいのか僕には分からないが」

「うん。ありがとうお父さん」

「部屋に戻って早速準備をすると良い。もう、手続きは済ませているから」

「うん、分かったよ」

それから私は踵きびすを返し、変装してから今度こそお父さんの部屋を出た。

しばらく艦内を歩いてると、無骨な鉄の通路の向こう側に見慣れた人影が右から左へと通ったのを発見した。

こつちを見てた訳じゃないから、多分気づいてない。

ちよつと驚かせてみよっかな。

静かにかかとかから踏み込み、音が出ないようにして小走りする。

行き止まりの通路を左に曲がると、目標の人物の背中をとらえた。

距離は5メートルほどかな？

小走りじゃなく、早歩きで目標に近づく。

すぐにその距離は縮まり、腕が届く距離になった。

「やあ、ジャンヌ」

「うわあああああ!?!」

両肩を掴んで声を掛けると、彼女は肩を大きく跳ねあげる。

その瞬間、私の両手を振り払い大剣であるデュランダルが顔の右側から迫る。

だけど、慌てる必要もないし避ける必要もない。

風を切るような速さで迫ってるけど、私には見える。

その大剣デュランダルを左手の中指と人差し指で挟み、止める。

渾身の力、と言う訳ではないけどそれなりに勢いがあったのにピタリと剣が止まった

ことに驚きの表情を浮かべてるのはジャンヌ・ダルク30世こと、ジャンヌである。

ふふ、驚きに満ちた良い表情だね。

「!?! ——何者だ!?!」

「嫌ですねえ。いい加減、慣れてくれると嬉しいのですが」

私は優男で気障な少年を演じる。

まあ、いつも公おみやげの場では顔も声も変えてる上に仕草も変えてるから私がジャックかジ

ルだと名乗るまでは誰も気づかないし、ジャンヌのような反応も仕方ない。

なんてったって、私の本当の顔を知ってるのはお父さんも含めて3人だけだからね。

「……ジャツクか」

「そうですよ。思い出していただけでしたか?」

「思い出すも何も、いつも違う姿ではないか。この間は東洋系の成人女性のような姿だったと思うが?」

「そう言えばそうでしたね。いやはや、失敬。なにぶん、顔が多いものですから」

と、大袈裟なジェスチャーを加えながら話す。

きつと、他の人から見ると舞台の演出家のようなイメージになんだろうなく、とかぼんやりと考えると、

「ところで、私に何か用か?」

ジャンヌが顔には出さないものの不機嫌そうな口調で聞いてきた。

「いえ、特に用とかはありませんよ。ただ見かけたので、少々驚かしてみたかっただけですの」

そうあつげらかに言うと、ジャンヌは少しジト目になった。

悪いね。本当に特に用はないんだよ。

「おやおや、その様な表情は似合いませんよ。貴女のような方には、女神のような微笑みが似合います」

私がそんなくさいセリフを言うと言つてジャンヌは――

「ジャック……本当のお前はどれなんだ？」

と、突然真剣な表情で聞いてきた。

本当の私か……お父さんとかと二人きりの時がそうなんじゃないかな？

実際、本当の私なんて私にも分からないし、分からなくても特に問題はない。

ただ、これだけは言えるかな？

「本当の私はありませんが、本当の顔ならありますよ？」

「……………」

「父上と理子と、あともう一人以外には見せたことはありませんがね」

「なに!？」

この言葉にジャンヌは眼を見開き、さつきとは違う驚きの表情を浮かべる。

おっと、機嫌が良いから口が滑つちやつたかな？

ちよつと釘を刺しとかないと。

「おや、失礼。少しばかりお喋りが過ぎてしまったようです。今のことは他言無用で、まだ死にたくはないでしょう？」

「——っ!？」

ニヤリと、笑いながら嘔くとジャンヌは声にならない声を上げる。

ん？ ちょっと、殺気を出しちゃったせいかな。

でも、ジャンヌもどんな表情してくれるか気になるところなんだよね。

今は仲間だから手を出さないけど、敵対する機会があったらいいな。

そんなことを思いながら、私は硬直しているジャンヌの横を通り過ぎ、自分の部屋へと続く道を進んでいった。

◆

◆

◆

「ハア……ハア……」

私は奴——ジャックが横を通り過ぎ、見えなくなった瞬間膝を折り、その場にへたり込んだ。

息が……荒くなっているのが自分でも分かる。

そして、安堵感と同時に汗が噴き出すようにして流れる。

それほどのプレッシャー……本当に奴は『人』なのか？

少しとは言え、奴の殺気を浴びてこの様だ。

あれほどの男……いや本当は男なのか女なのか、はたまた老人なのか青年なのかすら分からない。

その上、私のデュランダルを本気ではないとは言えたつた指二本で止めたあの實力。

「あまり——いや、絶対に敵対はしたくないな」

プロフェシオン
教授——シャーロックの寿命はそう長くはないと多くの者が囁いている。

つまり、イ・ウーの崩壊もそう遠くはないのだろう。

そうなれば今、取りきめの最中である『宣戦会議』バンデイレも行われる。

戦い、特に殺人が認められているとなればジャックは必ず現れる筈だ。

それまでの間に、奴をこちら側に引き込むか中立を保つように説得しなければ——終わりだ。

奴は殺人鬼の割には一度取り決めた契約は反故にしたりなどしない。

考えてみればまるで、伝承の悪魔のようだな。あまり、笑えんが……

もし敵対したなら……：場合によっては止められない事もないだろうが、それでも犠牲は多く出るだろう。

今回の話で幸か不幸か思わぬ情報が手に入った。

意外だったのが、シャーロックの他に奴の素顔を知る者がいると言うこと。理子がその一人と言うことも意外なことだ。

だが、正直扱いに困る。

下手に漏洩させて、奴の機嫌を損ねれば私の屍がどこかに転がることになる。

それに、この情報をどう生かせばいいかも今の私には分からない。

まさか、わざと情報を私に握らせて殺すための大義名分を得るのが目的だったのか？

殺人鬼の割に妙なところで頭もキレル奴のことだから何かしらの意図があるのかも
しれない。

まさしく、理性のある獣。

いや、獣など生易しいものじゃない。正しく化物。

でなければ、あのパトラが奴の影に怯えるはずがない。

しかし、奴を味方につけるにはどうすればいいのだろうか？

……………

……今、考えても仕方がないか。

私はデュランダルを杖代わりにして立ち上がり、自分の部屋のある方へと歩みを進め
た。

◆ ◆ ◆
お父さんの『頼み』を受けてから三日後。

私は今、神奈川武偵付属中学に向かっている。

世界一の探偵と言われるお父さんの手の回しようが、なんと早いことか。

住居の手配から、編入の手続きまで既に完了済み。

昨日、面倒くさかったけど学校の方に行って試験を受けてきた。

結果としてはAランク。

本当ならSランクだかRランクだか取れるんだけど、精神安定剤を投与してから試験を受けたからいつもよりも力が出なかったんだよね。まあ仮にそんなランク取つてたら、目立って仕方ないからしいけど。

でも、薬を投与してなかったら先生を多分殺してたし、お父さんの頼みが叶えられなくなつちゃう。

そう言うのは避けたいんだよね。

あと、学校とか言うのを私は行つたことがないから少し楽しみにしてたりする。

ここにいる間は人を殺せなくなるのがかなり残念だけど。

とか考えてる間にも職員室に到着。

ノックして――

「すみませ〜ん。編入することになった白野 霧でーす」

と言いながら入る。

ちなみに白野 霧と言うのがここでの私の名前。

ショートカットに黒い髪で、瞳はブラウン。

まあ、この方が日本人に馴染み易いし特に怪しまれないで済む。

最初はアルビノみたいな髪の色と瞳にしようと思つただけだね〜。さすがに目立ち過ぎだし、却下した。

顔立ちの方は夾竹桃を参考にしたから少し似てるかもしれないけど少し童顔かな？

声と性格はお父さんと話す時とあんまり変えてないけど。

で、私が入ると近づいてくるジャージ姿の女性が一人。

確か、矢貫先生やぬきだっけ？

「え〜と、お前が白野か」

「はい」

「ふ〜ん」

なんか、すごくジロジロ見てくる。

取りあえず愛想笑いをしておこう。

「お前は……よく分からんな」

いきなり何を言い出すんだか……

でも、本当の私なんてないからよく分からなくて当然だろうけどね。

「それじゃあ、ついてきな。もうすぐ、ホームルームの時間だから」

「りよーかい」

矢貫先生に連れられて、3―Aの教室の前まで来る。

「あたしが言ったら入って来い」

「はい」

返事をした後に先生が教室の中へと入ってくる。

楽しみだなく、遠山 キンジ。

◆ 「へっくし!!」

◆ なんだ？ 春先に風邪か俺？

ただですら、色タストレス（主にヒステリア絡み）で胃が若干、痛い気さえしてくるのに勘弁して欲しい。

そんなことを俺——遠山 キンジ——は机に頬杖しながら思っていると、担任である矢貫が入ってきた。

「席に座れ〜」

人。 気だるそうな声を出しながら矢貫が教卓で声を掛けるが、タラタラと移動するのが数人。

お前ら学習しろよ。

ほら、矢貫がいつ取り出したか分からんけどサバイバルナイフ握ってるぞ。

そして気づいたのか、それを確認したさつきタラタラ移動していた奴らが機敏に席に着く。

俺らのクラスの担任は徒手格闘を専門に教えている筈なんだが、なんでナイフの方が

得意なのか意味が分からん。

しかも、この矢貫先生。

ナイフ一本で銃を持ってたテロリスト10人を制圧したとか言われているらしい。

ありえんだろ、普通。

だけど、3年も中学とはいえ武偵をやつてればさすがにそういう話を聞いても大袈裟に驚くことはなくなった。

「えー、今日ここに編入生が来ることになった。今もう、教室の外で待機してもらつてる」

矢貫がそう言うと、教室が少しざわめく。

そりやそうだろう。

一般中学校から武偵に転校してくるのも珍しいが、編入と言うのも珍しい。

それも3年……しかも武偵中学に編入してくるなんて珍しいにもほどがある。

「いいぞ、白野。入って来い」

矢貫の向いている扉に全員が注目する。

俺としては、その編入生が女じゃない事を祈る。

俺を利用する奴が増えたら困るからな。

………

それにしても反応がないな。

もしかして緊張して入ってこれないのか？

反応が無いことに訝しいんだ矢貫がもう一度、扉に向かって言う。

「おい、白野」

「はい」

返事したのは扉の方じゃなく、俺の後ろ。

おかしい。

俺の席は窓際で一番後ろの席。

つまり、俺の後ろには誰もいないはず。

その突然の不可解な事態に俺は勢いよく後ろを振り向くと。

「……………」

幼さの残る黒くて短い髪の少女が静かに俺を見下ろしていた。

しばらくじっと見つめて、それから少女はニコニコと笑顔になる。

俺を見ている訳じゃないんだだろうけど、クラス中の視線が集まっているのがなんとなく分かる。

と言うか、なんだこの空気は。

「お前、どこから入った？」

いや、先生……聞くところそこじゃないだろ。

それとなくのだが、矢貫の声に少し驚きが混じっている気がする。

「えーと、呼ばれた時に近くの扉に入ったから後ろから、かな？」

「そうか。取りあえずそんな所にいないで前に来て自己紹介しろ」

「はーい」

おい、それだけかよっ！

なんで後ろから入ったとか、なんで俺の後ろに立つてるのかとか、一切触れない。

元氣よく返事をした白野と言う少女は、まるで子供のようになってて、と走り。

「今日からここに入ることになりました。白野 霧です。よろしくね」

その自己紹介とともに振りまいた無垢な笑顔にクラスの男子が、おおく！ と、喜びの声を上げる。

素直に歓迎してやればいいんだろうが、俺はそんな気分じゃない。

もし、こいつも俺の秘密を知ったら利用するんだろうか？ と言う不安に駆られる。

利用されてて気づいたのが女子って言うのは、猫かぶってるのが多いって言うことだな。

その上、集団でいることが多いから少し抵抗するだけでヒステリック気味に叫んだりする。

「それじゃあ、質問していけ。制限時間は5分だ」

矢貫がそう言うのと、我先にと一齐に手を上げる。

主に男子がな。

お前ら喰いつき過ぎだろう。

そして、矢貫が次々と生徒を当てていき、白野がそれに答える。

「ランクは?」「Aランクだよ」「趣味とかは」「うくん、人間観察かな?」

順調に答えてる中とある男子生徒が、

「この中で気になる人はいる?」

という質問を繰り出した。

その瞬間、クラス中の男子が興味を持ったのか真剣に耳を傾ける。

こう言う時に限って変に団結力を発揮しやがるな。

肝心の対する白野は、何か考えるような仕草をしている。

「うくと、そうだね。窓際の席の一番後ろの人かな?」

窓際で一番後ろの席ね。

……俺じゃねーかつ!!

そんなもつて、男子共は俺を恨めしそうな目で見るな!!

と言うか、なんでまた女子に目をつけられたんだ俺は?

2：奇妙な関係の始まり

白野 霧と言う少女がここ、神奈川武偵付属中学の俺のいる教室に来てから翌日の朝の教室。

別段、日常的に大きく変わったところは特にない。

しいて言うなら、割とカワイイ女の子が入ってきてきて男子が少し浮かれてる程度だろう。

そして、なぜかは知らないが初対面の俺に堂々と気になると言ってきた。それも、
H Rホームルームの自己紹介に……

おかげでまたいらん敵を作ってしまった様な気がする。

ただでさえ、女子どもにヒステリアモードを利用してあちこちに迷惑かけて敵を作ってるって言うのに、勘弁してほしい。

……なんで俺は朝からこんな頭を抱えてるんだろうか。

などと、思っていると――

「おっはよ〜〜!」

噂をすればなんとやら、白野が元気よく挨拶しながら入って来た。

元気な奴だなホントに。

なんとなくぼーっ、と見ていると女子の何人かが彼女に近づき質問をしているようだった。

なんか、早速馴染んでるっばいな、あれ。

まあ、雰囲気的に話しそうな奴ではある。

俺としてもなぜあのかき俺の後ろに立ったのか聞きたいところだが、正直、あんまり女子に関わりたくない。

これは俺が勝手に忌避してるだけなんだろうが、それでも何と言うかあんな利用される思いは勘弁だ。

それに、さわらぬ神に祟りなしって言うしな。

こつちが、関わらなくても向こうが勝手に関わってくるけど……

なんて、色々考えているといつの間にかHホームルームRの時間になっていた。

矢貫もいつの間にか教卓にいる。

「あゝ、今日は、二人一組ツーマンセルによる徒手格闘戦をする」

矢貫の言葉に俺は肩を落とす。

春先に早々か……

しかも、ペアを組まなきゃならない。

ある意味、クラスで孤立してる俺としては組んだ相手と上手く連携がとれるか微妙なところだ。

女子の場合、さらに面倒なことになる。

「せいじゃ、連絡事項は以上だ。演習場に行け」

矢貫がそう言った後にクラスのみんなが体育館に似た外装をする演習場へと移動する。

さて、演習場に移動したは良いが。

ペア、どうするか……

クラスの中にも俺を利用する奴がいるから、そいつに見つかる前にペアを組んでしまいたいんだが……厳しそうだ。

ほとんどの男子はもう組んじまってるし、適当な奴に声を掛けたところで快く組んでくれるとも限らないしな。

などと、考えていると――

「……ねえ、ねえ」

後ろから突然声を掛けられた。

最近と言うか、ついさつき聞いた声だぞ。

なんとなく予想が出来つつも後ろを振り返ると――

「私とペアを組んでくれないかな？」

案の定、白野 霧がニコニコと笑顔で立っていた。

他意は無いんだろうが、正直に言うところごく怪しい。

なにせ、編入早々になぜか俺の背後に立ってたんだからな。

それに何を考えてるのかもよく分からん。

だが、この際に贅沢は言ってられない。

幸いにもコイツは昨日、編入したばかりだから俺のヒステリアモードについては知らないだろう。

「ああ、別に構わない。ちょうど組む奴がいなくて困ってたからな」

「うん。よろしく」

と、白野が右手を差し出してきた。

多分……握手なんだろう。

取りあえず、その差し出された手に応じるように俺も右手を出して白野の手を握った。

……柔らかないな。

今思えば、女性の手を握ったの白雪以来じゃないか？

って、何考えてんだ俺は……

「え〜つと、名前は？」

「……遠山 キンジだ」

「キンジね。昨日、自己紹介したけど私は白野 霧ね。で、早速お願いがあるんだけど、いいかな？」

「なんだ？」

「できれば前衛を任せて欲しいんだ〜」

いきなりだな。

編入早々に前衛で戦いたいなんて。

と言うか、一般中学からの編入とかじゃないのか？

いや、待てよ。

そう言えば、確か昨日の質問の時に確かAランクとか言ってたな。

何の経験もない一般人でいきなりAランクってのはさすがに考えられにくい。

てことは、一般中学から来たって言うのは考えられないか……

「別にいいぞ」

「ありがと。ちよつと試したい戦い方もあるんだよね〜」

試したい戦い方？

なんか、言動から察するに霧は結構実戦を積んでるのか？

と、疑問が残るがその前に矢貫に報告しよう。

さすがにペアが決まってしまうえば他の奴も余計な手出しが出来なくなるからな。

それから矢貫にペアの報告をした後、再び霧の元へと戻ったんだが……

「あの人なかなか気になるな……でも、お父さんとの約束だしダメなんだよね……」

と、なんかよく分からんことを呟いていた。

が、こつちに気づいたと思ったらこちらに歩み寄ってくる。

「もう報告はいいの？」

「ああ、さつき先生に言ってきた」

「そっか。じゃあね〜大雑把に立ち回りでも決めちゃおっか」

割と真面目だな。

失礼な話、第一印象からしてもっと適当な奴だと思ってた。

「取りあえず、私が敵を引き付ける」

なるほど、囃か。

Aランクって言うのはまあSランクには劣るものの厄介な存在に変わりはないだろ

う。

なら、優先的に二人がかりでそちらを潰そうとする筈だ。

と言うか、中学でSランクなんてやつは俺の知る限りにはいない。それはともかくとして、今の俺は通常の身体能力しかない。

だが、男子の中には女子に利用されヒステリアモードになった俺にボコられた奴もいるので、俺を優先的に潰しにくるかもしれない。

しかし、今回はペアでの格闘戦だ。

一方に気を取られていれば、反対側から襲われることは充分にあり得ることだ。もし仮に白野の迷惑通りに向かわなくても俺が逆に囮になればいいだけだしな。

ここらへんの臨機応変さも試されるだろう。

そう考えてる間にも白野は話を続ける。

「で、私とその敵を全員倒す。うん。良い作戦だね」

「……おい」

「囮作戦じゃねえのかよ……」

まあ、Aランクなら可能なんだろうが……

例えそうだとしても、出来れば俺も多少は活躍しないと成績に関わる。

「頼むから、俺にも出番を残してくれ」

「ええー……」

ええーって、何だよ。

「じゃあ、二人とも前衛でいいか」

極端すぎるだろ……

さっきの立ち回り決める話はどうなったんだ。

『あー、マイクテスト。それじゃあ、ペアも決まったところで対戦相手を決める』
矢貫が拡声器を持って呼びかける。

『今から名前を言ってくるから、呼ばれたペアは私が言った番号のフィールドに入れ』
それから矢貫が名前を順番に読み上げていきどんどんフィールドに入っていく。

『次、遠山・白野のペアと古川・石野ペア、9番フィールドに入れ』

俺達の番か。

名前を呼ばれたので、矢貫の言う9番のフィールドに入る。

このフィールドはきれいな円状に線が引かれていて、その直径が15m程ある。

他のフィールドも形は違うが大体は端から端まで15mほどある。

で、そんな大きさのフィールドが1〜10番まであるから演習場の広さは推して知るべしだな。

初めて見た時はその広さに驚いたもんだ。

線の中に入り、相手と対峙する。

向こうは男子二人のペアだが別の意味で顔に見覚えがある

……あいつら俺がヒステリアモードになった時に相手した奴らだ。

なるべく視線を合わしたくないのだが……既に殺気がガンガンぶつけられてるのが分かる。

これはもしかしなくても、かなり根に持つてるだろうな。

「ふ〜ん、成程ね……」

と、俺の隣にいる白野が相変わらずニコニコとした笑顔で納得したような声を上げた。

ただ、何となくだがその目は表情に反している気がする。

……俺自身それをなんて言ったらいいのか分からないし、そもそもコイツは昨日ここに来たばかりだから俺は白野のことを何も知らないのは当たり前だけだな。

『いいか!! 制限時間は10分間で、武器の使用は一切なしだ!! 破った者は厳粛に処罰するつもりだからそのつもりでな。……いいか、10分間だぞ』

今の矢貫の言葉と繰り返し返した10分間と言うワードからして、多分だが……10分間戦い続けるってことなんだろうな。

つまり、ペアを片方倒せば勝ちとかではない。

いきなりハードで面倒くさい話だ。

こういうルールの説明の中から屁理屈が通りそうな事を拾うのも一つの技術らしい

からな。

「いいのかな？ 10分も戦って」

「多分な……10分間真面目に戦わないと居残りとかさせられそうだ」

「じゃあ、どっちも倒しちゃえば早めに終わるってことだよな」

二人を戦闘不能にする事を何でもないように白野はのたま宣った。

その自信を俺に少し分けて欲しい。

『それじゃあ……始めっ!!』

矢貫の大きな一声で演習が始まった。

ヒステリアモードじゃない俺はまずは、相手の出方を伺うのが先決だ。

そう思って少し下がろうとしたと同時に、白野が勢いよく前に飛び出す。

——あいつ!?

いくらAランクだからって2対1じゃ分が悪いだろ！

相手が素人ならまだしも俺と同じ武偵の生徒だ。

戦闘に関しては全くの素人と言う訳じゃない。

対して相手は、前衛とすぐ援護が出来る後衛に分かれている。

前衛が攻撃を受け流して、後衛がその隙を突くと言う単純なものだが効果は充分にある。

内心、舌打ちしながら俺も前が出る。

いつでも援護に回れるように。

前衛の男子（多分、古川）が真正面から来る白野に対して攻撃を迎え撃つではなく、受け流す形の構えを取った。

やっぱり、最初からそのつもりだったのだろう。

白野は真正面から殴りかかる構えを取ったかと思いきや、すぐに拳を引つ込めた。

そして、そこから素早い動作で跳躍し古川の肩を持つて空中で側転するように背後に回り込んだ。

その動きに俺も驚いたが、相手である二人もかなりの驚きの表情を浮かべている。

戦闘中つて言うのを忘れるくらいに鮮やかな動きだったな。

「うおっ!？」

古川が突然、声を上げながら前のめりに俺の方へと倒れてきた。

多分、白野は俺が向かってくるのをさっきの側転で見て背後から蹴り飛ばしたんだろう。

なら俺のやる事は一つ。

俺は倒れて来る古川にすれ違うようにして側面につく。

そして、素早く襟首と腰のベルトを持ち、足を引つ掛けて投げ飛ばす。

「がはっー」

背中からモロに床に突っ込んだ古川は肺から空気が押し出されたようにして呻く。あれで、しばらくは立ち上がれないだろう。上手く受け身も取れなかったようだし。白野の方に援護に回ろうと視線を向けると。

「くっ」

「ほい、これでしゅーりよ〜」

と間の抜けた声で石野の懐ふんどころに潜り込み、掌てのひらに顎を乗せる形で打ち抜いた。それから石野はピクリとも動かなくなった。脳震盪でも起こしたんだろう。どうやら決着はついたみたいだな。

……そう言えば、10分どころか1分も経つてない気がするんだが。

両者が戦闘不能になった場合はどうすればいいんだ？

などと、俺は場違いにも考えていた。

矢貫がなんか感心するようにこつちを見てるし、変な意味で目立っちゃまったな。

『遠山・白野ペアはそのままフィールドにいる。もし、10分以内に相手が立ち上がれば戦闘再開だ』

「と言う事らしい。やっぱり、10分間戦えってことなんだろうな」

「ふ〜ん。まあ、脳震盪起こしてるから一人はあと1時間くらいは気絶してると思うけ

どね。キンジが倒した方も、背中から強打したからそう簡単に起き上がれないだろうし。……所詮こんなもんか」

なんか最後あたりの眩きが聞こえなかったが……とにかく、こいつは実戦慣れしてるらしい。

ペアになっっている俺としては、頼もしい存在だな。

女子という点を除けばだが……

そうこうしている内に10分が経ち、1回目の試合が終了する。

ちなみにあれから古川と石野が起き上がる事はなかった。

古川の方は諦めて適度に呻いてわざと立ち上がらなかつたっぽい。

まあ勝てない相手、しかも2対1で立ち向かうのはさすがに無謀だからな。

それなら、時間を稼いで体力を温存した方が良いだろうし俺だってそうするだろう。

ここらへんは授業でやった通りだから、別に減点される事はないだろう。

「1回戦は無事に何とか勝てたな」

「……そうだね」

つまらなさそうだな白野……

出来れば、俺にももうちょっと実力があればいいんだがな。

……ヒステリアモードなしで。

◆
◆
◆
学校が終わって、帰り道。

取りあえず、全ての試合が終わった訳だけど……

快勝だったね。

正直に言うとは、戦い甲斐がないし……楽しくない。

白野 霧としてこんなつまらないところで過ごすのは正直気が進まないけど……お父さんの頼みだし、遠山 キンジの事は会ってみてなかなか気に入ったから別にまだここに留まってもいいかな？

そう思える。

「おーい、白野ー！」

噂をすれば、か……まあ、あの声はキンジだろうな。

と思つて振り返ってみれば案の定つてね。

「ん〜？ どうしたの？」

「いや、今日の演習での事でお礼にな」

「別に、お礼なんていいよ」

相手は皆、ジャンヌにも及ばない連中がほとんどだったし、倒すのにそんなにも苦労しなかった。

もつと言えば、上半身と下半身を瞬きする間に分かれさせる事も出来たけど、それやつちやうと潜入した意味がなくなるんだよね。

そもそもな話、武器も無かったから出来ないけどね。

「だけど、お前。俺に倒しやすいうように動いてくれてただろ？ おかげで、評価が下がらずに済んだんだ。ありがとな」

そう言うキンジだけど、なんでヒステリア・サヴァン・シンドロームを使わないんだろ？

アレを使えば、手を抜いてる私に余裕でついて来れるはずなんだけどね。

取りあえず、昨日他の女子から聞いた話でそれとなく聞いてみるかな？

「でも確か、キンジって女の子に迫られると強くなるって話を聞いたけどなんで使わなかったの？」

βエンドルフィンを作用させるなら性的興奮が手っ取り早い方法だし、薬を使うよりも速攻性はあるから別に問題はないはずだけどな。

それに薬を使用しない分、副作用に悩まされなくてもいいし。

「っ……」

驚きに目を見開くキンジに少し、顔を覗き込むように迫ってみると、心拍数の上昇と僅かながらの発汗、視線の不規則な移ろいが観察できた。

私の五感もHSS、つまりはヒステリア・サヴァン・シンドローム並に鋭敏だからこの距離なら心拍数ぐらいは聞こえる。

明らかに動揺してるよね。

つまり、知られたくなかったって事なのかな？

そう言えば、その人たち「キンジを利用すれば、ご飯も奢って貰える」とか何とか色々言ってたっけ。

と言う事は、知られたくなかった理由は利用されるのを防ぎたいんだろうね。

「その……何のことだろうな？」

「ダメだよ。はぐらかそうとしちゃ」

あからさまに怪しくなるからね。

そう言う反応を見ると、信憑性が高くなるし。

そして私が一步踏み出して行けば、キンジも一步下がる。

「そう言えば、強くなると同時に女の子に優しくなるんだってね？」

言いながら一步踏み込んで行くと、さらにキンジは一步下がる。

並木道で今は人がそんなに通ってないから別に後ろは気にする必要もない。

「……………頼むから、やめてくれ」

やめて欲しいな。そんな怯えた顔をしながら懇願するのは。

思わず背筋が震えそうになるからね。

まあ、そう言う反応が見たくてわざと迫ってるんだけどね。

「大丈夫だよ。ちよつと試すだけだから……」

そう言つて、私はシャツのボタンとスカートに手を掛ける。

色仕掛けのやり方とかよく分かんないけど、理子の持つてたゲームだと多分こう言う
感じで良いはず。

そして逃げる事も忘れて、目を閉じてしまっているキンジに手を掛けようとして――
「なくんちやつて」

と、私はおどけて見せた。

「……え？」

すると、キンジは驚きの顔を見せる。

なかなか楽しいね、キンジの反応を見るのは。

「まさか、本気にしちゃった？　大丈夫だよ。私はそんなことしないから」

にこやかに笑顔を作り、警戒心を少しでも下げておくことを忘れず、それでいて優しい
声で話す。

「本当に何もしないのか？」

「もちろん」

そうは言ってみただけ、んく……キンジは半信半疑って感じだね。

おそらくだけど、今まで結構利用されてる感じなんだろうな。

「今まで女子に騙されたりしたから信用できない？」

「……………」

何も言えないあたり図星ってことだね。

なかなかに分かりやすい反応で良かった。

ポーカーフェイスとかしてても、心音が聞こえてるから動揺すれば分かるけどね。

「それじゃあさ。こうしよつか」

「……………」

「私がキンジの事を守るから、私とパートナーになつてくれない？」

転校してきてそんなに日が経ってないし、今日たまたま組んだだけだから言葉の効果は薄いかもしれないけど、お兄さんと同じで押しには弱い感じだと思うからこのまま話しを進めれば多分、乗ってくれる。

「……………えっと、どう言う事何だ？」

「分かんないかな？ キンジが他の女子たちに利用されそうになったら、私が助けてあげるってことだよ。その代わりに私とコンビを組んで欲しいってこと」

そう言うのと、キンジは訝しげな表情をする。

私はここに来て日が浅い上に突然こんなこと言われたから、何か裏があるんじゃないかって思ってるんだろうね。

ほんと、手に取るように考えてる事が分かっちゃうね。

「なんで、俺なんだ？」

「それはねえ。単純に今日一緒に組んでキンジが気に入ったから、かな？」

実際気に入ってるのは本当だし本心だから嘘は言っていない。

それに、キンジと一緒に楽しい事が起こりそうなんだよねえ。

同時に私が殺人鬼であることを知ったらどうなるだろうなと思うと、余計に楽しみなってくる。

「……………えっと、ダメ？」

「うっ……………」

甘えるようにして言ってみると、キンジは少し呻いた。

今、心臓が高鳴ったね。

「その……………ダメじゃないが……………」

「ああ、大丈夫だよ。今すぐ信用してとは言わないから。だから、せめて友達からと言うか知り合いでもいいから……………ね？」

キンジの意思をくみ取るようにして言うと、少しの沈黙の後に首を小さく縦に振っ

た。

「ふふっ、それじゃ改めて自己紹介するね。白野 霧だよ。よろしくね」

「……遠山 キンジだ。よろしくな白野」

「ああ、ダメだよ。パートナーになるんだったらちゃんと名前で呼んでくれなきゃ」

「……分かったよ、霧」

「うん。それじゃ、明日からよろしくね」

そう私は元気に言った後、キンジと少し話をして別れの挨拶をした。

「ホント……楽しみだね、キンジ」

私は一人、キンジと別れた後に呟く。

自分でも分かるくらいに凄く楽しみにしてる事に。

3：パートナー

以前の演習の一件から、何故か分からんがここ神奈川武偵付属中学に最近やってきた白野 霧と言うAランク武偵の少女とパートナーを組むことになってしまった。

本当に何でなんだ？

と、俺——遠山 キンジは自問自答する。

でも、何となくだがアイツは……霧は俺を利用した他の女子とは同じじゃないと思える。

今まで散々に利用されてるから本当ならもつと裏があるんじゃないだろうかとか、色々疑うところだろうけど昨日、実際に話してみただが逆に安心させられたのは事実だしな。

——えっと、ダメ？

い、いかん……昨日のあいつの仕草と言葉を思い出すと血が少しばかり熱くなる。

アイツは利用しないとか言ってたが、それでも女子の目の前でヒステリアモードにはなりたくない。

「おはよ、キンジ」

「うおっ!？」

いつの間にいたのか霧が俺の隣に居た。

お前……ここに最初来た時もそうだが何で音も気配も無く現れるんだよ。

「驚いた？」

「いや、誰でも普通に驚く」

むしろ、隣に突然人が現れたら誰でも驚く。

そんな俺を見て可笑しいのか、霧は子供のように小さく笑う。

「それにしても、朝早いね」

「ああ……まあな」

今、教室にはそんなに生徒は来ていないし授業が始まる45分ほど前だ。

なんで、こんなに早く来ているかと言うと他の奴らに交じって登校しづらいだけだ。

前なんかヒステリアモードの俺にやられた恨みからか登校中に襲ってくる奴もいたからな。

そう言う事があつたので、なるべく一人で来るようにしている。

「大方女子と一緒に登校したくないとか、朝から利用されたくないとか、そんな感じでしょっ?」

そうニコニコと霧は言う。

昨日の会話でも思ったが、何でそんなに俺の意図と言うか考えが分かるんだ？

まだ、知り合ってそんなに日が経ってない筈なんだが……

「私の趣味が人間観察だつて言ったでしょ？　って、私の事そんなに話してなかったね」

そう言えば、自己紹介の時にそんな事を言つてた気がする。

俺はその時は特に興味なかったし、女子が増えた事にネガティブになつてたからな。

そう考えると、忌避してた事は霧には申し訳なく思う。

「私、これでも医療知識があつてね。色々と詳しいんだ。それで、キンジが女性に迫られて強くなるつて事で少し思い当たる症状があるんだ」

まさか医療知識があるとは思わなかった、とは言えない。

こいつ、もしかしたら俺より頭が良いんじゃないか？

「で、その症状の名前はアルファベット三文字でHSS、でしょ？」

これは、誤魔化せないな……もう開き直ろう。

「そうさ、それが俺の体質だよ」

「まあ、普通の人なら分かんないよね。それに、普通のサヴァン・シンドロームなら例が確認されてるけどキンジの体質は例が少ないから珍しいんじゃないかな？　まあ、そも

そも医者でも知ってる人は少ないだろうけどね」

1日でもバレた上にここまで当てたのはお前が初めてだけだな!!

でも、医療知識があればヒステリア・サヴァン・シンドロームに辿り着くのも時間の問題だったかもしれない……

元は医療用語みたいだし。

遠山家の特異体質だと思ってたけど、口振りからして他にもいるっぽいな。

「でも、これからは大丈夫だよ。約束通りにちゃんと守ってあげるから」

女性に利用された上に、女性に守られるって言うのも情けない話だけだな……

俺としては霧の好意はありがたいが、正直あまり世話になりたくない。

それに、本当に霧が俺を守ったことを兄さんに知られたら殴られるか一喝される予感しかない。

——遠山家の男が女に守られてどうする!!

多分、こう言うだろうな。

そんでもって拳が飛んでくると……想像しただけで背筋が恐怖で震えそうだな。

兄さんの拳はヒステリアモードじゃなくても力と重みがあるからな……

一度頭を思い切り殴られたことがあるが、あの時は触ると痛むほどのコブが出来たし。

それから霧は自分の席に戻って行く時には、いつも通りにホームルームが始まりそし

て授業へと続く。

兄さんのような武偵になるには授業はきちんとして聞いておかないと行けない。

それに東京武偵高に行くためには、それなりの実力もなければいけない。

3年生と言えど受験に備える時期だし……

そう思えば、利用されている今の現状から早いとこ抜け出して勉強や訓練に精を出したいところだ。

キーンコーンカーンコーン……キーンコーンカーンコーン……

って、もう午前中の授業は終わりか……

昼休みなら早いとこ教室から出て、女子の連中に見つからないようにしないと。

この間、屋上の出入り口の影に隠れるようにして昼食はとってたんだが……何故かは知らんが普通にバレた。

女子の情報網なのかは知らんが……恐るべしだな。

と考えながら、俺は泥棒よろしくそそくさと教室から出て人気の少ない場所を探す。

昼食は購買でもいいんだが……以前、購買で待ち伏せされてから今は登校中に買ってきたパンが家で作った弁当だ。

今日は弁当だから早いとこ場所を見つけないとゆつくり食う時間がなくなる。

何となく校舎裏に来てみたが……大丈夫っぽいな。

ここまで来る物好きはあんまりいないだろうし、授業の移動くらいでしかこの校舎を通らないだろうからちようどいいだろう。

あんまり地面に座りたくないが、場所に我が儘を言っではいられない。

俺は窓の下に腰掛けて、弁当をもつそもつそと食う。

「……」にいたの……遠山」

早めに弁当を食べ終え一息ついた瞬間、俺の頭上から声が掛かった。

この声……いやーな予感が背筋を薄く伝わる。

このまま聞かなかったフリをして去りたい……マジで。

こいつは俺を利用している女子の中でも回数が多く、ランキングだと5位以内には確実に入っている。

「無視はいけないんじゃない? 遠山」

再度名前を呼ばれて俺は、力無く立ち上がる。

出来れば顔を見ずに帰りたいが、今話してる奴は諜報科だ。

どんな根回しをしてるか分からない。

覚悟を決めて振り返ると、金髪に近い色をした長い茶髪に名前の通りに菊のような形の髪留めをしたツリ目の少女——鏡高かがたか 菊代きくよが俺の座っていた上の窓から覗き込んでいた。

そして、菊代の顔を見るとイイ笑顔で此方を見ている。

それは、少女らしく可愛らしくも思える。

利用されている側としてる側と言う関係じゃなかったら……もつと、純粹にそう思えたんだがな。

「それで？ 今日は何の用だ」

「邪見しないでよ。アタシはそんなに無理させてないでしょ？」

確かに他の奴より無理難題は言ってこないが、それでもやたらと俺を使うだろう。

例えば、イジメられた時なんか犯人を炙り出すのにつきあわされたし、ボディガードみたいな事をさせられたし……

「それでね……今日もお願いがあるのよ」

来たぞ……言え、遠山 キンジ！ こんな生活から抜け出すときつき決めただろう！

「悪いが……もう、俺は——」

「つと、そう言えば言い忘れたことがあった。遠山の体質の事は一部の女子しか知らないの。何で分かる？」

いきなり何だ？

「遠山は同じ顔の女子しか見てないでしょ？ 最近になって、見知らない女子に迫られたりした？」

その質問の意図が分からず、思わず言葉に詰まる。しまった……やられた。

今ので完全に話の出鼻を菊代にくじかれた。

さすがは諜報科だ。俺の話す内容を理解した上で、会話の主導権を握るためにさっきの質問をしたんだろう。

相変わらず、やり難い奴だ。

だが同時に菊代の言う通り、別にあれから俺の秘密を知ってる奴が増える様子はない。

霧は別だけどな。

「もし、キンジの体質が多くの人に知れ渡ったら……今まで以上に多くの女子に迫られることになる。だから、キンジの体質を知ってる子たちはあまり広めないようにしてるの。じゃないと、キンジを利用する機会が減るでしょ?」

なるほど……つまりは独占したい訳か。

普通の男なら、女子に迫られて喜ぶんだろうがこの状況は素直に喜べない。

「それで、それが何だっけ言うんだ?」

「相変わらず鈍いな。アタシはアンタを脅迫してるんだよ。これ以上、広められたくなかったら……遠山はアタシの頼みを断れない」

そう言つて、菊代は窓から乗り出して俺の前に立つ。

確かにそうだ。これ以上俺の体質を知られると、今よりも状況は悪化するだろう。相変わらず、ズルい奴だよ。

やつぱり、ダメなのか？ ……今の状況を脱出するのは。

そもそも秘密を知られた時点で劣勢過ぎたんだ……突つばねようにも、カードは向こうが多い。

対してこつちは交渉に出すカードが最初から奪われてる。いや、最初から無い。

「改めてお願いを聞いてくれるよね？ 正義の味方さん」

艶めかしくそう言いながら、菊代は俺に迫ってくる。

それを力尽くで押しつけられたら、どんなに楽だろうか？

だけど、やつぱり拒む事は出来ない……

なりたくない……こんな事で、ヒステリアモードになんてなりたくない！

そう思つても、菊代の体はすぐそこまで迫り来ている――

「あ、キンジ！ ここに居たんだ」

その途中で、菊代は急に俺から距離を取る。

この声は……霧か？

「いや、探したよ。購買行つて帰つたらいないんだもん」

すぐ近くまで来て俺と菊代の間に霧は割って入る。

そのいきなりの登場に俺も菊代も面食らった。

「あ、ゴメンネ。お取り込み中だった？」

「いや、それよりアンタは一体……？」

「私？ 私はキンジのパートナーの白野 霧だよ。よろしくね」

独特の雰囲気でその場を包みこみ、ニコニコと俺と初めて会った時と変わらない笑顔で菊代にそう言う。

「パートナーって……そんな」

「うん。まあ、それでお取り込み中に悪いんだけどキンジを借りてくね。早いとこ、パ-

トナー申請とかミーティングとかしないといけないからね。それじゃー！」

「……え？」

「痛い痛い!!」

そう言つて、俺の腕を思い切り引つ張るな!!

腕がっ!! 右腕が抜け落ちる!!

俺が叫んでいるにも拘らず、霧はお構いなしに引つ張って行く。

それから体育館の近くまで引つ張られて、ようやく解放された。

「危なかつたね」

「お前、いくらなんでも強引過ぎるだろ……」

おかげで、腕が抜け落ちるかと思った。

「でもね、あの手の人には強引に話を進めるのが一番なんだよ」

「だからってお前……」

「約束したでしょ。パートナーを組んで貰う代わりに、キンジを守ってあげるって」

その笑顔に俺は思わず顔を背^{そむ}けた。

別に見たくないとかじゃない。

昨日のことが思い出されて、顔が赤くなっちまうのが自分でも分かるからだ。

日本人形みたいに整った顔立ち。よくよく考えてみれば、コイツはコイツで美少女なのだ。

子供みたいな言動だからつい、女子であると言う事を忘れそうになる。

チクシヨウ……ある意味で菊代よりも厄介だよ。

「えつと……そのさつききのパートナー申請の話なんだが……」

とつきに話を振って、意識をそちらに移させる。

じゃないとまともな顔が見れない。

「あ、それはちゃんと本当だよ。その場しのぎの嘘じゃバレちやいそうだし」

よく考えてるな。

さつきも言ったように子供っぽいが、どうやら頭までは子供じゃないらしい。
失礼な話だけだな。

「だから、一応その紙も持つてるんだよね」

と、霧が出したのは教務科——つまりは職員室マスターズで配られているパートナー申請書だ。
これを出せば、この中学校にいる間はパートナーとなれる。

この申請書は出す奴はほとんどいない。

出した場合、ペアで受けなきやいけない授業とかがあるし任務クエストも出来るだけペアで受けなければならぬ。

中学とはいえ、武偵は武偵だ。つまり、命がけになる任務もあるから背中を預ける奴は選ばないといけない。

なので、相性がよくてなおかつ実力が高い者でなければなかなかペアを自ら組もうとはあまり考えないのである。

ちなみに同じ武偵高に双方が行く場合、同意すればパートナーのままではいられるという制度がある。

また、成績が良ければ奨学金も出る。

俺にとっては縁のない話だと思ってたけどな。

「どうするキンジ？ さつきは、パートナーだって言ったけど。本当にパートナーに

なった訳じゃない。この紙が通って初めて、パートナーになれるんだよね」
確かにその通りだ。

それに、このままだとまた利用されるのは間違いない。

「私はさっきの人みたいにな、無理強いはしないからね。キンジが決めてよ」

……何だろう、この選択権がある嬉しさは。

今まで問答無用だったからな……そう思うと、思わず泣けてきそうだ。

だけど、霧の誘いも悪くないかもしれない。

何より、コイツは昨日の約束をちゃんと守ってくれた。

完全に信用した訳じゃないが、信じてみよう……そう思えた。

だから俺は――

「……誘いを受けるよ」

「ホント？　ありがとう!!」

「つて、おい!？」

急に霧が俺に抱きついてきた。

しかも、顔がっ!!　顔が俺の隣に!!

女性特有の甘い香りも俺の鼻腔に迫ってくる!

段々と血の流れが速くなるのを感じる……この流れはマズい!

「き、霧！ 嬉しいのは分かったから早く離れてくれ!!」

「ああ、ゴメンゴメン。HSSだよね。分かってる」

なんとか……危機一髪のところまで離れてくれた。

「でも、少し残念かな。実際になるところ見たかったのに」

「勘弁してくれ……」

そう言いながらも、俺は霧に心の中で感謝するのであった。

◆ ◆ ◆

いや、案外あっさりだったね。

まずは信頼から勝ち取るのが定石だよね。

キンジが利用されている話をそれとなく聞き出した時には、使わない手はないと思っ
たし。

やっぱり、ラブアンドピースは偉大だと言う事がよく分かる。

殺人鬼である私が言っても説得力ないか……むしろ、愛と平和より恐怖と殺人だし。

それにしても、武偵法が相変わらず面倒だな……と言うか、法律自体多くない？

中国じゃ、人民は法で縛るほど抜け道を探そうとする、みたいな言葉があつた気がするけどまさしくその通りだよね。

武偵と言う組織が必要なほどに法で縛つたつて事なんだから。

私にとっては武偵なんて楽しみの一つでしかないんだから別にどうでも良いんだけど。

なんて、武偵中学の帰り道に考えてると今の私の自宅に到着と。

なんて事はない普通のアパートだね。

暮らして行く分には問題無い広さと、設備があるけど……医療機器と言うか遊び道具がそれほどないのが不満かな。

「はあ〜あ……キンジがいないと楽しくないな。理子もいないし」

退屈なんだよね〜、お父さんから早いとこ任務とか来ないかな？

なんて事をベッドに横になりながらに思う。

——ドクン。

ほくら、退屈だから兆候が出ちゃったよ。

一応、早いとこ準備はしとこう。

そう思っている内にも、私の心臓の血流は速くなってくる。

ドクン、ドクン、ドクン！

それで準備が終わったところには、体の芯がすっかり熱くなってる。

心臓もウルサイ程になってる。

ハヤク誰かコロさないと……不味い、かな？

これは私の体質で、キンジのHSSと似てる。

エンドルフィンとか脳内麻薬が出る事で身体能力が飛躍的に向上する訳で、キンジやカナ……と言うか金一のHSSと違うのは発動のカギが殺人衝動ってことだろうね。

それで、これは殺人衝動が発動のカギになってる訳だけど満足するまでは常時発動したままになる。

つまり、一人殺しても満足できなかったらそのまま身体能力の向上は続く。

それでもつて私は何人殺しても一度も満足した事はない。

なので、常に殺人衝動を抱えたまま生きてる訳で、身体能力はそこらの人とは比べ物にならないんだよね。

それを理性で繋ぎ止めてるから、こうして一定の周期で大きな殺人衝動が来る訳なんだけど……

ある程度殺せば治まりはするけど、完全に満足する訳じゃないし。

——ピリリリリリ!

あ、携帯が鳴った。

と言う事は——

「もしもし、お父さん?」

『やあ、ジル君。そろそろなんじゃないかと推理していたよ』

「うん。早いとこ任務を頂戴。じゃないと、そこら辺の人を斬っちゃいそうだよ」

『それは困るね。その国にイバラキと言う県があるのは知ってるね』

「間宮の里がある場所だっけ？」

『その通りだよ、ジル君。今夜、襲撃する事になったから君も向かってくれたまえ。細かい事は後で連絡するよ』

「じゃあ、以前の交渉は決裂つてことだね。お父さんの事だから、これから先に必要だから襲うって事もあるんでしょ？」

『ふふっ、相変わらず聡いね』

「当たり前だよ。私はお父さんの『家族』なんだから」

『そうだったね。場所は分かるかい？』

「もちろん。他に誰が来るの？」

『ブラドにパトラ、桃子君にツアオツアオ……そして、カナ君だ』

それはそれは……豪華なメンバーだね。

「そっか。それで、いつも通りに誰か殺してもいいんだよね？」

『ただし、一人だけだよ』

焦らすなあ、お父さん。

『それじゃ、任せたよ。ジル君』

「All right」

電話を切つてと……さてと、行こうかな。

今からでも、すごくすごく楽しくみだよ。

「なんだ？ 教プロフェシオン 授から何も聞いてねえのか？」

「ム……と言う事は、切り裂き魔の登場カ」

「そうだよ。相変わらず、誰も俺だつて気づいてくれねえよな」

と、私は悲しそうにやれやれと首を振る。

そして、ココはガトリングガンを下ろす。

「きひつ、初見で変装を見破れる奴が十人いれば上々ネ」

「お褒めの言葉として預かるよ。猛妹メイメイ」

私がそう言うと、猛妹は目を見開く。

「相変わらず、不気味ネ。どして私達ウオの見分けがつくカ？」

「口癖にそれから戦い方。爆発物を扱うための薬品、油の臭い……判断材料はいくらでもある。お前の場合だと、他の4人より笑い癖があるな」

「きひつ、怖い奴ネ。パトラが来てる事を知たら、腰抜かすに違いないネ」

「ああ、そりやいいな。是非とも怯えた顔を見てみたいね」

「……仕事に戻るヨ」

猛妹は呆れるようにして、私に背を向ける。

「ほんの冗談だろ？」

「そうには聞こえないネ」

再びガトリングガンを構えると、モーターの駆動音が鳴る。

そして――

ヴヴヴヴヴヴヴツツ!!

くぐもった音を出しながら、一軒の家をハチの巣にする。

まあ、炙り出してとこかな？

さあて、私も遊びに行こうつと。

と、意気込んで獲物を探したは良いけど……まるで、気配を感じない。

さすがは公儀隠密の役職に就いてた一族の末裔ってことかな？ 戦闘技術の秘密を

保持するためにいち早く逃げたか……

あれだけ派手に破壊してるんだから、多少はパニックに陥って逃げ遅れた人もいそ

なもんだけどね。

「……………っ！ ……りっ!!」

と、あたりを散策してると誰かの声が聞こえる。

なんだ、いるんじゃない。

いや〜どんな人かな？ 誰かの名前を叫んでるように聞こえてるあたり、間宮の関係

者かそれともその子孫か。

どちらにせよ楽しみだね。

ルンルン気分で声がする方へと向かってみれば……

「あかり！ ののかっ!!」

道路に居るのは妙齡の女性。

叫んでるのはあの人の子供か、それとも友人か……どちらにせよ私にとっては当たり。

町をもうじき出ようとする手前、引き返して来たんだろうね。

取りあえず吹き矢で様子でも見よう。もし、それなりの実力があればこの程度防げるだろうし。

ちなみに矢には即効性の麻痺毒が仕込んである。

これを喰らえば、例え大型動物でもすぐに倒れ込む。

毒に抗体を持つ人でもイチコロだね。

建物の影に隠れてから、吹き矢に口を付けて——フツ!

「あか——ツ!!」

お、名前を呼んでる途中だったのに見事に矢を左手で掴んだよあの人。

と言う事は……結構な実力を持つてね。

などと観察していると、向こうから何か飛んでくる。

ああ、クナイか……ニンジャとかこの国の隠密達が昔よく使ってた飛び道具だね。

なんて思いながらも左手で難なく持ち手の部分をつかみ取る。

「そこにいるのは分かっているのよ」

言われなくても出ていきますよ。

そのためにわざわざ自分の位置を知らせるような真似をした訳だし。

「どうもこんにちは……いや、ちげえか。こんばんは」

「……………」

姿を見せながら挨拶をするけど、反応はナシ。

私の実力を見極めるような視線を感じる。

「おいおい、自分で呼び出しといてだんまりはねえぜ」

「……あなた、さつきここを襲った人たちの仲間ね」

「人じゃない奴も紛れてるが……まあ、ご名答だ。それがどうかしたか?」

「間宮の技を奪ってどうするつもり?」

何を目的に襲撃したかは分かっているみたいだね。しかし、技を奪ってどうするかは分からないと。

お父さんとしては襲撃自体が目的みたいだから、もう達成されてるんだよね。

「単純な話さ。俺らの組織じゃ、技術は教え教わりと言う事は既に聞いてるんじゃないかねえのか?」

「ええ、以前にそう言う交渉が来たのは知ってる。だけど交渉が決裂したからって……
こんな、酷い」

と言いながら、女性は周りの景色に目を向ける。

所々から火の手が上がり、夜の空を明るく彩っている。

「技術を秘したからこそ奪われたんだよ。まあ、どっちにしろもう遅いがな。お前が叫んでた名前は大方、娘か友人ってところだろう」

「……………」

「その様子だと逃げ遅れてるみてえだから、あの町の中にいるかもな。なんなら探すの手伝ってやろうか？」

「遠慮するわ。襲撃した仲間に手を貸してもらおう義理は無い」

「そうかよ。じゃあ、勝手に探すさ。見つけたら、そうだな……：適当にバラしてから箱詰めにして送つといてやるよ。生物なまものになりそうだし冷凍保存しとくから、開けたらゆっくり解凍——おっと」

いくつものクナイが突然飛来してきた。

いや、あつさり挑発にノってくれたね。

「娘たちにそんな事はさせない!!」

「娘ね……：家族ならなおさら早く送ってやらないとな。はははっ!」

私は笑いながら彼女の攻撃を避ける。

遠距離攻撃で様子見してらんだろうなく。

とか思いつつも、彼女が投げってきたクナイをキャッチしては返すと言う動作を私も繰り返す。

そして、彼女がクナイとは違う物を地面へと投げた。

——ボンッ！　と言う音とともに白い煙があたりを包み込む。

ん？　スモーク？

この国じゃ煙玉とか言ってたっけ？

まあ、五感が鋭敏な私に目潰しなんてあんまり意味無いけど。

聴覚だけでも十分に場所は分かる。

バシッ！

と、私が目の前の煙を右手で掴んだ。

そのままカウンターで左の拳を目の前の煙に叩き込む。

「ぐうっ!!」

呻き声が聞こえると次の瞬間には左手から触れていた感覚が消える。

——ガツンッ!!

そして何かに衝突する音が聞こえる。

おく、痛そうな音だね。

今ので結構なダメージは与えたんじゃない？

音のした方に行つて見ると――

「なんだ、今ので沈んでねえのか」

そこには誰もいない。

あるのは若干変形した道路標識。

仕方ないからこの道路標識を武器にしよう。

「ふん!!」

ガラガラガラッ!

そんな音とともに掴んだ道路標識をアスファルトから引き剥がす。

「で? 早く俺を倒さなくていいのか? じゃないとお前の娘が俺の仲間に見つかったりしちまうぜ」

標識を肩に担いで挑発の言葉や煙の中にいるであろう人物に投げかける。

彼女にとってはこのまま逃げて娘を早く探すのも一つの手だろうけど、私をここで仕留めない方がリスクが大きいと踏んでるんだらうね。

聴覚で知る限り彼女が近くにいるのは間違いないし。

風切り音が迫るのが聞こえ、そちらの方に標識を振るう。

「何だ、クナイか」

ガキンと、金属音と共に弾かれていく。

場所を割らせないためにいくつもの方向から時間差で飛んでくるね。

時間稼ぎ？

と、思ったけど今度は大きな物体が飛来してくるのを感じる。

「後ろか!!」

振り向き様に標識を構える。

が、白い煙の中から現れたのは回転しながら飛来する彼女だった。

アレを受けたらヤバいかな？

とっさにそう思って、標識を彼女に向かって槍投げのように投げつける。

だけど——

バチバチ——バチン!!

標識が粉々になっちゃったよ。

しかも、勢いはそのままに迫ってくる。

普通なら避けられる位置でもないし、間に合わない。

そう……私が普通ならね。

私ができる事は単純明快、避けるでもなく、防ぐでもなく。

——迎え撃つ。

恐らくアレは振動による破壊。

そして、あの指先にその振動が集まると考えられる。

なら、タイミングを合わせて側面を叩けばいいだけのことだ、よ!!

私に指先が届く直前、そのギリギリの所で私の力の入った回し蹴りが腹部を直撃する。

声も出ないまま女性は歩道の方に飛んで行き、壁にぶち当たる。

「がはっ!!」

吐血しながら倒れ込み、何故と言う表情を此方に向ける。

「随分とエグい技を使うんだな？ 最初に煙玉を使って奇襲した時、俺の目玉を抉り取るうとしただろ？」

多分、技の一つだったんだろうね。

イ・ウーの下級生ぐらいなら簡単にやられてただろうね。

それぐらいのスピードとキレがあったよ。

「さっきの技は、振動による内部破壊つてところか？ じやなきや金属がああも粉々になるとは思えねえな」

「いっかつ……貴方は一体……」

おお、そう言えば名乗ってなかったね。

「俺はジャック、ジャック・ザ・リップパーさ。ニユースぐらい見てんだろ？」

「……貴方が、殺人鬼の……つけほ！」

さて、ろくに立ち上がれなさそうだし内臓系に結構なダメージを与えたから戦闘は不能だろうけど……

保険を使っておこうつと。

「自己紹介も済んだところで、お前の娘を探してやるとするよ。と言う訳で、同行して貰うぜ」

フツ——とさつき使った吹き矢に息を吹き込む。

もちろん矢は先程と同じ即効性の麻痺毒。

今度は防げるはずも無くすんなりと足に矢を受けた。

「くっ！ これは……」

早速違和感を覚えてるあたり、足に刺さった矢に何が塗られてたのか分かったんじゃないかな？

最初は意識を奪って、後でじつくり楽しもうかと思ってたけど良い事を思いついたんだよね。

だからあえて気絶させなかった。

お父さんからもう一つの任務の事もあるし、あと一人ぐらい逃げ遅れてる人がいれば良いな。

と、思いながら私はその女性を肩に担ぐ。

それからしばらくと、燃える町の中を探索していると逃げ遅れてる人——じゃなくて火事場泥棒みたいな人がいた。

なので取りあえずその人を速攻で気絶させて、仕込みをさせて貰った。

肩に担いでた女性は麻痺毒が回り切ったのか指先一つ動かす事が出来ないっぽいけど、何とか喋る事は出来るみたい。

しばらく燃え盛る町の中を歩いていると——大型犬ぐらいの動物の影を確認した。

ん？ あれはコーカサスハクギンオオカミ……ってことは近くにブラドがいるのか。

その銀の狼たちが行った方向とは逆に行ってみよう。

「おっいるじゃねえか」

しばらく移動すると全員集合してるのが視認出来た。

そして、私が近づくと向こうも気づいたのか視線が集まる。

「なんぢや、お主は？」

と、おかつば頭の少女が私に問いかけてくる。

「おいおい、パトラですら俺のこと分かんねえのか？」

「男の顔なんぞいちいち覚えたくもない。さては新人か？ だとしたらいきなりフアロオである妻の名を気安く呼ぶなど無礼にも程があるのぢや」

それは私の質問の答えにはなつてないけどね。

相変わらず高飛車だなあ……理子が残念な人だつて言つてたけど、あれつてどう言う意味だつたんだろ？

「きひつ、命知らずにも程があるネ」

「全くもつて同感だわ。前に痛い目にあつたばかりじゃない」

猛妹の言う事に同意するように煙管^{キセル}を吹かしながら、セーラー服の少女——夾竹桃が呆れるように言つてる。

「なんぢや？ お主らはこ奴が誰か分かつておるのか？」

「ジャツク、でしょ？ ココから聞いたわ」

「夾竹桃、正解。正解者にはプレゼントを差し上げまくすつてな」

そう言つて肩に担いでいた女性を地面に転がす。

その女性を見て夾竹桃や巨大な狼のような姿をしているブラドは興味深そうな視線を向ける。

パトラはなんか顔が青ざめてるけど。

「じゃ、ジャック、ぢゃと……？」

「おう、天下に名高きジャック・ザ・リッパーだが何か問題でも」

「い、いや、すまぬ!! じゃから、あの時のような事は勘弁して欲しいのぢゃ!」

「ただ単にエジプトっぽくサソリの大群の中に放り込もうとしただけじゃねえか」

アレは。パトラが随分と調子に乗ってた時だったかな？

お父さんが彼女をお仕置きして欲しいって言ったから、超能力封じの手錠をしてからサソリだかムカデだか、取りあえず蟲詰めスデルスの箱の中に釣り糸のように垂らしていったんだよね。

開始5秒くらいで改心したじゃなかったっけ？

それ以来、何か私の事を避けるようになったけど。

「随分と恐い事をするのね」

「そうか？ 痛くない分マシだと思おうが」

「……貴方の基準はおかしいわ」

夾竹桃が今度は私に呆れるように言ってる。

何でかよく分かんないけど。

「それで？ 間宮の一族はどうしたんだよ」

「間宮一族なら散り散りに逃げたネ。逃げ足は随分と速かたヨ」

ふくん……猛妹の言う通りだとすると、残ったのは私が担いできたこの人だけって事になるんだよね。

「おとなしく軍門に下つていればこうならず済んだのに……哀れな一族ね。それに、もう奪った。あとは燃やすだけよ」

夾竹桃は燃やすだけって言うけどもう既に随分と燃えてる。

辺りは火の海と言つても過言じゃない。

「それより、この女性是谁かしら？」

「間宮の関係者か一族の直系だろう。戦つた時に技を使つてきたからな」

私がそう言うのと、夾竹桃は「そう」と短く返事をした。

ああ、そう言えば。

「ほらよブラド」

私はブラドに向けて一つの蓋付きの試験管を投げ渡す。

「あん？　こりゃ誰の血液だ」

「その女の血液さ。もし、間宮の直系ならお前にとっては良い手土産だろ？」

それにギブアンドテイクでブラドはいい取引相手だしね。恩を売っておいて損はない。

ただ、理子を利用しようとしたりお父さんを裏切ったりしたら四肢を切断して聖水に

漬け込むけど。

「確かに俺様にとつては良い手土産だぜ。ゲハハハハ！」

上機嫌だなあ。

——ガウガウ!!

と、ブラドの手下である狼たちが吠えてるのが聞こえる。

狼たちとは違う声も交じってる。

その方向に目をやると、陽炎でよく見えないけど……あれは少女かな？

狼たちに追い立てられてるんだらうね。

つて言うか、後ろの狼たちばかり気にしてこつちの方は見向きもしない。

だから、どんどん近づいてくる。

あつ……あれは転ぶな、と思ってる内に転んだ。

「キャツ!!」

「ののか!」

こけた黒髪の少女を心配するように明るい栗色の髪の少女が叫んだ名前を私は聞き逃さなかった。

——ののか。

今、私の足元にいる女性が探していた人の名前はあかりとののか。

しかも彼女は娘と言った。

目の前で転んだ少女二人は目算で10代前半。

つまり——ビンゴ。

「……ひっ!?」

顔を上げてようやくこちらに気づいたのか怯えた声を二人の少女は上げる。

「お姉ちゃんっ!!」

「さ、下がって、ののか!」

黒髪の少女、ののかを守るようにして震えながら前に立つてるのが十中八九、あかりだね。

包丁なんか持ってもそんなに震えてる手じゃあ……ねえ。

膝もガクガクしてるし。

「ほほっ。他にも逃げ遅れがいたようぢやの」

「もう復活したの……」

「フアラオである妾がいつまでも怯え取る訳がないのぢやっ!!」

爽竹桃とパトラが何か言い合いしてるけど、こっちはこっちで確認させてもらおうかな。

「ほら……アレがお前の言ってた娘じゃねえのか?」

そうやって、私が女性の首を持ち上げて見えるようにしてあげる。

すると分かりやすいぐらいに反応があった。

「ツ……!!あかり、ののか……」

「お母さん!!」

二人の少女は叫びつつも全くこっちに来れてない。

恐怖で行きたくても行けないんだろうね。

「家族の感動の再会って奴か？」

「きひひひつ、趣味が悪いネ」

「何言ってるんだよ、ココ。逢わせてやっただけ良心的だろ？ それに、これから感動の再

会が悲劇の別れになるかもしれないんだからな。別れの顔ぐらい見せておかねえと」

「殺しはルール違反じゃなかったのかしら？」

今までこの場で一度も言葉が発しなかった人物からようやくお声が掛かったよ。

さすがに殺しをするような発言をすれば返してくれると思った。

街灯に腰掛けるのは鎌を持った三つ編みの美少女——だけど、本当は男のカナが私に

そう言いながら殺気を向ける。

本当の名前は遠山 金一で、キンジのお兄さんだけど。

そんなカナに向かって私はヘラヘラとした感じで反論する。

「俺は殺人鬼だぜ？ 人を殺すなど言われてもなあ……それに、今回は教プロフェッショナル 授から許可を貰ってるんだから違反でもねえけどな」

「なっ!!? なんでぢや!! 妾は贄を作ってはならぬと言うのに何でお主は許可されとるんぢや!!」

「パトラは俺と違って、誰か人を殺そうが殺すまいが生きていけるだろ？ 逆に俺は人を喰うようにしていかなきや生きていけない。言わば食事みたいなもんさ。全く、難儀なモンだぜ」

一度も思った事はないけどね。

「で、パトラよ。何か異論は？」

「くっ……納得いかんのぢや」

悪いけどそう言う体質なのは事実なんだよね。

一度試しに我慢して見たけど、結果として反動でカツエさん半殺しにしちやったからね。

「だけど、今回は特別にカナ……お前に選択権が委ねられる」

「……どう言うこと？」

私の言葉の意味が分からないと言った風にカナは声を上げる。

「なに、簡単な事さ」

私が懐から右手でスイッチを取り出して押す。

すると、1台の車が私達の向かい側の道路に見えるようにして停まる。

ちなみにその車の後ろの道路の上ではさっきの火事場泥棒さんが仰向けになって足を縛られています。

と、同時に私は左手でS & W M500の銃口をあかりとのかの母親の頭に向ける。

「向こうの車の後ろで寝そべってる男かそこにいる女か……どっちかを見捨てろ」

「見捨てろ、ですって？」

私の一言にカナは大きく目を見開く。

HSSでも状況から予想できなかったのかな？

疑問は後に置いて話を続けよつと。

「ああ、そうだ。どちらかを見捨てろ。お前にその選択権をやる」

「どう言うつもり!？」

さすがに生死の選択権をやるなんて言われて、冷静じゃいられなくなったのかな？

座っていた街灯から飛び降りてくる。

その顔には焦りか怒りかはよく分かんないけど取りあえずは動揺してる。

「なに、お前は武偵と言う事もあつてかイマイチ甘い考えを持つてるみたいだからな。

少しばかり矯正してやろうかと」

武偵うんぬんと言うより、お父さんからの任務の一つでもあるけど。

カナ、と言うより遠山 金一の信念を折る。

それがお父さんから言い渡された間宮一族襲撃と同時に言い渡された任務。

なんでも、いきなり折らなくていいから徐々に崩して欲しいって言ってたけど、どうなることやら。

まあ、任務を抜きにしても楽しいけどね。

「それで、だ。いざ、こうして強大な敵を前にして人質を取られた場合に、お前は切り捨てる事が出来るのかというテストだよ」

私が言葉を紡ぐ度にカナの鎌を握る拳に力が入ってるのが分かる。

なかなか良い感じだよ。

「ルールは簡単さ。俺の右手に持つてるスイッチを弾くか、左手に持つてる銃を弾くかだ。選ばないのは無しだ。ちなみに他の奴らは手出し無用で頼むぞ」

「ゲババババアツ！ こんな愉快なショーが見られるんだ。俺様としてもそのガキがどうするのかを見届けさせて貰うぜ」

ブラドはよく私の話が分かってくれるよ。

やっぱり、理子の事が絡まなかったら一番気が合うんだよね。

「元より手を出す気も無いネ」

「私は最初から不干渉よ」

猛妹メイメイと夾竹桃は、静観と。

パトラは微妙そうだけど、手は出さないでしょ。

さっきの言葉の意味はさすがに理解したのかカナの表情は静かに沈んでいく。

つまりは、助ける方の手に持っている物を弾く。

そして、弾かれなかった方の物を使って殺す。

右手のスイッチが弾かれたなら、左手で女性をバーン。左の銃を弾かれたなら右手のスイッチをポチッと押す。

とまあ、そんな感じで殺やっちゃいます♪

本当は銃なんて好きじゃないんだけどな。

単純だけど良い選択肢だと我ながら思うよ。

あ、そうだ。

「ああ、言い忘れてたぜ。もし俺を狙ったりしたり、妙な真似をしたら両方とも殺した上でお前の家族の誰かが死ぬ事になるから注意してくれよ」

「……………!!」

お父さんから殺していいのは一人だけって言われてるから、脅しなんだけどね。

でも、そんな事をカナは知らないから本当にすると思ってるのか声にならない声を上げる。

「おいおい、まさか家族が狙われないと思ってたか？　ちよいと失礼……あく、あー」
ボイスチェンジヤーと変声術を駆使して声を変えてと。

「こちら遠山　キンジ、メッセージをどうぞ」

適当にキンジの声真似をして喋ってみただけど……うん、ちゃんと真似できてる。声調も問題なし。

ただ、外見は別の日本人男性だから合わないんだけどね。

だけど、カナの動揺を誘うには十分だよね。

案の定さつきよりもさらに目を見開きカナは驚きを露あらわにしている。

「アナタ……まさか!？」

「そうさ。俺、遠山　キンジはジャックにもう会ってるんだ」

「……………」

呆然と言った感じで、衝撃の真実にカナは——いや、金一は立ち尽くす。

いや、今の表情はさらに良かったよ。

まさに絶望って感じだったね。

私が本人の声真似が出来るってことは、居場所なんて既に知ってるってことだから

ね。

ああ、声を元に戻しておかないと。

「なに、お前がどちらかを今この場で選べば犠牲は最小限に抑えられる。ただそれだけの話じゃねえか。それに実際に殺すのは俺なんだ。お前は自身は手を汚す事はない。そうだろ？ そう思えば楽な選択肢じゃねえか」

バカにするでもなく、労わる様な声音で私は問いかける。

その言葉にカナは――

「……ふざけ……なっ」

ん？

「――ふざけるなっ!!」

おお、カナじゃなくて金一の声の方が飛び出して来たよ。

心が不安定のあまりにHSSが解けちゃったか。

そして、不安定であるが故か金一は声高にして叫ぶ。

「自身の手を汚す訳じゃないから楽な選択肢だどっ!! ふざけるのも大概にしろ！ 人の生死がどれだけ重大な選択肢なのか分かってるのか!？」

私に説教されても困るんだけどね。

大体、殺人鬼だよ？ 私。

日本だと人を殺す鬼って書くんだし、鬼が人を殺すのに何か疑問があるのかな？

ほら、吸血鬼のブラドも不思議そうな顔してるし。

「はいはい、人の生死がどうこうとか……話を逸らすんじゃないやねえよ。今ある選択肢に目を向けるや」

そう私が言っても、未だに決めかねずにいるのか黙っちゃったみたい。

どうせ、両方を救うにはどうすればいいのかとか悩んでるんだろぅね。

金一の信念からして、そう言う思考に辿り着くって言うのは調査して分かり切ってるし。でも、時間は与えない。

「10秒……10、9、8」

私がカウントを刻み始めるとようやく金一は愛銃であるコルト SAA（ピースメーカー）と言うリボルバーをゆっくりと抜きと抜く。

ただ、その銃身はぶれまくってるけど。

「7、6、5、4、3」

顔を背けながらも銃は降ろさない。

「2」

そして――

「1」

加速した車のエンジン音に負けないくらいの悲鳴が木霊こだまする。

わくお、研磨機で背中全体を擦ってるみたいにく肉が抉きれてるよ。

アスファルトの上に小さい肉片が転がってるし、まるで赤い絵の具のような線を引いてるところがまた良い。

目の前の道路を目に見える範囲で3往復はしてる。

「串刺しより魅力を感じねえな」

「そうか？　これはこれでなかなか良い味を出してると思うが」
ブラドとその様子を見ながら評価する。

しばらく見ててある程度は満足したから、今は殺人衝動を抑えられる程度にまで鎮静化した。

もちろん、『ある程度』だから完全には満足してないけどね。

あの人はそのまま死ぬまで引き摺られて貰おう。

「いや、良い選択だったぜカナ？　いや、今は金一か」
この答えを出した本人に話しかけるけど、反応がない。

……と言うより、罪悪感に苛まれてるって感じ。

普通に考えて何を気にする必要があるんだか……実行したのは私で、金一は選んだだけ。

選んだって言うのは言い間違いかな？ 選ばせたって言うのが正しいんだろうけど、どっちにしたって気にする要素はあんまり無いよね。

「気にする必要は無いだろ？ 大体、あいつは火事場泥棒だったんだぜ。そこにいる母親が死んで、娘二人が悲しみに暮れると言う事態をたった一人の犠牲で回避できたんだ。安いもんだろ」

既にあかりとののかの母親は解放してる。

まさに家族の再会を味わってるどころなんだよね。

「……………クソ野郎が」

対する金一は憎々しげに一言、そう呟いた。

「ははっ!! 良い返答だ。まあ、何にしろテストは合格だから安心しろ。それよりも少しばかり長居し過ぎたな」

私がそう言うのと、サイレンの音が遠くから聞こえてくる。

多分、消防団や地元警察のサイレンだろうけど……武偵が混じってる可能性はある。

「今日はこの辺で解散だ。先に失礼」

と言って、私は一足先に離脱して山の森へと移動する。

あく明日が学校は休みでよかったよ。

そうだ……ポストーク号に帰って理子に会つとかなないと。

最近は全然会ってないし。

と——その前に。

「どうしたんだ？ 夾竹桃」

「あら……気づいてたの」

「いや、普通に気づくと思うぞ」

暗い林の奥からガサガサと音を立てながら夾竹桃が現れる。

別に最初から隠れる気も無い尾行しといてよく言うよ。

そう言えば一つだけ聞いておきたい事があつたんだ。

「そう言えばお前、間宮の秘術をあ母親から聞かなかつたのか？」

「確かに気になるけど……自分で手に入れなくちゃ面白くないでしょ？」

ああ、成程ね。

毒にこだわりを持つ夾竹桃らしい答えだね。

と言う事は、さっきの娘のどちらかに毒でも仕込んで行つたんだろうね。

「そうかよ。そいじやあ俺は一度、イ・ウーに帰るわ」

報告とかいろいろ兼ねて。

「そう……ならついでに、私も帰るわ。さつそく間宮のこの秘伝書を読まなきゃならな

い」

夾竹桃は一冊の本を私に見せながら言う。

それが夾竹桃の今回の狙いだっただらうね。

「そう言えば、何で俺の後をつけにきたんだ？」

「私の麻痺毒を使ったでしょ？ 感想を聞きに来たのよ」

ああ、そうだった……。「使ったら感想を頂戴」とか言ってたね。

「じゃあ、一緒に帰ろうぜ。感想ならその道中でも良いだろう？」

「そうね」

そう言つて、私と夾竹桃は林の奥の闇へと消えて行つた。

5：リュパンとジル

間宮一族襲撃の後、私はボストーク号——つまりはイ・ウーへと帰って来た。ついでに言うのと理子を探しながら。

「理子〜。どこにいるの〜」

と、私は優しいお姉さんと言った感じの声音で呼びかける。

今回の容姿は理子と同じ……と言うか、大体会う時は同じ容姿にしてる。じゃないと理子が混乱するし、同じ容姿の方が双子のお姉ちゃんっぽい。

それにしてもおかしいな、今日はいるってお父さんから聞いたのに。でもお父さんがいるって言うてるんだから、間違いはない筈なんだけどな。

「もう、出で来ないとぶんぶんがおくだぞー！」

指で角を作りながらそう言うけど、反応はナシ。

「誰をお探しかしら？ 4世」

と、私が探してる人物の声ではない声が聞こえる。

理子と勘違いしてるっぽいね。

ついでだから、ここは理子に成り済ましとこう。

「……ヒルダ」

私が理子が真剣な時にやる口調で声を掛けた者の名前を呼ぶ。

コウモリのような翼を持った金髪ツインテールで縦ロールの少女がそこにいた。

「そう怯えなくても何もしいわよ、4世」

舐めるような言い方で彼女はそう言う。

何かしてきたら銀ナイフを突き立てるけどね。

弱点に耐性があるだけで、苦手なのに変わりはないのは分かっているし。

怯んだりすれば、後は魔臓を刺せばいいだけ。

「貴方の事だからジャックを探してるのでしょうか？ なら、プロフェッショナル教授の所にいるんじゃないかな

いかしら」

既に行ってきたけどね。

「……ありがとう」

そう言っただけは去ろうとする。

「待ちなさい、理子。教えてあげたのだから、対価を払うべきじゃないかしら」

そして、私は止まる。

ふうん……ヒルダってば、理子にそんな要求をするんだ。

まあ、取りあえずここは流しておこう。

そのまま私が立ち尽くして、ワザと微かに震えてるフリをする。

するとヒルダはゆっくりと近づいてきて、私の両肩に手を添えて後ろから顔を近づける。

「最近、血を吸っていなくてね。だから、教えて上げたお札に少しばかり分けて頂戴」

そう囁き、首筋に息が掛かる。

さて、そろそろ眼球に銀ナイフでも刺して――

「ひ、ヒルダ？」

今の私と全く同じ声をした。

その声に反応してヒルダは後ろを向く。

「え……？　4世が二人？」

ヒルダの向いた方向には『本物の理子』がお菓子を持ちながら呆然としている。

同じようにヒルダも呆然としながら眼を見開いて、今の状況が分からずにいる。

ああ、そう言えばヒルダは私が理子の恰好をして本物の理子に会いに来てる事を知らないだった。

それにしても、良い驚き顔だねヒルダ。

いつもの澄ました顔が嘘みたいだよ。

これはこれで、理子に成り済ましてた価値があったね。

「それじゃあ、こっちの4世は一体……」

今度は逆に私が向かい合う形でヒルダの肩を持つ。

「ゴメンね。ヒルダが理子だと思ってたのは、ジャックと言うかジルちゃんでしたー」
「な、何ですって……」

「で、ヒルダ。あの程度で一々、理子に対価を求めてるの？」

私が唇を釣り上げて、ニヤリと笑いながらヒルダに問いかける。

一応、契約で人間の血液——しかも女性で処女の物を私がいくらでも調達する代わりに理子には手を出さないって言う話だった筈なんだけど。

私の間違いだったのかな？

「くっ……」

「ああ、妙な真似はするな。この距離なら十分にバラバラに出来る」

理子が本気になる時の男喋りで私は警告する。

いくら、超再生能力があると言っても体がバラバラになれば再生時間は延びる。

その延びた時間を使えば、弱点である4つの魔臓を同時に破壊するのは容易だしね。

それに、電気攻撃をしようとしてもアレは少し力を入れないと発動しないから……この距離なら力を入れる前に首を切り落とす事が出来る。

吸血鬼と言えど人間と同じように頭で考えて行動するんだから、その考える頭が無ければ体は何もできないって訳なんだよね。

とまあ、そんな事はひとまずは置いておいて。

「あたしとの契約に無かつたつけ？ 理子に手を出したら殺すつて。もしかして、あたしのいない所でそう言う事が何度もあつたのか？」

「……………」

もし、そう言う事なら契約は完全に無効だよな。

約束はちゃんと守って貰わないと困るよ。

だんまりつて事は、Yesつて事でいいかな？

「じゃあ……バイバイ」

別れの挨拶と共に、私は物凄い速さでサバイバルナイフを振るう。

それは、私の腕が相手には視認できないくらいに速く。

ヒルダが力を入れる間もなく、首が飛ぼうとしたその時――

「――待って!!」

抑止の声に私は、ヒルダの首筋でピタリとナイフを止めた。

「どうしたの？ りこりん」

打って変って私にこやかに理子に問いかける。

「ジャック……あたしは何もされてないから」

「ホント？ 脅されてたりとかしない？」

「うん。ホントに何もされてないから……大丈夫だから。お願い」

うくん、でも表情から見るに何か隠してるっぽいけどね。

このまま腕を振るっても良いんだけど……『家族』の頼みだしなく。

理子の意思がどうなのかは分からないけど、ここは聞いておこう。

「分かったよ。それじゃ、行こっか♪ それじゃあねヒルダ」

ナイフを下ろしヒルダの横を何事も無かったかのように通り過ぎる。

そして、そのまま理子の手を取って歩き出す。

——ミシッ！

何か、後ろで金属がひしゃげるような音がしたけど気にしない。

どうせ、ヒルダが悔しがってるだけだろうから。

やっぱり、高飛車だったりプライドが高い人ほど遊び甲斐があるね。

しばらく歩いて、理子の部屋へと到着。

いつ来てもファンシーだね理子のお部屋は。

特に、フリルの付いた意匠の服が多い。

中には私の上げた変装用の服もあるけど、それでも多いのはロリータファッション系なんだよね。

今、理子が着てるのも同じ物だからね。

「りこりんの部屋に来るのもひつきしぶりだね〜」

半月ぐらい？ いや、一月は理子には会ってないな〜。

お互いに忙しいみたいだしね。

仕方のない事だけだ。

「ほら、今日ー日はここに居るからゆっくりお話でもしよ」

「うん」

私がベッドに腰掛けながら言うけど、理子の返事はどこか元気がない。

「どうしたの？ もしかして、この姿じゃ駄目だった？」

前までは「お姉ちゃん」って言いながら甘えてきてくれたのに。

「ううん、違う。そうじゃなくてジャンヌに聞いたの。ジャックは理子に本当の顔を見せた事があるって」

そう言えば、そんな事言ったね〜ジャンヌに……

まあ、理子に喋るのなら別にいいかな？ 他の人に漏れてるの分かった瞬間には火刑台のジャンヌ・ダルクにしてあげるけど。

「あるよ。リコりんは覚えてないかもしれないけど」

アレはいつだったかな？

確か、理子がうっかり私の部屋に踏み入れた時だったかな？

取りあえず、その時の私はお父さん曰く「手がつけられない子供の100倍は手がつけられなかったよ」と、笑顔で言ってた。

つまりは今よりもやんちゃだった時なんだよね。

で、何も考えずに入ってきた理子を殺そうとして。

お父さんが乱入して。

止められて。

私の顔を見た後に理子は気絶して。

私もお父さんに気絶させられて。

終了。

そんな感じだった。

だから、私の本当の顔を見たとすればその時なんだよね。

いや、あの時の理子には悪い事をしたと思うよ。

「それで、本当の顔がどうかしたの？」

「うん。今までは、ジャックが本当の顔を出さないのは何か理由があるんだと思ってた」

ふむふむ。

「だけど、ジャンヌの話聞いて思ったの。一度素顔を見せてくれたのにどうして見せてくれなくなつたんだらうって……」

見せたつて言うより、偶然見たつて言つた方が正しいんだけどね。

「ねえ、ジャック。理子とジャックは家族だよね?」

私の隣に腰掛けて心配そうに理子は呟く。

ああ、成程ね……何となく理子の言おうとしてる事が分かつてきた。

「つまり、りこりんは私の素顔が見たい訳なんだね。いいよ、別に見せても」

「……え?」

何その意外そうな反応。

「隠してるんじゃないの?」

「うくん、別に隠してる訳じゃないんだよね。家族の前でも隠すのは他のイ・ウーのメンバーに見られるのを防ぐためだし」

ただ、何となく家族以外には見られたくないかと思つてるだけで別に見せても構わないんだよな。

それに、仮に素顔だつたとしても普段から変装をしてる私だから、本当の顔だと気づく可能性は低いし。

「さてと……それじゃあ、りこりんには特別に公開しちゃいます」

タネ明かしとばかりに私がカツラを取り、その中で結わえていた本当の髪をほどく。サラリと私の髪が背中、そしてベッドの上へと現れる。

カラーコンタクトを取り、それから特殊な薄い皮のようなマスクを取る。

「ふう……あと、声も戻しておかないと」

ちゃんと地声に戻して、一先ずは大体OKかな？

「うん、これが本当の私の顔と声だよ」

「……………」

って、あれ？ 理子は何でそんなにポーっとしてるの？

「ここはもつと驚く所じゃないの？」

「理子？ どうしたの」

「……………」

私が声をもう一度掛けるとようやく、理子は我を取り戻す。

「本当にジャック？」

「みんなジャックって言うけど、女の子だからジルって言う方が正しいんだけどね」

「……………男じゃなかったんだ……………」

「——え？」

「今まで、男だと思ってたの？」

「だ、だってジャックって男の名前だし、変装してる時は男の方が多いし」

「だから、みんなが勝手にジャックって呼んでるだけだよ。ジャックって呼ばれてるから本当の性別は男だと思ってたの？」

だとしたら、それはそれでありがたいけどね。

余計に私の事を勘違いしてくれて、色々と誤魔化せるし。

それに私自身、本当の名前なんて知らないしそもそも無いのかもしれないだよね。

別に何の問題も無いけど。

「あと、ちなみに言うとなんの変装が多いのは成り代わる対象が男性の場合がほとんどだからなんだ」

それ以外の場合は大体気分で決めてるからなく。

そう考えると、確かに男性の方が多いかもしれない。

「……そうなんだ」

すごく驚いてる感じだね、理子。

こんなに驚いてるのは、家族になろうって言った時以来だね。

「さてと、私ばかり話しても仕方ないんだよね。それに、時間も無いし」

今日1日終われば武偵の方に戻らないといけない。

キンジの方も気になるし。

「だから、ほら。理子のお話聞かせてよ」

「……う、うん」

なんだか急に理子がよそよそしくなったけど、まだ私の姿に動揺してるのかな？
もしかして想像してたのと違いすぎて幻滅しちゃったかもしれない。

うん、やっぱり正体は明かさない方が良いのかな？

そう思いつつも一度話してしまえば、理子はいつも通りに話をしてくれた。

こうして私と理子はしばらくの間、家族の雑談を楽しんだ。

◆

◆

◆

あたしの名前は理子——峰・理子・リュパン4世。

そしてジャックの妹であり、両親が死んだ後に出来たたった一人の家族。

それがあたしにとってのジャック・ザ・リッパー。

だけど、あたしは未だに混乱してる。

だってお兄ちゃんだと思ってた人物が実はお姉ちゃんだったなんて……

と言うか、ジャック——いや、ジルか……とにかくお姉ちゃんの変装を見破れとか言

われても無理ゲーなんだよね。

例えるならカエルでヘビに勝って言うくらいに無理。

實際、理子よりも何十年も長生きしてるヒルダですら見破れなかつたくらいだから、相当に完成度は高い。

逆にお姉ちゃん以上の変装の技術を持つてる人がいたら理子に教えて欲しい。

あたしの変装技術はお姉ちゃんが師匠——つまりは世間を騒がせているジャック・ザ・リッパー仕込みだけど、あたしなんてまだまだ。

声と外見、それからその人の癖と性格までしか似せられない。

お姉ちゃんの場合は、さらに筆跡から指紋や手の皺とかあと言葉の訛りまで再現する徹底ぶりで知識も豊富だから何にでもなれる。

以前はとある研究員に3日ほど成り代わったことがあるらしいし。

研究員って事は、何かしらの専門的知識がある訳で……つまりは普通に研究員に成り済ませたって事はその専門的知識が普通にあるってことなんだよね。

その上戦闘も出来るってどんなチートって感じ。

理子を監禁してたブラドと交渉したり、パトラが怯えてるあたりからしてもその凄まじさがある。

なにせ、パトラに関してはイ・ウーの中での強さはリーダーに次ぐナンバー2でブラドはナンバー3。

そのナンバー2、3と対等以上に渡り合えるジャックはなんなの？　って話になるん

だよね。

それはともかくとして、お姉ちゃんの本当の姿を見た時……あたしは声が出なかった。

ブラウンとピンクブロンドのグラデーションをした長い髪。

そして、宝石みたいな青紫色の瞳。

どう考えても殺人鬼とは何光年もかけ離れてて、縁のなさそうな顔立ちだった。

これがホントに世間で騒がれてる——『ジャック・ザ・リツパーの再来』と言われる人物なの？

理子にはとてもそうは思えない。

だって、ジャックは……お姉ちゃんはこんなにも優しくして理子を色眼鏡で見ることなく『理子個人』として見てくれる。

時々、犯行の一部始終を映像で武偵や地元警察に送りつけてたりするけど、その映像に記録されている残虐性を持った人物とは思えなかった。

ただ……お姉ちゃんの誰も寄せ付けられないような強さにあたしが憧れてるのは、確かなんだけどね。

「どうしたの理子？」

「……ううん、何でもない」

考えすぎだったのか、お姉ちゃんが私の顔を覗き込んで来る。

「やっぱり、ヒルダのこと？」

「ち、違う……ただ、まだお姉ちゃんの顔に驚いてるだけ」

慌てて否定するけど、ヒルダのことに関しては前からそう言う事はたまにあった。

嘘だつて言うのはきつとお姉ちゃんにはバレてる。

だけど、多分私の意思を尊重して聞いてこない。

……心が痛む。

でも、あの時私の姿をしたお姉ちゃんがヒルダを殺そうとした時、私が思わず叫んで止めたのは……きつと、怖かったんだと思う。

さつきも言ったように、お姉ちゃんの変装の技術は高い。

だから……なんだか鏡を見てるようで怖かった。

心の奥底で、理子がヒルダを殺す事を望んでいるような気がして変な感覚に陥りそうだった。

あと、これはあたしの我が儘まで……お姉ちゃんが誰かを殺す所を直接見たくなかった。

今でも、あたしの目の前にいる人物が『殺人鬼』であるという事実を認める事が出来ずにいる。

結局はそれは理想の押しつけで……お姉ちゃんは、理子の家族は、こんなにも近くて遠い存在なんだとは思いたくなかった。

ねえ、お姉ちゃん……もし、あたしが殺人をやめて欲しいって言ったらお姉ちゃんはやめてくれるのかな？

代わりに理子がいくらでも手を汚すから、お姉ちゃんは今日の前にいる優しい理子の家族のままいてよ。

……そう言いたいけど、お姉ちゃんの殺人衝動は先天的な物だって言うのは分かっている。

だから、理子の我が儘でお姉ちゃんを苦しめるのもイヤだ……

深く考えれば考えるほどあたしの心は沈んで行く。

「……ふえっ?」

突然にギュツと、あたしの体が抱きしめられる。

抱きしめる人物はこの部屋に一人しかいなくて――

「お、お姉ちゃん?」

「ん? なに?」

「ど、どうしてりこりんを抱きしめてるのかな? かな?」

思わず声に変になりながら、語尾を2回繰り返してしまった……

「なんか悩んでるみたいだから、取りあえず抱きしめてみた」

取りあえずつて……：そう言えば、お姉ちゃんの事で忘れてた事がある。

それはお姉ちゃんの感情はいくつか抜け落ちていっている『部分』があると言う事……
例えるなら、喜怒哀楽の内の楽以外の感情がない。

だから、人の思考を察する事は出来ても感情には疎い部分がある。

表情が豊かそうに見えるけどそのほとんどは演技で、楽しい以外の感情を出してる気がしない。

結局のところ、お姉ちゃんの感情はどこまであるのかはあたしですら分からない。

もしかしたら実は喜んだり、悲しんだり、葛藤したりしてるのかもしれない。

だけど、結局は分からない。

こんなに近いのに、理子にはお姉ちゃんの事が分からない。

「ねえ、理子。やっぱり前の顔の方が良かった？」

突然、お姉ちゃんはそんな事を聞いてくる。

さすがに無視し過ぎだったかもしれない。

「え？ どうしたのお姉ちゃん？」

「だって、全然こっち見て話してくれないから。顔がダメなのかなって？ もしかして、

男の方が良かったりする？」

「ち、違うよー」

思わず否定しながらお姉ちゃんの腕の中で体の方向を変える。

……しまった、お姉ちゃんと向き合う形になっちゃったよ。

うう……夾ちゃんのような趣味がないにしても、お姉ちゃんの素顔を見てるとりこりんは何か目覚めちゃいそうだよ。

「顔がダメとかじゃないの？」

「違うよ……その、お姉ちゃんの顔は凄くキレイだと思うし……顔を合わせられないのは、思わず見惚れちゃったからで——」

——つてあたしは何を口走っちゃってんの!?

発言的にそっちの趣味の人みたいじゃん!

「そうなんだ」

お姉ちゃん納得しないで!!

理子としては否定したいところで誤解なんだよ!!

「別に顔なんていくらでもあるんだけどね……私には分かんないな」

……

そうだった……お姉ちゃんは美的センスと言うか美感もズレてるんだった。

自分がどれだけ綺麗な顔かも自覚してない。

まるでファンタジー系のゲームのヒロインが飛び出してきたんじゃないかと思うような程の顔立ちをしてるお姉ちゃんは、そこら辺の女優よりも綺麗で美しく思える。

それに、お姉ちゃんにそう言う知識と言うか暗喩は通じないのを忘れてた。

「でも、理子が良いって言うんだったらこのままでも良いかな？」

そう言つて、あたしの目の前でお姉ちゃんは微笑む。

その笑顔に偽りはなくて……お姉ちゃんの『家族』という言葉に、嘘は無いつて言うのが分かる。

だからこそ、甘える事が出来る。

いつの間にかあたしはお姉ちゃんの胸に顔をうずめていた。

「……お姉ちゃん」

「ん〜？」

「甘えても良いんだよね？」

「もちろんだよ」

お姉ちゃんの声の頭の上から聞こえた時、あたしはさらに体を密着させる。

そうだよ……お姉ちゃんが何者かなんて、分かり切ってる。

理子の——家族なんだ。

そう考えながらあたしの意識は、段々と薄れていき、眠りへと落ちる。

6：気まぐれの接触

今日もまた学校が始まる。

今までなら、学校に来るのが憂鬱になってた俺だが……今までよりは心が軽くなつた気がする。

多分だろうが、アイツ——白野のおかげかもしれない。

窓から入ってくる朝の風が、妙に心地いいな。

………

………つて、待て。

確かに俺は窓側の席に座っている。

ここまでは風が入ってくる理由としては問題ない。

だけど、俺は席に座っただけで『窓を開ける』と言う行動はしていない。

つまりは窓は閉じている。

その不審な点に気づきつつ、窓の方を向いてみれば——

「おはよ〜キンジ」

いつも通りの笑顔で宙ぶらりんになってる霧がいた。

「お、お前何してんだ!？」

「何って、見ての通りだけど」

見ての通りって、分かんねーよ!

「階段登るのが面倒だからワイヤーを使って来ただけだよ」

普通に上がって来いよ。

何と言うか、前から思ってたが自由な奴だな。

「よっと」

振り子の原理で体を揺らし、掛け声と共に窓の外から教室へと移ってきた。

今、教室の中は俺と白野しかいないほど朝早くだから見ている生徒はいないだろうが

……

それでも何と言うか、面倒だからって言う理由でわざわざワイヤーを使って登ってくるなよ。

「なんてね。本当はキンジの反応が見たかっただけだよ」

「俺の反応なんか見ても面白くはないだろ?」

「ううん、面白いよ」

そう言いながら、霧はいつものニコニコ笑顔で言ってくる。

霧の感性がよく分かん。

それから、霧と他愛も無い話をしている間にH Rホームルームの時間になる。

「お前ら、席に座れ」

いつも通りに矢貫が来たが、いつももみみたいな気だるそうな声じゃない。

その異変に誰しもが気づいてる。

どうしたんだ？　こんなに真剣な表情をしてるウチの担任は見た事が無いぞ。

その雰囲気^{おととい}に気圧されてか、クラス全員の気が引き締まってる。

「昨日、茨城県にある町が襲われた。ニュースぐらいいは見てると思うが、テレビではチャイニーズマフィアによる襲撃とか色々な憶測が飛び交ってる」

確かに昨日のニュースで、そんな話はあった。

でもあれは、じいちゃんが「胡散臭いの」と言ってたから何か裏があるんだろう。

そして、その裏がこうして俺達にも知らされる事になった訳だろう。

「その時の襲撃の際に犯人を見た奴の証言から、ジャック・ザ・リッパーを名乗る犯人がいる事が分かった」

矢貫から聞かされた単語に教室が騒がしくなる。

ジャック・ザ・リッパー。

1888年に起きた連続殺人犯の通称で武偵が目指す理想の人物として掲げられているシャーロック・ホームズと闘やり合った殺人鬼だ。

しかも、そのシャーロック・ホームズが解決できなかった唯一の未解決事件。

そして、10年ほど前にその再来と呼べるような事件が起きた後に世界各地を転々としながら犯行を繰り返してる第一級の犯罪者だ。

さすがに1888年から現代に蘇ったとかはさすがに無いだろうが、逮捕しようとした武偵の何人もが犠牲になってるらしい。

「本人かどうかは分からない。ジャックの名前を騙る模倣犯もいる。だが、重要なのはジャックが来たという事実だ。よって国際武偵連盟^Aから通達があり、原則として国の武偵付属中学に所属している武偵生徒はジャックを追跡、交戦することを許可しない。なお、武偵高においても17歳以上のSランクまたはAランク以上の者でなければ交戦は許可しない」

当たり前だろうな。

プロの武偵が何人もやられてるのに、俺たちが敵う筈がない。

さすがに一端^{いっぽし}の武偵を狙う事は無いと思うが、相手は殺人鬼だ。

殺人自体が目的なのだからターゲットを選ぶ可能性は低いつて授業でもやってたな。だとしたら、日本の誰しもが狙われる可能性があるって事だ。

……いまいち殺人鬼が来たって言う実感が湧かないな。

「どうせマスコミもジャックが来たと言う情報くらいは握ってるだろうから、近い内に

放送されるだろう。警告はしたぞ、あとはお前らの勝手だ。ただし、交戦した場合には命の保証はないと思っておけよ」

その矢貫の言葉に、何人もが息を呑む。

「今日のH Rホームルームは以上だ」

そうして矢貫は教室を出ていく。

一気に教室の張りつめてた空気が霧散する感じがする。

殺人鬼なんて……勘弁して欲しいな。

さすがにこの年で辞世の句は詠いたくない。

さて、白野 霧とパートナーを組んでからと言うものの——俺の周りから利用する女の子たちの影がなりを潜めつつある。

まさか、パートナーを組むと言うだけでこんなにも効果があったのは驚きだな。

霧がほとんど俺の近くにいるおかげで、女子連中も連れだしづらいらう。

しかも、霧はAランクで生半可な実力じゃ強行策にも出れない。

——こんなところだろう。

もしかしたら虎視眈々と狙ってるのかもしれないし、火種が燻ぶってるだけかも知れないが、それでも今までのアレが無いと思うと気が楽だ。

代わりに受ける授業が増えたけどな。

現状を打破するため代償と見れば、軽いもんだ。

「……すまんが霧、教えてくれ」

「ん〜どれ？」

「このページの『アンフェタミン』についてなんだが……」

だが、なぜ医療知識を学ぶ必要があるんだ？

麻薬の取り締まりに必要と言えば必要だが……

しかも、課題で用語を調べろだなんて。

おかげで、霧に頼る破目になった。

本当なら女子と勉強なんて俺としては遠慮願いたい。

霧の事を信用してないって訳じゃないんだが、ヒステリアモードの俺を見せるのが怖

い。

「ああ、これは合成覚醒剤の一種だね。医療的に使われる事があるんだけど、身体能力も

向上するんだよね。ただ、麻薬と同じように依存性とデメリットがあつてその症状は――

――

そう言えば、最近知ったことがある。

それは霧の性能の高さだ。

戦闘は言うまでも無くAランク、その上にほとんどの問題にもスラスラと答える。頭脳明晰、文武両道って奴だな。

俺とは大違いだ。

これでSランクじゃないって言うんだから驚きだな。

「つて、聞いてる?」

しまった、自分で聞いておいて聞いてなかった。

「いや、その……」

「……ちよつと、失礼」

唐突に霧が俺の首筋に指を当てる。

「さっきの話、聞いてた?」

そして、もう一度同じ質問をにこやかな笑顔のまま強い口調で聞いてくる。

いかん………なんか、誤魔化したらヤバイ。そんな雰囲気がある。

「すまん………聞いてなかった」

「何か考えごと?」

「えつと、それは……」

さすがにこれには言いづらい。

霧の事について考えてたって言うと、何か恥ずかしさがあるぞ。

「なんだ、考え事してたなら言ってくればいいのに」

俺が何かを言う前に、霧は納得したようにして指を首筋から離す。

「お前、なんでそんな事分かるんだ？」

いくらなんでも、人の思考が読み取れる訳じゃないだろう。

「知らないの？ 首の脈に指を当てて動揺すれば、血流が変化するのを感じるから嘘を

言ってるのが分かるよ。割と簡単な嘘発見方法だよ」

それはまだ、武偵では習ってないな。

って言うか、内容的には諜報科レザドか尋問科ダギユラの方の部門じゃないか？

「なんでそんな事、知ってるんだ？」

前から疑問に思ってたが、霧は色々と出来すぎる。

別に不審がる事じゃないかもしれないが、どうしてそんなに医療に詳しいのか気になる。

「ん〜？」

「ああ、いや。無理に答えなくても良いぞ。家庭の事情だからな」

プライベートな事は何を突っ込もうとしてんだ俺は、しかも女子に。

「そうだね。知識的に必要だったからかな？」

「いいのか？ 話しても」

「別に話しても問題ないよ。あんまり詳しくは話せないけど」

「いや、俺が勝手に聞いただけだし、それでも十分だ」

それから霧はペンを置く。

「まず、私の家族だけだね。お父さんと、姉と妹がいるんだ」

「母親は？」

「母親は知らないよ」

「……そうか」

なんか、悪い事聞いちゃったな。

ウチも母親は早めに亡くなったんだよな……父さんも同じように亡くなっちゃったし。

「それでね、お姉ちゃんが病弱だね。ベッドから出る事はあまりないんだよね。お父さんも寿命が近いらしいし」

……お前、なんでそんな暗い事を平気で、そんな笑顔で言えるんだ。

と言うか、パートナーになったばかりの俺がそんな事を聞いていいのか？

「それで、お姉ちゃんは何の医者に診てもらってもどうにもならないみたいなんだよね」

「そうか……暗い話させてゴメンな」

「そう？ 今すぐ死ぬって訳じゃないから、暗い話でもないと思うけど？」

前向きな奴だな。

「それに、まだまだ時間はある訳だし楽しい事をしながら家族と過ごせればいいよ」
「それって諦めるってことか？」

思わず言ってしまった俺の一言に霧は少し笑いだす。

「まさか、家族を見捨てる訳ないでしょ？ 他の医者が治せない私が治すだけだし」

俺としてはお前の笑顔の裏にそんな事情があることにまさか、だよ。

強いな、霧は……

まるで俺の憧れる兄さんみたいだよ。

「あ、こんな時間か」

霧がそう呟くといつの間にか外は薄暗くなっている。

今使ってる図書館も閉まる時間だろう。

課題の提出はまだ先だけど、今日で大体は既に終わったし。

そう言えば、今日は兄さんが久しぶりに帰ってくる日だったな。

「なあ、霧。今夜、時間空いてるか？」

「うん？ 別に予定なんてないけど」

「なら、ウチに来ないか？ 今日、兄さんが帰ってくる日だからお前を紹介しておきたくてな」

兄さんは俺の学校での現状は知ってる。

と言うより、分かっているだろうな……俺がヒステリアモードを利用して女子たちの奴隷になつてゐる事を一度も話した事は無いが、多分、察してゐるんだろう。

だけど、俺は兄さんのような武偵になるためにはこの程度の事で弱音を吐いてられないと思つて、あえて相談しなかつた。

それに武偵庁の特命武偵である兄さんは自身忙しいのだから仕方のない事だとも思ふうけどな。

だが、霧のおかげで相談する必要も無くなつた。

パートナーが出来た事を兄さんに知らせる形で霧を紹介すれば兄さんも安心する事だろう。

ついでに夕食でも御馳走しよう。

以前のお礼も兼ねて。

「いいよ。それじゃ、片付けていこつつか」

別に驚く事も無く、霧は了承した。

せつせと勉強道具を片づけて俺たちは巣鴨にある俺の家へと向かつた。

そして、家に着いた時には薄暗かつた空が完全に闇に包まれている。

「じいちゃん、戻つたぞ」

「おじやましま〜す」

俺の後ろに続く形で霧が中に入る。

おかしいな？ 家の中に人の気配がない。

居間の方に行ってみるが……やっぱり、いない。

留守か？

と思つて、電気を点けて見るとちやぶ台に書置きっぱいがある。

——生け花教室により遅くなります。 セツ

成程な……じいちゃんの方は、いつも通りギャンブルかグラビア雑誌を漁りに行つて
るんだろう。

正直、じいちゃんがいなくてよかった……

女子を連れてるの見たら多分、変な意味に捉えるだろうしな。

「そこら辺に座ってくれ」

畳の上に静かに座りながら霧は物珍しそうに周りを見渡す。

まあ、今時こんな平屋の家に住んでるのは珍しいかもな。

そろそろ兄さんが帰ってくる時間帯の筈なんだが……

◆ ◆ ◆

「はあ……」

にはならない。いや、なつてはいけないんだ。

——と、考え事をしてる間にも家に着いたようだ。

「ただいま」

玄関を開けてみてすぐに違和感に気づく。

靴が二足……一方はキンジのだが、一方は違う。

しかも、サイズのにもデザイン的にも女子の物だ。

祖母の靴が無いあたり、二人は何か用事だろう。

キンジが女子を連れ込むとは……まあ、アイツも男だ。

だが女心をあまり理解せずにいるのは、正直感心しないがな。

前から感じていた事だが、キンジはヒステリアモードも相まって女性を惹きつけやすい。

あまりその事を自覚しないとキンジに惚れた女性に後ろから刺されかねない。

女の執念は恐いからな……

「兄さん、お帰り」

「ああ……客が来てるのか？」

靴を脱いでる最中にキンジから声が掛かる。

それに返事をしながら気になっている事を聞いてみる。

「あくまあ、あとで兄さんに紹介するよ」

歯切れが悪いな……

と言うより緊張してると言った感じか。

「パートナーでも出来たか？」

「……何で分かるんだよ」

「直感さ」

女性を家にあげるのはキンジにしては珍しいからな。

ただまあ……気になる点があると言えばそのパートナーもヒステリアモードを利用しようとか画策してるのかどうかと言うところだな。

そう言う手合いだった場合は色々と面倒が多い。

どういう人物かどうかは実際に会えば分かる……か。

「それはそうと、居間にいるのか？」

その問いに対してキンジは短く「ああ」と答えた。

あんまり、客を待たせる訳にも行かない。

キンジのパートナーを拝見するとしよう。

廊下を歩き居間に着いてみればそこには一人の少女がいた。

キンジと同じ武偵中学の制服に黒い短髪、そしてどこか幼さの残るような雰囲気

纏っている。

「あ、お邪魔してます」

彼女はにこやかに微笑みながら、居住まいを正す。

「ああ、ようこそ遠山家へ。俺は遠山 金一……キンジの兄だ」

「初めまして、白野 霧です。えっと、キンジのパートナーをやらせて頂いています」

互いに挨拶を交わすが……成程、何となくだがなかなかの実力を持つてるな。

それに物腰の柔らかな笑顔だ。

特に何かを画策しているような雰囲気は無い。

「なんか、雰囲気が違うな」

「いや、柄にもなく緊張しちゃって」

キンジの一言に霧は困ったように返す。

「まあ、緊張する事は無い。失礼だが白野のランクは？」

「一応、Aランクです」

「なら、安心だ。ダメな弟だがこれからも良いパートナーでいてくれると嬉しい」「兄さん!？」

文句でもあるのか？ そう言う思いを籠めてキンジに視線を送る。

するとキンジはすぐに引っ込んだ。

まったく……俺以上の才能を秘めているのだから、もう少し自分の能力と向き合って貰いたいものだ。

「こんな夜遅くだ。夕食はうちで食べて行くといい」

「それじゃあお言葉に甘えて」

キッチンに行き、夕食の支度をする。

祖母が作り置きをしてくれているのだが、あいにくと白野の分は無い。

急な来客だからな。

事前に連絡してくれればいいのだろうが、俺はイ・ウーにいる事も相まって忙しい。

つまりはいっ帰れるのかがあまり分からないのだ。

だから、俺が帰ってくる時の連絡はその前日かよくて1週間前だ。

大体は前者の方が多い。

と、考えていればキンジが横に来る。

「俺がやるよ。兄さん、帰ってきて疲れてるだろ？」

「特に疲れてはいないが……そうだな。俺はお前のパートナーも気になる事だし、少し

話してこよう」

「疲れてるなら疲れてるって素直に——うおっ！」

振り返り、キンジの眼前に拳を突きつける。

それも目と鼻先の間と言った位置だ。

「今の俺でも、キンジ相手なら充分戦えるぞ」

笑みを浮かべながらそう言うのと、キンジは苦笑いを返す。

「分かったよ。とにかく、料理の方は俺がやるから」

「ああ、頼んだぞ」

すれ違うようにして俺は居間の方に戻る。

そして、彼女の方を見てみるとどうやら何かの本を読んでいるようだった。

だが、すぐにつまらなさそうな表情をして本を閉じる。

「どうかしました?」

こちらに気づいたのか、彼女は言葉を掛けてきた。

「いや、なんでもないさ。ただ、何を読んでいたのかと思つてね」

そう言いながらちゃぶ台の近くに腰掛ける。

「医療系の本です」

「それは、大学の医学部に進むような本格的なヤツだな……」

「これでも医療には自信があるんですよ」

と、彼女は微笑みながら返すがいささか緊張しているようだ。

「別に、砕けた話し方で構わないさ。そう緊張しなくていい」

「そう？ ならいいかな」

随分あつさりと口調を崩したな……

「それで、白野の学科は衛生科メデイカなのか？」

「いいや？ 強襲科アサルトなんだけど……」

「そうなのか？」

医療には自信があると言う発言とAランクと言う実力からしてそうだと思ったのだが。

「お金がいるからね。強襲科アサルトの方が手っ取り早く集められるし」

「なるほどな」

別に理由は詮索しない。

そこまでプライベートに踏み込むつもりはないからな。

「ところで、キンジとパートナーになった理由を聞いてもいいかな？」

「キンジとパートナーになった理由……？」

「ああ」

「そうだね、一言でいうなら気に入ったからかな？」

随分と単純な理由なんだな。

もうすこし背中を預ける相手を選ぶ時間はあつただろう。

こう言うってはキンジに失礼だが、普段のアイツは頼りないからな。

だが、人一倍打たれ強さと逆境に立ち向かう力はあるから、足を引つ張るなんて事は無いだろうから特に問題は無いが。

「気に入ったからか……」

「そうそう。キンジと一緒にいれば楽しい事が起こる気がするんだよね。それに、見
ていて楽しいし」

「まあ、アイツは弄られ易いからな」

「そうなんだよね。つい、反応を見るのが楽しくてね」

「幾らなんでも酷くないか……」

「どうやら、キンジが戻ってきたようだが先程の会話を聞かれていたらしい。

料理を運びながら呆れたような目をする。

「だって……ねえ？」

「仕方がないだろう」

白野の言葉には何となく共感できる。

「理不尽だ……」

料理を並べ終えた後にキンジは肩を落とす。

「そう肩を落とすな。さて、食事にするのでしょうか」

そして、俺たちは食事をすることにした。

メニユーはサバの塩焼きにサラダ、竜田揚げと言ったところだ。

やはりの家庭の料理が一番だな。

食事の最中に適度な雑談を交え、そして完食した。

その雑談の中で感じた事と言えば、どうやらキンジを利用すると言った魂胆はないと言ふ事だろう。

パートナーになった理由は本人が言ったように純粹に気に入ったからだろう。

皿洗いはキンジに任せ俺は白野と縁側に腰掛けながら、引き続き話をしている。

「そうか、最近では体内の電気信号を利用した高度な義手もあるのか」

「そうそう。ほんと、見た目は人の腕その物だよ。ただ、やっぱり値が張るみたいで先進国じゃないと恩恵を受けられないみたいだね」

白野と医療関係の話をしているのだが、なかなか興味深い話を聞いた。

どうやら医療知識に自信があると言う彼女の言葉は嘘ではなく、それどころか俺の話について来ている。

自慢じゃないが、海外の医師免許を持つてる俺からしても感嘆させられる部分がいくつもあった。

「ふう……」

「ん〜？ どうしたの？」

「……いや、なんでもないさ」

「そうかな？ なんか悩んでるような息遣いだったけど」

この子は良い勘をしているな。

確かに、ジャックの事で未だに引つ掛かっている。

「ふっ、後輩に見抜かれるようじゃ俺もまだまだだな」

「じゃあ、やっぱり何か悩んでるんだね」

微笑みながら彼女は首をこちらに向ける。

「そうだな……だけど、これは俺の問題だ。それに、弟が傍にいる状況ではあまり話したくない」

兄としての意地と言う奴だな。

たった一回挫折したからと言って、弱音を吐くほど俺の心は折れていない。

確かに俺はあの時、間宮の里で一人の人間を救えなかった。

だが、悔んでいても何も始まらない。

それは一番俺が分かっている。

だからこそ俺は犠牲になってしまった奴のためにも——ジャックを逮捕する。

俺自身、鍛えなおしながらイ・ウーの中で確実に力をつける必要がある。

組織の中で実力がある事は認められたが、それでもイ・ウーの中で日の浅い俺の地位は低いだろう。

もう少し内部を探るためにも信頼を勝ち取らなければならない。

.....

個人的な思惑は置いておこう。

今は、客が来ているのだから。

「話は変わるが、白野は何を帯銃してるんだ？」

「M500」

.....なに？

「いや、何でか知らないけど親から貰ったのが何故かそれなんだよね。どう考えても、女の子に持たせる銃じゃないと思うんだけど」

確かにそうだ。

華奢な彼女が持つには手に余るような銃だ。

こう言つては何だが、その親は何を考えているんだ？

「少し、見せてもらえるか？」

「.....はい」

彼女は太もものガンホルスターから銃を取り出し、トリガーとトリガーガードの間に

指を入れて此方に手渡す。

まさか市販最強の銃を手取る事になるとはな……

父さんはデザートイーグルを使っていたから銃自体にはあまり驚きはしないが、女性が握るには似つかわしくないな。

だが、本体の方はよく整備されている。

特に不審な点などは無いが……ん？

フレームに弾丸が当たったような傷があるな。

傷自体は別に珍しくもない。

だが傷の個所が、あの時と同じ——

……同じ？

その瞬間、俺の中の記憶がフラッシュバックする。

白野が持っているコレと同じ物を、ヤツ——ジャックも持っていた。

それはいい、まだ偶然だと言える。

だが、同じ個所に似たような傷が入っていたとしたら？

偶然にしては少しばかりおかしい。

そして同時に俺は奴の台詞が蘇る。

『遠山 キンジはジャックにもう会ってるんだ』

まさか、と言う思いを胸に俺は白野 霧と言う人物を見る。

だが、彼女は小首を傾げるだけだ。

以前のジャックとイコールで結び付く要素は銃と言う一点のみ。

繋がりとしては弱いが、今の俺の中の不安を増長させるには充分だ。

「えつと？ だいじょうぶ？」

「……っ！ いや、何でもない」

俺の勘が警鐘を鳴らす、それでも今この場で確かめるにしても証拠としては弱い。

ダメだな……ジャックとの邂逅以来と言うものの少しばかり神経質になっているよ

うだ。

だが、俺の中で胸騒ぎが消えた訳ではない……キンジには悪いが、この少女——白野霧について少し調べる必要があるようだ。

◆ ◆ ◆
「どうも、ごちそうさまでした」

「ああ、気をつけて帰ってくれよ」

「Aランクだよ？ 不意打ちでもされなかったら後れは取らないって」

「それもそうだな」

「それじゃ、また学校で」

「ああ……」

キンジと別れの挨拶をして、キンジの家を後にする。

金一の方は表情は穏やかだけど、目に少しばかり不信感が籠もってるね。

しばらく歩いて、キンジの家が見えなくなったあたりで思わず笑みがこぼれる。

「くくく、ふふふ……」

銃を見せた時の表情……よかったなあ。

金一の事だからキンジの事も考えて、きっと深くは聞こうとしないだろうと思つてた。

それに私がジャックつて言う事をかなり遠回りに示したけど、さすがに銃一つじゃ確証とまでは行かないか……

きっと、私の周辺を個人的に調べるだろうからしばらくは大人しくして、いいタイミングで正体を明かそつと♪

……そうだ！ 今度、金一とゲームをしよう。

どんな感じのゲームにするかは後日に考えるとして……どうしようかな？

間宮の里では私が殺したけど、今度は金一に直接的に殺してもらおうかな？

色々考えてたらすごく楽しみになって来た。

I want to kill your heart ♪ I want to



上機嫌に口ずさみながら、月夜を道を歩んで行く。

7 : 因果応報

2ヶ月——キンジと私がパートナーを組んで経った月日が大体そのぐらい。

季節は夏。

日本は天気が良いね。

曇りの日が多いロンドンとは大違い。

別にロンドンに住んでた訳じゃないけどね。

しかし、湿気が多い気候だから肌に纏わりつくような暑さだなく。

パトラが住んでるエジプトとは違う暑さだよ。

とまあ、天気の話は置いておいて。

キンジってば、いつになったらHSSを使う気になるんだろう。

私としてはいい加減にキンジの本当の実力を見たいんだけどなく。

私の事を信用してない訳じゃないんだろうけど、未だに本人は抵抗を感じてるみたいだし。

無理矢理HSSにさせようとしたら今までの信頼を崩す事になるし、今までキンジを利用してきた人たちと同じになっちゃう。

だから、あくまで本人の意志でなつて貰わないといけない……

何か……そう、H S Sを使わざるを得ないような状況にすればいいんだよね。

例えば敵に包囲されるとか、私が負傷する……は却下だね、血液つて情報の塊だし。とにかく危機的状況になればいい。

ただ、前提として私がキンジの傍にいないといけないんだよね。

見たところキンジの私物の中にはH S Sになれるような物は入つてないみたい。

まあ、それもそうだよ。本人はH S Sになる事を忌避してるんだし、その要因になる物なんて入つてる訳がない。

だから、私が色仕掛けハニートラップをするしかないんだけど……

私がキンジにパートナーになつて欲しいって言う前するときみたいに迫ればいいのかな？

シャツのボタンに左手を掛けて、右手でスカートをめくる感じに差し迫る。

いや、理子のゲームだと上目づかいで迫つてのが多かつたから、上目づかいでキスの方が確実かな？

それで舌は……いれるんだっけ、いれないんだっけ？

色仕掛け方面はそんなに詳しくは無いんだよね。

そもそも性欲という欲求は知識的に知つてはいるけども、そんな衝動に駆られた事は

無いし……

お父さんがよく恋をしなさいとか言ってるけど、そんな感情も無い。

あ、でも「いずれ君にも恋する日が来る」って言ってたっけ？

いずれって事は、自然に分かるってことでいいのかな？ たぶん。

とにかく、取りあえずはキンジの実力を早いとこ把握しておこう。

お父さんと会う時には私も戦うかもしれないからね。

「おい、霧」

「ん？」

どうしたのキンジ？ そんな呆れたような顔をして。

「今日の授業終わったぞ」

「分かってるよ」

「なんで、教室にいるんだよ」

「もちろんキンジを待ってたからだよ」

私が笑顔でそう言うのとキンジは顔を赤くして少し顔を逸らす。

何でかよく分からないけど、つい弄りたくなるな。

「どうしたの？ 顔を逸らして」

「いや、なんでもない……」

その言葉が嘘なのは分かってるけど、あえて追及しないでおう。

それよりも重要なのはどうやって、キンジの本気を出させるかってことなんだよね。

「それじゃあ帰ろつか。それとも戦闘訓練、する？」

「そうだな……少しだけ、体を動かすか」

「……ん。分かった」

最近キンジと放課後に戦闘訓練をしてる。

と言っても私が一方的に投げ飛ばしたり、関節技を決めたりしかしてないけど。

見てて思ったのが、キンジはこれから強くなりそうってことかな？

HSSを自由に使いこなせれば、きっと金一よりも強くなる。

でも、本人は金一よりも才能が無いと思ってるみたい。

自覚が無いから、自信が無い。

理子と同じような感じだな。

なんで、もつと自分に自信を持ってないんだろう。

私なんてお父さんとお姉ちゃん以外には負ける気がしないのに。

まあ、そんな事はどうでもいいや。

しばらく他愛も無い事をキンジと話しながら誰もいない演習場へと入る。

武偵中学の演習場は基本的に放課後でも開いてる。

なんでも、自主訓練のためだとか。

基本的に武偵の設備は防弾性だからね。

特に演習場はそこら辺しつかりしてるから、撃ちまくっても問題ない。

って、今日は誰もいないな。

いつもなら演習場の中にちらほらと人はいるのに。

……な〜んか怪しいね。

と言うか、扉の影とかに人がいるし。

下手な待ち伏せだな。

それもそうか……なんだっけ有象無象に毛が生えた程度って言うのかな？

2、3年戦闘訓練しただけの武偵が束になったところで別に脅威じゃないんだけど。

待てよ……これは使えるかも。

「霧、どうしたんだ？」

「ん〜、なんでもないよ」

やっぱり、キンジは気づいてないみたい。

だったらこのまま教えなくていいよ。

多分、私とキンジが疲れてるところを狙ってくるだろうし。

「よっし、今日も遊んであげるよ」

「せめて訓練って言うてくれ……」

私とキンジの戦闘が始まる。

最初は体力が有り余ってるからか、キンジは積極的に攻めてきた。

けど、私は真正面から戦うことはせずキンジの徒手格闘を軽く受け流しながら戦った。

体力が減ってキンジが少し大ぶりの攻撃した後の隙について攻撃すると言った戦い方をしてみた。

そして、5戦ほどした。

結果は私が5戦5勝、全部関節技で決めた。

「あく……くそう」

「そう簡単に勝たせないよ」

「そりゃ、そうだよな……」

キンジは悔しそうに声を上げながら床を背に天井を見上げてる。

体力的にも限界だろうしね。

さてと、そろそろかな？

「ほら」

「ああ、すまん」

私が差し伸べた手をキンジが手に取り立ち上がる。
すると――

ダアン！

その音を聞いた瞬間にキンジの腕を引く。

すると、弾丸がキンジのいた場所を通過したのが見えた。

位置的には横腹で大胸筋の下あたり。

別に、死ぬ訳じゃないけどここでキンジに負傷して貰ったら困るんだよね。

「な、なんだ!？」

私が突然に手を引いたのと、発砲音でキンジは二重に驚いてる。

舞踏会の始まりってね。

まあ、役者不足だけど。

あれ？ 役者不足の使い方あってたっけ？

やっぱり日本語って難しい。

「大所帯だね〜」

「……………」

いつの間にか私とキンジが半円状に囲まれていた。

男性が10人か。

物影から一斉射撃すればよかつたんだろうけど、さすがに死亡する可能性があるからやめたんだろうね。

一般的観点からしてさすがに殺害するのは不味いから躊躇ったのかな？

あと逃亡の可能性もあるから姿を現して包囲したつてもあるんだろうけど。

「な、なんなんだよお前ら……」

キンジが動揺を隠せずに言葉を発する。

まあ、キンジはこの状況になる覚えがあるから動揺してるって言うのもあるんだろうね。

私もなんとなく予想は出来てるよ。

多分、キンジがHSSを利用してたときの被害者じゃないかな？

「なんなんだと？ テメエにボコられたのを忘れたとは言わせねえぞ」

金髪に染めたつばい少年が声高に叫ぶ。

その言葉にキンジは後悔したような表情をする。

「あく、成程ね……」

やつぱりとばかりに私は納得したように頷く演技をする。

「……霧？」

「アレでしょ？ キンジの負の遺産と言うか、ツケと言うか……HSSの被害者」

「うっ……」

キンジだけに聞こえる音量で話すと、キンジは凶星とばかりに呻いた。相変わらず分かりやすい反応するね。

「その……すまん。巻き込んで」

「ん〜？ 別に予想できてた事だし、今更って感じなんだけどね〜」

キンジを利用してた女子連中に回りくどいやり方で襲われてたし。

そうなるだろうと思つて罠を仕掛けてたけどね。

私の物に何か細工しようとしたらその罠が作動して返り討ちに遭う、と。

死にはしないけど、何度も相手するのも面倒だし楽しくないからかなり痛い目に遭つ

てるだろうけどね。

ふふ……

「何を話してるのか分からねえが、今はどうでもいい。女ごと撃て!!」

金髪少年の号令でハンドガンの一斉射撃が飛んでくる。

さすがにアサルトライフルはないか。

まあ、何にしても良い感じにピンチだね。

「よし、逃げよう」

「……………うおあ!!」

発砲される瞬間、私はキンジの手を引いてすぐに逃走する。

別にあの状況でも私は真正面から10人全員を倒す事は出来るんだけど、キンジの實力を確認するためにはこの状況を利用しない手は無いね。

いくつか弾丸が背後から体の傍を通過して行くのが見える。

射撃訓練してるんだろうけど、動く標的に撃つという経験はあんまりなさそう。

その命中率の悪さのおかげで私とキンジはそのまま走って演習場の用具室へと逃げ込めた。

そして、扉の影に隠れる。

いくつか弾丸が扉に当たる音がするけど、すぐに発砲音が止んだ。

無駄弾は撃つてこないか……

「ピンチだね〜」

キンジにとってはただけど……

私はこの状況なら上手く誘導すればキンジがHSSになるんじゃないかなと、考えながらキンジの方を見ると本人は申し訳なさそうに此方を見る。

「どうしたの?」

「……すまん」

突然、キンジが再び謝罪する。

「俺のせいでこんな事になっちまってさ……」

「そうだね。因果応報って言うのかな？」

「……………」

「でも、キンジは利用されてただけで仕方ないって言う風に納得できるんじゃないかなとは思っただけだね」

別に自分の意志でやった訳でもないし、ある意味キンジも被害者って感じに捕らえられる。

まあ、私にとって被害者がどうか善悪がどうかは欠片かけらも興味は無いけどね。

「取りあえずはどうしようかな？ 10対2……数的にはこつちの5倍な訳なんだけど

……まあ、何となくそうかな？」

「何か策があるのか？」

「例えば……うん、私が捕虜になるとか」

よく理子と一緒に見てた映画やアニメとかでよくある感じ。

自分はどうなっても良いからコイツだけは……みたいな。

私の場合は実際にそう言う場面によく立ち会っただけ。

「なっ!!? なんてそうなるんだよ!!」

「え? だって、謝罪したって向こうは許してくれなさそうだし……二人一緒にやられ

るよりは大分マシだと思っけど」

キンジは私の提案に対して不満っぽい。

そもそもキンジなら納得しないだろうと思っ提案したんだけどね。

「だからって、俺の事情にお前を巻き込むのとは違っだろっ！ 元々は俺が原因なんだぞ」

「そうだね。だけど、私はキンジのパートナーだし、キンジの事情や周囲の状況を分かった上でパートナーを続けていこうと思っだから別に問題は無いよ」

「お、お前は……」

キンジはどうしてと言った感じの顔をしながら、言葉を止める。

さてと、向こうもそろそろ何か対策をしたり突入の作戦を立てたりしてらるだろうし、そろそろ決めて貰わないとね。

「ねえ、キンジは私が犠牲になるのは嫌かな？」

「……当たり前、前だろうが」

「それじゃあ、もう一つ方法があるんだけどね。聞いてみる？」

「……………」

静かにキンジが頷いたのを見て、私は少し申し訳ない感じに言ってみる。

「……………HSS」

「——っ!？」

「あんまり言いたくはなかったんだよね。キンジにとつてはあんまり良い思い出はなさそうだし」

私はこれまでキンジとの会話にH S Sの話題を出すことをあまりしなかった。

だって、キンジが忌避してる事を色々と聞こうとしたら「ああ、コイツも結局は他の女子と一緒にだったのか」とかそんな感じで不信感が積もりそうだったし。

「でも、現状を打破するにはこれしかないんだよね……さすがの私でも5対1とかは厳しいし、特にキンジは恨まれてるだろうからすぐに潰されちゃうだろうからね」

実は言うとは他にも方法はあるけど一つしかないように言ってみる。

でも、こう言った事を断ち切ろうと思えば圧倒的な格差を見せつけないと多分何度も来るだろうし、一番良い方法ではあるのかな？

「……………っ」

未だに踏み出せずにいるのか、キンジは顔を歪ませる。

もうひと押しかな？

私はキンジの傍に来て、静かに隣に座る。

「ねえ、キンジ。無理になつて欲しいとは言わないよ？ 前にも言ったかもしれないけどキンジに無理強いはしたくない」

いつもの暢気な感じじゃなくて、少し真剣な表情をして言ってみる。ただど声音は優しく、安心させるようにして囁く。

「霧……」

「こんな状況になったのはキンジの所為せいじゃない。キンジを利用した人たちが悪いんだよ。だから、気にしたらダメだよ」

最後に私はそう言った後に立ち上がり、扉の方へと歩こうとする。

だけどキンジはすぐに私の腕を掴む。

その瞬間に、私はキンジに見えない角度で少しにやけた。

——ちよろいね。

すぐに表情を戻して、どうしたの、とばかりにキンジの方を向く。

「……キンジ?」

「俺は最低なパートナーだよ。今まで霧は俺に協力したり、助けてくれたって言うのに俺は何もしてない。だけどな……」

立ち上がり意を決したようにキンジは顔を上げる。

「パートナーを犠牲にして、自分だけが助かるなんて言う最低な結果にだけはしたくないんだよ!」

「そっか……」

私はそれ以上何も言わずにキンジに向き合う。

さてと、キスなんて初めてだな。

今まで成り代わった人たちの中でもそんな行為をした事は無かったし。

「……………」

「……………」

向き合う形で私は待つてるんだけど、キンジが迫ってこない。

「キンジ？」

「いや……すまん。いざやろうと思っても、なんと言うかだな」

もう、じれったいな。

「私こう言うの初めてなんだから、勝手が分からないんだけどね」

「え？　ちよ、ちよっと待て」

キンジの顔を両手で挟んで引き寄せる。

「なに焦ってるの。別にキスぐらいどうってこはないよね？」

「お、おい。何でキス前提の話なんだよ！」

「何でって性的興奮に手取り早い方法だからね。こっちの方が确实だし……」

「いやいや……それに、お前初めてって!？」

「うん、いわゆるファーストキスだよ？　何か問題でもあるのかな？」

「あるに決まってるだろ！」

悪いけど敵は待つてくれないんだよね。

と言う訳で——

「ごめんね、キンジ」

「——っ!!」

拒む事もせずにキンジと私の距離が縮まる。

そして、少し背伸びをすると唇の感触がする。

キンジは眼を見開いてるし、顔が赤くなってる。

不思議な感じはするけど、やっぱり私にはよく分からないな。

「……んっ」

少し息苦しいから私の声が漏れる。

と同時にキンジの心臓の鼓動が速くなるのが聞こえる。

その瞬間——

カランコロン。

◆ フラッシュ・バンが投げ込まれ閃光が弾けた。

◆

◆ なってしまった。

ヒステリアモードに、自分が忌避してた能力に。

「ただ、今回は”利用される”ために使うのではなく”守るため”に使う。パートナーを守るために。」

「と言うか霧に対してはかなり借りがあるんだよな。ちやらにするのにどれだけかかる事やら。」

「まあ、それよりも今は現状を打破するのが先だな。」

「さっきのフラッシュ・バンが投げ込まれた瞬間に俺と霧は耳を塞ぎ、目を閉じた。」

「そして、既にヒステリアモードになっていた俺は空間把握能力も向上したために目を閉じたまま霧を連れて、物陰に隠れた。」

「と同時に先程の男子生徒が5人ほど突入してきた。」

「おい、遠山はいたか?」

「ちや……」

「さて、どうしようかと思ひ少し目を開ける。」

「瞼の上からとはいえ光を浴びたせいかな少し見えにくい。」

「そして、若干の耳鳴り。」

「トントン。」

「すると、霧が肩を叩く。」

なんだと思ひそちらを見るが、霧は再び肩をトントンと一定のリズムで叩く。
……これは、和文モールス。

ヒステリアモードの俺の頭はすぐにその和文モールスを解読する。

”オトリ ナル トビラ テキ タオシテ”

つまり、霧が囷になつてゐる間に今突入してきた奴らを倒せつてことか。

フラツシュ・バンの効果が残つてゐる今なら油断を誘えるだろう。

お返しに俺も和文モールスで返す。

”シンジテルヨ オヒメサマ”

それを合図に霧は移動を開始した。

どうやらヒステリアモードの俺が閃光の影になるように霧をかばつた事で、霧は視界の方は見えているらしい。

俺は音を立てないように扉の傍に立っている男子生徒の近くの障害物に身を潜める。

「おい、あそこにいるのは白野じゃないか？」

「どうやら、フラツシュ・バンを喰らいながらも手探りで逃げたんだろ」

上手いこと注意が逸れたな。

と、同時に段ボールが載せられた台車を発見した。

どうやら、段ボールの中身は無造作に入れられた銃のジャンクパーツっぽい。

……適当だな、おい。

もうちよつとちやんと管理しろよ。

だが、これは使える。

その台車の傍に隠れながら素早く近づき、後ろへと回り込み重さを確認する。

これなら充分に動くな。

と同時に二人が霧へと近づいて行く。

よし、もう少し。

………。

今だ！

俺は思い切り、台車を蹴り押した。

ヒステリアモードにより身体能力が向上している俺の蹴りにより結構な速さで直線

状にいる二人に迫る。

「うわあ!!」

「ぐあっ!?!」

そして、ボウリングのピンのようにして巻き込んだ。

「な!?! そこか遠山!!」

当然、位置はバレるが俺の方ばかり向いてもダメだぞ。

パンツ！

「ぐはっ！」

弾丸が当たったのか、呻いて前のめりに倒れ込む。

霧の方から発砲音が聞こえて見てみると、GLOCK 18Cを握りながら舌を出している。

お前、随分と危険な銃を持つてるんだな。

と言うかよく銃銃検査登録制度検通ったな。

あれはフルオート射撃が出来るハンドガン、と言うかマシンピストルだからな。

命中率は悪いが火力はヤバい。

セミオートでも十分使える代物だ。

そして先程の台車に巻き込まれた二人が立ち上がろうとした瞬間を狙って、俺もベレッタを抜いて撃つ。

これで3人を無力化した。

「ちっ、退くぞ。狭い中じゃ駄目だ」

残った二人のどちらかが言うのと二人は扉へ出てすぐに脇に逸れた。

「残り7人か……」

「そうだね。だけど、霧。これは元々俺が招いたこと……それにその綺麗な指に怪我を

させたくはない。だから、ここで待っていてくれないか？」

ああ、以前にも思ったが何で俺はこんな恥ずかしい事を平然と言ってるんだ。

さすがはヒステリアモード、女性に対しては従順な騎士になることに定評がある。

そして、霧は俺の発言にキョトンとしている。

彼女はどうかやら知識的にはヒステリアモードがどう言ったものかを知ってるみたいだが、さすがに実例を見た事は無いだろう。

「お〜……キザだね。なるほど、そう言う感じになるのか」

おかしいな。

今までの女子なら、俺が何かを言う度に女子は顔を赤くして顔を逸らしたりするんだが霧には全くそんな兆候は無い。

それどころか何か納得してる。

「まあ、取りあえずはキンジの案は却下だね。せっかくの本気なんだからパートナーとして把握しておかないとね」

「仕方ないね。確かに一理あるよ。だけど、あまり君を危険に晒したくはない」

「なら、ちゃんと守ってくれるよね？」

「もちろんだよ。お姫様の我が儘まぼを聞きながらも守るのが騎士ナイトの役目だからね」

などと、言うとう霧は小さく笑い。

「じゃあ、踊りに行こうか」

「仰せのままに」

霧と共に扉の外へと歩み出す。

すると、7人が銃を構えて待ち構えていた。

「まさかお前から出向いてくるなんてな」

「もう、逃げる必要も無いからね」

霧が挑発するようにして返す。

その瞬間に相手全員が少し、不愉快な顔になる。

「舐めやがって！ 構わねえ、撃て!!」

金髪少年の号令により一斉にマズルフラッシュユがする。

今なら”アレ”が出来るか。

そう考えた瞬間、すぐにベレッタを構えて射撃。

俺に当たりそうな銃弾だけを弾く。

つまりは『銃弾^{ピリヤード}弾き』だ。

対して霧は走りながら、照準を安定させないようにして右に左にと方向を変えながら

回避している。

さすがAランクだ。

銃口に臆することなく、冷静に射線を見極めながら紙一重でかわしている。

「な、なんで当たらねえ。まさか、銃弾を弾いてやがるのか？」

「さてね。女性以外に種明かしをするつもりはないよ」

金髪少年に言葉を返し、銃弾を弾きながらも弾が切れてリロードしている時には回避している。

「キンジ、フルオート行くよ」

そう言つて、ロングマガジンに差し替えた霧からバラツ！ バラバラツ!!と言う音と共に多数の銃弾が男子生徒達に向かって行く。

さすがは「ロー・エンフォースメント・オンリー」（法務執行者、公的機関以外は運用禁止）に指定されてるだけの事はある。

一瞬だけが火力を押し返した。

「ぐおおおっ!!」

その内の一人が回避できずに9mmパラベラムの弾丸の雨をモロに胴体に受けた。

アレは痛そうだ。

取りあえず、これで6人。

一気に片を付ける。

霧が火力を押し返したおかげで、一瞬だが発砲が止んだ。

その隙に全員に牽制として1発ずつ発砲しながら距離を詰める。

「ちっ、近づいてきたか」

一人の男子生徒が素早くナイフ戦鬪に切り替える。

「あの女の足止めを3人でしろ！」

「白野がいないぞ！」

「なに!？」

金髪少年が指示を飛ばすが、返ってきた答えに驚愕しているようだ。

さすがに俺一人で6人を一気に片付けるのはヒステリアモードとは言え無理だからな。

「こんにちは、そしておやすみってね」

男子生徒の一人の背後に現れた霧は回し蹴りを炸裂させた。

そして、銃を構えようとしている男子生徒に対してそれよりも早く発砲。

これで二人倒した。残りは4人だ。

俺が牽制として6人に1発ずつ牽制を入れたのは霧から俺に注意を変えるため。

その隙に霧はワイヤーを天井に撃ち込んで空中へと飛び、彼らの背後に回ったと言う訳だ。

全く、さっきのフルオート射撃の発砲音で”和文モールズ”にするなんてよく考え付

くな。

ヒステリアモードでも気づくのが危うかったぞ。

しかもただ単に”ケンセイ”としか言わなかったからな。

「どうなってやがんだよ!!」

「彼女が美しいのは分かるが、見とれてばかりはダメだよ」

「なっ!?!」

霧の方に今度は注意が行ったために俺は充分に距離を詰められた。

成程、いくら人数が多くても一人にばかり注意が向けば不意を突けるのか。

霧の奴、やっぱり戦闘が上手いな。

咄嗟に男子生徒は反応したが既に俺は発砲しており、すぐに腹に弾丸を受けて倒れた。

残り3人。

「ちくしょう! 化け物かこいつらは!!」

金髪が焦っているが、ペースは完全にこっちのモノだ。

「ぐあっ!!」

「がっ!!」

俺は以前、霧がやっていた掌底で顎を打ち抜き。

霧はもう一人の顎先を蹴った。

これにより二人が同時に脳震盪で倒れる。

「な、なんでなんだよ!!」

金髪はこの結果に驚愕しているようだ。

まあ、それもそうだろうな。

数だけで言えば5倍の戦力を引つ繰り返された訳だから、ありえないって言いたくなるだろう。

「さて、残るは君一人だけどうする?」

あんまり逆撫でしないように降参を促す。

「うるせえ! 女の奴隷がっ!!」

「まあ、それは否定しないよ」

ヒステリアモード時の俺はまさにそれだからな。

実際に手を出したのも俺で、この状況を招いたのも俺自身だ。

ただ、言い訳させてもらおうと俺の意志じゃない。

「大体、テメエは殴られてしかるべきじゃねえのかよ!? 謝罪も無しにのうのうと過ごしやがってよお!!」

「確かに手を出した事については謝るよ。だけど、彼女を巻き込むのは筋違いじゃない

かな？」

と、俺は霧の方を見る。

今回の件に関しては自業自得だが、霧は関係ない。

俺一人が殴られるのならまだ納得できたかもしれないが、さすがにパートナーまでは傷つけたくない。

「はっ!! どうせ、その女も他の奴と同じに決まってる! お前に近づいて、独占した上で奴隷にしようって考えてるかもしれないんだぜ?」

そう言われて霧は少し眉をひそめ、

「他の人たちと一緒にしないで欲しいな。私はただキンジが気に入って、パートナーになっただけだからね」

と不機嫌そうな声音で言う。

はは、そうだね。ヒステリアモードになるのを恐れて、忌避しようとした自分が恥ずかしいよ。

「と言う訳だ。それに、女性の嘘をいちいち気にしていたらいけないからね」

「クソが!! 最後まで王子様気取りか!! 死ねやあああ!」

相手はFN ファイブセブンを乱射してくる。

アレはアサルトライフルにも迫る速度で弾丸を打ち出すことが出来るハンドガンだ。

ある程度離れてもケブラーヘルメットを貫通するほどの威力がある。

防弾制服を着てるとは言え、当たればただでは済まないだろう。

だけど、相手は冷静さを欠いてる上に照準も定まっていない。

したがって自分に当たる分だけを銃弾^{ビリヤド}弾きで弾けばいい。

たとえ装弾数が向こうが多いとはいっても充分に対処できる。

そう考えながら俺は発砲する。

ガキン！ ガキン！

と金髪と、俺との間でいくつか銃弾が当たる音がする。

「はい、お疲れさん」

金髪が弾をリロードしようとしている時に、霧が背後に回り手刀をいれる。

そのまま男は気絶したのか、ばたりと倒れた。

背後に回るのが上手いね。

ヒステリアモードなのに隣から消えていた事に気づかなかつたよ。

「終わりかな？」

「そうだね。さすがだよ霧。だけど、君の手を煩わせて済まないね。お詫びに今日は君

の言う事を一つだけ聞いてあげるよ」

「いいのかな？ そんなこと言っちゃって」

近づいて此方の顔を覗き込むように霧は微笑む。

それから少し考える素振りをして「うーん」と唸っている。

「保留でいいかな？ 今、キンジにして貰いたい事ってあまりないし」

「ああ、もちろんだよ」

「じゃあ、取りあえずは——」

そう言つて、彼女は近づき——

「眼を覚まして、ねっ!!」

思いつきり俺の顎を拳で打ち抜いたのだった。

そして、意識は途切れた。

◆ ◆ ◆

アレがキンジのHSSか……今のところ金一には劣つてる感じかな？

まあ、これからに期待だね。やっぱり。

しかし、HSSの解除方法がイマイチ分かりにくいんだよね。

今のところ時間経過で血流が鎮静化するのを待つか、鎮静剤たぐいの類を注入するか……気

絶させるか。

それぐらいしか分かんない。

だからまあ、元に戻らせるために気絶させるしかなかった訳だけど。

キンジは私の背中で気絶中。

一応は、私の拠点に向かつてる途中かな？

さすがに気絶したまま電車に乗ってキンジの実家に行くと目立つ。

道中でさっきの人たちみたいに襲われるとも限らないし。

一先ずは私の仮住まいに避難する。

学校に割と近いしね。

アパートの階段を上り、私の部屋の扉を開ける。

とりあえずはただいまっと。

キンジはまだ起きる気配はないから、上手く靴を脱がしてソファアに寝かせる。

うくと、どうしようかな。

何か、キンジを見てると少しだけ変な気分になるな。

そう……キスしたんだよね。

特に、何かを思う訳じゃないんだけど変な感覚だったな……

キンジは寝てるし、もう一回やってみれば何か分かるかもね。

と言う訳でソファアに乗り、キンジに覆いかぶさる形で顔を覗き込む。

そして、胸をくつつけて顔を段々と近づけて行く。

あんまり勢いよくやると、齒とかぶつかりそうだし。

あと、もう少し――

と思った瞬間、キンジの目がパチリと開いた。

「なんだ、起きたんだ」

「……霧？　――え？」

キンジは変な声を上げながら、私を見る。

さすがに近くて違和感を覚えてるんだろうね。

「――っ!？」

そして、今の状況を理解したのかなぜか顔を赤くしてる。

確かめられなくて残念だけど、ここは退いておこう。

キンジと密着させてた体を離してちゃんとソファアに座る。

「もう少し目覚めないかと思ってたけど、案外早かったね」

「あ、ああ……ここは？」

体を起してキヨロキヨロとキンジは辺りを見まわす。

保健室ではないからね。

ソファアで寝てた事にも違和感も覚えるよ。

「私の家って言うか……部屋かな？」

仮の、がつきそうだけだね。

「……お前、一人で暮らしてたのか？」

会話をして現状把握しようとするけど、キンジはさつきから恥ずかしいのか視線を此方の方に合わせない。

何を恥ずかしがる必要があるのか、私にはイマイチ理解できない部分だけど。

「まあね。色々と事情があるってことだよ」

取りあえず曖昧な答えではぐらかしておく。

理由とかは一応用意してあるから聞かれても問題ないけど。

「で、キンジがここにいるのは私が単純にココまで運んだから。さすがに気絶したまま実家に送り届けるのもどうかって思ったし、倒した人たちが目覚めて襲われるかもしれないなかった

から学校に近い私の家に来たってこと。分かった？」

説明としてはこんなところかな。

「今のところは……」

「よかった。それといきなり気絶させてゴメンね。HSSの解除法が分からなくて」

HSSと言うキーワードでキンジの心臓が脈打ったのが聞こえる。

あれ？ 何か動揺する事あったっけ？

「い、いや……それより悪かったな！ さすがに、これ以上世話になったら悪いから、す

ぐに帰るよ」

「そう？　気をつけて帰ってね。駅は大きな通りに出たら分かるはずだから」
急にキンジが慌てたようにしてバタバタと慌てだす。

口調も変に詰まって、しどろもどろって言うのかな？

「ああ、ありがとな霧！　それじゃあ！」

荷物を持ち、ドアを慌てて開けて逃げるようにしてキンジは去って行った。

バタン！

キス一つで、そんなに大袈裟な事だね。

私の感覚からしたら理解できないな……

でも……あのキスした感覚は変な感じだったけど、なんだろう……表現しにくいね。

取りあえず、楽しいとか楽しくないとかは違う感じなんだよね。

まあ、今すぐ分かる必要も無いから別に問題ないか。

もうすぐ、夏休み……お父さん曰く「そろそろ、次のステップに行くよ」って言った。

——楽しみだね。

8：嫉妬と尾行

期末テストが終わり夏休みがもうすぐ迫ってくるころ。

なのだが、残り短い期間とは言え学校に来るのがまたしても少し憂鬱になった。

なぜなら――

授業が終わり、先生が出て行くと何人かが俺をチラチラと見る。

聞こえないようにしてゐるつもりなんだろうが……武偵で習う読唇術のせいでは何となく言ってる事が分かる。

「そう言えば、この間の一件だけどな……」

「噂ってマジなのか？」

適当に読唇術で読み取った内容はそんな会話だ。

遠巻きに此方を見ては何人もの生徒がヒソヒソと話をしている……

原因はこの間の演習場で返り討ちにした事だろう。

相手が俺と同じ武偵中学に通う生徒とは言え、数的には5倍の戦力を覆したんだから噂にもなるだろう。

はあ……やっとな奴隷みたいな生活から解放されたと思つたら今度は別の意味で目を

つけられそうだな。

「やつと終わったね、キンジ」

机に頬杖をついていると霧がいつも通りに挨拶をする。

こいつはこいつでどこ吹く風って感じで、要はいつも通りだ。

演習場での一見のことがまるでなかったかのようだ。

……。

そう……演習場で俺はコイツと――

……ま、マズい。

あの時の光景が一気に蘇りそうだ！

思い出すなキンジ！

こんなところでヒスってみろ！

利用されるならまだしも俺自身が黒歴史を作りだしてどうする!?

「どうしたのキンジ？ 顔が赤いけど」

俺の様子がおかしいのを見て、霧が迫ってくる。

「い、いや。何でもない」

顔を逸らしながら、とっさにそう言うが――

「何でもないなら何で動揺するのかな？」

「うっ……」

逆に向こうはこっちの矛盾点を突いてくる。

くそう、何で思い出しちまったんだ。

期末テストが終わってあの時のことを考える余裕が出来たからか？

「まあ、言わなくても原因は分かるけどね」

ニコニコとしながら、霧はそう言う。

その笑みは、何と言うか兄さんがよくやるような意地の悪い笑みだった。

こいつ……分かってて聞きやがったな。

「こう言うのも何だけど、あの時のことはあんまり気にしないで大丈夫だよ。私が選んでやった事だし」

こっちの心情を察してか、そんなセリフを吐く。

それでいいのかとか？ 思わないでもないが、逆にこっちの毒気が抜かれて行くよう
だ。

その笑顔に少しばかり肩が軽くなった。

が、呆れてもいるけどな。

「お前って奴は……」

「でも、きつちりお礼はして欲しいかな？」

ちやつかりしてやがる。

まあ、実際に借りが積み重なってるからな。

少しは返しておきたいって言うのはある。

「分かったよ」

「頼りにしてるよ」

——頼り……か

あんまり霧に頼られたことなんてないから、少しばかり不安もあるんだがな。

だが、嬉しくもあるな。

「さてと……そう言えば授業はもう無いんだったね」

「そうだな。終業式も近いから短いんだろう」

「じゃあ、訓練はどうする?」

霧がそう尋ねてくる。

霧との訓練か……俺の中では1ヶ月も続けてたせいで少しばかり習慣化してきたん

だが、さすがにこの間の襲撃の件もある。

ここは少し様子を見た方が良いな。

また、襲われなくても限らないだろうし。

「いや、今日はやめておく」

「この間みたいに襲われるかもしれないから？」

さすがと言うか何と言うか、霧は俺の考えを見事に当ててくる。

組んでからたった2ヶ月だけど、俺の思考はほとんど読まれてるな。

観察力と言うか人のパターンを読み取る力は相当だな。

こいつが他の女子連中と一緒にだったらと思うと……

ぶるっ——背筋が本当に冷えたようだ。

考えるのも恐ろしいな。

「まあ、そうだな」

取りあえず思考が読まれてると言う、武偵的にはNGな事をそっちのけにしつつ肯定を示しておく。

「うくん。それなりに実力は示した筈だから心配は無用だとは思うけどね。キンジがそう言うなら今日はお互いにゆっくりするってことにしようか」

ニコニコといつも通りの笑顔で霧はそう言う。

何と言うか気を遣^{つか}わせてしまったな……

だけど、ありがたくもある。

「それじゃ。また今度ね」

「ああ、またな」

霧が教室から去るのを見送り、俺も教室から出る準備をするのだった。

◆ ◆ ◆
 教室でキンジと別れた後、私は一人思考しながら帰る。

さてと、帰ったらどうしようかな？

任務は今のところは無いし、オモチャで遊ぶ気分でもない。

ああ……でもルミちゃんに連絡はした方がいいかな？

アメリカのマファイアたちにもGⅢジーサードの動向を聞いておく必要もあるし、藍幫ランバンに装備品の

補充も依頼しておこう。

武偵に所属してるこの際だから銃技を極めてみるのありかな？

でもね……銃は味気ないんだよね。

特に狙撃なんて私には合わないんだよ……使えない訳じゃないけど。

そう言うのはルミちゃんの役目だし。

……………。

しかし、鏡高かがたか 菊代きくよだったかな？

随分とまあ、キンジにご執心みたいだね……あの手この手を使っては私に何らかの

接触コンタクトを図ろうとしてくる。

彼女もキンジの事を気に入ってたのかな？

ね。 だけど残念。アレは、金一と同じで気に入っちゃったから譲るつもりはないんだけど。

それにキンジに近づきたければ、もう少し優しくすればいいのに。

あとは多少の強引さかな？

金一と似てキンジは押しに弱いからね。

その所為か引つ張つてくれるような人となら相性はいいみたいだし。

鏡高の場合はもしかしてあれかな？ 理子で言うところの好きな人には意地悪をし

たくなるって言うところなのかな？

その気持ちは分からない訳でもないんだよね。

私も金一の目の前でキンジを殺したらどんな反応をするか……逆にキンジの前でこれのお兄さんが死んだらどうなるか、とてもとても気になるし楽しみでもある。

「ハア……」

漏れ出た吐息と共に背筋がぞくぞくする。

……ダメダメ、自制しないとね。

ちよつと落ち着くのと地理把握のためにも道草しよう。

歩道から脇道に逸れて。

住宅が立ち並ぶ道に入る。

それから道をいくつか曲がって、鞆に入ってるカツラを手取る。

ちよつとした変装道具は一応は常備してらんだよね。

本格的じゃないにしても、髪型一つで人の雰囲気は変わる。

カツラの上にカツラを被るのって違和感あるけどね。

黒の長髪のカツラを被り髪を撫でる様な仕草をしながら、さつき来た道を引き返す。

今の私はさながら少し高飛車な雰囲気がするお嬢様って感じかな。

すると曲がり角から誰かが静かに出てくる。

その通行人の隣を何食わぬ顔で通り過ぎた後にすぐさま背後を取って、GLOCKI 8Cを後頭部に当てる。

「……………!?!」

おお、驚いてるね。

まあ、変装しているとは言えわざわざ「尾行者」に向かって正面から歩いて行ったりしないからね。

「私に何か用かな? 鏡高さん」

静かに名前を告げると、鏡高は少しだけ頭を動かして横目に私を見る。

「……………おかしいね。一応、諜報科レサドで変装の見破り方を教わってたんだけど……………雰囲気が違うだけで意外に分からないものね」

自嘲じみた感じで静かにそう言う。

雰囲気や仕草は重要だからね。

外見をどんなに取り繕っても、その人物の特徴が出てしまえば意味は無いからね。

「アンタ、Aランクなんて嘘じゃない？」

「言い過ぎだと思っただけだよ」

そう言いながら銃を下ろす。

Aランクの変装なんて大体はこんなもんだよ。

さすがに筆跡や言葉の訛りまでは再現できないみたいだけだね。

「銃を下ろすの？　せっかくあたしから一方的に色々聞けるチャンスなのに」

「同じ学び舎の人を脅しても仕方ないからね」

と、無難な言葉で取り繕っておく。

とりあえず武偵に在る間は無闇に刀傷沙汰とかにはしたくない。

私の歯止めが利かなくなっちゃうし、そうなると武偵法9条違反とかになるからね。

カツラを取りながら、銃を右太もものホルスターにしまう。

「……随分と無警戒だね」

鏡高は私の行動に面白くなさそうな反応をした。

どうせ、私と舌戦でもして色々情報を引き出したりキンジに近づきたいと思ったりし

てるんだらうね。

彼女からして見れば目の前でキンジを奪ったみたいなものだし。

そんな事はどうでもいいんだけどね。

正直な話。私は彼女にあんまり興味は無いんだよね。

それにたかが2、3年程度訓練した武偵に私が負ける訳がない。

最近、私を追ってるジーサード程の実力が無かったら瞬殺できるし。

なので警戒する必要も無いし、相手の得意な分野にわざわざ乗ってあげる必要も無い。

「仲間で腹の探り合いなんかしても面白くないからね」

と、建前を言っておく。

武偵と言う敵地であまり心象は悪くしたくないからね。

ああ、でも……腹の探り合いはともかくとして殺し合いはしてみたいかな。

それはそうとして、ちょっとからかってみようか。

「そんなにキンジの事が気になるの？」

「……どうしてそこで遠山が出てくる」

「なんだ、そうじゃないの？」

「別に、遠山は……あたしの駒であって気になる訳じゃない」

にしては、言い淀んでるよね。」

特に『あたしの駒』の部分で。

他の人からして見れば、上手く誤魔化せてるように見えるかもしれないけど。

聴覚に意識を集中すれば多少離れても心音が聞こえる私には動揺してるのが丸分かり。

「へ〜……じゃあ、私を尾行してた理由は何なのかな？」

「アタシの駒を奪ったんだから奪い返そうとするのに理由がある？」

「奪い返してもキンジが心を許してなかったら意味無いと思うけどな〜」

「そんなのはアンタに言われなくても分かってる。だから、今度は優しく——」

「あれ？ 利用するだけの駒なのに気にする必要があるの？」

私が矛盾点を指摘すると鏡高は固まった。

随分とまあ、早かったね……

対して鏡高は顔を段々と赤くしてる。

「それで？ キンジを優しくどうするの？」

追い討ちを掛けるようにして尋ねると、悔しそうな顔をしながら顔を紅潮させてる。

パトラに似た反応だな〜。

「そう言えば、気にすると言う部分も否定はしないんだ」

その弄り甲斐のある反応にさらに追い討ちを掛ける。

「ち、違うッ!」

その必死な反応に私は教室でしているようにニコニコとしながら尋ねる。

「なにが? と言うかどこから違うのかな?」

「あたしは遠山の事が気になる訳じゃない!」

「ふくん……優しくはするんだ」

「———っ!!」

声にならない声を上げる。

彼女に興味は無かったけど、このパトラみたいなのは楽しいからこのまま観察しよう。

それに揚げ足を取れば勝手に色々と自分からぼろぼろと零こぼしてくれる。

「……とにかく遠山は関係ない」

「ここら辺が引き際かな?」

これ以上からかうと暴力に訴えてきそうだからやめておこう。

「そっか。じゃあ、嫉妬とかじゃないんだね」

「そうよ」

平静さを取り戻したのか鏡高は静かにそう返すけど、最初のもう色々と確定はし

た。

「それで、キンジを駒として取り戻したいのは分かったとして……どうするの？　武偵らしく、実力行使する？」

「遠慮するに決まってるでしょ。強襲科アサルトのAランクと真正面から戦う気なんてない」
彼女は顔を斜はすに構えながら発言する。

「つまり、尾行してたのは色々と情報を入手して外堀から埋めるつもりだったんだね。なんとも諜報科レザードらしいやり方だね」

「誉め言葉、どうも」

「実は、この間の演習場での男子達を嚇けしかけたのも君だったりして」

「アレはアタシじゃない。遠山にボコられた男連中が勝手に結託しただけ」

鏡高は関係ないとばかりにそっぽを向く。

その様子だと、本当にそうっぽいね。

「それは残念だなく……君を倒す大義名分が出来たのに」
「……………」

「やだなく、本気にしないでよ。ちよつとしたお茶目だよ。それはそうと、キンジに近づきたいんだつたらもつと素直になつた方が良いよ。こんな回りくどいやり方じゃなくてね」

私はそれだけ告げて、じゃあね〜と言って鏡高と別れた。

さすがに尾行はもう失敗してるから再び尾おいてくることはないでしょ。

自分の部屋に戻って武偵中学での鞆を置くと、携帯が鳴る。

多分、お父さんかもね。

携帯を通話可能にして出る。

「もしもし」

『やあ、ジル君。そつちでの生活はどうだい?』

聞こえて来たのは予想通り、お父さんの声。

「そうだね〜。……キンジがいなかったら退屈かな?」

『ふふ、そうか。その様子だと彼を気に入ったようだね』

「うん、とつてもね。それはそうと、今日はどうしたの? まだ兆候は出てないんだけ

ど」

『今日は別件だよ。もうすぐ夏休みだからね。その時にカツエ君に届け物をするために

少しばかりドイツに行つて欲しい』

「うん、分かった」

『あとは、そうだね。ロンドンに行つて僕の曾孫を見てくるといい。君の姉にも会うつ

いでよね』

「そう言えばそうだね。最近のお姉ちゃんの様子も気になるし」

お父さんの曾孫か……確か名前は神崎・H・アリアだったかな？

今まで興味は無かったから、観るのは初めてになりそうだけど。

『伝えるべき事は以上だよ。あとは、戻ってきてから詳しく話そう』

「りようかい。それじゃあまたね、お父さん」

私のその言葉を最後に通話を切る。

さて、お姉ちゃんに連絡しとかないと。

すぐさま電話番号を打って、引き続き電話をする。

数回のコールのあとに、反応が返って来た。

『……Hallo?』

「Hallo. This is Jill」

『……日本語でいいわ。そっちは日本でしょう』

「別に、どっちでもいいと思うけどね。まあ、お姉ちゃんが良いならそれでいいけど。

それで、調子はどう？」

『……まあまあと言ったところよ。最近ぜんそくは喘息も無いわ』

「そっか。なら、いいんだけどね。まあ、何かあってもジキルがどうかしてくれると思

うけど」

『そうね……近々、戻って来るのかしら?』

「うん。何かあるなら、用意するけど?」

『特に何も無いわ……けほっ』

「分かった。それじゃあね〜」

『……ええ、待ってるわ』

そこで通話は途切れる。

まあ、思ったより調子は良さそうかな?

お姉ちゃんは病弱だからね〜。

さてと、そうと決まれば準備しよつと。

お姉ちゃんとホームズの4世に会うために――

9：理子の決意

夏休み——学校に行つた事が無い私にとっては初めての経験な訳だけど。

まあ、休みを貰つてもあんまり関係ないんだよね。

イ・ウーでの任務もあるし。

さてとそろそろかなと私は闇夜の中、家の屋根に腰掛けながら見下ろす。

「Freeze!!」

甲高い声が聞こえる。

声の正体、それは私の視線の先にいるツインテールのピンクブロンドを靡かせ、防弾装備に身を固めた一人の少女。

お父さんの曾孫——神崎・H・アリア。

そして、私がいるのはロンドン。

相変わらずの曇天で、月は見えない。

しかし、アレがホームズ家の4世に当たる子か……

何と言うか、私とは気が合わなさそうだね。

あの子の母親に冤罪えんざいを着せて、イ・ウーへと導く。

理子とジャンヌと……あと、誰の罪を着せるんだったかな？

だけど、まあ冤罪の中に私の罪は含まれてないみたいだけだね。

見てる限り、確かに戦闘のセンスはある。

今でも武装集団を相手に大立ち回りをしている。

ただ……愚直だね。

猪突猛進って言うのかな？

ほとんど真正面から火力で制圧してる感じ。

実力は……私以下なのはもちろんだけど、下手したらジャンヌよりも劣るね。

Sランク武偵と一言いっても、結構分かれるからね。

SプラスとSマイナスみたいな感じで、同じランクでも上下に分かれる。

大体、あんな罫や策謀に引つ掛かりそうな子がSランク武偵ね……

ま、いいか。

興味は無いし、お父さんからは手出し無用と言われているから会う事はないでしょ。

向こうから私を追おうと思わない限りは——

さて、観察は終わったしお姉ちゃんにも会って来たし、イ・ウーへ帰ろうかな。

イ・ウーこと潜水艦ボストーク号にて、私は今日のはのんびりすることにした。

えっと、血液B型のRHマイナスがこっちでAB型RHプラスがこっち。

と、もうちよつと医者的人员増やした方がいいんじゃないのかなって思ったけど、医療が出来る人って貴重なんだよね。

それもこんなアウトローの中に入ろうと思つたら、そこらの闇医者じゃダメだし。結社に入るにしても秘密を守るような人物じゃないと……

まあ、私を含めて数人だけでも十分に治療で来てるから別に問題ないんだけどね。それに、私の場合はたくさん殺すから内臓と血液の調達には事欠かないし。

いざとなれば、マフィアとかに高値で売れるから資金源にもなる。

そう言えば、夾竹桃こと桃子の夏コミだっけ？

あれの時期もそろそろなんだよね。

夾竹桃の漫画は売れるし、これまた資金源になる。

しかし、女性同士の恋愛って人気あるんだね。

私には分からない世界だけど。

さてと、医療関係の整理はこんなもんでいいかな。

部屋に戻ってしよう。

通路をいくつか抜けて、教会のようなどを少し抜けければ私の部屋。

ほとんどお父さんの部屋の近くにある。

私の部屋は医療道具と、刃物類が多い。

あとは変装するための衣装が入ったクローゼットと、強化ガラスで囲まれたベッドがある。

ベッドが強化ガラスで囲まれてるのはアレなんだよね。

殺人衝動がある時にはここに籠もってあんまりメンバーを殺さないようにしてる。

それはそうと、理子に連絡を入れたから帰ってきてるのは知ってると思うんだけど。

そろそろ来るかな？

と思えば、ドアが開く音がする。

「お姉ちゃん？」

「ああ、理子。心配しなくてもめちゃんと部屋にいるよ」

一応は声を変えてる。

外見はロシア人女性だけど、すぐに素顔になると思う。

なんて考えてる内に理子がソファァに座っている私に飛び込んでくる。

「お帰りお姉ちゃん！」

「まあ、ただいま……と」

もう、素顔のままでもいいんじゃないかなと思うけど同じ顔だと特定されるんだよね。

それに私闘を禁じてないから他のイ・ウーのメンバーの中にも私を狙うのは何人かい

るし。

取りあえず変装を解こうかな。

その間に理子は甘えるようにして、私の膝に頭を乗せる。

「はああ〜」

何やら心地よさそうに理子は声を上げてる。

「お姉ちゃん、今度はどこに行つてたの？」

「ん〜？ イギリスのロンドン。ホームズの4世を見に行つてた」

「そう……どうだった？」

理子は少しばかり真剣そうに聞いてくる。

ホームズとリユパンだから因縁でも感じてるのかな？

「そうだね〜。興味は全然湧かないかな？ 遊び甲斐はありそうだけど。それに、私と

は気が合わなさそうなんだよね」

元より殺人鬼と武偵。

立場的にも合わないけどね。

「お姉ちゃんから見て実力はどう？」

「実力？ 確かにSランク武偵になるほどの戦闘のセンスはあるけど、それだけって感

じだね。私の敵じゃないよ。理子でも充分に勝てるかな？」

それはそうと、なんで理子は最後の言葉で安心してらんだろ。

確かに理子にとってホームズは因縁の相手ではあるけれど、別に戦う必要はないよね？

ブラドやヒルダとの話し合いで、理子はすでに自由の身なんだから。戦いたかったら別に止めはしないけど。

「そっかそっか。ふふっ」

理子はスリスリと猫みたいにこつちに擦り寄ってくる。

少しふとももがくすぐったいけど、まあ理子なりの甘えなんだろうね。甘え癖があるみたいだし。

「久しぶりにお風呂でも行く？」

「大丈夫なの？」

「別に、素顔だとは思われないし。名前を言わなかったら気づかないよ」
逆に堂々としてたら気づかないなんて事はよくあるよ。

理子が心配するほどでもない。

それに、こんな真夜中みたいな時間帯に浴場に来る人物なんてあんまりいないし。浴場に到着した私と理子は、すぐさま衣服を脱いで浴槽へと入る。

私は変装も解いてるけど。

イ・ウーの浴槽は日本の銭湯のような設備になつてゐる。

お風呂と言えば日本と言つたイメージがあるからこんな設備にしたんだろうけどね。入口も横に開閉するタイプだし。

「理子とお風呂に入るのも久しぶりだね」

「うん。お姉ちゃん忙しいからね」

まあ、そもそも日程を合わせるのが厳しいからね。

理子は横で髪をまとめて頭のタオルの中にいれている。

私は、面倒だから下ろしたままでいいけど。

しかし――

「えつと……お姉ちゃん？」

「5年で随分と変わるものだね」

随分と切り甲斐のある体に……つてダメダメ、私つてば家族にそんな事を考えちゃ。

やつぱり普段から満足してない弊害へいがいかな？

「ふくん。胸つてこんなに育つんだ」

「ちよ、ちよつと!?! お姉ちゃん、触つちや……ダメつ」

やつぱり人体は不思議だね。

私は男装の邪魔になるから、あんまり胸はいらないけど。

取りあえず理子の胸から手を離す。

「……………」

理子は顔を赤らめてこちらから目を逸らす。

そして、ぶくぶくと顔半分をお湯に沈ませる。

そんな反応されるとイタズラしたくなるなく。

まあ、やめておくけどね。

それよりも理子に聞きたい事があつたんだ。

「そう言えば、理子。一つ聞きたい事があるんだけど。いいかな？」

「どうしたの急に？」

「ん〜？ 最近一つ分からない事が出来てね……。聞いてくれる？」

「もちのろんだよ。お姉ちゃんの力になれるなら、りこりん幾らでも聞いちゃう！ そ

れで？」

さつきとは打って変わって理子は驚きつつも眼を輝かせる。

「うん。恋ってなんなのかな？」

「うん？ コイ？」

「そうそう。あの恋愛とかの恋」

「あ〜、その恋なんだ。……えっ？」

変な声を上げたかと思うと理子は大きく叫んだ。

◆ ◆ ◆
「ええええええっ!!」 どどど、どうしたのお姉ちゃん!」

まさか、お姉ちゃんからそんな言葉出るなんて夢にも思わなかった。

と言うより予想できない。

だってこう言うのもなんだけど、お姉ちゃんは切り裂きジャックだよ!

世界に名前を轟かせる殺人鬼が恋について聞いてくるなんて、予想外にも程があるよ

!

まさか、お姉ちゃんが喜怒哀楽の感情が出る前に恋という感情に目覚めたの!?

だとしたら、相手は!?

「どうしたも何も、特に意味は無いよ。ただ単に好奇心」

「そ、そっか……」

なんか、安心した。

いきなり彼氏が出来ましたなんてことになったら、いくらなんでも戸惑うよ。

「うん。」キス」したけど、恋とはあんまり関係ないって事は分かったし」

ん? ちょっと待とうかお姉ちゃん。

「キスした……?」

「そうだね。試しにしてみたけど、変な感覚がただけでそれ以上の事は分からな——」

「だ、だだだ誰と!?」と言いかお姉ちゃん、それって初めてってことだよね!？」

「初めての体験ではあったね。でも、身体接触しただけだよ」

「いやいや、お姉ちゃん。」

女の子にとってファーストキスがどれほど大事か分かってないよ。

「と言うか、誰だ!?」お姉ちゃんから初めてを奪った奴は!」

「ねえ、お姉ちゃん……誰としたの?」

「ん……遠山 キンジ。金一の弟だね。なかなか面白い反応してくれるから、結構

気に入ってるんだ」

「そっかそっか、カナちゃんの弟だったんだ。」

「……………」

「何だろう、このふつつつとこみ上げる殺意は。」

「オルメスやブラド以上にぶっ倒したいと、思ったのは初めてだな。」

「くふふふ……」

「もし、会う事があつたら男の証でも潰しておこうか。」

「くつつつつつつ」

「どうしたの？ 不気味な笑いを上げて」

「ううん、何でもないよ」

倒す相手がもう一人増えただけだからな。

取りあえずお姉ちゃんの手前、初めてを奪った本人もいないのに喚き散らしても仕方がない。

首を振り笑顔で返事を返す。

「まあ、何か企んでるのは分かるけどね。あんまり目立つ真似しちやダメだよ」

「うっうー！ ラジャーー！」

今度は敬礼のポーズと共に元気に返す。

「ふーん……こうで。うっうー！ ラジャーー！ かな」

相変わらず人の真似をするのがお姉ちゃんは驚くほど上手い。

特徴をよく捕らえてるんだよね。

「パトラの真似は？」

「フアラオ覇王である妾に口出しするなど百年早いのぢや」

「ツアオツアオ」

「金の切れ目が縁の切れ目ネ」

「お〜……」

「まあ、声真似だけなら朝飯前だね」

何でもないように言うけど、充分に特徴は捕らえてる。

モノマネ選手権でも出たらお姉ちゃん、荒稼ぎ出来そうだよね。

本人はそう言うの一切、興味はなさそうだけど。

やつぱり、お姉ちゃんは凄いい。

何にでもなれるし、自分の望む物は自分で手に入れてる。

両親を失って……ブラドによって自分さえも失ってしまいそうになったあたしとは大違い。

あゝ、あんまり考えるとお姉ちゃんを妬んでしまいそう。

……考えないようにしよう。

「そう言えば、お姉ちゃんはこれからどうするの?」

「ん? いつも通りに世界を飛び回って任務をこなすだけだけ?」

「そっか……」

本当はお姉ちゃんの隣にいたい。

けど、あたしにはまだやらなければならぬ事がある。

確かにお姉ちゃんのおかげであたしはブラドから解放された……”表向き”は。

でも……いつまでもお姉ちゃんに守って貰うような状況は嫌だ。

本当に解放されるには、あたしがブラドに打ち勝つしかない。

ただどあつちは文字通りの化け物で理子の何倍も生きてる……勝機は薄い。

だったら別の方法でブラドから解放されればいい——そう考えた。

だからこそ、取引をした。

もし理子が初代リュパン……アルセーヌ・リュパンを越えた事を証明できたなら、有能だとして解放してやると。

アイツはそう言った。

だけど、敗北すれば……あたしは檻に戻る。

お姉ちゃんには何も知らせないまま消えて行く。

せつかく出来た家族と別れるなんてそんなのは嫌だ。

もちろん、勝機も何も無しに誘いに乗った訳じゃない。

お姉ちゃんは言ってくれた——今のオルメスならあたしは充分に勝てる。

これで決意は固まった。

オルメスの母親は冤罪を着せられて、日本に送られる予定だ。

あたしは、その日本で先回りしてオルメスを迎え撃つ。

相手が成長しない訳じゃないから、寝首をかかれないうちにそれまでの間は自己研鑽に励む。

何時になるかは分からない。

だけでも少なくとも、オルメスが来る1年前には日本にいる予定だ。

見ててねお姉ちゃん——ちゃんと家族として隣に立って見せるから。

「残念そうにしなくてもちゃんと帰るときには、連絡を入れるよ」

「……うん」

「そろそろ上がろうか」

「そうだね」

さっぱりしたし、決意も新たにしたままお風呂を出る。

そして、そのままお姉ちゃんと別れた。

部屋に戻り、ベッドに背中から倒れる。

なんか、心苦しいな。

自分の力で解放されるためとは言え、お姉ちゃんを騙すのは……

——コン、コン。

扉を叩く音が聞こえる。

こんな夜更けに誰だろうと思って、扉を開ける。

「おお、ジャンヌだ！ 任務は終わったの？」

そこには、ジャンヌが立っていた。

珍しいなくジャンヌがこんな時間に来るなんて。

「簡単な任務だったからな。こんな夜更けにすまないが、話がある。ついてきてくれ」
任務帰りなのに疲れた素振りもせずに、そう言う。

真剣な表情を見る限り、重要な話だな。

あたしも気を引き締めてジャンヌの後について行く。

博物館のような場所の脇にある休憩所のテーブルへと案内された。

そして、対面する形で椅子へと座る。

「真剣な話って事でいいのかな？」

「ああ、そうだ。『宣戦会議』^{バンデイレ}の日程が決まった。私が任務に行く前の会議でな」

戦役については少し聞いている。

戦力の再分配、ようはアンダーグラウンドな連中のバランスを取るための戦い。

それが戦役。

そして、その戦役での陣営を決めるための会議がジャンヌの言う宣戦会議^{バンデイレ}。

ジャンヌが理子を連れ出して宣戦会議^{バンデイレ}の話をするってことは――

「ジャックを説得するために、理子を連れ出したの？」

「……そうだ」

静かに頷くジャンヌは、少し申し訳なきそう。

まあ、予想はしてたよ。

「ジャックの立ち位置は今のところは中立だ。だが、戦役でも中立を保っているかどうかは分からない」

そうだね。

ジャックは——お姉ちゃんはそう言う人だもんね。

三度の飯よりも人殺しが大好きだから……

きつと、戦役にも嬉々として参加する。

「研鑽派ダイオオでも、奴を敵に回すのは危険だと多くの者が言っている。主戦派イクオテイスでも同じことを考えているだろう」

「理子がジャックを説得して、中立でいてもらうかジャンヌたちの陣営に引き込んで欲しいってことでしょ」

「その通りだ……」

この様子だと、他の連中も理子にジャックの事を説得して欲しいって頼みにきそうだね。

でも——

「悪いけど、説得は無理かな」

「……なぜだ？」

「確かにジャックは理子の言う事を信じてくれるし、頼みもある程度は聞いてくれると思う」

「……」

「でも、迷惑はかけたくない。いくら付き合いの長いジャンヌでも理子は聞けないよ」

「……ごめんね、あたしは静かにそう言う。話は終わり。」

あたしは立ち上がって、静かにその場を離れる。

ガタンツ!! と、後ろから椅子の音が聞こえたかと思うとジャンヌは叫ぶ。

「ジャックにはあまり関わるな! いくら何でも危険すぎる!! 言いたくはないが、奴はお前を見て楽しんでるだけかもしれないんだぞ!!」

きつとそれはあたしを心配しての言葉なんだと思う。

「……」

「……………違う」

「……………理子。ジャックはお前にとって家族同然で、唯一の存在かもしれない。だが、危険すぎる。お前もカナ……………金一のように——」

ジャンヌは引きとめるのに必死なのか、あたしが近くに来ても気づいてない。

「ジャンヌ……………やめて」

あたしが喋る事でようやくジャンヌはこちらに気づく。

「すまん。だが、これだけは言わせてくれ。ジャックはお前を家族とは思っていないかも——」

「Arr・tee！」

思わずフランス語で叫びながらあたしが髪を操りナイフを首筋に当て、露出している脇腹に銃を押し当てる。

「それ以上は何も言うな……あの人は、お姉ちゃんは殺人鬼だけ——理子の前では家族でいてくれるっ！ あたし自身を見てくれて、家系じゃなくあたし自身に興味があるんだっ！」

そこはジャンヌでも譲れない。

さつきもそうだ。

お姉ちゃんは理子に相談してくれた。

相談内容はどうであれ、今まで守られて、教わってばかりいたあたしに。

そして、今まで変装してきたのにあっさり素颜も晒してくれた。

そんなお姉ちゃんが——

「家族と思つてない筈がないっ！ 理子の唯一の家族を悪く言うなら、ジャンヌでも許さない！」

視界がぼやける。

きつと、泣いてるんだと思うけどそんなのは関係ない。

「すまない……」

ジャンヌの顔は見えない。

だけど、申し訳なさそうな声であたしに謝る。

「あらあら、どうしたの？」

◆

◆

◆

「あらあら、どうしたの？」

涙で瞳を潤ませた理子と対峙していると、その背後にロシア系の成人女性がそこに立っていた。

見た目や口調からして、大人の魅力が出ている。

イ・ウーにおいて、目の前の人物にはあつた事が無い。

新人か、あるいは――

「……お姉ちゃん？」

「そうよ。ジルお姉ちゃんよ」

理子が尋ねると、女性はにっこりと微笑んで返す。

やはり、ジャックか。

対して理子はと言うと、慌てて私から銃口とナイフを離し服の袖ですぐに涙を拭いた。

「それで、何かあったのかしら？」

「な、何でもないよ。それじゃあ、りこりんは部屋でアニメのDVDを見なきゃいけないから戻るね！ キーン！」

から元気にも程があるぞ……理子。

両手を広げて遠ざかる背中を見て私はそう思った。

「全く、慌ただしい子ね」

ゆったりとした口調でジャックはそう呟く。

そのゆったりとした口調とは別に、私は気が気でない。

もし先程の会話を聞かれていたとしたら……マズい。

「まあ、良いでしょう。それでは、ジャンヌさん。おやすみなさい」

——なに？

懸念していた事とは裏腹にジャックはあっさり去って行く。

此方がぼかんとしている間に、ジャックの姿は見えなくなつた。

「はあ……」

拍子抜けではあるが……逆に疲れたぞ。

息を吐きながら椅子に座る。

冷や汗が少しばかり肌に着く。

「お疲れさま、と言った方が良いのかしら」

声が出た方を振り返る。

そこには柱の後ろから煙が出ているのが見える。

「夾竹桃か……いつからいた」

「……そうね。宣戦会議バンデイールの話をしてるあたりかしら」

つまり、最初からいた訳ではないか。

そう思っていると夾竹桃が姿を現し、そして私と対面する形で椅子に座る。

「随分と無茶するのね」

「仕方がないだろう。直接的に交渉したところで、気まぐれな奴の事だ。素直に此方の

思い通りに動いてはくれないだろう」

心苦しかったが、一番奴と親しい理子を介して交渉に臨もうとしたのだ。

その方がまだ確実性がある。

だがそれ以上に――

「やはり危険だな」

「ジャックが危険なのはいつもの事でしょう」

「違う。理子の方だ」

私の言う事に夾竹桃は煙管キセルの煙を吐きながら、どう言う事なのかと目で問いかけてくる。

「端的に言えば、依存だ」

「……ジャックと言う存在に、と言うこと？」

そう、理子はジャックと言う枷に縛られている。

依存と言うのは大体自覚が無いと言う事が多いらしいが……

ともかく理子の中でジャックと言う存在が大きいのは確かな事だ。

理子がフランス語でキレル所を見たのは初めてだ。

「でも、彼女の生い立ちを考えれば無理もない事でしょう」

確かにそうだ。

夾竹桃も理子の過去の境遇は多少は知っている。

理子は幼い頃より両親を亡くし、帰るべき家無くし、ブラドに騙され監禁された。

そして、そのブラドから逃げ延びた末にここへと辿り着き、ヤツジャックと出会ってしまった。

今の理子ならジャックの言うことを大抵は二つ返事で聞きいれてしまうだろう。

下手に動けば切り裂き魔の餌食。

「策の打ちようがないな……」

「ジャンヌ・ダルクはお手上げみたいね」

「そう言う夾竹桃に策はあると言うのか？」

自信がありそうに発言をするあたり、何かあるのだろう。

しかし、あつさりと解決策を出されてしまつては策士として名折れだがな。

「要は依存を取り除けばいいのでしょ。なら、別のモノに依存させればいい」

成程な。着眼点としては良い。

今現在の理子はジャックのみに依存している状況だ。

依存する物を分散させればやわらぐかもしれない。

「だが、具体的にどうすると言うのだ」

「そこで、この薬を使う」

夾竹桃は一つの小さな瓶を机に置く。

「それは？」

「媚薬よ」

……媚薬だと？

「これをどうにかして理子に飲ませる」

「——ほう」

「そして、あなたがこれを飲んだ理子を慰める」

「……………」

「これで解決よ」

「バカかお前は」

「そうだ……夾竹桃がそう言う趣味があると言う事を懸念し忘れていた。

「何を言ってるの。肉体関係は単純ながら効果的な依存方法よ」

「策ではなく快樂に溺れてどうすると言うのだっ!! それと鼻血を吹け」

「全く、話を真面目に聞くのでは無かったな。」

「だ、大体だな……な、なぜそんな非生産的な事をせねばならんのだ。」

「今度の冬コミのタイトルは『聖女と怪盗』で決まりね」

「話を聞けっ!!」

「……どうやら思考の最中なのかこちらの方を見てはいない。」

「夾竹桃の事は放っておこう。」

「問題は理子だ。」

「このままジャツクの影響を受け続ければ碌ろくな事にはならない。」

「どうしたらいいものか……」

「夾竹桃の眩きを聞きながら溜息を吐き、私は考えるのだった。」

10：浸透していく闇

お父さんからの任務をこなしつつ夏休みを過ごしている。

夏休みは半分は終わった感じかな。

「うーん……はあ」

背伸びをして息を吐く。

「任務はないし、殺人衝動がある訳でもないし……どうしようかな？」

そう思っていると、携帯にメールだ。

送って来たのは……キンジか。

深海と言えども、潜水艦だからね。

地上との連絡手段はあるし、それを応用して端末で連絡できる。

優秀な技術者がいると便利だね。

肝心の内容は――

『今度の土曜日空いてるか？』

と言うものだった。

すかさず返信、取りあえずは予定はない事を明記しておく。

返信を待つてる間に、銃の整備をしておこう。

そして、整備中に返信が来る。

『もしよかったら今度の夏祭り一緒に行かないか?』

ふむふむ夏祭りね。

そう言えば、日本の祭りは体験したことなかったな。

興味はあるし、特に断る理由もないから誘いに乗っておこうかな?

取りあえず『いいよ』と送っておく。

その後にジリジリ、と艦内に内通している電話が鳴る。

念のために取りあえず声は変えて電話に出る。

「ハロー」

『僕だよジル君』

「なんだお父さんか。どうしたの?」

『少し、君に渡したい物があってね。僕の部屋まで来てくれるかい?』

「うん、分かった」

電話を切る。

どうしよう変装しようかな……でも、お父さんの部屋はすぐ近くだし素顔を見られても変装だと思っただろうから別に問題はないか。

と言う訳で変装せずにお父さんの部屋まで直行する。

結局、誰にも会わずにドアの前まで辿り着いたわけだけど。

礼儀としてドアはノックしておく。

「入りましたまえ」

相変わらず綺麗に整った部屋に入る。

「来たねジル君」

お父さんは静かなクラシック音楽を流しながら優雅に待っていた。

「うん。それで、渡したい物って机に置いてるのだよね」

「その通りだよ」

机の上にあるのは一つの箱。

結構な大きさだね。

「開けてくれても構わないよ」

と、お父さんは笑顔で言うので取りあえず開けてみる。

そこには一つの衣服があった。

確かこれは、日本の浴衣と言う衣装だったかな？

それと下駄もある。

もしかして――

「キンジから誘いが来るのを推理してた？」

「はは、推理と言うほどのものでもないよ。金一君と同じようにその弟であるキンジ君もまた、義理堅いと分かるよ。それとキンジ君にはジル君に相当な借りがあると云うのも君との話で分かつてはいた。そして、日本のこの時期は祭りが盛んだからね。そろそろだとは思っていたよ。そう言う思惑とは別に贈り物と言う事にしておいてくれ。選んだのは、僕じゃないけどね」

何でもないようにお父さんは言う。

にしても用意がいいね。

どこから調達してきたのやら。

お父さんからの贈り物か……

「取りあえず、これを着ていけばいいんだよね？」

「着るかどうかは君の自由だけれども、見た目は大事だからね」

そうお父さんは、微笑みながらパイプをくわえる。

浴衣の着方は……ご丁寧に箱の中に説明書があるから問題はないか。

「ここで着替えるのではなく、向こうの部屋で着替えるといい。僕が盲目だと分かっている、無闇に男性の前で肌を晒すものではないよ」

お父さんが私の思考を先読みしつつ、そう言う。

別に問題ないとは思うんだけどね。

まあ、先に言われたのなら仕方ないか。

「分かったよ」

違う部屋で取りあえず着替える。

えつと、下着だけになってから浴衣を羽織ってそれから肩から落ちるように整えると

……

あとはこうなって、帯を締めて……コーリンベルトを着けて、伊達締めをして——こんなものでいいのかな？

これで下駄を履いて髪は上部でだんご状に結って……出来たつと。

うん……着てみて思ったけど、動きにくいね。

それと私にとって服なんて変装の道具の一つとしか見てなかったけど……

鏡に向かい、色々な角度から自分の姿を見してみる。

——たまにはこう言うのも良いかもね。

取りあえずお父さんにお披露目しておこう。

お父さんのいる部屋に戻るとイギリスの新聞、^{The Times}ザ・タイムズを読んでた。

確か、イギリスで一番古い新聞だったかな？

そしてこちらに気づく。

新聞を下ろしてパイプを啜えなおしながら、

「ふむ、似合ってるね」

微笑む。

お父さんは盲目の筈なんだけどね。

『条理予知』^{「コグニス」}——優れた推理力によつて、聴覚、触覚、嗅覚だけでも見えてるのと何ら変わりはない。

「こう言うのにはあんまり興味ないんだけどね」

「でも、たまには良いものだろう?」

私が先程思った事をお父さんは言葉にする。

「そうだね」

だから、私も微笑んで返す。

「それはそうと来客のようだ」

お父さんがそう言うので、聴覚に意識を集中させるとドアの向こうから足音が聞こえてくる。

あの足音からして……理子かな?

「ジル君。少し隠れてくれないか?」

なんで? そう思つてお父さんの顔を見ると、お父さんは子供のやるイタズラつ

ぼい顔をしていた。

その顔を見て分かった。

(成程、そう言う事ね)

と言う訳で静かに移動して、お父さんの背後にある本棚の横にあるカーテンへと隠れる。

ちようどその後にコンコンと、上機嫌そうなノックが聞こえてくる。

「りこりんです。入っても大丈夫？」

「ああ、もちろんだよ」

お父さんが許可するとドアの向こうから理子が入ってくる。

何故かその手にはデジタルカメラを持ってる。

「やあ、理子君。衣装の件はご苦労だったね」

「ふっふっふ。理子にお任せなのですよ。それでお姉ちゃんは……」

「その事なのだがね。残念ながらジル君はもう行ってしまったのだよ」

この衣装を選んだの理子だったんだ……

それはそうとさすがお父さん、演技が上手いね。

すまなそうな顔をしながら理子に言うところとか。

その瞬間、理子は残念そうにする。

「そっか〜……せっかくのシャッターチャンスを逃しちやっただか」

「ああ、今度の夏祭りに着て行くみたいだからね。早めに戻ってしまったよ」

「え？ 夏祭り？」

お父さんの『夏祭り』と言う単語に理子は反応する。

「どうやら金一君の弟であるキンジ君からお誘いがあったみたいだね」

「……お誘い」

そして、何か凄いショックを受けたような顔してる。

なんでそんなにショックを受けてるの？

「夏と言うのは男女の仲が進む時期だからね。ジル君もキンジ君をとても気に入ってる

ようだし、もしかすると……」

「も、もしかすると？」

「理子君なら分かるだろう？」

遠回しな言い方だね。

だけどお父さんの言いたい事は分かっているのか理子は啞然としてる。

まあ、私も言いたい事は何となく分かるけどそう言う関係にはならないと言うか……

そもそも恋なんて分かんないし。

それとお父さん、理子に見えない角度で少し顔がニヤついている。

「いや……いやいやいや。お姉ちゃんに限ってそんな事はない……よね？」
「さて、どうだろうね。ジル君の感情も10年前に比べると随分と豊かになった。それに、彼女も人間であり女性であることに変わりはないからね。そう言う時が来たのだから」

感慨深そうな顔をしながらお父さんがそう言った瞬間に理子は膝から崩れ落ちる。

そして両手をついて四つん這いになった。

「お姉ちゃんが寝取られた……」

『寝取られた』の意味は分からないけど誰にも私は取られてないよ、理子。

面白い物も見れたしそろそろいいでしょ。

「ふふ、お父さん。もういいよね？」

「はは、そうだね。もう出てきても良いだろう」

「……え？」

私の声が聞こえた時点で不思議に思ったのか理子は顔を上げてキョロキョロとする。

まあ、お父さんの後ろに隠れてた訳だから出ればすぐに気付いたけど。

出てくる際にカランコロン、と下駄の音が小気味よく聞こえる。

そして、私の姿を確認したところで理子は目を見開く。

さつきとは逆に別の意味でショックを受けてるみたいな感じだね。

何だろう……感動してるって事でいいのかな？

理子の目の前にまで行くと、さらに理子に変化が表れる。

「ふ、ふおおおお……」

変な声を上げながら打ち震えてる。

今日の理子は面白い反応するね。

「うんうん。理子の目に狂いはなかった！ よく似合ってるよお姉ちゃん」

「理子を選んでくれたんだよね。ありがとう」

私が笑顔でそう言うと、理子は顔を赤らめながら視線を逸らす。

「あ、そうだ！ お姉ちゃん、記念写真撮ってもいいかな？」

急に理子はデジタルカメラを見せながら私にそう聞いてくる。

まあ、元々そのつもりで持って来たんだらうけど……

うくん……写真かあ。

証拠にならないといいんだけど、理子の頼みだし、仕方ないかな？

それに知られたら殺せばいいんだよね。

死人に口無しだよ。

「うん、いいよ」

「どれ、僕が撮ってあげよう」

私が承諾した後にお父さんが撮影に買つて出た。

「おう、世界一の探偵の撮影とか滅多にないね」

「僕の推理力を持つてすれば一番良い写真を撮る事も可能だからね」

「なんて言う推理力の無駄遣い。そこにりこりん痺れる憧れる〜！」

そんなやり取りを二人はする。

それから理子からデジタルカメラを受け取りお父さんは電源を入れる。

どう見ても盲目には見えないよね〜。

「そうだね……向こうに並ぶと良い。そこが一番よく写る場所だからね」

「うっうー！ ラジャー！ お姉ちゃん行こ」

随分とご機嫌なのか理子は私の手を引いて急^せかす。

別に逃げたりしないんだから。

そして、お父さんの言われた場所に着く。

「いいかい？」

「モチのロンだよ！ お姉ちゃんもほら、ピースピース」

私の腕に自分の腕をからませながら理子は言う。

さつきからご機嫌だね。

「ん、いいよ。お父さん」

「Say cheese」

英語圏の『ハイ、チーズ』を言いながらお父さんはシャッターを切る。

「ふむ、これでどうだい？ 理子君」

「どれどれ」

理子がお父さんへと駆け寄り、カメラを受け取って写真を確認する。

その後に理子はまたしても感動してるのか、「おお」と言いながら目を輝かせてる。

「気に入ったようだね」

「とつてもだよ」

カメラを大事そうに胸に抱えながら理子はクルリと踊るように回る。

「早速、写真にしないと！ ありがとうね、お姉ちゃん！」

そう言つて理子はスキップしながら部屋を出て行った。

さつきまでショック受けてたのはどこにいったのかな……多分、様子からして忘れてるんだろうな

「やはり若いと言うのはいいね」

さつきの理子の姿にお父さんは羨むような視線をしながら言う。

見た目だけならお父さんも充分に若いんだけどね。

「取りあえず、着替えて向こうに行く事にするよ」

「そうだね……楽しんでくるといい」

私もそこでお父さんと別れる。

楽しみだなく。

そう思いながら私は自分の部屋へと戻った。

◆ ◆ ◆

土曜日、霧と約束をした日だ。

今日は、上野にある緋川神社で夏祭りが開催されている。

そこは武偵達がよく利用する神社として有名だ。

魔除けならぬ弾除けのお守りがあるのもここぐらいのもんだろうな。

とにもかくにも、日頃から積み重なったツケを返す方法がこれくらいしか思いつかな

かった訳なんだが……

「出かけるのか？」

玄関で準備をしていると、涼しそうな着流しをしてるウチの爺ちゃん——遠山 鐵まがねが

尋ねてくる。

「ああ……まあな」

少し振り返って、はぐらかしたような曖昧な返事をする。

女の子と夏祭りに行くなんて言ったら……爺ちゃんの事だ、絶対に何かしら言ってく

るだろう。

——キラン。

何だ？ 今、爺ちゃんの目が怪しげに細められたぞ。

「さては……女子か？」

一瞬での射てきたぞ……だが待て、遠山 キンジ。

ここで動揺すれば、一瞬でバレる。

パートナーから散々学んだだろう。

何でもないように取り繕うんだ。

「……違うよ」

「なら、金一が言っておった相棒と行くんじゃない？ なんでも短髪の快活な女の子らし

いではないか」

兄さああああああんっ!!

なんで爺ちゃんに話したんだよっ!!

「キンジよ。お主も男ならこの夏祭りに仲を深める——ごふっ！」

ドスッ！ と、そんな鈍い音が聞こえてきたかと思つたら爺ちゃんは前のめりに倒れ

た。

そして、爺ちゃんの後ろにはウチの婆ちゃん——遠山 セツがいた。

婆ちゃんは倒れた爺ちゃんを気に掛ける事もなく俺の傍に来る。

「この季節、虫は多いからねえ。ちゃんと虫除けスプレーをしてから行っておきなさい。それと、他の”悪い虫”にも気をつけなさいね」

俺を気にかけるよりも爺ちゃんを気に掛けた方がいいんじゃないだろうかと思つたが、復活したらしたらで面倒そうなので放置しておく。

「ああ、ありがとう婆ちゃん」

きちんとスプレーをして、財布と武偵徽章きじようと武偵手帳、ベレッタをホルスターにしておく。

武偵は常在戦場とか訳の分からん事を言つてたからな。

徽章と手帳はともかく拳銃まで常日頃に持ち歩く事を武偵では義務付けられている。

とつさの事件に反応できるように、と言う事だろう。

「それじゃあ行つてくるよ」

「気をつけて行きなさいねえ」

婆ちゃんに見送られながら、玄関を出る。

するとさつき帰つてきたばかりの兄さんが縁側から顔を出した。

「キンジ。霧と一緒に緋川神社に行くのか？」

唐突に掛けられた問い。

霧のことを知ってる兄さんにはさすがに誤魔化せないな。

「まあ……な。アイツには色々と借りもあるし、今日で少しでも返せればいいなと思ってる」

「そうか……」

何だか、微妙そうな顔だなと思ってる兄さんは此方に微笑みかける。

「粗相のないようにな。お前のことだ。女性が絡むとすぐにトラブルに巻き込まれるからな」

「酷い言いようだ……」

「まあ、今日は精々楽しんで来い。もちろん、彼女を退屈させないようにな」

「分かってるよ」

そう答えて俺は霧との待ち合わせ場所になっている巣鴨の駅へと向かうのだった。

◆
遠ざかって行くキンジの後ろを見ながら、俺はため息を吐く

白野 霧——か。

あれから法に触れない程度に彼女の事を調べてみたが……書類上に不審な点はない。

つまりは、白だ。

彼女と初めて会った時に見せてもらった拳銃。

ジャックが持っていたのと同じ物で同じ場所に傷があったのは単なる偶然だったんだらうか？

今の俺には分からない。

俺の勘は怪しいと言っているが、決定的な証拠は何もない。

いや……彼女の私物を調べれば何かしら分かるかもしれないが、それではキンジに迷惑がかかる。

キンジ自身も彼女の事はそれなりに信用している。

それなのに俺が彼女の事を疑って掛かってしまえば、色々と問題になるだらう。

今のところは彼女に不審な動きはない。

それどころか、キンジが少しずつ成長してるのが分かる。

彼女と出会ったおかげだらう。

——素直に良いパートナーだと思う。

(俺の考え過ぎか……)

やはり、神経質になり過ぎてたのかもしれない。

(今度会う事があれば謝罪しよう)

何にしる勝手にあのジャックだと思って、疑ってしまった訳だからな。

そこら辺の事は伏せておいて謝罪しよう。

それとは別に話してみたいと言う思いもある。

普段は同僚に専門的な医療の話をしてもらい分かって貰えないのだが、霧は博識だったな。

キンジと同じ歳だと言うのに、驚きだ。

どんな時代にも天才はいるものだな……

月を見上げながら俺はそう思った。

◆ ◆ ◆

巣鴨の駅に到着してからと言うものの、俺は霧の姿を探していた。

メールによればもう来ているらしいのだが……

一体どこにいるのか、さっぱり分からん。

夏祭りがあるせいかいつもよりも人が多い。

こう言う人混みの中、人を探すのは骨が折れるんだよな。

そう思っていると携帯が震える。

開いてみればメールの着信で、相手は霧だ。

『私は見つけたけど、キンジは見える？』

そんな内容だった。

おそらく近くにいるんだろうが、周りを見回しても霧の姿は見えない。

引き続き着信が来たかと思うと――

『左後ろ』

それだけ本文に書かれていた。

つまり、今見てる方向の左後ろにいますと言う事だろう。

そう思つて見れば――

「やつほ〜」

目の前に霧の顔が飛び込んできた。

「うおっ!?!」

思わず驚いて携帯を落としそうになる。

普通に現れられないのかよ！ そう言おうと思つて霧に言おうとして、その姿を改めて見て――言葉に詰まった。

予想外過ぎた。

まさか、あの霧が――”浴衣姿”で現れるなんて……

霧の浴衣姿に驚きながらも、何とか緋川神社に到着した。

いつもと違う感じに思わずヒスリそうになったが上手く止められた。

「賑やかだね〜」

そう言いながらカラコンコロんと下駄の音を立てながら、俺の隣を歩く。

ピンクの浴衣と桜模様の刺繍が映える。

桜は日本の花だしな。

年中を通して着ても何ら不思議はない。

遠山家にとつても縁起のいい花だからな……ご先祖様的な意味で。

だが、今の俺には危険要素が満載過ぎる。

「どうしたのキンジ？ そんなに見つめて」

お前、絶対分かって聞いてるだろ。

ニヤニヤと言った感じに霧は目を細めてイタズラっぽく微笑む。

「まあまあ、安心してよ。そんなにべったりくっつかないから」

「それはありがたいんだが……」

見るだけでも充分に危険なんだよな。

……あんまり考えないようにしよう。

そもそも今日は霧に借りを少しでも返すと言う名目で来てるんだ。

楽しんで貰わなきゃ意味がない。

「そうだ、霧。何か食わないか？」

「うん？ そうだね。おススメとかあるの？」

「あー、ばくだん焼きがあるな」

武偵に爆弾とか縁起でもないが、毎年人気があるらしい。

「たこ焼きは知ってるけど、ばくだん焼きって？」

「ようはたこ焼きがでかくなつた奴だ。確か、一つで8個分らしい」

「いいね。じゃあ、お願いしようかな」

「分かった。だけど、人混みの中を歩く事になるがいいか？ 別に俺が買ってきてもいいが……」

霧は浴衣だしな。

それに下駄だと歩きにくいだろうし、ふとした事で転びかねないぞ。

……………。

……………。

何だろうなこの違和感は――

……………ああ、そうか。

普段から俺の方が気が掛けられてるし、守って貰ってるからか、逆に俺が霧を気に掛ける事ってあんまりなかったからな。

考えてみて思ったが、情けないな……………俺。

「じゃあ、そうだね。拜殿の近くで待ってる事にするよ」

「ああ、分かったよ」

急いで買に行かないとな。

そう簡単には無くならないとは思いますが、早いに越したことはないだろうし。多くの人が行き交う中をかき分けるようにして進む。

しかし、随分と武偵が多いんだな。

帯銃してる奴や見知った顔がいるし。

そんな事を思いながらも何とか目的の屋台に辿り着く。

肝心の値段は……1個400円か。

まあ、予算の範囲内だな。

今回はそれなりにお金は用意してあるし、霧が大食いじゃなければ大丈夫だろう。

もちろん金銭は俺持ちだ。

まさか、ヒステリアモード以外で女の子に奢るなんて思ってもみなかつたな……

「すみません。レギュラーで2個ください」

「あいよー！」

威勢のいい若い男性の店員の声が帰ってくる。

しばらくして目当ての物を袋に入れて貰ってから受け取り、代金を支払う。

あとは、拝殿に待つてる霧の所へ行くだけだ。

来た道に戻りながら拝殿に通じる道へと入る。

家族連れの人たちが俺の横を何人も通り過ぎて行く。思わず目で追いながら、子供の無邪気な喧騒けんそうを聞く。

家族……か。

それにしても家族で夏祭りに来たのはいつだったか……もう、覚えてないな。

兄さんと一緒に歩く事も最近はあるまい。

まあ、武偵庁に勤務してる兄さんだから忙しい分きつと多くの人を助けてるんだらう。

以前は、ちょっとした病院を建てたと言う話も聞いた。

本人は大した事はしてないとか言うだろうけどな……

なんて考えてたらもうすぐ拝殿か。

夏祭りと言えば、普通は金魚とか風鈴とかの浴衣を着るんだけどな。

あいつの浴衣の柄は桜だから嫌でも目立つ。

首を少し動かすだけで、すぐに見つけられたが――

……なんだ？

霧の周りに見知らない顔の男達がいる。

帯銃してない所を見ると、武偵ではないらしい。

それよりもこのパターンは任務で見た事があるぞ。
クエスト

アレか……ナンパって奴か？

武偵をナンパしようとするなんて物好きな奴らもいたもんだな。

だけど、今の霧ならそれも納得だけだな。

普段のあいっつは自由奔放の一言に限るが、今日の霧はお淑やかで可憐さを感じる。つて何考えてんだ俺は……

「キンジ―」

此方に気づいたららしい霧が声を上げる。

それと同時に男達も俺の方へと向く。

人相悪いな……しかもこつちを見る目がいかにも『ああん!?』つて感じだ。

だがハッキリと言うと武偵中学にいる教師よりも怖くない。

あつちは本気の殺気も放つてくるしな。

「と言う訳で、先約がいるから私はこれで失礼させてもらうね」

霧がそう言つて備え付けのベンチから腰を上げる。

「まあまあ、そう言わずに少しぐらい俺たちに付き合つてくれよ。退屈はさせないからさ〜」

「じゃあ、丁重にお断りさせてもらうね」

「そう言うなよ。あつちのパツとしない奴よりも俺らの方が良いつて」

進行方向を塞ぎながら男たちは霧に詰め寄る。

それにしてもパツとしないって……まあ、事実そうなんだろうけどお前らに言われるのは余計なお世話だ。

しかし、面倒な事になったぞ。

いくら武偵だからと言っても銃を簡単に脅迫の道具には出来ない。

今はお祭りの最中だしな。

安易に出して誰かに見られれば誤解を招いたりパニックの原因になりかねない。

相手は3人。

徒手格闘でも充分に対処できるほどの素人だ。

だが霧は浴衣でその上に下駄だ。

普段はAランクの武偵であるアイツでもあの格好じゃあ、いつも通りに動けないだろう。

となるとだ。

俺が対処する事になるんだろうな……

兄さんの言った通り、確かにトラブルに巻き込まれたよ……

「あゝ悪いが、ウチのパートナーから離れて貰えるか？」

「なんだよ……テメエは」

不機嫌そうな声を出しながら耳にピアスをしたスポーツ刈りの男が答える。

俺のベレッタはともかく、武偵手帳ぐらいなら出しても問題ないだろう。

後ろのポケットに入れてある武偵手帳を見えるように開いて出してやる。

「武偵だ。悪いが、ナンパなら他^よ所^そでやってくれ」

これで、大人しく引き下がってくれるといいが。

「おいおい、中学生のガキの公僕がなんだって？」

効果なしか……年下だからって見てると痛い目見るぞ。

呆れると、霧から反応があつた。

ショートウインキング
マバタキ信号で何かを言ってるので、解読すると――

『無力化していい?』

と、来た。

『出来るのか?』

『Yes』

どうやら問題ないらしいな。

あの浴衣姿でどうやるかは知らんが、取りあえず警告はしておいてやろう。

「その、なんだ……大人しく帰った方が良いと思うぞ」

「生意気言いやがって、黙らせようぜ」

「ああ……」

一人がバタフライナイフを取り出し出した瞬間に、霧は動いた。

両方の手刀を振り下ろし、背中を向けていた二人を気絶させる。

突然にバタリと二人も倒れた事に驚いてる間に、霧は背後にいるスポーツ刈りの男にすり足で肉薄する。

まるで地面を滑るように移動した霧に男は反応するが、もう遅い。

左手で男の襟首を掴んで引き寄せながら、右手の掌底で顎を打ち抜く。

相変わらず綺麗に決まるな……アレ。

以前の演習でも見た光景、脳震盪を起こして気絶したのだろう。

あいつらきつと、霧の事をただの綺麗な女の子としてしか見てなかったんだろうな。

俺が武偵でしかもパートナーって言ったんだから、霧も武偵であるって言うことぐらい分かるだろう。

そして霧は少しだけ砂埃が舞ってしまったのか浴衣を少しはたくと、俺に向かって悠然と歩いてくる。

隣で歩いてる時には気付かなかったけど、随分と様になってるな。

「お待たせ」

「あ、ああ……」

思わず生返事になってしまった。

見惚れてしまったとかそういう訳じゃないぞ……断じて。

「えっと……あいつらどうするんだ？」

「まあ自業自得って事で、放置でいいんじゃない？ 恥を搔いた方がきつと大人しくなるでしょ」

いや、逆効果な気もするが……自業自得って言うのには変わりないか。

霧は3人組に目もくれずに俺の手を引いて行く。

「目的の物はちゃんと持ってきてるんでしょ。冷めたら困るから早めに、ね？」

「分かったから引つ張るな」

手を引かれながら先程とは違う備え付けのベンチへと座る。

そして俺が買ってきたばくだん焼きをお互いに頬張る。

「成程ね。人気って言うのも納得の味だね」

「こう言うの食べるの俺は久しぶりだけだな」

「キンジはこう言うお祭り騒ぎは嫌いそうだからね」

「いや、そう言う訳でもないんだが……」

「でも、当たらずとも遠からず。でしょ？」

「……まあな」

人が多いところ、つまり女子も多い訳だからな。

それにこう言う事を楽しむ相手もそんなにいる訳でもない。

「随分と寂しいね〜キンジは」

「放つておいてくれ……」

「いけないね〜。キンジは人生を損してるよ。色んな人がいるから世の中は面白いのに、自ら人と関わって行かないなんて」

「俺はお前とは違うんだよ……」

霧みたいに明るくするのは苦手だ。

俺のその発言に、霧はキョトンとした顔をする。

なんだ？ 俺何か変な事言ったか？

「なに当たり前の事言ってるの？ ま、キンジがそれでいいのなら私は構わないけどね」
くすりと小さく笑いながらいつの間にか食べ終えたのか、立ち上がってプラスチックの容器をゴミ箱へと入れる。

「ほらほら、私を退屈させると……怖いよ？」

「分かったよ」

ちようど食べ終わったので、俺も霧の後へと続く。

いくつも出店を回りながら時には舌鼓を打つ。

徐々に俺の財布の厚みも減って行くが……まあ、問題ないだろう。

帰りの分の電車賃ぐらいは確保してる。

「随分と店を回ったな」

「もうそろそろ終わりかな？」

「そうだな……」

霧の言うとおり、いつのまにか時間が経っていた。

もう神社には来た時ほどの喧騒は無い。

人の姿も少なくなっている。

祭りの終わりって言うのはこうして見ると寂しいもんだな……

「今日は、楽しかったよキンジ。こう言った事は初めてだったからね」

「初めてだったのか？ てつきり、こう言うのは結構参加してるのかと思った」

「ただ単に今まで興味がなかっただけだよ。それに色々忙しかったし」

忙しかった、か……そう言えば、病弱な姉のために稼いでるんだったな霧は。

なら、あまり触れてやらないでおこう。

その時にドオン！ と言う音と共に空が輝く。

見上げれば色とりどりの華が空に咲いていた。

そう言えば、花火もあつたんだったな。

しかも何気にちやうど見える。

穴場だったのかもしれない。

ラツキーだったな。

「たくまやうつてね。……ああ、そう言えばキンジ」

「……なんだ？」

「東京武偵高に行くんだよね？」

「まあ、な。腕を磨くのに打ってつけだし、寮もあるからな」

「じゃあ、これからもよろしく……だね」

よろしく？ それって——

「お前も、なのか？」

「そうだよ。てつきり中学だけの付き合いだと思ってた？」

今まで考えてなかった……訳じゃないが。

さすがに同じ高校とまでは行かないだろうと考えてた。

素直に嬉しいと言えはいんだろうが……さすがに恥ずいぞ、それは。

「だからキンジ——これからもヨロシク、ね？」

——ドオン！

手を差し伸べながら笑顔でこちらに向いてきた霧の背後で大輪の花が咲く。

その姿はとても幻想的だった。

「ああ、よろしく」

俺はその手を取り握手した。

俺にとってはもったいないパートナーだよ、お前は……

だけど、結局俺は知らなかった。

彼女の事を、何も——

最高の相棒パートナーだと思ってた……この時は——

11：ロシアの人間兵器（ヒューム・アモ）

夏祭りから随分と経った。

大体、4ヶ月くらいかな？　つまりは12月で、もう終わろうとしてる。

「ЛЯ〜ЛЯЛЯЛЯЛЯ〜♪」

陽気に鼻歌を歌いながら、私は薄暗い通路を静かに堂々と歩く。

歌って言っても単に『ラ〜ラララ〜』って言ってるだけだね。

私が今いるのはロシアの辺境にある研究所。

首都モスクワから北に離れたところ。

そして、今の私はロシア人なんだよね。

研究員の一人である女性に成り済ましてこの研究所を破壊工作中と言う感じ。

こここの主な研究は人工^{ジニオン}天才の製造な訳だけど……

ただの人工天才じゃないんだよね。

お父さん曰く、イロカネに同調する子を育てる施設なんだってね。

まあ、私もしばらくこの職員に成り済ましてたから充分に分かってる。

いや〜……面白かったな。

まさか、肉体を半機械化サイボーグするとは思わなかったよ。

そこら辺はアメリカとは違うアプローチだったね。

イロカネの同調は二の次で、結局はアメリカと同じ戦える兵士を育成する事に専念してたつぽいけど。

いいね〜いいね〜。

面白いね〜。

これだから、人を殺観察したりするのはやめられない。

……………。

そうだ……そう言えば人工天才も処分の対象に入ってるんだった。

確か、この通路の向こう側のドーム状の建物——実験施設にいるんだよね。

「М^発Ы^見 На^しШ^たЛ^ぞИ^ぞ！ Ст^撃рел^てя^てТ^てЬ！

突然の声に振り向いてみると、どうやら施設防衛の兵士らしい。

まだ残ってたんだね。

人数は2人、防弾チョッキを着て、こちらにAK47の後継銃——AK74を構えて発砲する。

通路じゃあ確かに避ける場所なんてないし、向かってくるとしても一方向だけだから撃てば当たる。

だけど——弾の密度が同じ訳じゃない。

私には見える。列を成して飛んでくる弾丸の薄い場所が。

だから私は両手にサバイバルナイフを持って、そこに向かって獣のように駆ける。

当たりそうな弾丸は切り裂き、迫る。

私が近づく度に二人の兵士の顔が驚きと恐怖に染まって行く。

距離が縮まり……兵士と兵士の間を風のように通り抜ける。

そして、少しの静寂。

彼らに横顔が見えるくらいに後ろを向くと、何も体に変化がない事を不思議に感じてるのかお互いに顔を見合わせてる。

その反応に私は思わず笑みが零れる。

プシュツ——

そんな音が僅かに聞こえた時には、彼らの首から鮮血が流れる。

そして糸の切れた人形のようにバタリと倒れ、沈んで逝く。

再び静寂に包まれた通路を私は進む。

しばらくして、重厚そうな隔壁のような白い扉へとたどり着く。

電気・通信系統は既に破壊した筈なんだけど……予備電源が作動してるのか扉を開けるためのパネルが動いている。

なら、IDカードとパスワードで開くかな？

カードスキャンにIDカードを通して入手してる8ケタのパスワードである数字を打ちこむ。

すぐに反応があり、下から扉が開いていく。

中に歩いていけば、そこはまるで闘技場のように広い空間。

端から端までは20メートルかな？ 薄暗くて分からないけど、そのぐらいはありそう。

さてと、この先に目的の人工天才が……いや、向こうから来てくれたみたいだね。

手間が省けたよ。

薄暗いながらも確かに見える人影、そしてこちらを確かに見ている感覚がある。

でも……その2つの双眸そうぼうから来る視線、そして殺気。

どれもが機械的で空虚だね。

哀れな自動人形。

悪いけど、人間ならともかく人形に興味は無いんだよね。

「Ликвидировать そ の 入 者 を 排除 し て 殺 す ぞ」

この声は……研究所の主任だったね。

どうやらこの空間に一つだけある、防弾性のマジックミラーの向こう側にいるっぽい

ね。

取りあえず、この人形を壊して残りの職員にも死んで貰わないといけないから、早くここ終わらせたいんだけどね。

「……Я ア Понимаю, 解 что た」

向こうはそうさせてくれない……か。

静かに聞こえる声は少女のもので、段々と見えてきたその姿も10代のロシア人少女。

その背中には何か大きな箱状の物を背負ってるように見える。

彼女がここの研究所で作られた人工天才で名称は『Шесть シエ スチ』。

名称と言っても、ただロシア語で6とつけただけ。

つまりは人工天才の6体目。

残りの5体は知らないけど、十中八九もう処分されてるだろうね。

なんて考えてると、向こうはいつの間にかガトリングガンを2門も構えてる。

しかもアレ、YakB-12、7だったつけ？

ロシアの戦闘ヘリ『ハインド』に搭載されてる機関銃……4銃身のガトリングガン。

随分と物騒な物を装備してるんだね。

しかもさすがは体を半機械化してるだけあって、あんな重い物を片手で持てるなんて

…

だけど、1門は無力化させて貰おうかな？

見えない速度での早撃ち——『不可視の銃弾』^{インヴィジブル}を放つ。

M500でやるとは思わなかったけどね。

ドウツ！ ドウツ！

ガキン！

おかしいな？ 1発は心臓付近に撃ち込んだのに弾かれた音しかない。

しかし、やっぱり2発しか撃てないね。

まあ、そもそも早撃ちに適した銃じゃないし、仕方ないか……

と、考えてる場合でもないか。

聞こえてくる駆動音——来る。

ヴヴヴヴヴヴツ！！

薄暗かった空間が写真のフラッシュを連続で焚いたみたいに、明るくなる。

そして迫る弾丸を私は右に避け、走り続ける。

私の軌跡を追うようにして弾丸が引き続き迫る。

銃口に撃ち込んだもう1門の方は、暴発する可能性を考慮して予想どおり撃たないか。

それどころか既に捨ててる。

心臓が無理なら……頭や首ならどうかかな？

走りながら再び2発の不可視の銃弾を放つ。

途端にガトリングの銃声が止み――

ギンッ！ ギンッ！

金属音が2回響く。

さすがに頭部や首は守ったか……

成程ね。最初の弾丸はプロテクターつまりは鎧みたいな物があって、防がれたただけだったか。

だけど首や頭部は防護してないっぽいね。

しかし、よりにもよってガトリングの銃身で薙ぎ払うようにして防ぐなんて、どんだけ馬鹿力で反応速度がいいんだか。

だけど発砲が止んだ。距離を詰めるチャンス。

ガトリングの駆動音がする前に人形にもう少しで手が届く距離にまで詰める。

行けるかな？

このまま懐に入って首を狩っちゃえば――

そう思って左手にスペツナズ・ナイフを取り、懐に入って首に向けて振るう。

ガキンツ！

再び鳴り響く金属音。

右手の手甲みたいので防いだか……

チリチリと金属同士が擦れ合う音を響かせながら、人形の顔を見るけど——やっぱり空虚だ。

外見的には人形のように整った顔立ち、少し癖のある白に近い金髪に薄いグリーンの瞳ね。

全く、私の邪魔なんかしないで人形らしく寝てて貰いたいんだけどね。

と言うか、もうチエツクメイト。私は右手の銃が残ってる。

向こうは左手にガトリングを握ってて防ぐ手は見当たらない。

本当は刃物で壊したかったけど、お父さんからの任務が最優先だからこれで終わり。

「Прощай<sup>ブ
ロツシヤイ
チェ</sup>Te」

ロシア語で『さようなら』を告げて、銃を向けようとした瞬間に人形の左手が素早く動く。

やっぱり反応速度が凄いなあ……まあ実際、半分は機械で出来てるから何もおかしい事は無いんだけど。

ガトリングを左手から離れたかと思うと、そのまま左手が迫ってくる。

いや、手首から何か刃のような物が伸びてる！
ヒュン！！

そんな風を切る音と共に私の顔へと迫る。

危なっ?! 首を動かして間一髪……何とかかわした。

髪を掠めちやつたよ。

素早くバックステップで人形から離れると同時にスペツナズ・ナイフの刃を射出する。

強力なスプリングで飛ぶ刃が人形の首に向かって行くけど、またしても右手の手甲で防がれる。

そして、そのまま右手を私に向けてくる。

なに？ ロケットパンチでもしてくるのかな？

と思ったけど、手甲の先には銃口が見える。

防具かと思ったら、同時に武器だったんだ。

ココ——ジーニヤン機嬢が見たら喜んで解体しそうだ。

そう思っていると、手甲からマズルフラッシュがすると同時に弾丸が飛んでくる。

まゝ距離を稼がれるよ。

後退しながら飛んでくる弾丸を左右にかわす。

もう、面倒だなく……

刃を射出したスペツナズ・ナイフを捨てて、代わりにグロックを抜く。
フルオート射撃でお返しするけど、やっぱり白いプロテクターで弾かれる。
今のでマガジン一つまるまる使っちゃったよ。

フルオートで距離が開けたまま、顔に当てるのは私でも厳しいか。
セミオートじゃあ火力負けするし、防がれもする。

弾幕をかわしながら思考するけど、どうしたものか……

フラッシュ・パンをしようと思っただけど、多分あのH^{ヘッドマウントディスプレイ}M^{モード}Dで無効化されるだろう
しなく……

大体、私は真正面で戦うなんてあんまり好きじゃないんだよ。

やっぱり、固めた相手に有効なのは一点集中かな？

反応速度的にもまあ、間に合うでしょ。

それにこの方法なら”プロテクターごと”撃ち抜ける。

M500に残ってる最後の弾丸を不可視の銃弾で人形の顔にめがけて放つ。

そして、またしても右手の手甲で防ぐ。

当然、銃撃は止む。

私はその瞬間を逃さずにかささずグロックを仕舞い、M500専用の弾である、50

O S & W を空中に浮かせる。

そして、シリンドラーに入ってる弾を抜いてからの空中リロード。

足を止めて、西部劇のガンマンがやるように腰元で構える。

名付けて、“継ぎ矢”ならぬ継ぎ弾。

——連続ロビンフット継ぎ弾。

ドドドドドウツ！

あまりの連射速度にいくつもの銃声が重なる。

そのまま弾丸は綺麗に一列に並びながら人形の心臓へ。

プロテクターがあるから防ぐ必要がないと思ってるのか、人形は機械的な動作で手甲をこちらへと向ける。

やっぱり所詮は人形だね〜

私はもう避ける必要がないから、このまま立ってても良いけど——向こうはどうだろうね。

ガガガガガン！ バキンツ！！

金属音と共に何かが砕ける音が空間に響く。

ま、そうなるよね。

プロテクターで止まろうとした最初の銃弾が次弾によって釘を打つように撃ち込ま

れる。

それが連続で4回なんだから、この結果も当然だよ。

心臓を撃たれた人形は衝撃で背後へと少し飛ぶ。

少し手間取っちゃった。

あと、この技はあんまりやりたくないね……

腕が痺れるし、腕自体が使い物にならなくなっちゃう。

この技、他の誰かに教えようかな？

使う使わない以前に私には合わないや。

「Hebepepya……」

この声……研究所の主任ってばまだいたんだ。

さっさと逃げてればよかったのに、もしかしてこの状況でも研究データを取ってたの

かな？

ありがたいことだけどね。

さてとここで人形に使わなかった貴重な貴重な武偵弾を取り出して、グロツクのマガ

ジンに詰める。

使うのは炸裂弾クラスターを3発。

曲がりなりににも研究所の実験場所だから1発じゃあ不十分だろうし、中にいる人を殺

す事は出来ない。

あそこに行こうとすれば普通に逃げるだろうしね。

それにあの人形のせいで時間も食い過ぎた。

本当は切り裂きたかったけど、もういいや……あの人形で我慢しよう。

「と言う訳で、さようなら」

躊躇いなく銃を防弾性のマジックミラーに向けて放つ。

瞬間的に轟音と爆発、そして爆発の余波が私の体に伝わってくる。

2回の爆発で完全にマジックミラーは碎け散り、もう1発は部屋の中で弾けた。

これで生き残る可能性は完全に無くなった。

あとは、あそこの人形だけ……

建物が崩れる事はないだろうけど、楽しんでる時間はあんまり無い。

はくあ……何の反応も無い人形を切り裂いても面白くないんだけどね。

と言うか、もう死んでるか……

臓器とか装備とか剥いでおくかな。

……………。

……何だろうこの違和感。

確かに心臓を撃ち抜いた筈だけど、人形の胸が上下に動いているのが近づく度に分か

る。

胸が上下に動いてるって事は……生きてる？

もしかして、プロテクターのせいではなかったのかな？

なんて思いながら、さらに近づいて行くと確かに生きてるのが分かった。

息を荒げてぼんやりしながらも、近づいたこちらに気づく。

そして――、

「…… He ^イ x o ^ャ q y」

たった一言、震えながらそう言った。

さっきまでとは何か違うなく

別の違和感を感じる。

そう……なんて言うのかな？ 瞳に光があると言うか、意志があると言うか。

ああ、そっか。さっきと違って怯えてるんだ。

つまりは……そう。

私が今まで見てきた人と同じで、『死』に対する恐怖みたいな感じ。

死ぬ直前で恐怖だけど、感情が芽生えたのか……なるほど、なるほど。

それでもつてこの雰囲気、理子に似てるんだよね。

何となくだけ。

どうしようかな？ お父さんからは人工^{ジニオン}天才も処分するように言われてるんだけど……なんだかこのまま殺しちゃうには勿体無く思えてきた。

取りあえず手短に連絡しておこう。

連絡用の端末を取り出して、コールする。

『やあ、どうしたんだいジル君？ 任務中に電話なんて珍しいね』

ほどなくしてお父さんから反応が返ってくる。

「うん。ロシアの人工天才の件んだけどね。殺さないとダメかな？」

『どうしてだい？』

「ちよつと、勿体無く思えてね。別に、処分しないとイケないって言うのなら言われた通りにやるけど？」

『いや……君がそう思ったのなら僕は咎めはしないよ。君に好きにするといい。職員の方は全員言われた通りにしたのだろう？』

「そつちはちゃんと済んでるよ」

『なら、問題は無いよ』

「これも推理の内だつたりして」

『ハハハ、そこまで万能ではないよ。結局は僕も人だ。神様ではない自覚はあるよ。それと人工天才の方はさつきも言った通りに君の好きにするといい。イ・ウーに連れてき

でも構わない』

「りょーかい」

お父さんは「フフ……」と小さく笑った後に電話を切った。

随分とご機嫌そうだったな

よく分からないけどね。

さてと、まずは治療かな？

と思って彼女の方を見ると、いつの間にか気絶していた。

うん。運び出す前にやっぱり治療だね。

12：小さな教授

研究所を取りあえず吹っ飛ばした後、私はイ・ウーに近くの海岸まで来て貰い、そこで研究所のトラックで人工天才と彼女の装備一式を運んだ。

いや、治療してる最中に驚きだったね。

研究所にいた時には詳しく見てなかったけど、まさか背骨がコネクタになっててそれが彼女が背負ってた箱と接続するための物だったとはね。

しかし、人間の中枢神経である背骨に人工物を埋め込むなんて……実に面白い。

まあ、背骨を改造するなんて危険だからその分の代償として犠牲は出てる訳だけど。

アレだね……こんな世間に知れ渡ったら非人道的だなんだかんだと、面倒な事になるのは目に見えてる。

なのに抑止力と好奇心のためには、やめられない止められない訳なんだよね。

でもって、上手い具合に完成したのが彼女ってこと。

ちなみに彼女が背負ってた『箱』の方は、武器とか弾倉とかの詰め合わせだった。機構を見た限りだと色々と射出したりも出来るっぽい。

私も本気じゃなかったけど、向こうも本気じゃなかった訳だ。

しかも向こうは本気を出したら実験施設を破壊しかねなかつたから、研究所の連中がリミッターでも掛けてたんだろぅね。

それはともかく、彼女は端的に言うのと歩く武器庫な訳なんだよね。

さて、今私達がいるのはイギリスのロンドン。

イ・ウーに預けると、場所がいちいち変わるので定期的に行けない。

迎えに来て貰うって方法もあるけど、それはそれで色々リスクがあるからなく。

と言う訳で、却下。

お姉ちゃんの所なら場所は分かつてるし、面倒な事があつても大丈夫だからね。

訪れなきやいけない理由もあるから、そのついででも会いに行ける。

定期的に行こうと思えば行けるし、特に問題は無い。

だからお姉ちゃんのいるイギリスまで来た。

もちろん、人工天才である彼女を連れて。

そして肝心の人工天才である彼女はと言うと、まだ気絶中。

今は車に乗り、後部座席で横になって揺られてる状態なんだよね。

運転手と言うと、私です。

ロンドン市街を安全運転で走行中……と。

ケガ人がいるからね。

原因は私だけだ。

まあ、昨日の今日で目を覚ますとは思ってないけどさ。

補足しておく、研究所での任務からここまで来るのに1日と半日しか経ってない。

本来は休ませるべきなんだろうけどね。

イ・ウーじやあんまり安心して置いとける場所が少ないし、金一なんかは色々嗅ぎまわつてもいるようだし……

面倒な事が多いんだよね。

「……っ、O^{アレ}っ？」

声が聞こえたのでバックミラーを見てみると体を小刻みに動かしている。

ちようど赤信号の交差点に差し掛かったので後ろを見てみると、ボンヤリとだけ目を開けてる。

もう起きたのか……あの様子だと、もう少し掛かると思っただけどね。

彼女は状況判断に努めようとしているのか、体を起こして辺りを見回す。

そして、即座に理解したらしく私の方へと視線を向けてくる。

声を掛けようと思ったけど、その前に青信号になったので前を向いてアクセルを踏む。

「目を覚ますの早いわね。私の見立てだともうちよつと掛かると思っただけど」

と、バックミラーを見ながら話しかけるけど……反応は無し。つて、そうだった。

人工天才とは言えロシア人だからロシア語以外を話せるとは限らないんだった。思わずイギリス英語で喋っちゃったよ。

「……誰？」

なんだ……話せるのか。

「ん〜？ 政府の要人。あなたを引き取ったのよ」

「……」

「嘘よ。と言うか、本当に分からない？」

その問いに対してコクリと静かに頷く。

いくら感情が少し出たって言っても、まだまだ人形に近い状態だからね。

言葉数が少ないのも当たり前か。

場所と状況を把握は出来ても、ここにいたる経緯までは推理できないか。

「研究所での事は覚えてる？」

その瞬間に彼女の瞳が揺れ動いた。

相変わらずの無表情だけど、僅わずかながらに反応を示した。

「じゃあ、私の事は分かる？」

バックミラーを見ると、フルフルと首を小さく振る。

そして、同時に考えてる……のかな？

さすがは人工天才。

私の発言に違和感を感じて、どう言う意味を持つてるのか即座に推理してる。顔も声も変えてるから、研究所で戦った人物とは一致しないだろうね。

顔はともかく声は研究所での時の人に変えてみるか……どう言う声だっけ？

「あゝあゝ……うん」

変声術と片手でボイスチェンジャーを弄って、少し発声しながら調整する。

細かい所は違うかもしれないけど……一瞬で分かるでしょ。

「Прощайте」
プロツシャイトェ

「……っ!？」

ロシア語での『さようなら』。

私が彼女に向けて発した唯一の言葉を出す。

再びバックミラーを見ると――

「……ハア……ハア……ハアッ!」

わゝお、凄い冷や汗に過呼吸。

おまけに瞳孔も凄い開きまくってる。

明らかにトラウマになっちゃってるよ。

でも、もうちよつと怖がらせてみたいかもなんて思ったけど、これ以上やったら発狂しそう。

取りあえず、感情はあるっばい。

恐怖だけ。

「あゝ……安心して、もう殺そうとは思ってないから」

と、声をさつきと同じに戻す。

大体、ここは車の中だから暴れられたら困るんだよね。

そう思つてフオローの言葉を掛けたけど、まだ治まりがつかないのかこつちを見たま
ま動かない。

ちよつとこれは、マズイかな？

あんまり心身不安定だと怪我に響く。

……ちよつと寄り道しようか。

仕方ないので車があんまり来ない小道に入つて、駐車できそうな場所に停める。

後ろを振り向くと、まだ過呼吸になつてる。

「ハア……ハア！」

ベルトを外して、手を伸ばすけど彼女は何もしない。

いや、何も出来ないって言った方が正しいのかな？

恐怖し過ぎて、何もかもを忘れてるって感じ。

取りあえず頭にポンと、手を乗せる。

そしてそのまま撫でる。

しばらく撫で続けて、違和感を覚えたのか彼女は静かに顔を上げる。

相変わらず怯えて呼吸も荒いままだけど……さつきよりはマシかな？

「どう？ 落ち着いた？」

取りあえず、安心させるような声音で話す。

「……なぜ？」

震える声で聞いてくる。

「なぜ、ね。まあ、理由はともかくとして、取りあえず殺すつもりはないと理解してく

れたらいいよ」

「……………」

一度命を狙ったからか疑ってるのかな？

うむむ……まあ、理子の時もそうだったし徐々に近づけばいいや。

「ああ、そう言えば自己紹介が遅れたね。私はジル。世間では切り裂きジャック・ザ・リップスって言

われてるよ」

「……………」

さつきと違って無反応か。

何だろう。

そんな反応されると……もう一度、恐怖心を煽りたくなくなるな。

「……分からない」

「ん？」

「あなた……分からない」

私の事が分からないって事でいいのかな？

それとも行動が分からないのか……

ま、反応を返してくれただけでもよしとしよう。

再び目的地を目指して車を出す。

しばらく車を走らせてるけど、さつきとは違う意味で彼女は動かない。

私に対する恐怖心は当然、まだあるんだろうけど……

今は恐怖で動かなくなってる訳じゃない。

窓の外を静かに見てる。

私がかつきから視線を送ってるけど、全然気にしてる様子は無い。

無表情ながらも意識が外に集中してる。

これも理子と同じような感じ……外への憧れって言うのかな？

どうも、ところどころ理子と重なるな。

と、ロンドンから4時間近く……ようやく目的地であるダラム市に到着したよ。

古い遺跡と建造物が多い観光地として名高い街。

ここにはイギリス国内で3番目に古いダラム大学がある。

歴史を感じさせる街並みの中、まだ車を走らせる。

そして、さらに車を走らせてると1つの屋敷が見えてきた。

大きさはそこそこで、ホームズの屋敷よりは小さい。

鉄の門の前に車を止めて、窓からインターホンを押す。

『どちらさままで？』

どこか威圧感を持った低い声の男性が応答する。

取りあえず、人工天才の子には聞こえないようにして顔を近づけて話す。

「今の私の顔見たら分かるでしょ。ジェームズ」

『いらん客は返さねばならんからな。後ろの小娘は何だ？』

「私の家族になる予定の子……かな？」

『……相変わらず自分勝手な』

「まあね。今更に始まった事じゃないでしょ？」

『自慢ならん。ソフィー様に害が無いという保証は？』

「私が保証人。何かあれば、私が……始末するよ」

さすがにそこは分かっているって言うのに、ジェームズも硬いなく。

理子の時も同じような反応だったし。

少しばかり待っていると、向こうから「はあ」と疲れたような溜息を吐く。

『通つて良い』

「どうも、ありがとね」

ギキート、金属音を響かせながら鉄檻のような門が開く。

車を屋敷の車庫へと入れて、後部座席の彼女に声を掛ける。

「着いたよ」

「……………は？」

「私のお姉ちゃんの家だね」

と言うか、もう変装は止めておこう。

どうせここでは変装を解くだろうし。

変声術をやめるとボイスチェンジャー止める。

カツラと顔を覆ってた特殊メイクのマスクを取る。

髪はよく解ほくして、さらりと伸ばす。

それからバックミラーを見るけど、彼女は私の変装に驚おどいてる様子は無い。

「取りあえず、降りようか」

私が車を出ると、彼女も一応は同じく車から降りた。

ま、行くあても無いからね。

こんな所で抵抗して、逃げてても面倒な事になると考えてるんだろう。

最悪の場合は政府に捕縛されてロシア行きで、研究所生活に戻る可能性が高い。

「……コレ」

「あ、その服は私のだよ。私とアナタは身長が少ししか変わらないけど、少し大きく感じるかもね」

彼女は落ち着いた感じの白っぽい毛皮のコートを羽織ってる。

ロシア人だからね。

白に近い金髪によく似合ってる。

それに今は冬でダラムはイギリスの中でも北部の方にあるから、当然のごとく寒い。

私もブラウンのコートを羽織ってるしね。

「……………」

4時間前の恐怖心はどこへやら……怯える事は少なくなっただけど、警戒はしてる感

じ。

無言でこちらを見てくる。

「……装備」

「君の装備は整備も兼ねて別の所に預けてるよ。持つて行くには大きすぎるし、目立つからね」

技術師である一番下のココ——ズニヤン機嬢に預けてる。

もし、壊したりしてたら燃料を抜いたオルクスに詰め込んで沈めて上げればいいや。

お金さえ渡せば向こうは仕事をきっちりしてくれるからそんな事はしらないと思うけどね。

「他に質問は？」

フルフルと首を振る。

「じゃあ、ついてきて」

私がそう言うのと、今度は頷かずに静かに私の後ろについて来てくれる。

殺すつもりはないと言う事は一応、理解して貰ったって事でいいのかな？

豪華ではないけど綺麗な内装をしたエントランスホールを抜けて、カーペットの敷かれた廊下を歩く。

そして、1つの扉の前で止まりノックをする。

すると――、

「入りなさい」

抑揚の無い、だけどどこか威圧感を持った声が返ってくる。

部屋に入って最初に言う事は決まってる。

「ただいま」

「お帰りなさい」

今、私の真正面にいてアンティークの机に座ってるのが私のお姉ちゃん。

病弱だからいつでも布団に寝れるようにネグリジェのような服装を着ている。

髪はブラウンだけど、多少は白髪が交じってるので白い部分がある。

いつも気だるそうにしてる目をさらに細めて、私の後ろにいる人物を見る。

「その子が例の、人工^{ジュニオン}天才ね」

「そうそう。最初はアレだったけど、興味が出てきたから拾って来ちゃった」

「……別に、問題は無いわ。だからジェームズも、安心なさい」

さすがはお姉ちゃん。

話が分かると言うか、何と言うか。

「ハッ……」

お姉ちゃんの隣にずっといた執事服を身に纏ったブロンド髪 of 男性――ジェームズ

は警戒しながらも殺気を出すのをやめる。

「ただ、私の後ろにいる彼女はちよつとやそつとの殺気じや反応しないだろうね」
兵士と言うか、人間兵器ヒューマンアープモとして研究所にいた訳だし。

しかし、私だと何でトラウマ……恐怖心を抱えたんだらうね。

「やあ、ようやく戻つて来たんだね」

と思考を中断するようにもう一人、細長い体型の若い男性が入ってくる。

相変わらずの優男つて感じの風貌をしてるね」

「うん。ジキル博士も、ただいま」

「ええ、お待ちしていましたよ。貴女あなたがいないとハイドが五月蠅くて仕方ありません」

「そう言われても、私も忙しいんだよね」

「そうでしょうね。貴女は有名ですから……やめるハイド！」

ついさつきの穏やかな口調とは違って突如として荒々しく叫ぶ。

しかも、見ている先は部屋の中にある鏡。

毎度の事だから不思議にも思わないけど。

「いつもの手癖の悪さかな？」

「ハイドも困つたものです。その人工天才の子に何かしようとしてたみたいですよ」

そつかさつか。

それはちよつと警告しておかないと、と思つて私も鏡に向かつて話す。

「この子に手を出したらダメだよハイド。……死にたい？」

殺気を叩きつけるようにして話す。

理子と同じように家族にする予定なんだから、変なことされると困るんだよね。

「……はあ、何とか分かつてくれたようですよ」

ジキル博士がそう言うんだから、大丈夫か。

「それより、貴女の後ろの子が大変な事になってますよ」

「ん？」

どう言うこと？

そう思つて、後ろを見ると過呼吸はしてないけど冷や汗を垂らしてる人工天才がいた。

足もガクガクしてる。

私の殺気に反応しちやつたか……

「またやつちやつたよ」

「何したんです……彼女に」

「ん？ お父さんの命令で最初は処分しようと思つただけ……気が変わつてね」

「いつもの気まぐれですか」

「そうそう」

返事をながらも、彼女を宥めに掛かる。

せつかくあの短時間で警戒されるまでに近づけたって言うのに、また心の距離が遠く
なったら困る。

「ほらほら、今の殺気は君に向けた訳じゃないから安心して」

「……………」

またしても静かに彼女の頭に手を置いて撫でる。

身長が同じくらいなのにこのセリフは違和感あるかな？

別に、相手も子供じゃないんだけど理子の時と同じようにしてしまう。

けど、これが一番有効そうな気もするんだけどね。

現に段々とだけど落ち着きを取り戻しつつある。

それからゆっくりと抱擁して、耳元で囁く。

「あの時みたいな事はしないから、安心してよ。君が何もしないなら大丈夫……私も何
もしない。だから、静かに……ゆっくりと心を落ち着けて」

意識を聴覚に集中させて、彼女の心音を聞く。

まだ多少は動揺してるけど、正常に戻ってる。

そして、静かに彼女の顔を見る。

「大丈夫だよね？」

その問いかけに小さくだけど、彼女は頷く。

危ない危ない。

「お待たせ、お姉ちゃん。それで、この子の部屋なんだけど……」

「ウイリアムに案内させるわ」

私がアイコンタクトでウイリアム——ジキルに目配せをすると「任せてください」とばかりに返してきた。

「じゃあ、うん。この人について行って欲しんだけど、いいかな？」

人工天才の子にそう言うと、コクリと頷く。

「では、ご案内します。こちらへ……」

それからジキルに案内されてあの子は退室した。

さりげなくこちらを見たので、手を振っておく。

「さつてと……本題に入ろうかな？」

報告を含めて、色々と伝えておかないと行けないし。

「そうしてちょうだい」

「取りあえずはそうだね。イロカネを持つてるホームズの子の現状報告としては、別に言う事は無いね。前も言った通りにただのSランク武偵だよ。イロカネが目覚めて

る感じもない」

私としてはあの子にあんまり興味がない。

どこにでもいる武偵って言う感じ。

ちよつとプライドが高くて弄り甲斐はありそうだけだね。

まあ、お父さんが気にかけてる子みたいだから、どこかで実力は化けるのかもしれないけど……

ああ、でも……お母さんが冤罪を着せられた時の反応は楽しみかな？

「そう……」

「ソフィー様、やはり今すぐに殺しましょうか？」

「——ジエームズ・モラン。あなたも恨みがあるのは分かるけど、今はやめなさい」

お姉ちゃんに言われてジエームズはすぐに下がる。

どこか納得してないような、そんな表情をしてる。

「大丈夫よ。近い内にホームズとは戦う事になるわ……必ずね」

「それがお姉ちゃんの推理？」

私の言葉にお姉ちゃんは否定する。

「私の場合は『推理』とは違う。数式で答えを出すように『解いた』と言うのが正しいのよ」

そう言えばそうだった。

お姉ちゃんはお父さんと違って探偵じゃないもんね。

座ってる机の片隅に置いてるチェス盤をお姉ちゃんは手に取る。

「けほっ……しかし、色々と皮肉なもの。100年の時を経て、またしてもホームズと争う事になるとはね……」

しかも100年前とは違って、私には才能ある頭脳を与えた代わりに病弱な体を与え、ホームズには才能ある体を与えた代わりに出来の悪い頭脳を与えた。まさしく対極の条件。

だけれど、私は既に私の体——手となり足となってくれる人たちがいる。対して、ホームズは頭脳とワトソンになってくれる人を見つけられずにいる」

そこで話を一旦切って、お姉ちゃんは息を吐く。

「今の私達に曾お爺さまの時のような巨大な組織は無い。このチェスで言えば、ポーンがない状態」

ジャラジャラと白のポーンだけを取り除き、机の片隅へと置く。

「でも、ポーンがなくても勝つ事は出来るわ。なぜなら私の駒は既に動いてるのだから……焦る事もない」

不敵にお姉ちゃんは笑う。

さすがはお姉ちゃん。

お父さんのライバルだった人物——ジエームズ・モリアーティの子孫だね。

ジエームズはその言葉を理解したのか静かに会釈する。

私もこれからの事を考えると楽しくなるよ。

ニヤリと、自然に口元が歪んで行く程に。

13：新しい夜明け

もうすぐ、新年。

私はまだ、イギリスのダラム市にいるお姉ちゃんの所にいる訳だけど……日本だった
ら時差の関係で既に新年を迎えてるだろうね。

さつきもキンジから新年の挨拶をメールで貰ったし。

「……………」

その前に問題は私の部屋で私を立ったまま無言でじつ、と見てるロシアの人工^{ジニオン}天才
ちゃんなんだけど。

うん。そんなに日も経ってないから未だに警戒されてる。

今のところは行く当ても無いし、色々と仕方なく従ってる感じ。

装備は無いけど、きつとあの装備無くてもそれなりの戦闘力はあるんだろうね、と
か思ったり。

まあ、あの装備無かったら戦えないなんて言う、そんな使えない兵器を作る訳ないだ
ろうし。

だとしたら素手、徒手格闘とか覚えてそうだな。

ロシアで格闘術と言えば……やっぱりシステマかな？

格闘術と言うよりは殺人術に近かった筈だけど、そこまで詳しい事は知らない。

と、違う事考えてた……

話を戻して問題はこの子をどうするか？ なんだよね。

つまりは、お姉ちゃんの所に置いておくのはいいんだけど、問題はその後。

さすがに何もさせないままって言うのもマズイし……タダ飯食らいとか、ジエームズがうるさそう。

だから、私がこの屋敷にいる間に彼女の役割って言うのを決めておかないとね。

ただ……思いつかない。

ヒューム・アモ
人間兵器である彼女が役に立つことと言えば、文字通り兵器として活躍して貰うぐらい。

でもそれって、かなり目立つんだよね。

下手したらロシアから回収部隊みたいなのが来るかもしれない。

さすがの私でも大国は相手に出来ないよ。

逃げる事は出来るけどね。

……そうだ。もう一つ忘れてる事があった。

「傷はどう？ 大丈夫かな？」

私に突然、話しかけられながらも驚くことなく彼女はコクリ、と頷く。そもそもそれが目的で呼んだんだった。

「ま、一応は診ておこうと思うから服を脱いでくれるかな？」

「……………」

今度は頷かない。

何にもしないって言うのに……やっぱり最初にやり過ぎちやったかな？

「仕方ないな」

取りあえず、私がつってるグロツクとM500をベッドに置いておいて。

服の裏にあるナイフと、あとは袖の中にスリーブガンみたいに仕込んでるナイフと――

武装を解除しておく。

「ほら、何にも持つてないよ」

両手を広げてアピールする。

そしてベッドに腰掛けて、ぽんぽん、と隣に座る様に促す。

これでようやく、彼女は動いてくれた。

すぐに心を開いてくれるとは思ってない。

理子の時は、どれぐらい掛かったかな？

確か、半年……いや、恐怖心とかを無くすのに2ヶ月か3ヶ月ぐらいは掛かってたはず。

完全に心を開いてくれたのがいつだったっけな？

まあ、とにかく焦る必要は無い。

「……………」

静かに声を上げる彼女の方を見てみれば、ちゃんと言われた通りに脱いでくれた。

下着はちゃんとつけてるけどね。

まずは、背中から診よう。

ベッドの上に乗って、彼女の横から背後に回る。

しかし……綺麗な肌だね。

見えてそう思う。

ロシア人なのもあるけど、研究所生活も関係してるんじゃないかなって言うくらいに白いんだよね。

私としてはこう言う肌を見ると、切りたくなるんだよね。

やらないけど。

彼女の背中には白い肌とは別の物が見える。

それは、武器の詰まった『箱』と接続するためのコネクター。

ちやうど背骨に沿うようにして等間隔に円状の金属板が並んでる。

きつと、この背骨以外にも目に見えない部分で改造されてるんだろーな、とか思いつつも診察する。

ふーん……貫通してたおかげで傷口を縫合するだけで済んだんだけど。

連続継ぎ弾ロビンフッドで5発も撃ち込んだのに心臓も背骨にも当たってない、と言うか重要な器官には何一つ当たってない。

ある意味奇跡だね。

それでも傷口はもちろん完全には塞がってないから安静にしておく必要がある。

次は前の方を診よう。

診るって言っても、大して変わらないだろうけどね。

ベッドを降りてから椅子を彼女の前に持って来る。

それから座って再び正面の傷口を診るけど……大して変化は無い。

順調に治ってる。

「取りあえず、横になつてくれるかな？ ガーゼとか貼り直すついでにもう少し傷口を診るから」

えつと、ガーゼどこやったつけ？

ほとんど薬品しか棚に置いてないからね。

多分、メスとかの医療道具と一緒にある筈なんだけど。
ああ、あつたあつた。

ついでに消毒液とか持って行つとかなないと。

『Bonne Anne・e!』

大声で扉の向こうから聞こえてくる声。

フランス語で『あけましておめでとう』か……

フランス語にこの声って言う時点で、理子だろうね。

どうやら、帰ってきたみたい。

ガーゼを取り替えて、傷の縫合もちゃんと出来てる事を確認する。

背中の方はこの間やったからいいや。

「よし。特に問題は——」

「あつけまして、おめでとー!!」

扉が力強く開けられる音がした。

こつちに来るのは予想できてたと言うか、足音聞こえてたからね。

「うん。あけましておめでとう……日本で言えば、まだ大晦日だけだね」

「ああ、そっか。イギリスだから時間を戻さないといけないんだ……つて、お姉ちゃん。ベッドの上で寝てるのって、誰？」

まあ、普通に気づくよね。

と言うか、理子に彼女の事を話すのを忘れてた。

イ・ウーに彼女を運んだ時も理子は任務だったのかいなかったし。

「この子はね、ロシアの研究施設で拾った子だよ」

「拾ったんだ……お姉ちゃんがここに連れてくるって珍しいね。ルミルミ以来じゃない？」

「そうだったっけ？」

あんまり覚えてないな。

それにルミちゃんはフィンランドだし、そう簡単にこっちには来れないだろうからね。

「まあ、その話は置いておいて。どうも、ジルお姉ちゃんの妹、りっこりんです！ よろしくね！」

ビシツ、と理子は敬礼をしながら笑顔で小首を傾げる。

しかし、ベッドから体を起こしている肝心の人工天才ちゃんは無反応。

いきなりの理子のアクションについていけないって言うのもあると、思うけどね。

「むう……無反応かー。りっこりん、泣いちゃうぞ」

「仕方ないと思うけどね。研究所での実験生活が長かったみたいだし」

「そっか……ロシアの研究施設って言う時点で大体予想してたけど、やっぱりそう言う事なんだ」

理子は静かに彼女の方を見る。

「そう言えば、理子も」閉じ込められてた”って言う意味では彼女と境遇は似てるかもね。」

同情みたいな気持ちがあるのかな？

「そう言えば、この子の名前は？」

「ああ、そうだった。この子はIII^{シエー}ectb^チ。ロシア語で『6』って言う意味の名前だよ」

「……………そう」

さっきと打って変わって静かになった。

その表情は少し、悲痛そうな顔をしてる。

ああ、そっか……

理子は確か数字に嫌悪感があるんだったね。

なんでも両親がいた時には使用人からは『4世さま』、としか呼んで貰えなかったみたいだし。

なるほど、道理で理子と同じ感じがした訳だね。

もしかしたら、理子の方がこの子の事を分かって上げられるかも。

となれば——

「この子と話してみる？」

「いいの？」

「まあ、私じゃ警戒されてるし。理子の方が幾分かマシかなって思ってたね」

「分かった。あたしも気になるし、なんだか放っておけない」

真剣な表情、そして口調で理子はそう言う。

ま、二人きりになっても大丈夫でしょ。

理子も素人って訳じゃないし、あの子もここで抵抗して逃げ出した所で何の意味も無いことぐらい既に分かっているだろうから、問題は起こらないだろうね。

それに理子なら——上手くこっちに引き込んでくれるだろうし。

「うん、お願いね。私は料理でも作ってくるから。あと、話す時は日本語じゃなくてイギリス英語でお願い。多分、さすがに日本語は話せないと思うから」

それだけ伝えたあと、私はガーゼとかを仕舞って理子に「よろしく」、と言葉を残して部屋を出た。

——新しい家族が増える。

◆ そんな楽しみを胸に抱えて、私は扉を離れて行く。

◆

お姉ちゃんが部屋から出て行くのを笑顔で見送ったあと、あたしはロシアの人工^{ジニオン}天才と向き合う。

そして、ベッドへと走って乱暴に隣に座る。

しかし、改めて見ると凄い肌が白いね。

お姉ちゃんはファンタジー系のヒロインって感じだけど、この子はまさしく西洋の人形って言う感じ。

コスプレさせたらきつと似合うに違いない。

——って、違う違う。

今はそう言う話じゃない。

「さて、どこから話そうかなって……取り合えず、もう一度自己紹介しておくね。あたしは理子——理子・峰・リユパン4世だよ」

「……………」

「それで、さっきの人。ジルがあたしのお姉ちゃんで、あたしもお姉ちゃんに救われたんだ」

「……………」

「救われたって言っても、子供のころに一度殺されかけたんだけどね。うん、あの時は怖かったな」

「……………あなたも、同じ?」

イギリス英語で一方的に話しかけると、意外にもすぐに反応があった。ちよつと、ぎこちない感じだけどきちんと話せてる。

「同じ、つて事は殺されかけたの?」

コクリ、と彼女は頷く。

ルミルミよりかなり言葉数が少ないけど、意志疎通は何とか出来るみたい。

だけど、無表情。

お姉ちゃん以上に感情が欠落してる。

いや、昔のお姉ちゃんよりはまだ酷くはないけど、それでも……………人としては終わってる。

何かを諦めた感じ——昔のあたしと同じ。

そう……………ブラドに監禁されてた時も、きつとあたしはこんな感じだったんだろう。

頭にチラつくのは、無機質な鉄の檻と、石の壁……………そして空間。

——胸糞悪いの、思い出した。

ふう……………

ダメダメ、今は彼女と話してるんだから感傷は無し。

こつちの方に集中しないとね。

「そっか。多分、最初は命令だから殺そうとしたんだろうねー」

「……………あの人、怖い」

お姉ちゃん、何やったの？

確実になんかこう、トラウマつちやってる感じがするんだけど。

しかも見てる限りだと、さっきまで無表情だったのに微妙に恐怖が表情に出てるし！

ほんつとうにお姉ちゃんは人にトラウマを残すのが得意だよね。

あたしも思い出したら……………うん。

やめておこう。

思い出したら、夢に出る。

初夢が過去のトラウマとか笑えない。

「まあ……………そうだよね。確かにお姉ちゃんに抱く印象としては正しいのかもしれない

ね」

「……………」

「だけど、お姉ちゃんは家族に対しては優しいよ。ここに連れて来たのもきつと、君を家族にするためだと理子は思う」

いつだってそうだった。

お姉ちゃんにとってつまらない人は切り捨ての対象。

逆に面白い、楽しいと思える物は手元に置きたがる。

要は、子供と一緒に。

気まぐれで恐ろしい、だけど子供みたいはどこか純真で、好奇心と欲求のままに動く。人工天才である彼女に、どこか面白さを見い出して自分の手元に置きたいからここに連れて来た。

理子はそう思う。

手元に置きたいからって言っても、お姉ちゃんは束縛したりはしないけどね。

「……………かぞく?」

「そう、家族。きつと、お姉ちゃんも言うだろうけどあたしからも言うよ」

それは、お姉ちゃんが以前にあたしに言った事と同じ。

「りこりん達と家族にならない?」

しばらくの静寂。

隣に座ってる子は無反応。

言つててなんだけど、これ思ったよりも恥ずいんだけど……

ちよちよつと、りこりんには厳しいよ……こう言う雰囲気。

「……………かぞく」

「うん?」

「……私、分からない」

分からない、か。

いきなり家族になろうって言われてもさすがの人工天才でも戸惑ったりするのかな？

「だけど——」

「……………」

「あそこ、帰りたくない」

それは、どこの事を指すのかあたしにも分からない。

研究施設なのかそれとも国に帰りたくないのか……

だけど何となく分かる。

きつと、閉じ込められるのはもう嫌なんだろう。

「なら、決まりだね。……そうだっ！ 名前を考えないといけないね」

「……………なまえ？」

「女の子なのにならなくても数字の『6』じゃダメだよ。だからね、りこりんが考えてあ

げ・る♪」

——そう。

あたしからすれば、数字なんてただの記号だ。

個人を示すモノじゃない。

さつてと、名前どうしよっかな？

さすがにりこりんの趣味でアニメキャラから取ったりしたら、味気ないんだよね。

ここはやっぱり、単純だけど女の子らしい名前がいいね。

シンプル・イズ・ザ・ベスト。

それと、やっぱりロシア人だからロシア語の名前が良いだろうし。

うゝん、何が良いだろうな？

無難に花の名前とか？

花の名前……花の名前……

………。

思わず立ち上がってウロウロと歩きながら考えてみるけど、なかなか思いつかないな

。

実際はいっぱいあるんだけど……ロシア語の発音的に女の子らしくない。

そしてあたしの様子を彼女はじつ、と見てる。

うう………そんなに見つめられるとちよつと考えづらくなっちゃうよ。

しかし、髪も白いねー。

金髪なんだろうけど、ほとんど白か銀だよ。

……白？

白で、花の名前——閃ひらめいた！

「うん。決まったよ！ それであ、発表します」

「……………」

「名前はリリヤ！ ロシア語の百合でЛ^リИ^リЛ^リИ^リヤから取って、リリヤ」

良い名前だとは思うんだけど……………どうだろう？

りこりん、ニックネームはともかくとして本格的に名前付けるのは初めてなんだよ。

「……………」

……………。

あの……………何か反応は？

ここまで無反応だと、さすがに心配になってくるんだけど。

リアクション！ リアクション、プリーズ！

もしかして、って言うのも考えなくちやいけないんだけどっ!?

「……………リリヤ」

「うん。リリヤ……………ダメだったかな？」

フルフル、と首を小さく振る。

「私……………名前、リリヤ」

「……………」

私の心の中で正直に言おう。

——嬉しい。

いやー、よかったよかった。

気に入って貰えなかつたらどうしようかと思つたよ。

それに何だか、妹を持った気分。

だけど、身長はあたしよりも高いんだよね。

となるとやっぱり年上なのかな？

「そう言えば、年齢は分かる？」

「……………14」

「——えっ!？」

思わず変な声が出た。

まさかの理子より年下……お姉ちゃんより少し背が低いくらいなのに。

まさかの年下……

これはこれでショックなんだけど。

だつてスタイル的に理子が勝つてるの胸だけで、あと勝つてるの年齢だけじゃん……

「年下かー。絶対にあたしの方が妹だと見られるパターンだ」

「……………年上？」

「そうですよー。りこりんは1つ上のお姉ちゃんですー」

「……………」

あたしは萌えて言う、ロリ巨乳だけど……

正直に言えばもう少し身長が欲しかったんだよ。

お母さまみたいなわがままボデイになりたかったんだよ。

なのに、身長は144ぐらい。

お姉ちゃんから聞いたオルメスの身長とあんまり変わんねーじゃねーか。

うん……妬むのはやめよう。

虚しくなる。

「……………リコ、お姉ちゃん？」

「うん？」

「リコ……リリヤのお姉ちゃん？」

——ぐふっ!?

思わず、リリヤの仕草に悶えそうになる。

ちよつと……待とうか。

無表情ながらも破壊力あり過ぎだよ！

小動物みたいに小首を傾げたりしてさ。

あたしが年上なんだからお姉ちゃんなのは分かるけど、いきなり過ぎるよ！

「あー……うん。お姉ちゃんだよ」

「……………リコお姉ちゃん」

やめて、眩くの止めて。

変な気分になってくる。

調子も崩れるし、キヤラも不安定になるから。

「と、取りあえず。お姉ちゃん——ジルの所に行こうか」

これ以上は居た堪れなくなつて、話題を変える。

色々と報告も兼ねてお姉ちゃんの所へ行こうと思つたけど、リリヤは動かない。

原因は何となく分かつてる。

あー、お姉ちゃんに恐怖心を抱いてるから会いたくないんだらうなー。

「大丈夫だよ！ お姉ちゃんはまだもう手を出さないって。ほら、りこりん——理子お姉ちゃんがついてるから」

コクリと頷いた後、彼女は服を着て確かな足取りで歩いてくる。

お姉ちゃんの事はどうしたものかなー、と思ひながらあたしはリリヤと一緒に部屋を出た。

るのは分かつてるヨ。そして、カギは——』

「なるほどねー。あたしが話した人工天才の子か」

よくある防犯対策って感じ。

あの子じゃなかったら反応しない。

指紋認証みたいなものって事だね。

『そう言う事になるヨ』

「つまり、整備しようにも出来ないって訳か……」

『無理にやろうとしたら、ドカン！ 吹っ飛ぶ可能性もあるネ』

「秘密保持に爆破処分はよくあるわねー」

『鎧も同じで何も反応しないヨ』

「はいはい、報告ありがとうね。今度、人工天才の子を連れて行く事にするわ。行く時に

は事前に連絡はしておくから……あと、猴コウにもよろしく」

『先に言っておくと交通費は払わないヨ』

「へー……そんなこと言うんだ。一番上のココから殺して行こうかなー」

『……笑えないから、やめて欲しいネ』

「大丈夫、冗談よ。あたしはそんなに短気じゃないもの。自分で払って行くわよ。それ

じゃ、回頭見またね」

そこで電話を切り、変声術もやめる。
やっぱり、冬のダラムは冷えるね。

持ってきたリングゴ酒のビンをワイングラスに注いで飲む。

お酒も良い感じに冷えてる。

まあ、私はそんなに飲まないんだけどね。

「お姉ちゃん」

「どうしたのかな、理子？」

後ろを振り返らなくても分かる。

足音は二人分あったからね。

取りあえず、話は終わったっつぽいね。

「それで、どんな感じかな？」

振り返って、ワイングラスとリングゴ酒のビンを片手に持つ。

理子を見た後に人工天才の子を見ると、未だに警戒されてるのかこつちをじつ、と見
てる。

下手にビクビクされるよりはいいけど、なんだかなあ。

「ああ、うん。取りあえずはこの子の名前をね、決めて上げたの」

「おー、どんな名前？」

「リリヤ」

リリヤか、うん。

なるほどね。

「ロシア語の百合から取ったでしょ？」

「やっぱり分かつちやう？」

「まあね」

何となくだけど、すぐに分かったよ。

「いい名前だと思うよ？　それで、私が名前を呼んでも大丈夫かな？」

一応、そこら辺の許可は取っておかないとね。

いきなり名前を呼んでも気分悪くするのが普通だし、私なんか殺そうとした訳だからね。

命を狙ってきた相手に名前を許すなんて、抵抗するだろうし。

「えつと……リリヤ？」

「……………」

理子が心配そうに隣にいる人工天才を見るけど、彼女は私を静かに見たまま。別に名前を許そうが許すまいが、どうしようとして訳じやないんだけどね。ただ、許してくれればいいなく程度の気持ちだし。

心の距離を焦って縮める必要はない。

第一印象が最悪だったのは理子の時も同じだったからね。

「……………あなた、怖い人」

「まあ、否定しないよ」

「……………リコお姉ちゃん。優しい人」

「うん、そうだね」

「……………分からない」

まるで途切れ途切れの映像みたいに喋るね。

ロシア語じゃなかったら文章にならないのかな？

精神年齢も若干低そうだし。

それと、さっきの会話から内容を予想すると。

「つまり、私は怖い人なのに理子みたいな優しい人がなんで懐いてるか分からない、って事でいいのかな？」

「え？ 今の会話そう言う事だったの!？」

理子はさすがに分からなかったのか、戸惑って私と彼女を交互に見る。

そして、人工天才の子はコクリと頷く。

「合ってるんだ……………」

「ほとんど直感だけどね。それで、どう言う感じの結論かな？」

「多分……あなたも、優しい。だから……名前、許す」

随分と安直な予想だけど、それだけじゃあなさそうだ。

言葉数が少ないせいで、全部伝えられないだけか。

頭の回転は悪くない筈なんだよ。

まあ、いいや。

取りあえずは、少しは警戒心を下げてくれたみたいだね。

それだけでも充分だよ。

「よろしく、リリヤ。それで早速なんだけどね……問題として、リリヤの役割をどうしようかなって思ってたね」

「役割って？」

「ほら、お姉ちゃんの所に暮らす上でどうするかって言う事だよ。イ・ウーに連れてつてもいいけど、色々と面倒なんだよね」

主に金一とか、ヒルダとか……あとジャンヌも最近は微妙に動いてるみたいだし。

それにリリヤの装備だと、イ・ウーが物理的に内部崩壊する可能性はあるね。

どう考えても屋外で使う装備しかない。

「あ、タダ飯食らいとかジエームズがうるさそうだね」

「でしょ？ それに何かしらの役割はあった方が良いんだよ。ただ、問題として思いつかなくてね」

「じゃあ、メイドとかどう？」

「メイド……か、良いかもね」

使用人って言ってもジェームズしかないし。

そもそもジェームズは、使用人と言うよりはお姉ちゃんの用心棒だからね。

実際の問題として屋敷の管理は一人じゃ、手に余る。

ジキル博士も自分の部屋で手いっぱいだろうし。

「でも、そうなると自然に理子が教えるって事になるんだけど」

「お姉ちゃんは忙しいもんね。大丈夫、りこりんが責任を持って教えるよー」

なら良いんだけどね。

ま、話す事は一通り済んだって感じかな？

「それじゃあ、新年を祝いに行こうか。料理はもう出来てるし」

「……その、お姉ちゃん。もう少し話す事があるんだけど……ごめん、リリヤ。少し、外してくれるかな？」

理子のお願いにリリヤは素直に頷く。

あの短時間で随分とまあ、理子は近づいたもんだね。

懐なついてる……とまでは行かないけど、ある程度の信頼と言うか、心を開いてるっぽい。

「やっぱり、第一印象が最悪だと時間が掛かるか……理子の時もそうだったし」

「いつの話を掘り出してるの……」

「いつだっけ？ 確か、私の理性が髪の毛よりも細かった時だったとは思うんだけど」

「……そんな時期もあったね。3年経って、ようやくだっけ？」

「そうそう。それから、色々あつて理子を家族にしようとしたんだよね」

とまあ、懐かしむのもこれくらいにして。

「それで……本題は？」

「そろそろ、オルメスの母親である神崎 かなえに冤罪を着せる」

理子が真剣な口調で言うてる。

もうすぐか……ようやく、お父さんが待ち望んでた本当のスタートラインに立つって

ことだね。

「だから、先回りのために東京武偵高に行く。そのための準備はもう整ってる」

「別に、あのホームズは放っておいても良いと思うんだけどね」

それに、今の理子ならあの4世程度の武偵は余裕で勝てる。

ただ、問題としてはパートナーがいる状態の4世に勝つ事が理子にとっての目的みた

い。

何が目的にしろ、理子の好きにやらせよう。

「くふつ、個人的に因縁に決着を着けたいだけだよ」

「そっか。お父さんから私は手出し無用って言われてるから、アリア自身に危害を加える事は出来ないけどね。理子は別にそうでもないから、どうせなら殺しちやつても良いんだよ?」

「元よりそのつもりだよ」

不敵に笑う理子。

その表情には、独特の獰猛さが見える。

そう言えば……武偵としてかれこれ1年近く潜入してる事になるんだよね。

キンジといるのが楽しくてすっかり忘れてたけど、目的とか聞いてないんだった。

お父さんの言った事としてはキンジと組むだけで達成されてる気がするんだけど。

でも、それ以上の事は聞いてなかったな。

あと、理子にも私が武偵に潜入してる事は話してなかった。

どうしよう、話すべきかな?

その方が色々と都合は良いんだけど、逆にリスクもあるんだよね。

武偵の教師たちが私と理子との繋がりが深い事が分かったら、何かしらのアプローチを仕掛けてくるだろうし。

「知らなかったら、知らなかったらで誤解とか招きそうだ。

あれ？ そう言えば、以前に理子に『恋』ってなんなのか相談した時にキンジの事を話したから。

私が武偵に潜入してることぐらい予想できてるんじゃないかな？

う〜ん……まあ、いいや。

取りあえず、教えよう。

何かあれば臨機応変で行こう。

「理子も東京武偵高に来るのか〜」

「……『も』?」

「そう、私もって事だよ」

「それって、お姉ちゃんも東京武偵高に来るって言うことだよな?」

「そうなるね〜。私の場合は黙ってたけど、1年ほど前から武偵としてお父さんの頼みで潜入してたんだ。と言うか、随分前に恋についての相談をした時に分かっていると思ってたんだけどね」

「あ……」

ほかんとした表情で、理子はしまったと言う顔をしている。

どうやら気付いてなかったみたいだね。

「そうだよ。カナちゃんの弟が武偵って言うのは、聞いてた話だったのに……気付いてなかった」

「理子も抜けてるね」

「う”っ……」

「この調子だと、肝心な所でボロが出そうだよ。私も武偵高に行く事を理子に話したのは間違いだったかな？」

「……言葉が胸に刺さる」

「あゝあ、お姉ちゃんは理子との学校生活を楽しみにしてたのにな。残念だな。武偵にいる時の私の名前を教えるのやめようかな」

教えなくても分かりそうなものだけど、ワザとらしく言ってみる。

「……………うう」

「うん、やつぱり色々と危険だからね。教えるのはやめにしておくよ」

「……そう、だよね。……うん」

「なくに？ 泣いてるの？」

「りこりんはそんなに泣き虫じゃないよーだ」

とか言つて、「いーっ」と言いながら舌を出してるけど若干涙目だよ。

説得力ないな。

しかも、拗^すねてるのかクルリと背中を向ける。

私はその背中に飛び移って、後ろから抱きかかえるようにして腕を回す。

「嘘です。ちゃんと教えるよ。相変わらず、弄り甲斐があると云うかイタズラ心が刺
激されるね、理子は」

「……ドS」

「教えて欲しくない？」

「……欲しい」

うん。素直で良いね。

人間素直が一番。

これから、新しい夜明けが来る――

お父さんの寿命まで約1年と半年。

第2章：東京武偵高校

14：入学試験

本日も晴天なり。

とうとう来た武偵高の入学試験なのだが――

「くそう、寝坊したっ！」

俺――遠山 キンジは、早速寝坊していた。

慌てて制服へと着替え、現在進行形で駅に向かって走っている。

なんで肝心な時に誰も起こしてくれないんだよ!!

いや、まあ俺の自業自得なんだが……それでも大事な日くらいに協力してくれても良
いだろうに。

気付けば、爺ちゃんと婆ちゃんはいないし!

走ってる最中に俺のズボンの携帯が着信する。

誰だよこんな時に……

走りながら通話を可能にして出る。

「おっおっおっ」

『やー、キンジ。おはよう』

「ああ、おはよう霧。今はそれどころじゃないけどなっ！」

相手は俺のパートナーからだった。

『もしかして、寝坊なんてしちゃったりして』

「その通りだよ！ 次の電車に乗らないと間に合わねえよ」

『そこで左手に注目』

……左？ 左って言っても車が走ってるだけだぞ。

そう思つて、左を見てみると――

『やっほー』

車を運転してる霧がいた。

窓から首と肩に携帯を挟んで、少しだけこちらを見ている。

そして、交差点を右に曲がって行く。

渡りに船だな。

俺も横断歩道を渡つて、交差点を右に曲がる。

そして、ウインカーを出して停まつてる霧の車へと走る。

その勢いのまま、ぶつけないように助手席の扉を開けて座った。

「慌ただしいね〜」

「放っておいてくれ……」

俺がベルトを締めた事を確認した霧は、車を発進させる。

「はあ、全く。どうなる事かと思った」

「受験の日に寝坊なんて……余裕なんだねキンジは」

「嫌味を言うのはやめてくれ」

「あはは、ゴメンゴメン。それで、なんで私が車を持つてるか気になってたりする？」

「気にならないって言えば嘘になる」

お前が車に乗ってるのを見て驚いたが……突っ込んでる暇はなかったからな。

大体、これってスバルのレガシイB4だぞ。

確か日本でも要人警護に採用されてる車だったはず。

しかも、充分に高級車の分類だ。

新車だと普通に2、300万はする。

「そろそろ個人的な移動手段が欲しくてね。便利でしょ？」

「まあ、確かに。って言うか、金はどうしたんだ？」

「割と稼いでたんだよ？ キンジと組んでるとき以外でも、色々と任務を請け負ってた

し」

なるほどな……強襲科アサルトでAランク相当のクエスト。

中学生とは言え、それなりの報酬は出るだろうな。

「運転免許もいつの間に取ったんだよ……」

「新年明けて割とすぐに教習を受けたんだよね。一応、まだ中学生ではあるけれど……卒業が確定してるからそれを証明する物を持って武偵専門の運転教習所に行ってきたら、あっさりと教習させて貰えたよ。その代わりに3週間、みっちりどだったけど」

確かに武偵は中学卒業の時点で運転免許は取れる。

犯人は追えば、逃げる。

そして、犯人が何らかの移動手段を用いた場合にはこちらも追跡手段が必要な訳だが……その際に、例えば車が運転できなくて犯人を取り逃がしたなんて目も当てられないからな。

増援を待つてる内に逃げられても、困る。

そう言う事を懸念して武偵では、武偵高に進む場合、中学卒業の時点で免許が取る事が出来る。

卒業が確定してるなら霧みたいな手段でも良いっぽいな。

ただ……早めに取れる代わりに交通ルールを守らなければ武偵三倍刑だけだな。

「俺も、武偵高に行く前に取らないとな……」

「だとしたら春休みだね」

「そうだな」

そこで話は途切れる。

……しかし、運転上手いな霧。

運転免許を取ったばかりとは思えないな。

まあ、こいつは何でもそつなくこなしてる感じが前からあったから、大袈裟に驚く事でもないが。

「そろそろレインボーブリッジだね。見えて来たよ」

「あれが、東京武偵高か……」

霧の方の窓から僅かに見える、レインボーブリッジの南側に浮かぶ大きな島。

話聞く学園島か……

元々は滑走路を造るためだったらしいが、計画が頓挫とんざして代わりに土地として安価で売却されたらしい。

そこに日本の武偵協会は着目して、ここに武偵高を建てたと言う事だ。

貰ったパンフレットにはそう書いてあった。

「お台場からしか車ではいけないんだよね」

「ま、充分に間に合うだろ。電車とモノレールで行くよりは余裕がある」

逆に霧がいなかったら、もっと余裕がなかっただろうけどな。

ほんと、パートナーさまさまだな。

と言うか、また借りを作つてると思うと溜息しか出なくなる。

試験前なのに気分が沈むぜ。

なんて考えてると、どうやら武偵高に着いたようだ。

「はい、到着」

「悪いな。送つて貰つて」

「どんだん借りが積もつて行くね」

……人が気にしてる所を的確に突いてきやがる。

確かに返済しても積み重なって行く借金みたいに作りまくつてるけどな。

凶星なので黙秘権を行使しつつ車から降りると、遠くにいる他の受験生がこちらを見
てくる。

いや、まあ。この年齢でこんな車に乗つてたら普通に注目されるだろう。

どう考えても、十代で持つような車じゃない。

「まだ余裕があるけど、それでもちよつと危ない感じだから急いだ方が良くもね」

「そうだな」

霧の言う事に同意しつつ俺達は早歩きで試験会場へと向かう。

そして、受付で受験票を提示した後に決められた教室へと向かう。

俺と同じ強襲科アサルトを志望している霧とはもちろん同じ教室な訳だが——

「おい、あいつ等って……」「ああ……神奈川武偵付属中学ウで聞いたコンビだ」「アレって、ウワサのプラチナコンビじゃない？」

教室に向かう途中の廊下で、他の生徒たちが俺達の話をしてる。

ウワサ……こんな所まで広がってるのかよ。

多分、俺達と同じ神奈川武偵付属中学にいた奴が広めたんだろうな。

『武偵』は武装探偵を略した言葉なのは分かっている事だが、探偵と言う事は情報通でなければならぬ。

だから武偵にいる奴は大体、情報を入手するのが早い。

ウワサが広まっていること自体は不思議な事じゃないんだが——出来れば広まって欲しくなかった。

神奈川武偵付属中学ウのプラチナコンビ。

それはもちろん俺と霧の事を指す。

誰だよ、こんな中二臭いコンビ名を考えたの……

白野 霧の『白』と、遠山 キンジ——名前を漢字で書くと金次だから——の『金』を合わせて『白金』つまりはプラチナだ。

無理矢理過ぎるだろ。

せめて名前の最初で合わせろよ。

と、俺が心の中で突っ込みを入れていると――

「だ、誰か助けてください！ 変な人に追われて――」

誰かが俺の左から声を上げて走ってくる。

それを確認した時には既に、俺や霧と同じ武偵の制服を着た女の子は間近に迫っていた。

しかも俺に気づいてないのか、そのままの勢いで迫ってくる。

これは――避けられない！

そう思った時には、ドスン！ と、派手にぶつかって倒れた。

そして、気付けば俺は彼女を組み敷いてる形になっていた。

――マズイ。

俺の下にいる彼女は、その……かなり扇情的だった。

めくり上がったスカートによって現れた健康的な太もも、下着は見えてないものそれでもかなり危ない。

体のプロポーションもヤバい。

まさしく、ボン、キュッ、ボンだ。

顔は端正で、大和撫子の典型と言っているいいほどだ。

髪も日本人らしい黒髪の長髪で、地面に倒れているせいで広がっている。待て、この子は知ってるぞ……この顔。

——まさか、白雪っ!?

俺がその事を自覚した瞬間に、体の芯から熱くなるのを感じる。冗談じゃないぞ。

だけど、これはどう足掻いてもアウトだ。

……………。

ふう……試験に受かる落ちるの前にとんでもない状況に落ちてしまったよ。

それに困ったものだね、白雪も。

危なっかしいのは昔から変わってないよ。

◆ ◆ ◆

いやー、いきなり隣で面白い事になってるね。

突然に女の子が飛び出したかと思うと、キンジにぶつかって一緒に纏もつれて倒れて行つたからね。

おまけにキンジはHSSになっちゃうし。

そして、キンジの下にいる子は知ってる。

——星伽ほしぎ 白雪。

緋々色金を護りし一族。

まさかこんな所で出会うなんてね。

「おいおい、なんだ？ 俺らの他に先客がいるみたいじゃねえか？」

ヘラヘラとした口調で、さつき星伽の巫女が飛び出してきた通路の方から三人組の男性が現れる。

アフロと、サングラスと、金髪の男性。

どう考えても試験を受ける格好じゃないよね、それって。

また分かりやすいぐらいに、つまらない人たちが現れたね。

どうせ、ナンパ目的で星伽の巫女を追いまわしてたっただけでしょ。

こう言う手合いは、やる事がすぐに予想できるんだよね。

だから、つまらない。

もつとね……予想外の行動とかしてくれないと、観察のし甲斐も無いんだよね。

「あの……違うんです。この人はたまたまぶつかっただけで、何の関係も無いんです！」

弁明してる星伽の巫女だけど、もう遅いよ。

それにこのままの方がきつと面白くなる。

「なあ……すまねえけど、その姉ちゃんは合格祈願として俺らと遊ぶ予定なんだよ」

キンジの肩に金髪は無造作に掴んで、話しかける。

「なに、俺らは寛容だから後でお前にも譲ってやる——」

——ガスッ!

そう言った瞬間に、キンジの右肘が金髪の頬にクリーンヒット。

そのまま尻餅をついて倒れる。

おゝ、派手にやるねえ。

「ハ、コイツっ!?!」

アフロとサンングラスも反応して得物を構える。

そして、サンングラスはキンジに向かってドスを持って、突っ込む。

防弾制服を着てるから怪我はしないだろうけど、突ってるから痛いだろうね。

サンングラスは肩を突くような動作で迫りくる。

キンジは振り返ると同時にサンングラスに駆けだして、ドスを構えてるサンングラスの右

手を左手で掴む。

「なにっ!?!」

驚いてる時点で遅いよ……

そのまま勢いよく引き寄せたかと思うと、右肘で鳩尾を突き、続いて裏拳で右の脇を

殴打する。

そして、最後にサングラスの腰のベルトを掴んだかと思うと背負い投げ。そのまま背中から床にこんにちは、つと。

「グハッ!!」

サングラスの男も脱落と。

最後だけ受け身は取れてたけど……最初の連打でアウトだね、あれは。

私もちよーつと、お手伝いしようかな？

そう思つて棒を構えてるアフロに目を向け、私は駆けだす。

「お、お前……なんてことを——」

頭に血が上つて、キンジしか見えてないのか走ってくる私には無関心。

キンジの隣を走り抜けた後に、ようやくアフロは私の存在に気付く。

「な、なんだ!?!」

驚きながらも、私に向かつて棒を突き出してくる。

それをクルリと一回転して、躲かわしながらの回し蹴りをアフロのわき腹に決める。

怯んだ所で私の左側にある棒を掴んで、回し蹴りを決めた右足でアフロの腹を蹴る。

すると、見事に相手の獲物が取れた。

ぶおん! と、聞こえるぐらいの速度で奪い取った棒をアフロの首元に突きつける。

「ん……どうする? 私、個人としては指の一本や二本を折って筆記試験や実戦試験

を受けられなくしても良いんだけど？」

にっこり、笑顔で私はそう告げる。

対して相手は冷や汗、だらだら。

「……霧。女の子がそう言う野蠻な事はしちやいけないよ」

キンジが私を諭すようにそう言つて来る。

まあ、自業自得つて事でやつても問題にはならないだろうけど、やめておくよ。

悪印象は与えたくないからね。

「はいはいつと……うん。仲間を連れてきつきと帰つて貰えるかな？」

そう告げると、アフロはぶんぶんと首を縦に振つて、伸びてる二人を引き摺りながら

去つて行つた。

キンジつてば目立ちたくないとか言つておきながら、結局は注目の的になるよね。

それにこんな廊下で乱闘したら、普通に人だかりも出来る。

棒を適当に立て掛けて、キンジの方へと歩く。

「あの……ありがとうございます。突然ぶつかった上に、助けていただいて」

「はは、気にする事はないよ。幼馴染みだろ？」

「——え？ もしかして、キンちゃん？」

「白雪は他に俺が誰に見えるんだい？」

相変わらずのキザな喋り方で、キンジは言う。
なるほどね……幼馴染おさななじ。

遠山家と星伽家の関係は多少なりとも知ってるけど、この二人は幼少のころからお互いを知ってるのか……

それは、知らなかったな。

帰り道で、そこら辺の事もさりげなく聞いておこう。

「キンちゃん、キンちゃああああああん!! 逢いたかったよ!!」

感動の対面なのか……星伽の巫女は声を上げてキンジに抱きつく。

まるで、安っぽいドラマのワンシーンだね。

「全く……東京こっちに来るのは分かっていたけど、こんな所で出会うとはね。それに、危なっかしいのも昔から変わってないね」

「ご、ごめんね……キンちゃんに迷惑かけちゃって。……その、後で体でお詫びしますっ!!」

……Wowわーお.

凄い、大胆な発言だね。

さすがに私でもその言葉の意味ぐらい分かる。

おまけに彼女がキンジにどういった感情を持つてるかも読めた。

「さつきも言ったけど、幼馴染みだから気にする事はないよ。それに、お互い試験時間も近づいてる。また、後でゆっくり話そう」

と、キンジが言いながら微笑むと、星伽の巫女は顔を赤らめて「夢じゃない……キンちゃん、目の前で——」とか何とか言ってる。

あーあ、分かりやすいぐらいに重症だね。

こう言う人って、嫉妬深いのが多いんだよね。

なんて考えてるとキンジは立ち上がり、最後に星伽の巫女にウインクをする。

その時の彼女の様子はまさしく放心状態。

試験前だつて言うのに、余裕だね。

私も余裕だけど。

「行こうか、霧」

「そうだね」

キンジの隣に並ぶ。

そして、集まって来た人たちをかき分けて、指定された教室へと向かう。

まあ、キンジに関しては後で思う存分に弄らして貰おう。

「解答、やめいっ！」

筆記試験が終了。

試験官である蘭豹らんびょうと言う女性の先生の掛け声が、教室に木霊こだまする。

さすがはプロだね。

私が今まで殺してきたか、逃げてきた武偵みたいな雰囲気纏まとってるよ。

ま、あんな程度じゃ私は捕まらないけどね。

考かんえてる内に解答用紙が集められて行く。

そして、解答用紙が全て集まった事を確認して次の説明に入る。

「次は、実戦試験や。詳しい説明を今からするから、耳の穴みみかつぽじって聞け！」

そんだけ大声なら聞こえるよ……

「試験の内容は『バトルロイヤル』！ 自分以外の受験生を全員捕縛、戦闘不能にすればいいシンプルな内容や」

教室が突然に暗くなつたかと思うと蘭豹の頭上から、スクリーンが現れる。

「今スクリーンに映つとるのが、試験場所や。この建物は東京武偵高が管理しとる14階建ての廃屋。お前らはこの建物の中で潰しあえて事や」

最後の蘭豹の一言に他の生徒たちは少しざわつく。

随分と歯さねに衣きぬを着せない言い方するんだね。

まあ、分かりやすくして良いけど。

「ちなみに協力したりするのは無しや。そんな、甘っちょろいことしようとした奴はウチが背中から撃ち抜いたる」

武偵中学にいた人物でも少し苦笑いするような言い方だね。

簡単に言えば、ようは個人の純粋な戦闘能力を見るのと……武偵中学から来た者にとつては復習つて言うところかな？

協力は無しでも漁夫の利は狙っても大丈夫そう。

「時間制限は無し。弾薬は支給される非殺傷弾ゴムスタンを使用すること、装備は爆発物などの殺傷武器でなければあとは何を使ってもよし！ 説明は以上や……何か質問は？」

罨もOKと……質問と言えば――

「はい。質問でーす」

「お前は、えーと。白野 霧か……なんや？」

「積極的に捕縛せずに逃げ続けるのはアリですか？」

「逃げるなどは言わん。やけど、あまり度が過ぎるようなら撃ち殺す」

「分かりました」

つまり、最後の二人になるまで逃げ続けるのは無しと……

あの先生は、殺しはさすがにしないだろうけど確実に撃つね。

「他に質問は？ なかったら、はよ行け！」

その大声に誰もが怯む。

私は怯んだ演技だけ……

全員が蘭豹に気圧されるようにして、そそくさと次の試験場所へと移動する。

その時にキンジをチラリと見るけど……まだ、H S S っぽいね。

この様子だと、試験会場はキンジの独壇場になる……と。

キンジとは組み手を何回もしてるから、大体の行動は読めてる。

だけど、H S S 状態だと勝手が違うんだよ。

……これも金一との経験だけだね。

うくん、キンジのH S S 状態は何度か見たけど……その状態のキンジと戦うのは初めてだね。

取りあえず、怪しまれない程度に実力を隠しつつ——本気でやってみようかな？

試験開始から10分が既に経過した。

まあ、自分以外が敵なんだからお互いにつぶし合って減って行くのが早いって言うのは分かるんだけど——

「うう……」

「なんなのよ、アイツ……」

私の眼下には他の武偵が呻き声を上げて倒れてたり、手を縛られたりしてる。

キンジつてば何人を捕縛、あるいは戦闘不能にしたんだか……

台風が通り過ぎた後みたいだよ。

私もそこそこは捕まえたりしてるんだけどね。

キンジには敵わないよ。

まあ、当たり前だけども。

しかし、随分と減っちゃったな。

銃撃を聞く辺り……もう、数えるぐらいしかいないんじゃない？

それと——足音ぐらいもう少し消せないのかな？

私は咄嗟に前を向いたまましやがむ。

パァン！

銃声がしたかと思うと、私の頭上を弾丸が通る音がする。

そして、しやがむと同時に後ろに閃光手榴弾フラッシュグレネードを投げる。

「なっ!？」

背後から驚きの声。

それが聞こえたと同時に、私はしやがんだまま勢いよくグロックを抜きながら後ろを振り返る。

残念♪ その閃光手榴弾はピンを抜いてないよ。

相手は閃光が来ると思ってたのか腕で目隠しをしようとしてる。

パパパパン!!

こんなチャンスを見逃す訳も無く、私は連射する。

「ぐあッ!!」

全弾、体に命中してるけど男子生徒は倒れない。

タフだね。

まあ、”これ”で沈むけど——

ドオンッ!

「——ぐあッ!!」

M500により彼は背後に少し吹っ飛ぶ。

少し、吐血してるけど……まあゴム弾だから骨とかは折れてないよ——多分ね。

これで戦闘不能、もしくは捕縛したのは8人目。

投げた閃光手榴弾を回収してと。

……さつきよりも大分静かになってるね。

もしかして、もう終わった感じ?

さすがはHSSモードのキンジだ。

と言う事は——

残つてるのは、私とキンジだけか

ようやく、私が望んだ通りの展開だよ。

やっと、少し楽しくなってきたよ。

さつてと……キンジはどこにいるかな？

そう思いながら堂々と……は歩いてないけど、部屋をクリアリングしながらキンジを探す。

……………。

——見つけ。

目では確認してないけど、通路の先から足音が聞こえる。

静かに閃光手榴弾フラッシュグレネードのピンを抜いて——曲がり角に投げる！

そして私は左の部屋に静かに走って入り、柱を抜けながら反対側の入り口を指す。

キイイイイインツ!!

すぐに閃光と音が弾けて、私が向かおうとしてる入り口が明るくなつたかと思うと同時に人影が飛び出して来る。

その人影の腹に向かって掌底しょうていツ!

普通ならずで懐ふところに入ってくるから防げるはずはないんだけど——

パシッ！

防ぐよね。

「何となく分かっていたけど——やっぱり、君だったね」

相変わらずの喋り方で私と競り合ってるキンジ。

それはそうと……HSSがさつきより強くなってる？

もしかして、戦ってる内に女性に触ったりしたからかな？

「戦うのは無しって言う選択肢はないよ？」

「パートナーとは戦いたくはなかったが……出来れば大人しく捕まってくれないかな？」

「そう言うのは、一度くらい私に勝ってからにして欲しいね」

「それもそうだな。今のところ、連敗続きだから——なッ！」

キンジは私の右手を捻って、体を後ろに向かせようとする。

速いけど、HSSの時はあまり女性を傷つけないようにして無力化しようとするこ
ぐらい読めてるよ。

私は跳んで、手を捻られた方向に体を回転させる。

同時にグロックを左手で抜くけど、

パシン！

すぐにキンジに手で弾かれた。

着地と同時に、さらに距離を詰めて左手でキンジの襟を掴んで背負い投げの要領で――
投げる！

「うおっ！」

さすがのキンジもこれは驚いたのか、声を上げる。

そして、私の手を離して飛んでいったと思っただけ――

タンツ！ すた。

ぶつかる筈の柱に両足を着けたかと思うと、柱で体を捻って衝撃を殺して床に着地した。

――ドオン！

「危なッ!？」

キンジは声を上げながらも驚異的な身体能力で柱の影に隠れるように避けた。

なんだ、着地した瞬間に硬直したから狙い目だと思っただけ……

引き続き、残りのM500の弾を牽制としてキンジが隠れた柱の左右を撃ちながらグロツクを回収する。

それから私も柱の影に隠れる。

M500の弾が少なくなってきたな。

と、リロードしながら思う。

だけど弾が尽きる前に……負けるね、これは。

ああ、本気で相手出来ないのが妙にいじらしい。

柱の影からキンジのいる柱を覗いていると、

バツ！

キンジが勢いよく飛び出してくる。

パパパパパンツ！

そして、キンジは私に向かって撃ってくる。

あくまで牽制だろうけど、迂闊うかつに顔は出せない。

銃撃が止んで覗いてみるけど……まあ、隠れてるよね。

どこにいるかは、分かってる。

普通だったら分からないだろうけどね。

取りあえず、柱の影から出て辺りを警戒する演技をする。

分かっているんだったら最初からそこに行けばいいけど……さすがにそれは、察しがよ

過ぎる。

グロツクを構えて、ジリジリとキンジが隠れている柱に近づいて行く。

そしてキンジから見たら私のグロツクが柱から出てきた瞬間、HSSのキンジの蹴り

が私の銃を飛ばす。

驚くフリをして、M500を抜こうとした瞬間にキンジが私との距離を詰めようとする。

私は反対に距離を離そうとバックステップするけど、今の私はAランク武偵。キンジのHSSのスピードには敵わない。

私に肉薄したかと思うとキンジは私の左手を抑えて、足を引っかけ、バックステップの勢いを殺せないまま、私は背中から転倒する。

目の前にはキンジのベレッタ。

あつさりとした結果だけど、仕方がない。

「ハア……私の負けか」

加減してるとは言え、負けると言うのは気分が良くない。

ま、いいや。

楽しかったし。

どうせこの後はキンジを弄^{いじ}るから、それで憂^いさ晴らしをしよう。

『試験終了！』

最後に14階建ての廃屋に試験終了の放送が鳴り響くのだった。



試験が終わって、帰る頃には俺のヒステリアモードは完全に解けていた。

そして、霧が運転する車の中で絶賛自己嫌悪の最中だ。

……やっちゃったよ。

よりによって入学試験で、ヒステリアモードを。

「いい加減に諦めたらどうかかな？」

「いや、諦める諦めない以前の問題だぞ」

地元の女子を避ける意味でも東京武偵高に受験したって言うのに……ヒステリアモードの存在が少なからず知られてしまった。

しかも、俺の幼馴染み——星伽 白雪の存在を完全に忘れていた。

霧に会うよりも以前に時々、メールなどで交流はあったが……アイツは何故か知らんが1日に何十通も送ってくるからいちいち返すのが億劫おっくうになってくる。

「白雪がいるのが、予想外だった。東京に来るとメールで言っただのは分かってたけど……まさか、同じ入学試験会場だったとは」

「私は星伽さん知らないんだけどね」

「そう言えば、霧には話す機会があんまりなかったな」

メールするのって大体は学校の終わりだし、霧との会話で白雪の話を出す機会なんてなかったからな。

「まあ、白雪とはいわゆる幼馴染みって奴だよ」

「それは知ってる。キンジが彼女と話してる時に言ってたからね。幼馴染みって言うのもいくつの時から知ってる感じなのかな？」

「あゝ……4、5歳の時だな。あの頃は人見知りをよくする奴だったよ」

「んゝ成程ね。そう言えば、星伽ってき……青森にある、あの星伽神社？」

「何で知ってるんだ？」

「割と有名だよ。何でも、武装する巫女がいるって言う事だね」

「そりゃそうか……あそこはあそこで濃いからな。」

「知ってる人は知ってる。」

「それぐらい有名だからな、星伽神社は……」

「と言う事は、その巫女？」

「そうなるな」

「思えば、アイツも随分と成長したもんだ……体が。」

「しかし、あつさりとヒステリアモードになったね」

「思い出させるな……」

「あの時の光景を思い出すと、またヒスリそうだな。」

「白雪は俺が他に誰に見えるんだい？」

「頼むから許してくれ」

俺の黒歴史を霧は遠慮なく抉^{えぐ}ってくる。

コイツの前でヒステリアモードになると、こうして弄^{もよほ}ってくる。

そして、俺の反応を見て楽しんでるって言うのが最近は分かってきた。

「仕方ないな。勘弁して上げよう」

だけど霧はそんなにしつこくは言っていない。

こうして素直に言えば勘弁してくれる。

言ってみれば、悪ノリって奴だ。

こう言った感じの方が俺としては気楽だ。

「だけど、キンジ。あの様子だとSランク通知とか来るんじゃない?」

「俺が目を背けてた事をなんでお前は的確に言ってくるんだよ……」

「目を背けても結果は変わらないと思うよ?」

そりゃ、そうなんだが……

「あんまり、そう言う期待が掛かるような事は勘弁して欲しい」

「ま、期待とか関係なく気楽にやればいいんじゃないかな?」

「簡単に言うなよ」

俺がそう言うと、霧はくすりと笑う。

「それはそうと、お腹空いてない？」

「そうだな……試験終わりにどこか食べに行くか」

「もちろん、キンジの奢りだよね？」

お前って奴は……

と、思ったが霧に借りがありまくる俺にとっては何も言えない。

素直に頷くしかない。

「どっかの三ツ星レストランでも行こうかな？」

「すまん、さすがに無理だ」

この後、ファミレスに入る前と出た後で財布の厚みが違うのは……当然の結果だろう。

それでも借りはまだ積もっている……

15：春の異変

神奈川武偵付属中学の卒業式が終わって春休み。

久々のイ・ウーにて、私はお父さんと共にいる。

「それで、どうしたのお父さん？」

「今日、こうしてジル君を呼んだのはある任務を言うためだよ」

帰って早々に呼ばれたかと思えば……いつも通りか。

次は、どんな任務だろう。

また研究所を襲撃とか、イロカネ関連かな？

「今年の終わりに武偵である金一君を終わらせて貰いたい」

——おおっと、これは予想外だね、って……

「今年の終わりって、だいぶ先だよね？」

「そうだね。だけど、あらかじめ言っておく必要があるからこうやって呼んだのだよ」

何か訳ありっぽい。

しかし、半年以上も前に言うって相当だよな。

「これは非常に大きなターニングポイントだからね。それに、僕もその時には忙しくなる」

つまりは、お互いに連絡をとる暇がないほどに忙しくなると……

お父さんの言わんとしてる事は、分かった。

「金一を殺すのか……」

しみじみと私は呟く。

いや、楽しみだね。

大体、金一の行動は少しばかり怪しかったし……元々の目的はイ・ウーと言う組織を崩壊させることにあるって言う事が、最近に分かってきたんだよね。

お父さんは元から知ってそうだけど。

「ジル君。少し、誤解しているよ」

「ん？」

「武偵である金一君」を終わらせるのであって、金一君の人生を終わらせる訳ではないよ」

お父さんはパイプを啜えなおしてそう言う。

ああ……なるほどね。

「ようは遠山 金一特命武偵には殉職して貰うと……そう言う訳だね。お父さん」

「そう言う事だよ。それと、この任務はもう一人と協力してやって貰いたい
もう一人？」

誰だろうと思つて、お父さんに尋ねようとすると――

「あなたの隣に這い寄る怪盗、りこりん参・上!!」

いつも通りな理子が部屋に入ってきた。

お父さんの話のタイミングからして。

「協力者つて、そう言う事か……」

「ご明察だよ。ジル君」

「あれ？ お姉ちゃんもいたんだ……てつきり部屋にいるかと思つたのに」

意外そうな声を上げながらも理子は私の隣に並ぶ。

そして、私と理子がそろつた事に「うむ」と満足そうに頷く。

「さて、来たね。理子君の任務は、ここに載っている武偵を攫さらつてくると言うものだ。方

法は理子君に任せるよ」

お父さんは机の上にくつつかの紙を出す。

それを理子は手に取ってみる。

紙は4枚。

私も横から見たけど、色々とプロフィールが書かれてる。

そして、その中には金一の姿もある。

「カナちゃんも入ってるんだ。うくん、何か複雑だ」

少しばかり唸る理子。

確か、理子の上役は金一だったね。

「金一君に関してはジル君と協力して、事に当たってくれたまえ」

「あいつ！」

ビシツ、と理子は敬礼する。

「今日、呼んだ事としては以上だ。あとは好きに過ごしてくれて構わないよ」

「あいあいさー。お姉ちゃんは どうする？」

「私はダラムに帰ろうと思ってるけど……理子は？」

「リリヤが気になるから、あたしもダラムに行こうかなと思ってる」

なら、ちょうどいいや。

「それじゃあお父さん。またね」

「素敵な余暇を過ごしてくると良い」

お父さんの言葉を背に、理子と一緒に部屋を出る。

そして、やってきたダラム市。

既に車を屋敷の車庫にちょうど停めたところ。

「着いたよ」

「……みゆう」

助手席で寝てる理子は変な声を上げて、身をよじる。

………

——ずぼつ。

「わひゃうッ!？」

理子の微妙に開いてる胸の間に手を突っ込むと、そんな声を上げながら跳ね起きる。

「着いたよ」

「お、お姉ちゃん……そう言うイタズラはやめてよ」

「寝てる方が悪いってことで」

「むう……なんか最近、行動がオヤジ臭い気がする」

そう言われてもねえ。

私の嗜虐心が疼くんだから仕方ないよ。

お互いに車から降りて、私は変装を解く。

「やっぱり良い反応をするよね、理子は。わひゃうッ！　　って」

最後だけ、私は理子の声真似をする。

その瞬間に理子は頬を朱に染める。

「あー……」

そして、さすがにさっきの声は恥ずかしかったのか、うわ言のように声を上げる。

「忘れてください。お願いします」

最後に懇願。

仕方ない……これ以上イジるのは勘弁して上げよう。

車の鍵をロックして、駐車場から屋敷の中へと通じる扉を開ける。

「……お帰り」

すると——そこにはメイド服を着たリリヤがいた。

「はい、ただいま」

そして、私はそのまま通り過ぎようとする。

「お姉ちゃん、リリヤに関して感想ぐらい言つてよ」

不機嫌そうな声で、理子が後ろから言う。

感想つて言われても……ね。

私にファッションの感性はあんまりないんだよ。

人の服装を真似したりするだけで、自分でコーデイナーとかは苦手。

最近は少し、興味が出てきたけどね。

「月並みだけど、似合ってると思うよ?」

今のリリヤは正統派のメイドのような格好をしてる。

黒いドレスに白いフリルがついたエプロン、そしてホワイトブリム——レース付きのカチューシャを頭に着けている。

スカートの丈は膝たけまでしかないけど。

「心が籠もつてない気がするけど……まあ、良しとしよう」

そう言つて理子はリリヤの方へと行く。

「よし、久々に張り切つて色々教えちゃうぞ♪ リリヤ、行くよ」

コクリと頷くとリリヤは理子の後ろへとついて行く。

お姉ちゃんしてるなく理子も。

だけど、客観的に見たら理子の方が妹に見えるんだよね。

あと、大分リリヤも理子に心を開いてきたね。

本人は自覚なさそうだけど……

私の方はもうちよつと掛かりそうだな。

……私も、お姉ちゃんの所に挨拶に行こうか。

いくつか廊下を通り、お姉ちゃんがいる書斎の扉の前でノックをする。

「入りなさい」

と言われたので、入る。

「あれ？」

ソファーにちよこんと誰か座ってる。

あの、ウエーブの掛かった銀髪――

「ルミちゃん、来てたんだ」

「お邪魔してる」

私の方を見ながら、物静かな口調でそう言う。

幼い感じの顔に、ウエーブの掛かった銀髪。

少しタレ目で瞳はグレーの色をしている。

そして、隣に立てかけてあるのは長い銃ケース。

空港とかよく通したね。

「お姉ちゃん、ただいま」

「お帰りなさい」

お姉ちゃんは相変わらず机に座って、何かを書いている。

多分、数式を解いていると思うけど。

と言うか今日はいつも隣にいるジエームズいないんだ……

「それで、どういった用件で来たの？」

「少し相談に來ただけ」

私の質問にそれだけルミちゃんは答える。

そのために遠路はるばるフィンランドから來たんだ……

「あなたにお願いもあつてきた」

「あゝ、なるほどね」

ルミちゃんのお願いと言うと、彼女の家族の事だろうね。

「うん、わかつた。いつ行けばいいのかな？」

「1週間後」

「いいよ。それじゃあ、1週間後にね」

ルミちゃんは用件が済んだとばかりに、立ち上がる。

「もう帰るの？」

「用は済んだ」

さっぱりしてゐるね。

と、ルミちゃんが扉に手を掛けようとした瞬間に――

パリーン！

窓ガラスが割れる音がした。

この部屋にいる全員がお互いに顔を見合わせる。

「はあ……」

そして、お姉ちゃんは疲れたような声を上げる。

ダラムは割と田舎だからね。

その田舎に金持ちそうな屋敷。

狙われる理由は、ない訳じゃない。

追いついたり、捕まえたりするの面倒なんだよね。

殺してもバレない自信はあるけど……ここら辺の場所が怪しまれはするだろうから、

こう言う手合いは嫌なんだよ。

「ジル……捕まえるか、」 処分 してきてちょうだい」

「あれ？ 捕まえて適度に痛めつけて追いつ返すんじゃないの？」

「今日はいいのよ」

思わせぶりの発言だね、お姉ちゃん。

さすがに、分かんないな。

「協力する」

「いいの？」

ルミちゃんはある日立ちたくないんじゃないの？

目をつけられても知らないよ？

「今更、一人二人撃つても同じ」

そう言つて銃ケースを開けたかと思うと、そこにあるのはフィンランドのサコー社製、ボルトアクション狙撃銃であるTRG—22。

素早く弾倉マガジンと消音器サブレッサーを装着する。

……スコープは相変わらず取り付けないんだ。

「早くしないと逃げる」

そう急かさないでよルミちゃん。

あと、理子達が捕まえてそうな気もするけどね。

扉を開けて、ルミちゃんと一緒に部屋を出る。

——ドクン……。

扉を閉めたちようどその時に、私の血流が変化するのを感じる。

あく、なるほど。

お姉ちゃんの発言の意味が分かったよ。

キンジという時はあんまり兆候がなかったけど。

まさか、こんな所で”なっちゃん”なんてね。

「距離、170メートル。目の前の窓から見て11時の方向」

ちらつと人影が見えて、屋敷の中にあつた物を持つてるのが見えた。

その場所をルミちゃんに伝える。

「ゴメンだけど、脚を撃ち抜いてくれるかな？」

「分かった」

窓を開け放つて、ルミちゃんは言われた方向に既にボルトを引いてるTRGを構える
と――

バスン！

すぐに撃った。

構えて撃つまでに1秒未満。

「うあああああああー！！」

悲鳴が聞こえる辺り命中してるね。

「ありがと、それじゃあ行つてくるよ」

「終わったから私は帰る」

「改めて、1週間後にね」

それだけ言って、私はルミちゃんが撃った窓から飛び降りる。

この先は林……近所の家や町から大分離れてるから悲鳴を聞かれる事も無い。

ゆつくりと歩きながら近づいて行く。

土の上に血が僅かながらに線を引いてる。

やっぱり、悲鳴は女性の方が良いよね……

反応は男性の方が良いんだけどさ。

「ふふ、ハア……ハアハア」

任務以外で人を殺すなんて久しぶりだから、興奮してきた。息が荒くなるよ。

イイ——実にイイね。

こう言う風に楽しみたいんだよ。

さて、どこからメスを入れていこう——

と、私は緋色に輝くメスを取り出す。

◆ ◆ ◆

全く、この屋敷に盗みを働くなんて……バカな奴もいたもんだ。

ここにはジエームズもそうだけど——殺人鬼であるお姉ちゃんがいるって言うのに。

改めて考えると、この屋敷にいるのってホームズに因縁がある人が多いよね。

モリアーティとモラン、ジャック・ザ・リッパ、そしてリュパンのあたし。

それはそうとして、さっきの銃声からしてルミちゃんがいるんだろうな。

それでお姉ちゃんの姿が見えない辺り、既にOHANASHIかOSHIOKIに

行ってるんだろうね。

りこりんとしては、ちよつとお姉ちゃんの様子が気になつてゐるんだけど。ドが付くほどの天然なサデイスティックだから……そこら辺が心配。

ついつい、やり過ぎちやうんだよね。

つと、見えた。

「おね——」

「アハハ、良い臓器だね」

……………。

ゾワリと、あたしの背中が震える。

声を掛けるのは、当然に躊躇われた。

そして、あたしの声が聞こえてたのか頭を上げてこちらを向こうとする。

だけど、お姉ちゃんがこちらを向く前にあたしは反射的に近くの木の影に隠れた。

なに隠れてるんだよ、あたし！

お姉ちゃんが殺人鬼である事くらい承知だろうがッ!!

そう思つても、見る勇気がない。

こんなタイミングで見せつけられるとは思つてなかつた。

本来のお姉ちゃん——殺人鬼である本性を。

おかしいな……どっかで覚悟してたはずなのに……

——恐い。

心の奥からそう思う。

だけど、ダメ……お姉ちゃんは家族なんだ。

向き合わないといけない。

そう言い聞かせて、深呼吸。

……よし！

でも、まだ恐いからちよつと木の影から覗いて……アレ？

いない——

「見つけた♪」

ドスッ！

「——がはっ！」

腹に一発入ったと思った時には、あたしは仰向けに倒れさせられた。

そのまま組み敷かれる。

「覗きは良くないね〜」

「ちよつと……待って、お姉ちゃん！ あたしだって、理子だよ！」

「今日についてるよ。二人もバラせるなんてね」

おかしい——こんなに近いのにあたしを認識できてない!?

なんでツ!?

「あぐツ!」

お姉ちゃんの左手が伸びてあたしの首を絞める。

意識が——少しずつ遠くなる。

抵抗するけど、首に伸びてる手を引き剥がせない。

お姉ちゃんの顔を見ると……青紫だった瞳が、緋色に輝いてる。

「——あ、あ……おね……ちや……!」

「……………」

急に、首を絞めてた手が緩む。

「げほっ、ごほっ! ……?」

咳き込みながらお姉ちゃんを見てるとさっきとはまた別に様子がおかしい。

目を片方抑えたかと思うと、お姉ちゃんの瞳の色が元に戻って行く。

「あーうん……」

お姉ちゃんは私の上でそんな声を上げた。

「ごめんね。理子」

突然の謝罪。

——元に戻った?

「謝る前に……理子の上から降りて欲しいな」

「そうだったね」

静かに、あたしの上からお姉ちゃんは降りる。

そして、そのままペタリと座り込む。

「どうしたの？」

「何か、頭がクラクラする」

頭痛持ちの人みたいにお姉ちゃんは頭を抑える。

さっきの瞳の色が変わってた事と何か関係があるのかも……

「それよりも、理子は？ 大丈夫だったの？」

「うん。大丈夫だよ」

「大丈夫の割には、手が震えてるけど？」

……くそ、止まれよあたしの手。

誤解されるだろうが！

「全く、怖いなら素直に恐いって言えばいいのに」

出来る訳ない……言える訳がない。

そんなこと言ったら絶対に距離をおこうとするに決まってる。

「ま、怪我がないのなら良かったよ。自分でやってて手遅れになったかと思ったからね」

うんうんと、お姉ちゃんは満足そうに頷く。

「意識はあつたんだ……」

「半分ね。だけど自制があまり利かないから見境ないし、理性を引き戻すのも楽しやないからね」

それつて、かなり難しいことじゃない？

意識半分で、飛んでつた理性を無理矢理引き戻すなんて……

「それで、結局のところ私の事——怖い？」

「……何で、その話題に戻すかな」

「だって、恐怖心があつたらこれから武偵高で会うのに困るでしょ？」

そこら辺の事も案外、考えてたんだ。

やっぱりお姉ちゃんも頭の回転は悪くない。

まあ、そうじゃなかったら今頃捕まってるよね。

それと、お姉ちゃんはズルイよ。

分かつてて聞こうとするんだもん。

「怖いよ」

「やっぱり？」

「だけど、あんまりお姉ちゃんと離れたくない」

「正直でよろしいね。別に、無理なら離れてても構わないけどね。理子は泣き虫だから」
「最後関係ないよねっ!？」

こんな時でも人を茶化そうとするんだから。

ほんと……お姉ちゃんは家族には優しいよ。

「さてと、証拠隠滅しに行かないとね」

「はい！ りこりんもお手伝いしまーす！」

なんて、言ってみただけ……結果から言わせて貰うと吐いた。

DVDで見るのと違い過ぎる。

色々と形容しにくい。

頑張った結果、あたしの記憶にトラウマが一つ追加されたのだった。

16:1—A組

4月7日。

大体の高校は入学式があるころだろう。

それは、この東京武偵高校も例外ではない。

ここが俺の新しい学び舎か……

寮もあるし、日本の首都に存在する武偵高だけあって施設は充実してる。

俺のヒステリアモードを知っていた地元の女子もいない。

まさしく俺にとっては最高の環境だ。

ただ、注目される事は間違いないだろうけどな……

俺が入学式に東京武偵高に在ると言う事は、合格はした。

合格はしたが——

(なんでよりによってSランクに位置づけられてるんだよ……)

合否の通知が実家に送られて来た時に、俺は目を丸くした。

合格してたのは、素直に嬉しかった。

思わずガッツポーズをしたほどだ。

だが、他の文章を読み進めて行くうちに気付いた。

『強襲科 遠山 キンジ 入学時暫定ランク S』

と、書かれている事に。

この一文を見た時に、俺の喜びの笑顔は苦笑いに変わった。

いやある意味、名譽な事なだけだな……

これはヒステリアモード時の俺のランクであって、「素」の俺のランクではない。

……………はあ。

待て、遠山 キンジ……元々分かってた事だ。

入学試験の帰り道に、イタズラ好きな俺のパートナーが言つてただろう。

それと、俺自身も薄々に勘付いてた事だ。

ただ、希望的観測で現実逃避してただけ……

ああ、分かつてる。

今更ランクを下げられないし、結果は出てしまった。

神奈川武偵^カ付属^ナ中学^{チュ}以上に恐ろしそうな教員たちに、『ランクを下げてください』と、バカ
なお願いをしに行く訳にもいかない。

(腹をくぐるしかないか……)

そうだ、逆にポジティブに考えよう。

パートナーに相応しいランクになったと、そう考えるんだ。

「やつほい！」

——バシン！

そんな声が掛けられたと同時に、背中をはたかれた感触がする。

意外にいてえ!?

入學式早々にこんなことする奴は、一人しかいない。

「おい、霧。もうちよつと普通に挨拶できないのか？」

後ろを振り返ると、東京武偵高の制服に身を包んだ霧が立っていた。

「それって、武偵流の挨拶ってこと？　なら、後ろから今度は発砲すればいいのかな？」

「どんな、挨拶だよ！　武偵流って言うが、武偵でもしねえよ」

と言うか、そんな物騒な挨拶があつてたまるかと思うが……中学の頃に注意する前に

発砲と言うのはよくあつた。

警告や注意をする前に発砲。

……順序が逆過ぎる。

なので、背後からいきなり撃たれると言うのも否定できない上に案外あり得そうな

が武偵と言う組織だ。

「それよりも、校門の前でいつまで立ってるの？」

「いや、考え事してただけだ」

「考え事するのなら、講堂に入ってからにしようよ」

正論だな……

「なら、行くか」

「うん」

俺の言う事に笑顔で霧は同意しつつ、隣に並んで歩く。

この構図も、当たり前になつてきたな。

と、思いつつも講堂を目指す。

生徒がひしめき合う講堂に到着して名簿順に並んで座つてる訳だが……

まず、妙に目立つのが武偵徽章きしやうと同じ武偵を表すエンブレムが刺繍じしゅうされてる緞帳どんちやう——

厚地の織物で製したとばり——が、舞台の上に左右に大きく広げられてるんだが……

明らかに弾痕だんこんを縫つたような跡がある。

周りの壁も、弾痕を修復したような跡やそのまま穴が開いてる部分がある。

中学の時よりさらに物騒な感じになつてるんだが……

それと、3年生と思しき集団。

どう考えても雰囲気が違う。

そう、例えるならウチの兄さんみたいな……プロの風格を漂わせている。

2年生はその途中みたいな感じだ。

先輩は、どの人もヒステリアモードでない俺だと負けそうな感じがする。

たった2年であそこまで変わるもんなんだな……

そして、壁際で並んで見てる教師陣。

あれもヤバイ。

矢貫先生よりも恐ろしそうな人たちがゴロゴロいる。

黒い短髪で、煙草を啜えてる女性の先生なんか目が死んでるぞ。

ヤク中みたいな感じだ。

俺と同じ新入生は、ヤバイ雰囲気が分かっているのか緊張で肩を張っているのがよく分かる。

それと同時に分かるのが、武偵中学から来た奴と一般^{バンチユー}中学から来てる奴との違いだ。

前者は雰囲気の違いが分かっているが、後者は分かっている。

暢気にアクビなんかしやがって……一般中学と同じノリだとすぐに痛い目を見るぞ。

問題は俺のパートナーだが、一応ここからでも僅かに見える。

アイツも、緊張してるんだろうかと思っただが、そんな事は無かった。

いつも通りな雰囲気をしてる。

そうだよな。

こう言っちゃあなんだが、アイツが緊張してる所なんて想像できん。

と、軽く周りを観察して気を紛らわせてるが、もう一人気になる奴を発見した。

さつきから妙におろおろとしている女生徒が一人。

サラサラと音がしそうな、黒髪ロングが揺れている。

同じ新生入生だろうな……

と、思っただけで顔が僅かに見えた。

——白雪だった。

大丈夫なのか、あいつ……

本当にこの武偵高でやっていけるんだろうかと、心配になる。

(そう言えば、合格通知が来た時にやたらとメールを送ってきてたな)

それも何十通も……

内容も意味が分からない物だった。

最初は『おめでどう』から始まったやたらと長い文章だった。

その次には、

『今度、お赤飯持って行くね！ ついでに何か作ってあげようか？ なにが良いかな？』

って、これって何だかお嫁さん——』
とか、

『寮に遊びに行つていいかな？　ご、ごめん迷惑だよね！　キンちゃんとか久しぶりに話したいと思つて、だけど決して一緒に泊まつたりしたいな〜とか思つてないから！　そのまま、夜まで——』

とか、あつたが……全部は読んでない。

と言うか、読むのが怖かったので読まなかつた。

しかも返事をするとき倍以上に返つてくるので、適当に話を切り上げた。

できれば、そこら辺は変わつて欲しなかつたぞ……白雪。

などと色々考えてると、どうやら入学式が始まつたようだ。

誰かが舞台へと上がつて行く。

そして、マイクを手取る。

『はい、はい。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。私がこの東京武偵高校の校長をやっています。緑松　武尊たけると申します』

あれが……校長？

武偵高校を纏める人としては、パツとしないな。

例えるなら通勤電車にいそうなサラリーマンだ。

『どうやら今年も良い人材が本校に集まった事を喜ばしく思います。毎年そうですが、その中でも幾人か“特殊”な生徒がおられるようです。私としてもそう言った方がおられるのは個人的に嬉しく思います』

その特殊の中に俺が入ってない事を願うばかりだよ……

『話を変えまして、武偵と言うのは社会に未だに正しくは認識されていません。少々誤解してる節があるようです』

そりやそうだろうな。

探偵と言つても、やつてる事はドンパッチ撃ちまくつたり、街中でカーチェイスを繰り広げたりと……映画でもあるような感じだ。

”武装” とついるからには、ある意味正しいんだらうけどな。

『なので諸君らには、そう言つた誤解を無くして貰うためにも犯罪者の検挙に協力して貰いたい。最近では、ジャック・ザ・リッパーなどと言う過去の亡霊がいる様ですが、彼のような凶悪な犯罪者を取り締まる卵の、君たちの奮闘を願います。以上で入学式兼始業式を終わります』

——はやつ!?

つて、不思議でもないか。

武偵では来賓がいなければ、始業式や入学式と言つた事が短いのはよくあることだ。

要は、説教より訓練。

体で覚えるって言う事を体現してる組織だからな。

つか、始業式も兼ねてんのかよ……

神奈川武偵付属中学ではこんなに雑じやなかったぞ。

講堂から出て、自分のクラスを確認して教室に向かう。

クラスはⅠ—A組だった。

名簿の中に意外にも霧や白雪がいた。

そして、教室に向かっている道中で霧と合流したので、一緒に向かっている訳なんだが

……

「予想通りに注目の的だね、キンジ」

「何でこんなにもウワサが広まるのが早いんだ……」

講堂を出てからと言うものの、俺を見てヒソヒソと話す奴が目立つ。

特に、強襲科。

当たり前なんだけどな……

「この様子だと、教室でも同じことが起きそうだね」

「やめてくれ」

俺は兄さんに比べたらそこまで大層な人物じゃない。

ヒステリアモードなんて無かったら、俺もそこの武偵と変わらないんだからな。なんて、話したり考えてる内に1-Aの教室に辿り着いた。

教室の扉の前に立ち、溜息を吐く。

あゝ……何か、霧の言うとおりの事が起きそうな気がしてやまない。

と言うか霧。ニヤニヤするな。

どう考えても俺を先に行かせる気満々だろ。

「レディファーストって事で、先に行つてくれないか？」

と、霧に提案するが――

「貸し一つって事で、数えても良いのかな？」

すぐに目論見は、潰された。

チクシヨウ……そう言われると強く出れない。

こうなりやヤケだ。

俺も男……いつまでもヘタレてる訳にはいかない。

深呼吸をして、扉に手を掛け――開ける。

「キンちゃん！」

そして、目の前に飛び込んできたのは白雪だった。

そうだった、白雪も同じクラスだった……

さつき確認したばかりだろ、俺。

「その、お久しぶりです！」

と、白雪は俺に対して90度腰を曲げかねん勢いで頭を下げる。

「久しぶりってほどでもないだろ……昨日もメールしてただろうが」

「で、でも……私、星伽から出るのこれが初めてで。だから、キンちゃんに会えないと不安で」

その言葉を聞いた時、俺は頭を手で抑えた。

本当に大丈夫なのか？ コイツ。

……いや、箱入り娘だった白雪なんだ。

不安があるのも仕方ない。

しようがないが……しばらくはフォロワーしてやるか。

「うくん、なかなか面白そうな子だね」

そう言いながら霧が俺の後ろから顔をひよっこりと出す。

そして、白雪は霧を見ると急におどおどした感じになる。

お前人見知りする癖、まだ抜けてなかったのかよ……子供の時よりはマシになってるんだらうけど、根本は変わってないな。

「あの、その……初めまして」

「どうも、初めましてね。星伽 白雪さん」

おどおどとしながらも、白雪は挨拶はしつかりとする。

真面目な所も変わってないな。

「あれ？ 私の名前、何で知って——」

「ああ、俺が入学試験の日に教えたんだ」

そう言えば、白雪には霧の事を教えてなかったな。

「白雪には話すの忘れてたが、コイツは俺が中3の時から一緒に組んでる相棒パートナーで、白野霧だ」

「どうもどうも」

「パー……トナー……？」

おかしい。

ただ単に霧を紹介しただけなのに、白雪の雰囲気雰囲気が怖いものものに変わってる気がする。

「その、キンちゃん。パートナーって、どう言う意味……？」

「あ、いや。ただ単に、武偵でのパートナーって意味で深い意味はない……ぞ？」

何か知らんが、白雪の雰囲気雰囲気に吞まれて疑問形疑問形になっちゃった。

そして俺の言葉に、白雪はパーッと笑顔になる。

「なんだ、そう言う事だったんだね！ 私、てつきり将来を誓い合ったのかと」
なんだそりや……俺と霧が将来を誓い合う？

意味が分からん。

「なんで俺と霧がそんな関係になるんだ」

「だって、世の中には仕事だけの付き合いが、恋愛に発展するのはよくある事だし……」

「ドラマの見すぎだろ……」

白雪の見当違いな事を流していると、違う人物がこちらに近づいてくる。

「やあ、ゴメンね。お話してる所悪いんだけど、色々と確認したくてね」

その人物は、すまなさそうにしながらこちらに笑顔を向ける。

いかにも優男って感じで、イケメンスマイルがよく似合う人物だな。

「まずは、初めましてだね。僕の名前は不知火しらぬい 亮。君と同じ強襲科だよ。遠山君」

「なんで俺の名前を知ってるんだ？」

「自分でも分かかってるんじゃないかな？ 1年でSランクの武偵なんてそれこそ数える

ほどしかいないんだよ。ウワサにならない筈がないからね」

ですよね……

「強襲科でもポピュラーなウワサだよ。何でも、抜き打ちの試験官5人も倒したってこ

とで話題になってるし、先輩にも一目置かれてるらしいからね」

「それは、初めて知ったね〜」

優男——不知火が話してる内容に霧は食いつく。

そして下から覗き込むように俺を見て、ニコニコと一言。

「入学試験の帰り道で何で言わなかったのかな〜?」

「お前に言ったら、絶対にイジってくるだろ……」

「話のネタにはするかもね」

「だからだよ」

と、話していると不知火は俺達を見て「はは」と笑いながら、今度は霧の方を見る。

「白野さんの話も聞いてるよ。遠山君と唯一渡り合った人物で、Sランクに近いAランクって事で評判になってるよ。女の子なのに大型の拳銃も使うって話だからね」

「だろうね〜。それに、女の子でこんな銃を使うのも私ぐらいだろうし……」

そう言いながら霧は左のホルスターに入ってる、S&WのM500を見せる。

不知火はそれを見た瞬間に僅かながらに驚いた。

「M500、市販品の中では最強の銃弾を使用する銃だね。同じ口径を持つデザートイーグルの方が有名だけど……リボルバーだから弾詰まりになる事はない、実戦的な銃だったはず」

「よく覚えてるな」

俺は不知火の博識さに舌を巻く。

武偵が銃の事に詳しいのは当たり前だが、どうやら見た目と違って頭がバカと言う事はなさそうだ。

知性を感じさせるような、喋り方だったしな。

「これぐらい、武偵……特に強襲科だと当たり前だよ」

と、不知火は謙遜するように言う。

「全く、同じ一年だとは思えないぜ」「次元が違ったよね」

教室にどうやら俺が倒した奴らも混じってたらしい。

不知火が最初に話しかけてから、次々と気兼ねなく話しかけてくる。

「ふふ、さすがはキンちゃんだね」

「やめろよ。気恥ずかしい」

白雪がそんな事を言うのでどこか居た堪れなくなる。

ピシヤン！

「月に代わっておしおきよ！ 美少女武偵、りこりん参上！」

……突然に扉を開け放って現れ、なんかのポーズを取ってる人物は、これまたイロモノ揃いの武偵でもかなりの変わり者だった。

身長はどう見ても150以下で、金髪のツインテールを揺らしている美少女。

おまけにその制服は何だ……やたらとフリフリした物がスカートとかに付いてるぞ。

「やー、りこりん」

「やー、キーちゃん」

霧と謎の少女はお互いにそんな挨拶をする。

お前ら知り合いだったのかよ……

「はは、随分とまた面白い人が来たね」

「面白いとかそういう問題か？」

不知火の言う事にそうツッコむ。

「ああ、キンジ。この子は学生寮と一緒に知り合った子だよ」

「あい！ 峰 理子であります！」

霧に紹介されて峰 理子を名乗る少女はビシッ、と敬礼しながら挨拶する。

と言うかさっきの『キーちゃん』って、ニックネームか？

「ふくむ、君がウワサのSランク武偵である遠山 キンジだね！」

「ああ……そうだよ」

彼女のテンションに押されつつも答える。

「なるほどね。遠山 キンジだから……」キーくんだ！

「……なに？」

「うむ、キーくんはキーちゃん。ちようどコンビだからイイ感じだね」

一人納得してゐる所悪いが——まるで意味が分からんぞ！

そして、峰 理子を中心に教室が段々とカオスになつて行く。

俺はこんなクラスで1年間、いや付き合ひを考えると3年間も一緒に学ばなくちやならないのか……

大丈夫なのか？ このクラス。

17：武偵高の日常

入学してから早くも10日。

日常的に変わりは無く、私が殺人鬼つて事を忘れてしまいそうなくらいに学校生活を謳歌してる。

いや、殺人衝動はあるから休日には色々と殺やつてるけどね。

「ふあくあ……」

「随分と暢気だな」

アクビ一つすると、キンジが隣の席で呆れた顔をする。

「だって、今は昼休みだしね。それにお昼の後には実習授業がない場合トレーニングのノルマを達成すれば、あとは自由だし」

「確かにな。でも、蘭豹らんびょうとかに呼び出される可能性もある」

キンジの言う通りなんだよね。

「いや、私が思ってたよりも私とキンジのコンビは教務科にも知れ渡マスタースってるみたい。」

特にキンジは、注目されてる。

Sランクだし当然と言えば当然なんだけどね。

「ま、その時はその時つてことで……それに教務科から依頼とかを指定された時は単位とか美味いでしょう？」

「その通りだよ。遠山くん」

と、優男の不知火しらぬい、亮が私達に近づいてくる。

いつの間にやらキンジとはそれなりに良好な関係を結んでいるみたい。

この人も強襲科アサルトでは有名と言えば、有名なんだよね。

なにせ、一般的な観点で見ればイケメンだからね。

それに話し方が様になってる。

性格的にも、強襲科では珍しい部類なんだよね。

「割り込んでゴメンね。気になる話を二人でしてみたいだったからさ」

謝罪も忘れないとは、随分とマメな人だね。

「気にしてないから、別にいいよ。それに、キンジは非社交的だからむしろ相手側から近

寄らないと……色々と、ね？」

「成程ね。色々となんだ」

「そう。色々と」

「おいお前ら、その本人の隣で何を話してる」

キンジはそう冷静にツツコミを入れてくる。

「ところで、話を戻すけど」

「おい」

キンジの言う事を華麗にスルーして、不知火は話を進める。

なかなか**強か**だね。

「確か、教師から指名があつての依頼は余程の事がない限り拒否は出来ないんだよね」

「耳が早いね」

「これくらいは当然だよ」

笑顔で不知火はそう言うけれど、私の隣の人は知らないっぽい。

「キンジはもちろん、知ってるよね？」

「すまん、知らなかった。と言うか、霧。確信犯で聞いてくるなよ」

それはいつもの事ですよ。

「はは、いいコンビだね。白野さんと遠山くんは」

微笑みながら、不知火は私とキンジをそう評価してくる。

しかし、教師陣からの依頼か。

まあ、武偵と言う組織に属してる以上は従うけど……本来なら命令とか頼みとかは気

に入った人以外はあんまり聞きたくないんだけどね。
と、話が逸れた。

「それで、拒否できない代わりに報酬や単位はかなり貰えるんだよね？」
「そう聞いているよ。でも、1年で教師たちから指名される人はそれこそ希まれみただけだね。……でも、遠山君はもしかしたらそう言うのがあるかもしれないね」

「……マジか」

不知火に言われて、キンジは反応する。

自分でも呼び出されるかもしれないって言ってたでしよ。

「それと、白野さんも遠山君と一緒に呼ばれるかもね」

「まあ、コンビだからあるだろうなとは思ってるよ」

一応は中学から引き続き、パートナーとして話は通ってる。

あり得ない話じゃない。

それはそうとして――

「ところでさ……背後から視線を感じるんだけど、気のせいかな？」

何となくだけど、星伽さんが見てる気がするんだよね。

「いや、気のせいじゃないよ」

不知火がそう言うので、背後を振り返ってみると案の定だった。

教室の後ろの扉から顔を出して何かをブツブツと呟きながら、私に怨嗟の視線を送ってくる。

読唇術で読み取ると、

「キンちゃんはそのパートナーって言ってたけど、怪しいよ。うん、そうだね白雪。間違いない怪しいよね」

とか、言ってる。

嫉妬深いと言うか何と言うか。

そう思っていると、突然に驚いた表情をした瞬間に星伽さんは引っ込んだ。

私の視線に気づいて、って訳ではなさそうだね。

「今の白雪か？ 一体、何やってんだ？」

隣にいるキンジがそう言って、私と同じ方向を見ている。

なるほど……キンジの視線に気づいたから引っ込んだのか。

「ねえ、白野さん」

「どうしたの？」

「遠山君って、もしかしてアレ……なのかな？」

キンジには聞こえないようにして不知火が私に耳元で話し掛けてくる。

『アレ』って言うのは、単純に察しが悪いって意味だろうね。

もしくは鈍感。

10日とは言え、星伽さんがキンジに向けてる感情がどんなものかは、大体の人は分かっている。

だって、アピールが露骨過ぎるんだもん。

「そうだね。簡単に言えば、察しが悪い方だよ。主に女性関連で」

「そうなんだ、納得したよ」

ニコリと私に不知火は微笑みかける。

それから私は何気なく時計を見るとどうやら、昼休みはもうすぐ終わりだね。

「つと、話してたらそろそろ時間だよ」

「本当だね。遠山君、一緒に行かないかい？」

「あ、ああ……」

キンジは生返事を返しつつ、さっきのはなんだったのか、みたいな感じで星伽さんがいた場所を見ている。

この察しの悪さは、何かしらの誤解を生みそうだね。

それはそれで、面白いけど――

そして、場所は強襲科^{アサルト}の訓練所に移る。

今日は徒手格闘の組み手で、蘭豹などの教師陣は見学しながら指導すると言う感じ。だから誰と戦うかは自由なんだけど……

「よーっし！ 行くよ、キーちゃん」

よりによって理子が相手か。

別に良いんだけどね。

手加減もしやすいし、実力を隠すにも打ってつけだし。

まさか、同じ強襲科アサルトだとは思ってなかったんだよね。

知ったのは入学してからだけ。

入学試験の時にもいたみたいだけど、全然気付かなかったよ。

「いつでもございませう」

と言うより、合図なんていらなんだけどね。

よーい、ドンで戦闘が始まる訳じゃない。

不意打ちでも何でもすればいい。

まあ、今回は格闘オンリーだから……不意を突けるのは体の動きだけ。

ついでにどれくらい理子が動けるかチェックしておこう。

そして一瞬だけ、理子の眼が鋭く変わったかと思うと地面を滑るようにして間合いを

詰めてくる。

八極拳の活歩かっほだね、おそらく。

確か、格闘はココからの受け売りだったね。

踏み込みと同時に繰り出される正拳突き。

意外に速くなってるけど――

捕らえきれない速度じゃないよね。

「……え？」

バンツ!!

そんな音と共に、理子は背中から落ちた。

自分が仰向けに倒れてるのが分からないっぽい。

今のは単純に勢いを利用して貰って、背負い投げを決めたんだけどね。

理子が呆気を取られてるのも一瞬ですぐにバネ仕掛けのようにして跳ね起きる。

そして、再び距離を詰めたかと思うと今度は連撃。

掌底、肘打ち、足技も組み合わせた、まさしくクンフーの動き。

だけど、ちよつと熱が入り過ぎだよね。

さすがに髪を操る超能力スーパーステルスは使わないだろうけど、それでも動きが段々と本気になつて

る。

「くふっ、やっぱり強いね」

「お褒めに預かりどうも、っと」

理子の笑い方からして、少しばかり戦闘による興奮状態に入ってきてるのは明らか。これは、早急に終わらせるのが得策だね。

どつかでボロが出て困るし。

飛んできた右の正拳を受け止めて、その肘に左拳を叩きこむ。

ちようどフアニーボーン——医学的な名称は上腕骨内上顆^{じょうわんこつないじょうか}。

つまりは肘を打った時に痺れる、人間の中でも体の浅い部分を神経が通ってる部分を刺激した。

「……っ！」

目に見えて怯んだ理子をすぐさま足を引つ掛けて倒す。

そして、十字固めで腕を引き伸ばす。

「イタイタイタイタイツ！ ギブギブ！」

バンバン、と理子は床をタツプをする。

「ほう、やるやないか」

いつの間にやら蘭豹が私の傍に来ていた。

「恐悦至極です♪」

なんて、笑顔で受け答えながら理子を解放する。

「うえ、キーちゃん容赦なさ過ぎ〜」

なんて言いながら理子がのそりと起きる。

「峰 理子もなかなかええ動きやった。と言う訳で、敗北者サービスとして特別にウチの相手や」

「え？ なにそれ理不尽」

「つべこべ言うなや！」

「キーちゃん、ヘルプ！」

ん〜……どうしよう。

なるべく、ここでの味方は作っておきたいから他の人とも戦っておきたいんだよね。

だから――

「頑張つてね」

「ガツデム！」

そのままズルズルと理子は蘭豹に引き摺ずられて行った。

まあ、死にはしないから大丈夫でしょ。

そんな感じで今日は過ぎて行った。

◆

◆

◆

酷い目にあつた。

あれから、あたしはこの教師である蘭豹に扱しかれた。

いや、イ・ウーでのお姉ちゃんよりはそれでもマシだけど、辛いものは辛い。

それは置いて——遠山 キンジ。

あたしのお姉ちゃんの初ファーストめてを奪った相手。

マジ、ぶつ殺す。

つて言いたいんだけど……残念ながら、お姉ちゃんがそれなりに気に入ってるからあんまり手出しできないんだよね。

何にしてもカナちゃん弟、実力は申し分無し。

オルメスのパートナーにも打ってつけだろう。

問題は、お姉ちゃんをどう説得するか……なんだよね。

オルメスと遠山 キンジを引き合わせたいって言って素直に頷いてくれるかどうか怪しいところ。

取りあえずは、お姉ちゃんに会おう。

お互いに報告って感じで女子寮前の温室で落ち合う事になってる。

そして、報告の後に引き合わせについて話そう。

元々はそう言うつもりで、お姉ちゃんを誘ったんだし。

扉を開けて、バラ園を囲う柵に腰掛けてるお姉ちゃんを発見する。

「来たね、理子」

あたしが声を掛ける前に気づくのは、相変わらず。

私も隣へと腰掛ける。

「さてと……お互いに報告って言ってもする事なんてあんまりないけどね」

「だよね」

お姉ちゃんの言うとおおり、これといって言う事がない。

「ただ、今日はちよつと本気出しかけてたでしょ？」

「ごめん」

今日の組み手で確かに熱が入り過ぎてた。

「まあ、それはいいよ。別に問題じゃないからね」

問題じゃないんだ……

「ただ、お互いに特に報告する事も無いのに呼んだのは、別に話す事があるんじゃないかな？ とか、思っっちゃったりするんだよね」

そして察しが良過ぎる。

「ああ、うん。確かにそうなんだけど……」

あたしとしては機嫌を損ねないか、とか心配なんだよね。

迷惑じゃないかどうかなんて、既に考えるのはやめてる。

黙ってブラドと取引してる時点で充分に面倒な事なんだ……

「言いにくい？ 別に、怒ったりはしないから安心してよ」

いや、お姉ちゃん今まで怒ったこと無いじゃん。

そもそも怒り、って言う感情自体が無いから怒りようがないって言う感じだし。ともかく……少し、遠回しに言ってみるしかない。

「その、オルメスって大体はワトソンがいるでしょ？ 今までもそうだったし」

「そうだね」

「だから、神崎・H・アリアのワトソン役にキンジを引き合わせたいなと思って……」

「それで因縁に決着を着けたいと？」

「そう言う事なんだけど、お姉ちゃんが大丈夫かな？ って思ってた」

お姉ちゃん、アリアとは気が合わないとか言ってたし。

そんな気が合わないアリアにお姉ちゃんが入ってるキンジを引き合わせたいなんて、正直な話としては気が進まないけど。

それでも、あたしが解放されるにはこうするしかない。

「ふうん……なるほどね」

お姉ちゃんの一挙一動が気になる。

思わず、息を呑む。

「うん、別に良いよ」

——あれ？

思つたよりも、あつさり。

良いの？　こんなにあつさりと話が通つちやつて。

理子的にはラストダンジョンに立ち向かう勇者的な心持ちで聞いたんだけど……

「……なんか、失礼な事考えてない？　まあ、私のやつてる事と比べれば失礼も何もないけど」

「そ、そんな事はないけど……でも、思つたよりもあつさりだったから」

「確かにアリアとは気が合わなさそうだよ？　だけど……アレはアレで楽しみ甲斐がありそうなんだよね」

お姉ちゃんらしい理由だった。

表情からして主にサディスティック的な意味で。

「ただ、まあ……そうなるとホームズはともかくワトソン役のキンジが問題かな？」

「問題つて？」

「理子が勝てる見込み」

「そう言う事か——」

確かに厳しいだろうけども、勝てない相手じゃない。

カナちゃん程に洗練されてる訳でも、経験が豊富な訳でもない。それに時間はまだある。

「くふつ、大丈夫だよ。ただの武偵に理子は負けないって」

「うんうん、自信があるのは良いよ。ただ、過信はしないようにね」

「分かってるよ。おねえ——」

「はい、Stopだよ理子。ここでは白野 霧であって、お姉ちゃんではないよ」

「……分かってる」

こんな時でも変装のキャラはしっかりしてるよね。

ただ……少し寂しくはある。

「なに、その寂しそうな感じは」

お姉ちゃんはマインドスキャンでも使ってるの？

「別に、寂しそうには言ってるじゃない」

と、言いつつも凶星なので誤魔化すようにさつき買ってきたいちご牛乳を飲む。

「そうかな？ 私にはせつかくの学校生活なのに家族として過ごせない寂しさがあるように思えるんだけど」

「ぶつ——」

思わず少し吹き出した。

「なんでそんなに具体的なのッ!？」

「家族だしね〜……それに、私の洞察力とか観察力を忘れた訳じゃないでしょ？」

「まあ、そうだけど」

洞察力とかなかつたら他人に成り済ますのなんて不可能だし。

「あと、人には秘密があるのが当たり前だけど……それは別に理子は、私に何かを隠してるんじゃないかな？」

ドクン……!

と、私の心臓が動揺して跳ねる。

やっぱり、怪しまれてた……??

ただどこかで話す訳にはいかない。

それじゃあ、意味が無い。

何か……話さないと。

「……………」

ダメだ。

言葉が——思いつかない。

下手に言ったら余計にボロが出る。

「理子、私の目を見て」

静かにお姉ちゃんが囁く。

その囁きに無意識に思わず真正面から見てしまう。

変装してるから外見はもちろん違うし、声も若干が変えてるけど、中身はほとんど変わらない。

「ねえ、そんなに話したくない？ それとも、私じゃあ力にならない？」

……違う。

お姉ちゃんに頼って、ブラドから解放されたんじや意味が無いんだ。

影に隠れてるのが嫌になった私のワガママなんだ。

「話して欲しいな。困ってる事なら私が全部解決して上げるよ」

耳元でそんな風に言われると抵抗できなくなる。

全部喋ってしまいたくなる。

「理子は私の事が好き？」

「い……いきなりなに？」

突然の話題にあたしは戸惑う。

「私は理子の事が……好きだよ」

う、うわ……ヤバい。

顔が熱くなる。

そんな事を囁かれたら——堕ちる。

「だから、もし理子が私の事が好きなら……全部話して欲しいな」

ゾワリゾワリと、あたしの背中が震える。

変な感覚になつてる……何も考えずに本当に全部喋つてしまいそうになつちやう。

「あ……うあ……」

何とか堪えてるけど、もう無理だ……

口が勝手に動く。

これ以上は——

「これ以上はやめておくかな？」

急に雰囲気が変わった。

「……え？」

「いや、このまま聞き出しても良いんだけどね。だけど、我慢してまで話したくないって言うのならさすがに聞かないよ」

それを聞いた瞬間、脱力。

あ、危なかつた……けど、助かったのか助かつてないのか分からない。

「ま、話したければ話してもいいし、話さなくてもいい。別に興味がないとかじゃないけど、強制はしない」

いや、半ば強引な方法でさつき聞き出そうとした気がするんだけど……
気にしたら……ダメだよね。

「それに、お互いに秘密があった方が面白いからね」

そつちが本音な気がするのは何でだろう。

「それで、他に何か私に話す事は？」

「な、無いよ……」

「そつか。それじゃあ、今日はこの辺にしておくかな？ それじゃあ、お先におやすみ
ね」

そう言つて、お姉ちゃんは少し機嫌がよさそうに去つて行つた。

そして、一人残されたあたし。

「うあく……すごい罪悪感」

何故か話さなかつた事に、安心よりも後悔を覚えちゃうよ。

それよりもお姉ちゃんの話術がヤバかつた。

あのまま続けられてたらきつと、関係ない事までペラペラ喋っちゃいそうだったよ。
文字通りあたしの全てを吐き出すところだった。

何と言うかお姉ちゃんは、ジャンヌやパトラよりも魔女っぽいよ。

魔性の女つて言う意味で……

あく、お姉ちゃんのさっきの言葉が脳内再生される。

『私は理子の事が……好きだよ』

その瞬間に、あたしの顔が熱くなるのが分かる。

うわく、さっきので秘密の花園を開けて目覚めちやいそうだ。

あたしに同性愛の属性なんて無い。

そう言う趣味があるのは同期の夾ちゃん（夾竹桃）だけで充分だよ。

うん、目覚めてなんか無い。

断じて……無い。

………。

やめよう。

強調していると、何か自覚してるっぽく聞こえる。

今夜は、眠れる気がしない。

18：嫉妬の巫女

どんな日常にも急展開って言うのはあるもの。

私の武偵高生活は存外に退屈はしてない。

「ゆゆゆ、許しません！ キンちゃんに付く悪い虫はっ！ 殺虫ですー！」

などと、日本刀を構えながら供述してる目の前の人物——星伽ほとぎ白雪は、私を恨みとか羨望とか、色々と混じった目で見てる。

まさしく一触即発と言った感じで、誰もいない武偵高の新棟を建設する予定地で二人きりな訳だけ。

どうして、こんな面倒で楽しそうな事になったのかは……

恐らく、数時間前の事が原因なんだろうな。

発端は不知火の一言から始まった。

「白野さんと遠山君って、かなり仲が良いけど付き合ってるのかな？」

「ん〜？」「……は？」

私の静かな反応とは正反対にキンジは大声を上げる。
と同時にざわつ、と教室にいる人が私達に注目する。

今は昼休み。

食堂から帰ってきてきてそれなりに人とか他の教室から来ている人もいる状況。
そんな大声上げたら普通に目立つに決まってるでしょうに。

「なにっ!?!」「二股!?!」

しかも、周りの人は話の内容も聞いてるっぽいし。

あと、理子は理子で微妙に反応してる。

他の人に見えないように目を吊り上げてキンジに殺気を送ってる。

『やめておきなよ』

と、アイコンタクトで伝える。

その瞬間に「むう」と言った感じに理子はつまらなさそうな顔をする。

そして、他の人たちに誘われたかと思うと一緒に去って行った。

嫉妬かな。

「いや、そもそも俺と霧はそう言う関係じゃない。ただ単に武偵のパートナーってだけだ」

「って、遠山君は言ってるけどその所どうなんだい? 白野さん」

「悪いけどそう言う浮いた話って言うのは無いよ」

考えながらも会話はずっと聞きと聞いてたから普通に答える。

そもそも私に恋愛なんて分かんないんだよね。

どう言った感情かも知らないし。

「なんだ、残念」

「何で残念なんだよ」

「キンジ、そんなの決まってるよ。話のネタにでもするつもりだったんでしょ」

「はは、武偵では恋愛話なんてあんまり聞かないからね。それに、二人なら付き合ってると思われても不思議じゃないし」

と、微笑みながら不知火はそう言う。

その瞬間に、教室の後ろの扉が開いたかと思うと、何か冷たい視線が私に刺さる。

この視線は星伽の巫女だろうね。

入学してから何度も経験してるから既に分かる。

視線を感じる方をチラリと見ると……おく、恨めしそうな目で見てる。

意味は無いけど、取りあえず勝ち誇ったような笑みをしてみると、彼女の表情がさらに険しくなった。

歯軋りが聞こえてきそうだよ。

うん、なかなか良い反応を返してくれる。

それから適当にキンジ達と話した後、そのまま授業へと入る。

その間に何度となく視線が向けられた。

これは、相当に来てるね。

そして、放課後――

専門学科の授業も終わって帰り道。

寮に帰ろうと思つて校門の方へと歩んでいると、その校門の影から人が出てくる。

「……白野さん、少し時間良いかな？」

刀を入れる刀かたな袋ふくろを下げた星伽の巫女が私をそう呼びとめる。

まさか待ち伏せされるとは思わなかったな。

「うん？ どうしたの？」

と、とぼけたフリをして私は聞く。

「お話があるから……付いて来て」

光の無い感じの目で、私にそう言ってくる。

ここで帰つたらどうなるかな、と思つたけど……誘いに乗ってあげよう。

星伽の巫女の後に付いて行くと、そこは武偵高の新棟の建設予定地。

まだ何の建設材料も置いてない。

ただの空き地。

二人きりになるには、打ってつけだね。

歩みを止めて、彼女は私に向き直る。

「それで、お話って何かな？」

「入学式の時、キンちゃ——遠山君は、貴女とはただのパートナーだって言ってたけど

……本当にそうなの？」

私とキンジの関係を疑うような発言。

「この場合の意味としてはつまり、”パートナー以上の関係”かどうかって話だよな。

……………

「実はそれ以上の関係って言ったらどうする？」

サー、と星伽の巫女の顔から血の気が引いて行く。

「もう既にあーんな事やこーんな事も経験しちゃったって言ったたら？」

「な、なななな………き、きききき」

壊れたレコーダーみたいに奇怪な声を出し始めた。

やだ、凄く良い反応。

見えて楽しい。

「キエーーーーーッ！」

どう考えても女の子の出す声じゃない。

そんな声を上げながら星伽の巫女は袋から刀を取り出し、鞘を投げ捨て、正眼に構える。

「ゆゆゆ、許しません！ キンちゃんに付く悪い虫はっ！ 殺虫です！」

そして、今に至ると……

殺虫って刀でするものだっけ？

まあ、それはそうとしてちよつと弄り過ぎたかな？

「決闘です！ キンちゃんを賭けて決闘ですッ！」

「それは一応、非推奨行為って事になってるんだけどね」

「関係ありません！ 汚物は消毒です！」

ダメだこの子。

話をまるで聞いてない。

しかも本人がいないのに、勝手にキンジは賭けの対象にされてる。

だけど今更、嘘って言うのもつまらないしな。

ちよつとだけ遊んでみようか。

「てんちゅー……ッ!!」

刀を振り上げて、凄い勢いで迫ってくる。

常人に比べて、かなり速い。

アレだね……パトラやカツエ先輩みたいに魔力とかで底上げしてるんだろう。

「——おっと」

ヒュンヒュンと、紙一重で避けながら後退する。

まだまだ余裕だけど。

あつちは何だか、動揺してるのと興奮し過ぎで早くも軽く息切れしてる。

「す、素早しっこいですね……」

そうじゃなくて、星伽さんが動揺し過ぎて動きにムラがあり過ぎるだけなんだけどね。

「そんなにキンジの事が好きなんだ」

「な、なんの話ですか！ キンちゃんとは確かにそう言う関係になりたいと思ってるけど……」

最後あたりが小さくて聞こえないけど、読唇術で聞こえるのと変わりない。

それと、むしろバれてないと思ってたのが疑問なんだよね。

あんなの勘がいい人とか関係なく、普通に察しがつくと思うけど……余程、鈍感な人じゃない限りは。

「つて、関係ありません！ キンちゃんを……キンちゃんを取ったこの泥棒猫ー!!」
盗んだ覚えは無いんだけどなく。

なんて考えながらも、私に向かって星伽さんは突きを繰り出してくる。

私はそれを、

あえて”避けない”。

迫りくる刀……風を切るように迫ってくる。

だけれども私は何もしない。

「——っ!？」

私の違和感に気づいたのか、星伽さんは突然に急ブレーキをして地面を滑る。

完全に制止した時には、刀は私の胸の前で寸の所で止まっていた。

まあ、防弾・防刃制服とは言えあれだけの速度で突かれたらタダでは済まなかっただ

ろうね。

だけど、何もしなかったら攻撃をやめるとは分かっていたよ。

「どうして……避けないんですか？」

「うん？ 星伽さんならやめると思ってたから」

にこやかに私はそう言う。

別に、彼女を信じて何もしなかった訳じゃない。

いや、ある意味は信じてたってことかな？

「……理由は、なんなんですか？」

「一言で終わりそんなものだけどね。理由は簡単。キンジに嫌われるような事をする筈がないと思ってたから」

分かってるのなら最初から避ける必要も無いけれど。

最初に避けてたのは何となくと、ちよつと実力を見てみたかったって言うだけ。

「仮にも背中を預けるパートナー……そのパートナーが突然に幼馴染みの所為^{せい}で怪我を負ったなんて聞いたら、キンジはどう思うだろうね」

「……………」

そう言われて星伽さんは押し黙る。

現に既に襲われてる訳だし……以前からちよつとした嫌がらせは受けてたけどね。

全部看破したけど。

そして、彼女は段々と涙目になる。

「う、うう……キンちゃん、キンちゃんが取られちゃったよう……私に、勇気が無いばつかりに……」

急に泣き出して、彼女は刀を力無く下ろす。

これが恋してる少女の末路か。

そうしたのは私だけでも。

このまま誤解を与えたままにしてもいいんだけど……それはそれで、話がややこしくなりそう。

「あく……ゴメンゴメン。ちよつとからかい過ぎたよ」

と、私は申し訳なさそうな演技をする。

その瞬間に彼女は「——え？」と、言いながら私を見る。

「さっきのは嘘だよ」

「……う、そ？」

「そうそう、嘘。キンジとは別になんて言うの？ 恋人とかそう言う関係じゃない」

「あんな事やこんな事って言うのも……？」

「嘘だよ。つまるところは、私がちよつとカマ掛けただけだよ」

そう言った瞬間、ポカンとした表情をする星伽さん。

ちなみに言うのと、あんな事やこんな事って言葉に具体的な意味は含んでない。

と言うか、私自身分からずに発言してる。

つまりは向こうが勝手に想像するように、意味があるように言っただけ。

「しかし、恋は病気とはよく言ったものだね。まさかあそこまで過剰に反応するとは

……」

「う……」

私に言われて、勝手に誤解した挙句にみつともなく泣いてる所を見られて恥ずかしいのか私から眼を逸らす。

誤解させたのは私だけだね。

あと、顔も赤い。

それと出来れば泣き顔はもう少し見ていたかったな。

なんて、思ったり……

「いつから……分かってたんですか？」

「むしろバレてないと思ってたのかな？」

「え？」

いや『え？』って……今まで本当にバレてないと思ってたの？

どう考えてもほとんどの人は見て見ぬフリしてる感じだったけど。

もしかしてこの子もキンジと同じ感じで鈍感？

と思ったけど……それとは違う感じだよね。

どちらかと言うと、キンジが絡むと周りが見えなくなるとかそんな感じだろうね。

「バレてたんですか……」

「まあ、それはバッチリね」

何度も言うけど、アピールが露骨だし。

対して彼女は両手を頬に当てて恥ずかしそうにする。

「さ、さすがはキンちゃんのパートナーですね」

それは関係ない。

「取りあえずは、そうだね。誤解を解かせて貰うと、私とキンジはパートナーでそれ以上の関係ではないよ」

「……だ、だけど。窮地に陥れば、吊り橋効果が働いてそこから恋が芽生える可能性もあるって——」

「うん。そう言うのではないね」

「ないの?」

「うん、ない」

そもそも恋なんて分からないって言うのに……どうやって芽生えるって言う話なんだけどね。

「今まで窮地に陥った事があるけど、そういった経験が無いんだよね」

しかもキンジにとつて窮地であつて私にとつては全然、窮地って感じじゃない。

むしろ窮地に陥つてるキンジの反応を見て楽しんでる。

「そうですか……」

星伽の巫女は何やらホツとしてる。

理由は大体分かるけどね。

入学式以降から見られてきたけど、逆に私も彼女を観察してたから大体は分かる。

大体と言っても、癖や行動のパターンとかそう言った事はさすがにまだまだ。

それでも、親しい人以外にはバレない自信はあるけど。

「ふふ、安心した?」

笑顔で尋ねると、なにやらわたわたと慌てます。

「い、いいいや! さっきのはそう言う意味じゃなくてですね」

「何で今更誤魔化してるの?」

「うう……」

唸つてもしようがないと言うのに。

そして、彼女は何かに気づいたように突然に頭を下げる。

「あ、あの遅れましたけど、ごめんなさい! 私が勝手に勘違いして、こんな襲つたりなんかして」

「それこそ今更って感じだけだね。私の机に細工してたり、下駄箱に何か変な手紙入ってた」

一体何人が過去に私と同じように誤解されて、こうして襲われたり、変な事されてた

りしたのだろうね。

いや、私は違うか。誤解されてるんじゃないかと、誤解させてる。ややこしい事になる前には自己処理するけどね。

「……そうですよね」

目に見えてしょんぼりしてるね。

この状況は、使えるね。

脅迫に――

「と言う訳で、キンジにバレされたくなければ――」

「ひっ……」

「私と友達になつて頂きます」

「へ?」

怯えた表情から呆然とした表情へとすぐに切り替わった。

私の一言でまるでスイッチみたいに。

随分とまた分かりやすい反応だね。

「お、お友達?」

「そうそう、お友達」

「どうして?」

「うん？ 面白そうだから」

「そうじゃなくてですね」

理由を聞いてるんじゃないのか。

「だって、私は——」

「なるほど。勝手に暴走した挙句にパートナーを襲っちゃってる面倒な女だもんね」

そう言った瞬間に目に見えて彼女は顔が青くなる。

そして、胸に何かが刺さったかのようにして抑える。

見事にクリティカルヒットしたね。

「とまあそれは置いておいて。別に、あれぐらいの事なら私は笑って許すよ」

と、笑顔で言う。

私の正体を知ってる人がいたら、どの口が言うんだと糾弾されるだろうけど。

今の私は白野 霧であってジャックではないから問題ない。

「……いいんですか？」

突然の申し出を真正面から言われて戸惑ってるのか、自信がなさそうな声をしてる。

ここで彼女の人見知りする癖が出たかな？

さつきまでは暴走気味で、その癖も無かったように見えたけど。

「いいんだよ。キンジもその方が喜ぶでしょ」

「……………」

遠くに飛ぶカラスの声が聞こえるほどに、無言が流れる。

さしてきて、どう転ぶだろうね。

と、思ったけど。

少しイタズラしよう。

彼女の意識は思考の海に入ってる。

静かに背後に回って両肩を掴む。

「ひゃうっ!？」

ジャンヌみたいにビクツとしちゃって……

「あ、あれ? いつの間に……………」

「いつの間にも何も考え過ぎなんだってば、こんなに近づかれるまで気付かないなんて」

ひよっこりと、彼女の目の前に移動する。

「簡単な話だよ。貴女は何も言わずに『はい』、と言えばいいだけ」

「何も言わずにつて、それは矛盾してるんじゃない? ……」

「四の五の言わないってね。返事は?」

「……………はい」

静かに彼女は頷く。

少々強引だったけど、まあ大丈夫か。

この子も人見知りするせいで、こちらから歩み寄って引っ張って行かないとダメな感じだね。

キンジが絡めばその限りでもないっほいけど。

それと何だか彼女は嬉しそうな感じがする。

「ふふ……」

そして、お互いに笑い合うのは同時。

夕焼けの空の下の出来事であった。

19：勘違いから始まる決闘

最近……と言うほど、入学から時間は経っていないが、変化が起きた。

「おはようございませす、霧さん」

「ああ、白雪さん。おはよう」

いつの間にか霧と白雪が仲良くなつてると言う事だ。

その証拠に現にこうして俺の目の前で挨拶あいさつしてる。

まさか、人見知りする白雪に友達が出来るとは……思つてもみなかつたぞ。などと感心しながら白雪を見てみると、こつちに気づいた。

「あの……キンちゃんどうしたの？」

「いや、何でもない。と言うか、昔のあだ名で呼ぶのはやめてくれ……」

入学してからこのやり取りも何度目だろうか。

「ご、ごめんなさいキンちゃん。つい癖で……あつ」

自分の言動にあわわ、と言った感じに慌てふためく白雪。

またこのパターンか。

最早お決まりだな……

「はいはい。落ち着いてね」

「う、うん」

しかも霧にフォローされてやがる。

「まあ、アレだよ。キンジも気恥ずかしいんだよ」

霧の言う通り、確かに気恥ずかしいのもあるが……キンちゃんって呼ばれる歳でもないからな。

昔ならいざ知らず。

「で、でも……それじゃあキンちゃんの事なんて呼べばいいの？」

「普通に名前で呼んだらいいじゃないかな」

……相談するなら本人に聞こえない所でやってくれ、と言いたいが。

まあ、ここは霧に任せておこう。

女子の会話に突っ込む気にはなれん。

「そんな……ハードル高いよ。キンちゃんの……その、名前を呼ぶなんて」

「難しく考えたり堅く考えたりするからダメなんだって。もう少し柔軟に行かないと、いつの間にか”取られちゃう”よ？」

”取られる”の意味は分らんが、霧。

お前、絶対に何か企んでるだろ。

さつきよりもニコニコしてるあたり怪しいぞ。

「う、うん。頑張ってみる。そうだよね……女は度胸だよ。頑張れ白雪」

自己暗示なんだろうが全部聞こえてるぞ。

いや、まあ……なんだ。

気恥ずかしいあだ名で呼ぶのをやめてくれるのなら、あえてスルーしておこう。

そして、白雪がこっちに向き直る。

お前、なんか緊張してないか？

「あの……」

「お、おう」

「キ……キ、キキキキキンキン！ キン」

……なんか白雪が怖いぞ。

特に壊れたテープレコーダーみたいに喋ってるあたりが。

しかも、何故かは知らんが気合いがあるせいで顔にも力が入ってる。

と言うか、なんで『ジ』が出てこないんだよ！

たった一文字だろうが！

「む、ムリだよー!」

俺の目の前にいた白雪は、顔を真っ赤にして叫びながら教室を出て行った。あいつ、もうじき授業だぞ……

俺の目の前に残ったパートナーが白雪が走り去った扉を見ながら問う。

「ねえ、キンジ」

「なんだ?」

「白雪さんって、面白いね」

「否定はしない」

白雪はいつからあんな愉快な感じになってしまったのか……

幼馴染みの俺すら分かん。

——昼休み。

一応、アレから白雪はちゃんと授業前に返ってきたが。

相変わらず様子は可笑しいままで。

いくらなんでも名前一つで大袈裟すぎないか?

と云うのを事情を話した不知火と事情を知っている霧に話したところ——

「さすがはキンジだね」

「うん、そうだね。さすがは遠山君だ」

と、何故かは知らんが勝手に納得された。

「お前ら俺をバカにしてるだろ……」

「察しが悪い方が悪いと思うけどね。先に言っておくと答えは言わない。こう言うのは自分で分らないと意味無いからね」

「なあ、霧。せめてヒントとかくれよ」

「ヒントね……女おんな心かな？」

俺の不得意分野じゃねえか。

どうしろって言うんだよ……

「ま、別にキンジはキンジのままでもいいんじゃないかな？ 今のままで色々誤解を招

くぐらいだし」

「ダメじゃねえか」

「だったらアドバイスとしては、人の心に機微きびでいる事だね」

何故だ……霧が言うと言説力があるぞ。

って言うかお前は逆に洞察力とかが良過ぎるんだよ。

今では慣れたが、俺の言う事を大体は先に言われるからな。

「白野さんはどうやってその洞察力を手に入れたのか、参考に聞いていいかな？」

不知火も同様に霧の凄さについては知ってる。

同じ学科でもよくつるんでるからな。

対して霧は自信満々に、

「経験だね」

笑顔で言った。

「なるほどね。凄^{すじ}い説得力だよ」

確かに……不知火の言う通り凄^{すじ}い説得力だ。

まあ、こいつの家庭事情は笑顔に反して暗いからな。

多分、そう言った経験をしているのも他の事情が絡んでるんだろう。

深く聞くつもりはないけどな。

そう思っているとチラリと、霧が別の所に目線が向いたような気がした。

「さて、ちよつと私は手洗いに行ってくるよ」

「あ、僕も手洗いに行くついでにコーヒーを買ってくるよ。お昼の後は眠くなるからね」

と、二人は何だか打ち合わせをしたように席を立った。

なんだ……？

「あの、キンちゃん」

と、声を掛けられた方を見ると今日は絶賛暴走気味の白雪さんが俺の背後に立ってい

た。

「……どうした？」

「う、うん。青森から届いたリンゴがあるんだけど、どうかなって思ってた。」

「ああ、貰うよ」

青森のリンゴと言えば名物だからな。

食後のデザートにはもってこいだろう。

白雪が差し出したランチパックから、一口サイズに切つてあるリンゴを一つ食べる。

さすがは星伽のお嬢様だな。

リンゴも良い味で瑞瑞みずみずしさが口の中で広がる。

「ふふ、美味しい？」

「まあな……」

と、曖昧な返事になったのは白雪の笑顔にドキッ、とさせられたからだ。

幼馴染みで忘れそうになるが、コイツはコイツで美少女なんだ。

そりや笑顔も映える。

身近にも危険物はあるんだよな……

これが灯台下暗しって奴か。

「それはそうと、霧と不知火もタイミングが悪かったな。まさか白雪と入れ違いになる

とは……」

「……うん、そうだね」

また、白雪の様子が変わった。

「すー……はー」

そこで深呼吸する意味はなんだ？

「あのね、えつと……キン、キン……キンツ！」

何か喉に詰まったみたいになってるぞ。

ああ、多分アレだな。

朝と同じように名前で呼ぼうとしてるんだろう。

と言うか、あのチャレンジまだ続いてたんだな。

「なあ、しらゆー」

「やっぱり無理だよ霧さーん!!」

俺が声を掛ける前に白雪は両手で顔を覆って朝と同じように走り去ってしまった

……

呆然と見送っていると、

「相変わらず愉快だね。白雪さん」

いつの間にか霧と不知火が戻ってきていた。

霧の発言からしてお前ら絶対にどこかで見えてたろ。

「最後に星伽さん、白野さんの名前を呼んでたけどいいのかな？」

「ん〜？ 別に行かなくても問題ないよ。すぐに戻ってくるだろうし」
適当だな、おい。

まあ、霧の言う通りすぐに戻ってくるだろう。

そう思っていると、

スパン！

と、教室の扉が勢いよく開かれた。

白雪かと思ったが……あの（普段は）おしとやかな白雪がそんな乱暴な開け方をする筈も無く――

「遠山 キンジ！ オレと決闘だ！」

扉を開けたツンツン頭の男がそう叫ぶ。

今日は厄日やくびなのか？

神様、俺が何をしたんだ……

◆ ◆ ◆

随分とまあ、面白い事になっちゃって。

ツンツン頭の大柄な男性――武藤むとう 剛気ごうきが決闘を宣言してからと言うものの、話は平

行線を辿ってる。

「だから、俺が決闘をする意味が分からん」

「んなもん、星伽さんを泣かせたからに決まってるだろ！ 1日に2度も泣かせやがって」

「そこで白雪が出てくる意味も分かんねえって言ってるだろ！」

さつきからこの会話は似たような事しか言ってるない。

あの武藤って人は、確か……車輜科クルマヅコではそこそ有名な人だったはず。

「不知火は武藤って人について何か知ってる？」

「うーん、そうだね。重度の乗り物オタクって所は聞いた事があるよ。それと、ランクはAで……白野さんと同じで割と期待されてるみたいだよ」

私を例に出す辺り、この人もなかなか喰えない人だね。

それはそうと、面白い展開にはなったけど進展しなくちやつまらないし——

「はいはい、お二人さん。そこまでにしようね〜」

パンパンと手を叩いて、注目を集める。

「もうすぐ昼休みも終わりなんだから、いい加減に話を終わらせないとキリがないよ」

「だけどな、霧。コイツが意味分からん因縁吹っ掛けるんだからどうしようもないだろ

……」

「お前なツ!!」

「武藤って人も落ち着いてね〜」

全く、二人して教室で注目を集めちゃって。

さっきのキンジと武藤のやり取りを見て……まあ、原因は分かった。

武藤は星伽の巫女を意識してる——惚れてるって言い方もできるのかな？

まあ、もう少し観察してればすぐにはつきりと分かるだろうけど。

何にしても、武藤って人も報われないね〜。

星伽さんが見てるのはキンジであって君じゃないって言うのに。

「ここは武偵なんだから、やりようはいくらでもあるでしょ？ 気に入らなければ実力

で決着をつければいい……ルールに則^{のっと}った上でね」

「だからやる意味が分からん」

「キンジ、取りあえずぶっ飛ばして黙らせるのと、いつまでも無駄に言い争ってるのと

どっちが良い？」

言いながら、キンジにマ^ウバ^イタ^キキ^ング^グ信号で——

『多分、何を言っても引き下がらないよ』

と送っておく。

その瞬間にキンジは疲れたような顔をしながら、

「……分かったよ。決闘を受ける」

承諾した。

周りからも「おお」と言った感じにどよめきが生まれる。

「まあ、問題はどんなルールにするか？ だけどね」

「はいはい！ りっこりんは提案がありまーす！」

と、元氣よく手を上げてピヨンピヨン跳ねてる。

まあ、ここはノリに合わせておこう。

「はい、りっこりん！ どうぞ」

「ランバージャック！」

「はい、決定」

その瞬間にキンジは嫌な顔をする。

そして、そんなキンジとは逆に盛り上がる教室。

「イエーイ！」

『イエーイ!!』

理子が合いの手を入れるときさらに盛り上がった。

理子も大分こちら辺に馴染んでるね。

「ランバージャックか、面白いじゃねえか。遠山、まさか降りるなんて言わねえよな？」

「俺も男だ。勝負を受けた以上、降りるとは言わん。大体、意味分からん因縁吹っ掛けたこつちとしてはいい迷惑だ」

「ハッ！ Sランク武偵だからって、余裕かましてると痛い目を見るぜ」

表情だけで分かるけど、キンジも割とイラついてるね。

まあ、どつちにしてもどうなることやら。

「あれ？ どうなってるの？」

ちようど帰って来た星伽の巫女はポカンと表情を浮かべてる。

どうなってるも何も、原因はアナタなだけどね。

そして、放課後——

決闘は教師陣からは非推奨行為とされてはいるが、禁止ではない。

まあ、やるなら適当に見えない所でやってくださいね——と言う事な訳なんだよね。

武偵の教師は大体は放任主義が多い。

1年の今は、それなりに最低限のフォローはしてくれるみたいだけど。

それでも、最低限って言う辺りは武偵らしいと言うか何と言うか。

今まではこんなに長い事、武偵に成り済ます事なんて無かったからねえ……ある意

味、新発見と言えば新発見だけど。

私には関係の無い事だね。

敵情視察ぐらいにしか思っていないし。

「さてさてやって参りました！ ランバージャックの時間でーす！ 司会は私、峰 理子がお送りいたしまーす」

『イエーイ!!』

「今回は遠山選手と武藤選手による徒手格闘戦です！ 時間無制限で、武偵柔術ルール。サミング目突き、噛みつき無しで、道具の使用も一切無し」

生徒が円状に配置されたリングの中で理子のご丁寧^{ごていねい}に進行役となつて、ルールを説明する。

あまり目立たない一般校舎の裏だからつて、騒ぎ過ぎな気もするけどね。

ま、気づいていても教師たちは見て見ぬフリをする可能性が高いけど。

「ちなみに、『^{カメラ}帮助者』はアリだけどどうする？」

「あく……霧？ 頼めるか？」

まあ、そうだよな。

と言う事でキンジに呼ばれて私もリングの中に入る。

「ちなみに手出しすることになったら……まあ、^{あほう}肋の1本か2本は覚悟した方がよいよ」

左のホルスターに入ってるM500をチラリと見せる。

見せられた相手は当然に冷や汗を流してる。

「さすがにそれはやり過ぎだ。最悪、死ぬぞ」

「はいはいっと……冗談だよ」

金一のような武偵を目指してるキンジだから止めてくると思ったよ。

仕方ないので、GLOC^ッK18C^ッの方を手に持つ。

「ハッ！ 上等だ。オレの幫助者^{カメライト}は——」

「俺だー」「いや、俺がやる！」「いや、遠山をぶん殴るのは俺だー」

武藤の幫助者^{カメライト}は候補が多いね。

と言うか、どうも周りの雰囲気を見るにキンジは完全にアウエーって感じ。

「なんか、いきなり俺に殺気が来てるんだが……気のせいかな？」

「気のせいじゃないと思うよ？」

だって、さつきからキンジに対して嫉妬^{しっど}の眼差しが見えるし。

アレかな？ 白雪みたいな美人が幼馴染みでなおかつキンジに対して恋愛感情があるとか分かってるから、妬んでるんだろうね。

「ふーん……何と言うか。見苦しいね」

『ぐほッ!!』

私が笑顔で聞こえるようにそう言うと武藤を含めたほとんどの男子が胸を抑える。

私の言う事の意味が分かってるんだらうね。

「へっ、精神攻撃か。随分と姑息な手を使いやがる」

「なんだこの茶番は……」

武藤の反応にキンジは若干、呆れた反応を返してる。

キンジは……まあ、私が見苦しいって言った意味を理解してないだらうね。

「取りあえずさっさと決めちゃいなよ。教師陣が横槍を入れて来るかもしれないんだからね」

黙認されてるとは言え、発見すれば注意はしてくるだらうし。

「んな事は分かってるさ！ 三上！ 頼んだぜ」

「おう」

と、武藤に呼ばれて出て来たのは糸目の男性。

あの人は同じ強襲科アサルトだったはず。

それはともかくとして――

「キンジ、HSSSは使う？ 使わない？」

近づいて耳元で話す。

もちろん、読唇術で読まれないよう相手の視界に口を映さないようにする。

念のためね。

「使う訳無いだろ、こんな大衆の面前で。おまけにこんな事でいちいち本気にしてどうする？」

「聞いてみただけだよ……それに補助者^{カメラート}なんて言っても、出番はなさそうだけどね」
「……どう言う事だ？」

「始まってみれば分かるよ。それに、決闘なんて言ったけどただの”喧嘩”でしょ？」
私の一言に、キンジは少し微笑む。

「ああ、そうだな。ま、いざとなったら頼むよ」
私を信用してる。

言外にそう言ってるような感じでリングの中央へと、歩いて行った。

ま、リングと言っても……ルール上で人数は1桁までと決まってるんだけどね。
リングより外にるのが観客。

そのリングの直径は大体10メートルってところかな？

今回は格闘戦オンリーだから、そこまで大きく動きまわる訳じゃない。
なにより周りに障害物^{オブジェクト}がある訳でもないからね。

どう考えても、泥仕合になる予感しかない。

あゝ、でもどうだろうな。

キンジは私と組み手をやってるから……HSS抜きでもそれなりにやれるし。

案外、あっさりと終わっちゃうかもね。

あの武藤って人についてもうちよつと知ってたらハッキリとした答えが出せるんだけどな。

と、考えてる間にも二人はリングの中央に立っている。

そして、進行役の理子がレフェリーみたくに右手を上げ――

「……始めっ！」

振り下ろした。

最初に駆けだしたのは、キンジ。

対して武藤は動かずにどっしりと構えてる。

迎え撃つつもりなんだろうね。

体格が大きいから、組み手に持ち込むつもりかな？

と、思っているとキンジもその事に気付いたみたい。

右のストレートを放つフェイントをして、そのまま回し蹴りへと変えた。

左足を軸に回ってそのまま武藤の右脇腹へと決まる。

「ぐッ！」

苦痛に顔を歪めるけど、素早くキンジの右足を掴む。

なかなかタフだね。

「なっ……!?!」

「うおりやあああああ!!」

キンジもすぐに切り替えて、反撃しようとしたけど武藤に掛け声とともに大きく体を振り回された。

そしてそのまま、背中から地面へ叩きつけられる。

「おお……」「アレは痛そうだ」「いいぞ!」

と、周りは盛り上がりを見せる。

受け身は……何とか取れてるね。

後頭部を打ってたら、もつと隙が出来てるよ。

「へっ! もういつちよ行くぜ!!」

「そう何度もやられて、堪^{たま}るか!」

もう一度同じ事をするつもりらしいけど、その前にキンジが反撃した。

体を捻^{ひね}って、武藤の顎を蹴り上げる。

「ぐあっ!」

もつとも、体の一部を掴まれてる無茶な体勢からだからそんなに威力は無いけど。

まあ、充分に怯^{ひる}むよね。

その間にキンジは抜け出して距離をとる。

「おいおい、Sランク武偵って言うのはそんなもんか？」

「たった一撃、喰らわせたからって調子に乗るなよ。まだ、始まったばかりだろうが」

武藤の挑発に、少し熱く返すキンジ。

なんだかんだでノツてきてるね。

まあ、それ以上に腹が立ってるだろうけど。

それからお互いに殴り、殴られ、キンジは相手に掴まれないように、武藤はキンジに肉薄して積極的に掴みかかる。

やっぱりこうなったか……

これじゃあ、撃てない。

お互いに近過ぎる。

下手に撃つたら味方に当たるとかそんな状況。

それに周りの雰囲気を見るに、どう考えてもカメラート幫助者カメラートの出る幕は無い。

手助けしたら水を差すつてことになる。

それは相手の幫助者カメラートも同じ事を感じてるのか、視線が合い「やれやれ」と言った感じに首を振る。

全く……面倒だ。

「ハア……ハア、ちくしょう。タフな奴だな、武藤」

「——ハツ……ハツ。お前もしつこいんだよ、遠山」

試合が始まって10分近く。

さりげなくいた不知火と、審判と進行役からジョブチェンジしてた理子、つまりはリングの生徒に押し戻されたりしながらも二人は戦った。

お互いに疲弊しまくってる。

そのおかげで戦闘は膠着^{しょうちやく}状態。

最初は盛り上がりを見せてた観客たちも段々飽きてきたのか……今じゃすっかり盛り下がってる。

中には帰ってる人もちらほら。

私も、この状況には飽きてきた。

殴り合ってた二人も、戦う理由を忘れてるんじゃないかな？

まあ、どっちにしたって既にこれ以上戦えないだろうし……意味も無い。

だから——

パン！

発砲音が”二重”に響く。

そして、キンジと武藤は同時に倒れる。

誰もがその光景に、驚きの声を上げる。

発砲した私と武藤のカメラート幫助者はお互いに、倒れた二人のリングの中央へと行く。

「お、お前ら……な」

「こんな、状態で……撃つてくるなよ……」

悶絶して二人。

武藤とキンジの順番で文句を言ってくるけど、知った事じゃあないよ。

「長いのが悪いんだと思うけどね。短期決戦かと思つたら、予想通りに泥仕合だったし。

それに、カメラート幫助者の本分はちゃんと果たしたでしょ？」

「だからって……おま、え……普通、カメラート幫助者が”味方”を撃つ……かよ」

確かに私は背中からキンジを撃った。

だけど、それは相手も同じこと。

「三上……」

「いや、ここらでお開きだと俺も思つたからな。白野が構えた時点で合わせただけだ」

細い糸目をさらに細めながら、武藤が何かを言いかける前に三上は弁明する。

いくら疲弊してると言つても、銃口が見えた時点で避けられる可能性はあった。

だからお互いに対戦相手ではなく、組んでる味方の背後を狙つた。

それだけの話。

「ま、お互いにもう言いたい事も言ったし……十分に殴り合つたでしょ？ それとも死ぬまでやりたかつた？」

私がそう尋ねると、二人は何とか体を起こし、座つた状態で顔を見合わせる。

「遠山と心中なんてゴメンだ」

「俺も、意味の分からん因縁の所為で死にたくはない」

と、お互いに拒否した。

「ま、取りあえず——」

私は握つてたグロックを上空に向けてパアンと一発放ち、注目を集め、

「決闘は終了。結果は引き分け。以上、解散」

終了を宣言した。

翌日——

当然だけど、キンジは全身……と言うほどではないけど打ち身や打撲傷だらけ。

だけど、そこは武偵。

二重の意味で“うたれ”慣れてるからか、それほど痛がつてる様子は無い。

「だ、大丈夫キンちゃん？ あんまり無理しない方が——」

「白雪、これぐらい武偵じゃ当たり前だつて言つてるだろ？」

私の隣にはキンジ、そしてキンジを挟んで向こう側に星伽さんの順番で並んで教室に向かっている。

キンジが寮を出てからずっとコレだよ。

心配性……いや、違うか。

さらに観察してる内に星伽の巫女について段々と分かって来た事がある。

それは——恐れ。

そう、彼女はキンジを失う事を極端に恐れてる。

キンジと彼女は幼馴染み……そして、彼女にとってキンジは昔馴染みとは別に特別な存在。

……ああ、バラし甲斐がアルヨネ。

「あ、あの、どうしたの？ 霧さん」

「ん〜？ 世話焼き女房だなくと思ってる」

「そ、そんな……世話焼き女房だなんて……キンちゃん、ダメだよ。まだ、1日は始まったばかりなのに——」

ちよつと勘付かれ掛けたかな？

上手い事、話は逸らせたけど。

星伽の巫女の能力は侮れないからね〜。

危ない危ない。

「おい、霧が余計な事言うから白雪が変な世界に旅立ったぞ」

「でも、しつこく聞かれる事も無くなったでしょ？」

「……お前、たまに酷くないか？」

「あしらい方が上手いって言ってる間に教室へと辿り着く」

と、キンジと言いつ合ってる間に教室へと辿り着く。

そして、扉を開けると、

「いよゝキンジ！」

武藤がいち早くこちらに気づいて挨拶をする。

「昨日の今日でなんか軽くないか？」

「気にするなよ！」

キンジは半目で睨んでるけど、武藤は気にせずに「はっはっは！」と豪快に笑う。

決闘終了後、お互いに冷静になった所で話してる内に誤解は解けたらしい。

ま、誤解も何も星伽さんはそもそも泣いてた訳じゃ無かったから本人がその事について話したらすぐに終わったけど。

ちなみにその時のキンジはかなり疲れた顔をしてた。

それは置いておいて、私はキンジに話しかける。

「ま、取りあえず昨日の反省点としては」

「何だよ……」

「白雪さんに、無理に名前と呼ばせようとしたらダメだって事だね」

「——同感だ」

20：毒の一撃（プワゾン）

はてさて、順調に私はこの東京武偵高に馴染みつつある。

味方もそれなりに作ってもいる。

要は、武偵高での自分の地位を確立してること。

話は変わって、あれから……武藤とキンジの決闘から1ヶ月近く経った。

一般中学から来たって言う人もそろそろ学校の雰囲気慣れたって所だろうね。

などと、自分の席でM500のシリンダーを回しながら考える。

あく、刃物を使いたいな……でも手の内をあんまり晒したくないからあくまで銃がメインになってしまふ訳だけ。

だからこうして、暇な時には軽い整備をしてる。

誰かさん曰く「銃は女の子と一緒に繊細」って言ってたしね。

「随分とマメだね」

「まあね」

と、話しかけて来た不知火しらぬいにそう返す。

遅れてキンジも不知火の隣に並ぶ。

もはや強襲科^{アサルト}では、お馴染みって感じの面子^{めんつ}。

「それで、どうかしたのかな？」

「ああ、実はね——」

「ちよつと待つて、当てて上げるよ」

不知火が言おうとした所を私は制止する。

「……『4対4戦』^{カルテット}の事について話に來た。それでしょ？」

「さすがは白野さんだ」

と、不知火は相変わらず優しそうな顔で微笑む。

さっきの「実はね——」の言動からしてただ単にお話に來たつて訳ではなさそうだったし。

『4対4戦』^{カルテット}が始まる時期がもうすぐだったはずだったからね。

それで、記憶が確かならキンジと不知火はまだ誰と組むかは決めてなかった筈だし。

「まあ、早い話がまだ誰とも組んでないなら組まないかって話だ」

「なるほどね。別に大丈夫だよ」

そうキンジに笑顔で返す。

Sランクと組んでるAランク武偵だからか、エリートだと思つて周りの人は遠慮しがちで、なかなか話し掛けてこないんだよね。

「てつきりお前の事だからすぐに誘いが来てると思ったんだが、そうじゃないのか……」
「多分、実力的な意味で周りの人が遠慮してるだけだよ」

「遠山君と白野さんのプラチナコンビじゃ仕方ないよ」

「不知火、頼むからそのコンビ名はやめてくれ」

キンジの頼みに「分かったよ」と笑顔で返してるけど、どっかで蒸し返すだろうね。

あと、そのコンビ名も大分浸透しんとうしてきてるよね。

今じゃすつかりキンジのパートナーⅡ私って言う風潮が出来てるよ。

だけど、私に頼りつきりだとなかなか成長しないだろうし。

まあ、近い内に一時的にお別れするだろう。

少しばかり個人的にやりたい事もあるからね。

「それはそうとして、あと一人か……」

「おー！ キーちゃん発見！」

キンジが呟いた後に、タイミングがいいのか理子がちようど来た。

「ちようどいいのが来たね」

「およ？ りこりんのウワサですか？」

「ウワサじゃ無くて、4対4戦カルテットのメンバーでちよつとね」

「奇遇だね。りこりんもちようど探してたのですよ」

これで4人目は決まった。

「強襲科が4人……随分と攻撃的なチームだね。だけど、急造で出来た割に連携は取りやすいかな？」

不知火は簡単にチームの総評をする。

攻撃的ねえ……私は、本当はどちらかと言うと諜報科よりなんだけど。

理子もどちらかと言うと諜報科だし。

まあ、取りあえず……どんなイベントが起こるか楽しみにさせて貰おうかな？

数日後――

校舎の外の学生掲示板に対戦者と競技内容が貼り出された。

対戦相手は、『霧隠班』ね。

そして、競技内容は『毒の一撃』。

イベントとは言え負けるつもりはないし……楽しめるように張り切っちゃおうかな

？

「なんだ、ここにいたのか……」

どうやらキンジも対戦相手をチェックしに来たみたい。

その隣には不知火もいる。

「僕たちの相手は霧隠班みたいだね」

「競技内容は毒の一撃か……」

と、不知火に続いてキンジが呟く。

チェックは終わったので、3人で教室へと向かう

「どんな連中なんだろうな、霧隠班って」

「——教えてしんぜよう」

キンジが何気なく吐いた言葉に続いて、どこからともなく声が聞こえてくる。

その事にお互いに顔を見合わせて、周りを見ていると。

次の瞬間——

ポフン!

白い煙幕スモークが突然に目の前に広がる。

「な、なんだ?」

そうキンジは驚いてるけど、私は何となく人がいるのは分かった。

だから驚きはしない。

不知火も少し驚いてるけど、すぐに平常心になった。

「ふふふ、伊賀忍者——霧隠 泰蔵!!」

「同じく、伊賀忍者——百地 桃子!!」

ビシツ、と決めポーズを決めながら、男女の二人組が目の前に現れた。名乗りからしてジャパニーズニンジャだよな。

ニンジャって確か漢字で忍ぶ者って書く筈だけど、目の前の二人組は全然そんな忍ぶ気配が無い。

「お主たちが、^{それがし}某達の対戦相手である遠山班だな？」

「あ、ああ……」

霧隠に質問されて答えてるけど……キンジ、呆然としてて生返事になってるよ。

あと、内心で呆れてもいるだろうな。

心の中で「また、濃い人が現れた」みたいな感じで。

「名乗ったのだから、そなたらの名前を聞かせてもらえませんか？」

百地に催促されて、私達はそれぞれに名乗る。

「そうだね。僕の名前は不知火 亮。学科は強襲科だよ」^{アサルト}

「白野 霧。同じく強襲科。よろしくね」

「……遠山 キンジ。俺も強襲科だ」

と言った所で霧隠は、笑みを深める。

「まさかとは思っていたが、お主らが神奈川で有名になった白金コンビか」^{しろがね}

「なんだよ白金コンビって……」

「そのままだろう。プラチナは漢字で書くと白い金だからな」

そして、霧隠の言葉にキンジは頭を抱え出す。

もう諦めなよキンジ。

1年でSランクなんて取った時点で目立つ事は避けられないんだから。

「ともかく、対戦相手となったからには挨拶はこれつきりだ。Sランクの実力、楽しみにしている」

「それでは失礼いたします」

百地がそう言ってポフンと再び煙幕を出し、風によつて煙が流されて行くと、当然にそこには誰もいない。

その様子を見てキンジは一言。

「なんだったんだ……」

「宣戦布告だろうね。あとは私達の顔と名前を知る必要があったとか」

相手は忍者つて言つてたから、色々と搦め手を使つてきそうだ。

私が言つた言葉の意味をキンジは分かつたのか、疲れたように息を吐く。

「俺達の事を調べるため、か」

「もしそうだとしたら、色々と外堀を埋めてくるだろうね。忍者つてそう言う者達だし」

不知火の言う通りだとすると、既に戦いは始まつてるんだらうね。

まあ、これも学業の一環いっかん。

自分の評価つなに繋がることには違いないから、相手も相手なりのやり方でやってくるって事だね。

いや、楽しみだね。

どうやって叩き潰してあげようか？

そして、さらに数日経った放課後。

私達は作戦会議を開く事にした。

まあ、ルールの説明は基本だよな。

あと、出来る限り対戦相手の情報を掴むと言うのも基本。

ちなみに集合場所は学園島の沿岸部で、現在そこに向かって進行中。

到着すると、既にキンジと不知火はいるっぽいね。

ベンチで二人とも何か話してる。

「二人とも早いね」

「10分前に集合は基本だから……」

と、キンジは苦笑いをしながら返す。

強襲科アサルトだと遅れたら、蘭豹の折檻せつかんだからね。

既に犠牲者も何人か出てるし。

「理子と一緒じゃないのか？」

「一緒の方が情報をすぐに共有できるって言うのは、いいけど。相手は諜報科レザドだからね。監視する目は分散させた方がいいから、別れて調べることにしたよ」

「なるほどな」

キンジはそう言って納得する。

「みなみなさん、集まっていますな」

ちようどいいタイミングで理子が登場。

いくつか荷物をぶら下げて来ている。

「さて、みんな揃ったから……僕から早速だけでもまずは競技のルール説明をさせて貰うよ。確か、峰さんも調べたんだったけ？」

「うん。持ってきたノートパソコンにデータが入ってるよ」

「あとでコピーして、みんなに配って貰っていいかな？ 取りあえず最初は、僕の方で説明させて貰うよ」

「あいあいさー」

理子が返事した後、不知火はファイルからプリントを取り出して、みんなに配る。

随分とアナログだね。

「僕達がやる競技『毒の一撃』^{プワゾン}についてだけど、お互いの班は紙資料^{ペーパー}に書いてある通り、『目』が描かれている棒のついた旗、『防衛フラッグ』を持つてる。

次にハチ・クモが描かれた旗、これが『攻撃フラッグ』。お互いにこの攻撃フラッグで相手の防衛フラッグを先にタッチした方が勝ちだよ。それから、防衛フラッグは持つててもいいし、どこかに隠してもいい。ちなみに攻撃フラッグは味方での受け渡しは可能。敵から強奪するのもアリで、そのまま折っちゃってもいいみたいだよ。

競技場所は武偵高第9区の沿岸部……つまりは僕たちがいる場所だね。範囲は大体100メートル四方だよ。それで、この範囲にある物は何でも使っていいみたい。勿論、常識の範囲でね」

ふむふむ、なるほどね。

敵から強奪するのもアリって事は……自分たちの攻撃フラッグが折られて無くなっても、相手のを奪ってタッチすればOKって事だね。

「つまり、相手の攻撃フラッグを奪ってタッチするのもアリ、ってことか？」

キンジが、私が思った事を先に言葉に出す。

「そう言う事だね。だから、自分たちの攻撃フラッグが無くなっても終わりじゃない。僕からの説明としては以上だよ」

それに対して不知火は肯定する。

これでルールの概要は大体いいとして――

「次は私かな？」

「白野さんは、対戦相手についてだったね」

と言う事で、不知火と入れ替わる。

短時間で4人も観察するのは骨が折れるからね。

だから一応は武偵手帳に書いておいた。

「と言う訳で、対戦相手に付いて調べて来た訳だけど……身長とか体重とか、スリーサイズとかもいる？」

「……いや、省はぶいてくれ」

キンジが間を空けて冷静に返す。

最近は慣れて来たのか、随分と軽くあしらわれるようになったな。

そろそろ新しい反応が欲しくなる。

「じゃあ、まずは私達の目の前に現れた二人について説明しておくよ。バンダナを巻いた男性が本人も名乗ったように霧隠 泰蔵。学科は諜報科レザドで、ランクはB。私が見た性格としては……割と自己主張が激しい方かな？ それで霧隠レザドつて言うのは割と有名な伊賀忍者の末裔まっえいみたいだね。それで、他の人の話によると実力はA相当あるんじゃないかって言われてるらしいけど……まあ、実力を隠す事は諜報科レザドでよくある事だよ。

だから正直な話。ランクはあくまで目安で、当てにならない」

「なるほどね。戦い方とかは分かるかな？」

不知火がおだやかな口調で、微笑んで聞いてくる。

「古武術って言うのかな？ それが主体みたい。組み手とかも割と得意そうだったよ」

「古武術か……なかなか厄介そうだね」

その不知火の言葉に私以外の人が頷く。

「で、次に髪をお団子に纏めてる女性の百地 桃子だけ……霧隠 泰蔵と同じく学科は諜報科^{レザド}で、ランクはB。こつちの性格としては霧隠 泰蔵とは逆に控えめな性格。割と慎重な感じで、二人だとかちょうどバランスが取れてるね。考え方的にも、性格的にも。ただ、彼女は道具を使つての戦法や罠^{トラップ} 専門っぽいから……このBランクって言うのは妥当な評価である可能性が高いね」

「つまり、防衛フラッグの周りにはそいつの罠がある可能性が有ることか？」

「まあ、キンジの言う通りだね。だけど、逆に罠があり過ぎるとその周辺に防衛フラッグがある事を勘付かれるだろうから……数を減らして質の高い罠を置いてくるだろうけど。特に、一般市民が通らないような所は注意だね。」

向こうの班の残りの二人はまあ、正直な話として私達と同じ学科の人だからあんまり紹介する意味が無いと思う」

「俺達と同じ学科？ 誰だ？」

「三上 良樹よしきと東海林しやうじ 夏海なつみ」

私の答えに、問いかけたキンジは「あー……」と、納得したような声を上げる。

三上は武藤のカメラト帮助者だった人。

東海林については……よく私に訓練を申し込んでくる人なんだよね。

割と強気な女の子で、組み手や模擬訓練で私に簡単に負けた事が悔しいみたい。

私に勝負を挑んでくる人なんてあんまりいないから、そりやあ目立つよね。

「同じ学科の『よしりん』と『なつちゃん』か〜」

「あいつらにもニックネーム付けてたのかよ……」

「チツチツチ！ 甘いねキークん。りこりに抜かりはない！ ちなみにクラスの大半

には付いてるよ」

「あ、じゃあ僕にも付いてたりするのかな？」

「うん！ 不知火君にはね、『ぬいぬい』って付けてみました」

「なるほど、素敵だね。そんな風には呼ばれるのって何だか新鮮だよ」

「おう、良いノリしてますなー。ノリの悪いキークんとは大違いだ」

「なんでそこで俺が出るんだよ」

全く、皆して楽しそうにしちゃって。

ま、楽しいのは良い事だよ。

早いとこ作戦を決めて解散と行こうかな？

やっぱりと言うか、予想通り相手もこつちを監視してるみたいだし。

「さて、対戦相手の情報としては以上だよ。次にどう言った感じで攻めて行くかを決めよつか？」

◆ ま、相手が監視してるのならちようどいいからね。

◆

◆ 作戦会議があつてからさらに数日。

◆ ついに俺達が『4対4戦』^{カルテット}をする日となつた。

「これより、遠山班と霧隠班による『毒の一撃』^{ブワゾン}を開始する。ルールの再確認だ。遠山班はクモ、霧隠班はハチのフラッグを相手の目のついたフラッグに当てれば勝ちだ。また、フラッグは仲間での受け渡し、隠匿^{いんたく}も可能だ。エリア内の物は何を使用しても構わない。銃を使用する場合、使用するはこの非殺傷弾^{ゴムスタン}のみとする。正直生温いから私は実弾でも構わんのだが……」

◆ おい……ルールの再確認に私情を混ぜるなよ。

◆ と、俺は今回の試合を監督する、いかつい男性教師に心の中で突っ込みを入れる。

「ともかく、実弾を使った時点でその班を失格にした上に尋問科^{ダギキュラ}や強襲科^{アサルト}の連中達に引

き渡す。一般市民に危害を加えてしまった場合も同様だ」

それは最悪のパターンだな。

どう考えても綴つづりと蘭豹が出てきて終わりじゃねえか。

「説明は以上だ。霧隠班は北端、遠山班は南端に移動しろ。10分後には試合を開始する」

そうやって教師は去って行った。

そのあと、なにやら霧隠は不気味な笑みを浮かべる。

「お主らとの対戦。楽しみにしていたぞ」

「俺としては忍者の相手は遠慮願いたいけどな……」

中学の時の風魔で懲りてる。

「まあ、そう言うな。伊賀流のもてなしをしてやろう」

そう言って、霧隠たちは去って行った。

その背後を見ながら俺のパートナーが一言――

「随分とまあ、好戦的だね」

「……だな。俺達も行くぞ。相性は良くないかもしれないが、勝ちを譲るつもりはない」

「キーくんも、なんだかんだで燃えてますな」

「峰さんも割と燃えてるんじゃないかな？」

「くふつ、当たり前だよぬいぬい。忍者と戦うなんてゲーム以外に出来なかつたからね、りこりん胸アツだよ」

なんだ？

今、理子の雰囲気が少し違った気がするが……気のせいかな。いつも通りのおバカキャラのまんまだが、ヤル気は充分だ。と言うか全体的に士気は高い。

それに霧の作戦もある。

あとは、俺達がどう動くかに掛かつてるな。

俺達は指定されたポジションである南端へと移動した。

ここは以前に作戦会議で集合した、沿岸部の広場だ。

周りに防衛フラッグを隠せるような場所は一応、あるが……

すぐにバレるだろう。

自然が少々あるだけだからな。

公共ロッカーを使うと言う手も考えたが、一般市民に紛れて奇襲される恐れもある。だから、俺達の取った行動は防衛フラッグを常に持ち歩くと言った戦法だ。

かなりリスクな戦法だが、有効だろう。

そして、ちょうど10分が経った。

合図は無いが、試合は既に始まった。

「じゃあ、霧。あとは任せたぞ」

「分かってるよ」

そう言つて霧はインカムを着けて、俺の隣を通り抜けて去つて行つた。

「よーっし！ りりりんも遊撃に行つてきまーす！ キーン」

両手を広げながらおバカキヤラ理子も去つて言つた。

「僕たちも行くこうか、遠山君」

「ああ、分かっているよ不知火。しかし、チーム全員で攻める『総攻撃』フルアタックを採用するとは……

アイツも大概だな」

『聞こえてるよ』

インカムから霧の声が聞こえてくる。

そうだった、会話は筒抜けだったな……

まあ、取りあえずさつきもチエツクしたが、マイクの感度は良好だな。

「これから目立たない道を通つて、取りあえず相手の試合開始の初期位置まで向かう」

『うん、分かったよ。二人とも罠とかには気をつけてね』

霧の言葉に俺と不知火は互いに頷き、ハンドガンを持つて移動する。

罨を警戒しながら人通りの多い所は避けて移動する。

いつもの学園島だって言うのに、不気味に感じるな。

胡散臭いが、何にしても相手は忍者だ。

通行人に成り済ましてって言うのは……充分にあり得る事だしな。

今の所、罨らしい罨は無い。

それどころか順調だ。

「………」ここまで接触が無いと不気味だね」

俺も同じことを思ってたよ。

不知火の言う通り、俺の予想だと罨の一つや二つがあると思つたが……

もうすぐ相手の初期位置だと言うのに、なんの接触コンタクトもない。

「ともかく攻めなきや始まらない以上、警戒しながら進むぞ」

「そうだね」

不知火はそう言って、優男スマイルを振り撒まく。

こんな時でも相変わらずブレないな、お前。

そして、なんだかんだで結局相手の初期位置周辺まで来たが――

「………」ここまで何も無しか……」

「白野さんの方はどう？」

『こつちも未だに接触されてないね』

「りこりんの方も全然だよ。エンカウント低過ぎー」

各自の報告を聞く限り、誰も襲われてない。

おかしい……

『どうやら、待ち伏せっぽいね』

「なに？ 霧、どう言う事だ？」

霧が答えを言う前に理子から通信が入って来た。

『あー、こちらりこりん。よしりんとなっちゃんに挟まれた』

「マジかよ」

挟撃されたって事は、こつちの動きは読まれてたってことか。

すかさず霧から通信が入る。

『この様子だと、作戦は読まれてたか……漏れてたっぽい。動きも読まれてるって事は、

誰かが見てる可能性も高いね』

『さすがは忍者、汚い』

理子は挟まれてるって言うのに暢気のんきだな。

ともかくだ。

「今から救援セーブに向かう。場所はどこだ？」

『公園近くの路地だけど、相手が簡単に許してくれる訳が無いよJ K』

常識的に考えて

「意味分からん事言つてないでさっさと教えろ。幸いにも俺達も公園だ。上手くいけば、逆に挟撃出来るかもしれない——」

ボシウウウウ、と突然に俺達の周りで煙が発生する。

なんだ!?

「すみませんが、そうは問屋が卸おろしませぬ」

声は聞こえるが、周りが見えない。

だが声からして、以前に会った百地だろう。

クソ……こつちの方でも待ち伏せか。

「遠山君、多分これ催涙ガスだよ。あんまりここに居るのは好くない」

しかも催涙ガス。

どうやら、俺と不知火を完全に足止めするつもりらしい。

これだから諜報科シザドの連中はやり難いんだよ。

「息を吸わないように出来るだけ早く煙の外に出るぞ！」

俺の言葉に不知火は頷くと、煙の薄い場所に向かつて走る。

——バツ!

煙の中から人影が飛び出す。

白野との訓練のおかげで間一髪、対応できた。

「しばらくの間は付き合っただけです」

お互いに腕を掴んで、競り合う。

どうやら百地は、催涙ガス防止のためにゴーグルと風魔がしていたようなマスクをしている。

準備は万端ってことか。

だが、俺が掴んでいる今がここで仕留めるチャンスだ。

そんな好機を、Aランクである不知火が見逃すはずも無く――

「女性を撃つのは気が引けるけど……」

そう言いながら、すかさず不知火が百地に向かってSOCOMを構える。

そして、パンツッ！ と発砲。

どうやら決まったらしく、彼女は悲痛そうな顔をした後に銃弾を受けた反動を利用して俺から離れて行った。

仕留める事は出来なかったが、少なくともダメージは与えた。

「早く抜けるぞ……」「ホッ！」

俺はそう言って引き続き催涙ガスの中を不知火と共に抜ける。

ようやく、催涙ガスの中から出られた。

少しだけ目が染みるぞ。

「吸っちゃまったか……目も痛い」

「ケホッ、まんまとしてやられたね」

全くだ。

相手はまだ近くに在るだろう。

不知火も同じように思ってるのか、銃を持つ手は緩めていない。

——カランコロン。

……何だ？

と、少し痛む目で音がする方を見れば——

「おいおい、冗談じゃないぞ!!」

俺が叫ぶと同時に不知火と近くの木の影に隠れる。

次の瞬間——

ドーン!!

爆風と閃光が弾ける。

「手榴弾とかアリかよ……」

「大丈夫です。火薬の量は調整しております」

「そう言う問題じゃねえよ!」

と、声はすれども姿が見えなくなった百地に向かつて叫ぶ。

『二人とも、その茂みから出れる?』

「どうしたのかな? 白野さん」

俺の代わりに不知火が応答に出る。

『今、ちょうど見えるからね。私がキンジ達のことが見えるってことは……あとは分かるでしょ?』

「そう言う事か……」

やる事は単純だが、果たして百地が姿を現すかどうか、だな。

いや、姿を現さないのなら引き摺りだすしかない。

「行けるか? 不知火」

「勿論だよ」

そう言つて俺達は同時に公園の広場へ飛び出し、出口を目指す。

理子と合流させないために、相手は俺達の足止めに専念する筈だ。

当然に俺達が公園の外に出ようとすれば――

「そうはいきませぬ」

百地の声が聞こえたと同時に俺達の目の前を再び白い煙が遮る。

また催涙ガスだろう。

だが、俺達はその中に突っ込む。

「強行突破もさせませぬ！」

すぐさま俺達に百地が襲い掛かる。

今度はクナイを持って肉薄してくるのが、ぼやけながらも見える。

俺は、バタフライナイフを出してそのクナイを受け止める。

おそらくだが……コイツがこの催涙ガスの中を出る事は無いだろう。

このガスの中は百地にとって有利な条件だからな。

それを捨ててまで、俺達を追撃しようとはして来ないだろう。

「不知火！」

「分かってるよー！」

俺が呼ぶと、不知火は空いてる手にタクティカルナイフを持って百地に接近する。

今度は撃つと俺に当たる可能性があるからな。

さすが不知火だ。状況判断が早い。

「くっ！」

反対側から挟むように来た不知火に対して、百地はクナイを投げつけた。

それを不知火はナイフで弾いたが、少しだけ足が止まった。

「ガハッ」

同時に俺の口から空気が漏れる。

コイツ、今の一瞬で腹に一発入れてきやがった。

俺が怯んだ瞬間に百地は俺から離れる。

そして、不知火は同時に俺から離れた百地に向かって発砲する。

だが、どうやら逃げられたっぽいな……

「大丈夫かい？」

「ああ、だけど……げほっ！　今のでかなり吸っちゃまった。目も染みる」

「僕も、結構痛くなってきたね」

不知火も目が赤くなってきている。

いやらしい戦い方だな。

確実にこつちを無力化してくる。

早いとこ決着をつけないとマズイぞ、これは。

そう思っていると――

「不知火、後ろだ！」

不知火の背後から百地が襲い掛かる。

アイツ、あの目は確実に仕留める気だ。

――間に合うかッ?!

俺は全力で駆けて、百地に向かってタツクルを仕掛ける。

「うおおおお！」

「なっ……?! おのれ！」

そのまま、白い煙の中へと俺達は飛び込んだ。

なんとか間に合ったか……

だが、このままだと俺が仕留められる。

早いところ無力化する必要がある。

そう思つて素早く立ち上がろうとするが、

——むにゅん。

そんな手応えを感じた。

地面しては軟らかいぞ……

と思つて下を見るが、催涙ガスの所為^{せい}でぼやけてよく見えん。

ダメだ、かなり時間を掛け過ぎたな。

百地がどこに行つたかも分からなくなつてやがる。

「そ、そなた……と言う奴は……!!」

声が聞こえるが、それは俺の下から聞こえてくる。

「敵に胸を鷲掴^{わしづか}みにされるなんて……屈辱^{くつじやく}」

胸を鷲掴み……まさか?!

俺の下にいるのは、物かと思っていたがそうじゃない!

早く離れないと、別の意味でマズイ事になるぞ!

「す、すまん。よく見えなくて、まさか下敷きになつてるとは思わなかった」

「う、動くなど言うに! ……んっ?!」

俺が離れようと手に力を入れると、下にいるであろう彼女から色っぽい声が漏れる。

そして同時に感じる、ヒステリアモードの血流。

チクシヨウ、催涙ガスのおかげで見えないから余計に今の状況を想像しちまう。

また、霧の奴にからかわれる。

——ドクン!

まあ、それも悪くないね。

だけど、今は試験中。

今、俺の下にいるであろう彼女を愛でたい所だけど……そうも行かない。

「すまないね。対戦相手であるのに、君の美しさに目が眩んでしまったよ」

「いきなり何を言うておりまするかッ?!」

俺の言葉に、かなり動揺してるのが分かるよ。

催涙ガスで彼女の顔が見えない事が、残念で仕方なく思えてくるよ。

「出来れば、このまま大人しく捕まっていて欲しいけど……ダメかな？」

そして、俺は彼女に優しく微笑みかける。

「そ、そんな顔で言っても絆ほどされませぬぞ！」

そう言うや否や、彼女は俺の腹に両足を潜り込ませて、そのまま蹴り上げた。

このまま距離を取るつもりだろうけど、そうはさせない。

彼女を見失う前に俺はすぐさま距離を詰める。

「これでも食らいなされ！」

そんな俺に向かって、彼女は両手の指の間に挟んだクナイを一齐に投げる。

だけど、今の俺はヒステリアモード。

銃弾ですら指で掴めるくらいスローに見えるのだから、人が投げる速度では止まっても同然。

だが、俺の視界は霞かすんでいる。

でも、問題は無い。

目があまり見えなくても、想像力で見ればいい。

走るスピードを緩めず、大きく右手を振り、全てのクナイを「掴つかんだ」。

「そんな……!?!」

彼女が驚いてる顔が頭の中に浮かぶ。

そして、そのまま彼女の服を掴んで煙の外に近い場所に向かつて投げる。もちろん、彼女が受け身を取れるように。

「すまないね」

最後に謝罪も忘れない。

その刹那――

……タン、タアアン!!

遠い所で銃声が聞こえる。

次に聞こえたのは、ドサリと誰かが倒れる音。

取りあえず、早いところこのガスの中から抜けた方が良いな。

そう考えて俺がガスの中を抜け出して見たものは、倒れている百地の姿。

「遠山君、無事だったんだね」

不知火もガスの中から出て来た。

「ああ、何とかな」

「何か雰囲気が違うけど、気のせいかな?」

「気のせいさ。そう言う事にしておいてくれ」

俺がそう言った所で、不知火は静かに俺にインカムを渡してくる。

どうやら、彼女にタックルした時に外れてしまったみたいだな。

インカムを着け直し、俺はお礼を言うべき人に感謝の言葉を伝える。

「助かったよ、霧」

◆ ◆ ◆
『助かったよ、霧』

私はキンジからの言葉を聞きつつも、スコープから目を離す。

この口調からして……さてはHSSSになってるね。

あの煙の中で、どうなってる事やら。

ま、想像するのは簡単だけど。

取りあえず――

「どういたしました」

と、返事をしておく。

うーん、やっぱり狙撃銃は味気ない。

私が今持つてるのは、H & K P S G — I と言うセミオート式のスナイパーライフルで装備科アムドからレンタルして来た物。

久々だな……狙撃銃を使うなんて。

『それにしても、驚いたよ。まさか、スナイパーライフルまで使えるなんてね』
不知火がインカム越しにそう感想を言ってくる。

「使えるって言っても、器用貧乏みたいなものだよ」

何より、私の肌には合わない。

『それより霧。不甲斐ない所を救って貰ってすまないね。この埋め合わせは——』
『ちよつと！　りこりんは放置プレイですか!?!』

息を切らせながら、キンジの通信に割り込んでくる。

大分消耗してるね。

ま、能力を使わずに2対1だろうし。

本気を見せる訳にも行かないだろうから、当たり前か。

「と言う訳だから、早いとこ理子の救援セーブをお願いね」

『分かったよ、お姫様』

最後にそんな言葉をキンジは残して通信を終了した。

それにしてもビルの上から見張りながら、相手を探すのは骨が折れるよ。

しかも、相手はガスで自分の姿を隠したり、路地に入って狙撃されないようにしたり。

まあ、確実にこつちの戦法は漏れてると。

わざと漏らしたんだけどね。

作戦会議の時に監視されてる事を気付いた上で、そのままの戦法で来た。

その方がきつと、私を襲いに来ると簡単に予想できるからね。

——ギン！

素早く振り向きサバイバルナイフを振るうと、ダーツのような矢を弾いた。

「む……よく気づいたな」

貯水タンクの下にいる霧隠は驚きながらも、私を見下ろす形で立っていた。

「目立つ所に立っておいでよく言うよ」

「ハツハツハツ！ 性分だ。これでも、気配は殺していたのだがな」

確かによく気配は消してたけど、私が気付かない筈がない。

せめてお父さんぐらいのレベルじゃないと話にならないよ。

「どちらにせよ、お主が防衛フラッグを持っている事は分かっている。狙撃という役割

ならば、安全に攻撃に参加できるからな」

「アー、ヤツパリ情報ハ漏レテタノカー」

「ハハハハハハ！ 助けを呼ぼうとも、もう遅い。伊賀流のもてなし、受けて貰うぞ！」

クナイを構えて屋上に降り立ち、私に向かって駆ける霧隠。

秘密兵器を使うかな？

と言う訳で、私は素早くスイッチを取り出し、押す。

次の瞬間には爆発音が響く。

「む、なん——ぐほあ!!」

一旦警戒して立ち止まった霧隠に屋上のドアが背後から襲い掛かる。そのまま彼はドアの下敷きとなった。

「……………」

そして、何の反応も無くなった。

あれ？ 死んじやった？

そう思いつつも、ドアをどかして霧隠を見ると、どうやら気絶してるだけみたい。

「んー……随分とあっさりだね」

何ともいい難い結果だよ。

取りあえずは彼の懐ふところを探り、目的の物を見つける。

それは相手側の『防衛フラッグ』。

まあ、彼の性格からして……恐らく単独で来るだろうと予想できてたし。

自信家っぽいからね。

それに、あえて前線で攻める人が防衛フラッグを持つと言う普通だったら考えられない事だけど、ある意味型破りな彼の事だから持つてると思ったよ。

あと、彼に取っては残念な事に、私は防衛フラッグを持つてない。

持つてるのはキンジ。

もちろん、本人は防衛フラッグを持つてる事に気付いてない。

最初にキンジの隣を通り抜けた時にすり替えておいた。

敵を騙すならまずは味方から、って言う奴だね。

それに、キンジは不知火と一緒に行動するんだからそう簡単に取られたりはしないだろうし。

「まさか、こんなにあっさりと終わるとは思わなかったけど……まあ、いつか」

ここまで綺麗に思い通りに行くとやっぱり楽しいね。

そう考えながらも私のクモの攻撃フラッグが相手の目のフラッグに触れる。

こうして試合はあっさりと終了した。

「ハハハハハ！ なるほど。情報を握っている事を逆手に取られたか」

試合が終わり、私はネタばらしをした。

敗因について知った霧隠は悔しがる事は無く、むしろ清々しいって言った感じだね。

キンジの方は微妙な顔をしてるけど。

「いやいやいや、まさか……某^{それがし}達の監視に気づいていたとはな」

「まあ、偶然の産物だったけどね」

私は朗らかに笑って謙遜^{けんそん}する。

「ケツ、相変わらずニコニコと余裕そうな顔しやがって」

「なっちゃんお顔真つ赤だ」

「よし、理子。今から一発撃つから死んでくれ」

「お断りします」

そして、東海林しゅうげいと理子の鬼ごっこが始まった。

お互いにボロボロだつて言うのに、随分とまあ元気が有り余つてるね。

それから百地と言う少女に関しては、さつきからキンジと視線を合わせない。

これはもう完全にキンジを弄いじるしかないね。

「遠山ばかり足止めする事を考えていたせいで、どうやらその相方を疎おろそかにしてしまつたようだ」

「一撃でやられた奴のセリフじゃないな」

三上の言葉に怯むことなく、霧隠は反省し、納得している。

神経が図太いね。

「今回は負けたが、次こそは伊賀流のもてなしを見せてやろう。さらばだ！」

そして、忍者二人組は煙に紛れて再び姿を消した。

続いて三上と東海林も疲れたような顔をして、去つて行つた。

東海林に関しては、私に挑発的な視線を送つて来たけど。

そこで私達の班も解散。

今はキンジと一緒に二人きりで帰ってる。

「……………いつの間に俺のフラッグをすり替えたんだよ」

唐突にキンジがそんな事を尋ねて来た。

「ん？ 試合が始まって分かれる時に、キンジの横を通った時だけど？」

試合が終わった今、隠す事でもないから正直に言う。

「全く、そう言う事なら早めに言えよ」

「怒ってる？」

「怒ってねえよ……………」

相変わらず分かりやすいね。

態度にも出てるし、口調にも出てる。

もしかして——

「頼って欲しかった？」

「……………」

キンジは無言になる。

なるほどね。

ある意味では自分勝手な行動だったし、気付いてたのに話さなかったのも、ちよつとマズかったかもね。

信用されてないじゃないか？　って言う風に感じるだろうし。

「ゴメンね」

「なんで謝るんだよ。別に俺は気にしてない」

「私の目を見ても、同じ事が言えるかな？」

キンジなら、凶星だとすぐに視線を逸らすだろうしね。

「素直に言った方がよいよ」

私のその言葉にキンジは観念したのか、「はあー」と疲れたような息を吐く。

「……ああ、怒ってるよ。なんで、自分が狙われると知ってて話さなかったかも含めてな」

「話したらキンジは攻めなかったでしょ？　防衛フラッグを持ってた事も含めて」

「当たり前だろ。チームがやられそうになってるのに、それを無視して攻められるか？

武偵憲章第1条にあるだろ……『仲間を信じ、仲間を助けよ』ってな」

「時には犠牲も必要だよ」

「バカ言うな。パートナーを犠牲に出来るか」

キンジは、面白くなさそうにそう言う。

口調も若干荒い。

やっぱりと言うか、金一に憧れてるだけあって犠牲を強いるのは拒否してるね。

うーん、何ともまあ真っ直ぐだね。

その代わり簡単に折れそうだけど。

「ま、そう簡単に私は負けないって。心配し過ぎだよ」

「あのなあ……」

「でも、心配してくれてありがとう」

私が笑顔でそう言うのと、キンジは再び視線を逸らす。

「なに？ 照れてるの？」

「照れてねえ」

「じゃあ、そう言う事にしておいてあげるよ」

「うぜえ……」

なんて、キンジをからかいながら私達は再び歩き出す。

あ、そうだ。

一つ聞きたい事があるの忘れてた。

「ところで、話は変わるんだけどね」

「……何だよ」

「今日、ヒステリアモードになった原因について詳しく聞きたいなー」

「やめろ。いや、やめてくださいお願いします」

それから、キンジをからかいながら私は帰った。

でもね、キンジ……君のお兄さんは踏み込んではいけない所に来ちゃってるんだよ。親しい人が犠牲になった時、キンジはどんな顔をしてくれるのかな？

——私は楽しみにしてるよ。

21：マタアイマシヨウ

7月の下旬。

既に夏と言った感じに蒸し暑い。

私の武偵高の制服も夏服へと変わっている。

ちようど今、終業式があつてこれからは夏休み。

私にとって、夏休みを経験するのは人生で2度目。

いやー、それにしても面倒だったよ。

半年で進級分の単位を揃えるのは……

別に苦労はしなかったけど、それほど楽しいと思えるほどの任務はあまり無かった。

お父さんから言い渡される任務じゃないと、あまり満たされない。

ピリリリリ……

仕事用じゃない方の電話か。

と言う事は、キンジか白雪さんかな？

携帯を開けて見ると、画面に表示されてるのは『遠山 キンジ』の名前。

通話を可能にして出る。

「ん、霧だけどうかした？」

『あー、どうかしたって言うほどでもないんだが……今日、時間空いてるか？』
「空いてるけど、どうして？」

『さつき連絡があつて、俺の兄さんが今日帰つてくるらしいんだ。それで、霧と話がしたいってさ』

お話ね。さすがに私の正体がバレたつて言うのは……無いか。
だとしたら何だろう。

医療関係の話とか、単純に話をしたいだけかな？

どっちにしてもちようどいいね。

「分かった。私もキンジの話があるからちようどよかったよ」

『何だよ、俺に話つて？』

「まあ、それはキンジの家でゆっくり話すよ」

『……ああ、分かった』

「それじゃあ、またね」

プツンと、私は電話を切る。

さてと、最後に色々と準備をしておかないと。



蒸し暑い夕方の空の下、俺は歩いてきた。

全く、上の連中も色々々と難題を吹っ掛けてくる。

おかげで仕事を片づけるのに時間が掛かってしまった。

まあ、何とか休暇を取り付ける事に漕ぎ着けられたがな……

どうやらキンジによると、彼女——白野は予定が空いてるらしい。

俺としては、それを聞いて安心した。

今日でなければ、次はいつ休みを取れるか分からないからな。

「ただいま……」

玄関を開けて、久しぶりの我が家へと帰って来た。

靴を見る限り、どうやら白野はいるらしい。

祖父母はいないのか……

「あ、お邪魔して——」

ちようど白野が通りかかり、俺に挨拶しようとするが……なんだ？

なぜ言葉を止める？

「えつと、金一さんだよね？」

「あ、ああ。そうだが」

「なんで、女装してるの？」

………
——しまった……

客をあまり待たせてはいけないと思って、女装を解くのをすっかり忘れていた。道中でやたらに男性の視線を感じたのはその所為だったか……

「ああ、うん。趣味は人それぞれだしね……私は気にしないよ」

「待ってくれ、誤解だ！」

「大丈夫だよ。金一さんなら女性でも充分やっていけるって、性転換したいのなら確かに良い国があつた筈だから」

「頼むから話を飛躍させないでくれ！」

心なしか、彼女の目が何かを見守るような温かい眼差しになっている。

このままでは、変な色眼鏡で見られかねない。

「兄さん、お帰り。つて言うか、何を玄関で騒いでるんだよ」

「キンジ、すまんが……誤解を解くのを手伝ってくれ」

ちようどよく来たキンジに、そう助け船を求めろ。

こんな事で弟の助けを借りると思わなかつたぞ。

俺の姿を見て察したのかキンジは、霧に声を掛ける。

「……あー、霧。兄さんが女装してるのは訳があつてだな」

「え？ キンジが言つてた、金一さんの変わった趣味つてそう言う事じゃないの？」
——なに？

「おい、キンジ」

「いやいや、俺は言つてないぞ！ 一言も！」

「そうだっけ？ 色々と自慢話を聞かされたような気がするけど」

「確かにしたような気もするが、変わった趣味だとかは言つてねえよ！」

そこでキンジは何かに気づいたのか、途端に冷静になる。

「霧、絶対に今のワザとだろ」

「さて、何の話だか」

彼女はワザとらしく視線を逸らす。

「なんだ……ちよつとしたイタズラか。」

「全く、危うく弟を肅清しないとイケなかつたぞ」

「お前のおかげで、俺の寿命が縮む所だつたぞ」

俺の言葉にキンジは、彼女を恨めしそうに見る。

だが、彼女は気にせずニコニコと笑顔だ。

「それで、女装してるのは趣味じゃないんだよね？」

「まあ、そう言う事になるな」

「元が良かったからビックリしたよ。そこらの女性よりも綺麗だよ」

男としてそれは喜んでもいいものか……

いや、同僚でも何度も言われている事だが。

それでも何と言うか……面と向かって女性に言われると、応える物がある。

思わず苦笑いが零れる。

「はは……ともかく、玄関で話すのもなんだ。居間の方へ行こう」

と、俺達は移動する。

畳敷きの居間に着いて、お互いに一先ず座る。

大ちゃぶ台に置かれている湯のみがある辺り、ちゃんともてなしはしてるみたいだな。

そして、彼女は優雅に畳の上に座る。

しかもきちんと正座だ。

以前の印象からして、自由そうなイメージだったが……無遠慮と言う訳ではないらしい。

「すまないな。せつかくの夏休みに時間を取らせてしまつて」

「別に気にしてないよ。ところで、女装についてだけど趣味じゃないなら、潜入捜査でもしてたの？」

当然だが、女装は趣味と言う訳ではない。

また、潜入捜査のための変装でもない。

もちろん女装については、HSSになるためのトリガーだ。

きっかけは両親を亡くした時だと言う皮肉なモノだが。

ともかく白野が俺の恰好かっこうに疑問を持つのも至極、当然の事だ。

しかし……彼女は、HSSもといヒステリアモードについて何も知らない筈だ。

いや、キンジとパートナーを組んでいる以上はヒステリアモードについて知っていると見る方が無難だろう。

だが、知っていてもその仕組みについては何も知らないだろう。

正直な話、彼女になら話してもいいと思っではいるが——

「あー、兄さん」

俺がどう答えようか迷っていると、キンジが声を掛けてくる。

「なんだ？」

「霧は俺の体質の事なら知ってるぞ」

「どう言う事だ？」

「だから、ヒステリアモードについてはもうバレてる」

「やっぱりな……」

「キンジ……お前はもう少し、忍耐力を鍛えた方が良いな」

「それってどうやって鍛えりゃいいんだよ……」

「まあ、キンジは簡単に色仕掛けで落ちちやうからね。学校でも散々だし」

「……ほう？」

それは、良い事を聞いたな。

「おい、霧。余計な事言うなよ！」

「いや、白野……続けてくれ。どうせなら今までにキンジがヒステリアモードになった時を教えて欲しい」

「いいよ？ 私が最初にヒステリアモードって呼ばれる状態になったキンジを見たのはね——」

「やめてくれええええええ!!」

数分後——

キンジは、魂が抜けたように床に倒れている。

白野の言葉を阻止しようとしたが、俺がその前に取り押さえた。

抵抗して来た際に、なかなか動きが良くなっている事に驚いたが……踏んで来た場数が違う。

「……………」

「いつまでそうしてるつもりだ」

「ぐほっ！」

軽く蹴りを入れてキンジを叩き起こす。

「最悪だ……恨むからな、霧」

「へえ、黒歴史を掘り起こしたぐらいじゃダメかな？ なんなら、今ここでお兄さんにヒステリアモードになる様を見せつけてもいいんだよ？」

「勘弁してくれ……」

白野が迫るとキンジは顔を少し赤くして逸らす。

完全に尻に敷かれてるな、キンジ。

この様子を見るとコイツの将来が不安になる。

一度、女難じよなんの相があるかどうか見て貰った方が良い気がする。

「取りあえず、夕食にするぞ。白野も、以前と同じように食べていくといい」

「ご馳走になります」

初めて会った時のように食事に誘う。

そして、料理が並んだ所で食べながら雑談をする。

相変わらずキンジは色々弄られていたが、本人は口では色々言いながらも悪くは

思っていないようだ。

この様子を見る限り、関係としては良好なのだろう。

——本当に良い奴を見つけたな。

口には出さないが、心の中でそう思う。

食事が終わり、縁側で霧は俺の隣に座る。

初めて会った、あの時のように——

「どうも、ご馳走様になりました。二度も食事に誘ってくれてありがとうございます」

「いや、気にする事は無い。それに、今日は俺の方から誘ったのだしな」

彼女は幼さの残る顔で、小さく微笑む。

「そう言えば、私に話があるって言う話だったけど」

「まあな……」

単純にこれと言うほど言っておきたいことがあった訳ではない。

ただ単に他愛もない話をしたり、キンジの事について色々と聞きたかったのだが。

……ちょうどいい機会かもしれない。

「真剣な話になるんだが……いいか？」

「真剣な話ね……キンジの体質のこと？」

「まあ、そうだな」

「割と当てずっぽうだったんだけどね」

そう彼女は言うが、いい洞察力と勘をしている。

「キンジもそうだが、俺も同じ体質を持つている……いや、遠山家にいる男性が代々受け継いできた特異体質だ」

「そうなんだ。もしかして、金一さんが女装してるのもその体質に関係があったりするのかな？ 関係無かったらただの変態だけだ」

「……………」

女の子にストレートに言われると、かなり来るな……

「……話を続けさせて貰うと、俺とキンジは β エンドルフィンベータを分泌することで、電気信号による神経伝達こうしんの速度が亢進こうしんして身体能力および思考速度も向上すると言う体質だ。

まあ、キンジのを見ていたのなら分かっていと思うが」

「要は、性的興奮をする事で脳内麻薬によりドーピングされた状態になるってことかな？ まあ、詳しく説明しようと思っただら色々違うんだらうけど」

さすがは医療関係に詳しいだけはあるな。

彼女は瞬時に話を理解している。

「そう言う事だ。それが、俺とキンジの体質だ。俺はこの体質の事をヒステリアHisteria・サヴァン・シンドロームSavant Syndrome——HSSと呼んでいる。キンジはヒステリアモードと呼んで

るみたいだがな」

「サヴァン・シンドロームなら聞いた事があるんだけどね……」

「まあ、それとは似て非なるモノだ。そもそも遺伝性の特異体質だから、遠山家以外にあるとは思えないが」

「そんな重要な事、私に話して良かったのかな？」

「遅かれ早かれ……と言っても、既にバレているしな。キンジの変わりようを見ればすぐに何かあると言うのは分かり切った事だ。パートナーである君なら、なおさらだ」

それでも、HSSのメカニズムについて辿り着くのは難しい事だろう。

医療に詳しくでもない限りはな……

だが、当然ながらイ・ウーの連中にはこの事は最早知れ渡っている。

この体質——いや、技術を秘する事はもう難しいかもしれないな。

「だけど、キンジはあんまり好きじゃないみたいだけどね。その体質と言うか、能力と言うか」

「全く、アイツもいい加減に向き合えればいいんだがな」

「中学の時に利用されて、散々な目に遭あつてるから……仕方ないんじゃないかな？ 軽く女性恐怖症みたいな感じだし」

「理由にならない。いずれにしろ、この体質とは文字通り一生付き合っ行って行かないとい

けないからな」

それに、あまり考えたくないが、もしかしたらアイツは災厄の渦中に放り込まれるかもしれない。

もし、そうなら……最低限キンジにはHSSを使いこなして貰わなくてはならない。

話が逸れたが、今話してる事とはあまり関係無いな。

「君にこの事を話したのは、兄として頼みたい。これからも、アイツの良いパートナーでいて欲しい」

「随分と突然な話だね。それに、さっきの話と組み合わせると、まるでキンジを貰ってくれって言うてるみたいだよ」

「急な話ですまないな……それと、あんな弟でよければ貰って欲しい。もっとも、アイツは無自覚に他の女性を魅了してるだろうがな。そのおかげでライバルは多そうだが」

彼女はクスリと、少女らしく笑う。

その表情は頭脳明晰でありながらも、理知的ではなく、むしろ実年齢よりも幼く見える。

彼女の無邪気なところもあるだろう。

「全く、人に片付けさせておいて二人でなに談笑してんだよ」

皿洗いを終えたキンジが近づき、霧の隣に座る。

「お前が普段、どんな風に過ごしてるのか聞いてたよ」

「そうだね。特に、キンジの女性関係について」

「頼むからそんな話を掘り返さないでくれ」

打ち合わせもしていないが、彼女は俺の言葉に合わせる。

キンジが不機嫌そうに言う辺り、女性に対してあまりいい印象を抱いていないのは、すぐに分かるな。

なのに白野をパートナーにしてるあたり、矛盾しているが。

彼女の事はあまり意識してないのだろう。

どっちにしろ、俺は邪魔そうだな。

「さて、俺は話す事は話したしな。あとは、ゆっくりしていくと良い」

俺は立ち上がって、女装を解くために部屋の中へと入って行く。

◆ ◆ ◆

「さて、俺は話す事は話したしな。あとは、ゆっくりしていくと良い」

俺の兄さんは、そう言って部屋の中へ入って行った。

おそらくは女装を解くためだろう。

声が若干低いために、あの姿で兄さんの声を聞くと……なんとも微妙な感じだな。

って、何を俺は思ってるんだ。

「それで？ 結局、何を話してたんだよ」

無意識のうちに霧にそう尋ねた。

会話の内容が気になる訳じゃない。

また、変な事を俺の兄さんに吹き込んでないかを確認するためだ。

「そうだね……キンジの体質について詳しくかな？」

兄さん、話したのか。

自分でも嚴重に、他言はしないって言ってた事を。

つまり、兄さんは霧を信頼してるんだろう。

「ま、そんなの無くてでもキンジは充分に面白いかもしれないけどね」

「……………」

思わず、その言葉に無言になる。

コイツは無意識で、何の意味も無く言ったかもしれない。

だが、ヒステリアモード以外の俺を認めてくれたような……そんな気がした。

そう思うと、嬉しいんだろう。

自分でも分らないが――

「どうしたの？」

相変わらずの幼さの残る顔で俺に、言いながら微笑みかけてくる。

やめろよ、その顔すんの。

今では、慣れたが……割と危ないんだからなお前の笑顔。

「いいや、それよりも俺に話して何なんだよ」

視線を逸らしつつも、本題に入る。

「ああ、その事ね」

霧はいつもの調子で、何でも無いように言った――

「私、しばらく日本を離れることになったんだ」

あまりに突然の告白。

俺が声を上げて尋ねる前に霧は、俺の口を手で封じる。

「おっと、言いたい事は分かるよ。だけど、私の事情は知ってるでしょ」

そうだ……

コイツには寿命が近い父親と、病弱の姉を抱えてるんだった。

それを考えれば、何かあったのかもしれない。

その答えに辿り着くと、自分でも思ったよりすぐに冷静になって行く。

霧も俺の落ち着いた様子が分かっているのか、手を離す。

「悪い……」

「まあ、突然に言われたら動揺するよね」

霧はそう言って笑顔でいながらも、俺が聞く前に事情を話し始める。

「簡単な話、お父さんの仕事を手伝う事になってね。ちよつと日本を離れることになったよ」

「……そうか」

「だけど、武偵高を離れる訳じゃない」

日本を離れるが、武偵高を離れる訳じゃない。

矛盾している言葉に俺は尋ねる。

「つまり、どう言う事だ？」

「簡単に言うと、退学する訳じゃないって事だね。一時的に休学するみたいなものだよ」

「そう言う事か……」

「お前、単位は大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。キンジじやあるまいし」

何気に酷いな。

つまり俺の見えない所でコイツは、既に進級分の単位を取得してるらしい。

さては、いつかは分からないが……日本から離れることを随分と前から知っていたんだらうな。

「だからまあ、武偵高を離れる訳じゃないけど、一時的にパートナーは解消しなくちゃい

けないんだよね」

そりやそうだろうな。

しばらくとは言え、武偵高にいない人物を誰かのパートナーにはおけないだろう。

「そう言う事か……」

「安心した？」

俺に差し迫るように霧は、近くに来る。

ニコニコと笑顔でいる辺り、俺をからかうつもりだろう。

もうその手には引っ掛からないぞ。

「——さて、どうだろうな」

俺が皮肉っぽく返してやると、霧は悲しそうな顔をする。

「酷いよ、キンジ」

……いいや、騙されないぞ。

「……………」

おい、何だよその僅わずかに潤ませた目は。

大体、正直に言うのと恥はずずかしいんだよ。

……………。

「安心したよ」

気恥ずかしいが、言わなければいけないような気がして、正直にそう言う。本当に何でかは知らないが。

「ぶっ……何だ、やつぱりそうなんだ」

途端に霧は吹き出し、笑顔になる。

コイツ――

思わず、俺は頬を引きつらせる。

が、しかし……霧とこう言ったやりとりもしばらくは出来なくなる。

そう考えると、何か感慨深いものがあるな。

まあ、仮にも1年と半年くらいパートナーやつてる訳だから、な。

そう思うのも自然なことかもしれない。

「そろそろ行くとするよ。半年くらいしたら、多分戻ってくるよ」

そう言つて、霧は立ちあがる。

「そうか。精々死なないようにな」

「その前にキンジが死なないようにね」

◆ ◆ ◆
強襲科^{アサルト}的なやりとりをしながら、霧は去って行った。

キンジと一時的にお別れした私は、イ・ウーへと帰って来た。

タキシードを着て、黒い外套がいのうを纏い、黒いシルクハットを頭に載せて——ある人ひとに会いに行く。

ノックも無しに扉を開けて、目的の部屋へと入る。

そこには、アンティークの机に座りながら私を待っていたかのように笑顔で出迎えてくれる。

「お帰り、ジャック君。武偵生活はどうだったい？」

お父さんは、私にそう尋ねる。

きつと、私の答えなんて推理できてるんだらうけど、それでも言葉にしておきたかったんだらうね。

「存外、悪くありませんでしたよ」

私は男性の声で、そう答える。

今の私はイギリス人男性。

印象としてはまさしく、英国紳士と言った感じ。

「そうか……それは良かった。だけど、残念ながらそろそろ本格的に歩み出さなくてはならない」

「なるほど。時間が無いと言う訳ですね」

「そうだね。ちょうど一年……それが僕の寿命だ」

お父さんはパイプを唾くわえなおしながらそう告げる。

「早速だが、ジャック君。僕としても心苦しいが……金一君の信条を折らねばならない。僕の曾孫を導き、最善の答えのために」

「分かっていますよ。私は貴方の家族なんですから、気軽に頼ってくれても構いませんよ」

「助かるよ……では、早速だが金一君と共に行って欲しい場所がある」

その任務の場所を言われ、目的と概要を説明された後に、私は静かに部屋を出る。

ああ、楽しみだね……

22：折れゆく心

1ヶ月――

お父さんに頼まれた任務の準備に掛かった期間。

まあ、私はすぐに他の人になれる訳じゃないし、それと、同じ人は二人もいない。矛盾が生まれるからね。

ドオオオオン！

と、くぐもつた轟音が響き、施設が揺れる。

電力供給の無人施設が爆発した音か。

金一……いや、カナが上手くやったみたいだね。

「なんだ？」

私の周りにいる研究員がざわざわ、と騒ぐ。

そしてすぐに施設内の電気が消える。

「おかしい、予備電源が作動してないぞ」

当たり前だよ。

それは私が無力化してるからね。

さて、そろそろ私はここの責任者に会いに行かないと。

私は机から立ちあがり、オフィスのような部屋から出て行く。

研究所の廊下を悠々と歩いている最中に予備電源が作動してないことに疑問を覚える人たちが、何事かとうろたえている。

そして研究所を護つてゐる軍人たちが私の隣を通つて行く。

私には気付かない。

誰も――

しばらく歩き、ここの研究所の責任者がいる扉へと辿り着く。

電子ロックやカードスキャナーを通さなければ行けないが……電源が作動していない事により、その必要も無い。

「すみません主任」

私はそう言つて、中に入る。

「ライリーか……一体、どう言う事だと思う？」

私の方を向いて彼は、私が成り代わっている人物の名前を言つて尋ねる。

「分かりません。ですが恐らくは、襲撃を受けていると思います」

「だろ。端末で他の部門に連絡。電子機器がダウンしている以上、バックアップを取つてゐる時間は無い。重要なファイルを持ちだせるように連絡してくれ」

「主な研究メンバーは集めますか？」

「ああ、集めてくれ」

私はすぐに携帯を使って、ここの研究メンバーに集まるように言う。

電話番号はきつちりと覚えてる……と言うよりは、私が成り代わってる人の元々の所有物なんだけどね。

しばらくして、他の研究メンバーがこの部屋に集まってくる。

全員がいる事を確認すると、主任は話を切り出す。

「見ての通り、どうやら襲撃を受けている事は分かっているだろう。通信機器も何も使えない。連絡が取れない以上、状況を確認してる暇は無い」

「研究データはどうするんですっ!?! まさか、全て捨てるつもりでは?!?!」

若い女性研究員がそう声を荒げる。

「いや、ファイルだけは確保してくれ。軍人がいると言っても、事態が収束するとは限らない」

「この人は、割と決断が早いね。」

「イ・ウーと言う組織により、アメリカ国内のいくつかの研究所が破壊……また、研究員すらも帰らぬ人となっていると言う通達が来てる。機材は無料じゃないが、代替はある」

随分と賢明な判断だね。

「すぐに撤退だ。他の研究員にも連絡してくれ」

それを最後に彼らは部屋を出ようとするけど……

私は扉の前に立っている。

「ライリー、ちよつと邪魔よ」

「ああ、すみません。ですが、ちよつと言い忘れた事があります」

「何よ……」

声を荒げた女性研究員が私に変な目を向ける。

他の研究員も同様。

残念ながら……もう、遅いんだよね。

「チエックメイトですよ」

◆
「Freeze！」

◆
アサルトライフルを構えた軍人たちが私の前に立ちはだかる。

◆
だけど、ゴメンなさいね。

◆
パン！ パアン！

私は見えない銃撃——インワイジビレ不可視の銃弾を放ち、彼らが装備しているヘルメットに掠め

る。

そして、そのまま振動により昏倒して彼らは倒れる。

数だけが多いわね。

全ての軍人を無力化しつつ、他の研究員に見つからないように、私は目的の場所を指す。

(ジャックと仕事をするのは、気が進まないけど……)

これもイ・ウーのリーダーである教プロフェッショナル授の命令。

そして何よりも、組織に馴染むために必要な事だから仕方ないわね。

確か、ジャックの情報によると……この先が研究所の責任者がいる場所だったはず。

そんな場所を軽々と集合場所に指定し、おまけに彼がその場所にいると言う事は……

(また、誰かに成り代わったわね)

相変わらず、末恐ろしい奴ね。

準備にとは言え、1ヶ月——それだけで、他の人には不審がられる事もなく成り代われる。

今の私でも見抜けるかどうか怪しい。

いや……そもそも奴が、本当はどう言った人物なのかすら知らない。

見抜くも何も無いわね。

そのためには――

(理子……あの子が教プロフェッショナル授以外にジャックを知るカギとは思わなかったわね)

もつとも、ジャンヌからそれとなく聞いた事だけだ。

一体、彼女とジャックにどんな関係があるのかは詳しくは知らない。

少なくとも師弟関係であつたことと、彼女がジャックを慕したっているのは確か。

……と、考えてる間に辿り着いたわね。

既に扉は開いてるでしょうと、私は扉に手を掛け、開ける。

「お待ちしていましたよ、カナ」

タキシードを着たヤツは机の上に腰掛けながら、笑みを浮かべている。

その周りには縛られて、口に布を巻き付けられている男女が5名。

恐らくはここを代表する主なメンバーでしょう。

「ええ、それで？　ここにいてるって事は、仕事は終わつてるんでしょう？」

「そうですね。あとは施設内の設備を壊してさようなら、と言つたところでしょ

う」
「だったら、さっさと帰りましょう」

「ええ、それではお願いしますよ。カナ」

「お願いします？」

一体、何をお願いすると言うのかしら――

……嫌な予感がする。
全員殺しなさい
 「Kill, em all」

「……………どう言うつもり？」

設備を破壊して研究を阻止しろ、と言われただけで殺せだなんて任務は言い渡されて
 いない。

そう言外に尋ねる。

「何を不思議がる事があるんです？ ちゃんと任務で言われたでしょう」

「ええ。設備の破壊であって、研究員を殺せとは言われていないわ」

とぼけたようなフリをする彼に向かって、私は少し苛立ちを覚える。

なのに彼は、逆に私の質問に疑問を覚えている……が、すぐに納得したような顔をす
 る。

「ああ、なるほど。全く、鈍いですねえ」

「……………」

「研究員”も”設備でしよう？」

「——ッ!!」

すぐに胸倉に掴みかかった。

コイツは、一体どこまで堕ちていると言うの!?

「やれやれ……甘い人ですね。いいですか？ 機材なんてコストが掛かるにしても、代用は幾らでもあるんですよ。つまり、阻止するには何事も元を断つと言う事です」

そう言いながらジャックは自分の頭を指すように叩く。

その意味は知りたくなくても、分かってしまう。

人の記憶がある限り、環境が整えば……同じ結果は得られなくても同じ作業は出来る。

「ああ、キレイなままでいたいのでしたら、私に任せてくれても構いませんよ。」あの時”と同じように見捨てればいいのですから」

「また、私に選ばせるつもりね……」

「そうですね。ただ、今回は強制しませんよ。全員が助かる道もちやんとあります」

……全員が助かる道？

一体何を話してるの、コイツは。

「選択肢は主に3つ。1つ、アナタがその5人を殺して他の人たちを見逃す」

……

「2つ、私に任せて施設内の全員が死んでいくのを待つ」

……

「3つ、私を殺して全員が助かる」

最悪の選択肢。

出来る訳がない……

選べない……

私は、ジャックを掴んでいた手を静かに離していた。

「ドウシタンデスカ？」

奴の言葉が、気味悪く感じる。

今まで色んな犯罪者を見て来たつもりだったけど……違った。

目の前のバケモノは、次元が違った。

「私に、人を殺せと言うの……」

「いいえ、だから言ったでしょう。見殺しにすればいいんですよ。自分の手を汚したくはないのでしょ……」

愉快そうに嗤う。

「そう言えば、大層な信条を掲げているんですね。誰も殺し誰も死なさず誰もを助ける、でしたか？」

……嗤う。

「止めたければ私を殺しても構いませんよ。もつとも……アナタの信条に反する事になるでしょうが」

……殺す。

切り裂きジャックを？

だけど、奴の言う通り……それこそ、私の信条を今度は私自身の手で自ら捨てることになる。

どうすればいい？

何をどう選べばいい？

ピリリリリリリリ！

場違いな音が、私の思考と静寂を破る。

この携帯は、イ・ウーのメンバーと連絡を取るための物。

こんな時に誰？

「もしもし……」

『ええ、もしもし。ジャックです』

なぜか電話を掛けてきた。

そこで私は気付く……奴の声が”電話でしか”聞こえない。

——いない!?

顔を上げて奴がいた場所を見れば、部屋の中からすでに消えていた。

『周りに知られるには時間が掛かるとは言え、あまり掛けてはいただけませんのでね』

「まさか、今すぐにも他の研究員を殺すつもり!？」

『いいえ? ただ、1分待つてあげますよ』

……1分。

何の時間だと言うの?

『さっきの選択肢から1つを、1分以内に決めてください』

「ふざけないでッ!」

『ふざけてなんていませんけど?』ともかく、今からきっかり1分です。何を犠牲にし

ますか? 信条か、少数の命か、大勢の命か』

奴の言葉を最後に、ツーツーと言う音が耳に残る。

止めないと……だけど、この人たちを置いて行くべきなのか?

私は、助けを求めるように声を上げようとする5人に目を向ける。

ダメ……連れて行く線はない。

奴と鉢合わせした時に護りながらは戦えない!

そこまで甘い奴ではないわ。

何より、ジャックにとってこの研究所内にいる人全員が標的。

この5人に拘らず、他の人たちを狙う可能性が高い。

私と正面から戦うなんて言う面倒な事はしないはず。

動かずにじっとしている方が、まだ安全……
だったら――

「ごめんなさい。しばらく大人しくしてて頂戴」ちようだい

私は扉を閉めて、駆けだす。

――残り45秒。

どこ？

奴はどこにいるの?!

明かりのない研究所の中を私は探す。

研究所内には確実にいる。

どこを目指す……

落ち着いて、推理しなさい、私。

効率的に多くの人が集まる所を奴は目指すはず。

そして、奴は切り裂きジャック……自分の手で人を葬_{ほうむ}るでしょう。

（――だとしたら!）

私の足は目的の場所へと目指す。

――のこり30秒。

何人かの研究員に見つかるけど、気にしてられない。

最短距離で行かないと間に合わない。

——のこり15秒。

目的地である、研究所の玄関ロビーが近づいて来た。

暗くても分かる。

扉が開かない事で出来た人だかりが。

多くの人の話し声も聞こえてくる。

そして、静かに彼らに近づいて行く人影に向かって大鎌——サソリの尾スソルピオで行く手を阻むように刃の向いてる内側へと入れる。

「動かないで、私が鎌を引いたら切れるわよ」

私がいる後ろを振り向く事もなく、ジャックは呆れるように首を振る。

「それで？ 答えとしては、私を殺す事に決めたんですか？」

「いいえ、誰も殺さないし誰も死なせないわ。私は何も捨てない。キンジにも顔向けできないしね」

親を早く亡くしてしまったから、キンジは親の愛情なんて他の子たちと比べればあまり知らない。

それに、親がいない以上……親の背中を見ながら成長なんて出来ない。

私が道しるべになるしかない。

だから折れる訳にはいかない。

「さすがのあなたでも、私とよそ見しながら戦えるほどバケモノでもないでしょう？」
「……………はあ〜」

静かに息を吐く声が聞こえる。

「どうやら、何とか止められたみたいね。」

「1つ、私の事について教えて上げましょう」

唐突にそんな事を彼は言う。

「ここに来て時間稼ぎ？」

いや、その可能性はさすがに無い。

いつもの気まぐれでしょう。

「何を教えてくれるのかしら？」

「そうですね……私も一応、最初は誰かに教えて貰っていた訳なんです。その誰かと言うのはご存知ですか？」

昔話をするように、彼は言う。

「知らないわ。あなたの過去なんて詳しく知ってるのは教授プロフェッサーくらいよ」

「じゃあ続きを話しますと、私の教師役はカツエーグラッセだったんですよ」

カツエーグラッセ……魔女連隊レギオン、ムジカの子だったわね。

今となつては、イ・ウーを自ら退学してOBとなつてゐる人がジャックの教師役ね。

「話におチが無い、なんて事はないわよね？」

「まさか。続けますと、一般的に言えば先輩な訳なんですけど……あの人が自ら出て行く理由を作つてしまつたのは私ですってね」

「何をしたと言うの？」

「簡単な話、うっかり半殺しにしてしまいましたよ。日頃の欲求不満でね」

「そう。まさか、それがおチじゃないでしょうね？」

私がそう尋ねると奴はここからが本番とばかりに「いいえ」と、楽しそうな声を上げる。

「カツエIIグラフィッセが私の教師役となつたのは教授プロフェッショナルの命令だつたそうなんですけど。どうやら教授プロフェッショナルは、相性すらも推理できていたようですね」

つまり、相性が良かったと言うことね。

………いつもの気まぐれにしては、やけに喋る。

一体、何を考へてると言うの？

「まさか、私にも超能力スーパーステリスの才能があるとは思いませんでしたよ」

「……それは、初耳だわ」

「さて、突然ですがここで今のアナタの心境を当てましょう。なぜ私がこんなに喋るの

か分からない……そうでしょう？」

「……………」

おかしい——

どうしてこの状況でジャックは楽しそうにしている？

本来なら阻止されて、面白くなさそうな顔の一つや二つはするはず。

なのに表情を見なくても分かる。

この状況を楽しんでる。

時計を見て、彼は言った。

「さて、”ゲームが始まって” 2分ほど経ちましたね」

「……………」

——ゲームが始まって……

……………ツ?!

私の脳内が何かを告げる前に、鎌を振り抜く。

ピシヤアと、私の顔に液体が飛び散る。

それは血じゃなくて、

——ただの”水”。

そんな……そんなツ!!

私はすぐに来た道を引き返す。

今まで話してたのは、ジャックじゃなかった!!

ジャックを模った人形……パトラと同じ、超能力ステルスによって作られた人形だった!!

今まで話していたのも時間稼ぎ。

(……まんまと引つ掛かった)

思わず舌打ちをする。

そもそも研究員を全員殺す必要も無い。

主要なメンバーを殺せば、研究を頓挫とんざさせるには充分だ。

なのに私は、奴の事だから皆殺しにするのが当たり前だと思っていた。

段々と研究所の主任室の扉が見えてくる。

迷ってる暇も無い。

バン! と扉を勢いよく開け放つ。

既に暗闇に慣れた目が、彼らの無事を確認する。

(良かった……まだ、生きてる)

……でもおかしい。

彼らを狙ったのではないなら、ジャックは一体、どこに?

よく見ると彼らは私に何かを伝えようとしている。

「……………!!」

誰かが叫ぶ。

その瞬間に、

——彼らの首が飛んだ。

なんで……

どうして？

私は、確かに間に合ったはず……

また、救えなかったのか……俺は——

静かに部屋の中へと足を踏み入れる。

目の前の光景は、冗談でも何でも無い。

たった今、この惨状になるのを目撃したのに、どこか冗談だと思ってる。

一歩進めば、ピチャリと音を立てる。

今度は水ではなく——血。

転がっているのは、人だった頭。

「うっ……ゲホッ！」

自覚する度に吐き気が襲う。

漂ってくる死臭。

膝を突き、頭を下げる。

ピリリリリリ!

鳴り響く、コール音。

何も考えずに出るしかない。

『いやはや、やりましたねー』

「……………お前が、やったのか…………?」

『やったのは、アナタでしょう』

「ふざけんじやねえッ!」

コイツが…………!!

電話の向こうにいるヤツジャックの所為で!!

『確かに私は罫を仕掛けましたよ。しかし、起動したのは他でもないアナタだ』

…………やめろ。

『別に良いですけどね。まあ、言い訳なんて幾らでも出来るでしょう?』

…………やめろ。

『選んだのではなく、選ばされた。殺したのではなく、殺させられた。救えたのに、救わ

させてくれなかった』

「やめろおおおおおおッ!!」

電話を投げ捨てる。

動揺で息が荒くなる。

「ハッ……ハッ……ハアッ！」

「アナタは神様ではないのですよ。お分かりですか？」

静かに後ろを振り返る。

アイツが……ジャックが嗤っている。

愉たのしそうに。

……

——殺してやる。

「うおおおおおおおおおおおッ!!」

鎌を振り上げ、首を狙う。

躊躇ためらいなんて無い!!

「ぐほっ!」

漏れ出たのは、俺の息。

いつの間にか拳が、腹にめり込んでいる。

(……クソッ、たれがッ!)

そう思いながらも、俺は……地に伏せる事しか出来ない。

「お前だけは、許さな——……」
途端に衝撃が来る。

(意識が暗く……チクシヨウ)

完全に俺の意識は、遠のいた。

殺意と折れゆく心を残して——

23 : ポイント・オブ・ノーリターン

「もう充分でしよう?」

私はお父さんの部屋に入って、そう切り出した。

対してお父さんは相変わらずパイプを口に咥くわえてる。

喫煙してもお父さんが推理してた寿命が変わらないって言うのは、どう言う事なんだか……

まあ、大方イロカネが関係してるんだらうけどね。

「そうだね。金一君の信条は、かなり揺らいでるだらう。そして、今日……彼にはもう一つ決断して貰わなければならない」

今日——12月24日。

今の今まで、お父さんの言う通り私は忙しかつた。

8月の終わりらへんで、私は金一を敗北させた。

信条が揺らぐように。

それが終わってからと言うものの……手を貸してくれだの、なんだの忙しかつたんだよね。

おまけにジーサードには見つかつて、逃げるのにも一苦労だよ。
つまるところ、お父さんの推理通りだった訳だけど。

そして昨日、イ・ウーへと戻ってきたばかり。

「理子も頑張ってるみたいだね」

「彼女なら、今頃舞台を整えている最中だろう」

「それで？ どこに向かえばいいの？」

「浦賀沖を航行するクルージング船がある。そこに、金一君はいる」

「船の名前は？」

「——アンベリール号だよ」

さて、魚雷型の潜航艇『オルクス』で、私は目的の場所に着いた。

と言ってもまだオルクスの中で、船と並行して移動してる最中だけど。

さて、集合場所の甲板に行かないと。

『どうも、りこりんです。お姉ちゃん、着いた？』

インカムから理子の声が聞こえる。

「んー？ 今、海面の下で離れて航行してる。誰か甲板にいたりする？」

『いいや、誰もいないよ。大体、こんな寒空の下に来る物好きなんていないって』

そう言えば、冬だったね。

「そっか……じゃあ今から行くよ」

浮上して、ハッチを開ける。

そして、波に揺られながらも甲板に向かってフックショットを放つ。

引つ掛かった事を確認しつつ、強力なモーターによってワイヤーが巻き上げられて、私の体は上へと浮いて行く。

甲板の高さへすぐに辿り着くけど、回転数が速いためにそのまま通り過ぎて、少しだけ空中に浮き、クルリと回転しながら甲板に着地。

「10点ー」

ノリのいい理子は、体操選手の評価をするように叫ぶ。

「どうもどうも、ってね。首尾はどうなの？」

「抜かりはありませんぜ、あねじ姐御」

自信満々に、変装している理子は言う。

取りあえず姐御だとか呼称は置いておこう。

「それにしても、お姉ちゃん……着飾ってるね」

「まあ、パーティードだからね。豪華客船に乗るんだったら、こう言うのが自然だし」

私が着ているのは黒色の、落ち着いた感じのパーティードレス。

肘より先が露出している以外は、そんなに肌は出ていない。

風に吹かれてカーテンのように揺れるフリルの着いたスカートは、膝下^{ひざ}までである。

「顔も声もキーちゃんだけど、大丈夫なの？」

そう、理子の言う通り今の私は白野 霧。

あと、変わった点として髪が長くなつてショートからセミロングになつた。

ちよつとした気まぐれで印象を変えたんだけどね。

「サプライズは大事だからね」

「……悪い顔してるよ」

「そうかな？ 私としては笑顔のつもりなんだけど」

まあ、何にしても今日で武偵である遠山 金一は死ぬんだけどね。

「それじゃあ理子。あとは予定通りによろしくねー」

私は船の中へと歩いて行く。

◆ ◆ ◆

俺は、果たして……このままでいいのだろうか？

あの惨劇から4ヶ月ほど経つ。

俺が気絶した後、研究所は全て破壊された。

その結果だけをイ・ウー内で言つて、ジャックは去つて行つた。

他の研究員はどうなったのか、果たして無事なのか？ と、アイツに色々と言ってやりたい事もあった筈なのに、俺は見送る事しか出来なかった。

そう……奴の罠に掛かったとは言え、間接的にだが——殺してしまった。

そして自分の信条を破つてまで、奴を殺そうとした。

自覚した時に、俺は……苛まれた。

自分が堅く誓っていた事が、父親と同じようにあろうとした事が……簡単に脆く崩れ去つて行つたような気がした。

何より掌てのひらで踊らされていたのだと感じる度に、苛立ちを覚える。

俺が未熟なのは当たり前だが……ここまで”未熟過ぎる”とは、思いたくなかった。

「……………ッ！」

アイツの言葉が、離れない。

『見殺しにすればいいんですよ。自分の手を汚したくはないのでしよう？』

もし、俺がアイツを殺せば……俺が手を汚せば、防げたんじやないのか？

相手は殺人鬼、例えば法廷に出したとしても極刑は免れない。

そもそも切り裂きジャックに対しては、武偵や警察と言った行政機関には殺人許可が降りている。

武偵法9条は適用されない。

これから先もアイツは……誰かを喰らうようにして生きていくだろう。
「と……やま……いッ！」

——多くの人を救うためには、犠牲を強いるしかないのか？

「遠山、おい！ 聞いているのかッ?!」

「……ッ」

同僚の声が聞こえる。

「どうやら、考え過ぎていたらしい。」

「全く、最近呆然としてるが大丈夫か？」

「あ、ああ……すまない。考え事をしていた」

「へえ。普段は真面目で堅いけど甘い、お前さんがな……」

「色々と余計だ」

軽口を叩きながらも、俺はその場を離れる。

「おい、どこに行くんだよ？」

「シフトだろう？ 休憩させて貰うさ」

「なんだ、聞こえてたのかよ」

同僚の言葉を背に、俺はパーティーを楽しんでいる人たちに目を向ける。

輝くシャンデリアの下で、今の俺とは違って彼らは笑顔でいる。

鏡を見なくても分かる。

自分でも、酷い顔をしてるに違いない。

(……………ん?)

今、見知った顔を見たような気がする。

が……………すぐに、分からなくなった。

何故か気になって、俺は邪魔にならないように人混みの中に入って行く。

しばらく首を回しながら、探す、やはり分からない。

「金一さん？」

突然に後ろから声を掛けられた。

この声は——

そう思っただけ振り返る。

「……………霧、なのか？」

セミロングでストレートの髪の少女が立っていた。

「やっぱり金一さんだ」

笑顔を見せる彼女は、間違いなく霧だった。

「まさか、こんな所で会うとはな……………」

「まあ、私のセリフでもあるけれどね。仕事？」

「見ての通りだ。豪華客船のパーティーに、こんな服を着てくる訳ないだろう」

自分の服装を示すように、他の人にぶつからないよう手を少し広げる。

防弾の黒いロングコートに編上げのブーツ。

仕事服ながらもパーティーの雰囲気は最低限、壊さないと云った服装だ。

「そう言う白野は、どうしてここに？」

「お仕事の一環かな？」

「お互いに仕事か……」

「私の場合は仕事よりもパーティー優先だよ」

確かに彼女は黒色のパーティードレスを着ている。

心なしか、髪型と相俟あいまって大人びて見える。

「似合ってるよ、キレイだ」

「なに？ 口説いてるの？」

「社交辞令だよ。休憩中とは言え、口説くなんて事をしてたら上司に怒られる」

「キンジみたいに慌てたりはしないか……」

「アイツは初心うぶ過ぎるだけだ」

俺がそう言うと、彼女はクスリと笑う。

そう言えば……夏休みに会った時、言いそびれていた事があった。

「少し、話があるんだが……いいか？」

「別にいいけど……個人的な話なら外に出ようか？」

「いいのか？ 寒いぞ」

「大丈夫だよ。上着はちゃんとあるから」

なら、安心だ。

それにしても気が利くな。

少し申し訳なくも思うが。

コートを羽織った白野と共に、船の先の甲板へと向かう。

寒い冬の風が、頬を撫でる。

こんな寒い空の下に来る人はあまりいないだろう。

海を見ながら、甲板に設けられた柵に腕を乗せる。

「お話って？ HSSについてじゃないのは、分かるけど」

「ああ、あの時は本当は言いたい事があったんだ。話が変わって、俺達の体質についてになってしまったがな」

……そう。

彼女に対して俺は謝罪していない。

あのジャックではないかと、疑ってしまった。

「君に一つ謝っておきたい事がある」

「ん…………？」

「俺は、以前に君の事をとある犯罪者が化けてるのではないかと疑ってしまった。すまない」

「とある犯罪者、ね。どんな犯罪者なの？」

「どんな犯罪者…………か。」

切り裂きジャックだと思っていた、なんて言えない。

いくらなんでも失礼過ぎる。

「そうだな…………その犯罪者は、他人に化けるのが得意なヤツだ。本当はどんな顔で、どんな人物なのかも分からない」

「それって存在してるの？」

「普通なら、そう思うだろうな。だけど、確実に存在している」

「そう、存在している。」

…………あんな巨悪を、俺は見過ごしている。

こんな事、父親に聞かれたらなんて言われるだろうな。

あの人は、『静かなる鬼』と言われたほどで、家庭でも例外じゃなかった。

きつと怒鳴り散らされるだろう。

「そっか。まあ、何にしても謝る必要なんてないよ」

「そう言ってくれると助かるが、俺としてもケジメを着けておきたかったんだ」

「お堅いね」

彼女はにこやかにそう言う。

「よく言われる」

俺も、自然に微笑んで返していた。

すると、突然に俺の携帯がバイブを鳴らし始める。

ポケットから取り出して表示を見れば、『非通知』の三文字。

間違い電話か？

通話ボタンを押して出る。

「もしもし？」

『ご機嫌いかがですか？』

その声に悪寒が走った。

聞き間違える筈も無い……この声は、夏の終わりに研究所で聞いた時の声ッ!!

『女性と二人、甲板で仲良くとは……存外、ロマンチストだったりするのですかね？』

コイツ……!!?

隣にいる白野に気づかれないように、辺りを見回す。

どこにも人影は見えない……

取りあえず、努めて冷静に返す。

「何か用か？」

『いえね、そろそろアナタには一つ決断して貰わなければいけないですよ』

「何をだ？」

『イ・ウーの一員であるのか、はたまた武偵であるのか』

——クソが……

そう言う事か。

確かに今の俺の立ち位置は中途半端だ。

武偵でありながら、犯罪組織の一員となっている。

いい加減にどちら側の人間なのかをハッキリさせろと言う事か……

プロフエション
教授——いや、シャーロック。

ここにきて、選択肢を突き付けて来たか。

「俺に、どうしろと言うんだ？」

『隣にいる人を殺しなさい』

——……なに？

『隣にいる女性を殺せれば、イ・ウーの一員として改めて認めましょう』

幻聴じゃない、聞き間違いでもない。

隣にいる白野を——弟のパートナーを殺せって言うのか?!

(どこまでも平然と、コイツは……!!)

携帯が壊れるくらいに力が入る。

だが、そんな俺の心境など構うこと無くヤツは話を続ける。

『まあ、出来ないのなら……船もろとも沈んで貰うしかないですね』

「……今度は何をした?」

『いえ、クリスマス・イブですからね。前祝いとしてクラッカー代わりに派手に爆破しよ

うと思ひまして』

「何を言ってるのか、分かってるのか……?」

『分かっていますよ? 乗客、約1000人がキリストの所へ旅立つかもしれませんがね』

もう、何を言ってるのか分からない……コイツは何を言ってるんだ?

なぜ、コイツは——

『温いんですよ。アナタは……』

「……………」

『アナタの信条は立派であるとは言っておきましょう。そして、それを実現できていた

のもまた素晴らしいことです。ですが人である以上、犠牲も無しに誰かを救う事など出来ない』

「……………」

『それにアナタはイ・ウーについて知り過ぎた。我々と来る気が無いのなら、武偵として死んで貰うだけです』

その言葉を最後に、ヤツとの通信は切れた。

力無く、携帯を下ろす。

全てが幻聴だと思いたい。

だが、違う。

俺はまた、選ばなければいけない……

「金一さん？　どうかしたの？」

心配するように、俺に声を掛けてくれる彼女。

白野を殺さなければ……俺だけじゃない、同僚も、関係のない乗客たちも、死ぬ。

だが白野は、アイツが——弟^{キンジ}がやっとな見つけたパートナーなんだ。

それを兄である俺が奪えと、アイツ^{ジャック}は言う。

もう俺には、何が最善かも分からない。

——救えない。

犠牲も無しに誰かを救う事なんて、俺にはもう……出来ない。

「くっ……ふふふふふ！ あはははははははははははッ！」

白野が突然に、狂ったように笑いだす。

こんな時に、一体何だと言うんだ……

そうぼんやりと思いつながら、彼女は無邪気に、腹を抱えて笑い、柵を叩きながらも笑う。

「ひーッ……あー、お腹痛い……。いやー、傑作だね。今までに無い表情だったよ」

途端に白野の雰囲気が変わっている……

何だ、今度は何だって言うんだ。

まるで理解が追いつかない。

「あー、理子。もう出て来てもいいよ」

理子だと……？

そう思っている内に、甲板に一人の人影が現れる。

「ゴメンねカナちゃん——じゃなくて、今は金一か」

そう言つてここの乗組員の格好をした理子が現れる。

何だ？ 何が起こってるんだ?!

いや、待て。

白野が理子を知っている事について疑問はない。

そもそも理子は、何が目的かは分からないが武偵高に通っていた。

そして、白野も同じ東京武偵高に通っている。

ならば二人が知り合いだったとしても何の不思議も無い。

だが、なぜこの状況で理子を呼んだ？

何かがおかしい。

これではまるで——

「おい……どう言う事だ!？」

「まあ、不思議に思うだろうね。と言うより、理解が追いついてないって感じかな？」

そう言いながら彼女は、俺から離れて行き、理子の隣へと立つ。

「つまりはこう言う事だよ」

そう言つて白野がコートを脱ぎ捨てる。

そうして現れたのは……黒いシルクハットにタキシード、黒い外套がいとろを羽織つた彼女。

その姿は忘れるはずも無い。

シルクハットと外套はなかったが、夏の終わりに研究所で見た姿とほぼ同じ。

——何の冗談だ。

なんで、白野が……

ジャックと同じ恰好かつこうをしてるんだ?!

そんな俺の疑問に答えるかのように、

「どうも白野 霧……改め、切り裂きジャックジャック・ザ・リッパーです。よろしく」

シルクハットを取り、紳士的なお辞儀をしながら自己紹介をする。

俺は、彼女の言葉に絶句するしかない。

……嘘だ。

そんな事が、あつて良いはずがない。

あつては……ならないッ。

「だから、言つたでしょう? 謝る必要なんか無いって、だつて疑つてた事は、正しかつ

た”んだから」

「き、さま……!!」

にこやかに嗤わらうヤツに、俺は我を忘れそうになる。

それと同時に一つの考えたくない事が、頭の隅に思い浮かぶ。

ジャックが白野だったとして、”本当の白野”はどこにいるのか……

同じ人間が二人もいれば矛盾が生まれる。

だとすれば、

「お前、本当の白野はどこにやつた?!

「本当の白野？ 私だけど？」

「そんな冗談を聞いてるんじゃないッ!!」

「ああ、なるほど」

白野の顔をしたジャックはそう言って、何かを納得したような表情をする。

「私が本当の白野を殺したと……そう思ってるんだね？」

「それ以外に何かあるって言うんだッ！」

「そうだねー、分かるように言っただけ……白野 霧って言う人はね、そもそも”存在しない”んだよね」

存在しない……だと？

「白野 霧とジャックはイコールだよ。つまり、こう言える。私は本物の白野 霧であって偽物なんかじゃない」

そんな、バカな事があつてたまるか……

「まあ、お父さんを甘く見過ぎなんだよね。世界一の探偵なんだから、書類偽装一つとっても、見破るなんて不可能に近い事だよ」

ニコニコと白野の顔で、言ってくる。

「確か、日本語の諺ことわざで後悔先に立たずだっけ？ まさしくそうだよね。最初に銃を見せた時に警戒してたのに、しばらくしてすぐに解いちやうんだもん。せめて自分の勘は信

じるべきだったね」

全て、嘘だった……

最初から、初めて会った時から、踊らされていた。

俺の実家で初めて会い、キンジにとつていいパートナーだと……そう思っていた。

今まで悲惨な事件があつても、俺は現実だと受け入れて来た。

だが、今回ばかりは受け入れられる訳が無い。

誰か、夢だと言ってくれ……

「さてと、早いとこ決断して貰わないとね。まあ、どっちにしろ表舞台から消えて貰うしかないんだけど。それに消した後は、キンジに会いに行かなくちやいけないんだから」

キンジ……

そうだ、コイツは俺だけじゃない。

同じ学校の生徒も、何よりも俺の弟を騙している。

そう考えると何もかもが腹立たしく思える。

こいつの存在が、憎いッ！

「私を撃つ？」

白野の言葉に初めて気づく。

無意識で俺は、コルトSAA（ピースメーカー）の銃口を白野——いや、ジャックに

向けていた。

「それもいいけどね。切り裂きジャックは死ぬけど、同時にキンジのパートナーも死ぬ事になるよ？ それでもいいのかな？」

——ッ!!

そうだ。

キンジにとつては、まだコイツは信頼のおけるパートナーだ。

それを俺は撃つていいのか？

だが、ここで討たなければ……これからもコイツは人を騙し、殺して行く。

そんな事を義に生きる遠山の一族として見逃していいのか……？

「迷ってるねー。じゃあ、もつと分かりやすい選択肢を出してあげるよ」

そう言つてヤツは、静かに俺に近づいてくる。

引き金トリガーに乗せた指が、震える。

どう言うつもりか、ヤツはまるで避ける雰囲気が無い。

今撃てば、当たる。

だが——、

(撃てない……！)

迷ってる内に、もう俺の手が届く所まで近づいてきた。

どうする……HSSでもない俺が、コイツを取り押さえるのは至難の業だ。

そんな素振りを見せれば、確実に船を爆破するだろう。

犠牲者が、出てしまう。

助けを呼ぶ？ そんな事をコイツが許す訳が無い。

ゆつくりとヤツは、俺のピースメーカーの握る手を持ち、その銃口を——自身の心臓がある場所へと誘導した。

「犠牲を厭わず、信条を自分の手で捨て、キンジのパートナーと一人の犯罪者の人生を終わらせるかどうか……その選択肢を上げるよ」

「……ッ!？」

その言葉に俺だけじゃない、理子も驚いている。

「おね——ジル、そんなのあたしは聞いてないぞ!」

協力していた理子が焦ったような男口調で、そう言う。

「そりゃあ言っつてないからね。聞いてないからって、邪魔はしないでよ？ 今、良い所なんだから」

そう言っつてヤツは俺に向き直った。

銃を握る手に思わず力が入る。

理子は、何も言わない。

俺も、何も言えない。

決断が出来ない。

ここでコイツを殺せば、終わる。

ジャックに殺されるかもしれない、未来の犠牲者は救われる。

その代わりに、今いる船の皆が死ぬ。

こいつの言う通り、犠牲を厭いとわず、信条を自分の手で捨てれば……ジャックと言う巨悪を、討つ事が出来る。

だが、仮にそうした所で、

(俺に残る……?)

今までやってきた事を俺自身で否定する事になる。

そもそも、そうして帰ってキンジにどう説明すればいい？

白野がジャックだから殺した。

そう言つてキンジが信じるのか？

信じられる訳が無い。

そこまで考えた所で、俺は何も考えられなくなつた。

……何も分からない。

何を選べばいいのかも分からない。

「う、クソ……」

悪態を吐きながら、俺は一步、二歩と下がる。
そんな俺を見て、ニヤリと笑う犯罪者^{ジャック}。

クソ、が……

そこまで分かっていて、コイツは。

……。

討てない。

ガシャンと音を立てて銃を落とし、膝を突く。

俺には結局、どうする事も出来ない。

何が……特命武偵だ。

笑わせる。

たった一人の悪意に、勝てない。

「ぐッ……クソツたれが——!!」

思わず、涙が出る。

悔しくて、どうする事も出来ない自分に——

「それじゃあ、新しい選択肢だね」

愉しそうな声が、聞こえる。

◆ ◆ ◆
「今回の事件について、どう思いますか!？」

「お兄さんと同じく武偵であるようですが、今回の件についてどう感じていますか!？」
いくつものフラッシュユが、俺の目を刺激する。

今の俺には何も聞こえない。

だけど、俺の頭の中を一つ言葉が支配している。

——兄さんが、死んだ。

昨日の浦賀沖を航行していたクルージング船・アンベリール号が海難事故を起こした。

事故の原因は、人為的な爆発らしい。

テロかもしれないし、ただエンジンが爆発しただけかもしれない。

詳しい事は何も分かってはいない。

幸いにも、乗客は全員……救命ボートに乗って脱出したらしい。

だが、俺の兄さんだけは乗り遅れたのか、アンベリール号とともに沈没した。

何時間にもわたる捜索をしたが、夜間と言う事もあり何も発見できなかった。

俺は訴えた……もう少しだけ探してくれと。

だが、返ってきたのは「これ以上の捜索は無意味」と言う、冷たい言葉だった。

あの兄さんが……どんな難事件も解決してきた兄さんが、死んだ。その事実を信じられないでいる。

あの人はヒーローだった。

例えるなら戦隊モノのヒーローそのものだ。

ピンチには颯爽と駆けつけて、仲間を見捨てず、弱き者を助ける。

そんな子供が見るテレビ番組のようなそれを実行してきた人だ。

兄さんが働いている武偵庁には、数えるほどしか行った事がなかったが……俺が兄さんの弟だと言うと、職場の同僚に感謝される事もあった。

信頼も厚く、誇らしかった。

なのにだ——

『よいですか？ 彼は特命武偵と言う地位にありながら、事故を未然に防げなかったのですよ？ これは如何ともしがたい事実です』

『つまり、武偵としての腕が怪しいと言う訳ですか？』

『辛辣しんらつな事言わせて貰いますが、そうです。でなければ、クルージング・イベント会社も豪華客船や多大な損失するという事も無かったはず』

何で非難されるんだ……

多大な損失？ 物的被害だけだろうか!!

人的被害は誰一人として出ていない！　なのに何で兄さんが非難されなくちやならない!?

うるさいマスコミから抜け出すように逃げて来た矢先にコレだ。

ビルに設置されている巨大な屋外テレビに、多くの人が行きかうイルミネーションが施された夜の街に、先日の事件が放送されている。

（――クソ、何でなんだよ……）

どいつもこいつも、兄さんの事を無能だと言う。

（全員助かったのは、誰のおかげだと思ってるんだッ!!）

救助に向かった警察の話によると、兄さんは最後まで避難誘導をしていたらしい。

だから、兄さんだけ遅れた……

帰らぬ人となってしまった。

人的被害は皆無なのに、客からの訴訟を恐れてクルージング・イベント会社は亡くなった兄さんをスケープゴートに利用しやがった。

その結果が、今やってるテレビでの放送だ。

銃であるテレビ画面を撃ち抜いてやりたい。

俺は逃げるように駆けだす。

何も聞きたくは、なかつた。

でなければ本当に撃ってしまいそうになる。

自然に武偵庁へと……俺の足は向かって行く。

何か手掛かりがあるんじゃないか？

もしかしたら、平然と兄さんが帰ってきてるんじゃないか？

そんなぼんやりとした希望を持って、俺は走る。

そして、見えて来た武偵庁のビル。

表の玄関口に向かって目に着いたのは多くのマスコミが押し掛けている所だった。

……胸糞悪いが、通るしかない。

意を決して歩んで行くと、誰かが気付いたのか……こちらに向かってくる。

そして、1人が釣られると2人、3人と、砂糖を見つけたアリののように俺に群がってくる。

「今回の事について何か一言お願いします！」

そう言いながら、1人の女性レポーターがマイクを突き付けてくるが、俺は無視する。

「君、待ちたまえ」

入り口を通ろうとすると、マスコミを止めていたガタイのいい1人の男性が俺を呼びとめる。

「名前は？」

「遠山……キンジ。あの人の、弟です」

自分でも分かる、覇気の無い声。

そんな消えそうな俺の声が聞こえたのか――

「そうか……入ってくれ」

俺に同情の目を向けるように、その人は通してくれた。

自動ドアをくぐり抜けて行くと、また1人、知らない人が俺を出迎える。

「お前さんがキンジかい？」

スーツを着た、細身の青年が確認をとるように、俺に声を掛ける。

胸には兄さんと同じ特命武偵を示すバッジ。

「……そうです」

「お前さんの兄さんが持っていた物が、事故当時の捜索の末に発見された」

「――ッ!? それは、どこに?」

「3階に、プレートに304と書かれてる部屋だ」

それを聞いた瞬間、俺は走った。

俺を止める声が聞こえたような気がするが、構わず走る。

(兄さん……!!)

目的の部屋へと辿り着き、扉を勢いよく開ける。

そこに置いてあったのは1つの長机。

その上に載せられているのは、兄さんが使っていたバタフライ・ナイフ。当然、部屋に兄さんはいない。

(そうだよな。何を勘違いしてんだ俺は……)

兄さんが持っていた物が発見されたからと言って、本人がいる訳でもない。

必ず手掛かりになる訳でも無い。

バタフライ・ナイフを手にとつて、刃を出す。

緋色に輝くそれが、俺の顔をわずかに映し出す。

自分でも思う、酷い顔だと……兄さんや霧がいれば、殴られたり、からかわれたりされるだろう。

ここに来て、ようやくよく自覚した瞬間に涙が溢れる。

「う、うッ、くうっ、兄さんッ!」

父さんも母さんもいなくなり、

「う、うああああああッ……!!」。

俺の憧れていたヒーローも、もういない。

もう、いないんだ。

一頻り、俺は泣いた。

武偵庁の中だと言うにも構わずに泣いた。

そして、俺は喪失感そうしつに襲われた。

(……兄さんを失った。人生で目標としてる人を)

俺は一体、何を目標に生きて行けばいいのか分からない。

誰の背中を追って行けばいいんだ？

俺には、分からない。

フラフラと立って、俺は部屋を出る。

「君が、遠山特命武偵の遺族だな」

部屋を出ると、また、中年の知らない人が俺に話しかける。

ぼんやりとした頭で、この人は武偵庁に勤務してる人ではないと、分かった。

ここで働いてる人と雰囲気が違う。

修羅場をくぐり抜けて来たと言う感じが無い。

「クルージング・イベント会社の者だが。今回の件について、遺族としてどう責任を取る

のか聞かせて貰いたい」

……………。

何を言ってるんだコイツは。

責任を取る？ 兄さんに何の責任があるんだ。

「今回、腕の立つ武偵と言う事で船の警護を依頼させてもらったが、結果は豪華客船一隻を失うと言う大損失だ」

低い声で、威圧的にその男性はそう言う。

俺には理解できなかった。

本当に……ナニヲイツテルンダ。

「客からのクレームもある。なぜ未然に防いでくれなかったのか、とね。私としても気になるが、残念ながら本人がいない以上確認も取れない」

テレビと同じ様な事をコイツらは言う。

「なので、同じ武偵である君に聞かせて貰いたい。どうやって、彼の後始末をするのか？」

こいつを今すぐ、ぶっ殺してやりたい。

バタフライ・ナイフを握った手に力が入る。

ああ、こんなに腹立たしい事はない。

これほどまでに人を殺してやりたいと思つた事はない！

「おい、お前さん。誰に責任を取らせようとしてんだ」

声を聞いて振り替えると、さっきの細身の青年がいた。

その後ろには彼に付き添うように数人の人が並んでる。訝しむように、俺の前にいる中年の男性は声を掛ける。

「君は？」

「遠山特命武偵と同じ任務に就いてた武偵だ。俺の後ろにいる連中もそうだ」

この人が、兄さんと……一緒にいたツ!?

俺は反射的にその人に掴みかかっていた。

「なんで、兄さんを見捨てたんだ!?!」

「見捨てたなんて人聞きの悪い事を言うな、武偵憲章けんしやうを破る訳ねえだろう」

俺に掴みかかられながらも、その人は平然と返す。

「武偵である以上、任務の際に犠牲が出るのは仕様がねえ事だ。いや、武偵に限らず軍隊や警察、諜報機関。武器を持つ連中には、死が付きまとう」

……そうだ。

武偵中学や武偵高でも教わった事だ。

この人は正しい。

当たっても意味のない事だと分かっている。

だけど、あの人はその犠牲を出さずに生きてきた人だ!

「先に言っておくと、俺はお前さんの兄と同じ武偵であっても同じ生き方をしてる訳

じゃない」

「——ッ!!」

俺の言いたい事を見透かしたように、その人は言ってきた。

そう言われて自然に手を離す。

「あの人も、そこら辺の事は分かっている。今日はもう帰りな」

「待ちたまえ、帰って貰っては困る。彼には——」

「お前さんも、勘違いしてる様だから言わせて貰うが。いくら何でも今回の件、遺族に責任を取らせようって言うのはお門違いじゃないかい？ スケープゴートなんて真似し
といてそれはねえぜ。コイツも武偵とは言え、高校生だ。教える側の人間じゃなくて、
まだまだ教わる側の人間なんだよ。そんな奴に、責任の一端を担^{かつ}がせようって言うのか
？」

「……………」

「責任を取らせようって言うなら、武偵庁か、ここにいる俺らにしな。あいつ一人に全部
責任をなすりつけてんじゃねえ」

青年に言われてクルージング・イベント会社の連中は黙った。

「お前さんも、さっさと帰りな。ここにお前さんの兄はいない」

最後に青年にそう言われて、俺はフラフラと彼の横を通り抜ける。

俺は帰らず、人知れず、適当に入った誰もいない一室に閉じこもる。
閉じたドアに背を預けて、ズルズルと力なく座る。

(何でなんだ……)

被害を出したとは言え、誰も死傷者なんていない。

褒められるべきなのに……なんで糾弾される。

『正義の味方』の末路がこれほどまでに悲惨だなんて、何かの悪い冗談だ。
死んだ拳銃に死体に石を投げられる。

そんな死体に石を投げた奴らを、

(あんな奴らを救いたいとは、俺は……思えないツ)

それどころか、殺してやりたいと思った。

本気で――

そんな事を思った時点で、俺には無理だ。

(正義の味方には、なれない)

そもそも何で、兄さんは死んだ？

何で兄さんは人を助けたのに、批難なんかされなきゃならない？

スケープゴートになんかされなきゃならない？

(そうだ……兄さんも言ってたな。武偵は捨て駒にされる事が多いって)

そう思った瞬間に俺は分かってしまった。

つまりは、そう言う事だと理解してしまった。

(正義の味方なんて——)

そう、心で眩きかけた時、

バァン!

「ぐおっ!?!」

俺の後ろのドアが勢い良く開かれ、俺は跳ね飛ばされた。

(一体、誰だ?)

そんな事を思つて人物を確認する前に、俺は腕を掴まれて、無理矢理連れて行かれる。

「おい、誰なんだ!?!」

俺の声に反応する事も無く、強引に走らされる。

抵抗しようにも、今の俺は無気力で、そんな気も起きない。

ただ、その後ろ姿は、

(何で懐かしく思えるんだ?)

そう、懐かしい。

セミロングのストレートな黒髪。

まるでキャリアアウーマンが着るようなスーツに身を包んでる俺より少し背の低い、女

の子と思われる。

俺を連れて武偵庁の廊下をただ走り、そして、武偵庁の職員達が出入りする扉から出る。

どうやら外の駐車場へと向かっているらしい。

さらに走らされて、1台の車に辿り着いた。

(この車は……)

見覚えのある車だった。

「お前は誰——」

顔を確認しようとする前に助手席に押し込められる。

一体、誰なんだよ。

俺の隣、つまりは運転席にその女の子は乗り込んでくる。

そして、車内のライトを点けた。

「久しぶりだね、キンジ」

「……霧、なのか？」

俺の、元パートナーだった。

「誰と見間違うんだか。まあ、今時間あるよね？」

シートベルトを締めながら、彼女はそう言う。

だけど、俺は再会を懐かしむ気分じゃない。

「悪いけど、霧——」

「分かってるよ。金一さんが亡くなった事くらい」

割と真剣な口調で彼女はそう言う。

今までに聞かない口調だった。

「取りあえず、誰もいない所で二人で話そう」

そう言つて霧は、エンジンをかけて車を走らせる。

走つてる間、俺は何も話す気にはなれない。

霧は、そんな俺を見て分かつてるのか話しかけてこない。

ぼーっとしていると、いつの間にか学園島の海辺の駐車場へと着いていた。

俺は、何も言わずに車の外に出る。

そして冬の冷たい潮風が、俺の頬を撫でる。

何も考えず、俺は柵にもたれかかる。

「キンジ」

霧が俺に声を掛けてくる。

だけど、何も答える気にはなれない。

「すまん、ここまで送ってくれて。あとは、一人で帰れる。悪いけど一人にしてくれ」

突き放すように俺はそう言う。

「車を出す前に二人で話そうって、言ったんだけどね」

「……そんな気分じゃない」

「私としては、放っておく訳にはいかないんだよね」

「放っておいてくれて言ってるだろうッ！」

思わず怒鳴る。

今の俺は、酷い顔をしてる。

そんなのを見られたくはない。

「世話が焼けると言うか、何と言うか」

そう言いながら彼女は、俺の隣へと図々しく立った。

「一人にしてくれて、言ってるだろうがッ……！」

霧に当たっても仕方がない。

そんなのは分かってる。

だけど、妙にイライラするッ！

「そう言つて一人にしたら、大体は自分で抱え込んで余計に辛くなるもんなんだよね」

「分かったような、口してんじゃねえよ！」

「そりゃ、分かるよ。キンジだもの」

いつもの飄々とした感じで答える霧に、俺は言い知れない怒りが積もる。

「俺の、何が分かるって言うんだッ！」

「色々だね。家族を失った悲しみと、怒りと……あとは何だろうね。目指すべきモノを失ったような、そんな感じがするね」

驚くぐらいに当たってる。

そりやそうだ……一年半も一緒にやってきたんだ。

こいつに誤魔化しは通じないのも分かってる。

「分かってるなら、さっさと一人にしてくれよ」

「二兎になっちゃったけど、パートナーだって言うのを忘れないで欲しいね。たまたま日本にいたとは言え、飛んで来たんだから」

「俺は武偵をやめるんだ!!」

……言ってしまった。

正義の味方なんて存在しない。

そう武偵庁で思い、そしてそう分かってしまった俺が決断した事を――

よりにもよって、霧に。

「そっか、そりやししょうがないね。……だから？」

どうしたと言わんばかりの表情。

「お前、聞こえてなかったのか?!」

「節穴じゃないからちゃんと聞こえてるって」

「だったら、なんで——」

「やめたかったらやめればいいんだよ。わざわざ楽しくない事を続けてもしようがないしね」

あつさりど、彼女はそう言う。

「別に、シヨックを受けてない訳じゃないし、キンジがやめるなんて聞いて悲しく思っていない訳でもないよ? ただ、そんな決断をするのも可能性としては考えてた」

「……………」

「世の中そんなもんだよ。利益を失ったりするのが怖いって言うつまらない人間が、責任を逃れたりするのはよくあることだし。ま、責任を逃れるためじゃなくて職場を失ったら困る社員ののために、なんて事もあるけどね。今回は前者っぽいけど」

「……霧。俺は」

言葉を続けようとする、途端に何かに包みこまれる感触がする。

「いいんだよ、何も言わなくて。本音を言えばやめて欲しくはないけどね。まあ、しようがないよ」

アレだけ怒鳴り散らしたのに、霧は嫌な声一つ上げない。

何でお前は——そんなに笑顔でいられるんだ？

そんな事を考えていると、霧は俺を離れた。

「さて、本当はもう少しキンジに構ってやりたいけど……残念ながらここまでだね。私も忙しいし」

「すまん、霧」

「いいんだよ。それにしても酷い顔だね。海で顔を洗うついでに体ごと突っ込んできたら？ 寒中水泳的な感じじゃ」

「確実に風邪になるだろうが……」

お互いに軽口を叩く。

自分でも分からないが、少しだけ笑えたような気がした。

「せいじゃあねー」

車に乗ってアイツは、窓から手を出して去って行く。

俺も、それに応えるように僅かに手を挙げた。

アイツの車が見えなくなるまで、挙げ続けた。

G o F o r T h e N e x t ……

第3章：交錯する道（クロスロード）

24：緋弾との出会い、そして帰還

晴天の空の下^{もと}。

私は帰って来た……この場所に。

なんて、センチメンタルっぽく思ってもみる。

けど、私にそんな感情なんて湧かないし、元よりないから分からない。

ともかく半年ぶりに帰って来たんだよね。

今私は、『学園島』と呼ばれるレインボーブリッジの南に存在する人工浮島^{メガフロート}。

そこに存在するあるビルの屋上のフェンスに腰掛けている。

そして携帯を開き、とある人物に連絡を取る。

「もしもし」

『もしもし、つて……今、理子は準備中なのでですけど』

私の妹から不機嫌そうな声が聞こえる。

「いや、ちよつと尋ねたいことがあってね」

『……なにかな？』

「私がサプライズでキンジを助けちゃダメかな？」

『あー、出来れば遠慮して貰いたいかなー……』

声の変化で分かる。

この声は、本当に遠慮して欲しいって声だろうね。

表情すらも容易に思い浮かぶよ。

だけど、私に強く言えないのか、少し遠回しな言い方をしてる。

「聞いてみただけだよ。ま、正直な話……キンジとあの子を接触させるのは気に食わないけど、理子が望むなら仕方がないね」

お父さんの望みでもあるっぽいけどね。

そう思いながら私は眼下にいるある人物を見る。

私と同じように、女子寮の屋上にあるフェンスに座っているのではなく立っている、ピンクブロンドのツインテールを風に揺らす少女。

身長は、相変わらず150には満たないね。140ぐらいで、理子よりも少し小さい。

理子に聞こえないように、携帯を顔から離して、彼女の名前を呟く。

「――神崎・Holmes・アリア」

あの子がお父さんに、イロカネに選ばれた存在。

彼女が立っている建物より高い建物の上に私はいるから、すぐにはバレないだろうけ

ど――

って思ったら、こつちを見そうだったのですぐにフェンスから降りて、見えないようにする。

良い直感してるよ、全く。

携帯を顔に近づけて、私は理子に話しかける。

「ま、頑張りなよ。私としては別に彼女は死んでも構わないからね」

『ラジャー！』

「それじゃ……また、武偵高でね」

私は最後にそう言つて携帯を切る。

お父さん的には、死んで貰いたくはないのだろうけど……死んでしまったら、死んでしまった。

理子が勝つか負けるかは分かんないけど、負けて死んだら所詮はそこましよせんでの器だつて言う事だし、研鑽派ダイオの人達もそんな弱者の下で従うつもりはないだろうからね。

まあ仮に？ あの子がイ・ウーの……お父さんの後を継いだとして。私としては、気に入った人や家族以外の頼みも命令も聞く気は毛頭ない。

いや、私が気にいる見返りを用意した上でお願いするなら、協力はするけどね。

しかし、お父さんやお姉ちゃんはどこまで”見えて”いるんだろうね。

果たしてあの子が死ぬのか否か。

ま、答えを聞いたら面白くないし……

何より2人とも外れる可能性もあるって言ってるから、100パーセントその通りになるとも限らないし。

先が見えないからこそ、楽しい事もある。

そう考えながら、しばらく待っていると――

『そのチャリには 爆弾が仕掛けてありやがります』

意識を集中させていた聴覚が、小さくも人工音声の言葉を拾う。

もう一度、ビルの下を見る。

そこには、サブマシンガンであるUZ1とスピーカーを載せたセグウェイがかなりの速度で走行している。

そのセグウェイと一緒に自転車で並走してる。いや、銃口を向けられて……走らされてるのは――遠山 キンジ。

確か、理子の話だとあのサドルの下にはプラスチック爆弾が仕掛けられてるはず。

(どう考えても、今のキンジには打開策はないけど……)

私はホームズの4世が立っていた場所を見る。

彼女は、キンジを真つ直ぐ見つめて――女子寮の屋上から飛び降りた。

これが、アリアとキンジの邂逅。

——本当の始まり。

◆ ◆ ◆
 (新学期早々に、最悪だ……)

チャリジャックと言う、珍しくも奇妙で何のありがたみも無い事件ケースにあつてしまった俺こと遠山 キンジは……トボトボと新しい教室に向かう。

ヒステリアモードを見られてしまった。

それも、さつき俺をチャリジャックから救ってくれた——神崎・H・アリアと言う女子に。

教室に辿り着いた後、俺はすぐに自分の机を探し出して座り、突っ伏す。

「はあく……」

溜息と共に嫌悪感が吐き出される様だ。

「いよー、キンジ！」

そんな最悪な気分の所に武藤 剛カ気が俺に声を掛けてくる。

「なんだよ、新学期早々に暗いな。そんなに星伽ほとぎさんがいないのがショックか？」

「武藤。今の俺に女子の話題を振るな、頼むから……」

「おいおい、そんな事聞いたら星伽さんだけじゃなくて白野まで悲しむぞ」

などと、武藤は俺に懐かしい……と言つても、4ヶ月ほど前に会った元パートナーの名前を言う。

メールでちよくちよく連絡を取つてたアイツも、

(今、どうしてるんだろうな……)

などと、ぼんやり考えながら、

「とにかく、頼むから今はそつとしておいてくれ」

武藤にそう返す。

「なんだよ、新学期早々にテンション下がる事を言いやがって」

なんて武藤は言うが、俺のテンションは既に下がってる。

「はあー……いや、すまん。今朝にチャリジャックなんてもんにあつたからな」

「え、マジかよ!?!」

「大袈裟に騒ぐな、暑苦しい」

近づけてくる武藤の顔を、俺は片手で引き離す。

そう、”この程度”の事は武偵じゃあ日常茶飯事^{さはんじ}。

この教室に来る前に教務科^{マスタース}に事件報告に、言つた時も、

『へえー、チャリジャックなんて珍しい事件^{ケース}だなあー』

それだけしか言われなかった。

ちなみに報告を受け取ってそう言ったのは綴つづりと言う尋問科ダギユラの教師。

怪我はないか？ とか、心配されるはずもない。

ここは——武偵高とはそういう場所だ。

「まあ、災難だったな。けど、無事だった事を喜ぼうぜ」

そう言つて武藤は俺にイイ笑顔を向ける。

無事だった事はいいが……俺は別の要因が絡んで、素直に喜べない。

「はいはい、皆さん席に着いてくださいーい」

と、ほんわかとした雰囲気インゲスタの女性が、俺の思考を中断させて教室に入ってくる。

俺が3学期から転科した探偵科たかまがはらの主任インゲスタをしてる高天原 ゆとり先生だ。

彼女が教卓に立つと、生徒が足早に自分の席へと戻つて行く。

大なり小なり、威圧感や殺気を普通に放ってくるこの教師の中で、彼女は異質だ。

威圧や殺気なんてものは、微塵みじんも感じられない。

逆に何で武偵高にいるのか不思議なくらいだ。

ちなみに彼女をあまり本気で困らせると、ルームシェアインピョウをしてる悪い意味で有名な女教師である蘭豹らんびょうと綴つづりの二人が飛んでくる。

一体、どうしてそういう人間関係インピョウが生まれたのかは、誰も知らない。

いや、知ったら逆に殺されそうな気がする。

「えー、今日は皆さんにお知らせがあります。なんと、この教室にカワイイ女の子が2人も来ちゃいますよ」

「おぉー……」「マジで？」

先生の知らせに他の男子は嬉しそうだ……

俺にとっては最悪のニュースだ。

なんか……イヤな予感がするぞ。

そんなもつて、イヤな予感は大体は当たる物だと、俺の知ってる誰かさんも言っていた。

「まずは最初に、去年の3学期に転入してきた神崎・H・アリアちゃんです」

ガタンッ！

俺は机の下に潜り込むように盛大にずっこけた。

マジ か よ !?

「アレ？ 遠山君、どうしたんですか？」

「いや……何でもないです」

実際は何でもなくはないが、俺が何か言ったら絶対に面倒な事になる。

そして、今で目立ってしまった俺は……チャリジャックから助けられた挙句に、ヒステリアモードになってしまった要因兼目撃者である彼女——神崎に目を付けられた。

完全にガン見してますよ。

「先生、もう1人はどうしたんですか？」

男子生徒の1人が、そう質問する。

「もう1人はですね。少し、遅れてくるそうなんです。ちなみに、もう1人は知っている人は知っている人ですよ」

そう言われて、教室にいるほとんどの奴が首を傾げる。

知っている人は知っている？

武偵の有名人か何かか？

「ねえ先生」

「はい、なんですか？ 神崎さん」

「あたし、アイツの隣に座りたい」

そう言つて指差してるのは確実に俺。

ざわっ!!

いきなり話の雰囲気をつつた切る流れに、教室がざわめく。

(え……ええー……)

もう、意味が分からなさ過ぎて俺は絶句するしかない。

なんだ、俺が一体何をした……いや、したな。

主にヒステリアモードの俺が。

その時の事を根に持つてるのか？

だとすれば教室の奴らの前で俺を公開処刑でもするつもりか……

「何だか知らんがキンジ。早速、あんなカワイイ子から指名があるなんてついてるじゃねえか！ いや、よかつたな！ 先生!! 俺が席を空けますよ!」

「あらあら……青春ねえ。やっぱり、最近の子は進んでるのかしら。神崎さん、武藤君が席を空けてくれるそうよ」

武藤^{バカ}を含め、ノリのいいこのクラスは、やんややんやと騒ぐ。

おい、武藤。何だそのいい仕事をしましたみたいな親指と笑顔はなんだ？

その表情にイラツときたので、武藤のお気に入りのバイクに穴を空けてカスタムしてやろうか。

本気でそう思った。

「ところで、そのあんたは何してんの？」

また神崎は、話の流れを変える。

彼女が俺の背後——教室の一番後ろを睨むようにして見る。

今度は、一体何なんだ……

「せっかくのサプライズなのに、空気くらい読んで欲しかったな」

どこかで聞いた声。

いや、聞き間違える筈も無い声。

そして、少し違うが……この状況に俺は覚えがある。

中学の3年の春の光景が、思い起こされる。

俺はゆつくりと、顔を後ろへと向ける。

「……霧」

俺の、元パートナーが……そこにいた。

あの時のように、俺に笑顔を向けながら立っていた。

角度的に先生と神崎は気付いていたんだらう。

だが教室の誰も俺を見ていたために、彼女が現れた事に気づかなかった。

さつきまで騒がしかった教室が、霧の出現に静まり返る。

「皆も知っているかもしれないが、一応前に出て自己紹介をしてください」

笑顔で先生がそう催促する。

言われた霧は、セミロングより少し長めの髪を揺らしながらゆつくりと歩く。

神崎だけは、誰? と言った表情だ。

そりゃそうだ。

さつきの先生の紹介だと神崎は去年の3学期にこつちに来た。対して、霧は去年の夏

には武偵高を去って今までいなかったのだから知らなくて当たり前だろう。

「今日から一緒に学んで行く白野 霧です。これからよろしく……いや、ただいま。かな？」

『おおおおおッ!』

と、クラスのひとつどの男子が騒ぐ。

「まさかの白野さん!」「プラチナコンビ復活か!？」

おい、誰だあのコンビ名出した奴。

頼むから、やめてくれ。

頭痛持ちのように俺は片手で頭を抑える。

そしてチラリと霧を見る。

早速、何人かの女子に囲まれて話をしているようだが……今、ホームルーム H R 中なんだよな？

騒いで大丈夫か？

と、思っているとアイツが……神崎が俺の前に来た。

「キンジ、あんたのベルトを返すわ」

「なにっ!？」「神崎さんがキンジのベルトを持っているだど?!」

お前ら忙しいな。

神崎が俺のベルトを返した所で、何人かが反応する。

しかも今、コイツ何気に俺の事呼び捨てにしてるし。

「おっと、これは怪しいですよ皆さん」

注目を集めるようにそう言ったのは武藤に続いてのバカ——理子だ。

去年まで俺と同じ強襲科^{アサルト}だったが、俺と同じ時期に探偵科^{インヴェスタ}に転科してきた女の子だ。

コイツが口を開くと、ろくな事が無いからな……

「キーくんはベルトをしておらず、そのベルトを彼女が持っていた。つまりですね、ベルトを外さざるを得ない行為をし、そしてその行為が済んだ後……ベルトを忘れた」

何かの警察モノのドラマみたいな感じで理子は喋り出した。

そして、そんな理子のトンチンカンな事をいつの間にか聞いてる奴が増える。

そんな中で、話を聞いてた1人の男子生徒がノリにあわせて、

「ベルトを外さざるを得ない行為とは何でしょうか……？ 峰警部」

そう質問する。

お前らも、何で茶番にノってるんだよ。

「では、逆に質問しましょう。男性はどう言った時にベルトを外すでしょうか？」

「それは、手洗いだったり着替えだったり……」

「そこに女性と2人きりと言う状況が重なれば」

「……ハッ!? ま、まさか——」

「ええ、そのままかです。ツインテールさんとキーくんはそう言う行為をした……つまり2人は既にただならぬ関係だったんだよ！」

『な、なんだってー!!』

一部の奴らはそんな風に驚き、さらには、

「そんな、白野さんだけでなくこんなカワイイ子まで?!」「実はムツツリだったのか?!」

「遠山君って、実は肉食系?」

などと他の連中も言う。

峰警部、まるで意味が分かりません。

って言うか、ただならぬ関係ってなんだよ。

俺と目の前にいる彼女はついさっき会ったばかりで、しかも俺は銃やらポン刀で追いかされたくらいの関係だぞ。

「へー、キンジもいつの間にそんな行為を覚えたんだか」

「お前はお前で、何でいつの間にいるんだよ」

俺の隣にいた霧にそうツッコむ。

なんか、以前に会った時には顔を見る余裕が無かったが……髪が伸びたせいかわ霧が少し大人っぽく見える。

中身は変わってないんだろうがな。

あと、お前いつもの良からぬ事を企んでるニヤニヤした顔になってるぞ。

「つて言うか、理子。ただならぬ関係ってなんだよ」

「え？ キーくん、言わないと分からない？」

「分かるかよ……」

「そりゃあ決まってるじゃん！ ギャルゲーみたいな熱い熱い恋人の關係に、つて事だよ！ キヤー！！」

キヤー！！ じゃねえよ。

周りの奴も無駄に囁はやし立てるように騒ぐ。

新学期で新しい教室だつて言うのに、早くもこいつら息が合つてやがるよ。前から思つてた事だが、ノリが良いのも考えものだ。

「はあ、お前らしい加減にしろよ……」

と、俺が疲れたように言つた瞬間――

ずきゆんきゆん！ と、2つの銃声が響く。

その音は、今まで黙つていた神崎から発せられていた。

十字架の様に両手を伸ばすその先には、片方ずつに銃が握られており……白い硝煙が銃口から出ている。

チンチンチーン……

空葉莢^{やつぎょう}が落ちた音も、2つ。

クラス中の誰も、突然の行動に凍りついた。

そして、撃った張本人は顔を真っ赤にさせて――

「こ、恋人だなんて……ッ!! くだらないッ!!」

そう言いながら、俺を睨みつける。

おい、俺を見るな。

「今度からそんなくだらない事を言った奴には……」

そして、クラスの全員に警告するように言った。

「――風穴を空けるわよッ!」

それを聞いた俺の隣にいる元パートナーは、

「随分とやんちゃなのが来たね」

相変わらずの笑顔でそう言う。

霧、心の中で1つ言わせてくれ。

お前が言うな……

「おいキンジ! 神崎さんとの関係について聞かせ――いねえ?!」

昼休みになって、俺は教室から逃げた。

後ろから同じクラスの誰かの声が聞こえたが……知らん！

昼休み前からクラスの連中がずっと俺を見ていたからな。何かあるだろうと思って、俺は逃走した。

そして、俺の隠れ場所の1つである理科棟の屋上へと避難する。

新学期早々から疲れる事の連続だ。

大体、俺はあのツインテールの転校生については何も知らないに等しい。

それなのに、俺に聞かれても困る。

にしても、意外だったのは……霧が帰って来た事だ。

今日来るまでに、そう言った連絡は貰ってない。

まあ、いつものイタズラなんだろうな。なんて思っていると、何人かの女子が喋りながら入ってくる。

見つかって質問攻めをされたら困るので、屋上に唯一ある物影に隠れる。

「それにしても、白野さんが帰ってくるなんてビックリだったねえ」

声からして、ウチのクラスにいる強襲科アサルトの女子か……しかも3人。

「あたしも、ビックリした。しかも、教室の一番後ろに突然現れたみたいだし」

「驚いてくれたなら、私は満足だけどね」

また1人、続いて屋上にやってきた。

その人物は声から予想できてたが……当然に、霧だった。

(アイツ、こんな所にまで何しに来てんだよ)

なんて思っている、他の女子は霧の登場に驚く。

「あつ、霧じゃん。教室では聞きそびれたけど、半年もどこに行ってたの？」

金髪のベリーショートの子が、そう聞く。

「んー？ まあ、お父さんの仕事の手伝いでね。イギリスとアメリカに行ってたよ。あとは、他の地方もちょこつと行ってたかな？」

「手伝いとはいえ、海外旅行じゃん。いーなー」

「つて言っても、割とドンパッチする事もあったけどね。日本は、まだ割と平和だって事を実感するよ」

「へ、へー……」

霧の言葉に他の3人は引き攣ったような表情をする。

お前の親は一体どんな仕事をしてるんだよ。

「そう言えば、キンジを知らない？」

結局の所それが本題なのか、霧は俺の居場所を聞いている。

いや、俺はここにいるんだが……正直な話、出にくい。

「キンジは見えてないねー。ね？」

「あたしも見てないよ」

栗毛のシヨートの子に続いて、金髪の子が答える。

「なんだ、てつきりキンジの事だからここにいてると思っただけだね」
すみません、ちゃんといます。

相変わらず俺の行動パターンを把握してやがるな、霧の奴。

「そう言えばさ、朝に来た周知メールについて知ってる？」

「ああ、アレね。帰って来たばかりとは言え、私にも届いてるよ」

「そう言えば霧も、始業式に出てなかったもんね」

事件の周知メール。

……ここに来て俺の話題かよ。

「アレってさ、キンジの事だったんじゃない？」

「あたしもそう思う。始業式にも出てなかったし」

栗毛の子が言うことに金髪の子が同意する。

それを聞いてる俺としては、思い出したいくない事を思い出してしまいそうになる。

ヒステリアモード的な意味で。

「チャリ爆破されたと思ったら、今度はアリアかー。キンジも不幸だね」

同情するように黒髪のロングの子が呟く。

「その転入生について、私は知らないんだけどね」

「今までいなかったんだし、霧さんが知らないのも仕方ないね。あ、でもちよつとマズイかもよ霧さん」

「マズイって、何が？」

黒髪の子が言うマズイって事について俺も気になったので、耳を傾ける。

「アリア、朝からキンジの事を探って回ってたよ。あたしにもいきなり、キンジについて聞かれたし」

「聞かれたって事は、答えたんでしょ？」

「まあね……『昔は強襲科アサルトで有名だったんだけどね』って、適当に答えちゃった。ゴメンね霧さん」

「おいおい、勘弁してくれよ。」

しかも朝からって事は、確実にチャリジャックの件が終わって以降から探られてるってことか。

「そう言えば、さつきは教務科マスタースの前でも見かけたし……さつきの話からして確実にキンジの事を探ってるんだよ」

「え、って事は三角関係トライアングル？」

栗毛の子が言った事に対して、金髪の子が驚く。

なんでそこでトライアングルが出てくるんだよ。

俺は内心、そうツツコむ。

トライアングル——それは武偵高にいる生徒にとつては、10月のイベントの事を指す。

ここ武偵高は、完全に縦社会だ。封建的だと言い換えてもいい。

つまり、簡単には上の学年に勝負を挑む事は出来ない。

だが、トライアングルの時には上の学年に挑む事が出来る。いわゆる下剋上げくじょうのシステムだ。

それが何で今出てくるのか分からないが、おそらく話の流れ的にそれとは違うだろう。

これだからガールズトークは分からん。

「何となく話の矛先が私に向いてるのは分かるけど、私とキンジはそう言う関係じゃないんだよね」

「えー？ アレで？」

霧の言葉に金髪の子が驚く。

もう話の内容が俺には全く分からない。

「そもそも、私自身そう言うのはよく分かんないんだよね」

「え？　もしかして霧さんって、男性と付き合ったこと無いの?!」
「全然?」

「えー、何か信じられないね。よく男性を尻に敷いてる感じなのに」

段々と話が生々しくなっていないか?

と言うか、霧が男性と付き合う所なんて考えられんぞ。

「でもさー、霧がいるんだからアリアが介入するところなんてないんじゃない?　帰ってきたって事は、またキンジと組むんでしょ?」

金髪の子がそう言うが、それはどうだろうな……

「あー、それはどうだろうね。任務には付き合うかもしれないけど、本格的にまた組むつもりはないよ」

「え、どうして?」

「まあ、事情があるんだよ」

「もしかして、キンジが転科した事と関係あるの?」

栗毛の子が霧と、そんな事を話す。

霧には、気を遣つかわせるな。

何だか申し訳なく思う。

「転科したんだ……キンジ。関係があるって言えば、関係あるだろうね。だけど、私が本

人のいない所でその人の事情をペラペラ喋る訳にはいかないでしょ？」
「それもそうね。つて、そろそろ時間じゃん」

金髪の子がそう言う。

確かにもうすぐ時間だな。

俺もそろそろ戻らないとマズイな。

彼女達は、話しながら屋上から降りて行った。

その事を確認して、俺も立ち上がる。

それにしても、どうやら面倒くさい事になりそうだな。

思わずため息が零れる。

「ため息を吐くと、幸せが逃げられるらしいよ」

「——おわっ!？」

いつの間にか隣に霧がいた。

久々過ぎて、油断した。

相変わらず心配も無く現れやがる。

突然に現れたように見えるから、軽くホラー現象だ。

「お前、やっぱり気付いてたのか」

「気付くも何も、チラチラ見ながら盗み聞ききしてたクセによく言うよ」

呆れるように彼女はそう言う。

まあ、お前が気付かない筈がないよな。

取りあえず、

「久しぶりだな」

俺はそう改めて挨拶する。

「まあね。だけど、今はゆっくり話してる時間はないから……放課後にね」

そして、霧はいつもの笑顔でそう返す。

色々聞かれるんだろうな。

そう思いながら、俺も小さく笑う。

◆ ◆ ◆

はてさて、朝のH Rホームルームの反応からして……キンジとホームズの4世の間に何かあった

んだろうね。

そして、理科棟の屋上での話によれば彼女はキンジの事を探っている。

と言う事は、上手い事にHSSを見られたんだろうね。

取りあえず、キンジと色々話をしながら神崎との間を取り持とう。

と言う訳で……早速、メールでキンジと話す約束をした私は、第3男子寮に到着して
いた。

ちなみにいるのは海側。

キンジの事だし、どうせ表から行ってもいい顔はされないうね。

大体、男子寮に女子がいるのは普通は可笑しい。

変なウワサも立つだろうね。

別に、私は構わないんだけど。

だからまあ、こうして空き巣のごとく別ルートで来てる。

私は瞬時に男子寮の見取り図を頭に思い描く。

えっと、キンジから貰ったメールの書いてる部屋の番号からして……

あのベランダか。

私はフックショットを、キンジの部屋のベランダに向かって放つ。

そして、引つ掛かったのを確認して巻き上げる。

こんなの使わなくても、体一つで登れるんだけどね。

だけど、そこまでするとAランクに似合わない身体能力だし、自重自重だね。

ベランダに到着して着地。

中にキンジはいるけど、こっちに気付いてない。

ソファアーに寝転んでる。

なので私はコンコン、と窓を叩く。

音に反応して、バネ仕掛けの様にキンジは体を起こした瞬間に私と目が合い、驚く。表情からして「なんでベランダから来てるんだよ……」って感じ。

疲れたような顔をしながら、窓の鍵を外して開く。

「お前、普通に表から入って来いよ」

開口一番にそう言ってきた。

「せつかく気を遣って裏から来たのに、酷いね」

「裏って言うか……ベランダに人が現れたら普通に驚くだろう」

「男子寮に女子を連れ込んでるなんて言われたくないでしょ？」

「まあ、その心遣いに感謝はするけどな……って言うか、その背中の荷物は何だよ？」

キンジは私が背負っているバックバックを指差す。

「ああ、コレ？ イギリスでのお土産。他にも色々あるけどね」

「別にそこまで気を回さなくてもいいって言うのに……」

「気を回すって言うか……単純に余ってるから分けに来ただけだね。他の人たちにも分ける予定だけど、まあついだと思つて貰つておきなよ」

「お前がそう言うなら、ありがたく頂戴ちやうだいしておくけどな」

キンジに受け取つて貰えたので、取りあえずバックバックだけを部屋の中に入れる。

私は部屋には入らず、代わりにキンジが部屋を出て、ベランダへと来る。

私もキンジもベランダの手すりに腕を乗せて隣り合い、夕方の東京湾を見る。

「転科、してたんだね」

私は初めに、そう切り出す。

「探偵科インテラスタに、な。あんな物騒な学科にいるのはやめたんだ。それに、武偵をやめる俺にとつて……あそこにいる意味は、ないしな」

「意志は固そうだね」

「当たり前だ……」

キンジは悲痛そうに顔を歪める。

金一が亡くなった時の事を思い出してるんだらうね。

ま、本当は生きてるし……そして、その兄がいなくなる原因を作ったのは私なんだけどね。

ふふ、金一に劣らず、キンジもいい表情してたよね。あの時は。

そんな事を思っても、私は顔には出さずに感慨深く言う。

「そっか……」

「悪い、霧。俺には、武偵を続ける意味が無くなったんだ。だから……」

「全部言わなくていいよ。別に引き止めたりはしないから」

「……すまん」

「ただ、少しだけ心配してる事はあるね」

私がそう言うのと、キンジは「何だ？」と言った表情を向ける。

「キンジは、何年も武偵としての日常を歩んで来たんだよ？ だから、別の日常を今更歩めるかどうか、心配なんだよね」

「相変わらず手痛い事を言うよな、お前」

「だって、キンジはコミュニケーション能力低いし」

「……………ほっとけ」

「クリスマス以降、私がない間、どうせ日陰みたいに過ごしてたんでしょ？」

「……………」

私の言葉にキンジは何も言わなくなった。

ここまで分かりやすいと、相手の思考を読む時にあんまり深く考えなくて済むから助かるよ。

呆れるようにして私は、

「こりやダメかもね」

と言った。

やめたとしても絶対にキンジは環境に適応できなくて、武偵に舞い戻ってくる。

まあ、そうじゃないと逆に困るけど……いや、どっちでもいいのかな？

さすがの私でもそこまで先の事は分かんない。

キンジは、そんな私に怪訝けげんそうな顔を向けてくる。

「何が、ダメなんだよ」

「んー？ 知りたい？」

私はそう言つてニヤニヤとした表情を作る。

その私の顔を見たキンジは、遠慮するような顔をする。

「やっぱいい……お前のその表情を見てると、聞いたらダメなような気がする」

「まあ、聞いて行きなよ」

遠慮するキンジに私は迫る。

「いや、頼むからやめてくれ」

「私の予想だと、キンジはね——」

「待て待て待て！ 聞きたくねえ！」

キンジが耳を塞ぎ、私から距離を取つて言葉を聞く事に抵抗する。

ピンポン。

そんな時に、インターホンが鳴る。

「な、なんだ？ 客か？」

そう言つて、キンジは助かったとばかりに足早に玄関へと走っていく。

逃げられたか。

ピポピポピンポン！

「誰かは知らないけど、分かったからそんなに鳴らすなよッ！」

玄関に向かう途中に何回も鳴らされて、キンジは怒鳴る。

なんだろうね……なんとなくだけでも、玄関の向こうにいる人物が予想できる。

私の予想通りの人物なら、あんまり話したくはないんだけど……

まあ、私の家族の目的のためだし、我慢しよう。

それに、話してみれば案外面白いかもしれないし。

と、希望的観測をする。

「遅い！ あたしがチャイムを鳴らしたら5秒以内に出ること!!」

「か、神崎ツ?!」

特徴的な高い声が玄関から聞こえて来たかと思うと、キンジは驚くような声が聞こえる。

やっぱりね。

キンジとホームズの4世が言い争っている声を聞きながら、私は靴を脱いでベランダからリビングに入る。

取りあえず、バックパックの中に入ってるお土産を整理しておかないと。

ちなみに中身は普通に紅茶とか食材、おまけで盗聴器を入れてる。ま、情報収集は大事だよな。

ちなみに理子のための盗聴器じゃない。

私が個人的に仕掛ける物。

理子にとってホームズズの4世とは個人的な因縁だから、私の手は借りたくないらしい。

自分の手でやりたい事って言うのは、あるからね。

私も自分の手で人を切り裂きたいし、その時に邪魔されたくはないから分かる。

だから私は、キンジとアリアを結び付けること以外には理子に手を貸さない。

でも、応援はしてるけどね。

取りあえず、ちよいちよいと盗聴器を仕掛ける。

あとは普通に食材を整理するためにキッチンへと、バックパックを持って行く。

整理が終わって紅茶の準備をしていると、キンジがトランクを引き摺ずって来た。

「なにしてんの?」

私が尋ねると、キンジは疲れたような顔をして、

「なんか知らんが、コイツを持ってアリアが押し掛けて来たんだよ」

足元にある、車輪が付いているストラップ柄のトランクを指差しながらそう言う。

私は、意味が分からないと言う風な感じで、呟く。

「神崎さんが、押し掛けて来た……ねえ。って言うか、玄関から聞こえた時には神崎って言うってたのに、なんで今は名前と呼んでるの？」

「アイツがそう呼べって言ったんだ。全く、こんな荷物持って来て俺に何の用だって言うんだ……」

ため息を吐きながら、キンジは頭を抑える。

トランクなんだから中身なんて大体は、衣服をいれるに決まってる。

って言う事は……居座るつもりだろうね。

彼女は今日キンジと会ったばかりだって言うのに、もう押し掛けてくるなんて。

行動力があると言うか、強引と言うか。

私からすればナンセンスだね。

手洗いの方から水の流れる音がしたかと思うと、ホームズの4世がリビングに現れる。

まるで部屋を窺うように、ぐるりと見回したかと思うと、私と目が合う。

そして驚いたような顔をする。

「あんたは……同じ教室にいた」

「どうもどうも」

と、私はそう軽く彼女に答える。

「なに、あんたはあの子と一緒にここに住んでんの？」

「ここは男子寮だぞ。女子と一緒に住めるか……それに、この部屋は俺一人だ」

キンジは苛立つように神崎に答える。

女子と一緒に同じ部屋に住む。

そんな状況になったらキンジは軽く発狂するかもね。

キンジの言葉に神崎は納得したような顔をする。

「そう、ならいいわ。それに、ちようどよかった」

——ちようどよかった。

その言葉に違和感を覚えると同時に、すぐに彼女の次の言葉が予想できる。

彼女は窓際まで移動したかと思うと、クルリと振り返り、

「——あんたたち2人、あたしのドレイになりなさい！」

そう高らかに宣言した。

25：濃い1日の終わり

——ドレイになりなさい。

そう言われて、キンジは絶句してる。

いや、キンジが調べられてる時点で私についても多少調べられてるだろうなどは思っ
てはいたけど……

まさかのいきなり奴隷どれい宣言。

ちなみにこの時のキンジの表情は、見なくても分かる。

だって背中が語ってるからね。

肩を脱力させて、猫背になってる。

予想としては「ありえんだろ、コイツ」と思ってるだろうね。

私？ 呆れてはいるけど、想定範囲内だから別に驚く事も無い。

だけど表向きは驚いたフリをしてる。

しかし、ドレイ……：奴隷ね。

もうちよつと言いい方はないのかな？ って思う。

ま、この子も大概コミュニケーション能力が低いしね。

イギリスで何度か観察させて貰った時に、他の武偵と言い争つてゐる事もあつたし。それと同時に、私は今ので確信した。

彼女とは気が合わない——

気が合わないって言つても、すぐにどうこうするつもりはない。

それに、お父さんや理子の目的も果たしてないしね。

なんて考えてると、神崎は勝手知つたる他人の家とばかりに、さつきキンジが寝転んでたソファーに、ぽふ！ と、腰掛ける。

「ほら、客が来てるんだから飲み物ぐらい出しなさいよ！ その程度のもてなしも出来ないの？」

ここまで凶々しい人を客つて言つて良いのかな？ 　つて、紅茶の準備の続きをしながら思う。

「コーヒー！ エスプレッソ・ルンゴ・ドツピオ！ 砂糖はカンナよ！ 1分以内に用意なさい！」

「残念だけど、エスプレッソマシンはここにはないよ」

「なによ、エスプレッソマシンも置いてないの!？」

私が答えると、彼女は信じられないと言つた感じに叫ぶ。

「今、紅茶を淹れてるんだけど」

「じゃあそれでいいわよー」

神崎は投げやりに答える。

大体、偶然とは言え紅茶を用意してるのにコーヒーを用意しろなんて無茶にも程があるよ。

キンジはキンジで、フラフラとこっちにやって来る。

「お前、今の魔法の呪文の意味分かっているのか？」

「魔法の呪文？ エスプレッソのルンゴ・ドッピオに砂糖はカンナって言うの？」

「ああ、それだ」

「エスプレッソコーヒーは分かるでしょ？ コーヒー豆を加圧して抽出した濃いめのコーヒーだよ。喫茶店とかでもメニューにあると思うけど……それで、エスプレッソには4種類あってね。ソロ、ドッピオ、ルンゴ、リストレットがあるんだけど——」

「すまん、もういい」

キンジは片手で頭を抑えるように、もう片方の手で制止するように突きだして、言うてくる。

「自分で聞いておいて、それはないんじゃない？」

「それは悪かったけど……お前の知識量に脱帽してるよ。どこでそんなの覚えてくるんだよ……」

「偶然だけど、お父さんがどう言う訳か今のコーヒーが好きでね。その折に覚えたただよ」

お父さんの曾孫だけあって、やっぱり好みも似るのかな？
なんて事を思う。

「なるほどな……で、この紅茶は？」

「イギリスって言えば、紅茶も有名でしょ？」

「まあ、聞いたことはあるけどな。俺は飲んだことないけど」

「ちようど出来た所だし、飲んでみたら？」

私はティーポットからティーカップへと移し、キンジにカップを渡す。

ついでに神崎の分も持つて行って、彼女に渡す。

二人ともカップを持つたま見つめてる。

「……ずず。毒が入ってる訳じゃないんだから、普通に飲みなよ」

毒殺するにしても、もつと別の機会でするし。

私は先に飲みながら、そう言う。

頻繁ひんぱんに飲む訳じゃないけど、やっぱり紅茶はおいしいね。

イギリス人なのか自分でもよく分かんないけど、取りあえず紅茶は好きだし。

「ずず……初めて飲んだが、上手いな」

キンジは先に飲んでそう言う。

そしてキンジに続いて、神崎も私の紅茶を飲む。

「へー、美味しいじゃない。あんた、紅茶が淹れられたのね」

「まあね」

「茶葉はどこ店の物？」

「英国王室御用達のとこって言ったら、分かるかな？」

「見る目があるのね」

私としては、君に褒められても何とも思わないんだけどね。

大体、嬉しいなんて感情も知らないし。

「それよりも、だ。仲良く話をしてるとこ悪いが」

キンジはそう言つて紅茶を飲みながらも、私の前にいる彼女に指を向ける。

「今朝、俺を爆弾事件ボムケースから助けてくれた事は感謝してる。それに、失礼な事を言つてしまった事についても謝る。だがな、何で男子寮の俺の部屋にまで押し掛けてくるんだ？」

「なに、分かんないの？」

「当たり前だ。しかもいきなり霧と2人揃そろつてドレイになれなんて言われて、分かる訳が無いだろう」

「……おかしいわね」

キンジはイラついてる様子だけど、神崎は逆に疑問を覚えて、何やら考えてる。

私は彼女のことについてほとんど知ってるから……別に疑問を覚える事もあまり考
える必要も無い。

だって、そう言う風に”誘導”してるんだからね。

「霧だったわね。あんたも分かんない？」

私に話を振らないでよ。

「分かるも何も情報が無いからね。私が知りたい——ああ、いや。ちよつと待つてね」

私は理科棟での会話を思い出す。

今日、白野 霧と言う人物が武偵高に帰って来てから知ってる情報だけを使って論理
立^だてる。

普通に考えれば、ただ単にキンジが救われただけなら彼女がキンジを調べる事も無
い。

その1点だけでも充分に考えられることはある。

「キンジは聞いてたと思うけど、理科棟の屋上での会話から考えて……始業式が始まる前
に、それも周知メールにあった自転車を爆破された時に神崎さんと何かあった。違う
？」

「何かあった、て言うか……さつきも言っただろう？　チャリジャックの時に俺はコイツに救われたんだよ」

「違うよ。救われた以外に、何かあったんじゃないかって話だよ」

私がそう言うと、キンジと神崎はお互いに顔を見合わせる。

「……………ツ!!」

その後何かを思い出したような顔をして顔を赤くする。

神崎はティーカップを机に勢いよく置いたかと思うと、私に訴えるように叫んだ。

「こ、こいつはね！　あ、あたしに強^{きんろう}狼^わしたのよ!!」

「強^{きんろう}狼^わじゃねえよ！　あれは偶然——」

「偶然で服を脱がそうとする訳がないでしょうがッ！　し、しかも、その後……お、お姫様抱っこなんかして！　突然、変なキヤラになって、あたしに変な事言つたじゃない！」

がるるるる、とばかりに唸ってキンジを睨みつけながら怒ってる。

変って、2回も言う必要があったのかな？

それにしてもやつぱり、感情的に動く子は分かりやすいね。

私は紅茶を優雅に飲みながら、2人の話を聞いている。

だけど、このままだと話の收拾がつかなくなりそうなので私が止める。

「ああ、はいはい。大体の事情は分かったよ」

「おい待て、霧！ 今のは誤解だからな!？」

キンジは私が強狼したと言う事実を鵜呑みにしてると思つて、必死に弁明しようとしてる。

.....

からかつてみたくなつたので、私は半目になつてキンジに言う。

「さすがにそれはないよキンジ……訴えれば武偵三倍刑だね」

「おいしいいいっ!? お前、本気で信じてるのかよ!」

「本気も何も事実でしょうがッ!」

「話がややこしくなるからお前は黙つてろ!」

「黙つてろですつて?! ドレイの癖に生意気ね!!」

「だから、ドレイじゃねえつつうの!」

あーあー……随分とまあ仲良くなつちやつて。

あながちこの子とも相性は悪くないみたいだね、キンジ。

私はちよつと満足したので、今度は本当に止める。

「と言うのは冗談で、キンジ……ちよつとベランダに集合」

私は飲み終わったカップを置いて、キンジの腕を掴んでベランダに引き摺りだす。

窓を閉めて、読唇術で彼女が読み取らないように海の方を向く。

「つたく、お前も話をややこしくするなよ」

キンジもそこら辺は分かっているのか、私と同じ海の方へと向きながらそう言う。

「話をややこしくするようなタネを持ってきたクセに」

「持つて来たのはあのチビツ子で、それを育てたのはお前だろうが」

「いや、ゴメンね。なんか久しぶりにならなかつてみたくて……とまあ、そこら辺は置いておいて本題。」

今朝の爆弾事件ボムケースの時に、何があつたの？」

私が尋ねると、キンジは歯切れが悪そう「あー」、と唸る。

私は大体予想ついているけどね。

「その、だな……チャリジャックの時に、俺はアイツに空中で救出セーブされたんだよ。パラグライダーを使つてな」

「ふむふむ、なるほどね」

「お前、今話を信じるのか？ かなり突飛な話だぞ？」

「あのね……いちいち嘘だと思つてたら話が續かないでしょう？」

それに、最初は見てたし。

「ああ、それもそうだな。じゃあ続けさせて貰うが、俺がアイツに——空中に浮かぶアリ

アに飛びついてから、自転車が爆発した。その時の爆風で、俺とアリアは外にある体育倉庫の中にある防弾性の跳び箱の中に入った」

「随分とまあ、上手い事入ったもんだね。それで？」

「それで、だな……その時に服がめくり上がったんだよ」

「ふーん。ブラジャーはどうだった？」

「寄せブラだった——って、違うだろうがッ!!」

真面目に言った後に、顔を真っ赤にしてキンジがツッコむ。

久々だと良いね、やっぱり。

「冗談だよ。ともかく、それで誤解されたってことね」

「まあ、そう言う事だ。弁明しようにも、話を全然聞く気はなかったし」

「そっかそっか。ところで、話はそれだけ？」

私は問い質すように聞く。

キンジは、

「やっぱり、お前は誤魔化せないか」

そう言つて僅かに笑う。

「そりゃあね。それに『突然に変なキャラになつて』って、神崎さんが言つてたからね。

だから……」アレ”になつたんだらうなど、すぐに思つたよ」

「そうだよ。俺はアイツでヒステリアモードになっちまったよ」

「悲しいねえ、男の性さがと言うか本能と言うか」

「頼むからそう言う話はやめてくれ」

「それであるの子、どうするの？」

「どうするって、簡単には退出してくれなさそうだからな。お前も協力してくれよ」

助けを求めるようにキンジはそう言うけど、私としてはキンジとあの子が離れて貰うと困るんだよね。

だから、

「いくら私でも出来ない事はあるからね……それに、どうやらキンジには特にしゅうしんご執心しゅしんみたいだし」

私は遠回しに言う。

「マジかよ。まあ、取りあえず話だけでも聞いてみるか。このままじゃあ進展しないからな」

キンジの言葉を最後に、ベランダからリビングへと戻ると、

「ねえ、おなかすいたんだけど」

図々しくもホームズズの4世はそんな事を言ってきた。

彼女はすっかりくつろいでる。

ソファ―に柳のようにしなだれかかる彼女を見て、キンジは顔を赤くする。そう言う仕草にも反応するんだ……

神崎は引き続き、聞いてくる。

「なにか食べ物はないの？」

「ねーよ。カップ麺ぐらいはあるだろうけどな」

「かつぶめん？ 何それ。あと、ももまんはないの？」

「ねえつつうの」

「だったら買ってきなさいよ」

理不尽だねー。

別に私はイラついたりと言うか、怒るつて言う感情が分かんないから……何とも言えないけど。

ただ、呆れてはいるね。顔には出さないけど。

キンジはまたしても疲れたような顔をしてるし。

会話をキャッチボールするどころか、変わってドッジボールだよ。

「仕方ないね、私がおか作つてあげるよ」

「お前、料理出来たのか？」

「酷いねキンジ。私だつて料理の1つや2つくらいするよ。それに、中学の時に一人暮

らししてたの知ってるでしょ?」

「そう言えばそうだったな。悪い」

「それと、ももまんだつたら下のコンビニにある筈だから買ってきたら?」

「じゃあ行きましょう」

神崎がキンジの腕を掴む。

「ちよつと待て、何で俺の腕を掴む」

「あんたも一緒に来るのよ!」

「何でだよ! おい、話を聞けつて!」

「うっさい! あんまり口答えすると風穴を空けるわよ!」

神崎に銃を突きつけられて、まるで人質みたいにキンジは連れて行かれた。

あの子本当に武偵なのか疑いたくなる。

自分でも言うのも何だけど、私の方が武偵してる気がする。

取りあえず冷蔵庫から食材を取り出して、準備をする。

持つて来た新鮮なトマトがあるし、パスタもあるから本格的なナポリタンでも作るかな。

あとは米料理と、バランスを考えてサラダ系と――

しばらくして、キンジが戻つて来た。
大分時間が掛かったね。

あの2人の事だからぎやーぎやー言いながら、帰つて来たんだらうけど。

「ぜえ……ただいま」

既に満身創痍まんしんそういと言つた感じのキンジ。

コンビニまでの距離はそんなに遠くないのに。

移動つて言つても階段を上り下りするぐらいしかかない、なのにかなり疲れてる。

予想通り騒いで帰つて来たんだらうね。

「ああ、お帰り。もうちよつと待つてね」

「それはいいんだが、聞いて——」

「ちよつと、キンジ！ 話はまだ済んでないわよ！」

キンジが私に話しかけようとする、何かを言う前に神崎が割り込んでくる。

「あら、美味しそうな匂いね」

「もうそろそろいいかな？ 今ちよつと出来たよ」

神崎にそう答えながら、テキパキと準備をする。

「俺も準備をするよ。どの皿を使えばいい？」

「大きめの平たい皿、ない？」

「ああ、あるよ。そっちの棚だ」

キンジも自分から手伝いをする。

神崎は、蚊帳かやの外。

うーん……これだとさすがにちよつと気まづくなるから、

「神崎さん、食後の紅茶の準備でもしてくれろ？」

「なんであたしが……まあ、いいわ。あんたには美味しい紅茶を飲ませて貰ったから、お返しして上げる」

ふふん、と自慢げに言いながら準備をしてくれる。

何だかんだで、頼めば聞いてくれるよね。

そうして淡々と準備をして、テーブルに割と豪勢な料理が並ぶ。

と言つてもほとんどイタリア料理だけ。

そうして私達は席に着き、

「さ、食べてもいいよ」

と私が言うのと神崎は遠慮なんてせずに、早速料理を取って行く。

キンジも続くようにゆつくりと食べ始める。

「上手いな、このライスコロツケ」

「あたしのとこの料理人みたいに、良い腕してる……」

それぞれ小さく料理の感想を言う。

最初に言い争ってたのがウソみたいに、2人は静かに食べてる。

それから黙々と料理を食べ続けて、皆満足した所で食後のティータイムに入る。

さすがは貴族と言うだけあって、飲み物に関してはこだわりがあるらしい。

何気に美味しい。

そして神崎だけは、コンビニで買って来たであろうももまんを一緒に食べてる。

神崎が淹れた紅茶を皆で飲みながら、キンジは気になっていたのであろう話を切り出す。

「さっきの話の続きだが……ドレイってなんなんだ？」

「簡単な話よ。強襲科アサルトであたしのパーティーに入りなさい」

その彼女の言葉に、キンジは眉を寄せる。

「悪いが、断る。お前は俺の事を何も知らないだろうから、ハッキリ言っただけでやる。俺は武偵をやめるんだ。それまで俺は探偵科インクスタで転校までの間、静かに暮らす。だからお前のその頼み、もとい命令は聞けない。ムリだ」

「あたしには嫌いな言葉が3つあるわ」

「お前なあ、人の話を聞けよ」

『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』。そんなネガティブな事を言っていると、自分の可能性を

潰す事になるわ。だからあたしの前では言わないこと。いいわね?」

威圧的に彼女はそう言う。

あーあ、また始まったよ会話のドッジボールが。

だけど、彼女を知ってる私としては分かる。

焦ってるね。

母親が冤罪を着せられてるのに、誰一人として本当の犯人を発見出来てないからそれも当たり前だろうけど。

ま、私の罪は彼女の母親の冤罪とは関係がないから……私を追う事もないだろうし、戦役までジャックとして会う事はないだろうね。

それまではせいぜいピエロみたいに踊ってる所を近くで見させてもらおうよ。

「あんたも一緒よ、霧」

だからいきなり私に話を振らないで欲しいね。

「んー? それって神崎さんの下につけ、って事だよ?」

「そうよ。ドレイなんだから当然でしょ」

「だったら、私も断らせて貰うよ」

”お願い”って言うならまだしも、命令なら聞けないね。

私の家族でも、私が気に入った人間でもないのに私に命令をしないで貰いたいね。

武偵つて言う組織に馴染むためにも、政府の偉い人や、この教師であれば許容は出来るけど……なんで同じ武偵、しかもお姉ちゃんみたいに才能を持ちながらも寿命が短い訳でも、理子みたいに壮絶な過去や復讐心があるわけでも、リリヤみたいに機械人形から人間になった訳でもない。

イロカネに選ばれた程度しか面白みがない。そんな人の命令なんて聞く気はない。

「私に反抗する気？」

ぎろりと、紅い目で神崎は睨みつけてくる。

私はすぐに笑顔で言葉が続ける。

「ただ……素直に協力して欲しいってお願いするなら、ちゃんと協力するよ？」

「ふん、まあいいわ。霧はそうね、まだ実力が分からないからポジションは保留として

……キンジはあたしと同じフロントね」

この子、話を聞かないね。

どうしよう……こう言う身勝手と言うか、プライドが高い人を見てると……

——無性に心を折りたくなるんだよね。

なんて思っても、お父さんとの約束を守るために自制自制つと。

キンジは自分がフロント——前線で戦うポジションに勝手に位置づけられて怒鳴る。

「何勝手にポジションを決めてるんだよ！ 大体、なんで俺達なんだ？」

「キンジが今聞いているのは、『なんで物は下に落ちるのか?』『なぜ太陽と月は昇って沈むのか?』と言っているのと同じ事よ。この程度の事、推理してみなさいよ」

推理が下手なくせに、他人には推理を求めろんだね。

随分と良い性格をしてるよ。

「霧、何とかしてくれ……」

キンジはお手上げと言った状態で、私に助けを求めてくる。

「どうしようもないよ。この手の人間は」

「あんた、私をバカにしてるでしょ?」

私の言い方に神崎は頬を引くつかせる。

「ま、取りあえず今日はもう帰った方が良いんじゃないかな? 外ももう暗いし」

一旦、休戦的な意味で帰宅する事を提案するけど……まあ、ホームズの4世は断るだろうね。

「イヤよ。あんた達が頷くまでは、帰らないわ」

やっぱりね。

それに彼女は帰らないって言うけど、私にも女子寮に部屋があつて、そこに住んでるのをつかっているのかな?

「霧はどうかは知らないけどな。俺は頷く気はないぞ」

「なにがなんでも入って貰うわ。あたしには時間が無いのよ！ あんたがうん、と頷かないのなら——」

「何する気か知らねえけど言わねえよ！」

「頷かないのなら泊まってくから！」

その発言に一瞬の静寂。せいじやく

これも想定通りの答えなんだけど、私は驚いたフリをする。

キンジの方は絶句し、すぐに叫んだ。

「ふ、ふざけんなッ!? さっさと帰れ！」

「うるさいうるさい！ こんな事もあるのかと準備は万端よ！ 長期戦になる事も想定

済みなんだから！」

ビシッ！ つと、リビングに置いてあるトランクを指差す。

「——出て行きなさい！」

本来キンジが言うであらうセリフを、彼女が叫ぶ。

「なんで俺が出て行かなくちやならないんだ?！」

「うっさい！ 分からず屋には頭を冷やす時間が必要でしょう?! しばらくは戻ってく

るな!!」

「ちよ……ッ、霧！ 助けて——」

私に完全に助けを求める前に、神崎が強引に引つ張りだす。

そしてよく吠える子犬みたいにガウガウ言つて、拳を振り上げたかと思うと、彼女は無理矢理キンジを玄関へと追い払つた。

さてと、どうしよつかな？

キンジを追うべきか、神崎と話すべきか……

私としては後者はあんまりしたくないけど、そこは家族の事を思つて我慢しよう。

それに、用があるのなら向こうから声を掛けてくるはず。

だから……私は取りあえずキンジを追うために玄関へ向かう。

「待ちなさい」

私の行く手を玄関前で神崎が止める。

「なんだ、私にも出て行けつて言つたんじゃないの？」

「あんたは残りなさい。話があるわ」

止めて来たか。

私は仕方ないと言つた感じに神崎の後ろに続きながら、どう話すか考える。

彼女は広いソファアに足を組んで座り、私はその斜めにある小さな椅子に座る。

「いくつかキンジについて話があるわ」

「なに？ 何でも……とは行かないけど、ある程度の事なら話してあげるよっ。」

それに、どうせ答えようとしなかったら無理矢理聞き出そうとするつもりだろうし。

「じゃあ、質問させて貰うわ。あなたはキンジの元パートナーなのよね？」

「そうだね」

「また組む予定はあるの？」

「いいや？ 任務クエストとかには付き合うだろうけど、本格的にコンビで武偵活動、つて言うのは

はしないだろうね」

「どうして解消したのかしら？ あんた達、強襲科アサルトではそれなりに有名なコンビだった

らしいじゃない」

ふむ、どうやら夏に私が家庭事情——と言う名の嘘の理由で武偵高を離れるから、コ

ンビを解消せざるを得なかったことを知らないのかな？

いや、多分メインで調べられてたのはキンジだから……私についてはそこまで詳しい

事は調べられてないってことなんだろうけど。

「うーん、まあね。家庭事情で私が夏に一時的に武偵高を離れることになったから、仕方

なくコンビを解消したんだよ」

「だったら戻って来たのに組む気はないって言うのは、どう言う事かしら？」

「そこは本人が言ってたでしょ？ 武偵をやめるって。だから、組んでも意味無いんだ

よ」

私がそう言うと、彼女はしばし考えて……そして口を開く。

「どうして武偵をやめるのを止めないの？」

「そこら辺はキンジの事情が絡んでくるね。キンジも、色々と苦勞してるんだよ……」

私は少し、悲しそうなフリをして言う。

私の表情を見て彼女は何かあるとばかりに私を睨む。

「次の質問をさせて貰うわ。あんたは、キンジの本当の実力を知ってる。そうでしょ？」

確信に満ちたような目。

全く、根拠も無いのに点と点を真つ直ぐに線で結びつけてくれるね。

お父さんも言ってたけど、優れた直感も予知になりえるって言うし。

だからこそ、お父さんは『コグニス』——条理、予知——って呼んでるんだらうね。

「本当の実力、ね」

「とぼけてもダメよ。あたしは今朝見たんだから！ キンジが一瞬で7台のセグウェイに載せられたUZIの銃口を1発で撃ち抜くのを。そして、あんたはそのキンジが隠してる本当の実力に気付いて——いや、知ってるはずよ」

「根拠どころか、そう思った過程すら飛ばしてるね」

「あたしは説明するのが下手だけど、分かるわ。あんたはキンジに心を許してるし、信頼されてる。それに……ペランダにキンジを連れだして話をしてたのも、多分キンジが隠

してる実力についてだと思ってる」

気持ち悪いくらい当ててくるね。

論も証拠も無いのに、答えだけは出してくる。

こんなの常識で考えたら信じられる訳が無い。

「何の証拠も無いね。例え知ってたとしても教える訳がないでしょ?」

「教えなさい! 私には時間が無いのよ!」

「時間が無いって言っても、ねえ? 何の時間が無いのかよく分からないし」

「それは……教えられないわ。あんたには関係のない事よ」

私の言葉に彼女は言い淀む。

そりやそうだよね。

神崎 かなえの冤罪。

そしてその冤罪を着せてる世界的な犯罪組織——イ・ウーに立ち向かうって言うんだから、並の実力だと瞬殺されるし。

そんなメンバーの1人である切り裂きジャックが目の前にいる訳なんだけどね。

そう考えると、随分と滑稽こっけいな話だよ。

私の罪と神崎 かなえに関係はないけど、ね。

取りあえず——

「人の事は教えろって言うておいて、自分の事は教えられないんだね」

「……………」

私の言葉に彼女は何も答えない。

自分でも理不尽だとは思ってるし、分かってるんだらうね。

だったら、ちよつといい事を教えて上げよう。

「そうだね。質問されてばかりだとつまらないし……………こちらからも一つ、言わせて貰うよ」

「……………なによ?」

「自分の事情もろくに話せないのに、他人に信用して貰えると思わない方がいいよ?」

「——ツ!? あんたに、あたしの気持ちの何が分かるのよ!」

ソファアールから立ちあがってそう叫ぶ。

おーおー、感情が出て来たね。

これだから直情的な人間は扱いやすいんだよ。

「分からないね。ましてや今日会ったばかりの人の事情も気持ちも、何一つ分からない」

「あんたねえ……………ツ!!」

「だからこそ、素直になつた方が良いんだよ。じゃなかったら協力しようにもできないし、どうして欲しいのかも分からないからね」

「……何が言いたいものよ」

「素直に協力して欲しいって言ったなら、キンジを強襲科アサルトに戻す手伝いくらいはするよ。私も、キンジには戻ってきて欲しいからね」

その瞬間、彼女は驚く。

「あんた、キンジが出て行くのを止めたくなかったんじやないの?」

「止めるつもりはないけど、反対してない訳じやないんだよね」

「自分で言っておいて、あんたこそ素直じやないのね」

「私は素直に言ったよ。やめて欲しくないってね。それでもやめるって言うんだから仕方ないよ」

そこまで言った所で、彼女の表情が柔らかくなる。

ようやく協力者を得たと言う感じにどことなく嬉しそうに思える。

「分かったわ、もう質問は無しよ。私自身の手でキンジの秘密を暴き出すことにするわ。どうせあんたは、喋る気なさそうだし」

「そりやそうだよ。自分の事情が自分の知らない所で漏れてるなんて聞いて、いい気分がするかな?」

「分かったから、もう聞いたりしないわ。だけど、キンジを連れ戻すのにはちゃんと協力してちょうだい」

「協力するって言っても、私が直接説得したりはしないからね？」

「なんでよ……」

「事情を知ってるからこそ、無理矢理引き戻したくはないんだよ。反対に、君は事情を知らない」

「なるほどね。分かったわ……ところで忘れてると思うけど、あんたも私のドレイなんだからね？」

彼女は笑顔でまだそんな事を言う。

なので私は――

「ドレイって言うなら協力するのやめる」

そう言うのと彼女は途端に掌を返したように、

「わ、悪かったわよ」

謝罪した。

せっかくの協力者を失うのは嫌みたいだね。

本当に扱いやすい。

「そうだわ、あんたも泊まって行きなさいよ」

いきなり何を言い出すんだか……

「私にも帰る部屋はあるんだよ」

「いいじゃないの。それに、あんたがいればキンジとも話がしやすいだろうし」
「そう言われてもね……」

キンジが許すとは思えないけど。

まあ、取りあえず本人の帰宅を待とう。

「ところで、お風呂どこ？」

「トイレの隣じゃないかな？ 大体、私はここに住んでる訳じゃないよ」

「そう言えばそうだったわね」

彼女はトランクから着替えを取り出して、風呂場へと行こうとする。

あ、そうだ……！ つ釘を刺しておかないと。

そう思って私は引き止める。

「ちよつと待って」

「なによ」

「キンジには私が協力してるなんて言わないでね」

「……ああ、そう言う事。分かったわ」

私の言いたい事は伝わったのか、そうしてこんどこそ神崎は風呂場へと行った。

私が協力してるなんて言ったらキンジは警戒するからね。

そしたら私を避けるだろうし、居場所を教えるなんて事も出来なくなる。

全く、面倒くさい役回りだね。

取りあえず、暇になったのでテレビをつける。

チャンネルを変えてるけど……特にこれと言って面白そうな番組はやってない。

ガチャ、と……扉が開く音がする。

キンジが帰ってきたみたいだね。

そのままくつろいでると、洗面所の方から何か物音が聞こえる。

ああ、キンジがアリアを発見したのか。

………からかいに聞こう。

椅子から立ちあがって洗面所に向かうと、廊下でキンジが風呂場を見ながら硬直して
る所だった。

「何してんの?」

キンジはゆっくりと首をこっちに向ける。

今、風呂場には神崎。

そしてその神崎がいる風呂場を見ながら固まってるキンジ。

見方によっては、

「キンジ……覗きなんてするんだね」

うん。覗きをしようとしてるように見える。

「待て、お前は何か誤解をしてる」

「誤解って言っても神崎さんがいる風呂場を見て固まってるあたり、状況証拠が既に揃そろってるんだけど？」

「いやいやいや、違うんだこれは」

「へー……何が、どう、違うのかな？ 私はあの子と違ってちゃんと話を聞いてあげるよ？」

キンジに近づいて、顔を覗き込むように迫る。

「洗面所で手を洗ってから気付いたんだから、たまたまだつつうの！ 帰ったと思ったんだよ……」

「靴が置いてあるんだから、帰ってる訳がないでしょ？」

「……………」

私に言われて、キンジは黙って玄関を見る。

その視線の先には私とキンジ以外の靴がもう一つある。
気付いてなかったっぽいね。

「ねえ、キンジ。一言いい？」

「何も言うな……」

「マヌケ♪」

私は飛び切りの笑顔でそう言ってあげる。

その瞬間にキンジは恥ずかしさと同時にショックを受けたのか……顔を逸らす。
んー、やっぱりキンジを弄るのは楽しい。

ピン、ポーン……

そんな時にアリアとは違って、静かにチャイムが鳴らされる。

キンジは凄いい反応速度で顔を玄関に向ける。

「このチャイムの鳴らし方……まさか」

「キンジの部屋に訪れそうな人物で、こんな ていねい 丁寧な鳴らし方をするとしたら……白雪さんか」

「あ、ありえん。ありえんだろこの状況——」

「どうするの？ 私はともかく神崎さんが風呂に入ってるなんて知ったら、白雪さん確実に暴走するよ？」

「そんなもん居留守を使うに決まってるだろ……！ 取りあえず、念のために洗面所のカーテンを閉めて——」

グキツ……！

キンジがカーテンを閉めようと足を踏み出すとそんな、音が聞こえる。

そして、私の方に倒れてくる。

バタン！ とそのまま私はキンジに押し倒された。

足を捻^{ひね}るなんてどんだけ鈍臭いんだか……

とつさに受け身を取ったからダメーじは無し、頭を浮かしたから後頭部は打たなかつたけど——

「足、捻^{ひね}った……すまん……き、り？」

ちよつと顔が近いと思うんだけどね。

謝罪しながらキンジが目を開けると、私の顔が目の前にあるのに気付いたのか……目を見開いてる。

大体、拳2つ分くらいの距離にお互いの顔がある。

なんかこんな状況を前にも見た事があるよ、具体的に言うなら入学試験の時に。

その時に私は立って見てただけなんだけどね。

って言うのは置いておいて。

「その……す、すまん。ワザとじゃないんだ」

キンジが顔を赤くしながらそう言う。

「それぐらい分かつてるよ。私はそんな事で一々騒いだりしないって言うのに……取りあえず固まってるんで早くどかないと」

「あ、ああ……分かつてるよ。白雪に見られたら——」

「……キン、ちゃん?」

「面倒な、事に、だな……」

壊れた人形みたいにキンジは、途中で聞こえた別の声の方にギギギと、首を後ろに向ける。

玄関に巫女装束を着た、黒い長髪の少女——星伽ほとぎ 白雪が、私達を死んだような目で見てる。

あーあー、面倒な事に。

「その、だな。白雪、頼むから俺の話を聞いてくれ」

「ふ、ふふ……分かってるよキンちゃん」

「本当に、分かってるのか……?」

苦笑いでキンジは聞き返す。

そして彼女は笑顔で返す。

目は笑ってないけど。

「うん、分かっている。久しぶりだね、霧さん」

「久しぶり。白雪さん」

私はキンジに組み敷かれながらも、顔が見えるように笑顔で白雪さんに挨拶する。

彼女は、笑顔から一転して——

「この、裏切り者おおおおお!!」

「分かってねえじゃねえかー!!」

目を吊り上げてどこから出したのか刀を上大きく振りかぶって、叫びながら跳んでくる。

勢いからしてキンジごと斬りそうだ。

「ぐほっ!」

私は自分の上にいるキンジを横に蹴り飛ばし、跳ね起きる。

そして、サバイバルナイフを構えて上から勢いよく振り下ろされる刀を受け止める。

「き、霧さんッ! キンちゃんとなんてうらやま、じゃなくてふしだら、じゃなくて羨ましい事を!!」

「それって結局、言い直す必要があるの、かな……ッ」

チリチリと金属が競り合う音を響かせながら、私達は言い合う。

(この子、超能力ステルスで身体強化してるからッ……ちよつと、力が常人じゃないんだけど)

いや私も元々身体能力高いけど、それでも若干きついんだよね。

これが愛の力と言う奴なのかな? なんか、違う気もするけど。

「霧さんは、信じてたのに……ッ! そうじゃないって、信じてたのにッ! なのに、帰って来て早々にキンちゃんと——」

「そんな親の敵みたいに言われても、困るんだけどね。取りあえず、落ち着いて話を聞いて、ねッ！」

最後の言葉に力を入れると同時に私は刀を上へと弾き、踏み込んで右手の掌底を彼女のお腹に決める。

白雪さんは廊下から玄関の先、通路まで軽く吹っ飛んで行く。

私はすぐに駆けだして靴も履かずに玄関の外に出て、扉を閉めながら彼女の両手を素早く掴む。

「放してよ！ 私、霧さんが帰って来て喜んだのに——」

「ていつー！」

「キャツ……!?!」

素早く白雪さんの頭を叩き、サバイバルナイフを仕舞う。

「勝手に勘違いで話を進めちゃダメだって、前に言ったのに」

「ぐすつ……だ、だって、キンちゃんに押し倒されてたし、まるで自分からき、キスしようとしてたし！」

「泣きながら言わないで欲しいね。順序よく説明するから一先ず落ち着いてよ」

「う、うん……」

「どうやら一旦落ち着いたのか刀を下ろす。」

この子も大概面白いからね。

付き合うのは少し骨が折れるけど。

私は事情を説明する。

「最初に押し倒されたのは、キンジが足を捻って私に倒れて来たから」

「……じゃあ、キスしようとしたのは？」

「あれは倒れた時に後頭部を打たないように、頭を浮かしてただけだよ。キスをしようとした訳じゃない。顔の距離は近かったと思うけどね」

「ホント……？」

「嘘言っても仕方ないでしょ？ それとも、信じてないの？」

「そうじゃないけど……でも」

納得してないのかなー？

仕方ないので証人を呼ぼう。

玄関を開けて、キンジを呼ぶ。

「あー、キンジ。ちよつとこっちに来て」

「大丈夫……に決まってるか、お前なら」

心配しようとしてキンジはやめた。

なんか気になる言い方だね。

キンジが靴を履いて、外に出て玄関の扉を閉める。

そのままキンジは白雪の目の前に出て、頭をぼりぼりと搔かいて言う。

「……あのな白雪、さっきのは事故なんだ」

「本当に？」

「ああ、たまたま足首を捻ひねって霧を巻き込んで倒れちまったんだ」

「そうなんだ、よかった……」

私の言った事が本当だと分かって、白雪さんはパー、と笑顔になる。

キンジの言う事はあつさり聞くんだね。

「何がよかったのかは知らんが、どうしたんだこんな夜に？」

そうキンジは言ってるけど、さっきから後ろの玄関の扉をチラチラ見てる。

さては……神崎の事が気になるんだろうね。

今ここで白雪と会えば、私以上に面倒くさい事なるって分かってるから。

「ああ、うん。それよりもキンちゃん。今朝の周知メールにあった事件の被害者って、キンちゃんだったの？」

「俺だよ」

キンジが面倒くさそうに答えると白雪は跳び上がり、

「だ、大丈夫だった!?! 怪我とかない!?!」

何て言いながらキンジの服に掴みかかろうとする。

この子、どきどきに紛れてそう言うことするよね。

半年前とちつとも変わってない。

「俺は大丈夫だつての……それより用事は何だよ?」

キンジは彼女を引き離し、用件を尋ねる。

あと焦ってるのか、ちよつとキンジの口調が冷たいよ。

だけど、白雪は気にした様子も無く足元に置いてある包みを持つ。

見た目が箱っぽい。

「う、うん。あのね、旬のタケノコご飯を作つて来たの」

「そ、そうか……悪いな。だけど夕食は食べちまったから、朝にでも食べるよ」

「そうなんだ。でねキンちゃん。私、明日から恐山で合宿なの。だからキンちゃんにご

飯を作つてあげられなくて……」

「へー、そ、そうなのか。準備で忙しいのにわざわざありがとうな。用事はそれだけか

?」

包みを受け取つてから、段々とキンジの口調が焦りでおかしなことになってる。

冷や汗も出てるし……

「キンちゃん、何か様子おかしくない?」

ほら、やっぱり気付かれた。

「そ、そんな事はないぞ。お前の気のせいだよ。な？ 霧」

私に助けを求めるようにキンジは、話を投げかけてくる。

仕方がない。

「そうだよ白雪さん。ちよつと今朝の事件で疲れたから、キンジも早めに休みたいんだよ」

「そう、そうなんだよ」

キンジは私の言葉に相槌あいづちを打つ。

私からしたら怪しさ満点なんだけどね。

「だったら私が癒して上げるよ！ ほら、私ならマッサージとか得意だし漢方にだって詳しいから」

「いいって！ 明日合宿なんだろう？ 早く帰って準備をしないで間に合わなかったりしたら俺が困る」

「キンちゃん、私の事……心配してくれてるの？」

「あ、ああ。そうだよ。だから早めに帰れ。な？」

「……嬉しい」

そう言って白雪さんが別の意味で、我を忘れてるよ。

いかにも幸せと言った表情をしてる。

「分かったよ。もしかして、霧さんも部屋に帰ろうとする所だったの？」

「まあね。ちよつと持って来た荷物もあるし、片付けて帰るから多少遅れるよ。積もる話もあるだろうけど……先に帰っていいよ。ゆつくり話すのは、合宿の終わりになるだろうしね」

「うん、分かったよ。じゃあ先に帰るね。キンちゃん、霧さん、おやすみなさい」

そう言つて白雪さんは笑顔で去つて行つた。

隣のキンジは峠を越えたとばかりに、ため息を吐く。

一体、今日で何回吐いてるんだか……

そう思つてると、キンジが気付いたように顔を上げる。

「つて、ちよつと待つてくれ霧。お前、本当に帰るのか？」

「男子寮に女子を泊めさせるの？」

「いや、だけどな……アリアと2人きりになるのは勘弁して欲しいんだが」

「別に私はいいいけどね。だけど、帰つて来て早々にまた私に借りを作る事になるけどいいのかな？」

「……うつ。お前、まだ覚えてたのか」

「覚えるも何も、一体何個借りを作つてるんだか……。細かいのを数えなかつたとして

も、相当積もってるよ。それに返して貰うどころか増えてるし」

「あー、すまん」

「ま、あんまり気にしないでいいけどね。どこかで纏めて返してもらってからにやー、と私が笑うと、逆にキンジは苦笑いになる。

「どっちにしても、私もアリアに泊まれて言われてるんだよね。だからまあ、付き合っ
てあげるよ。キンジが嫌いじゃないなら」

「お前は違うだろうが、なんて言うか……その、姉さんみたいな感じだし」

姉さん……お姉さんか。

キンジが弟ね。

それはそれでいいなあ。

何て思ってるキンジを見ると、自分で恥ずかしかつたのか照れてるし。

「お姉ちゃん、って呼んでもいいんだよ？」

「……言える訳ないだろうが」

そう言いながら、私とキンジは玄関を開けて入る。

そしてキンジは気付いたように、

「今の内にアイツから武器を取り上げるか」

「それって、彼女の衣服に手を突っ込むってことになるよ？」

「う……だが、いちいち銃やポン刀で追い回されんのは勘弁して欲しい。それに、入浴中に俺が帰ってきてるのを見られたら問答無用で襲撃されかねない」

「先に言っておくと、私が行って取ってくるなんて事はなしだからね」

「なんでだよ」

「また借りを作りたいの？ それに私は今の所襲われた訳でもないし……まあ、撃たれそうになったら止めてあげるけどね」

「いや、そうなる前に武器を取り上げて欲しいんだが……」

「帰って来たばかりで私も疲れてるんだよ。ふあー」

「アクビをしながら、私はリビングへと向かう。」

「自分で何とかするしかないのか……」

「キンジの弦きが後ろから聞こえる。」

「本当に武器を取り上げるつもりだね。」

「シャーと、後ろからキンジがカーテンを開ける音がする。」

「だけど、数秒後に――」

「へ、ヘンタイ……ッ!!」

「神崎の声が聞こえてくる。」

「あーあ、タイミング悪かったね。」

「ち、違うッ！ 目的は武器で——」

「じゃあそのあたしの下着は何よッ!? この、ヘンタイ強猿男！」

ゴスッ！ と音が聞こえたので後ろを振り返ってみると、キンジが吹っ飛んで廊下の壁にぶち当たる。

「死んでしまいなさい！」

再び神崎の声が聞こえて来たかと思うと、彼女の膝蹴りがキンジの顔面にクリーンヒット。

メシヤアとか、音が聞こえてきそうだよ。

(前途多難だなー)

私はそう思わざるを得なかった。

濃い1日が、終わる。

26：火野ライカとの出会い

キンジとホームズの4世が出会った翌朝。

結局の所、私はキンジの家に泊まる事になった。

制服のまま寝る事になるのは当然の事で……

私はソファで掛け布団をして寝た。

まあ……ベッドよりもソファの方がいいんだよね。

不意打ち対策的な意味で。

そして、基本的に私は眠りは浅い。

だから自然と早起きになる訳なんだけど……今は夜明けか。

太陽が昇り始めたつて言う所で、ベランダの方向を見ると朝焼けの空が見える。

ソファから起きてキンジ達が寝てるベッド見ると、どうやらまだ寝てるみたい。

私の見ている両サイドに2段ベットがあり、左サイドの下にはキンジ、右サイドの上には神崎が寝てる。

(対地雷なんて、なんで持ってきてるんだか……)

私は右の2段ベツトに防衛線のように張られている罫トラップを見る。

そこにはクレイモアに円形型の地雷、そして信管に繋がつてると思われるワイヤーが張つてる。

どう考えても、殺す気だね。

火薬の量を調整されてたとしても危ない。

そして、肝心の神崎はと言うときつきから「ももまんプール……」とか呟いてる。
暢のんき気なものだね。

……………。

私は左のレッグホルスターに入つてるM500を抜いて、神崎の頭に照準を合わせ
る。

そして――、

「バーンってね」

トリガーに指を掛けず、小声でそう言いながら撃つた動作だけをする。

ここで彼女を殺すのは簡単。

手段を選ばなかったら、それこそ瞬殺だね。

だけど、理子にも答えたようにお父さんとの約束で戦役まで手を出さないって約束し
てるんだよ。

見られない内に銃を仕舞って、私はリビングへと戻って声を出して背伸びをする。
「んんー……」

取り合えず朝食の準備でもしておこう。

◆ ◆ ◆
「……ちゃん……てよ」

誰かが俺の体を揺らして、声を掛けてる。

誰だ？ アリアか？

なんて思ってる内に、俺の眠りが段々と浅くなつていくのが分かる。

「お兄ちゃん、起きてよ」

アリアとは違うアニメ声で、こんな事を言ってくる人物を俺は知らない。

つうか、俺に妹なんていない。

「——風穴空けるわよ」

それを聞いた瞬間に俺は、一気に覚醒する。

ガバツ！ つと自分に掛かっていた布団を捲り、起きる。

朝から風穴とか、勘弁して貰いたい！

と思つて起きたが、目の前にいたのは霧だった。

「あ、あれ……？」

俺は変な声を上げた。

寝ぼけてたのか？

上手く頭が働かない……が、確かにアリアとここにいる俺達以外の声を聞いた気がするんだが。

「どうしたの？」

霧は不思議そうにベッドの外から俺を覗き込んでくる。

「あ、ああ……今、アリアの声を聞いた気がするんだが」

「本人は寝てるよ？」

霧はそう言って、俺の寝てる反対側の2段ベッドの上段を見る。

俺の部屋に押し掛けて来た侵略者^{アリア}は、気持ち良さそうに寝てる。

その様子を見ると、寝起きだが若干イラつく。

「つーか、今何時だ？」

「朝の6時」

尋ねると、霧はすぐに答えた。

俺がいつも乗ってる武偵高行きのバスが7時58分だから、2時間近くもありやがる。

昨日、アリアの所^せ為で寝付けなかった俺としてはもう少し寝ていたい。

「悪いけど私、学校の準備のために寮に戻らないといけないからね」
そう言えばそうだった。

結局、霧は俺の部屋に泊まったんだったな。

だとしたら準備も含めて早めに戻らなくちゃいけない。

「すまん……つて、なんで俺を起こした？」

寝起きと言う事もあり、アリアの事で若干イラついてたせいでキツイ口調になってしまった。

「ん？ 朝ご飯が出来たからね。神崎さんの分もあるから起きたら適当に食べとい
てよ」

しかし霧は気にした様な感じはなく、笑顔でそう言ってくる。

だとすると今、二度寝なんてしてしまったら朝飯も冷めるしバスにも乗り遅れる可能性が出てくる。

……起きるか。

霧は一足先にリビングに戻り、俺もその後が続くように起きる。

「それじゃあ、私は戻るね」

「悪かったな。付き合って貰って」

俺がそう言うのと、彼女はバックパックを背負って“ベランダ”へと向かう。

普通に玄関から出ろよと思わなくもないが……ここは男子寮。

霧みたいに早起きしてる奴が俺の部屋から女子が出てるのを見つかったら、面倒な事になるだろうな。

などと、上手く回らない頭で考える。

「また学校でね」

最後にそう言つて霧は、ワイヤーをペランダの手すりに引つ掛けて飛び降りた。

さすがに朝から大声で突つ込む気にはなれん。

そして、イイ匂いのするキッチンの方を見ると……確かに朝食がそこに並んでいた。しかも和食だ。

朝ご飯か……白雪ほどではないが、アイツも世話好きだな。

◆ ◆ ◆

女子寮に戻つて、私は学校の準備をしてちよいどいい時間に出た。

出る際に盗聴器のチェックも兼ねてインカムを着けると、神崎とキンジが言い争つてるのが聞こえた。

いやよいやよも好きの内つてね。

キンジ的には、本当に迷惑なんだろうけど……神崎みたいに多少強引にでも引つ張つて行つた方がキンジ的にはちよいどいい。

盗聴器のチェックが終わったのですぐに切る。

周波数を感じされると困るし、ここは武偵高。

言つて見れば敵地だからね。油断は禁物。

特に教師陣は舐める訳にはいかない。

あつちには経験があるし、それぞれの分野に専門家スペシャリストがいる訳だしね。

だけど今の所、誤魔化せてる。

それから学校に到着し、キンジと神崎も遅れて到着する。

その道中にキンジの愚痴を色々と聞いたりする。

だけど、隣に神崎さんがいる訳で……結局は彼女に追い回される。

それにしてもあの子、トリガーが緩ゆるいね。

銃の、じゃなくて本人の指が。

そんなこんなって言う感じの事があり、その後は教室で神崎と武偵高用の携帯で連絡先を交換した。

そして、今現在は昼休み。任務クエスト掲示板ボードの前にてキンジを発見する。

「任務クエストでも受けるの？」

「ああ、探偵科インケスタのな」

キンジは声を掛けた私に驚く事も無く答えた。

「俺の日常が壊されつつあるからな。今の所お前には重要な問題じゃないだろうが、俺にとつては死活問題だ」

「まあ、そうだろうね。私もドレイだなんて言われてるけど、別にどうでもいいんだよね。武偵をやめるわけでもないし」

「だからだ……なんか、ほとんどアリアと俺の問題みたいだしな。だから、俺はしばらくアリア対策に外に出る。アイツには言うなよ」

「はいはいって」

釘を刺すように言つてキンジは去つて行つた。

多分、探偵科インケスタの専門科棟に行つたんだろうね。

最初に謝つておくよキンジ、心の中でね。

私は早速、神崎の携帯の番号に掛ける。

「どうもどうも」

『キンジが動いたの?』

いきなり電話に出た神崎はそう聞いて来た。

私を含め、よつぽどキンジを引き入れたいみたいだね。

まあ、私はおまけつて感じがするけど。

「まあね。どうやら任務クエストに出て、神崎さんの対策をするみたい」

『キンジの癖に生意気ね……分かったわ。という事は、探偵科インケスタの専門科棟にいるのね』
生意気、ね……随分前から分かつてるけど、神崎は人の事を下に見てるね。

ただ単に舐められたくないから高慢でいるのか、それとも不安だから高飛車でいるのか。

まあ、彼女の場合は両方かもしれないけどね。

なんて考えながらも私は答える。

「うん、任務クエストの申請に行ってるだろうね」

『待ち伏せするしかないわね』

「午後の強襲科アサルトの戦闘訓練はどうするの？」

『あたしは卒業分の単位は全て揃そろえてあるのよ。そうだ、あんたもついてきなさいよ』
人の都合を考えないね。

まあ、私個人としては一緒に行ってもいいんだけど……

「昨日帰って来たばかりだし、私は強襲科に顔を出しておかないといけないから行けな
いよ」

私がそう答えると電話の向こうで少し残念そうに、

『そう、分かったわ』

そう言って神崎は電話を切った。

さてと、それじゃあ行こうかな？ 久々の強襲科に。

私は強襲科が所有してる専門科棟……って言っても、体育館の形をした戦闘訓練所だけどね。

ここでの学科の生存率は『97.1%』、つまり100人の内3人弱は卒業時には居ない。

うん……アメリカよりも生存率高いね。

あつちは3割、10人に3人は死んでるからね。

なんて考えながらも私は戦闘訓練所に入る。

ガラガラと言う音が、室内に妙に響く。

そして、ほとんどの人が戦闘の手を止めて私の方を見る。

「……白野！」

1人の女子が声を上げて、私の名前を呼びながら嬉しそうな笑顔で走ってくる。

セミロングの髪にツリ目をした子だ。

「白野ッ！」

私の事を呼びながら、彼女はさらに走るスピードを上げてくる。

次の瞬間、

「死ねえええええええッ!!」

獲物を見つけたとばかりに、叫びながら飛び蹴りをしてくる。

私は飛んでくるそれを軽く躲して、空中にいる彼女を軽く叩き落すとす。

ゴスン!

「~~~~~ツ?!」

受け身に失敗した彼女は後頭部を床に打ち付けた。

ゴロンゴロンと頭を抑えて転がり、悶絶してる。

「白野じゃねえか」

そう言つて男子生徒の1人が私に声を掛けると、数十人がよってくる。

私は悶絶してる彼女を無視して彼らに答えて行く。

「いやー、久しぶりだね」

「突然に学校を去つたかと思えば、半年も空けやがって」

「家庭事情なんだから仕方ないんだよね」

「知ってるわよ。たしか、アメリカとイギリスに行つてたんだだね。川崎さんから聞

いた」

「そうやって色々と答えてると、

「おい、無視するな!」

悶絶してた彼女が復活した。

誰もが彼女へと注目し、中には「またか……」みたいな顔をしてる。

「ああ、久しぶりだね」

「久しぶりじゃない！ ウチを簡単にあしらいやがって」

彼女は男つぽい喋り方で私に詰め寄ってくる。

私は取りあえず謝っておく。

「あーうん、ゴメンね。ところで」

「な、何だよ」

「誰だっけ……？」

私がそう言うのと彼女はプルプルと震えだし、FN ハイパワーと言う銃を私の顎に突きつけてくる。

まあ、単なる脅しなんだろうね。

「お前、本気で言ってるんじゃないだろうな……？」

青筋を立てて、彼女はそう言ってくる。

「冗談だよ。久しぶりだね東海林さん」

東海林 夏海なつみ——1年の時に私にちよくちよく勝負を挑んでくる女の子。

何かと勝気で……ってまあ、強襲科にいる大体の人が強気だったりもするんだけど

ね。

彼女も割と例に漏れず強気である。

「ワザとなんだよな？ 帰って来て早々にウチをからかつてるんだな？」

「うん。ワザとだよ」

「よおし、死なす。死んでくれじゃなくて、死なす」

私が笑顔で答えると、彼女はひくひくと頬を引くつかせる。

彼女も彼女でこうしてからかい甲斐ががあるんだよね。

「まあまあ、東海林さんも落ち着いてよ」

そんな彼女を引き止めるのは、

「不知火、久しぶりだね」

「うん。久しぶりだね、って言っても同じ教室なんだけどね。昨日は声を掛けてる暇は

なかったけど」

相変わらずの優しい笑顔で不知火しらぬい 亮が私にそう挨拶をする。

「そう言えばそうだったね。ゴメン、忘れてたよ」

「まあ、あの時は帰って来たばかりだったからね。忙しくて仕方ないよ」

私をフォローするように不知火はそう言ってくる。

「おう、お前ら！ 騒いでんと訓練に戻れや！」

「マズイ、蘭豹らんびょうだ」

誰かがそう言うのと、クモの子を散らすように訓練へと戻って行った。

東海林さんは少し不機嫌そうな顔だったけど。

「戻って来たな、白野」

私の目の前に立つ大女。

強襲科の主任である蘭豹がそう言ってくる。

「あ、はい。ただいま戻りました」

「遠山のド阿呆あほうはどうした？」

「もうパートナーじゃないですよ」

「チツ、そう言えばそうやったな。探偵科インケスタに行つてから腑抜けになりおつてからに」

ムカついたように彼女はそう言う。

そうだろうね。私とキンジがいた時は良い風潮があったからね。

Sランクつて言つたら近寄りたい存在だし、キンジは社交性に欠けるけど……そこまで取つつき難にくいって訳ではなかったんだよね。

何だかんだで付き合いは良い方だし、それにキンジには人を引き付ける魅力みたいのがあるからね。

私は私で普段から笑顔でいるから、そこまで警戒されてる訳でもない。

切磋琢磨せつさたくまする上ではイイ見本だったんだろうね。

「まあええわ。お前も腑抜けになつてないか試したるから、ちよつと顔ツラを貸しや」
付いて来いと言つたばかりに、蘭豹は振り返つて背中を向ける。

私は黙つてその背中に続く。

ある意味とぼちりだね。

そのまま、私は施設内の射撃レーンに連れて行かれる。

パン！ パン！ パス！

私以外にも他の人たちが射撃レーンにいるのは当然で、様々な銃声が聞こえる。

その中でも私に見覚えがある人がその手を止めて、何人か見てくる。

「よし、まずは中距離射撃や。スコアは100ポイントでやる。お前は違う銃2丁もつとるから、1丁ずつ交代でやれ」

簡単な説明だけを受けて、私はレーンに立つて耳当てをする。

私は取りあえず最初にグロック18を抜いて構える。

射撃はセミオートで。

「始めッ!!」

大声で言つてるんだろうけど、耳当てがあるせいで小さく聞こえる蘭豹の声に合わせ
て私は撃つ。

連続で聞こえる銃声。

マンターゲットのスコアが一番高いちょうど手の部分に順調に当たる。そして、終了する。

後ろを振り返ってみると、スコアの結果の紙を手にとってみている蘭豹。

「次は、ウチと同じ銃の方や」

そう言えば、蘭豹も私と同じ銃だったね。

グロックの結果はもう一方の結果も出てから言う……把握したよ。

『象殺し』^{エレファントキラー}——M500の方を抜いて、同じく構える。

「次、始めッ！」

蘭豹の掛け声と同時にグロックの時と同じく撃つ。

こっちは反動が凄いから、グロックみたいに連続で撃てないんだよね。

撃ち過ぎたら腕がおかしくなる。

そして撃ち終わって、結果が出る。

「ふーん、まあまあやな」

耳当てを外して、蘭豹の近くに行くと言って紙を見せてくる。

「100ポイント中グロックの方は96。M500は87。及第点やな。動かない的やけど」

「遊びに行つてた訳じゃないですからね」

「今ので分かつたわ。もうええで、好きに訓練行つとけ」

「格闘は見ないんですか？」

藪蛇かなと思いつつも、私はそう聞く。

「東海林しやうじを落とした動き見てたら分かるわボケ」

この人、さつきのを見てたんだね。

「そうやな………ついでやから、1年でも相手しとけ。お前は戦徒アミカがおらんしな。目ぼしいのいたら、好きにしい」

そう言つて蘭豹は違う生徒を見に行つた。

戦徒アミカ、ね。

戦徒制度——簡単に言えば先輩後輩がコンビを組み、二人ツーマンセル一組で教えると言う制度。

イ・ウーでも、そんな感じだったなあ。上下関係は年齢じゃなくて力だったけどね。

ここもあんまり変わらないか……先輩でも実力が低かつたら舐められるし。

私は大歓迎だけだね。

舐めてるつて事は、油断してるつて事だし。

それに、そうやつて驕おごつてる人ほど……叩き潰すのが楽しいんだよね。

しかし………戦徒アミカか。

私が武偵を育てるって言うのもおかしい話なんだけどね。

あー、でも私好みで育てて”こっち側”に引き込むのもアリかな？

そう考えながらも、私は皆が訓練してる大きな空間へと戻って来た。

「やあ、白野さん。大丈夫だった？」

そして、不知火が私に話しかけてくる。

「別に何ともないよ。ただ単に武偵高を離れてたから、鈍にぶってないか見られただけだよ」

「なるほどね。結局、遠山君は戻ってこないのかな？」

「事情を知ってるんじゃないの？」

「僕と武藤君は知ってるよ。だけど、事情を知っても知らなくてもここに居る何人かは

戻って来て欲しいって思ってるよ。もちろん、僕もそうだけどね」

今でもキンジは割と好かれてるんだね。

本人が聞いたら微妙そうな顔をしそうだけど。

私は話は終わりとばかりに、別の話題に切り替える。

「ところで、1年生ってどこら辺で訓練してるかな？」

「向こうの方だけど、いきなりどうしたんだい白野さん？」

「先生が1年生でも相手してきな、だつてさ。まあ、高校になつて外からも知らない子が入って来ただろうからね」

「つまり、顔見せって事だね。じゃあ僕は邪魔にならないように見学してるよ。ちょうど休憩したかったからね」

そう言う不知火は確かに汗をかいてる。

さつきまで訓練してたんだろう。

しかし、やっぱり食えない人だよ……見学とか言つて私の実力を測るつもりだろうね。

その程度の事、私には読めてるよ。

「まあ、ご自由に」

最後にそう言つて私は不知火が言つた1年生の中でも、盛り上がってる場所を目指す。

◆ ◆ ◆
「よっしやあ、取つた!」

そう言つてアタシは男子生徒の腕を捻り上げて、組み伏せる。

ギリギリとさらに腕を捻り上げる。

「クソツ! イテテテテテテ!? ギブだ、ギブ!!」

なんだよ根性ねえな。

なんてアタシは思いつつもタップしてる男子生徒を放す。

「相変わらずの男女め」

そして吐き捨てるようにそう言う。

別に言われ慣れちやいるから、どうという事も無い。

「へ、悔しかつたら勝つてみな」

挑発するようにアタシはそう言い返してやる。

事実負けるから、何も言い返せずにそいつは去って行く。

「さすがだね、ライカ！」

アタシは後ろでそう褒める友人——間宮 あかりに親指を立てて振り返る。

「今の所5連勝か」

「おい、誰かアイツの連勝止めろよ」

男子が口々にそう言うてくる。

今のアタシは連勝でノってるんだ。

誰が来たつて負けるもんか。

「先輩でもいいかな？」

そう言つて、誰かが他の1年生の間を縫うようにしてアタシの前に現れる。

「お、面白い人が来たな」

アタシの近くで見てた先輩がそう言う。

あの人、誰だったっけ……？

セミロングより長めの黒髪に、幼い印象を受ける顔立ち。

身長はアタシより低いだろうけど……あんな先輩、強襲科アサルトにいたか？

「おい白野！ ウチと戦わねえのかよ！」

東海林先輩が、人混みを分けて叫ぶ。

「東海林さんは半年前に割と頻繁ひんぱんに戦ったでしょ？ たまには違う人と訓練させてよ」

目の前の先輩はそう言うけど、東海林先輩が言った名前にアタシは驚いてる。

「白野って……もしかして、あの遠山先輩と組んでた先輩ツ?!」

「その白野で間違いないけど？」

アタシの言葉に白野先輩はにこやかにそう言う。

マジか……と、アタシは思った。

「えっと、誰？」

そうだった、あかりは去年の2学期に来たから知らないんだ。

ちよūdō白野先輩は夏には去っちまったし。

それに、あかりはアリア先輩以外にほとんど眼中にないしな……

アタシはあかりに近づいて教えてやる。

「去年の夏に家庭の事情で武偵高を去った人だよ。強襲科アサルトの主席候補だった遠山 キン

「先輩の元パートナーで、Sランク武偵に近いつて言われてたAランク武偵だ」
「えっ!? そんなに凄い人なの?」

「ああ、それにこの主任である蘭豹先生と同じ大型拳銃をある程度使いこなすらしい」
去年、アタシは中等部^{インターン}だったからあまり知らない。

「けど、同じ強襲科^{アサルト}だったからそれなりにウワサになっていた。」

「1年にプラチナコンビって言われるコンビがいるって言う話。」

しかも任務成功率も今の所100パーセントって言う話も聞いている。

「けど、あの方方は都市伝説みたいな感じみたいだけどな。」

「お話は済んだかな?」

「白野先輩はそう言いながら待っていてくれた。」

「あ、はい。すみません」

「ん、いいよいいよ。私を知らない人もたくさんいるだろうし」

「先輩だからと言って見下してる訳でもなく、白野先輩はそう言ってくれます。」

「何て言うか、話しやすい人だな。」

「それで、どうかな? 私とちよつと訓練してくれる?」

「別に構いませんけど、何でアタシなんですか?」

「さつき、蘭豹先生に1年生の相手でもしてこいつて言われてね。盛り上がったる所、先

輩が割り込んで悪いんだけどね」

「い、いえ。別に気にしてません」

少し緊張しながら、受け答えしていると後ろからあかりの堪えた笑い声が聞こえる。

「ら、ライカが……敬語使ってる。……ぷっ」

(あとで覚えてろよ)

などとアタシが思っていると、白野先輩が目の前まで来る。

「それじゃあよろしく。白野 霧だよ」

握手を求めるように、手を差し出す。

(応じないと失礼になるよな)

そう思って、アタシも手を差し出す。

「1年の火野 ライカです」

握ろうとした瞬間に、アタシの腹に何か突き付けられてる。

「油断大敵」

そう言っつていつの間にか、先輩が握手をしようとした手にナイフがあった。

一体いつ抜いて……

「ちよつと試させて貰ったけど、武偵ならこれぐらいは反応しないと」

そう言っつてバカにしている訳でもなく、愉快そうに笑ってる。

すぐにナイフを仕舞って白野先輩が握手に応じる。

アリア先輩みたいに賞を取ってる訳じゃないけど、この人もやっぱり凄い人なんだ。

(これが、Sランクに近いって言われるAランク武偵……)

アタシがそんな風に思ってる内に先輩は離れて行き、オープンフィンガーグローブを手にはめる。

「さて、訓練を始めよっか」

「は、はい！」

そうだ。気合いを入れないと。

相手は先輩なんだし、油断大敵だ。

「ルールは、バインディング噛みつきとサミング目突きは無しでそれ以外は有りって言う感じ？」

「はい、そんな感じですよ」

「銃以外の道具は？ 刀剣とか」

「一切無しです」

「勝利条件は？」

「相手が降参するか、逮捕術に則のつとった体勢であれば勝ちになります」

近くにいたルールを知ってるアタシと同じ一年の男子生徒が、緊張気味に白野先輩に

答えて行く。

「なるほどね。それじゃあ……いつでもいいよ」

そうやって、先輩は掛かって来いとばかりに人差し指を動かす。

挑発……してゐるんだよな。

「Sランクに近いだか何だか知りませんが、後悔しないで下さいよ」

「そう言うなら私を後悔させてみなよ」

この先輩、涼しい顔で言ってくる。

向こうは仕掛ける気はない。

なら、アタシから仕掛けてやる。

ステップを踏んで、駆けだす！

肉薄して、フェイントを掛けてからの鋭い蹴りを放つ。

「うーん。なかなかのフェイントだけど……引つ掛からないよ」

そうやって先輩はアタシの蹴りを脚で防御して掴んだ。

だけど、ここから！

地面を思いつきり蹴って、掴まれていないもう片方の足で先輩の顎を狙う。

そして、蹴りが顎先に触れる瞬間に白野先輩の顔が上へと向く。

決まった!? いや、手応えがない。

多分、アタシのつま先が顎に触れる前に顔を上げたんだ。

しかも脚を放してくれてない。

マズイ……このままじゃ組み技グリップリングを仕掛けられる。

アタシが空中に浮かんでると、先輩はアタシの脚を捻る。

結果、アタシは天井じゃなくて地面を見る事になった。

(……で倒れたら、負ける！)

腕立て伏せの要領で体が着く前にバン！ と、両手を地面につける。

そのまま体を捻り、掴まれてる脚を捻って抜け出す。

最後に先輩の腹を蹴って、バク転の要領で距離を取る。

打撃の蹴りじゃないから先輩にダメージはない。

「……ッ!？」

地面に着地する直前で、既に先輩が距離を詰めていた。

着地したら硬直で反撃出来ない。

だったら、着地すると同時に攻撃するしかない。

アタシは手を組んで、迫ってる先輩の頭に拳を叩き落とす。

タイミング的にもちようど頭の位置。

「残念そんなあからさまの読めてる、よー!」

「……グッ!」

最後の一言同時にアタシは後ろに飛ばされた。

防がれた。頭上からのアタシの攻撃を防御すると同時に腹に一発決められた。

「ライカ！ 前だよ！」

あかりの声が聞こえて前を見ると今度は空中に浮かんでる先輩。

すぐに腕を交差させて防御すると、カンフーアクションみたいな2連続の蹴りが、ア

タシの腕を襲う。

空中だつて言うのに重い蹴りだッ！

怯^{ひる}んでると、今度は懐に潜り込まれた。

防御してる腕の間から、先輩の腕が伸びてきてアタシの襟首を掴む。

さらに腕を掴まれて……足技を掛けられる。

完全にアタシを投げ飛ばすつもりだな。

だけど——

(甘いぜ、先輩)

アタシはすぐに足技を躲して、クルリと体を回転させながら先輩の前へと出る。

その際に逆に掴み返して先輩を投げ飛ばす。

これはさすがに決まった！

……アレ？

おかしい。

確かに先輩を投げ飛ばしたのに。

アタシが、浮いてる感じがする……

「ガハッ！」

背中の衝撃と共に肺から空気が漏れる。

天井が見える。

そして、先輩が私をまたいで見てる。

逮捕術であつた……腕と脇の間に足を置くと言う奴をやられてる。

つまり、負けた。

「えつと勝者、白野 霧」

審判役の男子生徒がそう言った。

「カーッ、負けた……」

アタシは寝ながらそう呟く。

なんつーか、先輩だから負けたとかじゃなくて。

何も有効打を与える事が出来なかつた。

それが悔しい。

「良い動きだったよ」

アタシの上からどいた先輩は、そう言つて手を差し伸べて来た。その手を取つて立ち上がる。

近くで並んで見るとやっぱり、アタシより小さいな。

まあ、アタシは165近くもあるし……普通の女子に比べたら背が高いんだから当たり前前だけだな。

「悔しいだろうけど、逆によかつたでしょ？ 強い人と戦えて」

白野先輩、自分でそう言うのかよ。

と、思ったけど……確かに強かつた。

「はい！ ありがとうございまして！」

感謝を籠めて頭を下げる。

「素直な子は良いね。よつし、誰か他の1年生で挑みたい人がいたら来てもいいよ。敗北だとか、そんなつまらない事は考えないで来てね。これは訓練だからね」

そう言つて、笑顔で言う先輩は女の子らしかつた。

憧れるな……こんな風に強くてカワイイ先輩。

「ああ、それと。戦つてる最中にあわよくば触れられるかもね。色々と」

そう言つた瞬間に男子の目の色が変わつた。

「いいのか？」「良いんじゃない？」「じゃあ俺が」

どいつもこいつも単純だなー。

何て思いつつもジト目になる。

あの先輩、絶対確信犯だ。

結果から言うとな心のある男子は、挑んだ全員が呆気なく退場した。

27：殺しの才能

いやー、昨日は驚いた。

まさか2年前のあの子がいるとは思わなかったよ。

名前は確か間宮 あかり、だったかな？

それに昨日の訓練でも分かったけど、1年生にも彼女以外に何人か面白そうなのがいるね。

だけど一先ず^{ひとまず}、1年生については置いておこう。

どうやらキンジは、理子に調査の依頼をしたみたいだね。

私はその事を理子から聞いている。

ついでに私も神崎について個人的に調べていると言う風に、話を合わせるつもり。

別に彼女の事は充分に知ってるから調べる必要はないんだけど……

まあ、私も調べたって言う事を証明しとけば話が円滑に進められるしね。

そのために一応、調べた資料も纏めてる^{まと}。

そして今は理子と一緒に女子寮前の温室にいる。

「今の所順調だねー」

「モチのロンだよ、りこりに抜かりはない。問題は……キーくんが武偵活動に消極的な所だけだね」

理子は後半、真剣な口調でそう言う。

「そうだね。キンジを強襲科アサルトに連れ戻したい神崎と、武偵自体をやめたいキンジ。意見は平行線だからねー」

「金一の死があそこまで影響あるとは思わなかったよ。おかげで3学期にあたしまで転科する破目になった」

誤算だとばかりに理子はそう言う。

「安心してよ。私が上手くやってキンジが少しは前向きになるように誘導してみるよ」

1度やめて、色々と吹っ切って戻ってくるって言うのもアリだけだね。

せっかく期待してるのに、こんな事で潰れて貰ったら困る。

むしろ成長したキンジが楽しみなのに。

「うん。ありがとう」

理子は笑顔でそう言うけど……怪しいんだよね。

何か後悔してるような感じがする。

詮索せんさくも調べもしないけど、どうも気になるね。

本人は話したくないみたいだし。

ま、焦る必要はない。近い内にいずれ分かる事だしね。
勘だけど。

どうやら、待ち人が来たみたいだね。

「理子、と……なんで霧までいるんだよ」

「おーっ！ キーくん来たねー」

理子はすぐにキヤラを切り替えて、ぶんぶんと手を振ってアピールする。

「私も個人的に神崎さんについて気になったから調べただけだよ」

「理子。喋ったのか？」

「うん、だってキーちゃんなら問題ないでしょ？」

「確かに問題ないが、依頼人について話すのはどうかと思うぞ？」

呆れるようにキンジはそう言う。

「まあいい。アリアに知られなかったら問題は無い」

そう言つてキンジは鞆かばんの中から紙袋を取り出す。

それを見た理子は目の色を変えて紙袋を破り、中身を取り出す。

「うわあ~~~~やつたー！ 『しろくろっ！』に『白詰草物語』に『妹ゴス』だあー！」

何かのゲームみたいだね。

それを見て理子はゲームを掲げてびよんびよんと跳ねて髪を揺らす。

別の所も揺れてるけど。

キンジは呆れたようにその様子を見てるけど、理子の表情が変化するのを私は見た。その視線は、『妹ゴス』というゲームのシリーズに2とか3が書いてある別のパッケージにあった。

数字に嫌悪感があるからか、微妙な表情を少ししてるね。

だけど、私を見てすぐに普通の顔になって、

「ま、いつか……。キーくん、ありがとね!」

「ああ。報酬としてそのゲームはくれてやるから、依頼した通りに調査した事について話してくれ。俺はトイレ行くフリをして無理矢理抜け出して来たんだからな」

時間は無いとばかりにキンジはそう言っただけで腰掛ける。

理子はゲームを服の中に仕舞う。

そして私と理子はキンジを挟むように座る。

「それにしても、キーくんはキーちゃんだけでなくアリアの尻にも敷かれたの?」

「どう言う意味だよ……」

「つまりはカノジヨさんなんだから、直接聞けばよかったのに」

「アイツは彼女じゃねえよ」

「え? だって、朝にキーくんとアリアが腕組んで学校に行く所を見たって他の男子生

徒が言つてたよ？ あとはね、キーちゃんだけでなくアリアまで侍らせてるキーくんを殺すつてフアンの子がジェラシーしてるし」

理子の言葉を聞いてキンジは不機嫌そうになる。

「侍はらせるつてなんだ、侍らせるつて……好きで傍にいるんじゃねえよ。霧はともかく、向こうが勝手に俺の傍に来るだけだ」

「なんだ、キーくんはツンデレだったのか」

「意味分からん事言つてないで、調査の報告をしてくれ」

面倒くさいとばかりにキンジは話を切り替えた。

理子は「ちえー」とつまんなそうに口を尖とがらせる。

「そうだな……まずは、アイツの評価だ。どう言つた実績があるのかとか、強襲科アサルトでの評価を聞かせてくれ」

「分かつたよ。えつと、そうだね……最初にあの子のランクだけだね。武偵ランクはSランクだよ、前のキーくんと同じだね」

Sランクと言う単語に、キンジは特に驚く事も無く思い出し出してる様子だった。

充分にあの子の実力は身を持って知つたみたいだからね。

「それでね、格闘技もすんごいだって。確かボクシングとか、日本の柔術とかの動きを取り入れた何でもアリの……バリー、バリー、なんだっけ？」

「バーリ・トワードね」

「そう！ それだよキーちゃん」

ワザととぼける理子に、私は話を合わせる。

「イギリスでは縮めてバリツって呼ばれてるよ。あとはねー、拳銃とナイフ……って言うか剣術の腕も凄くてね」

「それも身を持って知ってるよ」

「それじゃあキーくん、アリアに2つ名があるのも知ってる？」

「2つ名だと？」

「うん。『双剣^{カド}双銃^ラのアリア』なんだって」

理子の放った言葉にキンジはここで少し驚く。

2つ名——優秀な武偵には、そんなモノが付く。

犯罪者も同様だけどね。

私は既にあるから別にどうでもいいし、好きに呼んで貰って結構だけどね。

そう言えば私と同じ有名な犯罪者で通称があるのって、誰がいたっけな……

『魔^{デモ}剣^{ラダ}』ことジャンヌと、犯罪者じゃなくてテロリストだけど『厄水の魔女』のカツエ

|| グラッセが割と有名か。

イ・ウー以外で考えるなら『歌^{シン}う殺^{キン}し屋^{グスイーパー}』がそうだね。

「え？ キーくんそんな事したの？」

「おい理子。今の所、絶対に聞かなかった事にしろ」

キンジはそう言つて止める。

必死だねー。

さすがに、この話を広められたらキンジが死ぬかも知れないからね。

社会的に……まあ、その時は私が拾つてあげるけどね。

「えー、でも理子に対しての依頼は調査とそれについて口外しないだけだし。今の話の口止めは依頼の中に入つてないからねー」

「待て理子。早まるな」

あー、理子は理子でこの学校で友人関係を多く築いてるからね。

少し情報を漏らせば、瞬間に広がる。

そんな状況になったら、キンジにとって面倒くさい状況になるし。

それを未然に防ぎたいからこんな必死なんだろうね。

「理子、これで手打ちにしてくれるかな？」

私はそう言つて10万を渡す。

友人関係の口止め料としては充分だろうね。

それに偶然聞いただけだし。

「うえっ!? いいの?」

「いいんだよ別に、貯蓄は余ってるからね」

武偵活動で貯めさせて貰った分だけでも何年か過ごせるくらいには余ってるし。

理子の場合は別の意味でもいいのか、って聞いているんだろうけど。

「取りあえず、早いところ調査した内容を話した方が良いでしょう?」

「……でも、さすがに何て言うか」

「取りあえず受け取っておきなよ」

私はそう言って、理子に向かってワザとらしくニヤニヤと笑う。

この顔を見た瞬間、理子は納得してくれた。

「ああ……そう言う事ね。じゃあキーくん、次に知りたい事ってある?」

「お前らのやり取りに果てしなく不安を感じるんだが……。あー、じゃあ体質とか生ま

れについて聞かせてくれ」

考えないようにして話題を切り替えたね。

「アリアのお父さんはね、イギリス人とのハーフでお母さんは日本人なんだって」

「つまり、クォーターか」

「そうそう。で、ミドルネームの『H』家なんだけどイギリスの方に家があるみたい。そ

れと彼女のおばあちゃんはD a m eの称号を持つてる」

「デーム？」

「イギリスで叙勲された女性の称号だね。騎士階級の称号だよ」

「キーちゃん正解って、キーちゃんも個人的に調べたんだっけ？ 一部資料はりこりんから受け取ったけど」

「つまり、あいつは貴族ってことか？」

「正確には違うね。本人が貴族って訳じゃなくて、あくまで貴族の娘。まあ、貴族って言っても差し支えないだろうけどね」

キンジが疑問を覚えるように尋ねた事を私が答えてあげる。

日本だと身分なんて無いに等しいからね。

他国の身分の上下関係なんて、言われてもピンとこないだろうし。

そして、理子が私の話を続ける。

「そう言う事だね。それで、アリアはH家とは上手く行っていないらしくてー。ちよっと疎遠になってるみたいだから、家の事をあんまり話したくないようだしね。それに、どうやら情報統制もされてるんだけど……あの家はねー」

「ちゃんと報酬は払ったんだから教えろよ」

そのキンジの言いように、私はキンジの頭を軽く叩く。

「いてっ……」

「言うほど痛くしてないでしょ」

「だからつてお前、いきなり叩くなよ」

「さすがに叩くよ。1から10まで教えて貰うつもり？ 中学時代に助言したような気もするんだけどね」

「……あー、そう言えばそんな事も言ってたな」

『『考えない人は死んでも同然。人形と一緒に』、武装”探偵”なんだからちよつとは自分の脚で調べなよ』

「分かったよ……悪かったな理子。あと、強猿だとかの話はするなよ」

「ラジャーであります！ ま、頑張れや！」

そう言つて理子はキンジの肩を叩こうとして外し、キンジの腕時計に当たつて地面へと叩きつけた。

ガチャと、音がして時計は見事に壊れた。

私からして見ればかなりワザとらしいけど、キンジは気付いてないみたい。

「うわーゴメン。キーくん」

「いいよ別に、台場で買った安物だしな。また買い直せばいい」

「だめだよ！ 理子が依頼人クライアントの所有物を壊したなんて知れたら、沽券こけんに関わつちやうよ

！」

そう言つて、理子は胸元の襟首を少し引つ張つて壊れた腕時計を胸の中に仕舞う。随分と変わった隠し場所だね。

私には真似できない。

それと、キンジはどうやら理子の胸を見ちゃったみたいで顔を逸らしてる。

「と言う訳で、きつちり修理して返すよ。他には何かある？」

「いや……特には」

「分かった。それじゃあね、キーくんキーちゃん！ バイバイキーン！」

そう言つて理子は両手を広げて去つて行つた。

「相変わらず騒がしい奴だ」

「しかし、そう言いつつも胸元は見ると……」

「……見てねえよ」

「視線が集中してたくせにね。否定されても見てる人は見てるよ。私しかいないけど」

私は座つてた柵から降りて、立ち上がる。

「全く、蘭豹らんびょう先生の言う通りだったね。今のキンジはすっかり腑抜けてる」

まだ1年生の時や武偵中学にいた時の方が考えてた。

「別にいいんだよ。俺はこれで……」

「武偵やめて、本当にすっぱり吹っ切れるのかな？ 逆に違和感を感じるだけだと思う

けど」

「——どういう意味だよ」

「逆に聞いてあげるよ。私と武偵でコンビ組んでた時……楽しくなかった？」

私は悲しげにそう聞く。

不安があるような声音も交えて。

キンジは、その言葉に目を逸らした。

「そんな事は……ない」

「ならよかった。私からの答えとしてはそう言う事だよ」

私は笑顔で答えてあげる。

これは少しづつ矯正して行かないと、問題あるかもね。

私はそれ以上何も言わず、キンジに背を向けて歩き出す。

「あ、そうだ」

重要な事を一つ忘れる所だった。

私は振り返って、キンジに軽く指差しをして——

「理子の口止めで、貸しましたーっね」

またしても笑顔でそう言っただげる。

その時のキンジの顔は苦笑이었다。

『……一度だけだ』

『一度だけって、どう言う意味よ？』

『一度だけ、強襲科アサルトに戻ってやる。そしてその間に起きた最初の事件と一緒に解決してやる。つまりは自由履修で転科じゃない。その条件でいいのなら組んでやる』

その夕方、私は盗聴器で聞いた。

キンジが強襲科に戻ると言う約束をアリアに取り付けている事を。

ただし、聞いた通りに条件付き。

未だに関係が良好とは言えないけど、当たり前か。

私がワンクッションにならないといけないのかな？

だとしたら、かなり面倒なんだよね。

2人とも、意地張ってる所あるし。

これならイ・ウーのメンバー全員を切り裂きに行く方がまだ楽しいよ。

だけど……お父さんとあの2人が出会うまでは、付き合わないと。

難儀な話だね。

『分かったわ。あたしも時間がないし、その事件であんたの実力が嘘か本物か確かめる事にするわ』

『どんな小さな事件でも一件だぞ』

『代わりに大きな事件でも一件よ。手を抜いたりしたら風穴を空けるからね』

『ああ、約束してやるよ。全力でやってやる』

どうやら話は終わらしい。

キンジ、全力を出すつもりは無いね。

口調で分かる。

きつと屁理屈こねて自分の技能——H S Sを使わない全力を見せつけるつもりだね。

うーん、これはその時になったら誘導するしかないか……いや、待てよ。

きつと理子も別の盗聴器で聞いている筈だから、最初に事件を起こすだろう。

と言う事は十中八九、大事件になるだろうね。

私はすぐに理子の部屋へと行く。

「どうしたのキーちゃん？　理子の部屋に遊びに来たの？」

「そうだね。ちよつと、聞きたい事もあったし」

部屋の扉を開けた理子に、そう言いながら入る。

「それで、どうしたの？」

「どうせ……聞いてたんでしょ。さっきの会話」

私が遠回しにそう言ってキンジの部屋での会話の事を言うと、真剣な表情になる。

「聞いてたよ。よく分かったね」

「アリアとキンジを結び付けたいのなら会話ぐらい盗聴してると思ってたね。私も同じだけ」

「それで？ おね——」

「ストツプ、前も言った筈だよ。今は白野 霧だつて」

それに白野 霧がジャックなんてバレたら教師陣を皆殺しにしないと行けなくなる。

そんな骨が折れる事はしたくない。

それに、お父さんの約束までバレる訳にはいかない。

別にバレるとは思ってないし、変装には自信はあるよ？

だけど、慢心はしたくないんだよね。

それで全てがパーになったら、楽しむどころじゃなくなっちゃうし。

理子は相変わらずその事に残念そうな顔をしながらも続ける。

「……結局、どうしたの？」

「どうにもこうにも、最初に事件を起こすつもりでしょ？」

「そうだよ。それであいづらがくっ付けば、あたしは良い」

「その時に私も同行するよ。きつと、キンジはHSSを使わないつもりだろうからね」

「使わせるように誘導するってこと？」

「そう言う事、それでアリアはキンジの実力が本物だつて言う風に思うだろうけど……キンジと衝突するかもね」

むしろ意見が衝突しない訳がないだろうけど。

「だからその時のために私も事件の解決に協力すれば、色々意見とか主張が言えるからね」

私はカラカラと笑ってそう言う。

現場に居なかつたクセに口出しするなつて言われても困るし。

「……それつてつまり」

「私を見ても撃つなり爆破なりしなさいつて事だね」

「ダメだよー！」

すぐに理子は叫んだ。

今の、周りに聞こえてないかな？

ちよつと心配だけど話を続ける。

「そう言われても、多少のリスクぐらい負わないと」

私にだけ攻撃が止んだりしたら逆に怪しまれる。

「だからつて……」

「そう簡単に死なないつて、むしろ私が死ぬとか……」

それはそれで――

「楽しみだね」

「冗談でも……そんな事言わないでよ」

「だって自分でも気になるしね。一度しか味わえない感覚なんだし、だからと言って自殺願望がある訳じゃないけど」

「――イヤだ」

ドン、と私の胸に理子が飛び込んでくる。

心なしか、肩が震えてる。

もしかして、

「泣いてるの?」

一体何で泣いてるのやら。

尋ねてみても理子は答えてくれない。

別に私が死んだわけでもリリヤとかが死んだ訳でもなく、例えばの話をしただけなのに。

しかし、こんな風に泣かれたのいつだったかな?

家族が本気で泣かれると、私としても困るんだけどね。

「イヤだよ……死んで欲しくないよ……」

殺人鬼なのに、死んで欲しくないなんて言われたの初めてだ。
むしろ逆ならあるのに。

「別に私を殺せつて言ってる訳じゃないんだよ？」

「……………」

そう言つても、理子は離してくれない。

それどころか……逆に力が強くなってきたらただけ。
にしても泣き虫なのは変わらないんだね。

仕方ないとばかりに私は抱きしめ返して、囁く。

「じゃあ約束しよっか」

「……………約束？」

「うん、約束。私は死なないから……ちゃんと攻撃すること。じゃないと怪しまれちゃうよ」

「……………」

「白野 霧としてじゃなくてお姉ちゃんとの約束。それならいいでしょ？」

「……………分かった」

渋々と言つた感じに理子は納得してくれた。

「それじゃあ、頑張つてね」

理子を離して頭に軽く手を置いた後、私はそのまま部屋を出て行く。
死んで欲しくない、ね……

これだから理子は面白いんだよ。

そして、ある日の放課後。

いつも通りに強襲科アサルトで訓練しつつも面白い人がいないか観察する。

今はノルマが終わったのでちよつと休憩中。

「あ、白野さん聞きましたか？」

「いきなりどうしたの？」

男子生徒の1人が私に気付いて声を掛けて来たので返す。

「遠山が強襲科アサルトに帰ってくるらしいんですよ」

「へー、キンジがね……それは楽しみだけど。一体、どういう風の吹きまわしなんだろうね」

「白野さんは知ってるんじゃないんですか？」

「全然？ 帰ってくる理由が思いつかないよ」

本当は知ってるけど。

「だけど帰ってるなら出迎えないとね。情報ありがとねー」

私はそう言つて教えてくれた男子生徒に背を向けながら手を振る。

そのまま私は、強襲科アサルトの戦闘訓練所の2階へと向かう。

私がそこへ到着すると同時に、

——ガラガラガラ。

と扉が開けられる。

そこに居たのは、憂鬱そうな顔をしたキンジだ。

相変わらず微妙そうな顔しちやつて。

そして、他の生徒がキンジの存在に気付いた瞬間。

剣戟けんげきと銃声がしだいに止まり、全員がキンジを見る。

そして、キンジが中に入って来た所で他の生徒はキンジに雪崩込む。

「おー、久しぶりだなキンジ。お前は何かんだ言つて帰つて来てくれると思つてたぞ

！ お前の元パートナーのせいでイライラが溜まつてるから、憂さ晴らしに死んでく

れ」

「それ俺関係ねえだろ!!」 夏海

「蘭豹先生の話によると、最近腑抜けてるらしいなあーキンジ。武偵はお前みたいな腑

抜けたマヌケな奴から死んで行くもんだからな」

「だったら何でお前が生き残つてるんだよ三上！ しかも毒舌過ぎるだろー！」

好かれてるねー、キンジ。

「あ、白野先輩」

私が下にいるキンジを眺めてると、横からこの間聞いた声とする。

「火野ちゃん」

「こんにちは、です。あと、すみませんけど『ちゃん』づけはやめて下さいよ。そう言う風に呼ばれる歳でもない……ありませんから」

この間戦った火野 ライカが私に声を掛けて来た。

それと、普段から敬語に慣れてないのか言い直してる。

その彼女の後ろには例の子——問宮 あかりもいる。

「分かったよ。君も、慣れないなら敬語じゃなくてもいいよ」

「……いいんですか?」

「お互いに喋り難いでしょう?」

「それじゃあ、お言葉に甘えさせていただきます」

「別にそんなに畏まらなくてもいいのに、取って食う訳じゃないんだし」

人を食ったような奴だとは、言われた様な気もするけど。

私は火野に向かって微笑みながら安心させるようにそう言う。

「ところで後ろの子は? 確か、私と戦った時に話してた子だと思っただけど」

私は火野の後ろにいる間宮 あかりの事を尋ねる

一応、こうして顔を合わせるのは初対面って事になってるからね。

「アタシの友達なの、間宮 あかりです」

「は、初めまして」

火野に背中を押されるように、間宮は紹介される。

彼女も緊張してるのか、言葉が少し途切れた。

「どうも、初めましてね。2人もキンジの事を見に来たの？」

「見に来たって言うか……たまたま通りかかっただけです」

まだどこか堅いような喋り方だけど、さつきよりは普通だね。

火野はぼつが悪そうな顔をする。

「あの、白野先輩は……あのひ——遠山……先輩の、元パートナーなんですよね？」

取りあえず最初にその言葉を聞いて分かった事は、間宮はキンジに良い感情を抱いてないみたいだね。

『あの人』って言い掛けてたし、取って付けたような先輩からして敬う気なんてあまりなさそうだな。

「まあ、そうだね。キンジと私の事を知らなさそうだけど……もしかして途中から来た子かな？」

「あかりは去年の2学期に一般中から来たんですよ」

「と言う事は、私は夏休みに入ると同時に去ったから知らないだろうね。キンジも、クエスト任務でよく出かけてた時期だろうし」

火野の言う事を補足するように、私は呟く。

「それで、どうかしたのかな？ 間宮さん」

「その、何て言うか……」

歯切れが悪そうに、キンジの方を見ながら呟く。

そこにはもみくちやにされてるキンジ。

もしかして――

「想像してたのと違った、とか？」

顔を覗き込むようにしてそう聞く。

「な、なんで分かるんですか!？」

「キンジの噂なんて、大体はSランク武偵で強襲科の主席候補、私の元パートナー、プラチナコンビの1人、そんな所だろうからね。そこから考えれば今あそこで遊ばれてるキンジは、Sランク武偵には到底見えないだろうからね。もつと、色々と威厳とかに溢れてる人を想像してたんじゃ？」

「はい……そうです」

「私が言うのも何だけど、普段のキンジは頼りないからね。そう思うのもムリはないよ」
それでも運動神経は良いから……鍛えればHSS無しでも普通にSランク行けそう
だけだね。

体の土台としては結構出来あがってるんだよ。

「いいんですか？ そんな事言って」

「いいんだよ火野さん、蘭豹先生の言う通り最近腑抜けてるからね。私としても思う
所はあるよ。だけど、キンジはちゃんと光る物を持つてる」

「やっぱり、パートナーだとそう言うの分かるんですか？」

「そんな所だね。それと、私の目は良いんだよ」

そう、色々と人を観察して来た私の目は誤魔化せない。

火野に向かってそう返しながら目を向ける。

彼女も『目が良い』という言葉が、ただ単に視力が良いって言う意味じゃない事が分
かっているみたいだね。

「この前戦って分かったけど……火野さんも光る物——センスはあるよ」

「ほ、ホントですか!？」

「もちろんだよ。機会があれば、戦姉妹アミカにしてもいいかもね」

「……へ？」

私が笑顔でそう言うと、火野は固まった。

「う、うええええええええええっ?!」

そして慌てたようにして叫ぶ。

何を大袈裟に驚いてるんだらうね。

「アタシが白野先輩の戦姉妹だなんて、そんな——」

「イヤだった?」

「イヤって訳じゃないですけど……アタシみたいな人よりも、もつといい人がいるんじゃないかって思いますし。Bランク程度の実力ですし。Sランクに近いって言われる先輩とはアタシじゃ釣り合わないんじゃないかなーって思いますし。きっと先輩は人気だろうから、他にも戦姉妹になりたいって言う人がいるだらうし」

動揺してるのか、指を合わせて視線が泳いでる。

私って、武偵では意外と高嶺たかねの花的な感じだったりするのかな?

もうちよつと周りの評価に耳を傾ける必要がありそうだね。

「別に遠慮する事は無いのに」

「遠慮しますよ!」

「それに、私は戦姉妹アミカにしてもいいかもって言ったんだけどね。まだ戦姉妹にするとは言っていないよ。もしかして、期待してたりするのかな?」

イタズラっぽく微笑んであげると、火野は顔を赤くする。

「は、はは……すみません先輩！ アタシ、まだノルマが残ってるんで！」

苦笑いで1歩、2歩と下がったかと思うと、火野はトレーニングルームがある方へと逃げた。

あの子はあの子で弄り甲斐がありそうだね。

そして、友達の様子を間宮は呆然と見送っていた。

(間宮に近づくにも、ちょうどいいだろうしね)

私は彼女の背中を見ながらそう思った。

他の人たちに絡まれて、訓練が出来なかったキンジが強襲科アサルトを出て行く。

私もその隣を歩いて行く。

「お疲れ」

「ああ、霧か。お前2階で見てたろ」

「お迎えはと思ってるね。それにしてもよく戻って来たね」

「アリアと約束したんだよ。条件付きだが、強襲科アサルトに戻ってやるってな」

当然のごとく私は知ってます。

今思えば、私って性質たちの悪いストーカーみたいだね。

「ただど……他の人に成り代わるために観察してる時の私って大体そんなものだから、今更か。」

「そんな事を思っていると、夕焼けの門で背中について待つてる子がいるのに気付く。」

「まあ、神崎なんだけどね。」

「キンジも気付いたのか、少しだけ疲れたような顔をする。」

「彼女はこつちの姿に気付くと、小走りにやって来て、私がいる反対側のキンジの隣を並んで歩く。」

「アリ……」

「私の鋭敏な聴覚が声を拾う。」

「この声、間宮だね。」

「声を掛けようとしてやめたんだらう。」

「……あんた、意外に人気者だったのね。霧が慕われてるのは知ってたけど」

「俺はあんな奴らに好かれたくない」

「そのあんな奴らに私も入ってるんだけど?」

「間宮は無視して、私は嫌味っぽくキンジに言い返す。」

「すると、キンジは「悪かった」とばかりに視線を向ける。」

「あんたってさ、人付き合い悪いしネクラって感じがしたけど……今日の様子を見て何

か違うと思つたのよ。なんていうか……一目置いてるような感じ」

神崎の言う通り、その判断は間違つてないんだけどね。

1つ訂正させて貰うなら、キンジは別に人付き合いが悪い訳じゃない。

なんだかんだ言いながら付き合い合ひし、困つてる人がいれば助けてやるような人なんだよね。

彼のお兄さん——金一と同じだね。

つまりは典型的なお人好しだつて言う訳だよ。

「あのね、キンジ」

「なんだよ」

「付き合い合つてくれてありがとね」

「……約束したからな。ただそれだけだ」

冷たく言うキンジだけど、神崎はどことなく嬉しそうだ。

それはそうと……後ろの子はいつまで追つ掛けてきてるんだか。

下手くそ過ぎる尾行だね。

本当に隠密の未裔まっえいかな？

そう思つても後ろは向かない。

「ただの約束なのは分かつてるわ。でも」

「でも……なんだよ?」

「強襲科アサルトにいるキンジ、なんかカッコよかったわよ」

「……………」

その言葉にキンジは少し驚いたような、返す言葉に困ったような顔をする。

私はちよつと茶化すつもりで肘で小突く。

案の定、鬱陶しそうな顔されたけど。

「あたしは、強襲科アサルトでは誰も近寄ってこないからさ。実力差があり過ぎて、誰も合わせられない。『独唱曲ソング』だから別に構わないんだけど」

「…………『アリア』?」

彼女の名前とは違うニュアンスを感じ取ったのか、キンジは疑問を浮かべる。

「Aria——英語に従って『エア』とも言われる。オペラとかオラトリアとかで用いられる独唱曲の事だね」

「そうよ、霧。よく知ってるわね。あたしはその『アリア』——あたしはいつでも1人だった。イギリスのロンドンでも、イタリアのローマでも」

「…………下らないな」。

君が1人なのは、周りが合わせられないからじゃない。

周りに合わせようと”しない”から。

つまり、君は周りに合わせる事が出来ないんじゃない、そうしないだけ。

自分の持ち味を殺さずに周りに合わせる事は出来る。だけど君はそれを知らないだけ。

まわりと良好な関係を築けないのは、どこか心で傲慢ごうまんでいるから。

アレだね。なんて言うんだっけ……井の中の蛙かわず大海を知らずって言う奴かな？

この子は何も知らない。

私以上に何も知らない。

素直に教えてあげるつもりもないけどね。

「ここで俺と霧を引き込んで、デュエツトないしトリオでもなろうって言うのか？」

キンジがそう言うと、アリアはクスクスと笑う。

「あんた、面白いこと言えるのね」

「面白くないだろ」

「いや、キンジ。返しとしては上手かったと思うよ？」

「霧の言う通りよ。良い返しだったわ」

「お前の笑いのツボは分からね」

「あんた、なんだか楽しそうよ。強襲科アサルトに戻ってからなんだか活いき活きとしてるみたい。

「昨日とは違ってね」

神崎にそう言われて、キンジは彼女から顔を逸らして私を見る。

さすがは良い直感してるね、神崎。

「そんなことは、ない……」

キンジも無意識だと思うけど、凶星だったみたい。

だから思いっきり否定せずに、少し言葉を濁してると。

この間の温室での言葉が少しは効いたかな？

そうだったら良いんだけど。

「俺はゲーセンに寄ってく」

露骨な話題逸らし、と言うか現実逃避。

「そっか、私はちよつと寄る所があるからここでお別れだね。それじゃーねー」

私はそう言ってるキンジ達と別れる。

後ろから、神崎とキンジが言い争う声が聞こえる。

ま、寄る所って言っても……後ろのネズミにちよつと用があるんだけどね。

キンジと神崎を追い掛ける、間宮の子の後ろをさらに私が尾行する。

完全に意識が2人に向いてるね、あの子。

そう言うのは後ろからサクリ殺されちゃうよ。

なんて思いつつも、他の人たちに紛れて歩いて追い掛ける。ちなみに軽い変装で、伊達眼鏡を掛ける。

それにしても……何だかんだで息が合ってるね、あの2人。

楽しそうに、ゲームセンターのUFOキャッチャーの前でハイタッチなんかしてはしゃいでる。

すぐに気付いたのかお互いに2人はそっぽを向く。

そして、肝心の間宮の子はと言うと……背後からでも分かる。

肩を震わせて嫉妬してるっぽい。

火野との会話でキンジを敬ってる様子は無いから……

多分、神崎のファンとかそんな所だろうね。

彼女は実力があるから、その強さに惹かれるって子もいそうだし。

キンジと神崎が別れて、キンジは住宅街の前の普通の道を通って行く。

当然、その後ろを間宮の子が追いかける。

こちら辺で、電話してみようかな？

そう思つて電話を掛ける。

「もっもっ」

『霧、どうした？』

「後ろにネズミが尾いて来てるけど？」

『知ってるよ。さすがの腑抜けた俺でも、1年の尾行ぐらい分かる』

「そんな、嫌味っぽく返さなくてもいいのに」

『口振りからして、1年の後ろにいるのか？』

「まあね。私としても彼女がちよつと気になるからね。だから撒くのを手伝うけど？」

『ああ、頼む。ちようど風魔に頼もうと思ってた所だ』

風魔、いたんだね。

それは知らなかったよ。

キンジはそのまま後ろを振り返らず、電話を閉じた。

私は周りに誰もいない事を確認して、間宮の子に早歩きで近づいて行く。

そして、彼女が電柱の陰に隠れて止まった所で――

「はい、動かないでねー」

私は彼女の後頭部にグロックを押し当てる。

「……ッ!? 白野、先輩？」

少しだけ振り返って、間宮は私を見る。

「なんだ、間宮さんだったんだね」

私はメガネを取りながら、少し意外そうな演技をして呟く。

「てつきり武偵に変装した犯罪者かと思ったよ」

「あたしが犯罪者……。そ、そんな事より……。遠山を追い掛けないと」
慌ててるのか、先輩付けるの忘れてるし。

「なんで追い掛けてるのかな？ キンジに何かされたの？」

「いえ、そう言う訳じゃあないですけど……。あの人に話があるんです！」

真剣な表情をして間宮の子がそう叫ぶ。

「これはどう言う関係があるか……。ちよつと泳がせて、情報でも吐いて貰うかな。」

「ふうん、そっか。ちよつと待ってね」

私はキンジに電話を掛ける。

『今度はどうした？ 上手く撒けなかったのか？』

「そうじゃないよ。どうやらキンジに話があるみたい」

『……分かったよ。今、近くの公園だ』

渋谷と言った感じに話を聞いて電話を切った。

「話があるなら聞かせてさ」

間宮の子にそう伝える。

「そうですか。案内、して下さい」

「はいはいと」

私は間宮を連れて、近くにある公園を目指す。

そして、公園に入っ**て**しばらく歩いてるとベンチに座**つ**てるキンジを発見した。
向こうもこ**つ**ちに気付いたのか、立ち上が**つ**て歩いてくる。

「それで、霧の後ろにいる子が……俺に話がある**つ**て言う1年か？」

「みたいだねー。キンジ、何かしたの？」

「身に覚えがないぞ。そもそも、その1年の顔なんて見たこと無いしな」

「あ、あたしは1年**つ**て言う名前じゃありません！ 間宮 あかりです！」

私の前**に**出て、間宮は叫ぶ。

「分**か**つたよ。それで？ 間宮、何で俺を尾**け**るんだ？」

キンジはキンジで面倒**そ**うな顔**し**てる。

まあ、確かに身に覚えのない人に追**い**掛**け**られ**ば**そう思うだろうね。

「だ**つ**て……だ**つ**てズルイです！ あたしは、戦**つ**て追**い**掛**け**て、ようやくお近**づ**きになれたの**に**！ アリア先輩が自分**か**ら追**い**掛**け**るなんておか**し**い**で**す！ 一**体**、どう**言**う関係**な**んです**か**!？」

この子、何を**言**つ**て**るんだ**ら**う。

嫉妬**し**てるのは分**か**る**ん**だけ**ど**……

キンジも同じ**な**のか、状況**を**把握**で**き**な**いとばかりに尋**ね**る。

「話が見えないが、なんだ？　アリアのファンか何かか？」

「うーん、お近づきって言ってたから……戦姉妹とかじゃないかな？」

私が直感でそう言いながら、間宮を通りこしてキンジの隣に並ぶ。

「そうです。白野先輩の言う通り、あたしはアリア先輩の戦妹です」

「そうか。お前には悪いがな、俺はアイツに追い掛けられて迷惑してるんだ」

キンジの事だから……本音だろうね。

対して間宮の子は、いかにも怒ってますって感じ。

しかし、おかしいね……

あのプライドの高い神崎の事だから、手を抜いて戦妹にするなんて事はしなさそうだし。

目の前の間宮の子には、母親と違って大した実力は無いように思える。

少なくとも武偵にいた期間を抜いて考えても、公儀隠密の一族の末裔って言う話を考えるなら……素人ではない筈なんだけどね。

どうやって神崎に一杯喰わせたんだか……気になるね。

「どうだ？　聞いて満足しただろ。俺を追い掛けるなんて無駄な事はするな。今の俺はEランクだが、それでも1年の尾行ぐらい分かる」

それを聞いて間宮の子は表情が変わる。

キンジ、さすがにそれは違和感を相手に植え付けるだけだよ。

Sランクがどんな失敗をしたらEランクにまで落ちるのか……落差があり過ぎる事に、間宮の子はおかしいと思ってるよ。

表情で分かるけど。

「——おかしいですよ。SランクがEランクにまで落ちるなんて！ 遠山先輩は、何か隠してるんじゃないですか!？」

キンジは去ろうとして、背中を向けていたけど……ピタリと止まる。

私は振り返ろうとするキンジの肩を抑える。

「あとは、私が相手をするよ」

「すまん」

そのまま、キンジは去っていく。

個人的に気になる事があるから、キンジを去らせたんだだけだね。

「ま、待って下さい！ まだ話は——」

「やめておきなよ」

私は追い掛けようとする、間宮の子を止める。

「どうして止めるんですか?」

少し、『ム』と言った感じに怒った表情をする。

分かってないねこの子は……

仕方ないから殺人鬼がご丁寧せんぎんに警告して上げよう。

「あのね、他人ひとの事情は無暗せんまに詮索するモノじゃないんだよね。神崎さんに憧れてるの
か知らないけど、嫉妬で他人の領域に足を踏み込むのは違うでしょ？」

「……あたしは別に、そんなつもりはありません」

似てるねー、神崎に。

だけど……神崎とは違って、何かシンパシーを感じるんだよね。

「先輩としてーっアドバイスをして上げるね。……勇氣と無謀は違うんだよ」
後半は声を少し低くして、軽く殺気を叩きつける。

「——ッ?！」

無意識に、彼女はマイクロウージーを抜いた。

殺気には反応するか……

でも神崎の戦アミカ妹になつたのなら、まだ何かあるね。

「ちよつと殺気を出したからって、先輩に銃を向けるのはどうかと思うよ？」

「……先輩、今のは何ですか？」

「殺気出ただけだけど？」

「おかしいです。誰も殺した事がない人がそんな殺気を出せる筈がありません」

間宮の子は何を感じ取ったんだろうね。

にしてもいくら変装で来ても殺気の雰囲気は誤魔化せないか……

「そう言われても、武偵法9条は破ったこと無いんだけど」

「……………」

「まあ、そんな事はどうでもいいや。それとね、こんな事言いたくないんだけど……キンジの事を侮あはむってるでしょ？ それがね、ちよつと私の癩かんに触るんだよね！」

あくまで口実だけだね！

そう思いながら、私は間宮の子に向かってナイフを持って駆けだす。

銃は……撃たない。

さすがに同じ武偵に向かって撃つのはマズイと思ってるんだろう。

すぐに銃を仕舞って、彼女は私に向かってくる。

(何をして来るんだろうね)

少し楽しみにそう思いながら、私と彼女の距離が縮まって行く。

もちろん、ここで殺すなんて真似はしない。

狙うのは鳩尾みぞおち、ナイフの柄で押し込むようにするつもり。

そして間宮の子と私が——交差する。

私の手にナイフは、無い……

素早く後ろを見れば、彼女の手に私のナイフ。

あの技……2年前に戦ったあの子の母親が使ってた技と同じ。

だけど、眼球じゃなくて私のナイフを取った。

(なるほどね)

私は納得しながらも、すぐに間宮の子へと迫る。

彼女も後ろに迫る私に気付いてるんだろうけど、ナイフを掠め取った時と違って反応

が遅い。

襟首を掴んで足を引っ掛けて、背負い投げの要領で彼女を地面に叩きつける。

地面に落ちる瞬間、ちよつとは引いたから……そんなに痛くは無いはず。

右手が空いてないので、左のM500を抜いて胸に押しつける。

「はい、ゲームオーバー」

容赦なくトリガーを引く——

ガチン！

だけど、鳴るのはハンマーの音だけ。

グロツクの方は弾は入ってるけど……M500には弾は入れてない。

意外とバカにならないんだよね、こっちの弾代。

お金はあるから問題ないんだけどね。

それにリボルバーとは言え、落ちた拍子に暴発したら困るし。威力も洒落にならないからね。

そう言う意味で、任務と緊急時以外にはあまり入れてない。

間宮の子は、痛みに耐えるように目を閉じてたけど……何もない事に違和感を覚えて目を少し開ける。

「……いくらなんでも後輩を容赦なく撃つ訳無いでしょ？」

私は笑顔でそう言つて、彼女を立たせる。

「どうしてですか？」

「何が？ 襲つた意味？ それとも撃たなかった意味は……さつき言つたね」

「……………」

「襲つた意味としては、あんまり後輩に舐められたくなかったからね。どうも、間宮さんはアリア先輩以外を侮つてるみたいだし」

「そんな事は……」

間宮の子は視線を逸らす。

侮つてないと思つてるのなら、視線を逸らさないでしょ。

「嘘だね。今日、火野さんと一緒の時に言つたでしょ。私の目は良いって……私の目は誤魔化せない。おっと、私のナイフを返してもらうね」

彼女の手から、私のナイフを受け取って仕舞う。

「ま、先輩からの警告だよ。身を持って知ったでしょ？ だから、これからあんまりそんな事しないようにね」

引き続き、笑顔で言つて私は彼女の肩を叩く。

「あと、私の殺気から何を感じ取ったかは知らないけど……私は誰も殺したこと無いよ」

” 白野 霧 ” と言う人物はね。

「それじゃあね」

私はそう言つて、間宮の子と別れる。

帰り道、間宮の子からかなり離れた。

(あの子にシンパシーを感じた理由が分かったね)

それにナイフを取つたあの技。

あの子の母親が私に使つた所を見るに、元々はきつと眼球とかを抉る技なんだろう。

それをあの子は物を掠め取る技にした。

ワザと反応しなかったのはそれを確かめるためなんだけどね。

そして、あの子からシンパシーを感じた理由。

——あの子には人を殺める^{あや}才能がある。

面白い子、見つけた♪

28：武偵：白野 霧

いつもの強襲科で、アタシは射撃レーンのテストシューティングをしながら考えてる。

(戦姉妹か……)

あかりにはアリア先輩がいるし、志乃も同じように戦姉妹契約したしな。

何て言うか、アタシだけ疎外感あるな。

つっても……別に気にしてないんだけどな。

ガッン！

そんな音が聞こえるくらいに、アタシの頭が殴られた。

「いってー！」

「アホ、火野。射撃中に考え事すんな！ マンターゲットの当たつとる場所がぶれ取らないか！」

アタシ以上の男女、蘭豹先生に叱られた。

先生の言う通りマンターゲットを見れば、確かにぶれてる。

100点の所に当たってる所もあれば60点、50点の所に当たってる。

確かにアレは、考え事してゐるって取られてもしようがないよな……

「お前はアサルトライフル使つとるんやから。扱いに気をつけるや」

「はいっす」

威圧感バリバリで言われたらそう返すしかないし。

今日はノルマも済んでるし……帰るか。

帰り道に学校内のベンチに座ってスポーツ飲料を飲みながら、何気なくテニスコートの方を見る。

女子のダブルスで、練習試合をしてる。

掛け声を上げながらラリーをするその誰もが、アタシより可愛く思える。

テニスウェアって、意外にスカート短いんだな……武偵高の制服程じゃないけど。

(つて、アタシは何オツサン臭い事を考えてるんだ)

だから男女って言われるんだらうけど。

ま、何回も言われてるし……アタシ自身何度も自覚してる事だ。

今更女の子らしくしろって言われてもアタシには無理だ。

無いモノねだりしても仕方ない——

「辛気臭い顔してるねー」

「うおわッ!？」

危うく飲み物を零しかけたけど何とかキャッチ。

誰だよ、いきなり声を掛けてきやがって、

「つて、白野先輩……」

「どうも、火野さん」

後ろを振り返れば、アタシの座ってたベンチの背もたれの上で腕を組んでた白野先輩だった。

前に会った時と同じで、笑みを浮かべてる。

「……何やってんスカ」

「いや、辛気臭い顔で向こうの女子を見てる後輩を発見したもんだからね」

「辛気臭いつて……」

そんな顔した覚えは無いんですけど。

白野先輩はベンチを乗り越えて、座る。

「まあ、落ち着いて座りなよ」

「先輩が脅かしたんじゃないですか……」

「クセでねー。人の背後を取るようになっちゃって」

それって習慣になつてるって事ですよね、先輩。

武偵としては、犯人の奇襲を考えると正しいんだろうな。

と、思いつつもアタシは先輩の隣に座る。

「アタシに用でもあるんでしょか？」

「いいや、特には。だけどあえて言うなら、お喋りしたいだけかな？」

「お喋りですか……アタシと話しても何もありませんよ」

実際、他の女子と話が合わない事は多い。

きつと女の子らしい先輩は、他の女子と同じようにアタシと話の趣味が合わないだろう。

「そう卑下する事は無いのに」

「卑下って言う訳じゃないんですけどね」

「じゃあ、なに？ 話の趣味が合わないこととか気にしてたりする？」

直感なんだろうけど……先輩はズバリと当てて来た。

思わず視線を逸らしちゃった。

「くすつ。まあ趣味が合うかどうかは置いておくとして」

「置いておくとして……？」

「良い刃物を使ってるね」

いきなりどう言う話の変え方だよ……

そう思つて先輩の方を見ると、いつの間にかアタシのナイフを見てる。

まただ……この間の訓練の時みたいに、いつの間にかナイフを突き付けられてた時と同じだ。

いつの間にか今度は取られてる。

「ああ、ゴメンね。勝手に取つて」

「いつ取つたんスカ……」

「趣味の話をした時に視線逸らしたから、その時にね」

そう言いながらナイフを返された。

この人もこの人でバケモノ染みてるぜ。

アリア先輩とか遠山先輩ほどじゃないだろうけど。

「とまあ、悩み事なら聞くよ？ 私は昔から聞き上手なんだ」

そう言つて微笑む先輩。

顔が幼くて、無邪気なせいにか……年上な筈なのにカワイイんだよな。

つて、アタシは何でまたそんな事考えてんだよ！

「いえ、別に先輩の手を煩わづらわせるほどじゃないんで……」

と言いつつ、話と思考を逸らす。

「そう？ 訓練に付き合つてくれた誼よしみで、遠慮する事は無いけど」

「随分とフランクなんですネ」

「こう言う性格なんだよ」

「……………」

なんだろう、この人なら話してもいいかな。

何でか知らないけどそう思える。

「あー、先輩はアタシを見てどう思います?」

「漠然とした質問だね。まあ、印象から言うなら……女の子にしては大きいかなって言

うぐらいだけど」

「まあ、そうですね。身長なんて165もありますし」

何気にコンプレックスなんだよなー。

「その、女の子らしく無いじゃないですか?」

「女の子らしくない、ね」

「あまり接点のない先輩にこんな事を話すのもなんですけど、アタシは高身長でガサツですし、何て言うか他の女子みたいにカワイイ服とか似合わないって言うか……」

「ふーん、なるほどね」

先輩は隣で右肘をついて、まるで『考える人』の像みたいになってる。

そして、その体勢をやめて——口を開く。

「それは、気にし過ぎなんじゃないかな？」

「気にし過ぎ？」

「そうそう。アレだよ、隣の芝生が青く見えるのと一緒だよ。あとは自分に自信が持て無いだけ」

自分に自信が持てないか……って言ってもな。

どうやって自信を持てて言うんだか。

「自信を持つって言っても、ありのままの自分に自信を持つってことね」

「ありのまま、ですか？」

「そう。私の経験則けいけんそくで話をさせて貰うとね。人にはね、その人にしかない『魅力』ってものがあるもんだよ」

「それってアタシには無縁そうじゃないですか？」

「それでもないよ？ 火野さんは高身長でガサツっぽいつて言うけど、そこも人としての魅力だよ」

なんか、先輩には悪いけど胡散臭い話だな。

なんて思いながら残ってたスポーツ飲料を飲み干す。

「今、胡散臭いつて思ってるでしょ……」

「つぶ、げほ！」

思わずむせた。

いきなりそんな事言われたら驚くに決まってる。

しかもピンポイントだし！

「ちなみに顔に書いてあったからね。疑うような目をしてたし」

「す、すみません」

「いや、最初はそう思うだろうけどさ。せつかく茶化さずにお悩み相談して上げてるの
に」

「……あー、はいっす」

アタシから話を持ちかけたのにさすがにそりゃ失礼だよな。

そう思つて謝る。

「まあ、結果から言わせて貰うと……ガサツで高身長だけどそこが良いって言ってくれ
る人もきつといるよ。それに、カワイクなりたいて思つてるんでしょ？」

「……はい」

「そのカワイクなりたいて思つてる所とか、いかにも女の子らしいと私は思うんだけ
ど……違うかな？」

白野先輩の言う事に、何かストーンと心に落ちたような……

そんな気がする。

さつきと違って、なんて言うんだらうな。

分かんないけど、取りあえずスッキリした。

喉につつかえてた物が取れたような、そんな感じがする。

「先輩、ありがとうございます。なんか、スッキリしたような気がします」

「いいええつてね。お安い御用だよ。代わりになんだけど、悩みの相談に見返りを求めもいいかな？」

.....。

すぐに立ち上がって、この場を去ろう。

「——すみません、用事を思い出したんで」

「そんな常套句じょうとうぐ言って、逃げるのは無しねー」

足早に去ろうとすると、白野先輩に肩を掴まれた。

こう言う場合って嫌な予感がするから、アタシとしては早めに去りたかった。

「あー、ちなみに見返りってなんですか？」

そう言つて先輩は振り返つたアタシに1つの紙を、見せてきた。

「私の戦妹アミカになつて貰おうと思つてね」

——戦徒契約申請書アミカ

そう紙に書かれてる。

……戦妹^{アミカ}? アタシが? 白野先輩の?

「ええええええええええええエツ!」

◆ ◆ ◆

教室で、あたしと志乃ちゃんですごいものように談笑していると、ガラガラガラと、教室の扉を開けてライカが入って来た。

「だけど——、」

(なんか、様子が変……)

ぼーっとした感じをしてる。

いつものライカっぽくない。

志乃ちゃんも気付いたのか、あたしと同じで心配そうな顔してる。

ライカはフラフラと自分の席にどっかりと着席して、倒れるように机の上に頭を載せる。

「ライカ、どうかしたの?」

「悩みなら相談に乗りますよ?」

あたし、志乃ちゃんの順番でそう尋ねる。

「なあ……あかり、志乃。アタシ、夢見てるのかな?」

「いきなりどうしたのライカ? いつものライカらしくないよ!」

なんか明らかに様子がおかしいもん。

「昨日さ、先輩から戦姉妹アミカの誘いをされたんだよ」

私が尋ねた後に、ライカはそう言つて来た。

「もしかして、その事で何かあつたんですか？」

「志乃、この紙に書いてある名前つて間違いないよな？」

聞いた志乃ちゃんに向かつて、ライカは一枚の紙を見せてくる。

あたしもその紙を志乃ちゃんの隣から覗き込むように見る。

「——戦徒契約申請書。姉——白野 霧」

志乃ちゃんが確認するように読み上げた名前。

白野 霧……それつて。

「ライカさん、白野 霧つてもしかして……」

「そうだよな。夢じゃないよな。強襲科アサルトの中ではアリア先輩や遠山先輩に次いで有名人

な白野先輩だよな」

「す、すごいじゃないですか。どうやってなつたんですか？」

「昨日、相談に乗つて貰つてたら成り行きで……しかもエンブレムとかで決闘したりと

か一切無し」

「ある意味、羨ましいと思いますよ？ 試験も無しで戦姉妹アミカにして貰えるなんて」

「それが逆にすごいプレッシャーなんだよ！ アタシの何がよかったんだ！ 先輩とアタシの接点なんて訓練を1度したのと、何度か話をしたのと、昨日相談に乗ってくれたくらいだぞ！」

白野先輩……公園で、遠山を追い掛けたあたしに警告をした人。

あの時に、あたしに殺気を向けて来た。

本人は誰も殺した事なんて無いって言ってたけど、怪しい。

だって、あの人が殺気を出した雰囲気——似てたから。

2年前にあたし……いや、あたし達間宮の一族を襲い、お母さんを傷つけた人に。

でもあの時は確かに男だった。

なのに何で同じ雰囲気を感じ取ったんだろう……

「なあ、あかり。お前はと思う……って、どうしたんだ？」

「う、ううん。何でもないよ」

ライカ、どことなく嬉しそうだし。

余計な事は言わない方が良いよね。

◆ ◆ ◆

さてと、まずは周りから固めると……

火野を介して間宮の子を知るにしても、別に火野を切り捨ての材料にしたりはしない

のが私のやり方。

面白ければなんでも良い。

少なくとも面白そうだから、こうして戦姉妹アミカにしたんだだけだね。

火野をこつち側に引き込むかどうかは後にして、取りあえず育ててみよう。

「さてと、火野さん。いや、戦妹アミカだからライカって呼んでいいかな？」

「は、はい！」

「よし、それじゃあライカには私なりの鍛え方について説明して上げよう。ああ、その前に私の事も下の名前で呼ぶ事ね。霧先輩でも、霧姉さまでも呼び方は自由にしてもいいけど」

「……普通に霧さんか霧先輩で」

さすがにそこは遠慮するね、やっぱり。

体育館みたいな強襲科アサルトの施設の中で、お互いに向かい合って話す。

「私の基本方針は、まずは一通り鍛える。そして、私と教務科マスタースの評価を合わせて見抜いた才能に磨きをかける。つまりは長所を伸ばすって奴だね」

「長所を伸ばす、ですか……」

「まあ、基本的に自分に何の才能があるかは自分では気付きにくいものだからね。それに、この教師はある程度教えたら放任主義みたいな感じだし。実際、自分で考えて動

かなくちやなにも掴めないからね。そう言う意味では、ここの武偵高のやり方はあつてるよ」

「……………」

「それで、ここが重要。私にとって『技術』は盗むモノ」

「……盗む」

「うん。教わるモノでもあるけど、盗むモノ。自分に合うモノは何でも取り込む。とまあ、説明はこれぐらいにして体を動かして学んだ方が良いか。ライカはそう言うタイプみたいだし」

「お願いしますー！」

元氣いっぱいだねー。

手を抜いてる私にどこまで付いて行けるかな？

数十分後——

「か、関節が……」

ライカは言いながら床に倒れてる。

私がやった事はキンジと同じ、関節技と絞め技だけで相手をした。

結果としては私が入って、ライカはへばってる。

うーん、なかなか私の嗜虐心しぎやくが疼うずく。

この子は別の意味でも当たりだね。

「やっぱり運動神経はなかなか良いね」

「冷静に評価してる場合じゃ……」

「はいはいっと、今日の訓練はここまで」

「え、もう終わりですか？」

「ノルマに加えて、数十分とは言え濃い組み手やったからねー。続けたかったら、あと3

時間は——」

「ありがとうございました！」

素早く立ち上がってライカはお辞儀をする。

それに対して私は、

「遠慮しなくてもいいんだよ？」

と笑顔で言う。

「いや、関節がヤバいですから」

実際かなり酷使してるからねー。

まあ、あと3時間くらい続けられなくはないけど……

確実に筋肉痛になるだろうね。

「あんまり詰め込み過ぎても良い事はないからね。今日の所はこれまでにして帰ろっか」

「はいっすー！」

やっぱり、割と素直な子だねー。

元氣よく返事をするライカと共に私は強襲科を出た。

そして、強襲科を出て雑談をしているとライカは不意に視界に映った理子を見る。

その目は羨望せんぼうの眼差しみたいな感じ、

「ああ言う女の子に憧れてたりするの？」

私がそう聞くと。

「え、いや……」

ハッキリしない感じで目を逸らした。

言うのが恥ずかしいのか照れ臭く笑って誤魔化してる。

「あ、ライカ……と、白野先輩」

ライカと取って付けたように私の名前を呼ぶ、この声は。

「お、あかりに志乃。何やってんだこんな所で」

案の定、間宮とその隣にいるのは白雪と似たような顔立ちに黒髪ロングの子。

ライカは声に誘われてそちらの方へと行く。

私も気になったので、何となくそちらの方へ行つて尋ねる。

「お友達？」

「はい、あかりの隣にいるのは——」

「初めまして、佐々木 志乃と申します」

ライカに紹介されて、黒髪ロングの子は座つてたベンチから立ち上がり丁寧に挨拶する。

雰囲気的に気品ある感じ。

生まれが良いタイプなんだろうね。

「もしかしたらライカから聞いてるかもしれないけど、白野 霧です。よろしくね」

佐々木にそう笑顔で返す。

「はい。よろしくお願いします」

彼女も笑顔でそう返してくるけど、その隣の間宮から視線を感じる。

私の事を少し疑つてるような感じ。

さすがにこの間、殺気を向けたのがどうも引つ掛かつてるっぽいね。

2年前の雰囲気とそっくりで覚えがあるから、私の事を不審がつてる。

そんな所だろうね。

「間宮さん、どうかした？」

「別に……なんでもありません」

「そう？　なら良いけど」

私が話しかけた時の雰囲気はライカに声を掛けて来た時と違う。

どこか距離を取ってる。

そして間宮は思い出すように、

「あ、そうだ。あたしと志乃ちゃん、日曜日に『ラクーン台場』に行くんだけど、ライカもどうかかな？」

そう言っつてライカにパンフレットを渡す。

「あそこ遊園地だろ？　アタシもガキじゃないんだから——」

何で言葉を止めたんだろう。

そう思っつて、私はライカの視線の先をさり気に見ると、そこには3人組のアイドルユニットが写ってる所だった。

やっぱり、ライカはそう言うのに憧れとかがあるんだね。

それと佐々木って言う子が何か「来なくていい」って言う感じで念を送ってる。

「まあ、行ってもいいかな……」

ライカがそう言うのと佐々木はこけた。

この子も愉快ゆかい。そんな雰囲気があるところはかどなく見える。

「そう言えば霧先輩は日曜とか、何してるんですか？」

「私はよく出かけてるよ。当てもなくフラフラって感じで散歩してるよ」

「なんかお年寄り臭いですね……」

主に人斬りの相手を探してるんだけどね。

武偵高にいても相変わらず。

……満たされないんだよね。

今までも満たされた事なんて無いけど。

「霧先輩も、一緒に行きませんか？」

「いいの？ 先輩1人が紛まぎれてたら気にしたりしない？」

私が困ったかのようにライカにそう返す。

「意外にそう言うの気にするんですね。霧先輩」

「まあね。それとライカは次の月曜日は3時間コースね」

「それって組み手の話じゃないですよね……」

「火曜日には筋肉痛にしてあげるよ」

「さっきのお年寄りのくだりを根に持つてる?！」

「まあ、気にしないでよ。ほんのお茶目だから」

「お茶目で扱しじかれる身にもなつてくください」

キンジとは違った反応が良いね。

なんて思つてると、私とライカのやり取りがおかしいのか佐々木はクスクスと笑つて
る。

間宮も少し笑つてる。

「でも、どうしよう。このタダ券3人までしか入場できないつて書いてあるけど……」

間宮の子はそう言つて一枚のチケットを見せてくる。

「別に良いよ。私はお金払つて行くから後輩が気にする事はないし。つて、結局私も
行つていいのかな？」

改めて、私が照れくさそうなフリをしてそう聞く。

「もちろんだよな。あかり、志乃」

「ライカさんの戦姉アミカですし、拒む理由がありません」

「あたしも、大丈夫だよ」

佐々木の方とはともかく間宮は、警戒心が少し薄れたかな？

さっきのライカとのやりとりのおかげか……

「これはこれで僥倖やうじやうだね。

「ちよつと。その1年と霧」

上から掛けられる声。

こんな特徴的な声してるのは、ホームズの4世しかいない。

校舎の2階の窓を見てみたら、神崎が私達を見下ろす形で窓に肘をついてる。

「あ、アリア先輩！　いつからそこにいたんですか?」

あからさまに嬉しそうな声を上げてるね、間宮の子。

これは相当彼女にいれこんでるね。

「ついさっきよ。外に出かけるのはいいけど、ちゃんと武偵としての自覚を持つよ。

武偵は常在戦場なんだからね」

「はいー」

元気が良いね、間宮。

対して神崎は呆れてるけど。

「返事は良いんだから……。まあ、霧が一緒に行くって言うのなら……。少しは安心できるけどね」

「随分と買ってるんだね、私の事」

「あんたの事も調べたのよ。Sランクに近いって言われてるんでしょ?」

「言われてるらしいね」

「らしいねって……。興味なさそうね」

「実際、ランクに興味は無いんだよね。だって、ランクでその人の全てが分かる訳でもないし。あくまで目安だと私は思ってるからね」

他人の評価に興味は無い。

そんなのを気にするのはこうやって、組織に馴染んだりするためだけ。

「ふうん、なかなか殊勝な考えね。それと、霧の戦妹アミカになったライカ……だったわね」

「はい、なんですか?」

「アサルトライフルが銃銃検査登録制度 検通すの厳しいのは知ってるけど、いつまでも整備中で誤魔化してたら通らないわよ」

「分かりましたー」

最初の返事と違って、投げやりな感じ。

それと、相変わらずの上から目線だねホームズの4世。

「と言う感じで、何だか引率と言うか監督っぽい感じになりそうだけど。まあ、気にせず楽しんでなよ。武偵であることを自覚しつつね」

「それって難しくないですか?」

「簡単に言えば、締める所は締めるって事だよ。それさえ守れば、周りもうるさくは言わないでしょ?」

そうライカの問いに私は答える。

「ライカさん、霧さん。日曜の待ち合わせ場所ですけどね——」
佐々木から日曜の集場所を聞いて、私達は別れた。

そして日曜日——

ラクーン台場の入り口の前で、私とライカは既に待機中。

あとは佐々木と間宮を待つだけ。

「あかりが佐々木と一緒にくるから、少し遅れるそうです」

「迎えに行ったのか……まあ、それなら多少遅れてもしょうがないね」

ライカからの報告を聞いて、私はそう返す。

「それにしても霧先輩って車、持ってたんですね……」

「ここまでライカは私が車で送り届けた。」

その前に車を持つてる事に驚かれたけど。

「まあ、個人で車持つてるのは神崎さんとかお金に余裕がある人と、車輛科クルマの人達ぐらいだろうね」

「先輩はお金がある方なんですか？」

「お金がある方かって言われたら微妙な所だけだね。中学の頃の武偵活動で、報酬の高いの選んで何とか車は買えたぐらいだけだ」

「中学で車買えるほどの報酬って……」

「あんまりおススメはしないよ。当然、報酬が高かったら危険度も高くなるしね」
別に中学の頃に稼がなくても、充分にお金はあるよ。

イ・ウーにだけど。

ライカは苦笑いしながら、

「どんな事やってたんすか……」

「聞きたい？」

「逆に聞くのが怖いですよ」

その時にタイミングが良いのか悪いのか、間宮と佐々木が走ってきた。

「ゴメン、ライカに白野先輩」

「遅れました！ すみません！」

間宮が続いて、佐々木も息を少し切らせながら謝罪する。

「ま、それほど待つてないしね。それじゃあ行こうか」

『はい！』

後輩3人の声を聞きながら行く。

本当に引率になっちゃったねー。

しかし、まあ……私はこう言う所来るの初めてかもね。

そう思いつつも色々なアトラクションに乗ったりした。

ジェットコースターとか、ターザンロープ的なアトラクションもあったね。

特に後者のアトラクションで、佐々木が随分とカメラのシャッターを切っていた。

間宮に向かって。

その時の視線と言うか様子が、妙に熱が入っているとと言うか……

白雪がキンジに向ける視線と同じモノを感じる。

あと似ているとしたら夾竹桃の漫画みたいな感じ。

同性での恋愛って人気があるモノなんだろうか……そう言えば、あの子の生まれであるオランダは同性結婚が出来た筈だけど。

恋愛に関しては、分からないね。

単純に私がそう言う感情を知らないから分からないだけなんだけども。

「次はあれに乗ろうよ！」

そうやって間宮が指差すのは、観覧車。

こう言う所に来た事は初めてでも名称ぐらいは知ってる。

間宮に付き合う形で、全員が観覧車に乗りこむけど……意外と楽しんでるね。

私も初めての体験に楽しんでるけど。

「さっきのアトラクション怖かったー」

「そう？ 私はスリルあったから楽しんでたけど」

間宮が呟いた言葉に私は笑顔で返す。

「白野さんって、活発な人なんですね」

「活発と言うよりはやんちゃだって元パートナーに言われたけどね。そう言えば、佐々木さんって学科は？」

「私は、探偵科インヴェスタなので」

「そっか。だったら私の事は知ってたとしてもウワサ程度だろうね。他の学科の話って言うのは、あまり聞かないし」

何て佐々木と話していると全員が携帯が鳴る。

私はもちろん、武偵用の携帯が鳴った。

しかし……4人同時に携帯が鳴るって言う事は、武偵の周知メールだろう。

それぞれの携帯を見開く。

「武偵高の周知メールか？」

「4人同時に着信したって事はそう言う事だろうね」

ライカの言う事に補足しながら私はメールを見ると――

『Area：江東区青海5丁目1, 2 Case Code：F3B—O2—EAW』

とあった。

その下には誘拐された人物の名前と思われる『島 麒麟きりんからの発信』とある。場所 (Area) が示す住所は『ラクーン台場』……ここだね。

最初の F3B——これは誘拐・監禁を示す。

ライカもそれを理解したのか、

「現場は……」

「最初の3文字は、誘拐・監禁にあつたて言う事で……O2ってどう言う意味だっけ？」
「Over 2. つまりは原則として2年以上が動けつて事だね」

間宮の言う事に答え、私はグロックを取り出してコツキングする。

ついでにM500も弾を入れておこう。

全く、人が初体験を楽しんでる時に。

「佐々木さん、周りの武偵から連絡は？」

「は、はい。近い生徒でも15分は……」

「遅いね。EAW——『犯人は防弾装備』つて事は少なくとも武偵を攫さらう前提だったつてこと。まあ、実際武偵は帯銃とか刀剣の所持を義務づけられるから武器を持つてるし……上手く捕まえれば人質と武器が手に入る。まさしく、一石二鳥つて奴だね」

「つまり、それって……」

ライカは私の言う事にまさかと言う顔をする。

「犯人は結構なやり手。十中八九、計画された犯行だろうねー。この様子だと、人質は最低限手元に1人は残しておくにしても……あんまり時間を掛けると見せしめにどこかの誰かがこの世とさようなら、って事になる可能性もあるね」

弾を入れたシリンドラーを収納して、左のレッグホルスターに仕舞う。

こんな稚拙な犯行の狙いぐらい丸分かりだよ。

ジャンヌの方がもうちよつと上手く立ち回るよ。

計画された犯行って言ってもそんなに日数掛けて考えた訳でもないだろうね。

さて、どうしようかな。

私1人でも制圧は出来るだろうけど……あんまりやり過ぎると本当にSランクなんて付けられかねない。

そうしたら教師にさらに目を付けられるだろうし。

全く、本当に面倒だね。

私は一瞬立ち上がろうと思ったけどやめた。

……ワイヤーを使って降りようと思ったけど、それだと他の人たちがパニック状態か不審がって変な動きが生まれるかもしれない。

犯人だつて人間。

異変に気づけば、さらに面倒な事になるだろうね。

「さて、原則として2年以上と言う通達が着たわけだけでも……今、現場に近いのは私だけ。だけど、私1人で制圧できるかって言われれば微妙」

「どうしてですか?」

「間宮さん、少しは考えなよ。戦闘能力の低い特殊捜査研究科^Rとは言え、武偵だよ。素人じゃない。つまり——」

「犯人は2人以上いる可能性がある……」

「佐々木さん、正解ってね」

私が答えてると追加のメールが来た。

『なお、犯人は2人組の模様』

その文面をライカが読み上げる。

そして、そのメールの下には犯人の外見は不明とある。

つまり、誘拐された子は犯人を見てないのか……

「やっぱりね。犯人がどこに行ったかは不明、でもないか。身代金^{みのしろぎん}目的なら『ラクーン台場』を経営してる所に脅迫なりしてくるだろうね」

「よく分かりますね……」

「ライカ、探偵なら頭を使わないと」

と言っても、私以上に頭が切れるのはお姉ちゃんとお父さんと、他にもいそうなもの

だけど。

「つまりはそう言う事だよ。だけどさっきのあくまで予想の範疇。はんちゆう何が目的かは今の所は不明で、行き先も分からない。だけど、先に洗える場所はある」

『——ッ!? ラクーンングランドホテル!』

息がぴったりだねこの後輩3人組。

「まあ、そう言う事だよ。そこで情報が無かつたら他を洗うしかない。探しながら通信科コネットが島 麒麟の携帯を探知するのを待つしかないね。と言う訳で、手を貸して貰うよ」

『はい!』

元氣よく3人は返事をする。

一応、最初はパニックを起こさないように佐々木に避難誘導をさせるように指示して。

私とライカと間宮は『ラクーンングランドホテル』へと向かう。

「いたっ!! なにこれ?」

間宮が声を突然に上げたので振り返ってみると、彼女は1つの紙飛行機を手を持って
いる。

続いて、同じような紙飛行機がいくつも上から降ってくる。

上を見ると、どうやらあの窓から投げられてるっぽいね。

高さとの窓の数からして、7階か。

落ちて来た紙飛行機の1枚を手にとってみる。

(他の武偵に情報を与えるためにメッセージでも書いてあるかも)

そう思つて見ると、紙飛行機を投げる時に持つ部分に確かにあった。

『703NF ターザン モドリテ ダイブ』

NF——武偵の短ショートサイファー暗号で『Need Friendly』の省略だね。

応援要請か救援要請……どっちにしても一緒か。

そして最初の数字は——

「703号室ですね」

ライカの言う通り、ホテルの番号って見て間違いないだろうね。

最後の文章は今の所分からないけどね。

「どっちにしても、ここでビンゴって事だね。犯人はこのホテルの703号室にいる」

「はい。一旦、志乃ちゃんを呼びますか?」

「そうだね。ある程度の関係者に話して避難誘導するように話したし。間宮さん、ホテルのロビーに集合するように呼んで貰える?」

聞いてきた間宮に対して私はそう指示する。

そして、一足先にロビーに入ってホテルの関係者から話を聞いて待つっていると、佐々木も合流した所で状況説明ブリーフィングをする。

「犯人は703号室に陣取って、身代金待ち。問題は島 麒麟が書いたこの最後の文章

……『ターザン モドリデ ダイブ』って言う部分」

『ターザン』は強襲科アサルトで、ロープワークの事だけ……『戻りでダイブ』ってどういう意味なんでしょうか？」

「さあね。まあ、間宮さんが言った言葉のままだとは思いますが。問題は、どこにダイブしろって話なんだけどね。地面にダイブしろって訳でもないだろうし」

「それってただの投身自殺じゃあ……」

「本人も自殺志願じゃないのなら、何か考えがあつての事だとは思いますがね」

間宮の突っ込みを聞き流しつつも、説明を続ける。

「では、セオリー通りに扉と窓から攻めると言う事ですね」

「佐々木の言う通り、それが良いだろうね。爆薬でもあれば……壁とか天井とかから侵入もできるし、犯人を下の階に落とすなんて事も出来るけど——」

「そ、それは少し遠慮して貰いたいのですが」

ホテルの責任者の人が、冷や汗交じりにそう言う。

「さすがにしませんよ。犯人が事件を起こすよりマシとは言え、集客に響くでしょうか

らね。手段は選びますよ」

私は笑顔と敬語を交えてそう言う。

その言葉に他の従業員も少し安堵あんどした顔になる。

「と言う訳で間宮と佐々木の2人はドアからで、私とライカは窓から侵入するよ。まあ、1番良いのはドアから入った2人が制圧出来ればそれで一件落着」

「ががががが、頑張りまう。……噛んじやった」

間宮が少し緊張してる。

けど、他の2人はそんな間宮の姿に苦笑し、緊張が解ほぐれて行く。

「ま、私とライカは2人が突入に失敗した時の保険だからね。失敗しても安心しなよ、必ず救って見せるから」

後半はいつもの朗らかな口調ではなくて、私は真剣な感じを見せる。

後輩3人は、少し顔を赤くしてる。

ちよつとギャップがあつたかな？

私はいつもの調子に戻って宣言する。

「これも経験の1つだと思って、適度に肩の力を抜きつつも真剣にやる事だね。それじゃ、作戦開始」

『はー！』

間宮と佐々木と別れて、私とライカはラクーンランドホテルの屋上に着いた。

703号室は、真下の位置にある。

「フックを掛けられる場所がないですね」

「そうだねー。703号室に直接行けない」

ライカの言う通り、引つ掛ける場所が何も無い。

真下にワイヤーなりロープなりを垂らそうと思つても引つ掛ける所が何も無い。

「しかも、間宮達が制圧した知らせも無い」

「あははは……は。アイツ、こんな時にドジ踏んだんじゃないよな」

ライカは、思い当たりがあるのかそう言う。

ドジを踏むか。

思い当たるのは間宮の子の動き、どうも強襲科アサルトで習う動きと噛み合っていない気がするんだよね。

強襲科で組み手をしてる所を観察しても立ち回りが下手っぽく映るんだよ。

余計な動きを覚えたいかもね。

間宮の技の時は驚くほどに俊敏しゅんぴんなのに。

「と言う訳で、保険である私達が動くしかないね……」

「でも、どうやってあそこに行くんですか？」

「島 麒麟が送った暗号を覚えてる？」

「『ターザン モドリデ ダイブ』、ですね」

その意味は既に分かったけどね。

私達の右側にあるプールの位置と、下にあるプールの位置を見た瞬間に私は理解した。

どうやら、少しは周りの事が見えてる子っぽいね。

少なくとも頭は切れるタイプ。

「もしかして!？」

「気付いた？」

「はい。って、『気付いた?』って聞く辺り先輩も分かってたんじゃ……」

「ここに着いて、プールの場所とプールの場所を見た瞬間に分かったよ」

「何で教えてくれないんですか!？」

「不謹慎だけど、こう言う所で判断できないと事件なんて解決できないから試したんだよ。あんまり時間が掛かりそうだったら教えるつもりだったけどね」

「……そこまで考えてたんすか」

「もし気付かなかったら——どうしただろうね？」

私の笑顔を見た瞬間に、ライカはぞわあと言った感じに肩を震わせる。

「あ、何か寒気が……」

「漫才だかコントは終わりにして、ライカが救出役ね」

「霧先輩は？」

「ライカが人質を救出したら、部屋に飛び込むよ」

そう言つて、手早くポールにフックを引つ掛けて、私はポールより右側に行く。

ライカもポールにフックを引つ掛けて、私とは反対側の位置へ。

視線を合わせてお互いに頷いた瞬間にライカは落ちる。

そして、703号室の窓に向かつてアサルトライフルである『マグプル マサダ』を乱射する。

そのまま遊園地内にあつたターザンロープのアトラクションのように、振り子の原理で戻つていく。

戻つて再びライカが703号室に行き始めると同時に、小柄な金髪の少女が窓から飛び出す。

見事にライカは彼女を抱きかかえて、救出した。

不意に私を見て、ライカは微笑んだ。

——あとは任せませ。

みたいな感じで。

(さてと……)

内心でそう呟いて、私も空中に跳んで落ちて行く。

ワイヤーがピンと張り、弧を描いて真つ直ぐに703号室に向かつて行く。

窓から犯人と思われる男性が、ライカの方を見て銃を向けている。

だけど——

「——なっ!?!」

私の影に気付いたのか、薄いオレンジのサングラスを掛けた金髪の男がこっちを向く前に——その顔を蹴り飛ばした。

「グオオツ……!?!」

呻き声を上げて、壊れたドアの方へと吹っ飛んで行く。

「あ、アニキツ!?!」

もう1人の黒髪の日付きが悪い男性——おそらく犯人の1人——が声を上げて吹っ飛ばされた仲間を見る。

その隙に、間宮が黒髪の犯人に飛び込む。

黒髪の犯人が間宮に気付いた瞬間、銃を構えようとするけど。

間宮はそれを——掠め取った。

私は吹っ飛んだ金髪を追い掛けて、その両腕を足で踏んで銃を構える。

顔を蹴られたせいでサングラスが少し割れて鼻血を出してるけど構わない。

「クソッ……」

「おっと、動かないでねー」

置き上がって抵抗しようとしたのでM500を見せるように構える。

「次、変な素振りを見せたら君の×を撃つよ♪ その服も防弾繊維だろうけど、どうなるだろうね〜」

笑顔で言つて上げると、冷や汗交じりに金髪は銃を手離れた。

私はその銃を素早く蹴り飛ばして、犯人から離す。

もう1人の犯人の方も、佐々木と間宮が取り押さえたか……

これにて本当の一件落着だね。

とんだ休日だったけど……これはこれで楽しかったよ。

29：深まった溝

くふつ、いよいよだねー。

準備は万端。

あたしはランラン気分ジャンクシヨンで地下倉庫を通つて、非常口から外に出る。

「うー、さぶつ」

潮風が吹いて来て、あたしの肌を冷やす。

海に面してる小さな4、5メートル四方のコンクリートの地面へと、降り立つ。

連絡した時間だともうすぐのはずだから、ペンライトを点滅させて誘導する。

すると――

ザアアアアアッ！

と、夜の海面に2つの『オルクス』が浮かぶのが見えた。

お、きたきた♪

こっちに向かつてきて、2基は接岸すると同時にハッチが開く。

「ジャンヌきょうくとうに夾竹桃、おっ疲れー♪」

「特に疲れてなどいない。そもそも自動操縦オートパイロットだからな」

ゆらりと立ちながらジャンヌはそう言う。

あたしは手を差し出し、ジャンヌはあたしの手を取る。

そして、陸地へと引き上げる。

「ふー……」

「夾ちゃん、そんな所で一服しないでよ」

「ごめんなさい、寝起きだったものだから」

煙管キセルの煙を吐きながら、オルクスから立ち上がる。

「ところで、どうしてこんな所にいるのかしら……ジャック」

まあ、夾ちゃんの言う事もごもつとも。

あたしについて来たんだけどね、お姉ちゃん。

誰も驚く事も無く、梯子の上を見る。

そこには日本人の顔立ちの青年が座りながらあたし達を見下ろしてた。

「いや、なに。物見遊山つて奴なんだろうか？」

「私達に聞かれても困るぞ」

「ホームズの4世を観察しに来てた。ただそれだけさ、ジャンヌ」

「それで、私達に何の用だ？」

「おいおい、そう邪見しないでくれよ。用がなかったら仲間に会いに来ちゃいけないのか？」

「……相変わらずの気まぐれか。貴様はセーラ以上に読めん奴だ」

ジャンヌは不機嫌そうに喋ってる。

ジャンヌこそ、相変わらずジャックもといお姉ちゃんの事が苦手と言うか嫌いだよ
ね。

「実は用はあるんだけどな」

「お前はツ……性格も顔も毎回違うクセに人をからかう所は、一貫するのだな……」

「あーっとジャンヌ、抑えて抑えて」

「理子、止めなくても分かっている。私がコイツにかすり傷すら負わせられない事は知
てるが、無駄だと思っても攻撃したいのだ……」

「策士が沸点低かったら世話ないな」

「誰の所為だと思ってる！」

余計に泥沼にはまってるよジャンヌ……

こめかみがすごいピクピクしてるあたり、相当乗せられてる。

ジャックは笑みを浮かべて、

「ちなみに、用があるのは夾竹桃の方なんだがな」

「私にどう言った用件かしら？」

夾竹桃は煙を吐いて答えながら、陸地へと上がる。

「なに、確か……お前の狙いは間宮の毒だった筈だよな？」

「そうね。2年前に植え付けた種が花開くころよ」

「間宮 あかりを攫う予定は？」

「あるわ。元々そのつもりだもの。あなたは、毒じゃなくてそつちに興味があるみたいだけど」

「ああ……その通りだ。なに、ホームズの4世を観察してる内にあいつを見つけた時は、驚いたもんさ」

間宮 あかり——オルメスの戦妹いもうとだったね。

2年前つて言うとお、夾ちゃんやあのブラドが襲いに行つた間宮の里か。

あの子がその生き残りだつて言う事くらいは、知つていたけれども。

「あいつは良い才能を持つてる。観察して分かつたさ。あの子に武偵なんざ似合わな
い、外見うんぬんの話じゃなくてな」

「あの子に何を見たのかしら……」

夾ちゃんの問いに、ジャック笑みを深める。

「——人を殺める才能さ。元々、間宮の技術は必殺のモノなんだから当たり前の話なん

だかな」

「随分と気に入ったのね」

「なに、理子と同じく育てて見たくなつたのさ。夾竹桃に用があるつて言うのはそういう事なんだが……」

「私もあの子は気に入つてるのよ。それに秘毒『鷹捲』たかまくりを教えて貰うためにはどの道、イ・ウーに連れて行かなくちゃならない」

「話は乗るつて事でいいのか？」

「見返りは攫つてから求めるわ。皮算用は好きじゃないでしょ？」

「成立だな」

随分と黒い会話だよ。

怖い怖い……オルメスはあたしがやるから、あの子は色々と失う。

この間までは『毒の一撃』ナワツンの特訓で楽しくやつたのに、残念だよ。りこりん的に。

「なに、いざとなれば俺を引き合いに出してもいいぞ。復讐つて言うのは、間宮の子にとつて甘美な響きだからな」

「随分と買つてるのね」

「まあな。それに、楽しめりゃあいいのさ……何事もな」

「話は終わりか？」

今まで黙ってたジャンヌが口を開く。

「ああ、終わりきさ。俺はしばらく日本にいるから、前もって連絡してくれれば手は貸すぞ？ それじゃあな」

そう言つてジャックは立ち上がつて跳び、去つて行く。

「相変わらずだねー、あたしの師匠は……。それじゃあ気を取り直して、各ターゲットの少女を拉致または殺害する『GGG作戦』、楽しんで行つてみよー」

あたしは大きく拳を上げて、そう叫ぶ。

「理子、お前のターゲットはさつきジャックが話していた神崎・H・アリアだぞ。イ・ウーの下級生程度の実力しかないとは言え、まがりなりにもSランク武偵だ」

「ジャンヌ、心配は無用だよ。今のあたしならアリアには勝てるって師匠のお墨付きだから。それに、準備も万端だよ」

「なら良い。私の方を手伝つてくれ。お前の情報通りに星伽 白雪が合宿から帰京次第に獲る。夾竹桃は、さつきのジャックとの話し通りに間宮 あかりか？」

「そうね。だけど、心配は無用よ……。あの子は雑草と同じ。放つておけば伸びるけど、今は脆弱な存在。簡単に引き抜ける仕事よ」

夾ちゃんやジャンヌにとってはただ攫うだけだけど……

あたしにとっては、大事なんだよね。

自由とあの人の隣……あたしが笑顔で帰れる場所のために。

◆ おかしい事が起きた。

俺はアリアと出会ってしまった失敗を教訓に、余裕を持ってバスに乗れるように出た筈だった。

◆ だが——既に、7時58分のバスは到着していた。

雨と言う事もあって、多くの生徒がバスの中に押し掛けている。

(このままだと乗り遅れる！)

そう思っただッッシュする。

「あぶねー！ ギリギリ乗れたぜ！ おう、悪いなキンジ。見ての通りこのバスは満員なんだ」

「何お前は青いタヌキ型ロボットに出てくるキツネ顔の少年みたいに言ってるんだよ！」

武藤がこちらに気付いたと同時にそんな事を言ってくるので、思わず突っ込んでしまった。

だが、確かに武藤の言う通りバスの中の人口密度はやばい事になっている。

「な、なんとか入れてくれ武藤！」

「入れてくれて言われても、どう考えても入れそうにないぜ。あ、お前の元パートナーに迎えに来て貰えよ。確か白野は車持ってたろ？」と言う訳で、2人仲良く登校しろよこのリア充め！」

プシューと言う、バスのドアが閉まる音がするとそのままエンジンを唸らせて行ってしまうた。

何か恨みが籠もってたぞ、アイツ。

最後に『リア充』とか言ってたが……確か、理子語と言うかネット用語みたいな物だったはず。

無理矢理に理子に教えられたわけだが、意味は確か『リアルが充実してる奴』を略した言葉だったような気がする。

(充実してるどころか、不充実なんだけどな……)

武偵にいる以上、普通の生活なんて出来る訳がないんだからな。

しかし……このままだと、1時間目に確実に遅れる。

1年生の3学期以降、俺は単位が少し危ない事になっている。

あまり評価を落とすようなことはしたくない。

だが、霧に迷惑も掛けたくないしな……

——歩いて行くか。

そう思っていると、1台の黒い車がバス停を通り過ぎて停まる。
あの車は、どう見ても

「お困りの用だねー」

助手席の窓から、霧が顔を出す。

入学試験の時もそうだが、タイミングが良い奴だよ。

「悪い、送って貰えるか？」

「断る理由はないよ。ただ、貸しが……ねえ」

ニヤニヤと言った感じに微笑みやがって。

しかし、遠山 キンジ。

ここで意地を張ったら、1時間目には確実に遅れる。

しかも1時間目は一般学科の国語だ。

普通の高校に行くためにも、あまり逃したくは無い。

なので――

「すみません。送って下さい」

腰を折るしかない。

ああ、我ながら情けないぜ。

女子に頭を下げたからとかじゃなくて、人として。

「別にそこまでしなくてもいいのに……貸しはチャラにしないけど」

「お前、ホントに酷いよな」

「そう言っていないでさっさと乗りなよ。置いて行っちゃうよ？」

雨である事もあつて霧の冷たさが身に沁しみみる。

鞆を後ろの席に載せて、俺は助手席に乗り込む。

どうにかこうにか一般授業である国語には間に合いそうだ。

と、思いながら霧と共に廊下を歩いている。

はあ……全く、時計が遅れてるなんてな……

学校の時計を見た所、俺の腕時計はどうやら10分前後ほど遅れていたらしい。

理子に修理を頼んだのが間違いだったか？

霧と同じようにイタズラの気質があるから、これもちよつとしたイタズラなんだろう。

俺にとつてはいい迷惑だが……

何となくだが、霧と理子が仲が良い理由が今更ながら分かった気がする。

「ある意味ラッキーだったね。私が通りがかって無かったら、今頃は遅刻コースだよ」

「本当にな……」

そう霧と話しながら、教室の扉を開けるが——
人が少ない。

おかしい、武藤は確かにバスに乗っていた筈だ。

しかも霧の車よりも先を走っていた。

一度も抜かしてはいない。

普通に考えれば、既にうるさいくらいには人数がいるのだが。

「これは妙だね」

霧も同じように異変を感じ取ってるのか、少し目を細めてる。

「あんた達も来てたのね」

後ろからアニメ声が聞こえる。

霧と2人で振り返ると、

「アリア……」
「神崎さん」

アリアがいた。

「今すぐにC装備に武装して女子寮の屋上に行くわよ！」

そして、突然にそんな事を言い出した。

「いきなり何だよ。これから強襲科アサルトの授業じゃなくて国語の授業だぞ」

「違うわよ、バカキンジ！ 授業どころじゃない！」

「授業どころじゃない……?」

俺が疑問を覚えて、そう聞くとアリアは呆れるように唇を開いた。

「——事件よ」

移動してる道中で簡単な説明をされたので纏めると……

どうやら、バスジャックが起きたらしい。

それも俺と同じ『武偵殺し』の模倣犯と思われる。

俺が乗ろうとした——7時58分のバス。

武藤や多くの他の生徒が、乗りこんでいるバスだ。

だが、どうもおかしい。

模倣犯にしてはやり過ぎだ。

それに『武偵殺し』は既に逮捕された筈だ。

だとしたら、逮捕されたのは何なんだ?

もし、仮に影武者だったとして……俺の事件を含め本物の『武偵殺し』だったとして

……なぜ今更出て来た?

何かがあちこちおかしい。

俺はC装備である、T^{ツイストナックブライ}N^{ナイフ}K製の防弾ベストに、フィンガーレスグローブ、強化プ

ラスチックで出来た面^{フェイスガード}あて付きのヘルメットを装着しながら考える。

アリアは何も詳しい事を話そうとしない。

そもそもだ……なぜあいつは俺と霧を、特に俺をパーティーにいられたがる？

ベルトを締めて、拳銃を入れるホルスターと予備の弾倉^{マガジン}を装備してから強襲科^{アサルト}を出る。

その間も、疑問は絶えない。

「来たね、キンジ」

自分の車のボンネットに腰掛けている、俺と同じ装備をした霧がいつもとかわらない笑顔で迎える。

「アリアはどうした？」

「神崎さんなら一足先に、女子寮の屋上に向かったよ」

霧は何でもないように答える。

事件が起きたのに慌てる事も無く、いつもの調子だ。

霧の強みは、いつでも冷静な事だ。

調子を崩さないし、いつも笑顔でいる。

マイペースと言っていていいだろう。

だからこそ周りの事をいつも見ているし、調子が崩れないから訓練通りの力を発揮^{はっき}で

きてる。

中学の時から実戦慣れしてるっぼいしな。

そのおかげで、良い感じにバランスが取れてた訳だが……

「出来れば小さな事件であつて欲しかったよ」

「願つてもどうせ選べないんだから、願うだけ無駄だよ」

「だよな……」

霧の言う事は時々正しいから困る。

いつもは子供みたいに、無邪気だつて言うのに。

車に乗り、女子寮に向かいながら俺は思う。

(本当に俺はこのままでいいのか?)

いや、何を迷つてるんだキンジ。

こんなトチ狂つた場所からおさらばするつて決めただろう。

そして、おさらばするにはアリアを引き離さないといけない。

俺に失望してくれれば、二度とパーティーに誘う事も無いだろう。

女子寮の屋上に着いて俺は見知つた顔を、開いた扉の隣に発見する。

レキ——狙撃科スナイプの麒麟きりん児だ。

霧とは反対に無感情だが、それでも充分に美少女だろう。

口数が少なくて、ミステリアスな雰囲気が多くの子に人気らしい。

いつもオレンジのヘッドホンを着けているが、何を聞いているかは分からない。

どうやら、様子を見るにたまたま屋上にいたと言う訳ではなさそうだ。

ランクはアリアと同じSランクだ。

「すぐに爆弾処理出来る子はいいる？　そう、なるべく腕の立つ子……分かったわ」

無線機でアリアは何かを話しているようだ。

「どうやら、爆弾処理に長けている子を探しているらしい。」

「が、すぐに無線を切って俺へと向き直る。」

「あんた、霧はどうしたの？」

「あいつは地上から行くそうさ。今は女子寮の前において、応援を待ってるらしい」

「なるほど、いい考えね。通信は聞こえてるかしら？」

『聞こえてるよ。感度も良好ってね』

武偵高の校章が入ったインカムから霧が、アリアに伝えるように話しかけてくる。

「それで、詳しい状況説明は？」

「学校の廊下で話した通りよ。7時58分に男子寮前に停まったバスがジャックされた。本当は爆弾処理に長けた子が欲しかったけど、出払ってるみたい」

「どうして事件だとすぐに分かった？ それに、『武偵殺し』は逮捕された筈だが？」

「気付いたのは『武偵殺し』が使う爆弾を操作する電波にパターンがあつたから！ 私はそれを掴んだから気付けた。それと、逮捕されたのは真犯人じゃないわ!! 説明は以上よ！ 今は事件に集中しなさい！」

声を荒げるアリアだが、やはりここに来る前と同じで何かがおかしい。

「真犯人じゃないって、どう言う事だよ？」

「事件の説明は充分したでしょう!! その裏や、事件の背景を説明してる暇は無いわ！」

あんたには知る必要も無い！」

そのアリアの言い方にイラッと来た。

「ああ、分かったよ！ だがな、現場の詳しい状況をもう少し説明しろよ！ 犯人はバスの中にいるのか?! バスの周りに不審な影は無いのか?!」

「そんなもの、現場に行けば分かるでしょ!! 自分の目で確かめなさいよ！」

コイツ……詳しい状況も分からずに乗り込むつもりか?!

セオリー無視どころか無鉄砲だぞ!!

『ちよつとお2人さん。冷静になろうよ』

「だけど、霧！ こいつは、現場の危険度も知らずに飛び込むって言うんだぞ?! そんな奴に背中を預けられると思うか?!」

俺はインカムから聞こえてくる霧にそう訴える。

『確かにねーって、結局神崎さん……キンジに自分の事情を説明してないの?』

「説明する必要は無いわ……あんだ、あたしの事情の何を知ってるのよ」

『神崎さんがキンジの部屋に押し掛けて来てから、個人的に調べさせて貰ったよ。他の人と協力してね。キーワードは——864年』

「——ツ!？」

霧の言葉に、アリアは目を見開いて確かに驚いた。

——864年。

何の年数だ?

だが、アリアに関係するのは少なくとも確かなのは分かる。

「あんだ、そこまで調べたのね……。意外だったわ」

『いやー、神崎さんを見てて私は思ったんだよ。どこか“焦ってる”ってね。調べて納得したよ』

「どう言う事だ、霧。その事情ってなんだ?」

『さすがに今ここで話すのは場違いだから、事件が解決したら話すよ。神崎さんが話している言うならね……。ただ、キンジにとっては喉の奥に何か詰まったような感じになるだろうけど』

確かにそうだ。

霧は基本的に、人の事情を知っても本人の許可がなければ話さない。

そこは信頼できる。

実際、俺のヒステリアモードについてアリアが知らない所もそうだし、今まで他の女子に俺の秘密を漏らした事は無い。

「分かったよ……事件に集中する」

『それとねー。キンジにも言いたい事があるんだけど、プライベートチャンネルにして貰って……いいかな?』

俺に言いたいこと?

こんな時になんだって言うんだ。

俺は不意にアリアを見る。

「……手短かにしてちょうだい。もうすぐ、移動手段であるヘリも来るわ」

渋々と言った感じに、許可した。

そして見えるようにアリアはインカムの通信を切った。

俺はすぐに屋上の扉を開いて、中に入って閉める。

「こんな時になんだよ。俺に話して……」

『正直に答えて欲しんだけどね。キンジは、『本気』を出す気がある?』

いつもの調子で言ってる筈の霧の声に威圧感を感じる。

『本気』のニュアンスは——ヒステリアモードを使うのかと言う事だろう。

.....

ダメだ、どう考えても霧には誤魔化せない。

表情を見られない通信越しとは言え、嘘は言えない。

「本気は……ヒステリアモードになる気は無い。俺は、武偵をやめる……そう何度も言ったよな？」

『そうだね。だから、アリアが邪魔なんでしょ？』

「……そうだ。何だかよく分からんが、いきなりドレイになれと言ったり、人の部屋に押し掛けては凶々しくも居座って俺の事情も知らずに踏み込んできやがる。霧の言う事情が絡んでるのかもしれないがな……」

『まあ、多分当たりだろうね。あの子は自分の事情にキンジを巻き込もうとしてる。私は言ったただけだね、素直に自分の事情を話して助けてって言えばいいのに、って。結局は言っていないみたいだけど』

「逆にそれはそれで困るけどな……」

『と言いつつ、事情を知ったら見捨てるなんて器用な事は出来ないでしょ？』

「……そんな事は、無い」

なんだか本当の事を言われた気がするが、それでも俺は否定した。

『いいや。キンジはそんなこと出来ない。それとね、自分でも気付かない?』

——気付かない? 俺が、何に気付いてないって言うんだ?

『キンジも今、自分の事情に他人を巻き込もうとしてる』

「……俺が?」

『そうだよ。キンジが本気を出さないまま、長年のブランクを抱えたまま現場に出たとして……どうするの? ここまで来てこんな事言いたくは無いけど、足引つ張るだけだよ?』

「随分とストレートに言うな、お前」

『だってさ、このまま足引つ張って失敗してさ。爆弾があつてそれが爆発したら確実に誰か死ぬよ? その時に生き残って責任を取れる?』

「……ッ!」

その言葉に、俺は驚愕きょうがくした。

そうだ……あのバスには知らない奴だけじゃない。

俺の友人も乗ってるし、顔見知りもいるだろう。

俺は——バカだ。

元。パートナーにこんな単純な事を教えられている。

平穩を望むあまり、他人を巻き込もうとしてる。

全力で挑まず、友人や関係ない奴らを私情に巻き込もうとしてる。

確かに俺は武偵をやめたい。

だけど——！

その前に俺は、一般人になる前にそんな最低野郎に成り下がる所だった。

そんな失敗をして死んだら、俺自身……普通の生活も味わえない。

何より生き残って、友人が死んで、普通に知らん顔をして生きていけるのか？

出来る訳がない。

そんな事で得た平穩なんてクソ食らえだ。

「悪い、霧。今、言われて気付いた」

『そう。世話が焼けるね。まあ、事件を解決したら神崎さんとの喧嘩を仲介くらいする

よ。女子寮の玄関口で待つてる』

霧からの通信がそこで切れる。

喧嘩する事前提かよ……

だけど、あの分からず屋には真正面から言つてやらないと分かりそうにないな。

その前に早く、玄関口に行かないと。

気は進まないが……悪友を救うためだ。

◆ ◆ ◆
ホント、世話が焼けるよね。

ここまでお膳立てしないと、前に進まないなんて。

まあ、こう言う回りくどいの好きだから別にいいんだけどね。

なんて思ってる内に、キンジが降りて来た。

「……待たせた」

「はいはい、さつさとしないと神崎さんがうるさいよ？」

言いながらキンジに向かい合うけど、照れくさいと言うか恥ずかしがってるのか……
既に顔が赤いんだけど。

「いい加減に慣れないかな？」

「キスするのに慣れたらダメだろ……ただですら、俺は恥ずかしいってのに」

「そんな初心うぶな反応してるから、からかわられるんだけどね」

「逆にお前は羞恥心しゅうちしんがなさ過ぎるんだよ!!」

羞恥心って言われてもねー。

何を恥ずかしがればいいのか、私には分からないんだよ。

演技は出来るけど。

試しにして見ようかな……

「私だって、恥ずかしいんだよ?」

はにかんだ様に言いながら、キンジの胸に飛び込む。

「うっ……」

「だけど、キンジはちゃんと受け止めてくれるから……あんまり恥ずかしがってたらダメだと思つて、ね?」

上目遣いで、キンジを見上げる形で顔を覗き込む。

そして熱の籠もったような声音で話しかける。

同時にキンジはさらに顔を赤くして、

「そんな事に気付かなかつたなんて、俺はバカだつたよ霧」

……あれ?」

キンジの口調が変化した。

さりげなく首に手を回しながら脈を診るけど、脈拍も上昇してる。

さすがの私でも、これには驚いた。

簡単に堕ちた……ヒステリアモードに。

「もう、なつたの?」

「ああ。君のいつもと違つた感じに惹かれてね」

私が尋ねると、愛おしいとそうにキンジはそう答える。

ギヤップって奴だね……

「そう言っても、霧。いつもと違う君が演技なのが、少し残念だよ」

さすがに気付かれるか、この状態で密着してると。

「悔しかったら演技じゃなくさせてみなよ。取りあえずスキんシップは短かったけど、仕事に戻ろうつか？」

「そうだね。もう一人のご主人さまも、きつと痺れを切らしてるだろうからね」

「一時的だけど……」

「ああ、プラチナコンビ復活さ」

パン！ とハイタツチをして、お互いに別れる。

女子寮の玄関口を出ると、呼んだ応援もちようど来たみたいだね。

1台の白いスポーツカーがかなりの速度で走って、ドリフトして停まる。

「やつほー、霧さん！」

窓に身を乗り出して、顔を出してくるヘルメットを被ったシャープな美人顔の子。

武藤の妹である武藤 貴希が私に挨拶をして来る。

すぐさま後部座席に乗りこむ。

「挨拶してないで、事件だからちやちやと行くよ」

「ところで……霧さん」

「なに？」

「霧さんの車、改造していいんですね？」

「それからは好きに運転させてあげるよ。ぶついたり、交通違反しなきゃね」
「了解です♪」

兄妹揃って乗り物好き、彼女に関してはスピードに酔ってる。

当然のことながら武藤經由で彼女の事は知った。

入学から日は浅いけど、私の懐ふとろがお金的な意味で広い事と、私の車を見たら目を輝かせてた。

かなり現金な子だったけど、まあ充分だね。

腕は悪くないし。

「行きますよ。せいぜい、轆ひかれないでください」

「車に乗ってるのにどうやって轆ひかれるんだか……」

私がそう言うと、彼女はアクセルを思いつきり踏んで行く。

かなりのスピードだけど、こうでもないと追いつけないだろうからね。

『武偵の皆さんに連絡いたします。現在、バスは青海南橋を渡り台場へと進入。今もなお、暴走しています』

透き通った声でインカムにオペレーターの通信が入ってくる。

「もしもし、聞こえてる?」

『は、はにや……き、聞こえてるわよ霧』

私がインカムに語りかけると、神崎の間の抜けた声が返って来た。

これは、キンジが甘い事囁いたんだらうね。

ヘリのローターの音が聞こえる辺り、既に乗っているみたい。

「バスの具体的な居場所は分かる?」

『現在、ホテル日航の前を右折しています』

この声は、ウルスのレキか……あの子もいたんだね。

「了解と……貴希ちゃん?」

「聞いているよ」

タメ口でそう言いながらもすごいスピードで道を曲がる。

結構、遠心力が働くけど問題ない。

バスに爆弾がある以上、一般車両は既に退避してる。

ここも距離があるとは言え、交通規制が掛かっていて今の所は車は少ない。

スピードを出しても大丈夫。

すぐに私達の車は台場へと進入。

そのまま、さつきレキから聞いたホテル日航をも通り過ぎる。

『こっちはバスの上に着いたぞ、霧』

「ちようど今見えてるよ」

キンジから通信が入ったと同時に、バスの後ろを捕らえた。

バスの屋根の上にはキンジと神崎が見える。

「よし、こっからは腕の見せ所だよ。あのバスに乗り込むからあまりスピードをぶれさせないでね」

「大丈夫だよ、そんなの朝飯前！」

貴希ちゃんは自信を持ってそう答える。

すぐにバスに追い付き、左側を並走する。

スポーツカーの屋根が開いて行き、オープンカーになる。

当然、凄いい勢いで雨粒が顔に当たる。

風の音も凄いい。

「今から乗り込むよ」

『了解。カバーするわ』

神崎からそう通信が入って、私は風に負けないように声を上げて貴希ちゃんに言う。

「乗り込んだら、すぐに離脱しなよ?!」

『それは出来なさそうだぞ』

キンジから今度は通信が入る。

「どうして?」

『後ろから『武偵殺し』のオモチャが迫ってる』

来ちゃったか……なんて思いつつも後ろを振り返ると後ろから赤いオーブンスポーツカー、そして運転手にはUZIが鎮座してる。

「あ、あれは!?! ルノー・スポール・スパイダー! 1997年に生産されたオーブンスポーツだー!」

貴希ちゃんは嬉しそうに声を上げる。

後ろを見ながら何事もなく運転してるあたり、兄妹揃って運転技術が若干ヘンタイ的なんだよね。

「まあ、応戦しなきゃ面倒くさい事になるけどね!」

「あの車体に穴を空けるの!?! もったいなくない!?!」

「貴希ちゃんもヘルメット被ってるとは言え、当たったら脳震盪のうしんとうでも起こしてあの世にスピード直行だけどいいの!?!」

「遠慮なく撃つて下さい!」

すぐに掌を返した。

大声で喋っていると疲れる。

『この状態で爆弾を解体するのは難しいぞ』

『分かつてるわよ！　すぐにアレを追い払って、解体するわよ！』

神崎がキンジに向かって通信越しにそう言うのと、腰を屈めて射撃する。

が、80キロのスピードで蛇行するスポーツカーに当てるのは結構難しい。

車体にはいくつか当たってるけど、それでも追い払うには至らない。

まあ、キンジは別だろうけど。

『全員伏せろ！』

キンジが車内の窓に叫ぶと同時に——バリバリバリッ！

当然撃たれるばかりではなく、無人のスポーツカーも反撃に出た。

窓がいくつも割られる。

「牽制するから、キンジは車内の様子を見て」

『もう入ってるよ』

私の言う事にそう答えた。

気付けば、キンジはするりとルノーが死角になつてる場所から車内に入ってる。

早いねー。

私もぼちぼち反撃しますか。

そう思つて、後ろのルノーに向かってグロックをフルオートで撃つけど、すぐさまバ

スの後ろへと隠れる。

いいよ、理子。

その調子で頑張つてね。

『車内の様子は?』

『運転手が1名負傷した。さすがに運転しながら屈むなんて言う器用な事は出来ない。ああ……武藤、タイミング良く運転を変わってくれ』

神崎が応戦しながら現状報告を求めると、キンジは途中で別の人物に語りかけてる。

『お前、ヘルメットいいのかよ?』

『ああ、大丈夫さ。今の俺なら、そう簡単に傷ついたりしない』

私はグロックをリロードしながらバスの中を見ると、キンジはヘルメットを武藤に渡ししてる。

『意味の分かんねえ事言いやがって、死んだら轢いてやるからな!』

『そう言えば、霧。お前が乗って走ってる車を運転してるのは、貴希か?』

『そうだね!』

『え、オイ!? マジかよ!』

私が答えると武藤が車内で驚いたようにしながらも、素早く運転が変わる。

少しふら付いてたバスが、まっすぐ走りだす。

『お兄ちゃんに何か伝言はあるか聞いてくれ』

「貴希ちゃん、お兄さんに伝言はあるー?!」

「死んだら轢いちやうぞー!」

『おいしいッ!? マジで貴希が来てんのかよ!』

妹の声を聞いて、焦ったような声を出してる。

「死んだら、お兄ちゃんのお気に入りのバイクとか貰って行くからねー!」

『絶対に許さんぞ! オレのBMWのネイキッド・バイクは渡さんからね!』

私とキンジのインカム越しで会話する武藤兄妹だけど、走ってるスピードは全く一
緒。

さすがは兄妹。

『あんた達、こんな時にコントしてんじやないわよ!』

神崎が銃声を響かせながらそう叫ぶ。

「さてと、さつさと早めに終わらせようか」

『だが、問題はあのルノーよ……どうやって引き離すつもり? 段々都心に近付いてる

わ』

『この先はレインボーブリッジだ。そこで勝負を掛ける。それまでにあのUZIを引き
剥がせば俺達の勝ちだ。俺達であのルノーを停止出来ればいいが、無理に拘こたわる必要は無

い』

ほほう、さすがはヒステリアモードのキンジ。
冴えてるね。

私もその狙いには気付いたよ。

「狙いは？」

だけど、一応は聞いておく。

『ここは台場だ。建物が多し、上にいるレキも狙撃できないだろう』

『勝負を掛けるって言うのは、そう言う事ね』

神崎も分かったみたい。

『それと、霧。お前のグロックを貸してくれ……これからやる事は、俺のベレッタだけじゃ装弾数がなさ過ぎる』

「分かった、これからバスに乗り移る——うわっち!？」

ルノーがバスの前から現れて、こっちに銃口を向けてくる。

貴希ちゃんがブレーキを踏んで、バスの後ろへと潜り込み、撃たれる前に弾丸を回避する。

『大丈夫か!』

「キンジ、心臓に悪いよこのアクション映画」

『体験型なんてお断りだな。無事そうではよかったよ』

「それじゃあ、今からそっちに行くよ。フックショットでね」

『ああ、分かった』

私はすぐさまキンジに向かってフックショットを放ち、それをキンジが掴む。

さすがは反射神経も跳ね上がるヒステリアモード……まあ、その性能はキンジのお兄さんで体験済みなんだけどね。

そのままモーターが高速で回転して、私は後部座席から飛び立つ。

「そんなのアリ？」

貴希ちゃんそんな事を言った気がするけど気にしない。

私もバスの屋根へと飛び移りフックショットを仕舞いながら、ワイヤーを屋根に打ち込む。

そのままキンジにグロックと予備の弾倉マガジンを素早く渡す。

そして、M500でルノーに向かって射撃する。

と言つても、当てるつもりはあまり無いけどね。

まあ、そもそもある程度狙つても揺れる車体の上にも動いてるから自然に逸れるんだだけ。

当てようと思えば当てられるけど、それじゃあすぐに事件が終了する。

この役回り本当に面倒だよね。

Aランク前後の腕でやりつつもそれで演技だと、手を抜いてると思わせない。

我ながら難しい事やってるよね。

「車体ぐらいいにしか当たらないよ、全く」

「本当にね！ うろちよろしなさいでさっさとホイールなりあのUZIに当たりなさいよ！」

神崎さんも射撃しつつ、そう言う。

Sランク武偵でもあのルノーの軌道には、イラついてるようだね。

そして反撃も当然して来る。

UZIから放たれるいくつもの弾丸がこっちに向かってくる。

これは、下手すると直撃コースだね。

だけど——

ギギギギギンツ!!

UZIから放たれる弾丸が横から来た別の弾丸に、空中で弾かれた。

それも私や神崎に当たる物だけを判断して弾いた。

神崎は少し身構えてたけど、すぐに異変に気付いてキンジの方を見る。

「あんだ、今のって……」

『銃弾撃ち』だよ。お嬢さん」

「お、お嬢さツ!? もう、調子狂うわね!」

神崎は顔を赤くしてキンジから目を逸らす。

「俺がお前らに飛んでくる弾丸を全て弾く。だから、お前らはルノーのUZIを当てる事に集中してくれるかい?」

優しく語りかけるようにキンジは言ってくる。

まあ、確かに反撃されるかもしれないのに移動してる物体に当てるのは普通の人間だと難しい。

神崎は、惜しくもUZIを固定してる場所にくっつか掠めてる辺り凄いんだけどね。

今のキンジは私のグロックとベレッタの双銃ダブル、HSSのキンジならマシンガンにも引けを取らないだろうね。

キンジがやればそれで終わりそうだけど、それだとバスの中の人たちが無防備になる。

だから防御に徹する事を言ったんだだろうね。

「分かったわ、あんたを信じる。霧、やるわよ」

そんな突飛な事を言われても、神崎はあっさりと信じた。

おそらく持ち前の直感だろうね。

今のキンジなら出来ると、その目は確かに信じてると言った感じ。

「はいはいっと」

神崎に応じるように私は射撃する。

特に神崎は、怒涛の連射をルノーに向かって放つ。

UZIを含め、車体にかんりの弾痕が刻まれていく。

キンジはキンジで、UZIから放たれる銃弾を確かに弾いて行く。

「やっぱり……少し火力不足ね。私はさつきから撃つてたから弾が無くなりそうだわ」

すぐに神崎は気付いて、ガバメントを仕舞う。

「もうすぐレインボーブリッジだけど、このままだとキンジがもたないからね」

「直接叩き折るしかないわ」

神崎は力強くそう宣言する。

随分と大胆な行動に出るね。

「つまり、ルノーに飛び移るって事ね。距離を間違えたらさようならだよ？」

『行動に疾くあれ。先手必勝を旨とすべし』……このまま後手に回ってたらあんたの言う通りキンジがもたないわ」

HSSとは言え、かなりの集中力を使うだろうね。

「跳ぶから、手伝って頂戴」

「どうなっても知らないけどね」

そう言いながら屈かがんで私は手を組む。

あわよくば死んでくれないかなー、とか思ったりもしたけどさすがにそれはお父さんとの約束に反する。

神崎は私から距離を取り、

「行くわよー」

そう言つて私に向かつて走つてくる。

目標はバスの後ろから少し離れたルノー。

タイミング良く私の受け皿のように組んだ手の上に神崎の足が乗ると同時に、私の後ろに向かつて打ち上げる。

そのまま神崎は放物線を描いて、真つ直ぐにルノーへと向かつて行く。

UZIは空中にいる神崎に標準を向けたかと思うと、そのまま弾丸を放つ。

空中じゃあ避けようも無いけど、心配は御無用。

キンジの手によつて、再び銃弾は神崎に当たる前に弾かれた。

いくつもの音が雨の音と共に空中で響く。

——だが、今度はルノーは大きく減速した。

このままだと神崎は、地面に激突。

まさしく一巻の終わり。

だけど、そうは行かないだろうねー。

ルノーの真後ろから走ってくる”白いスポーツカー”がそのまま減速したルノーのスピードを下げないように押し上げる。

「貴希ちゃん、最後にいい仕事するね」

私がそう呟くと同時に、神崎はルノーに乗っていたUZIを蹴りで叩き折った。

そのままルノーの運転席に乗り移ったかと思うと、神崎はハンドルを切って減速し、停止した。

貴希ちゃんも同じく停まる。

どうやら運転席でも制御できたみたいだね。

『ルノーは無力化したわ！』

「上出来だよアリア。だけど、問題は解決してない」

キンジはそう言うけど、その口調は余裕そう。

その理由は既にレインボーブリッジに入ってるから。

バスに並走するように離れて飛んでくるヘリ。

ハッチが開かれていて、ウルスの子であるレキが狙撃銃であるドラグノフを構えて膝立ちしてる。

『レキ、荒っぽい爆弾処理だけど頼めるかい?』

『問題ありません』

キンジの問いかけにウルスの子は無機質に答える。

『私は一発の銃弾——銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない……ただ、目的に向かつて飛ぶだけ』

詩的な事を呟きながら彼女は発砲する。

遠雷のような音と共に、銃弾がバスの底部へと命中する。

ガランガランと言う音がすると、バスの後ろへと何か落ちて行く。

それは部品に取り付けられたプラスチック爆弾。

『——私は、一発の銃弾』

最後にそう言つて、再び撃つ。

爆弾ではなく部品に銃弾が当たり、そのまま放物線を描いて海の方へと落下する。

その刹那、

ドウウウウウウッ!

耳を劈く轟音と、空気を伝わる振動と共に巨大な水柱が上がる。

その様子を見てバスの中の武藤が大丈夫だと判断したのか、ゆつくりとブレーキを踏み減速する。

「事件解決だね、キンジ」

「ああ、これにて一件落着だ」

バスの屋根の上でキンジと私はハイタッチした。

どうやら、HSSが切れかけてるみたい。

「お前ら、パートナー解消したんじゃないやなかったのかよ……」

武藤が雨に打たれながら、私達を見上げてそう言う。

「もちろん解消したさ、霧の都合で」

「……嫌味？」

私はジト目で聞く。

キンジは首を軽く振って、

「そんな事はねえよ。再び組まないのは俺の都合だしな。今回はただ単に事件解決として一時的に復活しただけだ」

武藤の疑問に答えるように目を向けながらそう言った。

「なんだよ、神崎に乗り換えたのか？」

「誰があんな身勝手なチンチクリンの仔こライオン——」

武藤にそう答えるけど、キンジ……本人が近くにいるのにそう言うのは——

「……誰が、チンチクリンですって……ッ！」

もう遅かったか。

キンジは、肩を震わせて声が出た方へと顔をゆっくり向ける。私も同じように見るけど、そこには頬ほほをヒクヒクさせた神崎。

「人が気にしてる事を……あんたは……！」

言いながら2丁のガバメントを抜いちやったよ。

弾は打ち切った訳じゃないから、少しは残ってるだろうねー。

「地雷を踏んだね……コンプレックスを言われたら誰だつて怒るよ」

「これはコンプレックスじゃない！ それと、あたしはチンチクリンじゃなくてスレンダーって言うのよ！」

「スレンダー過ぎるんじゃないかな？」

「うっさい！ それ以上口答えしたら、風穴空けるわよ！」

私の言う事にいちいちツッコむホームズの4世。

やっぱり、弄り甲斐がはあるよね。

これ以上やったら本当に撃ちかねないから、やめるけどね。

「まあ、何にしてもあんた達の実力を見せて貰ったわ」

私とキンジがバスの屋根から降り立つと同時に、神崎は満足そうに笑みを浮かべてそう言ってくる。

キンジはその言葉に嫌な顔をしながらも、さりげなく私のグロックを返してくる。

「約束通り、実力は示してやった。満足しただろ？ 約束は守った、これで事件を含め全部解決だ」

キンジは切り替えて、約束を守ったのだからつけ狙うのはやめろと言外にそう言う。

「ええ、確かにあたしの満足のいく結果だったわ。だから、再契約よ」

「――」再契約?!

そのニュアンスにキンジは、顔を歪める。

まあ、彼女がこんな優良物件を逃すつもりはないだろうね。

「あたしのドレイになる再契約よ」

「はあ……」

その神崎の言葉に否定するのではなく、キンジは呆れの混じった息を吐いた。

「なによ、そのため息は……」

「呆れてるに決まってるだろ。いつまで経っても事情も説明しないまま、ドレイになれドレイになれって言われて、さすがの俺でも呆れる。それに俺の答えは変わらない。そんなもんは断る」

「どうしてよ！ あんたは、そんな実力があるのにどうして?! 武偵をやめるからとか言うからじゃないでしょうね！」

「ああ、やめるから断るに決まってる！俺は残りを平穩無事に過ごしたいんだ!!」
予想通りに喧嘩が始まったよ。

まさか、事件解決直後に早速とは思わなかったけど……

「白野、一体どう言う事だ？ キンジと神崎はいい仲間じゃなかったのか？」

武藤がおそるおそると言った感じに私に尋ねてくる。

「いい仲間どころか、見ての通り正面衝突してるよ」

「……なんでだ？」

「武偵をやめたいキンジと、キンジと私をドレイもといパーティメンバーとして組み入れたい神崎さん。どう考えても意見がぶつかり合うでしょ？」

「なるほどな……って、白野も神崎に誘われてるのかよ」

「どうもそれなりに実力を持った人が欲しいみたいなんだけれど……なぜ私達を引き入れたのかその事情を全く説明しないから、御覧の通り納得も行く訳もないよ」

私の説明に納得したのか、武藤は「なるほど」と言いながらヘルメットを外す。

「と言う訳だから、あんまり詮索せずにバスの中に鑑識科レビテアの人がいたら引きつれてルノーの検証とか証拠を確保してくれるかな？」

「ああ、分かったよ」

武藤はそれだけ答えて、何も言わずにバスの中に戻って行った。

そして、神崎とキンジの口喧嘩は留まる事を知らない。

「大体だな、何で俺達を引き入れたい説明ができないんだよ！」

「あんた達には知る必要がないって言ってるでしょ！ だけど、あたしからは時間がな
いとか説明できないのよ！」

「なんだよそれ！ 意味が分かんねーよ！」

「武偵なら頭使つて調べればいいでしょ！ 霧はとづくに知ってるのよ!！」

「俺は、あいつほど器用じゃねえんだ！ お前の口から説明されなきゃ納得もしねーよ
!！」

「出来ないって言ってるでしょ！ 大体ね、あたしに比べれば……あんたが武偵をやめ
る理由なんて——」

神崎が言おうとしている言葉をすぐに予測して、私はキンジへと静かに近づく。

「——大したことじゃないに決まってるわ！」

その言葉を聞いたキンジの右腕が動く。

私は、その腕を掴んでそれを止める。

「ストップ……我慢ならないのは分かるけど、踏み越えちゃダメだよ」

私は静かに言う。

拳を振りかぶろうとした状態で、キンジは止まってる。

今までにも見た事のないキンジの表情。

思わず背筋が震えそうになる。

——兄弟揃そろっていい表情をしてくれる。

内心、そう思いながらも顔には出さない。

キンジ自身、踏みとどまるつもりはあつたのだろう。

思つたよりも私が止めた事に抵抗しない。

「何よ……なんなのよ……」

その表情を真正面から見た神崎は雨に打たれながらも固まつてる。

「……すまん、霧」

「頭を冷やした方が良いよ。充分に言いあつたでしょ」

「——ああ」

キンジは力無く言つて、ちょうど迎えに来た車の方へと向かう。

神崎はそんなキンジを見送る事しか出来ない。

私は降りしきる雨の中……この2人をどう結び付けるか、考えるのだった。

30：毒の牙

通りかかった武偵の子達の話によると、どうやら……理子は行動し始めたみたいね。私もそろそろ行動しないと。

私が狙うのは間宮 あかりと間宮の秘毒。

だけど、あの子も可哀想なものね。

よりによってジャックに目をつけられるなんて……

まあ、同情なんてしないけど。

どっちにしても私のやる事は変わらない。

「それじゃあまたねーライカ、志乃ちゃん」

どうやらあの子が帰宅するみたいね。

私は煙管キセルを一回吹いてから仕舞い、傘を開いて間宮の子の後ろを追って行く。

どうやら平穩に過ごしてらみたいね。

妹には既に毒の異変が訪れてるでしょう。

なのに、間宮 あかりに焦ってる様子も何も無い。

きっと気付いてないのでしょう。

異変に気付かせまいと思って隠してるのかも、だとしたらお姉ちゃん思いのいい子ね。

ついでだから、あの子も一緒に頂いて行こうかしら。

『鷹捲』は一族の長男長女のみが伝承する事になってるのは間宮の秘伝書で知ってる。だけど、あの子も間宮の子だし……何か知ってるかもしれない。

それに姉妹の仲を引き裂くほど、私は残酷ではないつもり。

ジャックなら場合によっては躊躇ためらいなく妹は殺すかもしれないけれども。

私の追跡に間宮の子は気付いている様子もない。

そうして辿り着いたのは1つの古めかしいアパート。

ここがあの子たちが住んでいる所ね。

あかりが部屋に入った所で、私は彼女が入って行った扉の前へと立つ。

ピンポーン……

チャイムを鳴らして、私は傘で顔が見えないように隠す。

『はいーいー。ちよつと待ってくださーい』

扉の向こうから、あかりの妹の声が聞こえてくる。

すぐに扉は開いた。

随分と無警戒ね。

「どちらさま、ですか？」

「2年前……植えた種が育ち、開いた花を摘みに来たの」

「……？」

顔を見なくても分かる。

私の言う事が分からないと言った風に、あかりの妹が私に視線を向けている。

ゆつくりと傘を上げて——顔が見えるようにしてあげる。

「……あ……ああ」

目を見開いて、私から逃れるようにあかりの妹——のかが部屋の中へと下がりながら扉をすぐに閉めようとする。

だけどその前に私は彼女を捕らえて玄関へと入る。

「ののか、どうしたの？」

「お姉ちゃん！ 逃げて!!」

本当に姉思いのいい子ね。

自分よりも姉を逃がそうとする。

まだ制服姿のあかりが駆けつけて、玄関にいる私と、私に捕まっている妹を見る。

「……きょうちやくどう夾竹桃!!」

憎しみに顔を歪めて、私に向かつてすぐにマイクロウージーを構える。

「あまり騒がないで頂戴。ちやうだい。そうね、少しお邪魔させて貰うわ」

私は玄関へとさらに深く入って、扉を見ずに閉める。

「撃つていいの？ この子もそのまま傷ついちゃうけど」

「……くっ……ののか」

私の腕の中にいる妹を見て、あかりは躊躇ってる。

そして、私を射殺すような眼をしている。

いい眼ね……確かにジャックの言う通り、あなたは影で生きる子。

そう言う間宮の子が欲しいのよ。

「落ち着いて話でもしましょう。別に今すぐどうこうするつもりはないの」

「信用できると思う？」

あかりの言う通り、ごもつともな意見ね。

私は証拠として捕らえたあかりの妹をわざわざ解放する。

「姉の所に行きなさいな」

そう言つて、後押しして上げる。

私を警戒するように後ろを見ながら、ののかはあかりの所へと行く。

「……お姉ちゃんッ！」

「ののかっ!」

姉が妹を抱きとめながらも、私に銃を向けたまま。

姉妹愛つて言うのも良いものね。

思わず鼻血が出そう。

それと、ここには火災報知機とかは無いのね。

それを確認して、煙管に火を着けて煙を吹く。

「一体、どういうつもり?」

あかりはそう聞いてくる。

すぐに撃つてるかと思ったら、意外にも話は聞く気があるのね。

「だから言ったでしょ? 落ち着いて話でもしましょって」

「どうして今更、あたし達の前に現れたの……」

「2年前の忘れ物を取りに来たのよ。意図的に置いて来たモノだけどね」

煙を吐きながらそう答える。

「……2年前、あなた達のせいで間宮の一族は隠れ住む事になった」

「知ってるわ。私が現れたのは、あなた達をペットにするためと——間宮の口伝『鷹捲』たかまくり

を貰い受けにきたのよ」

「ッ!?!」

あかりと私とのやり取りの最中に、妹の様子は段々と変わって行っている。

あら、ちょうどいいタイミングで毒の兆候が出て来たわね。

「そんな技は……知らない」

「あらあら、そんな風に言つてとぼけちゃつて。一族の長男長女のみには教えられると言
うのは知ってるのよ」

「……仮に知つてたとしても、教える訳がない」

「ええ、だからこそ交渉に来たの」

「どう言う意味？」

「さあ、あなたの妹に聞いてみたらどうかしら？」

私の言葉に間宮の妹は肩を震わせる。

「……ののか？」

「ごめん、ごめんねお姉ちゃん」

妹の様子がおかしい事にあかりは尋ねるけど、その妹は許しを請うように泣きながら
しがつく。

「よく分からないけど、ののかは下がって」

「う、うん……」

そう言つて姉から離れて行く。

そしてそのまま、”私に向かって”ふらふらと歩いて来る。

「の、ののか！ そっちは行っちゃダメ！」

「あ、アレ……？ お姉ちゃん、どこ？」

可哀想に、もう見えなくなったのね。

「え、何言ってるの!?! どうしたの、ののかっ！ 私はここにいるよ！」
いくら言っても無駄なこと。

もう彼女に姉の姿なんて見えてないんだもの。

「あ……う、お姉ちゃん……ゴメン、ね」

そう言つて妹は壁に手を突いたあと、バタリと倒れた。

「ののか……？ ののか！」

私が目の前にいるにも関わらず、あかりは妹の所へと駆けつけ、抱きかかえる。
それを私は見下ろし、反対に彼女は私を見上げて睨みつける。

「ののかに何をしたの!!」

「毒が回つて意識が朦朧としてるだけよ。もう目は見えなくなってるでしょうね」

「……毒？」

「思い当たる節はあるでしょう？」

「……2年前の、あの時に……！」

どうやらようやく気付いたのね。

毒してあげると言っておきながら、今まで何の変化もなかったから安心していただけでしょう。

2年間、何もなければ……確かに毒されてるとは気付かないわね。

この『符^ふ丁^{ちやう}毒』は、使い勝手が良いわね。

問題はかなり遅行性だと言う事だけど、確実に相手を苦しめ、死に至らしめる事が出来る。

「ちなみに私が死んだりしたら、その子はもう助かる事は無いわ。その解毒方法を知ってるのは私だけよ」

「そんなの……医者に行けば!」

「そう思うならどこの病院でも連れて行けばいいわ。だけど最後に、あなたは私の所へ来るしかない。そのまま『イ・ウー』へ招待して上げる。妹ともどもね」

私は玄関を開けて、仮の連絡先を示したメモを置いて行く。

「1週間の猶^ゆ予^よを上げるわ。お友達とかにお別れの挨拶でもしなさい。自分の全てを犠牲にすれば、何も失わなくて済むわ」

最後にそう言っ私は扉を閉じた。

あの子は閉じる前に見た間宮の子は悔しそうに涙を流し、閉じた扉越しでも声が聞こ

える。

傘を開いて、何も思う事も無く私はその場を去って行く。
 (そう言えば、ジャックを引き合いに出してなかったわね)

まあ、別に構わない。

私との交渉が決裂しそうになったら言えばいい。

焦る事も無い、確実に毒して行けばいい。

◆ ◆ ◆

あれから……と言うほど時は経ってないけど、神崎とキンジと私がバスジャックを解
 決してその夜。

報告も済んで、一件落着。

万々歳……と言う訳でもなく。

最後にホームズの4世がキンジの琴線きんせんと言うか地雷に触れた。

そのおかげで、少なくとも2人の間に溝が出来た。

「全く、見事に言ったねー。自分に比べて大した事がない、なんて」

「あたしの何が、キンジに触れたって言うのよ」

女子2人、私と神崎は喫茶店である『Wildschut』と言う店で話をしてる。

「一体、なんだって言うのよ……」

「武偵なら調べればいいんじゃない？」

皮肉をこめて、神崎にそう返す。

「もつとも、友人が少なさそうな神崎さんが他の人に聞いても辿り着きそうにないだろうね」

「……あたしに喧嘩を売ってるの？」

怒り交じりにそう返すけど、私にとつては知ったことじゃない。

「事実を述べただけなんだけどね。まず最初に言わせて貰うと、自分の事情と人の事情を比べるモノじゃないよ」

「……どう言う事よ」

「母親が864年の罪を犯して、判決もある程度の所まで決まってる……まあ、大した事情だよ」

「あんた、やつぱり知ってたのね。先に言っておくと、あたしのママの罪は冤罪えんざいよ」

「常識的に考えてこの年数はおかしいと思ってるよ。だけど、冤罪を示す証拠は？」

「………ないわ。それを探してるし、これからも探す。だけど、時間がない」

「なんでそれを説明しないの？」

「冤罪を着せてる相手が一筋縄じゃ行かないからよ。『武偵殺し』に『魔剣』、『魔剣』、『無限罪のブラッド』……どれも都市伝説みたいな存在だわ」

神崎は悲痛そうに顔を逸らす。

確たる証拠は無い。

その内の1人、いや1人と1匹は武偵に在る訳なんだけどね。

私はカウントしない。

だってその冤罪に關しては關係ないし。

いや、この間来たジャンヌを含めれば神崎が言つた奴は皆在るんだけどね。

この武偵高に――

「だから、実力のある人に協力して欲しいんでしょ？」

「……そうよ。だけど彼らの背後に在る存在を、その背景を知つたら面倒な事になるわ。

だから、詳しく言う訳にはいかない」

「だから知つてもいない、キンジの事情と比べた訳ね……」

ここでキンジの事情を話そつかな？

そうした方が神崎もその前提で動いてくれるだろう。

キンジにもそれとなく神崎の事情を説明して協力するように話してみよう。

「今から言う事はキンジには内緒ね」

「なによ……」

「キンジが武偵をやめたい理由を、ちよつとね」

「……………」

「簡単に言うと、キンジはね……去年のクリスマス・イブに家族を亡くしたんだよ。それも、事件のスケープゴートにされてね」

「スケープゴート、ですって?」

赤い目を少し開いて神崎は驚く。

まあ、死んだか死んでないかの違いと細かい違いはあるけど、神崎も母親をスケープゴートにされてる訳だし。

驚くのも無理はないね。

実際は死んでないけど。

「そう。その人はキンジと同じ武偵なんだっただけだね、豪華客船の警護にその日は就いてただけけど……その豪華客船は何らかの人為的な理由で沈んだんだよ。詳しい事は、何も分かってない。ただの事故かもしれないし、テロかもしれない。だけど、人的被害はキンジのお兄さんのおかげで皆無。だれ一人失う事はなかった。本人を除いてね」

もつとも、私がそう言う選択肢を出したただけだね。

自分を犠牲にするか否か、って言うね。

「そして、客からの訴訟を恐れたイベント会社は責任転嫁てんかをした。他の武偵もいたのに

亡くなったキンジのお兄さん一人に全てをなすりつけてね。そこからは酷いものだったよ。『事故を未然に防げなかった無能な武偵』、『正義の味方みたいな真似して死んだマヌケ』そんな事がネットに流れてたよ。死んだ上に唾を吐きかけるような、そんな有様だったよ。当然、そんな惨状を間近で見てたキンジは……武偵と言う仕事に絶望したんだろうね」

私は悲しそうに言う。

「……………」

「神崎さんは、そんなキンジが辞める事情を大した事がないって言うんだね。随分と大したものだよ」

「……………悪かったわ」

さすがに罪悪感があるのか、私に向かって神崎は謝る。

だけど、それは筋違い。

「私に謝るんじゃないよ、キンジに謝りなよ」

「あんたも怒ってるんでしょ？ 元パートナーの……キンジの事情を知ってるから、あたしの発言を無責任だと思ってる」

別に怒ってはいないけど、

「そうだね。無責任な発言だよ……それに、神崎さんがキンジの部屋に押し掛けて来た

日に私は言った筈なだけどね」

『自分の事情もろくに話せないのに、他人に信用して貰えると思わない方がいい』……
確かにそうだわ。だけど、どうやって知ったら危険が及ぶような事情を説明しろって言
うのよ」

私が言った言葉を繰り返すように言う。

そして、同時に葛藤かっとうしてる。

「そんなモノは自分で考えなよ。私は既に答えを言ったような気もするけどね」

素直に何もかも打ち明けられないからそうなるんだよ。

何でそんな簡単な事が出来ないのか、私には不思議で仕方ないんだけどね。

まあ、どうせプライドとか余計な物が邪魔してるんだらうね。

私としては、そんなつまんないモノ捨てた方が良いと思うんだけど。

「……分かったわ。あたしにはキンジが必要よ。他にパートナーを探してる時間は……
あまりない」

「まあ、事情を知ったからには私も協力するよ」

「ほんとっ」

私の言葉に、神崎は嬉しそうな顔をする。

私はその疑問に笑顔で答える。

「嘘言ってどうなるんだか……だけど慈善活動じゃないから見返り程度は……ああ、やっぱいいいや」

どうせ、どっかで払って貰うし。

それに協力すると言つても、武偵”として活動してる間だけだね。

「なによ。遠慮しなくても良いわよ」

「全部が終わつたらにするよ」

その時にどうなってるかは知らないけど。

「……ありがとう」

私の『全部が終わつたら』と言う発言が、最後まで付き合うつて言う風を取ったんだろう。

嬉しそうに、だけどこか恥ずかしそうに神崎は静かにそう言った。

実際、最後まで付き合うよ。

——”誰”の最後になるかは知らないけどね。

そんな時に神崎から携帯の音が鳴る。

「はい、神崎です。……ライカ？ どうしたの、あたしに何か用？」

どうやらライカから連絡が着たらしい。

私としてはライカが神崎の連絡先を知ってたのが意外だけど……まあ、繋がりが無い

訳じゃないか。

同じ強襲科だし、神崎の戦妹アミカである間宮 あかりと友人関係だし。

「あかりの妹が失明して病院？」

それから神崎はしばらく黙って聞いている。

「……そう、分かったわ。すぐに行く」

そう言つてすぐに通話を切つた。

「何がどうしたの？ 間宮さんの妹が病院に運ばれたっほいけど」

「ええ、聞いた通りよ。失明して病院に運ばれた……ライカの話してる様子だと、敵に接触コンタクトされたみたい。最後はあたしの勘だけど」

勘、か。

間宮の妹が失明したと言う事は、夾竹桃も動き出した。

神崎の勘は当たつてるだろうね。

「あたしは武偵病院に行くわ」

「私も気になるし、ついて行くよ。ライカもいるみたいだし」

私はそう言つて、神崎と一緒に会計を済ませてすぐに武偵病院へと向かった。

はてさて……どんな様子かな？

早いとこ夾竹桃のモノになってくれると嬉しいけど。

病院へと辿り着き、受付で間宮 あかりの妹の病室を聞いてそこへと向かう。

『あかり！ 待てよ、どこに行くんだよ！』

目的の病室に近づいた時にそんなライカの呼びとめる声が聞こえる。

『ついて来ないでよ！ あたしが犠牲になれば、ののかは少なくとも死ぬ事は無いの……あたしが犠牲になれば』

扉一枚を隔てた向こう側で間宮 あかりのそんな声が聞こえる。

既に私と神崎は扉の前に立っている。

お互いに顔を見合わせて、神崎は疲れたような顔をしてため息を吐く。

『ごめん、みんな……さようなら』

最後に間宮の子がそう言つて、扉が開く。

「お別れにはまだ早いんじゃないかしら？」

神崎は扉が開き、間宮の子と目が合った瞬間にそう言う。

「アリア、先輩……!?!」 「霧先輩まで……」

扉の先に自分の戦姉アミカがいた事に間宮は驚いてる様子だった。

間宮と同時に、ライカは私もいた事に驚いた表情をする。

「やつほ……つて、軽く挨拶あいさつを言える状況でもなさそうだね」

私はそんな感じで言いながら、病室へと入って行く。あのベッドで目に布を巻いてる子が、間宮の子の妹。

同じく2年前に見た子だね。

他にも間宮の友人である佐々木とライカ……そして、ライカが戦妹アミカにしたと話してた島 麒麟きりんがいた。

以前に『ラクーン台場』の事件で救出した子だけど、あれからあの子の顔を見て思い出した。

去年に理子の戦妹アミカだった子だ。

まあ、だからと言ってあまり面識はないんだけどね。

それと武偵中学の時にいた風魔もいる。

「最初に言っておくわ。自己犠牲が褒められるのは、お伽話とぎばなしの中だけよ。犯人の言いなりになっていけば、どんどんそこに漬け込まれるわ」

「だけど……あたしには、これしか方法がないんです」

「どうして助かる方法が一つしかないと思うのよ。それに、今まで言わなかったけどあんたは別の“何か”を隠してる」

「……ッ?!」

神崎に言われた瞬間に、間宮は確かに動揺した。

「自分の事を偽いつわって、何もかも隠したまま。あんたと接触コンタクトされたであろう敵とどんな関係があるかは知らないけど……そんなので解決できるの？」

神崎も人の事言えないクセに。

いや、彼女の場合は違うか……話さないんじゃないやなくて、どちらかと言うと話せない方か。

「……………」

間宮の子は黙ってる。

それを心配そうに周りの子も見守っている。

「ごめん、みんな……今まで黙ってた」

間宮はそう言って沈黙を破った。

「話まず、何もかも……あたしの、あたし達——間宮一族について」

「……お姉ちゃん」

間宮の妹はそう言って、心配そうな声を上げる。

「話すにしても、一先ず座りなよ。神崎さんや友達以外に聞いて欲しくないのなら、私は出て行くけど？」

そう言って、私は病室を出ようとする。

「いいえ、白野先輩も聞いてください……」

どっちしろ聞くつもりだけどね。

もしかして、私を疑った事に負い目でも感じてるのかな？

まあ、間宮から許可が出たのなら遠慮なく聞かせて貰う。

私は引き返して、椅子を取り出して座る。

間宮も、他の皆もそれぞれ聞く体勢になる。

「あたしたちの家は昔、公儀隠密——いわゆる諜報機関みたいな役職に就いていました。敵地に潜り込んで情報を持ち帰る。そして、その存在を敵に知られてはならないから……生死を掛けた危険な戦いもあったそうです」

だからこそその必殺の技術。

まさしく見敵必殺って奴だね。

だからこそ、話してる間宮の子は強襲科じゃなくて諜報科の方が合ってる。

自分の持ち味を自分で殺してるんだよね。

「その戦いの技術は……子孫であるあたし達にも、脈々と受け継がれてきました。お母さんは言ったんです『いつ戦時になるかも分からない。だけど、そういう時代が来たら……人々を守るために戦ってね』って」

確かに間宮の母親は強かったねー。

そう言う信念があったせいで危うく目玉を抉られる所だったし。

「でも、2年前……そんな技術を狙われて間宮一族は襲撃を受けました。……お母さんも、あたし達を守るために傷つきました……切り裂きジャックを名乗る人に、やられて」
 間宮が言った犯罪者の名前に、その場にいる何人かが驚く。

まあ、知ってる人は知ってるだろうね。

2年前に、武偵にも忠告として連絡されたから……その本人は、ここにいますけどね。
 「……随分と大物がいたものね。何人が驚いてない所を見るに、それなりにニユースにはなってるのでしょうか」

「そうだね。武偵中学でも確かに警告されたよ……襲われた所が間宮さんのいる場所だとは思わなかったけど」

神崎に私はそう補足する。

「私が思うに、諜報機関って言うのは公安0課みたいに危険な仕事。その技術って言うのはもしかして——」

「はい、白野先輩の予想通り……間宮の技は人を殺める技——必殺の技術です。私の『鳶穿』^{とびうがち}も、元を辿れば眼球や心臓を取るための技」

「だから、技術を『矯正』^{きようせい}しようとした。武偵法9条を破らないために」

神崎の言葉に間宮は確かに頷く。

「なるほど。法を破らぬために、『鳶穿』^{とびうがち}を敵の得物^{えもの}を奪い取るモノにしたのでござるな」

風魔は合点がいったとばかりに言う。

「うん……。だけど、改変出来たのはそれだけ……。それ以外はどうしても急所を狙っちゃうし、無理にやろうとすれば技として成立しなかった」

もったいない。

自分の才能を殺しちゃうなんて、本当にもったいないよ。

だけど、そう思っても私は印象が悪くなるような事は言わない。

「間宮さんは、武偵に向いてないね。公安0課や武装検事を目指した方がまだまだ自分の才能を生かせる」

「霧先輩……。さすがに今のは聞き捨てなりませんよ」

ライカは怒り交じりに私にそう言ってくる。

まあ、今のは冷たいと言われても仕方ないけど、事実だしね。

だけど――

「まあ、待ちなよ。何もやめろとは言っていない。間宮さんは、武偵と言う道を歩んだ事に後悔はしてる?」

「してません……。アリア先輩に、みんなに会えたから」

「だったら問題は無いよ。向いてないと言われても、後悔してないなら自分のやりたいうようにすればいい。だけど間宮さんが接触された……。誰かは知らないけど、敵の交渉に

応じて後悔はないの?」

「あるに決まってるじゃないですか! だけど、あたしは……応じるしかないんです」
 間宮は私の言う事に答えながらも、椅子を立って病室の扉へと向かう。

「どこに行くつもり?」

視線だけ追って、神崎はそう呼びとめる。

「お別れです。あたしは、アリア先輩……先輩たちのように戦えなかった」

『……!!』

その言葉に間宮の友人が全員驚く。

「あかり。武偵憲章10条……言ってみなさい」

神崎は呼び止めるようにそう言う。

「……あき……るな」

彼女は神崎の言う事に答えるかのように言うけど、その声は小さくてはつきり聞こえない。

「聞こえないわ!」

「——諦めるな! 武偵は決して諦めるな!!」

「そうよ。あんたは今……武偵憲章10条を破ろうとしてるわ。あたしの戦妹なら、戦いなさい! 最後まで抗いなさいよ! あんたはあたしと違って、独りじゃないわ!」

「どうやら神崎は、今まで独りだと言う自覚はあつたんだね。まあ、そんな事は言わないでおくよ。」

「だけど、今のあたしには……」

「神崎さんの言った通りでしょ？ 間宮さんは独りじゃないって」

間宮が何かを言う前に私がそう言つてライカの背中を押す。

その行動の意図が分かつてるのか、私の目を見て確かに頷いた。

「そうだよ、あかり。先輩たちの言う通り、アタシ達がいるだろう？」

男前な感じでライカはそう言う。

この子、生まれてくる性別間違えたんじゃないかな……

何となくそう思うよ。

「そうです！ お姉様の言う通りです！」

島はライカに同意し、

「私もあかりさんがいなくなると、寂しいです！ 絶対に敵なんかには渡しません！」

佐々木は何やら別の決意をしてるっぽい。

やつぱりこの子、間宮に対して並々ならぬ感情があるよね。

「某も協力いたす。風魔の秘伝『符丁毒』を悪用するその所業、許すまじでござる」

当たり前だけど、風魔も協力するだろうね。

さて夾竹桃はどうなる事やら。

情報の一つでも流しておくか……

なんて考えながらも、

「武偵憲章1条」

私が言うのと、

「——仲間を信じ」

「——仲間を助けよ」

「ですの！」

ライカ、佐々木、島の順番で答える。

そんな皆に間宮は涙を流す。

「みんな……ありがとう……」

神崎は立ち上がって、間宮に向かい合う。

「あたしから初めて作戦の命令を下すわ」

「……それって……」

「ええ、戦姉妹^{アミカ}作戦よ。あたしは、今回のバスジャック事件の犯人を追う。あんたは自分の目の前の敵を逮捕する事に尽力なさい。2つの事件を同時に解決する」

少し間を置いて、彼女は宣言する。

「作戦コードは……『A A』。ダブルエーあかりとアリアのAよ」
「……はい！」

間宮は笑顔で神崎に答えた。

「なーんか、私としては面白くないなー。」

表には出さないけど。

「ま、いいや。」

「ライカは間宮さんの作戦に協力することを、姉である私から一応命令しておくよ」

「はい、もちろんです。そうすると、霧先輩はアリアさんの方に協力を？」

「まあね。そう言う訳で、頑張りなよ」

私は笑顔でそう言って、病室を神崎と共に出る。

「全く、ビックリしたわ。あかりに向かって武偵に向いてないなんて言うて……思わず

撃ちそうになったわ」

「病室で発砲する気だったの？」

神崎から驚愕きょうごつの事実を言われて、思わず突っ込んだ。

神崎も間宮の子に思い入れがあるみたいだね。

「さすがに病院で発砲はマズイから、途中から殴りかかってやろうかと思っただけど……」

さすがに自重したわ。他の人が見てる手前、そんな所見せられないもの」

「短気だね。そんなんだから、独りなんだよ」

「風穴空けられたいの？」

「ほら、そうやってすぐに銃に手が伸びる」

「……あんた、苦手だわ」

「奇遇だね、私も神崎さんとは気が合わないと思ってるよ」

本当にね……

「それじゃあ、私は戻るよ」

「ええ……あたしは、犯罪者を捕まえる前にキンジに謝らなくちゃいけないけどね」
病院のロビーで、少し後悔したように神崎は顔を少し下に向ける。

後悔するなら、最初から言わなきゃいいのに。

「ま、機会を見て近い内にキンジのいる場所を連絡するよ」

「分かったわ。あたしも予定は押し立てるから、早めお願い」

最後に神崎がそう言って、私と別れた。

病院からの帰り道、私は傘を差して武偵用じゃない携帯を取り出す。

喉を叩いて、声を出しながら適当な声を調整する。

周りに人はいない。

「もしもし？ 夜分遅くにすみません、夾竹桃さん。ジルですけれども」

丁寧な口調の女性の声で、私は早口に言う。

『どう言う用件？』

「いえ、一つ情報提供をと思つてご連絡をさせて頂いたしだいです」

『私に貸しても作りたいの？』

「いえいえ、まさかそんなつもりはありませんわ。どうしてもあの子が欲しいので、私から進んで協力させていただけたいのです」

『……そこまであの子が欲しいの？』

「ええ、出来れば欲しいです」

私がそう言うのと、少し間を置いて返つて来る。

『いいわ。教えて』

私はすぐに早口で伝える。

「ええ、どうやら交渉は決裂しそうです。愉快なお友達を誘つて行くそうですわ」

『そう。人数は？』

「5人ですわね。だけど、武偵ランクで言えばBランク以下の子たちしかいませんけれども……あなたが毒を奪つた風魔の子がいますわ」

『風魔の一党ね。なるほど、他には？』

「ええ、その内1人は特殊捜査研究科の子ですから実質の戦力としては4人になります」

わね。おそらく、その子は支援サポートに徹するでしょう。情報提供としては以上ですわ。何か他に知りたい事は御座いますか？」

私が最後にそう尋ねる。

『ええ、あるわ』

「なんででしょう？」

『どうやって情報を掴んだのかしら？ 盗聴とうちようだけじゃないのは確かでしょう』

違和感を感じたのか夾竹桃は聞いてくる。

まあ、そうだろうね。

だけど夾竹桃も私のやり口は分かっているはず。

「いつも通りのやり方ですわ。誰かに成り代わって聞いた、ただそれだけです」

『それにしても随分と具体的ね。まるで実際にその場において、聞いて来たような口振り。』

あなた、理子と同じで武偵の中に——』

「……消しますよ」

別に武偵の中にいる事が知られても、問題は無い。

顔も声も違うんだから。

だけど、このままだと余計な事まで聞いてきそうだったからそこで釘を刺した。

『……………』

「すみません。そのまま勢いで余計な事を聞いてきそうなのでしたから」
『……いいえ、悪かったわ』

「いえいえ、誰しも間違いはあるものですから。それでは、ごきげんよう」
最後にそう言つて私はそのまま電話を切つた。

雨の中を、歩く。

雨音を聞きながらも、これからキンジと神崎をどうするかを考えてる内に女子寮に帰つて来た。

私は女子寮の玄関口で、傘を閉じて入ろうとした所で珍しい人物を発見した。

「あ、レキさん。今日の事件、お疲れー」

私は笑顔でミントグリーンンのショートヘアをしたウルスの子——レキに話しかける。

この子、反応少なくて楽しくないんだよね。

今のお疲れ様についても、何も反応しない。

私は溜息を吐いて、彼女の横を通り過ぎる。

「あなたは危険です」

通り過ぎてから突然にそんな事を言われた。

「一体どうしたの？ 私、私が危険つて……」

振り返りもせず聞く。

何も証拠は無い。

なのにこの子も神崎と同じで点と点を線で結びつけてくる。

「あなたは、災わざわいをもたらす存在です」

「誰がそう言ったの？」

「——『風』が、そう言っています」

……風。

確か、お父さんの話によると彼女は璃璃色金りりいろかねを守護してた一族。

星伽と同じような役目を持つて話だったね。

そして、イロカネは心と結び付く金属。

彼女はそのイロカネの声を聞く事が出来るようだ。

——『イロカネの導き』か。

「もう、レキさん。冗談も大概にしなよ」

私は茶化すように言うけど、

「冗談ではありません」

私の事を黒だと確信して返してくる。

何も疑っていない。

私が危険な存在だと確かに思ってる。

面倒な人形だね。

この様子だと、どこかで邪魔になりそう。

あんまりこの姿でしたくはないけど……

消そう。

スリーブガンの要領で左腕から緋色のメスを取り出し、右手には携帯してる劇薬の注射器を握る。

さすがにここで血を撒き散らす訳にはいかない。

ピリリリリ!

だけど、その瞬間に電話が掛かって来る。

すぐにどちらも仕舞って、私は電話にでる。

「はい」

『ジル君、出来れば彼女を殺めるのは待ってくれないかな?』

お父さんがまるで見えてるかのようあやに語りかけて来た。

「うん、どうしたのお父さん?」

『ウルスの子がいなくなれば、少し問題が出てくる。僕としてはあまり好ましくない』

お父さんがそう言うなら仕方ない。

私としては、気に入らないけど。

「分かった……」

『踏みとどまってくれて嬉しいよ。心配しなくても、武偵にいたる間に彼女が襲ってくる可能性はないだろう』

なら別にいいんだけどね。

それに、彼女は神崎と同じく独りだから……さつきみたいに「危険だ」と言っても誰も信じないだろう。

「うん、分かった。それじゃあねお父さん、おやすみ」

『ああ、おやすみ』

それだけ言って電話を切った。

「それじゃあ、レキさんもおやすみ」

私は振り返って、レキさんに向かって笑顔で言う。

そのまま彼女は何も言わず、私は背を向けて自分の部屋へと歩き出す。

——邪魔なイロカネの人形だ。

31：嵐の前の静けさ

爽竹桃と理子が動き出した翌日の朝――

私はキンジの部屋へと、来ていた。

神崎と結び付けるためなんだけどね。

様子を見に来たって言うのもある。

「不機嫌そうだね、キンジ」

「当たり前だ」

私がベランダから来たのに突っ込みもせず、部屋に入れたキンジに私が尋ねると、キンジはそんな風に返してきた。

いつもよりも不機嫌そうにムスツとした顔をしてる。

まあ、他人に勝手に自分の事情を大したこと無いと決めつけられればそんな風に不機嫌にもなるだろうね。

「ゴメン、分かかって聞いたよ。だけど、あんまり神崎さんを責めてあげるのはやめてあげてね？」

「……随分とアリアの肩を持つんだな」

「そうじゃないよ。ただ、私も知っちゃったからね。彼女なりの事情って言うのを……」
「そう言えば、お前は知ってるんだったな。あいつの事情って何だよ？」

「調べてないの？ H家とか、彼女が言ってた……捕まった『武偵殺し』が真犯人じゃないって言う事について」

「昨日の今日だぞ？ 事件の報告とかもあってそう簡単に調べられなかった」

一応、調べようとはしたんだ。

少しは前向きになってるのかな？

そうだと良いけど、それでもまだまだ消極的な方だね。

「そっか……本人から許可を貰ってないから、事情については本人から聞くと良いよ。

神崎さんも、キンジに話したい事があるみたいだし」

「俺としては遠慮したいんだが？」

やっぱり、そう返すだろうね。

だけどキンジは、神崎の事が心の中のとどこかで気になってもいるだろうね。

何で自分たちを誘うのか、その理由を聞いてないし。

私がお前を言う前に、キンジは一つ息を吐いて――

「……分かったよ。お前がそう言うのならな」

そう言った。

これで取りあえずは安心。

あとは、神崎さんとキンジがまたすれ違いを起さなければ……それはないか。性格的に見て、あの2人が言い争わない確率は低い。

だけど……好きなだけぶつかり合えばいいよ。

その方がきつと、キンジ達には合ってる。お互いの事をよく知れるだろうからね。

「取りあえず学校に行こう。もうすぐバスが来る」

「そうだね。よければ私がまた送って行くけど?」

「いや、いい……お前に借りを作り過ぎると怖いからな……」

「なんだ、残念。それじゃあ、学校前のバス停近くで待つてるよ」

私は最後にキンジに向かってそう言っ、部屋を出てベランダから飛び降りた。

◆ ◆ ◆

ベランダから飛び降りた霧を見送って、俺はすぐに学校へ行く支度をした。

だが……正直な話、昨日のバスジャックの後にアリアとは喧嘩別れみたいな形になってしまってる。

だから顔を合わせずらい。

何より、あいつは俺の辞める事情を知らないクセに勝手に大した事がないと決めつけた。

それが一番に腹立たしかった。

家族を、俺の尊敬してる人の死が何でもないように言われたような気がしたから。

それでも昨日、霧がアリアに掴みかかろうとした俺を止めてくれなかったら危なかったかもしれない。

なんとか踏みとどまったかもしれないが、勢い余って掴むどころか殴ってしまったただらうな……

本当にあいつは何もかも見通してるようだ。

仲介——あの時は仲裁だったが——に入ってくれて助かった。

武偵を辞めるって言うのに、こうなつてくると霧無しで俺は上手くやって行けるんだらうか不安になってくる。

そんな事をぼんやり考えながらも俺は登校する。

昨日にバスジャックされたばかりだが、すぐに通常通りに運行となったバスへと俺は乗り込む。

「よお、キンジ。浮かない顔してんな」

すぐに俺へと気付いた武藤が、いつもと変わらない様子で話しかけてくる。

事件に巻き込まれたって言うのに、切り替えの早い奴だ。

って……武偵にいる奴らが大体そうか。

「そうでもなきや、武偵はやって行けない。」

「悪かったな、朝から辛気臭い顔してて」

「俺は返しながらも武藤の隣にある席へと座る。」

「この時間帯はよく混むのだが、珍しく空いてる」

「誰もそこまで言ってるねえ……ってどつちにしろ意味はほとんど同じか」

「自分で言った事に呆れるように武藤は息を吐いた。」

「昨日は、助かったぜ。ありがとな」

「いきなり何だよ気持ち悪い」

「武藤らしくない言い方に俺は思わずそう返した。」

「な!? お前、ひでえな……せつかくこの武藤さまが感謝してやってるって言うのに」

「感謝される程の事はしてない。武偵憲章1条を守った……それだけだ」

「それに、霧が言わなかったら俺は本気を出さず、誰か犠牲者を出したかもしれないんだ。」

「自分勝手な理由で見捨てようとしたも同然だ。」

「本当に心から感謝されるようなことはしていない。」

「あー、でもよ。確かお前、本気出すの嫌がってたよな?」

「そうだな……霧に言われるまで、出す気は無かった」

「また白野か、本当にいいコンビだなお前ら」

武藤の言う通り、そうなんだろうな。

「だけど」本当の俺、じゃあ、あいつとは釣り合わないような気がするんだよな。

「まあな……」

それでも、誇らしく思う。

「なんだよ、結局本命は白野か？」

「お前こそ何だよ本命って」

いきなり言っただけ来た武藤に俺はそう返す。

このパターンはアレだ、俺の苦手なパターンの話題だ。

「とぼけるのか？ 白野や星伽さんだけじゃなくて、神崎さんにまで手を出したクセに」

「意味が分からん。手を出すとどう言うか、関わって来るのは向こうの方なんだけどな」

「チツ、これだからリア充は……」

武藤は俺に向かって、舌打ちしやがる。

何で俺の周りには変な事を言う奴しかいないんだ。

——キンジは察しが悪過ぎる。

唐突に頭の中で霧の言葉が反響する。

察しが悪い、か……俺に何をどう察せと言うんだ。

そんな事を考えてる内に、武偵高の一般校区前のバス停へと到着した。バスを降りるとすぐに霧と、

（——アリア）

あいつがいた。

知り合つて数日しか経つてないが……いつもの強気そうな顔じゃなくて、しおらしそうな顔をしてる。

そんな女の子っぽいアリアを見るのが逆に違和感だが……

どうやら、様子を見るに話があるつて言うのは本当らしい。

「あー、おはよう」

「ええ……おはよう」

どんな風に声を掛けたものかと思つて適当に挨拶をしたら、アリアも返してきた。が、それ以上は続かない。

昨日は気まずいまま別れたからな、なんて声を掛けていいか分からん。

俺としては不機嫌さ残るが、昨日の事は忘れることにした。

確かにあの時はムカついたが、あんまりネチネチ根に持つのは男らしくないからな。

「はいはい、変な空気流してないでさつさと行こうね。話なら歩きながらでも出来るで

しよっ？」

霧が言いながら俺とアリアの背中を押す。

それで、お互いに歩き始めて霧も俺の隣に並んで歩くが……沈黙は保ったまま。周りの生徒も、様子がおかしい俺達を見てヒソヒソ話をしてる。

おい、どうしろってんだよこの状況。

そんな時だった——

「昨日は、悪かったわね」

やけくそ気味に沈黙を破るように、いつもの調子でアリアがそう言ってくる。

「なんだよいきなり」

「謝ってるのよ。昨日、あたしがあんたに向かって言った事に」

意外だな、こいつがああの時の事を気にしてるなんて。

「もういいんだよ。過ぎた事だ。あの時の事は、俺は忘れることにしたんだ」

一応、俺の本心を言っておく。

「それじゃあダメなのよ。あの時、あたしは無責任だったわ。あんたの事情も知らずに

……あんなこと言って」

「待て、それだと俺の辞める事情を知ったって言う事になるぞ」

「あ、あたし独自に調べたのよ！ 決して霧に聞いたとかじゃないわ」

アリアがそう言った瞬間に俺は無意識に霧の方を見る。

こいつ、喋りやがったな。

そんな目をして霧を睨むと、ゴメンと言った表情をしながら手を合わせている。

「そうかよ。だけどさつきも言った通り、俺は忘れることにしたんだ。だからお前も気にするな。それよりもだな、なんで俺達を引き入れたがる理由は結局説明してくれないのか？」

「それは……」

アリアは視線を逸らす。

これまでと同じく話そうとはしない。

が……知る必要は無いと突っぱねた感じじゃなくて、迷ってるようだった。

すぐに意を決心したように、アリアは俺達へと顔を向ける。

「今度の日曜日空いてる？ 霧もよ」

そんな事を突然に言われて、霧と顔を見合わせる。

「日曜日？ 空いてるがどうした？」

「私も空いてるけど？」

「あんたたちに連れて行きたい場所があるの。そこで、説明するわ。集合場所はあとで連絡する」

それだけ言って、アリアは先に教室へと入って行った。

「……まあ、ようやく本人から説明をしてくれるみたいだね」

「みたいだね……」

霧の眩きに同意するように答えながら、俺達も教室へと入って行く。

◆ ◆ ◆

そしてついに来た日曜。

神崎の連絡通りに武偵高近くのモノレールの駅に集合となった。

「ところで、私服でよかったのかな？」

「ここにきて今更かよ」

私の疑問にキンジは呆れて返してきた。

「そう言うキンジは制服でしょ？ もうちよつと私服とか着ないの？」

「防弾・防刃性の服が割と高いんだよ」

キンジは私から目を逸らしながらも答える。

今の私は長ジーンズに、薄手のシャツにその上に赤と黒の半袖のチェックシャツを着てる。

まあ、割と男性っぽい恰好だけど……こっちの方が動きやすい。

「お前の私服って、何か新鮮だな」

「武偵にしていると私服で出かけること自体が少ないからね」

「それってどこに帯銃とかしてるんだよ」

「ちゃんとあるでしょ？ 腰のベルトに」

私は上着を少し上げて、腰周りを見せる。

ベルトタイプのホルスターにいつもの銃と予備の弾倉マガジン、それから武偵に支給されてる手錠。

ちなみに後ろ腰には革製の鞆に収まった刃物もある。

「今じゃ、そう言うのもあるんだな……」

「武偵だったら割と安めだよ」

「いや、俺はそう言うのはいい。そもそも金欠だしな」

「その様子だとあんまり任務クエストを受けてないね……理由は分かるけど」

私が呆れたように言うと、キンジは「うぐ」と唸うなった。

まあ、そこら辺の事はしつこく言わない。

鬱陶しいと思われるだろうし。

「待たせたわね」

どうやら、誘った人がようやく来たようである。

声のする方を振り返ると、そこには武偵高では見掛けない姿の神崎がいた。

ピンク柄の清楚な感じをさせる薄いワンピースに、あの踵かかとの高いサンダルみたいなのは

……確かミユールって言う物だったかな？

それを履いている。

そんないつもと違う神崎にキンジは少し驚いてる。

「それじゃあ行きましょ」

物静かに神崎が言つて先に歩いて行き、私とキンジは顔を見合せながらもその後ろをついて行く。

そのまま神崎を追い掛けるようにしていくつもの電車を乗り継ぎ、あらかじめメールで聞かされていた新宿へと辿り着いた。

ここまで会話らしい会話は無し、キンジも気になつてゐただけ……目的地はもうすぐだと思つて、それまでは聞かない様子だね。

そして見えて来た建物は――

「新宿警察署？」

キンジが疑問を覚えるようにして、言う。

そんなキンジに神崎は悲痛そうに答える。

「そうよ。ここに――あたしのママがいるの」

それから面会の手続きを済ませて、面会室へと案内される。

念のために武器は預けられた。

まあ、そりや武偵とは言え……肉親が絡めば妙な真似をしないと限らないだろうからね。

アクリル板越しに2人の監視役と、もう1人女性が現れた。

神崎の面影があるその人は私はもちろん知ってる。

私が一方的に知ってるだけなんだけどね。

神崎 かなえ——私の隣にいるホームズの4世の母親。

私とキンジに気付いた瞬間に神崎の母親は、少し驚いたような顔をして——

「まあ、アリアのお友達に彼氏さん？」

「……ちがつ！」

「そうですね」

「ちよつと、霧！」「おい、霧！」

神崎の母親の『彼氏』の部分を否定する時も同じ、私の肯定を否定する時も同じタイミングで神崎とキンジは言ってくる。

そんな様子に神崎の母親は、クスクスと笑う。

「お若いですね。母親とは思えませんよ……てつきりお姉さんかと」

「あらあら、嬉しい事を……あ、それはそうと初めまして。アリアの母親の——神崎か

なえと申します」

「どうも、神崎さんと同じクラスの白野 霧と申します。私の隣にいる男性も同じくクラスメイトの遠山 キンジです」

「ど、どうも」

私ににこやかに紹介されて、キンジは静かに会釈する。

「ふふ、初めまして。お友達を作るのがヘタなアリアがお友達を2人を作るなんて、母親としてこんなに嬉しい事はないわ。うちの子と付き合うのは大変でしょう？」

「そうですねー。意地を張つてると言うか、何と言いますか……なかなか自分勝手な——」

私が神崎の母親と早くも打ち解けると、その娘がわざとらしく咳払いして、
「ごほん……霧。面会時間が3分しかないの、あんまり談笑しないで貰える？」

私を睨みながらそう言ってくる。

余計な事を言わないで、と言った感じに。

だけど事実なんだから仕方ない。

私は、はいはいと言わんばかりに手を振って、黙る。

「ママ、手短に話すわ。私の隣にいる霧はともかく、こっちのバカ面は『武偵殺し』の被害者の1人よ。先週、チャリジャックなんて言う珍しい事件に遭つてるわ」

「……まあ、それは大変でしたわね……」

本当に心配するように、神崎の母親は表情を固くした。

バカ面と言われて、キンジはキンジで神崎を呆れた目で見る。

「それと、つい最近にはバスジャックにもあったわ。ヤツの活動はここ最近に活発になつてる。きつと、もう一度動くはずよ。もう少しで尻尾も掴めるはず。あたしは狙い通りに『武偵殺し』を逮捕することに尽力するわ。そうすればママの864年の懲役も742年まで減刑される。判決が出る前にも間に合わせてみせる。だから、安心して」
神崎が言った年数にキンジは目を丸くする。

864年——私の言ったキーワードの年数と一致する事に当然気付いただろうね。

「ママをスケープゴートにした『イ・ウー』の連中も全員、ここにぶち込んでやるから……」

「アリア……焦り過ぎよ。そうは言うけど、あなたは『パートナー』を……仲間を見つけ
る事が出来たの?」

「それは、まだよ」

そう言い淀みながらも、神崎はキンジをチラリと見る。

その視線にキンジは気付いてない。

神崎と、彼女の母親との会話に聞き入っている。

そんな神崎の様子に母親である彼女は気付いたのか、少し安心したような顔をする。「そう。アリア、あなたの性格は遺伝性のモノだけど……あなたの性格を理解し、協力してくれる人がいなければその能力を十全には発揮できないわ。あなたは意地を張り過ぎなのよ。少しは自分に素直になる事を覚えなさい。そうすれば、きつと助けになつてくれる人も増えるはずよ」

どこか厳しそうに、だけど諭すように神崎の母親は助言する。

さすがは家族だけあつてちゃんと神崎の事を理解してるみたいだね。

「焦り過ぎてはダメよ。あなたがどれだけ転んで、立ち上がる子でも……母親として、あんまり傷ついて欲しくない。日本には『急がば回れ』と言う諺ことわざがあるわ。遠回りに見えるような事でも、一番の近道に繋がる事もあるのよ。今のあなたは最短で行こうとして、実は遠回りしてるのかもしれないわ」

「でも……」

「安心して、私の裁判は弁護士の方が頑張つて時間を引き伸ばしているわ。だから、焦らないで仲間と一緒に歩みなさい。一人で先走つてはダメ」

神崎を心配するように、母親は言う。

「もうすぐ面会終了だ」

監視役の1人から告げられて、神崎は早口になる。

「本当はこんな事じゃなくて、色々話したかった！ 学校の事、あたしの戦妹アミカのこと！」
「ええ、分かってるわ。だけどゴメンなさい。わたしも聞いてあげたいけれど、それは叶いそうにないわ。母親としていけない事ね……」

「ママは、悪くない！ 悪いのは『イ・ウー』の連中よ！ だから自分が悪いみたいな事言わないで！」

「ありがとう、アリア。白野さん、遠山さん……厚かましいお願いではありませんが母親としてお願いします。どうかアリアを——」

「……時間だ」

さすがに面会の規定を破る訳には行かないのか、監視役の人が少し間を空けてから告げて、神崎の母親を連れ出す。

「連れださないで、まだママが何か言おうとしてるでしょー！」

神崎がそう叫ぶけど、監視員はそのまま無視して連れ出す。

「いいのよアリア……お2人とも、アリアを——どうかアリアの助けになつてあげて下さー！」

最後にそう言って、神崎の母親は扉の向こうへと……消えた。

新宿警察署を出て、曇り空。

まるで神崎の心を映してる感じだね。

キンジは、そんな神崎に声を掛けられずにいる。

「これが、あんたが知りたがってた……あたしの事情よ」

神崎は私とキンジに背を向けたまま、歩きながらそう言う。

キンジはすぐに尋ねた。

「……なんで言わなかった？」

「同情で気を引けつて言うの？ そんなやり方で協力して貰うよりも、あたしの身勝手に巻き込んだ形の方がマシよ」

へー、意外に考えてたんだね。

確かに同情で気は引けても、協力をして貰えるかは分からない。

世の中、お人好しばかりじゃないってことぐらいは彼女も分かっているんだろね。

だったら無理矢理引き込んで、自分に負担が掛かる形で振り回して……協力させる。

そうして危なくなれば、引き離せばいい。

使い捨てみたいな形だけど、そうすれば事情を話さずに協力させる事は出来る。

焦るあまりにパートナーを探す事じゃなくて、そういう手段に出たって言う所だろう

ね。

多分、『パートナー』じゃなくてもドレイって言い方してたのも、そう言うこと。

相手の負担を減らす事と同時に、駒だと自分に言い聞かせてた。

神崎の母親が言つてた通り、最短距離で行こうとして彼女は遠回りをしてた。

まあ、どれもこれも私の予想なんだけど……大体は合ってるだろうね。

キンジは神崎の言葉に何も言えない。

ついに歩みを止めて、顔を伏せる。

肩を振るわせて、拳を握り、彼女の足元に雫しずくが落ちる。

雨は降つてない。

「アリア……」

「泣いてなんかないわ。目にゴミが入っただけよ」

キンジが声を掛けた直後に、怒つたように下手くそな言い訳を言う。

「泣いてなんかない……泣いて、ない……!」

雨と一緒に、

「う……くっ……うわああああああ!」

神崎は泣きだした。

彼女に近づこうとしたキンジの肩を持って、私は首を振る。

どうせキンジには掛ける言葉なんかない。

下手に言葉を掛けるよりも、こう言う場合はそつとしておくのが一番。

通りかかる人に注目されながらも、気にせずに彼女は泣く。

「ママあー……いー……うわあああああああ……いー！」

子供みたいに彼女は泣く。

その声は遠く響いて、私の胸にも声の振動が来る。

と言つても……私の胸には何の感情も湧かないし、響かないんだけどね。

ただ心の中で私は――

囁わらつてるよ。

神崎は一人にして欲しいと言つてきたので、私達は新宿駅で別れた。

私もキンジに「これでお互いの事情は知った。どうしたいかは自分で考えなよ」と、それから買い物に行くと言つていつもの調子で言つて別れた。

雨のおかげで服が肌に着く。

天気予報と言うか、天気のことを気にしておけば良かったかな？

まあ、雨は好きだから別にいいんだけどね。

そんな中……ドクンと、私の血流が変化する。

いつものが、来た。

急いで帰つても準備できるかどうか……微妙な所だね。

私は通りかかった店のガラスを見て、映る自分の姿を見る。
今の所、外見的变化は見られない。

一応は片腕で顔に掛かる雨を防ぎながら、走って行く。

「よお、お嬢さん。一人かい」

私の行く手を阻むように金髪の、黒いフードを被った男が現れる。

「おほ、上玉じゃん。雨の中寒そうだな、俺達と一緒に温まる事でもしないか？」

そう言いながら、他の男が五人ほど現れる。

雨を防ぐために誰もかれもがフードを被り、愉快そうに笑いながら、私を逃がさないように前後を塞ぐ。

またしても分かり易いぐらいつまらない人たちが出てきた。

あんまり短絡的にバラしたくはない。

「ナンパ？ 先に言っておくけど、私は武偵だよ？」

そう言いながら、私は腰のホルスターに下がってる得物えものを見せる。

「へえー、それは大変だ。安易に銃なんて抜いて良いのかな？」

金髪フードはそう言う。

後ろの方から銃をコッキングする音が聞こえる。

「私よりも先に、お兄さんたちも随分と安易に銃なんて抜くんだね」

私が言いながら少し後ろを見れば『USSR トカレフ』を1人が持つてる。おそらくはコピー銃。

だけどもあ、あれは粗悪品の方じゃなくてちゃんとした方っぽいね。

武偵崩れみたいな奴もいるから、きつとどこからか流れてるんだろうね。

「ちなみに俺らのは防弾の服じゃない。撃たれどころが悪かったら死ぬだろうな」

そう言つて黒フード達は私に近づいてくる。

なるほどね。

武偵法9条を盾にした感じか。

私はすぐに左の路地へと逃げ込む。

だけど、すぐに行き止まりに気付く。

まあ……上に逃げればいいんだけどね。

もう間に合わないし、追い込まれたフリをしておこう。

「おー大変だ。怖いお兄さんに追い込まれちゃったぞー」

「マジで外道だなー、俺ら」

金髪フードに同意するように仲間の1人がそう言つと、声を出して笑い出す。

おそらくこれを見越して、私の前後を遮さかったんだろうね。

私は悔しそうに怯えたフリをして、腰のホルスターを取つて地面へと落とすように置

き、両手を上げる。

「随分と物分かりが良いんだな。そう言うの好きだよ、俺」

言いながら段々と近づいてくる。

いいよ……もつと近づいて。

「きつと君も楽しめるぜ。それに、時間なんてあつという間だからな」

そうだね……すぐに終わるよ。

もうすぐで彼らが私に触れる。

そして――

さようなら。

ザーツと、雨の音が支配する。

私の手には緋色のメス。

そして私の後ろには喉を切られて死んだ、さっきのフード男たち。

血が着いたのは私の手だけ、それもすぐに雨で流れ落ちる。

だから雨の日は好きなんだよね。

血が着いても――流れるから。

すぐに私のベルトタイプホルスターを拾って、何事も無かったかのように路地を出る。

周りに見てる人は、誰もいない。

通りかかっている人も、その路地で人が死んでるなんて誰も思わないだろう。

私は心配を消すように雨の中を歩く。

そして、電話が掛かって来る。

いつもの調子で、私は電話に出る。

「はい、白野です」

『あ、キーちゃん。オルメスとキンジの様子はどうか?』

理子だった。

「いい感じだよ。お互いに気になってるみたいだからね。充分にお膳立てはしたよ」

『そっか、じゃあそろそろ勝負を仕掛けるよ』

「うん、頑張ってるね。って言ってもどうするか知らないけどね」

『さつき、ロンドン武偵局から命令が来たらしい。あんなんでもSランク武偵だからね。優秀な人材を外国に置いておくのは惜しいんだろう』

真剣な口調で理子が言う。

つまり、帰還命令なんだろうね。

受けるか受けないかは本人の自由かもしれないし、強制かもしれない。

どっちにしても彼女は帰るんだろうね。

キンジは前向きじゃない。

神崎は時間が無いことから考えて、そんなキンジの返答を待っている暇はないだろう。

「と言う事は……」

『ハイジャックで決着を着ける』

「大まかな筋書き通りではあるね。一応、メッセージにはなってる」

『あとはキンジを誘い出して、それで終わりだ』

「HSSのキンジだったら一筋縄じゃ行かないよ？ だから、殺す気でやっても良いよ」

『いいの？ お姉ちゃん、気に入ってるんじゃない？……』

さつきとは一転して、理子の口調が穏やかなものに変わる。

「別に心配しなくても良いよ。きつと、それぐらいの方がちようど良い……それに、神崎以外は死ななければいいんだよ」

『分かった』

「うん。応援してるねー」

そう言って電話を切った。

どういう結果になるか楽しみだ。

雨の中、帰りながら私はそう思う。

32：フォーリング・ダウン

この間の面会から別れてからの週明け。

いつも通りに一般授業が始まる。

が、俺の右隣にはいるはずの人物が来ていない。

言うまでも無くアリアだ。

——これでお互いの事情は知った。どうしたいかは自分で考えなよ。

霧を見ながら、日曜でのあいつの別れ際のセリフを思い出す。

(どうしたいか……か)

俺は武偵を辞めたい。

それこそ、あんな面倒そうな事に首を突っ込むのはごめんだ。

——見捨てるなんて器用な事は出来ないでしょ？

なのに、俺は霧の言ったことが気になっている。

どこか引つ掛かるような感じだ。

そんな状態で授業に集中できる訳もなく、気付けば探偵科インケスタの授業は終わっていた。

そのまま教室を出ると、携帯にメールの着信が来る。

送信者は、理子だ。

『授業が終わったら、台場のクラブ・エステーラに来てね。調査報告したいから。りんより』

だが、自分の名前の後にハートマークを付けるのはどうなのだろうかと思う。

メールの内容は調査報告か。

正直な話、理子に指定された場所が何となく嫌な予感がするが……

まだまだ『武偵殺し』には分からない事がある。

先週のバスジャックに関連して、理子には引き続き調べて貰っていた。

知るためにも、行くしかないだろう。

ちようど授業が終わった俺は、モノレールに乗り、道に迷いつつも俺は台場のクラブ・

エステーラへと来た。

カフェ……と言うよりは高級なカラオケボックスと言う感じの店だな。

理子のバスパが停めてあった。

本人は間違いなくここにいるだろう。

俺は気が進まないながらも、俺は店の中へと入って行く。

◆ ◆ ◆

どうやら、待ち人が来たみたいだね。

「キークーん」

あたしはそう言つて、キンジへと駆け寄る。

対してキンジはあたしから少し、目を逸らす。

どうやらあたしの服装にメロメロみたい。

相変わらず初心うぶな反応だよー。

「で、報告と言う話だったが？」

「もう、キークんてば本題に入るの早過ぎ！ もう少し落ち着いてりこりんとお話ししようよ」

言いながら強引にキンジの手を引いて、店の奥へと案内する。

そこは2人部屋の個室で、秘密を打ち明けるのには向いてる。

お互いに長椅子に座つてあたしは甘えるようにして言う。

「呼び出したお詫びとして、理子の奢ちかりにして上げる♪ 好きな物を注文しても良いよ」

「そんな事より、早く調査報告をしてくれ」

ホント、キンジはお姉ちゃん……もとい霧ちゃん以外にはあまり良い顔をしないよね。

理子としては複雑な気持ちで、思わず妬けちやうよ。

冗談じゃなくね……

「キーくんってば、あんまり急かす男は嫌われちゃうぞ。アリアとケンカ別れでもしたから不機嫌なの?」

「誰がそんな事言つたんだよ」

「えー、新宿駅で泣いてるアリアとそれを見てるキーちゃんとキーくんを発見したつて他の女子が言つてたよ?」

「……あれは、ケンカ別れとかそんなんじゃない」

「キーくんがアリアの告白をフツて、キーちゃんを選んだとかじゃないの?」

「どうしてそう言う話になる……? おまけにどいつもこいつも、そう言う話しに繋がたがるのか……俺には理解できん」

「女の子はコイバナが好きなんだよ」

あたしは言いながらも、キンジに詰め寄る。

そんなあたしに、キンジは微妙そうな顔をする。

「あまりくっ付くな……暑苦しいだろ」

「いいじゃん、男として嬉しいくせに」

「……勘弁してくれ」

「ふう仕方ないな……キーくんは。それじゃあ『武偵殺し』についてなんだけど——」

あたしが切りだした話しに、ようやくキンジは食いついた。

話のペースはあたしの方へと向いてる。

「その前にあーんするから、食べてくれたら教えてあげる」

またしても微妙そうな顔。

キンジつてば失礼だね、女の子に向かってそんな顔するなんて。

だけど背に腹はかえられないとばかりに、あたしがフォークに刺したモンブランを食べる。

それから教えろとばかりに目で語りかけてくる。

「よくできましたってね。くふ。それじゃあ、お待ちかねの本題だけ……キンジは『可能性事件』って知ってる?」

「『可能性事件』だと?」

「そう、『可能性事件』……同一犯の犯行とみられてる犯行だよ。だけど、証拠と関連性、確証があまりないから違うかもしれない。つまりは、かもしれない事件だね。過去にバイクジャックとカージャックがあったみたいだけど、もう一つ『武偵殺し』が起こしたとみられる事件が警視庁のデータベースにあったんだよねー」

「その事件と、今回のバスジャックやチャリジャックに関係が?」

「いいや。直接的な関係はないよ……ただ、今回の事件も3度目が起こる可能性があるんだよ」

あたしはそう言つて、一度離れたキンジに詰め寄る。

そしてポシエツトから一枚の紙を取り出しながら、一緒に見えるように片手で広げる。

「この事件——『武偵殺し』の仕業しわざじゃ、ないんじゃないかな？」

キンジの目が見開かれて、絶句する。

その紙に書いてある事は、

『2008年12月24日 浦賀沖海難事故 殉職 遠山金一』

キンジのお兄さんの名前。

みるみるキンジの顔は、憎しみに歪んで行く。

確かにお姉ちゃんの言う通りだ。

キンジはいい表情をしてくれる。

「いい、いいよキンジ。その表情」

思わず熱っぽい声をあたしが出すと、キンジはすぐにあたしを見る。

「その“眼”にあたしは惹かれたんだよ。入試の時にも見せてくれたその眼に」

お姉ちゃんの事を抜きにして、本当の事を言う。

だからあたしはお前を選んだ。

「理子……？」

あたしのそんな様子にキンジは不思議そうな目を向ける。
もうお膳立ては充分。

お前が真実に辿り着いた時に、あたしの本当の勝負は始まる。

「キンジい……」

そう言つてあたしは獣のごとくキンジを押し倒した。

下にいるキンジは、そんなあたしに驚いてる。

「ね、もういいでしょ？ イベント回収シーンなんだよ？ ここまでさせて、何も分からないなんて言わせないよ」

そう、お姉ちゃんとおあたしにここまでさせて真実にたどり着かなかつたら無能どころじゃない。

「キンジ、ここは個室だから……あたしに何をしても良いんだよ。あたしとキンジ以外、誰もいない。白雪はS研の合宿、アリアはどうやらロンドン武偵局からの連絡でイギリスに帰っちゃうみたいだからね。今夜の7時には羽田を出発する。だから、あたしと良い事しようよ？」

擦り寄つて、体を密着させて……キンジに囁く。

すると、突然にあたしを物凄い力で押しつける。だけど、どこか優しい。

「全く、とんだイタズラ猫だね」

あたしの顎あごに手を当てながら、キンジは目を真っ直ぐに見てくる。どうやらHSSに堕ちて、気付いたみたいだね。

「少し用事が出来たよ。お嬢さんは家へと帰るんだ。狼が襲ってくる前にね」
相変わらずのキザな言葉を放って、キンジは部屋を飛び出した。

ゲームは始まった。

あたしはすぐにバスパに乗って、キンジよりも先に羽田へと回り込む。

そして、第2ターミナルへと入って……オルメスが乗っている飛行機へと真っ直ぐに進んで行く。

オルメスがネットで予約した便は、あたしに筒抜けだ。

ANA600便・ボーイング737-350、この飛行機で間違いない。

周りの人があたしに目を向けるが、すぐに別へと視線を移してはいるが……何か事件かとあまり騒がれたら困る。

すぐにあたしは、その飛行機に乗ろうとしてるあたしみたいな小柄なアテンダントに話しかける。

「どうもどうも、すみません。武偵ですけどもー」

そう言って荷物を持ったあたしは武偵徽章きしやうを彼女に見せる。

「は、はい！ 一体、どのようなご用件でしょうか？」

新人さんかな？

だとしたら都合がいい。

あたしの言葉にびくびくしながら、そのアテンダントは言葉を返してくる。

「ああ、事件じゃないから安心してください」

「そ、そうですか」

「うん。それでねー、用件としてはこの飛行機にオルメ——神崎・H・アリアと言う武偵がいると思うんですけど」

「少々お待ち下さい」

そう言って彼女はすぐに飛行機へと入って行った。

あたしもその後ろへと続く。

別に、確認を待つ意味はないんだよねー。

飛行機に入った彼女が目的なんだから——

「ん、んーっ!？」

すぐに彼女を羽交い絞めにして、夾ちゃん特製の睡眠薬を嗅がせる。

声を上げようとして体を動かして抵抗してるけど、ものの数秒で寝息に変わる。

「よきフライトを」

そう言つてあたしはすぐに彼女をトイレへと連れて、彼女の服を奪つて着替える。持つて来た変装道具を使って、彼女の顔と同じ特殊メイクのマスクを作り鏡を見ながら顔に張り付ける。

髪型も彼女と同じモノへと変える。

同じ金髪のおかげでカツラを被る手間が省ける。

アテンダントを縛り、声を出せないように布を噛ませ、あたしはトイレを出て解除キーで外からカギを閉める。

そのままアテンダントに成り済みます。

しばらく待つていると、離陸の準備が始まる。

ハッチを閉じようとする、1人の男性が飛び込んでくる。

あたしは目を丸くするフリをして、その男性は武偵徽章を突き付けて来た。

「——武偵だ！ 離陸を中止するんだ！」

全くギリギリになつて来て……ヒヤヒヤしたよ、キンジ。

「お、お客さま!!? 一体、いきなりどう言うこと——」

「説明してる場合じゃない！ 今すぐに離陸を止めてくれ！ 早く!!」

息も絶え絶え、その剣幕に押されるようにあたしは首を縦に振つて、コックピットへと向かう。

「き、機長！ 突然、武偵から離陸停止を言われたのですが……」
すぐにコックピットへと入って、あたしは恐る恐るそう言う。

「何？ こんな時に一体なんだ……しかも離陸を中止しろなどと言っても、このフェーズでは管制塔からしか離陸を止める事は出来ないぞ！」

「わ、私に言われましても——」

「ともかくそんな命令を聞く訳には行かない。大体、どこからも止めろだなんて、命令は聞いてないぞ！ そう伝えろ！」

「は、はいいいいい！」

若っぽく見える厳つい顔の機長に言われて、あたしはすぐに引き返す。

階段を下りてる途中で飛行機が動き出す。

これでもう孤立無援だ。

「あ、あの……だめでした。このフェーズでは管制塔からしか離陸を止める事は出来ないぞ、『どこからも止めろだなんて、命令は聞いてないぞ！』とも言われました」

「クソ——」

「ひっ、撃たないでください！」

あたしの言葉を聞いて、キンジは髪を搔かく。

どうやら切り替えてるみたいだね。

「……神崎・H・アリアと言う人物がここにいる筈だ。案内して欲しい」
「わ、分かりました」

あたしはオルメスが予約した部屋へと案内する。

そして、キンジがオルメスの部屋に入ったところであたしは一礼して去る。

あたしは外を見る。

完全に空の上。

空港からもある程度離れたし、高度もある。

舞台は揃そろった。

あたしはコックピットへと行き、その扉を解除パンプキーでカギを外して中に入る。

「おい、一体どうやって入っ——」

扉の開いた音に気付いて、あたしに声を掛ける副機長をすぐさま銃のグリップで首の後ろを殴り気絶させる。

機長も驚いてる内に夾ちゃん特製の睡眠薬を嗅がせる。

抵抗する間もなく2人は眠った。

ワルサーP99をオートパイロットの計器に向けて放つ。

パン！ パン！

ベルトを外し、機長と副機長の襟首を持つて引き摺りながらコックピットを出る。するとすぐに銃声を聞きつけたキンジが出てくる。

あたしは機長と副機長を捨てるように手を離す。

「武偵だ！ 動くな！」

あたしにベレッタを向けて来たキンジに向かつて、にい、と笑つて胸からガス缶をと
りだし、

「Attention Please. でやがります」

投げた。

シユウウウウー！ と言う音を立てて振り撒かれる煙。

まあ、ただの煙で特に害はない。

「キンジ!? どうしたの!」

そう言つてオルメスも降りて来た。

無害の煙、だけどそんな事を知る筈もないキンジは、顔を青ざめさせて――

「全員部屋に戻つて扉を閉めろ！」

そう指示して、キンジも引き返す。

あたしは逆にコックピットへと歩いて行く。

奴らが部屋に入る前に振り返つて笑みを浮かべてやる。

そして、機内の電気を消す。

あたしはツアオツアオの自動操縦システムの応用で、コックピットに細工をして、リモコンで操作できるようにする。

これであたしは地の利を得た。

あとはオルメスを仕留めた後の脱出経路を確保して、準備は終わり。

………。

仕留めた後の事を考えるのは死亡フラグかな……

とにかく脱出手段は確保しておかないとね。

あたしはリモコンで操作し、ベルト着用サインを使ってお誘いをする。

アテンダントの服から武偵高の服へと着替えて1階のバーへと行き、あたしは1つのカクテルを見つける。

ブルー・ラグーン……フランスのパリで作られた青いカクテル。

景気付けにはいいよね。

イスに座って飲みながら、懐中時計を模したロケットペンダントを開いて見る。

そこには1枚の写真。

2年前に、あたしがお姉ちゃんにねだって一緒に撮って貰った写真。

浴衣姿のお姉ちゃんと、あたしが笑顔で写ってる。

こう言う感傷って、武偵高のあたしだと似合わないだろうな！。
我ながらそう思うよ。

死亡フラグあんまり立てるのも良くないから、感傷はこの程度にしておこう。

”お客さん”が来ちやっみたいだし。

あたしはカクテル飲みながら客人に振り向き、

「随分とキレイに引つ掛かってくれやがりましたねー」

言いながらメイクを剥がしてその素顔を晒す。

「お前は……理子!？」

「Bon soir・キンジ、さっきぶりだねー」

カクテルを飲み干して、驚いてるキンジに向かってウインクして上げる。

「お前が、お前が『武偵殺し』だって言うのか!？」

「この状況からしてそれ以外に何が分かるっていうのかなー、キーくん」

「あんたが……『武偵殺し』って言うのは意外だけど、どっちにしろあたしのやる事に變

わりはないわ!」

少しショックを受けた様子だけど、切り替えが早いのか、ようやく仇かたきを見つけたと

言った感じにオルメスは銃を構えて言ってくる。

「まあ、落ち着きなよ。焦ると良いことは無いよー、短気は損気だよ……」オルメス」

あたしが言うと、オルメスは目を見開いて驚く。

自分のミドルネームのフランス語読みくらい、分かるか。

キンジは逆にマヌケな顔してるけど……

オルメスはあたしに尋ねる。

「あんた……一体、何者よ」

にやりと笑って、稲光があたしの顔を照らすと同時に教えてやる。

「理子・峰・リュパン4世。フランスの大怪盗の曾孫ひまごだよ」

「リュパン……だと？」

「そうだよー、キーくん。あたしは正真正銘の直系……一人娘だよ」

イスから降りて、あたしはご丁寧に話してやる。

「でもねー、だーれも理子の事を個人として見てくれない。どの使用人も、あたしの家の事を知ってる近所の連中も、リュパンの曾孫と言う色眼鏡でしか見ない。お前と一緒にだよオルメス」

「……………」

「あたしとお前は同じ世代。つまりは4世だ。名前では呼ばずに4世、4世、4世……そんな風に呼ばれ続ける日々だったよ」

「4世の何が悪いって言うのよ……！」

「何が悪い？ お前は名前じゃなくて記号で呼ばれて満足するのか？ 家名ばかり先に走って行って、個人として見られない。お前もそうだろう、”欠陥品”」

これって、ある意味あたしにとっては自虐みたいな言葉なんだけどね。

あたしの言葉にオルメスは眉を吊り上げる。

「そう言う訳で、あたしは『イ・ウー』に入って力を得た。あたし自身の實力を見せつけて、個人として見られる努力をした。だけど、どれだけ實力をつけても足りなかった……だから考えた。先祖の因縁であるお前に勝てば、少なくともあたしを見てくれる奴がいるんじゃないかってね」

もう見てくれる人はいないから別にいいんだけどね。

これはあくまで建前だ。

本当はブラドから解放されるために、少なくとも有能であることを示すための建前。

だが、そんな事をこいつらに話してやる義理は無い。

なんだか喋り方がお姉ちゃんが挑発する時みたいになってる……影響受けてるな、あたし。

「おい、待ってくれ、一体何の話をしてるんだ……!?! お前が『武偵殺し』だとしても……オルメスって何だよ、『イ・ウー』って何だよ！ それに、俺達を狙った意味は何だ!?!」

「えー、キーくん。H家について結局調べてないの？ 消極的にもほどがあるよー」

「いいから答えろ！」

脅すようにして、キンジは銃を向けてくる。

「うーんとね、最初と2つ目の疑問については、ひ・み・つ♪ 隣にいる子に聞いてみる
といいよ。最後の疑問に答えるなら、あんなものはお遊びだよ。お前たちを結びつける
ための、な」

そのためにお姉ちゃんは、わざわざ骨を折ってくれた。

その身を危険に晒して。

「お遊び、ですって？」

青筋を浮かび上げながら、オルメスの怒気が声に表れる。

「そのとーりだよ。お前の一族には、自分の能力を引き出せるパートナーがそれぞれ付
いていたのは知ってる。そして、パートナー……果ては仲間も見つけられない欠陥品に
勝つても誰も振り向いてくれる訳がない。だから、欠陥品を完成品にするためにお前と
オルメスがくっ付くようお膳立てしてやったんだよ」

「俺とアリアを、お前が巡り合わせたって言うのか……?!」

「そう言うことだよ、キンジ。お前の自転車に爆弾仕掛けて、わっかかりやすいパターン
の電波を流してやったんだ」

「あたしが『武偵殺し』の電波を追っていたのも、気付いてたのね……」

「犯人を追うなら、もう少し上手く追いなよ。まさか、武偵の中に犯人がいるとは思ってなかったみたいだから、無理もない話だろうけどねー。問題はキンジが乗り気じゃなかった事だ。お前が消極的だったからバスジャックで協力させてあげたって言うのにさー。キーちゃんに言われてようやく本気を出すって、どうかと思うよ?」

あたしの言葉にキンジは歯軋りをする。

「まあ、何にしてもキーちゃんには感謝してるよ。あの子のおかげで、お前とオルメスはお互いを協力することが出来たんだからなあ」

ああ、胸が痛い。

まるであたしがお姉ちゃんを利用したみたい。

いや、変わらないか……自ら協力して来たとは言え、あたしはお姉ちゃんを利用したんだ。

「お前……霧は、友達じゃなかったのかよ！ 何もかもお前の計画通りだつて言うのかよ！」

「そうだね、友達だよ。霧も、武偵高にいたみんなも……だけど目的がある以上、利用しない手段はない。それに、計画通りとは行かなかつた。ま、キーくんにはキーちゃんがいたからアリアとくっつききらなかつたのは、当たり前のこと何だろうけどね。だからわざわざ、あたしがやったお兄さんの事も引き合いに出したんだから」

本当にやったのはお姉ちゃんだけどね。

「お前が……、兄さんをやったって言うのか……!?!」

あたしの挑発にキンジは乗って来た。

台場のクラブ・エステーラで見せたような顔をあたしに向けてくる。

「ほら、アリア。パートナーにしたいんだったら、ちゃんと止めてあげるか戦って上げないとマズイよ〜」

流れはこつちにある。

キーくんは相変わらず、人に簡単にノせられるよね。

「そうだ、キーくん。いいこと教えてあげるよ。君のお兄さんはねー、今は理子の恋人なの」

「いい加減にしろ!」

「落ち着きなさいキンジ! 理子のペースにはまってはダメよ!!」

「これが冷静にいられるか!?!」

キンジがベレッタを握る手に力が籠もった瞬間、あたしは見逃さずに髪の中のリモコンを操作する。

飛行機はその体勢を崩して、揺れる。

「Oh la la♪ 大変だ」

そう言ってあたしのワルサーP99の銃弾がキンジの銃を粉碎する。砕ける音と共に、床へと転がって行く。

「ダメだよ、キンジ。今のお前じゃ役には立たない」

そして事実を告げる。

あたしよりも才能があるクセに、全く向き合おうとしない。

ある意味ムカつく話だ。

「もう少し冷静にならないと行けないって——おっと」

言ってる途中にクルリと回って、オルメスの銃口から身体からだを逸らして避ける。

そして、あたしの前には2丁拳銃で肉薄するオルメス。

アルIIカタ戦か。

やってやるよ。

だけど、安易にあたしの銃が1丁だけだと判断したのは間違いだつたな。

2丁目を見せるように抜きながら、もう片方でオルメスの腹を狙う。

だが、すぐにあたしの腕を逸らして自分の銃をあたしに向けてくる。

銃弾を撃ち放ちながらも、格闘するように銃口を相手に向けながらも逸らされると言

う攻防をする。

さつきも言ったように、欠陥品に勝つのは容易だ。

それじゃあ意味がない。

だから、あたしはオルメスの、武偵の流儀に合わせてやる。

さっさと本気を出せ、キンジ。

ガチン！

弾切れを起こしたオルメスが、あたしの両腕を両脇に挟もうと迫って来る。

「……………」

だけど、その前にあたしは自らオルメスに突っ込んで、肩による体当たりをする。

見事に決まってオルメスはそのまま飛んで行くけど、倒れたりはずせずに受け身を取った。

さすがの戦闘センスだ。あたしの攻撃に反応して自ら後ろに跳んだ。

決まったのは決まったけど……浅い。

すぐに銃を構えて追撃しようとすると、オルメスはその前に銃を捨てて刀を構えて、銃の射線上の障害物にした。

おかげで放った銃弾が金属音と共に何発か防がれる。

ガチンと言う音と共にあたしも弾切れする。

当たったのは2、3発程度か。

十分に耐えられるだろう。

フを構えてあたしに警告する。

打たれ強いねー、キンジ。

それとこの状況……離せばすぐにオルメスに反撃されるだろう。

普通ならあたしがこの状況を打開するの無理だ。普通ならね。

「くふふ、それにしても奇遇だよねアリア。家柄も、容姿も似ていて、2つ名まで一緒なんてね」

これは内緒だけど、あたしと同じ欠陥品で言う部分もね。

「この状況で何を言ってるのよ……あんた」

あたしの言うことが理解できてないオルメスは、そう言ってくる。

「あたしもね、同じ2つ名を持つてるよ。『双剣^カ双銃^ドの理子』……そして、お前は何も知らない」

お前の中に眠っているモノ、お前の母親が冤罪を着せられた理由、お前の近くに居る脅威に。

髪を操作して、タクティカルナイフを抜く。

あたしの髪が動いてる事に、キンジもオルメスも驚いている。

まるでしなる鞭のようにナイフを握った髪が、オルメスの顔に襲い掛かる。

だけど、一度目はあたしに掴まれながらも避けた。

うん……慢心して失敗したら何も笑えない。
ゆつくりと、歩みを進めてあいづらが2人である時間を作つてやる。

保険を仕掛けて、あたしはオルメスの部屋の前へと辿り着く。

髪を操作して、カギ穴に合うようにして開ける。

そのまま腕で扉を開けるように、髪で押す。

「くふふ、あの世にハッピーエンドの時間ですよーつてね」

すぐに部屋の中に入って視界に見えたのは……キンジ。

そして、その雰囲気や視線が違う。

やはり兄弟だけあってカナちゃんに何となく似てる。

「おー、やっと本気を出したんだねキンジ。りこりん嬉しくて殺しちゃいそうだよ」

「そうすると良い、本気で来なかつたらお前が死ぬ事になる」

キンジの低くも鋭い声と殺気に酔いそう。

「だけど、どれもお姉ちゃんを越えない……誰も殺してないキンジとじゃあレベルが違う。」

う。

「それで……アリアはどうしたの？ その様子だと死んじやつた訳ではないよねー」

「そう言つて、あたしは膨らんでるベッドをナイフを握つた髪で示す。」

「死んだんならもつと取り乱してもいいし、それはそれであたしが困るんだけどね。さて、それはどうだろうな」

そう言つてキンジの視線は僅かにシャワー室を見る。

これは、どっちだ……

あんな分かりやすい反応をする訳がない。

HSSの凄さは、間近で見てる。

だから、どちらかがブラフ。

心理戦か……

「最高だよ、キンジ。これであたしの目的も、達成出来る」

そう言つてあたしはワルサーの狙いをキンジに定めてトリガーを引こうとする。

すると——バツ！ と、キンジはベッドの脇に隠してた酸素ボンベを盾にして、あたしに向かって投げってくる。

銃口の射線上にちょうど当たる位置だ。

撃てばあたしも、キンジも、この部屋に在るであろうオルメスもろともお陀仏だ。

当然、あたしは撃つのを止めて怯んだ。

キンジはその隙を突いて、あたしに向かってバタフライ・ナイフを持つて接近してくる。

「ただど——甘い。」

再び飛行機を操作して、揺らす。

さすがのHSSでも、急激な変化に対応できないのか体勢を崩す。

その瞬間を狙って、キンジに向かって銃弾を放つ。

崩れかけた体勢、迫る銃弾。

普通なら詰みだけど……

ギイイイインツ!!

キンジはナイフで銃弾を——斬った。

さすがだよキンジ。

その事に……敵だけど少し感動していると、キンジはアリアの黒ガバメントをあたしに向けてくる。

「動くな！」

「アリアが今度こそ死んでいいならね！」

今のキンジに銃を向けてる時間は無い、そう言ってあたしはシャワールームに銃を向ける。

キンジはその事に怯みだる様子は見られない。

つまり、本命はベッドにいる！

そう判断して、素早くシャワールームからベッドに銃を向けようとする——
バアン！

頭上正面のキャビネットからオルメスが飛び出て、シルバーモデルのガバメントをあ
たしに向けてくる。

ダブルブラフか!?

そう考える前にあたしが右のワルサーでアリアを狙おうとすると、ワルサーがあたし
の手から2つとも離れる。

ガアン！ ガアン！

響いた銃声は同時、すぐにあたしは切り替えてナイフで2人を狙おうとする前にオル
メスはガバメントを空中に放り、日本刀を抜いて——

「——やあッ!!」

掛け声とともにあたしの髪を切断した。

「……………うっ!」

思わずあたしは呻く。

髪で握っていたナイフが2つ、床へと落ちる。

やられた……………まさかのダブルブラフ。

オルメスは空中でガバメントをキャッチし、

「理子・峰・リュパン4世——」——殺人未遂の現行犯で逮捕するわ！」

キンジ、アリアの順番で言つて、左右からあたしに2つのガバメントを向けてくる。

「へえ、なるほど……ダブルブラフ。なかなかのコンビネーションだよ」

おまけにあたしの銃を弾く時、キンジが右、アリアが左の銃を弾いた。

それもお互いに狙つてない方を弾くなんて……

何だかんだで息びつたりだよね。

あたしは冷静に返す。

「短い期間とは言え一緒に過ごしてたし、お前が仕組んだ事件も霧と彼女と一緒に解決したからな。合わせたくなくても合う」

「それより、そんな余裕そうにしていいのかしら？　もう反撃手段は無いわ」

銃を改めて見せるように、オルメスはキンジのあとに続いて言ってくる。

——反撃手段が無い？

そう判断したのなら……さすがに持ち前の直感も、そこまで万能ではないって言うことだね。

あたしはニヤリと笑つて、

「ばあーか」

そう吐き捨てて、髪の中にある”別のリモコン”を操作する。

ドオオオオオオオオン!!

あたしの後ろにある両脇の壁が爆発する。

「——なにっ!?!」

「きやあああああ!?!」

キンジは驚き、オルメスは悲鳴を上げて壁の破片に巻き込まれる。

2人は怯んで、吹き込んで行く。

あたしもその轟音と爆風に身を屈ませるけど、破片の散弾を浴びた2人程には怯んでいない。

全てが遅く見える。

別にあたしがHSSになった訳じゃなくて、そう錯覚してるだけ。

あたしはすぐに足元のナイフを拾ってキンジの顔に向かって投げ、胸からデリンジャーを取り出してオルメスへと向ける。

破片を腕で防御して、吹き飛びながらもその腕の間からあたしを見ているオルメス。

その眼は驚きと、これから起きるであろう結末が見えてるみたいだった。

「J o u e z s u r」

フランス語で『ゲームオーバー』を意味する言葉を言って、あたしは銃弾を放つ。

そのままオルメスの頭へと向かって行く。

——勝った!!

そう思った時、笑みが深まる。

バスン!

だが、それは防がれた。

キンジの防弾制服の背中に——

痛みに耐えるようにして振り返ったキンジは、あたしのナイフを歯で噛んでいた。

(あいつ——避けてたら間に合わないかと判断して、ナイフの刃を噛んでキャッチしながら来たって言うのか!?)

キンジがとんでもない判断をしたせいで、あたしはオルメスを仕留められなかった事に舌打ちする。

その間にあたしの懐にはキンジが、迫ってる。

防御——!?! 間に合わない!

あたしを投げ飛ばして、傷つけないように組み敷いて腕を捻り上げられる。
結果、あたしはうつ伏せにさせられた。

「残念だけど、今度こそ終わりだ」

やられた……キンジの言う通り今度こそ終わりだ。

保険も使った今、反撃手段は無い。

マズイ、マズイマズイマズイマズイ！

悔しさと焦りが湧きあがって来るが……それ以上に、このまま逮捕されてはダメだ。自ら投降するのと、捕縛されるのとじゃ意味合いが違う。

洗いざらい吐かされるだろう。

そうしたら、お姉ちゃんにも迷惑が掛かる。

でも、いや……反撃手段はなくても”逃走手段”はある。

「くふふ、残念だよキンジ。最後の最後にお前に邪魔されるなんてね」

「お褒めに預かり光栄だよ。お嬢さん」

「だけど……捕まってあげる訳には行かないんだよね」

そう言ってあたしは再び髪の中で遠隔操作をして飛行機を急降下させる。

さつきとは比べ物にならないくらいに飛行機が揺れる。

「何をやってる——うおっ!？」

当然うつ伏せになってる以上、髪の変化に気付いたキンジはそう声を上げるけど、すぐにバランスを崩した。

その隙にあたしは抜け出し、一目散に壊れた扉と壁から部屋を出る。

「バイバイキーンってね」

そう言いながら、一階のバーへと降りてきて……そのバーの片隅にある脱出場所へと

辿り着く。

既に前もって用意は出来てる。

脱出手段が逃走手段に変わるの、誤算だったけど。

.....

「——クソー！」

思わず悪態を吐いて、壁を殴る。

それから壁を背にして逃走しようとする、あたしを追い掛けて来たキンジが近づいてくる。

「どこに行こうって言うんだい、イタズラ猫ちゃん」

「もちろん、外に決まってるよ。だから、あまり近づかない方がよいよ」

「あたしが言うどキンジはあたしが背にしてる壁を見て、粘土状の爆薬が仕掛けてある事に気付いたらしい。」

「ねえ、キンジ。どうせなら『イ・ウー』に來ない？ そうすれば、お兄さんにも会えるし……キンジが知りたい事、何でも分かるよ？」

苦し紛れの勧誘。

当然、そんな誘いにキンジが乗る訳もない。

「いいか、理子。女の子とは言え、さすがの俺も今度兄さんの事を引き合いに出されたら

反射的に武偵法9条に背く事になるかもしれないんだ」

「それは困るな。キーくんには、武偵のままできて貰わないと」

お姉ちゃんの機嫌が悪くなっちゃうよ。

いや……逆かな？

『イ・ウー』につれて行けるって言って、嬉々として攫うかも。

どっちだろう……結構一緒にいるけど何だかんだ言ってあたし、お姉ちゃんの思考ってあんまり読めないんだよね。

「取りあえず、アリアにも伝えておいてよ。いつでも『イ・ウー』は2人を歓迎するってね」

自分の体を抱きしめるようにした瞬間に、爆弾を作動させる。

壁が吹き飛び、あたしは外へと吸い込まれる。

風と雨があたしの体を包み込み、くるりと空中で回って服がパラグライダーへと変化していく。

そのまま遠ざかって行く飛行機。

そして、高度が下がって行くと同時に2発対空ミサイルがあたしの近くを通り抜けて、ANA600便のエンジンを轟音と共に破壊する。

暗い雲の中からも僅かに見えた光。

一体、何のつもりかは分からない。
そんな事はどうでもいいんだ……

暗い海が見えてきて、さらに黒い船体が浮上してくる。

潜水艦であるボストーク号が浮上して、あたしはその甲板の上へと風に揺られながらも着陸する。

パラグライダーになつた服を手繰り寄せて、自分を包み込みながら……あたしはハツチを開けて船内へと梯子はしごを降りて行く。

雨に濡れた髪から滴しずくを垂らしながらも、あたしは通路を歩いて自分の部屋へと戻る途中、

「ど、どうしたんですか理子さん!？」

心配するように白人の女性があたしに近づいてくる。

アリアよりも明るいピンクブロンドに、エメラルドのような瞳。

——リサだ。

「ああ、うん。あたし、負けちゃってね……その帰りだよ」

力無く笑つて、あたしはそう言う。

「そう、なんですか……。リサに何か役に立てる事はありますか?」

「特には無いよ。少し、そつとしておいて」

そう言ってあたしはそのまま通り過ぎた。

自分の部屋へと戻って来て、何も考えずにシャワーを浴びて、気付けば着替えていた。部屋に備えつけられた化粧台の鏡の前へと座る。

負けた……リサに言った言葉が改めて自分の中に響く。

あんだけお膳立てして貰って、お姉ちゃんにもジャンヌ達にも意気込んで言ったクセにこのざま。

「なんで、負けた……」

確かに追い詰めてた。

本気だった。

……なのに、届かなかった。

飛行機内で押し殺してた感情が段々と湧きあがって来る

「あ、は、ははは……ゴメン。負けたよ、師匠」

乾いた笑いをしながら、いない人に詫びをする。

哀しみが、溢れてくる。

こんなんじゃないあ、お姉ちゃんにまた泣き虫理子だなんて言われる。

リリヤにもこんな姿は見せられな——

「へえ、負けたの……4世」

——ッ!?

反射的に顔を上げて、目の前に化粧台の鏡に写ってるのは——ヒルダッ!
イスから立ち上がったって、逃げようとした瞬間、

——バチッツツ!

「ぐう”ッ……!!」

閃光が弾けて、あたしの体に電流が走る。

そのまま、前のめりに倒れる。

「顔を見て逃げ出すなんて、悲しいわ4世」

痺れた首を僅かに動かして見えたヒルダは、嘲笑ちやうしょうの顔をしていた。

一体、いつから……あたしの影に入り込んだ……

「あら、不思議そうな顔ね。あなたとリサが話してる間に、影の中に入り込ませてもらったわ。お前の結果報告を聞きたくてね」

逃げないと……せめて、部屋を出ないと。

痺れながらも、前に進もうとする。

「せつかく私が話してるのだから、最後まで聞きなさい」

「あぐッ——!!」

再び弾ける紫電に、あたしはどうしようも出来ない。

ゴミでも摘むかのようにあたしの襟首を掴んで、ベッドへと放り投げられる。

そのまま仰向けになると、ヒルダの顔が近づいてくる。

「影の中に入って、いざ出ようとしたら……負けたと言う眩きが聞こえたんだけど、その様子から見るに真実みたいね。おほほほほっ！」

耳に響くような高笑い。

手の甲を口元に当てて、嘲る。

「お父様との約束、忘れてはいないでしょうね。ホームズの4世に勝てなければ、お前は檻おとりに戻る」

「う……ぐッ……」

告げられる事実に、視界がぼやけて行く。

ベッドへと乗り込んできて、あたしを組み敷く。

「そう言う訳で、あなたの物は私の物よ。ペットにこんな物は勿体無いでしょう。ヨコハマ郊外にある別荘に預けさせて貰うわ」

あたしの首から下がっていた青い十字架ロザリオが——お母さまの形見が盗られる。

「……あら、これは何かしらね」

「——ッ!?!」

あたしの首に下がってたもう一つのロケットペンダントをヒルダが手に取る。

それだけは――

「や……め、ろ……そいつは……!!」

「――嫌よ」

無慈悲にも言われ、見られた。

「この隣にいる子は誰かしらね……4世の知り合いの中で、今までに見たことない顔
言いながら、あたしに尋ねるように見せてくる。

あたしの、お姉ちゃんだ。

それ以外に何も言いようがない。

だけと言わない。

「答えなさい4世」

絶対に言わない!

「まだそんな目が出るのね。そんな目をしたら――」

バチバチバチ!

「うあああああああッ!!」

「イジメめたくなつちやうでしよう?」

包まれる閃光に、頭が、おかしくなる……

だけど、すぐに閃光は小さくなる。

「ちよつと使い過ぎたわね。まあいいわ、喋りたくなくなるように檻の中で可愛がつて上げる。お前がいなくなつてジャックがどんな顔をするか、楽しみだわ。ほほほほつ！」
あたしから離れて、ヒルダは部屋から啗わいながら去つて行つた。

また、何もかもが奪われる。

電流の痺れが少しマシになつて、起き上がり空虚に隣を見れば……ロケットペンダントが無造作に置かれてる。

どうやら、十字架ロザリオだけで充分と判断して、置いて行つたみたいだ。

手に取つて、見ていると涙が零れおちる。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

握りしめて、あたしは何度も謝る度に涙が止まらない。

怪盗の子孫が全てを盗まれる。

何も笑えない。

もうあたしに帰る場所は、ない。

あんな所に戻りたくはない。

「ゴメンなさい……」

せつかく妹が出来たのに、ろくに会つてない。

「……ゴメンなさい」

何も言わずに勝手に取引して、あたしは何も言わず、その姉は気付いていながら何も聞かず。

「……ゴメン、なさい」

世話になった人達にも返してない。

「……ゴメ、ン……なさい」

生きながら家族に会えない悲しみなんて、もういらぬ。

デリンジャーを頭に当てる。

——さようなら。

◆

妙な胸騒ぎがする。

気になるのは理子の事だ。

理子がハイジャックした飛行機の通信を傍受した時に、神崎と遠山の声が聞こえ、犯

人が機外に逃亡したと言う話を聞いた私はすぐにオルクス戻った。

ちようどイ・ウーも近くの海に接近していたからな。

だから、私はイ・ウーへとこっそり戻って来た。

思わず早歩きになる。

確か、ヤツはブラドと取引をしていた事もそれとなく聞いている。

問題はそこだ。

ジャックに頼らずに、自らの力で自由を得る。

そう言うことだった筈だ。

これを聞いた時に、他の連中の疑念も深くなつた。

理子とジャックの関係はただの師弟関係と、ただ慕っているだけの関係ではないだろう。

「全く、難儀な話だ」

何もかもが上手くいかない。

ひとりそう言いながらも、理子の部屋へと辿り着く。

静かに少しだけ扉を開いて、覗き見る。

「……ゴメン、なさい」

……なんだ、誰に謝っている？

そう思つて声が出た方を見ると、泣いている理子が目に映る。

どうやら、事態は深刻そうだ。

「……ゴメ、ン……なさい」

再びそう言つて、理子はデリンジャーゆつくりと取りだした動作を見て、私はすぐに嫌な予感と共に駆けだした！

「よせ、理子！」

驚いて私を見る。

理子に構わず、そのまま押し倒す形で私はすぐに凍傷にならない程度に理子の手を冷やし、デリンジャーを放させる。

「じゃ、ジャンヌ……どうして？」

涙に顔を濡らしたまま、私に向かってそう言ってくる理子は、ひどくよわよわしい。「どうして私がここにいるかの前に、お前は何をしようとした……？」

怒り交じりに私は聞く。

「別に、死にたかっただけ……」

「……なぜだ？」

「あたしはどうせ、檻に戻るから」

どうでもいいと言った感じに、私の質問に答えて行く。

この様子、既にブラドかヒルダに接触されたか。

「……………」

止めたはいいが、我ながらどう声を掛けていいか分からない。

対して理子は私から顔を横に向けて。

「……………どうして止めたの？」

「それは……友だからだ」

「……漫画の主人公みたいな回答だね」

「だが、事実だ。同じ国の生まれだしな」

そう、理子との関係が始まったのはそう言った単純なモノだ。

同じ国に生まれた誼よしみ、年齢が近い事もあつた。

「ねえ……このまま死んだらダメかな？」

「それを聞いて私が許すと思うか？」

「相変わらずの堅物、だね」

「関係ないだろう。そもそも、死のうとしてる友を見捨てるなど……私の先祖に対する

冒瀆だ」

初代ジャンヌは異端とされたが、それでも最後まで戦った。

そうして抗あつがい、生き残った結果……今の私あつががいる。

影武者など、慕われていなければ用意できるはずもない。

私の家に伝わる話したが、初代ジャンヌの身代わりになろうとした者は多くいたそう
だ。

そして、選ばれた者に対し初代ジャンヌは泣きながらに感謝したと言う。

最初は影武者など用意せず、自らが犠牲になろうとしたのは余談だ。

そう言う意味では、ある意味……堅物なのは遺伝かもしれない。

「じゃあジャンヌは、あたしに生きて檻に戻れって言うの？」

「誰もそんな事は言っていないだろう？」

「だったら、どうすればいいの？ 理子は……もう分かんないよ」

力無く言う理子に、私は溜息を吐く。

念のためにデリンジャーを預かり、私は理子を組み敷いてる体勢から隣へと座る。

さて、策士を呼称してる私だ。

考えろ……理子を生かす方法を。

「そうだな、まず。お前とブラドが取引をしたのは知っている……取引の内容はホーム

ズの4世と勝負し、勝てれば自由。勝てなければその身を差し出す」

「……そうだよ」

どうやら情報に間違いはないようだ。

問題は聞いてない部分だ。

そう、例えば――

「問題は、期間だ。どれだけの間にホームズの4世を倒さなければ行けないのか、聞いてはいないのか？」

「聞いてない。ただ単にホームズの末裔を倒せば初代アルサーヌ・リュパンを越えたと

認めてあたしを解放、出来なければ何も言わずに檻に戻る。それだけだ」

理子からの言葉に私は、目を付けた。

期間が設けられていないのなら、付け入る隙はある。

「理子、よく聞け。チャンスはまだある」

「……どうして？ あたしは負けたんだぞ？」

少し怒り交じりに返してくるが、関係ない。

「取引の内容に期間が設けられていないのなら、全ては奴のさじ加減だ。ブラドはそう頻繁ひんぱんに姿を見せたりはしない。そこに漬け込むんだ」

私の言葉に、少しだけ理子が反応する。

「屁理屈で……押し込めつてこと？」

「そうだ。次にブラドがいつ現れるかは分からない。だからこそ、それまでの間にホームズの4世を倒せば少なくとも取引は成立だ。奴も悪魔……とは違うが、契約にはうるさいだろう。期間を設けなかったと言えば少なからずとも、何も言い返せない筈だ」

「敗北すれば」ではなく、「勝てなければ」と実際に言っていたのなら、これで充分なはずだ。

つまり、何回負けようと最後に勝てれば取引は成立だ。

私の言葉に理子の目に意志が戻って来る。

彼女は体をゆっくり起こす。

「……ジャンヌ、ありがとう」

「お礼を言われる程の事ではない。所詮、屁理屈をこねただけだ」

「でも、ありがとう……」

理子はそう言つて、私を抱きしめて来た。

世話の焼ける友人だ。

「取りあえず、アメリカにでも行つて身を隠せ。ブラドの影響はアメリカまで広がつてはいないだろう。そこで再起をはかるんだ」

「うん……アメリカ旅行だ！ そうと決まったら準備するぞー！」

ベッドから降りて、早くもいつもの調子で言う。

すぐに部屋の中を走つて、宣言通りに準備をしだす。

私は、デリンジャーを戻して何も言わずに部屋を去つて行く。

……それにしても、おかしな話だ。

ジャックはなぜ、理子の取引について何も知らない。

理子が喋らなかつたとしても、探ろうとすればあいつは他人に成り代わつて聞き出せるはずだ。

やはり、理子をただの観察対象としてしか見ていないのか？

そう考えた瞬間にギリ、と私は齒^{はぎし}軋りをする。
相変わらず何も読めない奴だ。

ブラド以上に不明瞭である点が、何よりも腹立たしい。
何にしても、まずは星伽だ。

私は切り替えて、すぐに武偵高へと戻って行く。

33：捕食者と観察者

どうやら、理子は負けたみたいだね。

神崎が飛行機から出て来たのを見てそう分かった。

元々殺すつもりでやってたんだから、生きて帰って来た時点でそう判断出来る。

まあ……HSSのキンジと戦う時点で理子の手には余るんだけどね。

ある意味この結果も当然と言えば当然だけど、正直な話として神崎が死んでキンジが帰って来ると言うのが私の理想だった……

ま、さすがにそこまで都合よくは行かないか。

次は夾竹桃の方か、秘術の取得と間宮 あかりの拉致。

私が武偵高の管轄にいる以上、下手に白野 霧がいなくなつてジャックが代わりに現れたら……まあ、簡単に怪しまれる。

それに、これは夾竹桃の仕事だし、情報提供ぐらいしか出来ないんだよね。

ああ、もどかしいと言うか……私自身の手であの子を連れ去りたい。

と言つても、絶対に欲しいと言うほどそこまで拘こだわる訳でもない。

出来れば欲しいと言うだけであって、手に入らなかつたら手に入らなかつた。

間宮の技術だけでも私にとつては収穫。

それにあの子の心は神崎に向いている。

連れ去つても神崎の教えとか本人に、じゃなくて復讐に心が向かなければ意味がないんだよね。

そう言う意味で、あの子が絶対に欲しいって訳じゃない。

ちよつとでも隙があれば、漬け込むけどね。

強引に連れ去ろうと思えば……あの子の妹や縁者を連れ去るなり人質にするなりで、脅せば……まあ出来ない事は無いけど。

何にしても、夾竹桃には頑張つて貰わないとね。

そのために情報提供を色々として上げたんだから。

失敗したら……別にどうもしないか。

喋つてはいけない事ぐらい、何か分かかってるだろうし。

◆ ◆ ◆
間宮 あかりからメールが来た。

文章は取引に前向きとも言えない「2人きりで話しがしたい」と言うもの。

ジャックの情報で、彼女が私の物になることは限りなく低い。

それに……決裂する前提なら、私も糸を張り巡らせる事が出来る。

間宮 あかりに私の居場所を教え、私はのんびりとシャワーを浴びて待つ。

そろそろ来るころかしら。

考えながら、私はホテルの浴室を出る。

「あら……？」

ホテルの部屋にいたのはあかり、私を見て赤面してる。

「えっちなね。覗きをするのが趣味なの？」

「ち、ちがいますっ！ メールにあったように話しがあつて来たの！ と、とにかく服を着て！」

銃を取りこぼしそうにしながら、あかりは言ってくる。

銃を持ってきて話しがしたいなんて……随分と強引な話なのね。

どうやら、ジャックの言う通り交渉を受ける気は無いわね。

考えながらも、私はクローゼットへと向かい、服を着ながら無駄だと思いつつも話を続ける。

「取引の内容はいたってシンプル。あなたの秘毒『鷹捲』たかまくり、そしてあなた自身の身柄とおまけであなたの妹の身柄。代わりにののかの『符丁毒』の解毒剤を渡す。望むなら……妹はイ・ウーに連れていかないで上げる」

「……秘毒？ 何か誤解してるようだけど、鷹捲は毒じゃない」

毒じゃない？ トボケてるのかしら？

私は盗んだ間宮の秘伝書を見せるように、床へと放り投げる。

「これは……!?!」

「そう。あなた達から盗んだ間宮の秘伝書よ。鷹捲の項目にはこうあった、『千本の矢をすり抜け、一触れで死を打ちこみ、死体に傷が残らない技』とね。そんな手段があるとしたら、現実的に考えて経皮毒けいひどくしかないでしょ？」

左手に手袋を嵌めながら尋ねる。

「鷹捲は、高難度の技。あたしが成功する確率は3分の1……そんな技をあなたが使える訳がない」

「……私ね、知らない毒があるのが嫌なの。私なりのこだわりと言うモノよ」

そう言いながら私は間宮に迫り、そして囁く。

「ねえ、頂戴ちやうだい？ 鷹捲……欲しいのよ、あなたを含めてね」

「……っ！ 渡せない、あなたみたいな犯罪者には渡せない！」

私から素早く離れて、あかりは銃を構えて叫ぶ。

「いいのかしら……復讐ふくしゅうの機会も失うわよ？」

「復讐？ どう言うこと……？」

「——切り裂きジャック」

私の言った名前にあかりは目を見開いた。

そのまま私は続ける。

「あなたの母親を傷つけた張本人。その人物がいる近い場所へとあなたは行けるわ。2年前の復讐が出来るわよ？」

「——ッ?!」

「もし、このチャンスを逃せば……あなたのお友達や妹が傷つく事になるかもしれないわ。母親と同じようにね」

私の言葉に、あかりは揺らいでいる。

「どうやらジャックはあなたの事を気に入っているみたいだし、あり得ない話じゃない。もし……誰も傷つけないのなら私と一緒に来なさい。傷つけられる前にジャックを倒せば、復讐も出来るし、お友達も救う事になるわ」

手を差し伸べて、誘う。

「さあ、来なさい……あかり。あなたは”イ・ウー”に選ばれた」

しばしの間、静かに時間が流れる。

あかりは顔を伏せて、その顔に影が出来る。

私とあかりの間に一匹の蝶が舞い、外へと出て行く。

その瞬間に、あかりは顔上げて――

「――お断りします！　そんな犯罪者がいる危険な所に、あたしは行かない!!」

確かな意志を持って、拒絶した。

浅ましい決断ね。

刹那……あかりは何かを投げる。

その後、激しい閃光と音が部屋を包み込んだ。

私はすぐに部屋の外へと飛び出る。

そして、空中に張り巡らしたT N Kワイヤーツイストナノケブラーへと降り立つ。

ホテルのベランダに躍り出たあかりに向かつて、言つて上げる。

「夾竹桃の花言葉は『危険な愛』……あなたの決断が後悔するように、お友達をじわじわとなぶ翳つてあげる」

月の光と、私が飼つてる蝶が周りを包み込んでる中、宣言する。

「――さあ、遊びましょ」

そう言つて私はあかりに背を向けて、ワイヤーを飛び移りながら降りて行く。

私を呼び止める「待つて！」という言葉が聞こえるけど、素直に待つ訳がないわ。

パァン！　と言う音と共に私の頬を掠める。

進行を止めてその方向を見れば、

「ふむ、もう少し待てばよかったですでござるな」

火縄銃を持っている武偵高の制服と忍び装束を合わせたような姿をした子。

私のワイヤーを利用して逆さ吊りになっている所から、普通にワイヤーの上に乗った。

あの子が、ジャックの話していた風魔の子ね。

私は左手の手袋を外して、問いかける。

「一応、死因の希望は聞いてあげるわ。どっちにしろ毒死だけど、どう言う風に死にたい？」

「老衰して畳の上で大往生と決めているでござるー！」

言いながら2枚の手裏剣が放たれ、私が乗ってるワイヤーを切る。

「あら大変」

落ちながら言い、ガス缶を投げる。

だけど、風魔の子は缶から出てくる煙に怯むことなくその中を突っ込んで降りてくる。

「……な、これは?」

すぐに変化は訪れる。

驚いてる間にも風魔の子の服は段々とボロボロになる。

「空気で毒すると思った？ 残念だけど、間宮の子が後悔するように戦ってるの。そんな面白くない事はしないわ。それに、あなたは風魔の子でしょ？」

「な、なぜ……某の事を知って……」

「残念ながら、あなた達の情報は筒抜けなの。交渉が決裂してこうなる事も既に予期していたわ」

煙管キセルに火をつけながら風魔の子に答えてあげる。

これだからジャックは侮れないのよ。

他人に成り代わり、情報を聞く。

私よりも人の心に入り込む毒のような存在。

だけど、殺人鬼を謳うたってる割には思ったよりも理性的。

ギブアンドテイクの関係では、良好な相手とも言える。

逆に裏切れば、命を弄ばれて死ぬことになるんだけど。

「何にしても、あなた達がどういう作戦を立ててきているかも丸分かりよ」

「そんな……くっつ！」

最後の力を振り絞るように私にクナイを複数投げってくる。

避けながら、私は風魔の子に近づく。

目の前へと迫り、彼女の特徴的なポニーテールを引っ張り地面へと横たわらせる。

「耐毒経験はあるみたいだけど、どうやら限界みたいね。どうせ、その口の布には防毒効果もあつたのでしょ？ そのためにわざわざ皮膚から侵入する毒ガスを巻いたのよ」

「本当に、某達の情報が……漏れて……」

「ええ、あなた達の知らない所でね」

そのまま口当てに手を掛ける。

「や、止めるでござる。素顔を見られるのは、しのび忍の恥！ 裸を見られるも同然ツ！」

「だから見たいのよ」

風魔の子の言い分を無視してそのままむしり取る。

思ったよりも良い顔してるのね。

「素顔が見られちゃったわね……その顔を見て、満足したわ」

悔しそうに私から顔をそらす風魔の子に、私は左手にある弛緩毒の爪を彼女に突き立てる。

少しだけ声を漏らしたかと思うと、彼女は力無く倒れた。

ついでに彼女の耳に付いているインカムを拝借して、呼び掛ける。

「よくお聞きなさい、間宮の子……早めに決断しないとお友達が1人1人無力化されて行くわよ。あなたとバックアップにいるCVRの子も含めて、残り4人」

『——ッ!?!』

通信越しに息を呑むのが聞こえる。

インカムを捨てる時に目に入った、スカートに付いた小さな物。
発信器ね。

さっきのクナイの一つに掠めた時に付いたのでしよう。

まあ、利用しない手は無いわ。

私は倉庫街へと歩き出す。

「夾竹桃……一体どこにッ！」

そう言つて今度来たのは随分と長身で金髪の子ね。

「どこに逃げたんだ？」

アサルトライフルを構えながら、探すけれど、私が逃げるなんて……心外ね。

「あなたは誘い出された蝶。そして私はクモよ。どちらが捕食者かしら？」

そう言つて背後から彼女のアサルトライフルのトリガーに南京錠を付ける。

私に気付いて素早く距離を取つて構えるけど、撃てない事とその原因に気付く。
すぐさま彼女は銃を捨て、跳び上がり、私に回転を加えた両足蹴りを当てる。

まあ、跳び上がった時点でそんなモノは予測できたこと。

わざわざ当たつた後のカウンターとして露出した彼女の太ももに毒を打ちこみ、私は

ワザと後ろへと跳んだ。

壁にぶつかる訳でもなく、ゴミ袋のクッションのおかげでそれほどにダメージは無い。
い。

狙ってやったんだけどもね。

「すぐに毒されそうな体ね。私に肌を見せるのがどう言う事か分からないのかしら？」

「どう言う意味——ッ!？」

すぐに変化は出た。

彼女は艶めかしい声を出して、膝を着く。

「……………、これ……………なんだ、よ」

「媚薬よ。快感が強過ぎて体に毒だけど、好きな子でも考えながら楽しみなさい」

「どうし、て……………んう!」

「あなたみたいな強気そうな子って、大体初心うぶな反応をしてくれそうなんだもの」

マンガでもよくあるパターンよ。

……………夏コミ、そう言えば考えてなかったわね。

早く原稿の構成ぐらい考えないと。

考えながらも彼女のインカムを取り上げる。

「残り3人」

そう言つて、私は目の前の子に投げて返してあげる。

「あう……!!」

服越しに当たつたとは言え、この反応。

ちよつと強過ぎたかしら。

(まあいいわ……)

私は一旦、その場を去る。

「ラ、ライカお姉様ツ!? 大丈夫ですか……?」

「麒麟……あんまり大声、出すな。体に、んあ……響く」

「は、はい……すみません、ですの。すぐに車に乗ってください」
随分と早くに来たわね。

「エサに釣られて、またエサが来る」

私は言いながら倉庫の影から出て、彼女達の前に再び現れる。

「そ、そんな……発信器の反応では、別の方角に……」

ハマーのような車の傍に居るのは、ローリータファッション風の制服に身を包んだ小柄な少女が私を見て驚く。

「逆手に取るに決まつてるでしょう?」

煙管を吸つて一服し、仕舞う。

私の言葉に悔しそうな顔をしながらも、さっきの長身の子——ライカが私の前に立ち
はだかる。

意外に根性があるのね。

「麒麟、下がれ……」

「そ、そんなお姉様を置いてなんて」

ライカの言葉に麒麟はたじろいでる様子。

良い友情ね。

好きよ、そう言うの。

「ライカお姉様、早く車に乗って逃げるんですの！」

「そんな事許してくれるような奴に、見えるかよ……」

足をガクガクさせながらも彼女は守ろうとしてる。

本当はこんな無粋な事はしたくないんだけど、行動してしまった以上、そんなに時間
は掛けてられないの。

ライカの意識が私から外れてる隙すきに、私は間合いを詰める。

「——お姉様、前！」

麒麟の言葉に私の方へ向き直るけど、もう遅いわ。

トン、と軽く彼女の肩に触れるだけ、

「ンあつ——!!」

媚薬に侵おされてる彼女はそれだけで声を上げて崩れ落ちる。

私はそのまま歩みを進める。

そんな私に、カンフーの構えで立ち向かおうとする麒麟。

「私わたくしだつて……お姉様に守られてるだけじゃ、ないんですの!」

そう言つて私に飛び掛かつて来る。

……無謀ね。

飛んできた右手を私の左手の爪が刺す。

「……あ、あれ? お姉様が、3人?」

「幻覚を見せる神経毒よ。後遺症とかは残らないから安心なさい、すぐに効果は切れる」

そのままフラフラとした足取りをした後に、パタリと麒麟と言う少女は目を回して

倒れる。

どこことなく幸せそうね。

車の中にある通信機を使って、間宮の子に教えてあげる。

「残り2人、レインボーブリッジで待ってるわ」

私はその場を去ろうとすると「チク、シヨウ……」と言う、声が背中から聞こえる。

そのまま、私は気に留めずに去る。

レインボーブリッジ手前で事故を起こし、封鎖させる。

私は用意したトランクをイスの代わりに、煙管を吸いながら待ち人を待つ。

——ピリリリリリ!

こんな時に電話……誰かしら。

「どちら様?」

『いやはや、どうもどうも。ジャックです』

お気楽そうな少年の声が返って来た。

「……大事な時に何か用かしら」

『いやいや、随分と順調そうなものですからね。慢心してないかと』

「あなたに心配されるほどにはしてないわ」

『そうですか。なら良いのですがね』

「そう言うあなたは高みの見物?」

私の問いかけに彼は愉快そうに笑って答えた。

『そうですよ。まさか、こんな武偵高の管轄かんかつで何の準備も無く姿を晒せと? 自分は演

出家なんですよ。もう少し舞台が整わないと興が乗りません』

「用件は、私に釘を刺しに来ただけ？」

『随分と冷たいですね。いえいえ、それだけではなくて逃走手段はちゃんと確保しているのかと思ひまして』

「私が負けると思ってるの？」

『世の中には死ぬこと以外に絶対はありませんからね。『if』は考えておくべきかと……用意していないのであれば、オルクスをあなたが今いる橋の下に呼び出しておきま
すが？』

……抜け目がないわね。

だけど——

「遠慮するわ。あなたに貸しを作ると高くなりそうなもの」

『それはそれは、残念です。どのような結果になるか楽しみに観ています』
それだけを言つて、ジャックは通話を切った。

——観ています、ね。

「遅かったわね」

ようやく来た待ち人に対して、そちらの方を見ずに、私はそう言う。

「夾竹桃……！ あたしの友達を、よくも!!」

私の事を恨むように彼女は視線と銃を向けてくる。

もう一人はどこに行つたのかしら……考えるまでもないわね。

「決戦の舞台として、ここを用意して上げたの。お礼を頂戴」ちようだい

「ふざけないで！ あたしの友達を、みんなを傷つけて……絶対に許さない！ それに、

ここはあたしの思い出の場所なの！ 犯罪者なんかについて欲しくなんかない!!」

相当に怒つてる割には、冷静そうね。

ジャックほどではないけど……私も人の心には聡さといのよ。

「この結果を選んだのは、あなた自身よ。それを忘れてもらつては困るわ」

「……ッ!!」

「もう一度言うわ。イ・ウーに来なさい」

私の誘いを、

「——断ります！」

またしても拒絶した。

「そう、残念ね」

私は煙管を仕舞い、そう言つてトランクから降りて、開ける。

取り出すのは、ココから押し売りされた無反動のガトリングガン。

「——なっ!?!」

あかりが驚いている間にもモーターが回り、すぐに幾多の弾丸が火を吹く。

その瞬間に下のグレーチングから飛び出してきたのは、あかりの仲間の1人。やはり潜んでいたのね。

あかりをかばう形で、彼女は剣を盾にするなどと言うあまり意味を為さない行為をする。

弾丸が日本刀を貫き、彼女の体をも貫いて行く。

防弾制服の上とは言え……相当の衝撃でしょう。

私が撃つのをやめると同時に長い黒髪ストレートの彼女は、後ろに倒れて行く。

回転が静かに止まり、銃身からは硝煙が漏れるのを見て、ようやくあかりは気付いたみたい。

「……志乃ちゃん？ 志乃ちゃん!？」

あかりは彼女を抱きかかえ、名前を叫ぶ。

弱装弾とは言え、相当な連射速度に大口径の弾丸。

防弾繊維の服の上とは言え、内臓系にダメージを負う可能性もある。

最悪、死んでしまうかもしれないわね。

そんな事は関係ないのだけど。

あかりは彼女を抱えながら私を射殺す眼をしている。

それこそ、あかりのアパートで見せた以上の殺気。

あの眼はまさしく人を殺める覚悟をした眼。

なるほど……ジャックが彼女に殺しの才能があると言うだけはあるわ。

「あかりちゃん、堕ちたら……ダメだよ」

「……志乃、ちゃん？」

「同じになつちや……ダメ。あかりちゃんは、あかりちゃん……武偵高でのあかりちゃん、だよ。武偵憲章……10条、あきらめるな、武偵は……決してあきらめるな。忘れないで、あきらめ、ないで——」

そう言って、あかりに志乃と呼ばれた黒髪の子は倒れる。

気絶しただけみたいね。

「志乃ちゃああああん!!」

お涙ちようだいのドラマのように、あかりは叫ぶ。

「気絶しただけよ。もつとも、すぐに治療をしなければ危ないかもしれないけど……これで、残りはあなた1人」

「——どうして、こんな事をするの？」

ゆらりと立ちあがって、私にそう問いかけてくる。

「欲しいからよ。あなたの……間宮の技術が。本来なら、あなたのお友達を殺しても良かったの……2年前と違って皆殺しにしているルールだから。だけど、私はそれをしな

かった」

あかりは黙り、私が一方的に話す形となる。

「あなたの心象を悪くしないためよ。既に心象は悪いでしょうけど……誰か死んだら、あなたはもっと抵抗するでしょう。だから生かしておいたの」

「……………」

私の言葉に、あかりは言葉ではなく、構えで返した。

先程とは雰囲気が違う。

「その構えは？」

「——鷹捲たかまくり」

あかりの言葉に、私は打ち震えた。

「そう……そう言うことだったの！ あなたも毒手使いだったのね!!」

灯台下暗しとはこの事、彼女も私と同じだった！

しかも中距離で使える毒手。

これほどまでに喜んだ事はないわ！

「いいわ、見せて頂戴ちようだい！ 鷹捲を！ 秘伝書にある『千本の矢』は、私がやってあげるわ

!!」

再び回るモーターの音の後に、すぐに放たれる銃弾。

対してあかりは、落ち着いた様子で銃弾に向かつてくる。
そうして彼女は——飛んだ。

空中魚雷のように、彼女が飛来してくる。

確かに千本の矢の代わりである弾丸をすり抜けてくる。

そのまま彼女は私ではなく、ガトリングガンへと辿り着き、触れた。

バチ、バチバチバチ!!

一体、何が——!

そう思った瞬間に、ガトリングガンは”砕けた”。

その衝撃は、私にも振動となって伝わり、衣服をも粉碎した。

(……毒じゃ、なかったのね)

気付けば、下は海。

ああ、私は橋から落ちたのね。

(どうしよう——私、泳げないのよ)

冷たい海に落ちて、沈みゆく体。

ジャックの言う事、聞いておけばよかったわね。

もう後悔しても遅い、か……

意識も一緒に……沈んで行く。

ザバアと言う、水の音。

微かな意識の中で隣を見ると、間宮の子がそこにいた。

どうやら……私を引き上げたみたい。

そのまま私を見てその腕に、

「夾竹桃、逮捕！」

そう言つて確かな敗北を掛けた。

◆

理子に続いて夾竹桃も敗北かゝ。

夾竹桃の敗因は……間宮の秘毒とやらに拘り過ぎてた事かな。

どうやら、様子を見るに思っていたモノと違つたみたいだし。

双眼鏡を下ろし、高みの見物を終了する。

間宮の子が使つた最後の技。

あれは、2年前にあの子の母親が私に使つた技だね。

つまりは、あれが夾竹桃が話してた『鷹捲』たかまくりの本当の正体。

振動で物を破壊する。

その結果が、ガトリングガンの粉碎。

なるほどね。

あの技、2年前から地味に気になってたんだよね。

振動で破壊する仕組みは分かったんだけど、問題はその振動をどうやって発生させるのか……

2年前の間宮の母親とその娘である彼女が使ってる所の共通点を見て、ようやく分かったよ。

おそらくはアレに必要なのは回転。

回転で……おそらくは人体の微弱な電気信号を集約させて、それを振動に変えて対象を破壊する。

理論としては、それで合ってるはず。

だから、回転さえあれば良いんだから……何も体全体を回転させるんじゃないくて、腕の回転だけでも多少は出来るはず。

かなり難易度は高そうだけどね。

ま、ちよつと挑戦してみよう。

わたしは武偵高の屋上の貯水タンクから降りて、深呼吸。

肩を軽く回して、壁に向かって走り出す。

そして、間宮の子がやってたみたいに跳んで空中を錐揉み^{きりも}回転。

電気信号を集約させるイメージをする。

槍みたいに手を尖らせて構えるのじゃなくて、壁に対して面になる様に手の平を構える。

壁へと勢いよく手を着いて、腕を曲げて衝撃を殺して、落ちる前に着地して壁から離れる。

「さすがにそう簡単には上手くないかないか……」

当然の結果と言えば当然の結果だけど。

これは——要練習だね。

私は微かにヒビが入った壁を見て、その場を去って行く。

34：嵐の終わりの夜

夾竹桃の敗北を見届けた私は、キンジの部屋のベランダ……の下の階のベランダにいる。

ちなみに部屋の人は帰って来てない。

そんな私の上、つまりはキンジの部屋のベランダには神崎とキンジがなにやら話をしてる。

話しに割り込んでも良いけど、そんな雰囲気でもないし……様子を見るか。

「台風が過ぎ去って、雲が晴れたせいか……星がきれいだな。都会の空気は汚いから普通はあんまり見えないんだが」

キンジがなにやら話す話題に困るようにしてそう言った。

まあ、下の階にいる私はその表情は見えないし、覗き込めばすぐにバレる。

だから声で判断するしかないんだけどね。

「そうね……こんな星空が見えるとは思わなかったわ」

神崎はキンジに同意するように返す。

それからしばらく静かな夜が、流れる。

なんだか微妙な空気だね。

お互いにぎこちない様な感じで、2人が視線を合わせずに黙ってるのが目に浮かぶ。

「ママの裁判の公判が……延びたわ」

神崎が先にそう切り出した。

「そうか……良かったな」

キンジは心の底から祝うようにして神崎にそう返し、

「ええ、本当にね。今回の件で、『武偵殺し』の事が冤罪と証明できたから年単位で裁判は見送りになるんだって」

嬉しそうに神崎は報告する。

いつもの意地を張った感じじゃない。

それほどに嬉しかったんだろうね。

私としてはこの結果に複雑な心境を抱いているから、微妙なんだけど。

「それよりも、あんた……どうしてあたしを助けに来たの？」

「……さあ、何でだろうな？」

神崎の疑問に、自分でも分からないと言った風にキンジは答えた。

「なによそれ」

「自分でもよく分からん。霧に言われて、お前の事情を知って……『武偵殺し』に狙われると分かって……放っておけなかつたんだと思う」

「っ!?! ……思う、つてハッキリしないわね!!」

キンジの『放っておけなかつた』の部分で神崎は言い淀んで、それから怒鳴るようにして叫んだ。

「なんでいきなり大声出すんだよ……」

しかし、当の本人は言い淀んだ事については気付いてないと。

完全に照れてるよね、神崎。

「よ、余計なお世話よ。あんたが来なくても……武偵殺しは1人で何とか出来たわ!!」

強がってるね。

実際、神崎と理子が戦えば理子が勝つに決まってるんだけど。

神崎の戦い方は真っ直ぐ過ぎるから、特に母親関連で揺さぶりでも掛ければ簡単に乱れる。

そう言うのは理子の得意分野だし。

「そうだな。余計なお世話だったかもなあ……」

キンジが深い溜息を吐くのが聞こえる。

「……ウソよ」

神崎は否定した。

その言葉にキンジは尋ねた。

「なにがだ？」

「1人で何とか出来たって言うのは……ウソ。もしあんたが守ってくれてなかったら、あたしは死んでた」

「……………」

ふーん、どうやら神崎を死の間際までは追いこんでたのか。

HSSのキンジがいる状態でののか、もしくはそうじゃない状態でののかは分からないけどね。

「ハイジャックが解決して、理解したの……あたしにパートナーが必要な『理由』。1人じゃ出来ないことがあるんだって、分かったの……」

へえ、素直に気付いたんだ。

またプライドとかが邪魔するかと思ったけど、神崎は言葉だけでなく本当に理解したらしい。

そのまま神崎は続けて話します。

「——だから、今日はお別れに来たの」

「…………お別れ？」

「ええ、あんたと霧を仲間に出来たら良かったんだけど……。あんたの事情も知っちゃったし、あんたが信頼してる霧を、引き離すような事も出来ない。だから、あたし……パートナーを探しにイギリスに戻ることにしたの。ロンドン武偵局もなにかとウルサイしね。キンジは、武偵をやめるつもりなんでしょ？」

「ああ……」

キンジは力無く答えてる。

迷ってるね。

「そう、よね。もし、今からでも気が変わったのならあたしのパートナー……とは行かないけど仲間に——」

「……悪い」

必死な神崎の言葉を遮るようにして、キンジは短く言った。

「あ、あんたが謝る必要なんてないわ。もしも、って言う話よ。今度は別に、強制なんてしない」

慌てて神崎はキンジをフォローするようにそう言って、

「あーあ、この武偵高に来て4ヶ月……良い事がなかった訳じゃないけど、微妙な日々だったわ！ UFOキャッチャーは上手くないかなしいし、ハイジャックでは犯人に逃げられるし!!」

どこか自棄になるように声を張り上げて、続けた。

「もし、日本に来るような事があれば……教えてやるよ」

「ふん……あなたに教えてもらう必要なんてないわよ。自分で何とかするわ!」

キンジが気を遣うような言葉を言っつて、神崎はそれに強がりて返した。

さすがのキンジでも、これは強がりだつて分かるでしょ。

私からは二人の様子は見えないんだけどね。

「そう言えば、霧はどうしたのよ?」

「さあな……あいつは気まぐれだし。昨日は、ハイジャックの件で少し走り回つてたみたいだからな。どこにいるか分からん」

神崎の質問にキンジは回答する。

これは、チャンスだね。

私はすぐに上にあるキンジのベランダへと飛び移る。

「私のこと、呼んだ?」

そう言いながら、私はベランダへと着地する。

神崎とキンジはそんな私を見て驚いてるけど、

「お前、いくらなんでも神出鬼没だろ」

キンジは慣れたように呆れながら、私に言ってくる。

「いや、そう言われても……実はさっきから下のベランダにいたんだけどね」
「……何してんだよ」

「だって、割り込める雰囲気でもなかったし、ね？」

私はキンジにそう言って、神崎に目を向ける。

まあ、いわゆる”良い雰囲気”だったから私なりに気を遣ったって言う事なんだけ
ど。

そんな私の意図が読めたのか、神崎は顔を赤くし始める。

「あ、あああ、あんたね！ あたしとキンジがそう言う風な雰囲気になる訳がないじゃない
い!!」

「そうかな？ 星が見える夜空にベランダで2人きり、これ以上ないほどに良いシ
チュエーションだったと思うけど？」

私はそう言って笑顔を向けると、神崎はさらに顔を赤くする。

「ちゃんと俺に分かるように話してくれ」

そしてキンジが分からないと。

最早お決まりだね。

「さすがは察しの悪さに定評があるキンジだね」

「……………バカにしてるだろ」

「してる」

「俺でも怒るぞ」

そんな私とキンジのやり取りを見て、神崎は羨ましそうな目をする。

「あんた達、やっぱり良いコンビなのね……」

「神崎さんにも見つかるよ。もう見つかつてるだろうけど」

そう言つて私はキンジを見る。

神崎はそんな私の視線の意味に気付いてるけど、首を振る。

「いや、もういいのよ。悪かったわね、付き合わせて……。あんた達に負けないパートナーを、あたしも探す事にするわ」

「元パートナーだよ」

「そうだったわね」

キンジの言葉に、神崎はそう答えて玄関へと行く。

私もそれに続くように、彼女を見送る。

さて……問題はここからだけど、まあ大丈夫でしょ。

きつとキンジなら、私の予想通りに動いてくれる。

「その、頑張れよ」

「ええ、ありがとう。バイバイ」

キンジと神崎はお互いに別れの言葉を言つて、神崎は笑顔でドアを閉じた。私は部屋に戻らず、そのまま玄関にいる。

そして、逆にキンジは部屋に戻ろうとして……違和感に気付く。

「あいつ、帰つたのか？」

「いいや……足音がしないよ」

キンジが気付いた事を私に聞いて、私はそれに答える。

どうしても気になったのか、キンジはドアの覗き穴に向かつて外の様子を見る。

『イヤだよ……あんた達みたいなのコンビ、そう見つからない。キンジ……霧、あんた達以外に、仲間になれる人なんて……早々に見つからないよお……』

その声は、ドア越しで私にも聞こえる。

神崎の泣き声と一緒に本心が出ている。

だけどキンジは、その言葉に背を向けて……静かに部屋へと戻る。

それと同時に、ドアの向こうの神崎の足音も聞こえる。

ドア越しとは言え、お互いに背中を向けて歩いてる。

さてと……ここからが本番だね。

私もキンジの後ろに続いて、部屋へと戻る。

キンジはすぐにソファアールへと寝転がって、片手で頭を抑えてる。

何も見なかった事にしようとしてるぐらいは、分かる。

「このままでいいの?」

私はキンジに声を掛ける。

「……何がだよ」

「自分でも分かってるんじゃないのかな?」

「……………」

「あの子は、孤独。それも、キンジとは反対方向に走ってる。私はキンジと神崎さんがハ
イジャックで何があったかは詳しくは知らない。最後に、空き地島で皆と一緒に誘導灯
になつたぐらいだからね」

「何が言いたいんだよ……」

少し、怒り交じりにキンジは言い返してくる。

私はそれに怯む事ひるも無く続ける。

「だから言ってるでしょ? 自分でも分かってるんじゃないかって……簡単に言うな
ら、キンジのお兄さんが亡くなった時に私がキンジを放っておけなかったのと同じかな
?」

「……………」

「それで、今度はキンジがあの子の時の私なんだよ。このまま放っておくかそれとも放つて

おかないか……神崎さんを連れ戻せるとしたら、似たような境遇きょうぐうにあるキンジだけだと
思うんだ」

「……………ッ!!」

私の言葉に、キンジは悩んでる。

すぐにソファから起き上がり、立ち上がって机へと向かう。

それからキンジは不意に携帯のストラップを見た。

あれは確か……神崎とUFOキャッチャーで入手した、ライオンをデフォルメしたよ
うなマスコットストラップ。

同じ物を確か、神崎も持っている筈だ。

「なあ、霧。お前、バスジャックの時に俺に言ったよな……俺が『見捨てるなんて器用な
事は出来ない』って」

「そうだね」

それからキンジは私へと振り返って、真剣な顔をする。

「——お前の言う通りだったみたいだよ」

そう言ってキンジは玄関へと歩き出す。

私はキンジが玄関を出る前に言う。

「多分、女子寮の屋上だよ。そこにヘリが停まってるのが見えたからね」

「——ああッ！」

キンジはそれだけ答えて、玄関を飛び出していく。

私に車で送って貰う事も頼まずに、いても立つてもいられないとばかりに飛び出して行った。

良かった……お姉ちゃんと私の思った通りに動いてくれて……

私はすぐに女子寮前の温室へと来た。

へりの音が近くで聞こえる。

そのまましばらく待っていると、温室のビニールの屋根から……男女一組が落ちて来た。

「お、おお……さすがに無茶だったか」

尻から落ちた男——キンジは悶絶もんぜつしながら、私に気付く。

私は軽く挨拶するように手を挙げる。

「どうもってね」

「何でここにいるのかはもう突っ込まんが、せめて受け止めてくれても——」

「こ、このバカキンジ!!」

キンジの襟首を揺さぶって、神崎は怒鳴る。

「あんた、いつものバカキンジの方なのね！　って、なんで霧がここにいるのよ!!」
急激な話題変化。

私を見つけて、神崎はそう言うてくる。

「いや……きつと来るとしたらここ何だろうなと思ったから、スタンバってた。何も準備してないけどね」

「このバカキンジのやる事が分かってたんなら、受け止める準備くらいしなさいよ!!」
「Sランクならこれくらい受け身を取りなさいよ!!」

声は似せてないけど、神崎の口調を真似してそう言う。

「あたしの真似をするなー!!」

対して神崎は腕をぶんぶん振って、子供っぽく抗議してくる。

「ふん、まあいいわ。それよりキンジ」

神崎はいつもの調子で言っ、紅い目をキンジに向ける。

「なんだよ……」

「あんたには何かもう一つ秘密があつて、スーパーモードになれるスイッチが存在する」
「……」

「それが何かは分からないし、霧に関してはそのあんたの秘密を知ってる。だけどあんたはその力を使おうとしていないし、使いこなせていないのかもしれない。だから、あ

たしは考えたの……あんたを調教してやればいいってね!!」

「ぶっ——!?!」

キンジは吹き出した。

どう考えても発想がおかしい。

私はそう思う。

人のこと言えないとか理子に言われそうだけど、私は殺人鬼だから別に良い。

「霧、助けてくれ!! このままだと、倫理的にマズイ事になる!!」

キンジがそう言ってくるけど、

「……神崎さん、思う存分に調教すると良いよ」

私はイイ笑顔で答える。

「待て、お前! 絶対に楽しんで言ってるだろ!?!」

「うるさい、うるさい!! 元パートナーからの許しも得た事だし、あんたに拒否権はないわ!!」

「俺に選択権ぐらいよこせよ!?!」

”ホームズ”のパートナーになるんだから、光栄に思いなさいよ!!」

神崎から飛び出した単語に驚いてキンジは、

「……ホー、ムズ!?!」

繰り返す。

その様子を見て、神崎はさらに怒鳴る。

「あんた、まだ知らなかったの!?! 霧から聞いたんじゃないの?!」

「教えてくれなかったんだよ! 自分で調べろって言う話だったが、バスジャックやらハイジャックやらで忙しかったから調べてる暇もねえよ!!」

「こ、このバカちゃん! バカデミー賞! そうよ! あたしの名前は、神崎『ホームズ』。アリア……ホームズの4世よ!! つまり、あんた達は2人のワトソンに決定したの!! 逃げようとしたら——」

ああ、やつぱり……

「——風穴をあけるわ!!」

彼女とは気が合わない。

それから後日の夜。

「あんた、ももまんの美味しさを知らないの!?!」

「お前こそ、このクセになるウナギまんの魅力が分からないのかよ!!」

神崎とキンジはももまんとウナギまんのどちらが美味いかと言う口論をしてる。

そんな私に、突然に電話が掛かる。

「はい、どうしたの白雪さん？」

『き、きききき霧さん!!』

その大声に思わず携帯を耳から少し離れた。

ああ、多分話題になつてゐるんだらうね。

「そんなに慌ててどうかしたの？」

『どうしてそんなに落ち着いてるの!? そ、それよりもキンちゃんが神崎つて言う泥棒猫と同棲どうせいしてゐるつてホントなの?!』

「まあ、ホントだけど私が慌てる理由もないからね」

『でも、男女が一つ屋根の下で暮らしていると知らない間に子供が出来るつて聞いたことがあるもん!! そう言うのつて学生である私達には早いよ!!』

「へー……ハムスターやネズミみたいだね」

『キンちゃんとその泥棒猫がそう言った行為、もしかして……してない、よね?』
心配そうな声で、白雪は聞いてくる。

私はそれに対して、

「あー、そう言えば前にキンジを起こしに来た時に同じ部屋でネテタキモスルナー」
棒読みで答える。

まあ、ウソは言つてない。

神崎がキンジの部屋……つまりはここに押し掛けて来た日には同じ部屋で寝てたし。ちなみに同じ部屋とは言つたけど、同じベッドとは言つてない。

だけど彼女の事だから——

『……は、ハハハ……あハハハハハハハ!!』

狂つたような笑い声を出し始めた。

時々、白雪が本当に人を殺してないのか疑問に思う事がある。

とまあ、それは置いておいて。

「今日もキンジの部屋にいるよ。今は私がいるけど……離れたら、どうなるだろうね？」

『ウン、ワカツタ……今からそっちにイクヨ』

そう言つて電話が切れた。

それと同時にキンジが聞いてくる。

「白雪からか？」

「まあね。女の子と一緒に暮らしてるの？　つて聞いて来たよ」

「……どう答えた？」

「ありのままを答えたけど？」

私がニヤニヤとした顔で答えると、キンジはぞわあ、と言つた感じに肩を震わせる。

それから、どどどどどど！　つと玄関の外から音が聞こえてくる。

それに気付いたキンジは冷や汗を流しながら言う。

「霧……お前、なんて事してくれる……ッ!?」

「どうしたのよ、キンジ。変に震えて」

「あ、あ、アリア! にに、にに逃げろ!! 今すぐに——」

キンジが警告する前に、ガラランガラランと斬られた玄関のドアが、音を立てて崩れ落ちる。

神崎もキンジも、現れた白雪の異様な雰囲気呑まれてる。

ゆらゆらと揺れながら、斬れたドアを踏みつけて、玄関に入ってきて来る。

「……ふふ、霧さんの言う通り……いたね。ねえ、キンちゃん……? どう言う……事かな?」

舌足らずに言う白雪を見てキンジは、

「霧いいいいッ!! 何とかしろお前!!」

私に助けを求めるのだった。

G
o
F
o
r
T
h
e
N
e
x
t
!!

第4章：カゴノトリ

35：白野式性教育

星伽 白雪——ヒヒロカネを護る星伽の一族の子。

私が個人的に、面白い子だと思ってる子の1人。

そんな彼女がキンジの部屋に女の子が住んでると言う事を誰かから聞いたんだろう。私に確認するように聞いて来たので、私はそれに正直に答えた結果、

「アー、大変な事にナツタナー」

「なんだその棒読み!? お前が余計な事言うから白雪が暴走しちまつてるじゃねえか!!」

私の肩を掴んで揺らしはしないものの、キンジは私に訴えてくる。

「キンちゃん……どうして、女の子と一緒に暮らしてるの……?」

「いや、これは……だな」

白雪に凄^すまれて、キンジは私の肩を離して下がって行く。

「ちよ、ちよつと何よあんだ!? あたしが何をしたつて言うのよ?!」

「女性が男性の部屋に押し掛けるつて、どう考えてもウワサにならない訳がないと思う

けどね〜」

混乱してる神崎に対して、私が答える。

「それがどうしてこうなるのよ！ 答えなさいよ、霧!!」

このお嬢さんは、常識に欠ける部分があるみたいだね。

若い男女が一つ屋根の下で暮らしてると聞けば、大概の人は恋人だ、愛人だと勘繰るに決まってるのに。

そんな神崎に突つかかるように白雪が刀で神崎を指し示しながら叫ぶ。

「だ、黙りなさい泥棒ネコ！ き、キンちゃんの一つ屋根の下で同じ時を過ごすなど、言語道断!! そそそんな、うらやまけしからん事をしておいて、シラを切るつもりですか!?!」

「意味が分かんないわよー!」

「霧さんはともかく、キンちゃんに付く悪い虫は排除です!! 悪・即・斬です!! きえええええええツ!!」

日本刀を振りかざして神崎に上から奇声と共に斬りかかる白雪。

そんな白雪の日本刀を、神崎は背中から2本の小太刀を取り出して交差させ、受け止めた。

ギリギリギリと金属同士が鳴って、鏢^{つばせ}迫り合いとなる。

うーん、ちよつとやり過ぎちゃったかな？

残念ながら、Aランク武偵の私にこの争いは止められそうにないね。

「お、おい！ お前らやめろつて!!」

キンジは止めようとするけど、2人が止まるはずもない。

聞く耳持たずと言ったところ。

なので、私は――

ベランダにある防弾性の物置へと静かに隠れた。

うん、さすがにちよつと收拾がつかなくなった。

このまま放置でも面白そうだから、嵐が止むまで静かにしよう。

なんて思っていると、

「すまんが、もうちよつと奥に行つてくれ」

キンジが扉を開けて来た。

「どうやらキンジもどうしようもないと思ったのか、こつちに避難してきたみたいだね。」

キンジは疲れたように息を吐きながら私が空けた隣に座つて来る。

「いやー、大変な事になったね」

「お前がそうしたんだけどな……」

「悪かったね。さすがにあそこまで收拾が着かない事態になるとは思わなくて」

「悪いクセだぞ。面白半分にあんまり場を引つ掻き回すなよ」

「でも、大体は自己処理するでしょ？ 今回は処理に失敗して爆発しちゃったけど」

「爆弾じゃないんだぞ……いや、ある意味合ってるのか？」

キンジはそう言つてなんだか微妙に納得してる。

それから息を一つ吐いて、

「どちらにしても、普通じゃない」

疲れたようにそう言った。

「何が普通じゃないの？」

「あのな、霧。超能力なんて……普通に考えたらあり得ないだろ」

「だけど確かに存在してるよ」

「いや、それは……まあそうなんだが……」

少し躊躇ためらうようにキンジは言つて、私から顔を逸らす。

それから話を続ける。

「アリアの一件は一応最後まで付き合う事に決めたが……このままだと、終わる頃には俺の目指す普通の生活に戻れなくなりそうだ」

「普通ねえ。キンジの言う普通ってなにかな？」

私の哲学的な質問にキンジは少し考えながらも答える。

「そりゃあお前、こんな銃をぶつ放す物騒な学校じゃなくて普通の学校生活に決まってるだろ？ 戦闘術や銃に対する知識、盗聴の仕方や見破り方を学んだりじゃなくて一般

の教科だけを学び、放課後には自主訓練じゃなくて部活やどこかに遊びに行ったりとか

……」

「ふくん……そう言う生活がキンジにとつては、普通なんだね」

「じゃあお前の普通ってなんだよ？」

ジト目になりながらキンジは逆に私に尋ねてくる。

「それはもちろん、この殺伐とした日常が私にとつての普通だよ」

「おいおい、それは……何か違うだろ」

「どうして？」

「どうしてって、もつと平穏を求めたりはしないのか？」

「それはキンジにとつての普通でしょ？ 何が普通かなんて、人によって違うものだよ」

哲学的な話になるだろうけどね。

例えば、紛争地域にいる人にとつて争いがある事が”普通”だし……私に関してもそう。ここよりももつと殺伐とした事が”普通”なんだよ。

色んな人の反応を見たり、人の命を喰らうように生きていることがね。

それにしても、平穩か……

何の変化も刺激もなくて——つまらなさそうだね。

キンジは私の回答に、実感が湧かないように尋ねる。

「そう言うものか？」

「そう言うものだよ。それよりも、キンジは超能力ステルスに何か疑問でもあるの？」

「いや、そう言う訳じゃないんだが……存在としては胡散臭いつて思ってるだけだ」

「そこら辺の知識も深めとかなないと、出会ったら面倒くさいよ？」

「そんなに会わないだろ。と言うか、早々に会ってたまるか」

「そんな消極的なキンジに、私からいつものアドバイスをして上げるよ。『無知は罪、そして知ろうとしない事はさらに罪深い事』だよ」

私のその言葉にキンジは目を細める。

「なんだよ、随分と真剣だな」

「武偵をやめるにしても……キンジが人として成長してくれなかったら困るからね。まあ、ちよつとしたお節介だよ」

そもそも私が面白くないし。

「余計なお世話だ」

そう言って、キンジは外の騒がしい音が無くなったのに反応して立ち上がってゆっく

りと物置の扉を開けて、部屋の様子を見ている。

私も移動して、キンジの顔の下から部屋の様子を覗き込む。

そこには奇抜なりフォームをされた部屋の惨状が映り込んだ。

壁や床のあちこちに弾痕や刀傷がある。

「本当に爆弾でも爆発したみたいだよ」

「どちらかと言うと台風や地震でも起きたみたいだって言う方が合ってる様な気がするかな」

私の言う事にキンジはそうツツコむ。

要するに天才のSランク武偵と幼馴染みは天災であつたと言う暗喩なのかな？

そんな深い意味でキンジは言つたつもりはないだろうけど。

物置から出て、キンジと私はそのまま鎮静化した災害の跡地である部屋の中に入つて行く。

2人は服を乱して、あられもない姿で床にへたり込んでいる。

「あー………で、引き分けか？」

取りあえず部屋の惨状には目を瞑^{つむ}って、キンジは尋ねる。

「いえ、私は………まだ、殺れますっ………！」

白雪の言葉に殺気が見え隠れしてる。

床に日本刀を突き刺して杖のようにしながら彼女は立ち上がる。

これでまた1つ、床に刀傷が増えたね。

「この……とつとつと、倒れなさいよ……っ！」

対して神崎は2本の刀を床に突き刺して杖代わりにしてふらふらと立ち上がる。

そんなに刺して床に何か恨みでもあるのか、つていうぐらいだよ。

なんにしてもどちらとも疲労してるし、これなら止められない事はない。

私は2人の間に立ち、

「はいはい、そこまでねっ」

「みぎや!?!」「きやん!?!」

軽く2人の頭をチヨツプで叩く。

すると同時に、軽く悲鳴を上げた。

「……霧さん」

「ちよつと、いきなり何するのよ霧!」

白雪は私に涙目ながらも見て、神崎は私に怒鳴る。

「近所迷惑だからこれ以上やるなら外でやってきなよ。よりによって人の部屋で暴れるなんて非常識もいい所だよ」

『うっ……』

私の正論に2人は呻く。

キンジからは「お前のせいだろ」って言う視線が飛んでくるけど、気にしない。すぐに白雪は自分の行いを反省したのか、刀をがしやんと置いてキンジに向かつて正座をしだす。

私が反省？　する訳もないし後悔するはずもない。

危機的な状況を何度か救ってるし、普段から借りがありまくるんだからこれぐらいの意趣返しみたいな事は多めに見て欲しいね。

「すみません、キンちゃんさまっ！」

額を床に着けんばかりに白雪は猛省している。

「ア、アリアを殺せなかったばかりか、多大な迷惑をお掛けしました！　キンちゃんさまが、私を捨てる、なら……アリアを殺して、私も死にますっ！！」

反省する場所が微妙に違う。

「どんだけ神崎を殺したいんだか……」

「理子や爽竹桃から聞いてたけど、これがヤンデレと言う奴なんだね。」

「見せて貰ったアニメでは男性をバラバラにして、ボートで逃遁行してたけど。」

「捨てるってなんだよ……捨てるって」

キンジが呟いてる間にも、白雪は凄惨な勢いで近づいて絶るすがように襟首を掴んだ。

そして、そのままキンジの首を揺らしながら話を続ける。

「動物でもオスとメスが一緒にいると知らない間に色々作っちゃうんだよ！ 幸せ家族計画になっちゃうんだよおー!!」

「白雪さんストツプ。キンジが目を回してるから、揺さぶらないでね」

私の一言に白雪は我に返って素早く距離を取る。

「ご、ごめんなさい!」

「首が締まった……げほ。意味が分からん上に飛躍し過ぎだぞ」

ちよつと咳き込みながらも、イラつき交じりにキンジはそう返す。

「まあ、取りあえず白雪さんは落ち着いてね」

「でも、霧さん——」

「反論は無しね。……これ以上キンジに迷惑を掛けたくないでしょ?」

後半は白雪の耳元で囁く。

「……っ」

息を呑むようにして白雪は黙った。

これで白雪は大抵、大丈夫。

落ち着いた所で私は話を続ける。

「話を整理すると、電話で話したのはちよつとしたイタズラが混じっててね」

「イタズラって?」

「簡単に言えば、白雪さんが電話で言った『そう言う行為』は全くしてないって言うことだよ。臭わせるような事を言っただけ」

「それってつまり……」

「ウ・ソ、って事だね。もつと言えば私が誤解を招くように言ったのをもの見事に白雪さんが勘違いして妄想したって言うことだよ」

私の言葉にキョトンとした顔をした白雪はその後に、あわあわと言った感じ顔を赤く始めた。

それから再び白雪はキンジに向かって土下座をし始める。

「申し訳ありません、キンちゃんさまっ!!」

誤解が解けたようだと思ったのかキンジは、頭を掻きながら言う。

「いや、誤解だと分かったなら別に——」

「白雪はいやらしい事を考えてるイケない子なんです!」

「……………」

盛大に謝る場所を間違えてる。

これにはキンジも絶句して、頭を抑えてる、

「白雪、別に気にしないから取りあえずもう少し落ち着いてくれ……」

「それって——」

「とにかく、俺は何も気にしないからこれ以上は謝るのも無しだ。分かったな？」

これ以上は話が進まないと思つたのかキンジは、有無を言わさずに白雪の言葉を封じたけど。

今の会話だと「いやらしいのを気にしない」みたいな風に取りれそうなんだけど。

実際に白雪は顔を素早く上げたかと思つたと照れながらも、

「いやらしいのを気にしないって言つてくれた気にしないって言つてくれた」

そんな事を反復してる。

キンジは白雪から意識を外してるせいで、その呟きが聞こえてない様子。

「全く、どうなってるのよ……」

1人だけ蚊帳かやの外だった神崎が、ようやく口を開く。

「落ち着いて状況を整理しようか」

「整理するほどの状況があつたか？」

私が言う事にキンジは静かにそうツッコむ。

単純に言えば誤解して暴走つて言う事だけだ。

そもその原因つてキンジのような気もするんだよね。

まあ、それは置いておこう。

「えー、まずは白雪さん。暴走の理由はキンジが女性と同棲どうせいしてると言う事でよかったですかな？」

「う、うん……てつきり私を捨てて、キンちゃんがいつの間にか内側に女の子を囲ってると思ったから……」

私の質問に白雪は姿勢を正してそう答える。

次はキンジに向かって問いかける。

「はい、それに対して被告人キンジ。何か弁明は？」

「おい待て、何で俺が犯罪者扱いなんだ」

まあ、ちよつとしたノリってヤツだね。

「あんたなんかほとんど犯罪者みたいなモノじゃない」

「始業式の日の事をまだ根にもつてやがる」

しかし、神崎はノリとは別に本気の眼をキンジに向けて言う。

キンジはそれに対して突つかからずに白雪に話しかける。

「取りあえずだな、白雪」

「はい……」

「アリアと俺は一時的に武偵としてのパーティーを組んでるに過ぎない。お前の言う女の子を囲うとかそういうのじゃない」

これは予想だけど、キンジは『女の子を囲う』の意味をあまり分からずに発言してそう気がする。

「本当に？」

白雪の尋ねるような口調に私はすかさず会話に割り込む。

「そうだよ白雪さん。大体、キンジだよ？ 女性に自ら手を出したりする訳ないよ」

「……どうしてそう言えるの？」

「そりゃあもちろん、キンジが“ヘタレ”だからに決まってるよ」

「——おい」

私の発言にキンジは不満の声を上げるけど、無視する。

「それに、キンジのあだ名を知ってるでしょ？ 女嫌いで昼行灯で朴念仁ぼくねんじんだし」

「最後のは聞いたことないぞ」

「キンジが聞いたことないだけでしょ？ とにかく、キンジが同棲してても白雪さんが考えてる間違いは起きてないよ。私も一緒にいたし」

「そうなんだ……じゃあ、『恋人』とかじゃ……ないんだよね？」

「こいびつ——!?!」

白雪のキーワードに初心うぶなホームズの4世が過剰ぶに反応する。

その本人に目を向けると顔を赤くしながら、子犬みたいに唸り始める。

「だ、誰がこんな奴と恋人なんか！　だ、大体ね、恋愛なんて時間のムダよ！　憧れたりなんかしてないんだからね！」

これはこれは、随分とまあ正反対の言つてそんな雰囲気だね。そんな風に否定をする方が逆に怪しいんだよね。

大体、憧れたりせよ興味がないのならそう言うのは無関心で素っ気ない返し方をするものなんだよね……大概是。

ま、これは彼女みたいに分かりやすい人も早々にいないと思うけどね。

「こいつは、あたしのドレイであつて……それ以上でもそれ以下でもないんだから！」
「ど、ドレイ!?!」

神崎の発言に白雪は顔面蒼白になって問題の単語を反芻する。はんすう

「そもそも、そんないけない遊びをしてたの!?!」

私に確認するように白雪は顔をこちらに向けてくる。

何度も事態を收拾するのが面倒だからさすがに場を引つ掻き回したりはしない。

「白雪さん、そう言うのは一切なかったから安心してね。ただ単になんて言うのかな？」

手駒みたいなニュアンスだよ」

「てっ、手籠めっ!?!」

「違うからね。……キンジ、白雪さんを眠らせていい?」

さすがの私も面倒になって来た。

「お前の言う眠らせるの前に物理的にか付きそうだから、ダメだ。あー、とにかく白雪。こいつとは恋人とかそう言うのじゃないから安心しろ」

「じゃ、じゃあ最後に聞かせてください！」

「……なんだ？」

「『キス』とかも、してないよね？」

白雪の言葉にキンジと神崎が凍った。

この雰囲気……やっちゃったんだね。

いつやったんだろうって、考えて見れば簡単な事か。

多分、ハイジャックの時にやったんだろうね。

キンジと神崎が目を合わすと、何かを思い出したような顔をする。

そしてすぐさま、神崎は顔を赤くして『わわわわ』と言った感じに慌てながらキンジを睨んでいる。

すぐに何かいい答え方がないかとキンジは神妙な顔をしてるけど、すぐに答えられなかった時点でアウトだよ。

「そう……なん……だ。した、んだよね？」

白雪の瞳孔がスーッと、小さくなっていく。

舌足らずな口調。

この雰囲気でも本当に人を殺してないの？

そうだったら私も少し驚くよ。

私は冷静にそう見ていると、

「だ、大丈夫よ！ そういうことは確かにあったけど！」

神崎は焦りながらも、無い胸を張って言い始める。

と言うか、大丈夫って……なにがなのかな？

「き、昨日分かったんだけど！」

分かった？

「こ、子供は出来てなかったから!!」

やけに響いた声。

そして、その発言に本人は言い切ったとばかりに息を吐いている。

キスして子供？

「……くっ、ふふ」

あ、ダメだ。

医療知識がある私には笑いがこみあげてくる。

それに、常識的に考えても多くの人が私と同じ反応をするだろうね。

いかにも自分の知識が間違つてるとも知らないキョトンとした顔だから、なおさらおかしい。

「お前がそんな風に笑うなんて初めて見たな」

「あー、そうかもねー」

キンジ以外にも見てる人はいるけど。

私はキンジに答えながらも、言葉の端々が笑いの余韻で引きつっている。

「なによ、そんなに大笑いするって事はあたしが間違えてるの!？」

「間違えてるなんてレベルじゃないよ。下手したら見た目通りの小学生か幼児レベルだ

よ」

「ななな、何ですって!？」

キンジは私の言葉に同意するように小さく頷き、神崎は怒鳴る。

「なんなの……キンジも知ってるって言うの?」

「霧が言ってただろ。と言うか早くて小学生、遅くても中学生には知る事だぞ」

そう言うキンジは中学生レベルでそう言う知識は止まってそうだけだね。

「じゃあどうやったらできるのか、教えなさいよ!」

「俺は教えないけどな」

キンジは変にHSSになったら困るからだよね。

分かってても私はからかい気味に言う。

「そうだね、キンジはヘタレだから気恥ずかしいんだよね」

「地味に傷つくからやめてくれ、霧」

「はいはい」と

まあ、どうせなら色々と詰め込んであげるよ。

どんな反応するか楽しみだし。

途中で神崎が何かに気付いたように声を上げる。

「ところで、白雪とか言う子はどこに行ったの？」

その言葉に私とキンジは顔を見合わせて白雪のいた場所を見ると……そこにはいたはずの人物がいない。

まるで、風が通り抜けるようになっていた。

神崎の発言にショックを受けて去ってしまったかな？

「これまた面倒な事になったかもね」

私のその発言に、キンジは頬を引きつらせた。

後日――

私は放課後に神崎を女子寮にある私の部屋へと招待した。

女子寮では同室者がいるのは1年まで。

2年には個室が与えられる。

与えられると言つても全員がそうじゃないけど、少なくとも私はいない。

だから、勝手に部屋に招待した所で問題は無い。

「さて、それじゃあ正しい性知識でも教え込んであげますか」

「本当にあんたで大丈夫なんでしょうね？」

そして、そんな生娘きむすめみたいな初心な反応をするお嬢さんは私を疑つてみたい。

「問題ないよ。私はこう見えて、医療知識はかなりあるんだからね」

「そうなの。それで、どうやったら……その、子供は出来るのよ？」

「まあまあ、そう焦らずに紅茶でも飲みながらゆっくり勉強していけばいいよ」

キッチンで私は準備をする。

「キンジと違つて、ちゃんとしたもてなしをするのは感心ね」

うんうんと神崎は頷きながら、テーブルに座つて待つている。

そんな紅茶の準備の途中で神崎は向こうから尋ねてくる。

「ところで、最近もまた切り裂きジャックがこちら辺に現れたらしいわね」

「みたいだね。確か、新宿だっけ？ 現れたつて言つてもメスのような刃物で首を切

られただけで、目撃証言も何もないみたいだし……いつも通りの模倣犯だつて言う話も

出てるけど」

「死亡時刻は聞いてる?」

「いや、周知メールで見たただだよ」

「そもそもそれをしたのは私だろうけど、私の名前を騙る連中が出てきても私には関係の無いだし。」

むしろ、もつと増えてくれれば情報が錯綜して私が動きやすくなる。

ただし……私が行動すれば、本物の犯行だつてすぐに分かるだろうけど。

「死亡時刻は、私があんたとキンジから別れた数十分前後だそうよ」

「つまり、近くにいた可能性があるつてこと?」

「そうね。それに、とつくに教務科やプロの武偵達も気付いてる事だけど、最近はアジアを中心に活動してるらしいわ」

あんまり日本でやると絞られちゃうからね。

上手い事、時期とか共通点をあまり残さないようにするのも疲れちゃうよ。

「ふーん、なるほどね。それを話すつて事は……神崎さんはジャックを追つてるの?」

「武偵の誰もが追つてるわよ。イギリスだつてM I 6が追つてるわ」

「もしかして、神崎さんの冤罪にジャックの罪が入つてるの?」

私のその質問に神崎は少し声の調子を落として言った。

「いいえ、入ってないわ。ただ、武偵として犯罪者を追う。それだけの……当たり前の話よ。もつとも、今はママの冤罪を晴らすのに忙しいから無理に追う必要もないけど」
へえ……それって私を片手間に追うって事かな？

本人には自覚なくても、違う意味に聞こえちゃうって事はよくある事だし。
直感の優れてる彼女なら、そんな片手間で追える相手でもないってことぐらい分かっているだろうね。

「それに、イギリスから出た犯罪者だし……のさばらせておくと面倒なのよ」
なるほど、国の立場の問題って事ね。

まあ、捕まえられるものなら捕まえてみるって感じだけだね。

「それよりも目の前の事でしょ？ 『武偵殺し』の罪は冤罪だと証明できたんだよね？」
「そうね。これも……キンジのおかげよ」

神崎が小さく呟いた言葉。

その素直さが少しは本人の目の前で出せればいいんだけどね。
そうすれば衝突も少なくなるって言うのに。

「ん、お待ちせ」

そう言っただけはティーカップとティーポットを持って神崎が座ってるテーブルの上へと置く。

それから私と神崎は少し雑談をしながらティータイムをした。

飲み終わり、私はキッチンへと物を片付ける。

その途中で神崎に指示をする。

「リビングの隣の部屋で待っててね」

「分かったわ」

1人部屋だからちよつとした個室なんだけど。

それでも2人ぐらいは入れる。

あとは中和薬を私が飲んでおかないと。

と言う事で、これで準備完了。

私も部屋に続く。

「はてさて、どう説明したものかな」

「なんでそんなに楽しそうなのよ」

部屋に入って開口一番に私がそう言うのと、神崎は目を細めてそう言ってくる。

それは、もちろんこれから楽しい事をするからに決まってる。

少し、時間は掛かるけどね。

「取りあえず、イスに座ってね」

私は言いながらも机の大きな引き出しを開けて、人体図を探して取り出す。

まあ、大きさはかなりあつて等身大だけどね。
それを壁に張る。

大人の男性と女性が描かれたよくある感じの人体図。

「そうだね。まずは簡単にどこまで性知識があるかチェックでもしようかな」

「な、なによ」

「さすがに性器つて言つて通じない訳がないよね？」

私がそう言つて神崎に尋ねると、彼女は顔を赤くする。

反応が早いよ。

「こそ、それぐらいは知つてるわよ！ バカにし過ぎよ!!」

「へー……それじゃあ、男性器と女性器の名称も分かるよね？」

「し、知つてるわよ」

知つてるなら顔を逸らさないでよね。

そんな風に、どこを知つてどこを知らないのかをハッキリさせながら神崎に淡々と説明していく。

その度に彼女は顔を赤くして反応する。

そんなこんなで色々と説明していると彼女は――

「は、ははは……」

知恵熱でイスの上でかなりぐったりとしてる。

全く、ここからが本番だつて言うのに。

「まあ、予備知識はこんなもので。次は実際に見てみようか」

「み、見るつてどういう事よ!？」

「さつき説明した性交について実際に見ると言う事だね。あれだよ、説明も大事だけど実際に見るのも大事だからね」

私が笑顔でそう言うのと、神崎はかなり慌てたように早口になりだす。

「もう、じゅ、充分よ! 私は帰る!!」

そう言つて神崎がイスから立ち上がろうとするけど、

「あ、あれ? 力が、入らない!？」

力を入れようと踏ん張つてる。

だけど、イスに張り付いたみたいに彼女は立ち上がれない。

「ふっふっふっふー、さすがのSランク武偵も気付けなかつたみたいだね」

私はワザとらしく笑みを浮かべる。

「ちよ、ちよつと!?! 何をしたのよ霧!!」

「それはもちろん、紅茶の中に筋弛緩剤しかんの一種を入れたからに決まつてるよ。ああ、安心してね。別に呼吸筋が弱くなつて呼吸困難になるほどの量じゃないし安全なものだよ」

「私の物にだけ混ぜたって言うの?」

「いいや、あのティーポットに入ってたの全部」

まあ、そうした方が確実だよな。

私も飲んでるんだし、同じものだからちよつとした違いを気にする事もない。

「じゃあ、どうしてあんたは平然と立ってるのよ……」

「中和剤を飲んだからに決まってるよ。神崎さん、戦闘面では頼りになるけどやっぱりこう言う^{から}搦め手には弱いね。まあ、強襲科^{アサルト}のほとんどに言える事だけだ」

話しながらも部屋を暗くする。

「ちよつと、どうして部屋を暗くするのよ!?!」

「視聴するんだつたら暗くしないと。あ、念のために手錠を掛けさせて貰うよ」

私は神崎の手とイスに手錠を付けて繋げる。

壁に張った人体図を片付けて、それからプロジェクターを起動して壁に投影する。

スクリーンじゃないけど、充分に見える。

さて、どんな反応するかな。

「え、ちよつと……何が始まるのよ!?!」

神崎が騒がしくしてる間にもすぐに映像が流れ始めて見えたのは若い男女。

それから映画のラブシーンみたいに濃厚なキスを始める。

「わ、わ、わ……待って」

「霧、早く映像を止めて！」

「とか言いつつも、気になってるよね〜」

「う、うわわ……」

「眼を閉じるのは無しねー」

「……………」

「おお、激しい激しい」

「……は、わわ」

大人なDVDを見て数十分後。

神崎は変な声をあげてる。おまけに知恵熱が凄い。

さっきよりもイスにぐっすりしてる。

視聴中はなかなか良い反応をしてくれた。

私的にはそれなりに満足。

途中から本人も気になってたのか眼を逸らしながらも釘付けになってたけど。

ちよつとやりすぎたかな。

「はい、お疲れ様」

そう言つて神崎を解放する。

それから神崎は、知恵熱のせいで足取りがフラフラとしたまま私の部屋を何も言わずに出て行った。

キンジにも同じ事やったらどうなるだろうな。

ちよつと試してみたいと思つた。

36 : それぞれの思惑

正しい性知識を貴族のお嬢さんに教えてあげた後日。

キンジを見ると、神崎は顔を赤くして逃走するようになった。

もちろん、私からも逃げるようになった。

まあ、神崎は公私を分けるタイプで切り替えも早いから逃走期間は短く済んだ。

白雪に関しては逆だけど。

彼女の場合はどちらかと言うと、シヨックでキンジを避けていると言った感じだね。

あれだけキンジの身の回りを世話をしたがっていた彼女が、こうも避けると言う事は

……それほど衝撃を受けたんだらうけど。

まあ、さすがの白雪もキスだけで子供が出来るなんて眉唾物まゆつばの話信じてる訳ではな

いだらうし、未だに避けてるけど特に問題は無いか。

普段から妄想癖へんきがある彼女の事だし、それぐらいの知識はある事だらうね。

それよりも……そろそろジャンヌが動き出すはず。

問題は、今回は白野 霧として武偵側で動くのかはたまたジャックとして傍観者でい

るのか、つて言う事だけど。

神崎とキンジに実戦経験を積ませると言うのがお父さんの狙いと言うのは、私でも分かる。

今の時点で何も言わないつて事は、きつとどちらに手を貸しても問題は無いと言う事だろうね。

ダメなら、今すぐにも連絡があつてもいい。

私の考えてる事もきつとお見通し。

それに、ジャンヌは敵対する人物の情報くらいは集めるだろうし……もしかしたら、私に何らかの形で接触してくるかもしれない。

そこら辺の事は置いておこう。

何にしても、理子や夾竹桃の時は傍観者だったけど……今回は役者の一人として舞台に上がらせて貰おうかな？

観るのも良いけど、やっぱり同じ舞台に立つのが何よりも最高の客席だよ。
とまあ、そんな事を考えてるある日の——昼休み。

生徒でにぎわう食堂で私とキンジ、神崎の3人。

最近だとワンセットみたいになりつつある私達が同じテーブルに着いていると、

「やあ。相席、良いかな？」

そう断りを入れて、優男な笑みを浮かべながら不知火が席に着く。

「キンジ、少しばかり尋問させろ。逃げたら拷問に変わって轢いてやるからな」

「あ、ごめん。武藤君の席はないや」

「前から思ってたが、白野さん。俺に風当たり強くないか？」

私の発言に少し肩を落として言う武藤が、椅子を持つてくる。

それからキンジのトレイを押しつけるように自分のトレイを置いて、どっかりと座る。

「貴希ちゃんからお兄ちゃんは適当に足蹴あしげにでもした方が喜ぶって言ったから、そうしたんだけど？」

「あのスピード狂が……兄を何だと」

うなだれる様にして武藤は頭を下げる。

実際にそう言ってたんだから仕方ない。

「ただ、そんな私の言葉は置いておくようにして顔を上げた武藤に対してキンジは用件を聞く。」

「いきなり割り込んで、尋問ってなんだよ……車クルマ輻ダギョウラ科から尋問科でも転科したのか？」

「んな訳ないだろ。それよりもお前、星伽さんとケンカしたんだって？」

その話題か、とばかりにキンジは少しばかり顔を伏せる。

対して武藤の表情は仏頂面^{ぶつちやうづら}。

まあ、惚れた人が落ち込んでるのならそう言う表情にもなるだろうね。

「あれはケンカと言うよりも、どちらかと言うと誤解とどこかのお嬢さんの知識不足が引き起こした事態だと思っただけだね」

「——むうっ!？」

「その原因にお前も入ってるだろうが」

「酷いよキンジ、私のせいにするなんて」

「実際そうだろ……ワザとらしい嘘泣きをするなよ」

よよよ、と手を口に当てて私が顔を逸らしていると普通に返された。

それはそうと神崎が何故か喉を叩いてる。

どうやらもまんを喉に詰まらせたらしい。

一体何に動揺したんだか。

それから神崎は水を急いで飲み始める。

「んぐ、んぐ——はあ……霧、いきなり変な事言うんじゃないわよ!」

それから私を睨み、指を差して怒鳴り始める。

「そっちが勝手に動揺しただけなんだけどねー。一体、何について動揺したんだか」
のらりくらりと言いながら、私は食事を進める。

そんな私に神崎は「ぐぬぬ」と言った感じに悔しそうな顔をする。

下手に喋れば私が揚げ足を取るからね。

それを警戒してるんだらう。

「で、何をしたんだよキンジ？ 星伽さん、結構沈んでる様子だったぞ」

「あのなー、武藤。今の霧の説明通りだ。誤解とかが重なって面倒な事態になっただけだ。と言うかお前、白雪を見たのか？」

「いや。不知火が今朝、星伽さんが温室で花占いをしてたのを見たって言うからよ」

……へえ、温室で白雪を見た、ねえ。

一般校区でキンジと一緒にいた時に、廊下で今朝の予鈴頃に白雪を見た。

その時には、トイレに逃げ込まれたんだけどね。

もし、不知火が同じ時刻に見たなると……あれは白雪じゃないかもね。

観察する暇もなかったし、本物かどうかもあるかもなかったけど。

それは置いておいて、私は不知火に尋ねる。

「花占いか……白雪さんも乙女だね。で、実際に白雪さんを見た不知火としてはどんな様子だった？」

「そうだね。なんだか、アンニュイって感じだったよ。僕に気付いたのと、予鈴が鳴ったのとで慌てて占いは中止しちやっただけ……悲しそうな顔だったよ」

なるほど、廊下で見たのが”白雪に成り済ましたジャンヌ”で本物は不知火が見た方か。

白雪の姿で動いてたとしたら、何か仕掛けたんだらうね。

「花占い、な……何を占ってたんだよあいつは」

「花占いで占う事と言えば1つしかないでしょ、キンジ……ってキンジの事だからどうせ知らないか」

「お前は知ってるのかよ」

「むしろ、知らない方が少ないんじゃないかな？」

常識を知らなきゃ、こうして馴染む事も出来ない。

対して私の言う事にキンジは、「ふーん」と興味がなさそうな顔をしてる。

「花占いはあれだよ。恋占いの1つだよ、花びらを1枚ずつ取りながらスキ・キライ・スキ・キライってやるのだね」

「あー、アレか……」

「なんだ、知ってたの？」

「知ってるも何も、いくらなんでも古いだろ」

「割とメジャーだと思うけどね。一体、誰と誰の恋について占ってたんだか……」

「さあな。あいつにも好きな人くらいいるだろ」

そのキンジの発言に私と不知火は視線を合わせ、私に関しては首を振る。

私の発言に疑問を持ってない辺り、相変わらず自覚と言うか白雪の好意に気付いてる様子はないね。

不知火は引き続き話をする。

「それで、なんで別れちゃったの？ もう愛が冷めちゃったとか？」

「お前、人の話を聞いてたか？」

キンジは呆れるように食事の手を止めて言う。

それと同時に神崎は『愛』と言う単語に反応してるけど、さつきみたいにもまんを詰まらせてはいない。

「そもそも、俺と白雪はそう言う関係じゃない。言うなれば、ただの幼馴染みだ」

「はぐらかし方としてはポピュラーな言葉だね。白野さんはどう見る？」

「さあてね。キンジと白雪さんの関係がどうであれ……白雪さんの恋とやらを応援しようと思うけど、その相手はかなり朴念仁と言うか鈍感らしいから、一筋縄ではいかないと思うよ」

その言葉に眉を寄せたキンジが私に聞いてくる。

「なんだよ、お前は白雪の相手が分かってるのか？」

「知ってるよー。広めたら他の人たちが騒ぎそうだから、もちろん広めないけど」

「そらそうだろうな。武偵高の連中はバカ騒ぎが好きだし、広めない方がいいだろう」
自分の事を言われてるとも露知らず。

自覚がないから皮肉も通じない。

ある意味、愉快な状況だね。

「どっちにしても、ウワサは違うってことなんだね」

「……ウワサ？」

「そうだよ、遠山君。結構騒いでたみたいだったからね。ウワサにもなるよ。ウワサでは神崎さんがヤキモチをやいて、星伽さんに発砲したって言う風に聞いている。対して星伽さんは神崎さんと遠山君がうまくいつてるのに嫉妬して女子2人が決闘……って言う感じかな？ 最後のは僕の推理だけ」

「正直な話、不知火の推理は当たらずとも遠からずって感じだね。どこかの誰かさんがキンジの話を嬉しそうにするからそう言うウワサも立つに決まってるよ」

私が言いながらチラリと神崎に視線を向ければ、彼女は再び動揺して、もきゅもきゅとももまんを口の中に頬張り始める。

それから飲み込むと、目を吊り上げさせて立ち上がり。

「ハ、ハの——ヘンタイっ!!」

顔を赤くして私の隣にいるキンジに殴りかかる。

……やれやれ。

パシツと言う音と共に私は神崎の手首を掴む。

そして、キンジは目の前に神崎の拳がある状況。

「食事中に人に殴りかかるのが、貴族のテーブルマナーか何か？」

「……ぐっ」

「まあ、落ち着いて座りなよ。冗談にいちいち反応してたら、キリがないよ」

「む、むむむ——ふんっ！」

どっかりと座って神崎はそっぽを向く。

私は諭すように言う。

「照れ隠しなのは分かるけど、暴力は感心できないね」

「……悪かったわよ。って、照れ隠しなんかじゃないっ！」

口を尖らせての謝罪からのツッコミ。

本当に素直じゃないね。

不知火と武藤は苦笑いをしてる。

そして、キンジはと言うとホツとしたように息を吐く。

「すまん、霧」

「いえいえってね。今のも貸しーつに勘定しても良い？」

「……………」

「冗談だって、そこまでしつこく貸しにしたりしないよ。ただ、今のくらい反応してもよかつたんじゃないかなーとか思ったりもしたけど」

「はは、遠山君も痛い所を突かれたね」

私のダメ出しに不知火は便乗する。

「……………そうだな」

そのキンジの言葉に、誰もが驚いた。

特に神崎は驚いてる。

いつものキンジなら「勘弁してくれ」とか言つてはぐらかそうとするのに。

ちよつとは前向きになつて言う証拠かな。

「……………そう言えば不知火。お前、アドシアードの競技に何か出るのか？」

キンジが話題を変えて来た。

あんまり、白雪とかの事を掘り返されたくないんだろうね。

アドシアード——武偵高の国際競技大会で、拳銃射撃競技、狙撃競技、格闘競技と言つ

た様々な競技をする。

まあ、スポーツで言えば武偵生徒によるインターハイとかオリンピックみたいなもの

だね。

「いいや、僕は補欠だからね。競技には出ないよ。武藤君も同じで、補欠扱いだからイベント手伝ヘルプいって言う事になるね」

つまり、何も決まっていって言う事だね。

「霧とアリアは？」

「私は愛想が良いからチアでもやってな、だつてさ」

「あたしは拳銃射撃競技代表に選ばれたけど、辞退したわ。霧と同じでチアだけをやる」

「アリアはともかく、霧はてつきり何かの代表にでも選ばれてると思つてたんだがな」

「そうだね。Sランクに近い人って言われてるんだから、準レギュラーにでも選ばれてるかと思つただけだ」

キンジが意外そうに言つて、不知火も意外そうに言う。

「私は器用貧乏みたいなものだよ。腕は一流と二流の間だけど、超一流とか専門家スペシャリストには勝てないのは当たり前だよ。だから、特にお誘いとかはなかつたよ」

「いや、白野さんは充分に汎用性が高過ぎて逆に凄くと思うんだが」

武藤の言葉にキンジと不知火は静かに頷く。

汎用性が高くて、真正面から戦えば負ける時は負けるんだよね。

それから神崎は気付いたように尋ねる。

「そう言えばキンジは、何やるかは決まっていらないのよね？」

「あ、ああ……まあな」

「じゃあ、キンジもやりなさいよ。チアのバンドは男子がやるんでしょ？」

キンジは神崎の言葉に考えるような顔を少しした後、

「バンド、か。特にやる事もないし、それでいいか」

投げやりっぽく答えた。

行き当たりばったりだね。

神崎の言う通り、バンドは男子だけ。

しかも女子を前面に押し出すから後ろで演奏するだけなんだけどね。

「僕もそれでいいかな？　一緒にどうだい武藤君？」

「そうだなあ……演奏できる男ってカツコイイだろうし、一つやってみるか」

行き当たりばったりその^{不知火}2とその^{武藤}3だね。

「それにしても神崎さん、代表に選ばれて蹴つちやうなんてもつたいないね。アドシ

アードでメダルを取れば、色々と推薦も取れて、キャリアにも箔が付くのに」

「あたしには先を考えてる暇がないのよ。今すぐ”やらなきやいけない事”がある。だ

から、競技の練習に出てる暇もないわ」

その意志が籠もった言葉に、キンジは神崎の言っている事が分かった顔をしてる。

発言した不知火も、何かあるんだろうと言う顔をして、すぐに笑顔へと戻りそれ以上

は何も言わない。

それから突然に神崎は無い胸を張って、腕を組み、座りながら背伸びをしてる。

ああ、これは見下す視線を作ろうとしてるんだね。

神崎の身長じゃあ子供の背伸びみたいに見えるんだけど。

「それ・よ・り・もっ！ キンジ、あんたの調教と秘密を探るのが先よ！」

まあ、そうやって誤解するような事を言う。

「お、おいおい……お前ら変な事でもしてるんじゃないだろうな？」

「心配ないよ。私が見てる所で、そんな事はしてないし……そもそもキンジと神崎さんにSMプレイなんて出来ないよ」

「——ぶっ！」

私の発言に呆れながらも水を飲もうとした武藤がテーブルの下へと吹き出す。

「どうかしたの、武藤？」

「いや、白野さんからそんな単語が出るとは思わなくて」

「言っておくけど、私は知識だけはあるからね。今までそう言うの知らない人だと
思ってた？」

「意外ではあった」

そう言う武藤は苦笑い。

初心だと思つてたなら残念だったね。

「一体、いきなりどうしたつて言うんだよ？」

キンジは武藤と私の会話に疑問を覚えながら尋ねる。

「お前、今の白野さんの言つた言葉の意味分かつてないのか？」

ありえねーとばかりに武藤は言うけど、キンジは意味分からんと言つた表情をするだけ。

そんなキンジを見て、武藤は私に顔を近づけてくると同時に不知火もさりげなく顔を近づけてくる。

そして、小声で尋ねてくる。

「なあ、白野さん。あいつ、マジで分からねえのか？」

「キンジは女嫌いだからねー。性知識なんて中学生レベルで止まってると思うよ？」

私は武藤に正直に答える。

「遠山君つて天然？」

「それは誑たし的な意味で？」

「もちろんだよ」

「そうだろうねー。天然の女誑たしだよ。それにフ×オとか、パ×リとかも知らないし、下手したら薬指に指輪をはめる意味も知らなさそう」

「白野さん、随分とオープンだね……」

「女性はそこら辺、進んでるからね。それに所詮は単語だって言う風に私は思ってるから別に私語で言う分には、羞恥心とかは特にないし」

そもそも羞恥心そのものがないし。

なるほど、と不知火は言つて、変にからかう事もなくさり気なくキンジと神崎を見る。

武藤は武藤で何かショックを受けてる。

「大丈夫だよ。天然じゃあどうしようもないって」

「何のフォローだよ?!」

小声で勢いのあるツツコミを武藤は私に言ってくる。

私が顔を引くと同時に、他の2人も自分の席に戻って行く。

私はいつも通りの笑顔。

不知火はホストのようなスマイルをしてるし、武藤は少し苦笑いをしてキンジを見てる。

ただ2人に共通してるとしたら……視線が残念なものを見るような感じってことかな？

その視線を向けられてる本人は神崎に向かって色々と言ひ合ひをしてる。

だから、視線に気付く事もない。

この日以降、キンジには『たらし』と言うあだ名が増えたのは当然と言えば当然なのかもね。

キンジの性知識が中学生レベルで止まってる事と、天然の誑しであると言う事が分かった翌日。

朝の7時、体育館とレインボーブリッジに向けて建てられ巨大な看板裏の間の細い長い空き地に私とキンジはいる。

どうやら私と武藤、不知火が小声で話してる間に朝練の話をしていたらしい。

それで、私もいると言う事はもちろんその朝練に私も付き合わされてる訳なんだけど……

キンジが少し前向きになったから、本人が望むのなら私が少しブランクを取り戻す手伝いをしようって言う魂胆。

私がキンジの心を折っておいて、私が立ち直らせて、私がキンジを成長できるように動いてる。なんて回りくどい事やってるんだかって思うかもね。

事情を知ってる人が見たら……

だけど、楽しいんだから仕方ない。

こんな愉快的状況にいるんだから、一緒に踊らなきゃ損ってね。

なんて考えながらも私は木の幹に腰掛けて、読書中。

読んでるのは洗脳とか暗示、催眠関係について。

まあ、使い手もイ・ウーにはいる事だしそろそろ手を出し始めようと思ってたから、この機会に学んでおこうと思ってたし、基礎は出来てる様なもの。

それに少しばかりヒルダの動きが怪しいってリサが言ってたし、理子に関しても様子が変って言う風に聞いている。

さては……手癖の悪さが出たかな？ あのコウモリ親娘^{おやこ}。

ここは理子が助けを呼ぶか、色々と日の当たる場所まで出てくるのを待つしかないね。

焦る必要もない。

どうせ、理子が救われるのも織り込み済みなんですよ？ お父さん。

「何か用？ 神崎さん」

見ていた本を下げて、目の前にいるチアガール姿の神崎にそう声を掛ける。

「あんた、何してるのよ？」

「見ての通り読書」

「随分と物騒な分野の本を読むのね」

「こう言うのは知っていたら防げるからね。特に神崎さんみたい直情型の人間は……」

簡単に”墮ちる”から、学んでおいた方が良いんじゃない？」

「……む。あたしがそう簡単に無法者になると思ってるの？」

「そうかもね。神崎さんの場合、選択肢を突き付けられたらきつと迷って選べないタイプだよ。そこからどんどん潰け込まれて、最後には……なーんて」

笑顔で茶化すけど、本人は面白くなさそうな顔をする。

「笑えない冗談ね」

「まあ、あり得ない話じゃないからね。世の中そう言う奴もいるって事だよ。ところで、キンジには何をさせるつもりなの？」

「それをこれから説明するのよ。だから、あんたも来なさい」

「——来て欲しいって、言ってる欲しいね。そんな命令口調じゃなくて」

私が笑顔でそう言うと、神崎は少し呻うめく。

「……あんた、やっぱり苦手だわ」

顔を逸らし、彼女は背を向ける。

「これからキンジの調教について——」

「訓練か特訓ね。人はモノじゃないんだよ」

「……訓練について説明するから来てちょうだい」

あの上から目線を訂正するのも疲れちゃうよ。

なんでかな、彼女の命令になんか反抗したくなるのは……

同族嫌悪みたいなもののかな？

いや、それだとお父さんに対して説明が付かないんだよね。色々と。

考えながらもキンジの傍へと来た瞬間に神崎が、

「……おほん」

偉そうに咳払いをする。

その仕草にキンジは少しだけ顔を引くつかせる。

が、彼女はそのまま説明に入る。

「取りあえず、特訓の内容について説明する前に……私の中では、キンジ。あんたはSランク武偵だわ」

「お前の中ではな。そもそも、常時Sランク武偵って言う訳じゃない」

「余計な口は挟まない！」

「そう言う神崎さんは、銃に手を伸ばす癖をやめた方がいいと思うけどね」

私に言われて、彼女は銃に伸ばしかけた手を止める。

何かの拍子で飛んできたら反応して、銃弾を斬りそうになる。

そうなたら……私がSランク以上の実力を持つてる事が露呈する事になるんだから。

「と・に・か・く、よ！ あんたがバスジャックやハイジャックで見せた實力は本物だった。だけど教務科マスターズの評価通りに調子に波があつて、上手く力を使いこなせていない」

その説明に対してキンジは少しだけ反応する。

まあ、着眼点と言うか相変わらず直感はいいね。ここでも冴えてる。

確かにキンジはHSSを上手く使いこなせてる訳ではない。

「問題はあんたの力を引き出す『鍵』が必要つてことよ。だから、あたしの見立てでは――」

ごくりとキンジは唾を飲み込んで、

「――二重人格よ」

そして脱力。

よかつたねキンジ。彼女に推理力があつたら今頃バレてる所だよ。

対して神崎は自分の答えに自信を持つてるのか、勝手に納得してる。

「きつとあんたには、危機的な状況に陥ると出てくる人格があつて、その人格があんたを護つてるのよ。霧から聞いた、あんたのお兄さんが……その、いなくなつた日を境さかいにシヨックを受けて、あんたの中の人格があまり出てこなくなつたのよ」

言い辛そうな事を頑張つて言ったのはいいけど……推理に関してはやっぱり駄目だね。

『上手く力を使いこなせてない』『その原因がお兄さん』と、直感で言ってる部分は合ってるのに予想してる所が全部外れてる。

「どうかしら、あたしの推理は？」

「いやー、私からは答えは言えないからね」

神崎の自慢げな質問に、いつも通りの笑顔で私は言うけど……正直な事を言うなら赤点だよ。

「その通りだ。よく分かったな」

キンジは勘違いしたアリアにそのまま勘違いして貰うつもりなのか、あつさりとそう言う。

感心したような相槌を打ってる。

「ここは合わせてあげるか……」

「いいの？ そんなにあつさりと観念しちゃって」

神崎が私を見てないのいい事に、私はワザとニヤニヤした笑みを浮かべる。

「いいんだよ。これで」

「ふふ、ようやく観念したわね！」

キンジのニュアンスは『勘違いさせたままでもいいんだよ』って言う事なただけ。

そんな事を知らない神崎は嬉しそうに言う。

「それで、どう言う特訓をするつもりなんだ？」

「もちろん、あんたの人格が危機的な状況で現れるって言うのなら……戦闘のストレスにさらしまくるのが特訓の第一段階よ」

言いながら神崎は、背中に隠してあった小太刀をキンジに向ける。

「お、おい待て待てッ!？」

「なによ、今更やめるのなんてなしよ!」

「その前にお前は俺を殺す気か!」

「さすがにそんな事しないでしょ。実際にやったら神崎さんが檻の中に入って、母親を救うどころじゃなくなるよ?」

「全くよ。あんた、本当にバカキンジモードだとバカね」

私の説明に神崎が余計な一言を付け足す。

でも、今のはそう言われても仕方ないけどね。

「簡単に言えば、これはあんたを覚醒させてそれから反撃の流れを作る訓練なのよ」

「つまり、カウンターって事ね」

「そうよ。霧はよく分かっているわね」

神崎は満足そうに頷いてるけどキンジはいまいちイメージが出てこないのか、しかめた顔をしてる。

「カウンタ―って言っても、何をするつもりだよ？」

「まずは真劍エッジ・キヤッチング白刃取りね」

「ちよ、おまつ——」

神崎が振り下ろした小太刀に反応も出来ず、キンジは立っている。

左肩の寸の所で彼女の刀は止まっている。

防弾・防刃制服とはいえ今のままの速度で下ろしたら、ちよつと肩の骨に罅ひびでも入ったかもね。

それから、ひゆる、と言う風を切るような音共に流れるように彼女は小太刀を背中に仕舞う。

「今のタイミングで500回、まずは頭の中でイメージする。私の理想としてはこうよ。まずバカキンジがいる。次に、戦闘時にあんたが覚醒。そして、その場で反撃。これがあたしの思い描く理想」

シンプル・イズ・ザ・ベストって言うレベルじゃない。

単に大雑把おおざっぱなだけだよ……それ。

彼女には教師も出来そうにはないね。

まあ、そもそも人に説明するのが下手な人が人に上手くものを教えられる訳がないか。

それに、その前にキンジにはやる事もあるしね。

「実戦で使えなきや意味がないけどね。それも組み込むかな」

「いきなり何の話だ」

「そりやあもちろん、キンジはブランクがあるからね。体のキレが悪いし。だから、私もここにいます」

「それってつまり——」

「久々の組み手ってやつだね。今のキンジの動きは酷いよ。蘭豹先生が見たら、先生

の特別基礎訓練メニューを3セットやらされるほどにね」

「イヤな事を思い出させるな……」

高校から武偵になった人達とか中学から武偵だったに關係なく、まさしく地獄だからね。

大体そこで篩ふるいにかけられるようなものだし。

「アリアと同じチアガールじゃなくて制服でいるかと思ったら、そう言うつもりだったのかよ」

「二応、持ってきてはいるけど。なんならチアガール姿でやってもいいんだよ?」

そう言うときんじは私から視線を逸らす。

「あ、ああ、あんたね! そんな事して恥ずかしくないの!？」

何故かは分からないけど、神崎は赤面して反応してる。

「恥ずかしいって何が？　そもそも、チアガールなんて人前に出るのが普通なんだから何を恥ずかしがる必要があるんだか」

「だ、だからって、チアの姿でやったら色々……見えちゃうじゃない」

「どうせ下はアンダースコートとかスパッツとかだから問題無しだよ。そもそも、チアの姿でやるとは言っていない。で、キンジはどうする？」

私がそう言うと、キンジは逸らして視線を戻す。

「お前と徒手格闘か……久々だから、お手柔らかに頼むぞ」

「徒手格闘？　違うよ。神崎さん、小太刀を貸して」

「いいけど、何に使うのよ」

彼女はそう言いながら、鞘ごと投げて渡してくる。

「ナイフ・ながもの長物に対する組み手に決まってるでしょ？　最初は徒手格闘から、とも思ってたけど……基本は体が覚えてるし問題ないかと思ってる。それに、実戦形式で出来なかったら真剣エッジ・キャッチング白刃取りを習得したって意味ないよ」

「二理あるわね。じゃあ、それで行きましょ。あたしがチアの練習をしている間は霧が、霧が練習している間はあたしがキンジの相手をすればいいわね」

神崎の言葉にキンジは冷や汗を流してる。

「ま、これも戦闘での勘を取り戻すためだと思つて諦めなよ」

私は笑顔でそう言いながらも、視線だけを左方向にある木の影に向ける。

そこには隠れるようにして見てる白雪。

他の2人が気付いてないけど、私は気付いてる。

と言うか、妙に悲しそうな顔しちゃつて。

私がそちらに顔を向けようとする、白雪はそれよりも速く木の後ろに隠れた。

アレは……”本物”か。

朝練があつた放課後。

私は昼休み『3大危険地域』と呼ばれる教務科マスターズから呼び出しがあり、その教務科へと

私は向かっている。

どう言う用件なんだろう。

私の変装がバレた……つて言う訳ではないでしょうね。

もしそうなら、今頃は監視されてるか不審な動きがあるはず。

そもそもここでは目立った不審な動きなんてしてないし、怪しまれる要素も特にな
い。

そんな訳で、堂々と呼び出しがあつた綴つづりと言う教師がいる部屋の扉に立ち、ノックす

る。

『あー……開いてるよおー』

気だるそうな女性の声が返つて来たので、扉を開ける。

「失礼します」

そう言つて私が入ると目に飛び込んできたのは黒い革張りのイスに腰掛けて足を組み、煙草たばこっぽいものを吸つてる綴先生。その向かい側にはパイプイスに座つた白雪がいる。

私が入つて来た事に白雪は少し驚いてる。

「お話があるとと言う事で来ましたけど、白雪さんがいると言う事は何か関係が？」

「まあねえー。そこら辺の事を詳しく話すからあ……適当に座りなよー」

気だるそうに黒いコートを少し直して、私の質問にそう返して来た。

コートの乱れはまだまだ全然直せてないけど。

私は取りあえず壁に立てかけてあつたパイプイスを持ってきて、白雪の隣に座る。

「はあい……詳しく話す前にここでもんだーい。どうして、白野はここによばれたのでしょうかあ？」

「別に悪い事してはないですからね。簡単に考えれば依頼で、白雪さんがいる事を考えれば依頼の内容は彼女の護衛とか……かな？」

「だーい正解。ま、ちよつと考えれば普通に分かるわな……」

褒めてる割には感情が籠もってない。

それから彼女はそのまま煙草つぽい物を灰皿に押しつけて火を消し、2本目を灰皿から取り出して火を付けて説明し始める。

「腕の立つ奴がさあ、大体はアドシアードの代表に選ばれてるし……星伽の護衛が出来る奴が白野くらいしかいないんだよねえ」

「神崎さんは？ 確か、アドシアードの代表を蹴ったからフリーなはずですけど」

「そう言えば……アンタは遠山と一緒に神崎ともよくつるんでたな。神崎に関してはなあ……一応、東京武偵高で預かってるとは言えアタシら教師から依頼を出す訳にはあまり行かないんだよね。自分から任務クエストをこなすならともかく、あんまり依頼を押し付けるとロンドン武偵局が出張るからさあ」

「つまり、面倒な事になると」

「そう言うこと」

本当に面倒そうに綴は言いながら煙を吐く。

どこでも少し厄介な扱いになってるね、神崎。

それから綴は緩慢かんまんな動きで、顔を私から白雪へと向ける。

「それでさあ星伽い。最近、おまえ成績が下がってるよな……何か変化でもあったあ

？」

「いえ、変化なんて……何も」

そんな風にあからさまに落ち込んでるのに何もいなんて嘘だつて分かるに決まってる。

私は少し息を吐いて白雪を見て、綴も少し目を細めて何かを見透かしたような顔をしてる。表面上、何も変化はしてないけど。

「ふあ……まあ、成績はどうでもいいんだけどー」

先生としてはダメな発言だね。

と言うか、普通に考えたら言っちゃダメなんだけど……ここはキンジの言う”普通”じゃないから気にしない。

「それでさー、デユランダ単刀直入に聞くと星伽はコンタクトアイツに接触された？」

「——魔剣に、ですか？」

ジャンヌの動きは勘付かれてはいるのか……

だけど、確信を持つてはいない。

そんな感じだね。

白雪は続けて言う。

「それは……ありません。そもそも、私程度の人なんて——」

「謙遜するねー。アンタは伸び代があるんだし、武偵^{ウチ}高^チにとつても秘蔵^{ヒゾウ}っ子^コなんだぞー……」

そんな白雪の弁明を綴は遮るように言う。

なるほど、そのために私を呼んだのか。

私と白雪は友人関係。仲もそれなりに良い。

だから教務科^{マスタース}は、護衛に積極的ではない彼女に対して私を呼んだ。

まあ、譲歩^{マカ}つてヤツだろうね。

親しい私を護衛に付けさせる事で、少しは態度を軟化させて貰おうと言う狙いなんだろう。

「星伽い、いい加減にボディガードをつけるってば。諜報科^{レザト}はアンタが魔劍^{デユンダ}に狙われ
てる可能性が高いって言うレポートを出したし、超能力^S捜査^S研究科^Rだつて似たような
予言^{ヨロコバ}が出る」

「でも……その、ボディガードは——」

「白野も、星伽に何か言つてやりなよ……お友達なんだろう？」

そう言う綴の目は『説得^{セツトク}しろ』って言つてる。

私の察^{サツ}しが良い事を教師であるこの人は分かつてるだろうし、今回は武偵^{ウチ}として動く
予定^{ヨクゼ}でもあるから乗^ノつ^クか^クつておこよう。

「白雪さん、私が融通を利かすから心配してる事は気にしないでおきなよ」

「霧さん……」

デユランダ

「魔剣の存在は胡散臭がられてるけど、徒勞で終わるならそれに越した事はないよ。

それに、ボディーガードって言ってもアドシールド終了までですよね？」

「そうだねー。アドシールドには外部の連中もわんさか入って来るから護衛期間はそれまで……正直な事を言うと、保険としてもう1人くらい欲しい所なだけだよ」

私の質問に綴は答えながらも通気口に視線だけを動かす。

私と綴は通気口に向かってグロック18を同時に向ける。

「その前にネズミを炙^{あぶ}り出そうかあ……？」

綴がそう言うと、通気口のカバーがガシャンと外れて落ちてくる。

そして、誰かの影が降りてくる。

私と綴のグロック18の銃口はそのまま降りて来た人物を追っているが、その人物は臆することなく――

「――そのボディーガード、あたしもやるわ!!」

特徴的な声で宣言した。

それから遅れてもう1人、通気口から落ちてきてその下の人物を下敷きにする。

「うおっ……!!」

「みぎや!？」

変な声をそれぞれ上げて、もつれ合う。

「ちよ、ちよつとバカキンジ?! 変な所に顔を押しつけんじや——にやつ!？」

神崎の言葉の途中で銃を仕舞った綴は、彼女とキンジの襟首を掴んで壁に向かって投げ飛ばした。

全く、こんな所まで来ちゃって。

そんなネズミ2匹——もとい2人にコキコキと肩を鳴らしながら綴は近付き、私は彼らに至極当然な事を聞く。

「2人して何してるの?」

「いや、これは……だな」

キンジは答えにくそうな顔をしてる。

どこら辺から見たのかは大体分かってる。

成績のくんだり辺りから聞いてたんだろう。

「んー? あー、誰かと思えばハイジャック解決したカップルかあ」

そう言いながら、綴は神崎のツインテールの片方の根元を引っ張り顔を近づける。

「ウワサをすれば影が差すってヤツだねえ。神崎・H・アリア——タイ記録も作ってる、ヨーロッパで活躍するSランク武偵……だけど、アンタの手柄はロンドン武偵局に横取

りされてる。協調性に欠け、独断専行が目立つせいで厄介払いされてる事もあるんだってなあ?」

「そんなの、あいつらが勝手にあたしを妬んでの行動に決まってるでしょ! ちよつと、髪を引つ張らないですよ!」

綴の淡々とした口調と、怪しげな雰囲気^{アツキ}に怯む事もなく神崎は噛みつく。

「そう言えば、蘭ちゃんから聞いたけど……アンタ、およげ——」

「わあ——!!」

神崎は大声で綴の話^{ワガ}を遮った。

全く、特徴的な高音^{アツキ}なんだからあんまり騒がないで欲しいよ。

耳に響く。

綴も同じなのか片耳に指を突っ込んで防いでる。

「カナヅチ——泳げない事ぐらい、強襲科^{アサルト}じゃあ既に周知の事実なんだから……今更防いでもね〜」

水泳の時間だけいつもいないし。

「ち、違うわよ霧! 浮き輪があれば泳げるわよ!」

「なかつたら?」

「ちよつと体が水に沈むだけで、泳げない訳じゃないわよ!」

それを一般的には溺れてるって言うんだけどね。

イギリスにいた時は雷も怖がってたし、神崎の苦手なものとして纏めると――

・雷

・水、もとい泳ぐこと

・恋愛関係

1つ目はそう頻繁ひんぱんに起こらないにしても2つ目が致命的だね。

綴は神崎を解放すると、キンジへと向き直る。

「で、こちらは遠山 キンジくん。白野の元パートナーで、元Sランク武偵……解決した事件は青海の猫探しに、武偵高行きのバスジャック、ANA600便のハイジャック。なんで事件の規模がどんどん大きくなってるとるんだらうねえ？」

「俺に聞かないでください」

「それで、違法改造のベレッタはどうした？　なくしたか？」

チラリとキンジのホルスターを見れば、綴の言う通り銃がない。

威圧するような口調にキンジは怯む。

武偵が銃を落としたら、罰則どころじゃないけどね。

一般人の手に渡ったら面倒な事になるし。

そう言えば違法改造してたね……あのベレッタ。

確か、3点バーストとフルオート射撃が出来るように平賀 文っていう装備科の子に改造して貰ってたんだっけ？

「なくしたんじゃないかって、こないだのハイジャックで壊されました。今は、米軍から流れた合法のやつを取寄せ中です」

「で、そのまま装備科に流して改造をして貰う予定なんだろう？」

放任主義とは言え、見てる所はちゃんとしてるんだよね。

対してキンジは、綴にズバリと言われて冷や汗を流してる。

「まあ、それはどうでもいいんだけどー」

違法改造を『どうでもいい』で流したよ。

でも、カスタムと言うか違法改造してる生徒なんて武偵高には掃いて捨てるほどいるからね。

私は全く改造とかはしてない。

変に銃にクセを付けるのもやりにくいし。

それから綴は、視線を再び神崎へと向ける。

「ボディーガードを引き受ける、って事でいいんだよね……？」

「そうよ。あたしが24時間体制の無償で引き受けるわ！」

彼女は立ち上がって、そう宣言するけど……それをされると依頼された私の立場がな

くなるんだけど。

分かってるのかな？

「あー、私の立場は？」

取りあえず、手を挙げて静かに私は綴に尋ねる。

「別にい、白野に関しては正式な任務クвестで事で通しておくから……そのまま星伽の護衛を引き受けな。それに、報酬1人分で2人も雇えるって話なんだからお得だしねえ」

簡単に言えば、自ら任務クエストをこなすならロンドン武偵局は出張らないって言う話だったから、彼女にとっても……と言うか教務科マスターズにとっても神崎が名乗り出たのは渡りに船って事だね。

神崎は神崎で、魔劍デユランダルが白雪を追ってるならチャンスだと思っただらう。

武偵としての本分もあるだらうけどね。

「と言う訳なんけど、星伽い？」

「そ……そんな、嫌です！ 霧さんならともかく、アリアがいつも一緒だなんて！ 綴が尋ねると、今まで黙っていた白雪はハッキリと拒絶した。

いや、まあ……分かってはいたけどね。

そう言う反応をする事ぐらい。

「あたしにボディガードをさせないと、コイツがどうなっても知らないわよ！」

神崎はスカートの下のレッグホルスターから銀色のガバメントを取り出すと、キンジのこめかみに銃口を押し当てる。

探偵の子孫が脅迫しちやったよ。

言い回しも犯人のそれだし。

キンジは私に向かって、冷や汗を流しながら目で助けを求めてるけど。

悪いね。面白そうだから、このまま傍観させて貰うよ。

いつも通りにニコニコしながら見ると、キンジは私が助けるつもりがないのが分かったのか、シヨックを受けた顔をしてる。

白雪に関しては、両手で口を塞いであわあわとしてる。

神崎がキンジを殺す事がないと分かってても、彼女にとっては気が気ではないだろうね。

「なるほど、そう言う関係かあー……」

「そう言う関係ですよー」

綴の言う事を肯定するように私が乗っかる。

それから3人を見て綴はニヤニヤとした表情をし始める。

「それでえ、星伽はどうすんのお？」

この状況を楽しむかのように白雪の担任である彼女が尋ねると白雪は、

「わ、わわ、分かりました！ だけど、じよ、条件があります！」

勇気を振り絞るように座りながら腕を伸ばし、

「キンちゃんも、私を護衛してください！ に、24時間体制で！」

涙声で声を張り上げた。

「私も、き、キンちゃんと一緒に暮らしますうー！」

「く、ふふっ……」

この時の魂が抜けたようなキンジの表情を見て、私が笑い声押し殺したのは秘密。

理子みたいな笑い声になっちゃった。

そう言えば、あの子もどうしてるんだらうね。

37：聖女の葛藤

ボディーガードを引き受けた翌日。

白雪は行動が早かった。

キンジも護衛をする事を条件に、私と神崎の護衛を引き受ける事になった後の白雪の行動は“キンジの部屋に引越す”と言うことだった。

随分と大胆に動くよね。

そんな訳で、今朝から引越しの作業中。

「ゴメンね、武藤君。朝早くからこんな事を頼んじゃって」

「いいんすよ、星伽さん。これぐらいの事は朝飯前つスから！」

そして、白雪の荷物運びをどこから聞きつけたのか、協力者である武藤は誰が見ても分かりやすいぐらいにやる気に満ち溢れてる。

彼は白い軽トラに載せた荷物をせっせと降ろしている。

「霧さんも、なんだかゴメンなさい」

「私は依頼でやってるし、気にする事はないよ」

にっこりと笑って返し、私もダンスを運びこむ。
友人を助けるのは当たり前前の事だしね。

「そのダンスは俺が持つから、他の荷物を運んでくれ」

運んでる最中、ダンスの影になって見えない角度から声がした。

角度を変えてそちらを見ると、キンジがいた。

「気を遣^{つか}つてるならご心配なく」

「いや、力仕事は男の仕事だしな」

「とか言つて、貸しを少しは返したいんでしょ？」

むふー、と言った感じに私が笑みを浮かべると凶星なのか『うぐ』とキンジは声を上げる。

気の利いた事なんてキンジはあんまりしないからね。

「悪かったな……見え透いた感じで」

「冗談、冗談。じゃあ、しっかりと働いてねー」

そう言つて私はキンジにダンスを渡す。

それから軽トラに戻る。

「それにしても……男子寮に星伽さんは、荷物を置きに来たんですか？」

「え？ ううん、違うよ。今日からね私、キンちゃ——遠山くんの部屋に住むの」

武藤が尋ねた事に白雪は恥ずかしそうに、だけど嬉しそうに答えた。

「え、き、キンジの部屋あ!？」

武藤は絶句して、私を見つけたかと思うと詰め寄って来た。

それから私の前で涙目になって訴えるように話しかけてくる。

「ど、どう言う事なんだ白雪さん!？」

「まあ、ボディガードを依頼されてね……白雪に。それで、成り行きでキンジの部屋に住みこむ事になったんだよ」

私はちよつと苦笑を交えて、彼に教える。

「もも、もしかして、白野さんも!？」

「そうだけど? キンジの事だし、間違いなんて起きるはずもないけど」

私は言いながらも、最後の荷物を持って男子寮の方へと歩く。

言い忘れてた事があつた。

「ああ、それと……あんまり情報を漏らさないでね。これについては言わなくても分かることだろうけど。あとはそうだねー、お兄さんが貴希ちゃんに黙ってモナコグランプリのチケットを入手したのを知ってるからね。貴希ちゃんに黙って行くつもりでしよ?」

「な!?! 一体、どこから」

「さあて、どこからだろうねー」

思わせぶりに言ってるけど、貴希ちゃん本人から聞きました。

つまりは既にバレてるんだよね。

脅してる様で、脅してない。

「私の場合は教務科マスタイズからの依頼でもあるし……と言う訳で、他言無用でね♪ 今度、一緒にお茶でもしてあげるからさ」

笑顔でフォローの言葉を付けくわえて私は白雪と一緒に去ると同時に、武藤はあんぐりと口を開けて呆然とした。

白雪に関しては、さいごに感謝を籠めたお辞儀をしてたけど……果たして彼の目に映ってたかどうか。

キンジの部屋の玄関に辿り着いて、白雪が扉を開ける。

「その……お邪魔、しまーす」

妙にオドオドとした雰囲気が入って行く。

「何でそんなによそよそしいの？」

「いや、その……何だか緊張しちゃって」

はにかむよう白雪は笑ってるけど……この間、大暴れしてた時は何だったのかな？

そんな事を思いながらも私は靴を脱いで、部屋の中に荷物を運んで行く。

荷物を置いて神崎の方を見ると、どうやら天窓になにやら細工をしている。

ベランダの窓に目を向ければ、赤外線探知機。

どうやらこの部屋に警戒網を敷くみたいだね。

「それで最後か？」

「ああ、キンジ。そうだね。私の足元に置いてある荷物で最後だよ」

私が答えてるうちに白雪も入って来て、

「ふつつかものですが……よろしくお願ひしますっ！」

綺麗な90度に腰を折ったお辞儀をし始める。

それと同時に彼女の甘い香りもする。

「何を今更テンパる事があるんだ？」

「だ、だってキンちゃん部屋の本格的に住みつくなんて今日が初めてだし……」

キンジの言う事に白雪は上目遣いで答えるが、キンジにとっては角度的に胸が強調されて目に毒。

すぐさま目を逸らした。

それから白雪は慌てるように言う。

「あ、そうだ。居間の片付けもしないと……そもそもこんなにしちゃったの私だし、色々

と”処分”もしないと」

この子、本性を隠す気がない。

チラリと見た神崎に対して熱烈な視線を送ってる。

でも、確かにこんな戦場跡みたいな居間じやあくつるげもしないけどね。

それから何かを思い出したようにキンジは、

「……ピアノ線とかはやめておけよ」

と注意した。

ピアノ線？

「ピアノ線って何のこと？」

私と同じ疑問を抱いたのか、白雪はキョトンとした顔をするけどキンジはそれ以上言ってこない。

取りあえず私はキンジの傍に寄って尋ねる。

「キンジ、ピアノ線って何のこと？」

「そう言えばお前は教務科マスタースに呼び出されたんだったな、あの場に。昨日お前が呼び出されて、教務科マスタースに潜入する前にアリアから聞いたんだよ。白雪に色々と嫌がらせを受けてるってな。その中にロッカーに入り込むと首が切れる位置にピアノ線が張ってあったらしい」

「ふーん、なるほどね」

嫌がらせうんぬんは、実際に強襲科で神崎と一緒にいる事もあるから知ってたけど。ピアノ線に関しては本当に知らなさそうな顔をした。

動揺もしてないし。

と言う事は……この間の一般校区で見掛けた白雪に成り済ましたジャンヌがいたのはそのピアノ線を仕掛けた前後だったのか。

なんて考えながらも私は、

「私の方からもそれとなく話してみるよ」

と言う。

「ああ、頼む。と言うか、お前がいないと白雪とアリアを抑えられる気がしないんだが……」

「前向きに頑張ってみるよ」

「その発言になぜか不安を感じる」

失礼な。

私はいつでも楽しい事には前向きだよ。

◆ ◆ ◆

忘れがちな事だが、白雪と霧は友人関係である。

どう言う原理かは知らんが、白雪は俺に女性が近づくと謎の発作ほっさを起こす。それは霧に対しても例外ではなかった。

武偵高に入学してからしばらくは、霧に対しても敵愾心てきがいしんがありまくりだった。が、ある日を境にいつの間にもやら霧と白雪は仲良くなっていた。

まあ、その方が俺としても助かるし、パートナーであつた霧と幼馴染みの白雪の仲が悪かつたら居た堪たまれなかつただろうな。

今のアリアと白雪のように。

と思つていたら、突然に背中から軽く蹴られた。

何気に痛いし、この遠慮しなさ加減はアリアだろう。

と言うか日常茶飯事に俺を蹴るのはアイツしかいない。

「ちよつと、何してんのよ！ 荷物を運び終えたなら、何か仕掛けられてないかチェックしなさいよね！」

「あのなあ……ここから女子寮までの短い距離で何を仕掛けるんだよ」「念のためつて言う言葉があるでしょ！」

と言う家事が出来ないアリア様は、何やら張り切つてるご様子。

白雪を狙つてる魔剣デモクラシカルつて言うのは、存在自体が怪しまれてる。

今、世間を騒がせてる切り裂きジャックと同じだ。

存在してるようで存在していない。

ある意味、気味の悪い話だ。

こう言うのは、大体は情報に踊らされてたりするのだが……今のアリアがいい例だ。

「よーしっ、終わった!」

「お疲れ様だね」

高らかに終了を宣言する霧と、何やら劳いの言葉を掛けてる白雪の方を見れば、あら不思議。

いつの間にやら戦場跡だった部屋が新築みたいにキレイになってやがる。

白雪ほどではないが、霧の家事スキルもかなりの腕だよな。

少しイタズラっぽいところはあるが……白雪みたいな暴走する感じもないし、アリアみたいに暴力的でもない。

しかも、俺と違って人間関係も円滑だ。

……あれ? 今にして考えてみれば、この中で一番まともなのは霧じゃねえか?

「聞いているー! 耳が付いているなら聞こえてるわよね!」

俺が考え事をしてるとアリア様は俺の耳を引っ張って、耳元でキンキンのアニメ声で叫ぶ。

「ちよ、耳を引っ張るな! 耳元で叫ばなくても聞こえてるっつうの!」

「ちやんとダンスとかチェックしておきなさいよ！ 私が警戒線を張り終わるまでにしなかつたら風穴大盤振る舞いだからね!!」

そんなもん振る舞うな。

と、思いつつも工具箱を持ってベランダへと向かつて行ったアリアを見る。

後ろから見ててもどこかやる気がある感じに見えるアリアの背中をそのまま見送り、傍にあつたダンスへと目を向ける。

「なに、神崎さんから荷物検査でも頼まれたの?」

聞いてたらしい霧が、俺の見たたダンスにもたれかかつてそう言ってきた。

「そうだよ。全くアリアのヤツ、少し疑心暗鬼にでも陥つてるんじゃないか?」

「だけど、チェックしないと怒られるよー」

だろうな。

霧の言う通り、やってなかつたらやってなかつたで面倒な事になる。

「仕方ない。私も手伝うか……割と荷物も多いし」

そう言つて霧も持つて来た白雪の他の荷物をチェックし始める。

だが、チェックした所で何も出るはずもないだろうから徒労に終わるだけだと思
うが。

実際、ダンスの周りを見たが……特に怪しい所も不審な物もない。

中身のチェックもして置くか。

「そう言えば、キンジ」

俺がタンスの引き出しを開けた所で、霧が背後から話しかけてくる。

手を止めず、振り返らずに返事をする。

「なんだ？」

「今調べてるタンスは後で私が適当に調べておくから、他の荷物を調べてきてよ」

「何でだ？」

引き出しの中には布。

しかも、白木の札で『勝負』と『普通』にキレイに分けられてる。

『勝負』は黒、『普通』は白で固められてる。

なんだこりゃ……通常装備とかの意味での『普通』か？

そう思って黒い布を持ち上げて見る。

「だってそれ、衣類を入れるタンスでしょ？ タンスの周りをチェックするのはいいけ

ど、入ってるのはどうせ衣類とか下着類だけだよ？」

——ピタッ。

俺はその黒い布を持ちあげて広げた所で、固まった。

霧、なんでもっと早く忠告してくれなかつた!?

俺はすぐさま自分でも驚くくらいに静かにかつ速く、黒い布を元の場所に戻し、タンスの引き出しを閉じた。

……………。

……やっちゃったー！

思いつきり、下着を直視ししちまった！

などと、軽く自己嫌悪してると――

「タンスの引き出しに手を掛けたまま何で止まってるの？」

後ろを見れば霧が俺を見下ろしてる。

どうやら、俺が下着を見たのはバレてないらしい。

取りあえず平静を装う。

「いや、何でもない」

「そう。もしかして危ない所だった？」

「あ、ああ……そうだな」

完全に手遅れだったがな。

察しがいい霧の前では喋ってる間に誘導されたりする。

俺は色々話をされるその前にタンスと霧から離れる。

「見た事は黙っててあげるよ」

「なっ——!?!」

霧の発言に思わず振り返った俺は悪くない。

俺が見た霧の表情は、イタズラが成功したようなニヤニヤとした表情だった。

こ、コイツ……鎌を掛けやがった……

「ん、気持ちいいくらいに簡単に引っ掛かった♪」

「お前……」

「大丈夫だって、言いふらしたりはしないから。脅しに使えるなんて思っていないから」

「マジでやめてくれ」

いつもいつも表情が笑顔ばかりなせいで、本当にやるかやらないか分からない時がある。

と言うか、いつにもまして顔が近い。

——クソ。アリアといい白雪といいコイツといい、俺の周りには美人が多過ぎる。

霧は……白雪みたいに胸が大きくてグラビアアイドルみたいなプロポーシヨンじゃないにしても、アリアよりも女性らしい曲線をしてやがるから充分にヒステリア要因になり得る。

……い、いかん。

さつき見た黒い下着を着けてるのを霧で想像しちまいそうだ。

「あ、白雪さん。ゴミ出し任せてゴメンね」

「ううん……いいんだよ。それよりも、2人して何してるの？」

霧の発言に玄関に通じる廊下を見れば、何やら首を傾げてエプロンを手に持つてる白雪が立っていた。

さつき見ちまつた下着を持つてる人だと思つと、余計に鮮明にイメージしちまう！

このままでとヒスリかねない！

「荷物のチェックだよ。もう忘れてる物とか特にないよね」

「これで一通りだよ」

「そっか。そうだ、キンジ。ちよつと買い出しに行つてくれる？」

白雪から俺へと霧は話し相手を変えた。

どうやら、俺の今の状態を察したらしい。

相変わらず気の利いたタイミングだ。

「メモに書いてある物を買つてきてくれる？ お金も渡しておくから」

そう言つていつもの笑顔で一枚の紙きれとお金を渡して来た。

もしかしたら霧が行くつもりだったのだろうか……俺にその役目を譲つて外に出る口実を作つてくれたらしい。

察しが悪いなどと言われてる俺だが、それぐらいの気遣いは分かる。

「分かったよ」

「買い出しなら私が行くの……」

「いいんだよ、白雪。それに護衛対象があんまり外出するのはよくないからな」

と、俺は申し訳なさそうな顔をした白雪に対してもっともらしい事を言いつつ、煩惱を振り払うためにそそくさと玄関に向かう。

「夕飯までには戻ってねー」

「お前は俺の母親か」

最後に後ろから声を掛けて来た霧に呆れながらそう返して、俺は外に出た。

◆ ◆ ◆

女子寮の空き部屋の一室からホームズ達がいる部屋を監視していたが……

あんなに警戒を固めればそこにむぎむぎ突っ込む訳がないだろう。

警戒網を敷くと言う事は、その範囲からあまり出ないと言う事だ。

昔で言うなら籠城ろうじょうと変わりはない。

それなりの攻め方と言うものがある。

理子も夾竹桃も失敗し、武偵高に残っているのは私だけ。

しかも夾竹桃に関しては捕まっていると言う。

だが、そうなった場合の立ち回り方くらい夾竹桃は分かっているだろう。

法に通じているからこそ無法者になり得るのだからな。
そちらの方は心配はしていない。

——問題は私の方だ。

「こんの、バカキンジ！」

神崎の声が正面から響く。

情報を得られるやも知れんと思つて、部屋を出た遠山を追い掛けて来たが……まさか、こんな所で間近に見る事になろうとはな。

今いるところはファミレス。

こう言う場所に来たのはいつ振りだろうか。

それぐらいに久しいのであまり慣れてない。

しかし、怪しまれないように普通に振る舞いながら視線を余り彼らに向けず、会話を盗み聞く。

「霧が買物に行かせたつて言うから探してみれば……こんな所でサボってるなんて、信じられない！」

「ぐつ……そう言うお前こそ、何でこんな所にいるんだよ」

「あたしは買物ついでにあんたを探しに来ただけよ。こんな風にサボってるかもしれないって思ったからねっ！」

どうやら、神崎は大層怒っているようだ。

それから彼女はスカートから買い物した証拠を見せるようにして、1つの手錠を取り出した。

アレは……対超能力者用の純銀の手錠。

やはり私の行動は少し勘付かれています。

そもそも東京武偵高は、言ってみれば敵地だ。

そして、教師陣は放任主義とは言え腕の立つ連中ばかり。

完全に気付かれないように行動するのは無理があつたようだ。

「お前な、何でそんなに白雪のボディガードにやる気なんだよ？」

「当たり前よ。一応は正式な任務なんだし、それに——」

遠山の質問に神崎は答えようとした途中で言葉を止めて、周りを見まわしだす。

それから席に着いたかと思うと会話が聞こえなくなつた。

(チツ——)

内心で舌打ち。

直感が良いと言うのは、本当のようだ。

私に気付いている様子はないが、人が多い場所と言う事を警戒して盗聴の可能性を察したらしい。

2人はしばらく何かを小声で話している。
ここからではよく聞こえん。

話してる間に遠山の方から携帯が鳴り、彼は電話に出る。

今度は話し相手を神崎から電話の向こう側の人物に変えたようだ。

それから神崎も何か言い始めると、何やら会話時間が経つ度に不穏な空気になっていく。

「分かったから！　すぐに帰るよ！」

最後に大声で遠山が怒鳴って携帯を閉じたかと思うと、神崎のツイントールの片方を引っ張った。

すぐ神崎に背中を蹴られて反撃された。

そして、そのまま彼らはファミレスを出て行った。

大した情報は得られなかったが、どうやら遠山の様子を見るにあいつはやる気がないようだ。

私の行動も少し勘付かれています事も分かった。

しかし、やる事は大きく変わらん……が、私一人では少しばかり情報が心許ない。

(……ヤツの手を借りるか)

私が失敗する訳にはいかない。

星伽は研鑽派でも注目されている原石。

今後の戦力としても期待できるが、彼女の心は遠山へと向いている。

ならばそれを利用するのが最善だろう。

それに……私程度に後れおくを取るのでは神崎・H・アリアなどその程度の存在だと言う事だ。

イ・ウーの無法者達を束ねる事など出来はしない。

今回はそれを確かめるためでもある。

そんな考え事していると、人影が突然に私の近くに来る。

「ご注文を承ります」

ウエイトレスか。

そう言えば途中で呼んだのだったな。

人目を盗み、仮拠点としている女子寮の空き部屋に戻って来た。

連絡を取ろうと携帯に手を掛けるが……少しばかり躊躇ためらってしまう。

手を貸すと、武偵高に来たあの日の夜にヤツは言った。

私個人の任務であるために大つぴらに協力すると言う訳ではなく、本当に少し手を貸すだけ……それこそ情報を渡すぐらいだろう。

だが、私がヤツに連絡を躊躇う理由は断られるかどうかを危惧してゐるのではない。
.....

私にも時間は迫つてゐる。

意を決して、連絡を取る。

数回のコール音の後に、陽気な声が電話の向こうから聞こえてくる。

『やつほー、どうしたのジャンヌ?』

「……他人に成り済ましてふざけるのはやめろ」

よりよつて理子に成り済ますな。

『やれやれ、分かつたよ』

ジャックは途端に凜とした女性の声に変わり、口調もその雰囲気似合うような鋭いものになつた。

いつ聞いても慣れない。

まるで他人……とても同一人物とは思えない。

そもそも、だ。同一人物も何も本当の正体などリーダーであるシャーロックや理子ぐらしいし知らないのだから当たり前前の話だろう。

判断材料である元の人物が分からないのだから見破るも何もあつた話ではない。

変装だと見破る困難な理由の一つだ。

『私に連絡をしたと言う事は……差し当たって情報提供を頼みたいのだろうか?』

確信しているような口ぶりです、ジャックは私の言わんとしている事を当ててきた。

実際そうなのだから何も言えない。

「そうだ。お前は自分の言った事や約束は律儀に守るタイプだからな。早速手を借りたい」

『いいだろう。何を知りたい?』

「まずは神崎・H・アリアについてだ。性格や経歴などは私の方で個人的に調べて大まかに理解している。武偵高での人間関係などについてまでは手が回らなかったから教えて欲しい」

『そうだな……彼女にも親しい人はそこそこいる。まず、遠山 キンジと白野 ことの2人は彼女に”それなり”に協力的だ』

それなり? つまりは積極的ではないと言う事か。

もしくは、親しいと言ってもまだまだ浅い関係と言う事だろう。

『あとは、狙撃科スナイプの少女であるレキと言う人物。ウルスの子だ』

「ウルスだと?」

『そうだ。5年前に父上——シャーロックがイロカネで交渉に行ったモンゴルの少数民族。彼女は神崎と一緒に時々行動しているみたいだが……友人と言うよりはどちらか

と言うと仕事仲間だ』

ジャックは言外にあまり警戒しなくていいと言うニュアンスを含めてそう言った。

『そして、彼女の戦妹アミカである間宮 あかりとそのお友達。以上が武偵高において神崎がそれなりに関係を持つてる人。それとそうだな、星伽ほしぎ 白雪を含めて私なりの見解をそれなりに教えてやろう』

電話の向こう側で楽しそうな声を弾ませるジャック。

まるで、秘密を話すのを楽しみにしててる子供のようだ。

『遠山 キンジは……兄とは違って臆病者。自分の才能と向き合う事をしない臆病者。いつまでも死んだと思ってる兄の事を引き摺りながら、今を見ようとしないう臆病者。そんな彼を見ているのがそれなりに嬉しいんだがな。クスクス』

声だけでも狂気が見え隠れする。

『兄を引き合いに出せば播さぶるのは簡単。神崎に関しても同様で母親の事を出せば、理性を失うほど取り乱しはしないだろうが容易に火が付きそうだ』

「白野 霧と言う人物に関しては何？」

『彼女は、そうだな。2人とは違って冷静沈着のマイペースで、それなりに実戦経験も豊富だ。神崎ほどではないけど勘も良い。強かしたたか、と言った方がいいだろう。神崎や遠山とは違って直情型の人間ではないし……ある意味、一番警戒すべきかもな』

そして、相も変わらず分析力は高い。

私の欲しい情報を色々と話してくれる。

情報と言うのは武器だ。

特に、私のように策を張り巡らす者にとってその鮮度や精確さは重要なものになってくる。

人に近づき、本人から情報を得たり実際に見たり聞いたりするアナログ的なやり方が……だからこそジャックの情報は精確でもあり、信用できる。

味方であれば頼もしいが、だからこそ敵に回したくはない。

『最後に星伽 白雪。彼女はそれなりに優秀で、周りから浮いている。他の生徒も彼女を一步引いたような形で見てるおかげで友達と呼べるような人物は数少ない。特に、遠山 キンジに関しては何れも昔馴染みと言う事もあつて心はかなり許している。利用しない手はない』

「そうか」

『もつと詳しい事を言おうか？ 遠山は魔剣^{デユランダ}なんて都市伝説で存在しない犯罪者だと

思ってる。だから、あまり乗り気じゃない。白野と神崎は存在する前提で動いてる。白野は星伽と友人関係だから、神崎はあなたを逮捕したい。つまり、遠山だけ協力してる動機が薄い。ここまで言えば分かるだろう？』

「……なるほど」

狙い目と言う事だろう。

それに、ファミレスで見た様子からしても積極的ではなさそうだったからな。「話は変わるが、爽竹桃に関してなのだが」

『ああ、あの子か？ 彼女なら夏コミに出る事を条件に司法取引を済ませた』

爽竹桃、それでいいのか……

いや、彼女ならばやりかねん。

「分かっていた事か……」

それが彼女の趣味だ。理子と同じようなオタク趣味。

そして、何故かは分からないが彼女の本はよく売れる。

しかし思うのだ。

サークル名を『イ・ウー屋』とするのはどうかと思う。

今までよくバレないものだ。

灯台下暗しと言うやつだろうか？

『彼女に関しては心配しなくていい。自分の事に集中することだ』

「言われなくても分かっている」

『制服がカワイイからと現うつつを抜かしたらダメだからな』

「……まま、待て。何の話だ!？」

『反応が遅いな。なぜ間が空く?』

いや、それよりも——まさか。

「貴様、見たな……?」

『何の話だ?』

「ここに来てとぼけるな! わわ、私が一人で愛らしい服に憧れを持っているのを貴様は知ってるのだろうか!？」

『おや、そうだったのか。てつきりモデルにでもなりたいのかとそれなりに思っていたよ』

いつものようにのらりくらりと……!

だからこそ、ジャックは苦手なのだ。

だが、ここで反応しては余計な揚げ足を取られるだけ——

『ふふ、存外にもこの服もいけるな。私もまだまだ捨てたものではない』

反応しては……

『なぜ私はこんなにも長身なのか、せめてもう少し身長が低ければ……』

「ええいつ! 私の声で再現するな!!」

さすがに自分の声を真似されて事実を繰り返されると腹が立つ。

それに、どれも言った覚えのある言葉だ。

イ・ウーで任務に出払った者が多かった時期を狙って一人、普段は着ない服に着替え
ていたがそこを見られたか！

『失礼。聖女の着替えを見るなど紳士として忍びなかったが、存外よかつたぞ』

「お前は今、女性だろう！　せめて淑女と言え！」

『指摘する場所がずれているが、まあいい。これだけ情報を与えればそれなりに充分だ
ろう。私はこれで失礼させて貰う』

「待て」

『何だ？』

思わず呼び止めてしまった。

私がジャックに連絡するのを躊躇した理由。

それは、理子のことだ。

余計な詮索をすると危ないのは承知の上だが……友としてどうしても放っておけな
い。

こいつが理子についてどう思ってるのか、止めた以上聞かなければならない。

「最後に聞きたい事がある。理子についてだ」

『あの子がどうかしたか？』

「理子はお前のお気に入りに入りなはず。お前は理子の異変に気付いてるのではないか？」

『それを知ってどうする？ 貴様には関係ないこと、と悪役の常套句じょうとうくを言わせて貰うよ』

やはりそう簡単には真意を掴ませないか。

分かつてはいたが、それでも妙にイラつく。

「実際、お前は理子をどう見てるんだ。仲間か？ それともカナと同じように観察対象か？」

『後者だ』

「——ッ!!」

その即答に思わず怒鳴りそうになる。

が、唇を噛んで耐える。

『冗談だ。そう怖そうな息遣いをするな』

「……………」

『心配するな。あの子はそれなりに大事だからな。ヒルダやブラドのような扱いをする』

つもりは毛頭ない』

「それは本当か？」

『さて、どうだろう。なにせ私は気まぐれだからな』

そんな意味深な言葉を残してヤツは電話を切った。

結局……何も分からなかった。

いつも通りに何も掴ませないままだ。

なんだ……このもどかしさは。

なぜこんなにも苛立つ。

言葉に出来ない何かの底から込み上げてくるようだ。

(理子、私にはお前があいつを慕う意味が分からない)

静かにそう思い、窓の外に映る景色に目を向けながらも、私は遠山達の監視を続ける。
何かを振り払うように。

38 : 巫女が見た未来と東京湾

「ただいまー」

そんな暢気な声と一緒に霧さんが外から帰って来た霧さんと、ちょうど部屋から出た私が廊下でばったりと会いました。

食後に、なにやら電話が掛かったと同時に外へと出て行つたのです。

多分、お友達でしょう……

不意に気になつて思わず尋ねました。

「誰からの電話だつたんですか？」

「フランス生まれで今、日本にいる知人からね。色々教えて欲しい事があるつて」

霧さんは、ほがらかに微笑んで何でもないようにそう言いました。

だけど、友達が少ない私からすれば彼女が羨ましく思えます。

私は彼女と同じように笑顔で、

「交友関係が広いんだね」

と返します。

「まあ、人脈は多いと便利だからね。ところで白雪さんが手に持つてる札は何かな？」
そう言つて霧さんは私の持つてる巫女占札みこせんふだを見ます。

「これは、巫女占札つて言つてね。星伽でよくやる占いな」

「占い、ね」

「うん。霧さんも占いとか興味ある？」

「興味と言うか、参考程度には当てにしているよ。最近の占いもバカには出来ないからね
……キンジのために占うつもりかな？」

最後の一言は確信を持つてるように言う。

な、何で分かるんだろう？

私はそんなこと一度も言つてない筈なのに。

「白雪さんの行動理由は大体キンジ関連だからね。半年ぐらいしか付き合いはなかった
けど、簡単に分かるよ」

私は何を考えてるかも分かつてるかのよう、霧さんはそう答えます。

霧さんは、私なんかよりも凄い。

キンちゃんみたいに私の事をよく分かつてる。

まるで昔から知つてるみたいに。

それから霧さんは、私の後ろに回つて軽く背中を押す。

「ほら、キンジの所に早く行こう」

「う、うん」

いつものように私を後押してリビングへと向かいます。

そして、霧さんが静かにソファアールへと向かって行って本を読み始めるのを見てから、アリアと何やら揉めてるキンちゃんに向かって私は話しかける。

「キンちゃん、ちよつといいかな？」

「どうしたんだ白雪？」

「あ、あのね。この私が持つてるの巫女占札って言うんだけど——」

「占いの一種か？」

「そうだよ。キンちゃん、最近は将来の事に悩んでるみたいだから占おうと思って」

「……そうだな。じゃあ、1つやってみてくれ」

「うん！」

何だか頼られるのが嬉しくて、私は少しだけ強く返事をした。

星伽の巫女として占いには自信があるし、キンちゃんも私の占いがそこそこによく当たるのは分かってる。

だけど、それでも嬉しい。

「それじゃあ、何について占う？ 色々あるよ、金運に恋愛運に恋占いに人との相性を

占ったりとか、結婚できるかどうかとかも分かるよ?」

私自身、怖いけど気にもなってる。

例えばキンちゃんとは結ばれるのか、キンちゃんと子供が出来るのか、何人子供がいて

「俺の将来……数年後に進路がどうなってるかを占ってくれ」

「チツ」

うん、そうだよね。

思わず舌打ちしちやっただけどキンちゃんが気になってるのは、本人が言った通り数年後のキンちゃん自身がどうなってるか。

大丈夫大丈夫……根気よく待つのも大事。

むしろ、キンちゃんの周りに女が増えたからって焦つちやダメなんだよ。

私には霧さんと言う味方もいる。

そう自分に言い聞かせて落ち着かせる。

すぐに笑顔で、

「分かったよ。ちよつと待っててね」

私はキンちゃんに向かって言う。

5枚の巫女占札で五芒星ごぼうせいを表すように配置する。

順番に札を返していく。

ちゃんとした順番じゃないと、占いの当たる確率が変わったり、結果が変化して安定しなくなる。

だけど、1枚、2枚と表にしていく度に……よくない感じがする。
最後の1枚を手にとって表にする。

……………。

……これって、どう言う事なんだろう。

「結果は？ どうだったのよ」

アリアはそう言っただけで尋ねてくるけど、私には何とも言えない。

占いが示したのは――

『キンちゃんがいなくなる』

それも数年以内に。

どう言う意味、なのかな？

占いと言っても具体的に何が分かるって言う訳じゃない。

キンちゃんが、一体“どこから”いなくなるのかが分からない。

そもそもキンちゃんがいなくなると言うこと自体が考えられない。

「おい、白雪……どうしたんだ？」

「う、ううん、何でもないよ。総運としてはいい感じだよ。ただ、具体的にはよく分からないかな……」

「そうなのか……」

私の嘘に、不安そうな感じを見せるキンちゃん。

あまりキンちゃんに嘘を言いたくないけど、私自身この結果の意味をもう少し考えた
い。

「じゃあ、次はあたしの番ね」

アリアはそう言ってテーブルに手を突いて身を乗り出してくる。

彼女は、適当でいいよね。

それよりもアリアが本当に色金を持つてるのか……疑問に思う。

彼女からはこれと言って何も感じない。

考えながらも私は適当に巫女占札を並べる。

「ところで生年月日とかはいるの？ あたし、乙女座なんだけど」

「へー、そうなんだ。似合わないね」

私の返答に膨れた顔をしてアリアは座り込む。

そんな顔をしたってキンちゃんは渡さないし、譲らない。

大体、キンちゃんと一緒にいること自体がおこがましい。

「総運、ろくでもないの一言に尽きます」

1枚を表にして見たただけけど、一応占ってはいる。

取りあえず、彼女には不幸が訪れるみたい。

それがいつ起こって、どんな不幸かは分からないけど。

「ちよつと待ちなさいよ！」

「何かな？ アリア」

「あんた、ちゃんと占ってないでしょ！」

「私の占いに文句があるの？ 私、ちゃんと占ったよ？」

「あたしと闘やろうって言うの……？ ケンカを売ってるのなら、買うわよ」

鋭いツリ目で私を睨むアリア。

私も負けじと睨み返す。

こんなちんちくりんに私のキンちゃんが取られる訳にはいかない！

「この間、戦った時……私は切り札を出してない」

「あ、あたしだって切り札くらいあるわよ！ あんたよりも多いんだからね！」

「じゃあ私はその3倍はあるよ」

「あたしはその2乗よ！」

「お前ら少しは落ち着けての!!」

キンちゃんが私とアリアの間に入りこみ、引き離す。

それからアリアは私に向かって舌を出して「ふうんだ！」と不機嫌そうな顔をしてり
ピングから出て行つた。

本当にあの子はなんなの？

気に入らない。

でも、それ以上に……私に真正面から立ち向かつてくる事に驚きもある。

学校の皆は、私の事をいつも一步引いた感じで話しかけてくる。

だけど、彼女は違う。

日本刀みたいに真つ直ぐ、私と同じ立ち位置で向かつて来た。

それが何だか気に入らないながらも……新鮮な感じ。

霧さんやキンちゃんとは、また違った感じがする。

「小学生みたいだね〜」

本を閉じた霧さんがソファで寝転びながらそう言ってこつちを見てきます。

「お前もちよつとは止めようとしろよ」

「ケンカするほど仲がいいって言うヤツじゃないの？」

「何か微妙にズレてる気がするぞ」

「そう？ 興味がなかったらいがみ合ったりもしないと思うんだけどね」

キンちゃんの言葉に霧さんはそう返します。

「そんな事ない」

何だか認めたくなくて私は思わず否定した。

「他の男子から見れば、アリアは可愛いかもしれない。けど、うるさいし……さつきだって私もだけど、キンちゃんに迷惑を掛けてるし。その前にはキンちゃんに失礼な態度だつて取ってる。だから私は彼女のこと、キライっ」

顔を伏せて私は一息に言った。

「だけど、それからハツとなつて2人の視線に気付く。」

「ごご、ごめんね。なんだか……雰囲気悪くしちゃう様な事を言っちゃつて」

「なあ、白雪。お前はアリアのことキライって言つたけど、本当か？」

「えっ……？」

「こう言うのもおかしい話だが、霧の言う通り……興味がなかったらいがみ合ったりもしないと思うんだよ。それに、お前がこんなに自分の考えや感情を表に出してるのもあまり見た事がない気がするし、俺や霧に対してる時でさえ変におどおどしたりするのにアリアに対してはハッキリと言つたのが……何て言うか、珍しい気がする」

うんうんと、霧さんも同意するように寝ながら頷く。

この2人は……私のことをよく分かっている。

霧さんなんて、半年しか私といなかったのに。

もちろん霧さんはキンちゃんほど私のことを知らないけど……キンちゃんが知らない事を彼女は知ってる。

「人は自分にはないものを他人に見て、羨ましがったり妬んだりする時があるからね。実は、白雪さんも一部は神崎さんのことを認めてるんじゃないのかな？」

何気なく言われた霧さんの一言。

「どうなんだろう。自分ではよく分からないかな……でも、そうなのかもしれない」

私にはないもの……例えば彼女の真っ直ぐな所とか、自分に自信を持つてる所とかがそうなのかも。

何となくだけど。

「ま、しみりした話はここまでにしよう」

「そうだな」

霧さんが切り替えるようにして言って、キンちゃんも同意するように言う。

2人には気を遣わせちゃったね。

特に霧さんにはいつもキンちゃんの事で後押ししてくれたり相談にも乗ってくれるのに、あまりお礼出来てないし……申し訳ないな。

……そうだ。

「霧さんも巫女占札で占ってみる?」

「私のことを……? そうだね。じゃあこれから先に、私にどんな事が起きるかを占ってみて欲しいんだけど……こんな漠然ぼくぜんとした感じでもいいの?」

「もちろんだよ。ちよつと待っててね」

今の私に彼女に出来ることと言ったらこれぐらい。

きつと霧さんなら、良い結果も出るはず。

そう思つて占いをする。

キンちゃんの時と同じように順番に札を表に返していく。

だけど――

(キンちゃんの時以上にイヤな感じがする)

1枚目と2枚目を返す時には何ともない感じだった……だけど、3枚目を表にした時に変な予感がし始める。

これ以上は見ちやいけなような、占っちゃいけないような予感がする。

よくない結果なら本人に教えてあげればいい。

それだけで済むはずなのに、何でだろう。

4枚目を表にしてからさらに不安は膨れる。

けれど、ここでやめれば不審に思われちゃう。

それに星伽の巫女として、こんな所で占いをやめる訳にはいかない。
最後の札を、静かに……表にする。

……………。

——ッ?!

どうして、こんな結果が。

「えっと、白雪さん？　どうかしたのかな」

霧さんが近くにまで来て、思わず彼女を見ます。

「……な、なんでもないよ」

「もしかして、よくない結果でも出ちゃった？」

「う、うん……そうなの。だから、何て言ってもいいか分からなくて」

「そっかあ。でも占って当たるも八卦、当たらぬも八卦でしょ？　絶対にその通りに

なるとも限らないんだから白雪さんが落ち込む必要なんてないって」

……違う。

そう言う意味じゃないの霧さん……

ただ運が良いとか悪いじゃない。もつと不安になる結果なんだよ……

「人生、山あり谷ありだしな。そう言う時もあるだろ」

「そうだね。さてと、そろそろ寝よつかないかな……」

「結局、日曜洋画劇場を見逃しちゃった」

「キンジがそう言うと思って、録画しておきました。見ないなら私が見た後に消すけど」
「……相変わらず用意がいいな、お前」

キンちゃんと霧さんはそんな事を言いながらそれぞれの部屋に行きました。

「そうだよ……霧さんの言う通り占いは当たるも八卦、当たらぬも八卦。

絶対にそうなるとは限らない。

私も外す時は外す。

結果がどうであれ、そうなると思った訳じゃない。

私の考え過ぎだよな。

だって――

霧さんが”裏切る”なんて考えられないもん。

◆ この間の白雪はちよつと様子がおかしかったね。

◆ 一体、私を占ってどんな結果を得たのか気になるよ。

それよりも、

「おはよう。キンジ、朝だよ」

問題はこつち。

さつきから布団にいるキンジに声を掛けてるのに全然起きない。
仕方がない。

私は窓を開けてM500を取り出す。

そして、外に向かって――

ドウンツッ!

「――ツッ!」

後ろを見れば、銃声に驚いたキンジは陸に打ち上げられた魚みたいに跳ね起きた。

2段ベッドの下で寝てるから、そのままガツンと頭を上へのベッドにぶつけた。

「いつてええっ!!」

「おはようございます。朝の6時半です」

「なんで朝のテレビ番組みたいなナレーションしてるんだ! それより、さつきの銃声は!?」

「あ、それ私」

「アホかお前は!」

アホかって言われてもね。

武偵が確実に起きそうなのって銃声ぐらいなものだし。

「なになに、敵襲!^{デュランダル}魔剣が来たの?!」

キンジが寝てる反対側の2段ベットの上部に寝てた神崎も跳ね起きて、ガバメントを振り回しながら辺りを見回す。

「いや、敵襲じゃなくて私の銃声」

「朝っぱらから何やってんのよあんたは!!」

「モーニングショット」

「意味が分かんないわよ！ 全くもう、人騒がせなんだから」

白雪を護衛し始めて数日……魔^{デュランダル}劍の警戒にピリピリしてる彼女はご機嫌斜め。

口調からも朝からイラついてるのが分かる。

ちよつとした物音でも、夜に彼女は銃を取り出して部屋の中を警戒する。

気負い過ぎなんだよね。

でもこの展開はある意味、ジャンヌの筋書き通りかもね。

白雪も白雪でキンジの傍にいる彼女が気に入らないのか、いちいち難癖を付けているのも神崎の不機嫌を増長させてる。

そして、結果としてその皺^{しわ}寄せがキンジや私に来ると……

まあ、私に関しては口先三寸で言いくるめられるけどキンジにはそう言う技能はな

い。

女性を誑^{たぶ}かすのは上手いのね。

ヒステリアモード——もといHSSに限らずに。

簡単に言えば、天然と言うやつだね。

話を戻せば、舌が回らないキンジは神崎の理不尽な暴力にあつてると。

要するにいつも通りだね。

時々私は私も宥^{なだ}めてはいるけど、あんまりキンジを庇い過ぎると神崎が不満を漏らしそうだし。

ほどほどに言うやつだよ。

「それはそうと、朝ご飯出来てるからさっさと顔でも洗って着替えなよー」
私はそれだけ言って、部屋から出て行く。

放課後——

夕焼けの校門に背中を預けて私は待ち人が来るのを待つ。

別に待ち人って言っても彼氏が来るのを待ってる訳ではないけどね。

そんな事を考えてる内に、校門から白雪とキンジの2人組が出てくる。

「——わっ！」

「ひゃうっ！」

うん、白雪の驚きの顔で待ち時間の退屈さは解消された。

「相変わらずイタズラが好きだな」

「悪いね。人の反応を見るのが性分だから、ついやつちやうんだ。褒めても良いんだよ？」

「褒める要素がないぞ……」

呆れた感じでキンジは私を見ながら言って、白雪はそんな私にクスリと微笑む。

それから私は正面左からキンジ、白雪、私の順番になる様に並ぶ。

出来るだけキンジと白雪がよく話せるように、って言う私の気遣いだね。

私の知らない色々な事を喋ってくるといいかな……なんて思ったりしながら話題を振る。

「今日、アドシアードの会議だったんだよね」

「あ、ああ……女子ばかりで居心地がよくなかったけどな」

それはキンジにとってヒステリアモード的な意味も含んでそうだね。

ただ、それを女性である白雪の前で言うのはどうかと思うけどね。

「ゴメンね、キンちゃん。何だか付き合わせちゃって……」

「いや、これもボディガードの一環いっかんだからな。白雪が気にすることじゃない」

「う、うん。そうだよね……」

キンジの回答にちよつと不満そうな顔をする白雪。

大方、キンジが白雪に付き添ってるのはボディガードだからと言う依頼による理由。

自分と一緒にいたいと言う意思でいる訳じゃないって事を白雪は分かっているんだらうね。

だから残念に思つて、そんな不満そうで悲しそうな顔をしてる。

すぐに白雪は、話を切り替える。

「そう言えば今日の会議、どうだった？ 私、変じゃなかったかな？」

「みんなに頼られて、信頼されてる感じがしたよ。どこも変じゃなかった」

「そっか……キンちゃんに褒められるなんて、嬉しいな」

白雪はそう言つて恥ずかしそうに微笑んだ。

嬉しいのは分かるけど、前方不注意だよ。

そう思いながらもさりげなく白雪の背後に回つて彼女の襟首を引っ張つて避けさせる。

「ほら、電柱にぶつかるとよ」

「ご、ごめんなさい……霧さん」

「全く、何やってんだよ」

「あう」

キンジに呆れられて彼女は別の意味で恥ずかしそうに顔を伏せる。

「そう言えば……お前、アルカタのチアには出ないのか？ 他の人からも勧められてたろ」

「ううん……いいの。私は霧さんみたいに明るく振る舞えないし、内気だし、地味だから……見てる人も楽しめないよ」

まるで自分に自信がないように白雪は、キンジに対して答える。

「別に明るく振る舞おうだなんて考えなくていいのに、自然に楽しんでいればいつの間にか明るくもなってるよ」

私は言いながら、いつも通りに白雪に微笑みかける。

「無理だよ。私には出来ないし、それに……星伽に怒られちゃう」

「なんでだよ？」

「私はあまり大勢の前に出ちゃいけない。そう言う決まり……なの」
尋ねたキンジに、白雪はいつもと違うハッキリした感じで答えた。

決まりと言う事は……彼女の家がそう定めてるんだらうね。

星伽は割と閉鎖的な部分があるみたいだし。

「会議の時に買物に誘われたのを断っていたのも、星伽か？」

「そうだよ」

「お、おいおい……いくら何でも——」

「いいの、キンちゃん。元々、星伽は守護の巫女……土地をあまり離れずに護る。そうやって先祖代々から受け継がれて来た。時代が変わっても、それはあまり変わらない。昔よりは外に出れるようになったけど、それでも星伽神社をあまり離れてはいけない決まりなの」

彼女の俯く視線。

何かを諦めてる様な、そんな顔。

うーん……実に私が好きそうな話だね。

家の秩序に縛られ、伝統に縛られ、だけど外へと憧れるお姫様。

そして彼女は外へと連れ出してくれる王子様を無意識の内に待っている……自分で考えて、なんだかお伽話ととばなしみたいな感じになっちゃったね。

まあその王子様はとんでもない朴念仁どころか朴念神みたいな感じだけだね。

うん、自分で言ってる上手いのかどうかよく分からない。

イ・ウーでの公用語だから私も結構な年月を使ってるんだけどね……日本語って難しい。

「だから私が武偵高に来る事も、本当はすごく反対されたよ……」

「だけど、お前は出て来たんだろ？ そんな習わしは素直に守る必要もない。今からで

もあいつらと一緒に出かけ来てよ」

いつの間にやら私は空気だね。

いや、別にいいんだけどね。

色々と話を聞けるし。

それからキンジの言葉に白雪は首を振る。

「ううん……いいの。それに、今は護衛中だし」

「護衛って、魔劍デユランダの件か？ あんなもの、教務科マスタースの過保護に決まってる。実際、この数

日は何の変化もなかっただろう？」

また、『いない』なんて決めつけちゃって。

杞憂きゆうと徒労で終われば笑い話で済むんだけど……もし、本当に魔劍デユランダがいて白雪がど

こかに行ったらキンジはどう責任を取るんだろうね。

って、私も責任を取る立場なんだった。

教務科からの正式な依頼だし。

「うん、そうだよ。魔劍デユランダなんて、いない。けど……それでも外は、何だか怖いよ

……」

「……外が怖いってお前」

「だって、私……小学校や中学校だって家や学校の外に出た事なんてほとんどないし」

箱入り娘だった弊害って感じだね。

私だったらそんな窮屈な生活は勘弁願いたいところだよ。

そして、白雪はつまるところ――

「何も知らないから自信がないし、怖いのかな？」

「うん……霧さんの言う通り、私は皆の知ってる事を何も知らない。服も、音楽も、最近の流行とかも……全然分らないから」

それから白雪は顔を上げて笑顔で続ける。

「でも、いいの。私にはキンちゃんがいるから、大丈夫。他には何もいらぬの」

「キンジ以外いらぬって事は、私もいらぬのか……悲しいね」

「え、あ……ごめんさい」

「冗談だよ。まあ、ちよつと毒舌だったかな？」

私はそう言つて、イタズラっぽく微笑む。

ほんと、キンジがいなくなつたらこの子はどうなるんだろう。

なんて思ひながらもキンジを見れば……なにやら物憂げで、なにやら心当たりがあるようなそんな感じの表情で白雪を見ていた。

夜の10時ごろ――

キンジ、白雪の3人で帰ってる途中で神崎に呼ばれて一緒に魔剣デュランダルについて調査してたら外は御覧の通りだよ。

いい感じに夜が広がってる。

こう言う日は散歩に出かけたくなるんだよね……大きい衝動はないから出かける必要もないけど。

諜報科レサドの専門科棟を出て、その途中で神崎はコンビニで紙袋いっぱいのもまんを買った。

そして、今はキンジの部屋に帰る最中。

「全く、急に連絡して来たと思ったら調査に付き合えだなんて」

「仕方ないじゃないの。あんたぐらいしか、付き合ってくれる人がいないんだから」

「武偵なんだからお金で依頼すればいいでしょ……」

「アドシアード期間中だから、どこも忙しいのよ」

「もうちよつと友達増やせばいいのに」

「……イヤミ?」

「いいや、事実だよ」

そう言つて神崎を横目に見れば、「……ぐぬぬ」と少し悔しそうな顔をしてる。

私と口論しようとするれば簡単に負けるから、なかなか言いだせないんだろうね。

キンジの時みたいに勢いに任せて銃を撃てばいいんだろうけど、直感で私の報復が怖いんだろう。

やられた場合、私は薬でも盛ってA V鑑賞の刑で反撃するつもり。

悪いけど、キンジみたいにやられて我慢できるほど受け身じゃないんだよね。

つまりは基本的にやられたらやり返す主義な訳だけど。

「ただいまー」

ドアを開けた瞬間に私と神崎の声が重なり、

「キンちゃんお願い！ 離して！」

遅れて白雪、

「いいから、おとなしくしてろって！」

続いてキンジの声。

そして、私と神崎の目に飛び込んできた光景は――

上半身裸のキンジと巫女服がなぜかはだけてる白雪がもつれ合い、暴れてる所だった。

私達の声を聞いてもつれ合ってる2人は顔をこっちに向ける。

目と目が合う瞬間、見られていると気付いたキンジと白雪。

私はいつも通りの笑顔。

私の隣からは不穏な空気。

この状況で取るべき行動は、

「お邪魔しましたー」

何も見なかった事にする。

しばらく時間を置けばきつとキンジは一枚むけてるはず。

そう思つて扉を閉めようとする と 神崎がバンツ！ と、私が閉めようとした扉を手で抑えた。

「この……バカチンのバカキンジいいいいッ!!」

「おっと」

神崎がももまんの入った紙袋を手放してガバメントを取り出した。

代わりに私が自由落下する紙袋をキャッチ。

「ちよ、ちよつと待て!」

「言い訳なら聞かないわよ! なに!? ちよつと任せたらこの有り様つてどう言う事よ!」

響くガバメントの連射音に負けないぐらいの大きな声で、神崎はずんずんとテンポよく歩いて行く。

そして、逆にキンジは叫びながら後退する。

(きつとこれも誤解なんだろうな)

なんて、私は内心思っていた。

大体、ヘタレのキンジが自分から手を出す筈がない。

ヒステリアモードを知っている私はその事を理解してるけど……神崎の場合は違う。彼女の場合は本気でキンジがグレーゾーンの行動をすと思うてる。

服を脱がしたりとか、色々と触ったりとか。

「もうやめて！　アリア、負け惜しみなんて見苦しいよ！」

「一体！　いつ！　あたしが負けたのよ！」

キンジを庇うように白雪が神崎の懐ふところに飛び込んで、その両腕を抑える。

「あれは、合意の上だったんだよ！　だからキンちゃんは悪くない！」

「ご、合意の上ですって……ッ!？」

「そうだよ！　私から服を脱ごうとしたの！　アリアは見せるものがないからって、キンちゃんにやつあたりはよくないよ！」

うーん、それは何かずれてるんじゃないかな……白雪。

それから神崎は顔をリングみたいぽかに赤くして、いや彼女の場合は色合的にサクラン

とにかく、いつもの初心うぶな反応をして顔を赤く染める。

怒りも混じってそうだけど。

「あたしの体型は関係ないでしょ!」

自分から言っちゃったよこの子。

まあ、白雪もそう言う意図で言ったんだろうけど神崎は半分自爆してる。

「それに例え合意の上であつたとしてもっ!」

「——きゃんっ!?!」

おつと、ここで神崎が白雪を華麗に一本背負い。

そのまま白雪はあえなく沈んだ。

「護衛対象とそういう関係になるなんて! 武偵失格! 人間失格!! 大失格うー!」

!!

さらにキンジは神崎に迫られベランダに追い込まれた! 後がない!

って、これはマズイかな。

キンジ裸だし……

前から思ってたけど、今の生活は退屈してない代わりに余計な手間が増えたよね。

「風穴の刑っ!」

神崎の叫びと共に放たれる銃弾。

そして、キンジはベランダを飛び降りた。

見えたのはベランダの手すりにワイヤーを引つ掛けたところだった。

同時に私も荷物を置いてベランダへと駆ける。

神崎はベランダから外へと身を乗り出して居る。

その後には聞こえる一発の銃声。

やると思つたよ……

ほぼ銃声と一緒に私もベランダから飛び降り、キンジがやったようにベルトのワイヤーをベランダの手すりに引つ掛ける。

「霧っ!?!」

驚いてるね、キンジ。

それから神崎にワイヤーを銃弾で切られて落ちるキンジの手を掴む。

「ふいー、間に合つ——」

プチッ!

……あれ?

「さすがに2人は無理があつたか……」

しかも落ちる勢いがあるから、負荷が掛かり過ぎたせいでワイヤーが切れた。

残念ながらフックショットはメンテナン스에서でないんだよ。

「何を冷静に言つてんだああああ!」

結局、助けた意味もなくキンジの叫び声と一緒に私も東京湾に落ちたのだった。

39：整って行く舞台

昨日、キンジと私は夜の東京湾に落ちた。

その時の私は服を着てたけど、キンジは風呂上がりで湯冷めしててしかも上半身裸。

その結果どうなるかは簡単に想像できるね。

「えー、28.5度」

「嘘を吐くな。低体温症どころの騒ぎじゃねえぞ……」

私が体温計を手にとって読み上げた数値にキンジは静かにツッコむ。

ちよつとは余裕がありそうだけど、さすがに大声でツツコンでは来ないか……

「ええ!? は、早く人肌で温かくしないとキンちゃんか——」

「おい、白雪……霧の冗談を真に受けるな。38度で、普通に熱が出てるだけだ」

キンジは私から体温計を取り上げて、体温を読み上げる。

さりげに白雪が服を脱ごうとしてたけど、キンジは気付いてる様子はない。

「全く、護衛する人間が体調を崩すなんてっ」

落ちた原因である神崎は平常運転。

まあ、いつもの事だから慣れたものだよ。

と言うか、こう言う場合は原因はどっちにあるんだらうね。

誤解をさせたキンジと白雪が悪いのかはたまた勝手に誤解した神崎が悪いのか……

ま、考えても仕方がない事か。

「あたしは先に行つて安全を確保してるから、霧は白雪と一緒にちゃんと来なさいよ！」

そう言つて神崎は玄関を出て行つた。

全く……私に指図しないで欲しいんだけどね。

なかなか直してくれないんだよね。

「そろそろ私達も学校に行かないとマズイよ」

「え、でもキンちゃん……」

「看病も大事だけど、そのせいで他の人に迷惑を掛ける訳にはいかないでしょ？ アド

シアードの準備が立て込んでるんだから」

「……それでも」

「キンジも一人でゆつくり休みたいだらうしね」

私が白雪に向かつて言いながら、キンジに視線を送る。

今のキンジは一人で居たいはずだからね。

私からのアイコンタクトに気付いたのかキンジも、

「学校サボってまで看病なんてされたら、気になって落ち着いて休めないだろ……それに、アリアもうるさく言いそうだしな。こっちは大丈夫だから行きな」

そう言つて布団へと潜り込んだ。

「うん、分かった……」

白雪はそれだけ短く言うと、カバンを手に持つ。

「それじゃ、行つてくるね」

私はキンジに向かつてそう言うと、キンジは布団から手だけを出してヒラヒラと振る。

それから白雪の背中を押して部屋を出る。

けど、白雪は部屋を出る寸前までキンジが入つてる布団を心配そうに見つめていた。

男子寮を出てからも、どこか気にしたような顔をする白雪。

私は声を掛ける。

「そんなに心配ならやる事を早く全部片付けちゃえばいいんだからさ、そう気落ちしたような顔はしないでよ」

「……………」

笑顔で私は白雪に声を掛けるけど、今度は私を見る目がどことなく変に見える。何かを気にしているような感じだね。

うーん、何か変な事したっけ？

特に不審な行動はしてない筈なんだけど……

と言うか、ちよくちよく私の事を気にするような感じの視線や表情を白雪がするんだよね。

キンジに対するのとは別の感じなんだけど。

そう、こんな視線や表情をするようになったのはどこからだっけ？

ボディーガードを引き受ける以前はこんな表情をしなかったし、し始めたのは……

……あ、占いの時か。

何だか私によくない結果が出たとか言ったけど、あれはきつと嘘だろうからね。

もつと何か重大な事でも出ちゃったのかな？

ちよつと突つついてみようか。

「最近、と言うか……占いをした日以来から妙に私の事を心配そうな顔で見るね」

「……え？」

「ん？ 何だか私を見る時の視線とか表情が、いつもと違う感じがするからさ」

「……その、何でもないの……」

「そっか、なら無理には聞かないよ」

と私は言うけど、この時点で白雪が私に対して心配するような出来事が占いの結果に出たんだろうなって事ぐらいは、想像できるんだよね。

なに、私どうなるの？ 死ぬの？ それとも、誰かに殺されちゃったりとか？
気になるね。

だけどここは焦らず慌てずってね。

押してダメなら引いてみる。

果報は寝て待て。

うん、いい言葉だね。

昼休み頃にちよつとキンジの様子が出来になったので男子寮へと向かう。

病人には気を遣つかわないとね。

私のお姉ちゃんも病人だし。

『あつ……』

そして、男子寮前で神崎とバツタリと出会った。

「神崎さんもキンジの様子を見に来たの？」

「違うわよつ。ただ単に忘れ物を取りに来ただけよ……」

否定から入るって事は、キンジの様子を見に来たんだね。

それに、私を見つけたと同時に背中に隠した物……いや、実際は隠れてる様で隠れてない。

足と足の間から見えてるんだけどね。透明なスーパーの袋に入っていて、読み方は……『特濃葛根湯』とくのうかつこんとうでいいのかな？

とにかく、そう書かれた瓶びんが袋の中に入ってる。

「そつか。じゃあついでにキンジの様子を見に来たんだね」

「そ、そうよ。あくまでついでよ、ついで」

この子もチョロイね。

「それじゃあ私は先に戻るよ。様子を見るのに2人もいらなからね」

私はそれだけを言うと、神崎に背を向けて学校へと行く。

しばらく歩いてると、その途中で突然に携帯が鳴る。

えっと、これはプライベートもお仕事用か。

「ご機嫌麗しゆう。何かご用でしょうか？」

周りを確認して適当に男性の声に変えて出る。

『私、ルミ』

淡白なフィンランド人であるルミちゃんからだ。

「ああ、ルミ様でしたか！ どうかなされましたか？」

『アドシアードの時に日本に行く』

「ふむ、それでどのようなご用でしょうか？」

『ソフィーから伝言』

わざわざルミちゃんに預けなくても直接言ってくればいいのに。

そう思っていると、

『ソフィーはしばらく診察』

補足するようにルミちゃんは言ってきた。

なら仕方ないね。

「分かりました。こちらから声を掛けますので、アドシアード期間中にお会いしましよ

う」

『分かった』

それだけ答えて通話は切れた。

……伝言ね。

どんな用件だろう。

ルミちゃんに頼む前にわざわざ通信機器を介して連絡してこなかったって事は、何か

大きな仕事でも頼むつもりかな？

ま、会ってみれば分かるよね。

そして、翌日。

昨日の夕方の時点でキンジはすっかり全快していた。

どうやら昨日、神崎がキンジの所に持って行った『特濃葛根湯』が効いたらしい。ただ、問題としては白雪が持って来たとキンジは勘違いしてるみたい。

そして、私がそれを訂正する気はない。

何故かは単純。

その方が面白いから。

今現在とは言うと、

「I, d like to thank the person.」

体育館に似た外装をしてる強襲科の専門科棟内で閉会式のリハール中。

ボーカルをしている不知火の歌声が響く。

まあ、銃声が一番多い場所だからね。

防音設備もバツリって言う事で、ここをリハール場所に決めたらしい。

私はチアガール姿で笑顔を忘れずに振付けを軽快に踊る。

さりげなくダンスの途中で視線をキンジに向けると、キンジは微妙に視線をギターに落としてる。

女の子が多い上に露出も多いからね。

まさしくキンジと言う男にとっては天国のような地獄って感じだよ。

「それじゃあ、今日はここまでにしましょう。お疲れ様でしたー」

『お疲れ様でーす』

白雪の終了の一言に、リハーサルに参加したメンバー全員が声を合わせた後、散らばって行く。

特にキンジはギターを片付けてそそくさと屋上へと続く階段へと向かって行ってしまう。

対して神崎はと言うと、ちよつと鋭い視線をキンジの背中に向けている。

なんとなーくだけど……これは一波乱ありそうだね。

◆
見事な五月晴れ。

吹いてくる風は『心地が良い』の一言に限る。

暑過ぎず涼し過ぎず、そして服がバタつく程の風ではなく、正しくそよ風だ。

昼寝をしない方が失礼になるって言う感じの陽気さだ。

なので、俺は強襲科棟の屋上で仰向けになる。

いつその事、このまま寝てしまおう。

1日で治ったとは言え、病み上がりだしな。

だったら布団で寝た方がいいんだろうが、この天気なら外で寝た方が健康的になる気がする。

「はあく……」

心地よさに息を漏らしていると、甘い香りと共に俺の顔にスツと影が差す。

(……なんだ?)

と思つて、そちらを見ようとしたら――

がすっ!

「ぶっ――!?!」

顔に蹴りが入った。

この陽気な天気から一転して俺は嵐に見舞われた。

どごっ! がすっ!

容赦のない蹴りが顔を襲う。

「ちよ、顔面はやめろ! せめてボディーに――」

そう言つて立ち上がった瞬間にどすっ! と、ボディーに右ストレートが入った。

「ぐほっ!!」

悶絶しながらも、俺は実行犯に目を向ける。

と言うか、俺に対してこんな事をする奴は一人しかいない。

「全く、任務だつて事を忘れてこんな事する暇があるならちやんと白雪を護衛しなさいよ! このボンコツ!」

案の定、アリア様がチアガール姿でボンポンを持ったまま両手を腰に当ててご立腹の様子である。

つて言うか追つて来やがったのかよ……

てつきり下で霧と話でもしてるのかと思つてたのに。

などと思つていると、アリアの右手が突然に背中の方へ行く。

——こ、このパターンは!

俺は条件反射ですぐに身構えるが、既にアリアは日本刀を抜いている。

最近恒例である、突然の真剣白刃取りだ。

白雪のボディガードを始めてからと言うものの朝練が出来なくなつたために、奇襲と言う形で合間に襲つてくるようになった。

ちなみにこれには霧も参加してる。

俺は迫りくる刃に対して、パン! と勢いよく両手を合わせて鳴らしたが……刀身を

掴むことなく――

「ごすっ！」

額ひたいで刀の峰を受け止める事になった。

「……勘弁してくれ。」

いくら強襲科アサルトで組み手とか蘭豹らんびょうとかで打たれ慣れてるとは言え、痛いものは痛い。

ちなみに……アリアは加減してるとは言え振り切ってくるが、霧は寸前で止める。

「遊びじゃないのよ！ 一度くらい成功させてみなさいよ！」

モチベーションが上がらないのに上達する訳がないだろう。

そんな事を内心で思いながら額をさすり、ぶりぶりと怒っているアリアに視線を向ける。

「あのなあ……俺は病み上がりなんだぞ……。どこかの誰かさんが、夜の東京湾に突き落としたせいだなっ」

俺を助けようとした霧も巻き込こまれた形で落ちたし。

「それは……悪かったと思ってるわよ……」

ちよつと言い過ぎたか、アリアは罪悪感を含んだ表情をする。

まあ、過ぎた事をいつまでもぐちぐち言うのもみつともないし……ここは少しフオーしてやるか。

「もう過ぎた事だし、風邪に関してはもういい。それに、白雪が持ってきてくれた
とくのうかつこんとう
『特濃葛根湯』で治ったからな」

最初は霧かと思ったが、あいつには『特濃葛根湯』とくのうかつこんとうについて話してないしな。

アリアには話したが、こいつはそんな気の利いた事をしてくれる訳がないだろう。

それに白雪本人に確認した所、「うん」って言ってたしな。

「え……あれは、あたしが……」

アリアは何故か、何かを言いたそうな感じに口籠る。くちしも

なんだ？

「どうしたんだよ？」

「……白雪が、自分で持ってきたって言ったの？」

「あ、ああ……本人に確認したらそうだ、って言ってたしな」

「……………」

おい、なんだよ。

なんでそこで黙る。

それからアリアは、ぷい、と顔を逸らして俺に背を向ける。

「ま、まあいいわ。白雪がそう言ったならそれでいいわよ」

何か含んだ言い方をするな。

「言いたい事があるならハッキリ言えよ。いつもはズバズバ言うクセに、お前らしくもない」

「うるさいわね。あたしは言いたくない事は言わない主義なの！ キンジンなんからしくないって言われても嬉しくないわっ」

背中を向けたままアリアは、いつものアニメ声で怒鳴って来る。

「なんか、怒ってないか？」

俺、なんか怒らせるような事をしたか？

「おい、何を怒ってるんだよ……」

「別に怒ってなんかない！ それに、白雪に面倒を見て貰ってよかったじゃない！ 特に霧や白雪はあんたに優しいものねっ！ どっちかと結婚でもしちやえばいいんじゃないの!？」

「なんでそこで霧が出てくる。」

「全く意味が分からん。」

「その理不尽な怒り方に俺も段々と腹が立って来た。」

「いい加減にしろよ！ 何にキレてるか分からねえけどな！ この際に色々と言わせて貰うが、真剣白刃取りの訓練なんてもうやめだ！ あんな実戦でも使えるか分からない達人技をそう易々と習得できる訳がねえだろ!？」

「ダメよ！ 魔劍デユランダは鋼をも斬り裂く剣を持つて話なのよ!? 防御してもそのまま斬られる！ だったら、”防ぐ”んじゃないくて”止める”しかないのよ！ 白刃取りの訓練は今でこそ重要な意味を持つよ、いざという時には、あんたを覚醒かくせいさせて——」

「その『いざという時』って言うのはいつ来るんだよ!? そもそも、そのプランだつて不確定要素があり過ぎるんだよ！ いや、そもそも魔劍デユランダなんて”存在しねえんだ!”」

俺の言葉に、アリアは一步前に入る。

「違う！ 魔劍は”いる”！ 少なくとも、霧はその前提で動いてくれてるわ!!」

「それは、霧が良い奴だからお前の妄想に付き合ってくれてるだけだ！ 大体、お前もあいつに迷惑かけ過ぎなんだよ！ この間の東京湾に落ちた時だつてそうだ。お前が勝手に誤解して、人の話を聞かないおかげで霧まで巻き込むハメになったんだ！ お前はそもそも——」

俺はこれ以上なく、

”ズレてるんだよ!!”

ハッキリと言った。

「ズレてるんだよ!!」

ちよつと様子を見に来てみれば、なんだか面白そうな事になってるねー。

それよりもキンジ、『お前も』って言う辺り私に迷惑を掛けてるって言う自覚はあるんだね。

まあ、迷惑だなんて私は思っていないけど。

そして、キンジの言葉に神崎は酷く傷ついた顔をして数歩、退いた。

「あんたも……他の人と同じ……」

聴覚に意識を集中させて、神崎の小さく呟いた言葉を拾う。

他の人って、イギリスでの出来事かな？

「そう、そうなんだ……あんたも、あたしの事を……分かってくれないっ！ あたしを先走りの独断専行の弾丸娘、ホームズの落ちこぼれって言う！ あんたも、他の人と同じ！！」

おこがましいね。

相手を理解しようとしないうちに自分を理解してもらおうなんて。

ふふ、彼女のこう言う所は見ていると楽しいんだけどね。

何て言うか……ズレてると言うよりは、歪んでる様な気もするんだよね。

今思った事を理子とかが聞いたら「お前が言うな」みたいな事を言われそう。

「あたしには、分かるのよ！ 魔剣デユランダはいるし、白雪に危機が迫ってる！ でも、上手く

納得できる説明が出来ない！ それでも直感で分かるのよ！ それなのに、どうして

……どうしてあんたは分かってくれないのよ!？」

その懇願こんがんにも似た神崎の訴えにキンジは、

「ああ! 分からねえよ! 論より証拠だ、主張があるなら証拠や根拠を出す。それが武偵だ! 警察でもそんな不確定な事で大袈裟に動いたりしねえ!! 何度でも言ってる、敵なんて存在しない。お前の妄想だ!!」

容赦なく跳ねのけた。

「…………この、バカキンジーツ!!」

対して神崎、逆切れしながら2丁のガバメントを引抜き銃弾で返答し始めた。

「ま……………」

あの様子だとキンジは「待て!」って言おうとしたんだろうけど……………たった2文字の単語も言い切れなかったみたいだね。

ババババン! と、ハンドマシンガンって感じの連射音でキンジの体の周囲スレスレに弾がばら撒かれる。

キンジがそれに対して硬直していると神崎はキンジに向かって行き、跳躍して顔面を踏み倒した。

「このバカ、バカの王様! ノーベルどバカ賞ー!!」

神崎は変な所に銃を乱射しまくると、屋上の出入口でいりであるこっちに向かって来た。

ちよつと場所を変えて扉の脇で待機してると、

「ばか……ばか……」

神崎は小さく呟きながら私に気付かずに降りて行った。

んー、どうしよつかな。

このままフォローせず放置でもいいんだけど……まずはキンジだね。

扉を開けて、仰向けにぶつ倒れてるキンジに近付く。

そして、何故か分からないけど水が降って来てるのでそちらの方を見ると『バカキン

ジ』と、屋上の出入口の上部にある貯水タンクに空けられた穴で書かれていた。

さつき見当違いの方向に銃を撃つてたのはこれか。

器用と言うか何と言うか、弾の無駄遣いだね。

お金を持つてる彼女だから出来る事だろうけど。

「なんだよ、霧か」

こつちに気付いたキンジが声を掛けてくる。

仰向けになりながら、首だけを動かして。

「神崎さんが戻って来たとも思ってた？」

「いや……。それより、いつから見えた？」

「どうして、そう思うの？」

「アリアと入れ違いでタイミングよく入って来たんだから、そう思うのが普通だろ……」
「ま、そつか。そりゃそうだよ。で、どこから見てたかって言うのと割と最初の方から」
「そうか……」

キンジは短く答えて、体を起こす。

私はその隣に静かに座る。

「お前は、デユランダル魔劍なんていると思うか？」

「逆にキンジはどう思うの？」

「俺は……いないって思ってる」

「どうして？」

「どうしてって、実際都市伝説みたいなものだろ？ 犯人の実態はないし、誘拐されたつ

て奴はただの行方不明かもしれない。そもそも、マスターズ教務科の警告にしたって襲われたため

しなんてほとんど無い」

「そうだね。私もいなかったらいいなと思ってるよ」

「だろ？ アリアはやっぱりかなえさんの事で焦り過ぎてるんだよ」

私に同意されて、キンジは妙に嬉しそうだね。

「だけど——私の言いたい事はこれからなんだよね。」

「確かにキンジの言う通り、神崎さんは焦り過ぎかもね。最近は気も張り過ぎだし」

「そうだよな」

「でもさ、キンジ。私は『いなければいいな』って言ったけどさ……キンジの場合は完全に『いない』ものとしてるよね？」

「……どう言う事だよ？」

「ん？ 確かに魔剣デモラダールがいるなんて証拠はないけどさ。いない証拠もないって事でしょ？」

「まあ、そうだな」

「なのに存在しないなんて、決めつけるのは早計じゃないかな？」

私の一言にキンジは疲れたような顔をする。

「なんだよ、お前もいるなんて言うのか？」

「いいや？ 違うよ。私の場合は神崎さんの言う通り、いる前提で動いてるってだけだよ」

私は笑顔で答える。

それからジト目をキンジに向ける。

「神崎さんは警戒し過ぎだけど……キンジは警戒しなさ過ぎるね」

「つて言ってもここ数日、白雪の傍に不審な影なんてなかったら？」

その言葉に、私は深呼吸をするように息を吐いて、

「ふうく……キンジ、もし魔劍デユランダがいてき。白雪さんが襲われたら……責任、取れる？」
 「藪から棒になんだよ」

「いや、聞いてみただけだよ。ま、それはそうと……しばらく神崎さんとお互いに頭を冷やした方がいいね。しばらく単独行動にしよっか」

「それはいいけど、お前は どうするんだよ?」

「遠巻きで白雪を護衛する事にするよ。白雪の傍にはキンジがいてあげてよ。1人の方が頭もよく冷えるでしょ?」

せっかく忠告してあげたのに、気付かないなんてキンジはバカだね。

でも、そういう所がいいんだよね。

◆ ◆ ◆

◆ ◆ ◆
 強襲科アサルトの屋上でケンカ別れた神崎と、妙な事を言い残した霧と離れて俺は1人で白雪をボディーガードする事になった。

それで、ゴールデンウィークにどこか行きたい所や予定がないかを白雪に尋ねると「特にないよ」と言う。

華の学生生活の筈なのにあまりにも華がなさ過ぎんだろ……

しかもお利口な白雪は、実家の言いつけで外出をあまりしなかった。

と言う訳で、俺が連れ出す事にした。

遠巻きで霧もいるって言うし、外に出ても大丈夫だろう。

なので5月5日である今日、花火大会を見に行く事にした。

それはいいとして、問題はアリアだ。

霧は連絡すれば返すし、呼び出せば簡単に来てくれる。

あれからと言うもののアリアはどこかに雲隠れしてしまった。

部屋に帰って来る事もなかった……が、行く場所は大体予想できる。

が念のために霧に聞いてみた所、どうやら予想通りレキの部屋に転がり込んだらしい。

バスジャック以来、アリアとレキはそれなりに関係を持つているからな。

なので、ファミレスでレキを介してアリアに報告しようと思ったが……無口、無表情、無感情の三拍子が揃っているレキに大体の事を報告するのは少し骨が折れた。

ちゃんと話を聞いているのか、内容を把握しているのかいまいち分からんだから確認するのに時間が掛かった。

「——と言う訳で、ゴールデンウィーク中も特に変わった事はない。報告としては以上だ、アリアにそう伝えておいてくれ」

……反応がない。

「アリアに伝えておいてくれ、いいか？」

コクリと、二度目でレキは反応した。

と言う感じで、今まで時間が掛かってしまった。

アリアに携帯で直接報告出来たらいいが……あんな事があつた後だとメールも電話もしにくい。

「あ……」

思わず声を上げてしまった。

時計を見ると、8時だ。

待ち合わせは7時の予定……大遅刻だ。

俺は慌て気味に席を立つ。

「すまんが、俺はこれから予定があるから帰らせて貰う」

「……………」

「俺は予定があるから、か・え・る・ぞ。いいな？」

確認するように言うのとレキは小さく頷いた。

まさしく『ロボットレキ』と言う感じの反応の遅さだ。

だが、これでも狙撃の腕はピカイチだから人間分らんものだ……

「……………外に出るのですか？」

いざ帰ろうとしたら、報告の時には喋らなかつたレキがここで初めて喋った。

抑揚のない声で、唐突に。

「そうだが？」

「気を付けてください。あなたの近くに、よこしま邪な風が近づいている」

邪な風？ つまり、風邪か？

ダメだ、翻訳できません。

と、俺は軽く混乱してると――

「特に、白野 霧……彼女は危険です」

続けるように言ってきた。

霧が危険？

確かにあいつのはイタズラはたまに危険なものがあるが、レキもその被害者か？

……あまり深く考えたら負けだな、これは。

「忠告感謝するよ」

俺は適当に返事をして帰るのだった。

部屋に戻ってみれば、白雪は正座をして充電器に挿した携帯を眺めている。

誘って置いて遅れた俺に対して怒ってるかと思っただが、そんな事はなさそう。

しかし、ガラリと雰囲気が違う。

今の白雪は着物姿。

撫子なでしこの花雪輪ゆきわの模様なでしこに清楚な白地の布ぬい。鴝色とぎの帯もしつかりと締められている。

髪もしつかりとお団子型に整えて、簪かんざしを挿している。

確かにきれいではある。

ただ、シユールな場面だ。

まるで携帯とお見合いでもしてるような感じだ。

その様子に少しだけイタズラ心が働いた俺は携帯でメールを送ろうとする。

——びろりん♪

俺が送る前にメールの着信が入り、白雪は勢いよく飛び付く。

そして、メールを読んだかと思うと急に何かに気付いたように窓を見始めた。

なんだ、と思って俺も窓を見ると鏡みたいに映るガラス越しに白雪と視線があつた。

まさか……霧のヤツ先手を打ちやがったな。

俺が何かをする前に白雪に連絡したようだ。

それから白雪はバツと後ろを向いて、直接俺を見てきた。

とりあえず、

「あー、遅れて悪かったな」

謝りながら部屋に入ると白雪は勢いよく立ちあがる。

「う、ううん……いいの。それよりも来てくれてありがとうございます」
なんか、変なお礼をされた。

「ところで、さっきのメール何だが……」

と、俺が尋ねようとすると俺の方にメールが入る。

携帯を開けて見ると、

『白雪に送ったのは私です♪』

霧からのメールだった。

おい、あいつどこから見えたんだよ。

思わず周りを見回していると、またしても着信。

『どこにいるかは秘密だよー』

と、今度は顔文字付きで送って来やがった。

心を読むんじゃねえよ。

さらに本文が続いているので、下へスクロールすれば――

『はよ行け』

うるせえよ！

取りあえず携帯を閉じる。

確かに霧の言う通り、遅刻してるから今すぐ行った方がいいのも確かだ。

「それじゃあ、行くか」

俺がそう言うのと、

「はいっ」

白雪は嬉しそうに笑顔で答えた。

東京の夜の街を歩きながら、目的地である葛西臨海公園かさいを目指す。

順調に向かつてはいるのだが――

「……………」

「……………」

会話が續かん。

そもそも、俺は女子を避けて来たのだから当たり前前の話だ。

どう言う会話をすればいいのかが、全く分からない。

霧は例外だ。

ともかく……白雪も、幼馴染みである前に女子だからな。

この場所に霧がいれば、共通の話題の1つや2つは振ってくれるんだが……

こんな時に限って霧の存在がいい感じに潤滑油になってたんだと思いき知らされると

は、思いもしなかったぞ。

「その、キンちゃん……私と一緒にだと、つまらなかったり……しない、かな？」
たどたどしい感じで白雪が唐突に切り出して来た。

「どうしたんだよ、突然」

「霧さんみたいにお喋りとか……得意じゃないから」

「気にしねーよ。俺もあまり喋るのは得意じゃないからな」

むしろ霧がお喋りなだけだ。

そして、またしても沈黙が俺と白雪の間に流れる。

だが数秒ほどすると、またしても白雪から話しかけて来た。

「あの……キンちゃん？」

「今度はどうした？」

「私達、なんだ……か……デ……ト……。……ううん、なんでもないよ」

「何だよ、気になるだろ」

「その……今の私達って……デート、してるみたいだね」

今度は妙な事を言ってきた。

デート、俺と白雪が？

とてもじゃないがそう言う風には俺は思えないし、ここで曖昧あいまいな返事をすればまた妙な事になるんじゃないだろうか？

例えばヒステリアモード的に危険な事態とかに。

ここは、誤解を生まないためにもはっきりと否定するのが無難だな……

「デートじゃないさ。ただ単に外出する護衛対象にボディーガードとして付き添ってる

……それだけだ」

「ボディーガード……そっか、そうだよ。なんだかゴメンね、変な事を言っちゃって……」

と、白雪は笑顔で言っではいるが……どこか肩を落としたように表情が曇っているように見える。

なんだ？ さっきの言動に肩を落とすような要素があるって言うんだ？

そう思っていると、携帯にメールの着信が入る。

ポケットから出して見ると、差出人は——霧だ。

一体、何なんだ？

そう思ってメールの内容を見る。

『今の言い方はちよつとないね。任務クエストでもなかつたら一緒にいないみたいだに冷たく取

れるよ』

……おい、マジで霧のヤツはどこから見てるんだよ。

周りに人は少しいるが、霧の姿らしきものは見えないって言うのに。

しかも会話の内容が分かってるあたり、近く……それも読唇術どくしんじゆつが使える距離には少なくともいるみたいだぞ。

それはそうと、メールの内容——考え過ぎじゃないのか？　と思つたが……非社交的と言うレッテルが張られている俺に比べて社交的で白雪と同じ女子である霧がそう言うんだから、一理あるんだろう。

それからメールにはどうやら続きがあるようだ。

『もしフォローするなら「これから外出するなら付き合う」みたいに見えるよ。白雪さん、自発的に外に出ようとしなからね』

質問の返信をしなくてもいいように、先に質問される内容を予測して解決策も書かれてやがる。

相変わらずだな。

俺の思考や行動パターンがほとんど読まれてるだけはある。

確かに、白雪が星伽に縛られずに自発的に外出しようとする気持ちがあるなら、幼馴染みである俺としても付き合うのは吝やぶさかではない。

携帯を閉じて、俺は白雪に話しかける。

「なあ、白雪」

「う、うん……どうしたのキンちゃん？」

俺から話しかけると、白雪は少し驚いた感じの声を出す。

「なんでお前はそうキョドるんだよ……」

まあ、これは今に始まった事じゃないからスルーして俺は話を続ける。

「もしお前が今日をきつかけに自分から外出するんだつたら、俺はこれからも付き合うぞ」

「え……?」

「お前は外に出なさ過ぎなんだよ。だから、自分から外に出るって言うなら……買い物にでも何でも付き合っつてやるよ」

「……………」

ぼかんとした表情を浮かべて止まってしまった。

俺も歩みを止めて、白雪の方へと体を向ける。

すぐに再起動した白雪はどぎまぎして、

「ほ、ほんとに?」

疑うように聞いて来た。

「嘘言っつてどうするんだよ」

「でも、どうして……?」

いきなり、俺が言いだした事に白雪は疑問を持ったのか俺の目を見て聞いてくる。

普段は俺と視線が合うとよく逸らす白雪だが、今回は真つ直ぐに見てきた。その疑問に対して俺は、すぐに答えを出した。

「放っておけないからだよ」

箱入り娘で普段はしつかりしてるくせにどこか危なっかしい白雪だからな。

外に出れば色々知らない事だらけだし、保護者的なポジションの人が必要になるだろう。

でなけりや、何かの拍子に事件や珍事を起こしかねない。

霧にも協力してもらえば、上手く行きそうだな。

名付けて『白雪かごのとり脱出計画』だな。

「ふえっ……?! ほ、放っておけないって……?!」

街灯に当てられた光の下だから、白雪の顔が赤くなっているのが見える。

何を驚いてるのか分からんし、顔を赤くする理由も分からん。

さては子供扱いされてるのが分かって、恥ずかしいのだろうか。

ともかく、だ。

「ああ、一人で外に行くのは不安だろうし俺が傍にいないといけないからな」

何か事件を起こさないようにな。

「それって——」

「そう言えば、早く行かないと花火大会終わっちゃうぞ」
話してる内に忘れる所だった。

白雪が何かを言い掛けてた気もするが、気のせいだろう。
少し急かすように俺は歩き始める。

「え、キンちゃん。待ってよー!」

遅れて白雪も声を上げて追い掛けてくる。

取りあえず、この花火大会が『白雪かごのとり脱出計画』の第一段階だな。

と言うか、これで良かったんですかね? 霧さん。

そう思っているとそれから再び携帯にメールの着信。

……霧からだ。

『バツチリだね』

どうやらお墨付きを得られたらしい。

だが、何故だ……こいつのバツチリとかに不安を覚えるのは……

モノレールやゆりかもめを乗り継ぎ、葛西臨海公園駅を降りる。

そしてそのまま森の中にある舗装された道を進んで、人工なぎさに続く道を歩く。

だが人工なぎさに到着し、ウォルトランドの上空を見れば、残っているのは硝煙のよ

うな煙だけ。

砂浜に近付いて行って音がしなくなった辺りイヤな予感がしていたが……どうやら終わってしまったらしい。

どう考えても原因は俺だ。

「すまん、白雪。俺が遅れたせいだ」

「う、ううん。気にしなくてもいいんだよ、それに途中で話しかけて足を止めてた私がいけなかったの」

などと白雪は愛想笑いと言った感じの笑顔で答えるが……その目はどこことなく残念そうだった。

「それに私は嬉しかったんだよ……キンちゃんが私の事を気に掛けて、連れ出してくれて。まるで、青森での花火大会みたいだった」

「それって5歳の時のか?」

「そうだよ。キンちゃんが私の手を取って、星伽を出してくれたあの日」

白雪は懐かしむように言いながら空を見上げる。

そこに今でも花火が上がっているかのような、そんな視線だ。

「何もかもが新鮮だったよ。星伽を出た事なんて……あの時はなかったから」

「だけど、あの後はめちやくちや大人達に怒られたよな」

「そうだね。キンちゃんはキンちゃんのお兄さんに、怒られてたよね」

白雪、あまりその話は掘り下げないで欲しい。

割とトラウマなんだよ、あの時の兄さんは。

まあ、怒られた後……どこことなく優しくそうな顔もしてたがな。

「やっぱり、私にはキンちゃんが必要だよ。じゃないと……こうして外にも出れない」

「そんな事はない。出ようと思えば、お前も出れるだろ？ それに、今は霧だっているんだしな」

「霧さん……」

霧の名前を出した瞬間に白雪の表情が少し曇る。

「どうしたんだ？ 霧と、何かあったのか？」

思わずそう尋ねるが、

「何でもないよ」

白雪は笑顔で返して来た。

ケンカしたって感じではなさそうだが……一体何なんだ？

いや、今は気にしないでおう。

せつかくここまで来て、何もせずに帰るのも忍びない。

霧が遠巻きで護衛してる事は白雪に伝えてあるし……俺が離れても問題無いだろう。

そもそも敵なんていないんだからな。

「白雪、少しこれを羽織って待っていてくれ」

そう言つて俺は制服の上着を白雪の肩に掛ける。

夜だし、潮風も冷たく感じるだろう。

……俺は逆に暑くなるけどな。

「キンちゃんはどこに行くの？」

「ある物を買いいに行く」

白雪の質問に簡潔に答えながら、俺は走る。

見える位置にいるから分かつてるだろうが……ついでに霧にも連絡しておこう。

◆ ◆ ◆

キンちゃんの背中が遠くなる。

その光景を見て、私は寂しさを覚える。

だけど……大丈夫。

キンちゃんは私の事を放っておけないって言ってくれた。

つまり——私の事が気になってるって事なんだよね……

でも、それでも私には不安な事が一杯ある。

キンちゃんに關してもそう。

今はもう見えないキンちゃん姿が、巫女占札みこせんふだで出た結果を表してる様な感じがする。

もしかしたらつて思ってしまう。

キンちゃんがなくなると言うこと……

それと、霧さんが裏切ると言うこと……

私は考えながら、砂浜から少し離れたベンチに座ります。

その瞬間に私の中きんちゃんやくぶくろ着袋の中の携帯が鳴ります。

取り出してみると、メール……でも、知らない人から……

間違いメール、なのかな？

そう思っけて開いてみる。

………

……え？ なに、これ？

『初めまして星伽 白雪。』

まず、最初に名乗っておこう。

私はお前達が言う魔剣と呼ばれる者だ。

単刀直入に言おう。

明日の午後5時に巫女装束で学園島の地下倉庫に来い。

でなければ、学園島を爆破し貴様と親しい遠山 キンジや白野 霧を殺す。
他の連中にはくれぐれも知られるな。

私はお前を見ているぞ』

何かの冗談、でも……ない。

これは脅迫だつて、私でも分かる。

でも、いきなり……なんで、どうして私なんだろう……

……

思わずキンちゃんの上着を握りしめるけど、キンちゃんは私の傍にいない。

……怖いよ。

「やつほー白雪さん」

この声は……

顔を上げて見れば、いつもの笑顔で霧さんが立っている。

霧さん……っ?! こんな時に考えちゃダメ。

だけど、さっきのメールが着た後に現れた霧さん。

巫女占札の結果。

——裏切り。

違う、霧さんはそんな事しない。

それに、知られちゃいけない。

私はとつさに携帯を閉じて手の中に隠す。

「どうかしたの？」

「ううん……なんでもないので……」

「ならいいんだけど、キンジも不用心だね。いくら私がいるからって言っても離れて行くなんて」

「きつと、何か考えがあるんだよ」

「まあ、そうなんだろうけど——私が魔剣デユランダだったらどうするつもりなんだろうね……」

「え……？」

霧さんの何気ない一言。

私の中の不安が大きくなる。

同時に、霧さんの雰囲気もどこか違う感じがする。

「クスクス、ホント……不用心だよね」

座ってる私を見下ろしている霧さんの視線が、違う。

いつもの楽しそうな笑顔じゃない。

そんなの、ウソ……だよね？

「何をそんなに不思議そうに見てるのかな？」

「いつもの冗談、だよね……?」

「さてどうだろうね。状況を見れば冗談かどうかなんて分かる事だと思っただけど?」
血の気が、引いて行く。

それから彼女の手が、ゆっくりと私へと伸びて――

「なーんてね。私が魔剣デユランダな訳ないよ」

ポン、と言った感じに私の肩を叩きながらいつもの屈託のない笑顔で言います。
しばらくして、私は冗談だと気付く。

……よかった。

「――うっ、う……よかったよう」

不安が安心に変わって、思わず泣きました。

だけど、本当によかった……

「あれ? えっと……白雪さん? どうしちやったのかな」

「なんでもないの……なんでも……」

「ちよつと不安になるような事を言い過ぎたかな? だったら、ゴメンね」

そのまま私は、キンちゃんが帰って来る少し前まで霧さんに慰められました。

◆ ◆ ◆

はてさて、キンジが帰ってくる少し前に私は退散した訳だけど。

いやはや……まさか泣かれるとはね。

一体、私に関してどんな占い結果が出てるのやら。

それはそうと、白雪を慰めてる間に携帯を拝借してメールを転送させて貰った。

本人は気付いていないだろうけどね。

もちろん、送信履歴からも転送した事はきちんと消してる。

私が近付く前に携帯を見た時の白雪の様子が、確実におかしかったからね。

だからまあ、少し強硬手段に入った訳だけ……

白雪の様子がおかしくなったメールの内容はと——

……………。

なるほど、そういう事ね。

キンジが離れたタイミングを見計らって脅迫した訳だ。

しかし、さすがのジャンヌも行動は把握してても言動までは把握してないっぽいね。

私がいると分かっていたら、キンジが離れても脅迫メールをしたかどうか怪しい所。

いや、白雪の性格を加味したら……不思議でもないか。

こんなメールをされたらキンジが好きな白雪は、絶対に他人に言わなかっただろう。

取りあえず、これで舞台上上がる準備は出来た。

あとは一緒に踊るだけ。

さて、どんな感じに演出しようか……楽しみだね。

40：海面下のダンス

あれから、砂浜でキンジと白雪は小さな花火をやった。

白雪は思いつめた感じで、花火の最中にキンジに話をしていた。

メールを転送して見た私からしてみれば、ジャンヌのところに行く前提のような感じの話し方だった。

話してる事が曖昧^{あいまい}だったし、しかも過去形だった。

「したかった」「だった」と言った感じに。

そのあとキンジに対して「火は好き……？」とか、「キス……して……」とか変な問いかけや差し迫り方をしていた。

様子がおかしいと、キンジも気付いてはいたみたいだけどそれが何かは分かってない感じだったし。

そして、終わっていたと思っていた花火が再び打ち上がり始めた瞬間に全てが有耶無耶^{うやむや}になった。

銃声だと勘違いしてキンジは白雪を庇う形で立ち、キスは中断。

流れが断ち切られて、何もかもがハッキリしないまま……2人は呆然^{ぼうぜん}とした感じに花

火を見ていた。

それが昨日の出来事——

ゴールデンウィークと呼ばれる週間が終わった翌日。

アドシアードの開催日となった。

国際競技会とあつて、色んな国の人がこの東京武偵高へと集まっている。

ルミちゃんも着いてるみたいだし……色々と早めに行動しないとね。

私は閉会式にやるチアガールまでの間は狙撃競技の手伝いをする事になつてる。

その手伝いが始まるのに少し時間がある事は分かつてたから、ある2人を昨日の内に連絡していた。

「概要としてはそう言う感じなんだけど……頼めるかな？」

武偵高の裏側で、私はその2人にやって欲しい事を頼んでいた。

「ふむ、^{それがし} 某たちは異変が起きればそのように行動すればよいのだな？」

黒いバンダナを頭に巻いたツンツン頭の男、霧隠 泰蔵^{たいぞう}。

1年前に『毒の一撃』^{ブワッソン}で戦った相手だね。

彼が確認するように言ってきて、私は静かに「うん」と頷く。

「しかし、^{デュランダル} 魔剣がこの武偵高にいるとは……信じられませぬ」

お団子ヘアーをして風魔みたいにマスクをしてる女の子、百地桃子が驚きを含みながら言う。

一応、魔剣が武偵高に潜伏してらしい事は2人に伝えてある。

逆にキンジと神崎に伝えてない。

こう言う裏で動く感じはキンジに合わないし、神崎に関しても同様。

もしかしたら彼女の場合は、地下倉庫に行つて待ち伏せするとか言いかねない。

大体、せっかく舞台が整つたのに2人に伝えて速攻で終わつたんじやつまらない。

だからもつともらしい口実も色々と考えてるし、私は適度に先に踊る事にした。

「まあ、信じるも信じないも自由だけど。証拠はこつちで掴んでる」

私は白雪に送られた脅迫メールを2人に見せる。

「ほう、なるほど。確かに証拠ではあるな」

「ですが、それを教務科に知らせれば良いのではと思ひますが……」

霧隠は納得してるけど、百地は考えを述べる。

慎重な彼女だから、そう言う考えを述べると思つたよ。

「残念だけど、それは出来ないね。どうやら魔剣はこつちの動きを見てるっぽいから、教務科の方も何らかの監視があると見た方がいいと思うよ?」

「……相手の姿が確認できない以上、手練である教務科と言えども知らせるのは危険と

言う事でありまするか？」

「そう言う事だね。逃走されて姿を見失った瞬間……学園島がドカン！　そして、私もキンジもこの世からさようならってことになりかねない」

ジェスチャーを交えて百地に朗らかと言ってるけど、内容は酷いものだよ。

「安心せよ桃子。彼女にも考えあつての事だ、某達は言われた通りにすれば良いのだ」

それから「はっはっは」と言った感じに、霧隠は笑う。

気持ちのいい程に真っ直ぐな人だね。

だけど、百地は向こう見ずであまり深く考えない様子の霧隠に対して疲れたように肩を落とす。

「まあ、心中お察しするよ」

「お氣遣い、痛み入りまする」

私の言葉に百地は静かにそう返すのだった。

前準備は取り敢えず出来たので、後は時間まで待つだけ。

待ち伏せしてもいいんだけど、早めに行つたからといってジャンヌが確実にいる訳でもない。

それに、私はルミちゃんと言うメツセンジャーと合流しなきゃいけない。

狙撃レーンのチェックをし終えて頃には、色々な選手がレーンの背後にある待機場所に集まっている。

その中に特徴的なウエーブが掛かった銀髪の少女を発見する。

フィンランド人の民族衣装を意識してるのか、スカートの前面は紺でサイドには赤のラインが入っている。

そして、白いシャツの上に黒いベストを羽織ってる。

間違いなくヘルシンキ武偵高の制服だ。

「やあ、ルミちゃん」

「……………」

私がそう言って近づいて行くと彼女は無言で見上げてきた。

ルミと呼ぶのは一部の人だけだから、これで分かるからね。

「名前、違う」

そう言つて彼女は胸の名札を見せるように私に向き合ってきた。

ああ、そうだったね。

『ルミ』は本名じゃなくて私たちといる時の通称だった。

「ごめんね。そう言えば自己紹介が遅れたね。初めましてレアちゃん。私の名前は白野霧だよ」

「本題に入る」

私が自己紹介した後にはレアちゃんは静かにそう言う。
相変わらず淡々としてるよ。

彼女の隣に座って、話を聞く体勢に入る。

「それで、伝言って?」

「ソフィーから仕事」

「どんな?」

「もう一人駒が欲しい」

なるほどね。

「それだけ?」

「それだけ。あとは任せるって言ってた」

レアちゃんは伝えたいことは伝えたとばかりに席を立って、狙撃の練習台へと歩き出す。

ふーん……もう一人欲しいね。

私が連れてくる人物がお姉ちゃんの希望って事だし、おそらく連れてくる人物も分かっているだろうね。

だったら、そうだな……せつかくだからこの武偵高から一人選んでみようかな?

アドシアードが終わったら早速、探さないとね。

さて、約束の午後5時まで残り20分。

これから私とジャンヌの前座が始まる。

私の演出にキンジたちはどんな反応をしてくれるのか楽しみだね。

そんなウキウキ気分で地下倉庫^{ジャンクシヨン}へと続く倉庫の入口を開けて、階段を下っていく。

地下2階から下はエレベーターか梯子^{はしこ}を使わないと降りられないけど……エレベーターで行くのはナンセンスだね。

ここは変圧室にある梯子を使う事にしよう。

変圧室へとすぐに辿り着き、床にある浸水を防ぐための隔壁みたいな重厚なハッチへと近付く。

その横にあるパネルを操作して、非常用パスワード、カード認証、IC認証を通す。それからハッチを開けて梯子を下ろすけど……この梯子、錆びてる……

まあ折れたりほしくないだろうけど変な音が鳴りそうなので、メンテナンスの終わったフックショットを梯子に掛けて私は飛び降りる。

ゆっくりとモーターが回って、静かに最下層へと降りる。

足が床に着くと同時にフックショットを回収する。

この場所に1つだけある扉の向こう側は資料室だね。

ドアノブに手を掛けて静かに押す。

鍵は……開いてる。おまけに蛍光灯は消えていて、点いてるのは赤い非常灯だけ。

つまり、既にジャンヌはこの先にいる事は確定して事だね。

音を立てないように侵入する。

さらに奥に進むと、大倉庫と書かれたプレートが扉の上にある。

夜目よめがきく方だから、明かりがなくとも読める。

大倉庫へと入っていき、広い廊下の左右には警告を示す英語が書かれた箱が陳列して
る。

これ全部火薬なんだから驚きだよね。

確かにここなら学園島を全部吹き飛ばすことも可能だろう。

さてさて、聖女の前に残念が付きそうな人はどこにいるのかなと思いつつ探す。

前へと進もうとすると、横目に闇の中でキラリと光る物が映った。

咄嗟に背後へと飛んで回避し、そちらへと振り向く。

ここでは火気厳禁だから、サバイバルナイフを抜く。

別の廊下の奥から段々と人影が近づいてくるのが分かる。

私の目に見えてきたのは――

「あれ？ 白雪さん……？？」

「霧……さん？」

巫女装束の白雪……の姿をしたジャンヌだった。
変装としては及第点かな。

ただ、その胸に着けてる甲冑は頂けないね。

どうせやるなら下着とかも似せないと。

声調は白雪と同じで、こっちは大丈夫か。

ま、短期間である事を考慮すれば上々の仕上がりだね。

なんて評価しながら、私は白雪（ジャンヌ）に近付いて行く。

「ごめんなさい、てつきり魔剣デュランダルだと思って……」

「別に気にしなくてもいいよ。しかし、水臭いよね白雪さんも」

私の言葉に白雪（ジャンヌ）は静かに「え……？」と言った感じに問いかけてくる。

「まさかワザと魔剣デュランダルに会いに行つて一人で倒すつもりでいるなんてさ。昨日メール見た時はビックリしたよ」

「う、うん……ごめんね。危険な目に合わせたくなくて……」

戸惑った感じで白雪（ジャンヌ）は答える。

さすがに通信機器に関しては手が回らなかったみたい。

「そんなメールしてないでしょ、バーク」

いい笑顔で彼女に真正面から言つてあげた。

私の発言にポカンとした表情をして少し固まった後に白雪（ジャンヌ）は顔を歪めて、
「おちよくつてるのか貴様はーっ!!」

どこからともなく取り出した西洋の大剣——クレイモアを構えて、横に一閃する。

私は軽くバックステップをしてそれを躲かわす。

この時点で声は白雪からジャンヌのものへと変わっている。

「ホームズでもなく、星伽の巫女でもなく、最初にお前が私に辿り着くとはな……」

大剣を構え直し、先程の叫びとは一転して冷静な声でジャンヌは言つてきた。

化けの皮が剥がれるの早いよ。

「意外だった？」

「ああ、誤算だよ。私の一番嫌いな事だ」

大剣を片手で持つてジャンヌは剣で私を指すように伸ばしてくる。

「どうやってここに私がいる事を知り得た？ 星伽は貴様に知らせていなかったはずだ」

「なるほど。そう言うつて事は昨日、砂浜のどこかで白雪を見てたんだね」

「昨日だけではない、その前からも私はお前たちを見ていた」

「チャンスを待つてた訳か……」

「その通りだ。上手く分断できたと思っただがな」

ジャンヌは残念そうに言うけど、分断には成功してるよ。

私がここに1人で来たのがその証拠。

連絡せずに来たのは自分の意思だけど、ちゃんとその理由も用意してある。

それから突然にジャンヌが懐に手を伸ばして、1つのスイッチを取り出したかと思うとすぐにボタンを押した。

「悪いが、連絡はさせない。屋内基地局を破壊させてもらった」

さすがだね。

先手を打ってきた。

私にとつたは読み通りの展開の1つだし、先に別の人たちに連絡してあるから問題はない。

あとは時間が解決するけど……ほとんど理性だけで戦うとどれぐらい持つかな。

初めての試みだからちよつと不安は残るけど、何とかなるでしょ。

それに、引き伸ばすのは私の得意なところだし。

「うーん、ちよつとこれは……」

言葉を濁して、動揺を演出する。

「さて、どうする？　ここでお前が逃げれば私は遠慮なく逃走させて貰う。そして、学園島は終わりだ」

「だよね……ただ、そうだね。質問には答えておこうかな？　なぜ、私が知り得たのか」

「……………」

「簡単な話が白雪さんに届いたメールを私の携帯に転送したただけなんだよね。あの時は私に気付かずに携帯の画面を見てたし、様子がおかしかったからね」

「そう言う事か……単純な話だったな。どっちにしろ、貴様はイレギュラーだ。誤算は修正する」

剣を深く握って、いかにも突きを繰り出しそんな構えをする。

私も身構えるけど、きつとアレは相手に剣を意識させるように構えてるだけ。

本当の狙いは――

パキパキパキと、足元から聞こえる音に下を見ると……靴と床が凍ってる。

「うえっ!？」

と、驚いたフリをして足を床から離そうとするけど完全に床に縫い付けられてるから……取れないよね。

そんな事だろうと思ったよ。

よく見れば、ジャンヌの足から床を通して私の足下へと氷が伸びてる。

「所詮はただのAランク。私の敵ではないッ!!」

動けないと見るや、ジャンヌはこちらへ走ってきた。

私はすぐさま靴を脱いで、横に飛ぶ。

間一髪。

そして、髪の毛が何本か切られた。

すぐさまこちらに振り向こうとするジャンヌに向かってナイフを何本か投げる。

難なく彼女は叩き落とすが、その中に閃光手榴弾フラッシュグレナードが混じっていたことに気づいたらしい。

手を掲げて、光が発せられる前に空中でパキンと凍らせてジャンヌは防いだ。

その間に私は一度退散つと。

◆ ◆ ◆

閃光弾に気を取られている間に逃がしたか。

だが、まだこの場にいる。

遊びに付き合ってる暇はない。

まもなく星伽が来る頃だろう。

それまでには終わらせる。

「時間稼ぎのつもりか？ 例えそうだとしても、星伽が来れば終わりだぞ」

闇の中にいる白野に私はそう呼び掛ける。

「確かにね。人質に取られたらおしまいだね」

彼女は律儀に返答してきた。

ジャックの言う通り神崎ほどではないが……勘が良いのだろう。

自分の敗北条件が分かっているらしい。

私を見失えば終わり、星伽が来ても終わり。

逆に彼女の勝利条件は遠山か神崎が来ることだろう。

だがその勝利条件は彼女がここに来る前に何らかの手を打っていたら話だがない。

その可能性を考慮すれば、やはり星伽が来る前に倒すのがベストだろう。

もし、遠山たちが来たとなれば白野を人質にすればいい。

段取りも決まったところで、彼女を探す。

銃火器はここでは使えまい。

影から撃たれることはないだろう。

撃てば最後、全てを吹き飛ばす事になるからな。

何かが飛んでくる気配と同時に振り返れば、

「またしても閃光弾……っ」

この暗闇に目が慣れてはいる以上、これをまともに喰らえばたとえ私でも間違はなく負

けるだろう。

すぐさま手を掲げて氷漬けにして防ぐ。

しかし、私の左側から白野が接近しているのが見えた。

チツ……剣を握っている手の逆側の方から攻めてきたか。しかも、私が防ぐことを見越していたらしい。

どうやら、実戦慣れしているという情報も間違いいではないようだ。

我が聖剣『デュランダル』を両手で持つて、横に一閃するが……かなり深くまで接近されている。

白野は私の一閃を屈んで躲かわしてみせた。

そのままの勢いでスライディングをするように私の足と足の間を通り抜けていく。

そちらの方を振り向こうとすれば、足払いを仕掛けてこようとしている彼女がいた。

すぐさま跳躍して、フランスの銃剣——ヤタガンを投げつけるが白野はすぐに退いたと思うと、何かを落としていった。

(3個目ッ……！)

またしても閃光弾。

私の超能力ステルスが付加されたヤタガンが発光する前に床を伝って閃光弾を氷漬けにする。

その間にも白野は闇の中に消えた。

「どうやら、実力差を考慮して奇襲によるヒットアンドアウェイの戦法を取っているの
だろう。」

「だがそれは閃光弾を囷にしての離脱だ。」

「なければ、私から逃れる術はない。」

「小賢しい真似を……閃光弾をいくつ持つているかは分からないが、所持数はそれほど
多くないだろう？ この戦法を取るにも限界ではないのか？」

「遠回しに脅迫した人に小賢しいなんて言われたくないよ」

「私は策士なのでな。小賢しいは褒め言葉だ」

「開き直りの間違いなんじゃないかな？」

「人の揚げ足を取るような喋り方……少しばかり既視感を覚える。」

「そう。ある人物の掴みどころのない、見えない姿が脳裏にチラつく。」

「少しばかり湧き上がる怒りを覚えたと同時に、背後からの気配に振り向く。」

「なっ……!!？」

「彼女はリボルバーを構えていた。」

「バカなッ!! ここは火薬庫だぞ……」

「発砲すればどうなるか分かるはず。」

「そして、彼女は躊躇いもせずに発砲した。」

我が聖剣の腹で銃弾を防いだが、弾かれた銃弾はどこかの箱にぶつかった音がする。思わず冷や汗を流す。

……………。

爆発しない？

その後も何発か銃弾を発砲し、私は防ぐが……一向に爆発する気配はない。

それから銃弾を防いだ時の違和感。

金属ではない。

それに気付くと同時に白野が私に接近して空中で蹴りを放とうとしている。

反撃はできない。

銃弾と同様に蹴りも剣の腹で防ぐ。

彼女はそのまま反動で跳んで行き、距離を取ったところで私は分かった。

「……ゴム弾か」

「地下倉庫ジャンクンで遠慮なく発砲して爆発しない時点で、銃弾じゃない事は簡単に分かっちゃうよね……」

「昨日の間によく用意してるな。対応の早いことだ」

おまけに銃を使えないと思っていった私の意表を突いた点も評価しよう。

閃光弾ばかり使っていたおかげでそちらに警戒も割かれていた。

どうやら、一番警戒すべきだと奴が言った意味がよく分かった。

こいつは神崎や遠山ほど単純ではない。

そう言う事だったのだろう。

奇襲を仕掛けてくることから、実力は私の方に軍配があると見ていい。

しかし、流れはあちらの方にあるようだ。

だがそれでも、大局的には私の方が有利。

静かに白野はグロック18Cを抜き、私もそれに対して剣を構える。

その時だった。

——ガシャン。

この倉庫の扉が開かれる音がする。

私も白野も視線をそちらに向ける。

誰だ？ ホームズか？ 遠山か？ それとも——

「誰か……いるの？」

「——ッ!? 白雪さん、そこで止まって！」

初めて見えた白野の動揺。

チャンスは逃さん。

私は一瞬目を細めて、白野に突撃する。

彼女は私に気付いたようだがもう遅い!!

数秒後には――

「え……う？ イヤ………なんで………いやああああああつ!!」

星伽の巫女の叫びが響いた。

41 : 深刻化した事態

「お……っ！ キン………っ!!」

まどろみの中、誰かの声が聞こえる。

……寝不足のせいでしょうかやら寝てしまっていたようだ。

寝不足の原因は昨日。

白雪の様子がおかしかった事だ。

それは置いておくにしても今はまだアドシアードの最中、起きなければと思いつつも意識は半分眠ったままで夢の海に沈んでいる。

「おいっ!! 起きろっつってんだよキンジっ!!」

肩を大きく揺すられる衝撃とともに一気に覚醒した。

目の前に何やら肩で息をしている武藤がいる。

寝ていた事に怒っている——と言う訳ではないらしい。

それよりも何かを焦っているような、そんな感じだ。

「どうしたんだよ?」

俺が目を少し擦こすって尋ねると——

「——星伽さんがいなくなった」

武藤のその言葉に、俺は思わず目を見開いた。

「どういう事だよ……?!」

「どういう意味もそういう意味だよ！ 星伽さんがいなくなった。それと、白野さんの姿も見えないらしい」

白雪だけでもなく霧も!?

武藤の言葉に俺は耳を疑う。

「10分ほど前に屋内基地局が破壊された。今は通信科コネットの連中が復旧作業に入ってる。どうやらこの武偵高で何かが起こってるらしい。携帯での連絡ができない以上、マスターズ教務科は口頭でだがケースD7を発令した」

武藤は俺の目を見てそう告げる。

走ったからこいつはこんなにも、呼吸が早いのだろう。

そしてケースD7——Dはアドシールド期間中に武偵高内で事件が起きた事を表す暗号だ。これがD7となると『事件かどうかは不明瞭。連絡は一部の者だけとし、保護対象者の安全のためにアドシールドは通常運行。みだりに騒ぎ立てずに極秘裏に解決せよ』と言う事だ。

俺は思わず携帯を確認する。

武藤の言うとおりで、どうやら屋内基地局が破壊されたのは本当らしい。携帯の電波の表示が圏外になっている。

と同時に気付いた。

メールが一通、届いてることに。

おそらくは屋内基地局が破壊される前に届いたのだろう。

そのメールの内容を見て、俺は凍りついた。

『キンちゃんごめんね。昨日はありがとう。さようなら』

なんだよ……これ。

まるで遠くに行ってしまうような、白雪から別れを告げる文面。

何がどうなっているのか……俺には全く分からない。

だがこれだけは分かる。

——白雪の身に”何かが起こった”のだと。

霧もない事を考えればもしかしたら……霧は白雪の身に起こった異変に巻き込まれたんじゃないのか？

ともかく、あいつらを探さなければならぬ。

俺は思わず駆け出した。

最初に白雪が担当する場所に俺は向かったが、そこには当然に白雪の姿はなかった。携帯が使えない以上、アリアに連絡することすら叶わない。

今はこの武偵高の敷地さえ広く感じてしまう。

一体、どこに誰がいるのかさえ分からない。

(——チクシヨウ)

闇雲に走り回っていると間に霧の言葉がチラつく。

『確かに魔^{デユンダル}剣がいるなんて証拠はないけどさ。いない証拠もないって事でしょ?』

『存在しないなんて、決めつけるのは早計じゃないかな?』

そうだ。

あいつの言うとおりでた。

確かに魔^{デユンダル}剣がいるなんて証拠はない。

だけど、いない証拠もなかった!

先日アリアに言った事もそうだ。

『何度でも言ってる、敵なんて存在しない。お前の妄想だ!!』

——違う。

それは逆で、俺も魔^{デユンダル}剣は『いない』なんて言う妄想に取り付かれてたんだ。

武偵憲章7条——悲観論で備え、楽観論で行動せよ。

その言葉通りにアリアと霧は悲観論で備えていただけだ。
なのに俺はどうだ？

敵なんていない。ボディーガードの必要なんでない。

そんな楽観的な考えで備えていたんだ。

アリアに偉そうに証拠を出せとか言っておきながら、俺も魔^{デユランダ}剣^{ダル}がない証拠なんて
何一つ出してない。

その結果がこれだ。

白雪は俺が守ってくれると信じてくれていた。

なのに、俺は……裏切ったんだ！

信じてくれていた白雪の心や信頼を。

白雪がどこにいるかも分からない。

だけど——探すしかない。

ここで諦めちまったら、俺はそれこそ最低な男に成り下がる。

そう思っ^て武偵高の南側に向かおうとした瞬間——

「待たれよ」

突然に声が掛かり、俺の目の前に人が降ってきた。

こいつは——

「ふっふっふ、伊賀忍者——霧隠 泰蔵、推参」

黒いバンダナをした鋭い目をした忍者はそう名乗る。

俺はこいつを覚えていた。

1年前に『4対4戦』で戦った相手だ。
カルテット

「こんな時に一体なんだよ」

焦りのあまりに俺は強い口調で聞いた。

「まあ待て。それがし某は白野殿に頼まれてお主を探していたのだ」

「なに………どういう事だよ？」

「異変が起きれば遠山殿を探し、地下倉庫に向かうように伝えてくれとな。しかし、お主を探し回るのは苦勞した。講堂にいますと言う風に聞いて行ってみればおらぬしな」

はっはっはと、少し霧隠は高笑いをする。

だが引つ掛かる部分がある。

「異変が起きれば？」

思わず俺はその部分を反芻する。
はんすう

「詳しくは白野殿に聞いてくれ。忍びは多くを語らぬのでな。ただ頼まれたことを遂行するのみだ。時間も無いのだろう？」

俺の疑問には答えないとばかりに霧隠は答えた。

確かに霧隠の言うとおりで、詳しい事を聞いてる暇はない。

「分かった……ありがとう。お前はどうするんだ？」

「某も付いていきたいところだが……あまり大袈裟に騒ぐわけにもいかん。持ち場に戻るしかないだろう。神崎殿を探しておるのなら心配するな、桃子が連絡に行っている」
 どうやらアリアの事を知っているらしい。

いや、霧が教えたんだろうな。

何て事ないと言った感じで微笑む霧の顔が頭をよぎる。

感謝……だな。

「そうか、ありがとう」

「武運を祈るぞ」

それだけ言つて、霧隠は忍者つぼく走り去つて行つた。

俺はすぐに地下倉庫ジャンクンヨンへと足を向ける。

武偵高の地下は7階までであり、多層構造になっている。

その中で地下倉庫ジャンクンヨンは一番下の地下7階にある。

そして、地下倉庫などと言つてはいるが厳密に言えばあそこの大部分は火薬の保管庫だ。

それ以外には資料室ぐらいしかない。

また、地下2階以下は海面で立ち入り禁止区画でもある。2階までは階段で降りられるが……地下7階に行くには非常ハシゴかエレベーターを使うしかない。

一先ず地下2階まで降りてエレベーターを探し当て、飛び付き、扉の横の端末を操作する。

が、反応がない。

おかしい。

武藤の言葉どおりに武偵高で何かが起こっていることを実感させる出来事だった。ともかく、エレベーターが使えないなら非常ハシゴを使うしかない。

すぐに変圧室へと向かい、扉を開けて俺の目の前に飛び込んできたのは——
(ハッチが開いてる?)

誰かがハシゴを使ったと見られる形跡が残っていた。

もしかしなくても、霧が既に下へと降りているのだろう。

霧隠は『異変が起きれば俺を探して地下倉庫に行くよう白野に頼まれた』と言っていた。

だから、霧の奴は巻き込まれたんじゃないやなくて白雪の異変に気付いてたんだ。

ただ気になるのは、どうして俺やアリアに知らせてくれなかったのか？　と言う事

だ。

だが、今は考える時間も惜しい。

すぐにハシゴを使って下の階へ——！

そう思つて、急いで俺はハシゴを降りる。

しかし、どうやらハシゴはかなり使われていないようで……あちこちに錆があるのが触つていて分かる。

時折その錆に指を引っ掛けて切れるが構いはしない。

それ以上に白雪や霧が傷つくかもしれないんだ。

痛みに手を休めてる暇なんてない！

落ちないように全速力でハシゴを降りて、ようやく地下7階へと辿り着いた。

静かに資料室の扉に張り付いて、扉の窓ガラスから中を覗き見るが……暗い。

点灯しているのは赤い非常灯だけだ。静かに中に入つてみてその様子は扉を開ける前と何ら変わりはない。

それどころか不気味さを感じる。

けれども俺は足を止めずに先へと進む。足音を殺し、急ぎながらも2人の姿を探す。

探しながらも奥へと進んでいる内に1つの大きな扉が俺の行く手を阻む。

この扉の先がどこに続いているのかを携帯の明かりで照らされた武偵手帳で確認す

る。

——大倉庫。

広い空間になっていて特に弾薬が多く集められている場所だ。

あと探していないのはここだけ。

……………。

扉を開けて入れれば誰かがいる気配がする。

「……………ど……………て？」

僅わずかながらに聞こえた白雪の声。

誰かと話しているようだ。

俺は息を殺し、白雪の声がした方へと柵を沿いながら近づいて行く。

近付きながら柵に置かれている箱にチラリと視線を向ければ、『KEEP OUT』や

『WARNING!』と言う警告を示す英単語が目に入る。

箱の中身は火薬だ。

火花でも起こせば簡単に爆発する。

銃は使えない。

柵の端まで辿り着き、その隣に続くように置かれている大きな木箱へと俺は移る。

バタフライ・ナイフを静かに展開して、刃を鏡代わりに角を確認すれば——

（――白雪――）

積み上げられた弾薬箱の傍で座り込んだ巫女装束の白雪がいた。

暗闇の中で1人。

その光景に俺は思わず内心、悪態を吐いた。

こんな時にこそ俺は白雪の隣に立つべきなのに……俺は影で様子を窺う事しか出来ない。

俺がマヌケじゃなければこの状況ももう少し違ったものになっていたかもしれない。

……………。

今は、そんな過ぎた事を考えてる場合じゃない。

白雪を救う事を考えろ。

俺は逸る気持ちを抑え、曲がり角に身を寄せて耳をすます。

「霧さん……私のために……！」

白雪は涙声で、呟いた。

霧が、どうしたって言うんだ？

少しばかり不安を感じさせる雰囲気には俺は息を呑む。

「魔剣^{デモラダール}どうして?! 私が身を差し出す代わりに誰にも手を出さない! そう言う話だったの!!」

訴えるように叫んだ白雪の声が倉庫内に響く。

——魔劍。
デユランダ

本当に、実在してやがったのかよ……

「勘違いをするな。私が自ら手を出したのではない。奴がこの場に来たのだ」

それに対して、男のような鋭い喋り方をする女性の声が返って来た。

ナイフの刃に映るように声のする方へと向けるが……何も見えない。

上手く闇の中に隠れてる様だ。

「そんなの、ウソだよ」

「嘘ではない。昨日、葛西臨海公園の人工なぎさで白野に慰められていただろう？」

その言葉に俺と白雪は離れていながらも同時に驚愕した。

なんでコイツがそんな事を知ってるんだ……いや、簡単な事だ。

あの時、近くにいやがったんだ。

デユランダ
魔劍は言葉を続ける。

「どうやら、その際にお前の携帯に送った私の脅迫メールを自分の携帯へと送ったようだ。貴様が気付いていない辺り、転送した事は削除したのだろう」

「……………」

「つまり白野はお前の異変に気付いていて、貴様を助けるために動いていたと言う事だ。

もつとも……私と闘うつもりはなかったようだ。私の姿を確認出来ればすぐに連絡し、増援が来るまでは待機か足止めする心算だったのだろう。少しばかり侮っていた。だが、貴様のおかげで”助かった”」

「——ッ!?!」

フオロリーミィ

「私に続け、白雪。貴様が来れば遠山も、武偵高にいる者たちも傷つかずに済む」

デユラツタル

魔 剣は勧誘するように言葉を投げかけて来た。

白雪は震えながら、返した。

「なんで、私なんかを……欲しがるの?」

「知れた事を……貴様は原石だ。それも大きな力を秘めた、な。このような箱庭でそんな値打ちのあるものが、欠陥品の武偵にしか守られていないのならば手が伸びるのは自然な事だ。疑問に思う余地はない」

「欠陥品……?」

「そうだ。遠山 キンジ……ヤツが欠陥品でなくて何だと言うのだ?」

「——違う! キンちゃんは、欠陥品なんかじゃない!」

白雪はすぐに反論した。

だが、それを魔 剣は一笑する。

デユラツタル

「ふんっ……なら何故ヤツは貴様の傍にいない? 何故助けにこない?」

「それは、私が助けを呼ばなかったから……」

「違うな。欠陥品でないのなら、助けなど呼ばなくても白野のように自らここに辿り着けるはずだ。つまり、ヤツはお前の危機に何も気付いていなかったのだ」

「違う！ 私がキンちゃんに気付かせないように振る舞ってただけ！ だから……」

魔 剣は事実を述べ、白雪は必死に反論するが……俺にはどちらの言葉も胸に刺さる。思わず左手で胸を抑えるように握る。

「遠山に迷惑を掛けたくないと言う一心か……。だが、貴様が知らない内に貴様は私に協力していたのだぞ？」

「……え？」

「すぐに来てくれ！ 白雪！ バスルームにいる！」

俺は耳を疑った——俺自身の声だ。

デユランダ

魔 剣は俺の声で喋ったのか?!

同時に白雪は息を呑み、肩を震わせるのが見えた。

その白雪の反応を見てか、ヤツは楽しそうな声を上げる。

「ホームズは警戒網を敷いていたようだが、罠が張つてると分かっている考えもなしに飛び込むほど私はバカではない。やり方は幾らでもある。中国では私のこのやり方を離間の計と呼ぶらしいがな」

「キンちゃん、アリアを仲間割れさせるために……私を利用した……う」

「そうだ。あとは水が高い所から低い所に流れるように自然に進んで行った。いい意味での誤算だったさ」

俺が東京湾に落とされた夜、白雪は俺が電話を掛けて来たと言つて風呂場に侵入してきた。

そして、上半身裸の俺を見た白雪は暴走し俺はそれを取り押さえたところで、アリアと霧が運悪く帰つて来て俺は誤解される破目になった。

だが、今になって分かった。

あれは“運悪く”帰つて来たんじゃない。

アリアたちが帰つて来るタイミングで魔^{デモンダール}剣が誤解させるよう仕向けるために、白雪を動かしたんだ。

俺とアリアを仲違いさせて、少しでも隙を作り、白雪に近付くために……次の女の言葉に俺は、耳を疑う事になる。

「お前は遠山に幻滅すべきだ。」兄と違つて“臆病者なヤツには特にな」

兄と違つて……だと？

なんだよ、それ。

それじゃあまるで――

兄さんを知ってるみたいじゃねえか!?

ギリ、と齒軋りをする。

なんでだ……なんで魔^{デュランダ}劍が俺の兄さんの事を知ってる様な口振りなんだ……?!

「どうしてキンちゃんにお兄さんがいるのを知ってるの!？」

白雪が叫ぶ。

対して、ヤツは当然とばかりに返した。

「当たり前だ。星伽の巫女、遠山 金一を殺したのは他でもない。これから貴様が行く

ところ——」

——我々、イ・ウーが殺したのだから——

頭が、真っ白になった。

今、魔^{デュランダ}劍は何て言った……?!

——イ・ウー。

アリアの母親に冤罪を着せただけでなく、峰・理子・リュパン4世を使って俺の兄さんを殺した。

アイツらが……俺の兄サンヲ……ッ!

頭に血が上って行くのが分かる。

齒を噛み締め、バタフライ・ナイフを握る手もカチカチと震える。

「それともう一つ。白野に関しては終わった事だが、もう一つ誤算があったようだ。星伽、遠山に連絡したな？」

白雪に語りかけていた声が俺へと向けられている。

その事に気付いた途端に俺は冷水を掛けられたように、頭が冷めた。バレたのなら、迷ってる暇はない！

「白雪、逃げろ！」

俺は犯人の確保するために叫びながら角から飛び出す。

今まで会話を聞いてたんだ。

声のした場所は大体分かってる。

相手は何らかの行動を起こす前に、辿り着くんだ！

「愚かだな」

デユランダ

魔劍の言葉と同時に俺の足に何か引つ掛かった。

派手に前へと俺は転ぶ。

すぐに立ち上がろうとするが、何か飛んでくる。

——間に合わねえ！

だが、その何かは俺自身じゃなくて俺の傍の床へと突き刺さる。

それから信じ難い現象が起きた。

パキパキ、と飛んで来た刃物の周りが凍り始め、俺の足を床と縫い付けた。
……何、だ？ こいつは……

そんな事を思っている内にも瞬く間に氷は広がって、膝ひざ、肘ひじ、と順番に床と一緒に凍りついて行く。

気が付けば俺は四つん這いで固められてしまった。
体を起こせない。

「星伽をここに呼んだのは私だぞ？ 罨があると、考えれば分かるはずだがな」

デユン、デユン、
魔 劍は拍子抜けとばかりに呆れたように言ってきた。

その言葉に俺はさつき引つ掛かった場所を見れば細いワイヤーが1本、床に沿って張られているのが見えた。

チクシヨウ……こんな単純な手に……

「キンちゃん！」

俺を心配するように白雪が叫んだ瞬間に赤い非常灯すらも消える。

「いや、放してッ！ キンちゃ——！！」

「——白雪！」

闇の中で白雪は俺に助けを求め、俺は白雪を助けようと足掻き……声を上げる。
が、届かない。

それどころか遠ざかって行く。

俺は目の前で起きている事に対して何もできない。ただ、傍観者でいるしかない。

……ここまで事態を深刻化させたのは俺の所為だ。俺がもう少しアリアや霧の言葉に耳を傾けていればこんな事にはならなかった。

なのに俺は……何も聞かず、何もせずにいたんだ。

もう、どうしようもないのか……？

「何を諦めてるのよ、バカキンジ！」

俺の内心で思った事に対して叱咤するように響いたアニメ声。

それから暗闇の中で1つ天井の明かりが点いたかと思うと、連鎖するように別の明かりも点灯していく。

暗闇に包まれていた倉庫内が白い光に照らされる。

さっきのアニメ声——聞き間違える筈がない。

「アリ——ぐほっ?!」

俺が名前を呼ぼうとした瞬間に、背中と足を踏み付けられた。

床を歩くように自然に歩きやがった。

それから、俺の目の前にちっこい脚が2本現れる。

「デモラッセル魔劍——！ 未成年者略取未遂の容疑で逮捕よ！」

日本刀を担ぎ、デユランダ魔劍のいる方向を指差してアリアは高らかに声を上げる。

そのアリアの気炎とは逆に冷静な口調で、姿の見えない女は聞こえるように呟く。

「誰かと思えば、使えないホームズか」

「名譽毀損きそんも罪状に加えるわよ……？」

俺が見えているのはアリアの背中だけだが、頬をヒクヒクと動かしている表情が俺には目に浮かぶ。

火薬箱が置かれている棚の隙間から突然に風を切る音が聞こえ、アリアに向かって2本の投剣が飛来する。

アリアは慌てる事もなく肩に担いでいた日本刀を上から下へと一閃すると……金属音が2つ響き、キヤリキヤリと音を立てて投剣は床を滑って行った。

そして、アリアは飛んできた方へと首を向ける。

俺もそつちに唯一動く首を向け、次に聞こえたのはガシャンと言う扉が閉められた音。

「逃げたわね」

そう言うアリアはくるりと俺へと振り向き、持っていた日本刀で俺と床をくっ付けている氷を砕き始める。

「全く、無様な姿ね」

「うるせえ……」

俺の目の前でしゃがんだ腰の布の中身が見えそうだったので俺はアリアにそう一言返して視線を外す。

屋上でケンカした時の気まずさもあって、俺はその事から意識を逸らすように尋ねた。

「今までどこにいたんだよ……」

「魔^{デモンタル}剣は、白雪を監視してた。あたし達を含めてね。それから段々と距離を詰めてる様な感覚があった。だけど、あたしや霧がべったりだったから直接的に手を出そうとはして来なかった。だからあたしは一度、白雪の傍を離れる事にしたのよ。霧も無意識の内か狙ってかは分からないけど、遠巻きからの護衛に切り替えてたしね」

「じゃあ、強襲科^{アサルト}の屋上でケンカ別れしたのは……」

「ま、これもいい機会と思ったのよ。あんたのやる気のなさに腹が立ったのは事実だけどね。それに武偵憲章2条『依頼人との契約は絶対に守れ』。それを破る訳ないでしょう?」

言いながらアリアは俺の膝の氷を剥がす。

ようやく床と氷から解放された。

「そうだ、白雪——!」

デユランダル
魔剣に連れて行かれたあいつを探そうと、俺はすぐに駆けだす。
が――

「待ちなさい」

「うおっ――!?!」

アリアに襟首を掴まれて首が締まった。

「何すんだよ!」

「少しは警戒しなさいよ」

アリアは呆れるように言つて俺の前に出て日本刀を振り、見えない”何か”を切つた。

それから光に反射して、宙に細い線のような物が舞う。

これは……

「ワイヤーか」

「そう。T N K ツイストナノケブラーワイヤー。今のはあんたの首の高さ、それでこれはあたしの首の高

さ」

言いながらアリアはもう一本のワイヤーを切る。

「どっちも首の頸動脈を擦るよう斜めに張られてる。確実に殺す気だったわね」

「用心深いヤツだな……」

「だけど無駄よ。あたしの目は誤魔化せないわ。早く白雪を探しましよ」
流れるようにアリアは日本刀を背中に仕舞う。

俺はアリアに続き、白雪が連れて行かれた場所へと向かう。

白雪を見つけるのに、そう時間は掛からなかった。

あいつは倉庫の壁際のパイプに立ったまま鎖で縛られていた。
口には布を巻き付けられている。

さっきの反省もあり、俺は罨に警戒しながらもアリアと一緒に白雪の傍へ駆けつける。

そして布を外してやると、

「よ、よかった……キンちゃん、無事だったんだね」

自分の心配よりも俺の心配をするあたり、白雪らしい。

そんないつもと変わらない様子の白雪に少し安堵する。

どうやら怪我も特にないらしい。

「俺よりも自分の心配をしろよな……」

呆れながらも俺は言う。

それから白雪は何かに気付き、それから震えながら口を開く。

「キンちゃん……霧さんは？」

「いや、俺も場所が分からない。魔剣デユランダと話してる時から気になってたんだが、霧がどうしたって言うんだ？ あいつもここに居るんだろ？」

それから、ボロボロと白雪は涙を流し始める。

「き、霧さん……どうしよう、キンちゃん……私のせいで……霧さんが！」

涙声になりながらも、白雪は俺に何かを伝えようとしている。

俺でも分かる。

嫌な予感だ。

こんなにも白雪が必死そうな顔をしてるのに、分からない訳がない。

俺の中の不安も大きくなる。

そして、思い出すのは魔剣デユランダが会話で言った言葉。

『もつとも……私と闘うつもりはなかったようだがな』

——まさか……！

嫌な予感が確信に変わった時、血の気が引いて行く。

アリアも、俺と同じような事を思ったのか俺の顔を見る。

「すまん、アリア。ここで白雪を——」

「言わなくていいわ。早く探しなさい！」

言いたい事は分かっているとばかりにアリアは俺のセリフを遮る。

すぐに俺は彼女達に背を向けて走る。

それから柵の通路を1つ1つ、探し回る。

いつもニコニコしながら何でもそつなくこなして来たあいつに限って、そんな事があるのか？

否定しながらも、不安は大きくなるばかりだ。

そうやって探してる内に、白雪が魔劍デユランダと話していた場所まで戻って来た。

それから柵の影の向こうの壁際に人影が見えた。

思考するよりも前に駆けつける。

……………。

壁際にいたのは間違いなく霧だった。

だけど、壁にもたれるように倒れている。

——両手足を氷漬けにされて。

——人形みたいに頭を垂らしている。

今までに見た事ない姿だった。

42：銀幕の劇場

「おい、しつかりしろ！ 霧！」

駆け寄って肩を軽く揺するが、反応がない。

頭が無造作に揺れるだけ。

目立った外傷はない。

首の動脈に指を当ててみる。

脈は……ある。

どうやら気絶してるだけらしい。

一安心すると同時に、後悔の念が生まれてくる。

俺が、バカだったばかりに……こんな事態を招いちゃった。そもそも霧は俺に注意してくれてたんだ。

アリアと喧嘩したあの日に……

なのに俺は話半分で聞いてた。

「悪い」

顔を伏せて、聞こえてないかもしれないがそう言うしかなかった。

そんな時だった。

「謝罪するくらいなら人の忠告はちゃんと聞くことだね」

いつもの陽気な声が聞こえた。

伏せていた顔を上げれば、いつもみたいに霧が微笑んでいた。

「お前……大丈夫なのか?！」

「気絶のフリをしてただけだからね」

「ならさつきと反応しろよ……」

「ごめんごめん。それよりも、氷を何とかして欲しいかなーなんて」

「あ、ああ」

俺は慌ててバタフライ・ナイフを出して、ガシガシと霧の足首にある氷を削る。

間違つて肌を傷つけないように少し集中する。

が……そのおかげで否が応でも霧の、女の子特有の柔肌の脚が目に入る。

クソ——さつきの反省から一転して不謹慎な感情を持つなよ、俺！

「キンジ、変なところ見てない?」

「……見てねえよ」

とつさに俺は返したが、アリア程じゃないにしてもそこそこ鋭い霧は気付いてるよ
うだ。

「まあ、別に見るのも触るのも構わないんだけどね。やりにくかったら、脚を掴んでもいいんだけど?」

「おい、やめろ。こんな時に限って変な事を言うな」

少し顔を見れば霧はいつもの調子の笑顔だ。

こんな非常時に余裕な事だ。

さっきの俺の心配を返せ。

なんて思ってる内にも両方の足首の氷が剥がれた。

そこから会話はなく、すぐに両手の氷も剥がし終える。

「やっとな窮屈な体勢から解放されたよ」

霧はそう言って立ち上がると、大きく腕を上げて背伸びするが……右腕だけおかし
い。

ぶらぶらと垂れ下がってる。

本人も違和感があるのか、自分の右腕を見て溜息を一つ吐く。

「はあ……外れちゃってるか」

「脱臼、してるのか?」

「みたいだね。ヒビも入ってるかも、ただ外れてるだけならいいんだけど……」

それから霧は左手で自分の右腕を掴んだかと思うと、

「んっ……」

ゴキ！　と言う音がした。

こいつ……自分で肩を治しやがった。

さすがの俺も若干引いた。

霧は治した肩の調子を確かめるように、少し肩を回してる。

「やっぱり違和感が残るね」

「当たり前だろ。それよりも——」

改めて、俺は霧に謝りたかった。

だけど……何て言ってもいいのか分からない。

真っ直ぐに霧の顔を見れない。

「ま、言いたい事は分かるよ。だけど、そう言うのは全部終わってからにしてね。まだ」

何も解決してない” んだから」

ズバリと、霧に正論を言われる。

そうだ。

何も解決してない。

犯人を捕まえた訳でも、白雪を解放出来た訳でもないんだ。

「そう、だな……その通りだ。霧、協力してくれるか？」

「友達を救うのは、当たり前前の事なんじゃないの？」

俺の背中を押す言葉をこいつは掛けてくれた。

謝罪を求める訳でもなく、責任を追及する訳でもなく、許してくれたのとは違うが……少なくとも気にしてない。

そんな風に聞こえた気がした。

俺と霧はすぐに白雪の所へと向かう。

辿り着けば、どうやら白雪はまだ解放出来てないらしい。

アリアはこちらに気付くと、

「あんた……よかった。無事だったのね」

そのまん丸の赤い瞳を開けてから、優しそうな声音で霧を心配していた。

霧は相変わらずのからかうような調子で、

「なに？ 心配してくれてるの？」

と言う。

「別に……あんたの事だからどうせ何食わぬ顔して戻って来ると思ったわよ」
ツンとした口調で返した。

短期間で霧の事がよく分かってるな、アリア。

「よかった……霧さん、無事で」

一番心配してた白雪も、目の端に涙を浮かべながらも笑顔で答える。

「無事って言っても、さっきまで右肩が外れてただけだね。あと、私の靴知らない？」
なんて言いつつも、霧は白雪の拘束されている鎖に手を掛ける。

氷を剥がす時に気付いていたが、霧は何故か靴を履いていない。

今は探してる暇もないのは分かってるからか、靴の事はそれ以上気にせずに霧は俺の拳より少し大きめのドラム錠を見る。このドラム錠は3つもカギがあるかなりの難物だ。

俺が霧を探してる間にもアリアは解錠パンクキーで解除しようとしていたようだが、未だに1つも開いていない。

かなり複雑らしい。

鎖も、工業で使いそうな分厚いものだ。アセチレンバーナーとかの道具がないと切れそうにもない。

銃で粉碎する？ バカな事を考えるな。ここは火薬庫だ……跳弾して引火したらどうする。

パイプは塩化ビニルじゃない。普通に鋼鉄だ。

ドラム錠を外すしか白雪を解放する手段はなさそうだ。

「ごめんなさい。皆に黙って……特に、アリアにはヒドイことばかりしてたの……」

助けに来てくれて、ありがとう」

突然の白雪の謝罪と感謝に、アリアは照れくさそうに顔を赤くする。

「ふ、ふんっ。あたしはただ単に魔剣デユランダルを捕まえたいただけよ。それに、これは依頼だからあんたを守ってるだけ……だから感謝されるような事はしてないっ」

言いながらもアリアは、ドラム錠の解除の手は休めない。

いまいち言動と行動が噛み合っていない気もするが、それは置いておこう。

それよりも、1つ気になる事があった。

「そう言えば霧、お前。白雪の事に気付いてたみたいじゃないか……どうして俺達に前もって知らせてくれなかったんだ？」

自分の事を柵に上げるみたいで聞きづらかったが、何で1人で突っ込むような真似をしたのかが分からない。

「そうよ！ あんたから伝言を預かった子から話を聞いたら、まるで前から知ってたみたいじゃない」

アリアも納得がいけない様子だったのか、手は動かしながらも少し霧を睨む。

対して霧はどうしたものかと言った感じに少し腕を組んで、話し始める。

「まあ、確かに知ってはいいたよ？ でもさ、あの時2人に知らせても足並みが揃わないと思っただよな。キンジなんて、脅迫メール見せた所で誰かの性質たちの悪いイタズラだっ

て言いそうだし——」

「うっ……」

「神崎さんに関しては、待ち伏せして魔剣デユランダを捕まえるなんて言い出しそうだし」

「うっ……」

「だから、知らせるのは魔剣デユランダの姿がちゃんと確認出来た時にするつもりだったんだよ。先に向こうに見つけられたけどね」

霧の言う事には一理あった。

確かに、白雪が脅迫された事を霧が言ったとしても……俺は信じなかったかもしれない。

性質の悪いイタズラ……そう判断しただろう。

そう思われたって言う事はつまり、霧は俺の事を信用出来なかったって事だ。

相手はやり手の犯罪者。

アリアと足並みが揃わなければ、それこそ取り返しのつかない事になる。

そう考えて、あえて俺達に言わなかったと言う事だろう。

アリアは1つ気付いたとばかりに霧に尋ねた。

「あんた、もしかして魔剣デユランダの姿を見たの？」

「見たと言えば見たけど……見てないと言えば見てない」

「ハッキリしなさいよ！」

アリアの問い詰めに對して霧は、白雪を指差す。

白雪がどうしたって言うんだ？

どう言う意味か分からず、霧以外の俺達3人は顔を見合わせる。

「魔劍^{デモンズ}は、白雪に変装してた。だから、本当の姿は見てない」

「私……に？」

「そう。見ただけじゃ分からない、高度な変装だったよ。カマ掛けなかったら分からなかったし」

霧から聞かされた事に、俺とアリアは驚く。

それから霧は続ける。

「それで、こんな事言いたくないんだけどね。目の前の白雪は本当に白雪なのかなって、疑ってもいるんだよね」

「……え？」

「拘束された白雪を装って、本物は別の所にいるとかね。だから白雪かどうかを確認するために質問させて欲しいんだ。例えば、キンジの誕生日」

「えっと、7月」

「身長は？」

「170センチ」

「体重」

「63キロ」

「血液型」

「A型」

「おい……」

血液型と誕生日はいいにしても、何で身長と体重まで知ってる……

霧は俺の反応を見て、にこやかに言う。

「どうやら本物みたいだね」

「しかし、白雪に化けるなんてね……」

「私達が追ってくる事を考慮して、変装してたのかもね。油断は誘えそうだし」

「デユランダ魔剣は姿を見せないらしいし……本当の姿を見てないって言うなら、想定内よ」

「どうやら、アリアは俺のいない間に随分とデユランダ魔剣について詳しくなったらしい。」

霧の言う事に1人納得している。

「もしかやと思い、俺は気になっている事を尋ねる。」

「なあ、アリア……さっきの氷なんだが」

「何も無い所から突然に現れた氷。」

霧も俺と同様に氷に拘束されていた。

床に何かある訳でもないし、液体窒素などの冷却性のあるものでやられた訳でもない。
い。

本当に突然に氷が現れたのだ。

その正体をアリアはあつさりと言った。

「あれは“超能力”よ。超能力ステルスって呼ばれてるわ」

……ああ、分かつてはいたよ。

だけど、聞きたくはなかった。

「多分、だけど……あれは『Ⅲ種超能力クラスⅢステルス』で、魔法マジック使いの部類だよ」

白雪はそう言うが、いつからファンタジーな単語は普通に使われるようになったんだ

……

「よりによつて魔法使いね……その割には、物理的にも強いつて言うから驚きだけどね」

「当たり前よ。魔剣デュランダルは剣の名手でもあるんだから、ゲームみたいに物理に弱いつて訳

じゃないわ」

霧とアリアはなんともなさそうに言い、普通に会話してる。

俺としては頭を抑えてこう言わざるを得ない。

「ありえねえ……」

「受け入れなよ。これが現実なんだし、目を背けたところでどうあつても付きまってくるよ?。」

相変わらず手痛い事を言ってくれる。

頭では理解していたつもりだ。武偵高にだって超能力捜査研究科がある事から、超能力の存在はまことしやかに囁かれてもいるし……事実、解決した事例もある。

だが、あそこは一種のブラックボックスだ。俺に従順な白雪だってあまり話そうとしないし秘匿性が高い。

だから胡散臭がられてもいる。

特に、俺みたいに一般人希望の奴はそんな胡散臭い場所を避けて来たんだ。本当の所なら白雪を連れて逃げたいところだ。

だけど……今回は俺の鈍臭さが霧や白雪を危険な目に合わせてしまったんだ。

さすがに自分の尻拭いはしないとイケない。

本音を言うと、霧にまた貸しにされたくない。

いや、もう遅いかも知れんがこれ以上大きくしたくない。

俺が溜息一つを吐くと同時にアリアが話しかけてくる。

「超能力なんて大したことないわ。あたしの経験上で言えば大道芸や手品みたいなモノよ」

「そうかよ……。それよりもまずは白雪の拘束を何とかしないとイケないんだが、霧……何か持っていないか？」

「そこまで私は万能じゃないんだけどね。何かあったかな？」
何かあるのかよ……

と思えば突然に霧はスカートの端を持ち上げ、広げ出す。

「お、おい!？」

思わず視線をあさつての方向へ。

危ねえ……。一歩間違えてたらヒスるところだ。

ギリギリ中身は見えてない。

「霧さん!？」

「あ、あんたねえ！ 突然に何してんのよ!？」

突然の霧の行動に白雪とアリアが順番に驚く。

「大丈夫、中はスパッツだから」

「そう言う問題じゃない!？」

アリアに怒鳴られている霧の顔を見ると、にやりと言った感じの顔をしてる。

霧のヤツ、俺をヒステリアモードにさせるつもりだったな。

今の俺が役に立つにはそれしかないだろうが、もう少し周りを見る。そう言う意味を

籠めてアリアに視線を向けた後に霧に戻す。

「閃光手榴弾くらいしかないね」

それだけ言つて霧はスカートを元に戻す。

それから肩を竦めた。

どうやら、俺の視線の意図が分かつたらしい。

対してアリアは呆れるような顔をした後に真剣な顔で言った。

「全く……それよりも、あんたと霧は白雪を解放したらとつと逃げなさい。ここからはあたし1人でやるわ」

「いきなり何だよ？ アリア」

俺は思わず尋ねた。

「そのままの意味よ。霧とキンジは超能力持ちのヤツとの戦闘経験がないでしょ？ 霧はどうかは分からないけど、負傷してるし……キンジに関しても『覚醒』の訓練も仕上がってないじゃない。だから、あたし1人でやる」

アリアがそう言うと同時に、ズウン……と言うくぐもった音と共に倉庫が少し揺れた瞬間、排水穴から水が逆流し始める。

アリアの決意に文字通り水を差すようにして溢れてくる。

「海水、か。どこか排水管でも壊したのかな……それに戦力を分断しに掛かってきたり

してる事から、結構な策士っぽいね。誰かさんの弱点もリサーチ済みみたいだし」「ち、違うわよ！ 弱点じゃなくて苦手なだけ！ それに浮き輪さえあれば——」

冷静に分析するように言う霧に対して、アリアは慌てる。

「そんな都合よくある訳ないけどね」

そして、霧はバツサリだ。

そんな短いやりとりをするだけでも、みるみる倉庫内の水位が上がってきやがる。

さつきまで足首までしか海水がなかったのに今では、膝まで上がってきている。

このペースだと、もって10分って所だろう。

今俺にやれる事は——

「アリア、霧。先に上に行け」

「何を言ってるのよ……あんた達を見捨てて行けって言うの!？」

「違う、見捨てろとは言っていない。ここは俺が何とかする。だから、お前ら2人で魔剣デユランダを探して鍵を奪ってきてくれ。今ここでヤツにとんずらされたら、それこそ終わりだ」

俺の言葉にアリアは、躊躇うように目を伏せる。

だが、霧なら今の俺の目を見れば分かってくれるはずだ。

不意に、視線が霧と交わる。

たったそれだけで霧はコクリと頷いた。

「ほら、神崎さん。とつとと行くよ」

それだけ言って霧は天井の穴——上の階へと続くハシゴの方へと向かう。

「ちよつと、待ちなさいよ!」

アリアの抑止の声も聞かずに霧は先へと進む。

一度、霧を追い掛けようと前に進むがすぐにアリアは心配そうにこちらを向いた。

俺はアリアの背中を押すように叫ぶ。

「行け! お前と霧なら魔剣デモソウダールを早くブチのめせるはずだ! 霧は俺と同じで超能力者との戦闘経験は少なくても、実戦経験は豊富だ。立ち回り方を間違えたりしねえ!! だから早く行け!!」

ケンカ以外でアリアが俺に怒鳴る事はよくあったが、逆に俺が怒鳴る事はあまりない。

俺の顔を見て、真剣な表情なのが分かったのかアリアは自分の手に持つてる物に目を落とす。

それから、俺の手へと解錠パンクキーを渡した。

「……分かったわ。でも、もし危なくなったらあたし達を呼ぶのよ! いいわね!」

最後に水の高さを見て、アリアは悔しそうな顔をしながらも霧の後を追った。

悪いな、アリア。

一応この場で覚悟を決めたとは言え、あまり知られたくないんだ。

魔劍デユラダールは……白雪と話している時に言った、俺は兄さんと違って臆病だと。

ああ、そうだ。

俺は兄さんと違って臆病だ。

兄さんが死んでからこの力を使う事に迷いもあつたし、逃げてきた。

一般人になろうとして面倒なことから逃げてきた。

だけどな……ここで何もかも投げ出したらそれこそ本当の臆病者になつちまう。

俺の家族に、友人に、アリアに、体を張って白雪を守ろうとしたアイツにも顔向けできねえ。

「キンちゃん……私の事は、もういいの……」

白雪は俺にそう切り出す。

「なんだよ突然」

「私のせいでこんな事に、なったの……これ以上、キンちゃんに迷惑掛けたくない」
段々と差し迫る水の上に流れる涙。

俺思いの白雪らしい言葉だ。

こんな事になつたのがお前のせい？ そんな訳ねえだろ。

お前が狙われた事には、何の罪もない。向こうが勝手に狙ってきただけの話だ。

むしろこんな事になったのは……俺のせいだ。

狙われてる事に気付かず、いないなんて決めつけて、魔劍デユランダの目論見通りにアリアを遠ざけて……事態を悪化させたただけだ。

これ以上、迷惑を掛けたくないのは俺の方だ。

「白雪、昨日花火大会に行く途中でお前が自分から外に出るなら……一緒に買い物にでも何でも付き合ってやるって言っただろ？」

「それは、もういいの……昨日の花火大会のおかげで、思い残す事なんてもうないよ」俺は霧みたいに嘘を見破るのが得意じゃない。

だけど、そんな俺でも分かる。

今の白雪は嘘をついてる。

思い残す事がないなら何でそんな悲しそうな顔をする？ 何で涙を流してる？

お前にだってまだやりたい事もあるし、知りたい事もあるんじゃないやねえのか！

遅いかもされないが、今から勝手に色々”果たさせて”貰う。

もう既に水は俺達の胸にまで迫ってる。

時間はない。

「なあ、白雪。昨日、人工なぎさでお前は俺に1つお願いしたよな」

そう……俺に滅多にお願いや頼みを事をしない白雪が望んだ1つのこと。

「キン、ちゃん？」

白雪は俺の真剣な雰囲気を感じ取ったのか、不思議そうに俺を見ている。俺は自分の意志で“あの力”を使う。

もちろん、今回の事に責任を感じていない訳じゃない。だけど、責任感からじゃない。それ以上に俺は今ここで逃げたくないんだ。

こんな形で悪いが、白雪。

「今から昨日の約束を”果たさせて”貰う」

そう伝えてから白雪の肩を掴み俺は——白雪と唇を重ねた。

◆ ◆ ◆

キンジ達を置いて、私は一足先に上の階である6階で神崎と一緒にジャンヌを探している。

この階は、どうやらスーパーコンピューターが立ち並ぶ場所みたいだね。集積回路とシリコンの壁、そしてLEDが点滅しているのが見える。

それにしても、我ながらいい感じに演出できたんじゃないかな？

どうやらあの様子を見るに上手くキンジを焚きつける事にも成功したみたいだし。

それはそうと、私の靴は今頃水の中か……別にいいんだけどね。

だけど靴下だから床の冷たさが直に伝わってくる。

「あんた、本当に大丈夫なの？」

歩いている途中で神崎が突然に声を掛けて来た。

「なにが？」

「さつきまで、右肩が外れてたとか言ったじゃない」

「ああ、あれね……無理矢理ハメ直したよ。動かすと違和感があるけど、使えない訳じゃないからね」

手足も凍つてたけど、凍傷にはなっていないみたいだし。

そう言えばジャンヌは私を白雪みたいに拘束しなかつたけど……気絶してると思ってたから、そのまま海水で濡れさせるつもりだったのかな？

多分、そうなんだろう。

「そう……それと、どうしてキンジ達をあんたはすぐに置いて行つたの？」

まだ置いて行つた事に未練を感じてる様子だね。

まあ、普通に考えても今のキンジ達がああ状況を打開できない。

ドラム錠を解錠する前に、2人とも水の中だろうね。

だけど、あの時のキンジの目は決意を固めたやる気の日だったから問題ないとも判断したんだけど……神崎は見てなかったみたい。

「私はキンジが何とかするって言ったから信じただけだよ」

「そんなの、詭弁よ……」

「そうかもね。白雪が狙われてる事を知った時に教えなかったのはキンジが信じられなかったけど……今のキンジは信頼できる」

そもそも教えなかったのはワザとだけだ。

実際、頼りなかったからね……あの時のキンジは。

「どうして?」

神崎は不思議そうに聞いてくる。

キンジの口調とか顔を見てたら分かると思うけど、さすがのSランク武偵さんもそこまで気が回らなかつたみたいだね。

「さあ? どうしてだろうね」

私ははぐらかすようにワザとらしく惚ける、笑顔を見せて。

「……………」

それから少しばかり冷たい視線を浴びる。

おかしいな、てつきり神崎の事だから私に突っ掛かってくると思ったんだけど。

そう考えていると、神崎は少し溜息を吐く。

「はあ……まあいいわ。あんたがそう言うんなら、キンジを信じるわよ」

ん? 何か、心境の変化でもあったのかな?

もしかしたら、パートナーが何たるかって言うのがちよつとは分かったのかもね。

大分、奥まで進んでエレベーターホールまで来た。

あまり神崎と離れないようにして周囲を調べる。

私はさらに上の階へと続く天井の扉を確認するけど、どうやら鍵は壊れてるみたいだね。

「そつちはどう?」

「ああ、どこの扉の鍵も壊されてるし使った様子もないよ」

「こつちもよ。エレベーターは全部内側から鉄板で塞がれてるわ」

私が調べた事を言うと、神崎も見に行つたエレベーターの様子を伝えてきた。

ふくむ、自らの退路を断つたのか……はたまた私達を逃がさないためか……

意味合いとしてはどちらもありそうだね。

そう考えていた時、

——……おとおおっ!

向こうから気合いの入つた声が聞こえた。

神崎も聞こえたらしい。

「今のは……キンジ?」

「多分ね。反響して場所が分かりづらいけど、確かなら……私達がこの階に上がって来た時に使ったハシゴの方向だと思う」

私がそう言うのと、神崎の答えは早かった。

「もしそうなら早く行きましょう」

「キンジが心配？」

「ええ……つて違うわよ！ あたしが心配してるのは、白雪の方よ！」

今、本音が少し出たよね。

録音しておけばよかったかな？

なんて思ってる内に神崎は、先へと進んで――

「早く合流するわよ！」

と急かす。

ほんと、言動と行動が一致しないよね。

私もハシゴから降りて、神崎の後を追う。

サーバーの通路を足音を殺しながら、迅速に移動していると角から突然に人影が見える。

私と神崎はそれぞれ銃を抜いて突き付ける。

向こうも、私達に銃を向ける。

鉢合わせした瞬間、

「——キンジ」「霧とアリアか……」

神崎とキンジがお互いに会った人物の名前を呼ぶ。

それから私達もキンジも銃を静かに下ろす。

そして、私は気付いていた。

この雰囲気……HSSになつてるね。

「無事だったのね……」

「ああ、か弱い2人を置いて逃げるほど——臆病者じゃないからね」

神崎の言葉に、キンジは息を含んだ囁き声で返してきた。

うくん、相変わらず何と言うか……扇情的な声だね。

まあ、変声術が使える私からしたらそれぐらいの事はお手の物だから特に驚く事でも

ないんだけど……

そして、キンジに似て初心うぶな誰かさんは——

「か弱いだなんて、な、何よ突然っ！」

銃を持ったまま両手を胸の前で交差させて、赤くなる。

それからキンジに向かって私は少し皮肉の言葉を贈る。

「遅かったね」

「ああ、悪かったよ。今度、埋め合わせをさせて欲しい」

「ほんとに?」

「もちろんだよ」

よし、言質は取った。

私は即座に話を切り替える。

「ところで、白雪は?」

「そう、そうよ! あんた、白雪はどうしたの!？」

私に続いて、神崎も捲まくし立てるように聞いた。

「白雪なら無事に救出したよ、特にケガもない。ただ、下の階の溢れた水に押し流されてここで見失ってしまったんだ。一応、補助刀剣サブエッジは出しておくように指示は出しておいたが……早く合流した方が——」

キンジの話の途中で、「けほっ」と言う誰かが咳き込む声。

この場の全員が聞こえたのか、首をそちらに向ける。

そして、アリアが呟く。

「白雪だわ……」

「みたいだな……だが、どこにヤツデユランダが潜んでるか分からない。俺がが先頭に立ってクリア

リングをする。アリアと霧は後に続いてくれ。それと霧、白雪に近付いたら念のために
 伏兵を頼む」
アシッッシュ

さすがはHSS、状況判断と指示が早い事だね。

この状況——つまりは私が既に白雪に変装してる魔劍デユランダの事を教えてるからね。

次に会った白雪が本物とは限らない。

それに、私は軽く右肩を負傷してる。

もし、今から会う白雪が変装で戦闘になった場合……負傷してる私が正面から闘うのは危険だと判断したんだろう。

だからキンジは3人で一緒に行くんじゃないで、私を伏兵にした——って所かな。

「分かったよ」

私が笑顔で答えた横目で、神崎は紅い目をキンジに向けていた。

多少の驚きを含んだその視線は、”何かに気付きかけている”様子だった。

それからすぐに白雪は見つかった。

見つかったけども……私は指示通りに白雪の死角へと回り込み、サーバーの影へと潜

む。

それから少し遠目に白雪を監視するように見る。

アレは……『偽物』だね。

巫女装束、と言うか全体的に濡れてるあたりから本物臭く見えるかもしれないけど、体のラインが妙にくつきりしてる。

甲冑かっちゅうぐらい外しなよ……変装してる事がバレてる可能性を考慮してるのは分かるけどさ。

だったら「本物か？ 偽物か？」って疑わせるくらいには完成度を高めて油断を誘った方がいいと思うんだよね。

まあ、慎重な策を用いるジャンヌらしい判断だと言う感じはするよ。だけど、ちよつとした大胆さは欲しい所だね。

なんて心の中でダメ出しをしてる間にも、キンジと神崎は白雪（ジャンヌ）に近付いて行く。

そして、私は聴覚に意識を……鋭敏になるように集中させる。

「白雪っ」

声を出して神崎は白雪に大きく近づこうとするけど、キンジが後ろから彼女の制服を掴みそれを止める。

白雪（ジャンヌ）に見えないようにしてるあたり、巧妙だね。

気付いたのかな？

と思いきや、神崎の前に少し出てから一緒に足並みを揃えて周り、警戒しながら白雪（ジャンヌ）に近付いて行く。

まあ、その警戒する対象に白雪（ジャンヌ）も含まれてる訳だけど……
それから一定の距離を置いて、止まった。

「白雪、唇……大丈夫か？」

キンジが、そう確かめるように聞いた。

それに対して白雪（ジャンヌ）は、

「う、うん。大丈夫だよ……口の中を少し切っただけだよ」

そう答えた。

引っ掛けにまんまと掛かったね。

キンジの目付きが確証を得たとばかりに細められた瞬間、ベレッタを白雪（ジャンヌ）に向ける。

対してジャンヌも、「ちっ」と唇を歪めるとキンジに銃を向けられる前に巫女装束の白小袖を振るう。

水に濡れたそれは鞭のように撓しなって、キンジの腕を弾き、初弾を外させた。

見当違いの方向に放たれた銃弾は近くのコンピュータサーバーへと直撃する。

神崎も魔マ剣ケンが白雪に変装してる事を私を通じて知っている。

だから、キンジが銃を向けた瞬間に偽物だと神崎は気付きキンジの背中影から飛び出そうとする。

が――

パキパキと言う音と共に、私と同じで足を氷で捕らえられた。

動けない事に神崎は驚きを隠せないでいる。

キンジも気付いたみたいだけど、神崎とまとめて足を凍らせられたらしい。神崎と同じように動けない。

その間に白雪の姿をしたジャンヌはコンピューターラックの下に隠してあったのだろう日本刀を取り出し、朱い鞆あかを投げ捨て、狙いを定められる前に動いた。

ジャンヌは、彼女から見て左に存在する神崎に向かって走る。

キンジはすぐに神崎の足の氷を撃ち抜き、続いて自分の足の氷も粉碎してから再びジャンヌに銃口を向けるけど――もう撃てない。

神崎は既に盾にされている。

頸動脈に刃を置かれて――

どうやら神崎もジャンヌが向かって来た時に迎撃しようとしたのか、両手にガバメントが握られているが……対象を見失ったようにぶらりと宙に浮いている。

見失ったと言うよりは、遅かったと言う方が正しいかな？

「——只の人間ごときが、この私に抗おうとはな」

声だけが元のジャンヌのものへと戻り、キンジと距離を取る。

「やっぱり、魔劍デユランダ……!」

「あまり私をその名で呼ぶな、ホームズの4世」

「だったら、あんたもあたしの事をちゃんと呼びなさいよ! どうせ、あたしの事も知ってるんでしょ! あんたがママに着せた107年分の冤罪……忘れたとは言わせないわよ!!」

噛みつくのはいいけど、状況を見なよ……

私と同じ事を思ったのかジャンヌは一笑する。

「フツ……自分の状況を顧かえりみるのだな。威勢がいいのは褒めてやるが、今の私は貴様を好きに出来るのだぞ?」

そう言つて、ジャンヌが日本刀を持ってない左手で神崎の手に触れる。

「ひあつ!」

短い悲鳴を上げたかと思うと、神崎は白銀のガバメントを床に落とす。

そして、落としたガバメントは床と一緒に凍つていった。

反射的に跳ねあがった銃が握られているもう片方の手に、ジャンヌは息を吹きかける。

「くう……！」

また神崎は声を上げながらのけぞって、漆黒のガバメントも落とす。

「おーおー、見事に無力化してるね。」

「敵の手の中で、こうも簡単に無力化されてしまうとは……無様な姿だな」

白雪の顔で目を鋭く細め、表情を歪める。

普段がちよつとアレだから……私としては今のジャンヌの姿に少し感動を覚える。

「——ッ！ キンジ……撃ちなさい!!」

「無駄だ。確かに私の変装を見破ったお前は、普段とは違うのだろう。だが、”今のお前”は人質に手出しが出来ない……違うか？」

計算高いことで……

神崎はジャンヌを引き剥がす事を第一に考えてるみたいだけど、キンジが日本刀を持つてる手を撃てば……反動で神崎の首が斬れる。

キンジはその事をジャンヌの手の位置から分かっているだろう。

それに今のキンジは女性に対して砂糖菓子みたいに甘い。

ジャンヌを撃つにしても、傷が残るような場所は撃たないだろう。

だから余計に選択肢は狭まる。

さすがのHSSの状態のキンジでも、この状況の打開策は見つからないらしいね。

汗を一つ流して、言葉を紡ぐ。

デユランダ
「魔劍——なぜ、白雪を狙う?」

「遠山、2度も言わせるな。私は他人に付けられた名前——と言うより通称は好きではない。私の名前はジャンヌ、ジャンヌ・ダルクだ」

「……面白い冗談だ」

「貴様が信じようと信じまいとどうでもいい事だ。だが、それが真実だ」

その事に神崎が噛みつく。

「なに? あんた、もしかしてその生まれ変わりだなんて言うんじゃないでしょうね!」

「そんな事は言わん。私はその血を引く者と言うだけだ……」

「ウソよ! ジャンヌ・ダルクは異端審問で火刑に処された! 子供を産んでたなんて話は聞いた事もないわ、子孫なんているはずない!」

「真実は違う……火刑に処されたのは影武者だ。貴様らが知っている話など、所詮はでっちあげの伝承に過ぎない。世の中にはそう言う埋うづもれた真実が多いと言う事を覚えておくといい」

そうだね。

お父さんとか理子とか私とかいるからね。

って言っても……私は自分のルーツを知らないんだけど。

ふむ……それにしても、この様子だと私に気付いてる感じはないみたいだね。

キンジ達が来るまでは神崎と一緒に結構動き回ってたんだけど……見られていなかったらしい。

「そして、遠山。私が星伽を欲しがる理由を貴様は聞いているはずだ。あの時に盗み聞きをしていたのだからな」

「違う。俺が聞きたいのは、イ・ウーとやらが白雪を欲しているのかって事だ」
ジャンヌの言葉に対してキンジはそう返す。

うーん、膠着状態。

私に合図でも送って来るのかと思えば、そんな様子はない。

さては……私を気に掛けてる？

それとも情報を引き出そうとしてるのかな？

「それを知ってどうする？ 貴様には関係のない事だろう」

ジャンヌははぐらかすための常套句じょうたうくを言う。

しかし、汎用性の高いセリフだよな。

ただあんまり多用し過ぎると芸がないと言うか、演出がしよぼく見えるのがネック——
ダメダメ、あんまり考ええると私の悪い所が出ちゃいそう。

今はこの舞台に集中しないと。

「そうだ……貴様も私に続け、アリア。リュパン4世が取りこぼしたお前も攫さらわせて貰おう」

刃を首に置いたまま、ジャンヌは神崎の顔を覗き込むように見ながら言う。

「冗談は、よしなさいよ……あたしのママに冤罪を着せた連中の所になんて、行かないわ！」

「ほう、そうか——」

不敵に笑いながら言っつて、ジャンヌは左手で神崎の太ももに触れた瞬間——凍りつく。

「うあつ——!!」

苦痛に歪んだ神崎が声を上げて反応する。

……………

切り裂くのもいいけど、たまには違う殺り方も——つて違う。

あんまり私の衝動を刺激しないでよね、ジャンヌ。

つて文句を言おうにも言えないんだよね。

「ならば——このまま死ぬか？ そう言う展開でも、私は構わないのだぞ」

ジャンヌはそう言うけど、残念ながらお父さんとお姉ちゃんの脚本シナリオにそう言う展開はないんだよね。

ある意味、お父さんと出会うまでは神崎とキンジの安全は保障されてるようなものなんだよ。

「誰、が……あんななんか……」

「随分とよく吠える事だ、そのうるさい口を封じるため——肺を凍らせる事にしよう」
ジャンヌは神崎に極度の冷気を吹き込んで、肺を凍傷させるつもりだろう。

顎を抑え、口を近づけて行く。

最後まで気高かったよ神崎さん、お別れだね。

「霧ッー」

なんて事にはならないんだよね——！

私はキンジに言われてすぐにM500を抜いてジャンヌの横っ腹に向けて発砲する。

ジャンヌは銃声がした私の方を見るけど、気付いた時には既に大口径のゴム弾が直撃している。

ああ、その表情いいね……

素顔じゃないのが悔やまれるけど、いい驚愕の顔だよ。

「——アリアー！」

銃声が続いて響く、力強い白雪の声。

その後に鎖分銅が飛んできて、ジャンヌの持っていた日本刀の柄に巻き付く。

私の銃撃で完全に怯んだジャンヌはいとも簡単に刀を吊り上げられた。

その隙に神崎も、ジャンヌの拘束を振り払い無事だった片方の脚でドロップキックを喰らわせ、後退した。

まさしく踏んだり蹴ったりだね。

それからジャンヌはサーバーの影に立つ私と、自分の背後にある一際大きいコンピューターサーバーの上から、日本刀を持って見下ろしている本物の白雪を順番に見る。

「——くっ……」

煩わしそうに顔を歪めると、緋袴ひはかまの裾すそから発煙筒を落とす。

私はすぐに発砲するけど、すぐに白い煙に包まれたジャンヌには当たらなかつた。いや、まあ適当だったから当たり前なんだけど。

それから火災の煙と勘違いしたスプリンクラーが作動する。

白雪は煙の中に飛び込む事はせず、それを避けてサーバーから降り立ち、キンジの許へと退いて行く。

私も白雪に合わせて、キンジ達と合流する。

「いやはや、逃げられちゃったよ」

「上出来だよ、霧。白雪もよくやってくれた」

キンジに褒められて嬉しいのか白雪は「う、うん……」ともじもじした様子で返す。それからキンジはアリアへと目を向ける。

「アリア、大丈夫か？」

「まんまとやられたわ……霧に言われて、分かったのに」

そう悔しそうに言いながら、神崎は両手を結んで開いてを繰り返してる。

目に見えてその握力は低下してる。

冬場で手が冷え過ぎると、血管が収縮して筋肉への血流が悪くなる。

つまりは酸素が届かなくなって、筋肉が酸欠になるんだよね。

だから冷え過ぎると動かなくなる。

今の神崎はまさしくそれ。

この様子だと、何も握られないだろう。

神崎の銃だつて氷に覆われてるし、寒冷地仕様でもない限りは使い物にならない可能性が高い。

片足も凍らせられたせいで思うように動かないんだろう。戦闘能力どころか、機動力まで奪われた訳だ。

加えて、私は右肩に違和感を抱えてる。

逆に言えば違和感を抱えてるってだけなんだけどね。

だけど、戦力としては若干低下してると感じ。

ジャンヌからして見れば、私の事は完全に戦闘不能にしたと思ってる。そこは誤算の1つだね。

あの時は攻撃がクリーンヒットしたしかなり手応えも感じてたはずだし……頭も打ってたけど、残念ながらそこまで私は柔^{やわ}じやない。

「さて、お互いにインターバルみたいだし答え合わせでもする？」

「そうだな、霧。俺もちょうど考えていた所だ」

私とキンジの会話に残りの2人は『どう言う事？』と疑問を持った表情をする。

キンジは白雪に問い掛けの視線を向ける。

「白雪、いくつか質問させて欲しい」

「え？ は、はい」

「温室にいる時に不知火に見られたかい？ 花占いをしてた時だ」

「う、うん」

白雪は恥ずかしそうに答えるけど、安心しなよ。

キンジは白雪の思い人が自分だなんて夢にも思っていないから……

何も恥ずかしがる必要なんてないんだよね。

と、心の中でフォローしておく。

続いて、私も質問する。

「あとね、白雪さん。アリアのロッカーにピアノ線って仕掛けた事ある？」

「確かにアリアに色々といタズラはしたけど……そんな事はしてないよ……」

今度はしおらしく白雪は答えた。

キンジは私に視線を送り、それに応えるように両手を上げて首を竦める。

その私の反応にキンジは「つ舌打ち、ようやく真実に辿り着いた訳だね。」

「俺と霧も、白雪が温室にいた時刻に一般校区の廊下で白雪を見ている。ヤツが白雪に変装してたのはこの地下倉庫ジャンクシヨンだけじゃなかった。あいつは白雪に変装していて、俺達を監視してたんだ。だから分断する事が出来た」

「それと、アリアのロッカーのピアノ線を仕掛けたのは魔剣デユランダもといジャンヌだったって訳だね。嫌がらせの中に殺意のある罠を仕掛けて、白雪に対してのアリアの嫌悪感を増長させるためだった……と言う訳だね」

「そう言う事だ」

私の補足するように言った説明に、キンジは同意する。

いつもと違うキンジの雰囲気キョウキに神崎はようやくやく気付いたのか、紅い瞳を見開く。

「あんた……まさか、”なれた”のねキンジ！」

その神崎の確認にキンジは静かに頷く。

「しかし、ジャンヌ・ダルクね。アレじゃないの？ いわゆる電波少女的な感じの——」

「誰が電波だ。勝手に私を痛い人みたいに言うな」

私の大きめに呟いた声がジャンヌの耳に入ったらしく、声が返ってきた。

方向からしてエレベーターホールあたりだろうね。

「じゃあ、アレかな？ クローン培養された感じの——」

「遺伝子解析で生まれた訳でもない！ 正真正銘の子孫だと言ってるだろう！」

今度は強めに返ってきた。

さすがは残念聖女だ、こんな時でも反応してくれる。

軽く雰囲気がぶち壊しな気もするけどね。

まあいいや、コメディも大事だよ。

と思っていると向こうから話し掛けてきた。

「白野 霧、私は貴様のような奴が嫌いだ。のらりくらりと掴みどころがなく、私の策を崩して行く貴様のような奴は特に……」

「お褒めに預かり光栄だね」

「気絶したまま、水の中で溺れていればいいものを——」

「自分の策に溺れそうな人がよく言うよ」

私がそう言った瞬間に返ってきたのは冷気の波。

私たちの周りをその波が包み込む。

スプリングクラーの水が空中で凍つてることから、かなりの温度の低さだろう。

ダイヤモンドダストが起きてる。

「霧、あまり刺激するものじゃないぞ。彼女が可哀想だ」

HSS状態のキンジは哀れみや皮肉ではなく、ジャンヌを本気でいたわってるようだった。

だけど、それを本人が知るところではない。

さらに冷気が強くなる。

神崎を一瞥した白雪は日本刀を置き、神崎の傍に片膝立ちで座る。

そして、霜ついて血色が悪くなった神崎の手を握る。

「今から治療するから……ちよつと、我慢しててね」

両の手で白雪が神崎の手を包み込み、何か呪いのような言葉を紡ぐ。

すると、白雪の手から何か淡い光が神崎の手へと伝わっていく。

その間にキンジは白雪達を守るようにジャンヌがいる方向へと一歩前に出る。

「——ッ!! ……く、う……」

どうやらしみるのか、神崎は声を押し殺して痛みに耐えてるようだ。

それから超能力式の治療は終わったのか、白雪が話す。

「ひとまず治癒はしたけど……この氷はG 6から8の強い、毒みたいな氷。だからあと5分くらいは自由に手を使えないと思う」

そう告げてから彼女は立ち上がり、置いていた日本刀を持って私とキンジの前に、背中を向けて立つ。

「キンちゃん、霧さん。ここからは……私が一人でやります。だから、アリアを守ってあげて」

えー、ここまで来てお預けなんてやだな。

今までは違う力強い白雪の言葉に対して、私はそう思った。

だってさ、せっかくここまで来てオーデイエンスになるだなんて……そんなの楽しくない。

やるなら最後までやった方が楽しい。

だから――

「さすがにそう言う訳には行かないね」

私は彼女の隣に並び立つ。

「霧、さん……負傷してるんじゃない……」

「足は動くし片腕も問題なく使える。負傷してた腕は……あまり動かさなかったらいい

だけの話だよ。それに、神崎さんの守りはキンジで充分だからね」
「でも……」

「足を引つ張つたりはしないよ。白雪さんが前衛フロントで私が後衛バックつて言うだけだから」
私はキンジに視線を送ると彼は言った。

「白雪、霧の言う通りアリアの守りは俺で充分だ。女性を前線に送るのは忍びないけど、これが現状としては最善だと思う。だから、俺からもお願いするよ……白雪」
最後に名前を呼ぶと同時にキンジは微笑む。

優しげで、見る人が見れば見惚れてしまいそうな魅力を持った笑みだ。

キンジに好意を持つてる白雪にとっては――

「う、うん……は、はふう」

効果抜群ばっぐんみたいだ。

顔を赤く染めて、息を漏らして卒倒しそうになつてる。

だけどすぐに意識を戻した。

それから、さつき白雪が乗っていたサーバーの壁に何かの札を貼り付ける。

すると札を中心にして円が広がるように冷気が消えていく。

それどころか、暖かい。

なるほど、いわゆる結界みたいなものか。

貼り終えた白雪は、

「ジャンヌ」

そう言つて声のした方へと一歩前が出る。

「もうやめよう……あなたはもう逃げられない」

「私を追い込んだつもりか？ 笑わせるな、負傷者1人に戦闘不能が1人……的が増えただけに過ぎない。それに実質は2対1だ、少しでもできる程度のヤツと原石が組んだところで私を傷つけることはできん」

私はジャンヌの言葉を小馬鹿にして返す。

「へへ、その割には手こずつてるみたいだけど？ それに、私たちを閉じ込めたつもりなんだらうけど自分の退路を断つただけじゃないのかな？」

「——黙れ。私に一度敗北した分際が何を言う」

「いいんだよ。最後に勝てば……何度負けようと何度退こうと——ここ一番で負けなければそれで良い」

それと、最後まで楽しめればね。

「フン、余裕なことだ。星伽の取り巻きは殺さずに脅しの材料にすれば、自ら身を差し出すと思つたが……上手く行つたのは途中までらしい」

スプリングラーの水が止まり、冷気の煙の向こうから人影が1つ現れる。

体の前面と関節を守るように着けられた西洋の甲冑。

ルミちゃんみたいな銀髪、だけど癖つ毛がなく輝く髪。

片手に握られた大剣であるクレイモアを持ちながら、薄い皮のような特殊メイクのマスクを彼女は破り捨てた。

「どうやら、失わねば分からんらしいな——星伽の巫女」

へえ、ジャンヌ……殺るや気みたいだね。

綺麗なサファイアの瞳の奥に、黒いものが見えそうだよ。

「私は何も失わない……うん、私が失わせない」

そう言つて白雪は、ゆっくりと自分の頭にある白いリボンに手を伸ばす。

が——持ったところで手が止まる。

それを見て、ジャンヌは少し嘲笑ちやうしょうした。

「ふつ、やはりな。その布が何を意味するかは分からないがおおよその見当はつく。だがそれを解いた時、お前は星伽を裏切る事になる……違うか？」

クレイモアで、白雪を指す。

いつも白雪が着けてる白のリボン……一種のリミッターなんだろうね。

状況から察するに。

だけど、ジャンヌ。

今の白雪は、星伽を裏切ることには躊躇ちゆうちゆうを抱かかいてるわけじゃない。

確かにそれもあるだろうけど、今の白雪が恐れていることは――

「みんな、私をしばらく見ないで……特にキンちゃんは、私のことを……キライになるかもしれない、私から離れるかもしれない」

不安を乗せた白雪の言葉。

だけど、キンジは後ろから自信を持って語りかける。

「安心しろ、白雪。誰もお前をキライになつたり、離れたりはしない。そうだろう？」

確認するように掛けられた言葉。

「ここで離れたら依頼放棄と一緒にでしょ！ そんな事、したりしないわ！」

神崎さんはやっぱり素直に言わないね。

私は、何も言わずにいつもの笑顔で返しておく。

それを見て、聞いた白雪は少し微笑んで、

「――ありがとう」

布を解ほどいた。

それから片手で刀を頭上に、腹を見せるように掲げる。

布を解いた時のジャンヌはさっきの嘲笑から一転して真剣な目付きになつてる。

「ジャンヌ、霧さんの言う通り策に溺れたね」

白雪もいつもとは違う目付きで刀に力を入れた瞬間、

——ゴウツ！

そんな音を立てて刀身が燃えだした。

へえ、まるで神話に出てくる炎の剣を具現化したみたいだね。

西洋の剣と東洋の剣って言う違いは出てくるだろうけど。

「炎、だと……！」

ジャンヌの顔色が変わった。

動揺と、恐怖心が顔に少し出てる。

「ジャンヌ……あなたにも本当の名前があるように、私にも本当の名前がある。『白雪』

は本当の名前を隠すための伏せ名、私の諱いみなは——『緋ひ巫み女こ』」

言うと同時に白雪は駆けた。

ジャンヌも正眼に構え、斬り掛かった白雪の炎の刀を受け止める。

けど、どこか腰が引けている。

少し切り結んだかと思うと、刀身を擦り、ジャンヌは後退した。

そのまま白雪は振り切り、サーバーを斜めに両断する。

私は白雪の後ろで、後退したジャンヌに向かってグロックで追撃する。

難なくゴムの弾丸を剣の腹で防ぐが、どこか鬱陶しそうな表情をしている。

その間に白雪はさらに踏み込み、再び斬りかかる。

いや、実にイヤラシイ戦い方だよ。

白雪から離れれば遠慮なく私に追撃されて、私を相手しようにも白雪に斬り掛かられる。

まあ、これもある程度お互いを分かたないといけないやり方だよ。

この状況が続けば、ジリ貧になるのはジャンヌ自身分かつてははず。

「……フツ！」

「くうツ!？」

一声とともに白雪を押し返したジャンヌは、明確な敵意を私に向けてきた。

あれ？　なんか、すごく怒ってらっしゃる。

おつかしいなく、挑発しすぎた？

いや、その割には尋常じゃないんだよね。

ジャンヌは私に手の平を向けるとその手の中が青く、淡く光りだし、氷の飛礫つぶてがかなりの速度で飛んでくる。

そんな攻撃もできたんだ……なんてちよつとビックリしつつも、私は足元に転がって
るサッカーボールくらいの大きさに斬られたサーバーを蹴り飛ばす。

いくつか氷が障害物であるサーバーにぶつかるけど、すぐに撃ち落とされ、解体され

た。

避けるのは……間に合わないか。

すぐに途切れることなく氷が列をなして飛来する。

私はナイフを2本出して、迎撃の構えを取る。

多少当たっても死にはしないし、問題ないよね。

頭さえ守つとけば大丈夫大丈夫。

「霧さんっ！」

声と共に白雪が盾になるように私の前に立ち、刀を一閃。

「ひほむら 緋焰・こぎかべ 焦壁！」

炎の壁が白雪の前に現れる。

そして、氷の破片は白雪に到達する前に液体どころか気体となって蒸発し、消えた。

思わず手を顔の前にするほどに熱い。

かなり高熱の炎なんだろう。

「くっ……」

炎の壁の向こうで、ジャンヌは怯んでる。

そもそも相性が悪い。

だけど、向こうは諦めていないようだ。

「ふ、ふふ……本当に誤算だよ、白野 霧。貴様があの時に気づいていなければ、ここま
で策が崩れることはなかった」

「責任せきにん転嫁てんかはやめて欲しいね。それに、友達を救うことはいけないことかな？」

「悪いとは言わんし、責任から逃れるつもりもない。だが——」

ジャンヌはそう言いながら、冷気をその身に纏わせる。

次の瞬間、炎の壁に向かって突進してきた。

それからジャンヌは飛び上がり、炎の壁を突破してきた。

どうやら冷気を纏うことで、高熱を防いだらしい。

体重の乗った、鋭い突きを繰り出してくる。

「——きやあッ!？」

白雪はそれを日本刀で防ぐけど、力負けして後ろに飛ばされてしまう。

「貴様だけは亡き者にさせて貰う！ オルレアンの水花！」

宣言しながら、既にジャンヌは剣を振りかざしている。

その剣に力が何やら集まっているようで、青白い光が見える。

こんな時に炎の恐怖を克服しないでよ。

防ぐ……のは無理。

手持ちのナイフじゃ、刃物ごと斬られるし……あれはきつとジャンヌの大技。

ここで銃を撃ったところで振り下ろされる刃までは止められない。

力を解放する瞬間が近いのか、光が一際大きく輝き、氷点下のような寒さに襲われる。白雪が張った炎の壁も小さくなってる、それほどの冷気。

どう考えても殺す気だ。

……………。

こんなところで”ちょっと本気”を出すのは不本意だけど、

——仕方ないよね。

死ぬのは別にいいんだけど、タイミング悪いし。

守つてない約束もある。

せめて死ぬなら、約束を果たしてから死にたいものだね。

そうすれば……自分の死をゆっくり楽しめる。

今まで理性でやってきたけど、少し自制をやめて本能を、衝動を呼び覚ます。

この状況下で、ニタアと笑みが浮かぶ。

「……………ッ!？」

私と視線が交わった時、ジャンヌの振り下ろす刃が一瞬だけ鈍った。

——その時だった。

「キンジ！ あたしの3秒後に続いて！」

そう叫んだ神崎が、こっちに向かってくる。

おや、ナイスタイミング。

私はすぐに色々と引つ込める。

背中から日本刀を二本抜きつつ弾丸のように真つ直ぐ駆けてくる。

だけど、振り下ろされる刃は止まりはしない。

そのまま私を狙ってくるかと思いきや、方向転換。

「た、だの……武偵如きが——！」

そう言つてジャンヌの意識が神崎に逸れた。

その瞬間を狙つて私はグロツクを発砲する。

胴体に当たり、怯む。

それに続くように神崎が滑り込むように肉薄し、ジャンヌの剣を下から上へと弾いた。

青白い光は剣から放たれて天井へと着弾。氷の花が咲いた。

「今よ、キンジ！ ジャンヌはもうさつきみたいに技を使えない——ぐうッ！」

神崎が呼びかけてる途中でジャンヌは彼女の日本刀を縫うようにして蹴り飛ばす。

その間にも、私は後退してグロツクを撃つけどこれまた素早い反応でジャンヌは剣で銃弾を防ぐ。

そして、弾が切れた。

排莢エジエクシヨンボルト口が開きっぱなしになる。

その間にも、ジャンヌは私に向かつてくる。

執拗に狙ってくるね。

どうやら、余程嫌われたらしい。

そもそも誤算は私の行動にある訳だから、狙ってくる理由は納得できる。

だけど策士を謳うたつてる割には感情的だよ。

なんて考えてる内にも相手の間合い——刃が迫り来る。

横薙ぎの一閃。

風を切る音が迫る前に私とジャンヌの間に人影が割り込む。

ジャンヌは「それ」ごと斬ろうとするけど、人影から伸びたたたった2本の指が大剣を止めた。

「——おいしい所を持っていくね」

「はは、ヒーローは遅れて登場するものだからね」

私が声を掛けると、キンジは私に横顔が見える程度にして笑顔を振り撒く。

頼もしくも遅刻グセのあるヒーロー様だね。

本人も、ちよつとした冗談のつもりだろう。あるいは軽い自虐を含んでるかもしれないな

い。

それから右手のベレッタをジャンヌに向け、

「年貢の納め時と言うやつだよ。いい子にしておくといい」

敗北を突きつけた。

私もキンジの隣に立ってM500をジャンヌに向ける。

対してジャンヌは、キンジに受け止められた剣をただ驚いた様子で見ていた。

ああ、そう言えば私も今のキンジと似たような事したね……いつかのイ・ウーで。

「武偵法9条——忘れたわけではあるまいな？ 私をどうこうする事は出来ないはずだ」

「だけど、傷つけられないわけじゃないんだよね……要は死ななきやいいんだから。まあ……するつもりはないけど」

「霧、たまに過激な発言をするよな……そんな危険な所も君の魅力ではあるけど、目の前のお嬢さんが困ってるぞ」

「だ、誰が、お嬢さんだッ！ 私をバカにしてるのか!？」

言われ慣れてないのか、ジャンヌは白い頬に少し火がついた。

それから剣を押しやろうと両手に力を込めてる。

だけどキンジは、ビクともしない。

さすがはHSSと言うべきか。

往生際が悪いというか、何というか。

もうチエツクメイトだよ。

「2人に、手を出すなあああつ！」

叫びながら下駄を鳴らして走ってくる白雪。

どうやら、吹っ飛ばされてから今まで何かしらの力を溜めていたらしい。

朱鞘に納められた刀から、何かの力を感じる。

ジャンヌが気づいたときにはもう遅く――

「――ヒビノホトギガミ緋緋星伽神――!!」

下から上へと居合抜きが走り、同時に火柱が現れた。

ジャンヌの大剣を斬り、そのまま天井をも砕いた。

爆薬でも使ったかのようにいくつかの破片が降り注ぐ。

落ちてきた小さい破片を軽く手で払っていると、ジャンヌが呆然とした表情で自身が持っていた剣を見ている。

その刀身は2分の1以下になってる。

「ば、かな……私の聖剣・デュランダルが――」

だが、その間にジャンヌの腕に掛けられた対超能力者用の銀手錠が掛けられる。

「デユランダル
魔劍、現行犯逮捕よ！」

神崎にそう言われ、さらにジャンヌは彼女に拘束されていく。
どうやらこれにて閉幕らしい。

ま、いい感じに引き立て役を演じれたし……踊れもしたから満足。
楽しかった。

あとは――

「もう……俺の目の前からいなくなるんじゃないぞ、白雪」
あそこで白雪を慰めてるヒーローを弄るしかないよね。

43：次の舞台へ

アドシアードの閉会式が、俺達の演奏で始まった。

ちなみに俺は半ばヤケクソである。

何が『もう……俺の目の前からいなくなるんじゃないぞ、白雪』だ。

相変わらずヒステリアモードの俺はとんでもない事を口走りやがる。

自分の意思でなつたとは言え、終わってみれば未練タラタラの後悔の連続だ。

特に、俺の実力をさらにアリアや白雪が誤解してる傾向にある気がしてならない。

「I, d like to thank the person...」

響く歌声は、会場を大いに盛り上げてる。

歌ってるのは不知火じゃなくチアガール姿の霧だけどな……

つか、すごくナチュラルに発音してる上かなりの歌唱力だ。

素人判断だが、上手いと分かる。

外国人シンガーみたいだ。

なぜ、本来は不知火が担当するはずだったボーカルを霧がやってるかと言うと俺が原

因……いや原因なのか？

直接的にやったのはジャンヌだが、間接的な原因は俺だろう……
ともかく右肩の負傷が原因である。

脱臼したのを無理やり戻したせいで、やはりどうしても違和感が残るらしくチアを辞退したのだ。

そこで急遽だが配役を変えた。

ボーカル兼演奏と言う役目の不知火からボーカルを抜いて完全に演奏役に回って貰い、代わりに霧がボーカルを務めると言う訳だ。

ボーカルならチアみたいに激しい運動をしなくて済む。

歌えるのかどうか心配だったが、結果はごらんの通りだ。

しかし、本当に何でも出来るな霧の奴。

もう、あいつ一人でもいいんじゃないか？ って言うぐらいに汎用性が高すぎる。

そう言えば……俺あいつに埋め合わせがどうか何か言っただけだったか？

だとしたら、かなりヤバイんだが。

一体どんな風に弄られるか分かったもんじゃない。

まあ、だが……正面から受けよう。

今回の件がそれぐらいで罪滅ぼしになるなら安いもんだ。

それで、話を戻すと……霧が抜けたことでアルカタのチアに欠員が出たわけだがそ

の代わりはと言うと――

「Who flash the shot like the bang bang
bab bang a?」

曲がアップテンポでサビに入ったところで、左右からチアガールの女子たちが笑顔で振りまいて舞台へと駆けてくる。

その中にはアリアと”白雪”の姿が見える。

白雪がチアガール姿で入ってきたということは……つまりはそう言う事だ。

準備委員会の方でも、白雪がアルカカタに参加することを推していたんだから……大いに歓迎された。

逆に霧が抜ける事に少し残念そうな顔をしてる奴も多かったがな。

「やっぱり、こんなのって……恥ずかしいよ」

白雪の声が聞こえたのでチラリと舞台袖を見れば……何やら恥ずかしがってる様子だ。

周りを見れば、盛り上がる人で客席は埋まっている。

一目で盛況だと分かる程だ。

が、人見知りをする白雪にとってはこの人数で人前に入るのは難易度が高かったみたいだな。

「……まで来て、何言つてんのよー」

アリアが演奏の中、白雪に聞こえるように怒鳴る。

それから蹴り出されるように白雪は舞台へと出て、霧の傍へと近づく。

霧は歌いながら軽く客席に応えるようにパフォーマンスをした後に、白雪に左手を差し伸べる。

そして、白雪はその手を少し見たあとに霧の顔を見て——手を取った。

まだどこか恥ずかしそうだが、霧に引かれて白雪はアリアと共に舞台の中央へと躍り出る。

その表情は、笑顔だった。

作り笑いではない。

本当に楽しそうな笑顔だ。

何だろうな……子供の成長を見守る親のような心境はこんな感じなんだろう、と俺は場違いなことを考える。

ともかくにも、もう白雪は『カゴノトリ』なんかじゃない。

今回、魔剣デユランダを退けた事であいつは『カゴ』を出て羽ばたいたんだ。

歌も終盤に差し掛かり、霧は相変わらず観客を盛り上げるように煽っていく。

それが合図だったかのように他の女子たちがポンポンを天高く放り投げる。

限界を知らないとばかりに、再び会場が湧き上がった。彼女らの手の内に握られているのは拳銃だ。

それから空砲を空に向けて撃ち、上げる。みんなテンションが上がってるのか、練習より多めに撃っている。

物騒な仕込みだ……なんて思いながらも薄く目を閉じる。

その中でも一際、目立つ銃声が響く。

なんだ？

そう思って目を開ければ霧のやつも撃っていた。

M500でな。

どうやら負傷していない左手で撃ってるらしい。

お前、随分とノリノリだな。

まあ……あいつがいつも楽しそうにしてるのは今に始まったことじゃない。さして気にする事でもないだろう。

ラストスパートの演奏に少し集中すると、歌いながら霧がこっちに近付いてくる。

それから、俺を見ると何故か目を細めた。

ぞくつ。

まさしく、そんな擬音が聞こえそうな程に俺の背筋が震える。

……すさまじく嫌な予感がするぞ。

最後の間奏に入り、チアガール達がパフォーマンスを披露すると同時に霧もそれに合わせて踊り出す。

邪魔をせず、チアガール達の踊りの調和を乱さないように魅せている。
そんな時だった。

アリアに合わせてバク転した瞬間に、

——ミニスカートの中身が見えた。

あ、あいつツツ!? スパッツとかアンダースコートを履いてやがらねえ!

思わず曲調が乱れそうになる。

危ねえ……ここで乱したりなんかしたら、カツコ悪いと言うか……お偉い方さんもいるんだぞ!

テレビ放映もされてるつてのに、失敗したら恐い教師たちによる折檻コンボが決まるかもしれないやねえか!

それから霧は再び歌い始め、さりげなく俺を見て、

『つまんないの』

うるせえよ!

そうマバ^{ウイ}タ^{キン}キ^グ信号で送ってきた。

表情もどこか残念そうだ。

霧は再びステージへと戻っていく。

全く……イタズラする時と場所を選べよ。

しかし”白”野だから”白”か——って、何を思い出そうとしてんだ俺は！

結局、モロに見たのとインパクトが強かったせいでその光景が脳裏に写真のように刻まれた。

おかげでヒステリアモードにならないかヒヤヒヤしたが、無事に閉会式は終える事ができた。

閉会式が無事終わり、会場の軽い片付けも終わった。

本格的な清掃やら何やらは明日からで、今日はお昼過ぎにはやるべき事が終わった。

それでもって今回のアドシアードの打ち上げを武藤達と一緒にやる事になった訳だが……それまで時間がある。

魔^{デモラダール}劍の件の疲れも残ってるし、部屋でゴロゴロと過ごすのが無難だろう。

と思った、その時だった。

携帯の着信とバイブがポケットから響く。

アリアじゃねえだろうな……

と違って開けてみれば、霧からだった。

「もしもし?」

『お疲れくキンジ、今どこ?』

「借りてた音楽機材を返した帰りだ。一般校区をちょうど今出たところだよ」

『そっか、分かった』

「おい、用件はないのかよ?」

俺が聞き返す頃には通話が切れた。

何なんだ一体……?

あいつの考えることは未だによく分からない。

だが、イタズラ好きな事を考えれば何らかの仕掛けをして俺を待ち伏せしてる可能性がある……と言うか高い。

しかし、どこで仕掛けてくるか皆目見当がつかん。

携帯を仕舞って正門へと向かい、門を出てさらにさらにバス停へ――

「動くな」

行こうとしたところで脅された。

俺は隣を向く。

「何してんだよ、霧」

グロックをこっちに向けてる霧がいた。

俺の反応がイマイチだったのか、不機嫌そうに唇を尖らせてる。

「もうちよつと反応してよ」

「どう反応しろって言うんだ……」

銃を向けられてるのに俺が反応しないのは、どこかのピンクのツインテールが霧以上に俺に向けてくるからだろう。

霧だからと言うのもあるが、それでも向けられること自体にかなり慣れ”過ぎてしまつて” いる気がする。

深く考えるのはやめよう……まだ俺は、普通の感性を持つていたい。

「それで、電話をしたのは何なんだよ？」

「見て分からない？」

と、霧は銃を仕舞つてから自分の姿を誇示するように両腕を軽く広げる。

今の霧の姿は、ワンピース姿だ。

上は黒で、スカート部分は灰色。

特に派手な装飾とかもない……霧の性格とは逆に落ち着いた感じの印象を受ける服装だ。

そして、ファッション誌で見た事があるような小さめのショルダーバッグを携たずさえてい

る。

「誰かとどこかに出かけるのか？」

「……察しが悪いね。私が電話を掛けてここにいる理由くらいわかるでしょ？」
「……分かんねえよ。」

呆れるように霧は言うが、俺は心の中で答えた。

霧は俺を指差す。

「出かける相手はキンジだよ」

「俺かよ……」

思わず肩を落とす。

その俺の反応に大して霧は、

「——貸し」

グサツ。

「——埋め合わせさせて欲しい」

グサツ。

と、2回も言葉を突き刺さしてきた。

そう来たか……さすがにそう言われると何も言い返せん。

「まあ、無理に付き合っただけ欲しいとは思ってないけどね」

なんて言つて霧は逃げ道を作つてくれてはいるが、実際は選択肢なんてないじゃねえか。

目もどこか笑つてやがるし。

でも、まあ……魔^{デモランダル}劍の事については何度も言うように俺に責任がある訳だ。

ここで断るのは人として違うだろう。

「分かつたよ、ちようど俺も時間が空いてるからな。付き合おうよ」

俺が了承すると、途端に霧は無邪気に笑う。

「よかつた。それじゃ、早く行く」

「分かつたから、引つ張るなよ」

俺の言葉を余所に、霧は勝手に俺の手を取つて引つ張る。

なんつーか、霧にしてもアリアにしても……俺を勝手に引つ張つていくんだよな。

今のこの状態が、何となくだが俺の立ち位置を表してゐるような気がする。

何となくだけどな。

霧に連れられてきたのは、学園島にあるシャレたカフェだ。

ここは確か、武藤が言うには東京武偵高の女子がよく利用してゐる所だったはず。

現に同じ制服を着た女子が何人かいるのが見える。

霧が相手なら変な噂もそんなに立たないだろうが、油断はできない。

騒がしいのがデフォルトだからな……武偵は。

それにこう言うところ苦手なんだよな。

何て思ってるうちにも、2人掛けのテーブル席へと案内される。

そして、お互いに座ったところで俺が口を開く。

「で、どうしてここなんだよ」

「特に意味はないよ」

「おい……」

「細やかな打ち上げのつもりだからね。色々と終わったことだし」

打ち上げ、ね。

確かにアドシールド期間中は、色々とあったな。

デユランダ

魔剣ことジャンヌ・ダルクは、尋問面談の最中だろう。

事務科の連中に引き渡す時にジャンヌが少し反抗的に顔を逸らした瞬間、綴が『ニ

ヤア』と口を歪ませたのを俺は偶然見てしまった。

今思い出しても寒気がする。

あいつのあんな笑顔初めて見たが……今頃ジャンヌがどうなってるのか想像するのも恐ろしい。

「今にして思えば、よく勝てたよな。あんなビックリ人間相手に」と、俺は感慨深く呟く。

対して霧は何でもないように言った。

「そう？ 私からしてみればさして珍しい事でもないと思うけどね」

「ああ、うん。お前はそう言うと思つたよ」

むしろ、霧が驚いてる所なんてあまり見た事ないしな。

と言うか、今にして思えば霧自身も色々と謎に包まれてる。

「どちらかと言うと、キンジの方がビックリ人間だろうけどね。まさか指2本で大剣を受け止めるなんて思わなかつたし」

「アレは……お前には分かつてるだろうが——」

「自分の本当の力じゃないなんて言うんでしょ？ 言わなくても分かつてるよ」

「アリアには言うなよ。俺の本当のこと」

「別にそんなに念を押さなくても言わないよ。あ、すみません紅茶とこのパフェーツ」

通り掛かった女性店員に注文を言うと、霧は再び俺に向き直る。

「だけど秘密つて言うのはどこから漏れるか分からないからね。身近な人には早めに話しておいた方がいいんじゃないかな？」

「簡単に言うなよ……」

「だけど、そうやって先送りにするのは禍根を残すことになるかも知れないよ？　どうして教えてくれなかったの？　って感じだね。まあ、簡単に言える話でもないのは分かるけどね。変態シンドローム」

「変なネーミング付けんな」

ある意味間違つてないから大きく否定もできない。

それに、ヒステリアモードも『返對』^{へんたい}って呼ばれてるしな。

いくら当て字とは言え、ウチの爺ちゃんはよく平気で言うもんだよ。

「クス、まあ安心してよ。私は色々」と聞くだけだし、誰かに言い触らしたりしないよ」

霧がそう言うと同時に、思わず俺はドキリとした。

こいつ、普段は無邪気なくせに時々雰囲気ガラリと変わりやがるんだよな。

大人っぽいと言うか何と言うか、とにかく年上の女性を相手にするような感じだ。

いつもの屈託のないものと違う笑みに、不意に俺が視線を逸らしたところで霧が注文した品物が目の前にきた。

「ではすみません。紅茶が2つとパフェでございます」

女性店員が柔和な笑みを浮かべて品を置いていくが、俺は注文してないぞ。

その事を言おうと思ったら、突然にパフェを盛ったスプーンを口の中に突っ込まれ

る。

女性店員が去ったあとに霧はスプーンを引っこ抜く。

「言ったでしょ？ 細やかな打ち上げだって」

「いや、確かに言ったが……いきなり何すんだよ」

「野暮なことを言いそうになったから」

と、言いながらも霧は先程のスプーンでパフェを食べ出す。

俺の口の中に入ってたんだからちよつとは気にしろよ。

内心でそうツツコミながらも俺は呆れて見る。

女子はどこに行っても甘い物に目がないのだろうか？

なんて、思っていると霧は俺の視線に気付く。

「どうしたの？ 一緒に食べたいの？」

「いや、遠慮する」

即座に否定しながらも、聞いている俺が恥ずかしくなってくる。

こいつ……何でそんなことを平気で言ってくるんだよ。

何て言うか、アリアや白雪には出来ないことだな。

理子あたりなら平気で言っ理子てきそうだが。

……そう言えば、アイツ理子は今頃どうしてるんだらうか？

イ・ウーとやらに身を置いてるのだろうか、少し気になった。

そう言えば、霧は……理子の事を知ってるんだらうか？

『武偵殺し』であつた事を――

「そう言えば、霧」

「ん？」

「理子について、何か知らないか？」

「ああ、理子？ アメリカに出張中らしいよ」

どうやら、霧の反応を見るに本当のことは何も知らないらしい。

しかし、理子のヤツ……意外とマメだな。

てつきり何の連絡もしないと思つたが、ハイジャックの時の言葉は真実だつたって事か？

……………。

ダメだ、俺には判断できん。

取り敢えず、あんまり下手な事は言わない方がいいだろう。

アリアと同じで勘が鋭い霧の事だ。

もしかしたら、勘付いてるのかもしれないけどな。

「そうか。それはそうと、たまにはこんな時間もいいかもな」

「いつも騒がしいからね。だけど退屈はしてないし、キンジの慌てようが面白いから別にいいんだけど」

「俺がよくねえよ」

「あ、それと料金は割り勘で」

「俺も払うのかよ!?!」

梅雨入り前だっというのに俺の財布の中身を改めて見れば、冬前の秋のような状態だ。

実りはとつくに過ぎてる。

いや、下ろせばあるが……あまり積極的にクエストに任務を受けてない俺の貯蓄はお察しくささいと言った感じ。

今回のジャンヌの件もアリアの独断で報酬は無し。

タダで依頼を受けるって言ったのはアリアだし、あいつに付き添ってた俺にも当然に報酬は無い。

報酬を貰ったのは正式にマスターズ教務科の依頼を受けていた霧だけだ。

「貴重な財産が」

「そう思うなら、依頼を積極的にやりなよ」

相変わらず霧は辛辣だ。

だけど、正しくもある。

学園島の沿岸にあるベンチで、俺はため息を吐く。

目の前には東京湾が見え、その向こう岸には乱立するビル群が見える。

何となく横を見れば、霧がさっきの俺と同じように静かに東京湾の方向を見ていた。

こうして黙って見ればこいつも美少女なんだよな。

セミロングの黒髪が潮風に揺れ、甘い香りを運んでくる。

いつもとは違う……ミステリアスで儂げな雰囲気があった。

それから俺が見ている事に気付き、「ん？」と言った感じに小首を傾げている。

「あー、いや……何でもない」

思わず俺は空気を濁すように言った。

今思えば、霧とゆつくり2人で行るのは久しぶりかも知れない。

それに何だか安心するんだよな。

自然に欠伸あくびが出る。

「眠いの？」

「いや、そう言う訳じゃないんだが……何だかな」

「寝たかったら寝てもいいよ。確か武藤たちと打ち上げの予定があるんでしょ？ その

時には起こすよ」

それから自分の太ももを示すように軽く手で叩く。

頭を乗せろ、と言う事なんだろう。

誰かに見られたらどうするんだと思ったが……こんな場所に来る物好きもいないだろう。

それに、霧なら大丈夫だろう。

アドシアードの閉会式みたいな時にやるのは勘弁だが、こう言う時にはイタズラする様なヤツじゃないしな。

逆に寝なかつたら何されるか分からん。

起きてる時より寝てる方が安全というのも変な話だ。

と思いつつも俺は頭を乗せ、横になる。

「おやすみ」

どうやら……思ってたよりも、疲れてたらしいな。

霧のその一言がスイッチだったかのように俺の意識は、静かに沈んで行った。

◆ ◆ ◆

10分も経たないうちに、私の太ももの上で寝息が聞こえる。

すっかり安心仕切ってる。

そんな事が一目で分かる光景だろうね。

ここで首を切ればどんな表情が見れるのか……少しだけ試したくなる。

まあ、もちろんそんな事しないけどね。

そんな時だった。

着信音もなく携帯が震える。

私は静かになる。

「はい」

『ルミから伝言は受け取ってるわね』

いきなりそう言っただけのはお姉ちゃんだった。

「うん、受け取ってるよ。私が選んでいいんだよね？」

キンジの顔を少し撫でながら答える。

『あなたの選んだものが私の、” 答え ” よ。けほっ……』

「分かったよ」

『あと、リリヤを動かしたわ。彼女を使いなさい。あとは任せられたわ』

それだけ言っただけ、お姉ちゃんから通話が切れる。

リリヤが来る、ね。

どうやら今度も、

——楽しいことになりそうだね。

N
e
x
t

S
t
a
g
e
!!

第5章：切り裂きと人斬り（リツパー・アンド・リツパー） 44：巡り合わせ

雨がよく降る梅雨と呼ばれる時期に入った。

どうやら理子が武偵高に帰ってきたらしい。

今頃は女子寮だろうけど……はてさて、何しに帰ってきたんだろうね。

別にここに戻ってくるメリットは理子にはあまりないはずなんだけどね。

最近の理子の行動は怪しいと思いつつも、私は詮索しては来なかった。

だけど、それももうすぐ分かる。

と確信めいた風に言ってるけど、これはあくまでも勘。

以前にジャンヌが私に「理子の異変に気付いてるのか？」と言ったことを聞かれ、はぐらかして答えたけど。

気付いてるからこそ、嗅ぎまわってないんだよね。

まあそう言う訳で、私は私の仕事をさせて貰うつもり。

6月の月明かりが空に見える時刻、私は以前にジャンヌや夾竹桃が『オルクス』で来た沿岸へと来ている。

もうそろそろかな？

そう思った時に海面が少し持ち上がり、オルクスの黒い船体が浮き上がる。

どうやら無事にイ・ウーから拝借出来たらしい。

こちらへとゆつくり近づき接岸し、ハッチが開く。

「……誰？」

立ち上がり出てきたリリヤは私を見て小さく呟いた。

そう言えば白野 霧での格好は知らないだった。

それはともかく、リリヤの格好が”メイド服”姿なのは……理子のせいだろうか。

リリヤと理子が出会って約1年。

随分と彼女は理子に対して心を開いていると思う。

大きく笑う事はないが、小さく微笑む時はあったような気がする。

まあ、私はリリヤと一緒にいる時間は短いからね。微笑むところを見たかどうか確かがないんだよ。

と、思考が脱線するところだった。

私は軽く変装を解き、素顔を見せる。

「私だよ」

「……リコお姉ちゃんじゃない」

変化は少ないけど残念そうに目尻を垂らす。

落胆してると言うのは分かるけど、あからさま過ぎる……

「私で悪かったね。と言うか、お姉ちゃんから話は聞いてるでしょ?」

「……リコお姉ちゃんに会える。……あと、仕事」

どうやらリリヤの中での優先順位は『理子』仕事』らしい。

しかし、さすがは人工天才^{ジニオン}。

どうやら既に日本語はちゃんと喋れるみたい。

ただ、喋り方は英語の時と何ら変わりはないさそうだけどね。

このままだと話が進まなそうなので、私から本題を切り出す。

「それで、仕事なんだけど……ここにやって欲しい事が書いてあるよ。頼めるかな?」

私はそう言って、任務の概要を纏めてある資料を渡す。

指令書みたいなものなんだけどね。

ま、特に意味はないけど念には念を置いて言葉ではなく文字で説明する。

リリヤはその資料に目を落とす。

「それじゃ、よろしく——」

お願いね、と続けようとしたら、

「……分かった」

リリヤは短くそう答えた。

それから資料を私に返してくれる。

「もしかして、覚えたの?」

「……ん」

彼女は1文字で答えた。

どうやら全部覚えたらしい。

なら、これはもういらぬか……

私は資料を空中に放り投げナイフで細かく切り裂く。

そのまま潮風に流されて、証拠は海の藻屑となった。

「出来れば怪しい所は全部調べて欲しいんだけど、大丈夫だよな?」

「……ん」

「ならいいや。ところで、住む場所はある?」

「……ん」

私はナイフを片手に遊びながら聞いているけど、大丈夫らしい。

ま、お姉ちゃんの事だしそこら辺は大丈夫か。

「それじゃあ、ある程度調べたら連絡お願いね。私の方で『品定め』するから」

「……ん」

「仕事が終われば理子に会えると思うよ？ 向こうも少し忙しいみたいだけど」
「……………うん」

理子に関しては若干反応が変わるんだね。

返事が1文字から2文字に増えた。

声音もどこか嬉しそうだね。表情の変化は少ないけど。

さーて、どんな面白い子が見つかるか……

——楽しみだね。

翌日。

教室でいつも通りに席に座っていれば、神崎とキンジが一緒に入って来た。

ナチュラルと一緒にいるけれど……

「やっぱりあの2人ってデキてるんじゃない——」

「でも、白野さんが本命っぽい気もするよね。神崎さんって暴力的だし」

とまあ普通の人なら聞き取れない距離と音量かもしれないけど、私にはそんな教室の片隅で固まってる女子たちの会話が耳に入ってくる。

視線と違って、耳は動かす必要がないからね。

意識を集中すれば自然に入ってくる。

それはともかく、神崎の表情がどこか不機嫌そうでキンジはそんな神崎のトゲトゲしい雰囲気から少し引くように若干だが腰が遠ざかっている。視線も神崎の方へと何度も動かしていた。

向けられてる当の本人は気づいてないっぽい。

結局2人が席に着いた後、時間が経つても神崎の機嫌はあまり治らないまま。

周りも神崎の雰囲気を感じてるような感じだ。

そんな中、このクラスの担任である高天原が入ってきてゆったりとした口調で、

「えー、今日はお知らせがあります」

と切り出した。

「峰 理子さんがアメリカでの捜査依頼で長らく空けていましたが――」

「ただいま帰ってきましたー♪ みんな大好き、りっこりんだよー!」

ガラリと扉が開かれて、高天原の話を遮りながら理子が入ってきた。

教卓へと立ち、その存在をアピールするかのようにくるりと回る。

それから一部の男子が「うおおおおお!」と歓喜の声を上げて教卓の傍へと駆け寄り、

『りっこりん! りっこりん!』と熱烈なコールをしながら、確かヲタ芸と呼ばれるダンスを

披露している。

そして話を無視される先生。

流石の私も哀れだと思わざるを得ない。

先生なのにクラスの中心にいないと言う非常事態だね。「話を聞いてください……」なんて言いながら存在も隅の方に追いやられてるし。

「やつほー、キーちゃんも久しぶり！」

「うん、久しぶりだね〜」

『イエーイ！』

理子から声を掛けられ、席を立って近付き、アメリカ帰りと言う事でアメリカナリでハイファイブをする。

日本ではハイタッチなんだっけ？

ともかく、両手を叩き合わせて小気味良く音を響かせる。

久しぶりだなんて言ってるけど、割と連絡は取ってるから久しぶりに会ったと言う感覚はあまりない。

「それじゃ今はこれくらいで、またあとでね」

「あいっ！」

理子は両手で敬礼して、答えた。

それからも理子の周りにクラスの人達が何人か寄ってきて談笑し始める。

「くふっ、キーくんもおいでよ」

輪に誘うように理子はキンジに手招きするけど、キンジはそっぽを向いた。

次の瞬間にはバキと、神崎がシャーペンを折った。片手で。

怒りでプルプルと震えながら顔を伏せている。

私がない間にどんなイベントがあつた事やら……

訓練のノルマをこなして放課後——お姉ちゃんからの仕事でスカウト的な事をやる訳なんだけど、ある程度は私の方で調べて欲しい人物をリリヤに送つとかなないとね。

大雑把にリリヤに調べてくれて言ったけど、やっぱり範囲は狭めておかないと。

なので私は、ひそかにさり気なく色々と見て回っている。

1年生から3年生。

学校にくる関係者や、見学に来た人。

教師は……さすがにレベルが高いと言うか、そう簡単に引き込める訳じゃないしね。

でもどうせなら面白くて伸び代がある子がいいな。

使い物になるならないとか、私はあまり気にしないんだけど。

それでもやっぱり、質は高い方がいいよね。

特に後暗い過去があれば、なお良しだよ。

「あ、霧先輩」

そして、廊下でバツタリとライカと出会った。

この子は……まあ、保留だね。

見ていて面白いし、伸び代もあるんだけど……もつと惹きつけるものがないんだよね。

魅力がないとかじゃなくて。

「なんだ、今日は彼女と一緒にじゃないの？」

「えつと……彼女ってどう言う意味ですか？　て言うか、彼氏じゃなくて彼女って……」

「麒麟ちゃんのことだよ。惚けとほなくても分かってるクセに」

と私は肘で軽くライカを小突く。

すると、ライカは少し顔を赤くして壁まで後退あとずきり。

「な、なななに言ってるんすか!?!」

「え？　麒麟ちゃんからメールが来て、ライカと付き合うことになったって」

「麒麟……っ!!」

頭を抱えて、ライカは叫ぶ。

「とか言っておきながら実は嬉しいとか」

「違いますから！　あたしはそんなじゃ——」

ライカが否定しようとしてる最中に人差し指で、口を封じる。

それからそつと耳打ちする。

「とか言つて、満更でもないんでしょ？ 見てたら分かるよ」

「いや、あたしは麒麟をそんな風には……」

「それは本音かな？ あんまり周りの目を気にして本心を隠すと、辛いよ」

「うっ……」

「素直に言っちゃいなよ。別に私は否定したりも引いたりもしないからさ。そ・れ・と・も、実は私が本命とか？」

「は、はいっ!? いきなりなに言つてんスカ!」

素早い動きで私から遠ざかるライカ。

その顔は困惑と羞恥が入り混じった感じだった。

彼女の反応に私は「クスクス」と笑みが深まる。

「ライカお姉さまは渡しませんの!」

「うわっ?!」

突然にどこからともなく飛び出して、ライカは自分の腰にしがみつく麒麟を受け止める。

私は驚いた声を上げてるけど、途中から見てるのは気付いてたけどね。

それから麒麟は子犬みたいに私に睨みを利かせてくる。

そう言えば麒麟とキリンって別の生き物なんだっけ？

なんてどうでもいい事を考えながらも麒麟に対して私は笑顔で答える。

「イヤだなく麒麟ちゃん。別にライカを盗ったりはしないよ……ライカが私の方に自ら来るなら話は別だけどね」

言いながらスツと、目を細めてライカに向かって言う。

「いやいやいや、先輩も麒麟も何の話ですか!？」

随分と困惑してるね。

ライカが初心^{うぶ}だって事が一目で分かる。

まあ、前から気付いてたけど。

「大丈夫ですの。お姉さまはきつと麒麟を選んでくださいます。ね？ お姉さま」

「お熱いことだね」

麒麟の発言に思わず半目になりながら私は、片手で顔を仰ぐ。

「霧先輩！ あたしはそう言うのじゃ……」

「だってさ麒麟ちゃん」

「そんな、お姉さま……麒麟の事がキライですの?」

上目遣いの涙目でライカを見上げる麒麟。

効果は抜群のようだ。

見るからに混乱してる。

「可哀想に麒麟ちゃん。こつちにおいて」

「霧お姉さま」

なんて言いながら、麒麟は私の胸に飛び込んでくる。

こらこら飛び込んでる最中にニヤつかない。

それにしてもこの子も理子と同じような感じだから、何となく気が合うのかもね。

その場のノリで合わせる事が出来る。

しかし、三文芝居とは露知らず約1名は狼狽ろうばいしてる。

「ライカなんか放っておいて、私に鞍替えくらかえでもする？ そうすれば色々ごわくと蠱惑こわく的な甘い

言葉を囁いてあげるよ」

「あつ……」

麒麟はライカの気を惹きつけるつもりで私のノリに合わせたんだらうけど。

私は少し本気で魅了するつもりで麒麟にネットリと息遣いを含んで囁く。

麒麟にとつても予想外だらうね。

私の言葉に一瞬だけトロンとした惚ぼろけた顔をする。

それからハツとなつて何かを振り払うようにブンブンと首を振る。

チラリとライカを見れば呆然と口が半開き。

ま、いい反応が見れたしイタズラはここまでにしておこう。

「なんちゃってね」

「な、なんだ冗談か……」

私が麒麟から離れておどけると、ライカは安心したように息を吐く。

「彼女が大事なら少しでも本音は言っておきなよ〜」

「むむむ……」

「何が、むむむなんだか。それじゃあね、ライカお姉ちゃん♪」

「んなつ!？」

ライカの横を通り過ぎながらの一言。

最後に驚き顔を頂いたところで私はそのまま背中を向けながら軽く手を振る。

取り敢えず右に左に散歩気分でブラブラする。

これでも探してるんだけどね。

望むものはよく手に入るのに探し物は探してる時になかなか見つからないんだから

……ジンスクって言うのかな？

でも、そう焦ることもない。

出合いはどこでもあるんだからね。

「あ、白野さん」

「ん？ ああ、佐々木さんか……」

後ろから声をかけて来たのは、佐々木 志乃——白雪の戦妹^{アミカ}だね。

彼女は私を一度見て何かを躊躇うように視線を落とす。

「どうかしたの？ 何か頼みたいことでもあった？」

こちから尋ねたところで、彼女は顔を上げた。

「少し、任務^{クエスト}に協力して欲しいんですけど……よろしいでしょうか？」

「ちようど今は暇を持って余してたから別に構わないけど、もうちよつとフランクに誘ってくれてもいいのに……白雪さんの戦妹^{アミカ}でもあるんだし」

「そう言う訳には行きませんか」

佐々木は困ったように苦笑する。

この子も……保留だね。

あんまり私の周りにいる子ばかり見ても仕方ないし。

なんて思いながらも私は話を続ける。

「それで、どう言った感じの任務^{クエスト}かな？」

「万引き犯の調査及び捕縛です」

「うん？ こう言うのはどうかと思うけど、私がついて行く意味あるの？」

1年生がやる実戦の初期段階の任務だからね。

インケスタ
探偵科である彼女は戦闘の専門じゃないにしても……何度か見た剣筋からしてそこそこ出来るはず。

私の助けを必要とする理由が分からないね。

おそらく難度はDランク相当だろうし。

「いえ、実は私じゃなくて——」

「志乃……話、終わった?」

佐々木が否定しようとしたところを割り込むように物静かな声が聞こえてくる。

佐々木の背後から微妙に見えた人影。声の主かな?

そう思って、佐々木の肩から顔を出すように私は確認する。

「……………」

黙って私を見て、静かに会釈したのは綺麗に横に揃えた前髪。少し目が隠れる程度の長さ。

会釈した時に揺れる後ろ髪は真ん中だけをポニーテールのように結わえている。あとはストレートだね。

目は少し伏し目がち。

肌は佐々木に比べれば白くはない。簡単に言えば日本人らしい肌と言えればいいかな

?

腰には黒い鞆に収まった一本の日本刀を佩^はいている。

女サムライって言葉が似合いそうなんだけど、なんだかね。随分と後暗い雰囲気^はにするよ。

「以織^{いおり}さん、大丈夫です。協力してくれるそうですよ」

私はまだ何も言っていないんだけどね。

勝手に話を進められた。

まあ、いいか……。

「そう言う事だから、よろしくね。私は白野 霧だよ」

「岡田……以織。私はこれで」

そう言っ^て彼女^は少し頭を下げて、投げやりな感じで私に背中を向けて去^{って}行^った。

「以織さんっ!!」

咎め止めるように佐々木は言い放^つけど彼女は意にも介さず廊下を真^っ直^ぐに歩^く。

振り返りもしないし、反応もなかったね。

彼女のことは置いておいてその前に。

「さーて、佐々木さん。勝手に話を進めてくれちゃってどう言うつもりかな〜?」

ちゃんと理由を知りたいからね。

笑顔で佐々木に差し迫る。

「す、すみません。怒ってます……よね?」

「うん? 別に怒ってはないよ。ただ色々聞かせて欲しいとは思ってるけどね。まあ、詮索するなって言うならしないけど」

「そ、そうですか……笑顔なのに怖い」

「こちら、聞こえないように言つたつもりだろうけど聞こえてるよ。」

「そこまで威圧的な笑みは浮かべてないはずなんだけどね。」

「まあ、人それぞれで感じ方は違うってことにしておこう。」

「取りあえず私から話題を切り出す。」

「あの子、何だか雰囲気が悪かったけど……何か関係あるの?」

「キョトンとした顔で佐々木は聞き返す。」

「分かるんですか?」

「何となくね。あの雰囲気はそう……誰か親しい人を亡くしたとか?」

「少しだけ佐々木は同情するような表情をして顔を伏せる。」

「どうやら当たりみたいだね。」

「それから彼女は顔を上げて、」

「少し、お時間いいですか？」

そう提案してきた。

と言う訳で、場所を移して喫茶店『Wildschut』にやってきた。

ここに来た理由としては、木を隠すなら森の中って言うヤツだね。

2人用のテーブルに向かい合う形で座り、互いの手元には紅茶。

「ここのは割とおいしいんだよね。」

「さてと、わざわざ時間を取らせたって事は話してくれるんでしょ？ ああ、ちなみに紅

茶は私の奢りね」

「いえ、先輩に奢らせるのは気が引けますから自分で払います」

「そう？ そう言えばお金には困ってないんだっけ？ キンジと違って」

「遠山 キンジ先輩、ですか……確か白野さんのパートナーの方ですよね？」

「元パートナーね。今はその話は横に置いて、本題なんだけど——あの子って佐々木さんの元カノみたいな感じかな？」

「——けほっ!？」

私の一言に佐々木は咽^むせる。

「な、何でそうなるんですか!？」

それから小声で器用に怒鳴ってくる。

何でって言われてもね〜。

「妙に親しそだったし」

あと、間宮の子の事もあるしそっちの気があると思われても仕方ない気もするけど。今回に関してはそうじゃないのは分かってるよ。分かってて聞いたんだから。

「つて言うのは冗談で……中学の時の同級生とか、昔組んでたとか？」

私が真剣に聞くと佐々木は「もう」と言った感じ呆れながらも話してくれた。

「正解です。中学の時の同級生で、たまに剣術の訓練に付き合ってくれる時もありました。最近はその学科が違うこともあって疎遠でしたけど」

ここからは本題とばかりに佐々木は顔を伏せる。

「以織さん、最近父親を亡くしたそうです。あの子は父子家庭で……母親の事は知らないと言った話してくれました」

どうやら、それなりに仲は良かったと見えるね。

問題はそれが今回の事とどう関係してくるかが問題なんだけどね。

まあ、ここは話の腰を折らずに黙って聞いておこう。

「それで、引き込みがちで何だか見ていられなくて」

「助けになりたい、と?」

「ええ……」

なかなか面白そうな話。

佐々木の提案じゃなくて、もちろん岡田 以織と言う人物について面白そうって言う話だけだね。

後暗いと言うか、ありふれてる事かもしれないけど……その裏にはどんなストーリーがあるのか考えるだけでワクワクする。

在り来たりかどうかは分からないけど、それは「中身」を覗いて見てのお楽しみ。

そのまま引き込むかどうかは中身を見てからでも遅くはない。

候補に入れてもいいかな?

それに来る者をあまり拒まない私の答えは最初から決まってる。

「うん。私でよければ協力するよ」

「本当ですか?」

「もちろん。私は基本的に何でもやるからね……それと、岡田さんを任務クエストに誘ったのは建前つてことでもいいのかな?」

「は、はい。調査で一緒に少しでも話ができたらと」

「なるほどなるほど。いい案だね、それじゃあ私が上手く機会を作るよ」

「ありがとうございます！」

嬉しそうな顔で佐々木は少し頭を下げる。

こっちこそ感謝だよ。

こんな巡り合わせをありがとう。

45：鏡に映る本性

さて、候補が決まったところでその日の晩にリリヤに連絡を入れた。

岡田　以織とその父親、または母親と分かかってることは全部調べるようにね。

あの子のことだからある程度のデータベースセキュリティを破る事は、フィッシュアンドチップスを作るぐらいに簡単に出来るだろう。

それぐらいのスペックはある。

と言いか機械関係に強い子だよ。

汎用性が高い殲滅兵器的な感じで教育プログラムされてるみたいだからね。

アメリカは要人暗殺の方に重点を置いてるみたいだから、随分と毛色が違う。

そもそも何でヘリに搭載するガトリングガンを持てるようにしたのか……どこの世界にも変態はいるもんだね。技術的な意味で。

ともかく、今は佐々木に協力するのが目下の任務と言うか目的だね。

同時に家族探しも継続中。

◆ キンジ達は……今頃はメイド喫茶かな。

◆

まず最初に言っておこう。

これは理子の取引のために仕方なく来たんだ。俺の隣にいるアリアもそうだ。

俺は兄さんの情報のため、そしてアリアは自身の母親の冤罪を証明する証人として理子に協力するんだ。

なので俺は、いや俺達は自身の意思でここに、

「おかえりなさいませ、ご主人様ー♪」

「お待たせしました♪」

この——『メイド喫茶』に来た訳じゃない！

理子曰く『大泥棒大作戦』の指定場所が何故か知らんが秋葉原のメイド喫茶。

こんな中で理子が作戦会議をしようと思った理由は……理解出来るわけがない。

右に左にきやいきやい言いながら接客するメイド達。

目のやり場に困る。

もういいだろう……十分に俺はよくやったんだ。だからーっだけ俺の願望を誰か聞いてくれ。

今すぐにレジの傍にある扉の外に出させてくれ。

だがそんな心の叫びを聞いてくれるのは、おそらく俺の携帯ストラップのレオポングらいだろう。

「実家と同じ挨拶をこんな所で聞く事になるんで……」

アリアにとってはメイドがいる事が日常らしい。

貴族の娘だから想像に難くはないだろうけどな。

その瞬間、出入り口から歓声が沸く。

「理子さまー、お帰りなさいませー!」

「理子さまがデザインした衣装、かなり好評ですよ!」

どうやら主役のご登場らしい。

しかも、メイド達が理子の名前を呼んでるあたり常連なんだろう。

なるほど……俺達をここに呼んだもとい作戦会議の場所に指定したのは話の主導権

を握るためか。

特に我の強いアリアだと勢い任せに色々と言ってくるからな。

それでこのホームグラウンドを指定して出鼻を挫いたと……相変わらず狡猾なヤツだ。

霧あたり呼んでおけばよかった。

あいつならこんな中でもマイペースにしていそうだからな。

「やはは、遅刻しちゃった〜」

それから理子は両手を広げて「ブーン」とか言いながら来た。

飛行機のマネらしいがその前に、その広げた両手に垂れ下がってる紙袋はなんだ？

まさかとは思うが、その中に入ってるフィギュアやらゲームやらコスプレ衣装やら買
うので遅れたんじゃねえよな？

思わず理子に睨みを利かせる。

そして俺の視線に気付いたのか、理子はこっちを向いて

「いやん、ダーリンてば理子に熱視線を送ってくるなんて……理子に惚れたらヤケドし
ちやうぞー♪」

バーン、なんて言いながら指鉄砲をこっちに向けてくる。

1厘の可能性もねえよ。

いちいち行動にイラツとするな。

どうやらアリア様も同じらしく、銃に手が伸び掛けている。

しかし堪えようと必死なのかその手はプルプルと震えてやがる。

アリア、今回は俺も同じ気持ちだ。

だが今は堪えろ。

じゃないと色々とおしやかになる。

お互いに一旦席に着いたが、反応と言うか機嫌は対照的だ。

俺の隣のホームズの4世は不機嫌、対してリュパンの4世はご機嫌だ。

そして一方は皿いっぱいのお桃まんを頬張り、もう一方はタワーみたいな特大パフエを食っている。ちなみにどちらも既に半分まで食い尽くしてる。

と、食べているものに関しては関係ない。

問題は話が一向に進まないことだ。

「まさか、因縁の一族と同じテーブルに着くことになるとはね。ご先祖様もさぞ嘆いておられるわ」

埒があかないと思ったのか、アリアが嫌味から切り出す。

だがそんな事は気にせず、理子は食べ進める。

俺もアリアに続いて念押しする形で続く。

「理子、俺達は食事しに来たわけじゃない。それと確認だが……俺とアリアとの取引、お前は守れるのか？」

「もつちろんだよ、キーくん♪ 約束はちゃんと守れって”言われてる”から信じてもいいよ」

なんて朗らかな笑顔で言いやがる。

一応、信じてもいいんだろう。

「そ・れ・に、キーくんはりこりんのダーリンだからね」

「誰がダーリンだ。お前とそんな甘い関係になった覚えはないぞ」

「——!? ま、まさかキーくんが普通に返してくるなんて……」

「誰かさんに普段から弄いじられてるからな」

もちろん、霧のことなんだが。

つーか何をそんなに驚くことがあるんだ。

そう呆れながら見ていると、アリア裁判長が銃のグリップでテーブルを2回叩く。

「はいはい、静粛に。早いところ本題に入って貰えるかしら。次は2発の銃弾に変わるわよ」

ここ民間施設。

それやったらお前が母親と同じ檻に入る事になるぞ……

なんて事は突っ込まなくても、アリア自身分かってるだろう。

本気じゃない、はず……

「せっかちなだね。短気は損気、鈍器は便利なんだぞー」

理子は意味が分からん上に聞いたことない慣用句を言う。

言いながら、紙袋からノートパソコンを1台取り出して俺達に見えるようにディスプレイを開ける。

「入るのは横浜郊外にある『紅鳴館』……一見すればただの広い洋館だけど、中身は別物。

「これがなかなか手強くてね、さすがの理子もクソゲーと言わざるを得ないんだよ」
見せられたのはその屋敷の見取り図だが、おいおい……色々とプランが細かく書いてあるぞ。

逃走経路、連絡手段、潜入経路、おまけにある部屋からある部屋に移動するまでに掛かる推定所要時間まで書いてやがる。

最初の3つの経路や手段は何通りも考えられてる。

「どうやらこの見取り図を見る限り、屋敷は地上3階と地下1階で構成されてるらしい。」

「それで、この地下金庫にあんたが盗み出して欲しい物があるのね」

「そうなんだよ、アリアン」

「誰がアリアンよ。その割には肝心の地下金庫の詳細が分からないみたいだけど？」

「確かにアリアンの言う通り、彼女がディスプレイで指し示した地下金庫の詳細は不明瞭だ。」

他の部屋は家具の配置まで調べてある徹底ぶりだと言うのに。

「それはね、金庫の奥深くまでは単純に分からないんだよね。セキュリティまでしょっちゅう変えててさ、だから仮に調べられたとしても参考にあまりならないんだよ。」

」

なるほど、何日かすれば全く別の物に変わってる可能性がある訳か。だからあえて詳細な情報はないんだろう。

「それと、この作戦立案は誰が？」

「わ・た・し・♪」

「いつからやったのよ……それと次そんな答え方したら風穴」

「先週ぐらいかな。計画はその前からしてたけど」

なんて事ないという風に理子は答えてるが、かなり凄いぞこれ。

俺もアリアも目が点になる。

「ジャンヌから教わったんだけどね。結構使えるよ？ アリアもどう？」

「あんたに教わるのは御免こうむるわ……末代までの恥よ」

理子の提案をアリアは普通に蹴った。

対する理子は断られると分かっていたのか、やれやれと首を振る。

こう言っちゃあなんだが、俺は覚えて欲しいと思った。

だが、俺が言っても素直にアリアが聞き入れるかどうか……怪しいところだ。

霧と違ってアリアは基本的にノープランだからな。

突撃、戦闘、捕縛の三拍子しかない。

「ところで、理子。ここにブラドは住んでるの？ 見つけたら捕まえてもいいわよね？ あいつはあたしのママに冤罪を着せてる一人だしそれと——」
少しアリアが溜める。

「ジャック」とも繋がってるって話よ、イギリスの貴族としてヤツを捕まえなきゃならないわ」

——ピクリ。

理子の反応が少しだけ、変わった。

ジャック——現代に復活したなんて噂されてる名高きジャック・ザ・リツパーか。

実際そんな事はないと思うが、それでも名前負けしない犯人には違いないだろう。

理子は特大のパフェを平らげると、スプーンをグラスに軽く投げるように入れて横にやる。

理子の様子がいつもと違う。

ウラ理子とかじゃない。

もつと別の、針のような尖った雰囲気だ。

「どこで聞いた？」

男口調で理子は聞いてきた。

獣みたいな鋭い目。

ハイジャックで見せた雰囲気とは違う理子の顔に、アリアも少し気圧されそうになつてゐる。

だが、気丈にもアリアは返した。

「ブカレスト武偵高だよ」

「……最初に忠告しておいてやる。やめておけ」

「な、なにをよ……?」

「ジャックを追うのをだ。お前には“ムリ”だ」

その単語はマズイ。

と思ったが、もう遅いらしくアリアが机を叩いて勢いよく立ち上がる。

「ムリってどう言う事よ!」

やはり嘸み付いた。

アリアに『ムリ』『疲れた』『メンドくさい』は禁句だからな。

だが理子は呆れ、アリアよりも視線は下なのに見下した眼をする。

「勝てないって言ってるんだ。あの人を逮捕なんてお前には夢のまた夢だ」

「なんですすって!?!」

が、と言いながらアリアはまだまだ嘸み付く。

これ以上吠えられたら店に迷惑が掛かるぞ……仕方ないので俺が話に割って入って

少し事態を沈静化させる。

「ジャックについて知ってるような口調だな」

「当たり前だ。ジャックもイ・ウーの一員だし、存在は誰でも知ってる」

「おいおい、そんなヤバイ奴までいるのか。」

「イ・ウーは一体どんな魔窟なんだよ。」

理子は続いて忠告してくる。

「別に追いかけるなら止めはしない。だが、オルメス。その代わり母親を失う事になるぞ、それでもいいのか？」

「……………え？」

「あの人は敵対する奴には容赦しない。そいつの大事なモノを色々と目の前で奪っていく」

理子はテーブルから身を乗り出して、アリアに顔を近付ける。

「どうやら本気みたいだな。」

「さすがのアリアも母親を殺されると言われれば強く出れない。」

赤紫の瞳が揺れ動いている。

それからアリアは静かに席に着くと同時に理子も自分の席に座る。

「あたしと違って肉親がいるんだ……………わざわざ失うようなバカな真似はするな」

不意に顔を横に向けて窓を見る理子の顔は、どこか儂げだった。

いつも武偵高でバカやつてる理子からは想像できないような一面だ。

本気でアリアの事を気遣っているかのような言葉も意外と言えば意外だ。

そして、少し遅れて俺は理子の発言に違和感を覚えた。

「違つて？ 理子……お前の家族は——」

「とつくに死んでるよ。父様も母様も、理子が8つになった時に亡くなった」

それから肘をついて理子は俺に顔を向ける。

「血の繋がった人は理子にはもういない……でも、あたしには帰る場所がある……帰らなきゃダメなんだ」

最後だけは小声でよく聞こえなかった。

とつさの事で読唇術でも読み取れなかったが、どうやら並々ならぬ事情があるようだ。

それからなぜかは分からないが、突然に理子は少し両手で頬を叩く。

「はい！ 暗い話はおーしまい、マゾゲー攻略に戻っちゃうぞ♪」

一転してきやるんとした笑顔を振り撒きながら表理子に戻った。

どうやらさつっきのは切り替えのつもりらしい。

だけどな理子……さつっきの話をした後なら、今はお前のその笑顔が俺には強がりに見

えちまう。

「さっきの質問の答えとして、ブラドはここ最近……10年単位でこの屋敷には戻ってきてない。管理人とハウスキーパーしかいない上に、管理人の方もほとんど不在で正体が分からない」

「そう。ジャックがブラドと繋がってるのはあんたの反応で分かったわ。この屋敷に手を出したらジャックが出てくる可能性はあるの？」

「それは、ない。ジャックはブラドとは単に取引してるってだけで、ガードマンみたいな真似はしてない。理子達が手を出したところで管轄違いって事でジャックは出てこない」

と、理子はアリアに説明するが……逆に出てこられたら終わりってことじゃねえのか。

無意識に俺はジャックの事を考える。

そう考えるのは、俺にはある1つの事が引つ掛かっていたからだ。

それはこの間の事だ。

白雪が理子に絡まれて足をくじいたかなんかで応急室に運んだ時のことだ。

そこで俺の事を占ったらしい白雪は俺に占いの結果を伝えてきた。

——狼と鬼と幽霊に会う——

らしい。

最初は狼が理子、鬼がアリア、幽霊が白雪の事かと思つた……当たつてる気もするが取り敢えず別の事として考える。

狼と幽霊が何かはともかく……鬼と言われればさっきのジャックの事だ。

何と言つても殺人”鬼”だからな。

可能性としてもなくはない。

この間のジャンヌでの一件の反省もあり悲観論で考えているが、出来れば考えたくはない事例だ。

白雪と応急室でその後何があつたかは、どう語ればいいのか……今にして思つても何だったのかさっぱり分からん。

まあ、簡単に言えばいつもの暴走だ。いつものと言つてるが、暴走する幼馴染と言うのは普通じゃない気がするが……今更だな。

「とは言え、問題はこの場所なだけどね。詳細が分からない上に定期的にパターンを変えられる以上は、リアルタイムで情報を掴む必要があるんだよね。じゃないと普通に侵入しても失敗しそうだし——」

それから理子はパソコンのディスプレイに表示されている金庫の場所を示しながら口角を上げる。

これまた嫌な予感がするぞ。

「と言う訳で、アリアとキーくんは紅鳴館のメイドと執事くんになって潜入してもらいま〜す♪」

予感、的中。

それから理子はパーアーンとクラツカーを鳴らす。

店の中でそんなもん使っているのかと思いつつも俺はクラツカーから出た紙吹雪を浴びる。

隣にいたアリアは呆然。

それから彼女は静かに近くにいたメイドにゆっくりと顔を向ける。

そこには小首を傾げたメイドが、なんだろうと言った感じに笑顔に向けていた。

こ、これ？ まさにそんな感じでアリアはメイドさんを指して、すぐに反論する。

「冗談じゃないわよッ!? 何であたしが使用人の格好なんか——」

「くっふっふっ、そんなこと言っているのかな？ 欲しいモノを持つてるのはりこりんなんだよ?」

「む……だ、だからってあたしよりもそう言うのは霧の方が合ってるわよ」

と言ったところで、アリアは気付く。

「そう言えば、霧は呼んでないの?」

「呼んでないよ。キーちゃんの方が適任ではあるけれど、相手はブラド……さすがに荷が重すぎるし巻き込めないよ」

理子は少しだけ顔に影を落とす。

どうやら霧が不参加なのはそう言う理由のようだ。

今にして思えばさり気なく関わってるが、霧はイ・ウーについて知らないだろう。

聞いたとしてもアリアの母親であるかなえさんと面会した時ぐらいだ。

それに俺にはヒステリアモードがあるがアイツは、成績が良くて少し変わってるだけの一般人だ。

俺も一般人のはずなんだがともかく、確かに荷が重いと言う理子の発言には心の中で同意する。

だが、なんつーか……霧に対しては妙に労わるよな、理子のヤツ。

ハイジャックの時に利用したみたいな発言をしたが、意外と友達思いなんだろう。

普段でも結構仲が良いしな。

しかし、霧がないのはどこことなく不安だ。

イタズラ気質ではあるが、それでもアイツは自重するところは自重する。

理子やアリアの抑え役もよくやってくれてるし……霧がないとなると、俺が2人を抑えないといけないのか。

そう思うと憂鬱な息が漏れる。

同時にアリアは理子の言う事に納得したのか、何も言わない。

けれども、どことなく不信感を抱いてるような視線を理子に向けているような気がする。

「それじゃあ大泥棒大作戦会議はしゅうりよく！ 分からない事があつたら逐次聞いてね〜」

◆ 理子はそんな視線に気付かず、解散を宣言するのだった。

◆ 候補を見つけて2日くらい。

あれから他の候補も探してはいるけど、なかなかに見つからないもんだよね。◆
 だけど、岡田 以織についてこっちはこっちで調べている。

どうやら佐々木の言うとおりで彼女は父子家庭で父親は1ヶ月ほど前に亡くなってる。

それから彼女は、人斬りをしていた事で歴史上有名なある人物の子孫らしい。

母親に関しては不明。

と言うか、そこまで詳しい事は調べてない。

佐々木からさり気なく色々聞いてるだけだし、情報収集に関してはリリヤに一任してるからね。

本格的に私が調べるのは佐々木から頼まれた任務クエストを終えて、リリヤから情報が来た時だけ。

その時に勧誘するかどうか判断する。

特に期限とかお姉ちゃんは決めなかったけど……もしかして、すぐに現れると分かっているから連絡したのかな？

まあ、普通に考えられる話だからね。

あの人に解けない事象なんてあんまりない。

机の上で震える携帯。

どうやら連絡らしい。

腰掛けてた背もたれ付きのイスを座り直してプライベート用の携帯を見る。

そして、そのまま電話に出る。

「A.J.J.O (もしもし) ?」

『……ロシア語じゃなくても、いい』

「その人の国の言語で返すのが癖でね。どうかしたの？ リリヤ」

『……調べ終わった』

早い事。

私の中では任務クエストが終わってから連絡が来るものだと思ってたんだけどね。

うくん、ちよつと過小評価してたかな？

だけど情報がい早いのは良い事だよ。

「うん、ありがとう。今更だけど、研究所での事は悪かったよ」

『……悪い物、食べた？』

酷い言いがかりだ。

私つてそんなに常識がない風に思われてたのかな？

世間的な評価を考えたら妥当なのかもしれないけど……

「別に変な物は食べてないよ。ただ、普段はあんまり会えないからね。連絡が付く内に言つておこうと思つて」

『……やつぱり、あなた、変。……情報、送つた』

「はいはい、確認したよ。それじゃ、引き続きよろしくね。それと理子に会えるよう取り計らつて見るから」

『……ん』

小さく、嬉しそうな鈴のような声がして電話が切れた。

さーと、プレゼントの中身を確認してみようかな。

当たりかハズレか楽しみだね。

さて、岡田 以織について知った翌日。

今日は佐々木の任務クエストと言うか、以織を任務にかこつけて連れ出す日。

別々で集合地点に向かう事になってる。

そして私は一番最初に集合場所に到着した。

場所は東京都内のある化粧品店前の通り。

人の往来が激しい中、静かに私は待つ。

今の私は武偵の制服ではなく私服。今時な感じのカジュアルなファッション姿にシオルダーバックを下げる。客を装って店内を徘徊するのが私の役回り。

そんな中で私はつい人間観察をする。

電話をしながら歩くサラリーマンに、何をしているか分からない数人のグループで歩く若者。待ち合わせをしているのか、相手が遅れて苛立つてる様子の女性。

「あー、すみません。ここら辺でおいしいお茶が飲める店を知りませんか？」

そして、ナンパをしてくる男。

声を掛けられたのは私。

人の良さそうな顔をして店を尋ねて来たけど、集団グループで遠巻きからチラチラ見てたのは気付いてたよ。

そのグループの他のメンバーは、私とナンパの男を見て談笑したりひそひそと話をし

てる。

大方、ゲームのつもりだろう。

私を誑かすことが出来るかどうかみたいなき感じに賭けてる感じ。

お金を見せ合ってるあたりそんな感じがするよ。

アレだね……こう言うのは、適当に銃をチラつかせれば去るだろう。

神経が凶太かったら、効果は無いだろうけど。

なんて思いながらも私は銃が見えるように上着を少し広げようとする。

「武偵だ。この人は任務協力者なのでお引き取り願う」

その瞬間、私の肩を抱き寄せて以織が割って入ってきた。

もう片方の手には武偵手帳。

ナンパの男に突き付けるように見せている。

いきなりの展開に男は怯み、焦るがどうやらしぶとい部類らしいね。

怯みはしても引き下がる様子はない。

「店を尋ねてるだけだから、そう怖い顔しないでくれよ」

頬を引きつらせながらも言葉が出るあたり場数は踏んでるみたいだね。

対して以織は、

「その通りの左に流行りのカフェがある。フランス語で書かれた看板だ」

普通に教えた後に、鋭い眼光を向ける。

いかにも失せろつて言う目だね。

視線は下にも関わらず、睨まれた本人はたじろいだ様子で「あ、ありがとう」と引きつりながら退散する。

それから以織は疲れたような一息。

「失礼しました」

それからお堅い感じで、私から離れる。

「いや、助かったよ。まさか後輩に助けられるなんてね」

一先ずお礼を言う。

だけでも彼女は少し申し訳なさそうに言う。

「いえ、別に……余計なお世話でした。白野さんなら何とかしたでしょう」

「なんだ私の事を知ってるの?」

「私も強襲科アサルトなので」

どうやら、言い方からして私の噂は聞いている人らしい。

それから会話はなく、通行人の雑踏以外に私と以織の間には何も無い。

この待ち時間にも私は視線を動かさずに周りを見ている。

そんな時だった――

「あなたはなぜ武偵に？」

唐突に以織が切り出してきた。

「ただ、私はそれについて聞き返すことはせずに素直に答える。」

「お父さんに頼まれてね。頼まれただけじゃなくて、お父さんが探偵で……興味が少しあつたし、楽しそうだったから」

「そうですね……」

「そう言う岡田さんは？」

「私は、父に憧れて——」

なるほど、キンジと似たようなものか。

キンジもお兄さんに憧れて目指してたけど、背中を追う人を失った。

生きてるけど。

彼女もそんな感じだろう。

そして、今は追うべき人も目標も見失って塞ぎ込んでる感じだね。

「だけど父は……ッ」

彼女はそこで言葉を止めた。

お父さんに何かがあつたのかな？

さすがに面識の少ない私にそこまで話してくれそうにはないけど、聞くだけ聞いてみ

る。

「岡田さんのお父さん、どうかしたの？」

「いえ、何でもありません……」

「やっぱり無理みたいだね。」

「だけでももう少し踏み込んでみるか。」

「何か悩んでるなら聞くだけ聞いてあげるよ。吐いちゃえば楽になるだろうし」

「……………いえ、いいんです」

少し話そうとした素振りを見せたけど、彼女は堪えた。

これ以上はダメだね。

あとは佐々木に期待しよう。

と思っていたら、ちやうど佐々木が遅れて登場。

「あのバラは誰が……もしや、彼女が——」

そして、神妙な面持ちでブツブツ呟いてる。

「佐々木さん？」

「あ、はい!? 遅れてすみません!」

近くに来たところで私が声を掛けると、今頃気付いたのか驚いた声を上げて私に謝る。

私は「はは……」と苦笑いを返すけど、以織は静かに一瞥いちべつするだけだった。

「それじゃあ私は店の人に話を聞いてくるから」

そう言つて私は佐々木の横を通り過ぎる瞬間、

「……あとはよろしくね」

小声で言う。

事前に私が店で、佐々木と以織が2人で万引き犯と思われる人物に関連する事を調査することになつてゐる。

私は店に入る前に後ろを確認。

佐々木と以織が離れたところで盗聴器のスイッチをオン。

さっきのナンパ男から守るように抱き寄せられた時にさり気なく以織に仕掛けていた。

インカムから周りの雑音が入るのが聞こえる。

私はそのまま店の中に入り、一応調査とどうか店の中を確認する。

監視カメラの位置とか見ておかないとね。

それと店の人には客に交じつて調査することは言つてある。

よく盗まれる物あたりを調べて、それから店の人の話を聞くと言う段取り。

その調査の途中で早くも向こうに動きがあつたみたい。

周りの雑踏も少し小さくなっている。どうやら人気の少ない方へ向かっているらしい。

『あの、以織さん——』

『……志乃、君の父は武装検事だったな』

『は、はい……それが？』

佐々木が話し掛けようとしたところで以織から話を切り出した。

いきなりの事に佐々木は戸惑いながらも返したようだ。

『……………』

話すべきか、話すまいかと言った感じの息遣いが以織から聞こえる。

『お父さんの事で、何かあったんですか？』

佐々木はかなり深く切り込むように聞いた。

『——ッ』

明らかに動揺した。

以織は、言葉に詰まっている様子だ。

盗聴器の音だけで判断するのは結構難しいんだけど……出来なくはない。

『志乃、私の父は——誰かに殺されたかも、しれないッ』

悲痛そうに以織は打ち明けた。

『以織さんのお父さんは、確か——』

『公安0課だ。父は、任務中に事故死したことに、なってる』
なるほどなるほど。

それから以織は息巻いて、絞り出すように佐々木に伝える。

『だが、父は……任務の前日に妙なことを言っていた。知りすぎたか、とたつた一言だが
そう言っていた！ 父が何を知ったのか私には分からない！ だが、その矢先に父は死
んだ!! 何かが、おかしいんだ……』

段々と以織は涙声になっている。

私を守った凜とした声からは想像もできない、弱々しいものだ。

『志乃、協力してくれ。武装検事の管轄外かもしれない、無理を言ってるのは承知だ……
だが私は、真実を知りたいんだ……』

その以織の懇願に佐々木は、

『——分かりました。父様に言うだけ言ってみます』

力強く答えた。

『本当、か?』

『もちろんです。武偵憲章1条：仲間を信じ、仲間を助けよですからね』

『すまない……ありがとう』

どうやら、話は終わったらしい。

最後は以織の感謝で締めくくられた。

いや、実にいい話だよ。

これで佐々木のお父さんが調べて、真実に辿り着ければ一件落着。

——だと面白くないんだよね。

良かったよ、私好みの話だ。

あの気丈な感じの性格も気に入ったよ。

佐々木のお父さんがもし調べることになったら、それよりも早く真実に辿り着かないとね。

思わず口の端が釣り上がる。

化粧品が並ぶ棚に据え置かれている鏡。

悪い顔してるのが映ってるよ、私。

でも仕方ないよ、

——楽しいんだから。

46: Who's Jack?

さて、私の仕事は順調。

リリヤの調査と以前の盗聴器での話で以織の父は公安0課であるのは分かっている事だ。

彼女の父親は割と凄腕……まあ公安0課なんて言ってしまうえばイギリスの00エー
ダブルオー
ジェントみたいなものだから当たり前の話なんだけど。

その中でも彼は刀一本で色々とやってきたらしい。

逃走中の車のタイヤを正面から斬ったとか何とか……それなりの逸話を持つてる見たい。

だが、そんな人が任務の捜査中に事故死と言うのは素人でも怪しいと分かる。

おまけに捜査には同僚が付いていた。

一見すれば、その同僚がさらに怪しいんだけど——どうやら目撃者は他にもいるらしくその目撃報告により事故死だと判断された。

うん、怪しく思えてたけど……何もないね。他にも目撃者がいるんじゃない、ただの思い

違い。

普通ならそう判断するだろう。

だけど私はそうは思わないだよね。

なんで分かるかって？ もう色々知ったからに決まってる。

「やあ、こんばんわ。外はいい夜だ。こう言う日は、家に帰って夜の紅茶を飲むに限る」

と、少し低い男の声で私は小粋なトークを挟みながら切り出す。

今の私はイギリス人の中年。顎髭あごひげを蓄えたダンディーな容姿だ。

「なので貴方もそう言った有意義な時間が過ぎたいなら正直に話すことだ」

私は背もたれ付きの古びたイスに両手足を縛られた中年男性に振り向き、そう言う。

胸には公安0課のバツジ。

服は防弾製のスーツ姿だ。

中年はさつき私が話し掛けた時に気が付いた様子で周りを見渡す。

「お前は一体何だ？」

さすがは厳しい試験に受かったエリート様だ。

どうやら状況把握に努めようとしている。この程度では動揺も何もない。

ここはなんて事はない、よくある数階建てでコンクリート造りの廃墟ビルだ。そのビルの中心に近くの一室。埃ほこりが舞うほどに古い。

しかし、電気はまだ通つてゐるらしく薄汚れた電灯が明滅する。
私は質問に答える。

「ホワイトチャペルから出てきた鬼だよ。これだけ言えばお分かりだろうか？」

「貴様、切り裂きジャックか……」

私はそれに答えずに話の続きをする。

「少しばかり聞きたいことがあつてね、手荒な真似をしてすまない。少しばかり名前が売れすぎたようだな、名乗るだけでファンが押し掛けて来るもので困っているんだが……まあ、それは致し方のない事だ。おつと……話が逸れたが、用件はある事についての確認だ」

「黙れ、貴様のようなヤツに何も話す事はない」

「おや、貴方は同僚を殺したも同然だと言うのに私を責めるつもりか？」

「何の話だ……」

「岡田 以臣さねおみ、お名前に聞き覚えは当然にあるだろうか？ つい一ヶ月ほど前に貴方達に事故死と言う事で片付けられた、な」

「……………」

名前を出しても中年は反応をあまり示さない。

やはり場数を踏んでる人間は違うね。

「ただ、少なくとも心当たりはあるはず。」

「少しばかり揺さぶってみるか……」

「ふむ、ではゲストをお呼びしよう」

私は踵かかとを返して、中年の正面にある古ぼけた木の扉をゆっくり開ける。

軋軋む音を響かせ開かれた先には、中年の女性と10代中頃の女の子。

こちららも古びたイスに同じように縛られてはいるけどどちらもグツスリと眠ってる。

「——ッ！ 妻と娘を……!!」

額に青筋を浮かべて飛び掛ろうとするけど、ちつとも動いてない。

いや、それどころか立ち上がることさえ叶わないだろうね。

だって今の彼には夾竹桃特製の筋弛緩剤を盛ってるんだから当たり前の話だよ。

公安0課と言えど、バツジを持ったただの人間に過ぎない。

やり方は幾らでもある。

「なに、彼女たちが目を覚ますことはない。少しばかり強力な睡眠薬でね……麻酔効果もある。つまり——」

若い娘の腕に緋色のメスを当てる。

そして、少しだけ切る。

血が垂れて行き指先から少量滴るだけで、彼女は起きない。

「このように何をしても薬が切れるまでは何も気付かない。例え腕をもごうが、中身を引きずり出そうがね……死んだことにすら気付かぬまま、眠ることも出来る」

「頭のイカれた殺人者が……ッ!!」

「まあ、妥当な評価ではあるが……単純な話として貴方が全てを正直に話して私の事を口外しなければ、それだけで終わる話だ。家族円満でいられる」

私は顎髭を触って話しながら中年に向かって歩き、顔を近付ける。

「どうだ？ 悪くない話だろうか？ なに、一度は同僚を金で売ったんだ、今度は家族のために売ったことにすればいい。金で売るよりかは幾分かマシな言い訳だろう」

「……………」

「大丈夫だ。貴方の直接的な関係者に手を出したりはしないと約束しよう。私は約束を守る男だね。貴方が口外しなければ今宵は悪い夢で終わるんだ」

「……もし私が貴様のことを話せば、どうなる……？」

「悪い夢が続くだけだ。まあ、それでも私はいいんだがね」

私は正面のまま少し後ろに下がり、1つの言葉を彼に突きつける。

「Make your choice
選択は貴方次第だ」

◆ ◆ ◆

さて、『大泥棒大作戦』開始まで刻々と日が近づいてる訳だが……

会つちまつたな——狼に。

それも絶滅危惧種の筈のコーカサスハクギンオオカミの成獣だ。

体重は100キロはありそうな巨体に針のような白い毛並み。

あんなものが学園島に迷い込んだなんて事は考えにくい。

おまけにかなりの知性もあるようで足跡を囿にして俺とレキを誘導したくらいだしな。

とまあ、既に終わった事に俺は思案を巡らせていた。

結論から言うと、事件は無事に解決。銀狼はレキの貫禄によって立派な忠犬へと代わった……狼なのに犬つて言う表現はおかしいが……

それよりも問題は潜^{スリッ}入だ。

メイドと執事と言う事で潜入する事に結局は決定してしまった訳だ。

——理子によって。

それでアリアはアリアでメイドの練習。そして、俺は執事の練習。

前者は上手く言つてるとは当然に言い難い。

貴族の娘が使用人になるんだ、それもプライドの高いアリア様だったら立場がどうのこうのと抵抗するに決まつてる。

かなえさんの事があるからか少なくとも割り切つてるようだが……それでもすんな

りとは行かない。

そんな中で理子は茶々を入れるものだから、收拾がつかなくなる事態に陥るのも想像に難くない。

俺の気苦労が増えるばかりだ。

すぐに霧を呼びたい心境だ。

アイツがいれば少なくとも色々と間が取り持てるんだがな……理子と仲がいいし、アイツが注意すれば理子は取り敢えず落ち着く。

アリアに関しては舌先三寸で言いくるめられるだろう。

だが、どうやら向こうも忙しいらしく最近は色々と後輩と一緒に任務クエストに行ってるようだ。

ほんと、面倒見の良いヤツだよ。

なんて考えてる内に俺は探偵科棟インクレストの外に出た。

空から水が落ちている。

——雨だ。

……………マジかよ。

だがまあ、まだ本降りじゃない。

多少濡れるのはやむなしだ。

そう思ってバス停まで強行突破を試みたが、

ザアアアアアアアツ!!

無理でした。

地面に水が跳ねるほどに降ってきてしまった。

(今日の運勢、下から2番目だったな)

そんな事を考える。

この運の悪さは当たつてるとしか言いようがないだろう。

選択教科棟の1階のひさし廂で雨宿りすることにする。

.....

.....

しばらく待ったが、一向にマシになる気配がない。

どうしたものだろうかと不意に空を見ると、ちらりとこの季節には似つかわしくない

ものが目に映る。

見間違いかと思って、目を少し凝らしているとまたしてもちらりと映った。

——氷の結晶だ。

そんなに冷えてたか? と思っていたら、今度は背後の窓の向こうからピアノの伴奏

が聞こえてくる。

この曲は……劇的オラトリオをピアノ曲にアレンジしたものだとはず。確か音楽の授業で聞いたことがあるぞ。

しかし、どうでもいい事はよく覚えてるよな……俺。

曲名は確か——火刑台のジャンヌ・ダルク。

うん？　なんだろうな、イヤな予感がするぞ。

思わず振り向いて、窓越しに弾いてるヤツの姿を確認してしまった。

以前に相対した魔剣^{デュランダル}——フランスの聖女の子孫、ジャンヌ・ダルクだ。

そして、向こうはどうやら俺が気付くのを待つていたかのように聖女に相応しく美しい顔を向けてくる。

それから顔を少し音楽室の扉へと向け、視線を向けるよう促してくる。入ってこいと言う事らしい。

俺が音楽室に入ると、ジャンヌはピアノ鍵盤あたりに腰掛け、堂々とした様子で待つていた。

身に着けているのは甲冑ではなく武偵高のセーラー服。

つまりは、だ。

「もう既に司法取引は済んでるのか？」

「そう言う事だ。だから銃を仕舞え」

どうやらジャンヌは見抜いてるようだ。警戒するなとばかりに彼女は言ってくる。用心のためにと一応は身構えていたが、その必要はないらしい。

俺は銃を仕舞いながら、

「随分と似合ってるじゃねえか」

一応本音を交えながら嫌味半分で言う。

「む……それは、お世辞か？」

「いや、一応は本音だが？」

「……そうか。しかし、いくら何でもスカートが短すぎるだろう……未婚の乙女がこんなに脚をみだりに晒すものではないぞ……！」

ちよつと嬉しそうな顔をした気がするが、彼女は窓に映る自分の姿を見て葛藤している。

憤慨しながらも結局は着てんじやねーか。

などと、思いながらも俺はジャンヌを見る。

普通に会話してるが、ジャンヌに思うところがない訳ではない。

霧に關しても白雪に關しても色々世話になつたからな。

だがまあ、過ぎた話な上に相手は司法取引済み。つまりは捕虜も同然だ。

「それで？ どういう設定だ？」

「今の私はパリの武偵高から来た留学生、情報科^{インフォオルマ}2年のジャンヌ・ダルク……そう言う話になってる」

「同じ年だったのかよ……」

「てつきり仕草とか喋り方からして少し年上だと思っていたんだがな。」

「女子の割には身長も結構あるし。」

「なるほどな。だけど制服にケチ付けるなよ。イ・ウーには制服とかそう言うのなかったのか？」

「探るような感じで俺は話を切り出す。」

「イ・ウーについて、俺は少なくとも知らなきゃならない。」

「それが兄さんに繋がるのならなおさらだ。」

「危ない橋かもしれないが、それでも知っておきたい。」

「制服から切り出したのは以前に理子がイ・ウーを『退学』になったと言う発言からの推察だ。」

「ふん、イ・ウーについて気になるのなら回りくどい聞き方はするな」

「ジャンヌの鋭い視線と言葉が俺を射抜く。」

「どうやら見抜かれてるようだ。」

「分かったよ。イ・ウーについて、色々知りたいことがある。聞かせてくれるか？」

「……アリアや理子からは聞いていないのか？」

「誰も教えてくれないんだ」

俺はジャンヌの疑問に答えつつも肩をすく竦める。

それからしばしジャンヌは片手を顎に当て、黙って考える。

「まあ、いいだろう。だが、イ・ウーについては知るだけで危険が及ぶ。その中でもとりわけ危険な情報をお前に渡して、地獄の逃走劇に身を落として貰いたいところだが――」

「おい……」

なんつー、腹黒い事を考えてやがる。

「それをすれば私は初代ジャンヌと同じ死に方をさせられるかもしれん。なので、あれこれと全てを話す訳にはいかない」

「上に消されるのか？」

「いいや、違う。もつと別のヤツにだ」

「別のヤツ？ お前以上の実力者でもいるのか？」

ジャンヌは俺に静かに目を向け、

「お前は私を過大評価しているようだが、私はイ・ウーの中で強さの序列としては最も低

い位置だ。私以上の実力者など、山ほどいる」

淡々ととんでもない事を打ち明けた。

おいおい……冗談だろ。

4人掛かりでも翻弄されて苦戦したって言うのに、そんなのが下つ端のポジションだつていいのかよ……

「少し場所を移そう」

俺が突然の事実にも然然としている中で、ジャンヌはそう提案してくる。

俺の視線の端に中等部の女子らしい子が扉から顔を出しているのが見えた。

そう言う事か……さすがにこんな場所で2人で話すのは目立つし、ここは音楽室。

他の生徒も使うのは当たり前だ。

不意に窓を見ればどうやら雨は少し弱まったらしい。

小降りになっている。

外に出るなら今のウチだ。

これからイ・ウーについて俺はようやく知ることが出来る。

ただ、知った後で鬼が出るか蛇が出るか、だ。

特に鬼は勘弁願いたいところだ。

「どうやらジャンヌも傘を持っていなかったらしく、あの音楽室で天気が悪くなるのを待っていたらしい。」

「その音楽室も他の生徒が使用するから出て行かざるを得なかったが……小降りなおかげで俺とジャンヌはファミレスの『ロキシー』に辿り着く事は出来た。」

「だがまあ、俺の隣の聖女さんは物珍しそうに周りを見ている。」

「と言うかコイツと2人でいると霧の時より目立つ。」

「聖女の子孫と言う事だけあって、西洋美人だからな。」

「シャープな顔にシユツとしたモデルみたいなスタイル。」

「とにかく目立つ。」

「あまり目立ちたくない俺は人数を言つて、隅っこにあるテーブルに案内するよう店員さんに素早く頼む。」

「そしてフリードリンクを頼んだんだが……」

「おい、何やってる?」

「ジャンヌはコップを持って見つめたままドリンクバーの前で立っている。」

「様子がおかしいので俺は声を掛けた。」

「これはどういう装置なんだ?」

「知らねえのかよ……」

予想外過ぎる。

「コップを置く場所があるだろ？　そこに置いて写真の下のボタンを押せば、その写真の飲み物が出てくるんだよ。ドリンクバー知らないのか？」

「知らん。私の故郷やイ・ウーには少なくともなかった」

キツパリとジャンヌは言い切った。

日本のドリンクバーみたいな感じは海外には少ないのか？

と、入れたメロンソーダを少し飲みながら何となく考える。

「お、おお……」

そして俺の隣のジャンヌ・ダルクさんはなんか知らんがレモンティーが出てる事に感動してる。

これも文化の違いってヤツなんだろう。

そう言う事しておこう。

2人用のテーブルに向かい合う形で腰掛けた俺とジャンヌは、お互いに少し飲む。

それからジャンヌは、コップを置いて切り出した。

「さて、イ・ウーについて知りたいのだったな。まず、イ・ウーに制服などは存在しない」
そこから始まるのか……別に真剣に聞いてた訳じゃなくて、話の取っ掛かりで聞いた

だけなんだけどな……

「そうか。じゃあ次に——お前達の組織は、一体どう言うものなんだ？」

一応は納得しておいて、それから俺は深く切り込む。

「イ・ウーと言うのは天賦の才を持った者が集う場所だ。お互いの才を教え合い、吸収し、研磨し、遙か高みへと昇華していく。いずれは——神の領域まで。そう言う概念を持った組織だ」

これで合点がいった。

白雪の狙われた理由はそう言う、天賦の才を持っているからと言うことだろう。

綴つづりも伸び代があるって言ってたしな。

「理子がお前から作戦立案を学んだって言ってたが……」

「ああ、教えたのは間違いないけど私だ。代わりに理子から変装術を私は学んだ」

どうやら、以前の大泥棒大作戦会議の時に理子が言ってたことは事実らしい。

「1ついいか？ 最近の理子の様子はどうなんだ？ 会ってるのだろうか？」

ジャンヌは少し心配そうな感じでいきなり聞いてくる。

その表情に俺は面食らった。

敵対してた時から想像も出来ない、優しげな雰囲気があったからだ。

「ああ……あいつはいつも通りだよ。アホみたいなテンションで俺とアリアの調子をか

き回してるよ」

「そうか。なら、いいが……」

「理子について聞くって事は、仲がいいのか?」

「同じフランス生まれだ。仲が良くなくてどうする」

ジャンヌは当然だとばかりに返した。

だが、今にして思えば奇妙な関係だな。

片方は大泥棒の子孫、もう片方は聖女の子孫。そして2人は友人だって言うんだからな。

「それに、私は彼女が好きだ。努力家なところが特に気に入ってる」

「努力家……? あの理子がか?」

「普段は明るく振舞っている理子だが、影では貪欲に力を求めていた。何よりも自分を有能な存在に変えたがっていた……」

そこでジャンヌは言葉を途切れさせる。

「どうやら、メイド喫茶で見た理子の並々ならぬ雰囲気にはそう言う背景があるらしい。」

だが――、

「何のために力を欲してたんだ?」

そこが分からない。

力を求めるには何か理由があるはずだ。

兄さんは言っていた。強くなるのは手段だと。

俺の兄さんの場合は、弱き者を守ると言う目的のために強くなり武偵となった。きつと理子にも同じように理由があるはずだ。

「——彼女は、自由のために戦っていた」

ジャンヌは目を伏して、そう一言答えた。

「自由？」

「そう、自由だ。理子はその昔、監禁されていた……長い間な」

衝撃の事実だ。

いつもの振る舞いからして、理子にそんな過去があるなんて誰も思わないだろう。

俺も、

「冗談だろ？」

思わずそう聞いた。

「逆に嘘を言っただうする？ 何のメリットもないだろう。バカか貴様は」

「ちげーよ。嘘を言ってるわけじゃないんだろが、信じ難がたいって意味で言ったんだよ」

俺はジャンヌに反論しつつ答える。

いきなりバカ呼ばわりとは……まあ、言われ慣れてるから何とも思わんけどな。

「だけど、リュパンは泥棒とは言え高名な一族の筈だ。そのお嬢様である理子が何で監禁なんか……」

「リュパンは没落したのだ。理子の両親が死んだと同時に衰退の一途を辿った」

「両親——理子が8つの時に亡くなった……」

「知っているのか？」

「本人がそう言ってたんだよ」

俺がジャンヌの疑問に答えると、彼女は「そうか」と短く答えて続きを話し出す。

「なるほど。では続きだが、両親の死と同時に没落したリュパン家は……仕えていた使用人によって多くの財宝が盗まれた。天涯孤独となった理子は親戚を名乗る1人の男に『養子に取る』と言い寄られ、フランスからルーマニアへと渡った。そして、監禁された」

淡々と語るジャンヌ。

「理子を監禁した人物はの名は——ブラド。お前達が盗みに入ろうとしてる紅鳴館の持ち主だ」

「どうやら、俺達が何をするか知ってるらしいな。」

理子から聞いたのだろうか？

そこら辺はどうか分からないが、ブラドの名前が出てきたことには驚かない。

以前の作戦会議で聞いたからな。

「ちなみに理子の監禁の話はブラド本人から少し聞いただけだ。私は、詳しい事を何も知らない。しかし、ブラド本人については色々知っている。一応、万一に備えて色々教えておいてやろう」

「随分と親切だな……」

「あいつは危険だからな。それに、お前とアリアの2人はどうでもいいが……理子に何かあつて欲しくはない」

さすがは氷を操る魔女……冷たい対応だ。

取り敢えずそこはスルーしておこう。

「危険なら、アリアにも言っておいた方がいいんじゃないか？」

「アリアはダメだ。母親が絡むと短絡的になる。ブラドの姿を見たら飛び掛りかねん上に返り討ちにされて、教えた私まで反撃の手が伸びる可能性がある。すごく……すごく気に入らないが、教えるなら白野にしておいた方がいい」

どうやら、ジャンヌは霧がお嫌いらしい。

そんな2回も念を押して言わなくてもいいだろう。

だがまあ、ジャンヌからしてみれば霧のせいで自分の作戦を滅茶苦茶にされたような

ものだからな。

しかもかなり挑発されたし……根に持つてるんだろな。

それと、ジャンヌには悪いが霧に教える機会はなさそうなんだよな。

特にその事を言う必要はないし変に話を広げる必要もない。なのでここは返事だけをしておこう。

「分かった」

「ここからの話は非常時のみ、アリアに話せ」

とジャンヌは前置きしてから腕を組み、話し始める。

「まず、先日に見れたコーカサスハクギンオオカミについてだ。情報科では目下調査中

だが……私の見立てではブラドの下僕しもべだと見て間違いないだろう」

「しもべ？ あの動物が……？」

「そうだ。かなり利口で、知性もある。色々と訓練されているから油断はしない方がいい」

それは身を持って既に知った。

武藤のコルト・パイソンの銃声に怯みもしなかったからな。

今の忠告はもう少し早めに知っておきたかったよ。

「かなり活動範囲も広い上に、数も多い。特にヨーロッパのルーマニア周辺は密度も濃

くなる。おそらく本拠地があるんだろう」

「ジャックと繋がってるって話なんだが、そこら辺はどうなんだ？」

「……なぜお前がジャックとブラドの関係を知っている？」

ジャンヌは訝しむような表情をする。

それにどこか不機嫌そうな表情だ。

「アリアから聞いたんだ。ジャックとブラドが繋がっているって言う話をブカレストで耳にしたって」

「先に教えておいてやろう。ジャックに関してはあまり調べるな」

俺が理由を話すと、ブラドの話をそちのけにしてジャンヌは警告してくる。

「いいか？ おそらく聞いているだろうが、ジャックもイ・ウーの一員だ。ある程度の諜報組織や裏社会でその事は既に周知の事実。だが、あまり知ろうとするな。ブラドに比べればヤツの方が危険だ」

あのジャンヌが少し焦るような言い方をする。

「危険って、どういう意味だよ？」

「イ・ウーでのあいつは処刑人——パニツシャーだ。組織の規律をあまりにも乱し過ぎたり秘密を喋ったりし過ぎるとヤツに殺される。イ・ウーのリーダーの右腕的存在だ。私が音楽室でもっと別のヤツと言ったのはそのジャックに、と言う意味だ」

無法者を束ねる秩序ってヤツか？

毒に対して毒を盛るように、無法者を制するのも飛び切りの無法者と言う事か。

「ヤツの恐ろしさを簡単に説明するならば……そうだな、例えばあそこに居るウエイトレス」

ジャンヌが少し目を向け、示すように言う。

俺も目を向けるとさつき俺達を案内したウエイトレスがいる。

彼女が何だって言うんだ？

「彼女がジャックかもしれない」

「——おい、何言ってるんだよいきなり……！」

「例えばの話だ」

ジャンヌは落ち着いた感じで返してくるが、こっちは冷や汗ものだぞ。

「私の後ろの席にいる男性もそうだ。ジャックかもしれない」

「……どういう意味だよ？」

要領を得ない話に俺は思わず尋ねる。

そして、衝撃の事実を彼女は打ち明けた。

「ヤツは”誰にでもなれる”」

「誰にでもって、そんなSFみたいな話があるか」

「事実そうだ。少し語弊があるかもしれないが時間を掛ければ70億人近い人間の誰にでもなれる可能性がある」

あつけらんかと言ってくれるが、最悪だぞそれ。

ジャンヌの言う事が本当ならそんなの捕まえられる訳がない。

どうやって特定しろって言うんだ。

「私の変装術、もとい理子の変装技術も元を辿ればジャックから教わった技術だ。その完成度は比にならない。変装と言うよりは変身だ」

「どんだけだよ……」

「肌の質感、指紋、声調、方言、癖、性格、性別、年齢、どれも一致したことはない。身長制限はあるだろうが、靴の厚さを変えれば多少は問題ない。同じ姿を好んでしばらくはそのままにいる事はあっても、それが本当の姿とは言い難い」

「お前……いいののか？ そんなに喋って」

そんな事を知って、俺まで狙われたらシャレにならない。

だがジャンヌは「大丈夫だ」と答えた。

「イ・ウーで誰でも知っていることを少し広めても、誰が広めたかまでは分からないだろう」

なるほど。

情報を共有してる人が多くいるという事は、ジャンヌの言う通り誰が広めたか分からない。

さすがのジャックもそこまで地獄耳じゃないだろう。

じゃなかったら困る。

「だが、問題はジャックと言うのはグループ名であつて本当は複数人いるんじゃないかと言う話もあるが——問題ないだろう」

「大アリだろ!？」

「……遠山、ここは他の客もいるのだぞ。静かにしたらどうだ」

さつきまでドリンクバーの存在を知らなかったヤツに常識を説かれた。

いや、まあそれは俺が悪いが——

「待て、待て待て……ジャックが複数人?」

1人ですら捕まつてないって言うのに、同じレベルのヤツが複数人もいるかもしれないなんて……どんな悪夢だよ。

「これはあくまでも推察だ。でなければ、人物の不一致に説明がつかないからな」

やめて欲しい推察だ。

武偵憲章にある悲観論で備えろとあるが、いくら何でも悲観論過ぎる。

ジャンヌはそこで話を切り上げに掛かる。

「あと、理子にジャックについて詳しく聞くのはやめておけ」

「何でだ？」

「さっき言っただろう……理子の変装技術は元を辿ればジャックのモノだと、だったら理子がジャックを師事していたと普通に考えれば分かるだろう？　あまり聞き過ぎると、理子からジャックの耳に入るかもしれない。理子自身、そういちいち告げ口をしたりはしないだろうが念のためだ」

とジャンヌは言うが……

理子、お前の交友関係はどうなってる。

天下の殺人鬼様が師匠で、お友達はフランスの聖女。

ビックリ人物相関図ができそうだな……

「あとの問題は、ブラドが帰ってきてきて理子に手を出したらジャックが出てくる可能性があるかもしれないと言う事だな」

「どうしてだ？」

「どうやらジャックは理子を気に入ってるらしい。そして理子も……ヤツを慕っている」

憂うような表情。

銀氷の魔女とは言え、こいつにも友達を思う心はあるらしい。

敵対してた時から想像できない全く違う一面だ。

「もし、ジャックが出てきても絶対に敵対だけはするな。殺人鬼とは言え理性的で話せば分かるヤツだ。いきなり中身を引き摺り出されるなんて事はないから安心しろ」

殺されるとかじゃなくて、なんだよその引き摺りだすって。

何を出されるんだよ。

それに殺人鬼なのに話せば分かるヤツって言うのが軽く矛盾してる気がするが……

「ジャックの事もアリアには言うな。それと……状況に構わず私の時みたいに嘔み付くのはやめるように言っておけ」

そう聖女さんは忠告を発してくれるが。

残念ながら俺はアリア曰くドレイなんですね……飼い主様には強く言えんのだよ。

しかも、あの仔ライオンが嘔み付くのを止められたら苦勞はしないんだがな。

「話を脱線したな。ブラドについての話に戻ろう」

ここまで話しっぱなしだったからかジャンヌはレモンティーを一口飲もうとするが、既に氷が完全に溶けている。

と思つたら、氷が浮き出てきた。

超能力使いやがったな、便利な上にそう言う器用な事も出来るのか……

そのまま一口飲んで、話を続ける。

「さて、ブラドの実力だが……現時点でイ・ウーでは上から2番目だ。私の先祖で双子だった3代前のジャンヌ・ダルク、27世と初代アルセーヌ・リュパンが共闘してブラドに立ち向かったが倒すには至らなかった」

「3代前って事は、ブラドの先祖か？」

「いや違う。ブラド本人だ」

「そう言う系の話ですか……」

もう今更、何を聞いても驚かねえよ。

「人じゃないと言うオチか……」

「お前にしては随分と察しがいいな」

嫌味っぽく言うな。

どうやらさつきまで理子を心配してたジャンヌはどこかに行ってしまったようだ。

またしても氷の魔女に逆戻りだ。

「そうだ、ヤツは人じゃない。日本語では何と言えばいいのかわからないが形容するなら、オニ……だな」

少し言葉に思い悩むように眉を寄せて、ジャンヌは言ってくる。

俺は言葉を頭の中で反芻する。はんすう

オニ……？

えっと、鬼……ですか……

白雪の占いでは『狼と鬼と幽霊に出会う』と言う話だったんだが……2つ目のキーワードが殺人鬼と鬼と2回も出てきてる。

嫌な予感が滅茶苦茶しまくりだ。

「おい、遠山。冷や汗が出てるが、どうかしたのか？」

「……いや、何でもねえよ」

何でもなくはないが、今一瞬だけ嫌なパターンを思い浮かべてしまった。

白雪さん、鬼が2匹とは聞いてないんですが……もし出会うなら1匹だけだよな？

ブラドとジャックのどちらがマシと言う話でもないが、さすがに鬼の間に挟まれる何て事は勘弁して欲しい……切実に。

「ならいいが。正直な話、今回の件は少し不審なところもあつてな。ブラドは何故かは知らないが理子に異様に固執している。しかし、ジャックが取引をしてブラドは理子に手を出さないと言う話だったはずなのだが……どうして、今ブラドの別荘に潜入しようと思つたのが疑問だ」

途端に彼女は策士の顔になる。

「さてな、でもブラドの別荘に取り戻したいモノがあるらしい」

「取り戻したいモノ？」

「その取り戻したいモノが何かはまだ分からん。一応、作戦当日に伝える事になつてる」
 「ふむ……まあ、ともかく。ブラドが帰ってきたら逃げるための戦いをしろ。双子の
 ジャンヌ・ダルクがヤツに銀の銃弾を撃ち込みデュランダルで突いても死ななかつたぐ
 らいだ。あと容姿については絵で説明してやろう」

至れり尽くせりだな。

それほどもでにブラドが危険だと言う証拠だろう。

兄さんの情報のために協力する覚悟があるとは言え、気が進まない。

ジャンヌはメガネを取り出して、学校指定の黒いカバンからノートと油性のペンを取
 り出した。

「これはイ・ウーで耳にした話だが、どうやらブラドには4つの弱点があるらしい。そこ
 を同時に攻撃しなければ倒せないと聞いた」

ノートを開き、ジャガイモみたいな縦長の歪な楕円を描き始める。

「調べたところによると、ヴァチカンから送り込まれた聖騎士に術を掛けられて、自分の
 弱点に何をしても落ちない目の紋様を付けられたようだ。4つの弱点とはその目の紋
 様の事だろう」

話ながらジャンヌはそのジャガイモに手足を生やした。それもかなり太い。

さらに禪みたいなのを両足の間に描き加えて、頭には子供が描く草みたいなのがギザギ

ザを生やす。

波線みたいな口には牙のつもりなんだろう、さっきの草を逆さにしたようなギザギザを付け足す。

最後にUの字みたいな太い鼻と黒く塗りつぶした点——目なんだろう——を描いて彼女は、ノートを自分の前に掲げる。

「うむ、大分出来たぞ。我ながら良い出来だ」

自分のスケッチにご満悦してるところ悪いが、

「幼稚園のお絵かきかよー」

それぐらいに下手だった。

おい、素人の俺にも分かるほどに美的センスの欠片もないぞ。

ルーブル美術館で少しは絵と言うヤツを学んだほうがいいんじゃないか……そう言いたいほどの酷さだ。

「な、何を言う！ 人の絵を見るなりお絵かきとは、失礼なやつめっ！」

いや、どう考えても10人が見たら10人ともそう評価するだろう。

だがジャンヌにとつてはかなりの完成度らしい。

そのまま反論してくる。

「ともかく、これは似ている。弱点は左右の肩と右脇腹あたりだ。4ヶ所目もある筈だ

が私には分からなかった。一応、取っておけ」

そう言つてジャンヌはペンで両肩つばい所と右脇腹つばい所に黒い点を描いて俺に渡してくる。

なんか、これ持つてるの恥ずかしいな。

おまけに不気味すぎる。

だがまあ、せつかくの好意だ……無碍むげにはできないし、もしかしたら参考になるかもしれない。

念の為に貰つておこう。

「分かったよ、それじゃあ俺はこれでな」

そう言つて俺はジャンヌに別れを告げる。

なんかこの絵、持つてるだけで呪われそうな感じだな

そう思いつつも、俺はファミレスを出た。

◆ ◆ ◆

レストランを出る遠山を見送りつつも私はレモンティーを飲む。

全く、本当に失礼な。

私の絵をお絵かきなどと、これでも夾竹桃には「斬新なセンスね」と褒められたのだぞ。

まあ、それはいい。

それよりも……問題は理子だ。

何を盗られたかは分からないが大体は想像できる。

おそらくは母の形見の十字架コザリオだろう。

いつも肌身離さずに身に着けている筈だが、以前に会った時にはなかった。

一度もその事について聞きはしなかったが、今回ブラドの別荘に潜入すると言う事で盗られた線は濃厚だろう。

だが何のために取り戻す？

母の形見だけと言う理由だけではないだろう。

それに、ジャックに頼めば事足りる話だ。わざわざリスクを負うような方法じゃなくても取り戻せる筈だ。

ジャックに頼らないと言う事は、やはり理子が個人的にブラドと取引した事が関係しているのか？

——ホームズの末裔を倒し、アルセーヌ・リュパンを超えたことを証明し自由を勝ち取る。

やはり、分からない。

自分の力でなくともジャックの庇護下にいる理子は、充分に自由な筈だ。

その庇護下を抜け出して自分で自由を勝ち取るということは……
ジャックのため？

私がある推察に達したところで電話が掛かる。
知らない番号だ。

「もしもし？」

『もしもし、おねえちゃん？』

鈴みたいな少女の声。

声の幼さからしておそらくは10歳に満たない子供だろう。

この子供の声に心当たりはない。

間違い電話か……

「私は君の知ってる姉ではないと思うのだが……」

『えく、ちがわないよ？』

む、もしかして勘違いしてるのか？

おそらくは私に似た姉なのだろう。

『——ジャンヌおねえちゃんですよ？』

一言、その一瞬で全身を駆け巡る悪寒。

「……ジャックか」

相変わらず心臓が悪い。

こんな幼年の少女みたいな声まで出せたとは……

『ちがうよ、おんなのこだからジルだもん』

子供の意地っ張りな所もよく再現している。

「それで、今度は何のようだ？」

『んとね、ジャックがね。おねえちゃんがわるいことしないかみてほしいって言ったの』

「……………」

まさか、先程の会話を見られていた!?

しかも誰かに頼まれたような言い方。

ジャックが複数にいると言う推察が当たっていたと言うのか？

いや、会話を聞いてたならそれを逆手に取ってと言う事もある。

今は余計なことを考えるな。

「特に重要な秘密や機嫌を損ねるような事は言っていない筈だ」

『えー、でもジャックについてすごーく考えてるかんじだったよ？ どうして?』

どれもこれもただの推論だが、喋り過ぎたか……ッ!

これは、マズイぞ。

今まで以上にマズイ状況だ。

「だが、どれも根も葉もない推論だ」

『いーっぱい考えてるってことは、それってジャックについてしりたいからだよね?』

「別に知りたい訳ではない」

『でも、ジャックと理子おねえちゃんのかんけいをうたがってるんだよね』

「違う、私は理子が心配で——」

『ジャンヌおねえちゃん、うそつきなんだ』

有無を言わずに私の言葉を遮る。

なんだ、この悪寒は。

子供の声なのに狂気が、見え始める。

『ジャックがクライで、理子おねえちゃんにちかづけたくないんだ。だからイジワルするためにしらべてるんだ』

「——待て」

『イジワルする子はけしちやわないと』

早くなる動悸。

冷や汗が止まらない。

誰がジャックかも分からないこの状況。

どうすればいい……！

『んふふ、ふふふふふ……うっそぴよーん♪ かんたんにはひつかかっちゃうんだ』

途端に携帯の向こうから響く笑い声。

『おねえちゃん、ぜんぜんわかってないもん。ジャックはいつも1人だよ。それにね、あのね……これぐらいならジャックもおこったりしないよ？』

さっきまでの狂気はどこへ行ったのか。

子供の声が呆気に取られてる私の脳内に響く。

『あんまりジャックにイジワルするのかがえちやだめだよ？ それじゃあねー』

一方的に話を進めて向こうから切った。

力なく携帯を下ろす。

本当に、心臓に……悪い。

不意に窓の外を見た瞬間、誰かが道路を挟んで向こう側から見ていた気がした。だが、車が通り過ぎると……誰が見ていたのかも分からなくなった。

◆ ◆ ◆

ファミレス『ロキシ』の向かい側にある歩道で、私は鼻歌交じりに傘をさして歩いて行く。

やっぱりジャンヌは私の事を嗅ぎ回ってたんだ。

音楽室を出たあたりからキンジと2人で一緒にいるのを見て、何か面白い話が聞けるかな〜と思って何となく尾行して正解だったね。

それと、理子がブラドと取引ねえ。

別に私は束縛とか嫌いだから、理子に限らずソフィーお姉ちゃんのところの人達は好き勝手にやってるけどさ。

ちよーつと今回は理子の行動は見過ごせないかもね。

もしかしたら……ね。

ま、今の内にココ——もとい藍幫ランバンがカツエ先輩あたりに連絡をして仕入れて貰おう。

それに以織ちゃん的事もあるからね〜

いや〜、今回はイベントが目白押しだね。

実に楽しみだよ。

47：前途多難

ついに来てしまった6月13日。

何の日かって？

理子の言葉を借りるなら『大泥棒大作戦』の決行日だ。

フォーメーションとしては事前の打ち合わせ通りに俺とアリアが潜入で理子は連絡や物資の調達をする後方支援。

そして、俺にとっては霧がない久々の仕事になる。

ダメだな……隣にいる事が当たり前なせいとか、どうも違和感がある。

これまでも1人で任務タスクをやつて来た事や霧以外の連中と組むことはあつたが、大概
そう言う時は断りをいれてからやつてたしな

特に言う必要もないが……俺も霧も一緒に色々とするのが当たり前だからそうやつて
事前に断りをいれてからやるのが当然になつていた。

なので、今回は霧に何も言わず来たのは妙な違和感を抱えてる。

代わりに隣にいるのはアリアだ。

正直に言おう……不安だ。

アリアはどちらかと言うと戦鬪面でかなり頼りになる存在だ。逆に霧はジャンヌや理子みたいな頭脳派のタイプ。そして、2人の仲裁と言うか緩衝材が俺。

アリアと霧が一緒にいるのはある意味としてバランスが取れてるんだよな。

理子の話では荷が重いとゆう事で今回の潜入の件は伝えていないのだが、今更ながら人選ミスのような気がしてきた。

「遅い！ 作戦の立案者が遅れるなんてどう言う事よッ!!」

そして、俺の隣のアリアは携帯の時間を見て憤慨する。

朝早くも学園島にあるモノレールの駅前へ集合と言う事になった訳だが、約束の時間から10分を過ぎてる。

作戦会議の時と言い、遅れてくるのが当たり前なのか……

それと、日本人は謙虚であることが美德なのだがイギリス育ちのアリアに説いても無駄だろうな。

なんてたつて当たり前のように自分のトランクを俺に持たせてるんだから……

特訓で少しは慎ましくなってるかと思っただが、そんな事はなかった。

頼むからもうちよつとその胸ぐらい慎ましくいられないだろうか。

「ふんッ!!」

「——いてえッ!？」

いきなりアリアに右足の甲を思い切り踏まれた。
踏まれた足の甲をさすりながらアリアに訴える。

「いきなりなんだよ?!」

「あんだ、何か失礼なこと考えてたでしょ?」

「してねえよ」

してたけど。

「なんでそう思うんだよ?」

一応理由を聞いてみる。

「勘よ」

プイツと顔を逸らしてアリアは自信満々に答えた。

それだけかよ……

だが、当たってるあたり相変わらず良い直感してやがる。

「呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーン! おまたせー」

ようやく主役のご登場らしい。

まったく、普段から集合時間を守ってるのか心配したく——

「ふふ、どう? キーくん」

………

時間が、静止する。

思わずアリアのトランクから手を離し、ガランと音を立てて倒れる音が呆気に取られる俺の耳に響く。

兄さん、いや……カナ……

——待て、落ち着け。これは理子の変装だ。

身長も声も雰囲気も、何もかもが違う。

ただの似姿だ。

クソ、質たちの悪いイタズラをしやがって……！

「なんでその格好で来るんだよ!？」

「りこりんはブラドに顔を覚えられてるし？ 管理人とかも、もしかしたらブラドのお仲間さんで理子の事を話に聞いているかもしれないじゃん？ だから変装したの」

「お前、だからってなんでカナの顔で……!？」

「カナちゃんは理子の知る限りだと、2番目くらいには美人だからね。それに大切な人に応援された方が嬉しいかなって思ってた」

それはただ単に皮肉だろう。

生きてるかも知れないとは言え、兄さんを”やった”のは理子。

その本人が倒した相手の顔で来たって言うんだからな。
バカにしてるとしか思えない。

だが――、

「お前の茶番に付き合うつもりはない。早く行くぞ」

理子の事だ。そうやってまた色々と主導権を握ろうとしてるんだろう。

悪いが、素直に反応はしないぞ。

それに……ジャンヌからの話を聞いて、いつもみたいに理子を見ることが出来なくなつた。

なんだろうな、悲痛さが最近は見えるようになった感じだ。

俺は吐き捨てるように言いながらも、どこか見逃してやるみたいにトランクを持って背を向け先に行く。

「……え？ キンジ、ちよつと!? 待ちなさいよ!!」

アリアが俺を引き止める言葉を投げ掛けてくる。

だが俺はそれを無視する。

……悪いな。

こればかりは、カナ——兄さんについては話す訳にはいかないんだ。

いや、話さないんじゃないんで……上手く伝えられないんだ。

荒唐無稽な話で、色々と込み入った事情がある上にこれは俺の問題なんだ。

アリア、お前と同じだよ。お前がかなえさんの話を最初にしなかったようにな。

「キンジー！」

俺を呼ぶ声が虚しく響く。

◆

◆

◆

おつかしいなく、カナちゃん大好きなキーくんの事だからもうちよつと反応してくるかと思っただけ。

思ったよりも淡泊だったね。

おまけになーんか、あたしを哀れむ感じがする。

まあ、気のせいだと思っただけ。

ともかく今から2週間が勝負どころ。

その間に”全て”を終わらせる。

ブラドとの約束が果たせれば晴れてあたしは自由の身だ。お姉ちゃんの手間もなくなるし、堂々と隣にいられるんだ。

今まで影に守られてきた数年間が終わる。

きつとお姉ちゃん、あたしの異変に気付きながらも見逃してるんだろう。

だってそう言う人だし、敵でもない限りはあまり深く事情とか詮索しない。

じゃなかったら今頃、言葉巧みに色々吐かせられてる。考えてる内に見えてきた。

タクシーの窓から見えた一つの洋館が段々と近づいて来る。

そして——ようやく着いた。

『紅鳴館』……ヒルダが言った横浜郊外にある別荘。

ここにあたしの盗られた物がある。

今こそ、盗まれた物を取り戻す時だ。

「薄気味悪いところね……」

タクシーから降り、鬱蒼とした森と薄い雨霧の中に建っている洋館を見て開口一番にそう呟くオルメス。

薄気味悪いのは同意するけど、ルーマニアの本拠地の方がもっと趣味が悪いよ。

あそこに比べればまだまし。

タクシーが去って、いざ入ろうかという時に、

「さて、今更ながら取り戻して欲しい物を言いまーす♪」

あたしはそう言って2人の注目を集める。

「本当に今更だな……」

「りこりんだって余裕がない時はあるんだよ。説明だの準備だので忙しかったし」

キンジに対してあたしは少し答える。

これは一応、本音だ。

前もって計画してたとは言え、少し余裕がない。

例えば、この間現れたコーカサスハクギンオオカミ。

こんな島国な上に武偵高に現れたって事は少なくとも、自然に流れ着いた訳ではない
 筈だ。

ブラドの指示だと——あたしは睨んでる。

何が目的かは分からないが……もしかしたら、近日中に帰ってくる可能性もある。

それまでに母様の形見を取り戻してこいつらを倒さないと、面倒な事になる。

「取り戻して欲しいのは母の形見である十字架ロザリオね。間違っても、他の財宝なんか盗つちやダメだよ？」

「しねーよ」

キンジは面倒そうに頭を掻いて答える。

「財宝なんて興味ないわ、せ……説明は終わり？ 早いところ入ってしまいたいんだけど

……」

「むふふ♪ さては、ビビってる？」

「うるさいわねっ。早く行くわよー！」

あたしの言葉を振り払うかのようにオルメスは先へと進んでいく。

きつと幼少期は夜のトイレが怖くて誰かに付き添って貰ってたタイプだろうね。

まあ、そんな事はどうでもいいや。

早いとこ紹介してあたしもバックアップの準備をしなくちゃ。

石で舗装された、森の中の道を歩いて行く。

両開きの木造ドアの玄関へと辿り着き、付いているドアノッカーを4回鳴らす。

そしてガチャリとドアが開いたところで、あたしは頭を下げて、

「初めまして。本日、正午からの面会をご予定しておりました派遣会社の者です。こち

らでお手伝いをさせて頂くハウスキーパーを連れて参り——」

そう挨拶を言う。

その終わりに顔を上げた瞬間、言葉が詰まりそうになった。

「——ました……」

だけど何とか言い切った。

……………。

このパターンは読めなかった。

「おや……これはまた、意外な事になりましたね……あはは」

そう苦笑いしながら返すのは、小夜鳴さよなき徹ととおる。

救護科アシビュランスの非常勤講師。細身で長髪のイケメンメガネ。

この間、件の銀狼くたんに襲われたせいかわ腕にはギプスをはめてる。少し先行きが不安になる展開だな。

考えても仕方ない。

それにここまで来た以上は引き返せない。

館のホールへと入って、1人につき1つのソファアームに腰掛ける。

あたし達が座った後に小夜鳴が最後にソファアームへと座る。

「本当に意外ですね。誰でもいいとはいえ、まさか同じ武偵高の生徒さんがここに来られるとは思いませんでしたよ。何と申すか、先生なのに家庭訪問されたような心境です」

そして、はにかむ様に小夜鳴は笑顔を浮かべる。

話を途切れさせないようにあたしは話題を振る。

「まさか、学校の先生と生徒と言う関係だなんてわたくしも驚きです」

「ええ、こんな偶然もあるものですね……おっと、そうです。少し、お断りしておくことがありました」

「はい、なんででしょうか？」

「実はですね、ついこの間にハウスキーパーが1人入ってきたばかりなんですよ。私もこの通り、片腕が使えない状況ですので急遽雇ったところでした。ああ、もちろんお2人もちゃんと雇いますよ？ 何せこの屋敷は広いですからね、1人では手が足りなくて」

小夜鳴はギプスをしてる腕を見せながらスラスラと説明する。

だが、あたしは内心少し眉を寄せる。

またイレギュラーか……上手くないかな

ちよつとその人物を見て、色々と対策を立てないとマズイかな。

「あ、すみません。お客さんが来たと言うのにお茶を出すのを忘れていましたね。紹介ついでにそのハウスキーパーにお茶を淹れてもらいましょう」

あたしからその人について聞こうと思っただけ、小夜鳴から呼んでくれるみたいだね。

「シエースチさん」

………ん？ シエースチ？

それからコツコツと靴音を鳴らして、小夜鳴の後ろから現れたのは——
リリヤだった。

え……うええええええええええッ!?

アイエエエエ！ イモウト!? イモウトナンデ!?
ちよ、おまッ!?

いやいやいや、ネタに走ってるけどそれどころじゃないよ!!
素数数えてる余裕もないよ!

イレギュラーにもほどがあんだろ!?

「おや、どうかしましたか?」

どうかしましたじゃねえよ、キザもやしメガネ。

どうかしまくってるよ。

だけど、表には出さない。と言うか出してたまるか。

「い、いえ……何でもありませんよ。キレイなメイドさんだと思ひまして」

なんて言つて茶を濁すけど……ダメだ、上手く愛想良く笑えてる気がしない。

絶対に苦笑いだ。

思わず口を押さえて、ちよつと美しさに絶句してるように魅せる。

「そうですね。私もそう思います。あ、シエースチさんお客様に紅茶のご用意をお願いします」

小夜鳴がそうリリヤに指示を出すと、リリヤは少し会釈するだけで引き返して行つた。

「いや、すみませんね。どうやら愛想はあまりよくないみたいで、口数も少ないんですよ。気を悪くしないで下さい」

リリヤの態度に小夜鳴がフオローの言葉をいれる。

あの子、身内以外にはあんまり喋らないからそれも当然だ。

「なかなか取っ付きにくいでしょうが、仲良くして下さいね」

「あ、ああ……」

小夜鳴に言われてキンジは生返事をしてるけど、お前はやめろ。

どつかの漫画の主人公みたいにラツキースケベな体質なんだから。

お姉ちゃんだけじゃなくて妹にまで手を出されたら、あたしの何かがキレる……多分。

「ところでこのお屋敷は小夜鳴先生の物なんですか?」

「いいえ、違いますよ。私はここの研究施設をお借りすることがあるので……そうですね。居候いせうこうと言ったところです。ですが、そうやって研究施設を頻繁に借りてる内にこうして管理人のような形に収まってしまったと言う訳です」

オルメスに聞かれて、小夜鳴はそう説明する。

その間にリリヤが紅茶を人数分の運んできて、さりげなくテーブルへと並べて去っていく。

……逆に言えば研究以外で帰ってくる事はあまりないって事だね。

通りで不在が多いと思つたよ。

「では、家の本来の持ち主は別にいらつしやると言う事ですね？」

「ええ、そうです。ですが、ご主人様はなかなか帰つてこられませんので、お2人がいる間に会う事はないでしょう」

「こちらが聞くまでもなく小夜鳴はあたしの疑問に答えた上に残念そうに言う。

「そうですか。残念ですね」

「本当に残念です、せっかく話のタネが出来たと言うのに」

「……それでは、私はこれで失礼します。お2人をよろしくお願ひします」

あたしは紅茶を飲んでからそう言つて席を立つ。

「ええ、お気をつけて。シエースチさん、お見送りをお願いします」

「いえ大丈夫ですよ。お気遣いありがとうございます」

小夜鳴の言葉にあたしはそう断りを入れる。

あの子は人工天才だし、お姉ちゃんの変装を何度も見てる。

あの人の変装はそう簡単に見破られることはないだろうけど……私は違う。

一応、バレないと思うけど……あまり下手に見られるとどこか気付かれるかもしれない。

だから念の為に接触は控えるに限る。

あたしは素早く、だけど走らずに屋敷を離れる。

ある程度、『紅鳴館』から離れたところで段々と自然に駆け足になる。

マズイよ……とんでもなくマズイ。

素人ならまだしもよりによってリリヤ。

色々やりにくい。

………待てよ、お姉ちゃんはこの事を知ってるんじゃない。

と言うか、何か仕事云々うんぬんを言ってたような気がする。

あたしは適当な物陰で変装を解いて、近場の予約してたホテルへと直行する。

到着した頃には日は落ちてきている。

ロビーで鍵を貰って、部屋へと辿り着き、入った後にやる事は決まってる。

素早く”あの人”に連絡を入れる。

『ただ今電話に出られません。ピーとなったら伝言を——』

「お姉ちゃん、そう言うおふぎけは今はいいから」

『はいはい、今日はちよつと不機嫌そうだね。なにかあった?』

「何かあったじゃないよ!?! どうしてリリヤがこつちに来てるの?!」

『知ってるって事は……紅鳴館に行ったんだね』

……

……あ。

墓穴、掘った……

携帯を持ったまま思わず膝を突いて項垂れる。

リアルにorzをやるとは思わなかった。

『さうして、何しに紅鳴館へ行ったのか……私は優しいから聞かないであげるよ』

うぐぐぐぐ……

自分で墓穴を掘ったとは言え、罪悪感が募るー！

頭を抱えて床を転げ回り悶絶する。

『紅鳴館で何するかは分からないけど、1人でやる訳じゃないんでしょ？ どうせキン

ジ達が十中八九、協力してるだろうからね』

はい、その通りです。

バレないように裏でやってるつもりでも、お姉ちゃんの耳が良すぎるせいでなんの意
味もない。

しかも、あたしはあたしで余計な情報を喋っちゃうしさ。

せつかく詮索しないでくれて意味ないじゃんっ！

うう……理子ってこんなにマヌケだったかな？ 少し悲しくなってくる。

『こつちで内密にリリヤに連絡しておくよ。キンジ達の邪魔をしないようにね。コソコソしてるとて事は、ブラドに知られたら困るんだらうし』

もうこれ、完全にフォローされてる。

まさかこんな事になるとは……思わなかった。

作戦が本格的に始まる前に色々とボロボロなんだけど。

『全部終わったら、聞かせてくれるよね？』

あ……これ詰んだクサイ。

だってもう、

「……うん」

こう答えるしかない。

選択肢が『イエスorはい』だよ。

『楽しみにしてるね……クスクス』

カラカラと言った感じの笑い声。

お姉ちゃんのイタズラっぽい笑顔が目には浮かぶ。

『それじゃ、私は理子が帰ってくるのを信じて待つてるからね』

そう言って切れた。

……。

.....

ズルいよ。

最後にそう言うの……

◆ やれやれ、世話の焼ける妹だこと。

◆ ま、手間が掛かる方が面白いからいいんだけどね。

◆ キンジと言いだす理子と言いだす、割と世話好きなのかもね……私。

◆ 理子が動いた事だし、こっちも本格的に始めようか。

◆ と言つても、色々と変な予感がするから理子が終わるより先に私の仕事を終わらせる

としよう。

◆ 日が落ちてきて、街灯が灯り始める。

◆ 私の待ち人は寮ではなく、父と2人でアパート暮らしだったので先回りしている。

◆ 帰りにこの道を通る事も把握済み。

◆ ふむ、時間も大体バツチリ。

◆ 岡田 以織が私へと向かってくる。

◆ 『It's show time』ってね。

今日も何もない日の帰り道。

私の日々は父が死んでから、どこか色褪せたようだ。

孤独と言うのは斯くも寂しいものだ……1ヶ月経った今頃、その事を実感した。

喪失感があるのに、まだ失ったことが分からないような気味の悪い感覚。

父を失ったと言う理解も実感もあるのに、どこか拒んでいる。

ふとした時に考えるのは何故、私の父は死んだのかと言う事ばかり。

武偵は常在戦場。常に死と隣り合わせ。

そんな事は分かっている。

だが、父の死んだ理由を詳しく聞かされない事が……理解に苦しむ。

公安0課だからと言う事だけではない筈だ。

真実が分からない。

だから、私はこんなにも——苦しいんだ。

「やあ、お嬢さん」

突然に掛けられる声。

不意に俯きがちだった顔を上げれば薄暗い街灯の下に1人のスーツを着た青年男性がいた。

特に前を意識はしていなかったせいかな、まるで突然現れたようだ。

雰囲気が一般人とは違う。歴戦の、父のような張り詰めた猛者もてさの空気だ。
ナンパ、ではないだろう。

おそらく……

「何でしょう？」

答えながらも少し警戒する。

「岡田 以織、で間違いないか？」

「そうですが、貴方は？」

「君の個人的なファンさ」

ナンパじゃなく、ストーカーだったようだ。

相手をしないに限る。

「失礼します」

そう言つて足早に彼の隣を通り過ぎる。

「あー、ちよつと待った。冗談だ……君の父親について知つてる者だよ」

私の足を止めるには充分な一言だった。

思わず振り返る。

「どう言う事ですか？」

「食いついたな。君の父親、その死について私は知っている。それを君に教えたくて私

はここに来た」

彼は少し笑顔で、胡散臭い感じに語り始める。

よく見れば彼の胸には父と同じ、公安0課の紋章があった。

「それは公安0課の……」

「なんだ、気付いてなかったのか。そう、君の父と同じ職場だよ」

その紋章を見せるように手で示し、彼は言った。

「君の父親の死から一ヶ月。君自身、色々とあっただろう。だけど、聞く所によると……君は父親の死について事故死としか聞かされていないと知ってね。さすがに不審に思ったんだ」

「……………」

「それで、私は個人的に調べて真実へと辿り着いた。だけど、直接的な関係者である君に知らせないのは忍びなくてね」

彼はそこで胡散臭い笑みを浮かべるのをやめて、真剣な顔で聞いてきた。

——真実を知りたくないか？

真実……父が、死んでしまった理由。

それをこの男が知っている。

まさに渡りに船のような話だ。

知ることが出来る……ようやく本当の事を。

佐々木、すまない。

私にはこの話を断る理由がない。

「お願い、する」

私の答えに彼は満足そうな笑みを浮かべる。

「そうか。なら、3日後に全てを話そう。君に全てを話すには色々足りないんだ」

彼は私へと近付き、1つの紙を渡してくる。

「これが連絡先だ。だけどこちらから追って連絡するよ」

電話番号を示す数字が書かれていた。

そう言つて彼は、背を向けて歩き出す。

突然に巡つて来た機会。

理解が追いつかないが、それでも父についてようやく分かるんだ。

それだけで充分だ。

私は、疑問を持つことはなかった……何一つ。

48：誰が為 尽くす心は水の泡

喜劇と悲劇はいつでもどこでも起こる。

些細な出来事で何かが変わったりもする。

悲劇が起きる時は何かの手違いだったりする事もあるけど……それでも、人の運命を
変えるのは人が原因。

それはいつの時代も同じ。

今日は1人の人物が運命の岐路きろへと立つ。

彼女はどっちを選んだらうね

実に楽しみだよ。

◆ ◆ ◆

公安0課の者が私に真実を教えると言ってきた3日後。

胡散臭い青年は私に連絡を寄越してきた。

なぜ私の番号を知っているのか少し気掛かりだったが、その事について尋ねると父を
通して私を知ったと彼は教えてくれた。

父と同じ職場にいたのだ。やり手なのは違いないだろう。

私の事を調べるなど造作もない事だと思い、特に疑問に思うことはなかった。場所は東京湾にある廃工場。

いかにも長年に渡って放置されている事を窺^{うかが}わせるほどに廃れている。私の心を映し出すかのように、虚しい空間だ。

上を見上げればトタンと鉄骨に支えられた天井。

周りには古びた機材に無造作に地面に積み上げられた鉄パイプ。

建設系の工場だったのだろう。

日は暮れて、夕焼けが錆びれた壁の穴から僅^{わず}かに差し込む。

「よくぞ、よくぞ来てくれました」

声を掛けながら近づいて来る足音。

この声は、私に真実を教えくれると言った青年のものだ。

振り返り姿を改めてみるが……どこか得体の知れない雰囲気とする。

「さて、ここに来たという事は真実を知りたいと言うことだ。そして特別に君にはチャンス、そう別のチャンスをあげよう」

チャンス……どう言う意味だ？

どこか鋭い口調で彼は、そう言う。

「ちなみにそれは後のお楽しみと言う事で」

一転して朗らかに微笑む。

表情がいちいち変わる人だ。

彼はようやく、私の知りたいたい事を話し始める。

「早速だが回りくどいのは無しで本題、本題に入ろう。君もきつと早く知りたいたいだろうからな」

それから彼はうろろと歩きながら、淡々と説明して行く。

「本題に入ると言っても順を追って説明しよう。いきなり答えを言われても実感がないという意味がない。まず、色金と言う物が君と父を結びつけるキーワードだ」

「イロカネ……?」

「そう色金だ。これは特別な金属で、レアメタルみたいな物だと思っ**て**いい。しかし、しかし……ただの**稀**少な金属ではない。超能力スの力が宿った金属だ」

超能力……それは、異形の力。

私の学校でもその力を研究している学科がある。

だがそんな金属と父に何の関係があるのだろうか……

「色金と言う金属に関しての情報は国家機密でね。核に代わるパワーを秘めていると言う事でこの国家も血眼になって探し、研究している……そんな代物だ」

「私にそんな重要な事を教えて良いのですか？」

国家機密だぞ。

父の事が知りたいとは言え、そんな情報をここで知る必要があるのだろうか……

何やらとんでもない方向に話が進みそうな予感だ。

話の行く先が不安になる。

「いやいやいや、君には知る権利がある。そしてその色金が、君の父が死ぬ事になった原因だ」

——ッ!?

「どう言う……事ですか？」

「まあ、落ち着いてくれ。ゲストが来たようだ」

彼の言葉と同時に扉のない出入口から、同じスーツを着た30前後の青年が現れる。

そのまま彼はその青年へと近付き、何かを喋っている。

それから入れ替わるように青年が私へと近付き、

「岡田 以臣さねおみの娘か……？」

威圧的な雰囲気ですべて尋ねてきた。

思わず腰に差している刀に手を掛けたくなる衝動に駆られる。

私に話を持ち掛けて来た彼と同じ公安0課……当然に纏う雰囲気が違う。

何もしないだろうと分かっているも油断すれば何かを持って行かれそうだと「そうです。父について、何かご存知ですか？」

意識を保って、問いかけた言葉。

「父親を追い掛けて、こんな所まで来たか。予想外だ」

何とも要領を得ない返答。

何が予想外だと言うのだ……

そう思った刹那――

発砲音。

気付けば、私の目の前に『彼』がいた。

話を持ち掛けて来た彼の拳が、額の前に何故かある。

「これは驚いた。まさか、彼女の父だけじゃなく娘まで消そうとはね」

彼はそう言つて拳を開くと、銃弾が1つ零れ落ちる。

……待て、一体何が起こっている。

目の前にいる彼はあの青年の後ろにいたはずだ。

それが瞬きをする間に目の前にいて、しかも発砲音が聞こえた。

理解が追いつかない。

「どう言つつもりだ？ いや、質問が違うな……お前は誰だ？」

「君と同じ職場の同僚だが？」

「いいや、違うな。確かに俺の知ってる顔だが、そいつはそこまで人間やめてなかった」
「ふむ、腐つてもエリート。この程度では動揺もなし、か……実に、実に面白くない」

青年の質問に彼は答えながら、私の理解が及ばない会話をする。

やれやれとばかりに首を振った彼が、またしても私の目の前から消えて――

「――な、に……!?!」

声を上げて、突然に前のめりに倒れた青年の背後に私の方を向いて現れた。

よく見れば青年の膝裏とアキレス腱あたりが斬られて、血が滴っている。

それも防弾・防刃服であろう上からだ。

「誠に、誠に残念だが少々相手をする暇がないのでね」

片手でナイフを弄びながら、彼がそう言う。

「な、何をしているんだっ!?!」

思わずハツとなつて私は叫んだ。

こんな事はおかしい! なぜ同じ公安0課同士が……!?!

「はてさて、君がこの状況を怪しむのも理解するがまずは私の話を聞いてくれ」

しかし、彼は何でもないとばかりに話の続きをし出した。

それから呻く青年の背中の上へと腰掛ける。

「私の尻の下にいる人物。彼は君の父の元同僚だ。そして——」

——君の父を殺した張本人だ。

全てが、たった一言で暗転する。

声が、出ない。

地面が傾いているような感覚。

足が、フラつき……立っていられない。足が崩れ落ちる。

私は何を言われたんだ……？ いや、彼は今何を言ったんだ？

「少しばかりシヨックが大き過ぎたか……まさか、まさか自分の父が同僚に殺されたとは予想外だっただろう。いや、そもそも知る由もなかつたんだ無理もない」

気の毒そうに言う彼の言葉が、私の心を抉る。

父が死んだのは、事故死。それだけだった。それしか知らなかつた。

だが、真実は……そもそも死因から違つた。事故死ではなく、他殺——それも父の同僚に……

——なぜ？

「それでは全てが揃つたことだ。君の知りがつていた真実について話そう」

私の胸の内に生まれた疑問を汲み取つたように、彼は話し出す。

「つい先程に色金について話しただろう？ 色金はどこ国家も血眼になって求めている

とも話した。それはこの国でも例外ではない。そして、裏社会でも色金の存在は認知されている。そんな国さえも求める金属だ。買い手が多いと思わないか？　そして公安0課も武装検事もこの国では公務員扱い、おまけに不景気なんだから割と薄給なんだろう。金に困る訳だ。

君の父はふとした事で色金の存在を知ってしまった。幾人かの同僚に話してしまう。そんな矢先に……とある裏社会組織の捜査で微量ながら色金を見つけってしまった訳だ。もちろん、色金の事を知った私の下にいる彼と他のお仲間も一緒に捜査にいた。君の父は色金を捨てるか、国に渡すと言う判断をしたんだろう。金に困っている彼らにとつては君の父が色金を持つことは宝の持ち腐れと映った。結果……君の父は殺され事故死と片付けられた」

……これが、真実だと言うのか……

そんな事で、私の父は死んだ。

嘘だ……こんなにも残酷で、つまらない事が真実である筈がない。

——あつていい訳がない。

「しよう、……証拠はないだろう」

苦悶の表情を浮かべながらも青年は口を開いた。

「証拠ねえ？　私がさつき彼女が以^{さわみ}臣さんについて勘付いてると言う事を話したら、貴

方は消そうとした。それが証拠だと思いますが、納得して頂けないのなら取って置き、取って置きの証拠を見せましょう」

そう言つて彼は一つのボイスレコーダーを取り出し再生し始める。

『さねおみ以臣さんの事について、その娘に話さなくていいんですかね?』

最初に喋つたのは、彼だ。

『喋つてどうする?』

続いて私の父を殺した青年。

『罪悪感、ありません?』

『この業界にいるとそんなものはとつくに置いてきた。だが一つ言わせて貰うと——殺

せて清々せいせいしたよ』

ほんの少しの会話。

それだけで、何も疑いようがなかった。

再生が止まり、私の息も止まりそうになる。

「虎穴に入らずんば虎子を得ずとはよく言つたものだ。おかげさまで虎子以上のものが手に入った訳だが。おっと動かないでくれ」

「ぐう……きさ、ま……」

彼が2本のナイフを青年の両手に突き刺す。地面に縫い付けるように。

それから、私の所へとゆっくり近付いて来る。

私は――

「ハッ……ハッ……」

動悸が、止まらない。

どうして……？ 私は真実を知りたかっただけなのに、どうしてこうなってしまったんだ……

視界が揺れる中で彼が目の前に映り、告げる。

「ここで君に特別なチャンスをおあげよう――『復讐』の、チャンスだ」

……ドクン！

胸が高鳴り、早まっていた動悸が不思議なくらいに突然に治まる。

――復讐。

驚く程すんなりと脳内をその単語が支配した。

「君の父の命はお金に変えられてしまった。それを許容し、見逃すと言うのならそれもいいだろう」

許容……？

何を許容すると言うのだ。

何も受け入れる必要なんてない。

「そう、何も許容する必要なんてない。立ち上がるんだ」

ユラリと、彼の言葉に引つ張られるように立つ。

彼は横へと移動し、私の視界からは外れる。

目の前に映るのは復讐の対象。

「前へと進み」

—— 歩ける。

「復讐の刃を抜き」

—— 出来る。

「殺^やるんだ」

—— 殺れる。

◆ ◆ ◆
私の言葉が糸になり、彼女はその糸に従って進む。

一応、見逃すと言う道も以織に提示したが……選択肢から除外したようだ。

これも因果応報と言うヤツだね。

色々とすんなりで行って良かったよ。

何事もそうだ。何かに成る事は簡単。だけど、そのままあり続けることは難しい。

例えば、今日の前に無様に倒れてる公安0課の人に関してもそうだ。

彼はエリートではあった。だけど、エリートであり続けられなかった。

キンジの兄である金一もそうだ。大層な志を持っていた。だが、彼は持ち続けられなかった。

まあ、金一の場合は私が折つただけだね。

倒れてる青年は違う。これも保身に走つた結果だよ。

ちなみにこの間脅した中年の公安0課の人は、彼と以織のお父さんの上司。

つまりはグルだった訳だ……

彼女が道を踏み外したのは、君らがつまらない考えを持って実行してしまった。

ただそれだけだよ。

いや、道を踏み外したんじゃない。残酷な世界との決別だね。

私としては大助かりだよ。

君等みたいな人間がいるから、簡単に勧誘できる。

今まさに彼女は復讐の刃を墮ろおそうとしている。

右手で刀を持ち、左肩まで振り上げ、

——やるんだ。

上から下へと鉄色の弧を描き、振り抜く。

「がつ……ふ……」

だけど、後ろ首から斬っても首の骨でそうキレイには斬れないだろうね。中途半端に虫の息だ。

彼女が両手で刀を持つと、今度は真っ直ぐに首の真上から刃を落とした。肉と骨を抉る音が私の耳には聞こえる。

躊躇いなんて何もない。

初めてにしては上出来だね。

――

既に事切れた青年。

血が広がり、彼女の足元を穢す。

首から刀を抜き、私の方へと振り向く。

その双眸はまさしく人殺しの目。

思わず拍手をして、おめでとうと賞賛を送りたくなる。

だけど次の瞬間、彼女は脱力したように膝から崩れ落ち、前のめりに倒れる。

「おっと」

すかさず抱き留める。

どうやら、意識が保てなかったらしく気絶している。

精神的なショックが大きすぎたんだから、無理もない話。

だけど、ここまでは余興。
私にとって本番はこれから。
ああ——楽しみだね。

49：決別

ここはどこだ……？

何もない無の空間。

存在するのは私1人。

周りを見回しても、ただ白い空間が広がるのみ。

私は立っている筈はずなのに地に足がついていないような感覚。

これは夢……なのだろう。

だが夢なのに自分の意思で動けるあたり、妙な現実感がある。

1人……いや、独りか。

この状況。まるで私の心境を表しているようだ。

と、自嘲じみた言葉が思い浮かぶ。

父も母もない。親戚に関しては父は両親から勘当かんとうされ、絶縁状態。

母がない理由は、父と色々あって揉めたらしい。

何でも私に剣を教える事を母は反対していたようだった。

折り合いがつけられず、そのまま母は去った。当然、母方の親戚と交流がある訳もない。

何故、母が私に剣を教える事に反対していたのかは知らないし分からない。

だが今となっては、剣が私の縁よすが。唯一の拠り所だ。

そして、剣があるおかげで……私は武偵として生きていけている。

『だがそれも終わりだ』

誰だ……?!

そう心の中で叫びながら、どこからともなく聞こえた声の主を辺りを見回して探す。

そうして見つけたのは一人の人影。

あれは……

——私？

両眼が少し掛かるように横に揃えられた前髪。そして、一部だけ結わえてポニーテールにした後ろ髪。

腰に差さる黒い鞘の日本刀。

少し長めの顔に、伏し目がちの眼。

どう見ても私だ。

『自分の夢だ。自分が出てきてもおかしくはない』

確かにそうだが、なぜこんな鏡のような夢なんだ。

そして夢とは言え、私ともう一人いる。

鏡に映っている自分が喋っているようで、変な感覚だ。

そして、終わりとはどう言う事だ……？

『自分のした事だ。覚えているだろう』

もう一人の私がそう言った瞬間、私の後ろで何かを斬る音がする。

勢いよく振り向けば私が、うつ伏せに倒れる誰かの後ろ首を斬っている。

白の空間の一部に赤の斑点が彩る。

その光景を見て、私の何かが引いていく。

——そうだ、私は………！

何をやったのか思い出す前に、もう一人の私が両手で刀を持ち、首に刃を突き立てようとしている。

——待て、よせ………！！

手を伸ばして走ろうとするが、その瞬間に肉を断つ音がする。

青年の指先がピクリと痙攣し………すぐに動かなくなつた。

赤が広がって、小さな水たまりができる。

バクバクバクと、大袈裟に自分の耳に聞こえる心音。

激しい動揺。

それからもう一人の私がゆっくりと振り向く。

瞳が揺れ動く。

——見てはいけない。

直感で感じながらも目を逸らせない。何かに縛られているように釘付けになる。

見えてきた私の顔は、

微笑していた。

戦慄。
せんりつ

待て、私は何で晒わらっている。

その冷たい瞳は何だ。

これが、私……？

こんなおぞましいモノが、私？

『復讐が出来たんだ。気が晴れて当然、笑みの一つも浮かぶ』

喋りながら血を滴らせた刀を持って私に近づく私のような何か。

——止せ、近づくな！

思わず拒む言葉を放つ。

『私は私なんだ。どうあつても逃げられない。復讐が出来たのに、どうして否定するん

だ？』

——望まなかった復讐だ！ ただ、私は真実を知りたかつただけだ！

『その真実を拒絶しながらも手に掛けたのに、自分のやつた事さえも否定し拒絶するか？』

——それは……

『どちらにせよ一線は越えてしまった。後戻りはできない。そもそも仇かたきを生かしておく必要もなかったんだ』

——だが、私は武偵で……剣は守るためにあつた筈だ。

『何を勘違いしてる。父は最初に教えてくれただろう』

——父が、何を……？

思わず伏せていた顔を上げた瞬間、目の前にいたもう一人の私が消えた。

それからグシュ、と鈍い音がして……私の胸から刀が伸びる。

——ぐ……あつ……あ、あッ!?

激しい痛みと目の前の光景の異様さに言葉にならない声を上げる。

胸の内が熱く、血が垂れていく。

いつの間にか背後に、私のような何かがいた。

それから耳元で何かを囁く。

『忘れたのか？ 父から私が教わったのは、活人剣じゃない——殺人剣だ』
挟られる胸の内。

最後にそいつは言った。

『さようなら、私』

「——ッ!? はッ……はあッ！ あ……ハア、ハア……」

覚醒する意識。

息が、荒い。

ベッドの上で静かに息を整えながらも、周りを見回す。

ここは……アパートにある私の部屋？

周りの家具を見ても、私の部屋だと分かる。

やはり、夢。

だが、目覚めの悪すぎる夢だった。

……夢……だったのか？

どこからが夢でどこからが現実だったのかが分からない。

それぐらいに現実味があった。

胸を貫かれた違和感も覚えている。

窓を見れば外は暗く、夜の街の光が差し込む。

寝汗も酷い。

何にしても、一ひと先まずは起きよう。

ベッドから降りて、リビングへと向かおうとして違和感。

扉から漏れ出る光。

電気が点いている。

……誰かいるのか？

ベッドの傍に立ってかけてあった刀を手に取り、扉を半開きにして隙間から中の様子を伺いながら静かに扉を開く。

リビングへと足を踏み入れるが、誰もいない。

思い違い……

そう思った時、視界の左端に誰かいるのに気付く。

どうやら扉の影になって気付かなかったようだ。

「——誰だ」

私は素早く、ソファアームに座っている人物の背後へと回り込みながら問い掛けた。

「数時間前にも会ったと言うのに、もうお忘れとは」

この声、公安0課のあの人が。

彼はそう言つて私の方へと振り向く。

「不法侵入ですよ、どう言うつもりですか？」

抜刀の構えで私は間合いを取る。

どうして私の家に侵入してきてるんだ。

「気絶した君をわざわざ運んだというのに実に心外、心外な話だな」

「何の話をしてるんですか？ 私は気絶なんてしてません」

私が答えると、彼は少しキョトンとした顔をする。

「ふむ、ショックが大きすぎた上に気絶したせいか記憶が飛んでいるのか？ ま、大いに

ありえる話だが……君は何も覚えていないと？」

「覚えていません。私は学校から帰り、それから——」

それから……？

おかしい、どうしてか学校を出てからの記憶が曖昧だ。

何も覚えていない。

いや、思い出そうと思つてもモヤが掛かったようだ。

それに思い出してはいけなような……思い出そうとすると何故か、頭が痛む。

「やれやれ、せつかくの事を忘れるとね。少し手伝いをしよう」

そう言つて彼は、

「廃工場」

単語を、

「色金」

1つ、

「父の死」

1つ、

「真実」

抜き出す。

「――復讐」

最後の言葉にドクン、と心臓が跳ね上がる。

頭が……痛いつ。

彼の言葉がカギだったかのように、私は何かを思い出そうとしている。

だけど、まるで頭をこじ開けられたようだつ。

頭が、とてつもなく……痛む……ッ。

今まで生きてきて体験した事のない痛み。

思わず片手で頭を抑え込む。

痛みと同時に、記憶がだんだんと明瞭になってくる。

そうだ……私は、父の真実を知りたくて彼が待っている廃工場に行った。
そこで私は……

私は……？

——自分のした事だ。覚えているだろう。

夢の中での私の言葉が映像と共に呼び起こされる。

「ハッ……ハッ……ハッ」

いつの間にか息が荒くなる。

私の何かが思い出すなど告げる。

「そう恐れることはない。君にとつて復讐は当然の権利だ。——した事を否定する必要もない」

彼の言葉が私の記憶を浮き彫りにする。

だが、彼の言葉の一部に雑音が入る。

拒絶している。

私がした何かを思い出す事を拒もうとしている。

「言葉だけで足りないのなら……」

そう言つて彼の手が私の刀へと伸びる。

——抜かせてはいけない。

「触れないで下さい！」

手を払い、叫んで、すぐに距離を取る。

彼は弾かれた手をさすりながらもどこか呆れた顔だ。

「何を拒む必要がある」

「抜かせてはいけない思った、それだけだ」

「随分と強気なのにどこか弱々しい口調だ。だが、抜かせるのは容易、容易なこと」

そう言つて彼は、1つナイフを抜き出す。

そして、床を滑るように差し迫つた来た。

(速いッ!?)

斜め上から迫る刃。

殺気に乗せたそれに、体が条件反射する。

金属音が響くと同時に彼に笑みが浮かぶ。

すぐに彼は後退し、私は切つ先を彼に向けた所で見てしまった。

刃の先に塗られた血糊。

それを見た瞬間、

「あ、あッ……あ……!?!」

全て、全てを思い出した。

私は——私は……!!

——人を殺めたんだ。

自覚した途端に震え始める手。

罪悪感が雪崩込んでくる。

私は覚えている。

肉を裂く感触も、骨を抉る感触も全て——

◆ ◆ ◆

「そんな、ウソだ……私が……」

以織は揺れ動く瞳でそう言いながら、冷や汗が溢れ出ている。

ガランと刀を取り落としてすぐに両膝を突き、自分の体を抱き留める。

これ以上までに無い程に動揺してる。

完全にフラッシュバックだね

「何も苛む必要はない。君は自分の意思に従っただけだ」

そう言葉を私は掛けるけど、

「ふっ……ふっ……ふっ……」

漏れ出る息と、冷や汗の垂れる音しか返ってこない。

完全な興奮状態。

右に左にと揺れる振り子みたいな感じで感情が揺れてる。

揺れてる同時に色々入り混じってるだろうね。

葛藤だとか、罪悪感だとか。

その感情の波紋を止めながら心に入り込み、あとは私の言葉を刻めばいい。

うん、それで行こう。

私は以織に静かに近付き、片膝を突いた後に彼女を素早く胸の内に抱き締める。

「落ち着いて、落ち着いて……私の言葉を聞きなさい」

耳元で鎮めるように囁く。

声のトーンも優しげに、彼女を労わるように。

どんな声調が落ち着くのかも私には分かつてる。

変装してる今の人物の声は変えずに、ただ音の高低や息遣いで調整する。

「何も心配はいらない。ただ単に君は人の誰もが持ちえる感情を表に出したただけだ、否定する事はない」

「……私は——」

「君の父を殺した相手なんだ。殺してもいい道理はなくても殺さなくていい理由にはならないだろう？ それとも、君の父の命を吸って得た金で彼が生きていたら君はそれを許せるか？」

「……………」

「許せないだろう？ 世の中にはそう言う連中が多くいる。そして、君が復讐を成し遂げた事はとても幸運なんだ」

彼女の息遣いが正常に戻る。

徐々に早くも落ち着きを取り戻しつつあるらしい。

「君は何も負い目を感じなくていいんだ」

「……………私は、どうすれば……………」

「そう今すぐに決めなくてもいい。だが、もし君が良ければ——」

——私と一緒に来ないか？

その言葉に、彼女は息を呑む。

これでもう十分だね。

あとは、少し時間を掛ければいいだけ。

「今日は色々あったんだ。気持ちの整理も必要だろう。返答は今すぐじゃなくてもいい、1週間後に東京武偵高にある女子寮前の温室で待っている」

最後に私はそう言って彼女から離れる。

そして、そのまま玄関へと向かう。

「……………待って下さい」

呼び止める声。

足を止めて、未だに両膝をついている彼女の背中へと目を向ける。

「どうかしたか？」

私が声を掛けると、彼女はこちらを静かに顔だけを向けて、

「名前を、聞いてません」

そう言えばそうだった。

今更ながら一度も名乗ったりしてなかったね。

だけど――、

「秘密さ」

このままにしておく方が面白い。

私は笑って、そう言う。

でも学校で会う姿の事を考えれば少しだけ教えてあげないと。

「だが、そうだな……。教えられる事があるとすれば……。白野 霧として君に会うだろう」

「……え？」

「それでは一週間後に君と出会った時間に。また、また会おう」

私はそれだけ告げて、呆気にと取られてる彼女の前から去る。

我ながらキザな去り方かな？

でも、これぐらいミステリアスな方が彼女も気になるだろう。きっと私を追い求めて来る。

きつとね。

◆

◆

◆

あの日の出来事から、しばらく時間が経った。

その間……学校には行けなかった。

自分のやった事を知られるのが怖くて、友人に合わせる顔もない。

私を探してるんじゃないかとも思った。

けれども公安0課が死んだと言うのに、何も報道などはない。

武偵高からの連絡もなしだ。

普通ならすぐに露見されて、今頃は捕まっている筈なのだ。

なのに何の変化もない。

本当に、自分のやってしまった事が夢だったかのようだ。

しかし、夢じゃない。

私の手が覚えている。

今でも夢に出るが……それでもうなされる程ではない。

彼の言葉のおかげ、なのだろうか？

たった少しの言葉で、私の心に大きな動揺はなくなった。

何故だろうか、会ってそんなに日も経っていない上に言葉もそんなに交わした訳でもないのに。

彼の言葉でこんなにも心が安らぐのは……

だが、私は肝心の『彼』について何も知らない。

突然に私に話を持ち掛けて、真実を覚えてくれた彼について何も。

それに去り際の言葉も気に掛かる。

——白野 霧として君に会うだろう。

まるで意味が分からない。

白野 霧……以前に任務で志乃と一緒に同行していた人で、強襲科で少し注目されてるそれなりに有名な人物だ。

そんな彼女と『彼』に一体、どんな関係があると言うのだろうか？

……分からない。

胸の内に石のように重いモノが残る。

父が死んだ時と同じようなもどかしさ。

だけど、今度は父の時と違い知る術がある。

彼は言った『私と初めて出会った時間に、温室で待っている』と。

そして、今日はその”約束の日”だ。

放課後の帰り道に彼と出会った夕方の時間。

私は一応武偵高の制服姿で温室へと足を踏み入れ、そのまま奥へと進んで行く。

「よく来てくれたね」

響くのは『彼』の声。

周りを探すが、声はしても姿が見えない。

「そのまま奥に来るといい」

声に導かれるまま、私は歩みを進める。

そうして辿り着いた先に。

『彼』はいた。

私に対して背を向けている。

声を掛けようと思った瞬間、彼は服を掴み……投げながら私の方へと振り向く。

「また会ったね」

彼の声が変わって、スーツ姿の彼ではなく制服を着た彼女——白野 霧が私に笑顔を見せていた。

「一体、どう言う事……」

思わず声を漏らす。

理解が、追いつかない。

彼が彼女になつて、彼女は私に……なんて言えば良いのか分からない。

が、まるでつい最近会つたような言い方をする。

「言つたでしよ？ 白野 霧として君に会うつて」

それは彼が私に去り際に言つた事。

私と『彼』しか知りえない事だ。

つまり——

「貴女が『彼』、だつたんですか……？」

「そう言う事だよ」

と、彼女は言うが私は混乱している。

まるで別人。

私には変身したとしか思えない。

言葉に出してみたもののさっきの『彼』が彼女だとは俄かには信じられずにいる。

「まあ、混乱しても仕方ないよね」

そう言つて彼女は苦笑しながら近付き。

私の両肩を持って、両膝を突かせる。

何故か分からないが、すんなりとそうさせられた。それから胸の内に抱きしめられる。

「あの時と同じ、でしょ?」

そうだ。

この状況。

『彼』に抱き締められた時と同じ。

それから、その時と同じように嘔き始める。

「何の負い目を感じなくてもいい、何も苛む必要はない」
言葉と共に安らぐこの感覚。

確かに『彼』と同じ……

見た目は違っても、この安らぎに間違いはない。

「中身は一緒だよ、安心して」

そう言つて彼女は離れて行く。

私は少し呆然とする。

よく分からないが心地よくて、余韻よゐんが残る。

「さて、あの時の話の続きだけど……答えは決まった?」

—— 答え。

そうだ、返事をしないと。

「私、は……」

だけど、私は答えを未だに用意していなかった。声を出そうとしても、言葉が出てこない。

——私と一緒に来ないか？

目の前の彼女彼女は私にそう提案してきた。

だけど、このまま私は付いて行っていいのか？

そんな疑問が生まれる。

「あの時には言わなかったけど、君には色々と選択肢がある」

私の迷いを察したかのように、彼女は話し掛けてくる。

「1つ、あの時の事を全て正直に話して自首する。2つ、何も話さず私の事も忘れていつも通りの日常に戻る。3つ、私と一緒にいる事を選ぶ。復讐をしたけど君には、まだ引き返せる道がある」

引き返せる道。

あの時の事に、罪悪感を全く感じなくなった訳じゃない。

彼女彼女の言葉に確かに救われた部分はあるが、それでも未練がある。なのに、思い返してみても不思議と後悔はしてない。

軽く矛盾しているような気もする。

でも……見逃していた方が後悔していたんじゃないかと思う。

夢の中で私は望まない復讐だと言ったが、それは間違いだった。

けれども今なら潔くその罪を認めて、人として引き返せるだろう。

そして2つ目のいつも通りの日常。

このまま話さずにいる事も、私には出来るのだろうか……？

いや、そもそも日常に戻ったところで私は——

「最初の2つの選択は君を孤独にする。孤独はきつと、辛いと思うよ？」

そう、孤独だ。

私が時に追い掛け、時に隣に立ってくれた父はもういない。

独りはもう嫌だ。

「孤独が辛いなら、私は君の隣に立ってあげるよ。見返りなんて何もいらぬい」

——私と家族になろう。

手を差し伸べて告げた、たった一言。

それだけで私は彼女に救われた。

返事は決まっていた。

「はい……はいっ！ 私を、連れて行って下さい！ 一緒にいて下さい！」

自分でも驚くくらいに素直に、懇願するように言っていた。

彼女がが何者なんかどうでもいい。

ただ、誰かと一緒にいたい。

この心地よさを手放したくはない。

私が望んでいたのはそれだけだったんだ。

孤独な日々は終わりを告げた。

さようなら、孤独な私。

50：巡る予感

私の目的は達成された。

今にしても思えば、お姉ちゃんがあのだいミンギでルミちゃんを通して私に連絡をしたのは……きっと以織と巡り合わせるためなんじゃないかと思う。

何となくそう考えるよ。

あの人達にとって大体の事はきつと想定範囲内だからね。

お父さんの言葉を借りるなら『推理通り』って所かな？

何にしても彼女は私の家族になったんだ。

これからが楽しみになってくるよ。

だけど、それは一旦置いておこう。

次は……理子の方だね。

◆

◆

◆

潜入開始から10日目。

俺達の計画は着々と進んでいる。盗む算段も大体はついた。

つまりは理子の『大泥棒大作戦』もいよいよ大詰めと言うところだ。そして、今のところ動きが勘付かれてもいない。

最初はシェースチと言う、ロシア人と思われる少女メイドがいたのには驚いたが……それでも順調だ。

と言うか、向こうからそんなに接触してくる事はそんなにない。

なんつーか……レキに似た雰囲気をしてる。

会話らしい会話なんてほとんどない。

一応、分からない事があれば教えてくれるが会話の例を出すなら「……掃除」「……手伝う」とか言った風に、ほぼ最低限の言葉しか言わない。

もしかしたら、レキ以上の口数の少なさかもな。

まあ教えてくれなくてもマニュアルがあつたので、それを見れば大体の事は出来るからそれほど教わる事もなかったが……

夜になって、夕食の時間。

俺は厨房で料理の支度をする。

と言っても、小夜鳴はそう難しい料理を注文してこない。

頼むのはほぼ1品だけだ。

それも串焼き肉。料理って言っても焼肉みたいなものだ。

生肉を串に刺して焼けばそれで終わり。

家事経験が少ない俺でも普通に出来る。

ちなみにアリアは、厨房に立たせられない。

メイドの特訓で理子と一緒に料理も練習したのだが……オムライスを作るので精一杯だった。

それ以外のレシピだと何故か錬金術が発生して、どんな食材を使っても黒い物体になる。

こう言うのもなんだが、女子としてそれはどうなんだと思う。

白雪や霧は普通に来るって言うのに、同じ女子でも料理が出来ない人は出来ないんだな……と痛感した。

「——キンジ」

「あつっ!?!」

いきなり特徴的なアニメ声が聞こえてきて、思わず火傷やけどした。

頭の中で考えてた人物がいきなり背後に来たら誰でも驚く。

しかも直感が鋭いから下手な事を考えたら足を踏まれるしな。

「なにやってんのよ、鈍臭いわね」

「うるせえ、いきなり声を掛けてくんناよ」

そう言いつつも俺は出来た串焼き肉を皿に載せる。

「どうしたんだよ、いきなり？ 何か問題でも発生したか？」

「そう言う訳じゃないんだけど、キンジはシェースチって言う子についてどう思う？」

「どう思うって、普通に物静かなヤツだなんてくらいしか思わないが……」

要領得ない質問に俺が答えると、アリアは顎に手を当てて唸る。

「本当にそれだけ？」

「逆にお前はどうかんだよ、あの子がどうかしたのか？」

「……そうね。何て言うか、只者じゃない感じがするわ」

「考え過ぎじゃないのか？」

どっからどう見ても、口数の少なさ以外は普通のメイドっぽい感じだが。

それでもアリアは何か引つ掛かるような顔をする。

「だけど、気になるのよ。理子は動きに警戒しながら接触は避けるようになって言ってるけど、特に対策とか立ててる感じじゃないし」

「突然の事だからそれぐらいしか対策が出来ないんだろ。不測の事態って言うのはあるもんだ」

「そうかしら……？ これはあたしの直感だけど、理子はあるのシェースチって子をあたし達から遠ざけてる気がするのよね」

お得意の直感か。

だけど、この間の魔劍デユランダの時みたいに一蹴したりはしない。

間近で見えてきたからな、案外馬鹿にならない程に当たる事は身を持って知ってる。

だから否定するような事は言わない。

「本人に聞いてみたらどうだ？」

「それもそうね。キンジにしては良い事を言うじゃない」

俺の提案にアリアはご満悦の様子。

だが俺に『しては』って言うのは余計だ。

10人以上が席に着けそうな洋風の長テーブルに1人、小夜鳴が座っている。

一応、作法通りにドーム状の銀のフタを開けて中身を見せながら、

「山形牛の炭火串焼きの柚子胡椒こししょう添えです」

と俺は本日のメニューを言う。

ちなみに昨日は神戸牛だった。

アルバイトである俺達の食事はこの屋敷の冷蔵庫から、適度に調理して食べて良いと

言う事になつてゐる訳だが。

生まれて初めて高級肉を食ったぞ……

潜入だつて言うのに、僥倖ぎようしやうだつたな。

まさかこんな敵地で高級肉を食べる機会が得られるとは。

あと、俺達が食べる料理を出すのは例の西洋人形みたいなメイドであるシエースチと言いう少女だ。

別に俺が頼んだ訳でもアリアが命令した訳でもない。

彼女が自ら勝手に作つて、俺達の部屋に持ってきてくれる。

メニューは多分、ロシア料理だつたはず。ロシア料理に詳しくないから実際は分からんけども。

ともかく潜入してからはずっとそんな感じだ。

口数は少ないが、本物のメイドらしい。

アリアが厨房で言つた意味とは違うが、只者ではないな。

「実に美味しそうですね。今日もありがとうございます神崎さん」

「え、はい……どういたしまして」

小夜鳴はニコニコとした笑顔でアリアに感謝するが、本人は複雑な表情だ。

それもそうだろう。

作つてるのは俺なんだから。

まあ、表向きはアリアが作つてると言う事になつてる。

じゃないと仕事の割合が——これ以上はやめておこう。

俺に向かつてなんか、嘔み付くような視線が飛んでくる。

いそいそと串から肉を落として、俺はそのまま下がる。

これで俺の仕事は終わり、あとは食堂の片隅で指示待ちだ。今にして思えば、随分と楽なバイトだな。

……
 ……
 ……
 ……
 ……
 ……
 ……

10日経って、サマになって来た感じだ。

「^{ファイブ}Fi i Bucu ros…」

と、窓の外にある庭のバラを見て小夜鳴は何かを呟く。

まただ……。確かこのフレーズは、以前にコーカサスハクギンオオカミ……レキのペットとなった『ハイマキ』が保健室のロッカーに隠れてる俺と武藤を襲う前、同じ言葉の小夜鳴は発していた。

どう聞いても「ぶつ殺す」にしか聞こえないが、

「ルーマニア語ですか？」^{すば}Fi i Bucu ros…？」

テーブルに置かれたグラスに赤ワインを注ぎながら、アリアが尋ねる。

「おや、知っておいで。もしかして、神崎さんはルーマニア語を話せるんですか？」

「ルーマニア語は少し話せます」

「Sunteti foarte priceput. Fii Bucuros」

2人は何やらルーマニア語でやり取りをし始める。

何言ってるのか、全然分かん。

おかげで俺は会話に割り込めない……

なので自然と意識は考え事へと向かう。

霧はルーマニア語とか分かるんだろうか？

ふとそんな事を思う。

あいつ、無駄に万能だから尋ねてもいつものニコニコ顔で「分かるよ」とか言いそう

だ。と言うか、普通に想像できる。

実際、喋れるかどうかは分かんけど。

そう言えば、あいつは今頃どうしてんだろうな……

などと考えてる内にいつの間にか小夜鳴とアリアの会話は終わったらしい。

そんなに時間は長くなかったが、密度的には随分と話し込んでいたようだ。

それから程なく夕食は終わり、残りの仕事も終わらせた俺達はそれぞれの部屋へと戻る。

作戦は大詰めだ。

本格的に盗むのは、最終日。

つまりは俺達がここから出て行く日だ。

去り際に十字架を頂戴して、そのままとんずらしようと言う事だろう。理子、相変わらず抜け目のないヤツだよ。

そろそろか、と思い俺は俺で風呂の準備だ。

今の時間帯ならもうアリアは風呂を出てる事だろう。

いつかの時みたいにながたってくる時にバツタリ出会うのはゴメンだ。まあ、あの時は武器を取り上げようとしただけなんだけどな。

2ヶ月ぐらいしか経ってないが、あの時の事が少し懐かしく感じる。いい思い出かどうかと聞かれたら違うんだが。

ここの浴場は、この屋敷が広いだけに無駄に広い。竜の彫刻の口から湯が出てるのを見た時は驚いた。

と言うか、大理石の浴場自体を生で見るとは初めてだった。おかげで庶民の俺は未だに落ち着かない。

銭湯の貸切みたく。

だがまあ、その分ゆっくり出来る訳だが……

扉を開けて、更衣室で服を脱いで、タオルを腰に巻く。

ガラスの扉を開けて中に入るが、凄い蒸気だな。

なんでこんなサウナみたいな状態なんだか。

そう思いながらもさっさと頭や体を洗って、タオルをお湯に浸けないよう頭に乗せゆつくりと浴槽に入る。

このお湯が体を包み込むなんとも言えない心地、まさしく疲れが癒されるな。

それから、誰かが換気扇を回したのかはたまた自動なのか分からないが蒸気が晴れて行く。

晴れていくと同時に、向かい側に薄らと人影が映る。

誰だ……？ 小夜鳴か？

まさか、こんな所で出会う事になるとは。

日本じゃあ裸の付き合いみたいな事はあるが、先生と生徒だし色々複雑だ。

先生には申し訳ないが、こっちは泥棒な訳だしな……

向こうはこっちに気付いていないようだ。

このまま気付かれないうちに去る事も考えたが、もしかしたら何か情報を聞き出せるかもしれない。

そう考えて静かに近付くが――

見えてきた人物は、銀髪じゃなくて白っぽい金髪。

きめ細かい肌にも、エメラルドみたいな瞳を持っている。

つまり、例の少女メイド——シエースチだった。

思わず素早く後退する。

蒸気の所為せいで全然気付かなかった！

最初から彼女は、ここにいたんだらう。

扉を開ける音がしなかつたしな……

って言うか、これどうすんだよ!?

なんて思っているが、やる事は一つしかない！

幸いにも目を閉じていてまだ向こうは気付いてない、今なら普通に出れる！

考えが纏まとまる前に、俺の体は危機を察知して行動していた。

腰にタオルを巻いて彼女に背中を向けず正面を向いたまま、扉の方へと進む。

出来るだけ音を立てずに慎重に、だ。

だが、ぱしやと言う水音を立てて人影が動き出す。

マズイ……どうやら向こうも上がるつもりらしい、こちらへと迫ってくる。

急がないと、ヒステリアモードの意味で最悪の状況になる！

大理石の浴場の淵に足を掛けようとした瞬間、腰のタオルがズレる。

嘘だろ——!?

そう思った時にはもう遅く、タオルを踏んだ俺は背中から派手にコケた。最悪だ……と思つて、素早く体を起こすが——

既に彼女が俺を見下ろしていた。

そして、当たり前だがここは浴場な訳で……当然に彼女は裸だ。

アリアみたいに騒ぎ立てる訳でもなく、静かに俺を見下ろしている。

妖精みたいな感じで、どこかファンタジーの世界の住人みたいな印象を受ける彼女だが、別な意味でファンタジーな部分が色々見えちまいそうになつてる!

「す、すまん……! ……入つてるのに気付かなかつたんだ! 決してワザとじゃない!」

「……………」

俺は弁明するが、シエースチは小首を傾げるだけだ。

いや、羞恥心とかねえのか!?

俺が何で慌ててるのか分からない様子だ。

なんつーか、雰囲気は違うがレキみたいな感じだ。

それから彼女は、何事もなかったかのように俺の横を通り過ぎる。

な、なんかよく分からんが助かった。

ヒステリアモードには……なつてないな。

蒸気が完全に晴れてなかった事と、動揺が激しかったのが幸いしたらしい。思わず彼女が浴場を出て行くのを確認するために背後を向いてしまったが、——気のせいかな、背中に何か金属の小さい円盤が付いていたのが見えた気がする。

何とか珍事を乗り切った俺は、すぐに着替えてベッドへと倒れ込む。

風呂に入ったはずなのに無駄に疲れた。

そして深夜——

この泥棒作戦でお馴染みになりつつある報告会の時間がやってきた。携帯電話を三者間通話にして、連絡を取る。

『んちゃ。それじゃいつもの報告会に行ってみよー、やってみよー!』

理子が電話の向こう側でそう言っただけで進行する。

前から思ってたが、お前……夜行性だろ。

なんで報告会の時は毎回ハイテンションなノリなんだよ。

だがそんなノリも10日間もすれば慣れるもので……

『それじゃ金庫内の様子について報告するわ』

アリアはそんな理子を気にする事もなく続ける。

まあ、構うだけ無駄だからな。

『地下金庫についてはちよつとマズイわよ。掃除の時に調べただけど、事前調査の時よりもかなり嚴重になつてる。物理的な鍵は当然にあるとして、声紋、指紋、網膜、磁気カード、おまけに室内は赤外線だけって事になつてたのが感圧床まであるわ』

おい、どんだけだよ。

機密書類でも眠つてるのか、この屋敷には……

十字架ロザリオ一つ保管するのに随分と用心深いヤツだな、イ・ウーのナンバー2とやらは。

それからもアリアは続ける。

『それに、どうやらあのシエースチつて言うメイドがセキュリティのメンテナンスをしてるみたい。多分、備え付けたの彼女なんじゃないかしら？』

『——ゴホッ!?!』

理子側の電話から何か飲み物を吹き零こぼしたような音が聞こえる。

呑気に何飲んでやがんだあいつは。

『あー、うん。そう言うオチか……でもでも、問題はナツシング！　どんな高い壁も乗り越えて盗み出すが泥棒の矜持きんぢ！　プランBと言う名のC21で行こう！』

と、俄然がぜんやる気に満ちた声を上げる。

どうやら、理子は壁が高い程に燃えるタイプらしい。

『大まかな作戦は3日前から変更なしと言う事で、「誘ルアーき出しアウト」のままね。それで、どつ

ちが仲良くなれてる感じかな?』

「アリアの方が小夜鳴とよく話してるから、アリアだな。俺にルーマニア語は分からんし、共通の話題は多い方がいいだろう」

『おー、随分とキーくん張り切ってますな。どうしたの? アリアにイイところ見せちゃいたい感じ?』

俺が答えると理子が突つつくように聞いてくる。

テンションが高いとよく絡んでくるな、お前……

って言うか、何でそう言う話になるんだよ。

「ノーコメントだ」

『キーちゃんに弄られてるせいか耐性が出来てきて、反応がうつすーい! そうだ、今度から報告会をする時は2人とも同じベッドの中でしてよ』

『あ、あああんだ、バカじゃないの!?! なな、何でそんな事をする必要があるのよ!』

『ほらあ、報告会の後に映画とかでよくある重大な作戦の前夜に愛を囁き合うスキンシップをするんだよ』

「おいばか、やめろ」

俺をヒスリ殺す気か。

いや、その前にアリアに風穴祭りされるだろうけど。

『くふふ、ほらキーくんもアリアぐらい反応してくれないと』

『あんた……おちよくつてるわね。後で覚えてなさいよ』

『いやん、こわーい♪』

アリアが怒気を含んだ言葉を放つが、理子はどこ吹く風だ。

相変わらずアリア相手にケンカを売る大した肝っ玉を持つてるよ。

『それじゃ、餌役はアリアで決まりね。どれくらい持たせられそう？』

『急に話を戻すんじゃないわよ……そうね、割と研究熱心ですぐに地下に戻りたがると思う』

「だな、普段の休憩時間からして10分前後つて所だろう」

『10分か……』

俺が答えた時間を聞いて、理子は考え込んでる様子だ。

さすがの天下の大泥棒の子孫様でも難題らしい。

使えるのは俺だけで、しかも多くのセキュリティを突破した後には偽物を置き、かつ証拠を残さずに去れつて言うんだからな。

『15分に出来ないかな……例えばアリアが——』

『あたしが何よ？』

『先生、あたしに保健を実技で教えて下さい♪ とか』

『今すぐあんたの場所を教えなさい、素敵な銃弾をプレゼントしに行つてあげるわ……』
こ、こええ……アリアがマジトーンで怒つてるぞ。

電話越しに黒いモノが漏れ出てる感じだ。

『おお、こわいこわい。ま、そこら辺はりこりんが考えておきますよ。それじゃまた明日、同じ時間にね〜』

『待ちなさい』

怒りを抑えて、アリアは真剣な口調で理子を呼び止める。

どうやら、厨房での俺の提案を実行するらしい。

『うん、どうしたの〜？ まだ何か連絡することがある感じ？』

『あのシエースチつて言う子はどうするのかしら？』

『今のところ、放置だね。さすがに1人で2人は誘き出せない。セキュリティのメンテナンスをつい最近にやったなら、しばらくは金庫に近付いたりしない筈だから……気にする必要もないよ』

『そう。それと理子、あんた……あの子について何か知ってるんじゃないの？』

さすがはアリアだ。

いきなり本題にズバリと入り込む。

だがそれを何事もなく理子は返す。

『ヤダなく、あの子について理子を知る訳ないじゃん。潜入開始の日に初めて知ったんだよ?』

『その割にはあたし達を彼女から遠ざけてるように感じるわ』

『思い違いだよそれは、よく分からないイレギュラーだから下手に刺激して藪蛇とか出さないために言ってるんだからね』

『……分かったわ、変な事を聞いて悪かったわね』

『うん、それじゃあ理子はおちるね〜』

プツと理子との回線が切れる。

もつともらしい感じで、特に変な所は無いように俺は思えたが……

「アリア、どう思う? 俺は特に気になる感じじゃなかったが」

『どうかしらね。あたしは、まだ何か隠してるように思うの……』

「それも勘か?」

『当然よ』

相変わらず自信満々に答える。

『あんたもそうよ。あたしに、何かを隠してる』

まさか俺にも矛先が向かって来るとは……予想外だった。

……は逃げるに限る。

「切るぞ」

『待ちなさいよ！ あんたにも聞きたい事があるのよ！』

「……………」

俺はそのまま何も反応せずに電話から耳を話そうとした瞬間、

『——カナって、誰？』

切る前に聞かれてしまった。

思わず硬直する。

『その……………あんたにとつて、大切な人……………なの？』

先程とは一転して弱々しく聞いてくる。

大切な人。

間違いはない。

だけど俺は、

「悪いが、今は答えられない」

そう答えるしかない。

『いえ、いいのよ。……………以前に霧に言われたわ「自分の事情と人の事情を比べるモノじゃない」って。だから、教えるだなんて言わない。あんたが言えない事にも何らかの理由があるんでしょ？ でも、ごめん。踏み込み過ぎたわ』

アリアか？　と思う程にしおらしく、素直に謝ってきた。

俺はこのまま話さずにいる事も出来る。

だけど、それはそれで申し訳なくなる。

だからせめて――

「俺自身、心の整理が出来てないんだ。悪い」

『それじゃあその心の整理が出来たら……』

「ああ、ちゃんと話すよ」

『そう、分かったわ。もう聞いたりしない。話してくれるまで待つてるわ』

その健気な一言に俺はドキリとする。

いつもの強気な感じからは想像もできない言葉に、思わず顔が赤くなる。

チクシヨウ、いつもは凶暴なクセに可愛いこと言いやがって。

「その……おやすみ」

『ええ、おやすみ』

気恥ずかしくなつて俺はすぐに電話を切った。

霧と言ひアリアと言ひ、俺の調子を狂わせる奴が多すぎる。

困った話だ……



はあ、危なかった。

相変わらずオルメスは、勘だけは冴えてるんだから。

なんて思いながらも、イスに座ったままあたしは項垂れる。

それにしても何が『知る訳ないじゃん』だよ。

とんだ嘔吐おうときなクセして……

今にして思えば、あたしはいくつ嘘を言ってるんだろう。

オルメスを仕留めるだなんて啖呵を切っておいて出来てないし、妹の事を知らないだなんて言ってるし、お姉ちゃんには相変わらず何も言っていないし。

ホント、碌ろくでもない妹兼姉だよ。

嘔吐おうときは泥棒の始まりだなんて言うけど、あたしの場合は泥棒だから嘘を吐き続けるような感じだよ。

はあ……憂鬱ゆううつ。

お姉ちゃんの声が聞きたいって思ってる辺り、あたしはもうダメだな。

だけどそれは、包容力があり過ぎるあの人が悪い。

何で子供みたいな性格してるのにあんなにも母性に溢れまくってるのか……

おかげで依存性になるよ。

……お姉ちゃん、今頃は何してるんだらうな。

◆ ◆ ◆
「あの、この体勢は恥ずかしいんですが……」

「いいでしょ、別に。私以外誰も見てないんだから」

「しかし、同じ布団に2人と言うのは……」

「まあまあ、そんな事は気にしないでそのまま胸の中にいてね」

女子寮の私の部屋で、同じベッドに以織と一緒に寝ている。

以織のアパートに行く事も考えたけど、少し距離がある。

と言う訳で私の部屋へと誘って、こうして今に至る訳だけど。

ちよつと半ば強引に布団には押し込めた感じ。

心の抵抗はあるけれど、そんなに拒んでる感じはしない。

そして今は寝ながら布団を被^{かぶ}って私に抱き締められてる状況。

私の顔の下に、以織の頭があつてその頭を腕で包みこんでいる。

これだけ密着してれば、彼女の息遣いも心臓の鼓動も聞こえる。

不安がつているかどうかも分かる。

「このままの体勢でよく聞いてね。自分の選択に後悔は、ない？」

「……分かりません」

「まあ、そうだよ。その時の選択が正しかったかどうかなんて振り返らないと分から

ない。でも、君は孤独が嫌だから私と一緒にいる事を選んだ」

「……はい」

「復讐へと導いた私でも、一緒にいたいと思う？」

「……はい。貴女のおかげで、父の仇を討てました。感謝こそすれ恨みなどはありません」

「そっか、安心したよ。もう、君は独りじやない。これ以上孤独を許容して生きていかなくていい。私が、君の孤独を……埋めてあげる」

私の言葉に以織の心音が高鳴る。

それからそのまま脈は速くなり、彼女の体は少し火照りを見せる。

少し迷うような感じで彼女は尋ねる。

「これから、何と呼べばよろしいでしょうか？」

「何でもいいよ。私は本当の名前を知らないからね」

「知らない？」

「そう、今は白野 霧だけだ。本当の自分の名前じやない、そもそも分からない。だけど、あえて名乗るとしたら——ジル。それが私の名前」

「ジル……」

「お姉ちゃんでも構わないよ？」

私の提案に以織は気恥ずかしそうに、顔を伏せる。

「では、姉上と」

「うん♪ それじゃあ、以織……おやすみ」

「はい、姉上……おやすみ、なさい」

数分と経たず、以織の寝息が私の胸にかかる。

これだけでもかなり心を許してるのが分かる。

私の言葉をすんなりと受け入れる辺り、余程独りでいる事が耐えられなかったみたい。
い。

つまらない大人の保身のおかげで、以織みたいな子が簡単に墮ちる。

さて、これでお姉ちゃんのお願ひ通りに手駒は手に入れた。

もつとも……私は手駒なんて扱いはしない。

なんてつたつて家族だし、勝手に切り捨てるなんて言うつまらない事もしない。

それに来る者は拒まずってね。

来る者と言うよりは誘う者って感じだけど。

少し、頭を撫でて私は寝室から離れる。

それからベランダに出て、声を変えて連絡を取る。

「やあ、リリヤ」

『……なに?』

「贈り物は届いてるかい?」

『……大丈夫』

「なら、念の為に準備をしておいてくれ」

『……分かった』

「キンジ達——今、紅鳴館で働いてる人達が行動をしたら教えてくれ。あと——」

それから、私はリリヤにいくつか指示をしておいてから電話を切る。

これで私のやる事は一通り終わったかな?

ホームズの4世程じゃないけど、私もそれなりに勘がいい。

だから嫌な予感がするんだよね。

具体的に言うなら、どこかの吸血鬼が牙を研いでそうな感じ。

ま、杞憂ならそれでいいけど。

——もしもの時は——

51：嘆きの空

潜入から2週間――

とうとう来てしまった俺とアリアが紅鳴館で働く最終日。

つまりは『大泥棒大作戦』決行の日だ。

時刻は午後5時――俺達がこの館を去る1時間前。

その1時間の中の10分が勝負だ。

オープンフィンガーグローブに、赤外線ゴーグル、そしてケブラー繊維のポーチ付きベスト。

まさしく特殊部隊って感じの様相だが……やる事は結局ドロボーだ。

情報一つ入手するのに何でこんな事しなきゃならないのか理解に苦しむが、それはもう今更過ぎる話だ。

さっさとこんな仕事は終わらせよう。

そんな事を思いながら、俺は遊戯室にあるビリヤード台の下の床板を開ける。

そこには短期間で掘った地下金庫へと通ずる穴がそこにはある。

インカムの通信をオンにし、マイクテストを兼ねて報告する。

「こちらキンジ。これからモグラが畑に入る」

『O u i . こちらりこりんです、感度良好……問題なしだよ〜!』

『最初の『ウイ』は何だよ……』

『フランス語の「はい」みたいなものだよ。それぐらい知っておいてよ』

しらねーよ……

と、心の中で愚痴りながら俺は穴の中へと入って行く。

今頃、餌役の^{ルアー}アリアが「この間の食事の時に話していた、品種改良のバラについて話を聞きたい」と言う名目で小夜鳴を連れ出している頃だろう。

その食事の時に俺は思考に耽^{ふけ}っていたので全く聞いてなかったけどな。ともあれ、つまりはアリアと小夜鳴は仲良くお喋りの最中と言う訳だ。

——なんか、ムカつくな。

って俺は何を考えてるんだ。

アリアが誰と話そうが、アリアの勝手だろうに。

それにこれは作戦なんだ。

何を不機嫌になる必要がある。

大体俺には霧が——いやいや、その思考もおかしい。

なのでそこで霧が出てくる。

それから変な思考に囚^{とら}われながらも、穴を降りて何とか地下金庫へと到着した。

青いピアスみたいな小さな十字架。

暗くて色まででは分からないが、アリアの報告通りの場所に十字架が置かれているのを確認する。

「こちらキンジ、モグラはコウモリになった」

地下金庫の天井から逆さ吊りになりながら、インカムで理子に報告する。

理子が考えた窃盗手段は大胆なものだった。

地下金庫の真上、つまりは穴を掘って地面からこの金庫室に侵入し、そして逆さ吊りになった俺が天井からお宝を頂戴すると言う訳だ。

まさしく作戦名通り『モ^モグ^ル・コウ^{コウ}モ^リ』

まあ、普通に考えてあの何重ものセキュリティを正面から突破するのは不可能だろう。

常識的に考えて10分じゃ足りん。

と言う訳でこの作戦と言う訳だ。

床は感圧式だしな、踏めばアウトだ。

そこら辺も考慮しての作戦なんだろう。

アリアが金庫内の様子を報告したのが4日前。

4日……いや作戦を告げられたのがその翌日だから3日か。

その短期間でよくもまあ俺はここまで穴を掘ったもんだよ。

我ながら感心する。

この作戦をアリアの報告の翌日には思いついた理子もかなりものだけども……

『この時点であと7分、それじゃあとつとと「レール作戦」始めるよ』

いつもおちやらけた感じの理子が真剣な口調だ。

それだけあの十字架が大事だって言う事なんだろう。

こつちも兄さんの情報が掛かってるから、失敗はできない。

『それじゃあZーから順番に——』

赤外線ゴーグルには別の小型カメラが付いており、俺の見ている映像と同じ物が理子にもリアルタイムで中継されている。映像は通信器の関係上、鮮明と言えないのが欠点だ。がな。

俺は理子の指示通りに1つ1つ微妙に形が違う三角柱のようなレールを赤外線に触れないよう繋ぎ合わせていく。

指示に従うだけとは言え繊細な作業だ。決して楽ではない。

数センチでもズレればレールが赤外線に触れてアウトだ。

おまけに下は感圧床だから、1滴の汗を落としてもアウト。

時間は……残り6分つてところか。

黙々と繋ぎ合わせて、ようやく十字架の真上までレールを伸ばす事に成功した。

「よし、今から鉤^{フック}を下ろす」

『残り5分だよ、少し急いで』

どこか緊張感に満ちた声がインカムの向こうから響く。

どうやらさすがの理子も焦り気味らしい。

そう急かすなよ……現場のこっちも冷や汗が出るぐらい緊張してるんだ……！

額に浮かんだ汗を拭ってから、レールの中にS字状の鉤を入れる。

レールの中には細いワイヤーが通っており、その細いワイヤーに鉤を取り付ける。

あとはそのまま手を離せば、鉤がレールの中のワイヤーを伝って一直線に滑り落ちる。

そして見事にS字状の鉤はワイヤーの先へと辿り着き、そのまま俺は十字架へと下ろす。

ワイヤーの先もまた鉤になっていて、鉤に鉤を引っ掛ける感じで見事に噛み合っている。

そうしてペンダントトップ——首から下げる紐などを通す穴——に下ろした鉤が引つ掛かる。

(上手くいった……が、問題はここからだ……)

手元のリールを巻いて、ワイヤーを巻き上げていくと同時に十字架が浮き上がる。チキチキと音を立てながらレールの中へと吸い込まれて行く。

けれど、レールに入るとカンカンと音を立てて十字架がぶつかる。

揺れるんじゃねえよ……！

赤外線に触れそうになる。

時折、巻く手を止めて揺れが落ち着くのを待つ。

『キンジ、アリアから緊急連絡。エマーゼンシー 暗号が来た』サイファー

「なんだ、こんな時に……！」

まだ十字架はレールの先の方なんだぞ。

距離にして10分の1程度しか進んでない。

『小夜鳴が館に戻ってる』

「どう言う事だよ、あと3分はある筈だろ……!?!」

『雨が降ってきたんだ』

梅雨の時期だからって今降るなよ……!?!

理子からの報告に思わず内心で悪態を吐くが、そんな場合じゃない。

俺はルールを巻きながらも、指示する。

「こつちは言い訳無用のコウモリ男状態なんだぞ！ 何とか……もたせてくれ」

『分かつてる。アリア、会話をして時間を稼いで。キングはまだ時間が掛かる』

一応アリアの方にも理子が状況確認をするため、メイド服に小型マイク、そして指示を受けるための小さなイヤホン型の無線を装備してる。

俺が作業に集中するためにアリアとの回線は閉じられているが……逆に今は状況を把握しないと落ち着かない。

「悪いが理子、アリアとの回線を繋いでくれ。状況を把握したい」
姿を見られる訳には行かない。

最悪、この十字架を盗んだだけで撤収しなければならぬだろう。

だが、それも今のままだと回収する暇もない。

『了解』

理子の返事が聞こえると、小夜鳴とアリアの会話が聞こえてくる。

『あ、あの……小夜鳴先生！』

『はい、どうかしましたか？』

『も、もう少しここにいませんか……？』

『しかし、雨が降っていますよ?』

『あ、あはは……あたし、あ、雨が好きなんですよ!』

下手くそか!

何だよ、雨が好きって! どんな物好きだ!?

『そうなんですか……変わっていますね。ですが、風邪を引く要因を見過アシヒユラスごす訳にはいきません。専門は遺伝子系ですがこれでも救護科の教師ですからね』

『え、はい。そう、ですね……』

と、アリアは簡単に折れた。

ダメだ……言っちゃあ悪いが、こう言う事はアリアには向かない。

今度、理子か霧に会話の仕方をレクチャーして貰え……

無事に帰れたらの話だけだな。

半ばヤケになりながらも俺はリールを巻く。

もちろん、赤外線に触れないようにだ。

落ち着け、冷静に。

霧のあの動じない感じを思い出せ。

一度深呼吸をして、少し急ぎながらも焦らずに巻く。

『おや、シエースチさん。どうしたんですか? 『扉の前に立って』

どうやら、向こうに変化があったらしい。

シエースチ？ あの少女メイドか。

『……今、中には入れない』

小夜鳴より少し遠くから、抑揚のない声が聞こえる。

『それはまた、どうして？』

『……床、掃除したばかり。……滑る』

『ふむ、なるほど』

『……滑ったら、怪我、悪化する』

『それは困りますね。この雨の中で表の玄関に行くとかかなり濡れますし……仕方ありま

せん。少し待ちましょう』

どうやら、小夜鳴が止まったらしい。

一転してラツキーだな。

床掃除をしたばかりと言う事は、乾くのに時間が掛かるだろう。

かなりの時間が稼げるはずだ。

『……キンジ、今のうちだよ』

理子が俺にそう指示をしてくる。

これがチャンスだって事くらい言われなくても分かっている。

さっきの追い込まれた状況が大分楽になった。

それから俺は落ち着いて十字架を回収し、偽物の十字架を鉤に引っ掛けて元の場所に置く。

そして、道具を回収して天井のパネルを閉じた。

これにてミッション完了だ。

一時はどうなるかと思つたが、思わぬ人物に助けられたらしい。

◆ ◆ ◆

無事にキンジが撤収したのを確認し、あたしはマイク付きヘッドホンを外す。

キンジをHSSにしようと思つてアリアとの回線を切る準備をしてたけど……当てが外れた。

まさかりリヤに助けられるとはね。

偶然とは言え、無事に済んでよかったよ。

達成感からかどつと疲れた。

……。

……。

偶然……？

いや、偶然にしては何か引っ掛かる。

リリヤは基本的に指示しないと動かないタイプ。
多分、人間兵器ヒューマン・アモとしての名残なんだと思う。

別に指示されるまで全く何もしないって訳じゃないんだけどね。

最近メイドが板に付いてきたし。

まあ、そうしたのはあたしなんですけどもね……

今回の事は、たまたまりリヤが床掃除して偶然にも時間稼ぎになったって言うだけの話。それだけの話なんだけど。

特に疑問を持つ必要もない筈はずなのに、それでも何か引つ掛かるんだよね。

主に”あの人”が何かしたんじゃないかって思っちゃう。

今は置いておこう。

『全部終われば』話を聞く機会はいくらでもあるんだから。

胸のロケットペンダントを握り締めて、あたしは決意を新たにす。

今度こそ——あいつらを斃たおす。

オルメス達に受け渡し場所のメールは既に送った。

あとはここで待つだけ。

横浜ランドマークタワーの屋上のヘリポート。

高度296メートルの空気があたしの頬を撫でる。

雨が止んだとは言え、天気は随分と荒れてるな

どんよりとした黒い曇天に雷鳴が聞こえる。

あたしの心を映し出すような天気。

だけど、こんな天気でもいつかは晴れる。

……違う、晴れるのを待つんじゃない。あたしがこれから晴らすんだ。

渴望してた思いを。

影に守られて生きるのは今日でおしまいにする。

ヘリポートに誰かが近付いて来るのを感じる。

あたしが後ろを振り向いて見ていると、現れたのは2人の人影。

「やっほー、アリアにキーくうーん♪」

待ちに待った2人が遂に来た。

スキップしそうな程に軽やかな足取りで近付いて、キンジの胸元に飛び込む。

「2人の相性、バツチグーだったね。こんなに上手く行くとは思わなかったよ！」

「途中は冷や汗ものだったけどな……」

擦り寄って上目遣いで見上げるあたしから目を逸らすようにキンジは顔を横に向ける。

「キンジ、さっさと渡すもの渡してくれろ？ ソイツが上機嫌なのなんかムカつくんだけど」

「おやおや、アリアン。りこりんに対してぶんぶんしてる割には、キーくん視線が向いてるよ。もしかして、ジエラシーでパルパルしちやつてる？」

「うるさいわよこの猫かぶり女……ッ！」

額に青筋を浮かばせて、オルメスは口を荒げる。

相変わらず沸点低いねえ

そんなんだから簡単に手玉に取られちゃうんだよ。

主にキーちゃんに。

オルメスの機嫌が損なうのを見て、キンジは焦り気味に胸ポケットを探り出す。

「ほら、お望みの物をやるから離れてくれ」

そうして取り出された青い十字架ロザリオ——お母さまの形見。

ようやく……ようやく取り戻せた！

素早くキンジの手から奪い取ってあたしは躍る。

「乙、おっつー♪ たったたりらり♪」

2人から離れて歓喜で飛び跳ねる。

これで、あたしは！ 自由になれる！

あたしの居場所、あの人の隣に堂々といられる。自由が得られるッ！
 ……………。

……でも、これで終わりじゃない。

まだ自由を得られる道が見えてきたただけだ。

本当の自由を得るのはこれから。

「理子。喜ぶのはいいけど、約束はちゃんと守りなさいよね……！」

不機嫌そうなオルメスの声。

言われなくても分かっている、約束はちゃんと守ってあげるよ。

——お前らを踏み倒した後でな。

「くふふ、アリアってばあたしのことなんにも分かかってない。あ、キーくんには先にお礼をあ・げ・る♪」

そう言ってあたしが手招きするのを見て、訝しみながらもキンジは近付いて来る。

そして、あたしを見下ろすぐらいに近くに来た。

「頭のリボンほどを解いたらプレゼントだよ」

あたしの言葉にさらにキンジは口をへの字にして怪しみながらも、何となくという感じにあたしの頭の大きな赤いリボンに手を掛ける。

リボンが解けると同時に顔を上げて一歩前へ。

キンジの唇にあたしの唇を押し付ける。
男にしてはいい唇してるんだね。

と、変な感想を抱きながらもあたしはゆっくり唇を離す。
いたずらな心が働いて、キンジの鼻をひと舐めする。

相変わらず初心な反応。

これぐらいで目まで見開いちやって。

「あ、あああ、あんた……ッ！ 何やってんのよ理子おッ!」

そうだ、初心と言えよコイツもだった。

お子ちゃまには刺激が強かったかな？

まあ、どうでもいいけど……

素早く側転を切って、屋上から降りるための階段の前へと移動し、立つ。

様子がおかしい事にキンジはとっくに気付いてるみたいだ。

そして、あたしがこの場所に立つ意味も分かってるはず。

あたしの”初めて”をあげたんだから、逆にH S Sになつて気付いて貰わなかったら
困る。

「悪いね。理子はいけない子なの、キンジ」

「ああ、そうだな……いけない子だ。だけどそんないたずらっぽい所も君の魅力なんだ

ろう。だから、俺は約束が例えウソだとしても許すよ。それが君の魅力だからね」

いい笑顔で臭いセリフを吐くね、キンジ。

いや、見方を変えればただの痛いセリフだよ。

悪いけどあたしにそんな甘言は効かない。

お姉ちゃんの言葉の方がもっと魅力的に響く。

「とは言え、俺が許しても彼女はどうか分からないけどね。起きてくれ、アリア」

「——はっ?!」

キンジが名前を呼ぶと同時にパチンと指を鳴らすと、呆然としてたアリアが意識を取り戻す。

「ふ、ふん……まあいいわ。どうせこんな事になる予感はしてたわよ」

「くふ、それでいいんだよ。ああ、1つ訂正しておくけど約束を破るつもりはないよ」

「この状況で守れる保証があるって言うのかしら?」

「別に信じなくてもいいよ。ただ、”あの時”みたいに命を奪うつもりはない。死んだら約束を守るも何もないからね」

「生かすだけで五体満足で帰らせるつもりはないんでしょう?」

オルメスの言葉に、あたしはニイとした笑みで答える。

ハイジャックの時みたいに殺そうとするよりはマシだ。

あたしは先に2丁のワルサーP99を見えるようにレッグホルスターから抜いてやる。

「ここは学園島の外。先に抜いてやるよ、オルメス。これで正当防衛が成り立つだろ？」
「あら、随分と気の利いた事してくれるじゃない」

あたしに合わせるようにオルメスもブラックとシルバー、2丁のガバメントを抜く。

そして構えながら聞いてくる。

「闘る前に1つ聞かせなさい。どうしてその十字架にこだわるの？ 母の形見、つてだ
けじゃないわよね？」

「……別にいいよ、聞かせてあげる。あたし両親が8つの時に亡くなった話は、覚えてる
？」

あたしの言葉にオルメスは疑問を覚えながらも、答える。

「……？ ええ、覚えてるわ。メイド喫茶とか言う場所でそんな話をしたわね」

「あの話には続きがあつてね。あたしの両親が死んでからリュパン家は没落したの。財
宝は盗まれ、屋敷は勝手に売られた」

思い出すのも忌々しい記憶。

首に掛けた十字架ロザリオを見ながらあたしは続ける。

「そんな時だった……親戚を名乗る1人の男があたしを養子に取ると言ってきた。右も

左も分からなくなったあたしは、ソイツを頼るしかなかった」

「ただそれが悪夢の始まり。」

「結果、あたしはその男に騙された。衣服を剥ぎ取られて檻の中に入れられ、足枷あしかせとボロ布しか与えられず、食事も腐つてたり泥のついたものばかり。そんな奴隷みたいな生活が始まった」

「何年？ 何ヶ月？ いつまで続いた？ 時間なんて覚えてない。」

「オルメスう……お前はキンジを奴隷扱いしてるけど、お前は奴隷になった事……ある？」

「……………」

「ある訳ないよな。お前なんかそんな経験してる訳もない。何も失ってないお前が、あたしには羨ましいよ」

「——ふざけないでツ！ あたしが何も失ってないですつて!! あたしのママを奪って
おいてよくも言えるものね!!」

銃を向けたあとに振り払いながら叫ぶ。

お前の境遇程度じゃあ、失った内には入らないんだよ。

「でも、まだ取り戻せる可能性があるだけマシだよ。あたしは違う」

「そう……お前なんかと違う。」

「あたしは地位も、名誉も、居場所も！ 両親も失った！　そして自分自身さえも盗み奪われそうになった!!　てめえの言う『失った』は一時的なものだ!!　あたしみたいに二度と取り戻せない訳じゃねえんだよ!!　お前は所詮、悲劇のヒロインぶって自分は世界で一番不幸だなんて思つてるとんだ被害妄想女つて言うだけだ!!」

それが何より気に入らなかつた。

お前の周りにはお前が気付いていないだけで、助けて欲しいと言えば手を差し伸べてくれるヤツがいるはずだ！

なのにお前は——！　下らないプライドで自分を孤立させてるただのマゾだ。

あたしは誰もいない狭い檻の中で助けてつて独り呟くしかなかった日々を送つていた時に、お前には人並みの暮らしがあつた！

親族から欠陥品と疎まれようと、居場所も、両親もいて、人としての尊厳も奪われずに安穩と暮らしてた！

それでもお前は自分が不幸だと思つてる！

「はっ……はっ……はっ……」

感情のままに叫んだせいで、息が切れる。

オルメスを見ればあたしの言動にたじろいで、一步引くように下がる。

キンジはあたしの激情に驚愕してるが、すぐに目を閉じて落ち着いた雰囲気になる。

……キンジのヤツ、さてはあたしの事をジャンヌに聞きやがったな。

あの落ち着きようはHSSだけじゃ説明がつかない。

まあいい。

これ以上、余計な話も不幸自慢もするつもりはない。

「この十字架^{ロザリヤ}……いやこの金属は、理子に力を与えてくれる。これだけは盗られまいとずっと口の中にいれてて、あたしは檻の中でその事に気付いた。そして抜け出せた……この力を使つて！」

あたしの髪が揺れ、左右のテールが背中に隠してたタクテイカルナイフを抜く。

武器が増えた事でオルメス達は身構える。

「さあ、本気で抵抗してあたしに踏み斃^{たお}されろ！ 自由を盗み取つて、あたしは”あの人”のところへ帰るんだ!!」

銃をそれぞれ2人に向けて、あたしは叫ぶ。

瞬間——

バチイツツツ——！

「ぐう”うツ——!?”」

呻きとともに体が硬直する。

電流……? ?

誰が、あたしを――

ナイフと銃が音を立てて落ちる。

まさか……ヒルダ、か……？

電流に倒れる前に後ろを振り向いて見えた人物の姿は、

「……さよ、な、きつー！」

あのメガネ教師だった。

一体、どうなってるッ……?!

そう思いながらも、いつの間にかあたしは床にうつ伏せで倒れてる。

「小夜鳴先生——!?!」

オルメスも名前を叫ぶ。

それから倒れたあたしの目の前に見せつけるように小夜鳴が捨てたのは、猛獣に使う

ような大型スタンガン。

何かの皮肉のつもりか、あたしを猛獣扱い。

チクシヨウが、体が、動かない……!!

これじゃあヒルダの時と一緒だ!

カチャと銃を構える音が後ろからする。

「さて、遠山くんに神崎さん。そこを動かないで下さいね」

考えるまでもなく、銃口はきつとあたしに向けられてる。

小夜鳴が警告すると同時に、低い動物の唸り声うながする。

何とか僅わずかに首を動かして小夜鳴の後ろを見れば、現れたのは白銀のような毛を持った2頭のオオカミ。

ブラドが飼しもつてる下僕くだやくだ。

もしかしなくても、このいけ好かないメガネはブラドの手先。

姿を見れば、案の定に銃——クジール・モデル74——を握っている。腕に付けてたギプスはない。

「今まで三文芝居を、してたつて言うのか……!?!」

「ええ、下らない茶番劇にわざわざ付き合つてあげたんです。逆に感謝して欲しいですね」

フザケた事をぬかしながら小夜鳴が顎を動かすと、2頭の銀狼が口であたしの銃とナイフを屋上から捨てる。

随分と手懐けてやがる。

「しばらく泳がせて見るのも面白いと思ひ放置していましたが……やはり欠陥品。盗みにしても何にしても、色々とお粗末なものですよ」

お前なんか盗みの美学を分かつて貰いたくはない。

内心でそう吐き捨てながらも体に力をいれようとするけど……ダメだ。筋肉が麻痺してる。

動かない。

「あんた、どう言うつもりよー！」

「おや、放置していてすみません。ただ神崎さん、動かないでと言ったでしょう？ 君ら
があまり賢くない選択をすると私はリュパン4世を撃たなければなりません。私に
とってはもつたいたいと思う程度ですが……そうなれば神崎さんと遠山くんは大層困
るハズです。違いますか？」

HSSのキンジは女性を人質に取られた時点でまず動けない。おまけに兄の唯一の
情報源でもある。

オルメスは母親の冤罪を晴らすためにあたしが必要。

小夜鳴の言う事に間違いはない。

「どうして、理子の本名を……!? さては、あんたがブラドだったの?!」
相変わらず頭の悪い探偵だ。

ブラドの正体を知らないから仕方ないとは言え、こんなひよろメガネがイ・ウーの現
ナンバー2に君臨する訳がない。

「いいえ、ですが彼はもうすぐここに来ます。ブラドの下僕であるこの銀狼たちもそれ

を感じて昂たかぶっていますよ」

小夜鳴に否定され、オルメスは羞恥する。

それよりも、あたしには1つの事実が迫っている事を知る。

ブラドがここ来る……

——イヤだ。

あんな場所に戻りたくはないッ！

「くっ、ううッ!!」

捕まったらおしまいだ。

まだ、オルメスを斃たおしてもいないのに——！

匍匐ほふく前進みたいに体全体を動かして、前へと僅かに進む。

例え無駄だと分かってても、何もせずにはいられない。

じゃないと、あたしは……!!

「往生際が悪いですね、4世さん」

「——ッ！」

靴の底の感触があたしの頭に来る。

そのまま額を床に押し付けられ、動けない。

「少しばかり時間があるので1つ、特別授業をしてあげましょう」

こんな時に授業なんて聞いている暇はない。

ボイコットさせて貰いたいけど、小夜鳴の足が邪魔で身動きが取れない。

あたしなんか気にも留めず、勝手に授業を続ける。

「遺伝子とは気まぐれなものです。2人の親の長所を受け継げば有能な子。逆に受け継げなければ無能な子。プラスとプラスが合わされば大きなプラスになるように、マイナスとマイナスが合わされば大きくマイナスになる。単純明快な話です。似たような事を以前に遠山くんがこの4世が受けた小テストのDVDで言っていますので、すんなりと理解できると思いますけどね」

小夜鳴の言葉で思い出すのは、そのDVDの中のマリリン・モンローとインシュタイン博士の掛け合い。

『私の美貌とあなたの頭脳を兼ね備えた子供ができたら素晴らしいと思いませんか?』

『やめておきましょう。私の顔とあなたの頭脳を持った子供が生まれるかもしれませんが……』

マリリン・モンローのあとの言葉にインシュタインはそう返したの覚えてる。

だけどあの時のDVDをなぜ話に出した?

……

……待て、お前は……何を言おうとしている!?

「おや、私が何を言うかお分かりのようですね4世さん。その驚愕した表情、実にいいですよ。では、授業の続きといきましょう。この4世は先程言ったマイナスを合わせた結果です。遺伝における失敗のサンプルケース。つまるところ——」

「や、め、ろ……!」

「『無能』だと言う事に他なりません」

……言われた。

今までひた隠しにして、無意識でどこか思いながらも否定して、考えないようにしてた事を。

よりによって敵であるオルメス達の前で!

この鬼畜メガネが……!!

「随分と反抗的な眼ですね、4世さん。しかし、ご自分でも薄々感じていたんではないですか? 果たして自分は有能だと言える程の価値があるのか……なので私は、それを科学的に証明してあげたに過ぎません。10年前にブラドに頼まれてあなたのDNAを調べて得た揺るぎない事実です」

うすら笑いを浮かべながら告げられる現実。

10年前——ブラドの居城の檻で意識半ばに1人の男を見たのを覚えてる。

視界もボヤけてて顔は覚えてなかったが……まさか、こいつがッ。

「あたしから血を、抜き取って……ブラドに下らない事を、吹き込んだのは……!」

「ええその通り、私です。ですが調べただけ損でしたよ。全くの期待外れ、初代リュパンの時のように鮮やかに何かを1人で盗む事もできない。これでもジャックに気に入られたあなたを見て、少しは期待していたんですがね」

残念です、と言わんばかりに小夜鳴は息を吐く。

ふざけやがって……!

あたしは、お前の勝手な期待に応えるつもりはないんだよッ!

「ジャックって……どう言う事よ?!」

オルメスが余計な疑問を覚えて口を開く。

「そう言えばそちらの4世さんは知らないんですでしたね。このリュパン4世は、かの有名な切り裂きジャック——その愛弟子まなでしみたいなものですよ」

「なん、ですって……ッ?!」

小夜鳴の言葉にオルメスが驚愕する。

クソ、どいつこいつも余計な口を開く。

そして……あたしはそれを黙って聞かされるしかない。

なんで、どうして……ッ! あたしはこんなに無力なんだ……

「遠山くんはあまり驚いてはいない様子ですね。もしかして、この4世とジャックとの

関係を既に知っていたんですか？」

な、に……?」

確かに小夜鳴の言う通り、キンジに驚いてる様子はない。

頭を抑えられながらも何とか視線を向ければ、キンジはまだ静かに目を閉じてる。

結局は兄弟。黙ってれば雰囲気は金一とそっくりだ。

「驚いてるさ、ただ……女性の秘密を勝手に口外するのは感心しないがな」

「生憎あいにくと教師ですので、何も知らない生徒には色々と教えたくなるのですよ。なのでもう1つ教えてあげましょう。ブラドとジャックはある取引をしていました、それはこのリュパン4世に関わる取引です。何だと思えます?」

そう、あの人はブラドと取引をした。

あたしのために……修羅の道を楽しみながら歩んでる。

だが、そんな事をオルメス達を知る訳がない。

「その取引の内容は……ジャックが他の優秀な遺伝子を集める代わりにこのリュパン4世に手出しはしないと言うものです」

そうだ、小夜鳴の言葉通り。

それが取引の内容。

あたしが今まで自由でいられた理由。

「果して、それほど価値のある存在なのか……私にとつては理解に苦しみます。こんな使えない無能を守つてもどうしようもないと言うのに——」

「く、ふふ……」

その言葉を聞いて、思わず喉の奥から笑いが零れる。

「何がおかしいんですか、4世さん？」

あたしの様子を見て、威圧的な感じで小夜鳴が聞いてくる。

何がおかしい？ ああ、おかしいよ。

ブラドから聞いたかどうかは知らないけど、あの人について全く分かつてない。

「あの人は使える使えない、ましてやお前みたいに……遺伝子で決めてる訳じゃ、ないッ

！ お前は何も、分かつて……いない……ッ！」

お姉ちゃんの判断基準はいつも至つてシンプルだ。

楽しいか？ つまらないか？

それだけ。

どこの家の生まれだろうと関係ない。

優秀か無能かなんて関係ない。

そして、あたしには分かる。

今、あの人がこの場についてお前の話を聞いたら間違ひなくこう言うだろう。

——くだらないな

そう言つて、退屈そうな顔をするところも思い浮かぶ。

お前はあたしに『無能』と言う純然たる事実を突き付けたつもりだろう。

だけど、あたしにとつてそんな事はどうもいいんだ。

あたしが優秀じゃない事ぐらい、あたし自身が知つてる。

それでもあたし自身を認めて、受け入れてくれる人がいるんだ。

だから、自身で手に入れた自由に家族の場所に帰る！

理由はそれで十分。

「……ならば、教育してあげましょう」

鋭い目を向けたあたしに答えるように、小夜鳴は言葉と共に足で仰向けにされる。

彼が取り出したのは、すり替えておいた偽物の十字架。

そして——

「ツ——!?!」

口の中に突つ込まれる手。

さっきの十字架を押し込まれる。

「人間は遺伝子で決まる！ いくら努力をしたところで越えられない壁があり、あなたのようにすぐ限界を迎えるのです！」

「ぐツ……!! うぶっ!？」

「いかに優れた師匠を持つていても、その弟子がガラクタならば意味がありません！
分かりますか、あなたは口の中に入ってる物と同じ非力な存在なんですよ。今のあなた
にはそれがお似合いでしょう」

口の中から手を出して、それからあたしの胸に掛かつてる本物の十字架を奪い取る。

だけどあたしは、少しだけ動く右腕で小夜鳴の袖口を掴む。

「やれやれ、本当に往生際が悪いですね……」

それを見て小夜鳴が呆れた顔をして、どこかに流し目をする。

すると、1頭のオオカミがゆったりと近付いてくる。

それから口を開かせてあたしを見下ろすオオカミに彼は命令する。

「やりなさい」

——ミシツ。

「あ、ぐ……ツ!?! あああああああつ!!」

喰らいつかれる右腕。

激しい痛み。

万力ですり潰されるような感覚が襲う。

「全く、どうしてそれも足掻きたがるんですかね？ 4世さん」

問いかげながら横顔を踏まれ、口の中に入れられた物が飛ぶ。

ヤツの袖から手を離しても、右腕の痛みは消えない。

「まあいいでしょう。足掻きたければそのまま足掻いても構いません。どれだけ苦痛の声を上げてても、あなたを守ってくれるジャックはここには来ないでしょうからね」

骨が、軋きしむ……！

何か言ってるか分からない……耳を傾けてる余裕が、ない。

歯を食いしばって耐えるしかできない。

「いいかげんにしなさいよッ！ 理子を痛ぶって、何の意味があるの!？」

痛みの中でオルメス声だけがヤケに耳に響く。

「絶望が必要なんですよ。彼は絶望の詩うたを、苦悶に満ちた悲鳴を聞いてやって来る」

「~~~~~ッ!! あ、ハア……ッ!」

小夜鳴の言葉と共に、オオカミが最後に力を入れてもう一噛みした後解放される右腕。

もう、ほとんど感覚がない……

僅かに袖に血が滲む。

「あなたは相変わらずいい声で鳴いてくれますよ、4世さん。おかげで、イイ感じになりましたよ」

メガネを指で上げてそう言う小夜鳴の雰囲気はどこか違う。

この感じ、覚えがある。何となくだけど分かる。

切り替わって行くようなこの感じは……金一やキンジと似てる。

あたしよりも先に当然、キンジは気付いている。

まさか、と言う顔をしながら小夜鳴を見ている。

そのキンジの表情見て、彼は嬉々とした顔をする。

「私は人に見られてる方がさらにイイ感じになるんですよ。君ならお分かりでしょう、遠山くん？」

「ウソだろ……」

「そう、これはヒステリア・サヴァン・シンドローム」

小夜鳴は答えを言った。

なんでコイツが、金一やキンジと同じ体質を……!?

「ヒステリア……サヴァン？」

ただ一人、この中でオルメスだけはその事について知らない。

キンジや小夜鳴を交互に見ながら言葉を繰り返す。

「しばしのお別れです、皆さん。ですが彼が来る前に教えておきましょう。イ・ウーでは能力を教え合う場所。聞いているかどうかは知りませんが、そう言う風に遥か高みへと目

指すのが我らの組織のコンセプトです。しかし、それは実力の低い者達のお遊戯に過ぎません。今のイ・ウーには私とブラドが革命を起こし、簡単に能力を写し取れる方法があるのですよ」

「聞いた事があるわ。連中は何か別の方法で……能力をコピーしてる。超能力ステルスさえも写し取れると言う話よ」

オルメスの言葉通り、確かに能力はコピーできる。

だがそれには血が必要だ。

「その方法と言うのは、ブラドが600年も前に行っていた事——『吸血』です。それを人工化し……遺伝子を選択、上書きする事によつて進化する。優れた遺伝子を集めるのは、私の仕事になりました。そしてジャックに優れた遺伝子、つまりは血を集めさせていたのもそのためです。先日とも身体検査と称して採血しようとはしましたが、遠山くんが覗いていたおかげで失敗してしまいましたかね」

コーカサスハクギンオオカミが武偵高に突然現れたのはそう言う事だったのか。

単純な話、小夜鳴を守るボディガードみたいなものだったんだろう。

「キンジ、読めたわイ・ウーのナンバー2の正体……。吸血、ルーマニア、ブラド……」
ドラキュラ伯爵”に間違いはないわ」

「なに……？ あれは、架空の話の人物じゃあ——」

「違うわ、あたしの曾お爺さまと同じように本物をモデルにした話よ。ブラド・ツエペシュ……15世紀のルーマニアでワラキアと言う土地の領主だった男。そんな昔の人物が、今も生きてるって言う噂が流れてる」

オルメスはキンジの言葉を否定し、小夜鳴はオルメスの言葉を肯定する。

「その通りです。ただ、世の中の人は『ドラキュラ』吸血鬼だと思つていますが、それは違います。あくまでドラキュラと言うのは竜の息子を指す言葉であり、吸血鬼を示す言葉ではありません。そして、ツエペシュと言うのは、串刺し公カニを示す言葉。ドラキュラと同じ通称みたいなモノであつて姓ではないのです」

嬉々として小夜鳴はよく喋る。

「そんなブラドは吸血鬼の中でも変わった人物でして、他の吸血鬼が動物などの血を貪むさぼつているのに対してブラドだけは人間の血を吸い続けた。そうして人間だけを吸血する事によって知性を得て、遺伝子は上書きされて行きました。結果、他の吸血鬼は自ら破滅、あるいは滅ぼされましたがブラドだけは屈強になり生き残りました」

ですが、と小夜鳴は言葉を区切る。

「知性を保つためには人間を吸血し続ける必要があつたのです。そうして遺伝子は上書きされ続け、とうとう……」私と言う人間が生まれその内側に潜むようになりました

”

自分の中を示すように、頭を指で叩く。

つまり、お前の中にブラドがいる。

そう言う事か……ッ！

「ブラドは私が激しく興奮した時に現れるようになってしまい、早々に表には出てきません。最初は適当に人間を騙るなぶだけでよかったです。今となってはあらゆる刺激に慣れてしまい……マンネリ化したのです。そこへ転機が訪れました。遠山 金一のDNAです」

「——ッ!？」

キンジが驚愕する。

「ヒステリア・サヴァン・シンドロームによる神経伝達物質を大量放出するメカニズムは、ブラドを呼ぶのに十分なものでした。さて、ここで1つ遠山くんには疑問が残るでしょう。何故、ヒステリア・サヴァン・シンドロームでありながらこの4世を危害を加え続けられるのか？ それは簡単な話で、種族の違いと言うヤツですよ。霊長類と人類が違うように吸オガ・パンヒエス血ホモ・サビエンス鬼から見れば人間など下等種も同然、私にとつて守るべき雌ではありません。しかし、私はそう言った“動物虐待”でも愉悦ゆえつできるサディスティックな嗜好へんぼうでしてね」

変貌へんぼうする……

小夜鳴の言葉と共に、体が肥大化していく。

あたしから足を離して一歩下がりがり、メガネが落ちる。

「特別授業はお終しまいです。さあ」

——かれがきたぞ。

降臨する。そんな崇高そうな意味を持って小夜鳴は言葉を放った。

その最後の言葉も、低く重々しい声調に変わつてる。

筋肉が盛り上がると同時に肌が変色し、赤黒くなる。ブランドのスーツを破りながら、肌と同じ色の毛が生えてくる。骨が鈍い音を立てて変形してる。

「へ、変身してる……ッ!？」

オルメスの呟くように言った声が聞こえる。

オルメスの言う通り、変身してる。

あたしはそれを……見上げるしかない。

完全に変身したあとには、オオカミ男に翼が生えたような姿に2メートルは越える巨きよ躯。

金色の瞳があたしを見下ろしてる。

忘れるはずもない。

「——ブ、ラド……!」

「久しぶりだな4世。そしてそっちの奴等をはじめまして、だな」

見下したような不気味な声で喋り始める。

「お喋りな小夜鳴から大体は聞いてるだろう？」 オレ達 は頭の中でやりとりする。話も全部、アイツの中から聞いてたぜ？」

「あんたが、ブラドツ！」

「そうだ。オレがブラドだ」

ブラドはあつさりとオルメスに答えた。

だが、それよりもあたしは聞いてない！

ブラドが人間になれるなんて今まで知らなかった。

予想外過ぎた。

「ち………く、しようっ！」

「ハッ、イ・ウー以来会ってないが随分とイイ眼をするようになったじゃねえか………4世」

下卑^{げひ}た笑みを浮かべながら剛腕であたしの頭を掴み、持ち上げられる。

その瞬間に響く3発の発砲音。

銃を持つてた右腕に2発、そして銃に1発当たる。

銃声からしてキンジだろう。だけど無駄だ。

腕に撃たれた銃弾は肉に押し出されるように排出され、傷口は治っていく。

「無駄だ、オレにいくら弾を撃ち込もうが通用しねえ。てめえは銃を無力化したつもりだろうが、これはもうオレには必要ねえ」

驚くキンジ達に見せつけるようにブラドが銃を握力だけで粉碎する。

「今のオレには人間の頭を握り潰す事なんざ容易い」

パラパラと手から落ちる部品。

そう言いながらブラドはさらにあたしを持ち上げて顔に近付ける。

「てめえは知らなかったんだよな、4世。オレが人間になれる事を」

「取引、しただろう……! ジャックの取引とあたしの取引………忘れた、のか………ツ?!」

「ああ、てめえに手出しはしない事とホームズの末裔を倒せば解放する事か。クク……

ゲエバババババツ!!」

何がおかしいのかブラドは顔を上げて大笑いする。

「——犬とした約束なんざ、守る訳ねえだろ」

コイツ………ツ!

あたしだけじゃなくあのひととの約束まで反故ほごにする気か!?

「ジャックに関しては一目置いていたんだぜ? てめえよりも遥かに優秀で、趣味もそれなりに合うしな。だが所詮は鎖に繋がれた犬………凶暴な走狗そうくつて所だな。同じ鎖に

繋がれるなら、あのいけ好かないリーダー様じゃなくオレの手元に置いておきたいもんだ。いい血が取れるだろうよ」

——ッ!!

「ふぎ、けるな……!」

あの人をそんな目で見るな。

お前が触れていい存在じゃない。

「なかなか頭が回るおかげで取引の時にアイツの血は取れなかったからな。だが4世……お前を使えばあいつが出てくるかもな」

「人、じち……にする気、か……?」

「ああ、どうやらお前はアイツのお気に入りに入りたいだから——あん?」

言葉の途中でブラドは眉を寄せる。

何かに話しかけられているような感じだ。

おそらく、コイツの中にいる小夜鳴がブラドに何か話してるんだろう。

「なるほど……。おい、4世。どうしてジャックはここに来ない?」

「いきなり、何言つて……」

「今、小夜鳴から聞いたぜ? アイツは他人に成り済まし情報を集める。お気に入りのでめえが何をするか知る事ぐらい造作もないってな」

確かにそうだ。

だけど、お姉ちゃんは知っても敵でなければ詮索はしない主義。

ブラドの言葉は嘘じゃない。

あたしが何をするかは既に知っている。

だけど、知った上で放置するだろう。

そう言う人だ。

「なら、ここにオレがいる事も本当は知ってるんじゃないかねえのか？」

……ありえない。

「オレがこうしてお前に手を出してもアイツが来ないって事はてめえ——」捨てられたか？」

それこそありえない。

あの人は、あたしの事を帰ってくるかと信じて待つて言ってくれた。

……待つてくれるんだ。

「まあ、オレとしちやあどつちでもいい事だ。アイツが手を出してこないだけでも好都合、殺り合うのはメンドクせえ。だが、てめえが”つまらない”選択をしたおかげで、簡単に檻に戻せそうだなあ『繁殖用雌犬』」

——つまらない——

お姉ちゃんが嫌う事だ。

……お姉ちゃんは、待ってるって言ってくれた。

あの人は嘘は言わない。それは確か。

嘘は言わないけど、真実をぼかした言い方をする。

待ってる、つまりそれは別の言い方をすれば”助けには来ない”って言うこと。

——だとしたら。

いや、あたしはこの状況で何を考えてるんだ。

『捨てられたか?』

違う……そんな訳がない。

あたしが勝手に悪い方に考えてるだけ。

ただそれだけ。

なのに、どうして……ッ!

どうして……こんなにもどうしようもなく、悲しんでる……

「ようやく理解したか、てめえがどこに行こうが関係ねえ! お前の戻るべき居場所は

あの檻の中にかねえって事がな!!」

ブラドに言われ、宙ぶらりんのまま振り回されて見せ付けられる外。

視界が涙で霞む。

「理子……！」「理子！」

異口同音にあたしを呼ぶ声。

近いハズなのに遠く聞こえる。

バカだな、あたし……

お姉ちゃんに何も言わなかったクセに、今度は都合の良い方に考えてる。

あたしの居場所。

……帰りたい。

帰りたいよ……

「………た、す、け………て………！」

——お姉ちゃん。

◆ ◆ ◆
誰かに呼ばれた感じがして、思わず顔を上げる。

ヨコハマグランドインターコンチネンタルホテル。

屋上とも言えない場所だけど、とりあえずその建物の天辺に私達はいる。

ここから一応、横浜ランドマークタワーの屋上がギリギリ見えるからね。

距離は大体800メートル程度かな、高低差も含めればもうちよつとありそうだね。

普段はこんな事しないんだけどね

気になって何してるかと様子を見ればブラドとお遊戯中とは。

本人にとつてはそう言う状況でもないし、そんな暢気のんきなものでもないだろうけど。

私はナイトビジョン付きの双眼鏡を外して下ろすと同時に隣にいる人物に声を掛ける。

「あー、リリヤ……？ 戦闘態勢に入るのもうちよい待ってくれないかな？」

「……Истребитель」

いつものメイド服に色んな物をゴテゴテ付けたリリヤがロシア語で呟いてる。

機械的な殺気を放ちながら、真っ直ぐにブラドを見ているように思える。

これ、完全にデストロイモード的なモノに移行しようとしているよね。

「待ってって言ってるでしょう？」

二度目の忠告で、ようやく彼女はこちらを見る。

無表情で、どこか懐疑的な目を私に向けてる。

「……どうして？」

「何が？」

「……リコお姉ちゃん、泣いてる。……なのに、止める」

ああ、なるほど。

どうして助けに行かないのかって言う意味ね。

それよりもこの距離、この暗さで顔まで鮮明に見えるんだ。つて、そんな所に感心してる場合じゃなくて――

「悪いけど、助けに行くのは良い方法じゃないんだよ」

お父さんからあまり手出ししないよう言われてるし。

ジャンヌの時程度の加担なら別に大丈夫みたいだけど、ここで私がブラドをどうしようとしたら絶対にストップが掛かる。

それに、ここで手を出さない方が理子が救われる方法でもあるハズ。

お父さんの事だからそれぐらい考慮してるだろうし、神崎達が死ぬような推理シナリオは立てないだろう。

だから、しばらくは高みの見物をするしかない。

建物は向こうの方が高いけどね。

「だけど、きつとあの2人が理子を助けてくれる。心配しなくてもいいよ」と私はいうけど、

「……………」

リリヤは納得していない様子。

ただ、それでも理子達がいる場所の方向をじつと見つめてる。

私としては気になったのもあるけど、面白い見世物も期待してた所もある。

だけど……何だろうね、この感情。

どう形容していいのかわからないけど、これだけは分かる。

この見世物は大好きで面白くもないって言うこと。

楽しくない気分になるのは久しぶりの感覚だよ。

「……………ッ」

リリヤが何かに反応する。

「どうかしたの?」

「……怖い感じ、してる」

聞いてみれば私を見て彼女はそう言う。

怖い感じ……?」

おかしいな、殺気なんて出してないはずなのに。

無意識の内に漏れてる?」

まさかそんな筈はないと思うんだけど。

まあそれよりも、あのコウモリをどうするか考えておかないとね」

そんな事を思いながら、雷鳴が轟く空を見上げる。

じきに夜霧よぎりが来る。

52：夜霧の摩天楼

「……………た、す、け……………て……………！」

悲痛で、か細い声。

それが理子の口から絞り出すように出された。

「——言うのが、遅いのよ!!」

迷いもなく、理子の言葉に応えるようにアリアが叫び、駆ける。

そんなアリアの叫びに気圧され2頭の銀狼が怯む。

風圧が隣にいる俺にくる程に、ブラドへと突貫する。

「キンジ！ あたしの側面は任せたわよ！」

俺に指示を出しながらも足は止めない。

その時、ブラドの下僕しもべである銀狼達が左右からアリアを挟撃する。

しかしアリアはそれに目もくれない。

——側面は任せたわよ！

なるほど、そう言う事か。

だつたら……!!

ベレッタを構えてそれぞれ1発ずつ銀狼に発砲する。

だが狙うのは命じゃない。

撃たれた銀狼達は空中で姿勢を崩すとそのままアリアを通り過ぎて倒れる。

ぶつつけ本番だつたが出来たな……

レキが以前にやった、銃弾を掠めさせて脊椎^{せきつい}を圧迫し、体を麻痺させると言う妙技。

さすがはヒステリアモードだ。

アリアは既にブラドの所へと辿り着いている。

2丁のガバメントを構えて、ブラドの側面に回り込み流れるように立ち回っている。

そして、マズルフラッシュと音を放ちながらいくつもの銃弾がブラドの腕と肩へと吸い込まれる。

生々しい音が鳴るが、

「学習能力のねえ人間どもだ」

ブラドは大きく口を開き、牙を見せながら笑つていやがる。

傷口は赤い煙と共に治り銃弾が零れ落ちる。

一度治る様子を見たとは言え相変わらず現実離れた光景だ。

冷や汗じりにそう思いながらも俺は、アリアの方へと視線が向いているブラドの死角

に潜り込むように駆ける。

バタフライ・ナイフを展開して狙うのは、尺側手根屈筋、短掌筋、長掌筋。

どれも手の平を握るのに必要な筋肉だ。

その筋肉が通つてる腕と手首に向かつて素早く刃を突き立てる。

「……なにッ!？」

ブラドは握力を失つた事に驚いた顔をしながら、理子を手放す。

それを俺がお姫様抱つこでキャッチする。

どうやら握力が失つたところを見るに、筋肉の位置は人間と大差なさそうだな。

すぐさまブラドは腕を振りかぶり、俺に向かつて鎌のように剛腕を振り下ろしてく

る。

それを俺は素早くバックステップで躲かわした。

何とか、大丈夫だったが……振つた腕から旋風が巻き起こり俺と理子の服と髪を揺ら

す。

今の一撃を喰らつたら、骨が持つて行かれてただらうな。

そのまま距離を取りアリアと合流する。

アリアは理子の様子を見て呆れ顔。

「あたしに散々、色々と言つてくれたクセに酷い顔ね」

「うる、さい……………」

確かに涙の跡が残ってる理子の顔は酷いものだ。

それを隠すように理子は左袖で拭う。

「まあいいわ。あんたとの勝負は”お預け”よ」

と、言つてアリアはブラドへと向き直り俺と理子を守るように大きく一歩前に出る。

「ブラド！ よくあたしの前にノコノコと姿を現せたわね！ あんたを……………あんたを逮捕するわ！」

「ゲアババツバツ！ オレを逮捕だア？ 大きく出たなホームズの小娘」

「誰が小娘よ！ あたしはもう16よ!? 立派なレディに向かつて失礼な言い草ね！」

「ハン、そんな貧相な体で何がレディだ……………しかも16でそれじゃあ将来の見込みもねえなあ」

ニヤニヤとした感じでブラドが見下す。

「あんた……………牢にブチ込む前に、1発どデカイ風穴あけてやるわ……………ツ！」

おい、簡単に挑発されてるなよ。

青筋を額に浮かべるアリアを見て、心の中で突っ込む。

すぐさま畳み掛けるようにアリアは言い返す。

「あんたはあたしの事を侮辱したから言い返させて貰うけどね！ あんたは相当のマヌ

ケよブラド！ キンジ、武藤レベルにマヌケよッ!!」

さり気なく味方である俺を貶すな。

「『無限罪のブラド』——あたしにとつてはジャックと同じくらいに正体を掴めないでいるあんたがわざわざこうして出てきたんだから、ラッキーの一言に尽きるわ」

「アンラッキーの間違いだろう。てめえはオレを倒すつもりでいるらしいが、ジャンヌやそのこの4世程度に苦戦してるお前じゃあ話にならねえ。オレはイ・ウーのナンバー2だ、この意味も分からないほどに頭が弱いらしいな……ホームズの小娘」

「あたし一人じゃないわ、あたし達があんたを倒すのよ!!」

そう言つて、アリアは理子に目を向ける。

その『あたし達』に理子も含んでの発言だろう。

理子はそんなアリアの発言に少し驚いた様子で、目を向けている。

「なるほど、ジャックの言う通りてめえは黽り甲斐がありそうだなホームズの4世」

そう言つてブラドは傍にある携帯の電波を受信するアンテナに手を掛ける。

片腕で掴んだそれをミシミシと言う金属音と共に折り曲げ、根元から引きちぎった。

「串と言うよりは棒だが、まあいいだろう」

長さは5メートル、重さは数トンありそうなそれを軽々と肩に担ぐ。

どうやら、あの剛腕は理子を軽々と持ち上げてた事からも見掛け倒しじゃないらしい

い。

そんな中、アリアがブラドに見えないよう背中ハンドサインでなにか手信号を送ってくる。

いや、これは指信号タッペンク。武偵の使う暗号の一種だ。

解読すると「リコ ヲ カクセ」との事らしい。

ブラドから庇うよう俺達の一步前に出たのはこの暗号を送るためか。

「さあ、どうするホームズの小娘？」

「上等よ、やってやるわ」

アリアが2丁の銃を構えてブラドに答える。

ブラドの意識がアリアに向いているのを確認してすぐさま俺は反転し、ヘリポートの階段下の影……この屋上から降りるためのドアの傍へと理子を下ろす。

「く、うツ……いー」

どうやらオオカミに噛まれた右腕が痛むらしい理子は下ろしたと同時に呻く。

些細な動きでも苦痛を伴うらしい。

彼女の右腕を見れば、それほど出血はしていない……オオカミの顎の力がどれくらいかは分からないが、あの100キロ級の重さのオオカミだったらその力は200キロは超えていそうだ。

骨には到達してると考えていいだろう。

「惨めだね、あたし……敵であるお前ら、に、救われるなんて……」

男口調のまままで自嘲じみた言葉を紡ぐ。

言葉の端々からも痛みがにじみ出ている。

「敵だ味方だなんて今は関係ない。俺のご主人様が言つてただろう？ 勝負は預けるつて」

「永遠に預ける事になりそうだけどね」

理子は小馬鹿にするように苦笑しながらそう言う。

「だったら、助けてくれないか？」

「……別にいいよ」

俺の言葉にあっさりと了承した。

「囿でも何でもしてやる。その代わり、あたしが死のうがあいつを必ずぶつ倒せ。あの人を裏切つたあいつを、あたしは許さない」

さつきまでの泣き顔とは一転して、俺を見上げた理子は怒りに燃えていた。

その鋭い眼は……ハイジャックの時とは違う獲物を狩るような眼ではなかった。

ヒステリアモードの俺すら、どう表現していいのか分からない。

ただ確かな意志を持っている。

それだけは分かる。

「……」

「死んでも、って言うのは聞けない相談だね。せつかく手に入れる自由を生きて実感しないつもりかい？」

「でも……！ 生半可で勝てる相手じゃない。あたしはほとんど右腕が使えないし——」

「なら、これで腕2本追加だ」

俺はポケットから取り出した“本物の青い十字架^{ロザリオ}”を理子の首に掛ける。

理子には超能力^{ステルス}とも言えるべき力がある。髪を手のように扱うことが出来る力が。

「これは……」

「正真正銘の本物さ。ブラドから救い出す時にポケットの中にあつたのを落ちてた偽物とすり替えておいた」

「……………」

「理子、君にもいなくなれば悲しむ人や会いたい人がいるだろう？ だから、こんな所で生きる事を諦めちゃいけない。もし理子が助けを呼ぶなら、俺は何度でも理子を助けに来る。約束だ」

力なく垂れ下がってる理子の左手を見えるように持ち上げ、握り締めながら俺は真っ直ぐに理子を見据える。

俺のその言葉に、理子は丸い目をさらに丸くする。

そして、夕焼けみたいに頬が染まる。

それはいつもの猫を被つたかぶような理子とも俺達と敵対した時とも違う一面だった。それからすぐに何かを振り払うように首をぶんぶんと振り、

「……行くぞ」

理子は立ち上がって誤魔化すようにそう言った。

俺の横を通り過ぎて、理子はヘリポートへと続く階段を上がる。

この状況……本来なら逃げるべきなんだろう。

相手は文字通りのバケモノで、ジャンヌからも警告されてる。

『逃げるための戦いをしろ』

そう言う風に言われた。

だが、ジャンヌ。お前が心配してる理子は退く気がないみたいだぞ。

もちろん、俺もこんな所で逃げ腰になる気はない。

正直に言うとは、面倒だ。

それを言えば確実にアリアから風穴をあけられるだろう。

だけどそれ以上に――！

女の子2人が勇敢に立ち向かって行ってるってのに、

——男の俺が退く訳には行かねえだろツ。

俺も理子に続いて、ヘリポートへと駆け上がる。

「こん、の……!!」

そこではアリアがブレードが振り回す鉄塊てつかいを躲しながら、距離を取って銃弾を浴びせている。

全て命中しているのだが全くと言っていい程に効果がない。

傷は治り、銃弾は全てヤツの肉体から零れ落ちる。

大きく回ってアリアは俺達に合流する。

「逃げなかったのね」

「お前に貸しを作るのは癩しやくだからな」

アリアの一言に理子はそう返す。

いつもの売り言葉に買い言葉。

しかし、今はそれが頼もしく感じる。

並んでる俺達を見て、ブレードはニイと牙を見せながら笑う。

「オレの遺伝子コレクションに自らなりにきたか？ ガキンちよども」

「誰があんたの物なんか……！ 血統書付きの犬猫じゃあるまいし」

「だったら串刺しの標本にでもなるか？ 肉が腐るまではさぞやいい眺めになるだろう

よ」

「品のない趣味ばつかね！」

ブラドとアリアが問答をしてる間に、俺は理子に耳打ちする。

「理子、俺はジャンヌからブラドの弱点はあの白い目玉模様だと既に聞いているが……どうなんだ？」

「ああ、間違いないよ」

確認するように問い掛けた言葉に理子が肯定すると同時に俺は、白い目玉模様の位置を再度確認する。

両肩にそれぞれ1つ、右脇腹辺りに1つ……容姿はあまり参考にならなかったジャンヌのイラストだが、場所に間違いはない。

問題は4ヶ所目だ。

「弱点は4ヶ所……最後の1つはどこだ？」

「最後の1つは——」

「理子！ キンジ！ 来るわよ！」

アリアに言われて正面を見ればブラドが大きく鉄塊の上に振りかぶっている。

俺達は左右に分かれ、振り下ろされるそれを回避する。

理子は右に、俺とアリアは左に。

ブラドが振り下ろした場所は、今まさに聞こえてる雷のようなくぐもった轟音を響かせて粉碎する。

パラパラと瓦礫がれきが飛び、さつきまで俺達の居た場所に風穴を刻む。

分断されたか……

しかも、理子が4ヶ所目の場所を言う前にされたのは手痛い。

「さて、コソコソと動くお前らを相手にするのも飽きた。ホームズ、そしてそれを補佐するワトソン役であるてめえ……ホームズにパートナーがいる時は警戒しろと言われている。人間風情ふせいに遅れを取るオレじゃあねえが……」

ギロリと金色の瞳がアリアから俺へと向けられる。

そのブラドの後ろで理子は口を開いて何かを伝えようとしている。

急いで読唇術で読み取ると、

『キンジは右脇腹、アリアは両脚の膝裏の腱を切った後に肩のどちらかをやれ！ 同時にだ！』

早口でそう伝えてくる。

「遠山、てめえの」今の状態は少しばかり厄介なんだな」

俺を警戒するような言葉を発するブラド。

何かしてくるつもりだ……！

急いで俺はブラドに見えないようアリアに指を使った和文モールスで理子の言った内容を伝える。

もちろん、白い目玉模様が弱点である事も添えながら。

理子が何をするか分からないが、早口で伝えた様子を見るに勝負は一瞬。

そして、おそらくは俺達が知らない4ヶ所目の弱点の位置を知っていて“ソレ”と”もう片方の肩”を理子がやると言う事だろう。

武器を全てオオカミに捨てられた彼女が2ヶ所もどうやるかは分からないが、信じるしかないだろう。

作戦とも呼べないプランだが、実行するしかない。

俺とアリアがアイコンタクトで領き、いざ踏み出そうとした瞬間――

ずおおおおおおおっ！

そんなけたたましい音と共に、ブラドが大きく胸を反らして空気を、吸っている……ッ!?

風船みたいに膨らむ毛むくじやらの胸筋。

あまりの不気味さに俺もアリアも踏み込もうとした足が止まる。

「ワラキアの魔笛に酔え――!」

ブラドの宣言と共に、

ビヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ——!!
咆哮が放たれる。

振動の波が、俺達の体を貫く。

砕けたヘリポートの一部がグラグラと揺れさらに崩れる。

夜の染まつた雨雲さえも千切れる。天を貫くような魔笛。

服も、内臓も、全てが揺れる。

なん、だこりやあ……ッ!

耳を塞いでも、音と振動が全部体を突き抜けていきやがる!

体全体でその音と振動を聞いているような感覚だ!

腰を据えて踏ん張れ! 意識を保つのに全力を注げ!

ここで意識を失えば確実に終わりだ!

そうして、数十秒にも及ぶ咆哮が終わった。

何とか、耐えられたが……感覚が残っている。

まだ体が振動しているような感じだ。

どうやらアリアも理子も、何とか意識は失っていないらしい。

理子に関しては無理やり右腕を動かしてでも両耳を塞いだようだ。

……だが何だ、この違和感は。

——ッ!?

そこで俺は気付いた。

血流が、おかしい……ッ。

ヒステリアモード独特の体全体を巡るような血の流れが、”ない”。

「どうだ、遠山」

俺に話し掛けてきたブラドは嘲笑している。

コイツ……ッ!

——ヒステリアモードを、破りやがった!

戦力が半減どころじゃない。

今の俺には次どう動くべきかも分からない。

ブラドの体重を乗せた足音が、近付いて来る。

マズイ……!!

どうしたらいい……どう動けばいいんだ!?

「キンジ! 何やってんのよ! 動きなさい!」

さっきの咆哮から回復したらしいアリアが俺に向かって叫んでる。

動かなきゃならない。分かってる、そんな事は。

なのに、頭も体も……止まってしまっている。

既にブラドは俺に向かって金棒を振り上げている。

そこでようやくハツとなつて気付く。

だが、既に遅すぎた。

今から動いても間に合わない……ッ！

……終わるのか、俺は——？

「キンジツ!!」

特徴的な声が響き、俺を守るようにアリアが前に出る。

「アリアッ!」

突然の行動に俺は声を上げる。

それしか出来ない。

もうブラドは俺達に向かって今にも金棒を振り下ろそうとしている。

その時、アリアが不意に上を向く。

「——しゃがめッ!!」

声と共に俺の頭を掴む感触。

その手に無理やりにしゃがまされると同時に、頭の上を風が吹き抜ける。

俺の右側に現れたその人物は——

”理子”、だった。

「どうやら俺の頭上から降ってきたらしい彼女は、そのまま俺の頭を掴んでしゃがませたのだ。」

「アリアが上を向いたのは、理子に気付いたからなんだろう。」

「理子が俺を何とかすると信じ、アリアは持ち前の反射神経で同じタイミングでしゃがんでいた。」

「つまりは全員、無事だ。」

次に理子は前後に出来た俺とアリアの隙間を縫うように駆け抜け、ブラドに向かって跳んで行く。

彼女の髪の前にはアリアの日本刀が一本、左手には俺のバタフライ・ナイフが握られている。

「どちらもさつき通り抜ける一瞬で盗み取ったようだ。」

「ブラドは俺とアリアを薙ぎ倒すのに大振りで金棒を振ったため硬直している。」

「跳んでくる理子に何も反応できていない。」

「絶妙なタイミング。」

「うおおおおおおおッ!!」

「そのまま理子は、雄叫びと共にブラドの金色の瞳に刃を突き立て、2つとも潰した。」

「ぐおおおおおッ!!」

「オレの目があああああッ!!」

さすがのブラドも目玉は痛いらしく苦悶の叫びを上げて体を大きく動かし、暴れている。

「今だ！ やれえツツ!!」

理子はブラドの顔に張り付いたまま、俺達に向かって指示を出す。

二度とないチャンス。

誰の目から見ても分かる。

ヒステリアモードであるかないかとか関係ない！

——やるしかないだろツ！

理子に指示されたアリアはすぐにブラドの背後へと回り、

「はあツ!!」

一声と共に日本刀で膝裏を一閃する。

血飛沫ちしぶきが出ると同時にブラドが膝を突く。

これでブラドは俺と同じ頭の高さになった。

すぐに再生するとは言え、短時間だが大きく暴れまわる事は出来ないだろう。

俺はベレッタを構え、狙うは右脇腹の目玉模様。

アリアがブラドの左肩に向かって飛び込み日本刀を目玉模様に突き刺すと同時に、俺も目玉模様の中心を撃ち抜く。

理子は勢い良くブラドの両目から刃を引き抜くと、すぐさまバタフライ・ナイフで右肩の模様を深く貫く。

左手のナイフを離さないまま、理子は痛みを堪えるように負傷した右腕で自分の胸からデリンジャーを取り出した。

そのままブラドの口の中へと彼女が十字架を入られたように銃口を押し込める。

「——くたばれ！」

理子の声。雷鳴。銃声。

全てが同じ瞬間に響く。

「ぐ、お……お……お……ば、かな……オレが、人間ごごときに……い！」

悪役がよく言う常套句じょうとうくを吐き出しながら、ブラドは前のめりに倒れる。

そして俺達が離れると同時に金棒のように持っていたアンテナが倒れ、ブラドの上のしかかる。

倒れながらだらしなく出している舌には弱点である”目玉模様”。

弱点の4ヶ所目だ。

なるほど、4ヶ所目が見つからないのはそう言う事か。

撃ち抜かれ、貫かれた目玉模様からは血が溢れ出てくる。

これが600年を生きた吸血鬼の血。

ブラドが上書きし続け、いくつもの人間の遺伝子が詰まったものだろうそれが流れて行く。

異様な回復をしていたブラドだが、それも今では傷が治るような様子は全くない。そんな瀕死のブラドの傍で、理子は右腕を抑えながらその場でペタンと女の子座りする。

「はっ……はっ……やった、ついに……」

疲れたように息を吐きながら、呟く。

ブラドを倒した。

それは理子にとっては大きな意味を持っているんだろう。

こいつにとっては過去の因縁、恐怖の象徴みたいなものだしな。

自由を手に入れるため、ブラドの呪縛から解放たれるためにオルメス——アリアに勝とうとした。

けれど、ブラド本人を倒した今はアリアを襲う必要ももうないだろう。

取引は見事に白紙と言う事だからな。

何にしてもこれで一件落着いてやつだ。

「こんの、バカキンジ！」

「いつてえええええッ!!」

今までない程にアリアに足を強く踏まれた。

顔を向けると、アリアは俺に向かって差し迫ってくる。

「ほんと、ほんととバカキンジ！ 敵を目の前にして突っ立ってるなんて何考えてんのよ！！」

「あ、おい、やめろ！ 言いながら殴ってくるな！」

「ほんと……あんたを死なせでもしたら霧に怒られるかもしれないじゃないッ！」
と、アリアは俺に背を向けて言う。

それはいかにも怒ってますと言う感じのアピールだった。

確かに、最後の最後までみっともなかったしな……俺。

あんなの霧に見られてたら絶対に色々と嫌味を言われてただろう。

それに、特にアリアには心配させた。

「悪かったよ、アリア。心配させたな。それと、助けようとしてくれてありがとう」

「……ッ!? な、なな、なによいきなり!! き、気持ち悪いわね……」

おい、素直にお礼を言ったのになぜ引く。

俺のそんな心の突っ込みも虚しくアリアは俺から離れ、顔も合わさない。

「このツンデレ天邪鬼が」

アリアに向かって理子は小さく吐き捨てるように、何かを呟く。

「ツン……何だつて?」

「何でもない」

俺は聞き返したが、理子はもう一度答えるつもりはなさそうだ。

そんな時、ヘリのローター音が近付くのが聞こえる。

空を見上げれば神奈川県警のヘリがこちらを窺うように飛んでいた。

あ……雲を裂く程の咆哮が響いたんだ。通報されて当然だろう。

一応、あれにレスキュー隊とブラドの身柄引き渡し連絡をするようお願いしよう。

ブラドは鉄柱の下敷きだしな。

俺達じゃ、あの重さの物はどうにもできん。

再びブラドを見ると、どうやら動けるようになった銀狼達がブラドを心配するように寄り添っている。

あんなんでも動物には好かれてるらしい。

それとも銀狼達の忠誠心が高いのか……

まあ、襲って来ることはないだろう。

そんな銀狼達が何かに気付いたようにビルの外へと首を向け始める。

何となく俺もその方向を見ると、段々と何か……煙のようなものが迫ってくる。

風に乗って、瞬く間に広がっていく。

「なによ、これ……？」

アリアも変に思っただらしく、俺と同じ方向を見ている。

これは――

「……霧？」

そう、アリアの言う通りに霧が出ている。

それは段々とこちらに迫って来て、296メートルはあるこのランドマークタワーの屋上をあっという間に包み込んでいく。

「なんだか、気味が悪いわね……。こんな日に霧なんて出るのかしら？」

「いや、普通はないはずだ」

天気に関して詳しい訳じゃないが、それでもアリアの言う通り、こんな日に夜霧が出るのはおかしい。

大して気温が下がった訳でもない。

しかもこの霧は、俺達に向かって広がるように出てきた。

――まるで生きてるかのよう。

話してる間にも夜霧は濃くなっていき、夜の街の光が小さくなる。

おそらくだが、これはみなとみらい21の地区を覆うくらいに範囲が広い。

神奈川県警のヘリが見えなくなり、俺達がいるヘリポートの端から端さえも見えなくなる。

「……まさか」

理子が、冷や汗を流しながら何かに気付いたように漏らした言葉。

俺とアリアが顔を見合わせまさに尋ねようとしたその時――

――パン、パン、パン。

くぐもった音。

手袋をしながら拍手したような音が、このヘリポートに響く。

……おかしい。

このヘリポートには俺たちしかないはず。

屋上の扉を開けたような感じはしなかった。

コツ、コツ、コツ。

拍手と一緒に響く靴音。

「いやはや、実に……お見事」

知らない男性の声。

倒れたブラドの後ろ側から夜霧に映る人影。

俺達以外の誰かがそこにいる。

そうして現れたのは1人の男性。

これから社交ダンスにでも行くようなタキシード姿。黒い外套がいとうに黒いシルクハット、白いシルクの手袋を付けた手には黒い杖。そして黒い髪をした英国人男性だと思われる風貌ふうぼう。

19世紀の英国紳士のイメージを体現したかのような青年が現れた。

「……ジャック」

『——ッ!』

理子が呼んだ名前に俺とアリアは息を呑む。

——ジャック——

この状況……誰を指すかは1人しか考えられない。

イースト・エンド、ホワイトチャペルの悲劇の再来。

世界的な国際犯罪者——切り裂きジャックジャック・ザ・リップパー。

「失礼、こうしてお会いするのは初めてだな。リュパンのご息女が既に言ってしまったが、改めて名乗らせて貰おう」

シルクハットを取って両手を広げ、自分を大きく見せるように演技かかったような動作をする。

そのままシルクハットを持ったままお辞儀をし、

「初めまして、私の名前はジャック。世間では切り裂きジャックなどと呼ばれている者だ」

自ら、彼は名乗った。

吸血鬼に続き、出やがった……殺人鬼と言う2匹目の“鬼”が……！
 ジャンヌとファミレスにいた時に考えてた事が現実になりやがった！

「ああ、そちらの自己紹介は別にしなくても構わない。遠山 キンジにホームズ家のご息女——神崎・H・アリア、だろう？」

コイツ、俺達の事を知ってやがる。

柔和な笑みを浮かべ、シルクハットを被りながら喋るジャックは、圧倒的な存在感を放っていた。

けれど不思議と殺気は感じない。ヤバイ雰囲気も一切しない。

殺人鬼の筈はずなのに、だ。

それが逆に恐ろしく感じる。

普通、犯罪者は大なり小なりヤバイ雰囲気をしてるものだ。

なのにコイツにはそんなのを微塵も感じない。

「あんた……ブレードを助けに来たの……？」

ここで気丈にもアリアが発言した。

そうだ。こいつはイ・ウーの一員。

このタイミングで現れたと言う事は、ブラドを救出しに来たと考えるのが普通だろう。

だが――

「いいや、違う。私はただ単に賞賛と通告をしに来ただけさ」

彼は笑顔で否定した。

それから、ジャックはブラドへと近付く。

2頭の銀狼が守るように唸るが……ジャックを見て、止まる。

あの屈強なおオカミが驚愕している。人間みたいに恐怖し、止まっているのだ。

そのままおオカミを無視して通り過ぎ、ジャックはブラドに話し掛ける。

「無様なものだなブラド。まあ、これも自業自得……因果応報と言うやつだ」

「て、めえ……」

「おっと、そうだった。少しばかり貴方にお礼をしたいと言う方がいるんだ」

ジャックが楽しそうに手を2回叩くと、ジャックの後ろからもう1つシルエットが夜霧に映る。

今度は誰だ……？

そう身構えて注視して現れた姿は――シエースチだった。

紅鳴館で働いていた少女メイドが、ジャックに付き従うように出てきた。

しかし、今の彼女はあの時のメイド服とは違う。その上に何か機械的な物を装備している。

スカートの上、腰のあたりから『く』の字をした飛行機の尾翼のようなものが彼女の左右にあり、後ろ斜めに出ている。背中には機械的な3枚の刃のような翼がこれまた左右に生えており、頭にはレース付きのカチューシャの他に隠れよう髪の下にヘッドバンドのみたいな物を付けている。

「どうやらアリアの言う通り、只者じゃなかったらしいな……！」

「……………」

シエースチは紅鳴館での時のように静かだ。

ブラドの傍に近付き、見下ろすと、1丁の銃を向ける。

あれは……KBP PP190M1。

ロシアの軍や法的機関向けに開発されたサブマシンガンだ。

さすがのブラドもあの無限回復を失ったであろう今では、ただの銃弾でも十分なダメージを与えられるはずだ。

「それは私からのお礼でもある。シエースチとリユパンが世話になったからね」
皮肉の意味を込めた感じにジャックは言う。

「それから、我らがイ・ウーのリーダーである教プロフェッショナル 授から貴方の事は好きにしていると言われている。つまるところ、”やり過ぎた”んだよ貴方は」

「おの、れ……この、オレが……たかが人間、に……」

「貴方は既に人間の強さを知っているはずだ。教プロフェッショナル 授も少々長生きしただけの人間。その人間に敗れておいてなお、貴方は人間を侮った。自信がある事は良い事だが、”自信と過信、余裕と驕りおごりは似ているようで全く違う”。老兵は自ら去るが老害は居座る。そして、今の貴方は老害だと言う事だ」

「どうやらイ・ウーはブラドを見捨てるつもりらしい。」

「ジャンヌは言っていた、ジャックはイ・ウーの処刑人だと。」

「だとしたらここにジャックが来たのは、ブラドを始末するため……!」

「ちなみにシエースチの持つている銃の弾倉は全て法化銀弾ホーリだ。銃弾の形をしているとは言え、結局は純銀。お釣りが出るほどに十分なお礼だろう」

愉たのしそうにヤツは笑みを浮かべている。

「ジャックが言った『法化銀弾ホーリ』とは、魔除けのまじないがされた銀の弾丸だ。購買でもサラリーマンの年収の半分がすぐ吹っ飛びそうなバカ高い額で売られている。」

「日本と言えば破魔矢、みたいなものだろう。」

「それに銀は吸血鬼の有名な弱点の1つ。」

「ジャックウウウツ!! きさ、まあああああああ!!」

さっきまで瀕死だったブラドが突然に叫ぶ。

「逆ギレとは、みつともない……契約を先に破ったのはそちらだと言うのに。くだらない事この上ない」

ブラドに背を向け、ジャックはパチンと指を鳴らす。

その瞬間にいくつもの発砲音とマズルフラッシュ。

「ブエアア”ツ!!」

ブラドの断末魔が、響く。

おびただ
夥しい血が流れる。

数秒後、銃声は止む。

その光景に俺もアリアも理子も、何も出来ずに呆然と見ている。

「ふむ、さすがは600年を生きている吸血鬼。回復力を失ったとは言え、やはり丈夫だな……ま、生きていなければ逆に困るがね」

ジャックは後ろを向いて、そう俺達に聞こえるように呟く。

どうやらアレだけの銀を撃ち込まれたのにブラドは生きているらしい。

ほとんど死んでるようにしか見えない。

アレでも生きてる辺り、やっぱりバケモノだな。

「……………」

シエースチは黙って弾倉マガジンを捨てると、予備の弾倉を取り出した。

止めを刺す気かッ!?

それを見てジャックは呆れるように言う。

「シエースチ、やめなさい」

「……生かす理由、ない」

ここで初めて喋った彼女は冷たい視線をジャックに向ける。

紅鳴館の時とは違う機械的で、氷のような冷たい雰囲気だ。

「確かにそうだが、殺す事よりもこの状況で生かされ人間の檻に入れられた方が屈辱的だろう。それに、そちらのホームズのご息女にとっては死なれては困るみたいだからね」

ジャックの視線にアリアはビクンと体を震わせる。

ブラドはアリアにとつては母親の冤罪を着せた相手。

その冤罪を晴らすためにはブラド本人の証言が必要だ。

ヤツの言う通り、ここでブラドに死なれたら証人がいなくなり、アリアの母親であるかなえさんを救う方法が少なくなる。

シエースチはそのままジャックを見ると、静かに銃を下ろした。

何とか、ブラドを失わずに済んだようだ。

「それはそうと、私の弟子を救っていただきお礼を申し上げます」

紳士的な態度で俺とアリアに向かって謝辞を述べるジャック。

ジャンヌの言う通り、話が通じないヤツではないらしい。

このままやり過ごせるかもしれない。

大体、こっちはヒステリアモードじゃない上にブラドとの戦闘後なんだ。

特にアリアはブラドと戦った時に銃弾を多く消費してる。

例え万全だったとしても、何人もの高ランク武偵を葬り、逃げてきたであろうジャックに勝てる訳がない。

「今回の事は貸し一つと言う事で、機会があればその時にお返ししよう」

そう言うってからジャックは理子に視線を向け、名前を呼ぶ。

「理子」

「は、はい」

「帰りますよ」

「……うん」

理子は立ち上がると、フラフラした足取りでジャックの所へと行く。

全く警戒もなく行くところを見るに、理子はジャックにかなり心を許してるらしい。

これまたジャンヌの言う通り、理子がジャックを慕っていると言うのは間違いではないさそうだ。

この状況……理子がジャックに何かされる可能性は少ないだろう。様子からして、理子を迎えに来たような感じだからな。

このまま穏便に――

「ま、待ちなさい！」

アリアが呼び止めるように叫ぶ。

おい、バカ野郎！

なんで呼び止める！

直感の鋭いお前なら、このまま行かせた方が安全だつて事くらいわかるだろう!? 背を向けて夜霧の向こう側に行こうとしたジャックがこちらへと振り返る。

「何か？」

「わざわざ国際的な犯罪者が目の前に出てきて、あたしが見逃すと思う?!」
クソ、喧嘩は売るなってジャンヌに警告されてるのに！

アリアに向かって俺は耳打ちする。

「バカかお前は！　ここで相手を挑発してどうするツ!？」

「バカは、あんたよ！　武偵が、犯罪者を見逃してどうするのよ!!」

赤い瞳を向けてアリアは俺を見上げながら答える。

確かにアリアの言う事は正しい。

だが、今は違う。その正しさが、この場では命取りになるかもしれないんだ！

「もう少し状況をよく見ろ！ 今の俺は、お前の言うところのスーパーモードじゃない！ おまけに相手の実力は不明で、理子が敵に回る可能性もあるんだぞ!!」

そうなれば3対2と言う、数的にも不利な局面になる。

加えてこの濃霧。

警察のヘリがこのヘリポートに直陸するのは困難だ。

増援の見込みもない。

「クク、ハハハはははははははハハッ！」

突然にジャックは笑い出す。

「私に立ち向かうか、あまり賢い選択とは言えないな。君達には私を捕まえる事など『無理』だ。そんな事をして『疲れる』し『面倒臭い』だけだ。やめておきたまえ」

それは、アリアが俺に言った3つの禁句。

ジャックはその禁句を全てを言った。

「……やってみないと、分からないじゃないッ!!」

2丁のガバメントを抜いてアリアは激昂する。

やつぱりこうなるか！

そんなアリアに対してジャックは言葉を続ける。

「君は直感が優れているそうだが、その直感で私と対峙することは得策ではない事ぐらい分かっているのではないか？ 今の君は武偵という立場から来る使命感とホームズ家であるプライドで動かされてるに過ぎない。君と私に直接的な因縁いんねんはない筈はずだ。違うかい？」

「違うわ！ あんたをここで逃がしたら犠牲者が増える！ あたしは、その犠牲を止めたいだけよッ!!」

「やれやれ、シャーロックもそこまでは向こう見ずではなかったと言うのに……」
呆れるようにジャックは顔に似合わずどこか年寄り臭い事を呟く。

まるでシャーロック・ホームズを知っているような口調。

まさかとは思うが、コイツもブラドと同じで長い事生きている本人とかじゃねえだろうな。

「今の君は勇氣と無謀を履き違えている、そして持っているのはプライドではなく傲慢ごうまんだ。実に、つまらない。君は今まで自分の力で生きてきたと勘違いしている」

「なによ……!! 何が言いたいの?!」

「君は生かされていると言う事だ。私は教授プロフェッサーから君に手出しをしないように言われて

いる。だから、”見逃してやろう。”

ギリ、とアリアは歯軋りをする。

犯罪者に生かされてる、見逃してやる。

プライドの高いアリアには屈辱的な事だろう。

「——ッ！ 風穴、あけてやるわ!!」

怒りの限界とばかりにアリアはジャックに向かって発砲する。

夜霧がさらに濃くなり、ジャックの姿が見えなくなる。そして、銃弾がヤツの居た場所を通り抜ける。

消えた——ッ!?

夜霧が少し晴れると、シエースチと理子の間にいたヤツの姿がない。

どこに行ったんだ……!!

俺もアリアも周りを見回すが、何も見えない。

再び正面に向き直ったその時、

バサ、と服をはためかせて——アリアの目の前にジャックが現れる。

それからアリアの顔を覗き込むようにジャックは滑るように近付いた。

おかしい、正面には誰もいなかった筈だ。

なのに……ヤツはテレポーターションしたみたいに突然に現れた。

顔を覗きこまれているアリアは、声を引き攣らせながら硬直している。さつきのブラドのオオカミ達と同じで、動く事を忘れたように。

次の瞬間には――

プシヤア！

アリアの体から、鮮血が飛び出る。

防弾制服だと言うのに、布切れのように切り裂かれ、血で染まる。

目を見開いて、その光景を直視してしまふ。

手首と手、太ももと膝が離れている。

ツインテールを揺らして、倒れて行く。

「あ、アリアアアアアッ!!」

俺が叫ぶと同時にドクンと、心臓が鳴り意識が覚醒する。

そこで見たのは五体満足のアリア。

切り裂かれてはいない。

ジャックはアリアの目に前にいるが、距離はさつき滑るようにアリアに近づく前の位

置だ。

「何か見えたかね？」

そう言ってジャックは愉快そうに笑みを浮かべている。

今のは……幻覚……？

「何が見えたかは分からないが、私は君達が見た光景を現実に出来る」
そう言つてジャックは背を向ける。

アリアは膝が崩れ落ち、その場に座る。
力なくガバメントを床の上に垂らす。

「それでは——近い内に」また会おう」

夜霧の奥へと進むジャック。

理子とシエースチもヤツに続いて夜霧の奥へと消えていく。

3人の姿が霧の奥に消えた後、夜霧が段々と晴れる。

そこに3人の姿はない。

夜の街の光、雲の掛かった夜空が見え始める。

霧のように悪夢が、去つて行つた。

53：語れない真実

ジャックとの邂逅^{かいこう}。

この間のブラドの一件でとんでもないヤツと出会ってしまった訳だが、俺達は生きてる。

いや……生かされた、と言うのが正しいだろう。

自分のやるべき事をやったとばかりにヤツは、俺達の事を歯牙にも掛けず去って行った。

アリアのプライドで一時はどうなるかと思っただけだな……

あの時は本当にアリアが切り裂かれたように見えた。

だが、それは幻覚。おそらくだが……ジャックの殺気だったんじゃないかと思う。

明確な殺意を向けられ、あのまま踏み込んだらどうなるかと言うビジョンを俺達がイメージしたんだろう。

——ジャンヌや理子が深入りするなと言った理由を思い知らされた。

イ・ウーと言う禁忌^{タブー}の存在の中でも、さらなる禁忌^{タブー}だと理解した。

ジャックに関して考えるのはこれぐらいしておこう。

ブラドはと言うと、あの後は警察や武装検事が出てきて身柄を搬送された。今は都内の中でも大きい留置所に入れられているが……近い内に長野の方に移送されるそうだ。

そんなブラドの屋敷である紅鳴館で窃盗行為を働いた事を武偵高の教師陣に戦々恐々としながらメールで報告した訳だが、返って来たのは処分の通知ではなく分厚い資料だった。それも理子もやったであろう『司法取引』の。その分厚い資料を読んで手続きの書類を纏めると、要点は2つ。

ブラドの一件は永久に他言無用、その代わりに窃盗行為などのお咎めは一切なし。

ジャックについての情報提供。

これだけだった。

そして、ジャックに関してもブラドと同様に他言無用と釘をさされている。

国際的な犯罪者が未だに日本にいるなんて混乱を招くだろう。

警察や武偵の批判にも繋がりがねない。

2年前の中学の時に警告として言われたあの時からずっと日本にいたのかは知らないけどな。

それから、ニュースによるとどうやらランドマークタワーでの出来事は落雷事故と言う事になってる。

誰がどんな根回しをしたかは知らないが……それがいいかもしれない。

あんな体験をした俺から言わせてみれば、知らない方がいい。その一言に限る。そうだ目の前の事に集中しよう。

「ひゃつはー！ りこりんがシュシュツと参上！ みんな、ただいまー♪」

なんでお前がいる！

教室でいつも通りに席に座っていたら、何事もなかったかのように理子が帰ってきやがった。

よくもまあ、何食わぬ顔で！ いつも通りに！ 教室のみんなにおだてられていられるもんだな！

……だが、ここでそんな事を突っ込んだところでネクラな俺の意見なんて誰も耳を傾けないだろう。

それどころか奇異な目で見られる、確実に。

「どうかしたの？」

俺の葛藤に気付いたのか、霧がナイフをチラつかせながら聞いてくる。

つて言うかそんな物を持ってこつちに来るなよ。

「いいや、別に」

俺と霧の声がハモる。

「と、キンジは言う」

「セリフを合わせてくるなよ」

「うーん……」

霧は唸って俺の顔を見た後に、理子の方を見る。

それからナイフを仕舞ってポン、と手を叩く。

「この間の任務とやらで理子と何かあつて、予想外の事が起きた。どう？」

霧は指を向けながらクイズの解答みたいに答える。

かなり具体性に欠けるが、大体あつてやがる。

相変わらずの察しの良さだ。

だが――

「悪いがノーコメントだ」

そう答えるしかない。

司法取引であの時の件の事は他言無用なんだからな。

それだけで霧は納得したのか、言及して来ない。

「なるほど……そう言えば、神崎さんは？ あつちもどうかしたの？」

霧にそう言われて隣を見れば、アリアはどこか上の空のような顔をしている。

理子が出てきたって言うのに、何か静かだと思つたら真つ先に反応しそうなヤツが反

応してない。

と言つても、ジャックと会つてからあの調子だ。

俺にはあいつの気持ちがよく分からないが……ジャックの言葉が引つ掛かつてるんだらうと思う。

俺だつてあの発言には疑問を覚えた。

なんでイ・ウーのリーダーはジャックにアリアを襲う事を止められているのか？

そもそも、そのリーダー様はアリアの事を知ってるんじゃないか？

じゃないと説明がつかない部分もある。

ジャックはリーダーの事を『プロフェシオン』と言つていたが……

あんなヤツやブラドを従えてるあたり、そのプロフェシオンとやらはそれ以上の實力を持つているんだらう。

ほんと、アリアはあんなヤバい連中がいる組織を相手に戦つていたんだな。

と言うか俺もブラドや魔^{デモンダール}剣ことジャンヌを倒してるからケンカは既に売っちゃまってるようなもんだし他人事じゃないが。

なんて考えてる内に霧はいつの間にか離れていて一般授業が終わり、アリアは専門科目の移動で教室を去つて行く。

終始静かだったな、アリア。

いつもと違って儂く見えた。

そのまま探偵科インケスタの授業に入るが、理子は理子でアリアと違い、いつもと変わらず。

休み時間に入れば何やらゲーマー友達と一緒に最新のギャルゲーがどうのと普段通りだ。

おかげで話し掛けづらい。

話すのはもちろん、約束の兄さんの情報の事だ。

ここに帰ってきたって事は少なくとも約束を有耶無耶うやむやにするつもりはない筈だ。

ジャックとの関係が気にならない訳じゃない。

けど、ジャンヌから警告されて止められてる事だ。わざわざ墓穴を掘りたい訳じゃない。

何よりも優先すべき事が俺にはある。

しかし、そのまま時間は過ぎてとうとう放課後になってしまった。

理子もそそくさと教室から出てしまい、仕方なく探偵科棟インケスタを出ようとする。

その時に出入り口で背を向けている理子の後ろ姿が目に入った。

そして、そのまま俺が出てくると――

「おっす、キーくん。りこりん、恋人みたいに待ってたよ♪」

なんて言いながら表理子のまま笑顔で近付いて来る。

恋人うんぬんの発言はスルーする。

「お前、右腕はいいのか？」

授業中も気になったが、あまり右腕を動かしてはいなかった。

あのオオカミにかなりの力で噛まれてたからな。

早々に治つたりはしないだろう。

「大丈夫だよ、封印してるしたまに疼うずくだけだから」

なんだ、その厨二病っぽい返し方は。

と思ったが……どうやら問題ないらしい。

そのまま俺達は無言で、雨が上がってしばらく経った湿気臭い道を並んで歩く。

「……聞いてこないんだね、理子と“あの人”の関係について」

歩きながら、視線を落とした理子から声が掛かる。

“あの人”と言うのは、十中八九ジャックの事だろう。

さつき考えてた通り、あまりその事を掘り返さない方が良さそうだ。

地雷を踏み抜きたくはない。

俺の命の安寧のためにも。

「これ以上、厄介事に首をあまり突つ込みたくはない。知れば危険なんだろう？」

「あー、うん……そうだね……」

理子は視線を逸らす。

おい、なんだその歯切れの悪い返し方は。

と思っただが、聞き返してはいけないような気がした。

それこそ厄介な臭いがプンプンする。

最近、俺にも直感が備わってるような……そんな気がするぞ。

だから俺もアリアと同じように直感を信じよう。

「それよりも約束の件だけど、情報は既にパソコンのメールに送つといたよ。私は”約

束を守る”」

約束の件……！

その単語が出た瞬間に俺は振り向き、いつの間にか立ち止まって後ろにいる理子を見る。

俺を見ながら理子は、真剣な顔で1つ忠告するように言った。

「ただ、キーくんの知ってる人とは別人みたいになってるかもしれない」

「それってどう言う意味だ……？」

「そこまでは、答えられない。私にもどうなってるか分からないから」

本当に意味が分からない。

ただ、兄さんの身に何かがあったような言い方。

あの兄さんに、一体何が……

俺が少し思案に耽^{ふけ}り、理子に尋ねようと顔を上げる。

けれど、そこに理子の姿は既になかった。

ただ湿っぽい風が虚しく吹き去って行く。

◆ ◆ ◆

キンジの顔が下がった時にあたしは退散させて貰った。

金一に連絡は既に入れてある。

ジャツクの息が掛かっているあたしの事を警戒しているような雰囲気だったけど、無理も

ない話。

お姉ちゃんと一緒に罨^はに嵌めたようなものだからね。

一応、上役だった事もあってあの時の出来事には罪悪感が少し募っている。

話を戻して……何やらキンジに話しておきたい事があるっぽかったから、おそらく金

一は来るだろう。

それにしてもキンジは少し危なかったな……ブラドの時に危うく絆^{ほだ}されそうに

なった。

おかげでちよつと、変に意識しちゃう。

大体、あたしには既にお姉ちゃんと言う存在が――

って、違う……！ お姉ちゃんは大事な存在だけど” そう言う存在” じゃない！

あたしはホントに何を考えてるんだ。

間宮 あかり大好きっ娘じゃあるまいし。

それにしてもブラドの時はお姉ちゃん何も言わなかったね。

ヘリポートから退散してから、あたしの事を軽く治療したらすぐに去っちゃったし。

何て言うか、雰囲気若干違っただよね。

どう違っかって言われたら表現しにくいんだけど……機嫌が悪いって言ったらいいのかな？

あたしの気のせいかもしれない。

けれど、そんな風に感じたんだよね。

考えてる内に女子寮へと帰って来て、私の部屋の鍵を開ける。

このあとはアリアとの約束を守る為に、神崎かなえの弁護士である連城れんじょう 黒江くろえと会う

予定だし出かける準備をしないと。

——カチャ。

ん？ なにこの手錠みたいな音。

と思つて右手首を見れば本当に手錠が掛かつてる。

あたしが入ろうとした部屋の角から手が伸びて、その手が手錠に続いている。

……誰？

そう思つて覗こうとする前に誰かが飛び出し、ベッドへと上手く足運びをされ押し倒される。

痛む右腕に意識を持つて行かれたせいで抵抗をする間もなかった。

「この姿で会うのは久しいね、理子」

そう言つてお姉ちゃんがあたしの顔を真上から見下ろしてる。

どう言う状況……？

あたしが組み敷かれてるのは分かるんだけど、何かおかしい。

垂れ下がってる髪は、黒じゃなくブラウンとピンクのグラデーションをした髪。

夕日に当たつて赤く見えるけど、瞳は青紫。

つまりは素顔だ。

確かに素顔で会うのは久しいけど――

「えっと、お姉ちゃん。どうかしたの……？」

いつも通りの笑顔なのに心なしかお姉ちゃんが怖く感じる。

ちよつと恐怖心が混じりながらも聞く。

「どうかしたも何もね……聞いてて自分で分かつてると思うんだけど？ 特にブラド

の件について」

うん……やっぱり誤魔化しは通じなさそう。

「まあ想像するのは簡単。私の影に守られている事が嫌だった、だから自分の力で自由を勝ち取ろうとした」

あれだけ情報が出揃ってれば、推理するのも簡単だろうね。

やっぱり、ほとんど隠してる意味がなかった。

「私の方針上、その事について咎めたりはしないよ。だけど……リリヤに心配をあまり掛けないようにしないとお姉ちゃん失格だからね」

「うん……」

「もしブラドとの取引に理子が失敗してたら手が出せなくなるところだったんだよ？

今回は向こうから反故ほごにしてくれたから失敗しても私とリリヤが出るつもりだったからいいけど」

お姉ちゃん、普段から律儀に約束を守る方だったよね。

だからきつと、あたしとブラドの取引が失敗してたら……この人は手を出してこない。
い。

あたしが檻に戻ってた可能性もある。

「でも、それでも……あたしは自分の力で帰れたかった」

「分かっているよ。ブラドの時はお父さんから釘をさされた事もあって最初から手出しで

「きなかったけど……でも、もし今度同じような事があつたら私が助けに行くよ。」約束する」

そう言つて、微笑む。

やっぱりお姉ちゃんは、ズルい。

居心地が良過ぎる。

「だけど……それとこれとは話は別で、ちよつとお仕置きしようかな？」

「……え？」

「ああ、別に肌を切り裂いてみたいとかそんなんじゃないよ？　ただ、私の存在を理子に

刻んであげようかなくなつて♪」

そ、そつか。

てつきりお姉ちゃんの事だから、そう言う風な展開――

……あれ？　ちよつと待とうか。

お姉ちゃんの存在をあたしに刻むつて、何か表現がおかしくない？

「お姉ちゃん、今のどう言う意味……かな？」

「ん？　そのままの意味だけど、夾竹桃がそうするとイイつて」

えつと、夾ちゃんが？

何か嫌な予感がするんだけど。

「ちなみに参考に本も貰ったんだけど」

そう言ってお姉ちゃんが取りだしたのは……コミケでも馴染み深い。
つまるどころ、

——ウスィイ・ホンだった。

……お、おiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiッ!?

あの腐った蠍さそりはお姉ちゃんに何て物を渡してるんだ!

この人にそんな物を渡したら、とんでもない化学反応起こしちゃうかもしれないにッ!

おまけに表紙から見ると絶対百合モノだよ!

「理子がどんな反応してくれるか……楽しみなんだよね」

本を仕舞い、弾むような声にいつも通りの笑顔。

かなり楽しんでるパターンだ。

ヤバイよ……天然DSが本領発揮しちやってる。

と言うか、お姉ちゃんの左手とあたしの右手がいつの間にか手錠で繋がってる。

おまけにあたしの脚の間にお姉ちゃんの右脚が割り込んでるのを見るに、これ……逃がす気がない。

「あ、あのう……あたしこれから用事が——」

「神崎の弁護士と会うんでしょ？　そして、連絡はこれから入れてそれから会いに行く。つまり連絡を入れるまでは具体的な時間は決めてない。だから、時間はそれなりにあるよね？」

「何故か把握してらっしゃるツ!？」

「何にしても、早くも逃げる口実がなくなつた。」

「と言うか予想外の展開過ぎて思いつかない。」

「顔が、近付いてくる。」

「同時に体重も段々と感じる。」

「血の臭いじゃなく、紅茶みたいな香りが鼻腔びこうをくすぐる。」

「見てる人いなくてさあツ！　言わせて！　誰得!?　誰得なのこの展開!？」

「そんな風に心で叫びながらも思わず目を閉じる。」

「ねえ、理子。別に嫌なら『嫌だ』って拒んでもいいよ？　それ以外の言葉は受け付けないけどね」

「いきなり口付けされるかと思つたら、耳元でお姉ちゃんが囁く。」

「拒否権を提示してくれるのはいいけど、そんなの……無理だよお……」

「理子、もっと肩の力を抜いて……私の言葉を聞いて」

「目を閉じてるせいで耳から聞こえる甘い声が余計に響く。」

少し目を開けると、左耳に顔を近付けてる。

けど、こつちに気付いてお姉ちゃんが微笑んで見てきた。

って言うか近過ぎて息遣いまで聞こえてきそう。

恥ずかしくなって、結局は目を閉じて仰向けになるしかない。

「もし理子が拒まないなら、このまま色々が無茶苦茶にするよ？ 全部、何度も、何度も、

嫌な思い出が忘れるくらいに全部壊してあげる」

息遣いが、凄い。

蠱惑的過ぎて、変な気分になつちやう……ッ！

「右から聞こえる時計の音に集中して」

いつの間にか右耳からカチカチとなる時計の音。

あたしの懐中時計の音だ。

「聞きながら……今度は私の声に集中。理性が時計の音と一緒に崩れて行く、私の声を

聞く度に意識は溺れて行く」

「あ……う、う……」

これ、いつかの温室で聞いた時よりもヤバイ。

本格的に墮とされる。

「溺れて、溺れて……反響して、反応して、反発して。名前を呼ぶ度にさらに溺れる」

「おねえ——」

「理子」

「……ッ！」

「理子……理子……理子」

名前を呼ばれる度に体がピクンピクンと自然に反応する。

脚が勝手に伸びる。

何、これ……？

体が、お姉ちゃんの体温とは別に熱さを感じる。

「ねえ理子お……もつと、どうして欲しい？」

愛おしそうに私の名前を呼んで、聞く。

頭が痺れてくる。

「あ、ま……ま」

「それじゃあもつと名前を呼んであげるね」

待って、と言う前に行動される。

「理子……理子……理子お……！」

「——ひうッ!？」

最後だけ力を入れて名前を呼ばれる。

同時に体も少し大きくビクつく。

「落ちよう? もつといっぱい溺れよう?」

エコーが掛かったみたいに脳内に声が、響く。

あたしの理性が、海辺の砂のお城みたいに崩れてく。

「ほら、段々と時計の音が加速して聞こえてくる」

カチカチカチカチとやけに時計の音が早く聞こえる。

あたしの理性が、加速的に崩れるのを感じる。

お姉ちゃんの言葉が、大きな波になってあらいながしてく。

こんなの……たえられない……

しこうが、ぶれちやう。

「同時に右腕の痛みが心地よく感じる。ジンジンとして、熱くなる」

ほんとうに、あつい……

ゆびをからませてにぎられてる右手がきもちよくかんじる。

右腕のジンジンとしたかんかくが、せなかでゾクゾクにかわってる。

いつの間にかあけてる目が、ぼーっとてんじようをみあげるしかない。

「これで準備はおしま」

さいごにそう言って、あたしの目におねえちゃんのかおがうつる。

まっすぐに見られてる。

もうわけがわかんない……はずかしくてしんじやいそうなのに目が、はなせない。「——今から本格的に壊してあげる♪ いいよね？ それとも『嫌だ』つて言う？」

さいごにそう聞いてくる。

いやつて言えば、ここでおわり。

だけどなんだろう……

こぼめない。

こぼむ気がない。

やめてほしくない。

「くす……」

なにも言わないでいると、お姉ちゃんがすこしわらい、かおがちかづいてくる。

この人のそんざいをきざまれる。

こわされちゃう。

でも……それで、いいんだ……

なにもかもふれられそうなくらいにちかく——

「理子お姉さま——」

とたんにお姉ちゃんがおざかる。

「この声、麒麟ちゃんか……せつかくこれからのお楽しみだつて言うのに」

ざんねんそうに言いながら、

「まあいいや。楽しみは後に取っておくものだしね」

どこか楽しみがふえたようなことを言つててじょうを外し、あたしのおでこに少しくちづけをする。

ベッドからはなれて行くのをしせんだけで、むいしきにおう。

「ブラドみたいなのに自分を奪われるのが嫌なら、本格的に私のモノになり来るといいよ。いつでも待つてるからね」

あたしに背をむけながらベランダにいつて、まどをあける。

それからベランダのはじで、なにかにきづいたようにふりかえる。

「目を覚まさせるの忘れてた。3つ数えて、0になったら意識が覚醒する」

そう言つてゆびを3本たてる。

「3、2、1、0」

カウントといっしょに指を上げて、さいごにパチンと指をならすとどうじに、お姉ちゃんはせなかから落ちた。

(あれ……あたし……)

何故か目が覚めたみたいにハッキリし出す意識。

ベッドから体を起こして思い出す。

けれど未だに視線がぶれる。

ほわんとした感覚。

本当に寝起きみたいな、感じ。

途中から意識半ばだけど……ナニされる所だったかちやんと覚えてる。

そう、言葉も何もかも覚えて——

覚えて……

………ツ!?

せ、鮮明に覚え過ぎててヤバい。

恥ずか死する……!

すかさず枕に顔を埋めて悶絶する。

何かして紛わせないと羞恥でおかしくなる。

……最悪だ。

◆ 今度からどんな顔して会えばいいのか、分かんないよ……

◆

◆ 理子の部屋をベランダから出て降りた私は、自分の寮に向かってしばらく歩く。

理子には軽く催眠を掛けたつもりなんだけど、少し予想外にも思ったより早く掛かっ

た上に深かった。

催眠って拒絶の意思があればそう簡単にならないものだし強制するものじゃないから普通に抵抗できる。

理子は私の言葉を全部受け入れてるあたり、拒むつもりは全くなかったって事だろうね。

つまりもう少して色々と出来た。

そう思うと、おしかつたな〜

もつたない事しちやつたかな？

まあ、その分の楽しみが増えたと思えば良いんだけど物足りないんだよね。

なんでこんな事するのか聞かれれば……何でだろうね？

夾竹桃に相談したらさつきみたいにするってイイって言われたからってのもあるけど

……

ただブラドのを見て、なんとなく気に入らなかつたのは覚えてる。

こんな感覚は今まで無かつたんだけどな……

なんて言うんだろう？ 感覚と言うよりは欲求なような気もする。

あんまり考えても分かんないし、深く考える必要もないかな？

きつとその内に分かる気がする。

理子の事は置いておいて、そう言えば金一がこつちに来るんだっけ？
何するか知らないけどキンジには会うだろうね。

……キンジを追つ掛ければ会えるかな？

確か、理子からキンジは金一についての情報を貰う事になってた気がするし。
兄弟の再会を邪魔するのも無粋な感じだから、見物させて貰おう。

あれから金一がどんな風が変わって、どう言った選択肢をしていくのかも気になるし
ね。

よし、決めた。

この物足りなさは金一をからかって解消する事にしよう。

金一とカナのどつちで来るかは知らないけど……

私としてはどつちでもいいんだよね。

そうと決まれば早速、白野 霧に戻らないと。

私はワクワクしながら変装して『空き地島』へと向かう。

◆

風力発電機のプロペラに座り、瞳を閉じて待つ私。

理子がキンジに私の情報を渡す約束をしたから、来て欲しいと連絡を受けた。

疑心があった事は否定しない。

だって、あの子とはんでもない災厄の弟子みたいなもの。
私を陥れもした。

それでも私はこの話を受けた。

だから東京武偵高からレインボーブリッジを挟んで向かい側にあるこの風力発電機
と不時着した飛行機しかないこの人工島メガフロートにいる。

キンジに会わなきゃいけない。

会つて、私の答えを聞かせなければならぬ。

巨悪から家族を守る為に、今までの私とは違う道を選ぶ事にした。

だけど”それ”を私が選ぶかどうかはキンジ次第。

私よりも可能性を秘めているあの子に、少し期待を寄せてる。

他力本願な思い、けれど……可能性を開花させなければこの先は生きていけないのも

事実。

特に身近にある脅威を知らないのが心配なところもある。

そう……何も知らない

シラ書14章16——迷いと闇とは、罪人と共に生じ、悪は、それを誇る者と共にと

どまる。

その悪を誇る罪人がキンジの傍にいる。

正体に気付けば、きつと心を壊してしまう。
そんな事をさせちやいけない。

心を壊すのは私一人で十分。

例え家族に拒絶される事になつても——守つてみせる。

瞳を静かに開ければそこにはキンジがいた。

私を見てどこか驚いた顔をしながら、不時着した飛行機の上部を歩いて近付いて来る。

その顔は最初はどこか本物が疑つてる顔だったけど、距離が縮まる度に確信へと変わつていつてる様子だった。

「キンジ、ごめんなさい。イ・ウーは……遠かつたわ」

謝罪と、私の挫折を秘めた一言。

キンジにとつては何のことだか理解できないでしょう。

それでも謝つておきたかつた。

私の弱さで孤独にしていまい、キンジに心を許す隙を与えてしまった。

「——今まで、どこで何をしてたんだよ!?! どう言う事なのか教えてくれツ?! カナ

……いや、” 兄さん”!

心配からくる怒り、キンジは私に事情を求める。

だげど悠長に話してゐる暇はない。

それよりも確認しなきゃいけない事がある。

「キンジ、アリアとは……仲良しなの？」

私の唐突な問い掛けに眉を寄せる。

意味がよく分かつてないのは当たり前だけど、これぐらいじゃ伝わらないわね。

この子に色恋の話は直接的に言わないと通じないから。

「——好きなの？」

それではうやく大きな反応が返ってくる。

キンジは視線を逸らして、何かを思い出して羞恥した顔をする。

相変わらず初心うぶね。

思春期の子供みたいなカワイイ反応。

もう少しそこら辺は大人になって欲しいところだけど、今は関係のない話。

「そんなの、今は関係ないだろッ！ どうしてアリアの話が出てくるんだ!？」

大きく声を出しながら誤魔化し、一步踏み出してくる。

”意識”は、してる……だけどそれを自覚してる様子はない。

言葉を詰まらせるのではなく誤魔化したと言う事は、まだまだキンジの中でアリアは大きな存在にはなっていないと分かる。

だったら、”まだ間に合う”。

「肯定、しなかつたわね」

私とアリアを天秤てんびんに掛ければ、私を選ぶ可能性が残ってる。

それでもアリアの存在がどの程度のモノか確かめる必要があるわね。

「もしそうなら……一人で済ませようと思ってたんだけどな」

少し間を置いて、私は唇を開く。

「これから一緒に——アリアを殺しましょう」

今までの私ならばしなかつた答え。

何かを犠牲にして守ると言う、選択。

キンジの中でアリアがどれ程の存在なのかを確かめる意味もある。

私の言葉に目を見開いてキンジは、

「な、なにを……言ってるんだよ……兄さん!？」

と私を見て震えながら、言葉を絞り出す。

私は「お兄さん」ではない筈なんだけど。

そんな事も分らないくらいに動揺したみたいね。

「カナ、今からそっちに行く」

呼び直し、早口で言いながら飛行機の胴体から主翼へと移って私の所へとさらに近付

く。

主翼の端までのほんの少しの距離で、キンジは汗を顔に浮かべている。

それは……私の発言に戸惑ってる動揺の汗。

私自身こんな発言するとは思ってなかった。

それもこれも――

……………。

頬を撫でるような風が少し吹くと同時に、隣の風力発電機のプロペラが少し揺れる。

それを視界の端で見た後に、私はキンジに向き直る。

視線が合い、キンジが先に自分の中で生じている疑問を紡ぎ出す。

「本当に、どうしたんだよ……半年ぶりに会えたと思ったら、アリアを殺す……？ 何の

冗談だ？」

「冗談ではないわ。もう、決めた事よ。私は今夜、あの子を亡き者にする」

今夜と言ってももう少し待つつもり。

だけど、覚悟は本物である事を私は示す。

「あの少女はいずれ諍^{いさか}いの種になり、争乱を巻き起こす元凶となる。すなわち、悪。悪を

討つは私達、”義”に生きる遠山の天命……」

何が義なのか、自分自身で言っていて笑っちゃうわね。

イ・ウーと言う強大な力を崩すには、私1人では荷が重すぎた。

大事な信条を折られて敗北し、犠牲無しでは勝てないと言う事を思い知らされた。

それにこれからあの少女が台風の目になるのは明らか。

戦役になれば確実に敵に回るであろう狂人。

期待を寄せていても、キンジをこの先の危険に晒したくないと言う思い。

全てを防ぎ、成し遂げるには……神崎・H・アリアを犠牲にした上でしか成り立たない。

一時の悲しみで多くのものを救える。

何十、何百、何千と方法を考えて、何万と何十万との苦悩と葛藤の渦を抜けた果てに

掴んだのは変わらない真実。

——もう私の『正義』は、犠牲無しには成り立たない。

「カナ！」

名前を呼んで、キンジは主翼から私のいるプロペラへと飛び移ってきた。

2メートル程の距離、だけど高さは15メートル。

落ちれば危険だった。

相変わらず危ないことするわね。

あまり私に心配させて欲しくないんだけどな。

着地と同時にプロペラが少し揺れ、キンジはバランスを崩しそうになる。

そうして何とかしつかりと両足で立ったのを見て、

「キンジ、早く行きましょう。あの子はまだ飛び立ての雛と一緒……仕留めるのは簡単」

私は日が落ちる東京を背に立ち上がり、少し急かすようにキンジに言う。

「ちよつと待てよ、まだ色々話を聞いてないッ！ カナはイ・ウーにいたのか?! だと

したら、なんであんな組織にカナは身を置いていたんだ!？」

立て続けに投げ掛けられる言葉。

沈黙は金。

知らぬが仏。

キンジに教えるわけにはいかない。

「応えてくれよ……! カナ!!」

「イ・ウーについて、答える訳にはいかない。知れば面倒な事になるわ。」こちら側”に
来てはいけない」

言いながら私は振り返る。

「ただ、私を信じて付いて来て欲しい。ううん、別に協力しなくてもいいわ。これから私
のやる”仕事”を看過するだけでも良い……大人しく、待っていて」

私が言い終わり、キンジは顔を伏せる。

私の言葉の裏に何かしらの理由が存在する事ぐらひは分かってるでしょう。血を分けた家族だもの。

言わなくても伝わる部分はある。

カチャと、何かを構える音。キンジは私に向けて銃を構えていた。

これは……想定外だったな。

無意識かも知れない。

だけど、確実に私に向けて敵意とも殺意とも違う。何かの意思を持って、立ちほだかっている。

それはまるで、キンジの後ろにある武偵高の中にいる存在を守るように。

そっか……キンジにとってアリアはそこまで大事なのね。

測り間違えたかしら。

もつとも、本人はどうして自分が私に銃を向けているのか分からないような表情をしてるけど。

きつと頭の中の整理もついていない筈なのに、キンジはまたしても問い掛けてくる。

「カナ……今のあんたは本当に別人みたいだ。どうして、何だよ……！ 一体、イ・ウーで——この半年で何があつたんだ!？」

「——何も答えられないわ」

答えてはいけない。

応えてもいけない。

迂闊な事を言えば、キンジを危険に晒す事になる。

「それよりも、武器を軽々しく見せちやダメよ。その武器の性能が分かってしまえば、立ち回り方を教えてるようなもの……覚えておきなさい」

言った直後に、キンジに向かって発砲する。

それは右耳と右肩の間を通り抜けるように不可視の銃弾が飛ぶ。

マズルフラッシュと発砲音しか分からないくらい早撃ち。

キンジに向かってこの技を使うのは試す意味もある。

「うおッ!」

銃弾が通り抜けた音に体が本能的に反応して、キンジは私から見て右へと大きくバランスを崩す。

足を滑らせてプロペラから落ちる。

キンジはすぐプロペラにベルトのワイヤーを引つ掛けて宙に浮く。

そのワイヤーに向かって再び私は『不可視の銃弾』を放つ。

”切る”のではなく”掠める”形で銃弾はワイヤーを通り過ぎる。

その事にキンジは驚愕しながらベレッタを仕舞い、段々と解れていくワイヤーを見た

後に私を見上げる、まだ抗う意思を持った眼をして。

「私とキンジの戦力差は絶望的。なのに、どうして……」

この状況でどうして、そんなにも真っ直ぐでいられるの？

キンジは這い上がろうと手を上に伸ばしてワイヤーを掴む。

けれど……プツプツと切れる音が私の鋭敏な耳に届く。

這い上がる前に切れるのは確実。

手助けする準備をしながら、私はキンジに同じ事を聞く。

「キンジはアリアと……仲良しなの？」

「なにを……言ってるんだよッ……!?!」

「——好きなの？ アリアのこと」

「意味が分からねえよ!!」

理解が追いついていない。

絶望的な状況。

なのにキンジは、自分の意思とか関係なく無意識に守ろうとしてる。

反骨の眼をしながら叫んでくる。

前から打たれ強く、逆境には強い子だと知ってはいた。

しかしその強い心がどこから来てるのか分からない。

でも、

——羨ましく思う。

唐突に一陣の風が吹き、キンジの体を揺らす。

蜘蛛の糸のような細さになったワイヤーがその反動で切れ、キンジは背中から落ちていく。

すぐさま忍ばせていたワイヤーを投げ伸ばして、キンジのベルトの金具に引っ掛ける。

そのままワイヤーを引き上げていけば……キンジは意識を失っていた。

これしきの事で気絶するなんて、やっぱり心配な部分が残るわね。

相変わらず手間が掛かる事に苦笑しながらもプロペラの上に寝かせてワイヤーを取り替える。都合よく気絶してくれて良かったかもしれない。

私は立ち上がり、プロペラが少し揺れた隣の風力発電機を見据える。

「そこにいるんでしよう?」

あれしきの風でプロペラは動いたりしない。

おそらく、私に気付かせるようにわざとらしく動かした。

「久しぶりだね」

陽気な声でプロペラの中心の影から顔を出し、発電機がある部分へと姿を現した彼

女。

「やっぱり聞いてたのね——ジャック」

思わず指に力が入る。

「やだなー、今の私は白野 霧だよ。だからそんな指を動かして身構えないですよ」

ニコニコした顔をしながら私の行動を見透かし、舐め回すような視線。

不愉快極まりない。

「私に始末されに来たの？」

「優しいな表情して随分とツンツンした事を言うんだね。もつと仲良くしようよ、お

義姉^{ねえ}さん」

「お義姉さん呼ばわりされる覚えはないわ、キンジの前から早く消えて」

「それは無理な相談。だってキンジは私がいないと危なっかしいし……一緒にいた方が

退屈しないで済むからね」

そう言つて微笑むジャックはキンジにとつて害悪にしかならない。

キンジがアイツに惹かれる度に傷跡は大きくなつていく。

心を許してる分だけ深くなる。

そう思えば、あの時に迷つていなければ良かったと後悔している。

あのアンベリール号の上で引き金を引いていれば……

「それに『キンジの良いパートナーでいて欲しい』って、以前に私は聞いたと思うんだけどな」

1年前の夏に確かに言った。

あの時はこんな事になるなんて予想できなかった。

「どうせ……裏切るつもりでしょう」

「うーん、それはこれからの選択次第かな？ 場合によつて白野 霧として生きていくのも悪くないかなーなんて思い始めてるし」

相変わらず本音かどうか分からない言葉。

何を考えてるのか理解できない。

「実はキンジを家族にしようと思ってるって言ったら……どうする？」

「認める訳がないわ」

「じゃあ、キンジが私を選んだら？」

「その前に私が殺すわ」

「……………」

視線が鋭くなってるのが自分でも分かる。

私の言葉にジャックは少し黙る。

唐突に笑みを浮かべて、

「ふふ……あはははははははは！」

肩を震わせて笑い出す。

子供みたいに笑って、笑って、ただ笑う。

無邪気に。

「はあ……うん、いい表情してるよ。だけど私を殺すつて事はキンジに拒絶されて家族じゃなくなるかもしれない。それでもいいんだ？」

身振り手振りを交えて面白そうに問い掛けてくる。

「例え家族じゃなくなっても失う訳にはいかない」

「いい決意だよ。口八丁の政治家や老害の数千倍は面白い！でも、そう簡単にまだ消えて上げる訳にはいかないんだよね」

くるりと背を向けて腰で手を組み、機嫌の良さそうな足取りでうろうろと動き回る。

「アリアを殺す事を聞いておいて、何もしないのね」

生じていた疑問を私はヤツに投げ掛ける。

そこでヤツはキョトンとした顔をしてすぐに微笑み返してくる。

「私は、何もする必要がないからね。神崎さんが関わる事にはあまり手出ししないように言われてるし……ただ、近くで観てるだけだよ。カナが何を考えてるかは大体の予想はつくし、私が察する事が出来る程度と言う事はつまりお父さんの“推理の領域”を

出ない。所詮は掌たなこころの中って事だよ」

相変わらず人を見透かしたような顔をしてくれる。

「久々に話せて楽しかったよ。それじゃあね〜」

そう言つてヤツは立ち去ろうとする。

だけど、何かを思い出したように立ち止まって私へと向き直る。

「あ、そうだ。武偵高で”キンジの隣”に私はよくいるから……いつでも見に来るといいよ」

今度のは、ただの笑みじゃない。

——嘲笑。

それを見た瞬間にどうしようもなく殺意が湧き上がる。

キンジを支え、隣にいるのは自分だと言わんばかりの皮肉。

人の神経を逆撫でる言動。

何もかもが気に食わない。

今は完全に背中を向けているヤツは、私の事を見ていない。

ここで仕留められるかもしれない……！

私は両脚を少し開けて、西部劇のガンマンのように構える。

一度も私と対等な条件でヤツは戦つた事がない。

精神を乱し、極限の状況下で私を迷わせるような選択肢を突き付ける。

そう言った自分にとつて都合の良い流れを作つてから、勝負を挑んできた。

それはつまり……”正面で戦えば私が勝つ”。

その可能性が高い。

手の内を未だに多く晒す事はないけど、闇討ちに奸計かんけいを常套手段としているのならあり得ない話じゃない。

1 / 36秒の早撃ち。

まだ人間であるのなら、ヤツがこれをかわを躲す事は不可能！

パパーン！

迷いなく引き金を引く。

銃声はほとんど1つに聞こえる。

だけど放たれたピースメーカーの銃弾は12発。

その全てが真つ直ぐにヤツへと飛んで行く。

音がした時点で反応したけれど、もう遅い。

弾は全て体に吸い込まれ、貫いた。

しかし――

人差し指を左右に振りながら微笑して、ヤツは立っていた。

防弾服のない頭部や手足に穴は空いてる。

なのに、どうして……!?

いや、それどころか穴がすぐに塞がった。

まさか……

「良いよ、その隙あらば私をこの世から排除しようとする姿勢」

自分の命が狙われていると言うのに、この状況でジャックはそれを楽しんでる。

「イイ……楽しい！　　楽しいよ！　　もつと私を追いかけて来て！　　私にもつと色んな顔を見せて欲しい！」

それから興奮した顔で叫んでくる。

ゾクリと背筋が震える。

何なの、この悪寒……

今までに感じた事のない恐怖心に警鐘が鳴っている。

これは——狂気。

幾度となく対峙し顔を合わせていて、感じた事のない一面が目の前に見えている。

「はあく……ふ、ふふ♪　それじゃあ、また会おうね」

最後に余韻よゐんに浸りながら笑みを浮かべ、ヤツの体が歪み身長が縮んだかと思うとパシヤと音を立てて崩れ落ちる。

やっぱりあの時と同じ、以前に研究所であつたような精巧な水人形。掴んだと思つたら消える霧のよう。そこには何も無い。

ヤツが居た場所を睨みながら唇を噛むしかない。

信条を奪われ、居場所を奪われ、今度は家族さえも奪おうとしてる。

どこまで、人のモノを奪えば気が済むの……！

膝を曲げて項うなだ垂れる。

潮風が心の隙間を吹き抜けるみたい。

ただ落ちた陽の光が……少しだけ、暖かだった。

G
O
F
O
R
T
H
E
N
E
X

t
S
t
a
g
e
!!

第6章：探偵と犯罪者（リバーシブル）

54：退屈しない夏の始まり

さて、カナ——金一を適度にからかった翌日。

「おはようございまーす……」

早朝に制服——半袖の夏服——でベランダから鍵を開けて侵入する。

特に意味はない。

ああ、でも……目覚ましに銃声の一発でも撃つておこうかな？

なんて考えながら部屋へと入る。

入って目に付いた左に顔を向けるとキンジが椅子に座って寝ていた。

PCを前にして、頭を落としている。

スクリーンセーバーが起動しているノートパソコンに近寄って、繋がってるマウスを動かすと表示される『Replay?』の文字。

Flashアニメらしい。これがどうやら情報みたいだね。

マウスから手を離して、キンジの横顔を見る。

あれから金一に運ばれたんだろう。

果たしてどんな風な思いをしながらキンジと別れたのか、気になるね、それから移動してキンジの顔を正面から見ると、

何かにうなされてる様な顔をしてる。

夢見は悪いみたいだね。

そのまま見ているとキンジは突然にまぶた瞼を開き、

「兄さ——!!」

ガバつと顔を上げて立ち上がるような勢いで私に迫つて来る。

そして、目と鼻の先で停止。

「おはよう」

私が朝の挨拶をするけど、キンジは目を丸くしてる。

数秒程硬直してようやく今の状況を理解したのか——

「うわあッ!?!」

素つ頓狂な声を上げて椅子と一緒に派手に転んだ。

「朝から騒々しいね」

「誰のせいだ、誰のせー!」

倒れた椅子から起き上がりキンジは元気よく突っ込んでくる。

だけどすぐに何かに気付いたような顔をする。

「あれ…………？ 俺の、部屋…………？」

「そっか…………とうとう自分の部屋だと認識できない程に神崎さんに侵略されちゃった——」

「ちげえよ！」

私に対して叫んだ後に、何かを思い出すようにキンジは頭を抑える。

「霧…………お前がここに来た時、俺はどうしてた？」

「その椅子でパソコンを前に寝てたけど、それがどうかしたの？」

聞かれた事にだけ私は答える。

本当の事を知ってるけど、聞かれてないなら答える必要もない。

聞かれても誤魔化すつもりだけどね。

まあ、私があの場にいたなんて思ってもいないから聞かれる訳がない。

「……………ッ!？」

しばらく状況整理をしてる感じだったけど、何かに気付いて寝室へと駆け、扉を開ける。

私も歩いてキンジの後を追ひ、寝室へと向かう。

背後からキンジの顔を見てその視線を追えば…………彼は2段ベッドの上段で寝てる神

崎を見ていた。

つて言うかいつまでキンジの部屋に入り浸びたってるんだか……

恋愛関係の話を出したらアワアワするのに異性と同じ屋根の下で暮らす事には何の抵抗も反応もないつて言うのは、正直疑問だよね

私はそんな感想を抱きつつキンジに視線を移すと、彼は何やら安堵したような息を漏らす。

きつと金一が昨日の夜にはアリアを殺害するつて言つてた事が引つ掛かつてここに来た、けど現に神崎は生きてる。その事に対して安心したんだろう。

「本当にどうしたの？」

「何でもない、夢見が悪かっただけ……」

私の問い掛けに自分に言い聞かせるようにキンジは答えた。

そしてそのまま、廊下へと出て風呂場へと入つて行つた。

どうやらキンジは昨日の出来事を夢だと思つてるらしい。

これはまた、面白そうな展開になりそうな予感♪

しばらく部屋でキンジが風呂場から出てくるのをテレビを見ながら待つてると、神崎が起きてきた。

「おはよー」

「おはよう、さっさと顔を洗ってきたら？」

「そうね……つてあんた、何でここにいるの？」

逆にくつつちが聞きたいよ。

ここは男子寮なのに神崎はなんで未だにいるのかつて突つ込みたい。

寝呆けた顔をしながらも聞いてきた神崎は、

「まあいいわ。顔を洗ってくる……」

そのまま私の事を気にする事もなく風呂場の隣にある洗面所へと向かう。

数秒後――

「あああ、あんた……なんで裸なのよ！　へ、へんたいだわ!!」

「俺がシャワーから上がって来た所にお前が入ってきたんだろ!!　なんでこれしきで変

態呼ばわりなんだ!!」

「うるさいうるさい！　は、早く服を着なさい――ギャーッ!!」

「おっふッ!?　お……お……お……」

神崎が絶叫した後に響く鈍い音。

これは、キンジの辜丸こうがんがやられたかな？

凄く苦悶の音が聞こえる。

朝から退屈しないな――

神崎達が夏服に着替え終わり、私が朝食を作って3人での食事。

その食事の終始、神崎はキンジを見ては顔を赤くした。

赤裸々なキンジの姿を見てしまった訳だから無理もないだろうけどね。

キンジは痛むのか、座りながらずっとモゾモゾ動いてた。

だから私が「見てあげようか？」って言ったら味噌汁を吹き出した。神崎も喉を詰まらせてた。

もう、今日のノルマはこれでいいかなと思えるぐらいにはいい反応が見れたね。

それから学校に行こうとしたところでキンジが、

「アリア、学校一緒に行くぞ」

靴紐を締めながら神妙な面持ちで言う。

いつもと様子が違う事に神崎はすぐに気付いたのか、私に視線を向ける。

私はそれに小首を傾げながら分からないフリをして答える。

「何よう、いつもは一緒に行く事に抵抗したのにどう言う心境の変化？」

「別に……少しばかり心持ちが変わっただけだ」

と、神崎に対してキンジは答えた。

夢だと思ってる割には気になっているのが丸分かり。

だけどそんな事を知らない神崎はどこか嬉しそうな顔をする。

「そ、そう……まあいいわ。一緒に行つてあげる」

「帯銃はしてるか？」

「武装確認とはいい心境の変化ね。もちろんよ、武偵は常在戦場だもの」

そう言つて神崎は銀のガバメントを見せながらレッグホルスターに仕舞う。

「そうか、ならさっさと行くぞ」

キンジが一足先に扉を出て行くのを神崎は、黙つて見送る。

その視線は歓喜に満ち、表情は緩く、目を細めている。

登校時間の短い間だけ……ここは2人きりにしておこう。

私は少し会つておく必要がある子がいるし。

「2人きりにしてあげようか？」

私から唐突に提案する。

「え……はッ!? あああんたいきなり、何言つてんのよ!？」

神崎は私を見て、頬を染めながら視線を泳がす。

「いや、別に? ちょっと私は学校に用事があるし、何やら話したい事がありそうな雰囲気だからね……」

「うう、うるさいわね! そんな事をわざわざ言わなくても行くならさっさと行けばいい」

いじゃない！」

「それじゃあ、2人きりの登校を楽しむといいよ」

最後にそう言つて私は靴を持ってベランダへと走る。

「キンジと2人きり……つてこら、待ちなさい！」

どうやら少しばかり妄想でもしてたのか、私がベランダへと向かつた事に今気付いたらしい。

私は呼び止める神崎に向かつてにんまりと笑うと、そのまま飛び降りた。

落ちる時に見えた神崎は顔を真っ赤にして腰の前に両手を握っている姿だった。

やっぱりからかい甲斐はあるんだよね

そんな事を考えながらも私は転落防止用の金網の上を歩きながら、車へと向かつた。

一足先に早く学校へと着いた私はある教室へと向かう。

その道中で気になる見慣れた後ろ姿を発見。

静かに近付いて、

「りっごりん、おはよう♪」

「うひゃあッ!？」

挨拶しながら両肩に手を置くと、声を上げて飛び上がるように私から離れていく。

「な、なんだ……お姉ちゃんか……」

驚き過ぎたのか普通にお姉ちゃんって言っちゃってるし。

「それでりこりんには、何か用かな？」

それから理子は私に視線を合わせずに廊下の窓を見ながら話す。

声が若干だけど上ずってる。

……さては、昨日の出来事が脳裏から離れないんだね。

忘れるように暗示しなかったのはワザとだけど。

私は理子の顔を両手で持って、強引に正面を向かせる。

「どうかしたの？ 顔が赤いし熱っほいけど」

微笑みながら真っ直ぐに見て、ワザとらしく聞く。

けれど今は白野 霧だから仕方ないよね。

って言うか本当に顔が少し熱い。

手に体温が伝わる。

「あ、う……お願い、見ちゃ……ダメ」

私の手を軽く振り払って理子は抑止するように左手を突き出し、自分の右腕で顔を隠す。

これはこれで新鮮な反応。

だけど、あんまりイタズラすると変に意識させ過ぎちやいそうだ。
このまま目的地に行こう。

「夏風邪には気をつけなよ」

それだけ言つて私は理子の横を通り過ぎる。

私も……最近は少しばかり心境の変化つてヤツが出てきたかな？

理子を見てると、どうも手元に置いておきたいと言ふ欲求が強いなだよね。

言葉にするなら……独占欲、かな？ 支配欲も混じつてるかもしれない。

気付いたのは、つい最近な訳だけど。

なんて事を考えながら私は1年C組の教室へとやつて来た。

開けっ放しになっている扉から中を覗き込むと、どうやら目的の人物は来ていたらしい。
い。

席が廊下側に近い事もあつて、その人物は私の存在にすぐ気付いた。

私を手招きをすると、彼女——岡田 以織は静かに席を立ち上がつて教室を出てく
る。

それから上の階へと行き、屋上への扉を開く。

私を追つて以織も屋上へと入つて来て私が向き直つたところで、彼女が先に口を開く。

「どうかしたんですか？」

「ちよつと心配になつてね。その様子だと、精神は大分安定してるみたいだけど」
「ええ、未だに夢に出ますが……大丈夫です」

日本刀の柄を撫でながら、以織は視線を落とす。

横に揃えられた前髪が、少し俯うつむいただけで彼女の目を隠す。

「そつか……それで話があるんだけど、以織はこれからどうしたいかな？」

「どうしたい、とは？」

「私と一緒にいたいって以織は言つたけど、私は武偵高にしばらくいるからね。実際、どれくらいいるかは分からないけど……逆に以織はどうかなと思つて」

「武偵高に残るかどうかと言う事ですか？」

「まあ、つまるところそうだね。君がこのままいたいのならそのまま残つてもいいし、いる意味を見い出せないのなら離れてもいい。離れるなら私が以織の新しい居場所を教えあげよう」

「……………」

「何にしても以織の人生だからね。いくら家族だからって私はそこまでとやかく言わない。好きに選んでいいんだよ」

甘い言葉。

胡散臭い言葉だと傍はたから見れば思うだろう。

これで人を騙すのは簡単。

しかし、私は生憎と詐欺師じゃない。

だって騙す必要がないくらいに世の中には残酷な真実が転がってるんだから、わざわざ嘘を言う意味がない。

「じっくり考えなよ。期限は特に設けないからさ」

伝えたい事は伝えた。

私はそれだけ言ってから以織の隣を通り過ぎて、屋上から下りる扉へと向かう。

「答えは、もう決まっています」

思わずドアノブに伸ばした手を止める。

意外に早いね。

もつと迷うものだと思ってたんだけどな。

内心、苦笑しながらも私は以織へと振り返る。

彼女は既に顔を上げて、私を真っ直ぐに見ていた。

「私は——」

足取りは軽く、キンジ達が到着してであろう連絡掲示板へと向かう。

いなくてもあそこで待つてればどうせ来るでしょ。

そう思つて来た訳だけど……何やら人だかりが出来ている。

まあ、この時期は単位不足やら何やらの連絡も来るからね。

そこら辺が気になる人もいるんだろう。

あとは緊急任務——単位合わせのための補習授業みたいなもの——とかもあるし。

ちよつと覗いてみるか、別に単位は不足してないけど何かのイベントでも張り出して
るかもしれない。

そう思つて人だかりを縫うようにして掲示板の前へとたどり着く。

画鋏がびようじゃなくて、サバイバルナイフで紙を留めてるあたり武偵高らしいなーとは思
う。

ざつと目を通して見ても特にイベントっぽいのは無しか。

強いて言うなら近日にある夏祭りに対しての注意の掲示があるだけ。

右から流れるように掲示を見ていつて目に付いたのは『一学期 単位不足者一覧表』、
そこで見たのは『遠山 金次』と言う一覧表の一番上に印刷された名前。

不足単位は1・9単位。

ああ……やつぱり。

最近インクエスタは探偵科クエスタの任務に出掛けてるところなんて全然見てないから、そうだとは思つた

よ。

武偵高では、夏休みが終わるまでに2単位を取らなければ留年になる。

キンジが正式に受けた任務は4月に受けた猫探しくらい。

世話が焼けると言うか何と言うか。

そんなもつて、都合よくちようど不足している1.9単位分の緊急任務が隣の用紙にはあるし。

ほんと、悪運は強いんだから。

不意にキンジ達が来るであろう後ろを見ると、

「む……」

メガネを掛け、松葉杖をついたジャンヌ・ダルク30世がそこにいた。

私に今気付いたのか、小さく声を上げる。

そう言えば軽い乱視だったね、君。

「ああ、囚われの聖女様か」

「いきなりケンカを売ってるのか貴様は……ッ」

私の皮肉にジャンヌは頬が強張る。

「司法取引で捕虜同然だろうし、何も間違っではないと思うけどね」

「事実だがお前に言われると腹が立つな」

「まあまあ、今はこっち側と言う事で……仲良くしようよ」

そう言って、親愛の握手を求めたけどジャンヌは静かに息を吐くだけ。
それから返答してきた。

「……断る」

「それまたどうして?」

「何となくだが私はお前が気に食わん」

早くも嫌われたものだね、私も。

でも……生理的嫌悪って言うのは案外当たるものなんだね。

手を下ろして、残念とばかりに肩をすく竦める。

それからジャンヌの後ろに映ったのは今到着したのであろうキンジ達。

私は見えるように手を上げて2人を手招きする。

特に神崎はジャンヌを見て少しだけ目の色を変えて、ずかずかとこっちに迫って来る。
る。

「武偵の預かりになってたのは知ってたけど、あんた……制服似合ってるわね」

「どいつもこいつも私をイラつかせるのが好きなようだな。凍て付かせてやろうか、ホームズの小娘」

神崎の嫌味に目を鋭く細め、不機嫌になるジャンヌ。

気のせいか以前より口が悪くなってる気がする。

「な、なによ……その足でやるって言おうの」

目が少し据わってるジャンヌに少しだけ気圧されながらも神崎は返した。

松葉杖をついてるって事は当然に足に異常がある訳だけど、ジャンヌの右脚を見れば足首から膝の間に何やら包帯を巻いてる。

「貴様一人なら足一本ぐらいちようどいいハンデだ。それにこの杖には寸を詰めて^{エストック} 鎧貫剣に造り替えた聖剣・デュランダルが仕込んである」

先祖代々から受け継いできた由緒正しい剣じゃなかったつけ……デュランダル。随分とぞんざいな扱いだね。

「はいはい、こんな人混みの中で闘^やり合わないでね」

取りあえず2人の間に割って入って諫^{いさ}めながら遠ざける。

「そうだぞ。大体、朝っぱらかケンカすんな。ジャンヌは足……どうしたんだ？」

キンジも私と同じ位置に入ってジャンヌに目を向ける。

「虫が、な」

「……虫？」

キンジと私の声が重なる。

「コガネムシのようなものが足に張り付いて驚いてな、そのまま側溝^{そっこう}にはまったところ

をバスが通りかかった」

「ちなみに全治は？」

「2週間だ」

バスにどう言う風につかつたか知らないけど、よくもまあ2週間で済んだね。

聞いたこつちが呆れそうだよ。

イ・ウーにしている面子は大概思ったよりも頑丈だったりするから、別に珍しくもないと言えば珍しくもないんだけど……

「よくそれで済んだな」

「キンジは人の心配してる場合じゃないと思うよ」

「なんだよ、霧。唐突に」

私が「ん」と言いながら掲示板を親指で指し示す。

キンジはなんなんだ？　と言う顔をしながら掲示板に近付きすぐに、

「んなっ!？」

現実を知った声を上げる。

そんなキンジに私は肩を叩く。

「キンジ、諦めよう。私の事を先輩って呼ぶためにも」

「ふざけんな！　なんでそうなる!？」

「え？ いいでしょ？ 後輩は大事にするよ。」

「やめろ、絶対にイジめる気満々だろ」

「つて言うのは冗談で、隣の緊急任務クエストに不足単位分のやつがあるからそれを受けるといいよ」

「なにッ!？」

私のアドバイスにすぐさまキンジは隣の掲示用紙かじに付いた。

キンジが掲示板でそれを探してる間に私は携帯を操作する。

登録申請して、よし……と。

隣から私の携帯を覗き込んでそれを見ていた神崎が一言。

「あんた、性質たち悪いわね」

「やだなー神崎さん、これは私の優しさだよ。早めに登録しておかないと誰か取っちゃいそうだし」

「そんな善意のあるような顔には見えないわよ」

キンジにも受けさせる予定なんだから、別にそこまで悪質じゃない。

心臓には悪いだろうけどね。

ようやくキンジは見つけたのか、すぐさま携帯を取り出して操作する。

けど――

すぐに膝を突いた。

きつとキンジの携帯には他の人が登録したと言う募集終了の画面が出ている事だろう。

「ねえ、キンジ」

私はキンジの傍に近寄ってしゃがみ込み、声を掛ける。

一気に顔色が悪くなったキンジが私に視線を向ける。

「……なんだよ」

「これなーんだ？」

私が携帯の画面を見せる。

そこには緊急任務にあつた『港区 クエスト・ブレスト カジノ「ピラミディオン台場」私服警備』——1.

9単位が映つてる。

目を見開いたキンジが安堵の息を吐く。

「お、お前……そう言うイタズラはやめろよ、マジで」

「ふふん♪ さてここで問題です。こう言う複数人でやる任務の最初クエストの受注者にはある

権利が与えられます、それは何でしょうか？」

ちなみに正解はメンバーを決める権利。

選べると言う事は断る事も出来る。その代わりにしっかりとした編成をしないとい

けない。

色々と責任が問われる立場でもある。

遊びでやってる訳じゃないからね。

当然にその事はキンジも分かっているの、

「……入れて下さい、お願いします」

懇願しながら項垂れる。

うんうん、素直なのはいい事だね。

私が満面の笑みを浮かべたところで、キンジがフラフラと立ち上がる。

「遠山、完全にお前は尻に敷かれるタイプだな」

「うるせえ……」

今のやり取りで確信したジャンヌが告げたのを、キンジは力なく反論する。

その間に私は立ち上がって残りの面子をどうするか考える。

「残り2人どうしようかな？ 適当に私服警備が得意そうなのを見繕うか……」

「いいや、残り1人よ。あたしも一緒に行くわ」

意外にも神崎が名乗りを上げた。

何故か私を少し睨みながら。

コレ……ねえ。

「私服警備とかできるの？」

「あ、当たり前でしょ！ なによ、あたしの事を疑ってるの!？」

「だって神崎さん潜入^{スリッパ}捜査とか私服警備^{Gメン}とか苦手そうだし」

私の言う事が当たってるのか、何かを思い出すような顔をしながらキンジは静かに頷く。

ジャンヌも何となくそんな感じがしてるのか、頷く。

「出来るに決まってるでしょ！ この間だって立派に潜入^{スリッパ}捜査をやり遂げたわよ！」

この間って言うのと、紅鳴館での事だろう。

私に差し迫りながら神崎は弁明するけど……リリヤから一応、その時の働きは聞いている。

掃除くらいしかやる事がなかったとか何とか。

そう思うと不安だな〜

「あー、霧。アリアも一緒に入れてやってくれ」

そんな事を考えてると、キンジが助け舟を出してきた。

「別に断るとは言ってるけど、どうしたの？ いつもは若干、神崎さんに対して煩^{わづら}わしそうにしてたのに」

「何でもねえよ。ただ、アリアもパートナーだから一緒に連れて行くこうってだけの話だ。

「ここ最近、3人で仕事する機会もなかったからちようどいいと思った……それだけだよ」

私の問い掛けに普通に答えたつもりだろうけど、不安そうな顔が表に出てる。

やっぱり夢だと思ってる出来事が頭で引つ掛かっているんだね。

分かりやすいよ、相変わらず。

しかし、そんなキンジの中で払拭ふっしょく出来ない不安を神崎が知る筈もなく……

不意に横顔を向けて、

「それもそうね。あんたと久々に一緒に仕事するのも悪くないわね」

腕を組みながらどこか納得している感じを演じてるけど、隠しきれない嬉しさが表情に出てる。

さっきの私とキンジのやり取りを見てから少し睨んだ上に、キンジから誘われて喜んでいるあたり、さては……

「はくん……もしかして、私に對抗意識でも燃やしてる?」

神崎に近付いてさり気なく聞いてみる。

その瞬間にビク、と肩を震わせツイントールを揺らす。

凶星か。

言動や行動はツンツンしてる割に反応だけは素直だね

「いい、いきなり何を言うのよ！ あたしが、あなたに對抗意識があるですって!」
神崎がバツ、と素早く距離を取って指を差しながら私の言う事を否定しようとして
る。

「ただ、もうそれは肯定だと私に確信させるには充分。」

「違うの？ てつきり私は——」

そこで言葉を区切って私はキンジに視線を向ける。

私の視線を追い掛けるように神崎もキンジに視線を向けたところで、

——ボン。

そんな感じに顔が赤くなる。

キンジは何だかよく分からないと言った感じで首をかしげてるけど。

「ちちちち、違うわよ。誰がキンジなんかの事で——!」

「私はキンジとは一言も言っていないけどね」

さらに否定しようとした所で墓穴を掘った神崎に私は追い打ちをかける。

私がニヤリと笑みを浮かべたところで、神崎はパクパクと指を差しながら震えてる。

それから腕を下ろし、彼女の指先が戦慄わななく。

おっと……これはマズイね。

これは神崎が怒りに任せて銃を抜く時の兆候。

「キンジ、逃げるよ」

「え？ あ、おい!？」

私に手を引つ張られて、さっきの会話の意味を全く理解していないキンジが驚きの声を上げる。

その後ろではガバメントを両手に持って、追い掛けてくる神崎。

「待ちなさいッ！ あんた達まとめて風穴あけて、人間レンコンにして上げるわ!」

『達』ってことは俺もかよッ!？」

キンジの突っ込みが虚しく響く。

授業の1時間目が終わり2時間目、綴つづり先生が二日酔いの青褪めた顔で休講を告げた。適度に時間を潰して過ごし、3時間目の水泳。

珍しく泳ぐ事に挑戦しようと神崎は意気込んだが、結局は溺れた。

「もう、二度と泳がないわ……」

その水泳が終わって着替え終えた神崎が謎の決意をする。

更衣室を出たところで携帯を見れば、メールが一件届いてる。

送信者はキンジか。

メールを開けてみれば、

『親愛なる霧へ。カジノ警備の練習がてら、二人つきりで七夕祭りに行かないか？』

日7時、上野駅ジャイアントパンダ前で待ち合わせだ。かわいい浴衣着てこいよ？』

そんな本文を載せた、お誘いのメール。

……ふーん。

……………。

送信者はキンジだけど、このメールを書いたのはキンジじゃないね。

あのキンジがこんなデートを誘うようなメールを書ける訳がない。

書いたのは、おそらく武藤か不知火のどっちか。

いや、このメールでの言い方からして武藤だろうね。

でもまあ、これに託^{かこ}けて誘われてあげよう。

そう思って携帯を閉じて隣を見ると、神崎が自分の携帯画面を見て硬直してる。

しかも震えながら。

そろりと近付き神崎の肩越しに携帯を見れば、そこには名前以外私と一字一句同じ

メールの本文があつた。

二股か……ますますキンジがしない行動だ。

とは言え、これは見なかったフリをした方が面白そう。

「携帯を見て固まってどうしたの？」

「は……ッ、え……ななな、何でもないわよ！」

声を掛けると慌てた様子で神崎は携帯を閉じる。

視線は泳ぎ、携帯を気に掛けてるようだった。

見間違い？ そんな戸惑いが彼女の顔に出てる。

「早くしないと授業に遅れるよ」

私はそう言いながら、神崎を置いて先に行く。

しばらく歩いてある程度距離が開いたところで後ろを見れば、神崎は携帯を見てトリップしてる様子だった。

恋する乙女の顔って表現したらいいのかな？

随分としおらしく、それでいて可憐な雰囲気。

今までに見た事のない反応だね。

私としてはそんな表情よりも君のもっと別の表情を見たいんだけど……ま、いつか。

4時間目の授業で神崎は遅刻ギリギリになって教室に入ってきた。

あの様子だとかかなりの時間、呆然としてたみたいだね。

英語の授業だったけど、その間にキンジと神崎の様子はどこか落ち着かない様子だった。

神崎がスラスラと音読した後に着席する瞬間にキンジと一度視線を合わせたけど、すぐに神崎の方から視線を逸らした。

私がキンジと視線が合った場合、キンジの方から視線を逸らしたけどね。

そんなギクシヤクした感じで4時間目の授業は終わった。

昼休み、神崎はどこかキンジを避けるように教室を出ていった。

私もなるべくキンジと会わないように別の場所へと移る。

まあ、私の場合はワザとなんだけどね。

私の察しが良い事は既に知ってるとは言え弁明されるかもしれないし、接触しないに限る。

昼食も終わり、5時間目は専門科の授業。

つまりは強襲科^{アサルト}である私と神崎は闘技場^{コロッセオ}がある第一体育館へと向かう。

本校舎を出て歩いてると、私の近くを羽音をさせてコガネムシのようなものが通り過ぎる。

あの虫……

コガネムシでもカナブンでもない。

私を完全に通り過ぎる前に少し気になってナイフを振るい、空中で両断する。

落ちた虫を観察してみれば、この日本では存在しないであろう昆虫——スカラベだ。

コガネムシの一種ではあるから見た目はよく似てるけど違う。そして、このスカラベを扱う人物を私は知ってる。

パトラ……この島国で何を考えて使い魔であるスカラベを放ったんだか。どつちにしても触れなくて正解だね。

このスカラベは肌に接触すると呪いを移すから厄介極まりない。

念の為にスカラベを踏み潰し、私はそのまま第一体育館へと向かう。

そのまま中に入ると少々早かったのか……人がまばらで知ってる顔が神崎ぐらいしかない。

神崎がこつちに気付き、向こうから私に近付いて来る。

「今日の授業は『1対1戦』らしいけど、一緒にどうかしら？」

「えー……」

「なんでそんな微妙そうな顔をするのよ」

「ぶつちやけ神崎さんと1対1なんて疲れる」

「本当にぶつちやけるわね……」

「この子、加減が下手くそだから無駄に体を痛める。」

「こつちは小手先で戦わなきゃいけないのに。」

「ちなみに拒否権は？」

「ないわ」

私の質問にキツパリと答える。

「横暴だね」

「いいじゃないの、それに一緒にの任務を受けるんだからお互いの実力を再確認したいのよ」

神崎は至極、真面目な事を言う。

そして分かるのは、例の任務クエストまで時間があるのに随分と張り切つてると言う事だね。

私と神崎が話してるそんな時だった。

周りを見ると、入口の方を見て数少ない生徒が全員、誰だ？　と言う感じの顔をして
いる。

それからコツコツ響く靴音。

すぐに足音が止まり、

「あなたが……神崎・H・アリアね？」

優しいな声で問い掛けてくる。

「——ツ?!」

声を掛けられた神崎が振り返った瞬間、息を詰まらせて驚愕に顔を染める。

この声……昨日も聞いたな

振り返るまでもないけど、私も神崎に倣^{なら}って静かに後ろへと体を向ける。

「初めまして」

そこには武偵高の女子制服に黒のストッキング、長い三つ編みの髪を揺らし、金一……いやカナが、柔和な笑みを浮かべて立っていた。

どうやらこの夏は一番退屈しない日々になるかもしれない。

そんな予感に、私は自然に笑みを浮かべるのだった。

55：感情の板挟み

いきなり現れた謎の美女の登場。

授業が始まり近付いてきた事もあつて段々と人が増えてくる。

昨日の今日でカナが乗り込んでくるとは……少しばかり予想外だね。

でもまあ、私をどうしようとしに来たわけではなく本命はむしろ――

神崎に視線を向けて一つの予測を立てていると、彼女の表情が少し険しくなる。

「あんたは……カナ、でいいのかしら？」

「あら、私の名前を知つてると言う事はキンジから聞いたの？」

「詳しい事は何も教えてくれないけどね」

「そう……」

カナは少し顔を伏せる。

そのまま続けて神崎が問い掛ける。

「あたしに声を掛けたつて事は、用があるつて事でいいのよね？」

「そうね。色々と言いたい事があつて来たの」

それから目を真っ直ぐに向けてカナは、唇を開く。

言いたい事はありそうだけど、確かめたい事もあるんだろうね。

「あなたはキンジとパートナーって事で……いいのよね？」

「そうよ」

「キンジの事、どう思ってる？」

「どうって……」

その質問に何かを思い出したのか、神崎は顔を紅潮させて首を振る。

さてはさっきのメールの内容でも思い出したんだろう。

「な、何が言いたいのよ!? さっさと本題を言いなさいよ!」

誤魔化したね。

話題の逸らし方が雑だけど。

その神崎の言葉にカナは、

「そうね。回りくどいのは無しにして本題を言いましょう」

——キンジとパートナーを解消しなさい。

面白い事を告げてきた。

もつとも、神崎にとつては衝撃的な言葉。

目を見開いて「え？」と、小さく声を上げる。

呆然とした状態から段々と表情が怒りに代わり、

「なによ……いきなり何なのよ!? パートナーを解消しなさいって!!」

金切り声を立てて、神崎は食いかかる。

「そのままの意味よ。あなたは、あの子の傍にいちやいけない。理由を教えるつもりはないし、あなたは知らなくていい事よ」

それを平然とカナは返す。

まさか、ここで神崎を排除しに来た訳じゃないだろう。

こんなに多くの人物がいる上にプロである教師陣がいる武偵高のど真ん中で悪役になりに来た。

なんて事ではないハズ。

むしろ神崎を焚き付けるような言動。

「ん、いきなりな物言いすぎるんじゃない? 一体全体どうしたって言うの?」

少し神崎の前に立って彼女がカナに飛び掛らないようにしながらも、私はカナにトボけたふりをして真意を確かめる。

「今、あなたに用はないわ。どきなさい」

冷たい言葉と視線が返された。

随分とヘイトを稼いじやったみたいだね。

神崎が見たらビビりそうなおっかない顔をしてるよ。

でも……なるほど、私を消しに来たわけでもない。
と言う事は、考えられる事は一つ。

キンジが無意識に守ろうとした神崎・H・アリアと言う人物を確かめに来た。
武偵高に来たのはそう言う事だろう。

「神崎・H・アリア。あなたはジャックと同じで災いを呼ぶ存在よ。そんな子を、キンジの傍には置いておきたくない」

私を視界に入れて言ってるあたり、それは私にも向けられた言葉でもあった。
言ってくれるね」

「ふざけないで！ 何を根拠に言ってるのよ！ 大体あたしをあんなのと一緒にしないで！！」

私の背後でこつち神崎はあんなの呼ばわりか。

嫌われ過ぎでしょう、私。

でもまあ、ほとんどワザとんだから当たり前か。

それとどうやら言い回しから見ると、カナは神崎の中に存在する”モノ”を既に知ってるらしい。

「霧、どきなさい……」

私に命令すると同時に金属音。

神崎が銃を抜いたんだろう。

「やめておきなよ。妄言の1つや2つぐらい聞き流せないと——」

「黙ってて……！ これは、あたしの問題よ」

人が素直にアドバイスしてあげてるのに、神崎は突っぱねた。

それから、私の横を通り過ぎてカナの正面に立つ。

「キンジは心の整理が出来たら、あなたの事を話すって言ってたわ」

「……………」

「だけどその張本人が出てきたからには、キンジが話してくるのを待つ必要もない。あたしがこの手で直接、あんたとキンジの関係を聞き出してやるわ！」

どこか焦ってる感じで神崎は銃を構える。

「——出来ないわ」

しばらく沈黙してたカナが何の感慨もなく呟く。

「あなたには“無理”よ」

「……………」

見下したその言葉に神崎は息を詰まらせる。

『無理』——それは神崎が嫌う言葉の1つ。

この状況、まるで私と対峙した時みたいだね。

神崎はその時の事を思い起こしてるのか、手が震えてる。

「あたしは負けないわ……あんたや、あいつなんか……ッ!! あたしは強くならなきゃいけないのよ!!」

悲痛な思いを含んだ決意。

私には神崎の心情が読み取れる。

ジャック
私との邂逅、そしてその時に見えてしまったであろう敗北のヴィジョン。

それが神崎の心に大きな楔くさびを打ち立てている。

つまりは焦ってるんだ。

母親の無罪を証明するために打ち倒さなきゃいけない敵がいる。こんな所で負けられない。

そんな思いを秘めているんだろう。

でも……そんなのではこの先、勝てない。

防弾ガラスの衝立ついたてに囲まれ、砂が撒かれた闘技場コロシアムにカナは目を向けるとそのまま静かに歩く。

それから跳び上がり、2メートルはあるガラスの衝立に片手を突いて乗り越える。

そのままフワリとした感じで着地すると神崎へと振り返り、

「いいわ。私も確かめなければならぬ事がある……アリア。あなたを私に見せてごら

んなさい」

挑戦的な言葉を投げ掛けた。

神崎もそれを追うようにしてICキーの扉にカードを通して勢いよく開け放つ。

いきなりの決闘ムードに誰もがざわついている。

闘技場の中心で相対する2人。

親善試合のような健全な雰囲気ではない事ぐらひは誰でも分かるだろう。

神崎はツリ目を更に鋭くして睨んでいるけど、カナはそれを受け流すかのように涼しい顔をしてる。

それは見る人がみれば吐息を漏らしそうな美しくも儂げな哀愁をも漂わせていた。

現に男女問わず何人かが見惚れた顔をしてる。

キンジに連絡は……入れないでもいいか。

いずれ耳に入る。

それに死ぬ訳でもない。

私としてもしばらくは見ておきたい部分もある事だしね。

突然に、一際生徒達がざわめく。

「お前ら、何しとるんや」

生徒達が道を開けた先で、蘭豹が瓢箪を呷りながら女にしては威圧感のある足音を響

かせてやって来る。

瓢箪の中身は十中八九お酒だろうね。

それから防弾ガラスの衝立ついたてに近付いて中を見ると、訝いぶかしげな顔をする。

「あん？　これはどう言う事や？　白野、5秒以内に状況説明せえや」

近くに居たとはいえ、私にご指名とは。

しかも軽い脅迫付きで。

「突然に現れた謎の女子生徒が神崎さんにパートナーの解消を要求。激昂した神崎さんが対決を申し込む。簡単に言えばこんな所ですね」

「ほう……。アレは、札幌サツ武偵高コウの女子制服やな。研修生が来るとかの連絡は受け取らんが……。あれ？　どうやったつけ？　酒飲んでたせいでイマイチ覚えとらん」

業務連絡に酒飲んでるとか、フリーダムだね〜

「まあええわ。酒さかなの肴さかなにも見世物にもちようどええやろ」

なんて蘭豹は適当な事を言ってるっぽいけど、今の獣のような目の色の変わりよう。

カナの実力が相当なものである事ぐらい見抜いてるっぽいね。

年齢よわいが19の割には目が肥えてる。

さすがは武偵高の教師で香港マフィアの首領まなむすめの愛娘。

蘭豹が跳躍し、防弾ガラスの衝立の上に片膝立ちで乗って闘技場コロッセオの中にいる2人に声

を掛ける。

「その女アマと神崎！ 闘技場コロッセオに入ったんならさつきと殺やり合わんかい！」

その言葉に生徒達からどよめきが走る。

いきなり許可が出た決闘。

しかも神崎が対峙して相手についてはこの学校では全く見慣れない人物。

野次馬根性が働くのも無理はない。

私は周りの喧騒けんそうをなるべく聞かないようにして、神崎とカナの会話を聞く事に集中する。

「許可が出たみたいね」

「ええ、願ったり叶ったりだわ」

神崎がカナにそう返すと、彼女は2丁のガバメントを構える。

対してカナは何も武器を構えようとしなない。

「さつきと抜きなさいよ」

「騎士道精神は無用よ。いつでもいらっしやい」

神崎は催促するがカナはそう言葉を返すだけ。

だが言葉の次には、カナの纏う空気が変わる。

カナの正面にいる神崎は、既に優れた直感で分かってしまったているだろう。

——格の違いを。

「……………ッ!!」

先手必勝だと思つたのか、気迫に吞まれる前に神崎のガバメントが火を吹く。

真つ直ぐカナへと飛ぶ4発の銃弾。

しかし、カナの手がブレた瞬間——

ギギギンッ!

金属同士が激しく擦れる音が響き、防弾ガラスに何発か銃弾がめり込む。

「おい、今のなんだよ……」

誰かが呟いた一言。

神崎が銃弾を放つたのにカナには被弾していない。

常人なら何もしてないのに銃弾が逸れたとしか思えないだろうね。

大体の人が驚愕する中、教師である蘭豹は感心するように笑みを深めてる。

私はキンジのを見るから特に驚く事はない。

ただの『銃弾撃ち』だ。

肝心の神崎はと言うと地を蹴つて前へと進んでいた。

普通なら動揺して硬直するところを、彼女は愚直に前へと進んでいる。

と思いきや、急停止して両足で地面の砂を巻き上げる。

目眩めくらましか……

砂煙が舞う中、カナは全く動かない。

大きな砂煙が1つカナの横に舞い上がった瞬間にその中から神崎が飛び出し、肉薄する。

どうやら近接拳銃アルカダ戦に持ち込もうと言う魂胆らしいけど……あれじゃあ遅いね。

迫ってきた神崎を一瞥したカナの手がブレる。

次に響くのはバシィッ！　と言う鞭で叩かれたような音。

神崎が防弾制服の上から腹を銃弾で撃たれた。

銃弾に押され、口から強制的に息が吐き出され、苦痛に襲われてる事だろう。

けれど神崎は歯を食いしばって踏み止まり銃口を向ける。

だけど彼女が撃つよりもずっと早く撃ったカナの銃弾が次は神崎の右肩に当たり、向けていた銃口が外れる。そして遅れて発砲される銀のガバメント。

すぐに撃たれた衝撃を利用し、神崎は左足を軸にしての回し蹴りに移行する。

この戦い慣れた感じ……14歳から武偵として活動してただけはある。

でも、場慣れしてるだけじゃ勝てない。

見切った感じでカナが少し後ろに下がると、神崎の蹴りは空を切る。

しかし、想定外の範囲だったのか神崎は左手の黒のガバメントをカナに向けている。

真芯で放たれた銃弾、距離的にも今度こそ間に合わない直撃コース。誰もか思うだろうけど、そうじゃない。

ガバメントの弾はまたしてもカナに届く事なく、途中で見えない銃撃に弾かれる。立て続けに神崎はマズルフラッシュを瞬かせながら開いた距離を縮める。

当てるためじゃなく、近づく為の牽制^{けんせい}。

カナは確実に当たりそうな銃弾だけを弾き、残りは僅かに体を逸らして避ける。

全ての弾を回避したカナには神崎と言う肉弾が懐^{ふところ}に迫っていた。

ガバメントを仕舞つてるところを見るに、お次は格闘技^{バリッ}で対抗しようと言う事らしい。

見えない銃撃には有用な距離ではあるし、確かに銃撃は防げる。

でも目視が不可能な早撃^{クイックドロウ}ちができると言う事は、見えない速度での拳が飛んできて

おかしくないと言う事だからね。

この勝負、とも言えない座興も早くも終わりかな？

退屈さに思わず欠伸をして目を閉じ、開いた時には神崎が宙を飛んでいた。

カナは手の平を上に乗っている。

あから、今の瞬きの間で掌底で打ち上げられちゃったか。

それからカナは追撃に空中にいる神崎を蹴り飛ばす。

砂の地面へと叩き落とされた神崎が滑りながら態勢を立て直して片膝立ちになる。

「——アリアー！」

この声……キンジだね。

予想通り、誰かからここで起こってる事を聞いて飛んできたみたい。

防弾ガラスの衝立ついたてに飛びついて叫んでる。

その一方でカナは、

「おいで、神崎・H・アリア。もうちよつと——あなたを、見せてごらん」

神崎に手を差し伸べて憂いの顔を浮かべている。

刹那の瞬間に鞭打つような音と銃声と神崎の悲鳴が耳に入る。

「——くうッ!!」

神崎はとうとう前のめりに倒れた。

たった数発とは言え、モロに銃弾を受けてたんだからかなりのダメージ。

どこか内出血しててもおかしくはない。

今まで苦痛に声を上げなかったのが不思議なくらいだけだね。

キンジを見れば息を呑み、目の前で起こってる事象に焦りと動揺の表情を浮かべて

る。

「蘭豹！　こんなのは違反だ！　今すぐにやめさせろ！」

蘭豹にキンジは抗議するが、

「もうちよい派手に殺り合え！　まだまだ生温いぞ！」

教師にあるまじきヤジを飛ばしながら蘭豹は瓢箪を口に付ける。

完全に聞いてないね。

もしくはワザと聞いてないかのどつちか。

実戦形式での実銃の使用は体中を防護する……バスジャックで使ったC装備の着用品が義務付けられてはいる。

キンジの言う通り、武偵法の違反行為ではある。

まあ、キンジは忘れてるかもしれないけど違反如きでここの教師陣が臆する訳がない。

だから言うだけ無駄なんだよね。

もつとも……蘭豹には見せしめ、つて言ったらおかしいけど良い刺激になると思っ
て決闘を許可したんだろうけど。

見世物つて言うのもあながち間違いないじゃない、か……

蘭豹が頼りにならないと判断したのか、キンジがICカード認証の扉の傍にいる私へと近付いて来る。

「霧……ッ！」

私を見つけたキンジが名前を呼んでくる。

手を軽く開閉して私はそれに応えるが、キンジはそれどころじゃないとばかりにICカードを通そうと扉に手を掛ける。

その前に私はパシとキンジの手首を掴む。

「どうして止めるんだよッ……」

そう言つて声を荒らげてキンジは私の手を払う。

「何でそんなに焦つてるのか知らないけど、あの中に飛び込むつもり？」

「こんなの違法だからに決まつてる！ それに……アリアが死ぬかもしれないだろ?！」

本題は前者じゃなく後者。

カナが神崎を殺しに来たと思つてる訳か。

「さすがに決闘で死にました、なんて言う事態にはならないでしょ」

「何を暢気のんきに言つてるんだよッ！ 現にアリアが撃たれてるつてのに！」

気持ちばかりが先に走つてるせいでキンジはカナに殺気がない事に全然気付いてない。

大体最初から殺すつもりならキンジがここに来る前に神崎は死んでる。

もつとも……キンジにはそんな事も分からないくらい焦燥感しょうそうに掻き立てられてる。

「今日の朝から様子が変だよ、本当にどうしたの？ と言うか私としては、生きてた事

”に驚きなんだけどね」

白野^私 霧と言う人物はカナ——金一が生きているかもしれないと言う事を知らない。

昨日の夕方の出来事も知らなくて当然。私はあそこにはいなかった。

キンジの中ではそう言う風になってるんだから話は合わせておかないと。

そして、私の指摘にキンジはばつが悪い顔をする。

「それは……っ」

「別に話さなくてもいいよ。私は根掘り葉掘り聞きたい訳じゃないし、ただ……ここは

私にお任せってね」

そろそろお開きにしてもいいでしょう。

「お前、何を……」

キンジの問いに私は笑みで返す。

スカートの中、太ももに巻きつけてあるグレネード系統を携行できるホルスターから

発煙^{スモークグレネード}弾を抜き取り、ピンを抜いて闘技場に投げ入れる。

いきなりの煙幕にザワザワと生徒達が騒ぐ。

「神崎さんじゃ勝てないし、勝負の行く先は見えてるからね。私が止めに行ってくるよ」

正直に言うのと飽きたし。

「ああ、ちなみにキンジはここで待っててね」

「なんでだよ……」

「HSSでもないのに鈍なまった腕でどう止めるの?」

「……………」

「ま、ここは私を信じてよ」

ICキーを通して防弾ガラスの扉を開け放ち、私は煙の中へと歩み進む。

室内と言う事もあつて煙は中々に晴れない。

その間に私は神崎に近付く。

「あんだ、どういうつもりよ……!」

四つん這いになって、邪魔をしないでとばかりに睨み上げてくる神崎。

私は呆れるように息を吐きながら、視線を合わせるようにしやがむ。

「何って、最初から直感で分かってるでしょ? 神崎さん一人じゃ、あの人には勝てな

い」

「まだ……戦えるわ! あたしは、負けてないッ!」

「今まで自分の直感を信じてやって来たのに、その自分の直感を否定するの?」

「——ッ!!」

私の言葉にギリと齒軋りをし、

「あんな事を言われて、引き下がれる訳ないでしょう……ッ!」

神崎は立ち上がった。

意地を張ってるねく

……………。

……仕方ない、予定変更して付き合ってあげるか。

カナに武偵高での私の立ち位置を見せるついでに。

内心呆れながらも私は立ち上がる。

「そう言えばお互いの実力を再確認したいって言ってたよね？」

「……………」

「神崎さん1人じゃ勝てなくても、”2人”なら……………どうかな？」

「2人……………って」

「神崎さんがそれでも1人でやるって言うなら、私は何も言わないけどね。勝手に1人

でやればいいよ」

その時は無理矢理に終わらせるだけ。

静かに顔を向けて言った私の提案に神崎は、

「足、引つ張らないでよ」

私の言ってる意味が分かったのか、ただそれだけ言ってガバメントを抜いて構える。

根性とプライドだけは一丁前なんだから。

私の提案を受け入れたのはカナを倒してキンジとの関係を聞き出したいからか、はたまた神崎も成長してるといふ事なのか……

それとも『無理』だと言われたから意地になつてゐるのか。

ま、どれでもいいか。

ようやく見えるくらいに白い煙幕が晴れていくと同時に、カナは目を細め、蘭豹は鋭利な視線で射抜いてくる。

「くおらッ白野！ 決闘に水差すなや！」

未だに残つてゐる煙幕の向こうから縫うように視線が射抜き、蘭豹がそう私に怒鳴り散らしてくる。

そんな蘭豹に私は立ち上がり、顔を見上げて「一つ要望をする。

「先生、神崎さんと一緒に参加してもいいですか？」

「あん？ 何を言うとなんのや」

「見てたらじつとしてられなかつたんです」

その後口パクで、

『このまま終わるのももつたない気がして』

と言つた。

読唇術で読み取つた蘭豹が、少し驚いた顔をしてから考えるように顎に手をやる。

このまま戦つても神崎に勝ち目はない。

蘭豹ほどの女傑じよけつなら最初に動きを見ただけで分かるだろう。

カナがそれほど実力を出してない事にも気付いてる。

今日こんにちの武偵高でも教師を除いて珍しい本物の実力者が突然に現れた。

このある種の貴重なチャンスが蘭豹が見逃す訳がない、それに教師以前にカナの事を個人的に気になっていそうだしね。

それからポニーテールを揺らし、ニヤリと蘭豹は口角を上げる。

「ええやろ……ただし、無様な姿見せたら扱しじき直したるからな」

彼女は私の提案に乗った。

私の言葉に一理あると思ってくれたみたい。

キンジはと言うと私を見て呆然としている。

そりや止める筈の人間が飛び入り参加したら、なんでなんだ？
つて言う感じにもなる。

そんなキンジに私は視線を合わす。

向こうも私の顔をしっかりと見たところで、

『私を信じて』

と唇だけを動かして伝える。

いつもの笑みを浮かべながら、たったそれだけ。

キンジは難色を示す顔をして答えを出すのを迷ってる感じ。

しかし、キンジの答えが出るまで蘭豹が待つてくれる訳もない。

「と言う訳や、2対1になるが……問題ないな？」

「ええ、別に構わないわ」

拒否権の無さそうな蘭豹の確認にカナは興味なさそうに平然と返す。

——表向きは。

西部劇のガンマンがやるような銃を抜こうとする僅かな指の動き。

私を撃ちたい討ちたいって言う思いが見え隠れしてる。

でも、殺気に敏感な女傑が見てる手前。

妙な動きをすれば、すぐさま排除される。おまけにキンジも見てる。

カナにとっては非常に微妙な状況だ。

感情の板挟み。

どこまで自分の本心を偽れるか、だね。

「仕切り直しや……始めッ!!」

蘭豹の持つM500が号砲を放つ。

さーて、どんな風に演じようかな。

◆ ◆ ◆
蘭豹が掛け声と共に銃声を放つ。

煙幕が完全に晴れない内に動いたのは霧だ。

残つてゐる煙幕の塊の中に身を隠すとその中からさらに煙が湧き出る。

おそらくはあの煙幕の中でまた発煙弾スモークグレネードのピンを抜いたんだろう。

アリアも素早く立ち込める煙幕の中へと身を隠す。

そこでようやく本格的に闘やり合うんだと言う事を理解した。

何故だ……

カナに関してもそうだが、霧の行動が理解できない。

俺じゃカナを止められない。

そんな事は分かかつてる。けれど、あいつら2人でもカナに——兄さんには勝てない事

を俺は知かつてる筈だ。

それを分かかつておきながら黙つて俺は何を送り出してゐるんだ。

あいつは最後に『私を信じて』と声に出さず綺麗な唇を動かして言った。

信じてやりたい、が……この場面でどうするのが正しかったのか俺には分からない。

ただ、黙つてこの闘いを見ているしかない。

そうしている内にもカナの周りは白い煙の壁が反り立つ。

角度的に何とかカナの姿が見えるが……アリアと霧の姿は未だに見えない。

一体あの煙の中で何をしているのか皆目見当がつかない。

カナへと飛び掛かるタイミングでも見計らっているのだろうか？

(だとしても——)

そう心の中で呟きかけた時に、カナの両脇から煙の塊が飛び出す。

2本の刀を交差させ突っ込むアリアと右手で逆手に持ったサバイバルナイフをカナの腹に突き立てるように霧が迫る。

完璧な挟撃。

だけどカナは視線を素早く左右に動かした次の瞬間には何故か長い三つ編みの髪揺らすとアリアの刀は弾かれる。霧のナイフは振られる前に手首を抑えられた。

すぐに霧はナイフを手放し、落ちたナイフを左手で握ったかと思うとそのまま安全装置セーフティのついた刃がカナへと再び向かう。

しかし、その刃はカナに届くことはなかった。

右手の人差し指と中指に挟まれた刃——二指真剣エッジ・キャッチング・ピック白羽取り。

それは奇しくも、ジャンヌの時に俺が使った技だ。

ヒステリアモードでなければ出来ない離れ業ワキモノだが、俺に出来て俺以上にヒステリアモードを使いこなすカナに出来ない道理はない。

霧はすぐに次の動きに移ろうとしたが、カナの方が速い。

左脚で軽く霧の足を払って浮かしたかと思うと、そのままカナは霧をアリアの方へ投げ飛ばした。

弾かれた体勢からアリアは硬直し、次のアクションが出来ない。

「くっ——！」「……っ！」

2人はそのまま煙の向こうに纏まとめて飛ばされ、消えた。

直後にズザザザ、と砂を滑る音がする。

どうやら音から察するに霧を受け止めて踏みとどまったらしい。

——バツ！

と思つてると間髪入れずに大きな煙の塊がカナの頭上を飛び越える。

そして煙がちぎれ空中に現れたのはグロック18を持って、逆さになつて霧。カナ

の背後に2丁のガバメントを構えたアリア。

これまた2方向から攻める形となった。

グロックとガバメントの銃声が同時に鳴り響くが、カナはその前に煙の中にいち早く

飛び込んだ。

当たり前だが、カナが霧の作りだしたこの煙幕を利用しない手はないだろう。

しかし、この煙幕はカナの手の1つをほとんど封じている。

いかに不可視インヴィジブルの銃弾と言えども対象が見えなければ撃ちようもない筈だ。

煙幕が張られてから今までカナが発砲してない事からの予想だが、だいたいあつてるんじゃないだろうか。

カナが煙に逃げ込む事を当然とばかりに予想してたのか、霧とアリアは一瞬で合流しカナの逃げた方へと突っ込んだ。

……………。

……………。

なんだ、一気に静かになつたぞ。

これじゃあ一体どうなってるか分からない。

もうじき煙幕も晴れそうだ。

その瞬間に人影が2つ、同じ方向に煙幕から飛び出した。

真正面で対峙するように出た2人。

俺から見て左端にカナ、アリアの順番。

一緒にアリアと飛び込んだ筈の霧がない？

疑問を覚えると同時にアリアの横から弾丸のように飛び出した霧がナイフを構えて

迫る。

「ありや……………」

「――！」
アリアを見た霧は困ったような声を上げながら滑るように止まり、アリアも目を見開く。

……反応からして何か予定が狂ったのか？

何にしてもカナの正面に2人仲良く並んでしまっている。

完全に補足された。

思わず俺はICキーの扉を開け放つ。

次の瞬間にドン、とすぐさま霧はアリアを突き飛ばす。

パ。パ。パ。パ。パ。パ。

そして、見事に霧だけがカナに撃たれた。

霧は咄嗟^{とっさ}に背中を向けたことで腹部への直撃は免れたみたいだが、それでもダメージ

はでかそうだ。

そんな光景を目にして俺はどうしようもなく憤^{いきどお}りを感じる。

もうこれ以上はいいだろ……！

何の意味があつて戦つてるんだ！

俺はカナの前に立ち塞がろうと駆けてる途中、

「やれやれ、降参降参」

痛そうにしながらも両腕を上げて霧はそんな風に白旗を振った。

その言葉に誰しもが唾然あぜんとする。

俺の足もつい止まった。

「あんた……何を、言ってるのよ……!？」

食いかかったのは蘭豹ではなくアリアだ。

突き飛ばされたからか、立ち上がろうとしながら霧を睨み上げる。

「これ以上は限界と判断したまでだよ。現に立ち上がるのもやつとみたいだし」

「まだ、あたしは……やれるっ!」

「そうは言っても神崎さんは動きが鈍ってるし、2対1でこの実力差……見極めも大事

だよ」

と、霧は遠回しにアリアに敗北を認めさせようとしてる。

「だったらあんただけ下がってなさいよ!」

対してアリアはまだやるつもりらしい。

何をそんなに意地になってんだよ……!」

これ以上は見ていられない。

「もういいだろアリア! これ以上やって何の意味があるんだよ!」

カナの銃弾がアリアに届かないように2人の間に割り込みながら言う。

「意味なら、あるわよ……!」

そう言いながら立ち上がるアリア。

それを見て霧はにこやかに微笑みながら困った顔をすると言う器用な表情で正面からアリアに近付き、

「ほいつ」

軽くアリアのこめかみあたりをコツコツと叩いた。

すると、力を失ったように霧の方へと倒れた。

「お、おい……アリア?」

俺が思わず近くに寄って見るとアリアは気絶していた。

「ああ、のうせきすいえき脳脊髄液を揺らして気絶させただけだよ」

霧はそう説明するが……何だよそれ。

傍目から見ても特別な事をしたようには見えないが、あんな事で気絶させられんのかよ。

「けつ、せつかくの酒がマズくなってもうたやないか」

蘭豹がガラスの衝立から降りてきて、不機嫌そうな……

いや、不機嫌そうじゃなくて不機嫌な顔をしてこつちへやってくる。

「おら、お前ら散れ! 3秒以内に散らんかったら撃ち殺す!」

その蘭豹の言葉に蜘蛛の子を散らすごとく、みんな手馴れた感じで静かに出ていった。

いきなりの展開。

思わずカナを見ると――

「……………んっ……………ふあ……………」

手を口元にやってあくびをしていた。

先程までの闘志は微塵もない。

おそらくは『あの時期』が近づいてるんだろう。

それからそのままカナは背中を向けて去ろうとしたところで一瞬だけ横顔をこちらに覗かせる。

何かを睨むように少しだけ目を細めて、すぐに歩みだした。

何だ、今の……………？

「最初からこう言うつもりやったな、白野^{ハナ}」

こっちはこっちで霧が蘭豹に顔を覗き込むようにして睨まれている。

最初から……………？

「えへへ」

「下手な誤魔化し笑いすんなやアホ」

「でも、あのままだと神崎さんは先生が何を言っても聞かなかったと思いますよ?」

「そんな時の心配をお前がせんでええんや、ボケ。教育にええ見世物として続けさせても問題なかった所をホンマに水差しよってからに」

「ちよ、ちよつと待てよ。あのまま続けてたらアリアは死んでたかもしれないだろうが！」

蘭豹の言い草に俺が食って掛かると、豹のような鋭い目を俺に向けてきた。

思わず身震いする一瞥いちべつをしたあとに再び霧へと目を向ける。

「おい、白野」

「ああ、はい。完全に昼行灯ひるあんどんです」

いきなり何故か霧に貶けなされた。

それから蘭豹が呆れたような目を向けながら、酒を飲んで言う。

「遠山……死んでたかもしれんとかほざいたが、あの女アママは始めから殺気なんぞカケラもなかつたやろうが」

カナに、殺気がなかつた……?」

その言葉に俺はいつの間にか出入り口に去って行くカナの後ろ姿を見る。

武偵高の教師である以上、蘭豹の見る目は確かだ。

嘘を言ってるようには思えない。何より、蘭豹はアリアと似た様な野生の獣じみた鋭

い直感を持つている。

それはいくら今みたいに酒に酔ってたとしても見事に当たる程のものだ。

以前にも何度か見た経験がある。

「よくよく考えてみなよキンジ。さっきの決闘で殺気を振りまいてたら、先生が気付かない訳がないでしょ？ それに、あの人がその気ならキンジがここに来る前に神崎さんはとつくにやられてるよ」

確かにそうだ。

カナがその気なら、霧の言うとおり俺が来る前に終わっていただろう。

なら、何のためにカナはここに……？

そんな疑問が浮かび上がる。

「ん……」

意識が戻りかけてるのかアリアが小さく声を上げる。

カナについての事は取り敢えず横あに置いておこう。

それよりもアリアだ。

俺は霧から渡されるようにアリアを背負い、闘技場を離れた。

◆ ◆ ◆

やれやれ、イマイチな茶番劇になっちゃったかな？

立ち位置を見せるつもりで飛び込んだけど……あんまり見せられなかった感じだね。キンジがアリアを背負い、そのまま救護科アシピランクスへと先に行った。

私は後から行く事を告げて一旦救護科に向かう途中の廊下で別れた。廊下の先の角を曲がる所で、理子が壁に背を預けて立っていた。

「その様子だと、観てみたいだね」

「無茶するよね……全く」

「そう思うんなら止めればよかったのに」

「あそこで邪魔したらキーちゃん、機嫌悪くなるでしょ？」

そこから辺は分かっているんだ。

私は少し苦笑する。

「かもね。まあ、どっちにしろ結果は変わらなかっただろうけど」

「……ところで、どうしてカナちゃんは武偵高に来たのかな？」

「さてね。色々と確かめたかったんでしようよ」

神崎・H・アリアという人物、弟であるキンジの様子、そして武偵高での私。

彼女（彼？）の事は後回しにして……

そう言えば気になる事が一つあったね。

「ところで理子」

「なに?」

「昨日の続きはどうする?」

「……えうっ!」

これまでに聞いた事のない驚愕の声と共に勢いよく壁と私から距離を取る妹。昨日の続きと言われてすぐに思い出したのか羞恥に染まった顔をする。

「あの……キーちゃんさ、最近思うんだけど。もしかしてそつちの”気”があるの……?」

「いや無いけど。ただ単に好奇心」

「嫌な好奇心だね……」

すぐに私にその気がないと知って理子は呆れ顔になる。

その後に何だか思い出した顔をする。

「そうだ。夾竹桃もジャンヌも捕まったことだし、一度会う事になってるんだけどキーちゃんは どうする?」

ああ、それは会っておかないと。

話したい事もいくつかあるし。

「同席させて貰うよ。連絡は後でお願いね。ちよつと神崎さんを見てくる」

「うん、分かった」

そこで私と理子は別れ、私は道を引き返して救護室へと向かう。

あれだよ。様子見って言うのもあるけど……私も無傷って訳じゃない。

袖を捲まくって後ろ肩を見れば痣あざになってる所がある。

弾丸の直撃を受けた背中はもうちよつと酷いことになってるだろうけど、骨とか内蔵組織とかは大丈夫だから問題なし。

言ってしまうえば打撲で済んでる。と言つても金属バッドで思い切り殴られてるようなものだから、それで済んでるって言うのおかしな話なんだけどね。

まあ、軽く冷やせばなんて事はない。

さてと、キンジ達はどここの救護室に——

『おい、待て！ 俺に八つ当たりをするな！』

『うるさいうるさいうるさい！ あんたなんかどつか行きなさい!!』

すぐそばで聞こえる喧騒。

どうやらこの救護室らしい。

「待てって言つて——ぐおッ!!」

慌てて扉から飛び出て来たキンジにコールドスプレーの缶が頭部にヒット。

ちよつどよかった。

冷やすものが欲しかったんだ。

そのまま私の方に飛んできたスプレー缶をキャッチする。

「ご苦労様だね」

こつちに気付いてない様子だったので私から声を掛ける。

「霧……」

「ん、どうかした？」

「……………」

少し私を見て目を伏せたキンジ。

「ありがとな、止めてくれて」

それから顔を上げて静かにそう言った。

「いいんだよ別にお礼なんて」

遠慮とかそんなんじゃないやなくて、実際問題としてマイナス要素が多いし。

「それじゃ」

キンジの横を通って私は神崎のいる救護室へと入る。

「一体何の用よ」

入った直後、ベッドの上で体育座りしてる神崎が膝の間から睨むように見てくる。

何の用って言われてもね。

「普通に自分の手当しにきたただだよ」

近くにあつたパイプ椅子を手に取り、背もたれを前にして座る。

「どうして止めたのよ……」

それから細々とした声で問いかけてきた。

「力量差があり過ぎた。それに冷静さも欠いてたし、あのままじゃ日常生活に支障をきたす怪我にも繋がりがかねなかつた」

「あんなこと言われてツ……冷静でいれる訳ないでしょ！ それにあんたが止めなければ勝つ方法はいくらでも——」

「あの見えない銃撃にも対応出来たって？」

「……………」

何も言わないって事は、やっぱり“あれ”に対抗する手段が自分にはない事ぐらい分かつてはいるんだ。

ただ……その現実を受け入れようとはしてない。

敗北が目に見えて分かつていても、拒絶している。

こつちもある意味では板挟みになつてる。

「上には上がいるもんだよ。時には退く勇氣や、負けを享受する強さも持たなきゃ」

「あんたも、キンジと似たような事を言うのね」

「へー、キンジも言ったんだ。珍しい……。ま、それは置いておいてキンジも神崎さんの

事が内心では心配なんだよ」

「……そう、なの？」

「どういう理由かは分からないけどね。でも、心配してるのは確かだよ」

私の言葉に目を瞬かせて、何かを思い返してるような顔をする。

さつきキンジに強く当たって追い出した事を反省してるのかな？

しばらく考え込むような形で膝を抱え込む。

それから私は軽く自分の手当をして神崎を残して救護室を去る。

今回はこれで一段落って所かな。

56：ささやかな日

カナと神崎の決闘から後日。

何故かは知らないが、キンジと神崎の仲が険悪になった。

教室でもお互いに一言も喋らない上に神崎に関しては誰とも話したくない的なオーラを撒き散らしている。

あの救護室から出た後、私はキンジの部屋に行かずに自分の部屋に戻った訳だけど。しまったなく……何かイベントを見逃したっぽい。

ま、想像に難くないけどね。

私が帰った後にキンジがカナと一緒にいるところに神崎が出くわしたんでしょ。

あそこまで雰囲気が悪いと、それぐらいしか考えようがない。

うーん……まあキンジの事だから何とかするでしょ。

この間の七夕に行くお誘いメールの件もあるし、結局どこかで何だかんだ仲直りする事になるだろう。

それよりも夾竹桃達だ。

「会う場所はどこだったけ？」

「えつとね。夾ちゃんは確かホテルに泊まつてゐるつて話だったよ。確かここら辺に……あつた」

そう言つて理子に連れられてきたのは、大きくはないが高級そうなヨーロッパ風のホテル。

軽く裝飾された門柱。その先にはホテルの入口へと続く十段ほどの階段。門の両脇には針葉樹の幼木よんぎが窮屈さを感じさせない程度に並んでゐる。

「司法取引した割には場所を移してないんだね」

「荷物を動かすの面倒くさいからだつて、それに特に移動しろとは言われてないみたいだし」

あの子は割とホテル暮らしが多い。

だからまあ、理子の言う事にも特に何も思わない。

出入り口へと向かい『LAST DANCE』の看板をくぐる。

入つてすぐにロビーの方を見ればすぐにソファアームに座つてゐる夾竹桃を発見した。ジャンヌも既にいるみたいだね。

『遅れてゴメン、待つた?』

「遅いぞ理子、一体何をして——おい……」

『ん? どうかしたジャンヌ?』

「2人同時に喋るな……と言うかもう片方は呼んでないぞ。」どっちが本物だ?」
そう、私は理子と瓜二つの姿で来た。

意味は特にない。

「ジャンヌ、どちらが本物でもいいでしょ。話す事も大したことじゃないし」
紫煙を吐き出しながら夾竹桃が言う。

その言葉にジャンヌは不満そうな顔を浮かべる。

「で、話ってどしたの? 売り子の話?」

ジャンヌ側のソファアに座った理子が夾竹桃に尋ねた。

「それもあつたけど違うわ」

「あ、違うんだ……じゃあどうしたの?」

「パトラが『退学』になつたらしい」

ジャンヌが夾竹桃の代わりに割り込むよう答える。

へえ、あの自称霸王フアラオのパトラが退学にねえ。

「ジャンヌつてばそれ、いつ聞いたの?」

「ついさつき夾竹桃に聞かされて私も知つたところだ」

私の問い掛けに一応ジャンヌは普通に答えてくれた。

まあ、どっちの理子が私かなんて分からないだろうからだけど。

「ちなみにパトラが具体的に何をしたのかは聞いてないし、いつ退学になったかは聞いてないわ。ただ単に素行が目に残ったから退学にしたそうよ」

まあ、素行が悪かったのは今に始まったことじゃない。

前から厄介者だった部分はあるし。

それにしてもお父さんも退学になんてせずに私に任せてくれれば良かったのに。

って、それなら普通に言ってくるか。

これから先に必要だから私に言わずにパトラを普通に退学にして生かしたんだろう。

「それと、なぜか私に『教授』^{「プロフェッサー」}から連絡が来て言伝を預かってる。あなたが来た事で連絡する手間が省けたわ」

夾竹桃は隣にいる私と理子を交互に見る。

どっちが私か分からないから理子も見たのであって、言伝の相手は私“だけ”だろうね。

「7月24日にイ・ウーに戻ってきて欲しいそうよ。私から話しておくことは以上ね」

7月24日……カジノ警備の依頼予定日だ。

そして、お父さんの寿命が近い日でもある。

だからもう、この時点で大体の展開と言うか予想が出来てしまう。

そこで私を呼ぶ理由まではよく分からないけどね。

「ああ、うん。確かに言伝は受けとったよ」

「あら、私の隣があなただったのね」

「別に隠してた訳じゃないよ。この格好で来たのに特に意味はないし」

私の言葉にジャンヌは呆れる。

「ならば普通に別の姿で来い。知人の姿だと紛らわしい」

「分かった。今度はジャンヌの姿で来るよ」

「なんでそうなるッ!？」

少し身を乗り出して私に突っ込む。

「いいでしょ。双子のジャンヌ・ダルクもいたんだし、問題ない」

「あるに決まってる。大体お前が私の姿をするなど寒気がする」

「……うつ、ぐす。理子お、ジャンヌがイジメるよ」

「うわあ、ジャンヌがお姉ちゃんをイジメたー。そう言うのいけないんだー」

「ええいッ……!! 2人して変な芝居をするな!」

私と理子の連携にたじたじの聖女様。

あんまり騒がしくして目立つのもどうかと思うし、ここらでやめておくか。

「ジャンヌをからかうのもこれぐらいにして……。何と言っても情けない話だね。下級生とは言えイ・ウーのメンバーが3人も捕虜になるって言うのは……1人は最近Dラ

ンクになった子に敗れ、もう一人はAランク武偵に翻弄されてたし」

理子から離れて、私はソファーに戻りながら夾竹桃とジャンヌを交互に見る。

「相変わらずどこで情報を掴んだのか知らんが、耳が早い事だ」

「くふっ、あたし独自の情報網を舐めたらダメだよ」

と、ジャンヌにしたり顔で私は答えるが。

情報網と言ってもほとんど私自身で仕入れてるから、大したことではないんだけどね。

そもそも白野 霧として武偵高にいる訳だし。

隣にいる夾竹桃が静かに手帳を開く。

「情けないと言うのは否定しないわ。それで理子、8月の13日に前日準備……14日から16日まで予定を空けておいてちょうだい。あといつも通りに原稿の手伝いをお願いするわ。ジャンヌもね」

「もちろんだよ！」

「わ、私もか……?」

理子は嬉々としてるが、ジャンヌは何やら巻き込まれた感が否めない。

「あと、サークルスペースは追って連絡するわ」

「了解であります」

理子はビシツと敬礼して夾竹桃に答える。

「気合入ってるね。コミケだっけ？」

「違うわ……戦場よ」

私の言った事と同じじゃあ、なんて思わなくもないが。

夾竹桃の目がキュピーンと言った感じに光ってる気がした。

だから多分、重みが違うんだろう。

面白半分で行きたいなんて言ったら怒られそうな雰囲気だ。

「ま、楽しむといいよ。それまでにイベントがありそうだけどね」

「そう言えば、お前は何かやってるのか？」

『お前はどうかんだ？』みたいな視線がジャンヌから放たれる。

私がここに来た余裕から私の事を暇人とも思ってるんだろう。

しかし暇じゃない事を理子的なテンションで答えてあげよう。

「もつちのロンだよ！　今も極秘の任務であります。数日後にはデートの約束もあるし」

♪

「へー、デートね……」

『……ん？』

理子が呟いた後に3人して私を見てくる。

「お前がデート……？ なんの冗談だ？ 相手は誰だ？」

「ジャンヌ、デートする相手じゃなくてデッドする相手の間違いじゃないかしら」

「ああ、なるほど」

夾竹桃の言葉にそれで納得するジャンヌ。

2人してかなり酷いこと言ってる。

「ぶー、ほんとだよ。仕事だけどデートだもん。もちろん相手は秘密だけど」

「仕事でデートと言う組み合わせがよく分からん。どうせいつもの冗談だろう？ 大

体、男か女かも分からんお前が誰とデートをするんだ」

「ふーんだ、疑うならそう疑ってればいいよーだ。男の気配がないジャンヌは聖処女の

ままがお似合いだよ」

「凍て殺すぞ貴様」

ジャンヌ眉の釣り上がり頬がヒクつく。

おお、怖い怖い。

「理子。お前の姿をしたこの何かに何か言ってくれ……」

ジャンヌが私を得体の知れないものみたいに言ってくる。

まあ、客観的に見れば得体の知れないって言うのは分かるから特に何も言わないけど。

「……………」

理子に対して言ったジャンヌだったが、当の本人は黙って何かに勘付いた顔。いやまあ、理子は気付くかもとは思っていたけど……

「何か言ってくれて言われても……セリフに困るんですけど」
ちよつと考えるフリをして理子はジャンヌに答える。

上手い事誤魔化したね。

「ここらで話を切り上げるか。」

私は立ち上がってホテルの外へと続く扉に向かう。

「ま、それぞれ学校生活を楽しんでるといいよ。それも”すぐ”に終わるだろうけどね」

「……………」

3人は去り際の私の言葉の意味を理解しているようだった。

近い内に、イ・ウーは崩壊する。確実に。

バンデイレ

お父さんが健在の内に決められた宣戦会議の開催がそれを物語っている。

「お前は——」

「悪いけどジャンヌ。あたしがどっちの勢力になるかは教えるつもりはないよ」
遮るように私は言う。

「……………」

黙ったところを見るに、私がどちら側につくかを聞こうとしたんだろう。

敵にしたいくないのが本音だとも分かってる。

けれどもそれを決めるのは私だ。

いや、お姉ちゃんかな？

まあ何も言わなかったら、私に任せると言う事でいいんでしょう。

そこはこれからの成り行きだね。

「それじゃ。Au ^オ ^ル ^ヴ ^ワ ^{ール} ^{ール} ^{ール}

フランス語で『また会おう』と言う意味の言葉を残して私は今度こそ去る。

7月7日——日本では七夕と呼ばれる日。

この日から武偵高は早めの夏休みが始まる。

これは単位不足の人が夏休み中に緊急任務をする事を考慮して早めになってい
らしい。

と言つても、日頃から依頼があるんだから学校がないだけで武偵の日常としてはあ
り変わらないと言うのが正直なところ。

ちなみにキンジとのデート（本人にそんなつもりはない）だけど……

さすがに神崎と同じ集合場所にいると色々としじれる。

いや、それはそれで面白そうなんだけれどこれ以上へそを曲げられても困る。だからここは一足先に緋川神社へ行つて偶然を装い、キンジ達よそおに合流する。それなら問題ないだろう。

緋川神社の鳥居付近に差し掛かつて突如何か視線を感じる。

振り返つてみれば、

「あれ、霧先輩？」

そこにはライカがいた。

◆

◆

◆

あつぶなー……気付かれたかと思った。

振り返つたお姉ちゃんに思わず緋川神社の鳥居の影に隠れるあたし。

いくら変装して人混みにいるからつてお姉ちゃんがあたしに気付かない可能性はな
いんだから。

普通に祭りに来る人に紛れるよう浴衣姿で来たはいいけど、思ったよりも多いな。

つて言うかお姉ちゃんがデートつて言ったからつてつきりキンジと待ち合わせしてると
思つただけど……違つたかな？

と思つていると、私の横を通り過ぎる人影達。

「あれ、霧先輩？」

見た事あるシルエットと聞いた事のある声に思わず視線を移すとそこにはあかり達
がいた。

声を掛けたのは確か、お姉ちゃんの戦妹^{アミカ}——確かライカって言う子だったはず。

ただ、その声を掛けた本人はキーちゃんだと言う自信がなさそう。

しかしお姉ちゃんは、

「えっと、私の事でしようか？」

うわー……トボけたよあの人。

いつものイタズラ気質が働いちちゃってる。

困った風に小首を傾げながら、片手を胸の前にして戸惑いを見せてる。

演技とは言えお姉ちゃんが困り顔をするのは結構レアだ……

いつものお姉ちゃんとは全然違うけど。さらに言うなら雰囲気完全に白野 霧と

は違うキャラだよ、アレは。

キーちゃんは簡単に言えば天真爛漫な人な訳だけど、今は清楚と言う言葉がしつくり
くる。

そもそも白野 霧の性格がほとんどお姉ちゃんの素の性格だと思っただけだね。

って言うか何、あの気合の入れよう。

浴衣姿な上に薄く化粧までしてるんですけど。

いや、お姉ちゃんは無駄なところに無駄に力を入れる事がよくあるから別に不思議ではない。不思議ではないんだよ……うん。

でもやつぱり『何かおかしいじゃないかな?』と内心思ったりもする。

「あ……えつとすみません、人違いでした」

申し訳なさそうにするライカ。

いや、合ってるんだよ。だから謝つたら逆に――

「どうしたのライカ。つて、あれ? 白野先輩?」

立ち止まったライカを気にしてかあかりが近付いてきた。

「あく……あかり、その人は――」

「おー、1年たちも来てたんだね」

「――ッ!？」

お姉ちゃんがいきなりキーちゃんに戻った。

ああ……やつぱり……

しかも今のライカの反応。物凄い勢いでお姉ちゃんの方に振り返ったね。

「え、あれ……? 人違いなんじゃあ……」

「そんな訳ないでしょ。戦妹いもうとなのに戦姉あねを見間違えるとは」

「いやいやいや、最初に確認しましたよね!？」

「ふふ……いや、からかってごめん。そんなに別人に見えた？」

適度に茶化して悪戯いたずらっぽく笑って問いかけてる。

と言つても意地の悪い笑みじゃない。可憐さと上品さを兼ね備えた何かがあるんだけど。

え、なにこれ……演技にも無駄に力入れすぎじゃない？　ほとんど素すかもしれないけど。

何かニュータイプぱりに1つの嫌な予感が浮かんでくる。

「そりゃ、まあ……別人に見えましたよ」

「まあ、白野様、綺麗なお姿ですの」

ライカの言葉に続いて麒麟も近付いて来る。

「ありがと、麒麟ちゃん」

お姉ちゃんは軽く笑顔で答えた。

この時点であかりのグループがお姉ちゃんを取り囲む形になる。ちょうどいい感じに障害物になって、私が見えにくくなってる。

見えにくいのはあたしの方でも言える事だけど……会話さえ聞こえたら問題ない。

「おっと、面識のない子を1人発見」

浴衣姿の面々の中でお姉ちゃんが気付いたように視線を唯一婦警の格好をした子に

目を向ける。

服装はビシツと決まってるて乱れがない。真面目だと言う事が窺い知れる。

腰の上まで長い黒髪、そして桜を模した髪留めでツインテールにしている。

「あ、そう言えば……桜ちゃんは初めてだね」

「は、初めまして！ 中等部3年、強襲科所属の乾 桜です！」

「これはどうも、ご丁寧に。高等部2年強襲科所属、白野 霧であります」

あかりに紹介される形で桜って子が敬礼で挨拶をする。

お姉ちゃんもそれに対して敬礼で返す。

そのお姉ちゃんの自己紹介に桜ちゃんは目を丸くした。

「白野……霧？ あの、もしかしてかつて『プラチナコンビ』って言われてた……」

「まさか中等部にまで知られてるとは……プラチナコンビ、そんな風に言われてた時も

あったね」

「こ、光栄です。まさかSランクに近いと言われてる人に会えるなんて！」

目を輝かせて、お姉ちゃんに迫る桜ちゃん。

……お姉ちゃん、最近思うけど結構目立ってるよね。

いや、カリスマ性があるだけかも知れないけど。

「言われてるだけだよ。ランクが実際に上がった訳でもないし、特筆する事がある訳で

もないしね」

嘘だ……変装チートが何を言ってるんだか。

お姉ちゃんはどうかの聖杯戦争でのクラスは間違いないくアサシンタイプ。

「桜さんは何か霧さんに憧れでもあるんですか？」

「ええ、私以上に何でも持つてる先輩に……とても憧れてました」

あの黒い長髪の子——確か志乃——が桜に問い掛け、彼女は嬉しそうに答える。

「なるほど。ま、私でよければいつでも相談に乗るよ。それよりも今は……」

「そうですね！ 今はお祭ですから、早く行きましょう」

麒麟がお姉ちゃんの言葉に割り込むように催促する。

「そう言えば、霧先輩はなんでここに？」

「ライカお姉さま、それは愚問ですの。女性が化粧をして着飾ると言う事は、やる事は」

「つしかありませんの」

「何だよそれ。ただ単に祭りに来たってだけじゃないのか？」

「いいえ、違いますの。ズバリ！ 白野お姉さまは誰かとデートされる予定ですの！」

「はは、霧先輩がデートなんて——」

「さすがは麒麟ちゃん。察しがいいね」

「そんな訳って……ええええええええええッ!？」

ライカが驚愕する。

つて言うか他のみんなも驚いてるよ。

「いや、いやいやいや……霧先輩にかかか、彼氏がいるなんて聞いてませんよ！」
「うん。だってそんな話はしてないからね」

目に見えて動揺してる1名。

ライカ……お姉ちゃんにこの時点で遊ばれてるよ。

だつてお姉ちゃん、デートは認めても相手が彼氏だとか恋人だとか言つてないし。
他のみんなも同様に目を丸くする。

そんなお姉ちゃんはちよつと悪意のありそうな笑顔だ。

「さて、ちようどいい所で出会つたし。私も後輩達について行くでしょう」

「え？ お相手を待つてるではないんですか？」

「んー……神社の中で合流する予定だから問題なし」

何やら気分が決めたような感じ。

質問した志乃は、お姉ちゃんの言い回しにどこか違和感を感じてるようだった。

あの言い方……やっぱり相手はキンジなんじゃあ。

……充分にありえそうだから困る。

逆に理子の知らない第三者が相手でも困るけど。

一氣に人数が増えてお姉ちゃん達が祭囃子まつりばやしの中に消えていく。

あたしも適度に祭りを楽しみながら、一般客を装いながら尾行する。

せつかくの祭りに尾行とかバカだと思っただろうけど、しょうがない。

気になるものは気になるんだから……

◆ ◆ ◆

緋川神社の屋台を歩き回る俺と赤とピンクを基調に金魚の柄が入った浴衣を着ているアリア。

アリアに関しては先日俺と険悪な雰囲気になってたとは思えないほど、この祭りでは機嫌を直していた。

俺としてもこの間の教室の中のギスギスした雰囲気のままではいたくはなかったし、どんな顔をしていたらいいのか分からなかったから、アリアのご機嫌がいいのは助かる。

余計な気を遣わなくてもいいしな。

それはいいんだが……問題は霧だ。

あの時、確かに霧にも誘いのメールを送られてしまった訳なんだが。上野駅のジャイアントパンダの置き物の近くにはいなかった。

送信履歴にも確かに霧に送った証拠があるんだが……うまく届かなかったのだろう

か？

メールを見てないなんて事はないとは思うが、実際はどうなのか分からん。

それに来たとしても……アリアと鉢合わせしてたら、その、何か面倒な事になってたような気がする。

だけど、来ない事に安心したかと言われたら微妙だ。

どちらかと言うと――

……………。

あれ？ 俺は何を考えてるんだ？ 霧が来ない事を残念がつてる？

……………。

ああ、ヤメだ。ヤメ。

アリアと同じで霧の事も考えると変な感じになる。

そんな感じで思考を払うように、テーブルや椅子が並べられている食事が出来そうな緋川神社の休憩スペースに目を向けると見慣れた顔が見えた。

それに気のせいかあつちから歌声が聞こえる。

「ピーポ♪♪ ピーポ♪♪ ピーポニャン♪♪」

なんかの子供アニメのような歌詞が聞こえた場所をよく見ると、アリア並にちっさい子も見える。

あれは……多分、アリアの戦妹アミカの間宮 あかりだろう。

つーことは、今あそこで歌ってるのは――

「……おい、あれか？」

「なにが？」

「アリアの戦妹アミカの戦妹アミカになるかもしれない架橋生アクロスつて」

俺に言われて視線を移したアリアが微妙な顔を始めたぞ。

おいおい、まさかとは思ったが……あそのテーブルの上で下着っぽい姿でネコミミのコスチュームをして歌ってる子がそうらしい。

アリアの話だと将来有望だと言う話もチラツとしてた気もする。

つーか、あいつら祭りを楽しみ過ぎだろ。

突然にアリアがあかり達の近くまで歩み寄り、

「こらー！ 武偵は常在戦場よ！ 気をつけえ！」

大声を出す。

後輩全員がビクリと反応し、シャキつとする。

「もう、お祭り気分もほどほどにしなさい!!」

『……………』

それから流れる沈黙。

アリア、注意を促す前にお前の姿をもう少し考えみる。

……お前が一番祭りを楽しんでいるじゃねえか。

頭にお面を乗せて右手にはももまん味のわたあめ、左手にはりんごあめにイカ焼きにチョコバナナ、水風船を装備してる。

そんな姿で言つても説得力がある訳がない。

ほら、後輩達も微妙な顔してるし。

「神崎さん、鏡を用意してあげようか？」

そんな言葉と共に現れた霧は、アリアと同じ……浴衣姿だった。

しやなりしやなりと歩いてきた霧はいつものように微笑んでこそいるが、どこか違う印象を持っている。

今のアリアは“カワイイ”と言う感じだが、対して霧は“綺麗”と言う感じだ。

「霧も祭りに来てたのね……」

アリアはちよつと意外と言う感じの表情をする。

「まあね。こんな所で会うなんて、偶然だね」

と言いつつ霧は俺に視線を向けてくる。

それから楽しそうな顔をして、

「そうだ。偶然に会った事だしキンジと一緒に回ってもいい？」

両手を合わせてそう提案して来た。

別に俺としては構わない。

と言うか、むしろついて来て欲しいくらいだ。

主にアリアのお守り的な意味で。

「ああ、もちろんだ」

「だ、だめよ……！」

俺と正反対の声が隣のツインテールから聞こえてくる。

アリアに顔を向けると、何故かは知らんがアワアワと慌てた様子だ。

「なんでだよアリア。別にいいだろ、霧が一緒に来たって」

「だって、ほら……霧は後輩達と一緒に——」

「ああ、大丈夫だよ。後輩達には事前に話してあるし」

そう言って霧の視線を追うと、何やら興味深そうな目をしてるのやら、ポカーンとした表情をしてるのやらがある。大体、ポカーンとした顔の方が多い。

どう見ても事前に話してあるにしては何か驚愕してるっぽいんだが……

そんな事はお構いなしに霧はアリアがいる反対側の俺の腕にナチュラルに絡み付いてくる。

「それよりも早く行く、それじゃあね」

「え、あ、おい!？」

霧は後輩達に別れの挨拶をしながら俺を引つ張つて行く。

「あ、ちよつと待ちなさいよ!」

アリアも声を上げて俺達を追い掛けて来る。

1人増えて3人になった俺達は、祭りの喧騒へと向かつて行った。

俺の左に霧、右にアリアが陣取りながら一緒に歩く。

アリアに関しては何んかよく分からんが、少しだけ不機嫌そうな感じがする。

一体何だつて言うんだ……

そう思つてると俺の右袖が引つ張られる。

「なんだよ、アリア」

「あそこに人がいっぱいいるけど、あれは何をしてるの?」

そう言われて見た先には七夕の笹ささだ。

色んな人が、備え付けられた机の上に置いてある短冊たんざくに願い事を書いて笹に飾つてい
る。

「ああ、あれは細くて長い紙に願い事を書いて笹に飾ると願い事が叶うんだよ。この国の恒例行事だね」

「そうなの。じゃあ、あたしも何か書くわ!」

俺の代わりに霧が説明すると、アリアが目を輝かせて短冊が置いてある机に向かって行った。

元氣よく「1枚ちようだい」と言つて、受付の人から短冊を買っている。

霧も續いて短冊を買つたらしい。

2人が書いてる様子を俺はその脇から眺める。

達筆な字で2人とも願ひ事を書いてるが、アリアのは英語だ。織姫と彦星は日本語じゃなくて英語でも大丈夫なんだろうか……。しかも縦書きじゃなくて横書きだし。

霧は後ろにいた俺に氣付く。

「なに、キンジは私の願ひ事に興味でもあるの?」

「何となく見てただけだ。と言うか見てもいいのか?」

「見てもいいのかつて言うか、笹に飾つたら道行く人にどうせ見られるんだし隠しても意味ないでしょ」

それもそうだ。

そう思つて霧の手元にある短冊に書かれた願ひ事を覗くと『人生、楽しく過ごせますように』と書いてあつた。

「お前、いつも充分に楽しく過ごしてらるだろ」

「これから先も楽しくなる保証はないからね」

何気ない一言だが、深いな。

確かに俺達武偵はいつ事件が舞い込んでくるか分からない。

それに事件の中には胸糞悪くなるようなモノも交じるだろうし。

そう言う意味では、霧の言う事も納得できる。

「なるほどな」

俺が感心して声を出すと、霧は笹へと飾る。

一方でアリアは見栄を張ってるのか背伸びをして笹に飾り付けようとしている。

普通に今の位置で飾れよ。

そう思っていると、道の向こうから歓声が聞こえる。

何だ……？

そう思つて見ると神輿みこしを担いだ人波が押し寄せてくる。

それもようやく短冊を飾り付けたアリアに向かって。

「え、え……？ なに？」

そのまま声を上げてアリアは人波に流されてしまった。

あーあ、あのままだと迷子放送しなきゃいけない。

霧も人波のせいで分断されちゃったし。

「アリア、こっちだー！」

仕方ないので俺はすぐに飛び込み。

特徴的なアニメ声を頼りにすぐにアリアへと向かって手を差し伸べた。

向こうも人の壁の向こうから手を伸ばして俺の手を上手く掴む。

その瞬間に、俺はアリアを引つ張り共に人混みから脱出した。

うまく屋台の立ち並ぶ路地へと避難した俺達はそこで一息つく。

「あ、危ないわね……で、出られてよかったわ。何よ、あれ……」

「あれは神輿だよ。それよりも、危うく離れ離れになる所だったな」

そこへちようど霧がさっきの人混みの中から普通に現れてきた。

「ふう、流されるところだった——うん？」

そのまま俺達の事を見てる霧に思わず尋ねる。

「どうしたんだよ霧。何か俺とアリアに付いてるか？」

それからニヤリとして、

「いいや。ただ、手を繋いで仲がよろしいと思ひまして」

ちよつといつもの喋り方とは違う感じでそう言ってきた。

手を、繋いで……？

思わずアリアと顔が向かい合ったところで、そのまま視線を下へとスライドさせる。

そこには、お互いに手をガツチリと握ってしまったてゝる手が映る。

『……………!!』

こ、この状況……………！ マズイぞ。

アリアがみるみる赤くなつて火山みたいに噴火しそうだ。

すぐに手を離そうと思つたが、アリアは万力みたいに逆に締め付けてくる。

——ギリギリギリイ！

おおいつ!? 音が、俺の手から音が！ 握力だけで骨が軋きしんでる感触がするぞ!!

ぼっ！ と、物凄い速度で離れたアリアは爪を立てるようになった自分の手を凝視ぎようしする。

それから涙目で俺へと振り向き——

「こんの、エロキンジ！」

何がどうしてそうなつたのか、俺を何故かそう蔑んでパーがグーになり飛んできた。

殴られて顔の方向を無理やり変えられた時、ちょうど見えた霧は微笑していた。

……………やっぱりお前は充分に人生楽しみ過ぎだ。

そう心から思う。

「動かないでよ、当てづらい」

霧にそう言われてじつとしてると左目に冷たさを感じる。

予想通りと言うか、アリアに殴られた左目の周りが青痣あおあざになつてゐるらしい。

どこかで氷を買つてきた霧はタオルに氷を包んで簡易の氷嚢ひょうのうにし、それを俺の目の周りに当てている。

ここは本殿の裏。縁側みたいになつてゐる場所だ。

そこに俺達3人は来ている。

アリアが人に酔つて、俺はこの有様だからな。

それに拝殿の方はカップルが多すぎて落ち着けなかつたし。

「わあ……」

そんな殴つた張本人は空に打ち上がる花火に子供みたいに口を開けて夢中だ。

ちよつとは俺の事を気にしろよ。

そんなお子様とは別に霧が甲斐かひ甲斐がひしく俺を介抱してくれている。

つつても、ほとんど殴られた原因みたいなものだから差し引きゼロだけだな。

「うん、まあ大丈夫。すぐに治るよ、キンジは「うたれ」強いから、二重の意味で」

「すぐ治る理由にならないだろ」

そのまま霧に差し出されるように氷嚢を受け取り、自分で冷やす。

それに二重の意味でよく「うつ」のは霧を挟んで向こうにいるホームズのお嬢様だ。

……しかし。

ちらりと左に目をやる。

霧もアリアも夏がよく似合うな。

特に霧はおととし一昨年の夏と違って、大人びて見える。

……。

……。

花火が終わり、夏の虫の音と、林からする葉擦れはずが俺達を包み込む。

沈黙が流れるが、さつきからアリアが俺をチラチラと見てる。

いや、お互いに顔を合わせては逸らしている。

「お互いに話しておきたい事があるならハッキリしなよ」

そんな俺達の様子を見かねた霧が催促する。

まあ、確かにこんな風に変な空気を流しても仕方ないよな。

その霧の言葉に後押しされる形で、

「あのさ」「えつとな」

お互いに口を開くがハモってしまった。

「ああ、その……何だ。お前からでいい、言う順番が違うだけだし」

「う、うん」

俺がアリアに先を譲ると、少し黙ってから薄い唇を開いた。

「カナの事、ごめんね。霧も……あたしの事を思つて一緒に戦つてくれたのに」
謝罪か。

珍しいとは思うが、その事を茶化す――

「神崎さんが謝罪なんて珍しい。傘買つてこないと」

よな……霧なら。

「もう、ふざけないですよ。あんたやキンジの言う通り、あたしはカナに負けた。確かな実力差があつた。特にキンジが言つたように、あたしより強い武偵はいる。その事を……頭では理解してたのよ。けど……今まであたしのいた武偵学校にはあたしを負かす程の実力者はいなかつた。だから、実感は湧かなかつた……けどこの間の決闘で、思い知つたわ」

どうやら自分の実力がカナには及ばない事を享受できたみたいだ。

しかし、「――でも」とアリアは話を続ける。

「でも、それでも負けたくはなかつた。カナにあんたのパートナーをやめるように言われて……どうしようもなく腹が立つた。だから、あの時にあたしは――」

カナがアリアに俺のパートナーをやめるよう言つた……？

一体、どう言う事だ。

どうしてカナが——兄さんがそんな事を？

全くもってカナがアリアを狙う理由が掴めない。

そこで話を区切つて、アリアが聞いてくる。

「それで、キンジ。以前に心の整理が出来たら話すつて言つてたけど……まだ、カナについて話せない？」

紅鳴館でそんな事を言つたが、律儀に覚えてたか。

まあ、教えるつもりが無かつたらそんな風に言わなかつたが。

それでも……

「悪い。まだ話せない。それどころか、余計に整理がつきそうにない」

兄さんが生きてた。

それは、何よりも喜ぶべき事実。

なのに、兄さんは変わつてしまつていた。理子に言われた通り俺の知つてる兄さんとは違つた。

誰よりも優しくかつたあの人が、同じ武偵であるアリアを『殺そう』と言ひ出してしまふ程に……

それと”もう一つの出来事”が余計に俺の頭を掻き乱す。

「そう、なの……」

シユン、とした感じがか細くアリアが呟く。

またしても静寂が訪れるかと思いきや、すぐに迫る様に声を掛けてきた。

「じゃあ、これだけ確かめさせて頂戴ちやうだい」

「なんだ……？」

「その、カナは、あんたの恋人……とかじゃないわよね？」

「違う。寮でお前はカナが俺の昔のパートナーだとか言ってたが、それも違う。お前と会う前まで組んでいたパートナーは霧ただ一人だけだ」

「でも……他人じゃない」

アリアの言葉に俺は言葉が詰まる。

それからアリアは言葉に迷いながら、続けてくる。

「なんて言うか……もつと別の、深い関係……絆みたいなものを感じるわ。ただの友人とか知り合いとか、そんなじゃない。これ以上、上手く言えないんだけど……そんな感じがするの」

相変わず抽象的な表現だな。

けれど、それは大体合ってる。

さすがに家族だ兄弟だ、とまでは行かなかつたが……それでも鋭い洞察力と直感でほぼ言い当ててきた。

「それで、あんたはこれからカナとどうするつもりなの？」

「どう言う意味だよ？」

「これから、パートナーを、組むの……？」

より一層、不安そうな声で尋ねてくるアリア。

何でそんなにも弱々しくなるのか俺には理解できん。

「それはないな……大体、言っただろう？俺とカナの関係はそんなじゃない。格も
違いすぎる」

一応ハツキリと否定しておく、

「そっか……」

アリアはどこか安堵あんどしたような優しいげな声音に変わった。

どうやら俺が離れて行く事が一番、不安だったらしい。

「それに、武偵憲章8条『任務は、その裏の裏まで完遂かんすいすべし』。お前と理子との戦いから始まって、ジャンヌとブラド。イ・ウーのメンバーを既に3人も倒しちまつてる。面倒だが、もう深いところまで入ちまつたからな。今まで受けた任務の裏の裏にお前の母親の件が絡みついてる。だったら、完遂するしかないだろ。イ・ウーの一件が解決するまで、付き合っつてやるよ。お前に」

「キンジ……」

「それにかねえさんにも頼まれたしな……お前の助けになつて欲しいって。武偵を辞めるつもりとは言え、俺は来年の3月まで武偵だ。だから、まだ俺とお前はパートナーだ」未だに不安そうな顔をするアリアに対してそんな風に俺は理屈を並べ立てる。

我ながら気恥ずかしい事を言つてる気もするが、本心だ。

俺とは反対に過酷な運命に立ち向かうアリアを支えてやりたいと……そう思つてるからな。

アリアはポツリと眩く。

「どうしても武偵を辞めるつもりなの？」

「ああ、これはどうあつても譲れない。誰に何と言われようともな」

武偵と言う仕事は、俺には早かったのかもしれない。

血生臭い事件もあるし汚い所もいっぱいあると理解はしていた。

だけどそれだけだった。

それなりに場数を踏んだつもりだったが……兄さんが死んだと思つた日には、もつと黒くて薄汚れた世界を見てしまった。

そんな世界のために奉仕するなんて事は、俺には無理だと感じた。

今にして思えば……俺は兄さんの背中に憧れて、ただ追い掛けて、武偵になったのかもしれない。

流されてただけなのかもしれない。

本当に自分になりたいモノが何だったのか、俺には分からなくなってしまった。

兄さんが変わってしまったのはきつと、俺と同じように何か別の黒い世界を見てしまったんだとそう何となく思う。

それには多分、武偵と言う仕事が関係してる。だから、俺は武偵を辞める。

「ともかく、カナについては……あまりに関わらない方がいい。目的は分からないけどうやらカナは、お前の事を狙ってるみたいだからな」

「う、うん……」

そこで会話は途切れ、静けさが戻って来る。

……。

これ以上は、何を話したもんかな……

って言うか何だよこの何とも言えない雰囲気。

そんな時だった。

「すつかり私は蚊帳かやの外か、寂しいもんだね」

「えっ……？」 「なっ!？」

突然に前から霧に声を掛けられて思わず驚いた。

って言うか、俺とアリアの間に座ってた筈はずなのに……

しかも霧はどこからか帰ってきた感じで林の奥からこつちに歩いてきていた。

「お前、さつきまで隣にいたんじゃないやなかったのか？」

「2人が話し込んでる間に席を外してたよ」

全く気付かなかった……

いや、それ程までに俺達が話し込んでたって事だろう。

「全く、すっかり私の事は忘れてる感じだよね……」

「お前は協力してくれとか言う前に勝手に首突っ込んでくるだろ」

「まあそうだけど……」

俺の言う事を否定しないのかよ。

まあ、霧らしいと言えづらいが。

「ともかく、どこまで協力出来るか分からないけど私の存在も忘れないで欲しいね」

いつもの霧のにつこりとした屈託のない笑み、だけどどこか頼れるような力強さがあつた。

「……………」

アリアは急に黙り込んで、俺にも霧にも見えない角度へと顔を隠した。

何だ急に……？

と思つたら急に肩が微妙かに震え、ぐすつ、と鼻を詰まらせたような音が聞こえた。

いち早く何かに気付いた霧は、少しだけアリアに近付いて意地の悪い笑みを浮かべながら中腰になる。

「ははーん、さては泣いてるの？ 神崎さん」

そう霧に言われてアリアは途端に肩を震わせる。

泣いてる？ アリアが？

「——うるさい」

すると泣いてる事を否定するような言葉が返ってきた。

つい俺はアリアの顔を確かめようと、近付く。

「う」……

もう少しで肩に触れそうところで今度は喉のどから変な声を出した。

今度は何だ……？

「みぎゃああああああ!!」

うおおおおッ!?

何故か奇声を発してアリアが縁側の上で飛び上がり、のたうち回る。

いきなりどうした!?

そんなに自分の泣き顔を見られたくないからって奇行に走り出したのか？

何て思ってる内にアリアは自分の浴衣の中を手を入れてまさぐる様に動かしている。

さすがの霧もいきなりの事に思わず尋ねた。

「服の中に何か入った？」

「そ、そうだから！ 早く何とかして——うきやあああああ!」

びちびちと、陸に打ち上げられた魚みたいに体を動かしてる。

取り敢えず近くにいた俺が、すぐさまアリアの浴衣の帯おびを緩めると。

ブーン、と羽音を立ててコガネムシみたいなのがアリアの浴衣の中から飛んで行った。

それから目の前の木に止まった。

「は、はひい——…な、なによあの虫……」

浴衣がめくれ、肌をあちこちと覗かせるあられもない姿でアリアはノビた。

アリアをここまで戦闘不能にするとは、あのコガネムシやるな。

そう思って再びさっきのコガネムシに目を向けると、すぐさまこの場から逃げる様に雑木林へと飛び去った。

「ひとま先ずは、これで解決か。」

「あーあー……こんな散らかして」

霧はそう言いながらアリアが暴れた際に飛び散ってしまった持ち物を拾い始める。

俺も近くにあった物をいくつか拾い集める。

そして、武偵手帳へと手を伸ばして自然に中が見えてしまった時に思わず手が止まる。

そこには若い男性の写真が挟みこんであつた。年齢は20歳ぐらい。俺ではない誰か。

そんな時に先日、アリアや霧に誘いのメールを送られてしまった日の不知火の言葉が何故か、本当に何故か頭に思い浮かぶ。

『神崎さんを狙つてるなら遠山君、ライバルがいるかもしれないよ?』
だから何だって言うんだ。

こんなチンチクリンな体型ではあるが、一応アリアも女の子なんだし。恋愛沙汰ざたにかなり耐性が低いとは言え、相手がいないとは限らない。

それにこんなのもも貴族のお嬢様だ。身分の高い人でよくある感じの許嫁いいなずけの1人や2人ぐらいいるだろう。

「はい、これと。あとはキンジの持つてるやつで全部だよね」
「あ、ありがとう霧」

浴衣を着直して霧から持ち物を受け取つたらしいアリアが俺へと顔を向ける。お互いに視線が合う。

すると俺の手元に気付き、奪い取るように他の物と一緒に武偵手帳を取つた。

ちよつと慌てたような仕草だな。

「見た、わよね……」

完全に見てる所を見られた訳だから、否定しようがない。

「見たけど、別に気にしてねえよ」

あ、何言つてんだよ俺。

それじゃあ逆に気にしてるみたいだろうが。

「何よそれ、何か誤解してるみたいで嫌だわ」

そう言つてアリアは再び縁側に腰掛け、自分の両脇を叩く。

どうやら俺も霧も座れと言う事らしい。

霧が真つ先に座つたところで、俺もそれに続くようにアリアの隣に座る。

「普通なら、親や兄弟の写真とか入れるもんだけど」

そう言つてアリアが武偵手帳開いて、俺達に見えるようにした。

そこには1人の成年男性が写っている。一昔前のような古いスーツの立ち姿。

写真はモノクロで、風化してるのかセピア色に色褪せている。

「この人はあたしの祖先……つて言つても、そこまで古くなくて実際は曾お爺さんなんだけど。武偵の理想とされる世界一の頭脳とあらゆる犯罪者と闘う肉体を兼ね備えた人。そして、この世にはいない人」

そうだ。

俺はこの人を知っている。

授業で教科書の写真でも見たその人物は、

「シャーロック・ホームズ」

その人だ。

俺の呟く様に言った名前にアリアは静かに頷く。

「やっぱり、尊敬してるんだね」

それを見て霧は優しそうに微笑んだ。

「当たり前よ。この写真はお父様から貰ったものなんだけど……いつも、肌身離さずに持ってる。心の支えで、誰にも見せたりしない。あたしの宝物」

「今、見せてくれるじゃねえか」

俺がそう言うのとアリアは武偵手帳を閉じて、少し縁側から軽く飛び降りる。

それからちよつと恥ずかしそうに、頬をほんのり紅く染めて振り返った。

「あんな達じゃなきや見せないわよ」

その顔に、俺は軽く胸が高鳴る。

「ちよ、ちよつとお花を摘みに行ってくるわ」

慌てたようにアリアは、とたた、と言う感じで走り去ってしまった。

こんな祭りの夜に花を摘むって、どう言う事だよ。
と思つてると、

「キンジ……お花を摘むって言うのは手洗い行く事だからね」

霧がさり気なく言ってくる。

「お前、いきなり何を言うんだよ」

「絶対に今の感じだと普通に『花を摘みに行くなんて変わってるな』とか、思つてそう
だったから」

こ、こいつ……

でも、当たつてやがるから何も言い返せん。

それはともかく置いておいて……だ。

それよりも、俺は霧に関して気になる事が2つある。

「お前は、大丈夫なのか？」

「何が？」

「アリアに協力しててだよ。家族の事とか色々あるんだろ？」

病弱の姉とか父親の事とか、何かしら抱えてた筈だし。

「ああ、別に大丈夫だよ。じゃなかったらここにはいないし」

「それはそうだが……」

「ちなみに厄介な事に首を突っ込んでる事ぐらい、もう分かっているから心配しなくてもいいよ」

相変わらず話の先がよく見えてやがる。

敵わないよな……お前には。

「この先、神崎さんに関わっているとジャンヌみたいなのが出てくるって事なんですよ？何となく予想はついてるよ。色々ときな臭い感じはしてたから……何よりも、神崎さん隠し事が下手だし」

まあ、お前は色々と看破かんぱしてくるからな。

アリアが分かり易い事もあるだろうが、どっちにしろコイツに誤魔化しは通じない。

「それで？他に何か気になる事があるんじゃないの？」

本当に……色々と誤魔化しに通じないヤツだ。

「気になるのはそれだけだ」

「嘘だね。神崎さんが去ってから妙に、私の事を見てる」

無意識の内に視線が霧の方へと向いてしまってたらしい。

祭りの最中は別段意識する事もなかったのに、こうした静かな場所で霧と2人きりになった瞬間に”もう1つの出来事”が思い起こされてしまった。

それはカナとアリアの決闘があつた日だ。

あの時、アリアを置いて部屋に戻った俺が見たのは……ソファで寝ているカナの姿だった。

兄さんは、カナになる事でヒステリアモードの持続時間を延ばしている。

だがそれは、のうずい脳髓への負荷を蓄積する事になり、どこかで纏まとまった休息が必要になる。所謂、『睡眠期』みたいなものだ。

カナはぼんやりとした雰囲気であんなに気付く、時折眠たそうにしながらも取り留めのない話をした。

単位の事、俺がヒステリアモードを使いこなせてるかどうかと言う事、保護者が気に掛けるような感じだった。

その時のカナは、俺が知っている昔の優しい人だった。

だが、その途中でカナは空気を張り詰めさせて――

『キンジ、あなた達には……敵が迫っている』

そんな妙な事を言い出した。

『どう言う事だよ？』

『下手な事は言えない。でも、あなたの元パートナーには気を付けて欲しい』

『元パートナーって、霧か……？ 霧の何を気を付けて言うんだよ』

『……ごめんなさい。今のは忘れて』

その時のカナは、今まで俺に見せた事のないような表情だった。

様子がおかしいと思ひ、詳しく聞こうとした矢先にアリアが帰つて来て、カナが俺の部屋にいるのを偶然に見て口喧嘩になつてしまった。

その後は結局、カナには聞かずにまいで色々と有耶無耶だ。

それから気にせずにはいたが、いざこうして霧と一緒にいると何故か気になつてしまふ。

もしかして、俺の知らない所でカナ——兄さんと何かあつたのか？

あの時のカナの表情を見て、そう思わずにはいられない。

だが……中学の3年の夏に割と楽しそうに話してたのを見てたから、仲が悪いとは思えない。

霧の事だ。その事に気付いてるだろうし、何とかするだろう。

あまり気にしても仕方がない。

「まあ、気にするな。ちよつと考え事だ」

「ふーん……ま、キンジがそう言うなら気にしないよ」

そう言つて霧は立ち上がり、どこかへと去ろうとする。

「どこへ行くんだ？」

「さつき2人が話している間に友人を見つけてね、一緒に屋台を回る事にしたの。だか

「分かった」
 ら先に神崎さんと帰ってていいよ、遅くなるだろうし」

◆ せいじや、と背中を向けながら霧は軽く手を振って屋台がある方へと消えて行つた。

◆ お姉ちゃんがどこかへと去って行つた。

しかし、随分とまあアリアとキンジに信頼されてるね

お姉ちゃん、おそろしい子！

なんてネタに走ってる場合じゃない。

雑木林から抜け出して、お姉ちゃんの後を追う。

はーあ……七夕の祭りに理子ってば何やってるんだらうね。

お姉ちゃんがデートだなんて言うから、気になって追つて来てみればそんな甘酸っぱい雰囲気なんて微塵もないし。

いや、キンジにそんな事を期待するだけ無駄か。

あの草食系どころか絶食系男子のキンジが、デートなんて言う高等技術を出来る訳がない。

と言うよりも、キンジの場合は絶食系でいようとしてるけどその実は草食系的な感じかな？

何かそっちの方がしっくりくる。

お姉ちゃんは、恋愛ってどうなのかな？

肉食系な感じはするけど、うーん……お姉ちゃんの場合は好奇心が赴くままにつて感じだから何とも言えないな

恋とかあまり興味なさそうだし。

強いて言うなら、雑食系。

……あれ？

確かにお姉ちゃんを追ってた筈なんだけど……

しまった。余計な事を考えてたせいで見失った。

ちようど目の前は神社の大通りで出店が立ち並ぶ光景が目に入る。

はーあ……どうせならお姉ちゃんと回りたかった。

「どうもリコさん。オネエさんです」

「うえッ!？」

突然に両肩を掴まれて変な声が出た。

思わず距離を取って振り返ってみれば、お姉ちゃんがいた。

って言うかお姉ちゃん何でそのネタ知ってるの……

まあ、それは置いて。

「やっぱり、気付かれてたかー」

「悪くはなかったけど。ただ、理子だと分かるようなものをぶら下げてたらね」
そう言ってお姉ちゃんが自分自身の胸に指差す。

あたしの浴衣の内に入ってる十字架ロザリオが、チャリと音を立てる。

一応、浴衣の中に隠してあったんだけどな。

どつかであたしに気付いててこれを見られちゃったか。

「それはそうと、いつまで変装したまんまなの？」

「ああ、そうだった」

バレたなら顔を変えてる意味もない。

お姉ちゃんに言われて特殊メイクのマスクを剥がす。

何か……舐める様に全身を見られてるんだけど。

「……お姉ちゃん、どうしたの？」

「てつきりフリフリの浴衣でも着てるのかと思っただけど、そうでもないんだね」

「それやったらもつと早くバレそうな気がする」

「だろうね。でも、充分に似合ってるよ」

む……さり気なく褒めてくる心遣い。

キンジもそうだけど、この人も大概に天然ジゴロな気がしてきた。

そのままお姉ちゃんはナチュラルにあたしの背中にもたれかかって来る。

「よし、それじゃあ……お姉ちゃんと夜遊びしようか」

「何で色っぽく言うの？」

変な気分になるから止めて欲しいんだけど。

あたし右肩から顔を覗かせるお姉ちゃんから思わず顔を逸らす。

「スキンシップもこのぐらいにして、早く行こう」

そう言ってお姉ちゃんが素早くあたしの手を取ると、そのまま祭りの中に引っ張って行く。

こんな時間が過ぎせるとは思わなかった。

でも……

七夕の日にさつき思ったあたしのささやかな願いが叶った。

そう思えば、悪くない……かな。

57 : 布石

夏休みが始まり早くも数日。

「アリア達は今頃、諜報科のモックアップルームでカジノ警備の練習中だろうね。」

私は部屋で情報を整理中。何の情報かは秘密。

キンジとかに見られれば、私は練習しないのか？ っ て聞かれそうだけど。

残念ながら私はバニーガール担当じゃないんだよ。

それは置いておいて今回の警備員には最低4人必要。

あの七夕の夜に帰宅途中でキンジから連絡があつて、2人の依頼参加を聞いたから……人数に関しては足りてる。

ただ……面子が私服警備員に向いてない。

今のところ参加するのは私にキンジ、神崎。そして、新しく入ってきた白雪とレキ。

私は普通に大丈夫として……キンジもまあ、こなせる。レキに関しては接客は無理でもディーラーあたりなら出来るだろう。ただ、箱入り娘の白雪とお嬢様な神崎に関しては向いてると思えない。

特に白雪は結構人見知りだし、うん。

神崎は……客として入るならまだしも、あの体型でカクテルウェイドレスもといバーガーって言うのはちよつとどうかと思う。

依頼側はどう言う意図であの衣装を送ってきたのやら。

一応、依頼の際にプロフィールとか送ってる筈はずなだけだね。

そこら辺はもう対策を考えてあるからいいけど、その前に気に掛かる事がある。

この間の七夕の夜。

神崎の浴衣から飛び出したコガネムシに似た虫……あれは恐らくスカラベ。正確にはタマオシコガネだけど、それはどうでもいいや。

何にしても簡単に言えばアレはパトラの呪いを運ぶ虫だ。

接触し、呪いを移す。

そして、その呪いを受けた者は何らかの不幸に見舞われる。

武偵高でも偶然に見掛けた。その時は私が屠ほぶったけど。

何にしても、あのスカラベを偶然とは言え2回も見たと言う事はパトラが日本にいると見ていい。

それも東京のどこかにいる。

うーん……待てよ。そう言えば以前にジャンヌがコガネムシみたいなのが脚に張り付いて、驚いて事故に遭ったって言ってたね。

もしそれがスカラベとして、何のためにジャンヌを負傷させたんだか。しばらく連想ゲームみたいに思考する。

パトラ、イ・ウー退学、スカラベ、ジャンヌの負傷、神崎へかけたであろう呪い。

……………。

……………。

パトラの誇大妄想癖、霸王フアラオ、ピラミッド……ピラミッド？

んー……色々と何となく見えてきたね。

よくよく考えれば、緊急任務クエスト・ブレストにキンジの不足単位分である1・9単位が都合よく転がってるのも胡散臭く思える。

それに、パトラの狙い。

王である事に固執こしつしてる所があるから、もしかしてイ・ウーのトップになる事が狙いなのかな？

いや、あのパトラの性格だから世界の王になるの大それた事を本気で狙ってそう。

どっちにてもイ・ウーのトップになる事が狙いなら……イロカネを奪い手中に収めるのが目的と考えられるね。

つまり、狙いは神崎。

だとするならスカラベが神崎に呪いを移したのも、そのための布石。

まあ、どれも私の推測だけど結構当たってる気がする。

それと——緊急任務。

クレスト・ブリスト

その事で少し頭が引つ掛かり、すぐさまパソコンで武偵高のホームページにある緊急任務の依頼一覧を見る。

『港区 大規模砂金盗難事件の調査』

『港区 工業用砂鉄盗難事件の調査』

『港区 砂礫盗難事件の調査』

思い違いじゃなかった。

最近、砂系の物がよく盗まれてる。

おまけにカジノ『ピラミディオン台場』はこの砂系が盗まれた事件と同じ港区。

これはほとんど確定だね。

この受けた依頼は畏である可能性が高い。

これだと……パトラも同じ港区にいるだろうね。

依頼場所が畏だとしたらその周辺にいるだろうし、何よりピラミッド状の建物の近くにいれば、パトラはパワースポットの恩恵おんけいで無限の魔力を手に来る。

わざわざそんな有利な建造物がある場所から遠ざかる理由がない。

ピラミディオン台場の周辺を本気で調べれば、簡単に炙り出せそうだね。

パトラを知ってなかったらこの結論にはならなかっただろうけど……

まあ、しないけどね。以前にパトラを殺そうと考えてたらストップが掛かったし。

お父さんの寿命までもう少し。お父さんが私に寿命が1年だと告げたのが去年の7月25日。

きっとその日にキンジ達がい・うへと導かれる。つまりはパトラの行動が鍵になると思う。

ここで邪魔しないのが得策だろうし。

しかし、そうなるとパトラは嘯ませか……さすがは自称霸王^{フェラーオ}。

あ、そうだ。24日にお父さんが帰って来るように言ってるんだから理子に頼み事をしておかないと。

そうと決まれば私はすぐさま理子の部屋へと向かう。

普通に理子の部屋のインターホンを鳴らす。

すぐさまドタドタとドアの向こうから足音が聞こえ、

「はいはい」

と理子がパジャマ姿で現れた。

もう昼なんだけど。

「なんだキーちゃんか。正面から来るなんて珍しいね」

「別に普通に来てもいいでしょ？ それとも私がベランダで布団が干されてるみたいな状態で来ててもよかったの？」

「それは！ かの有名なインナントカサンの登場シーン。最近お姉ちゃんちよいちよいネタ挟んでくるけど、見てるの？」

「まあ、話題合わせに色々。それよりも——」

「ああ、うん。入って入って」

そのまま引き入れられて理子のフアンシーな部屋へ。

ほどよくクーラーで冷やされた室内。

そして、布団の上にはDVDレコーダーにヘッドフォンと積み上げられたアニメのDVDケース。

これは確実にアニメ鑑賞してたね。

「それで、どうしたの？ 遊びに来たの？」

理子がベッドの上で胡座あくらをかいて聞いてくる。

「頼み事だよ。今度の私達が受ける依頼でちよつとね」

「あー、キーくんの単位不足を補うためのアレね。それが？」

「理子も受けてくれないかなーって思ってた」

「えー……せつかくの夏休みなのにカジノ警備？ 理子的には遊びたい」

「色々と面倒そうだからフォローをお願いしたくてね。それに頼みは依頼を含めて2つあるからさ。」

「他ならぬキーちゃんの頼みだから断る気はないけどさ。りこりに頼む理由は？」

「それがねー。どうも、パトラの罨臭いんだよね〜」

その私の言葉に理子がむっ、と顔を変える。

「パトラ？ 日本に来てるの？」

私はそう尋ねる理子に印刷した緊急任務の一覧を渡す。

「緊急任務？」

理子は紙を見て、首を傾げる。

「どうも最近、砂関係の物が盗まれてる。さらにはキンジの単位不足分である1・9単位の依頼が都合よくあった」

「そこだけ聞いたら怪しく聞こえるけど、何のために？」

「さてね……でも、私はここ最近でスカラベを2匹見た。おまけにジャンヌが負傷する前、コガネムシみたいなのが膝に張り付いてから事故に遭って負傷したらしい……多分、それもスカラベなんじゃないかーって思ってるよ。」

「こんな島国でスカラベなんて、珍しいでしょ？」

「確かに。状況証拠としてはそう思わせる要因があるけど、だったら依頼を受けなきゃ

いいじゃん」

「どうだろうねー……私的には、お父さんが神崎さんを自分の所へ導くための布石だと思ってるから受けない訳にはいかないと思うんだよね」

「そう言えば、この依頼の日にキーちゃんは戻るように言われてたね。なら、尚更なおよさらわざわざ行く必要ないんじゃないの？ キーちゃんが依頼を断ったら普通にキーくんが代わりに受けるだろうし」

「えー、面白そうないイベントなのに参加しないの？」

「野次馬根性働き過ぎでしょ……って言うかパトラの罫をイベント扱いって相変わらずの感性だね」

「それとは別に建前を用意してあるよ」

「どう言った？」

「面子が不安だから」

「……何気に遠回しに毒吐いてるよね」

「だって、ねえ……神崎さんと白雪さんが私服警備に向いてるとは思わないし」

私の言葉に「あゝ」と声を上げてどこか納得する理子。

それから理子が何かに気付いて私に迫って来る。

「そう言えば私服警備ってキーちゃんはどっち側でやるの？ 客側？ 従業員側？」

「店の従業員として」

「ふーん……ま、どっちにしても理子も行くよ。キーちゃんの頼みだし。ついでにアリアもからかう！」

神崎はご愁傷様として、依頼の人数は最低必要数である4人の倍、8人まで大丈夫だから……問題なし。

その分1人あたりの報酬は少なくなるけど、単位が目的であるキンジからしたらどうでもいいでしょう。

まあ、お金にも困ってるから出来れば報酬は欲しいだろうけど。

それはそうと、

「それと、頼み事はもう1つあるって言ったでしょ？」

「そう言えばそうだった。もう1つは？」

「もう1つはね——」

……

……

「なるほど。りこりん、了解であります」

もう1つの頼み事を聞いた理子は、軽く敬礼して元気よく引き受けた。

「うん、話としては以上。引き続き夏休みを満喫まんきつするといいよ」

「ほいほい。あ、そう言えばキーちゃんも夏休み中は家に帰るの？」
「そのつもりだよ」

言いながら私は理子の部屋の外に出ようとした所で、思い出す。

「そう言えば理子」

「んー？」

理子がヘッドフォンを付けながら寝転がってDVDプレーヤーを操作し、生返事が返ってくる。

「新しい妹ができたから、家に帰った時に紹介するね」

「分かったー」

そう言って部屋を出るところで、

「……………」

最後に理子のマヌケな声が聞こえた気がした。

理子の部屋を出てからしばらく、自分の部屋の中でナイフの手入れをする。

そう言えば……以織に色々伝え忘れてた。

登校日でもいいけど、言うなら早い方がいいね。

そう思って電話する。

『はい、姉上』

すぐに応答があつた。

「どうも、突然の電話ごめんね。以織に伝え忘れてた事があつてね」

『何でしょう?』

「7月の終わりに家に招待しようと思ふんだけど、どうかな?」

『はい、大丈夫です』

すぐに返答したけど、一応最後に確認しておくか。

「未練は……?」

『ありません。ここで何を成したかったのか、今の私にはもう分かりませんから』

迷わない言葉からして決意は固いね。

「大丈夫だよ。きつと、生きる意味は見つけられる。私ももちろん協力するよ」

『はい』

ちよつと嬉しそうに返事がくる。

「それじゃあ、また」

『はい、姉上』

◆

◆

◆

切れる通話。

生きる意味は見つけられる、か。

何故かは分からないが、妙に安心する力強い言葉だ。

冷静に考えて客観的に見れば……姉上のせいでもこんな事になったんだが。出会わなければ、今の現状が生まれることもなかっただろう。

しかし、それはそれで真実を知る事はなかった筈だ。

伽藍堂がらんどうのまま、この武偵高で殉職ならぬ殉学をしていかもしいれない。

どう捉とらえるにしても、我ながら……奇妙な事になってしまったな。

たった1ヶ月ほど前の出来事が今では随分前に思える。

学校の廊下で感傷してゐる場合ではないな。

手続きは終わったんだ。

早く帰って、荷造りの続きをしなければ。

「以織さん？」

声を掛けられて振り返るとそこには私の友人——志乃の姿があった。

驚きを多分に含んだ顔だ。

無理もない。

6月16日から私は学校に来ていないのだから。

「今までどうしてたんです?! 話を聞くに、16日から学校を休んでるそうじゃないで

すか!」

そう言つて詰め寄ってくる。

「すまない。色々とおつたんだ」

「電話くらい出てもいいじゃないですか」

「塞ぎ込んでいてな、それどころじゃなかった」

「……大丈夫なんですか?」

心配そうに私の顔を見ってくる。

「ああ、大丈夫だ」

私がそう答えると、志乃は何やら驚いた顔だ。

「何か変な顔でもしていたか?」

「いえ、以織さんが笑っているのが珍しくて」

「どうやら、自然に笑みが出ていたらしい。」

姉上のおかげであれから気が少し軽くなった気がする。

アレだけの事があつて取り返しのつかない事をしておいて、我ながら随分と軽薄けいはくなものだ。

「……………」

急に黙り込む志乃。

「どうかしたのか？ 志乃」

「その、すみません」

私が尋ねると、突然に頭を下げる。

「以織さんのお願い通り、何度も父様に頼んだんですが……公安0課の内部事情を探るのは難しいみたいです」

そう言つて申し訳なさそうにする。

「そうか」

「あの、以織さん……もう少し時間を頂けませんか？」

「いや、もういいんだ。志乃、無理を言つてすまなかつた」

「以織さん……？」

「志乃に頼んだ日から色々とおつたんだ。おかげで、心の整理もついた」

自分勝手だとは思つたが、こうでも言わないと志乃は律儀に私に応えようとするだろう。

だから――

「私は武偵高を出る事にしたよ」

「ここで別れを告げよう。」

「何を、言つてるんですか……？」

「心の整理をしたとは言え、私は何になりたいのか……何を追い掛けたいのか……色々と分からなくなってしまう。だから、武偵を離れる事にした」

「……………」

「私の知り合いが、一緒に暮らさないかと誘ってきてくれた。しばらくはそこで、探そうと思う」

知り合いとは姉上の事だが、正直に話しても反発されるだろう。そもそも上手く説明できない。

嘘も方便だ。

「そう、ですか……」

それでも志乃にとっては、衝撃的なことだろう。

私はすぐに声をかける。

「心配するな志乃。療養みたいなものだから、そう悲しい顔をするな」

「はい。なら……お気をつけて、また」

そう言っ過ぎてこちなく志乃は笑う。

どうやら、私の何かを吹っ切ったような顔に少し安堵したようだ。

「うん、また会おう」

そう言っって私は横を通り抜ける。

すまないな、志乃。

友では、私の孤独は埋められない。

家族でなければ――

◆ ◆ ◆
夏休みの登校日。

学生の子からしたら面倒な日だ。

登校日と言ってもそんなにやる事がある訳でもなく、普通にホームルームがあつて終わり。

すぐに解散の流れになる。

私は、キンジの席へと向かう。

「キンジ、ちよつと依頼の事で話があるんだけどいいかな？」

「どうしたんだ？ 何か問題でもあつたか？」

「いや、追加人員のお知らせ」

「他の単位不足のヤツでも誘つてきたのか？」

「ぶつぶー違いまーす！ それはりこりんの事でーす！」

ハイテンションで理子が割り込んできた。

いきなり私の背後から現れた理子を見た瞬間、キンジはげんなりとした顔をする。

「何で理子を誘ったんだよ……」

「もう、キーくんてば酷いなー。キーちゃんが面子に不安があるからって、親切心で理子を呼んでくれたのに」

「何に不安があるですって?」

今度はピンクのツインテールの鋭い視線がキンジの隣の席から飛んできた。

理子の事だからあえて言ってるんだらう。

「そりゃあもちろん、ユキちゃんやアリアんの事だよ。理子みたいな”モノ”を持ってないアリアはよくバニーガールなんてやろうと思つたよね。理子つてば尊敬しちゃう」

そして、理子は2つのメロンみたいなモノ（胸）を腕で押し上げて誇示^{こじ}する。

その瞬間、ブチッと神崎から何か切れる音が聞こえた気がする。

「風穴タイム!」

ガバメントが抜かれた瞬間、理子は私を盾にする。

「いやーん、これしきで銃を抜くなんてアリアつてばマジチョロイン」

「霧どいて! そいつ殺せない!」

「白雪みたいなセリフを言うね……取り敢えず、その銃を下ろしなよ」

私が注意してもなお、神崎はぐぬぬと歯を食いしばってガバメントを構えてる。

相変わらず沸点の低い貴族だね。

いや、それとも理子だからこそ喧嘩を買ってるのかな？

この展開に早くもキンジは既にスルーを決め込んでる。

けど、1人だけ静観つて言うのはどうかと思うな。

「キンジ的には理子と神崎さん、どっちがバニーガール似合ってると思う？」

「俺に振るな」

そうキンジは拒絶の意思を見せるけど、もう遅い。

神崎の矛先と銃口がキンジへと向く。

「な、なあに？ あんたも、やっぱりおつきい方が良いわけ？」

「おい待てアリア、お前また2人に遊ばれてるぞ」

珍しく的確な対処をキンジがしてる。

「ふふ」「くふつ」

私は理子と顔を見合わせてお互いに笑う。

そして、その様子を見た神崎は矛先をこつちに戻して来た。

標的がブレ過ぎでしょ。

「あんた達ねえ……ッ！」

「おっと、ここでドンパチはやめてね。それと今まで言わなかったけど、暴力的な女は」

嫌われる”よ?」

「……ふん、分かったわよ」

あつさりと私の一言で神崎は矛を取めた。

いやはや、我ながら機転が利きいてる。

今後はキンジを盾にすればある程度の怒りは抑えられそうだね。

「話が脱線したけど、要件は理子も参加するつて事を伝えたいだけだよ」

「俺は単位が貰えるなら何でもいいけどな。理子、あんまり変な事をして邪魔をするなよ」

「分かってるつてば、ほんとキーくんは理子に対して冷たいよね」

ぶー、と理子は頬を膨らませる。

余程単位を落としたくはないらしい。

まあ、落としたら学力に不安があるつて言う事で転校できなくなるから当たり前か。

それにキンジは他人に危険がなければ自己保身に走るから事があるから、時折冷たいんだよね。

「 সেইじや、話は以上だからそう言う事で」

「依頼の日に会おうねー」

私に続いて理子が別れを告げて、教室を後にする。

そのまま廊下を歩いてみると、理子が尋ねてくる。

「前から思ってたけど、キーちゃんはキーくんのどこが気に入ったの？」

「突然だね、また。うーん、どこが気に入ったかって言う……まあ見てて飽きない所かな？ キンジの周りはいつも騒がしいからね」

「キーちゃんらしい」

「お父さんからキンジの話聞いて、金一の弟って言う事で興味はあつたから……随分前から気にはなつてはいたんだよ。結果としては、割と退屈しないでいいね」

「そう言う理由か……」

「何か、ホツとしてない？」

その瞬間、理子の僅かに目が見開いた。

「なんで分かっちゃうかな……」

誤魔化しはせず、すぐにバレれると思つてか素直に認めた。

「端的に言えば、全部ひつくるめた経験から」

「ちよつとは鈍感でいてよ」

「鈍感だったら今頃は捕まってるか死んでるよ、私」

「ですよね……でも、そこはほら気付いてないフリをすとかあつてもいいと思うんですよ」

「ヤダ」

「即答!?!」

「触れられたくもない部分じゃなければ、遠慮する気はない」

「やだ男前な回答、つてそれつてただのイジリ宣言じゃん!」

「と言う訳でさっきの質問と言い、さっきの反応と言い、一体何を気にしてるのかな?」

にじり寄つて、理子の腕に抱きつく。

困惑してるね

いつもは相手を手玉に取る側の理子が逆に手玉に取られる。

その反応がなんとも楽しい。

「別に……キーくんに割とベタベタしてるからどうしてか気になっただけ」

「つまり妬やいてると」

「うん……つて違つ——わない、けど……」

理子は誤魔化そうとして、結局やめた。

段々と小さくなる声からして素直に言うかどうか、一瞬ではあるけど結構躊躇ためらったね。

伏せた顔は羞恥からか赤くなってる。

その顔が今までにない程にカワイかった。

「うーん♪ 理子ってば、カワイイ!」

「うわ、ちよツ……お姉ちゃん!?!」

初めて見る反応に自然と私は上機嫌になり、さらに身を寄せる。

歩きづらそうにしながらも、離そうとしてはこない。

「お詫びと言ってはなんだけど、聞きたい事があるなら1つだけ何でも聞いていいよ」

そう言った瞬間、理子は目の色を変えた。

「じゃ、じゃあこの間言ってた新しい妹ってなに?!」

足を止めてすごい勢いで迫ってきた。

どうやら割と気になってたらしい。

さっきまでの羞恥心はどこへやらだね。

「あー、あれね。そのまんまの意味だよ」

「いつの間に暗黒面ダークサイドに引き込んだの……」

「人聞きの悪い事を」

「じゃあ、どうやって家族に誘ったの?」

「表の世界の汚い部分を見せてあげた」

「最低だこの人」

「しようがないでしょ？ その子は真実を知りたがってたから、その真実を教えてあげたんだよ。そして、真実を知って絶望したその子に私は手を差し伸べただけ」

「付け入ったの間違いじゃ……」

「何か問題でも？」

「別に。お姉ちゃんの場合は本当に救ってるから質たちが悪いんだよ」

ため息を吐き気味に理子が呟く。

つて言うかさつきからお姉ちゃん呼びになってるけど、本人は気付いてない。

「妹が2人か、この調子だとあと何人か増えそうだね」

「増えそうって……そう簡単に見つかる訳じゃないよ。それに、これから家族になるか

は本人の意思次第だし」

「え？ 選択肢せはを狭めて、一緒に居られざるを得なくするんじゃないの？」

「え、何その鬼畜」

「お姉ちゃん、金一に何したか思い出してから今の発言しようか」

「嫌だなー、私はそんなつまらない事はしないよ」

私が笑顔でそう言うのと理子は「さらっと金一の事は流したね」と、ジト目で言う。

そのまま私は気にせず続ける。

「いくつか道を示した上でもう一度聞くよ。今までもそうしてきたし、それで2人は別の道歩んだからね」

リリヤの場合はそう言う風にも行かなかったけど。

「ん、2人？」

私の言葉に理子はキョトンとする。

「ああ、そつか。理子は知らないって言うか、教えてないのか。実は理子を家族に誘ってからリリヤを連れてくる間にね、あと2人家族に誘ったんだよね」

「マジで？」

「マジだよ」

「じゃあ今はその2人はどうしてるの？」

「1人は歌手で、もう1人はマジシャンになったんだったかな？　歌手の子はそこそこ

有名になり始めてるよ」

「そうなんだ……意外」

そこで話を打ち切り、私達は再び歩き始める。

「機会があれば理子にも紹介したいんだけど。歌手の子が色々面倒なんだよね」

「忙しいの？」

「忙しいかもねー。時間が作れない訳じゃないだろうけど」

懐かしいな」

理子を家族に誘って以降は、一緒にいる面白さに気付いたんだよね。

それからは面白い人を見つけたために人間観察がクセになって……同時に変装技術へと応用して行く事になった。

まあ、応用する前から顔は隠さないといけなかったけど人間観察のおかげで変装の完成度が高まったって言う感じかな？

なんて過去の懐かしさから別の事にまで思考が及んじやったよ。

気付けば、既に校舎の外へと出ている。

開放感に思わず両手と背を伸ばして息を吐く。

「さーて、これから徐々に忙しくなりそうだね」

「お姉ちゃんがいつも通り楽しそうで何より……」

理子と別れた私は帰り道をブラブラと歩く。

その途中にあるバス停で見かけた顔が3人。

あれは……間宮 あかりにライカ、それにこの間の七夕の祭りで会った乾 桜か。

ライカとあかりはともかく組み合わせ的には珍しい3人だ。

てつきり志乃もいると思っただけど、彼女は確か実家からの登校だったね。

さすがに女子寮へと向かうこっちの方面に来る事はあまりない、か。

静かに近寄っていると桜が「警察官の勘といいますか、ニオイといいますか……」と何やらあかりに対して呟いてる様子。

そんなあかりが桜の言葉に首を傾げた時に、

「やあー、どーも。こんな所で会うなんて偶然」

私は声を掛けた。

いきなり声を掛けられてあかり以外の2人が一斉にこちらを見る。

「霧先輩」

そう言つて真つ先に反応したのはライカ。そして、桜も敬礼して挨拶する。

桜に対して私はいいよ、と言う感じで手の平を見せる。

「3人とも、この様子だと帰宅途中みたいだね」

「はい、霧先輩も同じみたいですね」

「まあね。ちよつと友達と話し込んで、割と遅めになっちゃったけど」

そうライカに言つたところで私は1年生である2人を見てある事を思い出した。

「そう言えば、名古屋武偵女子高^{ナゴヤ}から研修生が来たらしいけど。どんな子だった？」

「気になるんですか？」

「そりゃあ、日本の武偵学校の中でも上位に食い込む武闘派学校だからね。どんな子が

来たのか気になるよ」

「それが、研修生はあかりの親戚しんせきなんですよ」

「へえ、間宮さんの親戚」

と言つて私はあかりに目を向けるけど、あかりは何やら変な顔をしてる。

どうやら未だに桜の言葉に首を傾げている感じだった。

「ま、どつちにしても仲良くしなよ。それとライカ、今度『組み手』スパーリングしようか？ 最近は

あまり戦姉アミカらしい事をしてなかったからね」

「うへえ……」

と、ライカは嫌そうな声を上げるが心の底からは嫌がつてない。

「機会があまりないんだから文句は無し」

「分かっていますよ」

「よろしい、それじゃまた連絡するね」

「はい、また」

そのまま3人と別れて私は自分の車がある駐車場へと向かう。

桜は気付いていても何も話しかけてこなかったけど、あかりは結局私に気付かなかつたね。

しかし、間宮の一族がこつちに来たのか……

どれ、何かする訳ではないけど少しばかり観察してみるか。

出来れば『鷹捲』たかまくりを見せてくれるとありがたいけど、そう都合良くは行かないよね。薄くではあるけどそれでも期待しておこう。

と考えながら、私は軽くスキップして車へと向かった。

58：観る者達

——体育館に似た強襲科アサルトの専門科棟。

オーブンフィンガーグローブをはめた私とライカが対峙する。

ライカの両手には銀色に光るステンレス製のトンファア。そして、私の両手には安全装置セーフティが刃に装着されてるタクティカルナイフ。

お互いに構えながら、にじり寄る。

そんな中で私はいきなり、

——ダン！

と、右足で震脚しんきやくする。

いきなりの事にライカは少し肩を震わせて反応したけど怯んではいけない。

瞬間、私のスカートからピンが抜けた閃光手榴弾フラッシュグレナドが落下する。

それを左足でライカに向けて……蹴る！

「!？」

これまたライカは少し驚いてる様子だけど、私は構わず突出する。

さーて、どう出る？

試すような感じの視線を向けながらライカへそのまま接近。

対してライカは――

バツ！

私と同じで前に出た。

閃光手榴弾フラッシュ・バンを気にする事もなく目を開けたままで。

どうやら気付いたみたいだね。

自分に飛んでくる閃光手榴弾フラッシュ・バンをトンファーで弾いて、私に真つ直ぐ向かってくる。

牽制けんせいにナイフを投げて、故意にガードさせて懐に潜り込むか……

そう考えて風を切るような速さでナイフを一つ投擲とうてきする。

しかし、ライカはボクサーみたいなステップでナイフを躲かわして私に突っ込んでくる。

そのままお互いに距離が縮まり、接近戦の間合いとなる。そしてライカは右のトンファーを振りかぶった。左のトンファーは胸の前でいつでもガードできるような構え。

次の攻勢が考えられている感じだけど、私からすればちよつと安易だ、ね！

私は足を踏み込み、瞬発的に加速する。

ライカの左側面を通り抜け、ナイフを投げた事によって空いた左手で彼女を足首から掬すくい上げた。

そして、そのまま床へと倒れ……

バン！

なかった。

結構、意表を突いてたんだけどな。

どうやら前転をするように上手く受身を取ったみたい。

転がりながらすぐに立ち上がるライカがこつちを振り向く前に袖からナイフを出して両手の2本を投げる。

私に振り向こうとしてる途中でナイフが飛んでくるのにライカは気付き、すぐに左手のトンファーで2本とも落とす。

その間に私はライカの背後へと回り込み、右袖からナイフを出してそのまま獣みたいに襲いかかる。

「なるッー！」

声と共に鎌のような鋭い回し蹴り。

左足を軸にしたそれは、私を捉えていた。

だけど私はその場で跳び、ライカの回し蹴りをスレスレで錐揉み回転して躲す。

その飛び掛かった勢いのまま——回転しながらのフライングクロスチョップ！

回し蹴りでちょうど正面に向いてしまったライカは私のチョップがクリーンヒット。

「~~~~ツ!?」

バランスを崩して後頭部を床に打ち、悶える。

「はい、しゅーりょー」

右手のナイフを袖の中に仕舞って、宣言する。

私が見下ろしていると、後頭部をさすりながらライカが立ち上がる。

「ちよつとは手加減して下さいよ……」

「犯罪者を相手にした時も同じセリフを言うつもり？」

「……手厳しいっスね」

「いちいち手心なんか加えてたら肝心な時に成長なんて出来ないからね。ま、これも一種の愛だよ」

言いながら私はライカから離れてナイフを回収する。

「そう言うもんですかね……」

「それよりも、よく気付いたね。この閃光手榴弾が偽物だつて」
フラッシュグレナード

そう言つて私は転がってる閃光手榴弾を持つてライカに見せる。

「霧先輩、目を開けたまんま突っ込んできたじゃないですか……それに弾いた後も結局、光りませんでしたし」

「あと、ナイフも弾いてじゃなくて躲したし」

「だってガードしたら別の角度から潜り込んでくるつもりでしたよね？」

「よく分かっている。ライカは割とカウンター狙いなどところあるから、見透かされると危険だよ。遠巻きで一方的にやられたり、別の角度から攻めてこられるからね」

「対峙したら動き続ける、って事ですか……」

「正面から戦う場合はね。ともかく、動きのキレもそこそこに良くなってるしこのまま成長できれば一線で活躍は出来るとは思うよ」

私がそう告げると、ライカは密かに「よっしゃ」と軽くガッツポーズ。

だけどすぐに何かに気付き、尋ねてくる。

「あ……一線で活躍って言っても具体的にそれっていつになるんですか？」

「んー、リアル10年くらい、かな？ 先生だったらもつと具体的な数字をハッキリ言いそうだけど」

「何だよ、それ……期待して損じゃないですか」

一気に萎えたのが、ライカが床に座り込む。

「あのねー、一朝一夕でホイホイ強くなれる訳ないでしょうに」

「先輩はその年でAランクじゃないですか」

「まあ、才能が影響するのは否定しないけど……何ならAランクの任務を一緒にやってみる？ 大幅に経験が積めるよ。——依頼によつては生死の境を見るかもしれないけ

ど」

「サラツと怖いこと言ったよこの人。あとさり気なく自分に才能があるって自画自賛した……」

後半はスルーして、話を続ける。

「武偵じゃ日常でしょ。危険が向こうから来るかこつちから飛び込むかの違いしかない訳だからね」

「分かってますけど、しかし……10年、か」

何を思ってるのかライカはどこか遠い目をしている。

活躍がしたいのか、それとも1人前になりたいのか、はたまた誰かに認めて貰いたいのか……

情報が少なくて胸中を汲み取る事が出来ないけど、どんな理由にしても実力が欲しいんだらう。

「実力が欲しいなら、別の分野を探してみればいいんじゃない？」

私のアドバイスにライカは首を傾げる。

「別の分野？」

「そう、ここでもあるでしょ？ 自由履修とかで別の専門科を受けれる制度。意外なものに伸び代があるかもしれないし」

「でも、あたし……他に何が向いてるかなんて分かりませんし……」

ライカは頭を落とす。

「だったら興味のある所から入ってみれば良い。分からないなら飛び込め、だよ。可能性は自分の知らない所にいっぱいあるんだからさ」

私はライカに近付いてから大袈裟おおげさに両手を広げて、可能性の広さを主張する。

「……………」

だけど、ライカは浮かない表情。

そして彼女から溜息が漏れる。

「ま、焦らずに探せばいいよ」

私はそう言うってから再びライカから離れる。

ライカの近くの壁際に置いてある自分の荷物を片付ける。

その間、ライカは黙って座ったまま。

ここは話題転換するか……

「そう言えば、麒麟ちゃんに愛の告白はした？」

「ぶっ?!」

スポーツドリンクを飲んでたらしいライカが吹き出す。

私に勢いよく振り向くと顔を赤くしながら否定する。

「いい、いきなりなに言ってるんですか!?　　って言うか、あたしと麒麟はそんなんじゃない」

「お決まりの否定文句だね。前にも同じような事を聞いた気もするけど。でも、意識してるのには違いないんじゃない?」

「う……」

「ま、いいんじゃないかな?　　ライクでもラブでも好きに変わりはないんだし」

「……そう言う先輩は、キンジ先輩とはどうなんですか?」

「どう言う意味?」

私はあえて惚ける。

「ほ、ほら……七夕の時にデ、デ、デートって言ってきましたし……」

この子も相変わらずの初心うぶだね

私の察しが良い事は知ってる筈なのに、それすら忘れてテンパってるのかわざわざ律儀に答えようとしてるし。

どんだけ耐性低いんだか。

「別に恋人とかじゃないよ。ただ単に元パートナーってだけ……今は、良き相談役ってところかな」

「え……あれ?　　でも、デートって……」

「デートとは言った、けど相手が彼氏だとか恋人だとかは言ったつもりはないよ」
「何ですかその屁理屈……」

ジト目をしながら返される。

「雰囲気で分からない方が悪い」

「しかも責任転嫁てんかっスか」

「黙れヘタレ」

「いきなり何ですか!?!」

私は座ってるライカに近付き、腰を落として「にひー」と笑う。

「自分の気持ちに素直になろうとしない子はヘタレって事だよ」

「自分の気持ちって……」

そう言われてすぐさま思い当たる事を浮かべたのか、ライカは狼狽ろうばいし始める。

私はライカが何かを言う前に口を人差し指で抑える。

「誤魔化しの言葉はいらぬ。私の目は誤魔化せないって、前にも言ったよね?」

その言葉と一緒に私は目を細め、続ける。

「アドバイスをしてあげるよ。あんまり自分の気持ちを誤魔化そうとすれば、肝心な時にその気持ちを伝えられなくなる。たとえばその気持ちだが、一般的な観点から見れば変だとしてもね。周りの目がある? 言うのが恥ずかしい? 私からすればそれはどれも

誤魔化しの言い訳だよ。簡単に言えば……自分の感情に素直になるのが怖い、受け入れたくない。大体の人はそんな臆病風に吹かれてるに過ぎないんだよ。麒麟ちゃんが大
事なクセにその気持ちを伝えずにいたら、どこかですれ違う事になる」

「……………」

それから私はライカの柔らかい唇から指を離す。

いきなりの展開過ぎたか、ポカンとした表情をしている。

「麒麟ちゃんに伝えるのが恥ずかしくても、自分の中で気持ちを受け入れてはおきなよ
く。じゃあねー」

勝手に伝える事だけ伝えて私は去り、アサルト強襲科棟を出る。

自分の気持ちを誤魔化してる、か。

私の近くに2人いるんだよね。自分の気持ちを誤魔化してる臆病者が……

キンジの場合は本気で気付いてない可能性もあるけど。

ちなみに私はそんな事はあまりない。するとしたら、演技の時くらい。

むしろ“ある気持ち”に関しては、誤魔化したり抑えたりしたらヤバイ事になるんだ
よねく

別にその事に不満はないんだけどさ。

……空を見上げれば、夕暮れの色。

太陽が傾いても、どこか蒸し暑さを感じる。

このまま帰ってもいいけど、どこか寄り道しようかな……

そう思つて上に向けていた顔を正面に戻すと、見慣れない人影。

一目で分かるのは、この学校の生徒じゃないと言うこと。

極端に短い防弾制服。

スカートはそんなに変わらない……いや、若干向こうの方が短いかもしれない。問題は上のセーラー服。腰上から胸の下の間の布がない、お腹が丸見えだ。その上、袖は東京武偵高の夏服より短い。

そんな露出度の高い制服を着ているのは褐色の肌をしたボーイッシュな女の子だ。

なにあの子……あんな惜しげもなく肌を晒して私に切つて欲しいのかな？

つて、違う違う。

この間やったばかりなのに何を考えてるんだろう私は……

私の欲望は置いておいて、あの子がおそらくこの間ライカの言つた名古屋から研修に來た間宮の親戚だろう。

だとしたら――

(ラッキー)

そう胸を弾ませながらルンルン気分でその子を尾行する。

尾行して見えてきたのはバス停。

そこで彼女は止まり何かを待つてる。

少しの時間待つていると、バスが来た。

そして扉が開いて降りてきたのは――

「あつ、ひかちゃん!」

間宮 あかりだった。

彼女がひかちゃんと呼んだ日焼けっ子に嬉しそうに近付く。ひかちゃんと言うのは

あだ名なんだろうね。

「どうしたの?」

「色々とあかりと話したくてね。ちよつとデートしようか」

と、日焼けっ子が誘う。

あかりは彼女について行き、楽しそうに話しをしている。

けど、段々と人気の少ない路地へと誘導されてる事に気付いてない。

しばらく歩いてみると段々と別の違和感を感じた。

……私以外にも誰かいる。

そう感じて物陰に隠れて足を止め、聴覚に神経を集中させる。世界が広くなったよう

な感覚を耳だけでなく肌で感じる。

雑音の中から聞こえる……足音。

問宮の子の2人以外に誰かいる。通りすがりじゃない。これは、確実に問宮の子を追ってる。

私は路地裏へと隠れて、フックシヨットを建物の屋上に向けて放つ。

転落防止の柵にアンカーが引つ掛かる。

すぐにワイヤーを巻き上げて、数秒もしない内に屋上へとたどり着く。

そしてすぐに、さつき問宮の子達が歩いてた方の路地へと目を向け、見つけた。

集中して聞いていると、さつきは親戚について話していたが……今は違って何か別の事を話し始めている。

「あかり……問宮と問宮が戦う時のルール、『一つ契』^{ちぎり}って覚えてるかい？」

突然に日焼けっ子にそう聞かれて、あかりは困惑しながらも素直に、

「うん」

と答えた。

日焼けっ子はさつきと違う雰囲気を纏^{まと}わせて、続ける。

「——負けた方が勝った方の言う事を何でも一つ聞く。それがどんな内容であっても

……それが『一つ契』」

喋りながら日焼けっ子が更に暗い路地裏へと入って行く。

「あ、待つて！ ひかちやん！」

あかりは声を上げて日焼けっ子が入った路地裏の近くまで行くが、足を止める。それから周りをキョロキョロと見回す。

どうやら、あかりの反応からして路地裏にはもういないらしい。

あの様子からして、逃げたつて事はないだろう。流れからしておかしいし。

それよりも路地裏に入る時のあの日焼けっ子の眼光は、猛禽類もうきんみたいに鋭かった。まさしく獲物を狙うような鷹たかの眼。

それに気付いていないあかりは、まだその場で日焼けっ子を探している。

「ここでやらないか、『一つ契』。ボクは、キミが欲しい」

ガントレット

ジャキ、と西洋の手甲ガントレットのようなものがあかりの背後の路地裏から伸びてくる。

あかりにまさしく鉄の魔の手が襲いかかろうとした瞬間――

ヒュン！

風を切つて、手錠が日焼けっ子とあかりの間を飛び抜けた。

続いて2つの手錠が日焼けっ子に襲い掛かる。

「ちっ……っ！」

右手に装備した手甲で彼女は難なくそれを打ち払う。

「あかり先輩！ その女は危険です！」

そう言つて婦警の格好をした乾 桜が毅然きぜんとした態度で現れた。

これは、面白そうなものが見れそうな予感。

◆ ◆ ◆

「全く、いきなり誘い出すから何かと思えば……」

「えー、だつて面白そうじゃん」

ジャンヌの乗り気じゃない言葉に私はそう返す。

偶然に見掛けた間宮の子達が人気のない方へと行くのを見て、何かあると踏んだあたしはジャンヌと夾竹桃きょうちくとうを誘い出した。

夾竹桃は普通に来てくれてんだけど、ジャンヌは興味が薄かったのか最初は断つてたんだけど……何とか説得して来てくれた。

あたし達はそのまま間宮の子達を見下ろせる建物の屋上へと向かう。

こつそり階段を上がり、屋上の扉を開いた時に目の前で何かを見下ろしてる人影が映る。

「先客が居るみたいね」

夾ちゃんが見たままの事を言う。

つて言うか、あの後ろ姿はどう見てもキーちゃん——もといお姉ちゃんだ。

こんな所で何してるだか、って言うのは愚問だよね……

イベントを逃さない人だなー

「何であいつがここにいるんだ……」

「あら、ジャンヌ。不機嫌ね」

「ジャンヌつてばあの子に自分の策を崩されたんだよねー♪」

「うるさいぞ理子。それよりも、まさか最初にあいつがお前を誘ってそれから私達と言う流れじゃないだろうな？」

と、ジャンヌはあたしに懐疑的な目を向けてくる。

「ゼーんぜん。そんな事はないよ」

逆にあたしが何でお姉ちゃんがここにいいのか聞きたいぐらいだよ。

と思つてると、お姉ちゃんが突然に両手に銃を持ってこつちに振り向く。

「何だ、理子とジャンヌか」

あたし達を見た瞬間に目を丸くし、そう言つて銃を仕舞う。

この屋上の扉を開いた時から多分気付いてるんだろうなく、とあたしは思う。

そして、今気付いたフリをした。

こう言う細かいところをわざわざよくやるよ、ホントに……

そんなもつて演技だと分かつてても違和感を感じさせない。傍にいる程、一緒にいる

程に未恐ろしいと感じさせるよ……

「それで、見慣れない人が1名。大方、ジャンヌの仲間だと思っただけ……どうかな？」

「正解よ」

キーちゃんに目を向けられた夾ちゃんが何でもなしに答える。

「しかも……ジャンヌとその黒髪の子と一緒に理子が仲良くいるって事は、つまり——」

そうだった。

キーちゃんはあたしがイ・ウーの一員である以前に、ハイジャックでの出来事を知らないと言う設定だった。

そこでキーちゃんは言葉を止めて、自分の頭を片手で押さえて「ふう」と息を吐く。

「察しが良いって言うのも考えものだね。余計な事まで知っちゃうよ」

それからクルリと背中を向けて、柵に身を寄せて何か——おそらく間宮の子達——を再び見始める。

「驚かないんだね、キーちゃん」

形式上、こう言っておかないとね。

「別に……シヨックではあるけど、武偵高の制服を着てるって事は少なくとも司法取引

は済んでるでしょ？ だったら過ぎた事だよ。とやかく言いたくはないし、過去を蒸し返すのは主義じゃない」

キーちゃんはこつちを見る事なく答える。

そこにはどこか落胆の色が見える。

「なるほどね……ジャンヌの策が破られたって言うのも納得できるわ」

夾ちゃんはそう眩き、冷静に分析していた。

これで、夾ちゃんも白野 霧と言う人物を認識しちやったか……

あたし達はそのままキーちゃんの傍まで近付き、その視線の先を追う。

「おーおー、やってますなー」

その視線の先の光景を見て、あたしは声を上げる。

予想通りだね。キーちゃん——もといお姉ちゃんの事だからそんな事だろうと

思ったよ。

そこにはアリアの戦妹いもづとであるあかりと、謎の日焼けっ子。いや、おそらくはあの子も

間宮……なんだろう。そして、あかりの傍で壁にもたれて気を失ってる婦警の格好をし

た中等部インターンだと思われる子もいる。

状況から見るに、あの日焼けっ子が婦警の子を倒したのか……

これは修羅場かな、ある意味。

「どうして……どうしてこんな事するの?! ひかちゃん!」

あかりは日焼けっ子に向かって叫ぶ。

だけど、返ってくるのは沈黙。

日焼けっ子は一度少し顔を伏せたかと思うとすぐに上げた。

「……あかり、今の間宮の現状をキミはどう思う?」

「今の、間宮……?」

日焼けっ子にそう言われて、今度はあかりが黙り込む。

「爽竹桃、どちらがお前の標的だった?」

「ブラウンの髪の子よ」

「あれがそれか……」

ジャンヌは爽ちゃんを倒した相手に少しは興味があるのか、そう言って視線を向ける。

それから再び状況が動き出す。

「ボク達、間宮は強い」

日焼けっ子が強めに切り出す。

「それなのに、一族全員が散り散りになり……今では陰に隠れて生きている。惨めだとは思わないか?」

「それは……」

「あかり、間宮が襲われた理由をキミは考えた事があるか？ ボクは、間宮が技術を秘したから襲われたと考えてる。間宮の里が襲われてから聞いた話だと、ボクら技術を欲して誰かが訪ねてきたらしい。そして、間宮は技術を渡す事を断った。それから、間宮は襲われた……！」

ツアオ・ツアオの話だと、お姉ちゃんも間宮の里への襲撃に加担してたハズ……

その日焼けっ子の話にあたしは思わず視線が隣にいるお姉ちゃんに向いてしまう。

それから日焼けっ子が提案する。

「だからボクは、間宮の技を名古屋女子で公開しようと思う。そうして、最強の武偵軍団を作るんだ！」

「こゝ、公開?!」

「そうだよ、あかり。それに名古屋女子での校訓に『強ストロンクきは美イズなり』がある。ボクの提案は受け入れられる筈はずだ。あかり、キミもそれに加わるんだ」

「……軍団って、どうやって作るつもりなの……?」

「……………」

「……………」

「……………」

あかりの一言で静寂が訪れた。

あたしら鑑賞組もギリギリ聞こえてたせいで変な空気になってる。

「そ、それは……その……ほら！ 教室をひらいたりして、いや……そうだよ！ 部活を

作るんだ！ 間宮部っ！」

「……それって、今考えたよね？」

「う、うるさい!!」

あかりのジト目されながらの指摘に右往左往し出す日焼けっ子。

そのやり取りを見て、

「アホの子だ……」「アホの子ね」「まさかのアホの子」

お姉ちゃん、夾ちゃん、あたしの順番で同じ感想が出た。

「あれはポイント高いねー」

「キーちゃん、ポイントって何？」

「私の中に存在する愉快ポイント」

「何その、不愉快そうなシステム……」

あたしは思わず突っ込む。

「ちなみに今のは10ポイント中で8ポイント」

意外に高い。

「それと他に滑稽ポイントがある。ちなみにジャンヌの滑稽ポイントは7」
「いきなりケンカを売ってるのか貴様……」

キーちゃんの悪い癖が出た。

いや、違うか……全てにおいてお姉ちゃんが一貫してると言うべき部分。それはよく人をイジるって事なんだよね。

他人になりすます時以外は大体そう。

「ジャンヌはなんて言うか……時々、何かズレてそうなイメージ」

「偏見だな。私はそこまでズレてはいない」

思わずあたしはジャンヌを見た。

ウソだ……以前にレストランに行った時にフランスでのレストランと同じ感覚でチップ——お金を置いて行ったクセに。

それに日本で地下鉄に乗った時には自動で開くの知らなくて手でこじ開けようとしてたし。

まあ、文化の違いから来る弊害なんだけど……ジャンヌの場合は堅物な性格が災いで、色々と衝突するんだよね。

「夾竹桃に理子、何だ？ 2人して何故私を見る？」

「いや、別に……」「何でもないわよ」

どうやら、夾ちゃんも見てたらしい。

あたしに続いて夾ちゃんもジャンヌから視線を逸らし、意識を間宮の子達に向けると、どうやら状況が動き出したみたいだね。

「ともかく！ 間宮の技を武偵業界でのブランドにするんだ！ そうすればボクらは……光の中で生きる事が出来る……」

なーんか……あれだよな。日焼けっ子の言葉が妙に刺さる。

何となく共感してるのかもしれない、もしくは同情。

「名古屋でキミも教官代理をすれば、ランクがあがる。成果が出れば指導料だって出る！ キミの妹にも現状より良い暮らしをさせられるはずだ！」

「……！」

一瞬だけあかりは言葉に詰まり、迷った。

「ダメ……ダメだよ！ 間宮の技は危険すぎるよ！ 教える事なんて——」

「危険な技を教える、武偵高つてそう言うところだろ？ それで多くの人が救えるかもしれないんだ。それにあの時みたいに襲われる事もなくなる！ キミの母親が傷つくような事もなくなるんだッ！」

「——ッ!!」

大分、あかりは押されてるね。

日焼けっ子の言葉に思い当たる部分が多いのか、結構揺らぎ始めてる。その時だった。

婦警の子が意識を取り戻したのか、銃を持って立ち上がる。

あの銃はミネベアM60 ニューナンプ、か。日本の公安系の公的機関で広く採用されてる銃か。

今となつては少し古い感じがするけど。

間宮の子達が婦警の子が立ち上がった事に気付く。

「桜ちゃん！」

あかりは婦警の子の名前を呼んで、支えるように駆け寄る。

「ダメだよ動いたらー！」

「私なら大丈夫です、あかり先輩……役に、立たせてください……」

そう言つて婦警の子——桜が日焼けっ子に向けて銃を構える。

だけど、意識はハッキリしてないのか照準がブレてる。

それを見た日焼けっ子は何か呟き、構え出す。

中腰になつて腰を据^すえて、右足を前に出す。手甲を着けている手を、前に出した右膝の上あたりで空に向けて爪を立てる。左手は手の甲を口らへんに持つてきて、これまた爪を立てるような形にしている。

「あかり、どくんだ」

完全に構えたのか、日焼けっ子が警告する。

「どうやら、同種同士での私闘のようだな」

「みたいだねー」

あたしは知ってたけど、ジャンヌの言う事に一応同調する。

「似た者同士、そして実力が拮抗してるのなら……その勝敗は『想い』の強さで決まる。それは何でもいい、執着、欲望、正義感、愛や憎しみでも……」

あたしは言葉に出してそう思う。

何にしても今のところは……あの日焼けっ子の方が『想い』は強い。

覚悟のある良い眼をしてる。

「だ、ダメだよひかちゃん！ 『鷹捲』^{たかまくり}は緩衝材も無しに打ち込んだら……し、死んじや

——」
両手を広げてあかりは桜を守るように立ち塞がる。

「そんな事はしない。だけど、そこアックスの架橋生には退場してもらおう。それに銃を向けられて戦わないのは名古屋女子では校則違反だ」

この状況をどう打開していいのか分からない。そんな迷いがあかりの表情から読み取れる。

「言っておくが、キミの仲間は来ない。今頃、2人は楽しい夏休みを送っているだろう」
見透かしたように日焼けっ子が口を挟む。

「あかり、三度目は言わない。どくんだ」

最後だとばかりに日焼けっ子が警告する。

そして、すぐにも仕掛けるような雰囲気かきを醸し出す。

あかりは――

「そこままでにして、”ひかり”……!」

日焼けっ子と同じ構えを取った。

どうやら、覚悟を決めたみたいだね。

対して日焼けっ子――ひかりは動じず言葉を投げ掛ける。

「――”それ”を使うなら”手抜き”はするなよ? 行くぞッ!」

一声と共にひかりは駆け、

「鷹捲たかまくりイツ!!」

空中で錐揉み回転しながら、あかりに向かつて行く。

あかりは桜の銃を持ってからその場で前宙し、

「鷹捲たかまくりっ!」

ひかりと同じように叫んだ。

2人の指先が接触した瞬間、電気のような閃光が音を立てて弾ける。

そして閃光はあかり側の2人を包み込み、服が弾けた。

『キヤアアアアアア!!』

悲鳴と共に2人は下着姿で倒れる。

それよりも――

「おー、何あれ?! 必殺技みたいなの出た!!」

あたしとしては、心配とかよりもそっちの方が気になるよ!

ああ言うのを見るとちよつと興奮する。

爽ちゃんが今起きた事について答える。

「今のは鷹捲たかまくりよ、両方とも」

「ひかりと呼ばれた日焼け娘の方が強かったみたいだな」

ジャンヌの言う通り、ひかりの方にダメージはなく悠然と立っている。

でも……

「まだ終わってない」

爽ちゃんの言う通り、まだ終わってない。

しかし、ひかりは確かな手応えを感じているんだろう。密かに笑みが浮かんでる。

ただどすぐにあかりが動いたのを見て、表情が曇った。

それからあかりは桜と共に体を起こす。

おそらくは、ひかりは今ので決めるつもりだったんだろう。しくじった事にどこか悔しさを滲にじませている。

「あかり、これがキミとボクとの差だ」

すぐにひかりは、腕を組んで言葉をあかりに投げ掛ける。

「鷹捲たかまくりを正面から打ち合つて、キミは膝を突き、ボクは立っている。それに、今は使わなかつたがボクには鷹捲たかまくりの上位技である『驚狂わしお』もある。使わなかつたのはキミが同族であるからだ。情けをかけたんだよ」

そう言つて自分は格上である事を誇示する。

これは、遠回しに降伏を促してゐるんだろうね。

けれどもあかりは立ち上がる。

「あたしにも……あるよ、上位技」

「何?」

「『梟挫たかつか』。あたしも、使わなかつたの」

あかりもひかりと同じように奥の手がある事を明かした。

「なら、あかり。呼吸を整えろ、3分間待つてやる」

「ム〇カ……?」

「そんな訳無いでしょう。ネタでもないのだから反応しないの」

ひかりの言葉に思わず反応したあたしに、夾ちゃんが冷静に突っ込んでくる。

「理子。空気読もう」

まさかのお姉ちゃんにも言われた……しかもこつちを見ずに。言葉も淡々としてて冷たいんだけど。

つて言うか、さつきから静かだなど思ったらお姉ちゃんの眼が真剣だ。

成り行きを見守ってる。

そんな感じに、見える。

普通ならそう思うんだけど……でも直感で、あたしは何となく違うと感じてる。

何を考えて見てるのは分らないけど、それだけは臍おぼろげに分かる。

家族以外の人がいると、演技に拍車が掛かり過ぎてあたしでも色々と分かんなくなるんだよね……

いや……”あたしでも”じゃなくて、”ソフィー以外”には分らないって言った方がいいか。あとは分かるとしたら教プロフェッショナル授だね。

「ボクが知らないキミが隠している『梟挫ふくろうざ』を使え、ボクもキミの知らない『驚狂わしお』を使
う」

そう言ってひかりは距離を取り、あかりとは反対側の壁にもたれて座る。

「どうやら、インターバルみたいだね。」

「ふむ、どうやら鷹捲たかまくり同士は相殺そうざい出来るようだな」

最初はノリ気じゃなかったジャンヌも身が入り始めてる。

「同じ振動技だしね。ただ単にガードしただけじゃ防げないわ、アレは」

夾ちゃんは食らった事があるのか、実感の籠こもった解説をする。

「さっきのぶつかり合いを見る限りだと、相殺じゃなく減衰になっちゃったみたいだけだね」

「そのようだな。先程の戦闘で振動力を騎士で喩たとえるならひかりは6騎分、あかりは4騎分あり、相殺されても残りの2騎分であかりを気絶させる程の力があつた。だが、あかりはその振動力をあのか警の娘に上手く分散させた。婦警の娘の銃を掴んだのはそう言う意図があつたと言うだろう。結果として、あかりは倒れる事なく立ち上がった。」

「素晴スバララしい、良い即応力だ」

「そう言つてジャンヌは拍手して賛辞してるけど……何で騎士で数値化したんだろう、普通にパーセンテージで良かったんじゃない？」

「これじゃあお姉ちゃんがさつき言った、どこかズレてるつて言うのを証明しちゃつてるじゃん。」

「なんて思つても口には出せない。」

多分、ジャンヌはショック受けるだろうし。

それからしばらくは静かになる。

あかり達は何か細々と話したり、何か行動してるっぽいけど……ここからじゃさすがに分からない。

一体この先どうなるのか、理子ってばワクワクしちゃう♪

……………。

……………。

「——3分だ」

ひかりが立ち上がり、あかりの傍に近付いて告げる。

あかりも立ち上がって、ひかりの正面に立つ。

「さっきは勇み足だった……謝るよ。だが、次が本当の『一つ契』だ。ボクが勝てばキミは名古屋女子の軍団に加わって貰う」

そのひかりの言葉にあかりは力強く返した。

「いいよ。ただ……手抜きは無し、ひかちゃんの全力にあたしも全力で答える」

拳を握って、決意してる。

熱いですな……まるで少年漫画でも見てる感じだよ。

それに対してひかりは不敵に笑う。

「……のぞむところだ」

あかりは危ないから、と桜を遠ざける。

と言う事は、さつきみたいに振動を分散させるつもりはないみたいだね。

「ひかちゃん……驚狂は武偵法9条を守れる?」

武偵法9条——いかなる場合においても人を殺してはならない。

それをあかりは確認する。

「ああ、その場ではね。だが、驚狂は相手に死にたくなるような恥辱を打ち込む技だ。――

――だが、キミは殺す気で来い。どんなものか見せてみる」

言葉と共にひかりは構えた。

さつきの鷹捲たかまくりとほとんど変わらない。

そしてあかりは、

「よかった」

微笑んだ。

当然、その表情に疑問を抱くだろう。ひかりは真面目に尋ねる。

「……なんで笑う?」

「それはもちろん、ひかちゃんを——信じてるからだよ」

言いながら、あかりは構えた。

その構えにあたしは驚く。

アレは——天地〇闘の構え!?

……じゃないか、さすがに。

でも、どこことなく似てる気がする。

「あたりは円を描くような動きで左手は下に、右手は頭の上の位置に構えた。

「わしお驚狂は、のうしよ脳漿に集中するよう波形調整した技だ。喰らえばパルスによつて脳が乱れ、心が歪み……死よりも無惨むざんな事になる」

ひかりは驚狂わしおについてあかりに教える。

聞いてる限りはヤバそうだと分かる。

けれども、ね。お姉ちゃんのを越えるヤバさじゃなかったらあたしは驚かないよ。

うん、変な耐性が出来てるんだよね。

今まで考えてなかったけど、あたしも意外と頭のネジ飛んでるんじゃないかな……

「そして、たかまくり鷹捲の上位技だけあつて余剰分のパルスはその効果もある。後輩の前でキミは——」

「いいよ、別に脅さなくても。怖いのは、十分に伝わってる」

ちよつと声が震えてるっぽい。

そのままあかりは続ける。

「あたしの『梟控』はね……成功率が1／2なの」

「宵座よいざではそんな事は認められない。こつちは100パーセントだ。間宮は強くあるべし」

「ひかちゃん言う通り、間宮は強いよ。間宮が暴走した時……止められるのは間宮だけ。『梟控』は、そのために暁座あかつきざに伝わる秘技なんだよ」

あかりの言葉に水を差すようで悪いんだけど……

あたしの回りに止められそうなの、いっぱいいそう。

ダメだ……インフレ環境に居過ぎたせいであたしの中での基準がおかしい事になってる。

って、イ・ウーメンバーのほとんどに言える事か。

なんて考えてる場合じゃない。

いよいよ、激突しそうな雰囲気だ。

こつちでも分かるくらいに空気が張り詰めてる。

あかりとひかちゃんの両名はお互いに喋りながら間合いを計ってる。

「ひかちゃん、さつき武偵高は危険な技を教えるところって言ったよね？ それ違う

よ」

「……？」

「武偵高は——正しい力の使い方を学ぶところなんだよ」

ひかりは、あかりの言葉に顔を歪める。

「違うぞ、あかり。正義はいつも……勝った方だツ!!」

覇気を纏まとってひかりは駆け出し、鷹捲たかまくりと同じように右腕を槍みたくに伸ばして回転しながら飛び込んでいく。

人間の弾丸。そう形容出来る。

それを迎え撃つあかりはその場から動かず、ユラリと静かに立っていた。それから両手で円を描くように、腕を戻している。

だけど腕を戻しているその手がお腹の辺りで光る。まるで、何かを集めてるみたい。

その集めた何かを受け止めるよう、両手を花の形にした。

相手はその間にも迫ってきて、もうすぐ驚狂わしおが打ち込まれる。

けれどもあかりは動じず、その光をひかりに向かって押し出すように前に出した。

その時だった。

——パアアアアツ!

と、その光がひかりの指先を受け取めた。

まるで鏡みたいにひかりに向かって閃光が弾ける。

次の瞬間、ひかりは弾けた奔流に飲み込まれ、服や手甲が砕けて下着姿になって飛ん

で行く。

その光景にあたしだけじゃなく、ジャンヌや夾ちゃんも驚いてる。

ひかりが痙攣してるところを見るに、どうやら生きてるっぽいけど……もしかして今
ので終わり？

「ひ、ひかちゃん！」

息を切らしたあかりがひかりの傍に駆け寄る。桜もあかりに続いた。

そして、介抱しながら安否を気遣う。

「ひかちゃん、大丈夫？」

「……………」

あかりはひかりが無事な事に安堵してるけど、何か様子がおかしい気が……

「うわああああああん!!」

——え？

「あかりおねえちゃん、ごめんなさいい！　ぶたないでえええ！」

何故か、突然にひかりが泣き出した。

見たまんまだけど。

それよりも気のせいかな、赤ちゃんみたいにちよつと舌足らずになってる。

あかりは何か心当たりがあるのか、桜に何かを話している。

こっちはひかりの泣き声で聞こえないけど。

「あ、赤ちゃん返りする技!？」

と思つたら桜から大声でそんな言葉が聞こえてくる。

「まさか、今のが?」

「ジャンヌ、多分違うわ。おそらくは……さつきあの日焼けっ子の技が赤ちゃん返りする技なんでしょう」

夾ちゃんがそう推測する。

「つて事は、それつてつまり——」

『赤ちゃん返り返し(か)！』

あたしが眩いた後に、ジャンヌとあたしがハモる。

眼下ではあかりに甘えるようにひかりが抱きついている。

いいねいいね!

さすがはあのアリアの戦妹^{アミカ}つてところだね。

ああ言うの理子^{アミカ}つてば、欲しくなっちゃう。

もし、このままでいれるのなら来年の戦妹^{アミカ}はあの子で決まりだよ

「ふう……まあ、私が介入する事にならなくて良かったよ」

「お前、それでここにいたのか?」

「変な感じだったからね。意外に後輩思いなんだよ、私は」
ジャンヌにそう返してお姉ちゃんは屋上から去って行く。

「もう十分に面白いものを見れたし、あたしも帰ろつと。キーちゃんつてば待つてー！」
言いながらお姉ちゃんを追い掛ける。

すぐに追いついて、建物から外に出たところであたしは話し掛ける。

「で？ お姉ちゃんの事だし、結局のところ面白そうだからあの子達について行つたんじゃないの？」

「何を分かりきつた事を」

あつげらかと暴露した。

「ですよー」

「理子も似たようなもんでしょ？」

「そうだね。否定はしないよ」

「私の場合は、別の目的もあつたけどね」

「別の目的つて？」

あたしが尋ねると、お姉ちゃんはふふ、と小さく笑う。

それはまるで子供が何か隠し事をバラす時みたいな感じ。

そこからは何も言わずに付いて来てと言つた感じに、あたしの手を軽く引つ張る。

そうして連れてこられたのは、人気のない沿岸の公園。

そこで、そこら辺に落ちてたアルミ缶を拾ってあたしに投げる。

「私が合図したらそれを私に向かつて投げてみてよ」

にこやかに言ってきた。

お姉ちゃんつてば、一体何をするつもりなんだか……

離れていくお姉ちゃんがある程度の距離で止まると、こちらに振り返り——構えた。

「!?!」

あたしはその構えを見て、驚いた

その構えは、さつきも見た鷹捲たかまくりの構え。

いやいやまさか……ね。

「いつでもいいよー」

距離が離れてるからか、大きめの声で合図してくる。

取り敢えず言われた通り、あたしは大きく腕を揺らして下から投げる。

放物線を描き始めたアルミ缶。

山なりに飛んで落ち始めるその時、ダッ！とお姉ちゃんが駆け出す。

それから回転を加えて飛び、アルミ缶に真っ直ぐに向かつて行く。

そして、指先がアルミ缶に見事に触れる。

刹那——アルミ缶が弾けた。

「ほっ！」

お姉ちゃんが着地をして、満足そうな笑顔を見せた。

「よし、大分形になった」

それから何て事を言う。

しばらく思考が停止してるのに気付いて、ハツとなる。

遅れて現実起きた事を認識し始める。

(え……ええええええ——ツ!?)

内心で、超驚愕する。

って言うかするしかない。

この人、マジでやっちゃったよ!

「いや、いやいやいや……何やってんの!？」

「何が？」

「何が……って、い、今のって——」

「ああ、たかまくり鷹捲」

「これはあつけらかんと言っているいい事態じゃない。

「ど、どうやって習得したの?」

「夾竹桃とあかりが戦ってる時に見ててね。その時に繰り出した鷹捲たかまくりの事が気になって練習し始めた」

「じゃあ、もしかして今回あかり達を見てたのって……」

「出来れば参考にもう一度見れないかな、と薄く期待してたところもある。普通に成り行きを見たかったのが本音だけど。いやー、でも見れたおかげでやつと形に出来たよ」

お姉ちゃんは伸び伸びとして、達成感に満ち溢あふれた顔をしてる。

軽く言ってるけど……この人、他人の技術をたつた3ヶ月で自分のモノにしちまいがった。

しかも教えを請わずにただ観察して、自分の中で試行錯誤したただけで……
明らかに異常だ。

ツアオ・ツアオの魔改造とか目じゃないくらいに異常だ。

「形にはなつたけど、今のままでと人体に打ち込んだ時にさっきのアルミ缶みたいに弾けちゃうと思うんだよね。それじゃ傷跡が残らずに死を打ち込むって言うのと違うし……そもそもこれ、意外と隙が大きい——どうしたの？」

「別に、あたしのお姉ちゃんは人外をどこまで地でいくつもりなのかと……」

「そこまで人間やめたつもりはないけど？ ほら、お父さんとかソフィーお姉ちゃんと

かウイリアムとか私以外にもいっばいいるし」

いいえ、十分に人間やめてます。

確かに人間やめると言えば他にもいっばいいるけどさ。

そういう事じゃないんだよね……

ちよつと現実逃避気味にネタに走ろう。

あたしのお姉ちゃんがこんな人外な訳がない。

今に始まった事じゃないんだけどね。

うん、大分落ち着いた。

再認識しただけで、どうって事はないね。

つまりはいつも通りのお姉ちゃんって事だよ。

「それもそうだね」

「でしょ？ それはともかく、私達もカジノ警備に向けて頑張ろっか」

「おー！」

あたしはテンションを上げて、拳を突き上げる。

こうして、またあたしは毒されるのに気付きながらも気付かないフリをした。

59 : 第二の可能性

いよいよ来た、7月24日。時刻は昼頃。

俺は、台場にあるカジノ『ピラミデイオン台場』へと到着した。

今は夏休み真っ盛りだ。なのに俺は何でこんな時にGメンなんぞやってるのだろうか？

普通の学生なら実家に帰るなりして夏休みを満喫しているだろう時に俺は……単位不足で補修任務だ。霧と組んでた時は、こんな事もなかったんだがな。むしろ、単位を早期に取得出来てて余裕にさえ感じていた。

と言っても霧が俺を連れ回したおかげでいつの間にか単位が……って言う流れだったから、俺が積極的に依頼をこなしてた訳じゃない。いや、兄さんがいなくなる前はもう少し積極的だっただろうが、今にして思えばそれ以上に霧が連れ回してた部分が大きいように思える。

だが一体全体、今はどうしてこうなった……。そう思うが、その原因は分かっている。アリアと出会った辺りからだ。

アリアは霧以上に俺を連れ回すから……違うか。振り回されると言った方が正しいんだろうな、この場合。

とにかく俺は静かに暮らしたいって言うのに、2年生になってアリアと出会ってからここ3ヶ月は色々とあり過ぎた。

リュパンの曾孫である理子と遙はるか上空の飛行機の中で戦ったり、学園島の地下でジャンヌ・ダルクの子孫と戦ったり、横浜の摩天楼で吸血鬼と戦ったり、極めつけは死んだと思ってた人との再会だ。

俺の人生は一体どうなるんだ……

と、グダグダと心の中でボヤいても仕方ない。

さっさと依頼を終わらせて俺も夏休みに入ろう。

そう決意する。

俺はITの若社長と言う設定でカジノ警備にあたる。いかにも成り上がりって言う感じのちよつと高級そうなスーツに身を包み、成金風のネクタイを締めている。

正面のホテルみたいな自動ドアへと向かい、中に入ると……ひんやりとした程よい冷気が身を包んだ。

ここがエントランス・ホールか。事前にカジノ内の見取り図は見てたが、思ったよりも広いな。

天井が高く、奥にある2階のフロアまで見えている。

目の前のレーザー光線で彩られた噴水は打ち上げるように水が出て絶えず音が響き、涼しさを感じさせる。

なるほど、カジノが日本で合法化されて最初に建てられた公営カジノ第1号だけはあるな。内装も気合が入ってる。

雰囲気だけで楽しめそうだ。

今回は依頼で単位のために来た訳だし、ノンビリと見学するつもりはないけどな。

こう言うカジノやパーティー会場では警備員以外に武偵が雇われたりする事もあるが……実際のところはトラブルなんて事はほとんど起きない。

だから、武偵業界じゃ『腕が鈍る仕事』などと揶揄やゆされている。

つまり今の俺にはぴったりの依頼と言う訳だ。受けたのは霧って事になってるけどな……

このエントランス・ホールの先がカジノ・ホール。そしてカジノ・ホール1階には主にスロットが立ち並び、2階にはルーレットやテーブルゲームが多い。

まずは、

「両替を頼みたい。青いカナリヤが窓から入ってきたんだ。今日はきつとツイてる」

チェンジカウンターで合言葉を言ってジェラルミンケースをカウンターに置き、作り

物の一千万円の札束をチップに換えて貰う。

そして、チップと一緒に何故か小型のインカムを出される。

「これは？」

「白野様からのお預かり物です。青いカナリヤの合言葉の方にお渡しするようにと」と、カウンターのお姉さんが説明する。

霧からの指示か、連絡手段は確かにあった方がいいな。

「ありがとう」

お礼を言いながらチップと一緒にインカムを耳に付ける。

マイクは服に付けるタイプか。

あんまり目立つところに付けると周りの客に警備員の類だと勘付かれる。それじゃ私服警備の意味がない。襟首の裏でいいだろう。

それからスイッチを付ける。

『あ、到着したみたいだね。どうもー聞こえてる？』

気付いたのか、霧の声が聞こえる。

「ああ、聞こえてる。他のヤツにも同じように連絡手段が？」

『まあね。ただ、この喧騒けんそうで同時に回線を開くと誰が何言ってるのか分からなくなりそうだから普段は2人までの通信にしてるよ。会話をするには同じチャンネルにする事

ね。緊急時以外は今開いてるオープンチャンネルはあまり無しの方向で」

「つて事は、例えば俺だけがお前のチャンネルに合わせて話しかけても意味ないのか？」
『いいや、一方的な通信になるだけだよ。私からは話せなくてただ聞いているだけ』
なるほどな。

『それじゃ、そろそろ仕事に入るよ。何かあつたら回線を開いてね』

そう言つて霧は通信を切つた。

……何か、微妙に疎外感を感じる。

そう言えば、兄さんがいなくなる前まではいつもこんな感じだったな。

懐かしいな、この感じ。

霧が準備とか色々と済ませて、俺はそれに連れられるような形で依頼をこなして行く。

いい加減に借りをまとめて返したいんだが……一体どうすれば今までのを帳消しに出来るんだか、皆目見当がつかん。

つか具体的に今、どれくらいかの借りがあるのかと思ひ始めると……想像するのも恐ろしいな。

「ちよつと！ 何をボーツとしてんのよ！」

いきなり耳を引つ張られて大声で叫ばれる！

そのキンキンとした高い声に耳鳴りがっ……！

耳を押さえて、声の主が居る方を見ると――

「もう、自分の事なんだから真面目に仕事しなさいよ！」

プリプリと言った感じにアリアがバニーガール姿で俺を見上げて怒っている。

「おい、アリア……ちよつとは静かにしろよ。俺は客なんだぞ？」

「うっさいわね！ あんたが突っ立ってるのが悪いんでしょ?!」

客が突っ立ってたらお前は怒鳴るのかよ……

「あのな……足を止めて周りを見てるのがいけない事なのか？」

「あんたの場合は別の事を考えて突っ立ってただけでしょ？」

俺の言葉にアリアはピシヤリと言い切りやがる。

どうやら言い訳だと思ってるらしい。

……いや、まあアリアの言う通り考え事してたのは間違ってる。

「どうせ霧の事でも考えてたんでしょ？」

しかも考えてた内容まで当ててくるとは……

無駄に直感が発揮されてるようだ。

だけど、霧の事を考えてたのが事実だとしても――

「霧の事を考えてたら、なんでお前が不機嫌になるんだよ」

「別に、不機嫌になつてないわよ」

俺が聞くと、アリアはツーンとした感じでそっぽを向く。

絶対に不機嫌だろ。

お前、何か嫌な事があつたりしたら割と顔と顔を逸らすからな。

「それより、お前はちゃんとウエイトレスやってんのか？」

「してるわよ。でも、あたしには注文してこないで理子の方ばかり行くのよ！」

言いながらアリアがぐぬぬぬ、と言つた感じの鋭い視線を向けた先には、

「お待たせしましたー♪ マンハッタンです」

アリアと同じくバニーガール姿の理子が丸いトレーを持って、カクテルを男性客に

配つてる。

それで何となく不機嫌な理由が分かつたぞ。

だが、それも無理もないだろう。そもそも、バニーガールと言えば大人の女性がするものだ。アリアみたいな犯罪じみた身長でバニーガールの格好をして、胸にパッドを詰めたとこで人気は出ないだろう。

それを言つてしまえば、理子もアリアと同じように低身長だが……あいつにはパッドは必要ないからな。愛想もいいから、客受けはいいだろう。

要はリユパン嬢ばかり人気なのがライブルであるホームズ嬢は気に食わないんだろ

う。

こつちに気付いた理子が、一瞬だけこつちを向いてウインクをする。

そして、次にアリアに視線を向けたかと思うと目を細めて「くふつ」と不敵に笑った。それからすぐに客に呼ばれてその場を離れて行く。

明らかにアリアには挑発したな。

「……いい度胸ね、理子お」

今にも銃を抜きかねない程にアリアの表情が引き攣^{くわ}つておられる。

『あー、そこのお2人さん。あんまり一緒にいると不審がられるからさっさと移動してもらえるかな?』

どこからか見えてるんだろう、そこにちょうど霧からの通信が俺に入ってくる。

すぐにチャンネルを合わせて返信する。

「悪い、すぐに移動する」

『あんまり不真面目だと警備が不十分だったって言って評価を下げるように報告するよ?』

「嬉しそうに言いやがって……頼むから勘弁してくれ」

『勘弁するかどうかはキンジ次第だね。神崎さんとの通信に切り換えるよ』

そう言って通信が切れたかと思うと、

「何よ、霧?」

霧がアリアの方に話し掛けてるんだろう。アリアが反応を返す。

「は……?! あんたつてばいきなり何を——わ、分かったよ!」

どうやら早くも通信は終わったらしい。

この感じ、アリアが何やら言い負かされたような感じだな……

ちよつと俺は霧がアリアに何て言ったのか気になったので聞いてみる。

「霧に何て言われたんだ?」

「あんまり目立つ行動をしたら、ホームズの娘は警備も碌ろくに出来ないと報告するつて

言ってきたわ……。全くもう! イヤらしい脅しね!」

プライドの高いアリアだからな。

霧は、そう言えば簡単にアリアが言う事を聞くとおつたんだらう。

人の扱いが上手いな……

「あんたもブーツとしてないで、留年しないようキッチンとしなさいよ!」

そのままアリアはズンズンと歩いて怒りを露あわにしながら去つて行つた。同時に俺は、バニーの衣装のV字に開かれ肌を剥き出したアリアの背中にある弾痕が目につく。

七夕の夜に俺の部屋でチラリと見た程度だったが、改めて見ると随分と古いな。

そんな俺の視線など気付かず、アリアは言いたい事は言つてやつたつて感じだ。

アリア、お前は理子の方にはかり客が行くのが気に食わないらしいが。そんな不機嫌なオーラを出してたら余計に客が寄り付かなくなるぞ……

理子とアリアと言う組み合わせに不安を抱きながらも俺は警備の場所を変える。

奥のテーブルゲームがある方へと進んで行くと、本格的なギャンブラーっぽい人が増えてくる。

絢爛けんらんなドレスに身を包んだ女性、俺と同じような高級そうなスーツを着て葉巻を吸ってる中年男性。一般客の中でも存在が濃いのが何人かいる。それに、普通の優男みたいな顔してるクセに目の色が違う奴もいる。

どうやらここら辺は少しばかり警戒が必要なようだな。

そのまま変に視線をギラギラさせないようにしながら警戒していると、ある一つのテーブルが他のテーブルに比べて人が多いのに気付く。

何だ？ あそこだけイベントでもやってるのか？

こう言う賭け事をする場所では人が多いところでトラブルがよく起きたりするものだから……一応、見ておくか。

そう思つて俺は見物人を装つて静かに近づく。

そこには、金ボタンのチョッキを着てディーラーの姿をした霧がいた。しかも髪をポ

ニーテールにしてる。

どうやらこのテーブルゲームはポーカームいただな。

霧はテーブルの上でトランプを扇状に広げ、それから見事な手際でカードをシャッフルをする。

プロみたいなカード捌きさばだな。見ている人の何人が少しばかり感嘆かんとんしてる。

相変わらず器用な奴だ。

それにどこか様になってる。

ここはあいつに任せても大丈夫だろう。

さらに離れると、霧とは別に集団がいた。

だけど今度はテーブルの周りに集まってる訳じやなさそうだ。

「すげーカワイイ子だー」「一枚写真撮らせてください!!」

と、集団から黄色い声が聞こえる。

アイドルでも来てんのか？

その集団に俺はさり気なく近付き、野次馬的な感じでこの黄色い声を上げている人が集まった原因であろう人物を探す。

「カクテルウェイトレスの撮影はご遠慮下さい!」「出入口の掲示板の注意事項にもございますので!」

ウエイトレスのお姉さん達が俺へと向かってくる。

そのまま、俺や他の人を押しつけるような形で去って行った。

お姉さん達が人混みを抜けた後に、よろけて彼女達の中から出てきたのは……見知った顔だ。

白雪だった。

おいおい……。裏方やっておけって俺は言つた筈なんだがな。

ただでさえ人見知りする白雪だ、こんな欲望に塗れてる場所じゃ刺激が強すぎるから忠告したつてのに。

そのまま、バニーガール姿の白雪は半べそになりながらスタッフルームへと逃げ込むように入った。

「あー、霧？ 問題発生だ」

霧のチャンネルに合わせて俺は通信する。

あいつは今はディーラーだからな……客の相手をしてるだろうし、都合よく返信はできないだろう。

「白雪が接客で参つたみたいだから様子を見てくる。あと、色々と注意をな。スタッフルームにいる」

それだけ伝えてから通信を切る。

返信は出来なくても聞こえてはいるだろうからこれで問題ないだろう。
白雪が入った後すぐに俺もスタッフルームに駆け込んだら客に怪しまれる。
しばらく時間をおいてからさり気なく入るか。

そうして少し待って、白雪が入ったスタッフルームの扉の前。

俺も入ろうと思つて僅かに開いたドアに手を伸ばしかけた時に、声が聞こえた。
少しだけ開いて、俺は中を見る。

「……うん、大丈夫。東京はお姉ちゃんに任せて」

どうやら白雪が電話してゐるらしい。

少し、話し終わるまで待つか……

「敵は、異国の蟲術むじゆを使います。だから蟲むしに気をつけて持ち場を離れないように。霧雪、
粉雪……星伽をしつかり守るんですよ。……また連絡します。それでは」

話し相手は妹達らしい。

白雪は静かに携帯を閉じる。

終わったみたいだな……

「おい、白雪」

「ひゃいっ!？」

扉を開けて声を掛けたら携帯と一緒に飛び上がったぞ。

座ったまま飛び上がるなんて器用なヤツだ……

それからあたふたと携帯をお手玉して掴んでから俺の方へと振り返る。

「ききき、キンちゃん!？」

俺が声を掛けただけでこの有様。

キンちゃん様にならないだけマシになったんだろうが……この調子だと、いつになったら普通に話せるんだろうな……

それは置いておいて、だ。

「お前、やるなら裏方——バックヤードにしとけって言っただろう?」

「(ぎ) (ぎ) (ぎ) (ぎ)、ごめんなさい! ごめんなさい!」

「そんなに謝らなくていいっつもの……」

「ごめんなさい……」

そう言つて俯うつむく白雪。

ダメだ、このパターンは堂々巡りになる。

「で、さつき妹達と話してたみたいだが……何かあったのか? 敵だとか、何とか言つたが」

堂々巡りになる前に俺は一旦、別の話題を出す。

少し気になってたと言うのもあるけどな。

白雪は「うん」とひと呼吸おいてから話し始める。

「イロカネアヤメが誰かに盗られちゃったみたいで……」

「菖蒲って、いつも持つてるあの刀か」

「ほら、私……この間の魔剣での事件で制約を破っちゃったし」

「謹慎とかじゃないだけマシだろ？」

「うん……」

白雪は少し落ち込み気味だ。

あの刀が大事なのは分かるが……だからと言って、M60を刀代わりに持ち出されても困るけどな。

「それはそうと、何でそのカッコなんだよ？」

「え……？ それは……この間、キンちゃんがアリアにこれを着せて、楽しそう……だったし」

俺の問いにモジモジした感じで白雪がそう返してくる。

楽しそうって……俺はあの時、ただ単に踏まれてただけなんだが。

何がどうして楽しそうに見えるんだ……

「それでも自分の向き、不向きぐらい考えて欲しいもんだけどね」

突然に扉の方から霧の声が聞こえたので振り返ると、案の定そこには彼女がいた。上手く抜け出してきたんだろう。

そうれはそうと、表情からして若干呆れてる。

白雪は霧を見て少し声を上げた。

「き、霧さん……」

「一応この依頼は客の気分を害さないよう目立たず、私達が警備関係の人間だとバレないように遂行して欲しいって言う風に条件が付いてたでしょうに。まあ、私は別にバレて依頼が失敗してもいいんだけど……」

「おこ」

思わず突っ込む。

お前はいいかもしれないが、俺はよくねえよ。

「今回の依頼はキンジの不足単位の補填ほてんと言う情けない目的があるんだから、白雪さんはキンジの足を引つ張りたいの？」

さり気なく俺を貶けなすな。

それと若干言い方がキツイぞ。

「う、うん……ごめん、なさい」

ほら見ろ、白雪が目に見えて落ち込んだじゃねえか。

そう言う意味を含めた視線を霧に向けてる。

「ま、でも……あつりようじ荒療治つて事でいい機会かもね」

呆れた顔から途端に笑顔になる霧。

こう言う時のあいつの笑顔は嫌な予感しかしない。

だがどう言う事をするつもりなのか念の為に俺は聞いておく。

ストツパーは必要だ。

「荒療治つて、何させる気だよ？」

「ん？ 理子と一緒に引き続きカクテルウェイトレスをやらせる」

いくら何でもハードルが高いだろ。

アドシアードのチアでほんの少ししかまだ人見知りの耐性が付いてないって言うのに。

そんな俺に霧が近付いて来て耳打ちする。

「理子と一緒に組ませとけば、大丈夫でしょ。このまま依頼の本分を果たせない人が出てきたら何かしら評価に影響が出るかも知れないし」

「それはそうだが——」

「それに、いい加減に人見知りでオドオドするのも治した方がいいってキンジも思うでしよ。」

まあ、確かに霧の言う通りではあるが。

「キンジが言えば、張り切るだろうし。少し発破を掛けるつもりでさ、こう言ってみて」
それから霧は俺が白雪に掛ける言葉を告げる。

.....

.....

「おい、ヒステリアモードでもないのに何でそんな事を言わないといけないんだよ」

「じゃあ、ヒステリアモードになったら言ってくれるの？ キスでもする？」

「おいバカやめろ。発破を掛ける前に白雪に爆弾を放り込む気かッ」

「だったら、四の五の言っでやいなよ。自分の単位と白雪さんのためでしょ？」

確かにここで評価に影響は出て欲しくはない。

それに、白雪の現状が少しでも好転するのなら……これも良い転機だと思えばいいんだらう。

「どうする？ 留年したくないんでしょ？」

ニヤニヤするなよ……

平穏な生活を送るには、まずは何の問題もなく武偵高を出る必要がある。

単位不足で留年なんてしたら転校出来なくなるかもしれん。と言うか、そもそも受け入れてくれる学校があるのか？ って言う状態になる。

そんな事になって武偵高に留まる事になったら今以上に居場所がなくなるぞ。後輩どころか同じ学年だったヤツにもいびられるに決まってる。

……背に腹は変えられない。

俺は白雪に向き直る。

未だに落ち込んでるのか、俺と霧が話してた事に気付いてない様子だ。

「あー、白雪」

「は、はいっ!」

俺が怒ってると思われてるんだろうか……白雪がビクつく。

「白雪、お願いがあるんだ」

そう言うって俺は白雪の手を握る。肌が、絹みたいな触り心地だ。

口調は微妙かもしれないが言葉だけはヒステリアモードみたいな優しいものだ。

正気の時にこんな事を言わなきゃいけないのは、軽く自己嫌悪に陥りそうだ。

「え? え?」

握られた手を凝視しながら白雪が混乱し始めている。

これ、早めに済ませないと面倒臭い事になりそうだ。

「難しいお願いかもしれないが、接客をもう少し頑張ってみないか?」

「で、でも……さつきみたいに男の人が——」

「これも白雪のためなんだ。もう少し、人前に出ても大丈夫なようになってきたら……キスの先を考えてもいい」

「きき、キスの先!? ええええAからBでCになってッ……は、はひー!」

白雪の視線が泳ぎまわっている。なんて言うか、グルグルと目を回してる感じだ。

おい、これホントに大丈夫なのか……?

っーか霧は言わなかったが、キスの先ってなんだよ。

内容は分からないが、ヒステリア的な要因を含んでる予感はずごくするんだが。

「だから白雪、これも特訓だと思って頑張ってくれ」

あと、俺の単位のために。

「はははい! が、頑張ります!」

効果は靦面てきめんだったが……とんでもない事をやらかした気分だ。

「それじゃ、俺は戻るからな」

すぐに俺は逃げるようにスタツフルームを出る。

出る前に少し白雪を見ると、頭をぐわんぐわんと揺らしながら放心状態で夢見心地の

ようだ。

霧の方に視線を移せばいつも通りのニコニコ笑顔だ。

それから「頑張ってるね」みたいな感じで手を握って開くのを見てから、俺は今度こそ

スタッフルームをあとにした。

アリアも白雪も私服警備^メには向いてないと言う、霧の言い分を身を持って実感した。理子を連れてきたのは、ある意味正解だったかもしれない。接客もあいつに合わせれば、何とか出来るだろう。

さすがに依頼で悪ふざけは理子もあまりしない……筈だ、多分。アリアはおちよくなるだろうけどな。

ともかく、個人評価だったらいいな……と言う希望を持ちつつも俺は俺で依頼の本文を全うしよう。

進級と転校が掛かってるんだ。

と言う事で、俺はカジノの2階の特等ルーレット・フロア——所謂^{いわゆる}会員のお金持ちが集まるVIPフロアへと警備を移す。

ここでは会員パスを持つてる金持ちしか賭けには参加できない。

見学するだけなら一般の人でも入れるみたいだが、見物料が別に必要になる。賭けに参加するなら賭け金は最低でも100万と言うハイレートだ。

俺はあらかじめ成金風のスーツと一緒に貸されている会員カードを黒服の警備員に見せて中へと入る。

色々と条件に金が付き纏うから客はそんなにいないと思っていたが、そうでもないみたいだな。

何やらテーブルの一角に大勢の見物客がいる。

並べられた動物の剥製を背後に構えてるルーレットテーブルにいたのは、霧と同じく金ボタンのチョッキを着たレキだ。

「……………」

相変わらずの無言、無表情で賭けを進行している。

しかし、その手際は良い。

意外だな……霧ほどじゃないがコイツも結構要領がいいぞ。

「では、次のゲームへ移ります。プレイヤーは賭け金をどうぞ」

次のゲームへの移行を宣言したレキに周囲の観衆が盛り上がる。

「はは、この僕がここまで負け越すなんてね……これで3500万円か」

と、ゲームをしている青年が喋りだす。

どうやらこのルーレットテーブルで賭けに興じてるのはこの人だけらしいな。

「——キミは運命を司る女神かもしれないね」

運命の女神って……

なんか、青年が突然にヒステリアモードの俺みたいな事を言い始めたぞ。

レキが運命の女神なんて、どう言う感性をしてるんだ。

人の好みはそれぞれだが……こんな愛想のないヤツでもいいのか？

そんな疑問を抱きつつも青年を見てみると、その顔にどこか見覚えがある。確か、テ

レビで最近よく見る本物の青年IT社長だ。主にスキャンダル関係の報道で、だが。

人が多い訳はこの有名人目当て。そう言う事か。

「残りの掛金は負け分と同じ3500万円……これを全て、黒ワールに掛ける！」

宣言と共に1枚が100万のチップを35枚、若社長は黒へと置いた。

その勝負の姿勢に客は更に盛り上がる。

だが、若社長は負け続きなのか興奮状態だ。

これは……トラブルの予感だな。

「では、この手球が黒へと落ちれば配当は2倍です。よろしいですか」

対してレキはいつも通りだ。無愛想に進行している。

もう少し雰囲気を感じて欲しいが……ロボットに空気は読めんか。

「いいや、配当はいらない——代わりに”キミを貰う”！」

宣言しながらレキを指差す若社長。

「僕は強運の女性をものにして、強運を得てきたんでね」

おいおい……何を言ってるんだこの若社長は。

その寡黙な少女は狙撃手スナイパーで武偵だぞ。

言つてしまえば殺し屋もどきだ。

まあ、レキに限らず武偵にいる連中は人を撃つのに躊躇わない奴らばかりだけだな。

アリアは別格。あいつはただの乱射魔だ。

しかしマズイぞ……

社長は興奮状態。観客はそれを煽るような雰囲気。対してレキは愛想笑いの一つもない。無愛想過ぎて、周りに怒っているような印象や雰囲気を与えている。

これだと社長が勝つてもレキが勝つても、問題になるぞ。

問題無く仕事してるのが霧と理子つて言うのが……

……仕方ない。俺が行くか、これも自分の単位のため。

「ちよつと失礼」

意を決して、俺は割り込む。

俺と言ういきなりの乱入者に周りの観客がどよめく。

「なんだ、キミもこのディーラー目当てか？」

不快感を顔に出しながらワックスで固めたような髪を揺らし、若社長が俺を睨みながらそう言うってくる。

「いいえ、私はあなたの商売敵ですよ。この程度の手持ちしかない下請けです。ああ、目当では配当だけですのお気になさらず」

俺は100万のチップを1枚見せながら若社長にそう返す。

そうして、さえないヤツが出てきたと周りに演出する。

実際に周りのムードはやや盛り下がりを見せている。

これで良い。

あんまり周りが煽ると場に酔って自分の感情の昂ぶりを抑えられなくなるからな。

もし、さっきの状態で若社長が負けていたら……強引な手段に出るかもしれない。

こう言うヤツはプライドが高いし、障害にぶち当たれば無理にでも前に進もうとするタイプだ。恥を搔いたと感じた時には特に感情的になる。

そこで俺が同じ場所に立つ事で、敗北した時の恥を分ける。そうする事で少しはトラブルの可能性を下げられるだろう。

もしも若社長が勝った場合は……知らん。

レキ自身が何とかするしかない。

「とつとと賭けろ。彼女は渡さない」

渡さなくていい。

こつちとしてもレキの扱いには困る。

とりあえずそうだな……若社長と同じ場所に賭けて一緒に負けるのもあからさま過ぎる。

ここは赤の——23だな。俺の出席番号に駆けておこう。

確率は36分の1。パーセントテージにして2・5と2・7パーセントつてところか。ともかく、当たる確率は低い。

「それでは時間です」

レキが言いながら無機質にテーブルを撫で、参加締切を合図する。

それからゲームが開始される。

レキがルーレットを回し、それから白い手玉を手を持った。

スツと滑らかにレキの手から放られた手玉はルーレットの上に落ち、縁ふちを滑る。

そのまま球は勢いを失くし、そのままルーレット番号の仕切り板の上を小気味良い音を立てて跳ねる。

それを固唾を呑んで俺と若社長は見守る。

俺は演技だけだな。

カツン、カツンと音を立てて球は——

「赤の23、2人目のプレイヤーの勝利です」

俺の賭けた場所に入った。

その瞬間俺は目が点になり、若社長は軽くコケる。

「おめでとうございませす。配当は36倍なので報酬は3600万円です」

レキの声で気が付くと、T字の棒でいつの間にもやら俺の目の前に3600万円分のチップが置かれていた。

そして観客は一気に大盛り上がりだ。

おいおい……

盛り下げるために出てきたのに、これじゃあ本末転倒じゃねえか！

て言うかレキのヤツ、意図して俺の賭けた場所に入れたんじやねえだろうな。

ルーレットで特定のマスに自由自在に入れられるヤツはいない。このゲームはそう言う前提がある。大体、ルーレットが回つて球自体もルーレットの縁を回ってるんだ。予測して特定のマスに入れるなんて事は前提以前に不可能だ。

不可能なんだが……レキならやりそうだ。

「は、はは……これで7千万の負けか。でも、これだけお金を落としたんだ。君の電話番号を教えてくださいませんか？」

若社長、あんたタフだな。

あれだけ負けてもまだ食らいつくか。

「お引き取りください。今日はもう、帰った方がいいです」

「そこをなんとか——！　メアド……いや、せめて名前だけでも！」
「皆さんもお帰り下さい」

懇願するような社長をスルーしてレキは何故か観客に語り掛け——

「本日は良くない風が吹き込んでいます」

そう言ったと同時にレキの後ろの動物の剥製はくせいの中から影が1つ飛び出し、重々しい音と共にテーブルの上に降り立った。

チップを撒き散らし、テーブルに脚を下ろしたソレは以前に俺とレキが捕獲ぎんろうした銀狼だ。

突然の銀狼の登場に一瞬言葉を失った観客たちを銀狼——ハイマキは跳び越えた。

そしてフロアの片隅からこちらに向かって走ってきた人影に向かってハイマキは飛び付き、首に食らいついた。

そのままスロットマシンを突き破るように押し、石柱へと叩きつけた。

「——！」

俺はハイマキに飛び付き、押し倒したモノを見て言葉を失った。

全身を黒いペンキで塗ったような肌をした人型、身に着けている物は腰に短い布。そして、半月型の手斧だ。

格好もおかしいが、それ以上に言葉を失ったのはそいつの頭部だ。

明らかに人の頭ではない。動物で言えばキツネのような頭をしている。

アレはアリアと見ていた動物番組に映っていた……確か、そう——ジャツカルと言うイヌ科動物の頭だ。

コスプレとか特殊メイクとかそんなものじゃないと直感的に分かる。

なにせ表情の変化が自然すぎる。

観客はハイマキが現れた時点で軽いパニックだったが、ハイマキが押し倒したモノを見た瞬間に恐怖心が加速したのか大声を上げて散り散りになる。

「お、おい……何のイベントだよこれ」

どうやら若社長も腰を抜かしたらしく、俺の足元で声を震わせている。

「イベントなら良かったんだけどな」

俺はネクタイを緩めながら拳銃ベレッタを取り出す。若社長は俺の取り出した得物に気付い

たのか、声にならない声を上げて一目散に去って行った。

「気を付けてくださいキンジさん、あれは人ではありません」

「見りゃ分かる」

忠告しながら近付いてきたレキの言葉に俺が苦笑いしたところで、ジャツカル男がハイマキに首を噛まれたまま立ち上がった。

その光景に俺はまたもや驚く。

ハイマキはバイクに近い重量があるはずなんだがな……何で平然と立ち上がった首を大きく回してハイマキを振り払ってるんだよ。

振り払われたハイマキはそのまま距離を保ちながら、ジャツカル男を威嚇いかくしている。俺は何が来ても対応できるように周囲を警戒しながら身構えようとした瞬間に、

——パァン！

発砲音と同時にジャツカル男のコメカミが撃ち抜かれ、頭が横に動きそのまま体も倒れる。

「異常があつたならさっさと連絡してよね」

撃つた方向を見ればディーラー姿の霧がグロックを片手に階段のすぐ傍に立っていた。

「悪いな、客を逃がするのが最優先だったからな」

「ならいいけど。それよりも何でアヌビスがこんなところにいるのやら……」

「——アヌビス？」

「古代エジプトから伝わってる守護神みたいなものだよ。正確にはミイラ作りの神だったかな？」

俺の問い掛けに霧は普通に答えた。

相変わらず何でも知ってるな。

俺はそんなオカルト染みた知識は皆無に等しい。

「それよりもキンジ……ジャツカル男を見てた方がいいよ。これからのために」意味深に霧がそう言うので俺が倒れたジャツカル男を見た時、その体が崩れ落ち、サラサラと砂になっていった。

黒い砂——おそらくは砂鉄だろう。

(どうなってるんだよ……ッ！)

その光景に目を疑ってしまふ。

そのまま見ていると砂鉄の中から黒いコガネムシが出てきた。

ダメだ、状況が何者かに襲撃されている。それ以上の事が分からない。

それにあの虫……どこかで見た事があるような。

そう思つて虫に近付こうとした瞬間、レキに肩を掴まれる。

「キンジさん、あの虫に近付いてはいけません。危険です」

「危険？ あの虫がか？」

「はい」

あの虫が危険だとは思えないが、レキは簡潔に短く答えた。

「レキユの言う通りだよー、キーくん。あの虫は超危険だよ」

そこへ理子が階段を使わずに柵の方から飛び上がってきた。

普通に階段で登ってこいよ。

そのまま理子は1階を見渡せる場所にある装飾された柵に降り立つと足を組んで腰を下ろした。

「あの虫が何なのか知ってるのか理子？」

「まあねー、って言うかあの虫を使うヤツって1人しかいないし」

理子が知ってるって事は……イ・ウーの連中って言う線が濃厚だな。

「ちなみにあの虫に触れたら、不幸属性と言うバッドステータスがプラスされちゃうぞ」
♪

「不幸って、もう少し分かりやすく言ってくれ」

「具体的に言えば、何か事故に遭うね。例えば肝心な時に銃が撃てなくなったりしちゃう」

理子の話を聞くにつまりは呪いのものなのか？

「詳しい話は後回し、今はこの状況を打開するのが先決だよ」

そう言って霧はグロックの銃口を上にして構える。

レキもビリヤード台の下から隠していたドラグノフを取り出し、弾倉を入れた。

みんなして上に注目しているので俺も上を向いた瞬間、思わず呻き声が漏れる。

絢爛なシャンデリアの向こう側、ホールの天井にさっきのジャツカル男が何体もへば

りついていた。

スパイダーマンみたいに天井を移動しながらこちらを見ている。

気味の悪い光景だ。確実に10体以上いるな。

『緊急事態なので全員通信をオープンチャンネルに変更。神崎さん、白雪さん2階のルーレット・フロアまで来て』

近くにいる霧の声が通信と一緒に聞こえてくる。

俺もインカムをオープンチャンネルに変えて、通信で全員の声が聞こえるようになる。

『ようし！ りこりんは今はウサギだから思いつ切り跳ねちゃうぞー！ くふっ』

ハイジャックでの時のように最後に笑った理子が柵の上で立ち、両足で飛び上がる。そのままシャンデリアの上へと軽々しく登り、

『落ちろ、蚊トンボ！』

2丁のワルサーを持った理子が声を上げて撃ちまくる。

天井に張り付いたジャツカル達がボトボトと理子が撃つた空薬莖と一緒からやつきように落ちてくる。

アリアもそうだが、理子も大概に遠慮がないな。

そんな理子の背後を狙って、天井に張り付いていた1体のジャツカル男が飛び掛か

る。

——マズイ！

俺は銃を構えて撃つが、他のジャツカル男が射線上に飛び出して手斧で銃弾を防ぎやがった！

俺の背後から間髪入れずに銃声が響いたかと思うと、俺の銃弾を防いだジャツカル男の額が撃ち抜かれ落ちていく。

どうやらレキが撃つたらしいが、理子に襲い掛かるジャツカル男が止まった訳じゃない。

いつの間にやら霧もジャツカル男と戦っている。

確実にこつちの数を減らすためにジャツカル男たちが連携してやがるな。

頭の中まで動物つて訳じゃないみてえだ。

射撃しようにも既にジャツカル男は理子の背後だ。

シャンデリアが邪魔で精確に撃てもしない。

半月の手斧を既に振り上げているジャツカル男が、その月を降ろそうとした瞬間——

——バスバスッ！ ギンッ！

ガバメントの発砲音と共にジャツカル男の手斧が弾かれた。

そして、理子の髪がザワザワと動いたかと思うと振り向きざまにジャツカル男の首が

掻き切られる。

そのままジャツカル男はシャンデリアの上から落ちた。

『なに油断してんのよ』

相も変わらず特徴的なアニメ声を通信越しに響かせながらやって来たちびバニーガールのアリアが、階段からホールの中央へと走りながら銃弾を上に向かって撒き散らしに行く。

それから走った後からボタバタとジャツカル男が落ちてくる。

『あたしが油断してる訳ないだろ、オルメス。お前の助けがなくても十分に対応できた』
男口調で言いながら理子が、アリアが落としたジャツカル男達をシャンデリアの上から撃ち抜く。

こいつら手馴れてやがるな……化物との戦いに。

『どうかしらね。あたしが撃ってなかったら今頃やられてたわよ、あんた』
物陰に隠れたアリアが通信越しに挑発気味に言う。

『お前と違ってあたしはそこまで迂闊うかつじゃない』

『ムカつく言い方ね』

『勝負ならいつでも受けて立つぞ』

頼むからこんな時にケンカすんなよ……！

『なら、どっちがあのごレムを多く倒せるか——勝負よ!』

そのアリアの一声が合図だったかののように2人は同時に動き出した。

理子はシャンデリアから飛び降りながらジャツカル男達を撃ち抜き、アリアはテーブルの間をすり抜けるように移動しながらジャツカル男達を撃ち抜いていく。

ジャツカルがうさぎ達に狩られている。

狩る側と狩られる側の立場、普通は逆じゃねえのか？

なんて思っているうちにも次々とジャツカル男達は黒い砂に変わっていく。

俺とレキはただ自分の周囲にいるジャツカル男共を倒すしかない。

援護しようにもアイツら動き回りすぎて下手に発砲できん。

徐々に数を減らしたジャツカル男はホールの残り1体となった。

そこへ2匹のうさぎが挟むようにジャツカル男に迫る。

お互いに顔を動かさず視線だけ向けて、

『あたしは9体倒したわ』

アリア、

『あたしも9体だ』

理子はそう報告した。

『そう、なら先に目の前のコイツを倒した方が勝ちね』

獲物を狩る眼をしたアリアの言葉と共に2人は視線をジャツカル男に戻す。

心なしか怯えてるようなジャツカル男は、

「——オオオーン」

と遠吠えをしたかと思うと一目散に窓へと向かい、ぶち破つて逃走した。

アリアと理子、そして俺はすぐさま追い掛けて窓の外を見る。

ピラミッドの斜面を滑り降りたジャツカル男はそのまま、水面を走り出した。

そんなのアリかよ……。そう思うが、もう多少の事ではあんまり驚かなくなったな、俺。

慣れ始めてると思うと、少し悲しくなってくる。

「せっかく白雪に客を外へ避難させたのに、外に逃げたんじゃあ意味ないじゃない！」
と、アリアはうさぎの耳を揺らしてご立腹だ。

『そう思うんならキンジとアリアは追撃。レキは遠方警戒。白雪は結界を張って、理子はその護衛ね。私は周囲を警戒する』

インカム越しに霧が素早く指示を出した。

しかも的確だ。

指示を受けた俺はアリアと不意に視線が合う。

「それじゃ——」

余裕の笑みを浮かべたアリア、

「行くとするか」

そしてセリフが続くように俺が言う。

追撃戦の開始だ。

◆

◆

◆

ピラミディオン台場の内部——廊下を警戒しながら私は進む。

角で止まっては棒の付いた鏡を使って廊下を確認する。

ここも問題なし。

「内部は問題なし。警備関係の人間以外はいないよ。念のため、しばらく通信を切って

もう一度見回る。5分後に通信再開するよ」

オープンチャンネルなので誰ともなしに報告する。

『うっうー了解デース！』

と思ったら理子から返答が来る。

それから少しノイズが入ったかと思うと、

『で、これからどうする気なの？』

少し真面目な雰囲気ですり理子が聞いてきた。

チャンネルを切り替えたね。

まあ、私は通信を切って見回ってるって報告したから……誰も通信はしてこないでしょう。

私もチャンネルを理子に合わせる。

これで、一種の秘匿通信状態になった。

「前にも話した通り、私はイ・ウーに一度戻るよ」

『分かった。事前の打ち合わせ通りにあたしは行動すればいいんだね』

「特に大きな予定変更は無し。だけど——」

『だけど?』

その前に今回のイベントを見ておく必要がある。

おそらく、”彼”もいるだろうからね。

「きつと面白いものが見れるだろうから、それを見てからにするよ」

『ブレないねー』

呆れ気味に理子が返してくる。

仕方ないよ。私はそう言う性分なんだから。

◆ ◆ ◆

波に揺らされるような感覚。

水の音が聞こえ、自然に目が覚める。

ここは船の中……だったな。と言つても、今は「海の中」だが。

潜水艦などではない。細長い船体をした少々大きいボートのような船だ。

その船の甲板にある財宝で装飾された船室の中で、俺は壁に背を預けて座っている。

——長い夢を見た。

それはキンジ達が今の教プロフェッショナル授を打ち倒し、イ・ウーと言う組織に終止符を打つ夢だ。

だが、所詮は夢。

実現されていないのだ。

そして、もしイ・ウーが崩壊すれば世界は大きく動き出す。

キンジの傍に潜む悪鬼も動き出すだろう。

ヤツが動き出すくらいならばと、俺は考えてしまう。イ・ウーを存続させると言う選

択肢を。

しかし、それは叶わない。

どの道イ・ウーは崩壊する。それは宣戦会議バンディエーレの開催が決定した時から確定してしまつた。

少しでもヤツの脅威をキンジから遠ざけるには……アリアを消すしかない。

でなければ敵対する事になる。

武偵であるアリアではなく、犯罪者であるヤツを生かした方が安全。おかしな話だ。

だが、もし……キンジがヤツに対抗できるほどの強さがあるのなら……可能性は広がる。

しかしそれは『もしも』の話だ。現実味を帯びている訳ではない。

そう思っていると船が浮き上がるような感覚。

水の音が船室の外から聞こえてくる。

どうやら海の上に出たらしい。

俺は今一度、考え直す。

しばらく自問自答を繰り返して、どうすれば”最小限の犠牲”で済むのかを考える。

そう考えている時点で最早、犠牲無しに何かを守ることなど俺には出来ないと言う事に改めて気付いてしまう。

考えは纏まってしまった。

あとは如何にしてキンジに伝えるか、だ。

ヤツの事だ……どうせ見ているのだろう。

俺は静かに立ち上がり、扉のない船室の出入り口へと歩む。

その間にパトラの砂人形が崩れたのであろう。出入り口の上から宝石と砂が滝のよう
うに落ち、夕陽で煌^{きらめ}く。

その砂の滝が勢いを失くし、止まる頃に俺は船室を出た。

甲板に出て、眼下にいたる水上バイクに乗ったキンジを確認しながら俺は呟く。

「夢を——見た」

俺は夢い絵空事をただ呟く。

「長い眠りの中で、『第二の可能性』が実現される夢を……な。だが……」

俺はキンジを見下すように正対する。

「所詮は夢。ただの夢い空想の出来事ではなかった。キンジ……残念だ。パトラごときに不覚を取るようでは、『第二の可能性』はない」

海風に漆黒のコートと長髪を揺らしながら、俺はキンジを見据える。

「……兄さんッ！　なんだよ、『第二の可能性』って！　パトラって誰だよ！　アリアを撃ったような奴の船にどうして乗ってるんだ?!」

どうやらアリアはパトラの呪弾に撃たれたらしい。

「これは『太陽の船』——古代エジプトで王のミイラを当時海辺のピラミッドへと運ぶための船を模したものだ。それでアリアを迎える……そういう計らいなのだろう？　パトラ」

キンジの問いに答えとも言えない事を答えながら、どこともなしに海に語りかける。

「——妾^{わらわ}の名を気安く呼ぶでない、トオヤマキンイチ」

女性の声が聞こえ、船の横の海からせり上がるように片手にそれぞれ古代エジプトの

聖柩せいひつとその蓋を持ったおかつぱ頭の少女が現れる。

ステージの舞台装置のように海面に浮上した彼女こそ——パトラ。

自称ではあるが、クレオパトラの生まれ変わりを謳うたっている。

ツンとした高い鼻に、鋭い切れ目。細い胸当てに黄金の飾りを垂らし、絹のような腰布を巻いて金の鎖で止めている。頭には蛇を模した黄金の王冠のようなものを着けていた。

彼女が持っている聖柩にはアリアが収められている。

聖柩の蓋を閉めたパトラは、指一本で軽く船へと放り投げる。

アヌビス達がそれを受け止めようとするが、何体か下敷きになり船が軽く揺れる。

「ほほほ、タンイとやら代償。高くついたので、小僧」

手の甲を口元に持って行き、パトラは見下すように笑う。

「妾は下賤の事はよく分からぬが、タンイとやらは大方地位や金に関わるようなものなのぢやろう？ それを餌にしてみれば、簡単にここまで出てきおったわ。ほほ、ほほほ」

パトラの笑い声と共に、そこでキンジは何かに気付く。

俺が見た時から気付いてはいたが、ヒステリアモードになっているな。

パトラは笑いながら見えない階段を上るようにこちらへと近付いて来る。

そのまま甲板へと降り立ち、

「妾が呪った相手は必ず滅びる。イ・ウーの玉座を狙っておったブラドも妾が呪っておったからこのような小娘に遅れを取ったのぢや。くくくつ」

俺の横を通り過ぎて何かに気付く。

「ほつ、そうぢや。まだ一人も殺しておらぬ」

パトラはくると振り返り、両腕をキンジへと伸ばした。

俺が伝えた事をもう忘れたようだな。

キンジを見ると、手から、顔から、口から水蒸気が出ている。

「パトラ、それはルール違反だ」

俺が短く告げながら甲板を歩き、パトラの真横へと行く。

「ふん、なんぢや……妾を『退学』にしておいて”るーる”なぞを持ち出すのか？」

パトラは横に居る俺に向かって、目を細めて見てくる。

「イ・ウーに戻りたいと言うのなら、守れ」

「……気に入らんのをう」

パトラがそう言うと同時に周りのアヌビス達が俺に向かって船の櫂かいを向けてくる。

その先は、槍のように鋭い。

ヒステリアモードではないとは言え、こんなものは脅しにならない。

『『アリアに仕掛けてもいいが、無用な殺しはするな』——俺が伝えた『プロフェッショナル教授』の言葉を

もう忘れたのか」

「……………」

パトラは面白くなさそうな顔をしている。

まるで子供だな。

「パトラ、お前がイ・ウーの頂点に立ちたい事は知っている。だが、未だにリーダーである『教授』プロフェッショナルは健在だ。この意味が分からない訳ではないだろう?」

「いやぢや! 妾は殺したい時に殺す! 贄にえがのうては面白くない!」

首と振りながら手を動かし、シャンシャンと手首に付けている金の腕輪がなる。

ダダをこねる子供のようにはパトラは俺の言葉を拒絶する。

「また「ヤツ」に狙われたいのか? 今度は五体満足でいれる保証はないぞ」

「…………ふ、ふん。そのような脅しで妾は屈さぬぞ。あの神殿がある限り、妾は無敵ぢや!」

パトラはピラミディオンの台場を指差して言うが、強がりだな。

ヤツとはもちろんジャックの事だ。以前にパトラがやり過ぎた時にはヤツがパトラに制裁を加えた。

その時の恐怖心が残っているのだろう。

パトラの声は震えている。

「そうだな。ピラミッドの傍でお前と戦うのは、賢明とは言えない」

「そ、そうじゃ。」今の「お前なぞ、ひとひねりぢや！　ひ、枢送りにされとうなかつたら妾に殺させろ！」

声を荒げながら俺を脅しにきた。

確かにパトラの言う通り、「今の」俺では太刀打ちできないだろう。

——なら。

俺は、すつと滑るようにパトラに詰め寄る。

遠山家に伝わる間合いを詰める足運び。

そのまま何も反応できていないパトラの顎を人差し指で上げて、キスをした。

「——！」

突然の出来事に目を見開くパトラ。

俺を引き離そうと、両手で胸板を押しそうとするが段々とその抵抗もなくなっていく。

弟の前でこんな姿を見せる事になるとはな。

脱力していく。パトラを支えるように左腕を腰に回す。

「——これで赦せ。あれは俺の弟だ」

言いながら俺はパトラの乱れた前髪を少し指で直す。

パトラの顔は夕陽に負けない程に赤くなり、ふらりとした足取りで俺から一步下が

る。

「ト、トオヤマ、キンイチ……わ、妾を”使ったな”？ 好いてもおらぬクセに——」
「哀しい事を言うな。打算でこんな事をするほど、俺は器用じゃない」

遠回しに告白してゐるようなものだが、本心だ。

父も俺もキンジも似たようなものだからな。キンジはさすがに不器用すぎるが。

パトラは手を胸にやり、心を落ち着かせるよう深呼吸を繰り返す。

そして、最後に「は——」と大きく息を吐くと

「な……なんにせよ、今のお主とは戦いとうない。か、勝てるには勝てるが、妾も無事では済まぬ。『プロフェシオン教授』になろうと言う大事な時に手傷を負いとうない」

早口気味にそう言つて、俺に砂時計を投げ渡してすぐさま海の中へと飛び込んでいった。

この砂時計は、アリアの命のリミットだろう。

どのような超能力ステルスが使われているか分からないが、常に砂が一定量落ちている。傾けても常に片方の砂は減り、片方の砂は増えていく。

後部デッキの方からアヌビス達が入った聖柩を担ぎ、パトラの後を追うように海へと飛び込む。

それに続いてキンジも——

「——生まれ！」

俺はそれを抑止するように叫ぶ。

俺の一喝にキンジは海へ飛び込もうとした体を止めた。

追つても無駄だ。

パトラは水中に長く滞在できる術すべを持っている。しかも装備もなしに海中に飛び込んでも見失うのが関の山だ。

この洋上には俺と、キンジ、そして日が沈みその残照に照らされた太陽の船が残った。波の音が静かにそよぐ。

「——『緋弾のアリア』、か。儚い夢だったな」

これから先の戦いで必要になるであろう力。

俺はただ、その言葉を零す。

「緋弾の……アリア？」

キンジはその言葉に疑問を浮かべている。

そう、コイツは何も知らない。

無知な子供のような顔をしている。

ピラミディオン台場の2階の窓から、反射する光が”2つ”。

1つはスナイパーのスコープ、もう1つは——

「兄さん……俺を騙したな！　アリアを殺さないって、あんた……俺の部屋で言っただけだろー！」

「騙してなどいない。俺は事の成り行きを看過しただけだ」

「詭弁だろー！　そんなの……！　あんたが助けてくれればアリアは……アリアは……」

アリアが死んだと思っ
ているのだろう。
キンジは顔を俯うつむかせる。

「まだだ」

俺のその言葉にキンジはハツ、と顔を上げる。

「アレはパトラによる呪弾。今から約24時間、アリアはまだ生きている」

「……………！」

「アリアを生かしている間にパトラは『プロフェシオン教授』と交渉を行うだろう。だが、その交渉が

どう転ぼうと——『第二の可能性』は無い。無いならば、アリアはここで死ぬべきだ」

「兄さんは、アリアを見殺しにするのか!?　あんたはそんな人じゃない、一体、イ・ウーで何があつたんだ！　無法者の超人どもの巣窟そくで何をされたんだ!!」

何をされた、か……

俺は失ってしまった。信念と言う、支柱を。

「イ・ウーは確かに無法者の集団だ。いかなる”法”も”無”意味とし、内部にも”法”

規が一切無^い。どこまでも自由に、自ら高みを目指し、自らの目的を果たし、自らの野望を叶える為の場所。他者がその障害となり得るのなら、排除する事さえ叶う。そんな魔窟だ」

「そんな組織、組織として成り立つはずが——」

「だが、実際に成り立っていた。イ・ウーのリーダーである『教授』^{プロフェッサー}と言う絶対的な存在によって。そして、お前も一度会ったであろう存在がイ・ウーの規律を保たしてきた」

現に見ているであろうヤツ。

俺はそこで区切る。

「しかし、イ・ウーはまもなく崩壊し、終わろうとしている」

「終わる……?」

「リーダーが、死ぬのだ。病や傷ではなく、寿命によってな」

ここから先は、俺が教えられる事の精一杯だ。

キンジを見据え、俺は続ける。

「イ・ウーは、ただの超人育成機関ではない。彼らはいかなる軍事国家にも手出しできない超能力を備え、誰もが世間を騒がせるほどの力を持った戦闘集団だ。それこそ、テレビに出るような表の犯罪者とは格が違う。その中には主戦派^{イクステス}と呼ばれる、世界に対して侵略行為を目論む一派がいる。もし奴らがイ・ウーの主権を握れば……イ・ウーの力を

思うまま操り、世界各地を襲撃して騒乱と殺戮さつりくを繰り広げるだろう」

もつとも、そんな最悪のケースは起こらないだろうがな。

「だが、主戦派イクナテイスのような騒乱を望まない研鑽派ダイオと呼ばれる一派がいる。『教授プロフェッソ』の気質を継ぎ、ただ純粹に己を高める事だけを求める者達だ。『教授プロフェッソ』の死期を知った研鑽派ダイオは考えた。新たな『教授プロフェッソ』を探し、その存在によってイ・ウーを存続させ、主戦派イクナテイスの抑止力にしようとな。武力、超能力、不死……それらの条件をクリアし、試行錯誤の果てに白羽の矢が立ったのが——アリアだ」

だがそれも無駄な事だ。

宣戦会議バンデイレが決定したと言う事は、戦役せんえきは免れない。

ならば先を見据えて動かなければならぬだろう。

「アリアは、イ・ウーの次期リーダー、『教授プロフェッソ』に選ばれたのだ。アリアをイ・ウーへと導き、素質がなければ——すなわち弱ければ殺し、新たなリーダーを探す。それが研鑽派ダイオの合言葉となった」

「そんな強引な方法でアリアが従う訳が……」

「いいや、従う事になる。『教授プロフェッソ』の前では必ずだ」

アリアともなれば特に、な。

俺の言葉にキンジは何も言い返せない。

「すまない、キンジ。今まで何も教えてやれなくて。俺は表の世界から消え——奴らを殲滅するためにその眷属けんぞくとなった」

お前を残して一人……俺は、悪意の沼に落ちてしまった。ちやうど一年前のあの夏に俺が気付いていれば……

お前の傍にヤツを立たせる事もなかった。

多くの事が、悔やまれる。

「俺は、奴らを斃たおす道を模索した。そうして見出した答えが——『同士討ち』——」

フオーリング・アウト

同士討ち——武偵用語で、巨大な組織を相手にする場合、その組織で内部抗争を引き起こし弱体化させる方法だ。

本来ならばそう言うつもりだった。

「イ・ウーを内部分裂させる——そうするには、奴らを束ねるリーダーがいてはならない。イ・ウーのリーダーの席に空白期間を作る必要がある。リーダー不在の状況を作り出せる方法は2つ——『第一の可能性』、今の『教授』プロフェッショナルの死と同時期にアリアを抹殺し、イ・ウーが次のリーダーを探す空白期間を作り出すこと。『第二の可能性』——今代の『教授』プロフェッショナルの暗殺——」

俺が考えていた2つの可能性。

だが、イ・ウーの崩壊が確定になってしまった今となっては意味合いが違うモノに変

わった。

『第一の可能性』——戦役の諍いさかいの種になるであろうアリアを抹殺し、キンジとジャックが敵対する可能性をなくす。

『第二の可能性』——今代の『教授プロフェッサー』に挑み、ジャックを退けるほどの力をキンジに習得させる。

前者は犠牲を出し、家族を救う道。

後者は修羅の道だ。犠牲が出ないとは言いつれぬ。戦役に巻き込まれる事を視野に入れている。

俺は——前者を選ぶ事にした。

キンジにはやはり荷が重すぎる。

アリアが死んだ後に俺がキンジの知らないところでヤツとの片をつける。それで良い。

『第二の可能性』の先には『教授プロフェッサー』との闘いが待っている。お前達ならもしましや……そう

思つて可能性に賭けた。が、賭けは失敗だ。パトラに不覚を取るようではこの先は生き残れない。『第二の可能性』が無いならば、俺は『第一の可能性』に立ち返るまでだ」

「兄さん……あんた、武偵のくせに……人を殺して事を収めるつもりなのかよ……！」

「キンジ、俺達は武偵以前に遠山家の男だ。遠山一族は義の一族。大義のために悪を討

つ為なら人の死を看過する事を厭いとつてはならない。覚えておけ」
話は終わりだ。

それを表すように俺はキンジに背を向け、太陽の船の後部へと向かう。
パトラが確実に遠ざかっているのだろう。

太陽の船の船首と船尾が元の砂に戻って行く。

その砂が、海風に乗って俺を覆い隠す。

何が大義の為……だ。

家族守りたさに他人を犠牲にしようとしているだけだ。

大義と言うには小さい。

義の一族だの大義の為だの……どれもこれもただの言い訳だ。

「帰れ、キンジ」

俺は背を向けたまま語り掛ける。

「イ・ウーはお前の手に負える組織ではない」

頼むから帰ってくれ。

これ以上俺は、何かを失いたくはないんだ。

揺れる船の上で俺は静かに眼を閉じる。

……。

.....

.....

目を開け、僅かに後ろを見るがキンジはまだ帰っていない。

俺はもう一度、背を向けたままキンジに言う。

「帰れキンジ。お前まで死ぬ事はない。犠牲は——アリアで十分だ」

俺がそう言った瞬間、水上バイクのエンジン音が聞こえてくる。

「——待て！ 兄さん！」

太陽の船に何かがぶつかる音の後に、

「——ふざけんじゃ、ねえッ!!」

何かが刺さる音が聞こえる。

見なくても分かる。

そして、俺の中で怒りが燃え上がる。

——バカ野郎がッ！

俺は振り返り、怒りの眼光を船の上へとよじ登ってくるキンジに向ける。

弟に対して向ける眼ではないだろう。

ただならぬ殺気にキンジは気付いてる筈だ。

俺が本気だと言う事に。

キンジ、お前は踏み越えてはいけな一線を踏み越えようとしている。

お前は何も知らない。知ってはいけな世界がある。

俺とキンジを隔てる目の前の砂塵さじんの壁がその境界線だ。

「兄さん——あんた、分かつてるんだろ！」

俺がやったバタフライ・ナイフを仕舞いつつキンジは睨み返してくる。

「何だかんだ言つて、自分のやつてる事が間違つてるつて——本当は分かつてるんだろ！ 今のあんたは自分を誤魔化してる！ 弱い自分を誤魔化してるんだ！ 『義』を口にして謳うなら、誰も殺すな！ 誰も死なせるな！ それが、武偵だろ！」

「……確かにそうだな、俺は間違つてる」

「兄さん……」

「だが、俺がそれを分かつていないと思つていいのか？ キンジ、これは俺が何万回と考え……何万回も自問自答を繰り返し悩んだ末に出した結果だ。義と言うものがお前の言う通りのものであればどれほどに良かったか。——義の本質は、悪の殲滅せんめつ。無辜むこの人、そして秩序ちつじょある世界を護り維持する為には犠牲が伴われる事もある。いや、伴われる事の方が多い。お前もそれを理解するべきだ」

「そんな方法で世界が救われて良い訳ないだろ!!」

そうだな。キンジ、お前の言う通りだ。

しかし、俺にとっての正義は世界を守る事じゃない。

たった1人の家族も救えなくて世界が守れる訳がない。

「キンジ、お前はたった1人の兄に逆らうつもりか？」

「もう、あんたなんか兄さんじゃない」

「……………」

「昔の俺が憧れてた兄さんは去年のあの冬、この海に沈没したアンベリール号で死んだんだ。正義だの可能性だの、関係ない——俺は——」

腰のホルスターからベレッタを抜き、キンジは俺にその銃口を向ける。

「元・武偵庁特命武偵、遠山 金一！ 俺は、あんたを殺人未遂で逮捕する！」

俺は弟に銃口を向けられながらも静かに目を閉じる。

……キンジの言う通りあの冬の日。武偵としての俺は死んだ。

お前の狙い通りだろう——ジャック。

だがな、何もかもがお前の思うように事が運ぶと思うな。

目を開けて、砂の壁の向こう側にいるキンジは逆境に立ち向かう目をしている。

さつきはただ感情に突き動かされているだけだと思って追い返そうとした。

が、もしかするとお前なら……

「——いいだろう。俺もまだ確かめていない事がある。お前のHSS……それは、アリ

アでなつたものだな」

「それがなんだつてんだ……！」

「——見せてみる」

俺は言いながら吹き荒れる砂の中で静かに爪先を動かす。

「この船が沈むまで残り僅かだ。その僅かな時でお前を今一度試す。お前の意志、想い、緋弾との絆が本物かを確かめる」

ここで俺を退けなければ、お前は先に進む事は出来ない。

実力もなく前に進めば俺のように大切な何かを失うだけだ。

俺はキンジのように銃を構えたりはしない。

銃口を見ればどこに弾が飛んでくるのか分かってしまうからだ。

どこに飛んでくるのか分かってしまえば、その射線上に障害物を置くだけでいい。それで銃弾は防げる。単純な話だ。

単純な話ではあるが、普通なら銃弾を防ぐなど容易い事ではない。

しかし、イ・ウーにはそんな連中がごまんといる。いや、イ・ウーに限らずこの島国を出れば分かる事だ。

自惚れている訳ではないが、俺が——その世界への入口だツ。

——パァン！

ヒステリアモードの反射神経を使った超速の早撃ち。

一部を除いて誰も反応できない『不可視の銃弾』がキンジの胸の中央へと吸い込まれ、銃弾が防弾布に阻まれ零れ落ちる。

……どう言うつもりだ？

「なぜ避けない？」

キンジは何のアクションも起こさなかった。

動く素振りさえ見せていない。

「わごと……だよ。それぐらい、分かれ」

キンジはその口の端から血を流しながら笑みを浮かべた。

「——視^みえたぞ、『不可視^{インヴィジビレ}の銃弾』！」

確信を持った言葉に俺は少し驚く。

「兄さん。昔、一緒に見たよな？ ジョン・ウエインの西部劇映画でその技の原型を――」

キンジは『不可視^{インヴィジビレ}の銃弾』の正体を遠回しに言い当てた。

どうやらただの当てずっぽうとかではないらしい。

なるほど。この瞬間にもお前は成長したのだな。

「さすが、俺の弟だな……」

この技を使うには自動拳銃ではダメだ。早撃ちと言う曲芸を実戦レベルで使えるようにするにはどうしても速度が必要になる。

そうして俺が選んだのがこの時代遅れの回転式拳銃だ。

早撃ちと言う曲芸を実戦で使える戦技として俺は昇華させた。

この『不可視の銃弾』の正体を見破ったのは素直に賞賛しよう。

しかし……それでは足りない。

「よくこの技を見抜いた。俺が離れていたのは正解だったのかもしれない。お前はアリアを触媒に目覚めようとしている」

そして、認めたくはないがヤツもまた……キンジの成長の助けとなっている。

非常に腹立たしい事実ではあるがな。

「だが、見破っただけだ。いいか、キンジ……お前の技術は”俺が教えた物”だ。その技術の中にこの『不可視の銃弾』を防ぐ方法は無い」

例え技の正体を見破ったとしても、それに対抗する術を持ち合わせていなければ何も意味はない。

キンジから言葉による返答は無い。

口元の血を拭い、ただ——”構えた”。

それは俺と同じ無形の構え。

何をするかと思えば、

「——浅はかな」

小さく溜め息を吐くしかない。

この土壇場の中、見よう見まねで不可視インヴィジビレの銃弾を放とうと言うのか。付け焼刃どころの話ではない。

「見よう見まねで同じ技を使うつもりだろうが……キンジ、お前の銃は自動式オートマチック。不可視インヴィジビレの銃弾を放つには不適切だ」

同じ事は出来ても自動式オートマチックではコンマ数秒の遅れが生じる。

そのコンマ数秒が命取りになる。

それはあいつも分かっているだろう。だが、諦めた顔をしていない。今でも眼は力強いままだ。

勝算があるのだろう。

本来であれば俺を超えようとしているのは喜ばしい事ではある。

こんな場面でなければ、素直に褒めてやりたいところだ。

しかし俺は、

「眠れ、キンジ。兄より優れた弟など存在しない」

ここから先にお前を行かせたくはない。

砂嵐が吹き荒れる中、その願いと共に俺は1／36秒で銃口をキンジへと向け、放つ。一瞬遅れて、キンジも俺と同じように不可視の銃弾を放った。

刹那に鳴る2つの銃声。

HSSにより全てが遅く視える。

俺の放った銃弾とキンジの銃弾がぶつかり、俺の放った銃弾が”そのまま返ってくる”。

キンジも同様に自ら放った銃弾がそのまま返ってくる。

次の瞬間、キンジの銃から2発目の銃弾が放たれ、返ってきた自分の銃弾を『銃弾撃ち』で弾いた。

——バカな。

ピースメーカーの銃口に自分の弾が入り、バガンツと言う音を出して破壊する。

同時に太陽の船は完全に崩れ、俺とキンジは同時に足を滑らせ海へと墜ちる。

すぐに待機させていた潜水艇『オルクス』を浮上させ、俺はその上へといち早く降り立ち、船を高速で少し前へと進ませる。

そこへちようど落ちてきたキンジを受け止める。

どうやら失神しているようだ。

これでは、この間の風力発電の時みたいだな。

相変わらずお前は世話の焼ける弟だ。

……けれどな、キンジ。お前は確かに一瞬だが、俺を超えた。

俺はパトラから受け取った呪弾の期限を示す砂時計をキンジの上着のポケットに入れる。

そして、近くの栈橋にキンジ降ろして俺はそのままオルクスの中へと入り、潜行してその場を去った。

『第二の可能性』——俺はもう一度、お前とあの緋弾に賭けてみようと思う。

60：親娘

深いところから目覚めるような感覚。

——兄さん。

静かにそう呟いて、俺は目が覚める。

瞼まぶたを開けた瞬間に光が目差し込んできた。

突然の光に目の前がボヤける。

それから何度か瞬まばたきをしながら目を光に慣らしていく。

「——キンちゃん？」

この声は、白雪か……？

半身を起こしながら周りを見ると、見たことのある……場所だ。

確かここは武藤とよくゲームしたりする時に来た、車輛科ロジの休憩室。

俺はどうやらこの備え付けのベッドに寝ていたらしい。

そして、そのベッドの傍らにはパイプ椅子に座って俺を看病していたであろう白雪が

いる。その手には包丁とリング。

「おっと、目が覚めたんだね。キーくん」

俺が起きるのを知っていたようなタイミングで制服姿の理子が部屋に入ってきた。ぼんやりとしながらも不意に俺は窓を見たとき、外の明るさに気付く。

明るい……? まさか!?

我に返って、壁に掛かっている時計を見た瞬間に短い針は7時を示していた。

アリア……そうだ、アリアは?!

「白雪、理子——」

「言わなくても分かっているよ、キンジ。だけどアリアはここにはいない。攫さらわれたんだ」
事情の説明を求めようと思った俺に対して、理子は静かに腕を組んで俺に結果だけを伝えた。

ここにはいない。

つまりは、あのパトラとか言う女に連れて行かれたんだ。

それにアリアが撃たれたのが午後6時。

……兄さんの言った事が本当なら、アリアの命はあと1時間しかない。

今すぐにもアリアを助けに行かないといけない。

だが、居場所が分からない。

どうすればいい……!?

思わず自分の髪を掻き毟りながら俺は焦燥感が溢れてくる。

「アリアの居場所は分かっているの」

その白雪の言葉に思わず俺は顔を上げる。

「何……？」

「占ったの、私。場所は——海。それも、北海道より上の」

「白雪の言う通りだよ。あたしがアリアにこっそり忍ばせたGPSの座標だと、ウルツプ島沖の公海。そこにアリアはいる」

理子がポケットPCを片手に俺に居場所を告げる。

同時に新たな人物がまた1人、部屋へと入ってくる。

「——目が覚めたのだな、遠山」

セーラー服姿のジャンヌが松葉杖をついて、理子の後ろから現れる。

それから理子の横に立って、顔を見合わせる。

「……カナから電話があったのだ。ついてこい、遠山」

未だに片足の負傷が治っていないジャンヌに合わせてゆっくり歩き、車輛科を階下へと降りていく。

「イ・ウーでは、カナは……私と理子の主役だった。私はカナを敬愛している。色々と世

話にもなった事だしな。だからどんな事でも協力すると申し出たのだが……カナは3つの事しか喋らなかつた。1つはアリアが攫われた事、2つ目は遠山……お前にイ・ウーについて話した事とその内容。最後に、信じ難い事にお前に敗れたということ」

歩きながら告げられたジャンヌの言葉。

それは、昨日の出来事が夢じゃない事を物語っていた。

「私と理子は、明確にイ・ウーと脱離・敵対した訳ではない。下手な事を喋れば……分かるだろう？」

察してくれと言わんばかりのジャンヌの視線。

下手な事を喋れば、処刑人^{ジャック}が来ると言う事だろう。

「だから話すべき事は慎重に選ばなければならぬ。が、そう時間も残されてもいない。それにパトラについて話すくらいなら問題はないだろう」

「そうだ、そのパトラって奴は——」

「大体、想像はついているだろう？ 遠山。パトラは、"クレオパトラ"の子孫だ。

少々、古代思想にかぶれた本人は自身をクレオパトラ7世の『生まれ変わり』だと自称しているがな」

——クレオパトラ。

古代エジプトで、その美貌と知性でローマの侵略から守ったエジプトの女王。

リュパン、ジャンヌ・ダルク、ドラキュラ伯爵、ジャック・ザ・リツパーときてクレオパトラか。

もうなんでも来やがれ。

「彼女はイ・ウーの厄介者でな」

エレベーターに乗って地下2階へのボタンを押しつつ、ジャンヌは眉を寄せる。

俺、白雪、理子もエレベーターに乗る。

確か地下2階は車輛科ロのドックだったな。

それはそうと――

「厄介者?」

「パトラは、誇大妄想のケがあつてね。自身が世界を治める王で、自分は生まれながらにしての霸王フアラオだと思ひ込んでる。ジャックに肅清されてからはちよつとはおとなしくしてると思つただけだね。パトラは、『教授プロフェシオン』が死んだら自分がイ・ウーのリーダーになつて世界を征服しようと考えてる。そんな感じで、素行も色々と目に余るところがあつたからちよつと前に退学になつただよ」

理子がエレベーターの壁を背にして俺の疑問に答える。

「お、おい……世界征服つて」

「アニメや漫画の悪党みたいな妄言だつて? 普通ならそう思うだろうね。でも、そん

な事を可能に出来ると思わせる場所なんだよ。イ・ウーは……。パトラだけじゃない、他にも何人かそう言う思想の連中はいるよイ・ウーにはね。それにそれを可能とさせるだけの實力もある」

「どうやら理子は冗談で言ってる訳ではないらしい。

ジャンヌの表情も変化がないあたり……誇張表現って訳でもなさそうだな。

すぐに理子から何かを嘲るあざわるように「ふっ」とした笑い声が漏れる。

「でも、パトラがイ・ウーのリーダーになんかになればはしないけどね」

理子が小馬鹿にしたようにそう言った。

「ジャック……か？」

俺の予想した答えを口に出した時、

「そうだよ。あの人が認めない限り、『教プロフェシオン授』以外の人がリーダーになる事はないだろうからね」

理子は当然とばかりにそう返した。

エレベーターが止まり、開いた先のエレベーターホールで伏せた銀狼とベンチに体育座りをしたレキがいた。

俺を見たレキはそのまま静かに立ち、銀色の大きいアタッシユケースを持ってエレ

ベーターから出た俺へと向かってくる。

そのまま俺の目の前で止まり、

「キンジさんは、アリアさんを救出しに行くのですね」

そうレキに問われて俺は、白雪、理子、ジャンヌを見回した。

どうやら彼女達は俺の意思を確認しておきたかったらしい。

だから、アリアを助けに行く俺を案内していたんだ。

俺は……レキの問いに頷いた。

「——仲間がやられて、黙ってられるかよ」

アリアがやられたのは、俺の責任でもあるしな。

「では、これを——」

そう言っレキが俺に見えるようにアタツシケースを床に置いて開ける。

その中身は俺が強襲科時代に使っていたB装備の防弾ベスト、ベレッタ・キンジモデル、バタフライナイフにフィンガーレスグローブ。

どれも整備されて磨かれている。

どうやら、準備はあまり必要ないらしい。

これで武偵1人分の働きは出来そうだ。

あの超能力者相手にどこまで通じるか分からないけどな。

「これも、キンジさんの上着のポケットに入っていました」

そう言ってレキから渡されたのは砂時計。

球状のガラスの中で揺れ動く砂時計は、常に下に落ちるように固定されていないようだ。

これが……アリアの命のタイムリミットだろう。そう直感的に分かった。

俺の所にコレがあるという事は、やってみろ——そういう事なのか？ 兄さん。

自分を倒した俺に、託したんだろう。

「お前はいいかないのか？ レキ」

防弾ベストを装着し、フィンガーレスグローブ、予備マガジンを装備しながら問いかけた言葉にレキはフルフルと首を振る。

「行けるのは2人。脚を負傷してるジャンヌさんは当然……理子さんは、相手に手の内を知られていると言う事で辞退なされました。相手が超能力者ステルスと言う事も考慮して、白雪さんが適任かと思われまます。ご自分でも出撃を希望されていますし」

どうやら、俺のいない間に相談事は済ませていたらしい。

だが——

「『行けるのは2人』ってのは？」

「それは、すぐに分かる。遠山、準備が終わったらドックに来てくれ」

そう言つてジャンヌは次の扉の前で背を向けながら時計を見つつ、先へと進んでいった。

「それとキーくん、これ」

理子が渡してきたのは武偵高の制服。

それも真新しい夏服だ。

絶対に救出し、武偵高に連れ戻せ。

そう言う意味だろう。

服にこだわりがある理子らしい気遣いだな。

「あと、ドックに行く前にちよつと寄り道して」

最後にそう言つて理子も次の扉へと向かつていった。

寄り道してる暇はないんだが——何か話があるっぽいな。さすがの理子もそこら辺

の空気は読めるはずだし。

装備が終わつた俺は、言われた通り理子が向かつた先へと歩く。

薄暗いドックへと続く通路の曲がり角で誰かの手がこつちに来るように手招きしている。

十中八九、理子だろうが……普通に待つとく事は出来んのか。

そんな事を思いながらも俺は曲がり角を曲がる。

そこにいたのは、

「やつほ……元気そうだね」

壁に背を預けた霧だった。

だが、その様子は少しおかしい。

「どうしたんだお前？」

「気付いた？ どうしたって言っても大した事じゃないよ。ちよつと熱っぽいだけ」

笑顔でなんて事を言いながらもどこか辛そうに見える。

「だったら寝てろよ」

「見送りぐらいはと思つてね。それにしてもひどい話だよ。海に落ちたと思つて水上バイクに乗つて海に飛び込んで探してたらいつの間にか本人は栈橋に倒れてたつて言うし」

「わざわざそれを今言う必要があるか？ まあ、助けようとしてくれたのはありがたいけどな」

「本当なら……一緒に行きかけたんだけどね。ま、ちゃんと取り戻してきてよ。理子に呼んで貰つたのはそれが言いたかつただけ。頑張りなよキンジ」

そう言つて霧は静かにその場から手を軽く振つて通路の向こう側へと消えた。

ありがとよ、霧。

心の中でそう感謝しながら、俺はドックへと向かった。

◆ ◆ ◆
ドックの通路で誰もいない事を確認しながらあたしは変装を解く。

はーあ……お姉ちゃんも抜け目がないんだから。

一応、熱で寝てるって事にはなってるからわざわざ出る必要もないように思えるんだ
けどね。

◆ ◆ ◆
こう言う細かいところにも気を配るから、証拠とか矛盾があまりでないんだろうけど。

カツラを取って、軽く自分の髪を梳すく。

今頃はお姉ちゃんは既にイ・ウーかな？

しかし、アリバイ作りも楽じゃないよね。

おっと……あたしも早くドックに向かわないと怪しまれちゃう。

足早にあたしはその場をあとにした。

◆ ◆ ◆
静かな気分。

なんだろうね、この気持ちは……

◆ ◆ ◆
このイ・ウーに戻ってからは、何て言うのかな？ まるで礼拝でも受けるような、風

いだ水のような、そんな気持ち。

今までにない程に私は落ち着いてる。

それに違和感を感じる。

おかしいな……今までここにいて、そんな事は感じなかったのに。

いつも何らかの衝動が湧き上がって来るはずなんだけど。

——あまり悩んでも仕方ない。

それにお父さんから話があるらしいし。

通路を歩いていき、お父さんの——イ・ウーのリーダーの私室へと向かう。

両開きの木製の扉の前に立ち、3回ノックしたあとに、

『入りたまえ』

返事が扉の向こうから返ってくる。

そして、金色の取っ手を持って大きく開く。

「やあ、ジル君。よく来たね」

お父さんはアンティークの机の傍でステッキを持っていつものようにパイプを啜えながら立っていた。

「話があるって言うから来たんでしょ？ よく来たも何もお父さんから呼んだくせに」

言いながら私はシルクハットを投げて帽子掛けへと掛ける。

「まあ、そうだね。それよりもジル君、紅茶でもいかがかな？」

そう言ってお父さんは今淹れたであろうティーカップを掲げる。

いかがかかって言う割には、お父さんが飲んでるやつを含めて最初からティーカップが2つある訳だけど。

「頂くよ。紳士からの提案だしね」

言いながら私はソファアールに腰掛ける。

お父さんが紅茶を持ってきて、対面する形で私の向かい側のソファアールに座る。

「それで？ 話って、最後の親子の団欒だんらんとか？」

「そんなところだよ。話すのはジル君についてだけだね」

「私について……？ 私の何について話すつもりかな？」

「そうだね。例えば——」

——自分が何者か知りたくはないか？

「ふーん……自分が何者か、ね」

私はどこか他人事のように思いながらも、紅茶を飲む。

「君ならそう言う反応をすと思つたよ」

そう言いながらお父さんは推理していたとばかりに微笑む。

「じゃあ、テイク2で。今度は動揺するパターンでもする？」

「ふむ、面白そうだ。ジル君が動揺する事はこの先ないだろうからね」

「さり気なく私の人生のネタバレをしないで欲しいな」

「失礼。こう言う童心は貴重なものだよ。結局のところどうなんだい？ 自分のルーツ

について」

「そこで話を戻すの？ 分かっているでしょ、私の答えなんて」

「分かっていたとしても、君の口から聞きたいんだよ」

「まるでプロポーズの言葉みたい」

「口説いてるつもりはないんだがね」

困ったように言いながらお父さんはパイプを啜え直す。

「自分の事について興味がない訳じゃないけど、別に固執する程の事でもないしね。それに何となくだけど、いずれ分かりそうな気もするし」

「ふむふむ」

「それに私は私……何者でもない。ただ人生を楽しんでる名も無き殺人鬼だよ」

これで満足？ とばかりにお父さんに笑顔を向ける。

「なるほど、充分だよジル君。僕がやろうとした事は余計なお世話だと分かったよ」

「つまり？」

「僕は相手が知らない事を説明するのが好きでね」

私が何者か教えたかったと。

クイズの答えを他人に教えたがる少年みたいな感じかな。

「だろうね。まあ、その気持ちは私も分かるけど」

「ふふ、そうか。分かってくれるかね」

「娘だもの、分かつて当然」

「ここまでゆつくりと語ったのは、結構久しぶりになるね。

それからお父さんは、

「ところで、ジル君は恋についてはどう考えている？」

藪から棒にそう尋ねてきた。

「哲学？」

「いや、恋に興味があるかないかの話だよ」

「前にも何度かそんな話、しなかった？」

「今までで23回ほどだったかな？」

結構してるね。

私はお父さんに呆れる。

「興味はあっても、感情を知らなきゃどうしようもないでしょ？」

「確かにそうだね。だけど、君もいずれは理解するだろう」

意味深な発言。

と言うよりは、

「またネタバレ？」

「ただの予想だよ」

推理じゃなくてただの予想ね。

あらゆる事象から論理的に物事を考えるお父さんがアバウトな事を言うなんて珍しい。

もしくは――

「推理できないとか？」

私の言葉に少しだけお父さんはキョトンとした顔をする。

これまた珍しい表情をするね。

それから子供みたいに無邪気に笑って、パイプの火種を交換して火をつける。

「君は本当にあの人によく似ているよ。僕がよくほんろう翻弄された“彼女”に」

何かを懐かしむような顔をしたのは一瞬。

「さて、そろそろ時間だ。紳士たるもの時間にルーズではいけない」

すぐにいつものように振舞って、ソファーから立ち上がる。

私も同じように立ち上がって帽子掛けにあるシルクハットを取る。

いよいよ第一幕のクライマックスか。
いや、違う。序章の終わり。

本場の第一幕が始まる準備が出来てきている。

しばらく待っていると、私の隣にコートを羽織ったお父さんが立つ。

「他にも私に言う事はあるんじゃないの？」

「教えたい事は山程あるんだがね。言う事は数える程しかないんだよ」

「例えば？」

「また会おう」と「今までありがとう」

そして、別れ。

”また会おう”って言うのがどう言う意味なのかってところだけど。また”生きて会えるって意味なのか、それとも”別の形”で会うって意味なのか、私には分からない。

「Shall we dance?」
もちろん

だからこそ私は今を楽しみたい。

私に向かつて手を出して紳士的にお父さんは私を誘い、私はその手を取って応える。

ポストーク号が浮上しようとしているらしい。

僅かな揺れが部屋に伝わる。

そのまま手を繋いで私とお父さんは扉を開けて部屋を出た。

61：夢の狂宴

アンベリール号の甲板の上で白雪はアリアの無事に喜びながら抱きつく。

抱きつかれてる当の本人は、パトラを退けた時の事をまるで覚えてないらしい。何が起こったのか分からないという風にポカンとした表情をしている。

その光景を見てくすくす、と三つ編みに髪を結び直したカナが笑っている。

……まあ、色々と思うところはあるが。

アリアは助かった。

パトラは近くにある棺桶に閉じ込めて逮捕。

この件はこれで一件落着と言うやつだ。

あとは、武藤達が帰り道を用意してくれるのを根気よく待つだけだ。

俺はもう既に光を失っているバタフライナイフを見ながらため息をつく。

その時。

——ハッ。

と、カナが海の方へと振り向く。

まるでそこに何かがあるように。

俺も視線をそちらに動かしてみるが、目の前に広がるのは広い海と水平線だけだ。

しかし、カナには別の何かが見えているような雰囲気だ。

そして動揺している。

今まででカナのこんな表情は見た事がない。

「キンジ……今すぐ逃げなさい。ここから早く！」

振り向きざまに俺に掛けられた言葉。

いきなりなんだよ、カナ。

あんたがそんな風に俺の名前を叫んで、そんな青ざめた表情をするなんて……今までなかつたじゃないか！

「2人も早く、この場から逃げるのよ」

俺の腕を引いてこの甲板からカナは離れようとしている。

カナの焦りようからして、アリアも白雪も尋常じゃない事態が迫っているだろう事は分かっていいるだろう。

だけど、逃げるって言ったってここから離れる手段なんて俺達にはない。

小舟一つ持ってやしない俺達にどうやってこの船から出ればいいんだ……

そんな事も分からない程に、カナは必死になつてる。

「キンちゃん……」

次にその”異変”を悟ったのは、白雪。

自分の体を抱きしめるようにしてその場に座り込み、震えている。

「何かが……くる……怖い」

俺も段々と異変に気付いた。

おかし……

——海が、おかしい。

さつきまでこの船の周りには今までテレビでも見た事がない程のクジラの群れがいた。

それが一匹もない。

それから起こったのは地震……いや、振動だ。

船どころか、海が震えて——揺れているッ!?

「どうして、ここに……?!」

足を止めたカナが振り返りながら眩き、冷や汗を流しながら舳先の向こう側に広がる海を見ている。

「キングジ、あそこー!」

こう言う局面で勇敢さを発揮するアリアが舳先へと立ち、海を指さす。

俺もカナの腕を振り払い、アリアの傍らへと急ぐ。

アリアの指先。アンベリール号の船首から数百メートル先の海が——持ち上がった
いる。

——そんな——バカな。

ザアアアアアアアアアアアアアアアアツ!!

豪快な水音を響かせて、大きな水飛沫しぶきが俺達に襲いかかる。

クジラ——じゃない。

それよりも遙かにでかい。

300メートルはありそうな何かが浮かび上がり、滝のように海水を落としている。

浮上してきた時に起こった波浪がアンベリール号をボートのように揺れる。

浮かび上がってきたモノが何かは分からない。

だが、間違いなく“人工物”だ。

それが分かったのは、幅が2メートルはあるであろう『伊U』の2文字が悠々と目の
前を横切ったからだ。

——『伊U』。

ヒステリアモードの頭が、瞬時に閃光のごとくその意味を理解する。

それは歴史の教科書の副読本にもあった。

——『伊』、それは旧日本帝国海軍で使われた潜水艦を示す暗号。

——『U』、それはドイツで潜水艦を示すコードネーム。

『伊U』……つまりはこれが秘密結社『イ・ウ』の正体だったんだ！

そして、その船体は俺が見た事のある造型だった。

武藤みたいな乗り物オタクじゃないが、それでも知っている。

その武藤達が屋内プールで動かしていた潜水艦の模型——

「……ポストーク号」

それだった。

「知って、しまったのね。そう、これはかつてポストーク号と呼ばれた戦略ミサイル搭載型・原子力潜水艦。出航直後に行方不明となり沈んだとされているけれど、違う。ポストーク号は沈んだのではなく”盗まれた”。世界一の頭脳を持つ『教授』プロフェッサーによつて……！」

カナが立ち尽くしながら言った言葉は、俺の答えが間違いでなかった事を証明した。

ターンを終えた原潜が真正面で正対するように止まり、その艦橋に1人の男性が見えたところで——

カナが立ち上がって叫ぶ。

『教授』プロフェッサー……やめて下さい！ この子達と、戦わないで！」

俺達を護るように前へと出てカナが立ちあはだかる。

ビシュ!

何の前触れもなく、カナが殴られたように跳ねる。

三つ編みを揺らして倒れるカナを反射的に受け止めた瞬間に、遠雷のような銃声が響く。

撃たれた……?!

その証拠に受け止めた俺の手に血の感触がする。

ウソだ……ウソだろ!?

「カナ!!」

叫びながらカナの体を見ると、胸元から血が滲んでいる。

”防弾制服の上から撃たれている”紛れもない事実だった。

あの男は動く素振りすら見せていなかったのに、カナを撃ち抜いた。

——『不可視インヴィジブルの銃弾』——兄さんの技を、あいつは狙撃銃でやったんだ!

カナを覆い隠すように抱いた俺がその事に驚愕し顔をあげると、その男が……見えて

……

「……!!」

あれは——

「あ、あなたは……!」

この場で誰よりも驚愕しているのはアリアだろう。

その男は、アリアの持っているモノクロ写真の人物。

驚鼻わしぼなに、角張った顎。

右手にパイプと左手にステッキを持った彼は、まさに紳士と言うべき風貌。

写真のようにハンチング帽はかぶってはいないが、それでも他人だとか他人の空似だ

とかそう言うのを疑う余地はない。

イ・ウーのリーダーである『教授プロフェッソ』の正体。

アリアがその正体を掠れた声で、呼ぶ。

「……曾ひい、おじいさま……!?!」

そう、アリアの曾祖父。

”シャーロック・ホームズ”だったのだ。

誰が想像できる……こんな展開に!

心も頭もついていける訳がない!

そのシャーロック・ホームズの隣にまた人影。

そいつはタキシード姿にシルクハットをかぶり、黒い髪をした英国人男性がシャー

ロックと同じようにステッキを持って立っていた。

それはランドマークタワーで出会った、あの時と同じ服装。

ジャック——!

シャーロック・ホームズ ジャック・ザ・リツパー
世界的な探偵と世界的な犯罪者。

その2人が俺達の目の前に現れた。

不可解にも本来なら相容れない立場の2人が今は仲良く肩を並べている。

映画なら夢の共演として売れるだろうが……こつちとしては最悪のシナリオだ。

「カナ！ カナ!!」

俺は必死に呼び掛けるが、俺の腕の中で力が失われていくのが分かる。

認めたくない。

認めたくないが……クソ。

カナは心臓を撃ち抜かれている。

武偵高の制服はライフル弾でも防ぐが、それが撃ち抜かれているとなると使われたのは装甲貫通弾。
アー・マー・ピアス。

それも理論上作成が可能で国際的に開発が禁じられているA——TNK弾に違いない。
アンチ

「キンジ……これを——」

ヒステリアモードが解けたのか、男声でカナ——いや、兄さんが鋭い目つきで背中に隠していたのものを俺に渡してくる。

それはパトラが隠していたであろうアリアの白と黒のガバメント、そしてその弾倉
マガジン

だ。

銃の持ち主を見ると、アリアは舳先で立ち尽くしている。

「アリア伏せろ！ 俺達は撃たれてるんだぞ！」

カナを抱えたまま叫び、アリアの腕を引っ張るが彼女はペタンと俺に引っ張られるが
ままその場に座り込んだ。

視線の焦点は定まらず、ただ驚愕に顔を染めて空虚にただシャーロック達を見ている
だけだ。

完全に放心状態。

それも当たり前だ。なにせ、俺の兄を撃つたのが自分が敬愛し、いつも肌身離さず
持つてる写真の人物——シャーロック・ホームズなんだからな。

おまけにその敬愛する自分の曾祖父の隣には横浜のランドマークタワーで出会った
殺人鬼がいる。

俺は船の落下防止柵を遮蔽物しやへいぶつにしながら、アリアのホルスターにガバメントをねじ込
む。

それから海に浮上してる”それ”を睨みつける。

イ・ウー。

無法者の超人を作り出す育成機関。

アリアの母親に冤罪を着せた無法者の組織。

そいつが俺達の目の前に現れた。

どこの国も手出しが出来ない訳だ。

移動するアジトなんて誰が考えつく。

それも原子力潜水艦だぞ。

4月に起きたハイジャック事件で不可解だった点が俺の脳裏に浮かび上がる。

あの時、俺達が乗っていた飛行機は”どこからともなく”飛んできた対空ミサイルによつてエンジンが破壊された。

あれは海にいたイ・ウーから放たれたものだったんだ！

「……………」

海の中から何かが——あの白い航跡は、魚雷!?

俺がそれを捉えた時にはもう遅かった。

「……………えっ……………」

アリアがまたしても信じられないと言った声を上げた時には、アンベリール号の船底から激震と爆音が響き、一瞬だけ持ち上がった。

俺達のいる甲板に着弾した時に上がった水柱の飛沫が降り注ぐ。

「きゃあああ!!」

背後で響く白雪の悲鳴。

「白雪！」

名前を叫びながら俺がそちらの方へ向くと、白雪はパトラの入ってる黄金柩ひつにしがみつきの姿勢を保っていた。

「キンちゃん、今のは……!?!」

「一瞬しか見えなかつたが恐らく、マーク60対艦魚雷マークシックスステイだ。イ・ウーが撃ちやがつた！」
パトラが元々自沈させようとしていたから船が沈むのは時間の問題だつたが……今
ので完全に止めを刺された……

船底から黒煙が出て、船体自体も傾き始めている。

沈むまでの猶予ゆうよはそんなに残されてはいない。

俺は未だに続いているヒステリアモードの頭で船の構造を思い出す。

「白雪、船尾側に救命ボートがあるはずだ！　すぐにそれを下ろせ！」

そのまま俺が命令を出すと、白雪は頷いて駆け出す。

白雪が離れると同時にパトラの入っていた柩の蓋が勢いよく蹴り開けられ、パトラが飛び出てきた。

「キンイチ——!!」

おかつぱ頭を揺らして彼女は、ビキニみたいな下着姿でこちらへと駆けてくる。

「——おつ、おい！」

「ああ、キンイチ！……そんな」

警戒して拳銃を抜こうとしたが、そんな俺を無視してパトラは俺を押しつけ、兄さんの傷に触れる。

それから銃創じゅうせうに両手を当てるとその両手が青白く光り始める。

よく分からないが、なにやら超能力的な治療をしているようだ。

ジャンヌと戦った時に白雪がアリアを治療してた時と同じような感じではある、が、ピラミッドが崩れ無限魔力を失ったパトラの治療は芳かんばしくないようだ。

その顔には俺達と戦った時のような余裕そうな表情はない。

——どうやら、パトラを再び拘束してる場合ではないみたいだな。

イ・ウーの後部の艦橋に立っている2人が甲板へと降り立ち、全長300メートルはある原子力潜水艦の上を歩いてくる。

（あいつらが……来る……！）

1世紀前のイギリスの英雄——シャーロック・ホームズ。同じく1世紀前にイギリスの殺人鬼で未だに色々と謎に包まれている殺人鬼——ジャック・ザ・リップパー。

2人は世界を股にかけるどころか、時空を股にかけてきたような感じだけ。

ついに2人がイ・ウーの船首へと到着したようだが……イ・ウーとアンベリール号の間は勿論、海だ。

しかもアンベリール号の舳先は火災を起こしている。

どうやって渡るつもりだ？

そんな俺の疑問に答えるように、シャーロックは海へと踏み出す。ジャックは……動いていない。

彼が踏み出すと海から氷がせり上がる。

まるで映画の演出のように彼が踏み出したところから氷の橋が出来上がっていく。

瞬間、俺達の周りにちらりと映る雪……じゃない。微細な氷——ダイヤモンドダストだ。

それはジャンヌが見せた魔術の水。

彼が冷気の煙と銀氷の渦を身に纏うと、次に黄金に輝く砂の階段が氷の橋からアンベリール号の舳先へと伸びていく。

それを見た瞬間に、俺は瞬時に理解する。

ジャンヌはイ・ウーを天賦の才を教え合い、高め合う場所だと。

際限のない能力の向上、共有。

ならばその能力を全て兼ね備えた完成形が存在する筈だ。

そいつが一番強いに決まっている。最強の存在として畏怖いふされ、無法者を束ねる。

それがイ・ウーのリーダー——シャーロック・ホームズなんだ——!

砂の階段を上りきったシャーロックから銀氷の風が吹き荒れ、炎と煙のカーテンを押し退ける。

そして、そのまま触先へと降り立った。

「もう逢える頃だと」推理していたよ」

何気ない第一声。

なのに俺の全細胞が硬直する。

理解したのは格の違い。

これは……ジャックの時と同じだ。

実力が違いすぎる。

そして、ジャックと違うのはカリスマとでも言うのだろうか……

この男の前だとひれ伏してしまいそうな、そんな……格の違いを、理解してしまう。

「——卓越した推理は、予知へと近付いていく。何事もそうだ。卓越した何かは、別の事象へと変化していく。僕の場合は予知に近い推理という事で『条理予知』と呼んでいるがね。つまりは、僕はこれを全て予め知あらかじっていたのだ。だからカナ……いや、遠山 金一君。キミの胸の内も僕には推理できていたよ」

試験の解答でもするような態度でシャーロックは、瀕死の兄さんにそう告げる。

聞こえない声で『そうかよ』と言ってから、兄さんは喀血かっけつした。

「さて、君は僕の事をよく知っている事だろう。これは決して傲慢ではない事を理解して欲しい。僕という存在はあらゆる資料、教本、映画などで取り上げられているからね。だが、紳士として自己紹介はしなければならない」

回りくどい言い方をしたシャーロックは一拍おいてから――

「初めまして。僕は、シャーロック・ホームズだ」

胸に片手を当て、紳士的にお辞儀をしながら名乗った。

ああ、そうだろうな。

今更になって偽物とかそっくりさんとかそんなチャチなモノじゃないだろう。

これは本物だ。

ヒステリアモードの直感で、そう分かる。

「それと、もう一人紹介しなければならぬ人物がいてね。君達は一度会っている事だろう」

そう言った瞬間にさつきまでイ・ウーの甲板にいたジャックがシャーロックの背後から飛び出し、舳先へと舞い降りた。

「お目にかかるのは二度目だね。久しぶり、と言うべきかな？」

柔らかな笑みを浮かべるジャック。

俺としてはあまり会いたくなかったんだがな。

「さて、色々疑問に感じてもあるだろうが……まずは——アリア君」

呆然としていたアリアが自分の名前を呼ばれて背筋がビクツと震える。

そして、その視線が交差する。

血族同士の邂逅。

今、俺の目の前ではアリアとシャーロックが言葉のない意思疎通をしているようだ。

それは俺と兄さんのように言葉にしなくても分かる何かがあるような感じだ。

「時代は移ろうものだが、君はいつまでも同じだ。ホームズ家の淑女に伝わる髪型をきちんと守ってくれているんだね。それは初め、僕が君の曾お婆さんに命じたものなのだ。いつか君が現れることを推理していたからね」

ツインテールを見たシャーロックがそう語りかけ、何の警戒もなく近付いてくる。

アリアに近付けてはいけない。

俺の直感がそう告げる。

ベレッタの銃口が俺の直感に従い、本能として動くが——

「その銃口を向けた瞬間、敵対行為と見なすがよろしいか？」

ジャックの冷たい視線と言葉に金縛りに遭ったかのように腕が硬直する。

この銃口を向けた瞬間に五体をバラバラにされる死のヴィジョンが、容易に想像出来てしまう。

なんだ、これは……

同じ存在感を持つヤツが2人。

これが、本物の偉人——子孫じやないオリジナルつてヤツ、なのか？

「アリア君。君は僕が待ち続けた才女だ。美しく、強く、天与の才を与えられた少女——それが君だ。それなのに、ホームズ家の落ちこぼれ、欠陥品と呼ばれ続け、自分の存在を認めて貰えない日々はさぞかし辛いものだっただろう。だが、僕は君を認めよう。僕は君を認める。後継者」として迎えに来たんだ」

「……あ」

シャーロックの言葉に反応して小さく漏らしたアリアの声。

それは、アリアの中で何かが入り込んで膨らみ……同時に今の状況を認識し始めたよ
うな感じだ。

抗うような素振りは一切ない。

「おいでアリアくん。君の都合が良ければだが……いや、都合が悪くても、おいで。そうすれば君の母親は助かる。もう、君は”独りで戦わなくていいんだ”」

その瞬間、アリアの赤紫色カメリアの瞳が見開かれる。

今のでアリアの心は完全にシャーロックへと傾いてしまった……！

シャーロック言葉がまるで甘い蜜みたいにアリアの中で広がっていったんだと、俺でも分かる。

「さて、行こう。積もる話も色々あるだろうからね。何より、機会を逃して後悔する事はままあることだ」

まるでダンスに誘うような手取りでアリアを引き寄せ、シャーロックは彼女を抱え込む。

「あつ……」

そのままお姫様抱っこへと持って行き、小さく声を漏らすアリアだが。

何も抵抗しない。

いや、この流れを受け入れている。

ただなされるがまま……

「さあ、行こう。」君のイ・ウーだ」

そう言つてシャーロックがぐるりとこちらに背を向け、アリアにイ・ウーを見せつけるようにする。

もう触先の火災はダイヤモンドダストによって消火されており、イ・ウーの威容が見える。

「——キンジ……」

困惑しているような表情をこちらに向けてアリアは俺の名を呼ぶ。

だが、今の状況を拒絶する意思はない。

シャーロックの言われるがままになろうとしている。

「アリア君、君たちはまだ学生だったね。ならばこれから『復習』の時間と行こう」

その言葉とともにシャーロックはまるでちよつとした段差から降りるような気安さで、アンベリール号の舳先から飛び降りた。

それに続いてジャックもシルクハットを片手で抑えて、飛び降りる。

そして、一瞬だがシャーロックの長いコートが……ムササビのように広がった。

そのまま滑空して流水群へと降り立つ。

ジャックも同じように外套がいでうが広がって、難なく流水の上へ降り立った。

あれは……理子のように髪を動かすのと同じタイプの超能力……！

ヤツらはあれが使えるのか。

いや、それよりも……アリアが連れ去られて行く。

この間のパトラみたいに攫さらわれたのとは訳が違う。

アリアは逃げる事が出来た筈だ。

たとえそれが叶わなくても、藻掻く事は出来る。

何かが内側から、こみ上げる。

”通常のヒステリアモードとは違う” 何かが。

◆ ◆ ◆
 劈^{つんぎ}く悲痛なキンジの叫び。

無力な自分を嘆いているようなそんな慟^{どう}哭。

普通なら元パートナーの現状に良心が痛むんだらうけど、生憎と私にそんな感傷的な感情は持ち合わせていない。

それと、こんなところで指を啜^{すす}えて眺^{なが}めている程……大人しい” 2人” じゃないだらうからね。

私はイ・ウーの黒い甲板の上で立ち止まる。

「お先にどうぞ。私は少しばかり、踊りたくなくなりました」

そう私が言うのと、

「踊る相手は1人だけだよ。3人も一緒には踊れないからね」

お父さんにはこやかにこちらへと少し顔を向けてそう言うのと、顔を正面へと向けて再び歩み始める。

1人……1人ねえ。

だったらどちらと踊るかは決まってる。

振り返れば、漆黒のアンダーウェアに身を包んだカナ……いや、もう女装は解けてるから金一か。

流水からこのイ・ウーの甲板へ移り、自分たちに向かつてくる金一の背後にはその背中を追うようにしてキンジもいる。

ああ、まるで1年前のキンジを見てるみたい。

兄に憧れて、その背中を追ってたキンジ。

がむしやらに、一族の誇りを持って……正義の味方なんて言う単純なモノに憧れてひた走ってた。

それを私が奪って……あの時は——

良かったなあ♪

うん、何度思い返しても自然に頬が釣り上がる。

もう一度、あの時と同じ事をしてみたいと言う欲求が私の中で生まれる。

今度は目の前で。

けれども、今はその時じゃない。

愉しみは後に取っておくもの。

まだ序章が終わりそうなところなのに、そんなメイスイベントを最初に持つてきたらそれこそ味気のない物語になっちゃう。

「——シャーロック！」

私の事よりもお父さんを優先か。

まあ、実際に神崎さんを連れ去つてるのお父さんだし。

そのお父さんに向かつて不可視の銃弾を叫びながら放つ、金一。

だけれど、邪魔はさせない。

その銃弾の正面に立ち、私のナイフが瞬時に両断する。

ギンと言う金属音と火花。

相手が不可視の銃弾を放つと言うのなら、私は不可視の斬撃で迎え撃てばいいだけ。

ただまあ、さすがに斬撃で全部の銃弾を防ぐのは……出来ない事もないんだけど……

お披露目するには早いかなー。

もうじき明らかになるとは言え、自分からネタバレはしたくない。

だったら簡単な話、自分に有利な状況にすればいい。

ちよつと時間稼ぎと行こうかな。

発煙弾を足元に2個転がしてお父さんと私が見えないようにする。

スモークグレネード

スチールス

を
する。

発煙弾の煙がなくなる頃に甲板は濃霧に包まれた。

下手をすれば海へと落ちそうだね。

それぐらいに視界が悪い。

彼らの目的は私の後ろにあるだろう艦橋。それにこの潜水艦の甲板は割と狭い。簡単に言えばほぼ一本道だ。

つまり、私を超えない限りはお父さんに……アリアに辿り着く事はできない。 ” 2人一緒 ” にはね。

目の前の濃霧の壁に映る黒いシルエット、そこから飛び出したのは——金一。私をその視界に捉えると同時にマズルフラツシユを瞬かせ、銃弾が私に迫る。数は4。

銃弾は見事、私を貫通した。

それから ” 偽物の私 ” は水となって消える。

その瞬間にすぐに私は金一の脇の霧の中から飛び掛かる。

私のナイフの閃光が差し迫り、それを金一は同じようにナイフで対応する。

これで不可視インヴィジブルの銃弾は封じた。

このまま接近戦に持ち込めば問題ない。

何度か斬り結びながらステッキに仕込まれた刃を頭あたまにさせる。

そのまま仕込みステッキをフエンシングのようにして突きを繰り出す。それをナイフで受け止めた金一はそのまま鏢は競り合いへと持ち込んだ。

「今だキンジ！ そのまま艦橋へと走れ！」

金一の叫びと共に、私の背後で霧を巻き上げて駆け抜ける一陣の風と人物。見なくても分かる。

まあ、狙い通りに上手く行つた。

いや……そう来ると確信してたよ。

「見逃すのか？」

「ええ、彼は先に進んで貰わないといけませんのでね」

私がそう言うと、金一は眉を寄せる。

「これも筋書き通りか……？」

「さてどうでしょう。生憎と台本は用意されていない舞台ですので」

私ののらりくらりとした回答に金一は何も反応を示さない。

いい加減に慣れてきたか、さすがに。

一度大きく刃を押し上げ、お互いに少し距離を取る。

死に体とは言えあつちはヒステリアモード、キンジは既にイ・ウーの中。そして、周りは濃霧で人の目を気にする必要はない。

この状況——

「そちらはどうしますか？ 今なら遠慮なく私を葬れますよ」

「もちろん、そのつもりだ」

そう言つて金一は殺意をこちらに向ける。

迷いはもう無いみたいだね。

「それは結構。ただ、私としては死ぬつもりは全くありませんがね」

「刺し違えてでも、お前はここで討たせて貰う」

「ほう……ならお別れは済ませてきたんですね」

言いながら私は仕込みステッキを甲板に突き刺し、シルクハットをその柄に掛ける。

そのまま素早く後ろへと跳び、霧の中へと身を隠す。

足音を殺し、静かに移動する。

相手もその場に棒立ちしたままでは無いだろう。

お互いに視界では見えない。

けれど、目で見つける必要はない。音で見つける。

心臓の鼓動、息遣い。

何でもいい。

もうこの戦い方もそろそろ対策されるだろうね。

潮風が霧の中を吹き抜ける。

流れていく霧だけど……流れがおかしいところがある。

何かの障害物に当たって、霧が左右に分かれている。

向こうは気付いてない。

足を静かに踏み込み、地面を滑るように音を立てずにその方向へ駆ける。

ナイフを投げて牽制し、軽く斜めから入り込むようにして見えてきた人影にナイフを構えて突つ込む。

見えてきた姿は私のさつき投げたモノを手にとって両手にナイフを持った金一の姿。不意打ちと言うにはお粗末だけど……少なくとも間合いには入れた。

逆手に持ったナイフを横薙ぎに振り抜く。

それを金一は難なく防ぎ、もう片方のナイフで反撃してきた。

教範にあるような見事な受け流しと反撃。

それを右足を軸足に私は左回りにクルリと回って回避しながら左の袖口からナイフを抜き出す。

そのまま逆手で突き立てるように金一の横腹へと薙ぐ。

一度、金一は大きく下がりがりその薙ぎを躲す。

私はすぐさま、距離を取られないように追撃する。

さあ、ここからテンポを上げて踊ろう！

62: End of prologue

アリアと一悶着あつたが……何とか、アリアを説得する事が出来た。

その後、素直になったアリアが話すにはシャーロックはアリアに聖堂に残るように言つた後、聖堂の奥の扉へと入つていったらしい。

アリアが示すその扉を開けると、扉の先にはさらに重厚な鋼鉄の隔壁があつた。

そのまま歩みを進めて行くと、隔壁の前まで来たところでその隔壁が上下・斜め・左右に自動ドアのように開かれていく。

まるでこちらに來いと言わんばかりに目の前に道が開けた。

隔壁の向こうに続く道へと足を踏み入れると、床は排水口のような格子組みグレイチンゲの床へと変わった。あちこちで電子盤のアクセスランプが光り、ここは何かの機関部である事を臭わせる。

さらに先には放射能を示すハザードシンボルが描かれた隔壁があり、その隔壁が何の警戒もなく開いていく。

警戒しながらアリアと2人……さらに隔壁を抜けた先には――

(ウソだろ……！)

大きい支柱が8本見えたかと思えば、それは——大陸^I弾道^Cミサイ^Bル^M。

こんなの弾頭の種類によっては大国1つを壊滅させる事も可能だぞ……！

なるほど、イ・ウーを牛耳れば確かに世界征服なんて可能つて言う話が現実味を帯びてきやがった。

この光景と起こりうる最悪のケースのスケールの違いに背筋が凍りつく。

「なんでなの……」

隣にいるアリアも同様に驚愕しているようだが、目の前の光景とは別の事に驚いてい
るようだった。

「キンジ、あたし……ここを見た事がある」

いきなり訳の分からない事を言い始めたアリアだが、精神が錯乱してる訳でもなさそ
うだ。

視線がきちんと定まっている。

ただ、ただ、驚いてるだけだ。

「アリア、それは既視感^{デジャヴ}つてヤツじゃないのか？」

「違うわ……確かにあたしはこの部屋を知ってる……こんな事を言うのもおかしいけ
ど、この部屋であんたと会った事がある……！」

「そんな筈はない。俺は、現にこの場所を知らないぞ」

何せ潜水艦自体に乗った事なんてこれが初めてだ。

俺が返答したと同時に、どこからともなく音楽が流れてくる。

これは……歌劇オペラか？

音量が上がっていきモーツアルトの『魔笛』だと分かる。

「音楽の中には和やかな調和と甘く美しい陶醉がある」

唐突に語られた哲学的な言葉と同時に世界最高・最強の名探偵様が I C B M の影から蓄音機を持って現れる。

「それは僕達が身を置く、争い……混沌とは対照的なものだ。このレコードが終わる頃には、戦いは終わりを迎えるだろう」

アンプに繋がれた蓄音機を足元に置きながら、シャーロックは静かに語る。

それから鋼の床を踏み鳴らしながら数歩前に出て、愉快そうに微笑む。

「はは、もうすぐクライマックス……解決編と言う顔だね。だが、残念ながらまだまだ序の口。この音楽と同じように僕は序曲——『序曲プレリュードの終止線ド・ファイネ』に過ぎないんだ。何かの終わりには新しい何かの始まりだ。簡単に言えば、君たちの物語はこれから始まる」

「始まり……？」

「そう、始まりだよキンジ君。この言葉の意味はじきに分かるだろう。さて、それよりも

——金一君が仕掛けようとした同フオーリング・アウト士討ちの罫のお味はどうだったかな？」

その言葉に俺とアリアは横目を合わせる。

なるほど……何もかも知ってたって訳だ。

しかも、さっきの俺とアリアの銃撃戦を仕掛けたのはシャーロックだったらしい。

だとしても、何が狙いだ。

銃弾を減らすのが目的なら、見事にしてやられた訳だが……

アリアは数発、俺の方は弾倉が2つ程度しか残ってない。

今の俺ならば弾倉2つあれば並の犯罪者集団を制圧できるだろうが、相手は常人じゃない。

弾倉2つ、ましてや銃が通じるかも怪しそうな男だ。

「曾お祖父様——」

アリアは気丈に一步、シャーロックの方へと踏み出した。

「私は貴方の迷惑通り、この銃で貴方に立ち向かうであろうパートナーを追い返そうとしました。ですが、止める事は出来ませんでした」

胸に手を当て明瞭にアリアは告げる。

「すみません、曾お祖父様。彼は……私がようやく見つけたパートナーなんです。曾お祖父様の事は敬愛しています。けれど彼に協力したい……でも、それはお祖父様と敵対

する事になります。お許し下さい」

「アリア君。君は今、僕と言う存在を心の中で乗り越えたんだ。君は尊敬する僕よりも唯一無二のパートナーの方へと天秤が傾いた。まあ、その重さは僅差のようだがね。敵対すると言つても……躊躇う部分はあるだろう」

「はい。貴方に”命じられない限り”、私はこの銃を向ける事は出来ません」

「いいんだよ、アリア君。それでいいんだ。君は一人の特別な男性を理由に血の繋がった僕と敵対する事さえ決意したんだ。それは一種の成長だと、僕は思うがね」

そう言いながらシャーロックはマッチでパイプに火を点けた。

「子供とは言え、君達は女と男だ。女心は僕の不得意な分野ではあるが、敢えて言うならば……女とは男にどれほど酷い事をされても憎みきれものじゃない。極端な話だが『雨降つて地固まる』と言うやつだね。君達は戦いを経て、より深く結び付いている事だろう」

何やら俺とアリアの不得意分野について語り始めたシャーロックだが、1つだけ分かっていた事がある。

「何もかもお前の”推理”通りって事かよ」

「はは、こんなものは推理の”初歩”だよ、君」

俺の言葉に愉快そうに答えるシャーロック。

「ですが、曾お祖父様。色々と分からない事があります。こんなのを尋ねるのは場違いかもしれません。答えて頂けませんか？」

「勿論だよ。ただ、質問は1つだけだ。あれこれと答えては君達のためにならない」

「アリアは何を尋ねるつもりかは知らないが、シャーロックは快く答えるつもりだよ。だ。」

「なぜ、ジャックなんかと一緒にいるんですか？」

その言葉にシャーロックは、フムと言った感じにパイプを啜え直す。

アリアからしてみれば一番にシヨックな出来事ではあるだろう。

自分の敬愛する曾祖父さんが、ホームズ家と因縁のある名前のヤツと肩を仲良く並べたんだからな。

「そうだね。少しばかり長くなりそうだから、無音の間奏と言う事にしておこう。本来なら曲を途中で切るなどないのだが」

そう言つてシャーロックは蓄音機のレコーダーから針を外す。

「まず最初に言つておくとジャック君は僕が拾つた子の1人でね。思い掛けない拾いモノだったよ」

昔話を語るかのような、見た目30代の若さの割に年を感じさせるような哀愁をシャーロックは纏わせている。

「彼女の生い立ちに関しては僕としても推理できなくてね。だけど、彼女の正体は最近になってようやく推理出来た……が、それは関係ない話だね。質問に端的に答えるなら僕が拾い、彼女を「育てた」から一緒にいる。と、この解答ではアリア君……納得してくれないだろうか？」

「育てた……？」

「その通りだよ、アリア君。僕は彼女を娘のように思っている。彼女のおかげで僕は今日まで生きられた……それに、色々と助かってもらいたよ」

何か信じられないフレーズを聞いた気がする。

ジャックを……育てた？

「お、おい！ ちょっと待てよ！ 育てたって……」

「そのままの通りだよキンジ君。本来ならホームズ家として恥ずべき事なのだろうけどね。だけど、僕は良かったと思っっている」

淡々と語るシャーロックは心なしか子供を自慢する親のような顔をしている気がする。

「こう言うのも何だがね、僕としては彼女とは仲良くして欲しいと心から望んでいる。娘とひ孫が争う姿を見るのは忍びない」

と、いくらシャーロックを敬愛しているアリアでも承服しかねるような内容を言う。

「まあ、僕も無理にとは言わないがね。これからジャック君は君の姉弟子にあたる事になるだろう。」そう言う意味でも、僕としては仲良くしてもらいたいのだが……」

「私には……分かりません。何故そこまで……」

消え入りそうな声でアリアは呟く。

確かに不可解だ。

ジャックに拘こたわつてる様にしか思えない言動だ。

「最初は僕もよく分からなかったが、正体を推理出来た時に合点がいったよ。まあ、それは……今後の楽しみとしよう」

そう言うってシャーロックは蓄音機の針を戻し、再び音楽を流し始めた。

「君達の疑問は全て時間が解決してくれる。焦る事はない、『果報は寝て待て』と言うだろう?」

「だったらこれを見てもお前は焦らないのか?」

そう言うって俺は事前の打ち合わせ通りにアリアの側頭部に銃口を向けて、シャーロックに問いかける。

その光景を見て、シャーロックは黙ってパイプの煙を蒸ふかす。

「君、それは人質のつもりかい?」

俺は銃口を向けたままアリアの背後へと回る。

「兄さんから聞いたんだ。シャーロック、お前の目当てはアリアなんだろう？ それに、イ・ウーはアリアがいなければ仲間割れを起こすってな」

「でも、君は撃たない」

「言つとくが、俺はヤケクソだぜ」

喋りながらアリアの影からシャーロックの見ている方向を盗み見る。

「どうやら、ちゃんとこつちを向いているようだ。」

「こんな子供騙しな作戦で目の前の偉人を動じさせる事は無理だろう。」

だが……目的はそこじゃない。こんな三文芝居をやるのは、こつちにただ単に注目させるためだけだ。

「シャーロック、お前に贈り物がある」

俺はポケットの中を探り、あるモノを取り出し、

「——兄さんからのな！」

指で弾いた。

次の瞬間、空中でアリアとシャーロックの間で弾ける閃光。

——閃光拳銃弾。
フラッシュグレネード

兄さんが俺に託してくれた武偵弾の1つだ。

これは銃で撃たなくてもこのように、従来のフラッシュ・グレネードと同じように手

で炸裂させる事ができる。

相手は最強の名探偵。

正面からやったところで勝ち目はない。だからこそ、こうして無力化するしかない。

「い、今よ……キンジ！」

その言葉に顔を覆い隠していた腕を自分の腕をどけると、アリアは俺を見ていた。が、どこか違う遠いところを見ている様子だった。

まさか、こいつ——！

「お前、目を隠さなかったのか!？」

「あんたはあたしの背後であたしまで隠したら曾お祖父様にバレるでしょ！」

そう言うアリアの目は焦点が合わないながらも俺に向かって叫ぶ。

今の閃光で、一時的にだが……アリアは失明している。

「あたしは見たわ、曾お祖父様が閃光を直視したのを！ だから、早く！」

俺はすぐさまアリアから拝借した超値用の手錠を手に取り、駆けた。

が、すぐに足を止めた。

いや……止めざるを得なかった。

何故ならそこには、平然と立つシャーロックの姿があったからだ。

「うん、今のは知恵を回した方だね。しかし、推理不足だよ」

悠然語るシャーロック。

今の閃光を、一体どう言う風に回避したって言うんだ……

いや、そもそも効いていた様子さえない。

「——そもそも“盲目”なのだよ、今の僕はね」

そう言う、事か——！

見えないなら、光を直視しても意味ないに決まってる。

「60年ほど前に毒殺されかけて以来、僕の目から光は消えた。これはイ・ウーのメンバーのほとんどが知りえない事実だけど、僕は見えるように振舞っていた。最初の頃は推理に頼っていたがね。人間、五感の1つが失われれば残りの五感がそれを補おうと発達するものらしい。おかげで僕の嗅覚や触覚、聴覚はそれなりに発達してね。今では空気の流れや音の反射で場所が分かるようになった。今こうして君が動揺して心拍数が上がっているのも、手に取るように分かる」

クソ……無駄だったって言うのかよ！

兄さんが託してくれた弾丸も、アリアが身を呈したこの作戦も、何もかも！

瞬間、俺の中で何かがキレた。

ああ、そうかよ……お前みたいな強者に小細工は通用しないっていう訳だ。

だったら簡単な話、正面からやるしかないだろ。

「……キンジ、逃げなさい！ 曾お祖父様はあたしから説得を——！」

「そう言う訳にもいかねえだろ……！ 下がれ、アリア」

俺の獯猛な言葉に肩を震わせるアリア。

自分の中からヒステリア・ベルセの血が沸き立つ。

普段の俺からは考えられない程に、今の俺は血気に逸はつっている。

「シャーロック、ここで決めるか」

「何をだい？」

「探偵と武偵、どっちが強いのか」

ベレッタを片手に俺はアリアを護るように仁王立ちし、シャーロックの前に立ちはだかる。

「キンジ君、君は17年平和な島国で暮らしてきた少年に過ぎない。対して僕は150年、世界中の凶悪で強靱な怪人を相手にしてきた。そんな君が僕に決闘を挑もうと言うのかね？」

「ああ、そりゃ高名な名探偵様から見れば俺は未熟者だろうさ。Eランクで、留年の危機が迫ってる落ちこぼれだしな。けどな……パートナーを置いて自分1人助かろうって程、小心者でもないし、腐っちゃいねえつもりだぜ」

俺の精一杯の啖呵にシャーロックは満足気な表情をする。

「そんなにもアリア君が大事なんだね。いやはや、大変結構な事だよ。けれどもね——」
 コートを脱ぎながら彼は、

「しかし、僕は強者として警告したつもりなんだがね。君はそれを受け入れなかった、今歩もうとしている道がどんなに困難なものか君は分かっているのかね？」

「知った事じゃねえよ、そんな事は……ただ、武偵としての本分を——遂行するだけだ！」

クイックドロウ

早撃ちで一発、銃弾を放つ。

シャーロックは持っていたステッキを正面に突き出して防いだ。

先端に当たり、銃弾が弾かれる。

「シャーロック！」

俺は続いて2発目の銃弾を叫びながら、放つ！

今度は同じようにはいかない。

シャーロックは今度も同じようにステッキで防ごうと銃弾を突くが、その瞬間に違和感からか僅かに眉を動かした後——

ドオオオオンッ！

爆炎に彼は飲み込まれた。

そして、その余波が俺達を包む。

「きゃあつー！」

反射的にアリアが俺に捕まる。

俺も思わず腕を交差して、爆炎の熱さを僅かながらに防ぐ。

なんつー威力だ。

武偵弾の1つ、炸裂弾。

まるでロケットランチャーでも発射したかのような威力だ。

さすがのシャーロックもこれは推理できなかつただろうな。

何せ、俺自身この威力は“想定外”だった。

さすがに今ので死ぬ命タマじゃないだろうが……もしかしたらやつちまつたかもしれない

い——9条破り。

と、考えながらもシャーロックの様子を窺うかがおうと歩みだした瞬間、

「……………」

ビリとした刺激を肌で感じ取る。

これは、悪寒。

立ち込める爆煙の中から発せられるそれは、シャーロックが生きている証拠ではある

が……それ以上に。

あいつの存在感が膨れ上がったような、そんな感じがする。

この感じ——

(どうなつてんだよ……!)

これは、俺達と同じ……ヒステリアモード!?

一体、どうやって……なつたんだ?

その疑問が浮かび上がった瞬間に、すぐに答えは得た。

シャーロックは寿命をもうすぐ迎えると兄さんは言っていた。

もしシャーロックが死に掛けと言うのなら、これは死に際のヒステリアモード——今

このイ・ウーの甲板で戦つてる兄さんと同じヒステリアモード・アゴニサンテ!

「——ここまでが『復習』だ、キンジ君」

煙の中から現れたシャーロックは焼き焦げたコートを脱ぎ捨て、150年生きてるには似合わない鍛え抜かれた筋肉が俺の目に映る。

初めて見た時から思つてたが、どう考えても爺さんつて感じの肉体じゃないな。

それに、よくよく考えればジャンヌやパトラと同じ超能力ステルスを使つてたんだ。

ブラドの他人の能力を写し取る技術があれば、シャーロックがヒステリアモードを兼ね備えていても不思議はない。

ここまでが復習つて言うのはそう言う事だろう。

「ここからは『予習』の時間と行こう。何せ、僕はここでは古い仇敵と同じ役職——

『プロフェシオン
教授』の名を継いでいるのだからね」

ズズ……ズズズズズと、シャーロックの言葉が合図だったかのように地響きをする。さっきの爆風の余波とは違う。

この部屋自体が震えている。

よく見てみれば、ICBMが稼働しているような雰囲気。

すぐに発射される感じではないが、その準備は着々と進んでいるようだ。

何だか、マズイ事がいつべんに起きてる感じみたいだな。

普通のヒステリアモードならここでアリアを連れて逃げるのが最善だと答えを出す
んだけだな。

それよりも俺は、ただ目の前にいるいけ好かないクソじじいをぶちのめしたくて仕方がない。

二度と俺のパートナーに手を出すんじゃないやねえってな。

野蠻だと我ながら思う。

だが、ただただ戦いたいと言う感情が湧き上がって仕方がない。

——バキイン!!

白い煙を背にシャーロックは銃撃を受けて罅ひびの入ったステッキを床に叩きつけた。

木片が舞い上がり、そのステッキは一振りの刀へと変貌した。

どうやら仕込みステッキだったらしい。

そして、その刀身は素人の俺でも直感的にただの刀じゃないと感じ取った。名剣だと一目で分かるような眩い輝きを放っている。

ぼんやりとだが、授業の内容を手繰り寄せて思い出す。だいぶ使い込まれているが、あれは種類としてはスクラマ・サクスと言う片刃剣だろう。

「いい刀だな」

「——銘については聞かない方がいい、これは女王陛下から借り受けた英国の至宝だ。それに刃向かったとあつては、後々君達の一族が誹りそしを受け事になる」

「興味はねえよ。どうせラグナロクとかエクスカリバーとかそんなんだろ?」

デユランダルを持つてる聖女さんもいる事だしな。

俺が適当にゲームでよく使われるようなネームを挙げると、シャーロックは驚いた表情をする。

それから痛快そうに笑った。

「いや、君は大したものだよ。名探偵の素質がある。僕が保証しよう」

「案外適当なんだな、あんた……」

多少呆れながらも俺は構える。

同時に噴射炎が部屋を徐々に明るくしていく。

「どうやら時間はあまりないようだ。一分で終わらせよう」

言いながら悠々とシャーロックは白い煙を踏み、こちらへ歩いてくる。

「奇遇だな、俺もそう思っていたところだ」

俺も、シャーロックに向かってゆっくり近付く。

西部劇のガンマンのように如何にも決闘と言う感じの緊迫感。

それがお互いに5メートル程のところまで――

――ダッ！

爆発し、同時に駆け出す。

シャーロックの刀が迫り、俺はそれをバタフライナイフで去いなす。

刹那――甲高い金属音を立ててかち合ったと同時にバチツ！と火花が散る。

俺はバックステップと同時にズシャアと背中から滑り、すぐに体勢を立て直して膝立ちになる。

今のは……雷か？

間一髪で避けたが、手の痺れからしておそらくそうだろう。

おまけにシャーロックが予習と言った時点で俺が知らない事をしてくるには違いない。
い。

気付けばいつの間にか、白い煙だけではなくこの鼻につくような湿った感じの白いモ

ノ——濃霧に囲まれていた。

完全に姿を見失った。

途端に俺の肩を何かが撃ち抜く、思わずその痛みで顔を歪ませる。

撃たれた——！　かと、思ったが……撃たれた右肩の傷口に手を当てれば血ではなく水がついていた。

と言う事は、今のはどうやら高圧の水を俺の肩に当てたらしい。

ビツクリ人間、ここに極まる……だな。

水に雷に砂に氷、魔法使いかよテメエは！

曲芸師か大道芸人でも転職したらどうだと言いたくなる。

俺が心底から悪態を吐いていると、右足に激痛が走る。

見てみれば脛すねに横一文字の傷がついていた。

今のは斬撃か……?!　だが、斬撃にしては重量感がなかった。

鎌鼬的な、見えない風の刃にどうやら切られたらしい。

足の痛みで機動力を奪われた俺に向かって白い煙の塊が近付いて来る。

真つ先に顔を出したのは寶石のような刃の煌きらめき——スクラマ・サクスの刀身が俺の左胸に迫ると同時にシャーロックの顔が見えてきた。

すぐさま後ろに跳び、何とか左胸に刃が到達する前に——

ギイイイイイインン!!

何とか……切り結ぶことができた!

が、思ったよりもスクラマ・サクスには重量があるのかそのまま重さとシャーロックの勢いに負けて俺は煙を連れて壁に叩きつけられる。

背中の衝撃に思わず吐血する。が、すぐに目の前に意識を向ければ再び切っ先が迫っていた。

フエンシングのように構えられ、風を切り裂くような鋭い突き。

——間に合え!!

ガイン! という音が鳴ると同時に俺は目の前のシャーロックに向かってナイフを振るう。

しかし、彼は跳び上がり鮮やかに後退した。

間一髪、だったな……

ベルセのおかげで通常のヒステリアモードよりも速く動けた……左胸に刃が突き刺さってる何て事にはならなくて良かったぜ。

俺は自分の左脇に当たっているスクラマ・サクスを見る。

どうやら防弾ベストとシャツを貫いて、壁に縫い付けるように刺さっているようだ。それを抜き取ったところで俺は、痛みを覚える。

チクシヨウ……これは、肋骨をやられたか。

「キンジツ！」

どうやら、視力が少しは回復したらしいアリアがこちらに心配そうな表情を向けている。

俺は『大丈夫だ』と言う表情をアリアに向けながら立ち上がる。

今の一瞬、俺がナイフを振るった瞬間にシャーロックは剣を手放す事を躊躇しなかった。

大した判断力だよ。

流石は、武偵の原点なだけはある。

しかし、優勢にも関わらずシャーロックの表情は固い。

「どう、やっている？」

その言葉に俺は、

「何がだ……？」

と尋ねる。

「このオペラが独唱曲ソングに変わる前に、君を沈黙させるつもりだったのだがね。君は僕が推理したよりも長い時間を戦い抜いた。おそらくは、HSSの上に行く反射神経で……それが、僕の推理——『条理予知』をも狂わせているんだよ」

……そうか。

どうやらシャーロックは、アゴニサンテや通常のヒステリアモードを知っていてもベルセについては知らないらしい。

知らないものを推理する事は不可能だ。

「つまりと、君は僕にとつて数少ない推理を仕損じた人物と言う事だよ。君は、賞賛に値する人物だ」

自分の思い通りに行かなかつたつて言うのにシャーロックは痛快そうに、嬉しそうに微笑む。

「俺はあなたに認められる程の男じゃないさ。ちよつと頭が悪くて乱暴な学校の一生徒に過ぎないんだよ、俺は」

言いながら俺は持っていたナイフを手の中で回して、ポツケの中へ仕舞う。

「——何故、武器を収めるのかね？」

「待つててくれたんだろ？」

俺の言葉にシャーロックは、キョトンとした顔をする。

「あんたは、俺を攻撃するチャンスは何回もあつたはずだ。それをしなかつたつて事は、待つててくれたつて事なんだろ？」

さつき俺が濃霧に囲まれてた時、高圧の水に撃たれた時、風の刃に体勢を崩した時

……少なくとも機会は何回かあったはずだ。

それを追撃や奇襲ではなく、正面から切り結んで来たって事はそういう事なんだろう。

本来なら、こんな余裕をかませる程に俺は強い訳じゃない。

だけど……このまま敵に貸しを作りたくないのが本音だ。

それに、貸し借りは返済する時期を見失うと延々と貯まっていくからな。

連想して霧の顔が思い浮かぶが、今は考えないでおこう。

「ともかく、これで貸し借りはなしだ」

そう言つて俺はスクラマ・サクスをシャーロックへと投げつける。

それを受け取つた瞬間にシャーロックは恥ずかしそうに顔を赤くし、頬を掻く。

何だか似てるな、俺にからかわれた時のアリアに……血の繋がりを感ぜさせる。

「いやはや、君は大した快男児だよ。君自身は否定するだろうが、それでも僕としては君を賞賛するよ。こんな気持ちになつたのはライヘンバッハ以来だよ」

「これはバッハじゃなくてモーツァルトだよ」

流れる独唱曲に耳を傾けながら答えると、シャーロックは小さく吹き出した。

そう言う意味分からん笑いのツボもアリアに似てるな。

「ふふ、こーう言うのも何だがね。僕は君が気に入つたよキンジ君。ジャックが君を見て

「退屈しないと言うの領ける」

……おい、何か今名探偵様の言葉からとんでもない事を聞いた気がするんだが？

「戦いの中で不謹慎だとは思うがね……ここからは君に敬意を払い騎士道精神に倣^{なら}ってボクシングといきたいところだが、残念ながらこの独唱曲^{ソング}は僕の最後の講義を知らせる合図なんだ」

その言葉と共に、シャーロックの体から異様な緋色の光が漏れ出す。

これは……！ さつきアンペリール号で見た、アリアが纏っていた光と同じ!?

それは段々と輝きを増して行き、後光のようにシャーロックの体を包み込む。

「——僕がイ・ウーを統率できたのはこの力があつたからだ」

それからシャーロックは語り始める。

「だけど、僕はこの力を不用意に使わなかった。何故なら『緋色の研究』——緋弾の研究が未完成だったからね」

言葉を続けながらシャーロックは銃を一つ取り出す。

——アダムス1872・マークIII。

かつての大英帝国陸軍が使用していたダブルアクションのリボルバーだ。

「緋弾を撃てるのか？ お前も」

「キンジ君が言う緋弾とは、別の現象のことだろう。おそらくは、古い日本の言葉で『緋

天・緋陽門』と言う緋弾の力の1つに過ぎない」

言いながら、リボルバーの弾倉から1発しか入ってなかったであろう弾丸をシャーロックは見せる。

「これが、『緋弾』だ」

見せられたのは淡く、薔薇のように、炎のように情熱的に輝く緋色の弾頭。

あれがただの弾丸ではない事は明白だ。

「緋弾と言葉の通り、これは弾丸の形をしているが……形は何でも良い。これは日本では緋々色金と呼ばれる金属なのだからね。峰・理子・リュパン4世が持っていた十字架ロザリオも同族異種で極微量の色金を使用しての合金だ。イロカネは、僕らの想像を越える超次元の物体だよ。それこそ普通の超能力が霞み、兎戯じぎに思えるような『超常世界の核物質』なのだよ」

……どうやら詳しくは分からないが、色金とやらは常人を簡単に超能力者に変化させる事が出来るようだ。

十字架をもっていた理子がその1人。

だが、分からない。

パトラと戦ってた時に何故アリアが今のシャーロックみたいな緋色の光に包まれたのが、分からない。

アリアの持ち物にはあんな緋色のモノは無いはずだ。

「いずれにしても、世界は新たな戦いの局面を迎えている。それこそ……銃が発明されて戦い方が変わったように、核が生み出された時のようにね。イロカネは既にその存在を多く知られ、様々な国、機関でも極秘裡に研究が進められている。僕の『緋色の研究』のようにね。僕の祖国——イギリス、そしてアメリカはもちろん、ロシア、中国、日本、アンダーグラウンドな機関ではイ・ウーだけではなくイギリスの有名な、あの結社、バチカンやCIA、アジア大陸北方のウルスに、日本では宮内庁の星伽が——いや、これは少々口を滑らせすぎたか。

国を上げてイロカネの研究、監視をするケースは枚挙に暇がない程だ。

僕のように高純度・大質量のイロカネを持つ者は常にお互いのイロカネを狙いつつも、その超常の力に手出しが出来ないでいる」

シャーロックは先程の緋弾を籠め直し、

「だが、この緋弾を使うのは後にして……君の見たものをもう一度お見せしよう」

そう言つてシャーロックが輝き始めたかと思うと、人差し指をこちらに向ける。

緋色の光がシャーロックの腕に螺旋を描いて、その人差し指に集まつていく。

——これは!?

「君が見たのはこれだろうか?」

そうだ。

パトラの時と同じ、アリアがその指先に集めていた光だ！

あのピラミッドの一部を丸々抉りとったかのような一撃を、こいつも撃てるとううのか?!

マズイ……マズイぞ、これは……！

「……キンジ……なに？ 何が、起きているの……う？」

アリアはまだ視力が完全に回復していないのか、今の状況を把握できずにいる。

ただ優れた直感で何か恐ろしい事が自分の身に迫っている事を察知しているようだった。

そう俺が理解した次の瞬間、アリアの体も光だした。

シャーロックと同じように緋色に。

それはパトラの時と同じように指先に緋色の何かが集まり、シャーロックのよりは小さいが太陽のように輝き出す。

「え……なに、これ……う？」

どうやら光の明暗は分かるらしく自分の体に起きた異変に気付いている。

アリアの言葉の中には混乱と同時にどこか恐怖心が混じっていた。

「アリア君。これは『共鳴現象』と言う一種の連鎖反応だよ。2つの音叉のうち片方を鳴

らして近付けるともう片方も共鳴し、鳴るのと同じように大質量のイロカネを持つ者同士は片方が覚醒するともう一方も覚醒するのだ。いや、音叉は2つではなく……” 3つだろうけどね”

そう言ったシャーロックはどこか遠くを見つめていた。

何かを憂うれい、娘を心配する父親のように。



「——がふっ!」

目の前で吐血する金一。

もう、満身創痍まんしんそういと言った感じだ。

心臓付近を撃ち抜かれた上でよくもまあ、ここまで戦えたもんだね……

「そろそろ、病院でも行くかね。幸いにも目の前に無免許の医者があるが」

と言つても、そこらの医者には取らないと自負してるけどね。

私からの提案に金一はニヒルな笑みを浮かべ、

「悪いが、地獄からの誘いならお断りさせて貰おう」

私を死神だと言いたげな皮肉を返してくる。

やれやれ……意地って言うヤツかね。

キンジに似て逆境の中で情熱的と言うか、熱くなるんだから。

そう思っていると、私の体が唐突に光り出す。

それは段々と輝きを増して行き、色が付き始め、やがては淡い緋色へと変わっていく。どうやら、そろそろ序章は終わりみたいだね。

同時にお別れの時が近付いて来ている。

「どうやら君との楽しい舞踏会もこれで一度お開きのようだ」

私は気障きざつたらしく別れの言葉を紡いでいく。

それよりも金一は私を見て驚愕しているようだった。

「お前……まさか——」

「ああ、見ての通りだ。私は”保有者”だよ。もつとも、勘のいい人物には既に知られているだろうけどね」

まあ、上には上がいると言うヤツだね。

いくら見た目を誤魔化せても私の中にあるモノまでは隠しようがない。

そもそも変装は、そう言った意味も含んでただけだね。

楽しみでもあるのは否定しない。

最初はこのイロカネに振り回される日々だったよ。

制御の仕方が分からず、誰彼構わず襲つては殺し、お父さんがいなければ危うく体を

乗っ取られるところだった。

今でも何て言うか、声が聞こえるんだよね。

それにお父さんの話だと私の殺人衝動はどうやらイロカネの副作用らしいし、五感と
言うか身体能力が他人よりも高いのもかなりイロカネと同調率が高いが故の弊害へいがいら
しい。

まあ、弊害と言うよりは副産物っぽいけど。

「ああ、安心したまえ。別に知られたところでどうこうするつもりはない」

むしろ知って広まったところで、ねえ？

私を襲うバカがいるとはあまりいるとは思えないし。

いや、むしろ襲ってきて欲しいかな？

向こうから私の遊び相手になって来てくれるんだったら、大歓迎。

まあ、生かして返す気はないんだけど。

それに金一をこんなところで退場させるのはもったいな——忍びないし。

「それよりも金二君、君の望み通り……イ・ウーは今まさに崩壊しようとしている」

その私の言葉と共にズズズと、地響きが大きくなっている。

船体から何かが飛び立とうとしているのが分かる。

しかし、お別れ……お別れか。

偽りの顔で見送るって言うのも、何て言うか嫌だね。

幸いにして周りには濃霧。

見ているのは金一だけ。

それに見られたところで正直減るもんじやないし。

私は躊躇いもなく、特殊メイクのマスクを破り捨てる。

そしてシルクハットを取って頭を振り、自分の長いブラウンとピンクブロンドのグラ

デーシヨンの髪を出す。

「だけど、忘れない事だね。これはほんの序章……終わりは新しい始まりなんだよ」

私は素顔を出し、声も地声で微笑みながら語り掛ける。

「それが、お前の正体……なのか？」

「そうだよ。家族以外で素顔を見せるのは金一、君が初めてなんだからね」

その金一の視線は驚愕と同時にどこか見とれているような感じだった。

意外だったかな？

まあ、男だと思つてのが女性だった何て普通にビックリするだろうけどね。

ミサイルハッチが開き、乗り物であるICBMが飛び立とうとしている。

そのままゆっくりと頭を出したかと思うと、ICBMは加速し始める。

8つのICBMの内、その1つにキンジと神崎さんが張り付いているのが目に映る。

あれにお父さんが乗っているのか……

だけど、その姿は濃霧と噴射炎でよく見えない。

と思いきや、上から何かが2つ落ちてくる。

それを私は上に手を伸ばしてキャッチする。

胸元にかけていき手にしたモノを見てみれば、それはお父さんが愛用していたパイプと一輪の白い薔薇ばらの薔ばらだった。

そう言えばパイプは予備もあつたね。

白い薔薇には私宛の手紙？ ではないね。

ただ単に『Dear daughter』と書かれている厚紙だ。

この薔薇自体が手紙って訳かな？

ふふ、何て言うんだろう……このくすぐったい感じ。

どこかむず痒くて、でも楽しいとは違う。

自然と笑みが零れそうになるこの感情は……

でも、同時にどこか沈んだ気持ちも湧き上がる。

これでお父さんと会えるのも最後。

そう思うと、何て言うんだろう……少しだけ自分の世界に色が欠けたような感じ。

パズルのピースが抜け落ちて、埋まらない穴が出来た感じ。

私の中で今までなかったモノが生まれるような感覚。

何かの感情なのは分かる。けど、それが何なのかは分からない。もどかしいもんだね。

それと、こっちのパイプは私のお姉ちゃん——ソフィーに渡すものらしい。

厚紙には達筆な筆記体の英語で名前が書かれている。

そして私は手向けと、お返しの意味も込めて手にした白い薔薇を海へ投げる。

それからすぐに金一へと目を向け、

「それじゃあ、次の舞台でまた会おうね」

無邪気にそう言う。

瞬間、イ・ウーの隣から何か大きな質量のモノが浮上したような水音を上げる。

巻き上がった海水は、雨粒となってこちらに降り注ぐ。

「なんだ、アレは……!?!」

濃霧の中から見えるシルエットに金一は呆然とする。

それは船だった。

イ・ウーと同じくらいの大きさの潜水艦。

魚のようなフォルムをしたそれは、ゆっくりと私達の目の前を横に移動する。

「それじゃあ、私はこれで失礼するよ。今度は欲望が渦巻く戦役の中で会おうね♪」

それだけを言い残して、私はその潜水艦へと跳び移る。

これからが第1幕の始まり、今はこう心の中で言つてあげよう——『緋弾のアリア』、君の物語はこれからだよ。

プロローグは終わりなんだ……これからは私も、もう少し表に出てもいいよね？ お父さん。

T a P r o l o g u e !!

T h e E n d o f J U S

第7章：裏側の役者達（アクター・オブ・ロンドン）

63：数学者のチエス盤へ

さて、イ・ウーが崩壊しても世界は変わりなく日常を迎えている。

だけどその裏では色々慌ただしい事になってるだろうね、おそらく。

今は7月の終わり。

まず最初に帰って来たキンジは肋骨が折れてたため全治約1ヶ月。

すぐに武偵病院へと搬送された。

単位の補填のために受けたカジノ警備の依頼は完遂、ではなく……営業を円滑に継続させる事が出来なかつた為に評価を半減すると言う教務科のお達しが私に来た。

まあ、この依頼を受けたのは私って言う事になってるから依頼に関しての知らせが来るのは分かる。

別にそれを知らされた所で私は別に単位不足になってる訳じゃないから、どうと言う事もないんだけど……

キンジは引き続き留年危機って訳だね。

その本人に私が知らせる必要は……ないね。うん。

退院しても夏休みは残ってる訳だし、残りの単位ぐらい何とかなるでしょ。それにほら、本人が聞いたら治療に専念どころじゃなくなるだろうし。

何て言い訳がましい屁理屈を自分の中で並べたてる。

何にしても、私は無事に熱が治ったと言う事にはなっている。

それより……この夏が終わってやる事は一つ。

「里帰りしよう」

やっぱりそう言うのは大事だよ。

「唐突だね」

この部屋の持ち主であるでる理子は、ベッドの上で漫画を読みながら呟く。

「理子は乗り気じゃないの?」

「まさか——」

漫画を閉じて理子はクローゼットの扉へ行き、そして勢いよく開け放つ。

そこにはキャリアバックとその他諸々の荷物が既に押し込められていた。

「準備バッチリです」

そう言つて妹は舌を出しながらウインクして親指を立てる。相変わらずあざとい。

気のせいかな、目が爛々らんらんとしている。

楽しみだったなら別に良いんだけどね。

それに、里帰りと同時に別の用件もあるし。

「なら話は早いね。チケットは既に私が取つてあるから」

「おー、さすがお姉ちゃん。で、いつ帰るの？」

「明日」

「わーお、話も唐突だけど予定も唐突に入つてきた……」

と言う訳で翌日。

あの後、荷物を纏めてすぐさま空港へと送り、私と理子は交通機関を利用して羽田空港へと向かう。

そして、羽田空港の第2ターミナルへ到着。

夏休みと言う事もあつて、観光客や旅行者がそれこそ掃いて捨てる程にいる。

「ねえ、お姉ちゃん？」

「うん？」

「チケットの飛行機が出発するまで1時間ぐらいあるけど……」

つまり着くのが早すぎないかと、理子は言いたそうにして言葉をそこで区切る。

「実は待ち人がいてね」

「待ち人って……リリヤ？」

「ふっふっふ、違うんだよねーこれが」

理子に対して私はしたり顔で答える。

とは言え、問題は2人が仲良くしてくれるかって言うのが少しばかり心配なんだけどね……

ちよつとした凸凹コンビになりそうな予感だよ。

何て言う予感していると、人の波間に見えた待ち人の姿。

服装は武偵高の制服ではなく、私服。

この暑い季節らしい、デニムショートパンツにコーデと言うシンプルな感じで来た。

こうして見ると……結構モデル体型なんだねあの子。

そして、ライカと同じで女性にしては長身だし。

向こうもこちらに気が付いたのか、私は手を軽く振って存在を主張する。すると、彼女はどことなく嬉しそうに口元を上げた。

その私の様子を見てか、理子も同じように私と同じ方向に視線を向ける……が、理子は低身長だからね。見えにくいのか背伸びをして探そうとする。

「どの子？」

「あー、あの黒髪で女性の割には長身でメカクレしてる子。こつちに真っ直ぐ歩いてき

てる」

「ふーん、でお姉ちゃんとの関係は？」

「前にも話したと思うけどね。新しい妹の事について、チラッとだけど」

「なるほど、お姉ちゃんの毒牙に掛かってしまった子か」

「そうだねー。でも、理子よりも素直なところが気に入ってるよ」

「うぐ……手痛いカウンター……。もしかして、ブラドの時の事を結構気にしてる？」

「さてね」

気にしてない筈なんだけど、私は何故かはぐらかした答え方をする。

変な違和感を覚えて思い返す前に、新しい妹——以織が目の前へと来てしまった。

「お久しぶりです、姉上」

「そうだね。元氣そうでなにより」

「ええ、姉上のおかげである程度は……そちらの方は？」

私の隣にいる理子を見て、以織はもつともな疑問を口に出す。

「どうもー、お姉ちゃんの妹の峰　理子ことりっこりんです♪　よろしくー！」

いつもの調子で挨拶する理子に以織は目を細めてたじろぎ、少し後ろに引き気味。

性格的にはほぼ真逆だから……理子のこのノリは、真面目キャラにはキツイんだよね。

「あ、その……よろしくお願ひ、します」

と以織は、きちんと挨拶をする。

かなり腰が引けてるけど。

「さあ、ちよつと早いけど行くこう。色々と話しておく事もあるからね」

言いながら私が第2ターミナルへと入るのに続いて、妹2人も後ろから付いてくる。

チケットを見せて出国の手続きを済ませて、無事飛行機に乗り日本を出発。

最初に目指す場所はニューカッスル国際空港。

それから14時間ほどの空の旅と洒落込んだ。

以織は起きてる時、ほとんど飛行機の窓を見ていた。後悔はなさそうだけど、未練は多少ありそう。

そんな面持ちだね。

対して理子は毛布かぶって幸せそうな顔して爆睡してたけど。

何にしても、ほぼ半日を掛けてようやくたどり着いた。

「やつと着いたー！」

空港から出たの理子の伸び伸びとした第一声。

実際にはまだ目的地には着いてないんだけどね。

時差の関係上、日本を出発したのがお昼頃で……14時間だから、まあ……普通なら

朝方。

「だけど時差で日本時間から9時間戻してだから、正直出発したお昼前後からあまり変わってない。」

「まだ目的の場所には着いてないけど。以織は大丈夫？」

「明らかに顔色が悪くて、吐き気ありそうな感じだけど。」

「もちろん、です」

「いおりん、時差ボケっぽいね」

「本人は大丈夫って言っても理子の言う通りで完全に時差ボケしてるね。」

「まあ、若くて体力のある子ならそんなに症状が長引く事はないでしょう。」

「移動してる間に休んでればちよつとはマシになるよ」

「すみ、ません……」

「喋るのが辛いなら喋らなければいいのに。」

「私の気遣いに律儀に以織は答える。」

「さらに移動して、空港から1時間ほどバスや電車を利用して1時間程でダラム駅に着した。」

「中世の石造りの家のようなホーム。」

まさしく外国の田舎って感じだろうね。

渡航経験があまりなさそうな以織としては、珍しいものを見るような感じだろう。辺りを少しばかり見渡している。

あと、当たり前だけど日本人がいない事に少しばかり心細そうな感じ。

だけでも態度は毅然きぜんとしているから大したものだよ。

何かに気づいたのか、理子は「お？」と声を上げてキャリーバッグを持ってホームの外へと駆け出す。

私達もそれに続いて理子の後を追うとそこには、

「…………お帰りなさい」

メイド服姿のリリヤが待っていた。

イギリスの由緒正しいメイド服だから別に不自然ではない。

多少メイド服に理子のアレンジが混じってるけども、それでもあからさまに変ではない。むしろ似合ってる。

珍しい光景ではあるだろうけどね。

そんなリリヤに理子はハグしている。

「ただいま！ こうして会うのも久しぶりだね。それよりも理子達が帰ってくるのがよく分かったね」

「……ソフィーに言われて」

「なるほど、納得。それじゃ、さっさと荷物積み込んでおう♪」

そう言つて理子はリリヤから離れて足取り軽く、リリヤの後ろにある黒塗りの車のトランクを開けてキャリーバッグを放り込む。

それから私達も手荷物を載せて、車へと乗車。

リリヤがドライバーで、ダラム駅を後にする。

……。

……。

……。

それから十数分してようやく辿り着いた我が家。

いやはや、相変わらず時間の掛かる里帰りだよ。

鉄柵が開き、車は屋敷の敷地内へと入る。

絵に書いたようなイギリスの貴族屋敷に以織は少しばかり驚いている。

て言つても、表は庭園も噴水も何も無い芝生だけだね。

手入れが楽でいいけど。

地下の駐車場へと向かわず、そのまま玄関先へと到着。

車を降り、トランクからそれぞれの荷物を取り出して玄関へと続く数段の階段を上が

ろうとした瞬間——

「……待って」

リリヤから足を止めるように言われ、3人とも足を止める。

「どうしたの？」

理子が不思議そうに尋ねると、

「……そっちの人、もてなしてない」

「そっちの人って、いおりん？」

「え、私……ですか？」

リリヤと理子に目を向けられてキョロキョロする以織。

もてなしってどう言う事やら……

私がか嫌な予感がしてると——

「……そう、もてなし」

蜂の羽音にも似たような音を響かせて何かか近付く。

そこには数機の蜂のように機体の下部に銃が取り付けられた小型ドローン。

SF映画か最近のゲームで出てくるような兵器が目の前にある。

いつの間にかこんな物を……と言うか、研究所から連れ出した時にはこんな兵器は無かったはずなんだけどね。

さては、私がない間に色々新装備でも作ったのかな？

「あー、リリヤ？ 物騒なもてなしだけど誰から教わったの？」

理子が引き攣りながら聞いてリリヤの口から出てきた名前は、

「……ジェームズ」

「James!!」

理子はいるのであろう人物に向かつて、英語で屋敷に吠える。

「Chill!!」
うるさいぞ

すぐに目的の人物は窓を開け放ち、理子に向かつて叫ぶ。

それから2人は英語で「リリヤに何教えてるの!」「そのチェシャ猫が、得体の知れないのをよく連れてくるからだ!」と言うやり取りをする。

ジェームズの言うチェシャ猫って、私に対する皮肉？

いつもにこやかな笑み浮かべてるし、自由に姿を消してるようなものだけだ。

隣の以織はどうしていいか分からないって言う感じで、困った表情をしている。何となく歓迎されてないのは分かっているような感じではある。

まあ……リリヤは日本語で話してたけど、今怒鳴り合ってる2人は英語で喋ってるからね。

言葉が分からないのも、困惑してるちよつとした原因にはなってるだろう。

幸いにも……この屋敷にいる面子は全員日本語は分かるし話せる。ウイリアムはちよつと変なイントネーション入るけど。

と、それは置いといて――

「リリヤ……悪いけど、下げてもらえる？　新しい家族だから、ね？　ソフィーお姉ちゃんから何か聞いてない？」

と、私が聞くと、

「……そんな事、言ってた」

一拍おいてリリヤは無表情で答えた。

やっぱりね。

「そう言う訳だから、よろしく。以織、行くよ」

それから以織は入っていいのか迷いながらも私についてくる。

未だに理子とジエームズは何か言い合ってるけど放置しておこう。

久々に思えるこのどことなく落ち着いた雰囲気のホテルへと入り、私は以織へ振り返らずに語り掛ける。

「靴は脱がなくていいからね」

「え？　あ、そうでした」

気付いて、慌てるような口調。

日本には靴を履いたまま家にかかる習慣がないからね。まあ、しばらくは文化の違いで困惑するだろう。

「さて、それじゃあ……まずは挨拶だね」

「この家主、ですか？」

「そうそう。私の姉にあたる人だね」

言いながらも、私はカーブを描く階段を上がって行く。

◆ ◆ ◆
これからどんな事が待ち受けるのかを楽しみにしながら。

◆ ◆ ◆
楽しそうな足取りで姉上は上階へと上がっていく。

◆ ◆ ◆
姉上の姉、か……

◆ ◆ ◆
今更ながら変な感じだ。

◆ ◆ ◆
この人に付いて行くと決めた。その事に後悔はない。

◆ ◆ ◆
独りは嫌だから……

◆ ◆ ◆
自分は心の抛り所を剣以外に求めていたのかもしれない。

◆ ◆ ◆
それは、無機質な刀ではない……確かな温もりを。

◆ ◆ ◆
今、私が見て追っている背中とは相当な危険人物ではあるだろう。

◆ ◆ ◆
本来なら何かしら疑うべき筈なのに、この人の言葉は何故か真つ直ぐに私の心へと届

き、そしてそれが嘘でないと思わせられる。

変な魅力を持った人だ。

だが、そんな姉上が付き従う姉とはどんな人物なのか少しばかり興味が湧く。

そうして歩いている内に、両開きの木製の扉の前で姉上が止まった。

それから姉上がノックをしようとしたところで、

『開いてるわ』

扉の向こうから透き通るような声の日本語が聞こえてきた。

英語ではなく日本語である事に少しばかり驚く。

「全く、お父さんもお姉ちゃんもノックする前に言ってくるんだから」

つまりはいつもこんな感じなのだろう。

姉上がそう少しばかり呆れるように言いながらも扉を開ける。

私もそれに続いて入った先には、アンティーク机でメガネを掛けて本を読む小柄な少女。
儂げで、白い肌が目に付く。あまり外に出るような感じではない。

文学少女。

第一印象としては、まさにそれだ。

「ただいま」

「お帰りなさい」

本を読みながら、少女はこちらに目を向けずに姉上にそう返す。

それからメガネをずらして本に向けていた視線を私へと移してきた。

「その子が……」

「そう、新しい家族」

少女の言葉に続くように姉上は答える。

自己紹介、した方がいいようだ。

「その、初めまして……岡田 以織です」

「……………」

少女はなんの反応も示さずに私を真つ直ぐに見てくる。

その瞳は、何というか……空虚でいて、何もかもを知っているかのような悟りきつた

目だった。

引き込まれそうでいて、不気味な視線に思わず喉を鳴らしそうになる。

それから少女は一つ息を吐いて、本を脇にどける。

「私はソフィー・モリアーティ。初めまして、”人斬りの子孫”さん」

ドクンと、心臓が高鳴る。

どうしてその事を……

「疑問に思ってるでしょうけど、少し考えればすぐに答えは出るわよ」

と言ったところで、私はすぐに単純な答えへとたどり着く。

私の事は既に調べられていた、と言う事なんだろう。

「情報提供者は言わずもがな、隣のあなたの姉よ」

「いやー、ごめんね。さすがに素性の知れない子をいきなり受け入れてください、何て言う訳にも行かなかったから」

と言いながら、姉上は悪びれなく答える。

至極、当然と言えるだろう。

それに通りですんなりと私の受け入れが上手く行ってると思っていた。

それから少女は、革張りのデスクチェアを後ろへと引いて立ち上がる。

……ち、小さいな。

本当に少女のような身長だ。

おそらくだが私の胸の上ぐらいまでの目線の位置。

今、玄関先でまだ言い争っているかもしれない理子さんと同じくらいだ。

これで、姉上より年上なのだろうか？

「言っておくけど、私はこんな容姿でも2ーよ」

机に手をつけて、こちらの疑問を見越したように少女は答える。

え？ 21……？

とてもそうには見えない。

どちらかと言うと、中学生……下手をすれば小学生で通りそうな感じだ。

「病弱なせいでこの身長なの」

「そ、そうなんですか……」

それから歩み寄りながら私へと saying てくる彼女に、私はそうどぎまぎして答えるしかない。

こちらへと歩いてくる彼女の足取りは弱々しい。それこそ、軽く力を入れれば折れてしまう枝のよう。

病弱と言う話も嘘ではない事を感じさせる。

私の目の前まで来た彼女は、メガネを外して右手を差し伸べてくる。

「まあ、これからよろしくお願いするわ」

これがどう言う意味なのか、少しばかり悩んでいると。

「以織、握手」

と姉上から助言される。

これはいわゆる挨拶の握手なのだろう。

あまり日本では見ない光景なので、少しばかり悩んでしまった。

私は彼女の右手を握る。

その手は、柔らかく……握られた手は今まであまり運動もした事のないような弱々しさだ。

挨拶を終えて、彼女は顔を姉上へと向ける。

「部屋は用意してあるわ。ジル、あの少し狭い書斎よ」

「あそこね、了解。それと……離れる前にお姉ちゃんに贈り物ね」

「そうでしょうね、あの人の事だから。そうだと思つたわ」

言ながら姉上は、パイプを彼女に渡す。

それを見て彼女は静かに受け取り、机へと引き返す。

すぐに椅子へと座り彼女は、

「もう下がっていいわよ」

静かに言った。

「それじゃあ、行こつか？」

「は、はい」

姉上に連れられて私はその彼女の部屋を出る。

そのまま案内されたのは小さな木製の扉。

姉上が扉を開けて中をみれば、そこには小さな書斎の部屋だ。

縦長の窓ガラスが1つ、その傍にアンティーク調の木製デスク。

左に本棚、反対に小さなベッドとクローゼット。その間の通路は2人分の広さと言った感じ。

少しばかり狭い気はするが、広いよりは落ち着く。

「暮らすには十分だね。広いよりかはいいでしょ?」

「ありがとうございます」

部屋を見てそう評価する姉上に対して、私は素直にそう感謝を述べる。

「今日はもう休んで、また明日ね」

そう言つて姉上は部屋を出て行った。

いきなりの環境の変化。私の周りで色々な事が起きている。

それなのに、私は多少困惑しても落ち着いている。

その事について疑問に思わない訳ではない。

でも……今は考えないでおこう。

私はすぐにベッドへと倒れ込んだ瞬間、そのまま落ちるように眠つて……いく。

◆ ◆ ◆

私は以織を部屋に案内したあとに、すぐさまお姉ちゃん部屋の扉へと引き返した。

そのままノックもなしに両開きの扉を開ける。

「さーて、これからどうするつもりか……方針を聞いてもいい？」

開口一番、私はワクワクしながら尋ねる。

って……早速、お姉ちゃんはお父さんから贈られたパイプを使ってるよ。

吸ってる煙は葉草の類だろうけど。

「そうね。まずは、役者を集める。あなたの弟子とお友達もね」

「それから？」

「動かす時は、私から声を掛けるわ。それまでは……アメリカの金で遊んでなさい」

何やら意味深な事を。

仕方ない……困った弟子に会いに行くしかない、か。

色々と予定を組んでおかないと、聞く事は聞いたし……

そう思つて部屋を出ようとすると、

「それと——」

呼び止めるように声を掛けられ、私は振り返る。

「城ルックを仕上げておきなさい」

了解、の意味を込めて私は軽く敬礼して私は部屋を出る。

舞台の裏側で役者集めか。

騒がしい裏側になりそうだね。

64：盲目の歌姫

イギリスの夏はそんなに暑くはない。

日本特有の湿度の高いジメジメした暑さではなく、カラツとした暑さ。

それにイギリスは1年を通して……特にロンドンでは曇りが多く、年間を通して雨がよく降る。

夏はあまり降らないけどね。

雨が降るって言っても地面をはねるような雨ではなく、シトシトとした雨な訳だけ
ど。

幸いにして、今日はそんなイギリスでは珍しく全体的に快晴らしい。

何が言いたいかと言うと――

「以織、出掛けるよ」

「え……あ、はい!？」

私が部屋に入っていくなりの一言にベッドの上で腰掛けて英語の教材を見てた以織は素っ頓狂な声を上げる。

ここに来て早くも5日。

屋敷の住人に以織の紹介を終えてからと言うものの、以織自身は特に目的がある訳でもなく……いや、正確には失ってしまったと言う方が正しいのかな？

ともかく屋敷の手伝いをしながらも怠惰に日常を過ごしている。

未だに剣に依存している節があるのか、鍛錬は続けてるみたい。

キンジのように親しい人を亡くし、追い掛けるべき背中を失くした彼女は生きる目的を探している。

空虚なまま以織の生を終えさせるには惜しい。色んな意味で。

だからこそ、私は家族に誘ったんだけども。

「出掛けると言っても、どちらに？」

以織は出掛ける準備をしつつ、聞いてくる。

別にそんなに慌てる程じゃないから、そんな焦って着替えなくてもいいのに……

何て思いつつも私は答える。

「んー？ ロンドン。少しばかり会わないといけない子達がいてね」

と言っても最近はずいぶん忙しいけどね。

「それよりも以織は、オペラに興味ある？」

言いながら私は『ロイヤル・オペラ・ハウス』で行われるオペラのチケットを見せる。

ダラムからロンドンまで電車で4時間近く。

詳しく場所を言うならコヴェント・ガーデン駅へとようやく辿り着いた。

結構早くに出なきゃ間に合わないからね。

「意外に遠いんですね……」

「疲れた？ でも、目的地はもう少し先だから私からあまり離れないようにしなさいね」

「あの、姉上？」

「何かしら？」

「どうしてそんな格好を……しかも声まで」

以織が疑問に思いながら見られてる。

イギリスの貴婦人みたいな変装と服装をして、声も上品で優雅さがあるような感じにしている。

「色々あるのよ。淑女にはね」

今は特に話す必要もないのではぐらかした答え方をする。

以織は内心、私が危ない人だって事ぐらい何となく気付いてそうな気もするけどね。

まあ……刀が手放せないって事で、持ってきた以織も充分に危ない人だけ。

武偵高の武器の登録検査証が国際免許証で退学後でも使えるのは幸いだね。

これのおかげでフリーランスのエージェントとして雇う事も出来る訳だし。

「は、はあ……」

「それよりも、早く行くわよ」

そう言つて私と以織はそのまま歩いて劇場へと向かう。

今の時間は19時を少し過ぎたあたり、まだ日は落ちてない。

ロンドンの夏の日没は遅い。

下手をすれば20時ぐらいまで微妙に明るいならね。

到着したロイヤル・オペラ・ハウスの出入り口は既に多くの客で賑わっている。

その客の流れに乗つて、奇麗な受付へと辿り着きチケットとチケットを購入したクレ

ジットカードを見せる。

受付に同じクレジットカードの決済である事を説明して、以織も私に倣^{なら}つてチケット

を見せた。

それからそのまま2階の右のボックス席へと向かう。

「あの、姉上？ 会う人がいるとは？」

「シツ……あとで言うわよ」

私は席に座つた以織に静かにするように言う。

そうしてオペラの公演が始まった。

やがて、第1幕の途中で目的の人物が劇場に現れる。

オペラの登場人物、このモーツアルトの『魔笛』の主役の内の一人も言える。パミーナ。

彼女の役をやつてる人物が、私が会いに来た相手。

隣を見れば以織は壮大なオペラに圧倒されている。

まあ、普通ならこんな経験は滅多にないからね。

場面は移り、第2幕第17曲「私にはわかる、すべてが消え」と言う独唱曲。

「A ch, ich f·hl's es ist ver schwen」

そんな言葉から始まる歌詞を彼女は力強く歌う。

いつの間にやらこんなにも有名になっちゃつて。

公演が終わり、劇場を出る。

以織は何やら余韻に浸つてる様子だけど、本来の目的を果させて貰おう。

「以織、行くわよ」

私が言うのとハツとなつて以織は私の後ろを犬のように付いてくる。

何て言うか、なかなか可愛らしいと言うか愛らしいと言うか。

舞台関係者が出る出入口付近の壁に背中を預けて、出てくるのを待つ。

すると、すぐに目的の人物は舞台衣装ではなく……いかにもお嬢様っぽい感じのドレスに身を包んで男性のマナージャーに手を引かれて出てきた。

頭には黒い網のような被り物——ベールフードを頭に掛けており、白い手袋にステツキ、手首にはいくつか腕輪を付けてる。

車に乗り込む前に私は、彼女に接触する。

「久しぶりね、キア」

「あら、その声は？」

優雅な英語で話しながら彼女は、首を動かす。

天然パーマの黒と金髪が混じった長い髪が揺れる。

「ごつちよ」

と、私が存在を主張すると彼女——キアは私に気付いたのか嬉しそうに声を上げた。

「まあ……！ ごめんなさい、チャールズ。友人とご一緒したいのだけれどよろしいかしらっ？」

「もちろん、今日の公演は終わりですしこの後のスケジュールは空いています」

彼女にチャールズと呼ばれた、ちよび髭を生やしたスーツ姿の彼はすんなりと快く了承してくれた。

話がかかる人で何より。

「では、ご友人とご一緒に車へどうぞ」

高級そうな黒塗りの車の後部座席の扉を開けて、チャールズはキアの手を取って車内へと案内する。

私もそれに続いて乗り込む。

以織はいいのかな？　と言う感じの顔をしながらも私が車内に入ったのを見て、続いてくる。

「そう言えば、もう一人はどう言った方かしら？」

キアはもつともな疑問をぶつける。

「ああ、彼女は以織。私の新しい家族になった子よ」

「あら、相変わらずですのね」

と優雅に私とキアは会話してるけれども、英語が分からない以織としては心地が悪いだろうな

早いとこ以織には簡単な英語を話せるようになって貰わないといけないね。

チャールズに頼んで、近くのレストランへ停まって貰った。

私はキアの手を引きながら店の中へと入って、3人で4人席のテーブルを囲う。

席に着いたところで、

「それでは遅れまして、自己紹介を。私の名前はキア・イレーヌ・アドラーと申します」
とキアは^{まかた}瞼を閉じたまま以織に向けて日本語で挨拶をする。

「日本語が、分かるんですか？」

「色々とありまして、イオリさん……でしたか？」

「は、はい。岡田 以織と言います」

「先程、お姉様から新しい家族と言うお話をしてたんですが……十中八九お姉様に連れられてこのイギリスに来たのでしょうか？」

「そんな……ところですよ」

言いながらも以織は顔を伏せる。

その声音は、どこか思い出したいくないような事を思い出してる様な不安そうな感じ。

キアは声から察して呟く。

「何やら、訳ありの様ですね。私も似たようなものですけれども」

「そう、なんですか？」

「ええ……私もお姉様に拾われて、生きる意味を見出してくれました。あなたもそうなのでしょう？ 何かを失ったような声をしています」

私に相変わらずと言っておきながらも、キアの方こそ相変わらず。

バカみたいに耳がいいんだから。

キアの指摘に以織は勢いよく顔を上げる。

「すぐに言い返さないと言う事は、当たり前ですわね」

自分の予測が当たった事にキアは口元を緩ませて微笑む。

うーん、メニユーどうしようかな？

「それはそうとお姉様はどうして私に会いに来たのですか？」

そう言えば用件話してなかった。

まあ、用件って言っても大したものじゃないんだけどね。

「大した話じゃないわよ。ただまあ、そろそろ次の舞台が整いつつあるって言うだけ」

それに結構先の話だし。

私はメニユーを見ながら答える。

イギリス料理ってあんまり当たりがないんだよね

「別に強制はしないわよ、けど……たまには『歌うんじやなく歌わせてみたくない?』」

言ってしまうば、これは勧誘。

選ぶかどうかは本人次第だけど。

「意地悪な方ですね。いつも選択肢があるようでない感じの言い方。けれど、1つ思い違いをしています」

思い違いね。

その言葉に私はメニューを口元まで下ろして、視線だけをキアに向けながら尋ねる。

「どう言う思い違いかしらね？ お互いの手癖の悪さは知ってる筈だけど？」

「ふふ、たまにはお姉様に挑戦してみようかと」

上品に笑う彼女は、二重の意味で『あやしい』。

いつの間にもやら生意気になっちゃって。

それからメニューを頼み、だんらん団欒しながら届いた料理を食べる。

意外にもキアと以織は結構喋ってた。

どうやら似たようなものを感じ取ったのか、以織は少しばかり心を開いているようだ。

その時に私は一つ面白い事を考えた。

けれども、それは後にしよう。

食事を終えて、レストランを出る。

そこそこ有名な店なのか料理は結構美味だった。

レストランを出て、車を走らせてしばらく、

「そうだわ！ 今日私の家にお泊まり下さい。ダラムまでは遠いでしょうし」

キアは両手を合わせて突拍子もなくそう言った。

実際、ダラムまで交通機関でも車でも4時間の帰り道になる。

なのでホテルをとって明日に帰ろうと思つてただけど……その方が色々と話しやすいか。

「いいわよ。元々、明日帰る予定だったし」

私がそう言うときアはすぐさまチャールズに英語で話し掛ける。

「チャールズも、今日はありがとう。ここで降りしてくれて構わないわ」

「いいのですか？ シュロトンストリートまではもう少し先ですが……」

「いいの、エスコートも付いてるし」

「あんまり無茶はしないで下さい。ですが、友人と語りたいと言うなら仕方ありません」

言いながらチャールズは道路の脇に車を停める。

私達3人は車を降りてから、運転席から顔を出したチャールズは――

「それでは、ごきげんよう。最近は犯罪が多いので夜道にはお気を付けて」

そう言つて車を出して離れて行つた。

なかなかの渋い英国紳士。

「それでは行きましようか、エスコートをお願いします」

「歌姫様の」随意に」

男性が言うようなセリフを言いながら私は、キアの手を取つて歩む。

「どうぞ」

ドアを開けたまま、キアがそう言うので――

「お邪魔するわね」

私はそう言つてドアから室内へと入る。

それから以織も続いて入つたところで、ドアが閉まる音がする。

最初に入った部屋の電気を付ければそこは小さなキッチンリビング。

家具はイスが4つにテーブルが1つ、それと食器棚ぐらいしかない。

シンプルだね」

いや、どちらかと言うと質素な感じだけど。

「何もないでしょう？　あまり物が多くても仕方ないの」

言いながらキアはステッキをカツカツと鳴らしながらこちらに歩いてくる。

それを見た以織は何か気付いた。

「もしかして、キアさんは……」

やれやれ、ようやく理解してみたいだね。

以織が口に出す前に本人の口から事実が語られる。

「あら？　今までお気付きではなかったのですか？　私が”盲目”だと言う事に」

◆ ◆ ◆

盲……目……？

私が聞いたのは、初めて会った人物の驚くべき事だった。だけでも私はすぐにおかしい事に気付く。

「目が見えないのに劇場の上をどうやって……」

「どう言う風に動くかは音楽が教えてくれます。劇場の上では、私は見えるの」と、キアさんは軽く言うが……目が見えない状態であんな歌劇オペラをするなんて、さすがに驚かされる。

「今までヒントはいっぱいあったと思うわよ？」

と、変装した姉上は呆れ顔で言う。

ヒント……

盲目と言う答えが分かった以上、その答えに至るまでの過程が頭に浮かぶ。

そう言えば、キアさんは常に姉上に手を引かれて歩いてきた。

自己紹介の時も私の方をすぐには見ていなかったし、このアパートの鍵を開ける際にも手が少し泳いでいた。

「そう言う事です。家の中なら一人で動けますのでお気になさらずくつろいで下さい」

そう言ってキアさんは静かに上の階へと上がって行った。

自然と彼女を目で追う。

「気になるなら話して来たら？」

「別にそう言う訳では……と言うかいきなり地声にならないで下さい、姉上」

テーブルに肘を突いて、こちらに微笑み掛けてくる。

「もしかしたら、何を指して生きて行けばいいのか……1つの参考になるかもしれないね」

姉上はそう提案してくる。

初めて会った相手にそのような相談をするのは、いささかはばか憚られる。

が……何故かは分からないが彼女と話をして見たいと言う気持ちはある。

それに、私には何かが足りなくなってしまった。

生きて行く上での大切な何かが。

レストランで少し話した彼女は、私と同じような感じがした。

「少し、話してきます」

私は衝動に駆られたようにそんな事を言っていた。

それを見た姉上は、軽く手を握ったり開いたりして「いつてらっしゃい」と言外に伝えてくる。

席を立つて、階段を上がる。が、そこに灯りはない。

上がった先に電気のスイッチを見つけ、それを点ける。

どこにいるのか探していると、階段を上がって右側の部屋からギイギイと言う木の軋きしむ音がする。

ここなのだろうか？

取りあえずノックをしてみると、

『開いてますわ』

と返事が返ってくる。

ドアを開けて部屋を見れば、またしても灯りは点いていない。

盲目なのだから電気など点けても意味無いのだろう。

「イオリさん、ですか？」

「そうですか……よくお分かりですね」

「足音で何となく分かるわ」

目が見えない代わりに耳がいいのか、キアさんは暗闇の中から話してくる。

取りあえず電気を探して点ければ、目に見えたのは女性らしい花柄の布団が掛かった

ベッド。

木製の平机の上にはCDが置かれている。

部屋にはクローゼット、ベッド、イスぐらいしか大きな家具はない。

当の本人は揺れるイス——ロッキングチェア、だったと思う——に腰掛けていた。

膝の上にイヤホンとCDプレーヤーがある辺り、おそらくはさつきまで音楽を聞いていたのだろう。

「どうかしたのかしら？」

「どうかしたと言う訳ではないのですけど……」

「お話なら歓迎ですわ。最近、年の近い人とあまり話せなくて。ベッドにでも腰掛けて下さいな」

と、彼女は微笑む。

貴婦人のような雰囲気だ。

その気品に思わず萎縮してしまっているながらも、ベッドに腰掛けて彼女と正対する。

それからキアさんは話題を探すように一つ唸^{うな}って、

「そうですわね……お姉様とはどちらでお会いされたの？」

そう聞いてきた。

私は少し言葉に迷いながらも切り出す。

「日本で最初は……姉上が男装して私に会ってきました」

ところどころぼかしながら、私は今に至るまでの状況を話す。

それを……彼女は何も聞かずに聞いてくれた。

その途中で、私は直感的に思った。

姉上が絡んでいるのなら、もしかしたら彼女も——私と似たようなモノなのではないか？ と。

……

……

……。

「そうですね。私も似たようなものです」

私の話を聞き終えて発せられたキアさんは思い起こすように呟いた。

「不幸自慢、ではないですけど……私も色々ありました。私の目に光が映らなくなつてからは、イオリさんと同じように空虚でいて……けれど、私は音楽に出会つてからこうして今の生活を得る事が出来ました。きっと、見つける事が出来ますよ。

なにせ、お姉様が最後まで一緒に探して下さいます。だつてそう言う人ですから」
楽しそうに話す彼女は姉上の本当の姿を信賴してゐようだった。

もしかして彼女は姉上の本当の姿を見ていない——いや、”見えていないモノ”を見る事は出来ない。

本当の姿を知らないのではないだろうか？

無邪気に語る彼女はそんな気さえする。

私も姉上の本当の姿を見てはいないが……私の見えているモノが全てではない筈だ。

ピリリりと、何かのアラーム音が鳴る。

「あら……もう23時ですのね。寝る準備をしませんと」

言いながら彼女は立ち上がり、CDプレーヤーを机の上に置く。

平机のCDの影にデジタル時計があつたらしい。

それを取つてアラームを止めてから、彼女はイスの脇にあるステッキを手に取る。

かなりの日数をここで過すごしているのか、目が見えているかのように一連の普通の動作をしている。

「バスタブは2階にあります。先に入つて下さいな」

ここは、好意に甘えさせて貰うとしよう。

正直慣れない土地で少々疲れていたし、4時間も移動した事もあつて眠かつた。

「はい、ありがとうございます」

思つたよりも風呂が狭く、シャワーだけにして風呂を上げる。

それからキアさんが私の後に続いてシャワーを浴び、何故かコルセットに下着、その上にバスローブを羽織つて出てきた。

引き続き彼女の部屋にお邪魔していた私は少し驚いた。

何と言うか、なまめ艶めかしいと言ふべきなのだろうか？

濡れた髪と言ひ、色白の肌と言ひ、顔立ちも外国人特有の高い鼻とシユツとした顔立ちが……その……同じ女性である私ですら色つぽさを感じてしまう。

それからキアさんはパジャマに、かと思いきや……今日着ていたのとは違う貴婦人のような水色調のドレスを身に付けた。

「パジャマではないんですか？」

「朝は早い。それに寝起きだと着替えるのも一苦労なんですの」

目が見えないなりに普段の生活も変えないといけないようだ。

と言うよりも、

「どなたか、お付きの人とか介護関係の人はいないんですか？」

そこが疑問だ。

見た所、盲目の彼女一人しかこのアパートにはいない。

チャールズと言うマネージャーのような人が一緒なのかと思いきや、彼が帰ったところを見るに運転手であつて付き人と言う訳ではないらしい。

キアさんは首を振る。

「あまり他人には世話になるつもりはないの。盲目である事を良い事に色々つけ狙われる時もありますし」

どうやら人間不信のようだ。

実際、障害者を付け狙う犯罪者はいる。

これは勝手な予想だが、彼女も私と同じように何かしらのショックな出来事が過去にあるのかもしれない。

「それよりも、寝る時はそのベッドをお使いになって下さい。私はロッキングチェアで寝ますので」

「い、いえ……ここはキアさんの部屋では？ 別の寝床があれば私はそちらに——」

「実際、私はベッドではあまり寝ませんの。こんな格好ですし、布団から起きてステッキを採すのも大変なので」

言いながら彼女はロッキングチェアに腰掛け、薄い毛布のような物を被るとそのまま寝る体勢に入る。

話し掛け辛い状況になってしまった。

姉上が上がってこないところを考えるともう寝ているかもしれない。

ベッドをまじまじと見ると、彼女の言う通りあまり使っていないのか新品同様な匂いがある。

他に寝るところもなさそうなので申し訳なくそのベッドの上に寝転がる。

夏なので暑くはあるが、日本みたいに蒸し暑くないので寝心地はそれなりによかった。

そのまま私は意識を手放す。

……

……

……。

カチャリ、と言う音が聞こえて目が覚める。

今の時刻は夜中の3時頃。

体を起こしてみれば、ロッキングチェアにキアさんの影が見えない。

手洗いだろうか？

それはそうと、少し喉が渴いたな。

水道水は……やめておくか。姉上から話を聞くに水道水が飲めるのは日本くらいだ
そうだし。

一応姉上からある程度のお金は渡されているので、自動販売機でも探すとしよう。

私は持ってきた刀を腰に差し、外へと出る。

日本は比較的平和だが、海外ではそうもいかないらしいからな。

念のために帯刀はしておかないと。

ドアを開けて外に出た方がいいが……どこに何があるかさっぱり分からない。

ひとまず、ぐるりと近くを回ってみるとしよう。

物。　　と思つてどこから行こうかと首を回していると、左の方にドレスのような服を着た人

間違いない、あれは……キアさんだ。

しかし一人で、しかもこんな夜更けにどこに行くつもりなのだ？

不審に思うのが半分、心配が半分。そんなある種の半信半疑な感情を抱きながら私は彼女の後を追う。

そうして追い掛けていると、木々が見えてきた。

慣れているのか彼女はすんなりと道路の向こう側……木々のある方へと渡つてしまつた。

暗闇の林の中を私も追い掛ける。

入った先は、どうやら公園のようだと何となく分かる。

それからすぐに見えたのは池だ。

その池の畔ほとりに彼女は立っていた。

こんな所で何を……と思つていると、聞こえてきたのは歌声。

「~~~~~♪」

けれど歌詞はない。

発声練習なのだろう。

けれども、私には1つの歌に聞こえるような感じがする。

歌や芸術と言ったものに私は疎いが……私は今、魅せられている。眼が離せない。

私はそのまま、木の影から人知れずに見守り、聞き入っていた。

どれくらいの時かは分からないが、時間が経ち……歌は終わった。

特に心配する程の事でもなかったが、このまま影から見守るとしよう。

尾行していて今更出るのも正直恥ずかしい。

そう思つて去ろうとしていると、彼女に近付く怪しい団体。

足元がふらついている事から……かなり酔つてるな。

ただの酔つ払いだが、私とあまり年齢は変わらなさそうだ。

酒に酔つた奴らは何をするか分からない。

過去に武偵の任務で酔つ払いを相手にした事もあつたが……理屈は通じそうになつた。

とにかく早く彼女の所へ向かおう。

既にどうやらキアさんは眼をつけられたようだ。

駆け寄つて、私は彼女と酔つ払いに割り込むように体を入れる。

「Leave」

慣れない英語で簡単に私は話す。

「She is my girlfriend」

と、私は強く言ってみる。

意味はあつてるかが心配だが、すぐに少年の一人が面白くなさそうな顔をして——

「Shit, Boyfriend」

そう言つて去つて言つた。

待て、今ボーイフレンドとか言つたが気のせいか？

後ろでステッキでも突いたのか、カチンと音が鳴つたかと思うと後ろで笑い声が上が
る。

「ふふ、イオリさん。もしかして尾行してらしたの？」

「眼も見えないのにどちらに行かれたのかと心配で……すみません、勝手に」

「いえ、いいの。それよりもイオリさん、あまり英語は堪能ではありませんのね」

「え、ええ……日本人ですし」

「先程の言葉、彼らにはどうやら私の彼氏だと思われたみたいですよ？」

なに……？ 彼氏？

女友達と言う意味で言つたつもりだったが、間違いだったのか？

と言うか何故だ!? 私は女だぞ!

「さすがの男気だね、以織」

姉上の声が聞こえた瞬間に彼女が、ゆつくりと林の影からスカートにシャツと言うラフな姿で出てきた。

そのまま軽い足取りでこちらに近付く。

いつからいたんですか……それと声は地声ですけど、変装はされたままなんですわ

……

「さて、それじゃあ私から提案です」

にひ、と言った感じに姉上が笑う。

嫌な予感が……する。

「キア、以織を護衛兼付き人にどう？」

はい……？

「そうですね。日本人らしい誠実そうな人ですし、お姉様の選んだ人に間違いはないでしょう。それに先程の言葉に少しばかりとトキメキました、何より彼女だと言われてしまいましたから……」

「いやいやいや、ちよつとお待ち下さいませんか?！」

思わず口を挟む。

何やら唐突に変な方向に話が進んでしまっている。

姉上はこちらに手の平を差し出すように向けて問いかける。

「何か不満でも？」

「不満、と言うか話が唐突過ぎます」

「屋敷でほぼ剣しか振り回してないでしょうに、あんまり怠惰に過ごすのもよろしくないと思うけどね」

うぐつ……と思わず唸る。

痛い所を突かれた。

確かに屋敷の中で何をしたらいいのか分からず、軽い手伝いなどをしてはいるが、正直なところそれだけだ。

この短い期間で何かの役に立っているかと言われれば、全然だ。

「そ・れ・に、キアを見てれば何かを掴めるかもしれない、と私は思うのだけれどね。日本からこつちに来てまた移動って言うのも大変だけど」

「……………」

その姉上からの言葉に私は思わず黙り込む。

言葉に形容できないが姉上の言われた通り、何かを感じている。

何かを掴めそうなそんな感覚だ。

「しびびらく考えさせて下さい」

けれど、ハッキリとした答えを出せない。

私は姉上に向かってそう言う。

それから、

「戻りましょう」

そう提案する。

「ええ。ではゴメンなさい、手を引いて下さる？」

キアさんは誰に手を向ける訳でもなく手を差し出してくる。

それを私は手に取り、彼女が転ばないように気をつけながら舗装された道を通って公園の外へと向かう。

気のせいかな、キアさんの手を取る瞬間に姉上が私を見て少し微笑んでいたような、そんな気がする。

65：逆位置の死神

姉上からの誘いで知己の人物に逢いにロンドンへと向かい、そして夜を明かした。

あれから部屋へと戻ってきて私は寝てしまった様だ。今までの生活サイクルが抜けきれないのか妙に起きるのが辛い。

これも一種の時差ボケだろうかと思いつつも体を起こす。

ダメだな……こんな事では何のために武偵高を抜けたのか分からなくなる。

既にキアさんは下に降りているらしい。

少し急ぎ気味に部屋を出て階段を降りる。

そして、気付いたのは食欲を掻き立てられる匂い。

その源であるキッチンを覗いて見れば――

「お姉様の手料理なんて久方ぶりですわね」

「そうね。最近はどうせ外食なんでしょう？」

「まあ、実際そうですね。料理は……やろうと思えば出来ますけど……」

「見えなくても出来ちゃうあたり、あなたも大概よね」

「ですけれど何分、多忙な身になってきましたしたので。料理に時間を掛ける訳には行きませんし、片付けるのも面倒ですし」

「本音は後者でしょう。結構面倒臭がりなのも変わりないのね」

姉上とキアさんが談笑している様子。

疎外感を感じてしまう。

と言うよりも完全にあの中に入るタイミングがない。

「イオリさん？ 隠れてないでこちらに来て下さいな」

柱の影に隠れていたのだがあまり意味がなかったようだ。

キアさんに言われて居たたまれない感じに私は出ていく。

「何を隠れてコソコソしてるのよ？」

料理をしながらも変装した姉上が問いかけてくる。

コソコソしていたつもりではないのだが……

「いえ、一番遅くに起きてしまった上に仲良く談笑されていたので……」

「入りづらかった、と？」

的確にこちらの言いたい事を姉上が当ててきたので、にべもなく「はい」と私は答える。

「真面目ですのね」

「真面目と言うよりは律儀ね。硬いわよ」

感心したように呟くキアさんとは逆に、姉上は少し呆れたように呟く。食事が完成したのか姉上がよし、と声をあげる。

「シンプルにエッグトースターとコンソメスープにしてみたわよ」と姉上が言いながらテーブルに朝食が並べられる。

シンプルだが美味しそうだ。

「あら、良い匂い。でも私はパンよりもご飯が良いのですけれど……」
意外だ。

外国はパンが多いと思っていたのだがキアさんはそうではないらしい。

「何をワガママな事を言ってるのよ」

「せっかくお姉様が来てるのですからリクエストしておこうかと」

姉上の言葉にキアさんは遠慮なく答える。

少しばかり半目になった姉上は手間の掛かる、とばかりに呆れた顔をしてリクエストを聞いた。

「次に用意しておくわよ。何をご所望かしら？」

「スシですわ」

「来日する時は連絡してね、店を予約するから」

「そんなご無体な、後生ですから……」

キアさんはよよよ、椅子の上で泣き崩れる。

あからさまにウソ泣きな訳だが、役者なだけあつて演技が堂に入っている。

姉上の視線はさらに呆れたものに変わった。

「いつから日本文化に影響されたのよ……」

「食事からですわね。あまり口に残る食べ物好きではありませんの。生地を使った料理つてもつさりしてますし」

先程の泣き演技から一転してケロつとした感じで姉上に答えるキアさん。

切り替えが早い……

「そう言うのは以織に頼んでちょうだい」

「そうですわね」

「ちよつと待つて下さい……」

姉上の一言で矛先がこつちに。

何か弁明しないと。

「私、寿司なんて握った事ありませんよ？」

「日本人ですのに？」

「キアさん、日本人が誰でも寿司を握つてる訳ではないんです」

「でも、あなたが腰に着けているのは——」

そう言つてキアさんは私の腰あたりに顔を向ける。

佩刀はいとうしていれば嫌でも音が響く。

目が見えなくも何かは分かるはずだ。

「マグロ包丁ではありませんの？」

「違います」

全然分かつていなかった。

的外れな解答に反射的に否定する。

そんなものを腰にぶら下げて歩いていれば変人にも程がある。

「ではカジキを解体するのに使うのね」

「魚から離れて下さい」

それにカジキもマグロです。

「ふふ、冗談よ。食事にしましょう」

楽しそうにキアさんは微笑みながら食べ始める。

この手の人は苦手だ。

最初はお嬢様と言う感じかと思つたが、思つたよりもふわふわとした人だ。

私も席に着き、食事をとる。

.....

.....

.....

食事が終わり、せめて片付けはと思い私が食器を片付けて後始末をする。

私に任せたとばかりに、その間にも2人は何やら準備をしている。

「以織ー、片付けは終わったかしら？」

「終わってますけど、帰るんですか？」

手を拭きながら後ろにいる姉上にゆっくり振り向きながら聞く。

「いや、しばらく帰らないことにしたわ」

.....はい？

「帰らないことに、って」

「ああ、大丈夫。キアにしばらく部屋を使って良いって言われたから」

「いえ、そう言う問題では——」

「ごめんね。ちよつと用事が出来たのよ。あとはよろしくね」

「姉上！」

そう言つて足早に、外へと出ていってしまわれた。

呼び掛けにも反応を示さずに。

よろしくね……と言われても何を、どう、よろしくしろと言うのだ。
続いてキアさんが姉上と入れ違うように階段から降りてきた。

「イオリさん、どうかされたの？」

「いえ、姉上が足早にどこかへ行かれてしまつて」

「お姉様ならイオリさんを私の専属ボディガードに言う事で色々と手続きをしに行
かれましたわよ？」

「姉上ええええええー！！」

キアさんの言葉を聞いてすぐさま玄関を飛び出す。

正面。

右っ。

左ッ！

いないッ?!

あの短時間で既にどの通りにもいない。

探そうにもどこに行つたかは不明、しかも私には当たり前だがロンドンに関しての土
地勘がない。

搜索は開始する前に既に終わっていた。

くっ、ここまでか……

と言うより昨日の私の発言は無視ですか。

思わず膝を突く。

「大丈夫かしら？」

「何も大丈夫じゃありませんよ」

背中を向けたまま心配するキアさんに答える。

「専属ボディガードなんて嫌だった？」

「嫌、ではありませんけど昨日の今日で話が急すぎます」

さすがに人目があるので膝を突いたままではいけないと思い、立ち上がりながら私は言う。

「では、よろしいではありませんの」

「良いんですか？ 昨日が初対面の何も知らない人ですよ？」

振り返って聞きながら見たキアさんの表情はニコニコとした笑顔。

顔の近くで両手の指を合わせてご機嫌そうだ。

「もしや——」

「姉上と共犯ですか？」

「ふふ、いえ、責任をどう取って貰うか相談したらそんな感じになりました」

「話を纏めてる時点で同じです」

「でも、初めて……でしたし」

「やめませんか、そんな意味深な顔で変な言い回しは誤解を受けます」

「つまり誤解ではなく事実にしてしまえばよろしいのね」

「何もよろしくありません」

「大丈夫、殿方の悦ばせ方なら心得てます。問題ありません」

「問題だらけですよ！」

最初の私の印象を返して欲しい。

しかし、これから一体どうしたものか。

と思っていると、目の前に黒塗りの車が止まる。

降りて来たのは先日にも会ったチャールズだった。

「おはようございます。本日も珍しい晴天ですよ、キア」

「そうでしたの。通りで陽射しを……それではイオリさん、私はこれで。昨日と同じ時間に終わる予定ですので、出来れば迎えに来て頂けると嬉しいです。鍵はお渡ししておきますから」

「あ、いえ、ちよつと!?!」

私は無理矢理に鍵を握らされて驚いている間にも、彼女はチャールズに手を引かれて車に乗り込み去って行ってしまった。

まさかの展開にどうしていいか分からず、立ち尽くす。

と思つていれば、目の前に違う車体が目に映る。

あれは……

「おー、いおりん。こんな所にいたんだ」

窓から顔を覗かせたのは理子さんだ。

そして、運転席に乗つてるのはメイドのリリヤさん。

「どうしてここに？」

「いやー、お姉ちゃんがいおりんの分も含めて数日分の着替えを持ってきてつて言われてさ」

言いながら車から降りて、理子さんはトランクの方へと向かう。

姉上、いくらなんでも手が速すぎませんか？

「てつきり迎えに来て欲しいって連絡かと思つてただけだね」

最後に、困った人だよ、と言う割には嬉しそうに微笑む。

それから大きめのトランクケース2つが取り出される。

「ま、しばらく私とリリヤもロンドンにいるし……何かあつたら言つてちょうだいな」

理子さんはそれから助手席へと戻る。

席に着いてそのまま発進するかと思いきや、何かを思い出したかのような顔をして窓

を開ける。

「出掛ける時は気を付けてね。日本ほど治安はよくないし、夜道は特に危ないから。最近のロンドンには死神がでるらしいよ?」

「死神、ですか?」

「そうそう。まあ、それっぽい格好した犯罪者の類だと思うけど……何にしても気を付けてね。それじゃ」

その言葉を最後に、理子さん達は走り去ってしまった。

取り敢えず、荷物を部屋に入れるとしよう。

……。

……。

……。

やる事もなく、暇を持て余す。

初めての土地で鍛錬に向いているような場所があるかどうかも分からない。

鍵は手元にある。

なので出掛けようと思えば出掛けられるが、言葉が通じない中で出るのは正直不安だ。

初めての土地、不安もあるが……冒険心が無い訳ではない。

どちらにせよここにおいても何も変化はない。

連絡手段はあるのだから、いざとなれば連絡をすればいいだけだ。

私は思い立つようにキアさんのアパートを出る。

それからアテもなく、私は周辺を散策する。

道は色々な所に続いてはいるが、私はどこに行けばいいのか分からない。

同じような景色ばかりに見える。

私の周りでは色々と変化が起きてはいる、が……私自身は何も変わってはいない。

姉上と出会った時に、心の隙間が少し埋まったような感じはした。

だがそれだけで、未だに埋まらないモノはある。

剣を振っていても虚しさを感じる。今の私の刃には何の想いも乗ってはいない。

それが分かっている、どうしようもない。

本当に私は……生きる意味を見い出せるのだろうか？

1人でいるとそんな事ばかりを思ってしまう。

「Hey, Girl!」

唐突に私に向かって掛けられる声。

声のするほうを見れば、スーツ姿で金髪のオールバックの青年が家の壁を背にして、

黒いテーブルクロスのようなものが掛かった机の前に座っていた。

回りを見ても人はいない。どうやら本当に私に声をかけたようだ。

自分自身を指差して、私？ とジェスチャーで伝えると彼はにこやかな笑顔で頷く。

あまり英語が分からないし、胡散臭い感じがするのだが……いざとなれば叩き伏せればいいだろう。

私は彼の目の前に来ると、イスに座るように示される。

それからマジマジと私を見てきて、

「うん、どうやら日本人……のようだネ」

たどたどしい日本語で彼は喋った。

「喋れるんですか……」

「少しだけネ。あんまり上手くはないけど、取り敢えずハジメマシテ」

変なイントネーションが入りながらも彼は気さくに挨拶をしてきた。

私は戸惑いながらも挨拶を返す。

「初めまして……」

「うん、急に声を掛けてすまないネ。キミに少し気になるものを見てネ」

「気になるもの？」

「そう。私は占い師をシテル、ワイズと言います」

占い師、か。

失礼だが、通りで胡散臭い訳だ。

彼はそんな辛気臭そうな職業とは反対に明るく、笑顔だ。

「唐突ですが、アナタ……とても迷つてますネ？」

「……………」

陽気そうな声とは裏腹に的を射たワイズと言う占い師の言葉に、私は無言になる。

「Oh……深刻そうですね。あまり力ちからになれないかもしれませんが、気休めに占つてみますか？」

何かに縋すがりたい私は、道を指し示してくれるなら何でも良かった。

静かに頷く。

彼は慣れた手つきで何かのカードを並べ、切り、1つの山札にする。

「占いと言つても、大袈裟な事はシマセン。全ては、その人の手の中にあります」

つまり引け、と言う事なのだろう。

引いた1枚目は2本のバトンを持った裸の女性が描かれたカード。

「フム、世界のアルカナの正位置。運命の出会い、あるいは何かの完成……つまりは良い事があるようです」

本当にそうなのだろうか？

今の状況では、俄にわかには信じ難い。

「今は未来から順番に占つてます。引けば引くほどに、近い未来が見えてきます。あと2回ぐらい引いてみますか？」

ワイズはカードを取つて、よく分らない並べ方をし、山札に戻す。

この戻し方に占いの意味でもあるのだろうか？

そう思いながらも2枚目を引き、同じように戻し、3枚目を引く。

「2枚目は逆位置の正義、3枚目が逆位置の死神……ですカ。どうやら、困難な道のりになりそうデス」

「つまり？」

「アナタには近い内に転機が訪れます。新しいチャンスです。しかし、その為には今までアナタのバランスを保っていたモノがなくなりマス」

「……………」

「大丈夫デス。最後にはきつと何かを得ているはずデス。ですが、それまでは自分自身を見失うかも知れませン」

不安な内容だ。

占いと言うのを信じている訳ではないが、それでもあまり良い気分ではない。

「ありがとうございます」

「お代はいらないです。アナタに幸運を」

一応お礼を言つて席を立つ。

お代は良いのだらうかと思つたが……

振り返つてみれば彼は笑顔だ。

本人が良いと言つている訳だし、このまま行くとしよう。

◆ ◆ ◆

以織が離れたのを見て、私は路地裏から出てワイズに話し掛ける。

「いつからマジシャンから占い師になつたのかしら？」

「本職はこつちだよ、それに今でもマジシャンをやつてる。ただ単に色々をやつてみたくてね」

流暢な英語で彼は答える。

「それよりも久しぶりのご登場だね。師匠^{マスター}」

「まあね、まさかこんな所で出会うとは思わなかつたけど」

「僕は思わぬ再会があると知つていたけどね」

なるほどね。

的中率は良いみたい。

「今では逆位置^{ウイザ}の魔術師^{サド}なんて名前が出回つてるらしいけど？」

「最近になって名前が売れてきたんだよ」

彼はそう言いながら胸元のハンカチを取り出して軽く振るとシルクハットに様変わりする。

それから黒のテーブルクロスを引つ張るとあら不思議、被せていた机とイスが消えた。

どう言うタネと仕掛けやら。

「それはそうと、近い内に新しいステージが出来るんだけど……どうかしら？」

「ああ、そう言えばそうだね。もちろん、参加するよ……最近マジックをする助手が足りなくて」

そう言つてワイズは目を細めて笑つた。

「それでは僕はこれにて。またゆつくり話せる時に、今日は色々とよろしくないみたいなので」

言いながらワイズはタロットの正位置の死神のアルカナを見せる。

それではまた、とお互いに言つてワイズはどこかへと去つて行く。

やれやれ、随分とイイ笑顔をするようになつちやつて。

これは以織の方が少し心配かな？

用事を終わらせたら注意しておかないとね。



ロイヤル・オペラ・ハウスに向かう道中。

日が傾き、まだ明るさが残る中を私は歩いて行く。

人通りの少ないどこかの小道。

中世の街並みを思い起こさせる風景で、落ち着いた雰囲気だ。

そんな中で考えるのは占い師の言葉……私が私でなくなる、とはどう言う事なのだろうか？

最近は何も掛かって思い悩む事が多すぎる。

気持ちは晴れない。

そして——唐突に耳に入る絶叫。

なんだ……?!

すぐさま駆け出し、聞こえてきた方向へ。

理子さんの言う通り治安が悪いのは本当だと思わせる程に問題に出くわすのが早い。

まさか言われた日に起きるとは。

だが、私は元々は武偵。

職業柄とも言うべきか、捨て置く事は出来ない。

すぐさま声がした方向の細い小道を調べる。

1つ目……違う。

2つ目……曲がり角に近づこうとした時、角から手が見える。

思わず足を止めて刀に手を掛ける。

出てきたのは黒髪のイギリス人の青年。

壁に手を突きながら、その顔は息も絶え絶えで恐怖に染まっている。

「H e …… H e l p …… !」

私を見つけて助けを求める青年。

すぐさま彼の所へ行こうとした瞬間に、彼の背後から見える黒い何か。

街灯に薄く反射するそれは……鎌。

全神経が嫌な予感に警鐘を鳴らす。

「待て……よせえええええ！」

私が駆け出し、手を伸ばそうとした時、

——鎌は青年の首と体を角の向こうへ持つていく。

呆然と見る事しか出来なかつた。

音もなく、声もなく……あの角には死がある事を明確にする出来事が目の前で起き

た。

角の向こうからドサリと何かが倒れる鈍い音と同時に、角から先程の青年の頭が転が

る。

高鳴る鼓動に冷や汗。

床が傾いているような気持ち悪さ。

刀の柄を力強く握り締めて気を保つ。

そして、角から別の人物が出てくる。

徐々に見えてくるのは黒いローブに、ブーツ、身長より大きい鎌。

——死神——

そう形容するに相応しい出で立ち。

私を視界に捉えたのか、死神が体をこちらに向ける。

「お前は……誰だ？」

気力を振り絞り、問いかけた言葉。

流れるのは沈黙。

「何者なんだ！」

私が怒号のように叫ぶも、死神は何も反応しない。

肩に乗せた鎌を振り払って、垂らすように持ち替えただけだ。

次の瞬間にフワ、とローブが揺れたかと思うと爆発的な加速と共に突っ込んでくる。

水平に跳んでくる?!

死神は体を捻ったかと思うとコマのように回転し出す。

鎌が、丸鋸まるのこの如く迫ってくる。

確実にこちらを仕留めに来ている……!

すぐさま首に迫る鎌を、鞘から完全に抜かず半分刀身を出した状態で防ぐ。

いや……これは鎌の部分じゃない、鎌の柄だ。

直後お腹に感じる衝撃。

「かふッ」

漏れ出す息。

蹴りによって体重が後ろへと引かれるのを感じた瞬間、私は思いっきりしやがみ込む。

頭上を刃が通り抜ける音がする。

今で遅れていれば首が後ろから飛んで行くところだった。

!? ——風切り音!

私の左から迫る鎌。

死神は腰の後ろで鎌を横にしてクルクルと右足を軸に、回って間合いを詰めてくる。

狙いは私の左脚か!?

向かって来た鎌を下からの切り上げで僅わずか上に逸らす。

頭上を刃が抜ける。

これでしゃがんだまま、死神に向かうしかない！

間合いは鎌の方が長い。つまりは懐ふところに、距離を詰めれば活路が開ける。

足に力を込めて滑空するように死神の足元を通り抜ける。

このまま……足を掬すくう！

刀を返し峰で死神の足を捉えようとした瞬間に、フワとまるで綿毛のように死神が浮いた。

何——!?

そのまま軸にしてた右足が眼前に迫り、鈍く光るものを見た瞬間に私はもう一段階跳び、右脚の上を飛び抜ける。

完全に一撃を入れるタイミングを逃した、が……死神の横を完全に抜けた。

私はそのまま前回り受身をして、真っ直ぐに走る。

あのブーツ……暗器が仕込まれていたようだ。

しかもあの状況で喉元を狙って来た！

——次元が違う。

今まで私が相手にしてきた犯罪者とは、格が違う。

そう直感が私自身へ警告してくる。

先程の青年の仇かたきを討とうとは思わない。

相手をすればそれこそ青年と同じ姿になる。

……逃げるしかない。

今の私の剣では、自分さえも守れないと知ってしまったている。

——ギイン！

なっ……!?!?

上から落ちてきた私の行く手を遮る大鎌に私は驚愕する。

足を止めれば、地面に刺さった大鎌の柄の上にフワリと座り込む死神。

重力を感じさせない程にゆったりと降りてきた。本当に死神だと思わせられる。

これは報いか？

私が復讐を果たしたが故の対価。

因果と言うヤツなのか？

『忘れたのか？ 父から私が教わったのは、活人剣じゃない——殺人剣だ』

待て……何故あの時の夢の言葉が出てくる。

『活^{生き}かす為には殺すしかないんだ』

——違う。

『父はそれを知っていた』

——違うッ。

『劍の在り方なんてそんなものだ』

——ち、が……。

『いつその事、心を殺してしまえば……命は助かるかもな』

思わず店のショーウィンドウに映る自分の姿を見る。

そこにはあの時の夢に出てきた私のようなモノが語り掛ける。

『逆に言えば、命を差し出せば心は助かるな。悩む事も、苦痛も、その業ごうからも解放される』

——そんな……なの。

『だが、せつかく手に入れたものも手放す事になる』

——……………。

『もうそろそろ答えは出すべきなんだ。選べないのなら——』

——心を活かしたまま死んでしまえ。

自分自身だと思えない言葉。

ここで、死ぬ……？

私が真実を知った時は姉上が助けてくれた。

けれど、今は違う。

私はまだ活きたい、生きたい。

私はまだ、やっと得始めたばかりなのに。

私はまだ、ここに在りたい。一緒にいたい。

選ばなくちゃ……私自身を活かすにはどうすればいいのか。

選ばなくちゃ……

……。

……。

……。

——私が活いきるには——

——殺さなくちゃ。

何かがプツリと切れ、私の中で消えていく。

刀を抜き、鞘を捨てる。

もう納める必要なんてない。

死神を斬れば、私は活いきれる。

考えるのはただそれだけ。

ただひたすらに、死中に活いを求めぬ。

音を越えるように踏み込み、跳ぶ。

狙うは死神の首。

振り上げ、構えられる大鎌。

そのまま真つ直ぐに飛び込む。

私の首は死の境界に入り、死が迫り来る。

左から迫るソレを、左下から切り上げ、上に。

そのまま私は回つて跳び上がり、死神の首を飛ばす。

私は死を越えた。

刀を振り払い、何の感慨もなく振り返る。

見えたのはヒラヒラと舞うローブの切れ端。

死神の姿が……

——ない。

……!? 後ろに気配!

即座に振り返り、下から迫る大鎌を刀の柄と峰を持ち、さらに後ろに飛んで防ぐ。

火花が散るほどの速度で鎌の外側と刀がぶつかる。

そのまま死神が跳び、空中で後ろ向きに回ったかと思うと今度は刀が鎌の刃の内側に引つ掛かりそのまま上へ弾き飛ばされる。

鎌の重量を使つて踊る死神。

狙われる首はしやがみ、次に狙われた足を跳んで躲す。

3 撃目は蹴り。

さすがに空中では、何もできない。

「かはっ」

背中に来る衝撃。

どうやら壁に叩きつけられたみたい。

ザクリと言う音と一緒に手足に圧迫感。

三日月型の刃が手足を地面と壁に私を縫い付ける。

抜け出そうにも力が入らない位置。

迫り来る死神が街灯に足元から照らされる。

どうやら切つたのはロープのフード部分だけ、だったんだ。

あまりにも集中し過ぎて手応えなんて分からなかったし、考えてなかった。

死神に顔なんかあるのだろうか……と変な考えをしていると、見えてきた。

……。

………キア、さん？

そんなはずは、と思つて見てもその顔は……確かにキアさんだ。

でも、あの人は目を開いてはいなかった。

それに雰囲気も違う。

世の中には自分と似た人が何人かいると言うヤツだろうか？

この状況で何をどうでもいい事を考えてるんだらう、私。

………。

……諦めてるんだらうな。

だつてもう、この状態じゃ足掻けない。

結局は伽藍堂がらんどうのまま、私は死ぬんだ。

せつかく生きようつて決めたのに。

まだ掴めてないモノがあるのに。

こんな所で終わるなんて……

「う……ッ……グス」

抑えられずに溢れる感情。

父上、私は……今から会えそうです。

今度は独りじゃない事を願います。

姉上、短い間でしたがもう少しあなたとあなたの家族と共にいたかった。

それから……

——ありがとうございます。

「はいはい、そう言う感動のお別れはもう少し待つてねー」

不意に聞こえた声。

振り下ろされようとした大鎌の柄を握って止めているのは、最近見慣れた後ろ姿。

「まさか、私がこんなヒーローっぽい登場をするとはねー」

軽い口調で言いながら姉上は死神にメモのような何かを見せる。

それからいくつかページをめくる音が聞こえ、しばらくすると——

死神は鎌を下ろして静かに目の前から去って行く。

路地裏の闇に消えたかと思うと、少し強い風が吹いた。

「帰っちゃったか」

ふう、と姉上は一息吐くと私を傷付けないようにしながら拘束していた物を蹴って

軽々と解いた。

瞬間、体は自然と姉上の方へと向かって行く。

「いめん、なさい」

そのままただ一言、うわ言のように私は眩いて意識が消えていく。

◆ ◆ ◆

いきなり以織が胸に飛び込んできたと思ったら何か、謝られた。

一体、何に對しての謝罪なんだか……

しかも抱きとめた瞬間に脱力したこの感じ……完全に氣を失つてる。

やれやれ、まさか以織が死神に出会う事になるとは。

占いも本当にバカに出来ないね。

いや、実は途中からは見てただけども。

何か成長出来そうな感じだったし即座に介入はしなかった。

ちよつとは何か変化のきつかけになると良いけど。

でも、余計なトラウマを与えちゃったかな？

変な後遺症でも残らないと良いけど。

しかし、謝った時の以織……結構弱々しかったな。今までで一番に女の子らしかったかも。

安心したって言うのもあるんだろうけど、普段から氣丈に振舞つてたその反動かな？

氣丈に振る舞う事で自分を奮い立たせて、孤独に耐えてたのかもしれない。

この子の性格上としては案外ありえる。

さてと……回収するものを回収してキアの所に帰ろう。

それとキアに色々と話しておかないとね。

音もなく、私達は誰かに見つかる前にその場から去る。

66：時は金なり

「Good morning!」

朝の玄関先から聞こえて来る理子妹の声。

あれから少々日数が経って……って言っても2日ぐらいだけど。

場所を移さずキアの部屋に入り浸っている。

本人は賑やかな雰囲気を楽しんでるみたいだし、色々と手伝いもしてるから助かってるだろうけどね。

「お姉ちゃんどうしちゃったの〜? 何か考えごと?」

キッチンのダイニングテーブルの椅子に腰掛けた未だに変装中の私を発見した理子はそう聞いてくる。

その手にはビジネスバッグを持つてる。

「ん〜? 少しばかり以織の事で考えててね」

「いおりん、どうかしたの?」

「例の死神に襲われた」

「わー……思ったよりも深刻な内容をしれつと言った」

事実をどう取り繕っても、現実は変わらない。

だったら誤魔化しても仕方ないからね。

すぐさま理子は気になってか聞いて来る。

「本人は？ どうなっちゃったの？」

「別に特に異常はないけど、ちよつとばかり変化はあつたわね」

死に直面して、何かしらのたがが外れたのか……何かを得て何かを喪失した、ざっくりと言えよそんな感じ。

本人は気付いてるようで気付いてない様子。

まあ、何にしても夏を境に人が変わるのによくある事だよ。

以織の事もそうだけど、問題は――

私の中で衝動が大きくなってるって言う事。

今すぐ狂って誰彼構わずって言う感じにはならない。

そんなのはとつきの前に制御が出来るようになってる。

問題なのは“衝動自体”じゃない。

その“周期”、なんだよね。

私の衝動はそう頻繁ひんぱんに起こるものじゃない。

常に火種くそぶが燻くすぶってる様なものだけど、我慢できない程ではない。

爆発するとしてもかなりの期間がある。

大体は半年くらいまでなら我慢できる。

最後に殺したのは4月の頃……たった3ヶ月、いや、もうじき4ヶ月か……しか経つてない。

周期が短くなってる。

そんな日もある、と言う訳じゃない。

この周期はそんなに大きく早まったり遅まったりする訳はない。

原因は……まあ、あるよね。

イ・ウーでの『共鳴現象』が十中八九、原因だろうな

色金を使えば使う程に、私は衝動に吞まれていく。

色金の力と衝動を思うままに振るえば……きつと気持ちいいんだろうな……

でも、それじゃあ楽しくないんだよ。

どうせ、そうして全部壊して行つたところで残るのは虚しさだけなんだ。

ゲームでチートを使って楽しいのは最初だけ、すぐに面白くなる。

だから私はあんまり色金を使うのは好きじゃない。

例え、自由に扱えたとしてもね。

しばらく色金を使わなかったら周期は元に戻るだろうけど、問題は現状をどうする

か。

この感じだと2週間以内には我慢の限界が来そう。

どうしようかな……以織の事もあるのに。

「はあ……」

気のせいかな何となしに吐き出した息に熱がこもってる気がする。

「何、今のエロい吐息」

「ちよつと熱っぽいかもしれないわね。理子、私の様子おかしかつたりしない?」

「いや、いつも通りのような……けど何て言うんだらう。何となくだけど、怖い雰囲気
が」

殺気でも漏れてるのか、案外自分では気付かないもんなんだよね。

色金の力まで漏れてないといいけど。

理子は心配するように私の近くに来て顔を覗き込むようにして聞いてくる。

「もしかして、いつもの衝動?」

「当たり前よ。この間、色金の力……共鳴して反応しちゃったからでしょうね」

「そっか。実はね、ちよつどお姉ちゃんに仕事の話があつて来たの」

「仕事……?」

「うん、ソフィーからね。もしかしたらお姉ちゃんの事を見越して私とリリヤに頼んだ

と思う」

以織の服を届けて貰うついでに下調べをしてたつて訳ね。

ありがたい話だよ。

「内容的にはきつと今までと似たり寄つたりでしょうね」

誰かを解体したり、どこかの施設を破壊したり、どこかの組織に潜入して情報を入手したり。

私の大体の仕事つて言つたらそこら辺だよね。

「大体はそうだね。だけどまあ、ただでさえ有名なお姉ちゃんがいギリス政府が血眼になつて探してるロンドンで活動するのは、結構危険じゃないかな？」

「別に捕まりはしないわよ。メヌエット・ホームズが私の事を推理しない限りは……まあ、推理して情報提供したところであちらにメリットは無いからね」

あの子の事だから、きつと私の背後に何かがあるかはおおよその見当は出来てるだろうし。

”それ”を敵に回したいとは思わないだろうね。

何よりも彼女には手元に自由に動かせる駒がない。

彼女の教唆術がいかに優れていても、政府の連中に頼つてたのではワンテンポ遅れる。

手数はこつちの方が多い。

お姉ちゃんと同じく頭脳勝負したら……どうなんだろうね。私にも分からない。

まあ、それは今は置いておこう。

「それでどう言う仕事かしら」

「分類的には暗殺、かな？ 中東で人身売買をしてるディーラーらしいんだけど、何でターゲットに選んだかはよく分かんない」

理子は眉を寄せながら資料をビジネスバッグから出して見せてくる。

理子から受け取ったそれは、簡易的なプロフィール資料。

へー、女性なんだ。

女性が人身売買のディーラーなんて珍しい。

でも顔写真を見る限り、軽くヤバイ薬をやってる顔してるよ。

……そうだ、良い事を思いついた。

ついでに理子に先に紹介しておこう。

「それじゃあ、今日の夜に軽くミーティングね。ついでに紹介したい人もいるし」

「いおりんは？ どうするの？」

「そのままゆつくりさせておくわよ。まだあの子には早そうだし」

私の答えに理子は「それもそうだよね」と言つてどこか納得したような顔をする。でも、近い内に以織はもう一つ経験をさせておかないとね。

有名なビツク・ベンの時計塔に明かりが灯り、その長針と短針が一番上に重なりそうな頃、私達はタワーブリッジの橋の下にいる。

ちなみにリリヤは車の中でお留守番。

真夜中にメイド服は目立つ。

「こんな所でミーティングね」

理子は周りを見渡して感慨もなく感想を述べる。

ここはタワーブリッジの渡り始め、その下にある小さなトンネル、そしてテムズ川に沿うように作られた長い舗装された道の所だね。

私はテムズ川の方を見ながら理子に語り掛ける。

「別に誰が見てるわけでもないし、問題はないでしょう?」

「でも、ロンドンに死神が出るって言うし……理子としてはあまりエンカウントしたくないかな?」

「もう遅いと思うわよ?」

私がそう言うと、首を傾げる理子。

さりげなく私は顔を動かして理子の背後が見えるくらいに視線を動かす。

そこには黒いローブを纏まとった”死神”。

理子は気付いてない。

でも、すぐにゾワリと何かを感じ取ったのか体を震わせる。

ゆっくり振り返って、冷や汗を流す理子。

すぐさまワルサー引き抜いて、死神に正対するように構える。

「お姉ちゃん……噂って当てにならないのばかりだと思つてたよ」

まあ、理子の言いたい事も分かる。

噂なんて背びれ尾ひれついて当たり前。

実際に見て理子もすぐに分かっただろうね。誇張表現無しの本物だつて事が。

私は焦る事もなく悠々と死神に向き合う。

さて、そろそろ一つネタバラシしようかな。

「理子、銃を下ろしなさい」

私はそう理子に頼む。

少しだけ間を置いて理子は、

「……お姉ちゃんがそう言うつて事は、知り合いつてオチ？」

銃を下ろしながら半目で私を見てきた。

最近はパターンが読めてきちゃったかな？

「ご明察よ。簡単に言えば、理子の妹弟子かしらね」

「死神が妹弟子なんて言われて理子はどうすれば……ん？」妹弟子？」
「そうよ」

死神は自らローブのフードを上げて、その素顔を晒す。

それはキアと瓜二つの顔。

理子が何かを言う前に私は答えを言う。

「紹介するわ、彼女はミア・イレヌ・アドラー。キアの双子の妹よ」

◆ ◆ ◆

お姉ちゃんから紹介された妹弟子。

その正体はロンドンの死神で今流行りの新人オペラ歌手の妹でしたー♪

……なんて、内心でおちやらけて見たけどそう言う気分にはなれないよね。

だってあの子——”目が死んでる”んだもの。

何て言うか、世界に絶望して全てをどうでもいいと思ってる……そんな目だ。

そんな目になる気持ちは分かるよ。

あたしも自分の境遇に絶望した時があつたから。

間一髪でそうはならず済んだんだけど、あのままだったらって考えると今でも怖気

が走る。

「そうだったわ、あの子にも説明しておかないと」

お姉ちゃんはそう言いながら、メモとペンを持ってミアに近づく。

メモとペンを持つ意味がよく分かんないけど……考えられるのは、筆談ぐらい。

もし仮に筆談だったとしたら、もしかしてあの子——

何て考えてる内に対話が終わったのかお姉ちゃんとミアがこちらに歩いてくる。

立ち止まったミアはあたしを静かに見て、ローブの端を摘つまんで片足を斜め後ろの内側

に引いて、もう片方の足の膝を曲げてお辞儀をした。

まさか、ヨーロツパでの伝統的な挨拶である『カーテシー』を生でされるとはね。

このミアって子、育ちは悪くないみたい。

目は死んでるけど……

一つ気になる事があるから、あたしは半分確信めいてお姉ちゃんに聞いてみる。

「お姉ちゃん、もしかしてこの子」

「——」聞こえてない”わよ”

やっぱり、ね。

「正確に言うとは難聴なんだけど、全く聞こえてないと言っても差し支えないわね」

医学知識のあるお姉ちゃんはそう付け加える。

「ねえ、お姉ちゃん……」

「何かしら？」

「前に、あたしに家族に誘ったのは2人って言ったよね」

「ええ、そうね」

「1人は歌手でもう1人はマジシャンだって聞いた気がするんだけど……」

明らかにマジシャンって感じの雰囲気の子じゃないんだけど。

誰かを楽しませるところか、悲しみに叩き落とすような事やってそうなんだけど。

「家族に誘ったのは2人だけど面倒を見たのが2人とは言っていないわよ」

また 屁理 屈 か。

思わず笑顔で言うお姉ちゃんに対して半目になる。

それに、お姉ちゃんの事だから例のオペラ歌手の姉と合わせてこの子も余程な過去がありそう。

聞きたくないけど、どうやって知り合ったかは聞きたいような。

知り合いが増えるのは嬉しいんだけどね、もう少し普通の人……いや、お姉ちゃんが絡んでる時点でその可能性はないか……

「それで？ どうせ訳アリなんでしょ」

「もちろんよ。聞きたいの？」

「出会った経緯が気になるかな」

お姉ちゃんは少しミアを見て、軽く彼女の頭を撫でる。

本人は撫でられた瞬間、驚きからか目を閉じたけどあまり抵抗せずに素直に受け入れてる。

「キアとミアに出会ったのは——」

ちよつとした昔話でもするみたいにお姉ちゃんは語り出す。

彼女達の過去を。

◆ ◆ ◆

姉上の姿が見えない。

もう夜中だと言うのにどうやら未だに帰ってきていないらしい。

「ふふ、イオリさん。寂しいの?」

「いきなり何ですか?」

ロッキングチェアに腰掛けたキアさんは私に向かって慈愛に満ちたような表情をしながら聞いて来る。

彼女が行儀よく座っているその姿はまるで人形のようにだ。

それよりも、私が寂しい?

どちらかと言うと姉上を心配してるんだが。

そこら辺の者に遅れを取る訳はないだろうが、それでも離れていると落ち着かない。この間の死神の事は……気にならない訳ではない。

だが、聞こうにも姉上がいけないのだから気にしても致し方ないだろう。

その前に――

「私は……姉上が心配なだけです、勘違いしないで頂きたい」

「心配と言うにはソワソワし過ぎな気もしますけど。そうね……例えるなら飼い主の帰りを待つ子犬みたい」

「誰が子犬ですか！ 私はそんな甘えたがりではありません」

「そう言う事にしますわ」

その私の弁明にキアさんは微笑み流すだけだ。

この感じだと、違うと弁明してもそのまま流されるだろう。

私はふと、気になった事を聞いてみる。

「聞きそびれていましたが、キアさんは結局姉上とどのように知り合ったのですか？」

私の質問にキアさんは少し迷うような表情をして、言う。

「あまり気分の良い話ではありませんわよ。それでも、お聞きになりますか？」

「どうやら触れてはいけなさそうな雰囲気だ。」

と、思いきやキアさんは一転して、

「なんてね。別に隠す程の事ではないですし、気になさらないで下さいな。気分が悪い話には変わりないでしょうけど」

何でもないとばかりに語った。

よく分からないが、私には悲痛な過去があるように思えてならない。

彼女が盲目的理由——そこに何かがあるような気がする。

「別に話さなくてもいいですよ。ちよつと気になつただけですから」

「優しいのね。でも、色々と勝手にお話を進めちゃつてるから……それにイオリさんだけお姉様と出会つた経緯をお話されたのに私だけ話さないのもズルいでしょう？」

そう言うものだろうか？

「イオリさん、私ね……本当にあなたが気に入つたの。勝手な想いかもしれないけど、私はあなたに私の事を知つて欲しいの」

……なんだろうか。

何と言うか、キアさんの言葉がプロポーズっぽく聞こえてしまう。

本人にそんなつもりはないかも知れないが、彼女の美声が妙に心に響き、女性である私でさえドキリとしてしまう。

それよりも……状況的に強引にでも話し出しそうな雰囲気だな……

私は諦めて呆れ気味に降参する。

「分かりましたよ」

私の言葉にキアさんは表情を緩ませて、

「そうね……どこから話したものかしら」

とどこか楽しげに出だしを迷っている。

「まずは……そうですわ！ 実は私には家族がいて、妹がいますの」

「妹さん、ですか？」

楽しそうに話し出すキアさんに思わず聞き返す。

何故ならこの部屋に寝泊まりして数日、私達とキアさん以外に誰かが訪れた覚えも形跡も特にないからだ。

「ええ、けれど妹はなかなか私に会いに来て下さらないの。まあ、原因は私にあるのでしようけれど……そこら辺も含めて……少し、お話ししましょうか」

そして、彼女は語り出す。

◆ ◆ ◆

私が語ったミアとその姉のキアの過去。

それは、理子と同じくらい酷いもの。

いいや……不幸の形なんて比べるものじゃない。

どっちがマシかなんてのは、不毛なんだよね。

だつてどつちにしても”不幸”なんだから……

「この子達と出会った経緯はそんな感じね」

「……軽く言つてるけど内容が重いよ」

私が話し終えたとばかりに締めると理子は呆れる。

「それにしても、ロンドンの死神がこの子つて言うのはちよつと驚きだったかしらね」

私はミアを見ながら言う。

以織が襲われてるところを見てた時、まさかとは思つたよ。

キアの事は分かつてたけど……ミアの事はあんまり聞かないからね。

たまにキアに聞いても妹が何してるかなんてあまり知らなさそうだったし。

理子は唐突に何かに気付く。

「もしかして、その子も仕事に参加するの?」

「あら、察したの? そうよ、久しぶりに弟子の実力を見ておきたいから」

「ふーん……お姉ちゃんの弟子なら実力の問題はないんだろうけど」

と言う理子の目は懐疑的。

耳が聞こえないと言うハンディキャップを背負つてるんだから、多少なりとも戦闘に影響はするだろう。

その事が気に掛かつてる感じかな。

でもね、理子。

そんなのは本人が一番分かってるし、言うまでもないんだよ。

おそろくだけど——

——シヤキ。

そんな鈍はつきのような音と一緒に理子の首に袖口から伸びた曲刃が突きつけられる。

ミアから目を離して私を見た一瞬だったね。

しかし、足音もなく間合いを詰めるとはね……死神なんて言われる訳だよ。

この時点で正面で戦えば実力は理子よりも上つぽい事が知れる。

まあ、ロンドンで暴れてる割に今でも捕まってるないのがその証拠だね。

理子の瞳を覗き込むようにミアは正面から見てる。

それから小首を傾げた。

ミアの瞳に引き込まれるように理子は言葉を失ってる。

すぐにミアは離れて刃を仕舞い、自分のローブから掌てのひらサイズの手帳とペンを出して

何か書き始める。

それから理子に見せる。

私は移動して、理子の隣に立ってその内容を見る。

『聞こえないからってバカにしないで』

スラスラと書かれた英語の筆記体でミアはそう文字で言った。すぐに別の内容を書き始める。

『それと読唇術が使えるから、筆談じゃなくてもいい』

音として言葉を捉えるんじゃないやなくて形で認識出来る様にしたみたいだね。よく成長してる。

「随分と、様変わりしたわね」

私の言葉にフルフルとミアは首を振る。

『私は何も変わってない。今も昔も、あの時のまま』

事情を知らない人からして見れば不思議な言葉だろうね。

言葉って言っても実際はこつちが読唇術で読み取ってるだけなんだけど。

私はその言葉からもしかしてと思って、1つミアに尋ねてみる。

「ミアには会ってないのかしら?」

その言葉にミアは表情を変えず、静かに顔を伏せる。

どうやらこれは地雷を踏んだみたい。

まさか進展なしとはね……

問題は未解決のまま、ミアが言うあの時のままって言うのはそう言うことなんだろう

……

軽く自虐も含んでたのかもね。

だけど、戦役までにはメンバーとして交流を深めておかないと。

問題が何とか解決すればすんなりと行くと思うんだけど。

その事を考慮せずにお姉ちゃんが私に単純に役者を集めるように言った訳ではないんだろし。

となると何か転機と言うか機会が少なくとも巡ってくるはず。

……もしかして——

「ミア、この顔に見覚えはあるかしら？」

私は今回のターゲットの顔写真をミアに見せる。

それを静かに手に取ったミアはゴミを見るように目を細めた。

それから口をゆっくり開く。

『いつ、どこにいるの？』

表情は特に大きくは変わらないけど殺気立った目をしてる。

どうやら反応からして当たりか……

お姉ちゃんとお父さんが絡むと一種のご都合主義みたいに流れる様に物事が進んで行く。

「それはこれから調べるところよ。見覚えがあるのね」

コクリと頷き、ミアは口を開く。

『私達を売ったヤツ』

なるほど。

お望みの復讐の機会が巡ってきたって言う訳だね。

だったらやる事は単純明快。

「どうやら近い内に会えるみたいよ。もちろん、付いてくるわよね？」

写真を返して貰い、お誘いの言葉を掛ける。

その言葉に彼女は迷いなくコクリと頷く。

「分かり次第連絡してあげるから、連絡先を教えてくださいわ」

と言ったらミアは携帯をロープの懐ふところから出してきた。

持つてるんだ……意外。

なんて考えながらも手早く連絡先を交換する。

「それじゃあ、またね」

私がそう一時の別れを告げるとミアはロープのフードをかぶり直し、私達に背中を向けて去っていく。

闇に消え、それから風がひと吹きすると気配が完全に消えた。

夏の割に肌に刺さるようなこの冷えた風は死神の風って感じだね。

「……うん、お姉ちゃんに関わった人にまともな人なんていないんだね」

ミアが去つてどこか遠い目をする理子。

「それって自分も含めて言つてるわよね？」

「いや、理子とリリヤはそこまでぶつ飛んでないし……あといおりんも」

「何て言つても結局は現実逃避でもう手遅れつて言うパターンじゃないかしら」

「そんな事はない、と思いたいな」

自信がないのか理子はそんな風に漏らす。

「それじゃあ仕事に掛かりましょう」

理子にそう声を掛け、私達もその場を離れる。

復讐は何も生まないと大半の人は言うだろう。

でも、それは場合によりけり。復讐を……過去を、しがらみを殺してこそ前に進める

者もいる。

理子にしても以織にしてもミアにしても同じ。

それを見るのが私としては楽しみでもある。

今回もそれが見れるだろうね。

なんて思いながらも私と理子は一旦別れて仕事の準備に向かった。

と言う訳で数日後。

今夜のロンドンの天気は雨。

降る雨は傘を使うかどうか迷うような、しとしととした降り具合だね。

準備としては上々……私とミアはターゲットのいる人気のない港にある倉庫へと向かった。

まあ、衝動を抑えるためにも何人が殺らせては貰ったけど私は付き添いでほとんど殺つたのはミア一人だけだ。

結果？ 死神に目を付けられた連中の末路なんて聞くまでもない。
ブオンと言う風切り音と共に振り下ろした鎌から血が飛ぶ。

そして転がり落ちる首。

それは今回のターゲットのやつれた顔の女。

しかし、復讐劇としては呆気なかったね。

よくある小物溢れる感じで半狂乱になって抵抗してこうしてあっさり死ぬ。

ミアは足元にあるいくつもの先が潰れた銃弾を何度か踏みながら私の方へと振り返った。

『終わった』

何の感慨もなく彼女はそう告げる。

それに対して私は「お疲れ様」と言いながら倉庫に置かれた中ぐらいのコンテナの扉を開けて中を見る。

そこには少年少女が押し込められていた。

数は20人くらいか……人種はバラバラでろくに何も食べてないのかやつれてる。

大規模ではなくこうして何かしらの表企業を装いながら小規模なブラックマーケットはどこにでもある。

これ、もしかしなくても何人かダメにしてるよね。

この女ディーラーの取り巻きも何かしらの麻薬をやってるし。

ふむ、さてどうしたものか……

今回はめぼしいのはいないっぼいね。

育ててみれば分かる事もあるけど、さすがに20人は多すぎる。

船長でも呼ぶかな「移動式の孤児院じゃない」って怒られそうだけど。

扉を開けたままだと外に出るかもしれないから、念の為に閉めて倉庫の外に出る。すると、私の服の裾をちよいちよいと引かれる感覚がして振り返ると――

『あの子達、どうするつもり?』

ミアが聞いてきた。

「知り合いにでも引き渡しますよ。衣食住のある場所に、ね」

と青年の声で私は答える。

『いつもこんな事してるの?』

「いつもしてる訳ではないですが……見掛けたらちゃんと生活出来るようにはしてますよ」

『変なの……』

変、ね。

別に私はダークヒーローをやりたい訳じゃない。

何て言うのかな? どうしようもない大人はともかく未来ある子供を解体する趣味はあまりないんだよね。

まあ、可能性があるかないかの違い的な感じ。

さっさと連絡して、船長が来たら今日はもう帰ろう。

ミアとキアの事はまた後日に機会を作るとしよう。

「よお、やつと見つけたぜ」

そういきなり虚空に響くぶつきらぼうな男の声。

ああ、この声は……そう思っただけで声が出た方を振り返る。

私が見る空間の先ではジジ、と音を立ててまるでテレビのノイズみたいに景色が歪んでいた。

姿を現したのはレインコートのような服を着た青年。

これ、メタマテリアル・ギリ光屈折迷彩^{メタマテリアル・ギリ}つてヤツだよ。SF映画とかでよく聞く光学迷彩。

こんな物を持つてて私を探してるヤツなんて一人しかいない。

「やあ、”ジューサード”。ご機嫌いかがかな？」

「ああ……機嫌はいいぜ。何せ、やつとお前を見つけたんだからなア？」

フードを取り、バイザーを取つて待ち望んだとばかりに表情を歪ませるジューサード。

その顔はキンジに瓜二つ。

当然ながら雰囲気は違うけどね。

「しかし、まだ私を追っていたのか？ 殺人鬼をストーカーするなんて酔狂な事だ」

「いいや……追つてたのは間違いないが、見つけたのは偶然だ。俺の目的は倉庫にいる

ブラックリスト入りの売人だからな。だがそれも——」

ジューサードはそこで言葉を区切ったところで、

「サード様、目的の者は既に死んでる御様子。コンテナには幾人もの少年少女が」

声はすれども姿が見えない。

声の高さからして女の子っぽいけど。

「分かった。そのガキ共を載せられるモンを用意しとけ」

「はい」

見えない人物に指示を出す。

そりや他にも何人かいるだろうね。

そして、指示を受けた人物の気配が遠ざかっていくと同時に再びジーサードはこちらを睨む。

「やっぱりお前達が殺つちまったみてえだしな。人の仕事を取りやがって」

「手間が省けたじゃないですか。まあ、殺人鬼が片付けた案件を自分の手柄にするなんてのは……貴方はしないでしょうね」

「当たり前だ。虫酸が走る」

吐き捨てるように言うジーサードはバイザーを付け直した。

「それはそうと、せっかくのチャンスだ。テメエの中に”ある物”を頂く」

メタマテリアル・ギリ
プロテクター
光屈折迷彩のマントを脱ぎ捨ててジーサードは臨戦態勢を取る。

漆黒の現代的な甲冑プロテクターに身を包んだ彼から殺気を感じる。

さて、どうしたものか……

そう考えているとミアを中心に静かに風が巻き上がる。

それまでミアの事が眼中になかったジーサードの視線が私から外れる。

「ところでテメエの隣にいるそいつはなんだ？」

「ああ、彼女かい？ 彼女は私の弟子さ」

「弟子、だと？」

「これ以上は秘密さ。さて、少しだけ共に踊るかね？」

「俺にはそんな趣味はねえ……」

「おや、芸術関連に興味のある君の事だからダンスにも造詣ぞうけいがあると思つていたよ」

「てめエには俺の趣味を共感して欲しくねえな」

「そうかそれは残念だ……」

私は一つ呟いて背後の空間に向けてナイフを投げる。

すると、ザリと言う音がする。

右に避けたか。

同時にミアが大きく薙ぎ払うように大鎌を振り回す。

私はすぐにしやがむ。

ミアの鎌に何かが引つ掛かりそのままジーサードの方へと投げ飛ばすようにミアは振り抜いた。

そして、ジーサードの傍の地面を滑り走る2つの軌跡。

それを見てジーサードは舌打ちする。

「チツ、バレてやがったか」

「もう少し駆け引きを上手くしたまえ。逃したくないがために自ら堂々と姿を晒したの

「はいが、少々お喋りが過ぎたな」

さつきのは時間稼ぎ。

私の目の前に現れて注意を引きつつ、こちらを挟撃するタイミングを見ていたんだらうね。

まあ、それもミアの風のおかげで分かったんだけどね。

しかし……さつきは少し踊るか？　なんて誘いをしたけども……

ここはロンドンで00エージェントが^{ダブルオー}いる本拠地。

秘密結社のリバティーメイソンやロンドン武偵局。

ここは地の利的には私のホームグラウンドでもあるんだけど勢力的にはアウエーなんだよね。

だからあんまり派手にドンパッチする訳には行かない。

……ああ、せつかく殺したのに。

今度はどれぐらい持つか心配。

「私は君と同じで忙しい身だ。ダンスはまた今度にしよう。それと、少年少女は君の好きにしたまえ」

緋色の光が私から溢れる。

そして、私とジーサードの間の空中に現れるのは一辺が30cm程度の黒い立方体^{キューブ}。

いくつもそれが現れて、私はそのキューブに向かってナイフを投げる。キューブの中でナイフは物理を無視したように静止する。

それから指をパチンと鳴らしてキューブを消滅させた瞬間にナイフは投げた時よりも格段に速度が上がって進む。

それもバスン！　と言う音の壁を越えたような加速。

予想外の加速にジーソードも驚愕してる。

「フォース！　避ける！」

ナイフの対応に全力を注いでいる今の内に退散。

——イマジナリ・ジャンプ
有視界内瞬間移動——

私はそう念じ、ミアと共にその場から消える。

ギリギリ目に映る遠くの家の屋根に私とミアは空間跳躍した。

さすがのジーソードも他国で依頼された内容以外は派手には動けないだろう。

そんな事をすればアメリカとイギリスから糾弾されるだろうしね。

独自に気付かれないよう捜査するにしてもきつとロンドン市内だけでも手に余るだろう。

あとはこつちが大人しく息を潜めていれば問題はない。

「さて早く退散しよう。それと少し話がある……ソフィーの所へ、また連絡する」

私はそう言つてミアから足早に離れる。

避難した先は人気のない裏路地。

あーあ……使つちやつたよ色金。

でもねえ、色金なしで堂々と戦うのは結構キツいんだよ。勝てない訳じゃないけど

……

それに私のやり方は相手の不意を突きながらの奇襲、暗殺だからね。

時間を掛けすぎると武偵局やら何やらに嗅ぎつけられるかもしれない。

すぐさま変装を解いて裏路地にある水面を見る。

辛うじて色の判別はできる。

……ちよつと色金、侵食しちやつたかな？

勘弁して欲しいね。

お姉ちゃんよりも先に私がダメになったら意味ないし……いい加減、本格的に対策を
考えないと。

しかし、お姉ちゃんも人が悪い。

アメリカの金で遊んでなさいつてそう言う意味だった訳ね。

何かしらの意味があるとは思つてたけど。

分かつてたんなら教えて欲しかったよ。

私の色金を強めてどうするつもりなんだか。

お姉ちゃんにあまりメリットがあるように思えないし。

力を制御させるため、って言うのはないね。ほとんど制御出来るし。

危機感を持たせるため？

うーん、分かんないな

お姉ちゃんとお父さんの考えることなんて分かる訳がないんだけど。

キンジはともかくしばらく金関係とは距離を置きたい。

色金しかりGの血族しかり、ね。

67 : ライヘンバツハ

微妙に倦怠感が残る目覚め。

昨日、色金を使ったあとに何とか鎮めようと殺る事は殺ったんだけど……
フラストレーションが溜まってるのを感じる。

何とか我慢できない程ではないし、これは適度に殺りつつ時間経過で普通に治まるのを待つしかないか。

しばらくは大人しくしよう、キンジを弄りながら。

さて、と——心の中でそう思いながらソファーから体を起こす。

そろそろ役者は揃いはじめてきたし、あとは団結していかないかね。

まずは以織か、それともキアとミアの姉妹か。

……………。

決めた、両方にしよう。

二兎追う者は？

そんな言葉は知りませんね。

それに別々の方向じゃなくて同じ方向に逃げようとしてる二兎ならやりようはある。そうと決まれば行動を移す前に身内の人間観察と行こうかな？

メンタルヘルスチェックも兼ねてね。

まずは以織かな？

短期間で色々とありすぎたし。

と思つたら、本人が向こうからやって来た。

私はすぐさまソファから体を起こす。

「おはよ、以織」

すぐさまいつもの調子で挨拶をする。

「おはようございませす。夜遅くに帰つて来ましたが……姉上は昨日、どちらまで行かれてたんですか？」

聞かれると思つたよ。

以織の質問に対して私は、

「ちよつとした危ない仕事よ」

当たらずとも遠からずな答えを出す。

「そうですか……」

納得した風な答え方をしてるけれど、以織の顔は腑に落ちてない。

まあ、そろそろ不信感を持つてもおかしくないだろうね。

色々やってきて、以織はそれに関して聞きつつも私は茶を濁してばかりだし。以織自身も色々と分かつてはいるだろうね。だけど見て見ぬふりをしてるだけ。

そろそろ、いい加減にここらでネタバラシしところかな。

私は立ち上がって以織の肩に軽く触れて横を通り過ぎる。

それから、何だろう？　と言う感じの顔を向けた以織に微笑みながら私は手招きをする。

そのまま以織と共に早朝のロンドンへ。

「……………」

「……………」

お互いに会話がなのまま、歩道を歩く。

別に話し出せない訳じゃない。

ただ単に話す場所を選んでるだけ。

ここら辺でいいかな？　散歩としても最適であんまり不審な場所じゃないし、それに

そろそろ話し出さないと以織も不安になるだろうし。

「以織」

「は、は、は」

急に声を掛けられてビクリと肩を震わす以織。

そんな、白雪みたいな反応しなくてもいいのに。

「まあ、そんなに不安がらなくてもいいわ。……そろそろ色々と教えるべきだと思ってね」

「姉上は——やっぱり」

「そうね、あなたを誘った時から何となく分かつてる事だろうけど。かなり危ない人よ、私。それこそ、武偵とは正反対に位置する事をやってきてる」

そんな私が武偵をやっているって言うのも、かなり数奇な人生なんだけどね。

私は振り返り、改めて以織に面と向かって話し掛ける。

「色々と理由はあるんだけど人殺しには変わりないわね」

「それを教えて、どうするんですか？」

「別にどうもしないしわ。ただ、改めて私がそう言う存在なのを認識しておいてって事よ。まあ、もつと言うなら——」

一度目を伏せて、すぐに上げる。

「私と共にいるにはそれ相応の覚悟があるわよ？」

私の視線に肩を硬直させて直立する以織。

あんまり殺気を向けたくはないんだけどね。

でも、私という事は実際にリスクがある。

それこそ……人生をダメにしてしまう程のね。

以織をこちら側に引き込んだのは私だけど、それでも引き返す道は常に用意する。

なんでか、つて聞かれたら私は勿体無いからつて普通に返すよ。

面白い逸材と一緒に墓場に持つて行きたくはない。

私に墓標なんて立つはず無いんだろうけど。

それに例え色々と観れなかったとしても一緒に終わらせたくはないんだよね。

「覚悟と言うより、もうどこにも行けません。私に他の居場所なんて——」

「別に作ればいいだけの話よ。ないものは作れる。今はここしかなくても、時間がない

訳じゃない」

「なぜ、今になって……そんな突き放すような事を」

「これから先、色々と荒れるからよ。そうなれば守る余裕はなくなる」

誘ったのは私で、お姉ちゃんの指示でもあるけど……身の振り方を決めるのは本人自身。

今は無理でもアフターケアはしないとね。

と思いきや、すぐに以織はにつきりする。

迷いはない笑顔だ。

「別に構いませんよ。荒れると言うのなら斬り払うまでです。今の私の居場所は——
此処こゝにあります」

恥ずかしそうに上気した顔で私に視線を向ける以織。

言葉と感情が真つ直ぐなのは分かる。

同時に分かるのは……思った以上に私に対して依存度高いなーと言うこと。

以織は母親が早々に離婚したせい、母性というか甘える存在がいなかった反動で無意識の内にそう言うのを求めているかな？

ふむ、これはこれで別に対処するとして……

「分かったわよ、好きにしなさい」

半ば投げやりに言いつつも私は笑顔を向ける。

正直なところ手放したくないのも事実。

まあ、それは以織に限った話じゃないんだけどね。

そのまま以織を連れてどこかの公園へ入り、備え付けられているベンチに座って次の話をする。

「問題はキアとミアね」

「キアさんはともかく、ミアとはどなたですか？」

あー、以織は知らないんだった。

別に隠しておく事でもないんだけど……ロンドンを暗躍する死神って言うのは伏せておくかな。

「キアの双子の妹よ」

「行方知れずの妹さん、ですな」

と言う以織は少し悲痛そうな表情。

もしかして——

「キアから聞いたの？」

「ええ、ついこの間……キアさんからお聞きしました」

「まさか彼女たちの生い立ちも？」

私の確認に以織は静かに頷いた。

「だって今のキアさんからは想像できません。そんな——」

——奴隷生活があつたなんて。

以織の呟いた事実は公園の喧騒にすぐに吞まれ、虚空へと消えていく。

そこまで話すつて事はキアも相当に以織の事を気に入つてゐるね。

ふう、と私は一息吐いて以織がキアから聞いているかも知れない事を改めて話す。

「あの姉妹と理子の生活は似てるわ。監禁した相手が本物の化物か人間の皮を被^{かぶ}つた化物かの違いと、貞操があるかないかの違いだけ」

「……………」

「彼女達の出自はロマ族みたいな移動民族みたいだね。詳しい事は分からないわ。ただ、そこから拉致されての奴隷生活。姉の悲痛な声と下卑た男達の声を聞きたくなかった妹は耳を塞ぎ、残酷な光景を見たくなかった姉は目を閉ざした。そんな生活がどれくらい続いたかは知らないけど、そこから2人を連れ出したのが私よ」

仕事でたまたま、なんだけどね。

アンダーグラウンドな世界でそこそこの勢力を持つ組織だったんだけど、イ・ウーの邪魔をちよくちよくしてくるから消してくれって言うお父さんの依頼でね。

ある意味、今ままで水面下にいたイ・ウーと言う組織が裏の世界で表に出始めた時でもあつたかな？

それまではひっそりと超人を育成してたみたいだからね。

「解放された事実を妹は見ていたけど、姉は知らないからね。そうして一緒に逃げようと妹は手を差し伸べるも、姉はその手を払った。それが姉妹の間に出来てしまった最初の溝。そうして溝は段々と広がっていき……現在に至る訳よ」

「……何とか、ならないんですか？」

「何とかするわよ、これからね」

実はこれからその話をしようと思つてたところなんだけどね。

その言葉に顔を上げた以織は、すぐさま私を見た。

それに対して私は「任せなさい」とばかりに優しげな笑みで答える。

「今まで姉妹共々、お互いに会わせる顔がないの一点張りだね。でも、それも以織のおかげで解決しそうよ」

「本当ですか!?!」

「まあ、一芝居やつてもらおう事になるけどね」

あとはお姉ちゃんに知恵を貸してもらって、ついでに“金”を釣り上げよう。

と言う訳で数日と言う短い期間だけでも、シナリオは上々に仕上がった。

あとは各自のアドリブとしっかりキャストが揃うかどうかとところかな。

いつも通りに顔は変えて紳士っぽい感じの身なりを軽く整える。

夜のロンドン、連なった屋根の上に黒ローブのミアが静かに私の目の前に降り立った。

「呼び出してすまないね、ミア」

『別に』

私の謝罪の言葉にミアは死んだような目を向けながらそう口パクで返す。

動かし方からしてツンとした声が聞こえてきそうだよ。

いや、普通に聞こえないから私の想像なんだけども。

双子なんだけどね……今じゃ正反対な性格になってる。

そうなった原因は過去にあるから今がある訳なんだけどね。

「それで、会合についてなんだが……おや？」

と、私がおかを見つける。

その私の視線を追ったミアもすぐに見つけられたのか、少しばかりピクリと動揺をみせる。

そこには大通りを仲良く歩くキアと以織。

ちようどオペラの公演帰りのようだ。

しかし、このミアの反応……どう考えても姉の事を心配してるよね。

棒立ちしてるように見えてローブの端を軽く握ってる。

しかし……常々思ってたけど、私の周りには素直じやない人が多すぎる。

まあ、それも今日で幾らか埋まると思うけど。

それじゃあ始めましょうかね、歌姫と死神の再会と言う演目を。

◆ ◆ ◆

川沿いの人気のない道。

姉上に言われてこうしてキアさんと一緒に散歩をしている訳だが、本当にこれで良いの

だろうか？

目の見えない彼女を連れ回すのは少し気が引けるのだが、
と思っていたのが、

「イオリさん、私……タワーブリッジの下に行きたいのだけれどよろしいかしら？」
本人はそんな事などお構いなしに楽しんでる様子。

私に手を引かれながらも色々と言いたい所を言ってくる。

「ゴメンなさい、イオリさん。私つたらはしやぎ過ぎかしら」

「いえ、そんな事はありませんよ。むしろ頼ってください」

「まあ！ イオリさんってば、他の男性よりも紳士なのね」

紳士ですか……紳士、と言われても正直なところ女である私には困りどころなの
が。

と、少しばかり自分でも分かる程に微妙な顔になってしまふ。

幸いにもキアさんは見えないので表情を読み取られる事はないのだが。

「本当にゴメンなさいイオリさん……」

先程の浮かれた感じの謝罪とは違う、心から申し訳なさそうなキアさんの声。

その儂げな声に思わず私は振り向く。

「チャールズは運転手で、私の付き人でもあるけれど……普段の生活まで連れ回す事は

出来ないの。彼にも生活はあるのだから。だから、こうして貴女にその役目を押し付けてしまふ形になってしまふ事を申し訳なく思うわ」

おそらくあの生活からして、彼女が一人で出歩くと云うのはなかなか出来ないだろう。

まあ、それでも耳だけを頼りに自宅からあの公園に辿り着くのも結構驚きだが。

オペラでの行き帰りと自宅の周辺が彼女の行動出来る範囲だ。

こうしてはしゃいでいるのは、見知らぬ場所に行けるからだろう。

「良いんですよ多少のワガママは。今まで狭い世界でしか生きていなかっただけです。私が目になってもっと広い世界に連れ出してあげますから」

私もそうして姉上に救われたのだから。

……ん？ 私は何となくだがとんでもない事を言っていないだろうか。

と言うか、気のせいかキアさんの手が熱いような。

いや、そもそも夜の街の灯りに照らされている彼女の顔が赤いような。

「私にその提案は魅力的すぎます」

そう言つて彼女は顔を伏せた。

「でも——ゴメンなさい」

三度目の謝罪。

「私の目の代わりは妹って決まっていますの」

その言葉に私は思わず笑みを浮かべる。

きつと、ずっと想い続けてきたのだろう。

色々な想いが詰まったような妹の事を心から思う言葉だ。

「そうですか。なら、仕方ありません……」

「ああ、でも……私の騎士ナイトに、なつてくれませんか？」

つまりこれはボディガードのお誘いだろう。

……唐突な話ではあつたけれど、もうそろそろ答えを出した方が良さそうだ。

それにあの家においても正直なところ今の私ではあまり力になれそうにない。

手に職がないと言う宙ぶらりんな現状、何もしないよりかはマシだ。

「喜んでお受けします」

これはうろ覚えだが、映画でよくある騎士の誓いの真似事をしてみる。

キアさんの手の甲にキスをする。

私は日本の生まれなのでこれにどれほどの意味があるかは分からないが、何事も形からと姉上も言っていたし誓いとしては十分だろう。

「嬉しいわ」

そう言って微笑む彼女はまさしく姫のようだった。

◆ おー、見せ付けてくれるね以織ってば。

◆ キンジ程じゃないけどあの子も大概なジゴロな気がしてきた。
どちらかと言うとジャンヌと同タイプだね。

それよりも問題は――

「……………」

死神^{ミア}の殺意レベルがドンドン上がってる気がする。

こう言う風に仕組んだのは私だけどそのせいで以織の寿命がヤバイ。

さつきから死んだ目から冷めた視線へと段階がシフトしちゃってるんだよね。

これはもう、嫉妬してるんだろう以織に対して。

早いとこ傍に行けばいいのに……ミアの様子を見るにいつでも妹を受け入れる準備は出来てるはずなんだよね。

わざわざ見えない目でお金を稼いで住む場所を構えて待ってるのがその証拠。

何よりも、1人で暮らしてるのがそう思わせる決め手だった。

ミアの隣に行つて、1つのメモを彼女に見せる。

『行かないんですか?』

そう書かれた英文を見せた瞬間に冷たい視線がこっちに来る。

目の端がピクピクと動いてるあたり、相当にご機嫌が悪いらしい。

そして、そこに火に油か……

お互いに軽く距離を取るように体を躲した瞬間、私とミアの間を通り抜ける布のようなモノが2つ。

「あは、やーつと見つけた♪」

姿を隠さずに私達の傍に近寄る1つの影。

前回のジーサードのように漆黒のプロテクトスーツに身を包んだ少女が堂々と目の前に現れる。年齢的には理子と同世代。

背中で交差させるように差した刀が2本、両腰に2本。

HMD越しに見える目が、私達を捉える。

しかし……1人、ね……斥候役^{せつこう}って事かな？

周りには彼女以外の気配もないし。

「やあ、お嬢さん。こんな夜更けに怪盗^{ゴーストバスター}ごっこかね」

「んーん、違うよ。亡霊退治^{ゴーストバスター}しに来たんだ」

「ふむ、バスターズではないのかね？」

「うん、でもすぐに来るよ。もう既に連絡は入れた、10分もあれば到着する。あたしはそれまで時間稼ぎ出来ればいい」

そう言つて少女は左腰の柄を抜いたかと思うと、柄から”刀身が燃え上がった”。

ああ、なるほど。

先端兵装ノイエ・エンジエの剣と言う訳ね。

言つてしまえばアーク溶接で出る光を刀身にしたものだろう、実際……眩しい。彼女が構えると同時に先程の布がフワフワと少女の両脇に浮かぶ。

「——ッ!!」

息を吐き、屋根を蹴り、電光石火の如く突つ込んでくる少女。

同時に少女の尖兵であるかのように布のような兵器が少女よりも速く突つ込んでくる。

やれやれ優先順位は私の方が高いか。

布の兵器の1つは牽制けんせいかミアの方へ、少女を含めて残りはこっちに。

ナイフを出して、布の兵器を紙一重でいなす。

ギヤリギヤリと音と火花を散らせる。

布つぽいけど見た目通りに布で出来てるわけではないみたいだね。

そして問題はあの光る刀身。

ナイフだとそれごと斬られるだろうね。

こう言う防御不可な攻撃は——

「……!?!」

懐セオリに入るのが定石セオリってね。

予想以上の速さだったのか少女は目を見開く。

少女の振り下ろされる腕より内側に入り、その刀をナイフで弾き飛ばす。

そして、そのままクルリと回って少女を蹴り上げる。

プロテクターがあるせいとか、打撃の手応えがあまりない。

ただまあ……攻撃手段は奪わせてもらおう。

2本のナイフを投げて、さつき弾き飛ばした光る刀身を出す柄を貫く。

と、同時に浮遊感。

いつの間にか布が足首に絡みついている。

あー、意外にこれは面倒だね。

それからタロットのハンドマンみたいに釣り上げられる。

「サードは時間稼ぎだけでいいって言ったけど、これからを考えれば致命傷でも与えたら合理的だよな」

そう言っただけで着地した少女が今度は背中に付いた長い刀を取り出す。

S Fっぽい見た目をした刀はその刀身からモスキート音のような高い音が発している。

今度は高周波ブレードってヤツ?

致命傷どころか四肢切断されそうだよ。

「と言う訳で、解体されちゃえ！」

いや、本当に切断しようしてる……

突っ込んで横薙ぎに来る刀身を私は素早く体をUの字にして躲す。

背中に風圧を感じる。

それからそのまま足に絡まつてる布の先端にある菱形の部分と布の接合部分を緋色のメスで斬る。

瞬間、布が浮力を失い落下する。

「そんな……弾丸をも防ぐ磁気推進織盾が斬られるなんて」

私が着地してる間にも少女は驚愕する。

——だろうね。

さつきナイフで防いだら火花散ってたし。

それよりもどうやら布自体にプログラムがある訳ではないらしい。

あの布にくつついてる菱形が端末、と言う事だろう。

「さて、人数的には2対1……兵器はいくつか破壊された訳で武力的にも怪しくなってきた訳だが」

「非合理的い……誰も”2機”しかないなんて言っていない」

そう言つて彼女の背後から浮かび上がる布が6枚、いや6機か。

「それに最初にも言つたけど、時間稼ぎが出来ればいい。勝とうなんて思つてない」
すぐさま少女はPファイバーと呼んでた布の兵器を6機をこちらに差し向ける。

まるで槍のように真つ直ぐ突つ込んできたそれは、突然にカクんと進行方向を90度変えた。

それはミアの方へと向かい、屋根の一部を吹き飛ばす。

煙が巻き上がつて、屋根から1つの煙の塊が落ちる。

すぐさま風が巻き起こり、無事に難なくミアは鎌を振り回しながら着地する。

けれども、ちよつとそこは”気まずい場所”だろうね。

私もすぐさま屋根から飛び降り、彼女達の所へと行く。

「お前は……!?!」

辿り着いた時には、以織が臨戦態勢になつてる。

同時にミアは以織の後ろにいる姉の存在に表情を曇らせた。

「イオリさん、一体何が?」

「ロンドンの死神です。傍には見慣れぬ男性が」

目の見えないキアに現状を説明する以織。

その言葉にキアは以織の背後に隠れる。

いつの間にやらお姫様を守るナイトやってるね、以織。

以織の反応で思い出したけど、変装した私の姿を覚えてなかったな。

「あーあ、非合理的な事になった。そのカップルさん、危ないから下がらなよ」

少女も忠告しながらPファイバーに捕まりながら降りてきた。

うん、これで状況は上手く揃った。

あとは……邪魔なキャストには早々に退場して貰おう。

「ふむ、合理的に動いてくれてありがとう。ジーサードによろしく伝えてくれ、”戦役”

で会おうとね」

「……………」

瞬間、少女の表情が歪む。

それはそうだろうね、もう決着を付けると言ってるようなものだし。

私はミアに向かって「目くらましを頼む」と言ってから少女に向かって直進する。

ミアが腕を一振りすると巻き上がる風の波。

砂塵を巻き上げて少女に襲いかかる。

目はHMDで守られてるだろうけど……さすがに風圧に対して真っ直ぐには立って

いられないだろう。

私は風と共に駆ける。

さーて、取って置き見せちやおうかな。

あれからちよくちよく練習した必殺の――

――鷹捲たかまくり――!!

そのまま人間魚雷とばかりに空中を回転しながら少女に突つ込む。

HMD越しに私の姿を捉えているだろうけど、既にこの手は少女のプロテクターに触れている。

バチバチと言う音と共に弾ける装備。

あの時の夾竹桃みたいに身に纏つてる衣服と言うかスーツも弾けてる。

悪いけど、私は殺人鬼だからね。

そのまま少女の首を勢いよく引つ掴む。

「――かはっ!」

喉を刺激されて苦悶の息が漏れる。

それから回転してテムズ川の方へと放り投げる。

からの――ナイフ三連投げ!

身を守る物がなくなった少女の右肩、左脇腹、右脚に突き刺さる刃。そして少女は川の中へ。

すまないね、致命傷を負わせて貰ったよ。

その方がこつちにとつて合理的だし。

あれなら一ヶ月近くはあまり動けないだろう。

さて、気を取り直して――

「そう睨むな少女」

「お前は、一体……?」

以織に向かって私は話し掛けるが、対して以織は変装してる私に対して警戒心バリバリだ。

「はは、分からないかね」

面白がつて私が引き続き問い掛けてると、

「……まさか、お姉さま?」

予想外にもキアが答えた。

以織も私も思わず「え?」と驚愕した。

いやはや、まさかね。

声で変装を見破られるとは思わなかった。

「あははッ! まさか、当てるとはね。お姉ちゃんビックリだよ」

言いながら私は、変装を解く。

同時に以織は二度目のビックリ。

「ほ、本当に姉上ですか？」

「そうだよ。なんで分かっちゃったのかな？」

「いえ、愉悦と言うか愉快そうな声と同じだったので」

キアは何となしに答えてるけど、声と同じって……声調とか訛りとか色々なまと変えてるんですけどね。

なに、能力でも目覚めたの？

と思っただけど……目が見えない分、耳が相当に発達してると考えよう。

お父さんもそうだったし。

「もしかして、並んでるところを見るに姉上は死神と知り合いなんですか？」

「ああ、知り合いと言うか何と言うかね」

以織の恐怖混じりの質問に私は歯切れの悪そうな答え方をしながらミアの様子を見る。

ミアは呆然とキアを——姉の姿を見てる。

同時に安堵したかのような表情をしてる。

光が灯った瞳で、確かに姉の姿を見ている。

「キア、あなたの妹よ」

「……え？」

ここで言うしかないだろうね。

「ミア？ 本当にミア、なの？」

途端、ミアの表情が曇る。

ミアに声は届かない。

だけど、言葉は分かる。

キアの口の動きで何を言ってるかは分かっているだろう。

すぐに怯えた表情をして、背中を向ける。

私は立ち塞がるようにミアの前に立つ。

「せっかくの機会なのに、ここで目を背けるの？」

私の言葉にミアは首を静かに動かして振り返ろうとするけど、踏ん切りがつかないのか顔を伏せる。

「ここまで言えばあとは、2人次第だよ。もともと君のお姉ちゃんは——」
「逢いたかった」

ミアの背中にもたれ掛かるようにしてキアが彼女の両肩から手を伸ばして胸の前で自身の手を掴む。

抱き締める、とは違うかな。

二度と手放さないようにその腕の中に妹を確かにおさめてる。

「本当に、逢いたかった。ゴメンなさい、手を振り払ったりして……あなたを拒絶して、ゴメンなさい」

漏れ出すキアの感情。

今のミアには声も言葉も届いてはいない。

でも、気持ちは届いてるみたいだよ。

流れ落ちる2つの雫。

ミアはキアの腕をすり抜け、向かい合わせになって抱き締める。

あんまり近くに居るのは野暮かな？

そう思って以織の傍へと行く。

「上手くいったみたいですね」

「ん、まあね。以織もありがと」

「別に礼を言われる程では……直感で思ったんですよ。ここでキアさんを妹さんのところに連れて行かないといけないって」

「その直感の間違ってないよ。だからこうして今の光景がある」

「ところで姉上……」

「どうしたの、いお——」

「イタズラが過ぎませんか？」

いつの間にか抜かれてる刀身。
それが首にある。

居合、意外に速いね。

と言うか以織の表情に凄^{せい}みがある。

「死神がキアさんの妹の事と言い、ボディガードの事と言い……人に黙って色々としてくれてますよね？」

「ほら、でも結果として良い方向に進んでるでしょ？」

「結果論です。まったくもう……他にも色々と隠してるのではないのですか？」

「いやー、私から話せる事はないかな？」

「そうやって誤魔化してるんですか？」

「なに、以織は色々と共有しないと済まないタイプ？　そう言うのは面倒な女つてなつて旦那さん見つからないよ？」

「余計なお世話です！」

なんて漫才を続けてる暇はない。

もうそろそろジーソードが来ちゃう。

「それよりも早くトンズラしないと、武偵局とか警察にミアの姿を見られると面倒なことになる」

「む……そうですわね」

以織はそう言つて刀を納めた。

ふむ、何とか誤魔化せたか。

そうしてすぐに私とミア、以織とキアで別れる。

私達がある程度距離を離れたところで電話が鳴る。

「はい？」

『歌姫と死神は無事に出会えたでしょう』

お姉ちゃんが前置きもなく答えを言ってくる。

「無事にね。知恵を貸してくれありがとう」

『別に……礼はリリヤに言いなさい』

今回の演目の舞台裏。

ジーサード……と言うか協力してるリバティ・メイソンにキアの周りに気になる影があると言う曖昧あいまいな情報を流した。

信憑性はあまりないだろう。

だけれども、ジーサード達は死神と私に数日前に会っている。

つまりそんな情報でも彼らにとっては動く要因になり得る。

まあ、詳しい事を省けば結局のところどれもこれもお姉ちゃんの盤上の出来事だった

訳だよ。

『役者集めは一旦終わりよ。集合して頂戴』ちようだい

そうして翌日、ダラムに帰って来た私達。

理子とリリヤ、以織はもちろん、キアとミアの姉妹も居る。

居るんだけども……

「ねえ、お姉ちゃん。あそこだけ姉妹空間出来上がってるんだけど」

「いやー、姉妹仲良くって言うのはイイね」

「だからって道中ずつとお互いに引っ付いてるのはどうなの？ 明らかに姉妹の距離

じゃないんだけど」

理子がそう言った先にはミアに腕を絡ませてるキア。

道中ずつとあんな感じ。

もう二度と離れないとばかりにくつついてる。

「それは、ほら。長年お互いに会えなかった反動だよ」

「いや、雰囲気的に夾ちゃんが見たら『キマシタワー』って言いそうだよ」

理子とそのまま雑談をしながら屋敷の玄関を通り抜け、お姉ちゃんの書斎へと向かう。

その扉を開いて見えた光景は、異様と言う雰囲気だ。

この屋敷に住んでる面々は別として、あまり見ない来客が何人かいる。

1人はいかにもギヤングと言う感じのスーツとハットを被った金髪少女。

もう1人は船長と言う感じの服装。服の種類としてはジユストコールってヤツかな？ 17世紀か18世紀のヨーロッパでの古い男性用の上衣だね。モーニングコートやフロックコートの元になったヤツ。

ただ、問題はそれを着てる人物は中学生くらいのアジア系の少年って事な訳だけど、酷く似合わない。

服に着られてる感じ。

そしてレアちゃんにワイズに、キアとミアの姉妹。

なかなか豪華なキャスト。

「さて、集まる面子は集まった事だし説明しましょうか」

1人アンティーク机に座ってるお姉ちゃんは切り出す。

「望む事は人それぞれ、だけど求める物は同じ。言うまでもないけど戦役は近い……いや、もう水面下では既に始まっている。個人では望みの物を得られる可能性は低い、だったら台頭するしか望みはない。単刀直入に言うと、私の駒になつて貰うと言う訳よ」

「駒、ね」

ソファーに足を組んでる金髪少女の眩きにお姉ちゃんが流し目を送る。

「不満があるなら別に退室してもいいわよ？」

「いいや、オレに不満はないさ。ボスが何て言うかは知らないけどね。でも、その方が利口だつてのは分かる。ところで一本吸つていいかい？」

言いながら金髪少女はぶつきらぼうにタバコのケースを見せる。

「残念ながらここは禁煙だ。ソフィー様の喘息ぜんそくが酷くなる」

「さすがはイギリス紳士だね」

と言いながらも、タバコを咥え始めたのでちよつと脅す。

「この会合がお別れパーティーになつてもいいのかしらね？」

「……ああ、はいはい。分かりましたよ」

金髪少女は不貞腐れたように口を尖らせながらタバコを仕舞う。

「それで？ 協力する見返りはあるのかね？」

アジア系の少年が古めかしい喋り方で問いかける。

「望みの物を得られるだけで不満なら、望みを叶えるまで付き合うと言うのはどう？」

「ふん、お主が生きてる前提だろう。その言葉を信じるかどうかは半信半疑だ」

「約束は守るわ。じゃないとジルに殺されるもの」

「ほう？ どう言う意味かね」

お姉ちゃんが私に目を向ける。

理由を話せて事ね。

「もしお姉様がそんなつまんない人なら、私が殺してあげるわよ。私、つまらない人間は嫌いな。約束を守らなかつたり裏切り者は特にね。家族だろうが何だろうが、ね」

「なるほどな。相変わらず扱い辛いのか易いのかよく分からん思考をした鬼だ」

「いいじゃないの船長。今まで何度か手も貸したでしょ？」

「ああ、船を孤児院みたいに扱ってなければもう少し感謝も出来たがな」

「それはほら、船員確保って事で」

「阿呆……余計なお世話だ」

言いながら少年——船長は帽子を深く被る。

「この場にいる全員、1つの勢力として戦役に参加する事に異論は他にあるかしら？」

——沈黙。

「そう、ならいいわ。そうね、これからは今後を考えてこう名乗りましょう——」

——ライヘンバツハ——

お姉ちゃんもなかなか粋いさな事を考えるものだね。

さーてと、会合も終わった事だし……私は私で帰る準備をしないとね。

「あれ、お姉ちゃん何してるの?」

「んー、帰る準備」

私の部屋を覗きに来た理子に向かって私は普通に答える。

「まだ夏休みあるのに帰るの早くない?」

「ちよつとキンジの様子を見に行こうと思つてね」

「あー、そう言えばイ・ウーの後に入院してるんだっけ?」

「そうそうお見舞いだよ」

「ウソだ……お姉ちゃんの事だからそれは建前で絶対に目的は違う」

「よく分かつてる。それじゃ、キンジを弄いじつてくるね」

「ああ、うん。気を付けてね」

荷物を持つてそそくさと出る私を理子は呆れたように見送ってくる。

そのまま空港を乗り継ぎ、交通機関を利用して1日近く。

武偵病院へと辿り着き、キンジのいる病室へ――

「どうもーイジリに来ました」

「おい、臆おくめん面もなく言うな」

普通に入室。

本人は元氣そうだ。

まあ、夏休みは潰れて単位は結局不足だけどね。

「いやー、元気そうでなにより。リングは白雪で食べ飽きてそうだからうな餛飩買ってき」

「マジか、なんか悪いな」

「いいのいいの、遠慮なく食べといて。それよりさ……キンジ」

「んぐつ……何だ？」

「単位不足です」

「——ゴホッ!？」

あ、喉詰まらせた。

やっぱりこう言う時も楽しい。

◆ ◆ ◆

お姉ちゃんが一足先に帰って翌日。

何故か屋敷の面々が書齋に集められた。

あたし、リリヤ、以織、ジェームズ、ウイリアム、ソフィー。

重要な話があるって事で集められた訳だけど問題は、

「お姉ちゃん抜きで重要な話って、なに？」

そう……お姉ちゃんがないこのタイミングでやった事だ。

以織は気付いてないし、リリヤは……正直分かんない。
男性陣2人は何となく気付いてる。

「そうね、重要よ。本人は気付いてるようでも色々と自分の体を誤魔化してるみたいだけ
ど」

自分の体を誤魔化してる。

そう言うって事は、明らかに嫌な方向にしか話が見えてこない。

「ここにいてる誰しもとって重要な事よ。特に私にはね」

ソフィーはパイプを吹きながら淡々と告げる。

「——私とジルの寿命は5年あるかないかよ」

G O F O R T H E N E X

t S t a g e !!

第8章：人形狂演劇（マリオネットパーティー） 68：ゲームの前座

「——私とジルの寿命は5年あるかないかよ」

沈黙、静寂、呆然、衝撃。反応は人それぞれ。

私の中ではいくつもの感情が渦巻く。

いや……いやいやいや。

「ウソ、だよね？」

「私はこう言う時にジルみたいに冗談を言うつもりはないわ」

そうだろう。

ソフィーがお姉ちゃんみたいな事をしないのは分かってる。

今、理子達に告げた言葉は事実なんだと……実感が、遅れてくるように後になって胸の内に入り込む。

目に見えて動揺している以織から疑問が静かに吐き出される。

「なんで、ですか？ なぜ姉上の寿命が——」

「色金——聞いた事あるでしょう?」

ソフィーの言葉に、あたしも以織も思わず体を震わす。

「ジルの中には色金がある。そして、色金は心と繋がる金属……言い換えれば人の心を侵食してしまう可能性もある」

「……………」

「やっぱりあの子は以織には話してないみたいね」

ソフィーは何もかもを見通してるような目で言う。

「今まで私が生きてこられたのは、ジルの非人道的に培ってきた高度な医療技術のおかげ……あの子がいれば難病のいくつかは解決できる。簡単に言えば、あの子が死ぬ時には私の寿命もそれまでよ。そして、私は病弱だから当たり前だけどジルの寿命が短い理由はもちろん色金が原因。あの子は色金と相性が良過ぎる事、そして何よりも本人の在り方……そう、感情を知らないという事ね」

そこまで説明したところで「ケホツ」と軽く咳をする。

だけど、本人は気にせずそのまま続ける。

「あの子は感情が抜け落ちてる。楽しい以外の感情をあまり知らないし、緋々色金にとつて重要な恋と言う感情がそもそももない。まあ、知らないだけでしょうけど……その結果、色金特有の好戦的な部分に変質して殺人衝動になった。結局はバランスが取れず

に偏った結果として色金に侵食されながらも現状を保ってる。ちなみに色金を使い続ければ寿命はより短くなるわ。ジルを救う方法は今のところ2つ、感情のバランスを元に戻すか、色金を抜き取るか……今までにない難題だわ。解答は結局のところ実質1つしかない」

ソフィーの言うとおり、色金が心と繋がる金属だというのなら実質の解決方法はただ1つ。

——お姉ちゃんが誰かを好きになるしかない。

それが、数日前の出来事。

お姉ちゃんに恋愛感情を持たせる？

なに、その難易度の高いヒロイン……フラグ構築するルートが見えないとかマジで無理ゲー。

あーあ……これは新学期早々に憂鬱だ

いやさ、希望がない訳じゃないんだよ？

でもさ……相手があの唐変木の朴念仁しかいないんだよね。

別にキーくんの魅力がない訳じゃないけどさ、それでも何て言うかお姉ちゃんは勿体無いと言うか何と言うか。

ともかく、あたしとしては反対。

ああ、でもアリアにキーくんを取られるのも癪しやくだし……

……。

……………。

もー！ 本当にどうしたら良いんだー！！

思わず枕を持って部屋のベッドの上でゴロゴロのたうち回る。

ハッ、そうだ！ 別に男性にこだわる必要はないんだ。

恋愛感情を持てば女の子でもおk……なのかな？

……いやいやいや、理子ってば何を考えてるんだか。

冷静になろうよKOLLになるんだ。

一瞬だけど妄想してた構図、完全に理子が堕ちてる側だったし！！

お姉ちゃんが恋しなきやダメなのになんで理子が堕ちてるの！！

「朝から何をやってるんだ理子……」

ハッ、と我に帰って玄関に続く廊下の方を見ればジャンヌがいつの間にか立ってる。

うわー……これは恥ずかしいところを見られた。

向こうも呆れたように見える。

「いや、ほら悩みがあつて悶えてたと言うか何と言うか……」

「私がノックしたのもチャイムの音も聞こえないのか？ だとしたら相当に重症だな。私でよければ相談に乗るが？」

「別にいいよ、ジャンヌじゃ多分無理だし」

「……最近、私の扱いがぞんざい過ぎないか？ と言うより、お前の友である私はそんなに頼りないのか？」

珍しくジャンヌがしおらしいと言うか、若干悲しげな表情。

しまった……さすがに言い過ぎた。

でも、正直――

「頼りないって訳じゃないけど、ジャンヌじゃ荷が重いつて言うか……」

視線を逸らして苦笑いしながら理由を答える。

「何を言う、頭脳担当の私ならば解答は得られなくてもアドバイスは出来るはずだ」

ジャンヌはメガネを掛けてやる気全開だ。

無駄にドヤ顔しないでよ……このあとの展開が読めちゃうから。

「恋愛相談って言ったら？」

「……だ、大丈夫だ。その辺の知識はある」

「その知識は少女漫画とか言うオチじゃないよね」

「……………」

わーい……分かりやすい反応。

「ふ、ふふ……すまない理子。私には荷が重かったようだ」
折れるの早い。

「うん、知ってた」

その一言で聖女は膝から地に堕ちた。

「しかし、恋愛相談——まさか理子!? 誰かに恋をしたのか!」

と思いきや急降下からの急上昇。

一度沈んだジャンヌがすごい勢いで詰め寄ってくる。

と言うか、私が話した最初にその結論に至るかと思いきや意外に遅かった。

「いや、あたしじゃないんだけどさ……ちよつと結ばれて欲しいと言うか、恋して欲しい人がいてね」

「なんだそれは……」

「いやー、お互いに惹かれてると思うんだけどね。遠くから見てもう、お前ら結婚しろよ的な? とまかくもどかしくてね」

「それは、本人の意思に関係なく結び付けたいのか?」

「あー、それは……その」

ジャンヌのジト目の指摘に言葉が濁る。

これは人に相談しようにも、複雑すぎて説明できない。

特にアリアとか白雪の耳に入ったらお姉ちゃんよりも先にあたしの寿命がヤバい事になりそうな予感。

シャーロックに並びそうな頭脳を持つあのソフィーが難題と言う訳だよ。

お姉ちゃんそう言う人の意思を無視して話を進めるの嫌いそうだし。

あんまりやりすぎると——考えたくない……

お姉ちゃんの感情が抜け落ちた時の表情ってかなりトラウマなんだよ。

「理子の言う相手がそれを望んでいるかどうか、一番大事な部分ではないのか？」
いやまあ、ジャンヌの言う通りなんだけどさ。

それとこれとは話が別なんだよね。

恋を望んでるとかじゃなくて恋しなきゃ死ぬなんて何の冗談なんだか……

何にしても、あの人を死なせちゃいけない。

世間では悪党だろうけど、あの方は大切な家族なんだ。

絶対に見捨てない。

「そうだよ。もうちよつと考えてみるよ」

……難しいだろうな、恋を盗んで人に与えるなんて。



8月も終盤に差し掛かって、キンジは不足単位の獲得に大忙し。私としては手伝ってもいいんだけど……

「あー、何でこんな時に出るかな」

色金の侵食が進んでる。

そのおかげでちよつと表には出れない。

別に瞳の色が緋色に近付いたって訳でもない。

ただ単に衝動が少し胸の内をザワつかせる。

少し？ いや、段々と大きくなってる。

「は、ハハ、ふふふ。ダメだよ、我慢しなくちゃ……大丈夫、気持ちは静まる、鎮まる……」

波が引くみたいに」

鏡の前に立ってただひたすらに自分に向かってそう言い聞かせる。

薬と自己暗示の併用（へいよう）で抑えてきたけど……これもそろそろ限界かもしれない。

注射器を首に刺し、目の前の洗面台に軽く捨てる。

これで”3本目”……案外、ヤバいかもね。

夾竹桃の毒を利用した精神安定剤のおかげで今までは1本である程度は衝動を抑えられてた。

でも、この間のロンドンで色金を使ってから体の熱があまり治まらない。

何人解体すればこの疼うずきは止まるのかな？

早いところ人形を何体か見繕わないと……

「フー……はあああ〜」

うん、取り敢えずはこれで大丈夫。

鎮静するのに結構時間が掛かっちゃったな。

改めて鏡に映る白野 霧としての自分を見る。

何もおかしいところはない。

さーと、気付けばいつの間にやらメールが届いてる。

キンジからだ。

「どうやら、単位補填のために色々と奔走してたみたいだけど……8月31日の今日まで結局取れなかったみたいだね。」

そしてどうやらお情け任務として掃除を頼まれた、と。

自分の現状を包み隠ヘルプさず載せてる上に手伝ヘルプいの申し出、か。

ま、仕方ないよね。

「退屈しない夏休みだったし、そのお礼って事で協力してあげよう。」

「~~~~♪」

鼻歌交じりに部屋を出てキンジのいる探偵科棟インケスタへ行く。

高揚感は残るけど、精神安定剤が効いてるおかげでそれ以上の感覚はない。もう夕方だし、今から行っても間に合わないかな？

一応、顔だけは出しておく。

もしかしたら神崎もいるかもしれないけど、それはそれ。

キンジと一緒に弄り倒す。

なんて考えてる間に目的地の探偵科棟に到着。

キンジさんはドーこなな♪

1階から順番に各部屋を覗いて見れば、どうやらどこも掃除をされた形跡がある。やっぱり遅かったか。

下の階から順番に上に掃除をしていったみたいだね。

一番上の教室が掃除されてるなら……あとは屋上だけかな？

そう思って階段を上がる途中で誰かが駆け足で降りてくる音。

男性にしては軽い……そして、1人。

取り敢えず屋上に続く階段から脇に逸れて、廊下の方へと隠れる。

予想通り、上から下りてくるのは神崎だった。

でも、その顔は哀しみに染まってる。

まるで失恋でもした感じ。

喧嘩って言う感じではないね……あの表情。

何やらとんでもない事が起きてる予感。

これは本気で気配を殺して様子を見てみようかな？

ゆっくりと足音を立てずに屋上の扉へと辿り着き、その影から様子を見る。

「キンジさん」

この抑揚のない声、ウルスのレキだね。

ドラグノフの銃床を地面に置き、杖みたいに立ててる。

「あなたはアリアさんと結ばれてはならない」

「……なっ……」

「霧さんとは、特に結ばれてはいけない」

「おい、何を言ってるんだよ……」

困惑するキンジ。

色金の操り人形が随分な事を言ってくれるよ。

そのまま私は様子を観察する。

「これからは、私があなたのパートナーになります」

「お、おい……ッ」

レキの言葉に食いかかるようにキンジは一步前へ。

同時に分かる、キンジの様子の違い。

手の甲で唇を押さえてる。

さては、キスでもされた？ それでヒステリアモードになってる？

「あなたたちは強くなった。イ・ウー程度の敵が相手ならそれでも十分だったでしょう。実際、”今の”キンジさんが私と素手で戦えば——十中八九、あなたが勝つ」

……イ・ウー程度、ね。

それから録音された音声を再生するかののような感情のない声で続ける。

「これから”の敵はただの力比べでは勝てません。だからあなたは、やり方次第では自分を簡単に殺せる人間がいる事を知るべきです。キンジさん、あなたの周りには危険な風がいつも吹いている。それに備えなければいけない」

意味が分からないと言う感じにキンジの困惑の色が濃くなる。

「例えば狙撃手^{スナイパー}。永い時間の中を潜み、彼方から射る私たちは、ほんの少ししか戦えない超能力者を、僅かな距離でしか戦えない拳銃手^{サジツト}を容易く仕留められる」

セーラー服のポケットからレキは、装甲貫通弾^{アーミーピアス}を取り出す。

ここでそれを取り出すと言うか使用しようとする意味は？

「今から私が、それを教えて差し上げます」

レキは弾倉に装甲貫通弾^{アーミーピアス}を入れ、ドラグノフに弾倉をセットし、

「そろそろ頃合のようですね」

私達の防弾制服を貫通するそれが入った銃口をキンジへと向ける。
向けられたキンジはただ苦笑いをするだけ。

「キンジさん」

「……なんだ？」

「私と結婚してください」

……うん？

結婚……？

あのウルスの巫女がプロポーズ？

これは、久々に驚いた。

いきなりの出来事にキンジは声にならない声を漏らした。

「……レ、レキ……聞き間違いかな？ 今さっき、なんて言った？」

「聞き間違いではありません、私はプロポーズしたんです」

その言葉にキンジは狼狽ろうばいする。

同時に私からは何かが冷めていく。

「ま、待ってくれ……いきなり過ぎるんじゃないか？ もう少し前置きが欲しかったよ」

「前置きはした筈です。『これからは、私があなたのパートナーになります』と」

ウルスの巫女は淡々と機械のように答えるだけ。

別にキンジが誰と結ばれようと構わない。

だけど、神崎さん以上にレキにはキンジに近付いて欲しくはない。

何でつて？

感情を持たない人形と一緒にいて何が楽しい？ 何が面白いの？

ただ色金の声を聞いてそれを実行するだけの傀儡かいらいに未来も何もない。

「光栄な事だが……レキ。それは、人に銃を向けながら話す事じゃないと思う、ぞ？」

キンジが穏やかに対応をし始め、距離を取ろうとすると――

「逃げられませんよ」

狩人のように鋭い雰囲気をしつつレキが銃を少し動かす。

……お父さんは私がレキを殺そうとした時に待ったを掛けた。

でも今は、どうなんだろうね？

戦役前に適当に間引いてもいいじゃないかな？

「もし断るといふのなら――」

……………。

決めた♪

「――風穴を開けます」

殺^{バラ}
し
ち
ゃ
お
う
♪

69：路地裏のキャスト

さて、ものの見事に求婚をされた遠山 キンジ。

その後の展開はレキの”7分間の襲撃の中で1度でも1分以上狙撃から逃れれば求婚の話は撤回”と言う取り引き……もといゲームに見事に負けた。

で、キンジは現実を知った訳だね。

ヒステリアモードは無敵ではない。状況次第では自分を容易く殺されると言う現実。……妨害すれば良かったかなくって、ちよつと後悔してる。

あの時キンジが降参してなかったらレキは本気で殺す気だったし、妨害する口実はある訳だし。

まあ……やらなかった理由としては、あそこで水を差したら”面白くない”かなと何となく思っただけなんだけどね。

で、結果としては――

「次！ さっさと来なさい！」

神崎の怒声。

体育館に似た強襲科^{アサルト}の専門科棟は大荒れの天気。

台風の目は神崎。

今は早”朝”戦鬪訓”練”——つまり世間一般で言われる朝練とは違う朝練で剣道をやつてゐる訳なんだけど……

新学期の朝から死屍累々^{ししるいゐい}だね。

ある意味面白い光景が見れてるから私としては良いんだけどね。

人の噂つてのは恐ろしいものだよ。

何せ、昨日の今日でこれだからね。

女子寮からレキとキンジが出るのを見たつて言う目撃情報がどこからか入るや否や、すぐに神崎の耳にも入った。

その結果が、この男女関係なく倒れてる人の数々。

いやー……嫉妬つて恐ろしいね。

まあ、しばらくは触らぬ神に祟りなして事でちよつと距離をとらないとこつちにも飛び火しちゃうよ。

◆ ◆ ◆

あー、どうしよう。

8月31日、つまりは昨日……りこりんはお姉ちゃん部屋の部屋で目撃をしてみました

た。

お姉ちゃんの洗面台に転がる” 3本の注射器を。

ジャンヌが帰ったあと、ソフィーのあの時の言葉がどうにも頭に離れなくてお姉ちゃんの様子を見に行こうと思つて部屋を覗いたらこれだよ。

証拠を残さない殺人鬼にしては珍しいミス。

中身は十中八九、精神安定剤だろうなあ

それを用いるつて事はさ、確実に侵食が進んでるつて言う事だよね？

ソフィーの言う寿命は残り5年。

でも、それはソフィーの言うとおり”お姉ちゃんが色金を使わなかつた時の余命”。

……。

……お姉ちゃん。

もうあたしは嫌だよ、家族の冷たい姿なんて……

見たくない、聞きたくない、触れたくない——失いたくない。

本当にもう……困つた人だよ。

殺人鬼の癖に。

……。

……。

………。

さてと、切り替えないと。

もうすぐ始業式が終わる。まあ、あたしはそもそも出てないけど。

確か9月の間に『修学旅行I』と武偵のチーム登録があるんだよね。

お姉ちゃん、このまま武偵に居座るつもりなのかな？

実際のところ戦役で正体を明かさずに敵対したとしても何だかんだ武偵には残る可能性は大いにありそうなんだよね。

気に入ってるキンジの傍をあまり離れないだろうし。

ただ、敵対するってなったら相当のリスクがあるだろうね。

アリア達が……の話だけ。

今まで味方だと思ってた人がいきなりの敵対。

お姉ちゃんはかなりキンジやアリア、白雪に信頼されてる。

それが裏切り者だと分かった日には……かなりの衝撃だろうな。

誰か精神崩壊してもおかしくない。

まあ、お姉ちゃんの事だから普通に裏切る何て事はしないだろうけど。

正直なところ……敵対するかどうかはアリア達次第。

理子としては、その前にまず交渉から入ると思うんだよね。

どう言う風に交渉するかは知らないけど、何となくそんな気はする。そろそろ始業式が終わりかな？

お姉ちゃんも割と優等生と言うか普通に始業式に参加してるだろうし……ぼちぼち理子も向かうとしますかね。

「よっつ」

ベッドから一息に起き上がって、制服のまま玄関の外へ――

「……お帰りなさいませ、お嬢様」

目の前でスカートの端をつまみ、ふわりとした感じで挨拶をするメイド。

あれ？ ここメイドカフエだっけ？

理子ってばいつの間にもどこでもドアでもくぐったんだらう？

それよりもこの子、何となくリリヤに似てるような気がするな――

……いや、バカな現実逃避はやめよう。

それよりもツ!!

私は素早く廊下を確認して、誰も見ていないの確認しつつリリヤを部屋に引き入れる。

あ、危なかった。

誰かに見られてたら理子に変な噂が立つところだった。

あたしはドアを閉じたところでリリヤに向き直り、

「えーとリリヤ？ 何でここに？」

すぐさま疑問をぶつける。

「……ん、挨拶、間違えた？」

小首を傾げるリリヤ。

この光景、男性連中がいたら萌えて悶絶ものだね。

いや、妹自慢じゃないよ？

「間違っではないない、けど。理子の求めてる解答とは違うかな……って言うか誰から教わったの？」

「……ワイズ」

確か、お姉ちゃんの弟子の1人だった気が……あの野郎リリヤに何を吹き込んで。

「あー、理子お姉ちゃんが聞きたいのはどうしてリリヤが日本にいるのかって言う話」

「……ソフィーからの依頼」

「依頼？」

「……ん」

そう短く言ってリリヤは携帯画面をこちらに向けて電話を掛ける。

そうしてすぐ出たのは相変わらず机に座ってるライヘンバッハの『教授』となったソ

フィー・モリアーティ。

画面越しでも分かるくらいに生気の薄い目をこちらに向けながら彼女は何でもなしに切り出す。

『どうやらリリヤは無事に着いたようね』

「えつと……依頼って話らしいけど、あたしに？」

『大した事ではないわ。リリヤの面倒を見てちょうだい、仕事自体はリリヤに任せているから』

「手出しは無用？」

『そうよ。それに、まだその時ではないわ』

意味深な発言。

一体何が見えてるのか……きつと同じ境地の人にしか理解できないんだろう。

すぐに自分にとっての最善を導き出せるのはある意味、便利なようできて不便だろうね。

言ってしまうえば物語の序章で結末を知ってしまった。

でも、今のあたしには羨ましいかな……知りたい事を知れるんだから。

『…………ふう』

画面の向こうで一息吐いてソフィーはこっちの思考を読み取ったかのように呆れて

る。

この人の前じゃ——イ・ウーのシャーロックもそうだけど、おちおち考え事も出来ない。

『感情は芽生えるもの……特に感情を表してる時はいつ?』

「それって——」

『話は終わりよ』

あたしが聞こうとする前に連絡は途絶えた。

誰の話かは言わずとも分かる。

ソフィーは、あたしにヒントを出した。

きつと話を切ったのはあたしだがそのあとに答えを求めてしまうと分かっていたから。

自分で考えずにただひたすらに結果だけを求めるなんて、お姉ちゃんならつまらない
と言って切り捨ててしまおうだろう。

ああ、そうだよね。

そうやって苦悩して、足掻いてる人がお姉ちゃんは好きって事を知ってるじゃん……
あたし。

お姉ちゃんの近くで、自分の生き方に苦悩してる人物。

分かってはいたよ。

お姉ちゃんが好きそうだなって思ってもいた。

家族の死を前に四の五の言って迷ってる暇はない……か。

なら、今まで誰もやった事がないであろう大変なモノを盗んでみますかね。

——恋心つてヤツを。

◆

始業式が終わり、あとは自由時間。

◆

私は1人部屋に戻って色々準備をする。

◆

何の準備かと言うと解体の下ごしらえってやつだね。

化粧品やら日用品に紛れ込ませてある薬品、それから私のナイフコレクション、その

他もろもろ。

狙い目は修学旅行I。
キャラバン・ワン

適当にアンダーグラウンドな組織な感じの風貌ふうぼうを装って、あのウルスの姫君を暗殺する。

実際問題、ウルスは私達に敵対するだろうから……その前に戦力を減らすに限る。

あとは色んな噂を吹聴ふいちょうして組織同士で睨にらみ合ってくれば、こつちとしても動きやすいしね。

お姉ちゃんは『師団』ディーン『眷属』グレナダのどちらにもおそらく属すつもりはないだろう。

……? 誰か来る。

こんな時に来客なんて。

理子? キンジ? それとも白雪かな?

いや、この歩調は……

素早く私の仕事道具を片付けて、気配のする玄関の方へと向かう。

ドアの覗き穴を見ればそこには顔にベールみたいなのが垂れ下がってるけどいつものメイドリリヤの姿。

「いらつしやい。日本にわざわざ来たって事はお仕事?」

「……ん」

ドアを開けて聞いてみれば無表情の短い返事。

「まあ、取り敢えず入りなよ。ロシアンティーでも飲む?」

「……いい。……ソフィーから連絡」

そう言いながらリリヤは玄関のドアをくぐり、そのまま振り返って私に携帯を見せる。

テレビ電話、ね。

”伝言” じゃなく直接私に話したいと。

玄関のドアを閉じて、私はお姉ちゃんが出るのを待つ。
数回のコール後に、

『フウー』

こちらに背を向けて窓に向かってパイプを蒸すお姉ちゃんが映る。

お姉ちゃんにとつて嫌いなお父さん——シャーロックからの贈り物の筈はずなんだけどもね……

私がつけてきた時にその事は分かっているとと思うんだけど、普通に使ってる事に今更ながら違和感。

『さて、人形遊びに興じるのも良いけど……私としてはオススメはしないわ』

うん、私のやる事がよく分かってる。

そして分かっている上で私に注意してる。

悪いけど——

「止まるつもりはないよ？ さすがに、私にも限界はある」

色んな意味でね。

『するな……とは言わない。でなければ、貴女はすぐにイレギュラー要素になる。計算通りに行かないのは困るのよ』

完璧主義者だね

いや、完全主義者？

どちらにせよ数学者のひ孫……計算違いは起こしたくないって言うのは分かる。

その言葉を言ったあとにお姉ちゃんはアンティークの椅子を回転させてこちらへと生気のない色白な顔を向ける。

「じゃあ良いんだ♪」

『ええ、でも……ウルスの人形姫の相手は機械人間にさせなさい』

「えー……」

『あからさまにつまらなさそうな顔はやめなさい。それに、動き始めたとは言えまだまだ水面下で動く必要があるわ。”潜水艦”のようにね』

「そっか、船長が色々？」

『船長はこれから私の代わりに静かに動いて行く。そしてこれから私は「教授」となる』

教授、ね。

船長は隠れ蓑……その背景に教授。

なるほど、お姉ちゃんってば曾お爺さんと同じような感じでやって行くつもりなんだ。

『まだ死にたくはないのよ。この世がつまらなくても』

「知ってるよ」

『なら……私を死なせないよう大人しくして適度に遊んでなさい』

うっ、これはさり気なく手出しするなって言われた。

『それじゃあまた』

そう言ってお姉ちゃんとの通話は切れた。

しかし、ウルスの姫は“人形” 姫でリリヤの事は機械“人形” じゃなく機械“人間”、ね。

お姉ちゃんとしては人形の方が動かしやすいだろうに、あえて人間を使う。

イレギュラーを嫌う割には、軽く矛盾してるんだよね。

でも、ま……そこが私は気に入ってるんだけど。

「それで？ リリヤの仕事は？」

「……威力偵察」

なるほどね。

まずは彼我の戦力の分析に来たわけだ。

リリヤなのは、無人兵器を操作出来るから。

遠巻きで色々と出来るし適任といえど適任だしね。

これから考えるとこちらの戦力をあまり知られたくはないだろうし……現状、外で動いてるのは私とリリヤだけ。

顔と言うか、ライヘンバッハの存在を知られてないとは言え少なくとも私とリリヤ、理子が何らかの線で繋がってることは既に露見している。

イ・ウーとは別の繋がりだとあの直感力が予知に近いツインテールピンクには何となく思われてそう。

その事は置いておいて。

うーん、しかし適度に遊んでなさい、か。

たまには全力全開！　ってやってみたいんだけどね。

いや、したら侵食が甚大だけど。

それよりも早いところ、殺人欲を満たしたい。

けれどもウルスの姫は殺っちゃダメ、ではないんだろうけど、私が動くのはやめた方がいいってばい。

リリヤが殺すんじゃないかって私が殺りたいんだけどなく

別の物で補う、か。

食欲、は別に人並みだし……睡眠欲も人並み……それが殺人衝動の代用品になるかと言ったら正直ならない。

手っ取り早いのは快樂に墮ちるか、嗜虐心を刺激するか。

どうしたものかな……

ここは……無難にキンジでも適当にからかうかな？

ウルスの姫の目を誤魔化して会いに行こう。

「リリヤは自分の仕事に戻っていいよ。サポートが必要ならいつでも呼んでね」

「……ん」

1つ返事をする、リリヤの姿がブレる。

ジジと言う、テレビのノイズのような音と共にそのまま背景に溶け込んでいった。

え、なにそれ？

無駄なところに無駄に技術力高い機能を備え付けてる。

いつの間にメイド服はステルス機能付きになったの？

微妙に埃が上がった場所からして外に出ていったのは分かる。

あ、なるほど……ベールしたのはそう言う事ね。

あの子も暇を見つけては色々とやってるっぽい。

どこから機材を調達してるかは知らないけど。

さーと、キンジのところ行かなくちゃ♪

始業式が終わっておそらくはウルスの姫が参加してるパレードの近くにいるだろう。

狙撃拘禁？ 何にしても軟禁状態なのは変わらない。

今の内ぐらいしか会えなさそうだしね。

取り敢えずパレード近くの路地裏を探してみよう。
適当に探してれば会えるでしょう。

「見つけた！ おい！ 見つけたぞ！」

路地裏で謎の男子生徒に発見されたと思つたら犯罪者のごとく報告される。

そうしてぞろぞろと集まってくる男子生徒と女子生徒。

男女比率的には7：3ぐらい。

「なーに？ 武偵なのに強姦みたいな事しちゃうの？」

身をよじりながらの私の発言に顔を赤らめるのが十数名。

なんで女生徒の何人かも顔を赤らめてるの……

「いいや、違う！ 今日水投げの日。つまりは堂々と手合わせを願えると言う訳だ！」

熱血漢っぽいのが純粋に私と実戦をしたいとばかりに説明した。

水投げ——確か校長の母校の伝統で誰に水を投げてても良いって言う祭りだったかな

？

こつちでは徒手格闘限定なら誰に挑戦しても良いって言う武偵独自のルールになつてるけど。

「それで、あわよくば私をもみくちやにしてまきぐりたいたい」

「違う！ 純粋な手合わせだ！」

熱血漢生徒はそう答えるけど、多分……ついてきてる半分ぐらいは下心あるでしょ。はあ、今は加減がしにくいんだけどね。

ここは適当にサクサクと片付けよう。

「仕方ないね、ちよつとだけだよ？」

と、私はそのまま集団に突っ込んでいく。

「——え、ちよ!?」

驚いてるけど、仕掛けたのはそっちなんだから話は聞かない。

……。

……………。

うん、多分時間的には5分以上10分未満ってところかな？

路地裏は死屍累々。

何人か幸せそうな顔してるけど。

「つ、つええ……」

「また……負けた」

「あともう少して触れたの、に……」

やっぱり下心あるの何人かいるし。

欲望に正直過ぎなものも考えものだね。

それにこの狭い路地裏に集団で固まってたら意味ないし。

もうちよつと段取りしてから来なよ。

「悪いけど用事があるから先に行くね。仕掛けたのはそつちだからアフターケアは自分でやつといてよ。それじゃあねー」

そう言い残して私はその路地裏をあとにする。

運動はいいけど、下手に興奮したら再発するリスクがあるこの現状はあまりよろしくないかな？

衝動を意識、思考すると余計に再燃する可能性が高まる。

人間は不思議なもので怪我を認識あるいは意識してなければ傷の痛みもしばらくは気付かないからね。

ただ、考えないように意識してる時点でそれは意識してるって事にもなるから……ある種の矛盾だね。

最初から別の事を考える方が得策――

あれ？ 色金が勝手に反応してる。

色金の共鳴現象……

手を見てみれば緋色に淡く光り始めてる。

おそらく全体的にオーラみたいに私の体が発光してる。

この武偵高には一応、超能力の専門科がある。

つまりは探知される可能性があるね。

無理矢理抑えさせてもらおう。

意識して強制的に色金の力を遮断する。

イメージとしてはパソコンを強制シャットダウンする感じ。

当然ながら無理に何かをしようと言うのはあとで何かしら支障が出るもの。

正直、あまりやった事がないから実際にどうなるかは分からない。

数十秒経って——何とか、力は抑えた。

今のところ変化はない。

衝動とかも大丈夫そう。

始業式にココがいたからもしかしたらと思ってたけど、まさか日本に来てるとはね。

でも一体何のために？

戦役も始まっていないのにあの子を連れて来るなんて。

って言うのは、この時点でお門違いなんだろうね。

お姉ちゃんも動き始めてるし、イ・ウーが崩壊した時点で他の組織が動いてて当前だ

ろうしね。

あの子を連れてきたのは……まあ、ココの事だから小間使いに連れて来た程度だろう。

他に何の目的があるかは知らないけど。

それはそうとキンジだよ。

パレード終わったらどうせ人形姫が戻ってくる。

あのブラドのペットだったオオカミがキンジの傍にいるだろうけど、そこは問題ない。

噛み付いてきたりして問題になるのはあっち側だし。

考えながら移動していると、オオカミの唸り声。

こっちの方が。

軽い足取りで1つ角を曲がればそこには尻餅をついてるキンジとその前に立っている人形姫のオオカミ。

「路地裏でなーにしているの・か・な♪」

「別に、なんでもねーよ」

いきなり現れた私に驚く様子もなくキンジは普通に返してきた。

パンパンと尻を叩いて立ち上がる。

「まさか水投げで誰かに負けたとかじゃないよね？」

「そんな訳無いだろ」

なんて言うキンジは普通に返してるようで怪しい。

何もなかったらこんな所で座らないだろうし。

「ふーん……正直に話したら貸しーつチャラにしても良いんだけどなく」

「……やめておく」

私の取引に一瞬迷ったね。

まあ、でも……迷った時点で大方の推測は出来た。

「へえ、年下に負けたんだ」

「誰もそんな事言っただろ」

「実は見てたって言ったら？」

「悪いが、その手には引つ掛からないぞ」

と、キンジは呆れたように答える。

何度と同じ事を経験してたらさすがに学習するよね。

で・も。

「しかし、すごい動きだったね。まるで酔拳みたいだったけど」

「ほんとに見てたのかよ……」

ボロ出すの早いよ。

私は舌を出して、

「いや、ウソ♪」

してやったりとばかりに答える。

「……………」

やられた、キンジはそう思っただけに頭に抱える。

「……………どうして分かった?」

諦めたとばかりにキンジは理由を聞いて来る。

「いや、まあ……………水投げの日にこんな何にもない路地裏で尻餅ついてたら疑うでしょ、普通。それに、相当飲んだのかな? 外にいるのにアルコールの臭いがキツイし。年上
に負けたのならさっきの貸しのチャラの後で話してるだろうからね。貸し借りよりも
先に保身に走ったって事は、私に知られたら面倒だと思ったから……………そうでしょ?」

「ああ、もう分かったよ……………降参だ」

私の推理に見事完敗とばかりにキンジは観念した。

「相変わらず頭が回るな」

「探偵ですから」

笑顔で私は答える。

「もちろん言わないでくれるよな?」

「さあて、どうだろうねー」

「勘弁してくれ、昨日から厄日なんだ」

キンジは疲れたとばかりに息を吐いた。

これは、ある意味チャンス。

「もしかして、レキさんと何か関係あるの?」

見てたから知ってるけど……いつものごとく知らないふりしておく。

「何だよ、お前も既に早朝の俺とレキの事を聞いているのか?」

「人の口に戸は、つてヤツだね。噂なんてすぐに広まるよ、閉鎖的な組織や学校なら尚更なわさら

だしね」

「まあな……」

納得したような顔をしながらもキンジの顔は疲れてる。

これは、結構参ってるね。

正直なところあの人形姫の傍にキンジを置いておいてもあまりメリットなさそうだし。

最初は面白いかな、と思つて放置してたけど……神崎さん以上に気に入らないから略奪させて貰おう。

ウルスの姫も言つてたしね。

異性は話し合いじゃなく、奪うものだって。

「なんなら私のところに来る？ 何か訳ありっぽそうだし」

「……いいの？」

「別にいいよ。キンジが気にしなければ、の話だけどね」

と、甘い言葉を投げ続ける。

狙撃拘禁なんて言うある意味脅迫された状態なんだから本人も気付かないぐらいに精神的には疲弊してるはず。

それに、何となくだけどキンジが傍に居れば私の衝動もいくらかマシになりそうだし。

しかし、私がキンジの部屋に行くのはよくあるけど逆はなかったね。

まあ……そもそもキンジが女性の部屋に自ら進んで行くこと自体ありえないだろうから当たり前だけど。

「で、どうするの？」

「……」

私の問いかけにキンジは黙って考え始める。

迷つてると言うよりは葛藤してる感じ。

提案としては狙撃拘禁されてる現状からしたら魅力的だろうね。

ただ、それで私が狙われるんじゃないかとか考えてるかもしれない。

風とやらに私は危険視されてるみたいだし、風の命令に忠実な人形姫はマリオネットのごとく糸に引かれるまま引き金を引く、と。

そんな事して家族になろうなんて不可能なんて事は普通は分かるだろうけど。

あのウルスの人形姫にそう言う考えがあるとは思えない。

そうして迷った末に――

「……いいや、やめておく」

キンジは断りの言葉を出した。

「そっか、助けになれると思っただけだね」

「いつも助けて貰ってるし、貸しは増やしたくない」

「残念……ま、いつでも来るといいよ。最近は退屈してるからね」

私は言いながらそのまま背を向けて路地裏を出る。

やれやれ……ほんとに残念だな

と言うか、最近はキンジとなかなか一緒にいれないのがホントに残念。

中学の時みたいに隣にいる事が出来ないのは仕方ないけど、それでもあの時は今よりも面白可笑しく日々を過ごさせてた気がする。

あの時が楽しいって思えるならキンジももうちよつと私に構ってくれればいいのに。

それはそうと……

さっきので居場所はバレた。

早いところ、この場を――

「ジャック、ジャックなの――わぶっ!？」

すぐさま角から出てきた人物の視界と口を塞ぐ。

世の中、上手くないかないもんだね。

「何も見えないです」

「喋らないで貰えるかしら?」

「ふえ、なんで不機嫌ですか?!」

目の前にいる少女が驚愕する。

今の姿を完全に見られた訳ではない。

でも、この状況はちよつとマズい。

つて言うかこの子、私の事を殺人鬼だつて知つてると思ふんだけどね。

もうちよつと配慮つてものをして欲しい。

「こつち来なさい」

「え、はい……」

そのまま180度少女の体を回転させて後ろから手で目隠ししたまま違う路地へと

進む。

そうして、適当なところで立ち止まって少女を解放する。

だけど……今の姿を見られるわけにはいかない。

「私が良いと言うまでそのまま前を向いたまま」

「……あい」

さて、ジルちゃんによる3秒は無理だから30秒変装講座へ

適当にメイク、適当にセミロングのカツラを被って、カラコンしたらあら不思議。

ちよつとミステリアスな感じがするお嬢様の出来上がり。

「いいわよ」

「さつきと姿が違う気がします」

振り返った少女が気付いた事を真っ先に言う。

実際、同じ姿でいる事なんて武偵高以外ではあまりないし。

「いつもの事ですよ」

私は普通にそう返す。

「ところでココ達の傍から離れて良かったのかしら、コウ猴？」

小五ぐらいの体格。

足元まで伸ばしたロングの黒髪、人にしては珍しい赤い目をしている彼女はあはは、

と力なく笑う。

「ココ達はみんな、テストだなんだと言って猴を置いて行ったのです……」

しゅんとして、猴は困ったような顔をする。

そりや慣れない異国でいきなり一人にされたら不安にもなる。

「で？ 色金使って私を探そうと？ そんな事して保有者だつてバレたらあなたも私も

あの手この手で狙われるわよ」

「あい、すみません……軽率でした」

しよんぼりする猴。

まあ、大規模な組織に属してる猴は守られるだろうけどね。

色金持ちを他組織に渡すはずないだろうし。

しかし、色金をリーダー代わりにするとは……

それに不完全と言えど猴ほど色金を使いこなせば出来ない事はないだろうね。

「実は孫^{ソン}が勝手に出てきてつて訳じゃないわよね？」

「いいえ、探してたのは猴です」

「それで？ 私に何か用？」

「用と言う程ではないですが、この武偵高にいると言う話を聞いて猴は……心配だったので。色金に吞まれていないか……」

猴は緋々色金の性質である恋と戦とはあまり合わない性格をしてる。

戦うのが嫌いでご覧の通り心優しい。

「私はそんなに簡単に呑まれないわ」

「そう、でしたね。でも、実際に会って分かった事があります。確実に色金に侵食されてるのです」

そんなのは私自身分かつてる事なんだけどね。

だけどもあ、猴がそこまで分かるって事はあのピンクツインテールもいずれその境地に至る可能性があるって事が私にとつての懸念事項。

だって中身が分かっちゃえば外見なんていくら変えても意味ないし。

それはいずれ考えるとして――

「こんな悪女を心配してくれるなんて……ありがとう、と言えばいいのかしら？」

「本当に悪、なのででしょうか？ 猴には、猴と同じで色金に振り回されてるだけにしか思えないのです」

「だって私はもう人殺しだもの、そしてあなたと違ってそれを楽しんでる」

「――っ」

瞳を覗き込むようにして前屈みになり、猴に語り掛ける。

息を呑む彼女は良い表情をしてる。

「殺したくはない。でも、”今まで誰も殺さなかった”訳じゃないでしょう？ 齊天大聖？」

「……ッ！」

「ね？ 心配しなくても大丈夫よ」

それから猴の頭を少し撫でて私はそのまま「お先に失礼するわ」と言つて路地を出た。

色金同士は惹かれ合う運命にでもあるのかね？

そう思う路地裏の出会いだったよ。

70：修学旅行Ⅰ

9月14日——ついに来た修学旅行。

メンバーは私と理子でお送りします。

何て言うか……

「新鮮味がない」

私はそう眩かざるを得ない。

場所は京都駅。

中央改札口の見上げるほど開放感のあるホール。アーチ状になっているガラス張りの天井。

11階まであるんだったかな？ 地下は2階まで。

店も多くあつてホテルが隣接してるから駅と言うよりもちよつとしたテーマパークって言う感じ。

そして、日本だと言うのに頻繁ひんぱんに見かける外国人。

日本なのに様々な言語が不協和音な音楽のように聞こえてくる。

そんな中、隣にいる妹はちよつと悲しげに声を上げる。

「その言葉は何気に傷つくな」

「別につまんないとは言つてないでしょ？」

「そうだけどさく……それとこれとは別で、気になる事があるんだよね」

「つまり？」

「キーちゃん、不機嫌じゃない？」

理子が少し顔を横に動かして聞いてくる。

不機嫌……不機嫌、か。

実際のところどうなんだろうね。

私としてはいつも通りのつもり。

まあ、でもウルスの姫の隣にキンジがいる事に何も思わない訳じゃない。

「そうかもね」

理子の推測にそう答えるけど、曖昧あいまいなんだよね。

私自身……よく分かんない。

ただまあ、私の思ってる事をはっきり言わせてもらおうと。

「……気に入らない」

言葉に出すと同時にその瞬間だけ湧き上がる殺意。

うん、やつぱりダメだ。

言葉に出すだけでも体が勝手に反応してしまう。

理子はと言うとチラリと見れば冷や汗混じりだ。

すぐにスイッチを切り替えるみたいに感情を抑える。

「さてと、京都観光と行くのかな」

この旅行に明確なスケジュールなどない。

何せ旅程表である『旅のしおり』にも、

『場所 京阪神（現地集合・現地解散）』

1日目 京都にて社寺見学（最低3ヶ所見学し、後ほどレポート提出の事）

2日目・3日目 自由行動（大阪か神戸の都市部を見学しておく事）』

としか書いてない、しかもA4の紙1枚で。

引率の先生はなし……正確には京都、大阪、神戸に1人ずつ先生はいるけどあくまで

この修学旅行中の緊急事態の対処要因であって生徒を監督するものではない。

つまりは監視の目もなし。

なので――

「……ん、来た」

家族と同行しても問題はない。

「え、あれ？ リリヤ？」

人混みの中から現れたリリヤに対してきよとんとした顔の理子は一人困惑してる。まあ、ここに来るとは思っていなかっただろう。

呼んだのは私だけだね。

今のリリヤは遠目から見て不審がられないように京都の武偵高の制服を着てる。

東京武偵高の制服だとあれ？ こんな子いたっけ？ って思われるだろうしね。

あと、キンジ達が見ても分からないように若干のメイクとか髪の毛の形を三つ編みに変えてる。

その辺の抜かりはない。

仮に聞かれたとしても京都の武偵高の留学生とでもしておけばいい。

そのための武偵関係の身分証明も偽装済み。

設定盛り過ぎとかそう言うのは気にしない。

「せっかくなんだし、家族サービスって事で。こうして出るのもアリかな？ って思ってるね」

「粋いきな事してくれるね」

理子は相変わらずと言った感じに呆れる。

実際のところこう言う時間は大事。

つかの間の休息って言うやつだね。

とは言え、理由はそれだけじゃないんだけどね。

「さて……取り敢えずは西から東に向かって観光しよう」

「おー！ 龍安寺の庭園見て、金閣見て、それから東本願寺、アニ○イトと虎の○にも立ち寄ろう」

理子の最後2つは神社仏閣じゃない。

この分だと……大阪か神戸の方もただのアニメショップ巡りになりそう。

リリヤに関しては、別に干渉する気はない。

だってお姉ちゃんが指示を出してるなら別に余計な事をする必要がないし。

「つて言っても、理子は途中から呉に行かないといけない訳なんです……」

「だったらリリヤの面倒はこつちに任せてもいいよ？」

「……襲わないよね？」

理子が割と真面目に聞いてきた。

何を失礼な。

家族に手を出すほど落ちぶれてない……つもり、だけど。

こう聞いてくるって事は私の体調に関して勘付かれたかな？

「ああ、うん。大丈夫だよ」

いつも通りの笑顔でそう答える。

まあ、さっきの言葉に最後、”今のところは”って付け加えても良さそうなものだけ
ど。

理子は「そっか」と安心したような声を出す。

せつかくの旅行なんだし、楽しもう。

◆

◆

◆

◆ ご機嫌よく前を歩くお姉ちゃん。

傍はたから見たら好奇心に駆られる子供っほい。

いや、まあ……日頃から子供っほいになって思う事はあるんだけどね。

今は完全に殺意がなりを潜めてるけど、さっきの京都駅での雰囲気は……紛れもなく
ガチだった。

不機嫌かどうかの質問に対してお姉ちゃんは曖あいまいな返事をしたけれども。

アレは自分でも分かってない感じ。

不機嫌なのは確か、それでレキに対しての嫌悪感も分かってる。

でも、”何に対して気に入らない”のかハッキリは分かってない。

キンジの隣にいるレキが気に入らないのか、それともお姉ちゃんの隣にキンジがいな
い事が気に入らないのか。

以前まではここまで分かりやすい感じではなかったハズなんだけどね。

いつもニコニコあなたの隣について言う感じで何が起きててもほぼ笑顔で、何も読み取らせないような感じだった……家族の前であろうとも。

最近のお姉ちゃんは感情が豊かになってきたって言うか、明らかに変わり始めてる。

キンジが絡むと尚更だね。

これは、ホントに希望があるかもと期待しちゃう。

金閣寺に着いた矢先——キンジを発見、おまけでレキも付いてるけど。

お姉ちゃんもキンジの存在に気付いてるっぽい。

お姉ちゃんの反応はと言うと、

「……………」

まさかの無言。

それどころかすぐにクルリと回って別の方向へと進もうとする。

意外………てつきり構わずに声を掛けると思ってたのに。

「声、掛けないの?」

野暮かな? と思いつつもそう聞く。

お姉ちゃんはすぐに、

「あの子がいるとどうもやりにくくてね。私の中にあるモノを知ってるっぽいから……」

あまり接触しないに限る」

つまんなそうに答えた。

お姉ちゃんがそう言うって事は、レキも色金について知ってるのかな？

何て思つてるとキンジがこつちに気付いた。

キンジにしてはナイスタイミング。

そして、こつちに向かつて歩いてこようとしてるけどレキに袖を掴まれて止められてるっぽい。

うーん……ここは一芝居打ちますかね。

お姉ちゃんが不機嫌だったりするとこつちの心臓にも悪いし、妹が震えてるのを見ると……思うところがある訳ですよ。

「リリヤ、ちよつとあそこで待つててくれる？」

金閣寺が建つてる池の適当な畔ほとりで待つてるように言う。

するとリリヤはコクリと頷いて静かに歩いていく。

うん、目立つ。

近くにある金閣寺より目立つ。

いや理子もブロンドヘアーだけどき、あの白に近いプラチナブロンドは周りにいる外国人観光客の中でも一際目立つ。

プレイボーイがいたら間違いなくナンパ対象。
正直一人にするのが心配。

あれ……？ これ、シスコンの予兆じゃないかな？

いや、そんな事考えてないで今はキンジのところへ行こう。

「おーす、キーくん。相変わらずレキュとアツアツですな」

先手必勝とばかりに軽いジャブ。

まあ、キーくんの事だからどうせ――

「ちげえよ」

否定から入るだろうね。

そして、面倒臭そうな顔をする。

ふっふっふー、相変わらず分かり易いですな。

そして立ち去ったお姉ちゃんが気になる様子。

「さつき、霧と一緒にだったんじゃないのか？ 見慣れないヤツもいたが」

見られてはいたけどリリヤだとは分かってないみたいだね。

「京都武偵高の留学生に出会っただけだよ。観光がてら警備任務だつて」

すかさずそれっぽい事を言う。

「京都らしいっちゃらしいか……とところで霧のヤツ、俺を見るなり引き返して行ったん

だが……」

「んー、どこことなく不機嫌だったかな」

何て適当に言ってるけど、ウソは言ってるない。

実際のところご機嫌ではないし。

適当に予想して話してみようかな。

「キーくん、キーちゃんに対して何か断りとかした？」

「なんでそう思う」

「女のカンですよ、カン」

いや、本当にカンなんだけどね。

それに対してキンジは思い当たるところがあるっぽいのか首を捻^{ひね}る。

「まさか、あの時か？ いや、それだけであいつが機嫌悪くなるとは……」

「思い当たる節があるようですね。だったら解決方法はひとつ！ 本人に聞いてみる、これに限るね」

「思ったよりもシンプルだな……いや、分からなくもないが。機嫌悪いのに話し掛けて大丈夫なのか？」

あー、これはアリアと比べてるね。

機嫌悪い時に話し掛けたらダメだったパターン経験しちゃってるから。

「むしろ話し掛けないと余計に機嫌悪くなると思うよ?」

あたしはそうアドバイスする。

アリアどころか、お姉ちゃんにまでヘソを曲げられたらさすがのキンジも困るのか頭を掻きながら息を吐く。

「すまないがレキ、ちよつとここで待つてくれるか?」

「——イヤです」

即答!?

キンジもまさか断られるとは思っていなかったのか、目をパチクリさせてる。

まさか……あのレキがこうもハッキリ言うとは、りこりんもさすがに驚かざるを得ない。

そして同時に確信する。

キンジがレキに壁ドンしてた日、レキはアリアを間違ひなく殺そうとしてた。

『恋してはならない』

あの時、アリアに向けてレキはそう言った。

つまり彼女は緋々色金をキンジに近付けたがついていない。

「だから何でだよ。霧と話すだけだろ?」

「ダメです。アリアさんもそうですが、特に彼女には近付いてはなりません」

これは相当だね。

表には出さないけど、お姉ちゃんが間接的に否定されてるみたいでイラツときた。

「おー、レキユがここまで独占欲が強いとは驚き。仕方ない……キーちゃんにはあかしから話しくとくよ」

「すまん、理子。正直……俺としてはコイツの行動がよく分からん」

キンジからして見ればそうだろうね。

「それじゃあ、邪魔者は退散しましょう。まったねー」

と、あたしは元氣よく手を振って走り去る。

観光客に紛れてキンジ達が見えなくなったところで、すぐに歩きに変える。

そうしてリリヤの近くまで来た所で、あたしは息を吐く。

勘弁してよ……ただでさえ色金の侵食うんぬんがあるのに、お姉ちゃん精神バラン

スまで不調になったら……うん。

いや、多分適度に自分でバランス取ろうとするだろうけどさ……この間みたいに注射器が転がってるなんて言う光景は見たくない。

でもこんな事を妹に頼むのも、どうかって思うんだよね。

あ……

その前にリリヤの仕事が何なのか聞いてなかった。

一応、確認しておこう。

「ねえ、リリヤ」

「……ん」

「ソフィーから頼まれた仕事って、何？」

「……威力偵察」

威力偵察、か。

「何かやつちやいけない事とかある？」

「……特にない。けど、ツアオツアオと合流する」

ツアオツアオと？

あの守銭奴に会ってどうするつもりなんだろう？

天才の考える事は常に先を行き過ぎてるからよく分かんない。

それはともかくとして、特にリリヤに禁則事項はないらしい。

なら——

「お姉ちゃんの頼み、聞いてくれる？」

こんな事、家族に頼む事じゃない。

でも……

——手段は選んでられない。

◆ ◆ ◆
観光地を3ヶ所ぐらい回って、理子は京都駅へと戻り呉へと旅立った。

リリヤは名残惜しそうに小さく手を振っていたけれども……それに対しての理子の顔はすごく未練がましかった。

そう、まるで過保護な母親みたいに去り際に何回もこっちに振り向いてた。

最早ただのシスコンだったね、あれは。

1人っ子の弊害かな

なんて思いつつも、リリヤに目を向ける。

「楽しめた？」

「……うん」

「なら良かった。そろそろお仕事に戻らないとね」

「……ん」

言いながらリリヤは静かに歩き出す。

さて、私もちよつとお仕事しないと。

根回しは大事。

あの守銭奴達にちよつとした交渉に行こう。

水投げの日以降に調べて居場所は掴んでるし。

そう思つてリリヤが向かった方へと歩き出す。

……。

……。

……。

あれ？ 行く先々でリリヤを見かけるんだけど……まさかのお仕事は共同作業？

と思つてたら、目的地に着いた。

京都の四条河原町、鴨川付近に存在する高級中華料理店『好好（ハオハオ）』。

ここは藍幫ランバンの隠れアジトだったりする。

どうやらリリヤもここに入つていったらしい。

携行してる変装セットで、近くにあるコンビニのトイレに入つて適当にパッと済ます。

今日は中性的なボーイッシュな少女にしよう。

そうしてトイレから出て、隠れアジトに表から入らず従業員出入り口から職員が出たのを見計らつて潜入。

隠れアジトと言っても構成員の雇用先であつて、記憶が正しければ裏の仕事に従事するためのアジトとしては機能してない、はず。

ただ単に宿泊先と言つた感じだろう。

なので大したセキュリティはないと見える。

従業員用の通路を通り、階段を上がる。

おそらく人目のないところで会談なり準備なりしてるだろう。

そうして最上階のVIPルームのような絢爛な部屋が目についた。

直感的に、怪しい……

貸切の看板もないし、従業員が出たり入ったりしてる割には運ばれるのは料理じゃない。別には日用品とか物騒なモノばかりだし。

別に私は暗殺に来た訳じゃない。ちよつとした会談をしに来たんだから、潜入はここまで。

龍と虎が赤と金色で描かれた両開きの扉の前に立ち、普通に押して開ける。

「你好ニイハオ♪」

なんて、気軽に挨拶しながら入ればココ三姉妹が卓上テーブルを囲んでキョトンとした顔。

1人の傍にはラジコンヘリとレミントンM700、1人はサブマシンガンであるUZ Iをいじってるし、そして最後の1人は爆弾つぽいのいじってる。

すぐに全員目の色を変えて席から立ち上がり、袖から腰からとどこからか長剣、刃が幅の広い柳叶刀リュウエイダウ——日本では青龍刀と呼ばれてるけど、間違い——残りのココは、刃の

付いた扇である戦バトルファン扇を構えた。

「日本人の武偵、何の用力？」

レミントンの傍にいる長剣を握ったココ、狙撃手である事から長女の狙姐ジュジュが真つ先に聞いてくる。

「ボクとしては穏やかにいきたいんだけどね」

言いながら私はイ・ウーのスクールリングを見せながら、

「ロンドンの殺人鬼なんだけど、分かんない？」

と笑顔で聞く。

『開ジャック?手傑克!』

と私の自己紹介に対してすぐに驚き、中国語で三姉妹揃って私の名を叫ぶ。

「私達ウオに何の用ネ？」

ここでもたしても長女が先に聞く。

四つ子とは言え、やっぱり長女は長女らしく姉妹を纏めてるらしい。

それにしても私って分かってても警戒心は下げてはくれないのか。

それどころか余計に武器を握り直してる。

私は話を通じない部類ではないと思ってたんだけどね……彼女達の反応を見るに

そうではないらしい。

そんな事は置いておいて本題に入らして貰おう。

「いや、用と言つてもちよつとお願いがあってね。どうせもう、戦役に向けての駒集めに勤しんでる——と言うか、今まさにその準備をしてるんだろう」

「それがどしたネ」

「狙姐——別に君達をどうしようと言う訳じゃない。ただ、ちよつとしたお願いだよ」

「変なお願いじゃないネ？」

「ボクのポケットマネーで報酬も出そう。お願いの内容はウルスの姫の暗殺ただそれだけ」

私がそう言うときココ三姉妹は、ハテナマークを浮かべたような顔をしてる。

それからお互いに顔を見合わせながら武器を下ろす。

どうやら、武器を下ろしたあたり交渉には乗るらしい。

そのまま狙姐ジュジュが引き続き話を続ける。

「……どう言う事ネ」

「ちよつとばかり邪魔だと思つてね。別に生け捕りにしたいならそちらのご自由に。そうだね……成功報酬は100万円はどう？ ちなみに3人じゃなく1人、100万円ね」

今のレートで日本円にすれば約1400万〜1500万つてところかな？

守銭奴である三姉妹は提示された額に目の色が変わる。

少なくとも安い報酬ではないはず。

「それともう1つのお願いとしては遠山 キンジにはあまり手出ししないように」

「……お前も狙ってるのか？」

「ここでパオニヤン砲娘が聞いてくる。

「いいや、狙ってるんじゃない。ただ単に他人にはあまり取られたくないだけさ。別に反撃するなどは言わない、殺さなければそれで良い。ま、殺すつもりで襲わなきゃすぐにお縄を頂戴されるだろうけどね」

そう言つて私はゆっくりとそのままココ三姉妹の座つてる卓上テーブルの椅子に腰掛ける。

その間も3人は武器を下ろしても納める様子はない。

そのまま私は自分の家とばかりに椅子を揺らして、態度のデカい少女を演出して振舞いながら聞く。

「で、どうする？ 別に断つたつてペナルティも何もない。メリットしかなさそうな提案だと思ふんだけどね。胡散臭いと思ふんならシェースチを人質とでも思えばいい」

「む……あの俄ロシア斯人の少女か」

と、三女の猛妹^{メイメイ}が呟く。

「そう。そして、シエースチが万が一あの子を殺つても報酬は出そう」

「ますます分らないネ。狙いは一体なにカ？」

と、今度は狙姐^{ジュジュ}。

「裏も表もない。目的は今のところ」ただ一つ」だと言う事だよ。要件はそれだけ」

言うだけ言つて私はそのまま椅子から立ち上がり、扉へと向かつてその場を去る。

後ろでココ姉妹はどうするか中国語でヒソヒソと相談している。

さて、次はそのまま星伽神社の京都分社に行つて宿泊かな？

閉鎖的な星伽だけ……白雪がオツケーしてくれたおかげですんなり入れる。

これが分社じゃなかったら話は違ったかもしれない。

まあ、それは置いておいて……

疑われる事もなく——静かに事態は動いている。

それを確かに感じる私は、

「~~~~~♪」

ちよつとだけ楽しくて鼻歌を交じらせる。

71：人形と人間の境界

混浴の温泉、レキの侵入と言う難事を何とか掻い潜り脱出できた。

どうやら経験上、俺はレキではヒステリアモードにはなりにくいみたいだが油断は出来ない。

相変わらずレキはよく分からない事をさっきの温泉でも言ってたしな。

そう言う意味でも油断は出来ない。

なんだよ——

『良くない風の流れを感じたのです』

だの、

『死を纏った風を感じる』

だの。

相変わらずのポエムっぷりだ。

今に始まった事じゃないけどな。

俺は女将の沙織さんがサーブिसで洗濯・乾燥してくれた肌着の上から制服を着直し、そして『西陣の間』——この民宿である『はちのこ』の中で一番豪華な部屋——へと戻っ

てきた。

西陣織の反物がタペストリーのように飾られている部屋の中に、”1つの布団”に枕が2つ”置かれている。

この光景の”意味”を分かりたくもないが、分かってしまった。つて言うかこれ——

(……沙織さんの仕業かッ!?)

いや、レキ以外に他に誰かいると言ったら女将さん以外にいないだろうが……それに前にッ!!

このままだと仲良くレキと同じ布団で寝る事になるぞ。

予備の布団はと思い、押入れを開けてみるが——ないッ……!!

(どうする……!!)

一難去ってまた一難だぞ。

いつも寝てるベッドの布団よりも柔らかく、それでいて暖かそうだが……レキを外して1人でこの布団に入るとなると罪悪感で寝れる訳がない。

大体、こんな狭いスペースで2人なんて俺には拷問でしかない。

休める天国が地獄に早変わりだ。

そして、布団の傍にある浴衣。

これもよろしくない。

寝間着のつもりなんだろうが、浴衣は危険だ。

——脱げやすいからな。

帯1つ緩まれば自動的にほだけてしまう。

何よりも俺は寝相が悪い。掛け布団を蹴飛ばす事もままある。

そんな状態で2人仲良く寝てみる、目を覚ませば犯罪的な光景が目飛び込むに違いない。

そこで運悪くヒステリアモードになれば、俺は婚姻届を出すような事をするかもしれない。

取り敢えず枕を1つ持ってどうするか考えるが妙案が浮かばない。

こう言う時に色々と助言をしてくれるかも知れない霧の手を借りたいところだ。

が、その肝心の俺の元パートナーは別行動……と言うよりもレキによつて接触自体をさせてすら貰えない。

そこら辺も気掛かりだ。いい加減に説明して欲しいところだが、それは何度も思い、考えて……結局は諦めたしな。

同じ日本語なのに別の言語みたいに聞こえる程に難解な言い回しでしか答えは返ってこない。

そうして、通信科コネットの中空知よろしく布団周りをグルグル回っていると……

——す、と制服姿のレキが襖ふすまを開けて来た。

いつも通りの静かな様子で気配がなかったせいでも不意をつかれた俺は、枕をお手玉しながら……

「は、はは……2人だと枕投げも出来ないなっ」

などど自分でも訳の分からない言い訳をしながら枕を押し入れに置いて閉める。

ど、どうする……目の前の光景を直視しないために、何か、何か話題は……

「そう言えば、ハイマキはどうしたんだ……う？」

自分でも無理矢理だと思ふ話題変換。

レキはドラグノフを杖のようにして壁際に立ち、そのまま体育座りしながら言った。

「——室内にいます」

「室内？」

いるのは何となく分かってるが、姿が見えないからどこにいるのかを具体的に聞いたんだが……

まあ、いたらいたでハイマキは色々嫌がらせをしてくるからな。

それに取り敢えずは布団からは話は逸らせたようだ。

(とは言え……)

俺は向かい合うようにレキとは反対側の壁にもたれて座る。

この状況、気まぐすすぎる……!

昔の政略結婚をさせられた人達もこんな気持ちだったのだろうか。

何にしても沈黙はキツイ、だからと言って話題にも困る。

と言うか、レキはいつも通りあの銃を持つての体育座り——侍スタイルで寝るつもりなのだろうか。

別にそれはそれで構わないのだが、そうなれば俺は布団を端に寄せて1人寝させて貰うからな。こっちは体質的な諸事情により事が事だ。胃に穴が開こうが構わん。

「お前は……ここでも銃を抱えて座って寝るのか?」

言ったあとで俺は話題のチョイスを間違えた事に気付く。

今の言葉『そんな所で寝るな』↓『布団に入って寝ろ』って言う風に曲解されかねない。

と、思ったがその心配は杞憂だったらしく——

「はい。常に敵に備えよと……風が命じています」

そうレキは斜め下の畳を見ながら答える。

どうやら仲良く布団の中に、とはならないようだ。

珍しくすんなり行きそうだ。

「——そうか。なら、完遂してくれ」

「はい、ただもう一つ風は私に別の命令を出しています。それは私一人では実行できません」

「何だそれ？」

気になって俺は思わず眉を寄せる。

するとレキは立ち上がり、

「風を守る、ウルスの子孫を作る事です」

「ウルスの子孫を作る？」

「キンジさんと私の子供です」

「……!?!」

そ、その話をここで蒸し返すのかよッ。

狙撃拘禁初日のレキの部屋以来から聞いてなかったから油断してた……!!

そのままレキは立ち上がり、布団の上を歩いてきて明かりを紐を引いてカチンと消す。

星明かりだけとなった薄暗い部屋に浮かぶレキの瞳が……きろっ、と俺を見下ろす。

同時にゴトンと鳴る鈍い何かが倒れた音。

音のした方を振り向くと……ハ、ハイマキが部屋にあるデカイ高級そうな壺の中から

出てきやがった!

そのまま俺の背中をグイグイと頭を使って押してくる。

前方からレキも俺に迫って来る。

すんなり行くかと思ったら一転してピンチだぞ……俺っ。

前門のレキ、後門のハイマキだ。後ろが狼なせいで前のレキが虎に見えてきた……つて言うかこのシュチュエーション普通は男と女、逆じゃないのか!?

「それと敵に備えよと同時に、私はある事を命じられています」

言いながら急にレキが前屈みになったぞ。

……な、なんだ?

「——キンジさんを守れ、と」

そう言った瞬間にレキが普段とは違い、物凄い勢いで俺を押し倒してきた。

「……ッ!?!」

幸いにもハイマキに押された分、布団の上へと入り込んで俺はちょうど枕の位置に頭を落とす形になった。

後頭部は無事だが逆に眼前にレキの胸が押し付けられて安全とは程遠い状況だ。

もう何が何だか分からなくなって、俺自身の顔が真っ赤になるその時。

——ビシユッ! シュン! バリン!

襖の向こうから何かを裂く音と風切り音、そして窓が割れる音が闇夜の部屋に響く。絶え間なく撃たれる銃弾。

そのまま障子の窓が外れたのを見た瞬間——さらに2発の銃弾が撃たれ後に携帯電話「だった」ものが俺の顔の近くに落ちてくる。

それも2つ。

間違はなく俺とレキの携帯だ。

クソ、どうなってやがるッ!?

内心で悪態を吐いたところで、部屋の壁に飾られていた絹の反物たんものが羽のように舞い降りて縦・横・斜めにレキの背中へ重なる。

そこで銃撃は終わった。

「——狙撃です」

今の状況を顔色一つ変えずにレキは報告するように呟く。

それから数秒遅れて聞こえてくるタアンとエコーが掛かったように山に響く銃声。

狙撃銃は亜音速。

距離が遠いほど銃声が遅れて聞こえる。

撃たれてから数秒後に銃声が聞こえたって事は……

「レミントンM700。狙撃距離は約2180m、山岳方面から撃ってきました」

銃声から銃の型式を見抜き、しかも距離を割り出したレキが呟いた数字に俺は目を丸くする。

(……2180m……!?)

音からして1000mは越えてるだろうとは思ったが、まさかレキの狙撃距離キリングレンジの2051m以上だぞ……

どうやら敵は、目の前にいる狙撃の天才児を上回る天才らしい。

しかもレミントンM700。

装備も信頼度が高い上に性能も良いと来た。

「移動しましょう。敵に位置が分かりすぎている」

レキの下から這うように出て行く途中で掛けられた言葉。

「敵ってなんだよッ……! なんて俺達が狙われる!」

身に覚えがない訳じゃない。

イ・ウー関連で色々ドンパッチやってはいたが……あいつらのボス——シャーロツクは空に消え、組織としては崩壊してははずだ。

ヤツらの生き残りか……?!

だとしても早すぎる。

ましてや中心は俺とアリアのコンビだ。

レキはサポートでいたが、それだけだ。ブラドみたいな大物を実際に捕まえた俺達からすればレキがターゲットになる優先順位は低い。

これは、つまり……お前が夏の終わりの屋上で言っていた”これからの敵”——それが来たって事なのか？

狙撃してきた方向から死角になるよう裏の勝手口から出る。

出る間際に後ろから沙織さんが警察を呼ぶ声が聞こえた。

おそらくは電話で通報してるのだろう。

警戒心を剥き出し、毛を逆立たせたハイマキが不意に勝手口を出た途端に上を見上げ、それからどこからともなく。

「遠山キンジ レキ 2人とも 投降しやがれ です」

機械的な音声。

人の肉声ではないと言うのがよく分かる、まるで言葉を切り貼りしたような声が聞こえた。

(こいつは……)

4月で聞いたボーカロイド……その姉妹作品の声だ。

その事に気付いた俺の隣で、レキは何かを見つけたのかドラグノフを空に構え、ダア

ンと銃弾を上空へと放つ。

そして、夜の空に火花が散った瞬間に見えたのはラジコンヘリ。

黒く着色されたそれが煙を上げてドライブウエーの方へと落ちていった。

だが、レキの銃弾に応戦するようにいくつもの弾丸が降り注いできた。

「まだいるのか——!?!」

どうやらさっきのラジコンヘリは1機だけじゃないらしい。

おまけに武装もしてるようだが……ラジコンが銃の反動に負けているのか精度は悪い。

「沙織さん！ 外に出ちゃダメだ！」

沙織さんが携帯を片手に出ようとしていたのを見かねて注意するが、同時に銃撃も激しくなる。

相変わらず命中はしないがそれでも下手な鉄砲もつてやつだ。

すぐさまレキが、

「——私は1発の銃弾」

あの詩を^{うた}呟きドラグノフを構えて反撃に出る。

1発も外す事なく夜闇に浮かぶラジコンヘリ射抜く。

空中で爆発が続き、3機目のヘリが落ちながら壊れた機械音声で、

「逃げたら……そこ、と 沙織……さんを 破、かいする、です アハハ アハハハハ
」

無差別攻撃を宣言してきやがった。

民間人もお構いなし、か。

どうやら相手は危険な奴であるのは確定だな。

ともかく優先されるのは民間人である沙織さんを危険に巻き込まない事だ。

まあ、元より逃げるつもりはあまりないんだけどな。

「へりはもうありません。旅館の陰から森に入り迂回して反撃しましょう」

レキに言われて移動を開始すると同時に俺はこの襲撃に不可解なものを感じていた。

武装の付いた遠隔操作できるラジコン。人工音声。

まるで4月にあった理子の襲撃を思い出させる手口だからだ。

しかし、理子と明確な約定がある訳じゃないが今は休戦状態みたいなものだ……俺をこのタイムミングで襲うのはおかしい。

いや……正確には俺と”レキ”を、だな。

理子の狙いは俺とアリアのコンビであって俺とレキのコンビではない。

それに理子がレキを襲う要素が思い当たらない。

そもそもレキと理子の接点自体が少ないのだからこの襲撃の動機としては不十分だ。

イ・ウーの線もない訳じやないが、レキはサポートでただけで狙われる対象としてやはり俺とアリアに比べれば優先順位がやはり低い。

……分からない。

一体、何で俺達が狙われるのかまるで分からない。

俺たちを襲つてる奴は、一体何が狙いなんだ!?

俺とレキは駐車場を抜け、その隣接してる林から森の奥深くへと進んでいく。

木々の陰に身を潜めながら狙撃手スナイパーの射線に注意しつつ前進して、起伏きふくの激しい道ではない道を通る。

やはり山奥は湿度が高いな。濡れた地面からは湿気の混ざった土と木々の臭いがする。

狙撃手スナイパーに狙われていると言う極限的な状況せいかいの所為か、体力の消耗が激しい気がする。

そんな中、レキは迷わずに息も切らさずに歩み進んで行く。

(不味まずいな……)

山奥に進むごとに暗さが目立っていく。

今日の前にいるレキの背中を一瞬でも見失えば、どこに行つたか分からなくなつてしまふぞうだ。

星の明かりも月の煌きらめきもこの森の中では届かない。

「レキもう少し——」

明るいとところへ行こうと俺が提案しようとしたところで、レキはこちらを向いて『シー』と静かにのジェスチャーをした。

ゆっくり俺の方に近付いたと思ったら唐突に何かに気付いたように俊敏になり、俺の袖を引つ張つてすぐさま木の陰へと身を隠した。

い、いきなりなんなんだ!?

先頭を歩いていたハイマキも素早くこちらに合流した。

「静かに、何かが近付いてきます」

こっそりとレキが俺に耳打ちするような近さでそう伝える。

まさか……さっきの狙撃手スナイパーか？

とも思ったが、遠距離から撃てる利点を捨ててまでこちらを搜索する意味がないだろう。

そんな俺の疑問に答えるかのように聞こえてきたのは、何かの羽音。

フィンと言う、高い音を発しながら何かが近付いて来る。

「何だ？」

「分かりません。ですが、少なくとも自然のモノではない」

俺の疑問にレキは冷静に答えた。

それには俺も同意だ。

確実に虫とかではない。

音は段々と近付いて来る……先手必勝で仕掛けるか？

いや……ダメだな……

近付いて来るものが分からないのに仕掛けるのはリスクが高い。

奇襲は基本的に相手が分かかった上でやるものだ。

だからこの案はなしだな。

だが、見つかった時のために一応ベレッタを構えておく。

しばらく静かにレキ、ハイマキと共に息を潜めていると音は段々と遠ざかって行つた。

「どうやら行つたらしいな」

俺はその言葉と共に構えていたベレッタを軽く下げて立ち上がる。

「ええ……ですが、キンジさん」

そこで言葉を区切つてレキは俺を静かに見上げた。

「声を潜めて下さい。どうやら相手は集音器を使っていると思われる。さつきキンジさんが旅館の女性の名前を叫んだ後に、敵も彼女の名前を言った」

そう言えばそうだ。

旅館のホームページには女将の名前は掲載されていなかった。

なのにボーカロイドの声は『沙織』と名指ししていた。

「どうやら敵は、そう言った機械を駆使する合理的な人物であると思われます」

レキの言葉に同意するように俺は頷く。

「なるほどな。だが、これからそんな敵にどう対処する？　そもそも俺達はどこに向かっているんだ」

「狙撃地点を推測し、こちらの狙撃に適した場所へと向かって攻勢に出ます」

「反撃するとは聞いていたが、そんな場所があるのか？」

「はい。目星はついていきます」

さらりとレキはそう言つてのけやがる。

今まで地図とかを見ていた素振りはなかった気がするが、こいつが嘘を言うようには見えないしな。

大体、狙撃手スナイパーに対しての対処法を俺は知らない。

餅は餅屋つてヤツだ。

ここはレキに合わせるしかないだろう。

そうして再び歩き出したレキ、ハイマキに俺は付いて行く。

妙な羽音が聞こえた地点からしばらくして、先程とは違うずぶりとぬかるみにハマった感触がする。

暗くて見えないが……どうやら目の前には川があるらしい。

レキはこんな中でもすんなりと妖精のように川を渡って行く。

どうやら折れた木やら川面から出た岩があつてその上を渡っているらしいな。

俺も何とか目を凝らしながらレキに続いて行く。

そうしてたどり着いたのは、1本の大樹だ。

かなりでかいな……5人は陰に隠れられそうだ。樹齢は1000年ぐらいありそう

だ、言うなればこの森の主だな。

きな臭い事に巻き込んで悪いが、是非ともこの森の主さんの加護を得させて貰おう。

「ここから、どうするんだ？」

少し休憩の意味も込めて、俺は座りながらベレッタの作動点検をしながら聞く。

まあ、狙撃手相手ではこんな銃じゃ太刀打ち出来ないだろう。

そもそも俺自身役に立たないだろうけどな。

だがさっきの羽音も気になるし、警戒するに越した事はない。

「ここ待機・索敵し、狙撃の機会を窺います」

索敵……な。

「こんな暗闇じゃあ、お互いに見えないだろう。視界も木々に遮られて最悪だしな。」

「そんな機会が出来るのか？」

「逆に迂闊うかつに動くと危険です。腕時計の夜光塗料や金属など、光るものは隠してください」

狙撃される危険性を避けるためだろう、レキの言う……金属はともかくとして、だ。

「夜光塗料？ 敵からどれぐらいの距離があるか分からないが、こんな見えるもんか」

「——私なら見える」

真顔で言うレキに俺は生唾を呑む。

相手はレキを上回る射程距離を持ち、携帯を寸分違わずに撃ち抜く程の優れた狙撃手。
スナイパー

レキが見えると言うのならこんなのも的になりかねないと言う事だろう。

「それに相手はおそらく、微光暗視照準器スターライト・スコープを搭載しています。でなければ夜襲は仕掛けない筈ですし、黒塗りのラジコンも見えないでしょう。技術もあります但し装備も充実していると思われます」

微光暗視照準器スターライト・スコープ——狙撃銃とかに取り付ける暗視装置だな。

前に俺も見せて貰った事はあるが、深夜の暗闇でも昼間みたいに見えるようになる代物だ。

「旗色は悪そうだな」

「しかし、勝機がない訳ではありません」

俺の言葉を反論するようにレキはそう言う。

「2050m……ここは既に私の射程距離圏内です」

「射程距離でも敵の場所が分からなければどうしようもないぞ……」

腕時計を外しながら、逆に俺はレキの言葉に反論するように返す。

「だからこそ、機会を待ちます」

そう言ってレキは座る。

眉を寄せる俺の足元で伏せていたハイマキが突然に起き上がり、耳をヒクヒクと動かす。

そして、何かを知らせるように吠えずに喉を鳴らして低く唸り始める。

なんだ……？

耳に意識を集中させると聞こえてくるのは——フイーン——と言う高い羽音。

こいつは、さつきも聞いた音だ。

「この木の脇にある茂みに隠れましょう」

レキに言われ、移動する。

ハイマキはいち早く茂みに入り込み、俺達もそのあとに続く。

そのまま音のする方を警戒しながら様子を見てみると、音の正体が段々と近付いて来ていると分かる。

何が来てるんだ？

得体の知れない物に恐怖を抱きながら声を押し殺す。

なんだ、ありや……？ アレは……ドローンか？

木の間に縫うようにして現れ、さつき渡った小川の上で空中静止している物体は最近色々と話題になりつつある遠隔操作が出来る小型無人機だ、

4つのローターで動いてるらしいそれは、どうやらただの無人機ではなさそうだ。

”銃身っぽい物”が機体の下部に蜂の針みたいが付いてるからな。

索敵だけが目的じゃないだろう。

しかし、さつきのラジコンヘリよりも実用的な感じがするぞ。

何でさつきの夜襲の時に使わなかったんだ？

そんな事を考えているとそのドローンはその場で如何にも索敵してるとばかりにその場で方向転換し始める。

やり過ぎすしかないだろう。

と、思ったが……おかしい……アイツ確実にこつちを正面に向けたところで止まったぞ。

俺が違和感に気付いた時に、すぐにレキはドラグノフを隣で構えて迷いなくドローンの中央を撃ち抜いた。

その後、バチバチと音を立てて川に落ちる。

「見つかったようです。すぐに移動しましょう」

そう言うのとレキはドラグノフの銃口を上に向けて素早くその場を立ち上がり茂みを出る。

あの暗闇でこつちを見てたつて事は思ったよりも高性能っぽいな……！ 何か暗視装置でも付いてたんだらう。

俺もレキに続いて茂みから出ながらそんな事を考えているときっきのドローンの飛んでる音が聞こえる。

もう増援かよッ……?! しかも、音からして1機じゃない。

少なくとも3機以上は近くにいる。

と思えば今度は銃声。

足元に銃弾が跳ねる。

おいおい……さっきのラジコンヘリよりも精度がある気がするぞ?!

上空にはいるんだらうが、木々が邪魔でどこから撃ってるのか分からない。

反撃のしようがない。

取り敢えず木を上手く遮蔽物しゃへいぶつにしなから退避。

しかし、追撃は止まらない。

レキは木の陰に隠れながら素早く上空に3発の銃弾を撃った。

閃光が連続する。

すると、銃声が……止んだ？

「今ので撃ち落としたのか？」

「僅わずかに見えるマズルフラツシユを的にして撃ちました」

違う木から顔を覗かせてレキにそう聞くと、しれつとそう返してくる。

相変わらずの神童だな、お前は。

ともかくこれでさっきの妙な玩具おもちゃは来ないだろうが。

それでも、安心は——

瞬間——バウ！ とハイマキが上空に向かって吠える。

また新手か?!

そう思つてベレッタを構えて待ち受けていると、木々を折つて何かが降りてきた音がする。

何か落ちてきたぞ……何だ？

それから何かを葉室に送り込む重厚なりロード音が闇の中から聞こえる。

そして――

レキが隠れていた所の木の幹が爆音と共に風穴が空いた。

「――レキ?!」

目を向けていればどうやら回避していたようで、俺の傍まで来ていた。

メキメキと決して細くはない木が、倒れる。

近くに立っているのは……あれは――

「……………」

アイツは、横浜ランドマークタワーでジャックと共に現れたメイド――シエースチだ。

今回はどうやらメイド服じゃないらしい。

白い機械甲冑――いや、プロテクトスーツとでも形容したら良いのか？ とにかく近

代的なそれを身に纏っている。

極めつけは右腕にある物だ。

腕に着けられているのは見た目からして恐らくはパイルバンカーだろう。

出すのは銃弾じゃなく杭っぽいし、今もガシャンとリロードした上に葉莖が落ちてるしな。

人に向けるもんじゃないだろう、どう考えても。

「……………」

無言でこちらを見ながらゆっくりと歩き出す。

取り敢えず俺はベレッタを構えて足を撃つが、容易くプロテクターで弾かれる。

「逃げましょう」

レキが淡々と言うそれには賛成だ。

問題は、

「どうやって逃げる?」

敵だと言わんばかりの目の前の脅威からどう逃れるかだ。

「私に策があります。本来なら別にとつて置きたかったのですが、仕方ありません」

言いながらレキはドラグノフを構えて撃つ。

「撃ちながら後退して下さい。それから合図をしたら前を向いたままで」

言葉と銃弾を止めないレキに倣ならって俺は言われた通り撃ちながら後退する。

流石に数が多いと鬱陶しいのか相手は時々、左手の手ガットレット甲を使って銃弾を防ぎながら

もゆっくり前進する。

レキは策があると言ったが、本当に大丈夫なのか?

そう思いながらも俺はひたすらに悪路を走り続ける。

ハイマキが俺の隣を余裕で走り抜けた。同時にレキも俺のすぐ後ろに追いつく。

「今です、前を向いたままでいて下さい」

レキがそう言った瞬間に彼女はさっきのシエースチが居た場所に向かって何かを投げた。

言われた通り、俺は前を向いたまま走る。

すぐに変化は起こった。

背後から迸る閃光。

逆に明るすぎて何も見えなくなるほどにこの暗闇の森が一瞬、光で白くなる。

それはすぐに消えたところでハイマキがこちらに見えるように木の陰から顔を出し、こつちだとばかりに小さく吠えた。

泥水を越え、崖のような坂道を降り、ハイマキに連れられて来たのは少し開けた場所だった。

森の中なのは相変わらずだが、態勢を整えるには良さそうだ。

一角にはいい感じの大岩がある。

そこに腰掛けながら息を整えていると、レキが戻ってきた。

どうやら上手く逃げられたらしい。

「何をやったんだ、さつき。物凄い光だったけど」

「武偵弾の1つである閃光弾フラッシュを使用しました。敵もさすがにしばらくは動けないですよ

う

いつも通りに淡々とした口調でレキは答える。

武偵弾——俺がシャーロックの時に使った特殊弾、か。

あれは1発が100万ぐらいだから、ホイホイ持てるような物じゃない。

専用の職人も必要だしな。

「問題は、相手は狙撃手だけではないと言う事です」

「何……?」

「私達が発見された時点で狙撃手からは約2キロの距離がありました。しかし、あの機械が発見されて1分40秒で彼女は現れた。彼女が狙撃手であるならば約2キロの山道をそんな早く進む事は出来ない」

酸欠になった頭でレキに言われた事を冷静に飲み込む。

確かにそうだ。

じゃなきや矛盾だらけだ。

「キンジさん——私を使って、ヒステリアモードになって下さい」

……ん?

な……何だつて?

「お、お前……どこで聞いたのか知らないが……いや、どう言う物か知ってるんだろう

が。ヒステリアモードになるには……だな」

突拍子もない事に俺が言葉に詰まっていると。

「分かっていきます。ですが、悠長な事は言つていられない。この戦いの結果がどうであれ、”今のあなた”ではこの森を抜ける事は出来ない」

その言葉に詰まっていた言葉すら出なくなつた。

レキの言う事は……正しい。

相手が狙撃手であれ、シエースチであれ、一度補足されれば俺は終わりだ。

そう、今の俺では。

相変わらず気の進まない時に嫌な選択肢を出してくれる。

『人生、そんなものだよ』

もし、今さつき心に思つた事を呟いたら霧ならそう返すような気がした。

……そう返すだろうな、あいつなら。

「私は、何をされても構いません。あなたになら」

レキはそう言うが気は進まない事に変わりはない。

だが、ここでならなければ……”あの時”と同じようになる。

ジャンヌと戦つた学園島の地下倉庫ジャンクシヨンでの俺の元パートナーの悲惨な姿……それを今

度は目の前で再現されるかもしれない。

結果的には軽傷で済んではいたが……あんなのはもう見たくはない。

「キンジさん早く、HSSに——ヒステリアモードに」

いつもの口調だがレキの言葉に焦りの感情が見える。

時間がない事を強調してるのだろう。

俺も覚悟を決める。

「——分かった」

俺は立ち上がり、レキを引き寄せて相対する。

覚悟を決めても慣れないよなこう言う事は……いや、慣れたらダメなんだけど。

まじまじとレキを正面から見ると美人なのをより一層認識させられる。

人形みたいに整った顔立ち、黄色い瞳とミント色の髪がこの暗闇の中でも輝いて見える。

白雪の時はともかく、自分からこう言うのをするのに慣れてない俺はここで止まってしまう。

あー……正面からジツと見られてると変に意識しちまう……

どうしたもんかと、悩んでいると。

——バウ！ ドン！

ハイマキが吠えてから遅れてレキは俺を突き飛ばした。

俺とレキの間に何かが割り込み、俺が腰掛けてた大岩を轟音と共に粉碎した。

飛び散る破片、衝撃、聞こえるパイルバンカーのリロード音。

まさか——もう追いついたのか?!

プラチナブロンドの髪を靡なびかせるシエースチはそのまま、俺ではなくレキの方へと地を蹴つて進んでいく。

「クソ——!」

吐き捨てながらベレッタを構えるが、射線上にはレキがいる。撃てないッ。

この暗闇で下手に撃てば、同士討ちの可能性もある。

そのままレキは確実にシエースチに追い込まれていく。

そんな主人の窮地にハイマキが援護しようと、飛び掛かった。

しかし、シエースチは物凄い反応速度で左腕を払いハイマキの胴を横薙ぎにして吹き飛ばした。

「——ハイマキ?!」

森の奥へと消え何かに叩きつけられる音に俺は声を上げた。

が、それとは別にレキは冷静にドラグノフをハイマキに気を取られて静止したシエースチに向けて構えていた。

反撃のチャンス。

ハイマキが作ったこの時を生かすために俺はベレッタを構えてレキの援護に向かう……が。

——ビシュ！

俺の近くを何かが通り抜けた音がした瞬間、レキの体勢が崩れる。

マズイ!!

その隙を逃さないとばかりに迫るシエースチに向かつて発砲しようとするが、俺の足元で何かが跳ねてレキと同じく体勢を崩される。

「レキーっ!!」

地面に倒れ、名前を呼んだ時には既にレキはトラックに跳ね飛ばされたみたいに木に叩きつけられていた。

お、おい……嘘だろ。

あんなもん喰らえばどう考えても五体満足でいる保証がない。

同時に遠雷のような音が聞こえ、理解した。

俺達が体勢を崩したのは狙撃によるもの。

レキは倒れたまま動かない。けれども、彼女は何故かパイルパンカーをリロードしている。

……まさか、今のをもう一度叩き込むつもりか!?

「俺達を……俺達をどうして狙うんだ?!」

俺が疑問を叩きつけるように叫ぶと、シエースチは歩みを止めて無機質にこちらを向いた。

それから小さな声で、答える。

「……頼まれた。彼女の破壊を」

頼まれた……?」

そう言われて、最初に思い当たるのは――

「ジャックか?」

俺の出した名前にシエースチは反応しない。

こいつはジャックの仲間。それは横浜ランドマークタワーで知っている事だ。

だが、ヤツ以外に他にいるとすれば――

「まさか、理子……」

そう……ジャックの弟子でもある理子もシエースチとは何らかの関係があるだろう。

あまり考えたくないが、繋つながりを考えると自然にそうなる。

「……違う」

しかし、彼女は否定した。

それだけ言ってシエースチはこちらに向けていた顔を戻して再び歩み始める。悠長に寝てる場合じゃない。このままじゃ、レキが危ないッ。

俺はベレッタを持って駆けようとする、この山の中に不相応な音が響く。

立ち止まり、注意して聞けば……これは——バイクのエンジン音？

ビイイインと言う甲高い音は、恐らく2ストロークエンジンだからだろう。

段々と音は近付き、木々の中からそのバイクが飛び出てきた。

それから、シエースチの前に立ち塞がるようにバイクを止めながら抑止の言葉を放ったのは、

「待つネ」

——ココ。

あの水投げの日に俺に通る魔みたいな真似をした香港武偵高の留学生。

アリアと同じ髪型である黒いツインテールと派手な中国風の衣装を揺らし、バイクに乗ったままシエースチに語り掛ける。

「レキ——優秀な駒ネ。殺すにはやはりもたないヨ」

「……………どうするの？」

「持って帰るだけネ。使えるものは使うヨ」

「……………」

そのままシエースチは武器を下ろす。

シエースチが頼まれたつてのは、ココにつて事か。

まさか……こいつらが繋がつていたとはな。

おまけにこのタイミング。狙撃銃は持つていないが俺達を狙つていた狙撃手も、恐らくは彼女である線が濃厚だろう。

俺は静かに立ち上がる。

「動くな。キンチ——追試は0点ネ。でも、戦績の優秀な駒は好きヨ。もう既に先約が
いるのが残念ネ」

ココは俺に滅音器付きのUZIを構えながらそう言つてくる。

どうやらさつきの話の話を聞くに、俺も持つて帰るつもりだったのだろう。

先約があると言つるのは、多分アリアの事だろうな。

何て考えてる場合じゃないぞ。

形勢は圧倒的に不利だ……

ハイマキはどこかに飛ばされ、レキもぐつたりとして動かない。

レキが戦闘不能である以上、実質2対1と言う状況だ。

「手？捨てるネ。胸のDデザートイグルEもヨてっぽう」

武装解除を要求するココに俺は従うしかない。

見えるようにベレッタとデザートイーグルを目の前に出して、前へ放り投げる。

それからココはUZIで後ろに下がるように示す。

「俺達を……どうするつもりだ？」

何か打開策を見つけるためにも俺は下がりながらも時間稼ぎを試みる。

実際に俺達をどうするつもりなのかも気になるところではあるしな。

「これから超能力^{ステルス}、みんな滅びる。だけど、お前らみたいに『ただの人間だけど強い駒』、早く手に入れておくの良いネ。これから乱世、始まるヨ」

乱世、だと？

ココはそのまま続ける。

「キンチ、ジャックに気に入られて下手に手出し出来ないのが残念ネ。だから、お前は見逃してやるヨ。君子^{君子、危うきに近寄らず}不近刑人ヨ」

……そう言えば海の中——イ・ウーでシャーロックがそんな事を言つてたような気がしないでもないが。

ココの言つてるそれがマジなら完全にヤバいんだが。

気に入られてるって何ですかね?!

「依頼は完了ネ。これで100万^{ウオ}元は私達^{ウオ}の物ヨ」

キヒヒと笑いながらココはそう言う。

どう言う事だ？

シエースチはココ達に依頼、あるいは雇われているらしいが……さらにココに依頼したのがあるのか？

冷静に思考してる内にさっきのドローンが静かに2機ほど空から降りてきた。

状況が時間と共に悪化してやがる。

「さっきの場所に戻るネ。ココは先に行ってるヨ」

それだけ言つてシエースチを置いてココはバイクを走らせ、森林の闇の中へと消えて行つた。

音も遠ざかつて行き、完全に聞こえなくなつた。

この場はシエースチに任せただろう。

実際、コイツに俺が立ち向かつたところで勝率はない。

武装解除させられた上に、さっきの無人機が2機。

何か妙な動きをすれば瞬殺されるイメージしか出てこない。

万事休すか——！

その後にピン、と何かが弾かれる音。

——ドオオオオオオオオン！！

「なん——ッ!？」

轟音と爆炎。

ドローン諸共、もろともシエースチはそれに突如として包まれた。

俺は言葉を途切れさせて爆風によって吹き飛ばす。

そして地面を少し滑ったところで起き上がれば、森は燃えている。シエースチの姿はない。

一体、何が……？

「キンジ、さん」

声のする方に目を向ければレキがドラグノフを杖の代わりにして血を流して足を引き摺ずってこちらに向かつてきている。

だが不意に倒れかけたのですぐさま支えてやる。

「大丈夫か!？」

「いいえ……私は、もう動けません。立つのがやっとです」

いつもの冷静な口調。

しかし、心なしかその声は弱々しい。

実際のところ背中を強打していて、背骨には何らかのダメージがあるはずだ。

おまけに。パイルバンカーを打ち込まれた腹部には血が滲じんでいる。

防弾制服のおかげで貫通こそはしてないが……それでも、出血は酷くなっている。

「武偵弾の1つ、炸裂弾グレネードを使用しました。これで、何らかのダメージは与えたはずですが、レキはそう答える。

どうやら先程の爆発は俺がシャーロックの時に使った物と同じ武偵弾——炸裂弾グレネードだ。目の前のレキも心配だが、シエースチがああ爆発で生きてるのかどうかは少し気になるところだ。

「早く、1人で……逃げて下さい」

「何言ってるやがる——！」

急かすようにレキは自分を置いて逃げるように言うが、そんな事出来る訳ねえだろツ。

「私は、敗北しました。敵より、弱かったです。弱き者は強者の糧かてになる……それは、自然の摂理です」

弱肉強食ってヤツだろう。

たしかに自然の摂理かもしれない。

「合理的になつて下さい……2人とも一緒に殺されるより、1人でも生き延びた方がいい」

そうだな、確かに一緒に死んでしまうよりもどちらかが生き残った方がいい。

合理的だ。

それはこの場における”最適”な解答ではあるだろう。

でも、それは——”最善”——じゃない。

「お前……こんな所で終わっていいのかよ！」

「いいのです。私は……風の、私達の宿命の上で生きて死んでいく。それが私の生き方なのです」

人は誰しも色々なレールに沿って生きている。法律にしても、宗教にしても。

レキにとつてそれと同義なのが『風』と言うモノの教え——教条レールなのだろう。

だがなレキ、お前は忘れてる。

「そんな人形みたいに扱われて、人として生きようとは思わなかったのかよ……！」 笑

う事も泣く事も知らず……何も抱かないまま死んでいくなんて……そんな人生……！」

霧が嫌う、つまらない事じゃねえか。

「俺はやらねえぞ」

レキをここで置いて行くのも、それをしてアイツにそんな事を話すのも。

それにアリアだつて、こう言うだろう。

——諦めるんじゃないわよ、つてな。

だがレキはそれはダメだとばかりに首をふるふると振る。

「私は先日、感情を抱いた事がないと言いましたが……それは間違いです。本当は、あの

時は……なぜか、あなたには言えなかった……私は一度だけ、明確に感情を持ったことがあるのです」

「……レキ……」

「私は、『風に』……キンジさんのものになれと命じられた時……自分の、自分自身の想いが、初めて生じたのです——」

レキは……

「——キンジさんで良かった、と——」

感情を、持っていたんだ。

いや……正確にはきつと”知らなかった”んだ。

きつと感情表現する事が不器用な子供のように、未発達なだけなんだ。

「だから、キンジさん……生きて下さい。ここであなたを死なせたくない。上手く表現出来ませんが、あなたと共に過ごした2週間は——」

そうしてレキは、

「——楽しかった」

少しだけ微笑んだ。

ぎこちない笑み。

だけど、今まで動かなかった頬を緩めて確かに柔らかな表情をしている。

「……レキ、ここにお前を置いていくのは合理的で最適なのもかもしれない」
「……レキ、そんなお前を見た以上言わせて貰う。」

”最善”なのは、全員で生き延びる事だ」

レキの手を取って俺の肩に回し、ドラグノフを持って立ち上がる。
悠長に話してる暇はないだろう。

お前が今見せた笑顔を、俺は最初で最後にしたくはない。

俺の行動が意外だったのか、レキの目が少しだけ開かれている。

今度は少しだけだが驚いた顔をしてるな。

だけど意識が遠のいてるのか、すぐに地面を見始めた。

目の光も少しだけ曇ってるように思える。

ダメだな……レキは歩けなさそうだ。

すぐにドラグノフを背負い、レキの両膝を抱えてお姫様抱っこし、駆ける。

そのまま逃げる前に自分の銃を回収し、ハイマキの飛ばされた方向へと向かう。

少し走れば、飛んだ方向の木の影にハイマキは予想通り倒れていた。

這い蹲つくはって、力なく伏せている。

俺達に気付くとハイマキは力なく立ち上がり、ヨタヨタと近付いて来る。

こつちもダメージはデカそうだ。

「歩けるか、ハイマキ？」

俺がそう聞くと、ワウ、と小さく吠えた。

お前にも意地つてヤツがあるんだろ？

何となくそう思いながらも、ハイマキを連れて森の出口を探す。

逃げるぞ、逃げてやる。

こんな所で終わらせない。

そう自分に思い聞かせながらも肉体は正直に悲鳴を上げる。

だが、それもどうやら報われて森を抜けたらしい。

開けた先は一面、秋桜コスモスの咲く美しい野原だった。

星明かりに照らされたそれは、霧もやのように淡く光っているように見える。

「おい、レキ……レキっ！」

呼びかけて意識の有無を確かめるが、レキは——答えない。

マズイぞ……体温が低くなってるのを感じる。

ハイマキも主人の容態が悪くなっているのを感じ取っているのか小さくクウン、と鳴いている。

最初に連絡手段である携帯を破壊されたのはかなりの痛手だ。

圏内であればすぐに応援なり、救急車なり呼べたのにツ!

腹部の傷は静かに、確実に、レキから生きる可能性を奪っている。
俯く俺の視界の端にチラリとアゲハが通り過ぎる。

そのアゲハがチラチラと目の前を舞ってから、どこか案内するように飛んで行く。それを視線で追った先には、あれは……道路の明かりか……?!

雑木林の向こう側に小さく光ってるモノが連なっているのが僅かに見える。
あそこまで行けば、車を通るかもしれない。

(レキ……死ぬな……!)

お前の事、俺はようやく分かり始めたんだ。

ほんの少しだが、理解できたんだ。

だからこそ伝えたい事がある。

ここで死んだら、何も伝えられないだろ!

全身全霊をもって足に力を込める。

そんな時だった。

——ワウ……!

ハイマキが何かを知らせるように弱々しくも吠えた。

その時に、目の前にアイツが——シエースチが行く手を阻むように落ちてきた。

ガスンと重厚な音と衝撃で秋桜の花びらが舞い散る。

静かに立ち上がり、背中を向けていたヤツがこちらに振り向くと、左腕が……ない。先程の爆発でどうやら失ったらしい。

「……………ッ!?!」

同時に俺は別の事実を目を見開く。

左腕から“ケーブル”っぽいモノが見えている。

血は出ているのは分かる。

だが、明らかに人間のモノじゃない部分が見えている。

「お前……………」

それ以上、言葉が出てこない。

絶句しているこちらに構うことなく、彼女はこちらに歩み寄ってくる。

「……………разрушение^{破壊}」

パイルバンカーをリロードして、よく聞き取れないが何かを呟いた。

どうやら、どうしてもレキを殺したいらしい。

だったらどうする？

決まっている……抵抗するだけだ。

俺はレキをそつと背後へ下ろし、前へと出てベレッタを構える。

同時にハイマキも俺の隣に並ぶ。

お互い男だ。

種族が違っても何を守りたいかぐらいは分かる。

意地を魅せる時だ。

「横槍、失礼ッ」

突然そんな言葉と共にシエースチの側面から影が弾丸のごとく近付き、飛び回し蹴りを食らわせた。

しかも防御が不可能な左からの一撃。

そのまま牽制にグロックをシエースチへと撃ちながらこつちへと近付いて来て、長い黒髪を靡かせながら俺達の前に背を向けて立ち止まった。

お前は……いつも正義のヒーローみたいなタイミングで出てくるよな。

半分、来てくれるじゃねえかとも思ってたけど。

思わず安堵して息を吐く。

「よく俺達の場所が分かったな」

「あれだけドンパチしてたら大体の場所ぐらい分かるよ。一部燃えてて空が明るかったし、まあ私が近くにいたのもあるけど」

俺の疑問に”霧”は背中を向けながら答える。

「もうすぐ増援も来るよ……星伽さん達がね。どうする？　そのターミネーターさん！」

そう言つて霧はシェースチに対して呼び掛ける。

すぐさまシェースチは先程の霧の銃撃を防ぐために構えたであろうパイルバンカーを下ろした。

そのまま俺達に向けてしばらく機械的に視線を動かしたあと、凄まじい跳躍。

背後の森へと消えて行つた。

何とか……危機は去つたらしい。

「すまん、霧」

俺がそう言つると霧は「ふう」と肩で息を吐いて、こちらへと向き直る。

「無事で良かったね」

霧は言葉ではそうは言つてくれてはいるが、どことなく角がつくような言い方だ。

「で、レキさんは？」

そう淡々と言つてレキの傍へと近付き、しゃがみ込んで容態を見ている。

「腹部に裂傷、銃弾よりも大きい上に……貫通してない。さっきのパイルバンカーだね。この分だと内蔵の損傷もあり得る、か」

傷を見ている霧は冷静に分析しながら携行していた救急ポーチを取り出し、清潔な

ガーゼを取り出して処置をしていく。

手早いその応急処置を見て、俺は安心する。

「処置はしたけど、本格的な治療をしないと危ないかもね。まあ、それもすぐに解決するだろうけど」

そう言つて霧が立ち上がった瞬間、

「キンちゃん!」

白雪が道路のある方から走つてきた。

先程の白っぽい蝶に案内されるように連れられている。

その蝶を改めて見て思い出したぞ、あれは——ホトギアゲハ。

子供の頃、青森の星伽の神社で飼育されているのを見た事がある。

あの時は神社で蝶を飼育してる事に疑問を持たなかったが、おそらくはパトラのスカラベと同じで使い魔的なヤツなんだ。

つまり、あの蝶が俺達の居場所を知らせてくれたのだろう。

「何があつたの……?!」

「レキが——」

「見ての通りレキさんが重傷。お供のオオカミもね」

白雪に対して俺が答えようと思つたら霧が俺の隣に立ち、簡潔に事態を説明した。

「大変……！ 分かった、すぐに病院に連れて行くよ」

確かにレキの状態は危険で、霧が応急処置をしてくれたとは言え、ちゃんとした医療施設での治療は必要だろう。

だが――

「それは、ダメだ。相手には狙撃手がいる。街中だと狙撃されかねない」

俺はすぐに白雪にそう答える。

ビルなどが近くになればそれは恰好の狙撃場所になる。

おまけにこつちには狙撃手がない。つまりは反撃手段がないに等しい。

「そっか……あ、風雪」

1人、俺達の方へと2メートルはある和弓を持った武装巫女が近付いてくる。

風雪――白雪の1つ下の妹だ。

白雪の妹の顔立ちは姉に似ているのだが、風雪はクールと言った感じの雰囲気をしており実際に冷静な子だ。

「白雪姉さま、先に行かないで下さい。心配なのは分かりますが、1人で行くのは感心出来ません」

と、普通に注意された白雪は少しだけ落ち込みながらもすぐに切り替える。

「ごめん。それよりも、今は怪我人がいるの。分社に医師をお呼びして」

「病院ではダメなのですか？」

「相手には狙撃手がいるから、街の中に入っちゃ余計に危ないんだよ」

「なるほど……そう言う事でしたらすぐにお呼びしましょう」

風雪は白雪の説明で納得し、すぐに携帯を取り出して連絡を入れ始める。

ようやく肩の荷が下りた、と言ったところか。

道路に行つたところで2台の車——どれも光岡自動車の高級車——が止まっていた。

1台はオープンカーでワインレッドの卑弥呼、もう1台は堅牢そうな白のセダンの
クシナダ
 櫛撫。

その内の防弾車である櫛撫クシナダにレキを後部座席に寄せ、俺と霧とハイマキも後ろに同乗し、白雪は助手席に座る。

卑弥呼の方には風雪が乗り、先頭を走つて運転手と共に警戒をしている。

「キンちゃん、繋がったよ。マスターズ 教務科の宿直室にいる南郷先生に」

と言う白雪から白い携帯を受け取り、俺はすぐに状況を報告する。

——犯人が香港武偵高からの留学生であるココとシエースチと呼ばれる少女である事、ひえいさん 比叡山付近で狙撃を受け戦闘になり、レキが負傷した事も。

『それはケースE8だ、遠山』

俺の話をも黙って聞いていた南郷が俺の話が終わると低い声でそう通達してきた。

ケースE8——それは内部犯の可能性があるため周知は出さず、信用できる者に連絡を取り、当事者で解決せよ。

と言う暗号だ。

南郷の判断は……正しいのだろう。

実際に留学生で2学期の始業式に出ていたココが犯人である以上、他にも近くに居る可能性は否定できない。

もしそうなら、生徒全員に連絡すれば情報が筒抜けになるだろう。

そして、武偵法4条——武偵は自立せよ。2年、3年になれば自分達に降りかかった火の粉は自分で払うのが原則だ。教師陣が助けるのはインターンと1年までだ。

自分のいる学校がどんな方針で生徒を育てているかは当然、知っている。

昨日今日、入ったばかりの新人じゃない。

だが南郷の冷血漢め、少しは自分の生徒を心配する素振りぐらい見せろよ。

『もし民間人が巻き込まれそうになったらその時に連絡しろ、遠山』

その時にはもう遅いだろうな、と内心思いながらも俺は一礼して通話を切った。

そのまま次の電話をかける。

相手は理子だ。

ボーカロイドによる警告。武装したラジコン。

レキがアリアと喧嘩した時に理子が見せた構えが中国拳法カシンフイだったのも気になる。

イ・ウーで何か繋がりがあるんじゃないか？

それと、シエースチの事もだ。

ジャックとシエースチは関係者であり、ジャックの弟子である理子はシエースチと少なくとも間接的、以上の関係はあるはずだ。

そう思つて電話しているのだが……肝心な時に出ねえな。

そう言えば今日、大阪でアリアが呉で理子と武藤を待たせてるつて言つてたがそれ絡みか？

圏外なのか、ともかく理子が出る様子がなさそうなので一緒にいるであろうアリアにも電話してみるが同じく反応はない。

ココ……一体、何者なんだ？

銃撃戦はアリアに引けを取らず、ヒステリアモードの俺と同等の格闘能力、狙撃の腕はレキ以上。

まさしく万能の武人とも言うべき才能だ。

そんなのがいるとしたらイ・ウーの面子ぐらいしか思いつかない。

(もう一人いたな、イ・ウーのメンバー……)

思い当たって俺は、電話をかける。

深夜なものもあり、電話に出ないかと思ったが6コール目でその人物は出た。

『……星伽か？ こんな深夜にどうした？』

「ジャンヌ、俺だ。遠山だ。今、白雪の携帯からかけてる」

ジャンヌ・ダルク30世——あいつも元イ・ウーのメンバーなんだ。

だから、何か知ってるかもしれない。

『……？ なぜ、お前が白雪の携帯からかけているんだ』

訝いぶかしむジャンヌに余計な詮索をされる前に俺は素早く事情と本題を切り出す。

「数時間前に敵襲に遭ってな、携帯はその時に破壊された。それよりもお前に聞きたい事がある。イ・ウーにレキ以上の狙撃手はいたか？ それも、銃撃戦も格闘戦も出来るようなヤツだ。名前はココ」

「狙撃手……ココ……？ いやん。リーダーであるシャーロックを除いて、レキ以上の狙撃手は見た事がない。パトラなど扱える者はいても、それも嗜たしなみ程度だ。レキ以上の狙撃手など決して多くはないだろう。それはイ・ウーであつても例外ではない」

ジャンヌは深夜にも関わらずハッキリとそう答えた。

じゃあ、ココは——イ・ウーの残党じゃないって言う事か？

そんな時に霧が隣から、

「外見的な特徴は？」

疑問を投げかけてくる。

「特徴か？ アリアと同じくらいの高身長で、ツインテールの黒髪。中国っぽい民族衣装を着ていたがそれがなんだって言うんだ？」

『アリアぐらいの高身長で……中国っぽい衣装？ 待て……今の外見に一致するヤツなら確かにイ・ウーにいる』

携帯を当てながら霧に答えていたためにジャンヌの方にも会話が入ってしまったらしい。

が、それに対してジャンヌは反応を示した。

『名前は違うが、ツアオ・ツアオと言うヤツだ。イ・ウーでは外部組織からの技師、メカニック売人として所属していた。イ・ウーでの様々な兵器——魚雷やミサイルを乗り物として改造したのもヤツだ』

「何……？」

『ヤツはかなり金にうるさい。莫大な金が動く時には必ずと言って良いほど絡んでくる。日本でそう言うヤツを何と言うのかは知らんがな』

「そう言えば100万円がどうか言っていた。レキや俺を襲ったのは、どうやら誰かの依頼らしい」

『ふむ、お前の言うココが私の言うツアオ・ツアオと同一人物かどうかは確証は持てないが……人物像としてはほとんど一致する。今からそちらに向かう、どこにいる?』

「星伽の京都にある分社に向かっているところだ」

『分かった。すぐに私もそこに向かおう。お前に伝えたい事もあるしな』
そこでお互いに通話を切る。

不意に霧を見してみると彼女は、車の窓の外をぼんやりと見ていた。

さつき助けて貰ってからも視線をあまり合わせてない気がする。

……なんつか、雰囲気的にも話し掛けづらい。

金閣寺で理子が霧の機嫌が良くないみたいな話をしたが、この様子を見るにマジっぼいな。

俺達を襲った相手は気になるが、俺としてはこっちの方も気になる。

そんな事を考えていると、明け方に染まる空から雨が降ってきた。

まるで今の霧を表してるような、そんな天気だ。

72 : 雨のち晴れ

神社には会社と同じように本社と支社がある。その支社にあたるのが分社だ。

星伽ほどの神社ともなれば分社と言つてもそれなりに大きい。

京都の分社に着いた頃には随分と空も夕方くらいには明けてきた。

車から降りれば濡れたアスファルトの匂いがする道から、待機していた寵巫女——星伽に仕える、幼い巫女達——が、レキを用意していた担架で運んでいく。

俺、白雪、霧、ハイマキ、そしてタクシーで俺達に数十秒遅れて着いたジャンヌは、彼女らに続いて神社へと続く階段を登る。

「……遠山、ここはまるで城のようだな。ここならレキを街中の病院に搬送するよりは安全だろう」

ジャンヌは周囲に冷静な視線を向けながら言う。

「ああ。俺も来る度に思うが、星伽の神社は他の神社とは違うんだ」

「まるで砦だよな」

霧の言う通り、まるで砦だ。

俺達の眼下にはちやうど俺達を乗せた2台の車が厩車殿ガレージへと入って行くのが見えた。そこには車だけでなく川崎重工の偵察ヘリ『OH—1』——通称『ニンジャ』——が、格納されている。

この分社は小山の上であり、周りは杉の木で囲まれているため狙撃手は下の方しか陣取るしかない。

さらに鳥居以外に自由に出入り出来る場所がなく、周囲には武家屋敷のように塀で固められている。

何にしてもこれなら本殿の内部を撃つ事は出来ない。

鳥居の下には、先に到着した風雪や武装巫女達を守りを固めている。

ココ達も下手に追撃は出来ないだろう。シエースチが懸念事項だが……あいつは負傷してるし、おそらくは攻めて来ないだろう。

「こつちだよ、キンちゃん」

俺達は白雪に案内されて、救護殿と呼ばれる和風の医務室的な場所へと案内された。

既に一室には運び込まれたレキと、ふちなしメガネを掛けた女医がその傍にいた。

「ほう、随分と派手にやられたな。血液型判定・交差適合試験クロスマッチ、分かり次第すぐに輸血の準備や」

負傷状況を既に確認したらしい女医はナース達に指示を飛ばしていく。

どうやら女医は拳銃を腰に下げているあたり、衛生武偵らしい。メデイックDA

衛生武偵とは、簡単に言えば衛生兵みたいなものでこうした事件などで負傷した武偵や民間人を救護する武偵だ。一般の救急隊員では近付けない武力的に危険な区域で活躍する。

東京武偵高でもそんな武偵を育成する専攻科があり、それが衛生科だ。メデイカ

隣で霧は唐突に息を吐き、

「心配なのは分かるけど、休んだら？ 暗い顔が余計に酷い顔になってるよ？」

からかいながらも真面目な口調でそう言ってきた。

「——助かるよな？ レキは……」

「……………助かるよ、私が保証する」

少し間を空けて俺の目をようやく見て霧は言った。

安心させるように微笑みながら、自信を持った目で言ってくれた。

「あの女医さん、かなり手馴れてるね」

「うん、霧さん。あの人は星伽の嘱託医しよんたくさんなの。京都でも一番の名医さんだよ。たま

に変わった事を仰るけど」

「聞こえたぞー白雪い」

などと言いながらも女医の手は慣れた感じで動かしている。

きつと普段から負傷した武偵を見ているのだろう。
そう思わせるくらいに自然に動いている感じだった。

素人の俺が判断出来るくらいに、彼女は名医なんだと分かる。

誰に言われるでもなく、ここからはプロの仕事で俺は無事に治療が終わるのを待つしか出来ない。

「私も手伝おう。これでも汎パン欧州ユーロ医療ロビアン免許・看アシ護ステ助手資格テントを持っている。多少は助けになれるはずだ」

と、ジャンヌは手際よく医療用のエプロンや手袋をし始めた。

お前……そんな資格持ってたんだな。

俺の隣でハイマキはレキを見守るようにその場に伏せ始めた。

同じように負傷してるハイマキの治療をしようと巫女達が近付くが、その場を動く気配がないハイマキをそのまま治療し始めた。

お前も心配なんだな。

「それじゃ、私は鳥居で警護でもしてるよ」

霧は足早にその場を去ろうとする。

そうだ、霧に聞かないといけない事が――

(……………うっ)

声を掛けようとした瞬間、何か切れたような感覚。

何だ？ 視界が、かた……むい——

「キンちゃん!？」

「……遠山!？」

白雪とジャンヌの声が遠くに聞こえて、俺は真つ暗な海に沈んでいく。

◆

◆

◆

「キンちゃん!？」

「……遠山!？」

白雪とジャンヌの声が響く。

振り返れば、キンジの顔が私の胸に飛び込んできた。

「おっと」

思わず後ろに下がりそうになるけどそこは踏み留まる。

この脱力した感じ……完全に失神してる。

だらんと垂れた腕に沿うようにドラグノフが落ちそうになるけど、それをキャッチしてキンジをゆつくり地面に近付けて行く。

「キンちゃん……!」

「キンちゃん!!」

叫びながら近付く白雪、いや……ホントに近いよ。

キンジどころか私の顔に迫る勢いに思わず、チョップ。

「ていッ」

「きゃん！」

「落ち着いてよ、失神してるだけ。きつと緊張の糸でも切れたんでしょ」
言いながら私はキンジを仰向けにして寝かせる。

まあ一応、脈とかは見ておこつかな。

軽く首筋に指を当てて……脈はよし、息は、大丈夫だね。

やっぱり失神してる。

「白雪さん、空き部屋を用意して。キンジを運ぶから」

「う、うん。すぐに担架も用意するから」

パタパタと白雪がすぐさま走る。

全く相変わらず世話が焼けるんだよね。

キンジを空き部屋に運び込んで、付き添いの巫女達に着替えをさせてベッドに寝かせた。

白雪は最初、キンジの着替えをやろうとしたけど他の巫女達にさり気なく誘導されて部屋の外へ。

理由は、うん……何となく分かる。

しかし分社だけで白雪の対応に手馴れてたね、あの巫女達。きっと経験豊富な人なんだろう。

白雪はそのままキンジの傍にいたらしく、部屋の扉の前で守るように正座し始めた。

相変わらずのキンジ愛だね。

しかし、惜しかったな……結構、いいところまで追い詰めてたっぽい。

もう少し発見が遅れてたら手遅れでなし崩し的にあのウルスの人形姫が死んだのに……

私が2人を発見した時には白雪にもホトギアゲハによつて見つかったから、あの場で介入してリリヤを逃がした。

じゃないと本格的にリリヤが捕縛される可能性があったから仕方ない事なんだけれども。

——やっぱり、私が直接解体バラしてあげれば——

……。

……。

「……はあ」

思わずため息。

最近、思考と意識がちよくちよく引つ張られる。

お姉ちゃんからはダメって言われてるのに。

本当にどうにかしないと。

やっぱりキンジで遊ぶのが安定する気がするんだよね。

でも、当の本人は気絶中。

それに私としては今、キンジとはあまり話したくない。

遊びたいけど話したくない。

何だろう、この気持ち。

こんな複雑な気持ちになったのは初めてかもしれない。

ただハッキリしてる事は、キンジの隣にいる人形が気に入らないって事だけ。

運悪く死んでないかなー、と言う淡い気持ちを持って救護殿に立ち寄る。

そのまま治療中により封鎖されている扉の前へと立つ。

まあ、中は見れないんだけどね。

そのまま扉の傍に座る。

ああ……あとで理子に連絡をしないとかないと。

突然、妹が腕を無くして帰ってきたら気が動転するだろうし。

それはそうと、座ったら眠い……

夜中にドンパツチ起きた上に搜索して、結局は朝になったからそれも当然なんだけ
ど。

ちよつと仮眠しよう。

そう思つて目を閉じて、そのまま意識を手放す。

……。

……。

……。

——うん？

いつの間に私、手術してる部屋の中に入つてるんだろう。

周りも気のせいか暗い。

もしかして夜まで寝ちやつたかな？

取り敢えず電気は……これか。

壁にあるスイッチを押せば、そこに現れたのは一面の赤。

みんな赤色。

さつきの女医も、巫女も、ジャンヌも。

部屋自体がほとんど赤色に染まって、誰の臓器か分からないけど、とにかく内蔵が部

屋の一角にまとめられたように積み上がってる。

私はその光景につい肩を落とす。

……やっちゃったか。

仮眠なんて言っただけで意識を手放したのは駄目だったか……夢遊病よろしく無意識に行動してしまっただけか。

両手を見れば、赤色に染まってる。

いや、当然なんだけども。

取り敢えず……ぱつと見て負傷具合がマシそうな壁を背にして倒れてるジャンヌに近付いて見る。

「どうも〜ジャンヌ？ 生きてる〜？」

声を掛けてみても反応はなし。

あれ？ よく見たらこれ、四肢が離れてる。

……あーなるほど、人形っぽく繋がってるように見せてるだけか。

無意識で器用な事してるね、私。

と言う事は人形みたいに中身が見れちゃったり。

そう思っただけでジャンヌの着てる医療用のエプロンをチラリと上げてみれば、うん、子供の大事なお部屋まで見えてる。

さすがは私だ。

だけど、聖女の末裔だから火炙りにすればよかつたのに。

そこは無意識だから考えられなかつたんだらうね。

まあ、こんな所でどうやってするのかは分かんないけど。

肝心の人形姫さんはどうかと思つてベッドを見れば、どうやらこつちに手は出してないらしい。

いや待てよ、布団で隠れてるだけかも。

そう思つて布団をめくつてみる。

やつた♪ 手を出してなかつた。

お姉ちゃんからは止められてたけど、やってしまったものは仕方ない。

だったらこの場で最後まで解体バラして楽しんで方がい。

そう思つて私はすぐ傍にある医療用メスを取つて、ウルスの姫の病人服の前面をはだけさせる。

文字通り、人形みたいに白い肌。

思わず指でなぞつて感触を確かめる。

うん、いい触り心地。

中身はどこから確かめようかな♪

あ、そうだ……銃弾は人の心を持たない、なんて撃つ時に言ってるから”心”があるかどうか確かめてあげよう。

そうなるど肋骨が邪魔だから、その下から裂いて――

「霧、お前……」

声がして振り返つてみれば、扉の所にキンジ。

信じられないと言つた感じの表情。

何を見るのかも理解出来ない、言い表せない、反応出来ない。

まさしく絶望を顔に出してくれてる。

私は打ち震える、あの時と同じ。いや、金一が亡くなつたと思つた時以上の表情だ

よッ♪

もし、ここでこの人形を解体バラしたらどうなるのか！

どんな反応をしてくれるのか楽しみで仕方ない♪

我慢なんてしなくていい……！

私を満たして♪

メスは勢いよく、肌の海の中へ――

……。

……。

……。

「ん」

心地よい目覚め。

ぼんやりとして、すぐに意識がハッキリし始める。

そして周りを見て理解する。

夢オチ……か。

いい感じの夢だったけど、所詮は夢。

覚めれば手に残る感触も感情も霧散していく。

リアルな夢だった。

けれども余韻よゐんには浸ひたらしてはくれない。

何故なら夢だから。

心地よく目覚めても後味は悪い。

欲求は未だに満たされず、気分は晴れない。

切り替えよ……今、何時かな？

仮眠と思つてたけど結構ガチで寝てたみたいだし、時間も経つてるだろうね。

携帯を見れば、時刻は正午近く。

我ながら座つてよく寝てたもんだよ。

しかし、夢の中まで”そう言う内容”になっちゃあたり本格的にヤバいかもね。それはそうと、時間も経ってるしそろそろキンジは目が覚めたかな？

外は……まだ雨らしい。

何となしに私はキンジの所に行く前に鳥居の近くへと向かう。

警護している白雪の妹である風雪、その近くへと。

「白野さま、どうかされましたか？」

気付いた彼女が普通に私に話し掛けてくる。

まあ、昨日宿泊して多少話してるからね。

彼女から白雪に関しての愚痴を聞くくらいには親密度は上げてる。

実際のところ、何て言うのかな？ 姉妹はバランスが取れるように育つて事がよく

分かった。

白雪がおつちよこちよいな性格な分、その次女である彼女は落ち着いている。

反面教師で育った感じがするよ。

「いいや……不審な影がないか、私も気になってね。それに暇ではなくても、退屈はして

そうだから話し相手になろうかなって」

「そんな、お気遣い頂かなくても大丈夫です。それよりも、お休みにならなくて良いので

すか？ 昨日、異変が起きてから山の中を単独で探しておられてお疲れなのでは？」

私の事を心配してくれている。

白雪の貴重な友達、と言う事もあつてかそこら辺を配慮して彼女から色々世話をして貰った。

「さつき寝ちやつてね。おかげで、睡魔は消えたよ。神社にいるから魔除けされたかな？ おかげでスツキリ目覚めたよ」

「それは、良かったです」

と、彼女は微笑む。

「睡魔」と魔除けを掛けたジョークなんだけど、分かってくれたのかな？

少しばかり話題を出して、何か情報を言ってくれないか試してみよう。

「しかし、きな臭いね。100万円を報酬に2人を狙うなんて」

「そうなの、ですか？」

「ああ、風雪さんは別の車に乗ってから知らないよね。キンジの電話での会話を聞いてたからね、ちょうど同じ車にいたし」

「何故、お2人を狙ったのでしょうか……」

「さてね。キンジは変わった高校生で、レキさんは狙撃の天才っていうだけだと思うんだけど、何か危ない事に首を突っ込んだのかな」

「——蕾姫？」

風雪がレキの名前に反応を示した。
ん？ これはビンゴかな。

「少し、気になる事があります。白野さまもついてきて下さい。」

私はその風雪の言葉にきよんとした振りをする。

それから足早に鳥居を離れる風雪にすぐさま付いていく。

そのまま御殿の裏手に上がり、装備していた和弓や鎧を別室に預けると風雪は白雪の場所を巫女達に聞いて真つ直ぐそこへと歩を進める。

どうやら進展がありそうだね。

そのまま膳殿ぜんでんへと進んでいく。

「失礼します」

正座をしながら襖ふすまを静かに開けた風雪。

その向こうでは食事中だったらしいキンジ、白雪、ジャンヌの姿が見える。

白雪の様子は若干おかしいけど。

キンジの慌てぶりから見て、修羅場みたいだね。

そんなキンジはその場を切り抜ける話題逸らしのためか、

「か、風雪……外の様子はどうだ？」

助かったとばかりに聞いてきた。

「——今のところは何もありません。現在、警護は寵巫女達めくみみこに任せています」

そう言つて風雪はキンジに一礼してから白雪のところへと向かう。

そして、何やら耳打ちしてる。

私も部屋の中へと入るとキンジがこつちを見てくるけど、私は上手く視線を逃す。

やつぱり、今はあんまり話したくない。

キンジを直接見たら、何故かそんな気分になった。

「……………間違いないのですか？」

白雪が急に呟いた。

風雪からの報告は、ちよつと危ない雰囲気ふんいきの白雪を正氣に戻す程のものだったらしい。

「ゴメン、キンちゃん。私、ちよつとレキさんの所へ——失礼します。ごちそうさまでした」

パチンと、白雪は箸を置いた。

そのまま彼女は半分も食べてないお膳を残して、私の方へと近付いてそれから部屋を出て行った。

ふむ、どうやら余程重要な話らしい。

あの人形姫の出自とかウルスについて知ってるのかな？

まあ、私は大抵の事を知ってるけど。

それはそうと……話題を適当に出して正解だったね。

風雪も白雪に続いて部屋を出ようとする。

気になるし、ついて行こう。

私はキンジ達を一瞥して、風雪達の後ろへ。

人形姫のいる救護殿へと向かう。

そこにはどうやら治療が終わったらしい人形姫が布団に寝かされていた。

周りの巫女達が彼女を見守っており、先に到着していた白雪は人形姫の近くで何かを

観察しているようだった。

「どうですか、白雪姉さま?」

風雪が聞いてから間を置いて、観察が終わったのか白雪は正座したままこちらに向き直る。

その表情は重々しい。

「色金は、ありません。ですが、もしそうなら……彼女はやはり”彼の地”の巫女なのでしょう。『星伽史西聞』を、書かれていますしたらあの書物です」

「分かりました」

そう言つて風雪は一礼して下がる。

「どうも、何やら引つ掛かる部分があるみたいだね」

「…………霧さん」

私の名前を呟いた彼女は、複雑な表情をしてる。

これからの事を話すべきか話すまいか。

そんな感じだね。

「別に聞いて欲しくないなら、私はこの場でさよならをさせて貰うよ。でも、キンジ達が狙われた理由と言うか……………今までの事がどこかで繋がってる気がしてならないんだよね」

「それは…………」

「さっき言った”色金”に関しても、そう。イ・ウー、色金、レキさん、そして神崎さん……………バラバラなようできてどこか実は線が続いてる。そんな気がするんだよ」

「……………」

「察しが良いのが自慢だから、何となく分かる。深入りすれば危ないんだろね、きつと。イ・ウーの一員とやらであるジャンヌさんを逮捕した時点で、無関係ではないような感じもするけどね」

聞く人が聞けばいけしゃあしゃあと、どの口が言うんだと突っ込みを受けそう。

いやほら、マッチポンプって素晴らしいよね。

何がどう素晴らしいかは分かる人にしか分からないけど。

「それじゃ、白雪さん。キンジ達によろしくね」

取り敢えず、こちら辺で引いてみよう。

私はそのまま分社の外に出るために入入り口に向かう。

で、結局は救護殿の外に出ちやった訳だけど。

今日はこのまま帰るしかなさそうだね。

あそこで居座つたら不審な感じがするだろうし。

いや、白雪さんなら「話を聞かせて貰うよ」つて言う感じに強引にでもいけそうな気がするけど。

ほら、私そう言う無理矢理なのつてあまり好きじゃないしナンセンスだと思ってるから、今日のところはこれでいいや。

リリヤの様子を見ておかないといけないし、それから――

「霧さん――!」

声に振り返れば白雪が慌てた様子で走ってきた。

「どうしたの?」

「霧さんも、その……話を聞く必要があると思う、の」

息を少し切らせて、たどたどしい言い方をする。

私は一息吐く。

「別に私だけに話せない事に責任を感じてるなら、それは違う、とあらかじめ言っておくよ」

「そうじゃ、ないの。それも……ちよつとはあるんだけど。でも、違うの。このまま何も知らずにいたらきつと、もつと危ない事になるって……そう思ったから」

この時点での白雪の心情を推察するに。

星伽は色金に深く関わってる、それこそかなり古い時代から。

その星伽と友人関係にある私、しかもイ・ウーの一人を協力してではあるけど捕縛してる上に今回の襲撃でココ達の邪魔をした。

イ・ウー達からもそうだけど色金関連で狙われる理由も充分にある。

あんまり単独で行動していると、訳も分からない襲撃者が来ないとも限らないし、私を人質にして星伽の中心人物である白雪に何かしらの脅しが来ても不思議じゃない。

いや、実際はそうはならないんだけども。

ともかく色金について知らずにいれば、安全な部分もあるけどそれ以上に私自身に身に覚えのない危険が迫る可能性がある。

それが嫌で白雪は私に話そうとしてる、こんな所かな。

何よりもキンジ以外の数少ない”友達”、だもんね。

「武偵は自立せよ、別に巻き込まれたところでそれは自己責任だからね。気にするなつて言うのは、白雪さんには酷な話かな？」

「そうだよ……だから、私……霧さんには傍にいて欲しいの。キンちゃんと同じで、遠くにいると不安で」

……ん？ 何か、おかしくない？

そう”言う意味”じゃないとは思うけど……何て言うか今の言葉がある意味告白っぽく聞こえたんだけど。

うん、今の言葉が私じゃなかったら勘違いする男子がいそう。

白雪の様子からして、これはただ単に不安なだけなんだ。

ふーむ、やっぱりジャンヌの襲撃以前に私の事を占つてから未だに様子が少しおかしい。

ここまで人を不安にさせる結果とは、一体……うごごごい。

何て、理子みたいにネタに走ってみるけど実際のところ気になる。

「そこまで言うなら仕方ないね。その代わり、根掘り葉掘り聞かせてもらおうよ」

一先ずはその事を置いておいて、屈託のない笑顔を白雪に向ける。

「う、うん。もちろんだよ！ ちょっと話せない事も、あるけど……」

嬉しそうに肯定してから少し目を泳がせる白雪。

「それはまあ仕方ないとして……キンジが気絶してる時に襲ったりはしてないの？」
「お、おそ——!?! そ、そんなはしたない事はさすがに、ききき、キンちゃんに悪いから……」

あれだけ既成事実とか言っておきながら、そこはへたるんだ。

「ま、それは冗談として。なるべく助けにはなるよ、”友達” なんだからね」

私はそう言いながら微笑み、白雪もつられて微笑んだ。

再び救護殿に引き返した私達。

そこには既に風雪が待機していた。

先程と違うのは、他の巫女達の様子だね。

まるで要人を警護してるとような……重々しい雰囲気だよ。

その時だった、キンジとジャンヌもちようどやって来たようだ。

キンジ達もこの雰囲気さすがに分かったらしく、口を噤つぶんでいる。

白雪が最初に沈黙を破った。

「……キンちゃん。少し、お話しないといけない事があります。キンちゃんは、聞きたがってなかったけど……ごめんなさい」

「聞きたがってなかった……? 何の話だ?」

「——色金の事です」

その言葉にキンジは何かを考えてる様子だった。

思い当たる事は色々あるだろう。

お父さんからある程度のヒントは出されてるだろうし。

「先月、キンちゃんが入院してる間にアリアから聞きました。イ・ウーで何があつたのか。だから、キンちゃんは知ってるよね？ 色金と言うものの存在は」

「ああ、知ってる。イロカネ……アリアが持つてるのは緋々色金で、その常人を超能力者に容易く変えてしまう程の金属。その金属と適合するには、条件があつて……プライドが高く、子供っぽい人格じゃないとダメだつて言うのは知ってる」

「そう、色金は人の心と結び付く金属。理解し辛い事かも知れないけど、そう言うものなの。でも、それは……緋々色金の場合」

白雪の言い方からして他にも色金があるみたいだけど、実際に3種類あるのは私も知ってる。

緋々色金^{ヒヒイロカネ}、
 瑠瑠色金^{ルルイロカネ}、
 璃璃色金^{リリイロカネ}。

これらが共通してるのはどれも超常の能力を秘めていると言う事。

ちなみにリリヤがいた研究所で同調させようとしていたのは璃璃色金な訳だけ。

「色金には種類が有つて、その1つが……璃璃色金」

「リリイロカネ……？ それを、レキが持っているのか？」

白雪の言葉にキンジは考えをそのまま口に出す。

しかし、白雪の傍にいた風雪が否定する。

「白雪姉さまや、私が失礼ながらお体を検分させて頂きましたが——違います」

それから彼女の近くに置いていた桐の箱から巻物を一つ取り出し、それをしゅらと、伸ばしながら説明し始める。

「恐らく、レキ様は郷里で色金の傍で長く過ごされていたのでしよう。琉璃色金と通じる、彼の地の巫子の様な役割をされていたと思われまほとぎしせいぶんす。この星伽史西聞……この書は星伽に伝わる史書ですが、その琉璃色金の記述がございます。『琉璃色金は穏やかにして、その力、無なり。人の心を厭いとい、人心が災厄をもたらすとし、ウルスを威迫す。琉璃色金に敬服せしウルスは、代々の姫に己の心を封じさせ、琉璃色金への心贄こころにえとした』とあるのです」

「……ウルス……」

その言葉が引つ掛かたつたのかキンジは眩く。

「なるほど、やはりウルスカ」

今の会話を腕を組んで聞いていたジャンヌは合点が言ったとばかりに呟いた。

「……知っているのですね、彼女達の記事を」

白雪は少しだけ、目を吊り上げてジャンヌに視線を向けた。少しだけキリツツとして見える。

「遠山からレキの調査を頼まれた時に、その単語に聞き覚えがあった。5年前に色金絡みでシャーロックが交渉に行っていた——なるほどヤツが言った通りと言う訳か」

「ヤツ？」

キンジはジャンヌに誰の事だ、とばかりに視線を向ける。

「これは……もう終わった事だが、私が星伽の拉致らちをする準備の段階でジャックに情報提供を頼んだのだ。その時に神崎と協力関係にある人間について教えて欲しい、とな。そうして、その際にヤツは言った……レキはウルスの子だと」

それからジャンヌはアイスブルーの瞳を瞬かせて——

「その言葉を念頭に置き、通信科コネットの中空知によるお前がレキから抜き取った音を音響分析して、レキの出身地は絞られた。その1つを居住地とするのが——ウルス族」

「どこの部族だ、それは。聞いた事がないぞ」

「それもそうだ。ウルス族はロシアとモンゴルの国境付近、バイカル湖南方の高原に隠れ住む少数民族だからな。だが、彼女らの祖先は遠山も聞いた事があるはずだ。かつてその弓と馬でアジアを席卷した蒙古の帝王——チンギスハーン。ウルスはその戦闘技術を色濃く受け継いだ民族の1つであり、未裔まつえいだ」

そのジャンヌの言葉にキンジは事情を知ってるであろう風雪に視線を向ける。

しかし、今の説明に何も言っていないと言う事は真実である事を証明している。

「かつてウルス族はその弓と長銃の腕を恐れられた傭兵の民だった。が、それも次第に数を減らし……これももう言って良いだろう。5年前のシャーロックの訪問の際には既に47人しか生き残りがいなかった。それも、その全員が女だったらしい」

ふむ、なるほどね。

この人形姫がチンギスⅡハンの血統だった事については知らなかったけど、そうなる
と……。

この人形姫が日本人に近い特徴を持つてるのが気になる。

「髪の色とかはともかく……どうもレキさん、日本人ぽいんだよね。てことは、まさかあの説……本当だったりしないよね？」

「あの説とは？」

ジャンヌがそこは知らないのか、私に聞いてくる。

「義経がチンギスⅡハンって言う説」

私の言葉にキンジも白雪も目を丸くする。

キンジは半分呆れてそれはないだろう、的な感じで。

対して白雪は本当に驚いてる感じだった。

「霧、それは作り話——」

「そうなの、霧さん。チンギスハンは——千年前に大陸に渡った九郎判官——源義経なの。当時の蒙古帝国ではゲンギスケンって読まれてて、それが変化してチンギスハンになったの」

キンジが否定しようとしたら、白雪が肯定を示した。

それを聞いたキンジはさっきの白雪と同じ、驚いて目を丸くした。

「白雪……それ、作り話じゃないのか？」

「作り話、って言う事にしたの。江戸時代にバレちゃったから、後で星伽が……史学者の先生とかにお願いして……」

「星伽が？」

「うん。その当時、星伽神社は源義経が大陸に渡れるように手を貸したの。ナイシヨで、津軽から船を出して……」

確実に史学界に嵐が巻き起こる大事件を秘密がバレちゃった的なのりで暴露する。

隣にジャンヌ・ダルクの子孫がいるんだけどそこは突っ込まないだね。

今更だけど。

「当時の星伽神社は、政治的に複雑な立場にあつたのですが……義経様が大陸に作られた帝国を正式に国家として承認し、その頃から色金についての情報を遣り取りしていた

のです。そして、蕾姫^{レキ}という名前は、その純血姫が代々使われていた名前の一つです」

風雪は、巻物にある漢文の中にある『蕾姫』と言う部分を示す。

「随分と詳しいね、風雪」

「私は外交担当の巫女ですので、あらゆる宗教に関してそれなりの知識があります。しかし、白野さまからレキ様の名前を聞かなければ何も分からなかったでしょう」

と、私の言葉に風雪は謙遜する。

対して妹の方が活躍していたために白雪は落ち込んでる様子。

「気を落とすな白雪。レキが源氏の末裔で、どこかの姫様だったなんて——思いつくがない。俺も、すぐには理解出来ないよ」

キンジはそれを見てそうフォローする。

思ったよりも有用な情報はなかったけど、一つだけ分かった事はある。

——璃璃色金は穏やかにして、その力、無なり。人の心を厭^{いと}い、人心が災厄をもたらすとし、ウルスを威迫す。

この風雪が読み上げた文面からしてリリヤが人形みたいに空虚だったのは、それが璃璃色金の適合条件……心を、感情を封じる事だったからな訳だ。

その色金は、人間と言うものを否定する位置づけらしい。

緋々色金は恋と戦を好む。つまりは人の大きな感情を好んでる。

随分と対照的だね。

もし、そうだね……色金に宿る”何か”がいるなら、私と琉璃色金は話が合わなさそうだ。

◆ 個人的にそんな感想を抱いたのだった。

◆ ジャンヌは神崎かなえとの裁判関係の用事で去って行った。

最後の銃弾——ジャンヌはレキが、もし今回のように危機に陥ればそれを使って自決する可能性を話してくれた。

あいつは、人間なんだ。

それは俺が既に知っている事だ。

その事を胸に強く刻む。

……? 今、縁側の角に霧がいたような。

つて言うか、忘れかけてたが……あいつ何でか不機嫌なんだった。

そこも聞いておかないとな。

直接的に俺とあんまり話してくれねえし。

さっきの説明の時もあんまりこつちに視線を合わせないし、食事の時に入ってきた時も俺の視線に気付きながら逸らすし。

追い掛けるか。

レキは何故か俺を霧に近付けたがらないからな、寝てる今が絶好のチャンスだ。俺は整備したドラグノフをレキの枕元に置き、霧のいた方へと歩く。

角の向こう側には……いねえな。

あいつ、かくれんぼとか得意そうなんだよな。

しかも分社とは言え広い、敷地を探すのは骨が折れる。

巫女さん達に聞いて回るのが早いか。

……。

……。

……。

おかしい、これだけ巫女達に聞いてもどこにいるのか分からん。

近付いてるのは確かだ。

だが、近くにいると思つたらまるで幽霊みたいにすり抜けてる感じがする。

完全に避けられてるな、これは。

一体、俺が何したって言うんだ。

最近あまり話せてないって言うのはあるかもしれないが、それもレキの狙撃拘禁のせいだしな。

そこら辺、あいつなら分かってきてくれるとは思うんだが……
仕方ない——

「おい、霧。聞こえてるんなら出てきてくれよ。俺が何かしたなら教えてくれ！ 謝るから」

と、俺が言うと霧からメールが来た。

『やだ』

なんでメール何だよ……

まあ、それは置いといてどうやら聞こえてはいるらしいし、答えてはくれるらしい。

「じゃあ、何に対して不機嫌なんだよ」

それからまたメール。

『さあ?』

さあ、つてなんじゃそりゃ。

「自分でも分かってねえのかよ」

『うん』

「俺に何か出来ねえのか?」

『分かんない』

「……その、何だ。何でも付き合ってやるから機嫌直してくれ」

……今度はすぐにメールが来ない。

少し、待ってみるか。

そう思つて縁側に腰掛ける。

もう正午も過ぎて、夕方の手前だ。

雨が上がつたおかげで綺麗な日差しが見える。

雲の隙間から差す光が水蒸気に当たつてるのか、それが光の線を描いて幻想的だ。

そんな事を考えてたら、またメールか。

『前、向いたままでいてね』

そう霧からメールが届いた。

向いたまま、な……ここで振り返りたいが、そんな事して余計に不機嫌になられたら

今度こそ何も聞けなくなりそうだ。

ここは我慢だ。

俺の背後から何かが足音と共に近付く。

霧なのかどうかは分からんから前を向いたままにいる。

すると、座るような音が聞こえたと思つたら背中が重くなる。

この雨上がりの匂いに混じる……紅茶っぽい香りは、確実にお前なんだろうな。

つて言うかここまで来て会話はないですか、霧さん。

振り返れないからあれだが、多分……今は背中合わせで座ってる状況なんだろう。

『最近、私に構ってくれないよね』

意地でも喋らないらしい。

背後から携帯の操作音が聞こえたあたり、来るとは思ってた。

他の人から見たら変な光景だが、まあ気にせずに話そう。

「仕方ないだろ、狙撃拘禁されてたんだからな」

『あ、そうだったんだ』

「お前は力になるって言ったけど、あの時はレキが危ない雰囲気だった。お前を巻き込またくなかったら断ったんだよ」

『私に何かあれば大手を振って助けを呼べたのに』

「何かあつてからじゃ、遅いんだ」

こっちはあのジャンヌの一件で懲りてるんだ。

『最近ね、お父さんを亡くしたの。1ヶ月以上前の話だけど』

唐突に切り出された話題。

俺がその文面を見た瞬間、何も言えなくなった。

『それからは、退屈だね。今まで楽しかった事が少しだけつまらなくなつた。レキさんがキンジを拘束してからは、余計にね。何よりもそんな風に束縛してるのが気に入らな

い
い』

「それは、レキに対してか？」

『そうだよ。訳も分からずキンジから私を遠ざけるような真似をして、不満がないと思
う？』

霧の言う事は、もつともだろう。

いきなり自分が危険なんて言われて、そんな風にされたら当然だ。

『しかもキンジはキンジで拒絶しないし』

「いや、それはお前……拒絶したら死ぬぞ、多分」

あの時のレキはマジで俺を撃ちそうだったからな。

『頼ってくれば良かった。そうすれば、私が何とかした』

「お前に貸しを作るのは勘弁だ」

『既に貸し1つだよ。ピンチを救った人が誰かは忘れないでよね』

やっぱり、あの時も勘定に入ってるんですね……

思わず肩を落とす。

「それはそうと、結果論だがレキはどうやら俺を守ろうとしたらしい。よく分からない
が、新しい敵が迫ってるって話だ」

『今回の謎の襲撃者みたいなの？』

「ああ、そうだ。だから俺としては、お前を——」

そこまで言ったところで、後ろから撃鉄を起こす音がする。

こいつがこんな事するのは珍しい。

アリアと違ってマジで撃つ事はないだろうがそれでも冷や汗が出そうだ。

『分からない？ 私が聞きたいのはそうじゃない。貸しとか借りとか、そう言うの気にしないでもつと頼って欲しかった。今まで一緒にやって来たのに』

……ああ、そうか。

思えば俺は、あの一件の事をまだ引きずってるんだ。

色々と巻き込みたくなかった結果、こいつを信じて頼ろうとしなかった。

だから霧は不機嫌なんだろう。

ある意味、霧を裏切ったんだろうな……俺は。

「悪かったよ」

『反省した？』

「ああ……」

『じゃあ、お詫びのチューして』

「……——ッ!?!」

え、あの、霧さん？

お前、こんな時に何言ってるんだよ?!

『それで今回の貸しはチャラにして上げる。断つてもいいよ、その代わり夜中にキンジと同じベッドに忍び込んで白雪さん呼ぶから』

なんつーえげつない選択肢を出しやがるんだっ?!

思わずその携帯の画面を凝視してると、

『30秒以内に「はい」か「いいえ」で返信してね』

そんなメールが着信しやがったよ!

お、おい、どうするキンジ。

これがイタズラなのかマジなのか、分からんこの選択肢。

いや、断れば確実に白雪コールはするだろう。

コイツの性格上。

だったら、最初の方がまだ安全……いや、違うだろ。

ヒスったら何するか分からん以上、こっちの方が危険……いや、それでもいつものイタズラでした、パターンかもしれない。

「~~~~♪」

背後で鼻歌をし始めた霧からして、間違いない楽しんでやがるッ。

ど、どどど、どうする。

残り10秒ぐらいだぞ、多分。

と思つたら、またメールだ

『私の事は嫌い?』

お前、こんな時にそんなの聞くのズルくないか?!

すぐに俺は「いいえ」と、送る。

すると、

『そっか。お詫びのチューと合わせて聞いたつもりなんだけど、「いいえ」か』

お前……

『代わりに残りの修学旅行、一緒に回ってくれるよね?』

その文面を見た時、俺は呆れて少し笑いながらすぐに「はい」と送った。

すぐに霧が隣に座って、俺にいつも通りの屈託のない笑顔を向けてくれた。

73：感情整理

それからそのまま京都の分社で一泊した俺達はその後、早朝に分社を出た。

星伽の運転手に国道367号線を通って京都市内に送ってもらい、適当な場所に降りて貰った。

そこから徒歩で移動し、現在は鴨川付近の祇園ぎおん四条駅にいる。

白雪も一緒に誘ったのだが……少し分社に残ってやりたい事があるらしい。

まあ、夕方に京都駅に集合して一緒に帰る段取りをしてるから別に問題はない訳だが……。

それはともかく、早朝に出たのは霧との約束のためだ。

残りの修学旅行をこいつと一緒に回る。

つて事だったんだが、実際にこうしてこいつと一緒に2人で歩くのは随分と久しぶりな気がする。

アリアが来てからは2人きりの時間なんてあまりなかったからな。

「昼じゃないのにもう観光客だらけ」

「そりゃあ日本で超有名な観光名所だからな」

「3日目だから知ってはいても、それでも驚きだよ。ま、それはそれとして——」
言いながら霧は俺に何故か唐突にくつついてくる。

さらに腕を絡めて来やがった。

微妙にあたる胸の膨らみに紅茶っぽい甘い香り。

中学で一緒にいた時は異性よりも相棒って言う感じで接してたのが大きいが、改めて見るとやっぱり女の子なんだよなあ……

それよりも俺の体質を分かかってやってるだろ、これ。

「借りを返したいなら、分かるよね？」

無邪気に笑みを浮かべながらも向けられたその視線は、ゾクリとするような妖しきがある。

そう言われれば俺は当然、強く出れない。

ヒスる可能性はあるが……こいつは本当に俺が嫌だと思つたら一線を引いてくれるから、そこまで心配はしていない。

どちらかと言うと心配なのは俺と同じ東京武偵高の連中に見つかる事だ。

何て考えてると、

「清水寺は行った？」

霧はちよつと俺を見上げて聞いてくる。

「ああ、そつちはレキと一緒に行ったよ」

「じゃあ、八坂神社は？ あと二年坂、三年坂」

「三十三間堂の方に行ったからな……そつちは見てない」

「京都の町並みって感じで雰囲気が良いみたいだからそつちに行つてもいいよね？」

そう聞いてくれるものの、俺に拒否権など無いんだろうな。

つて言つても別に楽しくない訳じゃない。

振り回されながらも何だかんだ一緒に楽しんでる。

だから拒否権以前に断る理由なんて最初からない。

「仰せのままに」

諦め気味にそう俺が答えると、霧はいつものように微笑んだ。

そのまま俺は絡められた腕に引かれるように八坂神社の方面へ。

いかにも京都の町と言つた感じの雰囲気がある二年坂と呼ばれる通り。

京都土産の店が軒を連ねていて、清水寺へと続く参道には多くの観光客が集つてい

る。そう言えば、じいちゃん達に京都土産を買つておかないとな。

この辺りならちやうどいい物が買えそうだし。

「和菓子も良いね。この甘味に渋いお茶はもちろんだけど、紅茶にも合いそう」などと、霧は団子を口にしながら食べ歩きを満喫している。

支払いは俺だけだな。

いや、別に払えつて言われた訳じゃないが……こうでもしないと貸しが減らない。

せめて土産分と新幹線の代金は残しておかないと。

「それで？ 残額は？」

団子を食べて終えてニンマリとした顔で聞いてくる、機嫌がなおって絶対調な元パートナーを見た瞬間、俺はある意味悟った。

これ……絞しぼられるパターンだ。

「その表情から見るに相変わらざるの金欠だね。キンジじゃなくてキンケツにでも改名する？」

見透かされてる……おまけに強烈な霧の言葉のストレートが俺の鳩尾みぞおちにクリーンヒット。

ヤバい、今の言葉はアリアとかに罵倒ばとうされるよりも結構キツイぞ……。

「やめてくれ下さい」

と、俺は力のない声で音を上げる。

「自分で言つてて惨めにならない？」

さらに抉るな、お前。

「そう思うなら言うなよ」

「ふふ……いや、ごめんね。これも今ままで私を放つておいた意趣返し、とでも思つてよ」

「寂しがり屋かよ」

「……………」

何だ？ 唐突に黙つて。

隣を見れば、霧は前を向いたままきよとんとした顔。

と、思えばすぐこつちを見て少しだけ目を細めてはにかみながら言つた。

「そうかもね」

いつもの笑つた表情、そのはずだった。

なのにそれは儂げで、触れれば壊れて消えてしまいそうなガラス細工みたいに俺は感じた。

そんな俺が今まで見た事もないような——いや、見た事はある。

ハイジャックのあと、アリアがロンドンに戻る時の、俺の部屋から出て行く時の表情。それに似ていた。

別れる訳でもないのに何でそんな表情をするのかは、やっぱり家族を亡くした事が響いてるんだろうな、多分。

俺も三度は経験してるけどな。いや、1人は生きてたけど……それでもあの喪失感は何度遭っても慣れるものじゃない。

実は、いつもみたいに笑顔でいるだけじゃないのか？

そんな疑問が俺の中に出てくる。

「なあ……いつもと違うくないか？ お前」

「急にどうしたの？」

いや、実際にどうしたの？ って聞かれたら具体的な返答には困るが、

「笑ってる割には、あんまり楽しんでないって言うか……いや、楽しんでるんだろうけどいつもと違うと言うか……まあ、何となくだ」

そんな風に俺は曖昧あいまいに答える。

感じたままに言っただけだから具体的も何もないんだが。

「歯切れが悪いね」

目を細めて霧は呆れる。

「悪かったな。家族を亡くして無理してないか心配なだけだ。まあ、お前がいつも通りならそれで良いんだがな」

「そりやどうも。それはそうと、もうそろそろお昼だね。この近くにお茶漬けと言うか漬物バイキングの店があるらしいんだけど」

結構、食べ歩いてた気がするんだがまだ食べるらしい。

あれか……？ 甘い物と食事は別腹的な。

事実、アリアや理子も普通に食事した後にはスイーツとか食ってるしな。

女子のあの思考はよく分からん上にペロリと完食もするから不思議だ。

そして、改めて思う。

喧嘩別れしたみたいなのアリアや負傷してるレキには悪いが、あの2人が一緒よりも気が楽だ。

ここに来てようやく修学旅行っぽい事が出来てる気がする。

「支払いはどちらにするかお任せするよ」

霧はにこやかにそう言う。

気が楽ではあるが……頭を抱え込む事情があるのには変わりないんだよな。

京都駅に着いた頃には日は傾いていた。そして、俺の財布は夕方どころか季節を巡って秋みたいに散つてもいた。

「い（ち）そ（う）さ（ま）で（し）た」

「はい……お粗末さまでした」

あれからぐるりと回って京都を満喫した元パートナーはご満悦な様子でお礼を言う。俺はそれに対して肩を落としてそう返すしかない。

「うん……久々に楽しかったよ、キンジ。ありがとう」

コイツのズルい所だ。

別に俺は大した事はしてない。

なのに真つ直ぐにお礼を言ってくる。

そして、その屈託のない笑みはいつも通りに無邪気なものも変わらず。

「俺は大した事はしてない。借りをこうでもしないと返せないし、な」

「それでもないと思うけどね。楽しませてくれたらその時の貸しはチャラにしてるし」

「何だよそれ……」

「まあ、この間の危機を救った件に関してはこれで帳消ししてこと。で、奢ってくれた分は中学の時の貸しをいくつつかってことで」

細かいよなそう言うところ。

って言うか——

「まだ中学のやつ残ってるのかよ!？」

「中学のは今日のを合わせて4分の3ぐらいかな」

「マジか？　って言うか、今まで疑問に思わなかったが帳消しの基準は？」

「ん？　私が良いと思ったら」

臆面もなく言ってくれる。

しかも基準……超アバウトじゃねえか。

いつ貸し借り無しになるのか本当に分からない。

「言つとくけど、基準は結構緩いつもりだよ。私を楽しませたら良いし、頼みを聞いてくれてそれを達成する、こうして食事を奢る。私に尽くしてくれたら小さい案件から帳消しにしてあげる。ちなみに、大きい案件はそれに似合ったものじゃなかったら帳消しにしないからね。例えば——ジャンヌの時の事件とか」

それを霧から聞いた瞬間、少しだけ胸が痛む。

まあ、あれは……そうだよな。

生半可なものじゃ駄目だろう。

コイツが良いって言っても、俺自身納得するような形でなかったらデカい借りとかは帳消しにして欲しくない。

「あの時の事は悔いても、引き摺らないでよ。見苦しいだけだし、私自身がやった事だし」

見透かしたように目を細めて俺を射抜く。

俺の考えてる事をまた先読みされたか。

そのまま霧は俺を見て、胸に軽く手を持って来て言った。

「うん、で……話は変わって早速頼みがあるんだけど」

「何だよ、俺が出来る事なら何でもするぞ」

「ホントに？　今、何でもするって言ったよね？」

「ああ」

……………。

ん……？　今思ったが俺は何かミスを犯してないか？

それも霧や理子みたいなヤツにはやってはいけない系のミスを。

「それじゃあ、こっちに来て」

と、重大な何かに気付きそうなのに腕を引く霧に気を取られた。

そうして京都駅の人があまりいなさそうな南遊歩道へと、連れ去られる。

それから周りに誰かいないか確認しながらも霧にそのまま連れられて俺は柱の陰へと行く。

「こんな所まで連れてきて何するんだよ？」

「いまいちよく分からん行動をする霧に俺は疑問を投げる。

「そうね。——キス、してくれない？」

うん？

あの……霧さん？

それ確か……

「星伽の分社でその話は終わりじゃなかったか……？」

と言うか、お前にハメられた形だけど断ったよな？

「それとこれとは話が別よ。お詫びとかじゃなくて、純粹にそうしたいだけ」

見上げた霧の瞳が妖しげに煌きらめく。

何でか分からないが、いつもの霧と雰囲気が違うぞ。

今までの子供っぽい感じとか全然ない。

逆にこれは大人の女性が放つようなオーラ……包容力とか母性とかそう言う感じのモノだ。

おかしい、まるで目が離せない。視線が霧の魅力に吸い寄せられてるみたいだ。

いやいや、待てよ。普段はそんな事を言っつてこない霧が唐突に何でそんな事を言うのかは考えるだけ無駄なんだ。

思考を切り替えないと危ない。

どうせまたイタズラ——

「別に断つてもいいわよ。私に魅力がないって事だし」

いや、これはイタズラ……

「出来る事なら何でもするってさつき聞いたんだけど？」

……………。

ああ、クソ。

いきなりどうしたんだ、ホントに。

「おい、霧。本当に様子がおかしいぞ」

「私は、いつも通りのつもりだけど？」

「お前自身がそう思ってもだ」

「そんな事を言つて相変わらさずこう言う事からは逃げるのね。まあいいわ。ちよつとだけ確かめたい事があるのよ」

「いや、別にお前に魅力がない訳じゃないけど——分かつてるだろ？」

物理的な距離は縮まつてはいないが、雰囲気は差し迫るような勢いだ。

人気のない場所、近くに感じる女の子の香り。だけど、いつもの紅茶の香りとは少し違う。

意識し始めれば段々と止まらなくなってくる。

霧の今まででない感じに吞まれつつあるのが分かる。

い、いかん………血流が来そうな兆候が——

霧はそれから熱っぽい息を吐いて、段々と寄ってきてる。

完全にレッドゾーンな感じに俺は抵抗を試みる。

「ま、待て霧」

「悪いけど、止まらない」

霧に柱に少しだけ押し付けられたかと思えば、下から霧が迫る。

止まれないと言った霧はそのまま本当に止まらずに迫ってくる。

そのまま――

キス、してしまってる。

気付いた時には遅かった。

一瞬だけのハズなのにそれが、長く感じる。

熱い……唇越しに熱が伝わる。

密着してるおかげで体温も、柔らかな肢した体の感触もだ。

それから離れる唇。

同時に来るのは血流の流れ……その流れが……流れ、が……

ん、来ない？

いや、微妙に来てはいる。

けど、おかしい。

こんな事をすれば普通はヒステリアモードになつてゐるハズなのに。
中途半端な所で止まつてしまつてゐる。

言つてしまえば、半分だけヒスつてゐる状態だ。

おかげで気付いた。

「お前、何か振り掛けてゐるな？」

「流石に暴走したくはないでしょ？　ちよつと興奮を抑制する香水的なヤツをね」
通りでいつもの紅茶みたいな香りの中に別の匂いが混じつてると感じた訳だ。

どこで振り掛けたかは分からないが。

「それと、強引にこんな事をしてゴメンね」

「そう思うなら最初からやるなよ。何を確かめたかつたのか知らないけどな」

「そこはほら、乙女の秘密ね」

俺から離れた霧はさっきの妖しい雰囲気はなく、いつも通りの霧だ。

ちよつとあざとく、それでいて少しだけ恥ずかしそうに人差し指を唇に持つて行つて

「シー」のジェスチャーをやつてゐる。

「それとこの事は乙女とは関係なく秘密ね」

霧に言われなくても話したら俺は死ぬ。

主に巫女とピンクの子鬼によつて。

結局さっきのは何だったのかと言った感じで何も分からないまま、俺は霧と共に京都駅の中央口に戻るのだった。

◆

今日の漬物、なかなか美味だった。

◆

◆

そのままご飯と一緒に食べてよし、茶漬けにしてもよし。

日本文化にも順調により深く馴染みつつある。

色金の方も大分……だけどね。

馴染むと言うよりは侵食だけど。

さっきはちよつと危なかった。

いきなり変な衝動に駆られたし。

唐突にキンジが欲しくなった。

それは殺人的な欲求じゃなくて……ただ単にもつと近くにいたいと言う、独占欲にも似た何か。

殺人衝動ではなかったので取り敢えず衝動に身を任せてみたんだけど。もちろん、保険も用意して。

そのまま本能で行動した結果……あの迫り方。ちよつと恥ずかしい。

って言うか、あの私は誰って言う状態。

別に何かに乗っ取られた訳でもなく、何かが浮き彫りになって別人格が出たと言うか。

ともかく私自身、よく分からない。

分かる事としては、やっぱりキンジの隣にしていると不思議と色金による殺人衝動があまり気にならないと言う点。

ウルスの姫のせいでそれを確かめる暇があんまりなかったけど、今回の事で確証は持てた。

理由は不明だけど。

まあ、何にしても……言える事は分かりきった事実。

——私にはキンジが必要。

世界には70億人の人がいるんだから、他にもキンジみたいな人物がいる可能性は十分にある。

でも、そんな悠長な時間はないし、可能性はあっても出会える保証はない。

と言つても所有物にするつもりは無い。

そう言うモノ扱いは嫌いだからね。

だから”私がキンジを家族にする”のではなく、”キンジが私の家族になる”ように

すれば良い。

これからの事を考えれば、その為に”霧のロンドンの惨劇”を再び起こすのも、イイかもね。

キンジは私を寂しがり屋と言った、その通りだと……思う。

お父さんがいなくなつた日、あの日から胸に巢食つていたのは寂しさ、そしてこれが悲しいと言う感情なんだろう。

でも、私は知っている。

寂しさは埋める事が出来ると。

その為の家族なんだったね。

しかし、キンジが私の心配をしてくれるなんてね。

悪い気はしない。

むしろ——何だろう？

自然と頬ほほが緩むのが分かる。

そして、楽しいとも悲しいとも違うモノを感じる。

これはお父さんが私に向かって白いバラを落としてきたのと同じ感じ。

これもきつと、今まで私が明確には感じてなかつた感情なんだろう、多分。さて、そんな感情整理は終わりにして——

「で、そつちは大丈夫なの？」

『……ん、腕の替えはある』

リリヤの問題だよね。

電話で確認をする限りは、腕の方の問題は解決するらしい。

腕の替えつて字面がヤバいけどそこは気にしない。

「この先どうするかはココ達に任せるけれど、あんまり深入りはしないようにね。私達の存在はまだ裏の中でも表じゃない」

『……ん』

裏の裏は深淵。

”私達” はそんな立ち位置だからね。

「何にしても次は表に出るのはやめた方が良いよ。威力偵察は十分だろうし、お姉ちゃんもおそらくはこれ以上は口を出してくるかもね」

『………ん』

ちよつとさつきよりも間が空いたね。

何か考えてたのかな？

どう言う考えかは分からないけど理子がいると分かれば派手には動かないだろう。

しかし……あのココ達ならどこかでまた奇襲を仕掛けてくると思う。

ビジネスと金にはがめつい連中だからね。そして、かなり打算的。私の依頼の100万円では飽き足らずにいらぬ欲を出してきそう。ふむ、どうしたものか。

こつちがウルスの姫の排除を依頼したとは言え、本人は星伽神社の京部分社で療養中。

それに私は依頼の期限を特に設けなかったし。

強欲に来るだろうなあ、あの姉妹。

何かしらのセールスアピールでも仕掛けて来るだろうね。

それと問題は……理子だね。

今回のリリヤの一件を――

そこまで考えたところで私は不意に思いついた。

”使える”ね。

私が、

「どう言う状態かは知らないけど、理子が心配するだろうし前もって言うっておきなよ」
こう言うだけで良い。

――家族を傷付けた。

”理由”はそれで十分でしょう？

京都駅で私は1人、人混みの中で微笑む。

◆ ◆ ◆
呉でアリア達と帰る予定だったけど、一足先の便に乗って東京ではなく京都駅で降りる。

リリヤから連絡なんて珍しい。

いつも通りに短い言葉だったんだけどね。

ただ単に一言『……話がある』ってだけなんだけど。

で、京都駅にいるって聞いてはいたけど無口系妹のリリヤから詳しい場所を聞き出すのは結構難しいですよ。

つまりは京都駅にいる以外は分かりません。

と言う訳で、お姉ちゃんコール。

「リリヤ、京都駅に着いたけどどこ？」

『……南遊歩道』

目立たない場所であんまり利用する人がいなさそうな歩道か。

京都駅の案内板を見て、一応場所をチェックしてから向かう。

そうしてたどり着けば、チラホラとはいるけど予想通りそんなに人はいない。

裏路地みたいな場所だしね……

そんな中、しばらく歩いて探してみれば柱の陰に右半身と特徴的なプラチナヘアが見えた。

妹の姿に間違いない。

ふーむ、何となくですが様子がおかしいですな。

「お姉ちゃんが来ましたよ〜」

と、近付いて声を掛けてみる。

この時点で嫌な予感が半分位ある。

お祈りタイムだよ。

「……………ん、リコお姉ちゃん」

「お話だよね。もしかして、結構重要だったりする？」

「……………」

質問に対しての沈黙。

自慢じゃないけど、リリヤに関して最近は多少分かってきた。

口数が少ないのはいつもの事だけど、この沈黙がいつもと違うって言うくらいにはね。

「……………ゴメン」

そう言っつて正面を向いた時の妹の体に違和感。

謝罪の意味を考える前に気付いてしまった。

”五体満足”じゃないことに。

「……お願い、叶えられなかった」

ああ、うん……その事はどうでもよくはないけど、今はいい。

リリヤにレキを殺すように頼んだのはあたし。

このままレキがキンジを独占し続ければお姉ちゃんの精神はきつと不安定になる。

不安定なまま、今みたいに殺人衝動を押し込めていればきつとどこかたがが外れるに決まってる。

そうなって欲しくない。

それにお姉ちゃん自身、そんな事は望んでないはず。

だからその前に何とかしたかったけど……

半袖の武偵高の制服。

本来なら左腕が通ってる袖に触れる。

代償がこれ、か。

「リリヤ、ゴメンね」

「………何で謝るの?」

その疑問には答えずに、リリヤの体を抱き締めて応える。

これはある意味あたしの責任だ。

それと、ちよつとした不条理に怒りも覚える。

何でいつも家族の為にと思つてしようとした事が空回りして、こうも迷惑を掛けてしまうのか。

不条理なのもそうだが、あたし自身に腹も立つ。

そんな表情を見せず、あたしは切り替えてから妹を離して笑顔を向ける。

「うん、無事ならそれでお姉ちゃん満足だよ。今日は他にやる事あるの?」

「……ない」

「なら、レキユの事は一旦お預け。別の機会がいいよ」

「……分かった」

「気を付けてね。あと、変な人について行つちやダメだからね」

それだけ釘を刺すと、リリヤはコクリと頷いてそのまま京都駅のどこかへ去つて行つた。

それを見送つて、あたしは新幹線の改札口がある方へと向かいながら考える。

あー、どうしよっかな

誰がやったか知らないけど、とにかくあたしの妹の腕を持つて行つたのは許せない。

同じように左腕を盗_{ぬす}つてやる。

◆ とまあ、理子を発見して遠目から観察してみれば……イイ目してる。

リリヤの状態を見て復讐心が燃え上がってる事だろうね。

これで躊躇ちゅうちゅうはしないでしよう。

出来ればその心を持ち続けて欲しいけど、時間が経てばそう言うのは生半可な気持ちだと薄れていくからね。

どこかでまた、発破でも掛けないと。

この修学旅行が終わればお待ちかねの会議の日が近い。

そこで、私はティンと思いつく。

いきなりライヘンバッハを名乗らせてはくれないだろうから……別の勢力を立ち上げよう。

立ち上げると言うか、私の殺人鬼ともだちネットワークで呼び掛けをしよう。

まずは唯一面識があり、さり気なく連絡先を交換してる歌う殺し屋シンキングスリーパー……

今はちよつと呼び名変わってるんだっけ？

確か、歌う眠り姫シンキングスリーパーの方が定着してるんだったかな？

あとの同類は面識は無くても活動場所とか範囲くらいは知ってるし、眠り姫から知ってる連中を聞き出せばいいや。

世界を股に掛けた殺人とか、とても面白そうだよ。

74：時速140キロの開戦

そんなこんなで新幹線に乗る時間。

前もって白雪と話してキンジの隣の席は彼女になるよう取り計らった。

新幹線に乗る前のホームで理子は、

「……………」

ちよつと暗めの表情で妹が気になる様子。

「まあ、大丈夫だよリリヤは」

「やっぱり知ってたんだ」

「そりやそうだよ。キンジ達が襲われてるところを助けたのは私だし」

「……………」

「……………」で暴露。

当然、理子は反応する。

顔を勢いよくこっちに振り向けての反応で何を言いたいかは分かる。

「ちなみに私はもちろん、やってないからね。キンジは……………そう言うのイヤだからしな

いだろうし。おそらくやったのはウルスの姫だろうね」

「……そっか」

「そう暗い顔しない」

「うえ!? ……いひやいいひやい」

背後からムニムニと理子の頬をつまみ上げる。

もちもちしたこの触感。

思わず切りたく——うん、そう言う思考はカットカット。

それからすぐに離して上げると、涙目で見上げてくる。

うむ、良い表情。

「家族を守るには……どうすれば良いか分かるでしょう?」

背後に回り込んで、私がそう問い掛ければ理子は迷わず頷く。

「うん、分かってる。盗殺られる前に盗殺ればいい」

「そう言うこと」

そこで東京行きの新幹線が来る。

この新幹線にキンジ達も乗る筈だけど……と思っただらいた。

どうやら白雪も一緒らしい。

けど、席は少し離れてるのかこのキンジ達は16号車の先頭辺りの扉で私達はその1

6号車の最後部の扉にいる。

そのまま私達はその最後部の扉の中に入って行き、乗車券の席に行くと――

「あら、偶然ね」

神崎がそこにいた。

入ってきた私達にすぐに気付き、声を掛けてくる。

「この新幹線だったんだ。あ……隣、私の席だから失礼するよ」

そう言つて私は神崎の前を通つてその隣に座る。

そして、カチリと何かのスイッチを押し込んだような感触。

……あー、この席……文字通り地雷だ。

座つたお尻の微妙な違和感。

これ、感圧スイッチでしょ。

それがここにあるって事は……この新幹線のどこかに爆弾がある可能性が高い訳だよね。

何でこんなピンポイントに、そう思ったところで私は通路を挟んで向かいの席に座る理子を見て理解した。

そう言えば理子は本来、神崎達と一緒に帰るはずだった。

わざわざ離れた席を取るより知ってる顔で固まった方が色々と気楽に決まってる。

だから多分、この席は理子が乗る予定だった席。

でも理子はリリヤに呼ばれたために一足先に京都へと来て、その空いた席に私が予約した……と。

運が良いのか、悪いのか。

どっちにしても下手には動けない。

この新幹線内にいるのは確か。

無線による爆弾の起動なら、確実に作動させるためには乗り物自体に乗っている必要がある。

こんな電子機器が山盛り積んでる上に高速で移動する物なら尚更……電波は確実性に乏しいからね。

飛行機の時も理子は退路を確保した上でジャックした。

乗客に紛れてるのか、はたまた……既に運転席に潜んでいるのか。

「ねえ、ちよつと話があるのだけれど」

「……ん？」

神崎に声を掛けられて私は短く返事する。

「キンジ、なんだけど……どんな様子かしら？」

「私がキンジの様子を知ってる前提の話じゃん」

「何となくよ。実際、どうなの?」

と、神崎は何だかんだキンジが気になる様子。

雰囲気的にまた喧嘩でもしたんだろうけど。

そして、相変わらぬの勘の良さだよ。

「どんな様子って言ってもね。いつも通りと言えば、いつも通りだけだ」

「一緒に、いたんだ……」

「まあね、ちよつとばかりトラブルがあつて」

「何よ、トラブルって」

「レキさんが負傷した」

「——なっ!?!」

目を見開いてそのまま私に詰め寄りそうだったので軽く手で制すように、手のひらを神崎に向ける。

ここで話とかなないと、あとで面倒臭そう。

と言うかどうかせこの新幹線はジャックされて嫌でも協力せざるを得ない状況になる。

その時にキンジが情報提供でもすれば自然とバレる。

キンジの事だから私に「話さなかったのか?」とか言つてきそうだし。

「あんた、そう言う大事なことを何で言わないのよっ。報連相は基本でしょ?!」

「神崎さんに言われたくはないね。一応、キンジは白雪さんの携帯で連絡はしてたみたいだけど……出なかったみたいだし」

「それは……野暮用があったのよ。念のため聞いておくけど、レキは……大丈夫なの？」
「どうでもいいけど、とは言わないあたり根はお優しいことで。」

本人はそんな感じのつもりらしいけど、心配そうな表情がありありと見える。

相変わらず感情がちぐはぐな女だ。

手を下ろして私は答える。

「一命は取り留めた。けど、しばらくは安静だね。今は星伽の京都分社で寝てるよ」

「そう。犯人は分かっているの？」

「私が助けた時にいたのはロシア人の少女だったよ。パイルバンカーみたいな物騒なものを持って、機械的な装備を身に纏まとっていた」

「まさか、シエースチ……？」

「明察。」

横浜ランドマークタワーの屋上でジャックと一緒にいた少女ですよー。

まあ、犯人は1人じゃないけど「私が」見た時にいたのはリリヤだけだったし。

「何にしても、もう一度襲ってくることはないよ。向こうも重傷だったし」

「本当でしようね」

「嘘を言っただけなの」

私は基本的に嘘は言わないようにしてる。

ただ、真実をぼかすだけ。

矛盾してたら困るからね。

「……無事なら、いいわ」

ちよつと複雑そうな感じだね。

ウルスの人形姫はキンジを奪った張本人だし、私のいない間に何かしらのトラブルもあつたみたいだし。

「それで……あんたはその後にキンジと一緒に何してたのよ？」

おっと、これは嫉妬の予感。

無意識の内か神崎のツリ目が鋭くなってる。

「別に、大した事はしてないよ」

「ほんとでしようね？」

「ちよつと私に付き合ってもらって京都の町をブラブラしてただけだよ」

「ここで理子の方がいちご牛乳を愛に飲んだらしく、飲み込んだあとに咳き込む。ちやつかり聞き耳立ててるよね、我が妹。」

「そう……って、そそそれってデ、デ、デートじゃない!？」

この恋愛処女のことだから気付かないと思ったのに。

「普通に食事とかして、色々と観光もしたけどデートじゃないよ」

「ニヤニヤしながら言うのやめなさい！ あ、あたし知ってるんだからね。観光名所で、その……食事したり、色んな場所を見たりするの！ そう言うのがデートの定番って雑誌に書いてあったもの！」

神崎は顔を赤くしながらまくし立てる。

ほーう、そう言う雑誌を見ると言うことは私が思ったよりも恋愛処女ではないらしい。

「ふふ、本当に違うよ。キンジが今回の借りをどうしても返したいって言うから、そう提案しただけ」

私は座席を軽くリクライニングさせながら答える。

だけど、神崎は疑惑の目だ。

「ホントに、ホントでしょうね？ 私の知らないところで変な事してないでしょうね？」
変な事は……してはいないけど、何かはしたと言うか。

今、思い返してみる結構大胆だったね、本当に。

京都駅の南遊歩道でのキス。

中学にした時とは“違うモノ”を感じる。

何でだろう……あの時を思い返すと妙に体が熱い。

色金の影響、かな。

何にしても、

「変な事はしてないよ」

だって健全な男性と女性なら普通だと思うし。

私は人差し指を唇に当てながら、微笑む。

何か理子がいちご牛乳のパックを片手に私の方を見て、呆然としてるんだけど。

別に大した事はしてないはずなのに、何そのリアクション。

お姉ちゃん気になるんだけど。

神崎は私の言葉に安心したのか「ならいいけど」と、そこで会話を途切れさせた。

イベントが始まるまで私はゆっくりさせて貰おう。

◆ ◆ ◆

何、今の。

お姉ちゃんがすごい魅了スキルの高い微笑みしちやっただけけど。

ゲームで言えば男性はほぼ確定で行動不能になるレベルの表情だったんだけど。

完全にだつてアレ、女の顔つてヤツになってましたけど?!

少女が夏を越えたら少女じゃなくなつてた的な成長をしちやってるんですけどー!?

うわわ……とんでもないモノを見てしまった気分。

別に理子に向けた表情じゃないのに、思わず顔が熱くなる。

やっぱりお姉ちゃんも魔性の女で悪女だよ。詐欺師になれるね、間違いなく。

はーあ……

ある意味喜ばしいんだけどやっぱり複雑だよ。

このまま行けば、理子が恋を盗むまでもないんじゃないかな？

問題はキーくんの周りにはライバルがたくさんいる事だけ。

ラノベの主人公かかって言う話だよ。

べ、別に理子はキーくんなんて興味ないし。

横浜ランドマークタワーの時は借りだし？

惹かれてなんかいない。

うん……やめよ。

心の中でそんな事を自問自答しても虚しい。

飲み干した紙パックを袋に入れながらリリヤの事に切り替える。

リリヤ、大丈夫かな。

腕とかあのままなんだろうか。

こう、左腕を結合とかお姉ちゃん出来たりしないかな？

お姉ちゃんなら出来そう。

だってお姉ちゃんだし。

相談してみよ。

さすがに妹が五体不満足なのは見てて辛い。

何だかんだ乗車して30分ぐらい経って――

「ねえ、霧。相談があるのだけれど」

「相談ね……。私でよければ」

アリアが少し横になってるお姉ちゃんに向かって、勇気を出したような感じでそう話し掛ける。

む、これは……面白そうな予感！

「ほっほう、アリアが悩み事ね」

通路を挟んで反対の席のあたしがそう割り込むと、アリアはすぐに否定した。

「あ、あたしじゃないわよ。これは、その……あたしの友達に相談された話で。ほら、あたし……そう言う恋愛話って分かんないから。霧なら分かるかな……って思っ

「りこりんのアドバイスもいる？」

「あんたはふざけそうだからいいわ」

何と言う塩対応。

半分分かってましたけど。

「それで？ そのお友達は、どんな恋愛の悩みをお持ちで？ 喧嘩別れしてどうしたらいいのかわからない、とか？ それとも、もうすぐどこかに行くからその前に仲直りしたい、とか？」

普通に答えてはいるけど、内心面白くないだろうなくお姉ちゃん。

って言うか、お姉ちゃんが言ってるの全部アリアの事じゃん。

「よ、よく分かったわね」

アリアはアリアで既に話す内容を見抜かれているとも知らずに、そのまま話を続ける。

前の席にいるキンジにも気付いてない。

確か、アリアの前って不知火だったよね。

キンジがこつちに来る前に彼は素早く、席に潜り込ませるように腕を引つ張ったのが見えた。

恋愛関係の話になると途端に視野が狭くなるね、アリアは。

「そうなのよ。あたしの、その……友達は、まあ仮にAさんと呼ぶわ。それで、そのAさんはある男子……まあ、これはK君。Kは、べつ別に好きとかハッキリ言ったり言われ

たりした訳じゃないんだけど……その、まあ、一緒に行動してたのよ。何ヶ月も」

「なるほど。で、何ヶ月も一緒に行動してる内に何かに気付いたのかな？」

「そ、その通りよ。Kは——やる気は無いけど、やれば出来る男子だったのよ。それでAさんは協力関係になって、喧嘩友達みたいになってたの。それで、その内……Aさんは、Kを『自分のもの』みたいに感じるようになって……」

「……へえ」

お、お姉ちゃん……!?

や、ヤバイ、素が出てるッ。

すぐに納得した風な顔に切り替わったけど、アリアの「自分のもの」辺りで一瞬だけ目が据わってた。

最近は情緒不安定な感じがヤバイ。

その内、武偵高から本当に1人、2人ぐらい人が消えそう。

「つまりは、独占欲が出てきてしまった訳だね。それも正式にお付き合いする前に」
どうしよう……アドバイスしながらも面白半分だからかおうと思ってたけど。

さっきのお姉ちゃんの反応のせいでアリアが地雷を踏まないか見守る感じになってしまった。

頼むから、お姉ちゃんを刺激しないでっ。

じゃないと死を体現したような雰囲気まを纏まとい出すから！

それ見たら自分が解体される夢を見るから！

あー、イ・ウーでのお姉ちゃんとの初対面を思い出したくないけど思い出す。

ブラドのところから抜け出して心身共に弱ってた上に、幼女にあの殺気はキツかったなー。

「で、でもね。Aさん、もうすぐ転校することになっちゃったの。Kを武偵高に置いて何て軽くトラウマが再発しそうになっちゃったら、アリアは少し必死な感じで語る。」

「そんな時にキン、あつ、その、K君は別の女子に近付かれたの。これは……Rさんと言う女の子ね。性格も能力もAさんとは違うタイプで……優秀な子よ」

喧嘩したとは言え、そこら辺は認めてるんだね、やつぱり。

「その後、KとRさんは一緒に行動するようになって……その……」

「つまりAさんはさっきの独占欲と相まって、Kを取られたと思った訳ね」

「そう、なの……」

「面倒な子だね、そのAって言う子」

「面倒って何よ、真剣な悩みなのよ！」

お姉ちゃんの今の毒の吐き方は完全にワザとだ。

アドバイスもするだろうけど弄いじるか、毒を吐くか何かしら混ぜてきそう。

さすがはアリア……的確につついたらボロボロ出てくる。

「英雄色を好むってヤツだね。出来る人程、案外女の子にも積極的になるんだよね。まあ、科学的に証明された訳じゃないけど……出世とホルモンは強く関係するらしくてね。実験でも証明されてるらしいんだけど、そのK君は普段やる気はないけど出来る人間なんだよね？」

「そ、そうね。でも、能力と言うか調子に波があるみたいだけど」

「でも、ここ一番の勝負では負けない。逆境に強い人間じゃない？」

「よく分かるわね……あんた」

「経験豊富ですから♪」

経験豊富（処女）です、分かります。

う……。お姉ちゃんから不穏な視線。

観察眼スキルが凄いの分かってるんだから下手なことは考えないでおこう。

「何にしてもだね。私が面倒だなんて思うのは、そんなに束縛したいの？　って話だよ。私と思うに、良い女の条件があるんだけど」

「な、何それ。教えてちょうだいよ」

食いついてますな、アリア氏。

「待つ女だね」

「待つ？」

「そう、待つ。男なんて移ろい易いモノなんだよ。可愛い女の子がいれば、外国人だろうが漫画だろうが目移りしちゃうくらいには。それにいちいち怒ってたらキリがないし、男もちよつと違う女性と食事に行つたぐらゐで怒られたら嫌になるに決まつてる。だから、私的には待つ女が良い女で……どんなに女たらしでも最後には自分のところに帰つてくれればそれで良いかな、つて思うんだけどね」

やだ、あたしのお姉ちゃん思つたよりも女子力が高い。

女子力どころか、大人の女性だよ——淑女シスターだよ。

……あのプライドの高いアリアが頭を抱え込んでる。

気のせいかな「負けたわ」つて敗北宣言をするくらいには、打ちひしがれてる。

「それで、そのAさん……誕生日が近いんじゃない？」

「ホントによく分かるわね」

「こんなものは推理の初歩だよ」

「それをあたしに言うのは、流石に人が悪いわ」

アリアの曾お爺ひいさんのお株を奪うセリフを言われて、アリアは眉を寄せる。

「失礼。何にしてもだね、Aさんは待つて……Kさんを試せばいいんだよ」

「た、試す……？」

「Aさんのことが嫌いじゃないなら、誕生日にKさんから何らかのアプローチがあるはずだよ。もし、なかったら……その時はその時だよ。Kさんは、その程度の男だったこと」

おつと、ここでキーくんに向かって鋭い言葉の槍が座席を貫く。

あー、でもキーくんのことだからこの話を理解してるのか怪しいと言うか、理解してない可能性が大。

一応、様子を見る限りはダメージは入ってるみたいだけど。

「もしかしたら、別れ際にプロポーズ……なんてね」

「ぶぶぶぶぶぶ、プロポーズ……!?!」

公共の場所にも関わらず大声を出すアリア。

「それから別れ際に……最後の夜を一緒に過ごさないか？ 的な展開で、ベッドに一緒にインしてだね」

「それ以上いけない!」

「しばらく離れて会えないから、温もりが欲しいんだ」

何でそこイケボで言うの？

つて言うか、お姉ちゃんの話の展開が何かのドラマみたいだよ。

「あ、う……」

ぷしゅうう、とアリアから煙が出た。

完全にオーバーフローですね。

そんなアリアの様子を見て、お姉ちゃんはクスクスと笑っている。

やっぱり途中から遊んでたよ、この人。

そんな時だった。

グツ――

電車が前に引つ張られる感覚。

少しだけ座席に押し付けられる。

窓を見れば名古屋駅のホームと看板が通り過ぎるのが見えた。

おかしい……確か名古屋駅は止まるはずなのに。

周りの乗客も違和感を覚えているし、名古屋駅で停まらなかったことに不満顔が出ている。

『――お客様に、お知らせいたします』

車内放送が流れてきた。

『当列車は名古屋に停車する予定でしたが、不慮の事故により停車いたしません』

この時点で一気にきな臭くなってきたな。

事故なら普通は停車するはずだ。

なのに、逆にコイツは加速してる。

『名古屋でお降りのご予定でしたお客様は、申し訳ありませんが、事故が解決次第……：最寄駅からの臨時列車で名古屋までお送り致します。大変申し訳ありませんが、事故の詳細は調査中となっております』

この放送もおかしい。

調査中だとしても事故の詳細まで不明なんてことはないはずだ。

つまり、これは――

あたしがある考えに行き着く瞬間にマナーモードの携帯が震える。

メールだ、しかもお姉ちゃんから。

『曹操 これで分かるよね？ 見たらこのメール消しといて♪』

お姉ちゃんを見ればあととはよろしく、とばかりに手を軽く振ってる。

曹操……：ツアオ・ツアオのことだ。

やっぱり新幹線は既にジャックされていたんだ！

あたしはすぐに立ち上がり、不知火、アリア、キンジに見えるように手招きする。

表情を見て、ただ事じゃないのは分かってくれたのかすぐにあたしの席に集まってくる。

「一体どうしたんだ？」

開口一番にキンジが聞いてくる。

「よく聞け、既におかしな事態になつてるのは分かつてると思うがこの新幹線……
ジャックされた」

『!?!』

全員が目を見開く。

「どう言うことよ?!」

客に聞こえないように配慮しながらもアリアが怒鳴ってくる。

「言葉のとおりだ。おそらくこれは、^{ハリ!アップ}加速爆弾……あたしが4月にキンジのチャリに仕掛けた爆弾——^{ノン・ストップ}減速爆弾の改良版で一定の速度で加速しないと爆発する代物だ」

「それが仕掛けられて——」

「こらあ! 車掌出せ車掌! 俺あ名古屋で降りなきやなんねえんだ! 俺が誰だか知つてんのか! 名古屋に戻せ!」

アリアがあたしに聞こうとしてる途中で怒鳴り声。

見れば、サングラスを掛けた柄の悪い男が暴れてる。

あれ——タレントの鷺尾^{わしお}習^{なろう}だね。

こう言う状況じゃなかつたら一応、サインは貰ったんだけどな。

今の状況じゃ、厄介者以外の何者でもない。

「どうやら、客の沈静化が先ね」

と言ったところでアリアが気付く。

「霧、どうしたのよ。さつきから動かずに」

お姉ちゃんがいる席に近付いて行くけど、多分……お姉ちゃんは動かないんじゃない。
い。

動けない可能性が高い。

「どうやらこの座席、特殊みたいでね。ここに座つとかなないと大変なんだよ」

お姉ちゃんは何でもないみたいに言ってるけど、そう言うって事はやっぱりあの座席は感圧スイッチだ。

「やられた……霧はもう動けない」

「そう言うこと、ね」

あたしが霧が動けない事を言うと、アリアは察したのかそれ以上は言ってこない。

段々と客はパニック状態になって来てる。

すぐにお互いにやるべき事を認識して、まずは武偵として客の沈静化に臨む。

無言で頷いたあたし達はそれぞれ、客に落ち着くように呼び掛ける。

「武偵です、落ち着いて下さい」「それぞれの席に戻って下さい」

そんな時だった。

『乗客の皆さまに お伝えしやがります』

今度の車内放送は、人工音声——ボーカーロイドだ。

『この電車 どこにも停まりやがりません 東京まで ノンストップで参ります

アハハハ アハハハハハハハハハハ』

その不気味な放送に客のパニックは広がっていく。

『3分おきに10キロずつ 加速しやがらないと ドカーン！ 爆弾が大爆発！ し

やがります アハハハ アハハハハハハハハハハ！』

さらに不安になる放送に悲鳴があがる。

あいつら、ビジネスのためにここまでするかッ。

電光掲示板を見れば、

——【只今の時速 140キロ】——

そう流れるのが見えた。

さっきの加速の具合からして着実に数字は増えていくだろう。

「理子、あんたこの爆弾の基本構造は知ってるんじゃないの？」

「ああ、知ってる。けど……こう言うジャックする乗り物の爆弾は解除不能な位置に設置するのが定石だ。探しては見るけど車体の下、外部の可能性が高い」

そこまで言ったところで今度はキンジが近付いて来る。

「なら、せめて霧を動けるようには出来ないか？ さつき武藤達に聞いたがタイムリミットは19時22分だ」

今の時刻は18時2分……残り80分。

その間に霧、もといお姉ちゃんを動かせるようにするよりかは——

「私をどうにかする前に爆弾か、犯人をどうにかした方が手っ取り早いと思うよ」
だろうね。

お姉ちゃんはどう言う時でも、動じないな。

「あたしも霧の案に賛成よ」

「なら、話は早い。最初に言っておく……基本的に速度爆弾メートルボムは無線でスタートさせる。けど、高速で移動する上に電子機器の塊みたいな言う乗り物は電波を阻害してしまう……つまりは確実性に乏しい。あたしはヤツに習った。そう言う時は退路を確保した上で、自分も“乗り込め”ってな。つまりは——」

あたしはそこでひと呼吸置いて確実に言える事を伝える。

「敵は既に乗ってる」

キンジとアリアが顔を見合わせたところで、新幹線の運転席の方から音が聞こえる。

この移動する爆弾を巡る開戦の合図が——

75：呉越同舟

ガンガン！ ギンツ！

運転席の方から金属音が聞こえたと思つてそちらを見れば、悲鳴を上げて乗客がこちらへと逃げて行く。

俺達を押しつけて後方の車両へと人が消えていき、見やすくなった先には——
「きひっ」

運転席の内側のドアを切り裂いて出てきたであろうココが、悪い笑みを浮かべて肩に刀を担ぎながら出てきた。

それからこちらを威嚇するように座席を切り裂きながら、片手をこちらに突き出し、指先を上に向けてクイクイと挑発の手招きをする。

「さあ、任^{ビジネス}の時間ネ。この列車、お前たちの棺桶^{かんおけ}になるヨ」
言いながら構えたあの刃が幅広の刀は……青龍刀。

中国の映画とかではよく出る刀剣では有名な武器だ。

あれは、日本の刀とは違う純粹に鋭きで斬る物ではなく重さで叩き切る代物だ。

「ココはデートの約束があるヨ。10分だけ遊んでやるネ」

そう言うココの背後の方で運転席にいるのは若い女性の運転手が半べそになって運転してる……運転席の助手席部分には誰もいない。

どうやらココは、運転助手を追い出してあそこに居座ってたらしいな。

理子は、少しだけ裏理子になって威圧的な言葉を投げ掛ける。

「どう言うつもりだ、ツアオ・ツアオ？　こんな列車をハイジャックして何のつもりだ？」

「峰　理子。何であの席に座ってないネ？　おかげで目論見が外れたヨ」

それに対してやれやれと言った感じに頭を抱えたココは、どうやら理子を無力化するつもりだったらしいな。

おそらくだが……新幹線の予約情報でも調べて理子が座る予定だったあの席にスイッチを仕掛けたんだろう。

しかし、理子はあの席に座らずに代わりに霧が引つ掛かった。

と、理由はこんな所か。

どっちにしても1人は完全に無力化された訳だ。

「言つたとおり、ビジネス商売に決まってるネ。これからの乱世を生き残る戦いは既に始まるヨ」

乱世——レキや俺を襲撃した時にも言っていた。

そのままココは、武器を軽く下ろした。

「もつとも……お前達とは戦いたくないネ。キンチ、理子……ジャックのお気に入りに手を出せば、皆知らない内に消えるヨ」

などと、物騒な事を言う。

毎度思うが、何で天下の殺人鬼様が俺をお気に入りに入りリストに入れてるのかよく分からん。

理子の時とシャーロックの時以外に接点なんてあまり無い筈なのに、何でなんですかねえ？

「だから、取引するネ。お前達がこのまま何もしないのであれば、爆弾は解除しなくても加速するのは無しにしてやる。それで終点の東京で晴れて自由ヨ。ココは日本政府に要求した身代金を貰って帰るだけネ」

「悪くない取引だね……。別に呑んじやってもいいんじゃない？」

おい理子！ 何、早くも鞍替えしてるんだよ?!

別にその時は良くてもあとで風評被害とか、蘭豹の折檻とか、色々と面倒なことになるに決まってるだろ!?

「さすがに無実の人達を巻き込めないからね。全員死ぬよりはよっぽど良い」
確かにその言い分は一理あるかもしれない。

だけどな——

「だからって言つて犯人の要求を飲む訳には行かないわ！」

アリアなら、当然そう言うよな。

背中から日本刀を2本、抜刀して片方をココに向ける。

「それと初対面の時にココと名乗つておいて、偽名とはね！ ツアオ・ツアオ——！」

「それ欧州人の間違つた呼び方ネ！ イ・ウーではシャーロック様がそう呼んでたからそのまま皆にも呼ばせてただけヨ。私は曹操^{ウオ}、三国乱世を生き残りし曹魏^{コウ}の姫ネ！」

三国乱世、曹魏……つまり、ココというのは——曹操^{ソウ}のことか？

これで俺は合点がいった。

理子がホームズをオルメスと言つたように、言語によつて名前の呼び方が違う。

ジャンヌが俺の電話でココと言つた時にピンと来なかつたのがその証拠だ。

日本語だと曹操^{ソウ}だしな。

全く……グローバルな戦いになると名前から苦勞するぜ。

それだけじゃない。

「どうやらお前のプライドの高さを利用されたみたいだな、アリア」

「いきなり話し掛けて何よ」

「どうやら、未だに今までの事を根に持つてるらしい。」

アリアは俺に顔を向けてこない。

「お前、理子に拳銃戦アルリカタで戦った相手の特徴を詳しく話さなかつただろ？」

「うぐ……」

俺の一言に、凶星の声。

やはりな……

俺が霧に下級生に負けた『下負け』を言わなかつたように（すぐにバレたけど）、アリアは『下分け』——つまりは引き分けた事を隠したんだ。

プライドの高いアリアは、自分より年下のココと引き分けた何て事は言いたくなかつただろうし、知られたくはなかつた。

中国で有名な兵法書『孫子』の言葉に——彼を知り己を知らば百戦殆あやうからず、という言葉があつたな。

つまりは敵と味方を把握していれば負ける事はないということだ。

世界史で習つたが曹操はその孫子を研究・編纂へんさんした人物。

文字通り、俺達という敵についてココはよく知つていた。

俺とレキを襲撃した時にも通信手段を破壊し、自分の情報をすぐには伝達できないようにした。

その結果、この状況に陥っている。

「自信過剰じしんかじょうな人間ほど御しやすい者はいないネ。急速ふんそくは侮おそられるヨ。きひつ、まあココ達の手の上で猿さるみたいに踊おどってた連中なんて敵たかじやないネ」

意地の悪い笑みを浮かべ、明らかに下に見てるココ。

ムカつくが、実際に踊おどらされてたのは事実だ。

その前に隣でプチンと言う音が聞こえた気がする。

「手の上で踊おどってたんなら、その手ごと風穴かぜあなぶち抜ぬいてあげるわッ」

言いってることが脳筋のうきんそのものだぞ、アリア。

って言うか、お前……ココの言うことも一理あるぞ。

「そんなんだからハメられるんだよね……」

霧は呆おろれてそんな風に呟つぶいた。

「ちよつと、霧！ どつちの味方よ！」

「正しいと思おもった方の味方」

アリアには申し訳わけないが霧の言うことに俺は内心、同意する。

敵たかでも言いってることは正しいんだよな。

「きひつ、人望じんぼうもないと見えるネ。将しょうとしては三流……けど、色金いろがねを持てる人間はそれだけで価値かちがあるヨ」

ココは言いながら、再び剣を構え直した。

「来^{ライ}来^{ライ}、シャーロック4世ッ」

再び剣を握っていない手を動かして掛かって来いとばかりに挑発してくる。

その時に、びええええんと言う子供の泣き声。

俺達の後方から聞こえるそれに振り返れば、この16号車の中央付近で妊婦さんとそれに付いている子供達がいる。

どうやら一般客が取り残されているようだ。

他にはいない。

だが、妊婦さんの様子はおかしい。

苦しそうに脂汗を掻きながら膨れたお腹を抑えている。

どうやらパニックのストレスで体調が悪くなったようだ。

アリアもそれを把握したのか、

「――白雪！ 彼女達を救^{セーブ}出して！」

指示をしながらココに向かつていく。

そのココとアリアの間の座席の脇から白雪が飛び出し、手を組んだ。

アリアはそのまま白雪の組んだ手を足場に斜めに飛び上がり、座席を飛び石のように渡り、ココに向かつていく。

さつきパニックになった客達で見えなかったが、白雪は彼らに押し寄せられて座席に

突き飛ばされていて、それからココが出てきたのを聞いて身を潜めていたみたいだな。それからアリアと入れ替わるように白雪はこちらに向かってくる。

「キンちゃん！」

「白雪、さつきアリアの指示通り理子と一緒にあの子達を頼む」

「う、うん。分かったよ。あの、キンちゃん……気を付けてね。あの子、普通じゃない気がするの」

俺はバタフライ・ナイフを出しながら――

「普通じゃないのはいつもの事だ。だから、普通だ」

自分に言い聞かせるように、そう答える。

そのままココはアリアに任せ、白雪達を護衛しながら15号車へと行き、無事に送ったところで再び俺は16号車にとんぼ返りする。

あいつらを残してはいけないからな。

◆ ◆ ◆
やれやれ……強制観客状態とはね。

微妙に見えそうで見えない神崎とココの剣戟けんげきを見ながら、私はゆったりする。

と、くつろいでるとすぐに白雪達を護衛したキンジが戻ってきた。

「お前、こんな時に余裕そうだな……」

キンジは私を見るなり呆れる。

いや、余裕も何も——

「何も出来ないからね。だったら私のすることは信じるだけだよ。だから、キンジ……助けてよね？」

私がそう言うのと、キンジは少し顔を赤くする。

だけどすぐに真剣な顔をして、

「見捨てる訳無いだろ。もし無事に帰れたらいくつか貸しをチャラにしてくれ」

そう言つてすぐにナイフを構えて神崎の方へ行つた。

死亡フラグに聞こえるけど、そうじゃないんだよね……キンジの場合。

私は今回、囚われのお姫様状態か。不満はないけど。

私の今まで満たされなかつた欲求がキンジと一緒にいる事で満たされてる気はする。

あと、やっぱり神崎にキンジはもつたいたない。

あんな面白い人間を縛り付けるなんて、本当にもつたいたない行為だよ。

だから早いとこ、私との貸し借りも無しに欲しいんだよね。

最初に出会つて、関係を続けていく建前としてそう言う風にしたのは私だけど。

今となつてはもう、そんなのはどうでも良い。

縛られず、ただ傍に出来るだけの関係——それで私は満たされる気がする。

以前に金一を空き地島で白野 霧として生きて行くのも悪くないかなーって言ったけど、本気で考えようかな？

お姉ちゃんとの約束を果たしてからの話になるかもしれないけど。

そう考えたら、神崎は邪魔だよな。

お姉ちゃん的にも、私的にも。

うーん、でも……キンジと神崎はお互いに結構意識しちゃってる。

下手に引き剥がそうとすればキンジが抵抗したりとか、取り返しそうだし。

悲しんでる顔も良いんだけど、あんまり話さなくなられてもそれはそれで私が困る。

やっぱり……神崎がいなくなるのはマズいかな？

そこまで考えたところで、あるシナリオが浮かび上がった。

……あ、そうだ。

私”が”神崎”になれば良いんだ。

霧にカッコつけて前に出たはいいが……

ココとアリアは互いの刀剣を交じ合わせ、鏢つばせ競り合いになっている。

身長も髪型も似た2人はゲームの1P・2Pカラーのキャラクターのようだ。

その2人が激しく入れ替わり、剣を交える。

目を離せばすぐにどつちがどつちか一瞬、分からなくなりそうだ。

「きひっ」

少し距離を取ったところでココが座席の一部を叩き切り、それを回し蹴りしてアリアへと飛ばす。

「ぐっ!?!」

驚きながらもアリアはそれを防御する。

いや、待て——

「アリア！ 次が来るぞ！」

僅わずかに見えた光景に俺がアリアに警告する。

アリアが声と共にすぐさましゃがんだところで俺も座席の方へと避ける。

さっきの刀剣が俺の顔の横を風を切って通り抜けた。

武器を手放すのに躊躇いがないッ！

つまり、ココはまだ何か隠し持っている。

瞬間的に俺と同じことを思ったのか、アリアはすぐさまココの方へと駆け出した。

だが既にココはその手に何かを握っている。

あれは……香水の容器？

ハオハオチユウ

「——爆泡珠！」

そのまま目の前の空間に何かを吹き掛ける。

分かりにくいだが、車内の光で少しだけ小さなシャボン玉のような物が見えた。

アリアは危険だと思ったのか、すぐさまココに向かうのを止めた。

「アリア、そいつは“気体爆弾”だ！ よけろ！」

15号車から戻ってきた理子がそう背後から叫ぶ。

すぐさまアリアはココから背を向けずに後退しようとするが、

——バチツツツツ!!

シャボン玉が弾けて、激しい閃光と衝撃がこつちにも伝わる。

「きやうツ！」

少し、悲鳴を上げたアリアだがすぐさまバックステップして、そのままバク転しながらこつちに戻ってくる。

あんな小さいヤツでこれ程の衝撃……ッ。

俺達の傍に戻ってきたアリアは少なからずダメージがあるのが見て取れる。

「これで、和了^{ホーラ}ネー！」

言いながらココはバタバタと袖を振って、中から双節棍^{ズンヂヤク}——いや、小型ロケットのよ
うなものを2本と小さい布の玉を取り出した。

その布の玉を投げた瞬間に、閃光が弾ける。

これは——理子が使用した音の出ない閃光弾フラッシュグレネードツ!

それから光の向こう側からさっきの小型ロケットが飛んでくる。

そのまま俺とアリアの周りをグルグルと回り始め、ロープのようなものが巻きついてくる。

「な、なに?!」

「なんだ……これは?!」

光のせいで俺もアリアも困惑する。

閃光から視界が少し回復すれば、いつの間にか拘束されてるぞ?!

お互いに密着して、立っている状態だ。

「きゃッ?!」

「うお?!」

アリアが何かに足を滑らせたのか、そのまま俺も引つ張られて倒れる。

その衝撃で俺は武器であるナイフを手放してしまった。しかも、アリアもだ。

お、おい……一気にピンチだぞ!?

よく見れば足にも巻きついていて、た、立てねえ……

俺のナイフは座席の下に滑り込んでしまったからロープを切る事も出来ない。

アリアの日本刀は……ダメだ、2本ともこの列車の窓側に行っちゃってる。

だつたら——

「り、理子！ 頼む、早く助けてくれ！」

理子に頼むしかない。

俺はすぐさま理子に助けを求めるが、理子は複雑に顔を歪めている。

どうするべきか、何故か迷つてゐるぞ。

「峰 理子。お互いに建設的な商談をするネ。お前の後ろにジャックがいる以上、私^{ウオ}は手出ししたくないヨ。そして、私^{ウオ}達——藍幫^{ランバン}を敵に回すのも良くないネ」

と、ココは理子に取引を持ち掛けてるぞ。

そしてココが言う藍幫^{ランバン}——それが、どうやらあいつらが所属してる組織らしいな。

「そうだねー。理子としても、同じ元イ・ウーの同期だし……あんまり争いたくはないな
」

「話が分かるヤツはいい商談相手ネ。どうか？ 今なら藍幫^{ランバン}に招待するある」

理子はクスリと笑いながら、

「それは無理かな」

普通に断つた。

「まあ、無理強いはいしないヨ。正直、味方でも安心はできないネ」

どうやら完全に俺達の事は眼中にないらしいな。

まあ、実際に何も出来ないから当たり前なんだが。

「ただ……こいつらは貰つていくヨ。キンチは、しょうがないから一旦こつちで預かるネ」

「ああ、うん……アリアはどうでも良いけど、キーくんはちよつとねー」

お、おい、何でお前らだけで話をまとめようとしてるんだ?!

つて言うか、ココは何で俺の扱いに困つてる風な感じなんだよツ!

あれか、さっきのジャックが俺をお気に入りにして関係かツ?!

「何であたしの扱いだけ雑なのよ!」

そこが不満なのか、アリアは密着した俺の背後で暴れてる。

ムキー、つて声を上げてるな。

こんな状態でよくそんな闘争心を出せるよ……

そう思っていると、ココが胸の前で両腕を袖に入れて余裕な感じで歩いてくる。

それから見下ろせる位置まで近づくと、まじまじと顔を見つめた。

「ふうーん、これがアリアあるネ。写真を見てココに似てカワイイと思つたケド、会つてみれば可愛げのない性格してるある。これならまだ、ココの方がカワイイヨ」

「確かに」

確かに。霧と理子は声に出し、俺は心の中で同じ事を思つた。

「ちよつと、霧に理子!! あんたたち、本当にどつちの味方よ!!」

アリアが暴れるせいで、地味に俺の足が蹴られて痛い。

「つて言うか、ココおー! あんた、その髪型やめなさいつて言つたでしょう! あたしと被^{かぶ}つてんのよ!」

「そんなの聞いてないネ。ぷつぷー、藍^{ランパン}髷もイ・ウーの主^{イタナテイイス}戦派も仮想アリアの子を欲しがるアル。この髪型は稼^{イタナテイイス}ぎになるヨ」

「主^{イタナテイイス}戦派……? イ・ウーの残党つて訳ね……」

「ココは商売のために一時的に身を置いてただけネ。正式にイ・ウーにいた訳じゃないヨ!」

最初から覚えていないような微妙に噛み合わない会話をしつつ。

そのままココは雰囲気を変えて、見下し、恨みがあるような視線に変わる。

「――^{Aria the scarlet amm}緋弾のアリア」

緋弾のアリア。

それは、イ・ウーでシャーロックが残した言葉。

それをココは出してきた。

「イ・ウーの崩壊で世界はまた、乱世になる。機関、組織、結社……世界の均^{きんこう}衡は崩れて、変化するヨ」

と、何か壮大な事を呟いている。

「最早、これは避けられぬ運命。緋々色金を喜ばせたお前は、既に渦中の人ネ。緋々色金
が調子づいて、璃々色金、100年ぶりに怒たヨ。見えない粒子を蒔まいて世界中の
超能力、不安定になた」

「超能力……が……？」

アリアは俺の背後で呟き、何が起こってるのか分からない感じだ。

超能力関係には弱い俺だが……思い当たる事はある。

以前にジャンヌにレキの調査を依頼した時に、最近は力が不安定である事を言っていた。

京都の分社でも風雪が巫女の力が弱まっているような事を聞いた。

あれは、つまり……色金絡みの事、何だろう。おそらくは。

「これからは超常の力を持つ者はあまり役に立たなくなるヨ。頼れるのは純粹な力。戦
力集めるは、重要ネ」

ココの話を聞くに……どうやら既に俺達の見えないところで大きな事が動いてるらしい。

「キンチ、超能力者違う。誰もが欲しがる、優良な駒ネ。ウルス、主戦派、研鑽派——み
んなキンチを欲しがってる」

俺の頭を爪先で小突きながら言ってくるココ。

何で……俺なんかを。

俺は普通に暮らしたい高校生だぞ。

「ウルス、キンチに接触するの早かた。けど、ジャックに気に入られてるキンチに手を出すの愚策ネ。ジャック、多分、怒てレキを殺す刺客しかくを送り込んできたネ」

その話に俺はあの紅鳴館で出会い、俺達を襲ったメイド——シエースチの姿を思い出す。

アイツがココと一緒にいたのはそう言う事かッ。

「でも、優れた狙撃手殺すのは惜しいある。いずれ、レキも貰うネ。アリアは色金、高く売れるからそのまま貰うヨ」

ココはそのまま上機嫌に離れていく。

「それで？ どれくらい、身代金を要求したの？」

「さつき300億人民元、日本政府に要求したネ。払えばよし、払わなければ、どつかあーん！ 爆泡バオバオのデモンストレーションに派手に爆破してやるネ」

理子の質問にココはジェスチャーを交えて答える。

「爆泡バオバオ——さつきの気体爆弾ねッ」

その気体爆弾を体験したアリアが、睨み上げる。

ココはあれを、この電車のどこかに仕掛けたらしいな。

「どれだけ仕掛けたの？」

「ちなみにさっきのは、ほんの1ccネ。この電車には1?仕掛けてあるヨ」

「多すぎない……?」

「デモンストレーションなら、派手にやるネ。仮に支払わないなら、それでセールスアピールするある」

理子は普通に聞きながらも、冷や汗を出してる。

冗談じゃないぞ。

さっきのが1ccなら、1?はその100万倍って事だ。

ここまで来てハツタリ……はないな。

ジャンヌがビジネスにうるさいって言ってたし。

だが、問題はそんな質量をどこに仕掛けたか……だ。

「様子を見る限り、理子は助ける気はないみたいネ」

「お互いに建設的でしょ?」

「きひっ」

ココと理子はそんなやり取りをする。

おい、どうするんだよコレ。

理子は完全に俺達を見捨てるみたいだぞ。

いや、見捨てると言うよりもお互いに不干渉を決め込んでる感じだ。

理子はココ達を敵にしたくない。

ココはジャックに狙われたくないため……なのだろう。

そのままココは、俺の襟首を引っ張りそのままズリズリと移動させる。

向かう先は運転席の方だ。

「ちよ、ちよつと!?! 理子、あんた武偵でしょ!! 本当に見捨てる気なのツ?!」

「理子ってば、悪い子だからね。司法取引、何それおいしいの?」

「あんたねー!!」

アリアの言葉は虚しく、捨てゼリフに変わっていく。

理子には理子の事情があるのが何となく分かった俺は、何も言えない。

誰だって命は惜しいからな。

そのままグン、と新幹線が加速するのを感じた。

見れば景色はさらに流れている。

——【只今の時速 180キロ】——

電光掲示板を見れば、そう流れていた。

「ふ……え、主よ。神のもと、に……近づ、かん……」

引きずられた先のドアの向こう側の運転席にいる女性運転手は十字架を持って祈りを捧げてる。

「どうやらクリスマスチャンだったらしいが、そんな事よりも……彼女は精神的にヤバイぞ。」

この電車に何百人という命を運んでいて、それが自分の腕一つに掛かってるなんて意識したらとてもつもないストレスがあるだろう。

「あたし達をどうするつもりよ!?!」

「何も出来ない連中に話す必要はないネ」

アリアの質問を一蹴しつつ、ココは俺達に巻き付いているワイヤーロープに頑丈そうなカラビナ・フックを取り付けた。

それからそのまま車両整備用のハッチを開いて梯子を登っていき、列車の上へと消えた。

「あいつ、あたし達を釣り上げて行くつもりね」

「みたいだな。中国まで宙吊りじゃないよな? あと、俺はパスポート持ってないんだ

が……」

「なに霧みたいに落ち着いてるのよ?! 早く、抜け……出さない、と……!」

体を動かしてアリアは何とか抜け出そうとする。

——助けてよね？

まあ、霧にさつきそう言われなくても最初からそのつもりだが。

自分から”なり”に行くのは、まだまだ研究しとかないとな。

とは言つても、あんまり言う事を考えたことがないからどうして良いのか分からんが……

俺は至極一般的な人生を歩みたいだけの高校生なのに。

だが、あんまり助けを求めない霧のためだ。

今回のは大きな返済になるだろうから、気合を入れていかないとな。

正直、女性に關しての想像は忌避すべきモノだ、俺に關しては特にな。

何度か想像で”なりかけた”事もある。

なら、逆にそれは——

(想像でもなれるつて事だ)

それが実体験の事ならなおさらだ。

俺は思い起こす。

京都駅で霧と”した”事を——

ヤバイな、コレ……想像だけなのに何故か色々と思ひ出すぞ。

体温とか、感触とか、色々——

そうして血流が集まって、笑顔のあいつが思い浮かんだ瞬間。

——ドクン。

それでチエツクメイトだ。

加速的に頭の中で情報が再構築されていく。

今なら、分かるぞ。

この事件の重要な部分が。

その前に脱出だ。

俺は後ろでもがいてるアリアには悪いが、遠山家の縄抜け術をさせて貰う。

関節を外し、上手く腕を出して、あとは外した関節を戻す。

腕一本分の隙間が出来るだけでも十分に脱出の余裕がある。

すんなりと抜けた事で、緩くなったワイヤーにアリアは不思議に思ってる顔だな。

「え、どうして？　って言うか、緩くなったと思ったらあんたいつの間に」

「ちよつとした、縄抜けの術をね」

それだけを伝えて俺は、アリア達を見つめる前に立ち寄ったトイレへと行く。

ドアノブを確かめれば……これは、壊れて開かないんじゃない。内側から打ち付けられたような感じだ。

それによく見れば、蛇口やコンセント、換気扇……空気が抜けたり触れそうところ

は全てシリコンの透明なシールのようなもので塞がれている。

トイレの窓には超小型のプラスチック爆弾。

上手く隠蔽いんぺいされてるな。

なるほど……1?。それに、気体爆弾。

こいつは解除不可能だ。

「爆弾は見つけた訳だね。キンジ」

そう言つて近付いた来た、理子。

それで俺は気付いた。

”悪い子”だな、理子」

「えへ♪」

俺がそう言つと舌を出して微笑む。

アリアだけは分かつてない感じた。

「どう言う事よ?」

「さつきまでの会話、ココから情報を引き出すために一芝居を打つたんだろう?」

「まあ、半分はね」

つまり、半分は本当な訳か。

俺はアリアに分かりやすく説明してやる。

「さつき、理子がココとの会話で最初に建設的な商談を暗黙の了解で決めた。それにより、ココは理子が干渉してこない商談を成立させたおかげで少しだけ舌が滑りやすくなったんだろう。そこを理子は利用して、爆弾の場所を探ろうとした」

とは言え、どこに仕掛けたかは直接聞かずに大きさを絞りこもうとしたんだ。質量が大きければ隠し場所も自然に狭まる。

逆に小さければ、それは効率的にこの列車を破壊する場所に限られる訳だ。

「そして、ただ単に身代金目的だけじゃなく、ココはセールスアピールのデモンストレーションと言った」

派手にやると言うことは……それだけ質量がデカイ。

本人もー?と言ったしな。

俺が入れなかったトイレの中の様子を確認で、爆弾の場所の証明は終了だ。

「外からやるんじゃないやなくて中から破壊したほうが派手に演出出来る。そう言う事だろ？」

『武偵殺し』さん」

「キーくん、大正解！」

皮肉を言ったつもりが、理子は意に介さず笑顔で言うだけだ。

そこでアリアは気付いたのか、

「あんた……」なれた”のね?!”

目を見開いて確信を持って言ってくる。

だが、俺はそれに言葉で答えずに静かに頷くだけにする。

ヒステリアモードなのに自分でも分かる程に今の俺は冷静だ。

「やるべき事はハッキリしてる。だけど、理子……君の助けは『いらない』」

その言葉にアリアだけが驚く。

「な、なんでよ。今はこの難局を乗り切るのに1人でも——」

「理子は情報を引き出すために芝居を”半分”だけ打った。つまり、”もう半分”は本当の事なんだろう？ アンダーグラウンドな事情によつてな」

それはジャックと言う存在の枷^{かせ}だ。

ココが敵対したくない理由として理子の背後にはジャックの影がある。

そして、他にも理由はありそうだが、理子がココと敵対したくないのはココが理子の手の内が分かっているからだろう。

「人工音声、爆弾、以前俺に見せた格闘のスタイルが中国拳法^{カシンフー}だった事から推理するに……ココにある程度の技術を師事していたんじゃないのか？」

「流石だよ、キンジ」

裏の理子の顔になり、素直に認めた。

「今は武偵……でも、あたしにはあたしの事情がある。だから、”直接的”に手を貸せな

「い時もあるんだよ」

「やっぱり理子には、他にも理由がありそうだ。」

それをかなりぼかしてはいるが、ここで知ろうと深入りすれば危険だろう。

理子の言葉にアリアは納得した。

「いいわ。深くは聞かないであげる。でも、あんたはあんたの出来る事をしなさい」

「けど、相変わらぬの上から目線だ。」

「命令しないでよね。呉越同舟こえつどうしゅうつてだけで、そう言う関係じゃないし」

理子はそれだけ言つて16号車の方へと戻つて行つた。

呉越同舟、まさしくそんな関係だな理子とアリアは。

つまり、逆に言えば「いつでも敵対する理由」はあるのだろう。

そこを今聞くのは……やめておこう。

今はこの難局をどう乗り切るか、だ。

16号車に戻り、そのまま15号車に行く途中で理子が霧の座席の下を調べていた。

ココと直接的に戦う訳じゃなく、間接的なやり方でこの事件の解決に尽力しようとしている。

少し見ただけで俺とアリアはすぐに15号車へと入ると、そこには産気づいたさつき

の妊婦さんが苦しそうに座席に横たわっていた。

すぐに白雪が高齢の女医を連れて来てくれた。彼女は慣れた手付きで迅速に処置していく。

こう言う時に乗り合わせの医者がいてくれて感謝、だな。

「キンジ、戻ってきたか！」

武藤が動揺する客をかき分けながらこつちへと来た、その後ろに続くように不知火がいるな。

「この新幹線に乗ってた武偵はこれで全員だね。この場にはいない白野さんと峰さんを合わせて10人」

到着して不知火が最初にそう報告してくる。

「爆弾は見当たらない」「警察にも連絡したんだけど……」「犯人もいないわ」

2人の後ろから鷹根^{たかね}、早川^{はやかわ}、安根崎^{あねざき}——ヒステリアモードの俺は彼女達の名前を思い出せる——俺と不知火が一緒にいた時によからぬ話をした通信科^{コネット}の3人が遅れてやってくる。

「もう、どつちも見つけた。その狙いもな」

俺はすぐに状況報告をし、理子は霧の座席にあるだろうスイッチの解除をしようとしている事を伝えてから16号車と15号車の連結部を作戦会議場所とした。

まず相手はかなりの武装をしている事、運転席近くに気体爆弾がある事、最後に犯人は列車の上に行つてから動向が不明である事を伝えた。

それから――

「犯人が車内に戻つてきた事を考えて人員の配置は、等間隔で。鷹根、早川、安根崎は1号車、3号車と4号車の間、11号車と12号車の間だ。鷹根達は場所につき次第、警察や鉄道公安局、武偵高に連絡を取つて爆弾解除の方法を模索してくれ。白雪はこの15号車と16号車の間、不知火は対テロリストの訓練の経験があるから7号車と8号車……この新幹線の中央を受け持つて欲しい」

的確に人員を配置する。

武装してるのは俺達だけだからな。

これであれば、どこから入つてきてもすぐに駆けつける事が出来る。

「キンジ、俺はどうするよ?」

「運転手が精神的にグロッキーな状態だ。武藤には運転を頼みたい。3分につき10キロの加速……精密な技術が必要だが、出来るか?」

「車輛科なら1年でも出来るぜ! 任せろ」

「爆弾は運転席の真後ろだ。逃げ場はないぞ?」

「爆発しちまえば、どの車両にいても大して変わんねえだろ? それに、お前なら逃げる

か？」

武藤はそれだけ言って、白い歯を見せる。

心配する必要はなかったみたいだな。

漢字は違うが名前の通り剛毅ごうぎな奴で、頼もしい限りだ。

「アリアと俺で銃刀法違反及び監禁の容疑でココを逮捕する。子供は帰る時間だつて事をあいつらに教えてやろう」

俺が言いながら腕時計を見れば、18時22分を示している。

ここからは安全な運転を保証できない速度を強要される。

この緊急事態にリーダーシップを発揮した俺に驚いたように見上げているアリアの視線が俺と合う。

その瞬間に小さく声を漏らし、

「う……うんっ！」

と何やら、妹のように素直に頷くのだった。

76：自らの意思

通信科^{コネット}の3人が骨伝導式の簡易インカムを複数持つており、俺達はそれを受け取って周波数を合わせて互いに通信できるようにした。

全員が配置についていたところで、不知火から通信が入る。

「……遠山君。7号車のどこかにテレビのスタッフが数名乗つてて、カメラ機材を持つてる。新幹線の無線LANを使ってさっきから放送してるみたい」

『現実感の無い人達だね。無事に帰れる保証もないのに。いいの？ キンジ』

一応状況を把握するためにインカムをつけている霧がそう聞いてくる。

多分、言葉的に俺がマスコミに良い感情を持つてない事を加味して言ってくれてるんだらう。

だが――

「……放つておこう。報道は自由だ」

どのみち情報は止められない。

この報道で俺みたい不幸な人が出ないことを祈るばかりだ。

俺の隣では、

「キンジ、あんたも踵^{ヒール}鉤爪^{フック}を使いなさい」

言いながら不安定な足場等で使われる金具を取り付けているアリアがいる。

普段はベルトのバックルやホルスターに秘匿^{ひとく}されているそれは、パズルみたいに様々な組み合わせが出来る。

今回は白兵戦だ。

以前、バスジャックの時には車の屋根にワイヤーを打ち込んで支点にしたが。

それをすれば……切断されるだろうな。

「正しい判断だ」

俺も同意しながら、鉤爪を靴に装着していく。

「ねえ、大阪でのあんたとレキのこと——」

先に用意できたアリアが、こちらに背を向けて準備運動をしながら気まずそうに切り出してくる。

「気にしてないから」

「気にしてるな、間違いなく。」

「流石^{さすが}にプライベートに踏み込みすぎた事、謝るわ」

「誤解してるようだが、俺はレキに狙撃拘禁されてたんだよ。お前と一緒に教室を片付

けたあの日からな。レキは無口で多くを語らなかつたが、どうも俺を守るためだったらしい」

「ふーん……」

半信半疑って感じだな。

それからアリアは顔をこつちに向けた、と思いきやすぐにパイと前を向いた。

それから――

「ま、いいわ。そこら辺は待つことにしたから、それが”条件”みたいだし」

などと、ヒステリアモードの俺でもよく分からない事を言い出す。

「待つって、何をだい?」

「別にいいでしょ。あーあ、こんな事件に巻き込まれて不幸だわ。来週、誕生日なのに」

チラッと見ながらアリアが軽くスパイクの具合を確かめるように足踏みする。

「ほんと、ツイてないわ。来週、誕生日なのに」

なぜ2度も言う……

一応、認識してるぞ。俺は。

霧の言う、その程度の男なんて思われたくないしな。

それから再び俺を見てきたアリアに対して、ジッと見ると少し慌て出す。

「そう言えば、あんた実家どこなのよ?」

あからさまに話題を変えてきたな。

まあ、合わせてやるか。

「巢鴨すがもだよ。祖父母が住んでる」

「スガモ……？ 寄るつもりだったの？」

と、アリアは名前自体は知ってる感じだが……まだ日本の地理には詳しくないみたいだ。

「都内だよ、巢鴨は」

「都内？ じゃあ、あんた何で寮生なんてやってるのよ。通学すればいいのに」

「——色々だね」

多くを語らず、それで準備完了という感じの雰囲気が出る。

今の雑談で多少はギクシヤクした感じも少しは和らいだだろう。

アリアは、気合いを入れるように自分の両頬をパシパシと軽く叩いて気合いを入れるという、かわいい一面を見せた。

それからすぐに、

「——行くわよ」

と氣勢充分にココが上がった梯子はしこに手をかけるが、俺はすぐにその小さな手を上から自分の手で覆おおう。

「な、ななっ何よ!？」

奇襲に弱いアリアが顔を赤くしながら慌てる。

「梯子や階段を上る時は、レディファーストの例外だよ」

俺は示すように小指で軽くアリアのスカートの端を弾き、すぐに俺が上る。

これは、上つてる途中で俺とスカートの位置関係に気付いたアリアに風穴を空けられないためでもあるが。

おそらく、最初に外に出る一人目は危ないだろうからな。

俺の推理が当たつてなければ、いや、確証はあるからこそ最初に出なきやいけない。

下で俺の言つた事に気付いたアリアが、顔を赤くしてスカートを掴んでいる。

その間に俺は上へ——

ゴウウウツ!

既に時速200キロ以上に到達した風が顔を殴る。

すぐに全身を列車の上に出し、足を着ける。

服やネクタイの風で波打ち、暴れるが——

(立てない程じゃない)

靴に取り付けた鈎爪が上手く作用している。

闘える。

ココは——いた。

新幹線のパンタグラフ——電車などが電線から電気を取り入れる装置——その根本で何か発光信号のような物を動かしている。

こつちには気付いていない。

近付くために空気の抵抗を少なくしようと屈かがんだ瞬間、ボタン！ さつき出てきたハッチが閉まる音がした。

同時に聞こえる音はアリアが転げ落ちる音だろう。

やっぱりな——！

俺は振り向き様にベレッタを数発、撃った。

暗闇しかないように見える中で弾ける金属音と火花。

そこにいたのは、さつき俺達と戦ったであろう青龍刀を持った”もう一人のココ”。

「きひっ」

ギャリ、と俺と同じようにスパイクの音が聞こえる。

笑みを浮かべながら獣の様に四つん這ばいになったココが叫ぶ。

「パオニヤン 炮娘！ キンゾウが出てきた 金次来了！」

「メイメイ 猛妹！ つかまえてろ 抓住！」

叫んだ反対側からも中国語が聞こえて、見れば俺が近付こうとしたココがUZIを構

えている。

当たり前だがきつきの発砲音で気付かれるよな。

そして――

(俺の推理通りだった訳だ)

ココとそっくりなココ。

つまるところ、見た目がそっくりな時点で双子の姉妹か何かだった訳だ。

この事に關して気付けた鍵は2つ。

1つ、俺とレキが民宿で襲われた時だ。

シエースチの援護をするように狙撃され、レキが致命的な一撃を貰ってからココが現れた時――俺は狙撃手だと思っていたが、違う。

仮にバイクを使ったとしても到着するのが早いように思えた。

狙撃銃を持っていなかったのも気になる。

2つ、きつきのアリアとココの会話だ。

水投げの日、ココはアリアと近接拳銃戦アルカタで会っている筈だ。

だが、ココは“写真を見て”と言った。

おまけにアリアがその時に『その髪型をやめろ』と言ったらしいが、本人は聞いてないフリではなく本当に知らないとばかりに返した。

つまり、アリアが以前に会ったココとは似た別人という仮説が成り立つ訳だ。大体、拳銃、狙撃、格闘。

どれも一流の腕前なんて言うチートキャラみたいな存在、そうそうにいるものじゃない。

結局のところ『万能の武人』を演出した紛^{まが}い物だったという訳だ。

それが目の前の光景。

前にもココ、後ろにもココがいるこの状況だ。

「ココ、ココ——お仕置きの間だ」

俺は左右のココを見ながら左手で胸元のデザートイーグルを抜いて、それぞれに向ける。

右手にベレッタ、左手にデザートイーグル。

2丁^{ダブ}拳銃^ラで相手をしてやる。

いや、刀剣もナイフとスクラマ・サクスの2つがあるから——双剣^{カド}双銃^ラだな。アリアと理子の十八番^{おほこ}、見よう見まねだが使わせて貰う！

◆ ◆ ◆
上で聞こえる発砲音からして始まったみたいだね。

まあ、私はこの感圧スイッチが解除されるまでは動けない訳だけど。

もし、解除出来るなら早めに。

中途半端なら最後までこのままでも全然構わないんだけどね。

「どう、理子?」

「うーん、狭い。つていうか、線を切る道具がナイフしかないから割りとマズゲー」

言いながらも私の座席の前へ後ろへと、色々と視点を變えて試行錯誤中の妹。

都合よく爆弾を解除するための道具がある訳はない。

銃の整備のために常備してる予備工具的な物だけじゃ、流星に心許こころもとないだろうね。

この調子だと間に合うかどうかとどころ。

その間にも私の頭の中には犯罪計画シナリオが思い浮かぶ。

こうした方が面白いんじゃないか?

どうすれば誰にも気付かれず成立させられるか。

想像するだけで、とても楽しくなる。

ここ最近ジャック・ザ・リッパーは切り裂きジャックとして動いてないから、久々に探偵に事件と謎を提供し

てあげようかな?

これ以上の我慢は精神的に良くないし。

いやー、切り裂きジャック——まあ、自分から名乗った覚えは一度もないんだけど——

—の事件を生で体験出来るなんて素晴らしい幸運だと思うよ。

キンジ達、どんな顔するかな？

「こんな時に楽しそうだね……」

おっと、妹がジト目してる。

人が真面目に解除してるのにつて感じだね。

「まあね」

私がそう答えると、理子は静かに聞いてくる。

「キーくんのこと考えてた？」

「む、いつも通りの笑顔なのによく分かったね」

「んー、何となくだよ」

言いながら理子は作業に戻る。

かと、思いきや——

「キーちゃんは、さ……」

「……？」

「キンジのこと……いや、何でもない」

「そう言う話の引き方されたら普通に気になると思うんだけど……」

「デスヨネー。いや、別に大した事じゃないんだけど今聞くことじゃないかなーって、思ってたね。だったら話してよって言われるかもしれないけど、勢いで聞いたらマズイか

な—とか考えちゃったり、いや、本当に大した事じゃないんだけどね。別に理子が気になったから聞こうと思つた訳じゃないんだけど——」

途中から目がグルグル回つてゐるような感じになつてきた。

支離滅裂つて訳じゃないんだけど、予防線張りすぎ。

理子にしては珍しい反応とぼろの出し方だ。

そして、分からないかな妹よ。

そう言うのを見ると私は口を割らせなくなる性格つて事をね。

今回はブラドの時みたいに触れられたくないつて言う感じじゃないし。

「怪しいけど、聞かないでおくよ」

そう言つて私は静かに軽く目を瞑つて聞かないアピールをする。

チラリと見れば理子は少し安堵あんどした感じだった。

それから引き続き感圧スイッチの解除をするために私の正面へ来てしやがもうとしたりと、軽く両足で股下を開くように内から外に払い、そのまま尻餅しりもち。

「……!?!」

今頃、お尻から落ちた事に気付いた表情を浮かべたところで軽くお腹を右足で踏む。

これで立ち上がれないでしょう。

「体に」直接聞けばいいだけだしね♪」

顔を近付けて、その言葉を聞いた瞬間の理子の顔は「あれ？ 似たようなパターン前にもあったような気がする」って言う感じだね。

まさしく顔に書いてあるよ。

実際、金一と会う前に理子の部屋で同じような事はあったけど。

「別に今回はブラドの時みたいに触れて欲しくない事じゃないんでしょ？ それに以前に言ったよね？ 触れられたくない部分じゃないければ、遠慮する気はないって」

「いや、聞いた気がするけど……遠慮して貰いたいかな」

「やだ」

「あ、ハイ」

最早、既に半分諦めてる妹。

「で、さっきの話。言うの、言わないの？」

「今は緊急事態だから、あとでじゃ……ダメ？」

「……」で上目遣い。

並の男なら反射的に「いいよ」って言ってしまいそうな愛嬌だけ——

「ダメ♪」

笑顔で告げるお姉ちゃんは無慈悲です。

「何ならあの時の部屋の続きをしてもいいんだよ？」

その一言で、一瞬で顔を赤くする理子。
結構反応速かったね。

そのまま軽くお腹を踏んでた足に力を入れて、スイッチが反応しないように顔を近付ける。

抵抗はなくて、段々と理子の表情が蕩とろけているのが分かる。

戦闘狂な一面があるから性質的に嗜虐しやく的な方かと思いきや、案外被虐ひやく的な感じがするんだよね。

本人は無意識かもしれないけど、期待してる感じが視線に混じってる。

そんな顔されたら……期待に応えない訳にはいかないよねえ？

そう思って手を伸ばそうとしたところで、

『霧、緊急事態だ』

インカムにキンジから通信が入る。

前もいいところで水を差されたよね。

すぐに私は返答する。

「どうしたの？」

『レキが来た』

そして、人形姫のお出ましか。

「私が応急処置をした時、内臓系に少なくないダメージがあった。それは本格的な治療を受けたところですぐに回復する訳じゃない。死ぬつもりなの？」

死んでも構わないけど。

『……レキは既にこの新幹線の上にいる』

最初からこの新幹線にいた訳はない。

だとしたら、空路を使ってここまで来たとしたか考えられない。

「それで、何で私に通信してきたの？ 状況報告つてだけじゃないでしょ？」

『まあな。感圧スイッチは解除出来たか？』

「全然だね……理子が尽力してくれてるけど」

私がそう言うと、理子はハツとなって首をブンブンと振る。

顔は赤いままだけど。

それをキンジが聞いてきたところで、予想出来た。

これからやろうとしている事が。

「切り離すつもりだね。この16号車から後ろを」

『流石だよ、霧』

「民間人とレキさんを巻き込まない最善の方法はそれぐらいだからね」

『出来れば霧、君にも回避してほしいところだったけど』

「()までくれば、一蓮托生いちれんたくしょうつてやつだよ」

大体、仮に出来たとしてもこんなところで退出なんてお断りだね。それに、何となくだけでもこれから面白くなりそうだしね。

◆ ◆ ◆ 『()までくれば、一蓮托生つてやつだよ』

元パートナーのいつも通りの調子の声に少しだけ安心する。

問題は、レキだ。

トンネルに入る前に星伽のへりから飛び移つて来たレキは止まることなく、もう新幹線の半分——9号車あたりまで来ている。

戦わせちゃいけない。霧の言う通り死んじまうぞ。

すぐに俺は、インカムを挿した耳を押えて白雪に通信をいれる。

「白雪ツ。今の話、聞いてたか」

『う、うん……でも——』

「お前にしか、頼めないことなんだ」

そう言ったところでレキの後方から、何かバカン！ とぶち抜くような音が聞こえた。

何だ——？

どこかの連結部から、この列車上に誰かが出てくる。遠目だが、見える。

……シエースチ。

あの時、俺とレキを山で襲った少女が、いる！

しかし、左腕はないままだ。

よくよく見れば格好はどこかの武偵高の制服っぽいぞ、あれは。

まさか……乗客に紛れてやがったのかッ。

「アリア、悪い知らせだ。シエースチがいる。今、列車の上だ」

『何ですってッ?!』『——ッ』

アリアが叫ぶと同時に理子の息を呑む声が聞こえた気がする。

今はそれどころかじゃない。

向こうは左腕がないが、それだけだ。

対してレキは重傷者だ。安静にしないといけない。

戦わせちゃいけないんだ！

表情を変えてはいないが、レキも分が悪いと思ったのか足を止めずにこちらへと向かってくる。

「レキ！ 後ろだ！」

届いたかどうかは分からないが、俺が叫んだ時には、シエースチは明確な敵意を持ってレキにナイフを向け、突撃する。

レキは、格闘戦の技術がない。

銃剣が装着されたドラグノフを槍みたいにして戦う事は出来るみたいだが……それでも、それほど白兵戦に強い訳じゃないんだ。

接近に気付いたレキは、シエースチのナイフをドラグノフでさばきながら戦っているが、明らかに押されてる。

相手も腕一本だけだっていうのに、動きが普通じゃない。

確実に喉を、腕を、レキに致命的な一撃を与えようとしている。

そして、こちらへと向かつてる。

だが、あのままじゃレキがもたない。

確実に殺される。

俺はすぐに駆け出し、後ろにいるココ——パオニヤン 炮娘に向かつてデザートイーグルで威嚇射

撃をしながら16号車の反対、1号車がある方へ向かう。

レキが無力化して倒れているもう1人のココ——メイメイ 猛妹を越えてさらに先へ。

既にレキは、14号車を越えて15号車の上へと来ていた。

だが次の瞬間、シエースチが自分に向かつてくるドラグノフを脇で挟み、レキを蹴り

飛ばした。

武器を奪われたツ。

シエースチは奪ったドラグノフをバトンのように回し、銃剣の先を立ち上がるレキに向かつて投げた。

レキは、寸で頭を動かして避ける。

そのままドラグノフが俺の方へと向かつてくる。

流石さすがにレキの相棒とも言うべきこいつを落とす訳にはいかない。

俺は右側面へと抜けようとするそれを、体を左回りに回転させながらキャッチし、そのまま見よう見まねで膝撃ちの姿勢を取る。

狙撃銃なんて、強襲科アサルトで体験でしか使った事はないが……銃の基本である狙って撃つということとは変わらない！

「レキ、こっちに来い！」

俺がそう言うのとレキは、すぐに俺の方へと傷付いた体で駆け出す。

しかし、やはり傷が完全に癒いえていないのか、その走りはぎこちない。

その背後では、シエースチはレキをすぐさま追いかけてくる。

まるで、負傷した草食獣を狙う肉食獣だ。

山の中でレキが言った自然の摂理——弱肉強食。

それを体現してるかのようだ。

だけどな……草食獣が肉食獣に反抗する時がある。

——それは仲間を守る時だ！

ダアン、と俺はドラグノフの引き金を引く。

回転する弾丸がレキへと向かっていくのが見える。

だが、その弾丸はレキの顔の横を通り過ぎ——ギインと背後で振り上げられたシエースチのナイフを弾いた。

それに対してシエースチは少しだけ驚き、足を止める。

紅鳴館ではほぼ無表情だったが、あいつもあんな顔するんだな。

と、場違いな感想を心の中で述べているとレキが俺の近くへと来た。

あっち行けの命令は受け付けなかったが、こつちに来いは、以前考えてた通り普通に来たな……

「キンジさん……今ので分かりましたが」

と、俺が立ち上がる同時にレキがいきなりそう切り出してくる。

何が分かったって言うんだ？

「あなたに狙撃は向いていません」

相変わらず物事をストレートに言ってくれる。

自分で分かってても、口に出して言われれば結構傷付くな……
少しだけ、いつものレキらしい事に苦笑してると。

「ですが……助けて頂いてありがとうございます」

無表情ながらも、そう言ってくれた。

レキらしくない。

けど、俺はそれが嬉しい。

「何を笑っているのですか？ 私は感謝をしただけなのですが……」

「だからだよ。レキがそう言ってくれて嬉しいんだ。だけど、感心しないな。そんなロボロの体でこんなところまで来るのは……」

「——キンジさんも、あの夜、ロボロになりながらも守ってくれました」

淡々と告げるレキ。

だけど、俺は少しだけ恥ずかしくて息をつまらせる。

あの時——シエースチに襲われて意識がないと思ってたが……そうではなかったらしいな。

「それに私は誓いました。『主人に仇あだな為す者には一発の銃弾となり、必ずや滅びを与えん事を誓います』——と」

レキは俺からドラグノフを受け取り、シエースチの方へと構える。

そこには機械のような冷たい視線をこちらへと向けるシエースチが、武器を持たずに立っていた。

「あなたは何のために戦うのですか？」

そんなシエースチにレキは、問い掛けた。

何も答えない。

そう思っていたら、

「……家族のため」

短くそう答えた。

「……私は、機械。ただの兵器。でも、そうじゃないと教えてくれた」

何だ……？

シエースチの様子が……俺達を襲った時とは、何かが違う。

「……最初は、恐怖。その後は、温かい気持ち。家族」

彼女は思い出すように静かに目を閉じた。

「……私は、人」

無機質じゃない。

「だけど、家族の望みを叶えるために破壊する兵器に戻る」

確かな意思を、声、瞳、に乗せて頭あらかわにする。

あの時の戦闘用ドローンが彼女に呼応^{こおう}するかのようになどここからともなく現れ、空中に浮かんでいる。

数は4機。

あの時より手強く感じるぞ、こいつは。

第2ラウンドの開始、だな。

77：新しい人生

——ざあつ——

新幹線がまたしてもトンネルに入り、轟音と闇が俺達を包む。

だが、トンネルは短かったのかすぐに通り抜けた。

その先では——バラバラと何かの音が上空から聞こえる。

不意に上を見れば、サーチライトが俺とレキ、シェースチを照らした。

あれは、報道ヘリだ。

不知火がこの新幹線に乗っていると言うテレビスタッフを通じて、他のところにも情報が入ったのだろう。

ヘリは1機だけではなく複数飛んでいる。

安全なところから高みの見物とは良いご身分だ。

お互いにサーチライトが当てられ、まるで映画のワンシーンのようなこの状況で先に動いたのは、戦闘用ドローンだ。

4機が一齐に俺達に向かいながら発砲してくる。

俺とレキはすぐさま、左右から挟むように攻撃してくるドローンに向かって発砲す

る。

レキは2発撃つと、ドローンが2機火を吹いて落ちた。

負傷してても腕が変わらないのは頼もしいな。

俺も負けじと発砲するが、ドローンは距離をとった。

すぐに拳銃の射程から外れ、複雑に左右に揺れながらシエースチのところへと戻っていく。

対応が速いな。

それから、まるで鳥のようにシエースチの肩に止まる。

いや——装着した感じだな。

ドローンからベルトみたいなのが巻き付いてる。

そのまま、肩から発砲しながら左右に緩急をつけて高速で駆けてくる。

しかも空中での反動制御がない分、命中精度が上がってるな。

それに懸念する事は他にもある。

「レキ——16号車に移るぞー！」

俺がそれだけ言うとレキは、俺についてくる。

そのまま連結部を飛び越えて、白雪に伝える。

「白雪……列車の切り離し、出来るか？」

『で、でも——キンちゃん』

「頼む白雪。これが最善だ、これ以上は民間人を危険に晒せない」

俺が引つ掛かっている部分はそれだ。

既に安全な速度ではない。

このままの状況だと、脱線する可能性は高まるばかりだ。

早く切り離さないと、事故は甚大になる。

俺が叫んでる間にもシエースチは迫ってくる。

俺達が車両の中央付近まで来たところで、シエースチが連結部を飛び越えて、そのまま2本目のナイフをレッグホルスターから取り出し、構えだす。

『白雪さん、私達は武偵。身近な人と天秤てんびんにかけちゃダメ。それに、キンジを信じてあげなくちゃ——女すたが廃るってものだよ』

通信越しに霧からそんな通信が入る。

ありがたい援護だ。

そんな霧に押されて白雪は、

『……分かったよ。キンちゃん、私、やるよ。だから、無事に帰ってきてください』

心配しながらも覚悟を決めたようだ。

「心配するな」

俺はそんな心配を掻き消すように力強く答えてやる。

あと、そうだな。

「アリア、お前も15号車に移れ。かなえさんの裁判もある。お前にはお前のやる事があるだろう」

『そんな……!』

『聞こえたぜ、キンジ。どうやら俺は居残り組らしいな』

アリアが何かを言い掛けたところで武藤が通信に割り込んでくる。

「済まないな、武藤。こんな事になっちまって」

『はっ、ガキの頃から新幹線を運転するのが夢だったんだ。それが叶って本望だぜ!』

半ばヤケクソな感じはするが、取り乱してはいない。

『その意気込み良いね、武藤君。生きて帰れたら、ドライブでもしてくれる?』

『マジかよ?! って、それフラグじゃねえのか?! ああ、でも……白野さんとドライブなんてしたら自慢できるぜ』

『だから頑張つてね♪』

『うっしやあ、絶対に生きて東京に着くぜ!』

霧の誘いにまんまとノツたな……武藤。

まあ、意気消沈してるよりずっと良いが。

話している内にシエースチの雰囲気が変わり、

ダッ——！

足を力強く踏み込み、シエースチが動いた。

視線はレキに向けられている。

接近戦に慣れてない方から、潰すつもりなのだろう。

そうはさせまいと、すぐさまシエースチに向けて銃を撃とうとするが、片方の肩のドローンがこちらに銃身を向け、ダダダッと発砲してきた。

まるで自分の意思でもあるみたいだ。

すぐさま銃弾^{ビリヤード}で対応するが、相手はマシンガンで、こっちはハンドガンだ。

クソ、連射力と装弾数が違いすぎる。

命中するやつは弾いたが、下手に動けない。

もう片方のドローンがレキの方にも撃っている。

確実に仕留める感じだぞ、あれは。

そのまま接近するシエースチに対して、レキはその場にしゃがんで狙撃の構えを見せた。

いくつかの弾丸がレキの露出した肌にかすり傷をつける。

だが、レキはそれに動じず。

「——私は一発の銃弾」

あのいつもの言葉を呟きながら引き金を引いた。

瞬間、シエースチの肩のドローンから火が出る。

すぐさまシエースチはそのドローンを外し、蹴り飛ばした。

新幹線の幅からはみ出したところで、ドローンが空中で爆発する。

だが、シエースチは止まらない。

ドローンを蹴り飛ばしながらも真つ直ぐレキに向かって行く。

俺の方を向いていたドローンが銃口をレキに向けた瞬間、ドローンが発砲するよりも

速く、レキは再び引き金を引いた。

またしても銃弾に貫かれるドローン。

装備を解除したのか、シエースチの足に向かって落ちる。

それでも、シエースチは止まらない。

ナイフをレキに向けたかと思うと、何か持ち手にあるボタンを押した。

すると、刃先が飛び出した。

あれは、スプリングが内蔵されてる仕込みナイフかつ。

レキに向かって飛んで行くそれは、既にドラグノフで撃ち落とせぬほどに近い！

俺がすぐさま撃ち落とそうとしたところで、発砲音と同時にギインとそれは弾かれ

た。

俺はまだ撃ってないぞ？

と、俺が不思議に思っていると――

「全く、レキに貸しを作るなんてね」

背後から聞き慣れたアニメ声。

新幹線の側面から漆黒のガバメントを持ったアリアがよじ登ってくる。

窓からやって来たらしいが、窓ガラスがどうなったかは……まあ察するしかないな。

俺は呆れながらアリアに目を向ける。

「移れって言っただろうに」

「悪かったわね――」

供え 近付いて来るアリアが言葉を区切ったところで、15号車と16号車の接合部

分を輪切りにするようにバーナーのような火が出る。

瞬間――ぼくと切り離される音が出た。

「乗り遅れたみたいだわ」

アリアはその離れていく15号車を見送ってそう言った。

……お前な。

そう心の中で再び呆れた俺が15号車に目を向けると、連結部分だった断面で白雪が

日本刀を持って振り返っているところだった。

刀を振るった後の残心。

そんな感じだった。

だが、すぐに力を使い果たしたかのようにその場にへたりこむ。

そのまま15号車は段々と距離が離れていく。

最後に、遠ざかる白雪は俺達を切なげに見ていた。

よくやった、白雪。

お前のおかげで民間人の命は救われたぞ。

「……………」

そんな中、こちらを黙って見ているシェースチは3対1の構図になっても動じていない。

「アリアさん。あなたもキンジさんに近付かないように言った筈です。車内に戻ってください」

レキは警告するように言う。

3人になったとは言え……そのまま戦力になる訳じゃない。確執かくしつは未だにある。

「…………ツ。怪我人こそ、車内で安静にしてなさいよ！」

「いいえ、アリアさんが退くべきです」

「あんたでしょ」

「アリアさんです」

「あんたよ！」

だから……こうなるのは当たり前前だよな。

白雪とも喧嘩はしたが、何だかんだ危機には連携していた。

だが、こっちは連携する気が微塵みじんもない。

こんな時でも、レキはアリアに対して殺気を向けている。

アリアも受けて立つとばかりの、尖とがった雰囲気だ。

今にもガバメントで追い払いそうな感じさえする。

この状況は相手にとって都合だろう。

だが、それでも不可解な部分はある。

戦闘不能になった猛妹メイメイも、未だに隠れて様子を見ている炮娘パオニヤンも闘志を失っていない。

向こうで実質戦えるのは猛妹を除き、2人。

こっちが連携出来るかは別にしても、相手にとっては数的には不利な筈だ。

まるで何かを待っているような――

それに気付いた時に、ヘリの音に違和感を感じた。

空をもう一度見渡すと、車両の後方から1機のヘリが近付いてきていた。

この列車には爆弾があるんだぞ!？ 命知らずなマスコミもいたものだな。そこまで考えたところで、分かった。

あの報道ヘリは違う!

「アリアー! レキ! 敵機だ!」

俺が叫ぶと同時に操縦席にいる人物を捉えた。

——3人目のココ。

それから、ヘリがこの16号車の後方を並走し始めたかと思うと、ハッチが開いて狙撃銃を持ったココがシェースチの傍に降りてきて、ぎやりという金属音を鳴らす。

そのココが持つてる狙撃銃はマッドブラックに塗装されたレミントンM700。

山の中で狙撃された時にレキが言っていた銃だ。

つまり、俺達を狙撃していたのはこのココかっ。

「年貢の納め時つてやつネ」

3人目のココがそう言うのと、そのヘリから戦闘用ドローンが出てくる。

さつき、どこからともなく現れたのはそういうことかっ。

マズイぞ。

またしても状況はこつちが不利だ。

追い詰めていたと思えば、すぐに形勢を覆くつがえされる。

さすがは兵法書『孫子』を編纂した人物の子孫だ。

「……人形劇は終わり」

シエースチがそう言うと、ドローンが俺達を囲むように飛び始めた。

心なしか、その銃口が全てレキに向けられている気がする。

どうあつても、レキは殺したいようだ。

一体ジャックはレキの何が気に入らないのか理解出来ない。

味方は俺達だけ。増援の見込みはなく、四方には敵。

四面楚歌、この状況はまさしくそれだ。

さらにシエースチは猛妹の近くに刺さっている青龍刀を拾い上げて、幅広の刀を活か

して盾にするように構える。

明らかに突っ込んでくる気だ。

すぐに俺達は背中合わせになるが……ヒステリアモードの頭でもこの状況を打開す

る方法がすぐには思いつかない。

相手は今にも火蓋を切ろうと――

『下へ参りませ』

理子の陽気な声が聞こえた瞬間に、爆発。そして重力を感じた。

「うおッ!」「みぎゃ!」「……」

声をあげてる内に気付けば、車内が視界に映っている。

「と、上へ投げまーす」

目の前にいた理子が何かを上へ投げた瞬間に上から閃光が降り注ぐ。

今のは……

「キーくん、最初に跳んで！」

すぐに理子が手を組んで叫んだ。

言われて頭上を見れば穴が空いている。

あそこから俺達は落ちてきたのか——って、今は状況を冷静に振り返ってる場合じゃない！

上で閃光が見えたって事は——

俺はすぐに理子の組んだ手を足場に、打ち上げられるようにして跳躍する。

再び新幹線の屋上に出たところで目についたのは、全員が目を覆っているところだった。

やはり、さつき理子が投げたのは閃光弾の類たぐいい。

勝機が見えた！

すぐさま俺は2丁拳銃で周りを囲んでるドローンに向かって回転しながら発砲して、

1機残らず撃墜する。

ガチンと、薬室が両方とも開く。

ちようど弾切れか……

不意に、狙撃銃を持ったココが、視界が少し回復したのか銃口を俺に向けてきた。

だが、俺は落ち着いている。

——あいつらを信じてるからな。

バツ、と穴からレキが飛び出して、空中でドラグノフを構えたかと思うと3人目のココに発砲した。

斜め上からの狙撃に、銃だけが上手く撃ち抜かれる形になる。

「阿っ」

短く悲鳴をあげたココは、そのまま少しよろめいて尻餅をついた。

すぐさまレキは、着地した瞬間に後ろを振り向き、今度は新幹線の先頭に隠れ気味だった炮娘パオニヤンのUZIを撃ち落とす。

これで2人。

最後にシエースチが、特攻とばかりにこっちに向かって突っ込んで来る。

その視線、殺気が向けられているのはレキだ。

機械的に、対象を殺す事だけを目的とする彼女はまさしく兵器。

だが、家族のために兵器であろうとするシエースチが……俺には少し、悲しく見える。

そう俺が思ったところで、最後にアリアが穴から飛び出して、ガバメントを乱射しながらシエースチを迎撃する。

盾にされた刀に弾が当たるが、流石に口径の大きい・45ACPの連射には耐えられなかったのか、そのまま連射に負けて青龍刀が弾き飛ばされた。

武器を失ったシエースチはそこで足を止める。

そつちが孫子の兵法なら、こつちは日本の兵法——織田の三段撃ちだな。

「降参しろ！　もう終わりだ！」

「イヤ」

この状況においてもシエースチは降伏するつもりはないらしい。

俺の勧告をすぐに無表情ながらも力強く切り捨てた。

「キンジ、無駄よ。ああ言う目をしたヤツは捕縛しないと止まらないわ。それに、これは良い機会よ。あいつを逮捕すればジャックに関して何か分かるかもしれない」

アリアの言葉に俺は頷く。

シャーロックにも色々ど気になる事を言われたしな。

それに、相手が俺を狙ってるなら少しでも対策はしておきたいところだ。

本当はそんなヤツと関わりたくないんだが……向こうが俺の事をお気に入りにしてる辺り、積極的に関わってきそうだしな。

シエースチをココとまとめて逮捕しようと画策していると、ボシユウ、と何かの音と同時に俺達は煙に包まれた。

新幹線の前の方にいるココ——炮娘が何かしたのか……

ともかく、これじゃ何も見えない。

「アリア、レキ、固まれ！」

すぐに叫んで俺達は固まり、背中合わせになる。

これで全方位、どこから来ても対応できる。

この煙はそう長くは出し続けられないだろう。

さあ、ここからどうするつもりだ？

◆ ◆ ◆

——危ない。

キンジ達やツアオ・ツアオ達の目を盗んで、スモーク発煙筒を焚たいて、何とかリリヤを車内に連れてこれた。

何にしても煙が出てる時間はそう長くない。

目の前には京都駅で帰った筈の妹。

ちよつとだけ、驚いてるかな？

いつも無表情な顔が少しだけ驚きに変化し、そしてグリーンの瞳は何かを恐れてるか

のように揺れている。

「流石のお姉ちゃんもぶんぶんだぞ。どうして帰らなかったの？」

最初はいつもの調子でフザケたけど、後半は真剣に聞く。

「理子に嫌われたくなかったんでしょ？」

と、お姉ちゃんが脈絡なく言う。

その言葉にあたしがお姉ちゃんの方に向けていた視線をリリヤに戻すと、しゅんとした感じでリリヤは下を向いている。

え？ 当たり前なの？

お姉ちゃん、心情把握はやくない？

「別にあたしの頼み事が出来なかった件なら気にしてないのに」

と言うか、言うことはよく聞く子だった筈なんだけどね……リリヤ。

だから、キンジからリリヤが来てるって聞いたとき驚いてしまった。

そんな私の言葉に反してリリヤはフルフルと首を振るった。

「……望みを——」 命令「は遂行しないと」

その言葉を出したリリヤは、どこか……震えてる。

命令……って、あたしは別にそこまで強制するつもりはない。

リリヤが無事である方が大事だし、あんなのを見たら帰すに決まってる。

「使えない兵器は廃棄処分」

そのお姉ちゃんという言葉にリリヤは肩を震わせる。

いきなり何を言い出すんだか……

少し意味を考えていると、あたしは1つ思い至った。

まさか、リリヤが恐れてるのは……

「……みんな、みんな棄^すてられた。使えないって……兵器は、結果を出さなきゃ……棄^すてちゃ、ヤダ……」

リリヤがロシアの研究施設で育ったのは知ってる。

でも……その施設の研究内容は知らない。

知ってるのはお姉ちゃんだけ。

どんな苦しみを、どんな理不尽を、どんな過去なのかを知らない。

でも、知ってる。

今のリリヤは、自分を必要としてくれる存在が欲しいんだって事が。

だから——こんなにもあたしの服の端をすがるように握りしめてる。

あたしはそれに応えるように、両腕で抱き締める。

「棄^すてたりしないよ。リリヤも理子にとって必要な家族。だから——」

——逃げて——

「それで、お姉ちゃんのところに戻ってきて。これは命令じゃなくて約束」
「やく……そく」

「そう、約束。だから逃げて」

真つ直ぐにそれだけを目でも語る。

リリヤは少しだけグリーンの瞳を潤ませていた。

何だかんだ、子供なんだよね……

年齢は1つ下なんだけど、どうも精神年齢が幼い感じがする。

それは置いといて、あんまり時間はないんだった。

「……うん」

それだけ答えてリリヤは切り離され、外に繋がった連結部へ向かう。

「……約束、だよ」

振り返り、それだけ言ってリリヤは車外へと飛び出た。

アグレッツィブな下車するなー

最後はちよつと笑ってたかな？

妹って案外に手が掛かるものなんだね。

まあ、お姉ちゃんからしてみればあたしも手の掛かる妹だろうけどさ……

「お姉ちゃん、久々の空気」

……手が掛かるのは姉も一緒か。

◆ 煙が晴れば、何かしらのアクションを起こすと思っていたが。

◆ 予想外だな……

◆ シェースチの姿がない。

そして、ここでシェースチが消えた事にココ達も困惑してるようだった。

「キンジ、今よー！」

その困惑をチャンスと見たアリアがさつき狙撃銃を破壊されたココに飛び掛かる。

そのまま捕縛すると、倒れていた猛妹と共に一緒にまとめて手慣れた手つきで縛った。

すぐに俺も新幹線の先端にいるであろう炮娘に目を向けると。

——パァン！

隣でレキがその炮娘に向けて発砲した。

だが、炮娘に当たった感じはない。

外したように見えるが、違うな。

以前も見たことがある。

すぐに炮娘はフラリと、その場で倒れた。

あれは通常弾で体の一部、神経系を圧迫して相手を麻痺させる精密射撃。レキが以前にハイマキを無力化した時と同じ方法だ。

人間でも出来たんだな。

流石は狙撃の麒麟児だ。

あの場所なら滑り落ちる心配もないだろう。

レキは、ドラグノフを肩に掛けて炮娘の方へと向かっていく。

「これで犯人は無力化した」

「ええ、そうね。事件は解決してないけど」

現状を整理するように俺が呟くと、アリアがすぐ近くまで戻ってきた。

レキもズルズルと麻痺して動けなくなった炮娘を引きずって戻ってきた。

扱いが雑だな……まあ、こいつらにはこれぐらいの事は我慢してもらおう。

それから、レキとアリアの視線が合う。

「か、勘違いしないことね。さっき、ナイフに弾が当たったのは偶然だから。別にあんたを助けるためじゃないから」

赤くなつて、そうアヒル口でアリアは言う。

「私も……彼女達を無力化したのは成り行きです」

レキもそう言葉を返す。

2人して意地を張ったような言い方だが……その目はお互いを認め合う、信頼の証だった。

雨降って地固まるってヤツか。

これで2人の仲が少しだけ、前に進んだことを祈るよ。

「き、きひ……お前達も終わりネ。一緒に吹き飛ば……ば……敗北じゃなく、痛み分けヨ」

麻痺して上手く喋れない炮娘が不気味な笑みを浮かべる。

「お前達は何も出来ないネ」

「このまま人生も終着駅ヨ、バーカ、バーカ！」

アリアに縛られた2人のココもそう捲まくし立てる。

既に新幹線は都心に入り、加速もとうに限界だろう。

確かにここにいる面子じゃ、この状況は打開できない。

だが、仲間を信じ、仲間を助けよ。

「いいや、出来るさ……俺達なら」

俺が言った瞬間に後方に目を向けると、近付いてくるもう1つの新幹線。

その登場にココ達は目を丸くしている。

「——この修学旅行キャラバン、ワンIはそう言うことも学ぶらしいんでね」

俺達は理子が開けたであろう穴から車内に降り、ココ達を協力して車両の後方から中へと入れた。

正確にはアリアが突き落としたんだけどな。

これぐらいの意趣返しはあつても良いでしょ、と突き落とした本人は少しだけスッキリした感じで言った。

そこは挑発したコイツらの自業自得だな。

俺達が車内に戻った時には既に武藤によつて新幹線のドアが開けられており、並走する新幹線から風船のチューブが伸びていた。

そこから、

「あや、あややややー!」

こてん、と尻餅をついて装備科の平賀 文さんが出てきた。

「すまないな、平賀さん。こんなことに巻き込んで」

「顧客のピンチなら、あややは喜んで手を貸すのだ。とーやま君、レキさん、理子ちゃん、霧さん。みんな大口顧客なのだ」

言いながら平賀さんはチューブ先のロープを引っ張ると、工具やらポンベやら機材がこつちに運び込まれる。

そのまま素早く機材を設置し始める。

「解除できんのか平賀よー！」

その機材の設置途中で武藤が新幹線を加速させながら叫ぶ。

「Nothing is impossible！」

平賀さんは、笑顔で大きく答えた。

そのまま作業をしながら説明する。

「気体爆弾は酸素と混ぜると爆発するつて、さつき理子ちゃんから無線で聞いたのだ。それ以前に、ある程度の事は不知火くん達からも聞いたのだ」

平賀さんはボンベを持ってくると、気体爆弾の充満する洗面室の窓に丁寧な作業で取り付けた。

そのままチューブを伸ばし、先端に取り付けられたカッターで小さな穴を空けて何かを送り込んでいる。

「これは……？」

窓を覗いたアリアがそう聞く。

「これはシリコンの風船なのだ。これを窒素で膨らませて、中にある気体爆弾を押し上げてこの真空ボンベに送り込むのだ」

平賀さんが言ってる内にも、風船は膨らみ始めていた。

真空ボンベに取り付けられたメーターが動いてるのを見る限り、順調に作業は進んでいるようだ。

だが――

「間に合うかどうか、賭けになりそうだね」

俺達の近くに来ていた理子が見ながらそう言う。

そうだ。既にこの新幹線は新横浜駅を越えて、品川駅に迫っている。

時間にしてもう数分もない。

コンプレッサーの音が焦燥感を煽る。

「キンジ、最後の加速行くぜ――！」

武藤が言うと、クンと加速する車両。

品川駅を過ぎて、東京の夜景が窓を流れる。

これで時速410キロ。

間に合うのか、と俺達が見守る中で。

ピー、と機材が音を鳴らした。

「よし、完了なのだ！」

「武藤、ブレーキだ！」

平賀さんの宣言と同時に俺が武藤に叫ぶ。

瞬間——キイイイイ！ と、甲高い音と共に揺れる車内。

前へと行く凄まじい慣性が体に襲い掛かる。

減速してるが、止まらない。

「止まりやがれ——！」

武藤が、叫んでいる。

外ではブレーキの摩擦で火花を散らしているオレンジの光が見える。

まだか、まだなのか——!?

そう思いながらも車体は長く、滑る。

ギイ、イイイイン……

思わず閉じていた目を、音がなり終わったと同時に開けて……窓の外を見ると。

J Rの駅名掲示板が見えた。

——『東京駅』——

目に見えたのはそれだ。

着いた、らしいな……無事に。

俺の近くで止まった事を感じたらしいアリアが目を開けてこつちを見た。

「アリア、さつき通学しない理由言ってなかったな」

「……？」

「苦手なんだよ、電車が」

「同感だわ……」

アリアはそう、苦笑いした。

しばらく、電車は乗らなくていいな。

お互いにそう思ってる事だろう。

「思わず寝ちやっただけど、やっと着いた」

おい、霧……降りてからの第一声でそれはどうなんだ……？

と言うかあの状況でよく寝れたなお前。

そう思ってる之不意に霧が俺を見て、

「信じてたよ」

相変わらずの笑顔で言ってくる。

真っ直ぐ、純粹に言われたそれに対して少しだけ恥ずかしさを覚えながらも俺は軽口を返す。

「今日の返済は大きいんじゃないか？」

「でも、ゼロじゃないんだよね」

そこは触れるな。

「しかし、随分な歓迎だね」

霧が周りを見て言う歓迎とは、この爆発の対策としてだろう停止標識の周囲に積み上げられた土囊^{どのおう}。

そして、盾にするつもりだったのか、無人の電車が密集してこのホームに止められている。

「あはっ♪ この中身は、作業料としてあややが貰っていくのだ」

新しいオモチャを見つけた子供みたいに、平賀さんがボンベを大事そうに抱えて降りてくる。

その後ろからはレキが静かについている。

「火遊びは程々にな……」

俺が注意すると同時に、武藤も降りてきてホームの様相に驚く。

「うお、なんだこりや！ べー丁寧に土囊まで積みやがって」

「東京うー、東京うー、お降りの際は段差にお気をつけ下さい」

調子外れなアナウンスをしながら理子は武藤と一緒にココ達をホームへと運ぶ。

段差に引つ掛かってココが一人痛がってるぞ。

そして、そのまま3人まとめて今積んである土囊みたいに転がされる。

近付いたら噛みつきそうな感じだな。

見た目が似てるせいかな、アリアが不機嫌な時にそっくりだ。

ここまで来て、まだ反抗の意思があるのは大した根性だよ。

「ああ、そうだキンジ。こいつらが使ってたへりは神奈川県警が押えたらしいぜ。まあ、何にしてもこの状態じゃあ逃走もままならないだろうけどな」

肩を鳴らして、軽く回しながら武藤が近付いてくる。

「そうか、大役ご苦労だったな武藤。ありがとう」

「礼には及ばねえよ。武偵憲章にあるだろ、仲間をなんとかかって。しかし、駅弁と言うかジエット焼売シュウマイおおうと思つてたのによ」

「武藤くん！ こっちから出られるのだ！」

一刻も早く分析したいのか、ボンベを抱えた平賀さんが階段で待つてる。

それを見た駅弁マニアでもある武藤は、お、と声をあげるとすぐさま階段へと向かった。

「じゃあ後始末は頼む。そいつらは尋問科ダギョウラにでも引き渡して搾しぼってもらえ！」

言いながら走り去る武藤。

さりげなく押し付けたな。

だが、この様子だと店なんか閉まつてるだろ。

避難勧告とか出てるだろうし。

「シエースチ、車内にいるかと思っただらいわね。煙に紛れて逃げたのかしら？」
言いながらアリアはココ達の上に座る。

息をするように座ったな。

「さあな……」

俺はアリアに向かつて、分からないとばかりに答えるが……いささか不可解な部分がある。

あれだけ、執念みたいなモノを感じたシエースチが退いたとはあまり考えにくい。

最後までレキを倒そうと言う雰囲気だった筈だ。

しかし、煙が消えたと同時にヤツも消えた。

それも、こっぜん忽然と……

腑に落ちない。

それに煙を出したと思ったココ達が何もしなかったのも疑問だ。

ただ1人、疑いたくはないが……シエースチとジャックに関わりがある人物。

彼女が何かをした可能性が高い。

ただ、本人は喋らないだろう。

喋ったら命の保証はないかもしれない。

唯一、疑いを晴らすには霧に聞くしかない。

「なあ、霧。理子は結局スイッチを解除出来なかったのか？」

「そうだね。穴を開けた以外は、何とか爆弾かスイッチを解除しようとしてくれてたんだけど……やっぱり間に合わなかったよ。キンジをいい感じに助けて、また貸しを作ろうと思ってたのに……」

「やめてくれ。いちぢごっこになる」

残念そうに答える霧が、嘘を言ってる感じはしない。

まあ、それも当然だろう。

霧はまだそこまで事情を把握してないだろうしな。

ココとのやり取りで理子に何らかの裏がある事だけは、察しの良いこいつには分かっているだろう。

「疑ってるの？ 理子のこと」

「まあ、あんな聞き方したらお前なら分かるよな」

「そりゃあね……ただ、きつと知りすぎるとよくないよ。深淵をのぞくとき、深淵もまたこちらをのぞいている。ニーチェの言葉だけど、謎のままの方が良いこともあると思うんだよね」

いつになく真面目な事を言う。

霧の言うことも分かる。

だが――

「武偵が、謎を解き明かさなかつたら意味がないだろ？」

なんてたつて武装探偵。なんだからな。

「そっか」

それだけ言つて、霧は離れる。

逃げた理由は不明だが。

理子を手助けした訳じゃないとすれば……一体誰が――

不意に空を見上げる。

……なんだ？

キラ、と何かがビルの上で光つて――

「伏せてください」

レキが静かに言うと、すぐにドラグノフを構えた。

それに対してまだヒステリアモードの頭が瞬時に理解する。

「スナイパーだ！」

俺が叫ぶと、全員が物陰へと走り出す。

既に、2発の銃声が聞こえていた。

撃たれた。

だが、それは俺達じゃない。

カランコロンと俺の足元に何かが転がる。

「止まるネ」

ココの1人が、手に何かのスイッチを持って忠告する。

そして俺の足元に転がるこれは――

やられた。

今の1発、俺達を狙ったものじゃない。

よく見れば、ココを縛っていた1人分のロープが切れている。

「逃しました。200メートル以内で、銃声からしてTRG―22でしょう。狙撃慣れ

しています」

レキがそう分析して報告する。

また狙撃手。

距離はレキ達に見劣りするにしてもロープだけを撃ち抜く腕の持ち主。

まだ、仲間がいやがったのか……

「ジャックの言う通り暗殺しておけば良かったヨ、ウルスの姫。よおーく、分かったネ……お前は、空っぽの人形。風が躡^{しつ}け、風の命令でしか動かない。そんなのは、兵じゃないネ……だから、いらぬ。ここで死ぬ」

言いながらココは手に握ったスイッチを見せつける。

俺の足元に転がる爆弾を起動するスイッチだろう。

「レキ……まだ、弾を持つてゐるはずネ。それを使え、ここで。出来ればキンチは殺したくないヨ。無惨に殺されたくはないネ、だから——」

ココは力チリと、スイッチを押しした。

その音に冷や汗が出る。

「死なば諸共ネ。この手のスイッチを離せば、少なくともアリアも巻き添えヨ。だが、お前だけが死ねば……全員助かるネ」

俺が叫んだと同時に物陰に行く途中だったアリアまで……10メートルか。

少なくともこのホームにいる俺達が殺傷範囲。

レキ以外の誰かが何かをすれば、全員巻き添え。

「私だけを撃てば……みなさんは助かるのですね」

その言葉に俺は振り返る。

よせ、よすんだレキ。

——最後の銃弾——

ジャンヌから聞いた、最後の1発で状況が変わらなければ、主人の足手まといにならないために、自ら命を絶つ。

それをしようつてのか……！

「曹魏の姫の名に誓うヨ」

「いいでしょう、ウルスの姫——蕾^{レキ}姫の名において今の言葉を誓いの言葉とし、この場に
いる全員の命を奪わない事を守りなさい」

誓約が、取り決められてしまった……

それからレキが弾倉を外して、残弾を確認すれば——1発。
最後の銃弾だ。

そして、再びドラグノフに装填されてしまった。

「レキ、やめなさい！ あんた騙されてるわ！」

アリアが金切り声をあげて、叫ぶ。

俺も続いて、言葉を投げ掛ける。

「やめろ……レキ。誰もそんな事は望んじやない」

「いいえ、望んでいます」

少しだけ、視線を動かしてレキは俺を見つめた。

「——私が」

そのままドラグノフの銃口を顎につけた。

「私は、あなたに生きて欲しいと思いました。それは風の意思ではなく私の想いです」

そのまま独白される言葉。

「ウルスの女は銃弾に等しい。銃弾に意思などありません、ですが……シエースチ、彼女を見て思った。何かを守りたいと想う事は出来るのだと」

そう思えるなら、お前は銃弾なんかじゃない。

「ですが、私はそれだけです。銃弾であることに変わりはありません。以前にキンジさんは、人を撃つなど言いました。ならばこれは造反に当たりません……何故なら、私は人ではなく」

最後に靴を脱いで裸足になって、ドラグノフの引き金に足の指が乗る。

「お前は人間だ！」

「――発の銃弾」

俺の叫びは空しく響き、無情にも引かれる引き金。

――ガチン。

弾は、出ない。

レキは目を開けて驚いている。

「不発弾……」

アリアも赤紫の瞳を驚きで満たしている。

現代の銃で不発なんてのは、そうそうに起こらない。

じゃなかったら敵に撃たれる。

ましてやレキは、自分で銃弾を作成し、撃つことに完全分解する程に不発防止に努め、可能性を極限にまで低くしていた。

その可能性は何千、何億分の一の領域だろう。

そして、レキ自身も――

『この銃は私を裏切りませんから』

そう言い切る程に信頼をしていた銃が、裏切ったんだ。

レキを生かすために。

「チエックメイト」

「あうっ」

陽気な声が聞こえたと同時にココの短い悲鳴。

すると、ふ、と力が抜けたようにココが倒れた。

すかさず霧が、倒れるココのスイッチの指を押えながら抱える。

「見た目通り軽いねー」

言いながら霧は、そのままゆっくりその場に座る。

これでココによる爆発はなくなった。

俺は足元に転がる爆弾を注意しながら、拾い上げる。

軽いな、中身はさっきの気体爆弾か。

俺はそのままレキからドラグノフを静かに取り上げて、弾倉から銃弾を取り出し、握り締める。

「レキ、二度と自分を撃つな」

それから睨み付ける。

俺が怒っている事を伝えるために。

「お前、俺の命令なら聞くんだろ？　これは命令だ」

俺の鋭い視線を見つめたレキは——こくり。

無言で頷いた。

それを確認した俺は、弾丸をもう一度弾倉に入れて、

「それに、さっきも言ったがお前は人間だ。それ以上でも、それ以下でもない。1人の人間で、女の子なんだ」

そう語り掛ける。

さて、爆弾……このままスイッチを押したまま運搬なんてのは危険だしな。

駅の上は、何も無い。

周囲の建物の人は避難してらるだろうし、ビルから距離もある。

「レキ、こいつを撃つてくれ」

「打ち上げ花火？」

「正解だよ、霧。新しい門出にはいいだろう」

俺がそう言うのと、レキは撃つことに了承したのか頷いた。

まだギリギリ、ヒステリアモードは続いている。

だつたら夜空に高く打ち上げよう。

マツハで拳を打ち出す『桜花』の投擲版とうてきで今夜限りの——『桜花火』！

シユン、と風切り音と共にホームの端から打ち上げられる気体爆弾。

我ながら本場の花火顔負けの上昇速度だ。

ドラグノフをレキは、静かに構える。

「ここは暗闇、何も見えず、何も聞こえず」

それから、いつもと違う詩を紡ぎ始めた。

「ただ一筋の光があるのみ。何も無い私は——」

そして、

「光を駆ける者！」

撃ち放たれた弾丸が、今、上空にある爆弾に当たる。

瞬間、閃光が空に弾けた。

まさしく、一筋の光だな。

今、確かにレキは生まれ変わったんだこの場で。
新しい生誕。

心の中で祝おう、お誕生日おめでとう——レキ。

◆ ◆ ◆
色々と何やかんやあつて、事件は解決した。

後処理も済んだ、今——

「ふふ、キンジ。やっぱり退屈しないよ、君といると」

この興奮を抑えずにはいられない。

人形に心を与えるなんて、まるでピノキオの一節みたい。

今まで空っぽだった筈なのに、シエースチみたいになつた。

つまらない存在だと思つてたのに。

「ああ、そうだ……連絡しておかないと」

声を変えて、すぐさま連絡を取る。

『なに?』

「レキを殺すのはナシだよ、ルミ」

低い男性の声で告げると、向こうから疲れたような吐息。

『ドタキャンはどうなの?』

「何故そんな日本語を知ってるのかは、置いておいてだね。事情が変わってね。人間になっただよ、彼女は」

『どっちにしても邪魔』

「いやいや、観察しないともつたないだろう」

『相変わらず面倒な人』

「面倒と言う割には、スコープが嫌いな君が珍しい事をしてた気がするが？」

『私の意思じゃない』

「なるほど……」

大方、あの人の指示か。

理由は……なかったらレキが死んでるから、だろうね。

つまりまだ退場には早いと言う訳だ。

『帰る。次はドタキャンなし』

通信が切れた。

相変わらずドライなことだ。

あ、そうだ。

新しく結成中のメンバー第一号に声を掛けておこう。

『O u i』

フランス語の穏やかな、女性的な声。

たった2文字でも分かる優しげな感じ。

「やあ、こうして話すのは初めてだね。ジャックだ」

『初めまして、愉快的紳士さん』

「やっつてゐることは紳士にほど遠いがね」

『約束はきちんと守る、充分に紳士的だと思うわ』

「そう言う君は淑女的なことはしてるのかね？」

『いつでも安らかな眠りを提供してる』

「それは実に淑女的だね。どちらかと言うと母親的か」

『私は未亡人よ。知ってるでしょう』

「そうだったね。まあ、それはそうとどうだろう？ 研究の助けになってるかね？」

『ええ、いつもありがたいわ』

「礼は不要だよ。君は、愚かな死を迎えるしかない人々に安寧を与える存在だ」

『ありがとう。それで、ご用件は何？』

と、用件を忘れてた。

世間話に花を咲かせるのもこれぐらいにしておこう。

「近々大きなイベントが起きる。どうかな？」

『ああ、そう言うこと……』

少し間が入り、向こうですぐに変化はあった。

『嬉しいわ。是非ともお願い』

「ありがとう、R^ッ I. P。君と同じ舞台に立てることを嬉しく思う」

『たまには童心に戻らないと、自由な発想は生まれえないもの、それじゃあ』

童心に戻らないとって、言う程に歳は食ってないでしょうに。

そこで通話は切れた。

あとは、リリヤ……か。

今は何してるんだらうね。

◆ ◆ ◆

極東の島国の猿にしてやられたヨ。

今は、日本人の武偵共の護送車の中。

気絶して、目を覚ませばこの中ネ。

それよりも何力、この目の前の札は。

これじゃあ、不死人^{キョウシ}ネ。

ガシャン！

何かにぶつかった衝撃と共に浮き上がった車体。

な、何事カ!?

「事故でも起こしたネ」

「下手な運転ヨ」

妹達は口々にそう言うが、と言うか妹達にも札が貼られてるヨ。

でも、今のは事故を起こしたと違うネ。

そう思っていると、扉が乱暴に引き剥がされた。

「お前ハ……」

扉の先にいたのは、ジャックのこのメイド。

まさか、私達を助けに来たのか?

「……早く、逃げる」

「あの時逃げたクセに何で戻ってきたネ……」

「……逃げたのは、指示があったから」

それだけ、彼女は言う。

相変わらず淡々としてるヨ。

「……でも、助けに来たのは私の意思」

その言葉に妹達も驚く。

どう言う風の吹き回しなのか。

思てると、そのまま彼女は立ち去るつもりみたいネ。

「……装備見てくれたお礼」

それだけ言つて、消えたヨ。

助けてくれたはいいが……どうやって藍幫ランバンに帰れば……

ええい、考えても仕方ないネ！

このまま捕まつて保釈金が支払われれば、ココ達のお金が減つてしまうヨ。

「炮娘、猛妹！ 逃げるネ」

「狙姐、ちよつと待つヨ！」

「私ウオ走れない、走れないアル！」

78 : Next Stage

あれからココ達の事件を解決した後の事後処理が終わり、これにて一件落着。なんて、そんな訳はない。

次のイベントは既に始まっているようなもの。

ついに……バンデイレ宣戦会議が開かれる。

それが、1週間近くに迫ってきた。

待ちに待った戦役。

役者はたくさん、よりどりみどり。

誰をどうバラすかは……まあ、その時の楽しみにしておこう。

最終的な目的はお姉ちゃんを救うこと。

だけど、個人的な目的は私の考えた犯罪計画が無事に完遂されることだ。

犯罪者なんて個人的な欲望で動いてるだけものだしね。

他人の為だろうが、自分の為だろうが結局は自分がそうしたいから殺し、犯す。

ふふ♪ それはそうと、もっと観察して資料を集めないかね。

癖とか仕草だけじゃない。過去の思い出も、今の想いも……全部知らないといけな

い、見ないといけない。

誰にも気付かれずに成し遂げる。

私なりのこだわりだね。

そのためには、私の存在をなかったことにしないと。

もとより誰でもない私なんだから、誰になっても問題はない。

まあ、理子や家族達にはネタバラシをしてもいいかな？

全部終わった後でだけだね。

それよりもまずは、チーム編成。

理想はキンジや神崎達と同じチームになること。

でなければ、観察できない。

これから何を思っ何をしたのかを知る必要がある。

いずれ別たれる運命だろうけど。

チーム編成の日取りは既に明日に迫っている。

神崎に編成は任せてるから、私の理想と言うより希望通りに話は進むことだろう。

人間らしさを見せ、新しく生まれ変わったとも言おうべきウルの姫はココ達が逮捕さ

れた後、東京駅から忽然と姿を消した。

いつも彼女が言っている風のようにどこか自由に吹き流れて行ったようだ。

神崎の話によると、彼女——レキから未だに連絡はなく、狙撃科スナイプの方にも戻ってきた話は聞かない。

チーム編成は事前登録が普通。

だけど、私達が受けるのは直前申請ジャスト。

文字通り、チーム登録メ切日に申請を出す駆け込み乗車的なシステムだ。

私を警戒していた彼女が同じチームに入るかは、微妙なところ。

いや、逆に私を監視する意味も含めて自ら来るかもしれない。

キンジに対してもあなたを守るから、的な宣言してたし。

どっちにしても、妙な動きをすれば……真っ先に死んで貰おう。

私の計画がおじゃんになるのは勘弁して欲しいしね。

せっかく人間性を獲得したんだから観察したいとは思うけど、私には優先順位がある。

切り捨てるのもやむ無し、だよ。

と、武偵高の自室でゆっくりと明日の準備をしてると……机の上のお仕事用の黒い携帯電話に着信。

相手は——ジャンヌ。

珍しい事もあるもんだね。

「Hey. 聖女からのお告げですカー?」

ハイテンションな外国人女性で対応する。

『あんまり招待したくないが宣戦会議パンデイルへの招待だ。正式な書状を渡したくてもお前はどこにいるか分からん』

「それは、スミマセン。けど、待つてましたネー!」

私の反応にジャンヌは疲れたような息を吐いた。

『誰もお前を待つていないがな。結局どうするつもりなんだ?』

「どうもこうもしないネ。色金なんか、私には興味のない話ヨ。戦役には参加しますが……勝手に争つてクダサーイ」

興味はなくても必要ではあるけどね。

ただ言えるとすれば——

「私は好き勝手にバラすだけダヨ」

『無辜の人を巻き込めば戦役どころではなくなり、両陣営からも狙われるぞ。決闘じみた戦争だ。もし、戦役に参加するのであれば——』

「戦役で済むと思つてるのですか?」

『なに……?』

私の言葉にジャンヌは話を途切れさせた。

これは、謎が出る前のヒント。

だけどヒントはそれだけ。

「おっと……それでは、パンデイレ宣戦会議でお会いしまショウ」

それだけ言って私は一方的に電話を切る。

戦役の先に待ち受けるモノが何か、ほとんどの者は知らないだろう。

その現実には私は笑みを浮かべる。

直前申請には、デイウイザー・ネロ防弾制服・黒と言う礼服で臨まないといけない。

ぱつと見は、リクルートスーツっほいんだけどね。

いや、印象的にはどちらかと言うとマフィアかな。

黒のテンガロンハットでも被れば、いかにも80年代のマフィアって感じになりそう。

まあ、そんなイメージ通りのマフィアの知り合いは既にいるんだけども。

そんな訳で自室の鏡の前で衣装合わせ。

黒の長袖、長ズボンにそして黒のネクタイ。

靴も黒のパンプス。

まさしく黒づくめの怪しい人。

遊園地で頭から血を出した小さい子供が発見される事件とか起こりそう。

ピンポーン……

「キーちゃん、迎えにきたよー」

インターホンが鳴ったと思つたら理子の声が玄関から聞こえてくる。

「はいはい」

軽い感じで返事だけして、最後にチエツク。

化粧も済んだし、鏡の前で襟首を正して玄関に向かう。

そのまま玄関を開ければ同じように防弾制服・黒を着た妹が笑顔で立ってる。

服のタイプは私と違うみたいだけど。

それよりも元気そうでなにより。

そして気付いたのか、妹がツツコんでくる。

「それ、男物じゃないの?」

「ちゃんと全部女物だよ」

「ふーん……真面目に仕事が出来そうなキャリアウーマンっぽいね」

「いつも仕事出来ないみたいない方で失礼だね……。私はいつでも楽しくなるよう

に面白おかしく仕事を完遂してるでしょ?」

「普通に仕事を完遂させる気はないんだね……」

私のモットーは何事も悦よろこび楽しむって事だからね。

さて、妹が私の服装をチェックするなら……私もそれに倣ならうとしよう。

まず目につくのは谷間を大きく露出させ、強調した上着。下はタイトな黒のミニスカート。

上着の下は……ブラウスっぽい。

それと体のラインがハッキリしてるね。

小柄な理子のあどけなさが抜けて、まさしく女を感じさせる雰囲気。

それと黒に金髪はよく映える。

私の視線に気付いた理子が少しだけ胸の谷間を片手で隠す。

別に女の子同士なのに何で隠すんだか……

「キーちゃん、視線が舐め回す感じなんだけど」

「成長を見てる。と言うかブラぐらいしたら？」

明らかにしてないでしょ。

「これはこう言うスタイルだからいいの」

「あら、そう……どつかで水でもかけようかな……ふふ」

「キーちゃん、理子そう言うのよくないと思うんだ」

「じゃあ下着はつけなさい。R-18的な絵面になりたくなかったらね」

「むう、分かったよ……」

少しむくれたかと思うと、理子は廊下を歩きだす。

自分の部屋に戻るんだろう。

全く……女の子ならそこら辺は意識しないと。

お父さんからも無闇に肌を晒すものじゃないって言われたし。

2年ぐらい前か……あの時はよく分かんなかったけど、羞恥心って言うものを持ってって事なんだろうね。

別に誰に何を見られようが私は構わないんだけど……

でも、キンジに見られるのは、ちよつと困る、かな……

これって羞恥心なのだろうか？

未だに分からない気持ちは色々ある。

他人がどう思っつて、どう言う感情を抱いてるかは分かるのに……自分の気持ちはあまり分かんないなんて今にして思えば変な話だね。

まあ、いいや……今はそこら辺を考えてる時じゃない。

キンジの部屋に行こう。

どうせみんなそのつもりだろうし。

私は部屋を出てキンジの部屋を目指す。

そのまま、同じように直前申請をするつもりなのか、同じように黒い制服に身を包んだ生徒の何人かとすれ違い、キンジの部屋に到着。

玄関を開ければキンジ以外の靴が一足、丁寧に爪先を揃^{そろ}えて置かれている。

この丁寧さとサイズは白雪だね。

先に來てるってことは、チーム申請の話は既に白雪から聞いてるかな？

キンジは初めて編成を知るだろうね。

神崎からキンジには内緒にするように他の面々を含めて言われてるし。

そして、神崎に一任したチームの名前は——バスカービル。

それはお父さんが解決した事件の1つ。

今は神崎の所有してる土地の名前でもあるらしい。

対して、私達はライヘンバツハ。

2人の先祖の運命が分かれた場所だね。

それを組織として名乗ってるって事は、我々がその転換点になるって言う暗示かな？

そう言えば私が結成中の組織に名前、なかったね。

別に組織って言える程に高尚じゃなく、ただの殺人サークル的なものでしかないけど。

あとメンバーは今のところ1名だけだし。

増える予定は未定。

当てがない訳じゃないけど。

考えながらもリビングに到着。

やっぱり白雪はキンジと一緒にいた。

様子を見るに、どうやら私の予想通り白雪を通じてチーム編成について知ったらしい。

キンジのことだから、転校を考えてる身としては編成なんてどうでもよかつたんだろうけど。

そして、2人とも私に気付いたらしい。

「霧、お前もか。というか顔がにやけてるぞ」

そんなカエサルが暗殺された時みたいなセリフをキンジは最初に言いながらも、気付いた事を指摘してくる。

キンジのセリフで思い出した……カエサルの名を冠する子がいるのを。

あの子、いいかもね。

ただまあ、皇帝の名を冠する者の例にもれず高慢でいて寛大。

誰かの下にいる器ではないけど。

それは置いておこう。

「改めてよろしく、チームリーダーさん」

「結局組む流れになったな。チームとしてだが……」

そんな気はしてたのか、キンジは軽口を叩きながらも満更まんざらでもなさそう。

チームの編成は、リーダーにキンジ、副リーダーに神崎。

メンバーは私、理子、白雪さん、レキと顔見知りばかりだ。

おまけにキンジを除いて武偵ランクA以上。

まあ、本来ならキンジもSあるんだけど書類上はそうなってる。

「それはそうと、早く着替えてきなよ。あと、申請のメ切まで30分ぐらいなんだから。白雪さんに着替え、手伝ってもらおう?」

「え、そんな……き、キンちゃんのお着替え。い、良いんですか!?!」

「よくねえよ! 1人で着替えられるツ」

白雪の変わりようを見て、キンジは危機を感じたのかすぐさま制服を持って部屋の中
に。

相変わらず愉快なんだから。

申請の場所と言うか撮影会場は探偵科イシケスタの屋上。

現地集合という事でキンジ、白雪と共に到着すれば既に2、30人の生徒がいた。

存外、他の生徒ももつれ込んだんだねチーム編成。

背中を預ける存在を見定めるための修学旅行だったからね。

相性がよくないと思つたらあらかじめ決めてた編成も変えるだろうし、こんな風にギリギリにもなる。

キンジみたいに土壇場どたんばで、つていうのも居そうだけど。

神崎は、いたね……オーダーメイドらしいSサイズより小さそうな黒い制服を着ている。

同じ服装でもあの髪の色と外見のおかげですぐに見つかる。

理子も一緒だ。

しかし、天気が悪いね。

ロンドンみたいな曇り空。

イギリスのロンドン出身者には馴染み深い空ではあるけれど。

撮影者は蘭豹らんびょうか。

撮影場所には床に黒いビニールテープで、長方形の枠で示されている。

その中で生徒が横一列に並んで撮影している。

「おいアリア。カミナリ様にヘソとられるぞ」

撮影の様子を無言で見っていた神崎にキンジはそう声をかける。

ああ、そう言えばさつきからヘソがチラチラ見えてたね。

「キンジ……」

声を掛けられた神崎はキンジを見上げると、

「相変わらずおかしな事を言うのね、撮るのはヘソじゃなくて写真よ?」

ここで文化の違いが出た。

この国特有の雷神がヘソを取る言い伝えを知らないらしい。

あ、キンジ……何か企んでるね。

神崎が雷が苦手なのを良いことに少し仕返ししようと考えてる感じだ。

「撮影まであと5分、風の少女は未だに来ず?」

「そうね。朝一で待ってるし連絡もいれてるけど……」

時計を見て、私が尋ねると神崎はそう答える。

そう言えば携帯破壊されたみたいな事を言っただけだったわけ、キンジ。

もしそうなら、レキに連絡が入らないのも納得だけど。

「キンジ……あんだ、来てくれたって事は……いいの? あたしと……チームを組む事」

「完全に事後承認だな。お前が勝手に書いたんだろ? 俺の名前。それにリーダーにま

で据^すえて」

「それは、あたしとレキのせいであんだがこのチームにも入れない事態は避けたかつ

たのよ。別にレキから横取りし返したとかじゃ……ないわ」

言いながらも神崎は周囲を見回す。

待ち人を探してゐるんだろうけど、未だにその姿も気配もない。

いや……違う。

気配は、ある。

以前の彼女は感情がないせいで、同じ空間にいても人形が部屋の隅に置いてあるみたいな存在だったけど。

ちゃんとした存在感、雰囲気がある。

へえ、たった数日でここまで変わるもんなんだ……リリヤに比べて変化がすごいね。

おそらく、目に見えての変化はあまりないんだろうけど。

気付いても教えるのはやめておこう。

「キーちゃん、良いの？　これで」

理子が周りに聞こえないように静かにそう聞いてくる。

「何言ってるんだか。良いんだよ、これで。お姉ちゃん風に言えば、解は収束する。あるべき答えにね」

「理子達、悪い子だね」

「これも家族の為だよ」

「バツはいつ2つになるの?」

「彼ら次第だね」

そのまま私はキンジと神崎に目を向ける。

何やら向こうも話してゐるらしい。

それからキンジが呆れるように首を振って、何かに気付いたのか一点を見つめた。

それは屋上に置かれた2メートル程の空調設備。

そこへキンジが駆け出した。

「キンジ!」

驚く神崎の言葉が聞こえてないような感じだ。

待ち人を見つけたらしい。

それを見て私達も駆け出す。

「レキさん……! 良かった、間に合ったんだね。みんな、心配して探してたんだよ?

どこに行ってたの、ほんとうに……!」

白雪がそんな感じで声を掛けた。

言い方がまるで迷子を見つけた母親みたいだ。

「——ハイマキと合流しに京都へ戻りました」

「えっ」

レキの言葉に白雪は驚いてる。

あの東京駅から、どうやって京都に戻ったのか……

夜行バスを使った可能性もあるけど、どっちにしても白雪の驚きようを見るに星伽神社には行つてないらしい。

「——それから襲撃を受けた時の民宿を貸し切り、湯治をしていました」

襲撃を受けた時の民宿……キンジと一緒に泊まつてただろう場所だね。

湯治とは——随分と自然治癒に任せた治療法だ。

内臓に効くところもあるにはあるけど……どちらかと言うと、疾患系しっかんであつて負傷の部類の治療には当てはまらない気がするけど。

「それにしても、俺達がここにいてよく分かったな」

「携帯を新調した時にメールが届きましたから」

キンジの疑問に答えるようにレキは端的に答えた。

なるほど……やっぱり、その時まで携帯はなかったんだ。

しかし、自分の意志でここに来たっぼいね。

これからの事を考えると人形の方が都合がよかつたのかもしれない。

いや、その前に死んでただろうけど。

事実、殺すつもりだったし。

でも……その方が面白い。

私にとってはそれだけで充分。

それはそうと……

「……………」

真つ先に近付いた割にレキの前でもじもじしてるこのピンクツインテールは何してるんだか……

申請した本人で、そう言う”意図”もあつたでしように。

キンジが私に視線を向けてくる。

ニュアンス的にはフォローするか？ って感じだね。

でもそこは、お譲りゆずするよ。

なんて言つたつてリーダーだからね。

私はどうぞ、とばかりにジェスチャーをする。

「レキ。お前、このチームでいいのか？ アリアが勝手に編成決めちまつたけど」

キンジが会話の道筋を作るようにそう聞くと、レキは静かに頷いた。

「だとよ、アリア。言いたい事があるなら言えよ」

そう言つて背中を押すキンジ、だけど当の本人はこういう時には弱いだろう。

今まで一人でやってきたんだから。

つまりは仲直りの仕方がまだよく分かってない。

癪しやくだけど、手助けしてあげよう。

勿論もちろん、普通に手助けしないけど。

「ん、んう……その、レキ……あの時は、悪かったわ」

『!?!』

その瞬間、レキを除く全員が驚く。

特に神崎に関しては困惑してる。

何故なら喋ってるの本人じゃないし。

腹話術ってヤツだね。

「ち、違うわよ——今のは、あたしが言ったんじゃ」

「私も、奪うような事をしてすみませんでした」

そう言つてレキは軽く頭を下げた。

これにはちよつと神崎だけじゃなく、他のみんなも少しだけ驚いてる、私も含めて。

「それとあの時、助けてくれてありがとうございます」

目に見えての変化はそんなに無いと思つてたけど。

私が想像してた以上の変化だよ。

こんなにも素直に自分の意思を伝えるとは。

感情が乗つてるとは言い難いけどね。

さて、ここまで言われて貴族様はどうするつもりなのかな？

「レキ……」

少しだけ顔を赤くした神崎は、名前を読んだあと――

「無事で、よかった……！ 心配したのよ！ あたしも、あの時はありがとう。それに来てくれて嬉しいわ！ えっと、その……絶交は取り消しよ。復交？ 再交？」

「復縁ね」

「そう、霧の言うとおり復縁。何にしてもまた、交わりましょ」

感情のまま、喜びを表現するようにレキを抱き寄せた。

うん、こういう温かみのある光景は嫌いじゃないよ。

別に私、そこまで壊れてない……と思いたい。

何よりも殺人欲求が優先されるだけで、感性だけは普通の人とそう変わらないはず

……

って、何を考えてるんだか私は。

別に人並みの人生に憧^{あこが}れてる訳なんてないのに。

それでもキンジと一緒になら退屈しないだろうなって、ふと考えてしまう。

私もやっぱり変わってるんだらうか……

「ホラホラ！ 私ノ可愛い生徒達！ 締め切りマデ15秒ヨ！ 武偵ハ時間厳守デ
シヨ」

このオカマ口調は。

諜報科レザドの教諭であるチャン・ウーだね。

声はしても姿が見えないという事で有名だけど。

毎回、予想外のところに潜んでるからあの人。

多分これ、屋上の上にある空調設備の中だね。

視線とか向けたら勘付かれそうだから見ないフリ、見ないフリ。

「くおら！ ガキども、イチヤイチヤしとらんと、こつち来いや！ さつさと撮影するぞ
！」

蘭豹がカメラを大きく振り回して、撮影場所の黒いビニールテールの枠を示す。

「行きましょー！」

レキの手を握って神崎が駆け出す。

「俺達も行くぞ」

それからキンジの声と同時にみんなも釣られて行く。

「あと5秒や、走れ！」

蘭豹が時計を見ながら怒鳴り散らす。

やれやれ……横一列に並んでる余裕もないみたいだね。

そして、これは写真撮影でもチームの登録。

犯罪者に情報が渡る可能性を考えて特殊な撮影方法になる。

「よし、笑うな！ 斜^{はず}向け！」

とまあ、顔を全面に見せる事はせずちよつとだけ表情が見えないようにする。

正体を微妙にぼかすためだからね。

所属の高校も分からないようにするため、制服も統一されている。

「チーム・バスカービル！ 神崎・H・アリアが直前^{ジャスト}申請^トします！」

ふむ、私はちよつと空の方を見ておくかな。

横顔が見えるくらいでいいや。

それぞれ正体をぼかす工夫をしたところで時計を見ていた蘭豹が、

「9月23日11時59分、チーム・バスカービル——承認・登録！」

大きくシャッターボタンを振り上げてスイッチを押す。

ストロボの閃光がパシャ、と弾ける。

この時に大きく振り上げた蘭豹のせいでカメラが微妙に傾いてしまった。

その時の写真はお世辞にも良いものではなく、全員が写っていたとは言え構図はすごく斜めになっていたの。

何よりも、これが最初で最後。このチームの始まりであり終わり。

同じ面子が揃う事は二度となかった。

何でって、分かるでしょ？ 名探偵さん。

私は何者なのか、誰もが知ってるもの。

◆ ◆ ◆

日付が10月1日に変わろうとする深夜帯。

気が、重い。

これ程までに気が重いのは久しぶりだ。

バンディール 宣戦会議の進行役など、戦争を終結に導いた先代ジャンヌ・ダルクからすれば何の皮

肉かと言う話だ。

魔女であるのは確か。だが……それは人を魔に落とす為ではなく安寧の為。

それが私の祖先である初代ジャンヌ・ダルクが魔女であった理由。

新たな戦の幕開けを、私が執り行う。

これは、既に定められていた事だ。

なぜ私を指名したのかは未だによく分からないがな。

霧が出てきたか……

それが、夜の空き地島を覆い隠し始める。

カツエか、ヤツか……どっちにしてもそのどちらかが近くにいるのは確かだ。

しかし、電話で話してた言葉。

ジャックの言葉は何を意味している？

『戦役で済むと思っっているのですか？』

いつも通り声を変えながらも語った、あの言葉の意味は……

もしや、この争いの先を既に見定めていると言うのだろうか。

だとしたらその狙いは……色金以外のモノなのか？

色金に興味がないと言っていた。

事実、ジャックは興味を抱いておらず人間観察と殺人にしか好奇の目を向けていない。

それはどの人物であつても一貫していた。

「はあ……」

疲れた息を吐く。

駄目だな、まるで私には分からない。

相手の真意や裏をかいてこそその策士。

だがヤツの真意も、目的も……何も分からない。

リスクは高いが、協力関係になれば何か分かるか？

理子を救う方法も分かるかもしれない。

それと、問題は……遠山だな。

事態の深刻さをヤツは自覚していない。

ただ目の前の障害を乗り越える事だけに全力を出しただけだ、その後をまるで考えて

はいない。

いや、知る由もなかったのだろう。

我らイ・ウーが世界の均衡を保つ枷であったなど。

あのひた向きさは好ましくある。

だが、それも今回報かりは裏目に出たようなものだ。

……当の本人がお出ましか。

「遠山、こつちだ」

私が声を掛けると気付いたのか霧の中をかき分けるように近付いてくる。

手紙の通り武装はしてるみたいだが……いささか軽装だな。

「何だ。こんなところに夜遅くに呼び出して」

何も言わなかったせいで既に訝しんでるな。

これは、電話で聞かれた時に事の次第を言わなくて正解だったようだ。遠山の場合、全てを語れば来なかっただろう。

「——まもなく0時です」

風車のプロペラに腰掛けているウルスの巫女が静かに告げた。

間もなくか……

「何なんだよ、お前達……」

遠山が困惑した瞬間、この一帯を強烈なライトが照らし出す。

霧に移るシルエットは様々。

だがそのどれもが、組織、結社、あるいは機関の代表者——大使の任を負った者であるには違いない。

「——先日は藍幫ういちの曹操姉妹ココがご迷惑をお掛けしたようで。陳謝致します」

丸眼鏡を掛けて、絢爛けんらんな中国服を身に纏まとい遠山うやうやに恭しく礼をしているのは藍幫しよかつの諸葛しよかつか。

噂ではシャーロックとやりあったのもそうだが、光線を放つらしいからな。

どう言った原理かは不明だが、理子は軍師ビームとか言っていた。

そのまんまだが。

「お前がリユパン4世と共にお父様たおを斃たおした男？ 信じ難いわね」

影から出て来たのはブラドの娘——ヒルダか。

周りを見回せば、続々と集まっているな。

顔見知りにはパトラ、カナ、カツエ、メーヤぐらいのものか。

私が一番に警戒をしているヤツは……まだ見えない。

だが既に刻限だ。

私は進行役としての役割を果たさなければならぬ。

「それでは各地の機関・結社・組織の大使達よ。イ・ウー崩壊後の力の再配分、求めるものを奪い、巡り、戦い合う運命にある我々が次に進むために」

始めよう——^{バンデイレ}宣戦会議を。

t S t a g e !!

G o F o r T h e N e x

第9章：運命の天秤と輪（フォーチュン・メッセージ） 79：エニグマ

「——宣戦会議パンデイレーに集いし組織・結社・機関の大使達よ。まずはイ・ウー研鑽派残党ダイオ・シノマドのジャンヌ・ダルクが、敬意を持つて奉迎する」

見回して、全員を一瞥いちべつした後いにそのまま言葉を続ける。

「初顔の者もいるので少しばかり説明しよう。我々は世界の目立たぬ影の中に身を潜め、表に顔を出しながらも各々の武術・知略・技術を秘しながらも伝承してきた。そして——求める物を奪い、巡り、鎬しのぎを削ってきた。だがそれもイ・ウーの隆盛と共に休止されたが——その崩壊と共に、今また、砲火を開こうとしている」

これは定められていた運命だ。

誰もが予期していた事態。

シャーロックが残した言葉の通りに時代は進んでいる。

その中で一人、イ・ウー所属であったナチスの残党である魔女連隊メギメント・ヘクセのカツエーグラツセが口を開く。

「あいつは来てねエのか、ジャンヌ?」

「まだ来てはいない」

「いや、来てねえなら良いんだ。あんまり顔を見たくねえから……」

私の言葉に安堵したように見える彼女はそのまま黙る。

会議の進行中に口を挟むとは、ヤツが余程のトラウマらしい。

元はと言えば、最初にジャックの面倒を見たのはカツエだ。

本人は嫌がってはいたが、シャーロック直々の依頼。

リーダーである以上、無下にも出来まい。

それに本人も最終的には同意した。

シャーロックに言いくるめられた形には見えたがな。

詳しい事は分からないが、半殺しにされて危うく死ぬところだったという。

イ・ウーを出る時期が早まった原因でもあるらしい。

つまるところヤツを育てた責任の一端でもある訳だ。

本人はその事に少しばかり後悔してようだがな。

「——皆さん。あの戦乱の時代に戻らない道はないのですか？」

柔和な笑みを浮かべて前に出た大剣を背負ったシスターが、甘い声で語り掛ける。

母性を感じさせるほどの女性的な体型をしている泣きボクロが特徴的な彼女——

メーヤは、バチカンの聖職者らしく手袋をしたその手に十字架ロザリオを握りしめながら、

「バチカンは必要悪として許容しておりました。高い戦力を有するイ・ウーがどの組織と同盟するかを見守り続け、その加勢を得た敵を恐れながらお互いに手を出せず……結果として平和が実現できたのです。その平和を保ちたいとは思いませんか？」

そのまま話を聞いていたが、それは難しい話だ。

そもそも平和と言つても停戦であり、嵐の前の静けさであつただけ。

いずれはこうなつていたであらう。

「私はバチカンの戦乱を望まぬことを伝えるに、今夜、ここへ参つたのです。平和の体験に学び、我々で平和を保つ努力をし、無益な争いを避ける事は——」

「——できる訳ねエだろ、メーヤ。今までの平和は仮初かりそめな上にただ単に停滞してただけだろうが。小競り合いもあつたしよ……。それに平和を保つ努力なんざやつてなかつたと主に懺悔ざんげしろよ」

魔女を象徴する黒のトンガリ帽子を揺らしながらカツエが挑発する。

「黙りなさいカツエ！ グラツセ。忌まわしい不快害虫。あなたが主の事を語るなど言語道断です」

急変し、その表情と口調を歪ませるメーヤ。

そのまま詰め寄り、カツエの首を掴む。

相変わらずだなこの2人は……

「——はっ！ リュツセルドルフでアタシの使い魔を襲いやがった癖に、平和だの和平だの口先だけか？ 所詮は聖書を盾にした偽善者共なんだろう？」

「黙りなさい！ お前こそ、かの悪魔を生み出した元凶の一人であるのは知っています。その所業……煉獄でも浄化されぬと知りなさい！」

そのまま首を掴まれ、吊り上げられながらもカツエは少しだけ真顔になったかと思うと、ニヤリと笑う。

「……そういや、あいつに何人か殺られてるんだってな？ いい気味だぜ。おまけに待ちに待った戦争だ。こんな絶好のチャンスを逃せるかってんだ！ なあヒルダ！」

剣呑なやり取りのまま、カツエは愉快そうに笑っているが。

「どうだろうな……本心は。」

対して話を振られたブラドの娘のヒルダは、

「そうねえ。私も戦争、大好きよ。いい血が飲み放題になるし」

日傘を回しながら悠然と答える。

「こちらもいつも通りだな。」

ジャックに父親がやられた事に今のところ触れてこないのは気がかりだが。

「ヒルダ……その首を一度落としたのに、あなたも存外にしぶといですね」

「パッ、とカツエを離れたメーヤは鋭い視線をヒルダへと向けた。」

最初の和平だのはどうした……

今のところ場を一番にかき乱してするようにしか見えないぞ。

「——首を落とした程度で竜悴公姫ドラキユリアが死ぬとでも思つて？ 相変わらずバチカンが詰

めが甘いわね。ほほほほつ、お父様が話して下さった何百年前と何も変わらないのね」

手の甲を口元に近付けて、パトラのような高笑いをしながらヒルダは語る。

やはり、気が重い。

この段階で様々な欲望や思惑が交錯しているのを感じる。

ただ一人、遠山だけが話についていけない雰囲気だ。

何も知らずに来させたのは失敗だったか？

だがやはり、この事を言えば来なかつた可能性を考えれば何も言わなくて正解だと思
いたいが。

「和平、と仰おっしゃりましたか——メーヤさん？」

のどかな声でそう切り出した諸葛は、丸眼鏡の奥の細い目をにこやかにさせている。

この状況においても冷静でいるあたり年季があるな。

こう言う交渉、大使と言つた事に慣れてるのがよく分かる。

「それは非現実的と言うものです。元々、我々には長江チンジャンのように長く、黄河ホアンホーのように入
り組んだ因縁や同盟、誼よしみがあるのですから。こうなるのは当然の帰結かと」

言いながら諸葛は風車のプロペラに腰掛けるレキを見上げた。
「そうだ、当然の帰結。」

「——私も、出来れば戦いたくはない」

私はそれだけ言つて一同を見渡す。

「だが我々はそういう運命であり、そういう風に出来ているのだ。既にこれはシャーロックが存命中に決められていたこと。ならば、我々は進まねばならない……裁定をしなければならぬのだ」

腹の探り合いはもういいだろう。

私はそのまま、進行を続ける。

「では、古の作法いにしえのつとに則り、まずは3つの協定を復唱する。86年前の宣戦会議バンデイレーではフランス語だったそうだが、今回は私が日本語に翻訳させて貰った。その事を容赦頂きたい。

第一項、いつ何時、誰が誰に挑戦する事も許される。戦いは決闘に準ずるものとするが、不意打ち、闇討ち、密偵、奇術の使用、侮辱は許される。

第二項、際限なき殺戮さつりくを避けるため、決闘に値せぬ雑兵の戦用を禁ずる。これは第一項より優先される」

つまりは無駄な兵力は出さず、各組織の代表の戦士がそれぞれ闘う。

だが……戦士の数に規定はなく、決闘の回数の規制も無い。

たとえ負傷しても回復すれば戦線に復帰でき、戦闘できる駒がなくなれば敗北だ。

ちなみに捕虜に関しての規定はない。殺害してはならないという決まりもない。

「第三項、戦いは主に『師団』（ディーン）と『眷属』（グレナダ）の双方（ふたかた）の連盟に分かれて行う。この往古（おうこ）の盟名は、歴代の烈士達を敬う故、永代、改めぬものとする。

それぞれの組織がどちらの連盟に属するかはこの場での宣言によって定めるが、秘・無所属も許される。宣言後の鞍替えは禁じないが、その時に応じた相応の扱いに留意されよ。

そのまま連盟の宣言を募（つ）るが……まず、イ・ウー研鑽派残党（ダイオ・ノノマド）を代表して『師団』となる事を宣言させて貰う。バチカンの聖女・メーヤは『師団』。魔女連隊のカツエIIグラッセ、竜悴公姫（ドラキュリア）のヒルダは『眷属』（グレナダ）。よもや鞍替えは無いな?」

「はい。バチカンは元より汚らわしい魔性、その眷属（けんぞく）の者を討つ『師団』。殲滅師団（レキオ・ディーン）の始祖です。ああ神よ……再び剣を取る私をお赦（ゆる）し下さい」

聖職者らしく胸の前で十字を切りながら宣言する。

「ああ、アタシもメーヤと一緒になんてなれるもんかよ。当然、『眷属』（グレナダ）だ」

そう宣言するカツエの向こう側で、

「その通りよ。我々は元より闇の眷属……あなたもそうでしょう?」 玉藻（タマモ）

ヒルダはハイヒールを鳴らして遠山の隣にいる小柄な狐耳の少女に問い掛ける。
 「すまんのう、ヒルダ。儂わしは今回『師団』じゃ。未だに仄聞そくぶんのみじやが……星伽きりすとは基督協
 会と盟約があるらしいでの。じゃからパトラ、おぬしもこつちや来い」

狐耳を動かしながら少女——玉藻は答える。

対してパトラは、

「タマモ。かつて先祖もろもろが教わった諸々の事は、感謝しておるがの。イ・ウーの優等生共には私怨しえんもある。それに、妾わらわも代表として来ておるでな。よつてイ・ウー主戦派イクナテイスは『眷属』
 じゃ」

私を見て、含みのある言葉を放つ。

どちらかと言うとお前は自業自得の部分もあるだろう。

「あー……お主はどうするのぢや、カナ」

そして、カナに対してアヒル口で問い掛ける。

完全にホの字だな。

前から知っていたが。

大鎌を持ってカナは少しばかり目を閉じて——

「まだ”一人”来てないでしょう？ 私は個人でここに来たけど、決めるのはそれからにするわ」

ぞわりとする瞳を開いた。

持っている大鎌より鋭い……底冷えするような冷たさだ。

初めてだぞ、あんなカナを見るのは……

見れば遠山も少しばかり驚いてる。

「そ、そうか……」

隣にいるパトラも怯え気味だ。

「ジャンヌ、リバティ・メイソンは『無所属』だ。しばらく、様子を見させて貰う」

低くよく通る声の男がそう宣言する。

トレンチコートを羽織ったその男は、口元を見る限り美形そうだな。

リバティ・メイソンの中でも若い部類だろうが歴戦の戦士を漂ただよわせる。

「——LOO——」

柱が曲がった風車の傍に居るのは、アメリカから来た代表。

安全の為、武装の必要はあるだろうが、歩行戦車で臨む必要はないだろうに。

そいつはルウーと単語を発しながらも、何を伝えたいのか分からん。

せめて意思疎通の方法ぐらい確立してからここに来て欲しかったぞ。

「LOO——LOO——……LOO……」

「LOO。お前がアメリカから来るのは知っていたが、私はお前をよく知らない。意思

疎通の方法が分からなければ黙秘と見なし、『無所属』とさせて貰うが——良いな？」
その確認にL O Oが少しだけ、しやがむ姿勢を取る。

頷いた感じだ。了承したという事だろう。

「——『眷属』なる——！」

たどたどしい喋りでそう宣言したのは、トラ模様の毛皮を着た十代程の少女。
とは言え、「頭に”角”がある以上はヒルダや玉藻と同じ人外の者だろう。

種族で言えば鬼か。

身長以上の、メーヤの大剣以上の大斧おわおのを振り回し石突を地面に打ち、立てる。
それで少しばかりこの空き地島自体が揺れた。

「——ハビ——『眷属』！」

もう一度、鬼の少女はそう宣言した。

さて、次はお前だぞ遠山。

「遠山……バスカービルはどちらに付く？」

「……何で、俺に振るんだよ……ジャンヌ」

この場の雰囲気呑まれ、周りを見る事ぐらいしか出来なかつたようだな。

困惑してるのが分かる。

「お前はシャーロックを倒した張本人だろう」

「い、いや。あれはどつちかつーと流れで……アリアを助けに行ったらシャーロックがいたっていうか……」

「まだ分からないのか？ この宣戦会議パンデイールにはリーダーの連盟宣言が必要だ。最近、『バスカービル』という組織が出来た訳だが……その代表としてどうするつもりなのか聞いている」

「どうするつもりって、お前……あれは武偵の学校のチームであつて組織とか大層なものじゃない。それに俺はリーダーって言つても、名前を貸してるだけの——」

その言葉に私は流石に苛立ちを覚えた。

癪しゃくだが、ヤツの言葉に印象に残っている言葉がある。

無知は罪だが知ろうとしない事はさらに罪深いと。

イ・ウーにいた時に説教交じりに言われた事だが——

この会議の内容を教えなかったのは私の考えだ。

しかし、遠山……お前は何も”知ろう”としてはいない！

——ガン！

遠山のいる方向の地面に向かって片手でデュランダルを振り下ろし、地面を穿うがつ。

遠山は私の雰囲気きずなに足を引いた。

「現実を見る。貴様は、我々が口火を切る原因を作つた。成り行きだろうがその事実は

既に変えられない。その責任を取れ」

「お、いッ……」

私の言葉、そして周りの視線に押し負けたように遠山は言葉を詰まらせる。

そんな私と遠山に対して、傘を回しながらヒルダが声を掛けてきた。

「新人は皆、そう無様に慌てるのよねえ。あんまりそうイジメちゃかわいそうよ、ジャンヌ。どちらに付くかなんて分かりきった話よ。遠山 キンジ、お前達は『師団』……それしかないわ。私の父であり『眷属』の蒙古であるブラドお父様の仇なのだから」

ツリ目を不快とばかりにさらに吊り上げながら、高圧的な息を吐くヒルダ。

遠山はそちらに視線をやる。

「それでは、ウルスが『師団』に付く事を代理宣言させてもらいます」

バスタービルの一員でもあり、ウルスの代表でもあるレキが宣言した。

「私個人は『バスタービル』の一員ですが、同じ『師団』になるのですから問題はないでしょう。私が大使になる事は既にウルスで許諾されています」

その言葉にレキを見ていた諸葛は丸眼鏡と視線を向け、不敵に笑った。

「ならば藍髯の大使、諸葛静幻が宣言しましょう。私達は『眷属』。ウルスの蕾姫とその一行には先日ビジネスを阻害された借りがありますからね。残りは……貴方だけです」

諸葛の言葉に全員が目を向けたのは、顔にペイントをした少年。

道化師のような派手な衣装に、何かの音楽をイヤホンで聴きながらガムを噛んでいる。

礼節の欠片かけらもないな。

だが話は聞こえていたのか、

「チツ、美しくねえな……」

携帯音楽プレーヤーをイヤホンごと足元に、言葉と共に吐き捨てるように捨てた。

それに少しばかり私は、剣を杖のように立てながら眉を寄せる。

「どうやら、お前は何か納得していないようだなGⅢジーサード」

「ああ？ 当たり前だ、強えヤツが集まるかと思つて来てみりや。結局は使いつ走りの集いだった訳かよ。どいつもこいつも取るに足らねエ。とんだムダ足だったぜ。何よりも、だ……ジャック・ザ・リッパ。アイツはどこにいる？」

他は興味ないとばかりにそれだけを聞いてくる。

「分からん。参加する意思があるのは確か……だが、ここに来るかどうかは不明だ」

「なら、ここに来た意味はねエな。それと、今度は一番強いのを連れて来い。それを全殺しにしてやる」

私がそう答えると、GⅢはそれだけ言った直後、彼の体からノイズが聞こえてきた。

その姿が、段々と霧と一緒に消えて行く。
光学迷彩。

あまりヤツの事はよく分からないが、随分な先端技術の装備を持っているらしい。
完全に、気配すらも無くなった。

「——下賤げせんな男。吠える負け犬のようだわ。殺す気すらも失せる」
ヒルダはため息交じりに言葉を吐く。

「でも、これで……この場にいる全員の表明は済んだ。そうよね、ジャンヌ？」
「……その通りだ。最後に——」

——お待ち下さい。

私の声を遮る言葉が、聞こえた。

この場にいる誰のものでもない声が。

「~~~~~♪」

童謡である” ロンドン橋が落ちた ”のメロディを口ずさみながら誰かが歩いてくる。
霧の向こうから。

来たのか……やはり。

周りにいる者がその方向に視線を向ける。

好奇、恐怖、怨恨えんこん、敵意。

そんな視線が混じる中で、霧の向こうの影がライトによって鮮明になる。

19世紀を思わせる、いつも通りの黒のタキシード。

ジャックが、姿を現した。

「やあ、どうも……紳士・淑女の皆様方。遅れてすまないね」

気さくそうな笑みを浮かべながら彼は自然に皆の中央で足を止めた。

そのままシルクハットを取ると、紳士的にお辞儀をして謝罪をする。

「改めて、謝罪を。時間に遅れるのは紳士的ではないが……少しばかり熱烈なファンに

追いかけて回されていてね。タイミングを見ていたのだよ」

熱烈なファン——さっきのGⅢのことか？

どうも、ジャックを狙っているような話をしていたが……こんなのを追い掛けて何になると言うのだ。

「まあ、それはそうと宣戦会議バンディエールの連盟の表明だったね。私個人としては……『師団』と言

いたいのだが——」

「あなたが、『師団』？ いつもの気まぐれにしては随分な冗談ね」

「ヒルダ、その方が都合が良いんじゃないのかね？ 君の父親を売ったようなものなの

だから」

「別に、どうもしないわ。そこは我が父でありながらも愚かだったと認めましょう」

あのヒルダがそう言うとはな……しかし、ジャックが『師団』？

敵に回したくはないが、味方でも安心はできない。

好奇心で動いてるヤツなどに信用などある訳がない。

「個人としては、と言いましたが……それではまるで”個人”で来た訳ではないと、聞こえますが？ 貴方はイ・ウー以外に所属している組織はない、と記憶しています」

諸葛が丸眼鏡を少し指で上げて、疑問を投げた。

そうだ。私もそんなのは知らない。

シャーロック以外に誰か上にいる人間などいない筈だ……

何だ、この胸騒ぎは。

「ええ、そうでしょうね……だからここに来たのです。”我々”がどうするのかを——」
「我々？ 我々だと？ 諸葛の言う通りお前は、イ・ウー以外に所属していた組織はない

筈だ！」

思わず、私は声を出す。

聞いていない。

ジャックを御せる人間はシャーロック以外にいない。

それ以上の人間がいるなど……

「思い込みが激しいですね、ジャンヌ・ダルク。シャーロック以外に何故、私の上に誰も

いないと思ったのですか？」

ヤツは柔和な笑みを浮かべながら寒気が走る言葉を紡ぎだした。

そんな、バカな……

「さて、ではお教えしましょう。私が所属する組織の名は『エニグマ』——素晴らしいでしょう？」

エニグマ……その言葉にカツエが反応する。

エニグマはナチス・ドイツが用いていたローター式暗号機のことだ。

だからこそ、言葉の意味も知っているだろう。

その言葉の意味は——『謎』だ。

「エニグマ……だと？」

「そう、まさに謎の組織！ 構成員も！ 目的も！ 場所も！ 何もかもが謎に包まれている！！」探偵”にとつては素晴らしく挑み甲斐がいのある組織だろう？」

私の驚きの言葉に満足したように、ヤツはワクワクしたような子供じみた感じで答える。

そして、探偵のところまで遠山を見た。

「それと、我が盟友であるシャーロック・ホームズを打倒した武装”探偵”である君には是非とも挑戦して貰いたい」

「ふざけるな、そんなのは丁重に断る」

遠山の言葉にジャックは少し、顎に手をやって何かを思い返している。

「武偵が謎を解き明かさなかつたら意味がない」、と言ったのはどこの誰だったかね？」

「——!？」

その言葉に遠山は目を見開いた。

何だ。今の言葉に何を驚いている……？

「お前……」

「はっはっは、いや失礼。いい反応をありがとう。それと、もう一つ良い事を教えてあげよう」

愉快そうに言いながらジャックはシルクハットを被る。

「今後もホームズの4世に味方をし続ければ——」

……残酷な何かが、

——君の元。パートナーは必ず死ぬ。

今、解き放たれた。

80：灯台下暗し

——俺の元パートナーが死ぬ。

今、俺の目の前にいる殺人鬼は残酷な事を愉快そうに告げた。

「お前……霧を殺すつもりなのか?！」

足を踏み出して、俺は叫ばざるを得ない。

そんな事を聞いて黙ってはいられなかった。

あいつに……まだ俺は何も返しちやいないんだ。

貸し借り以上に大切な何かを。

俺の言葉を聞いて、またしても愉快そうにジャックは微笑む。

「いいや、殺すのは私じゃない。君の今後の”選択”によつて彼女は死ぬんだよ」

俺の、選択……?」

一体どう言う意味だ?

謎ばかりが増えていく。

俺がどう言う意味なのか問おうとすると、兄さん——カナが俺の前へゆつくりと歩み寄り、守るように、あるいは引き留めるように大鎌を持っていない腕を水平に上げた。

「キンジ……殺人鬼の言葉に耳を傾けてはダメよ。呑まれるわ」

その言葉に俺は、ゾワリとした寒気を覚える。

背中越しでも分かる。

カナから殺気が出ているのが。

それは、いつしかアリアがそこにいるパトラに撃たれ、追おうとした俺を引き留めた時に対峙した雰囲気とは違う。

怒りからくる殺気じゃない。

ただ、純粹に殺そうとしている。

本人もそれが分かっているながらも、笑みを崩さずにいる。

「素晴らしい家族愛だ。感動的だよ」

「さっさと要件を終わらして貰えるかしら？ キンジの教育に悪いわ」

「ああ、そう言えば陣営の選択だったね。そうだね……我々は『無所属』、とさせて貰おうか」

「そう。なら、ここで仕留めても問題はないわね」

カナが大鎌をそのまま構えだす。

お、おい……始める気なのか？

「どの道、味方でも敵でも仕留めるつもりだろう？ そもそも、まだ”始まってはいない

” のだから落ち着きたまえ」

言いながらジャックはジャンヌの方を見た。

その言葉に不本意そうな表情を浮かべながらもジャンヌは進行を続ける。

「……最後に、この闘争は……宣戦会議バンデイレの地域を元に名付ける慣習に従い、

『Far East Warfare 極東戦役』——FEWと呼ぶ事と定める。各位の参加に感謝と、武運の祈りを

……」

「始めていいのね？」

「ヒルダ、今夜はここで戦わないと事前には言っていないなかったか？」

「ええ、そうね……高度も天気もイマイチだし、いい舞台ではないわね。でも、気が変

わったの。それに……血を見なかつた宣戦会議バンデイレも過去になかつたというし、ねえ……

？」

キバを見せて笑うヒルダのその言葉の終わりに、

「さあ、お遊戯の始まりだ」

殺人鬼はただ愉しそうに笑みを浮かべた。

視線が俺に集まつてるのが分かる。

な、何だよ……何でみんなして俺を見てるんだ？

「何をしているのだね？ もう、” 始まつた ” のだよ」

ジャックが言いながら俺に目を向けている。

——始まった——

その言葉の意味を理解しかけた瞬間、カナがジャックに向けて飛び出した。

「いやはや、積極的なアプローチは紳士冥利みよりに尽きるが、少々肉食の過ぎないかね？」
迫り来るカナに対して軽口を言いながら、ヤツの周りだけ霧が濃くなつていく。

完全に霧で姿が消えたジャック。カナもその先に飛び込んだ。

だが——

すう、と俺のすぐ近くに、

「さて、遠山 キンジ」

さつきまで向こうにいたジャックが俺の近くに現れた。

相変わらず気配なく現れやがる……！

顔だけをそちらに向けるが、ここで銃を抜いたところで勝てるビジョンが思い浮かばない。

シャーロックの時は試された意味合いがあつたが、コイツは違う。

何もかもが不明だ、行動の意図も、俺を気に入つた動機も、その実力も。

「人生とは選択肢の連続だ。どのような選択をしても結果が出てしまえば、過去のものとなる。後戻りは出来ないのだよ」

何を言ってるんだ、コイツは。

その言葉にどんな意味がある？

「まあ、つまりは……だ。何を選ぶかは君の自由、だが何を犠牲にして結果を得るのかはこれからの君の行動次第ということだよ。目の前にある“問題の本質”を知ろうとしなければ——いや、別に知らなくても私は楽しめるのだから問題ないのだがね」

意味が分からない。

何を犠牲にして結果を得る？ 目の前にある問題の本質？

謎は深まるばかりだ……

「さて、私だけに気を取られている場合ではないぞ」

言いながらジャケットが視線を向けた方向を見ると、ぞ……ぞぞ、とヒルダが足元の影の中に沈んでいく光景が見えた。

な、なんて非現実的な光景。

事態の急変と得体の知れなさに身動きが取れない。

だが……ここで何もしなかったら間違いなくすぐにやられる。

それだけは分かる。

俺はすぐさまベレッタを抜く、がどちらに銃を向けていいかも分からない。

ヒルダに向けようとしていたが、ヤツは既に影と一体化してしまった。

向けるべき対象が、いない。

それから影は俺に向かつて伸びてくる。

「遠山！　今すぐ逃げろ！」

ジャンヌが影に立ち向かうように俺の目の前に出たかと思うと、デュランダルを投擲ジャベリン槍のように投げた。

そのまま地面と共に影に突き刺さる。

すると、影の動きが鈍くなった。

どうやら、地面と一緒に影を縫い付けたような感じだ……だがそれも完全に動きを止めた訳ではないようだ。まだ、影は蠢うごめいている。

ジャンヌに逃げろと言われたが、こっちはどつちに逃げていいかも分からない。

助けを求めるように不意に隣にいた狐耳の少女・玉藻に目を向けると、そいつはどこか別の方向を見ていた。

視線を上げて見れば、あのハビとか言うあの大斧を担いだ少女も同じ方向を見ている。

学園島の方を……

他の連中も何かに気付いたのか、次々とそちらの方に視線を向けた。

何か来るのか？

そう思って、いると――

どるるるるる！

そんなエンジン音が霧の向こう側から聞こえてくる。

それは、俺がここに来る際に使った小型ボートと同じエンジン音。

ごつん！ と、ボートが接舷せっげんする音に続いて――ぱし！ と、空き地島の南端に”ちっこい手”が掴まるのが見えた。

あ、あれは……！

「SSRに網を張らせておいて正解だったわ！ あたしの目の届くところに出てくる勇氣だけは認めてあげる！ そこにいるんでしょ!? パトラ！ ヒルダ！」

そのまま、んしょ、とよじ登ってきたセーラー服のツインテール。

アリアじゃねえか……！

俺がそれを見た瞬間、

「ふ、フハハハハハは！ 随分と愉快的な客が出てきたものだ！」

ジャックが頭を抱えて豪快に笑い始めた。

マズい……コイツ、何をするか分からないぞ。

直感的に、ここにアリアを来させてはダメだと俺は理解した。

「その声は、ジャック!? あんたもいるのね！」

「アリア、こつちに来るな！」

今にも突撃してきそう雰囲気、俺は声を出して、アリアの目の前へと行く。

「キンジ、あんたどうしてここに……?!」

「それを言ってる暇はない！ 今すぐここから逃げるぞ！」

目を見開いているアリアに向かって俺はすぐさまそう言う。

その手をすぐさま引いて行こうと思つた矢先、

「そう慌てる事はない。招かれざる客、だが今回は歓迎されるだろう。なので、ゆっくりしていきたまえ」

ジャックがそう言うと同時に霧が少し薄くなつて、他の怪人達がこちらを見ているのが見え始める。

全貌ぜんぼうが見え始めたアリアは再びその赤紫カメリアの瞳を驚きで満たした。

両腕を軽く広げて、演出家のような感じでヤツは怪人達に語り掛けた。

「さて、”緋弾のアリア”のお出ました。今回のこの戦役のある意味重要人物である彼女……しかし、彼女は何も理解していない！ これ程に愉快な見世物もなかなかにお目にはかかれぬ事だろう」

なぜなら、とジャックは言葉を区切る。

「自分が飛び込んだ先が”深淵”の一部だとは夢にも思っていないのだからね」

緋弾のアリア、そのキーワードを出しながらもヤツは再びこちらへと向き直る。

「ふん、深淵が何よ！　ここであんたを捕らえれば、それこそ愉快的な見世物になるのはあんたの方よ！」

「ははは、威勢は相変わらずいいが……」不可能だ、そんな事は。いい加減に学習と
言うものを覚えたらどうだね？　精神論でどうにかなるほど世の中は甘くないのだよ」

小馬鹿にした感じでジャックはアリアを挑発する。

「相変わらず上から目線ね……！」

「それはそうだろう。シャーロックが話してるかどうかは知らないが……私はある意味、君の先輩みたいなものだ」

その言葉に思い当たる事はある。

アリアを助けにイ・ウーへと飛び込み、シャーロックと対峙した時にいくつか気になる事を言っていた。

——これからジャック君は君の姉弟子にあたる事になるだろう。

その中でジャックの言うような事を確かにシャーロックは話していた。

どういう意味かは分からないがな。

「お主……さては……」

向こうで玉藻が何かに気付いた感じで言葉を漏らした。

だが、それに関係なくジャックは話し続ける。

「私が今語った言葉の裏側、その謎、それを推理してみたまえ。そもそも私が本物のジャックであり、今までの犯行を立証する証拠はないのだがね」

相変わらず掴みどころのないヤツだ。

それからヤツはくるりと背中を向けた。

立ち去るつもりか？

「灯台下暗し、” 足元” には気を付けたまえ」

そんな忠告めいた言葉を残して俺達から離れ、再び霧の中に消えた。

「待ちなさい！」

アリアの言葉に対する反応はなく、その言葉は霧に吞まれた。

そして、俺達は気付いてない。

ヤツの忠告通り” 足元” から何か近付いている事に――

◆

――エニグマ。

急造で思いついた組織名としては我ながらなかなか良いと思う。

これからが楽しみだね

実際エニグマは組織なんて大層なものじゃない。

傍^{はた}から見ればただの殺人サークルみたいなものだし。

エニグマに所属する者は等しく人でなしでありながら、人を愛してる。

それだけが共通事項。

ジャンヌには私より上がいるみたいない言い方をしたけど……この組織には当てはまらない。

上とか下とか関係なく、ただの似た者同士の集まり。

ライヘンバツハであるならば話は別だけど。

以前に電話したR・I・Pを最初のメンバーとしたのは、私の弟子以上に相応^{ふさわ}しいと思つたから。

うん、別に弟子が相応しくない訳じゃないんだけどね。

弟子以上に良いと思つた、ただそれだけ。

だから、ワイズもこっちに入ってもらおう。

メンバーは随時募集中。

とまあ、昨日の出来事を思い返すのはここまで。

「ガキども！ それじゃ文化祭でやる『変装食堂』^{リストランテ・マスケ}の衣装を決めるぞッ！」

ガアン！ と、体育館の天井に向かって威嚇射撃をしながら蘭豹が吠える。

当然ながら周りにいる生徒は静まり、話を聞く態勢に移行するしかない。

この天井、その内落ちてこないよね？

毎回生徒黙らせるのに蘭豹が上に撃つから鉄骨に穴が結構あるんだけど……

まあ、近々あの人の給料から修繕費は引かれることだろう。

『変装食堂』——簡単に言えばコスプレ食堂だね。

それが10月の末にある。

だが——武偵である以上ただのコスプレ食堂ではない。

これは演技力というかその役にどれだけ成れるかが重要。

潜入捜査技術を一般人にアピールするためのものなんだよね。

私は去年は不在だったから手伝いすらしてないけど。

ふむ……変装はそこその完成度でいいかな？

ここで諜報科顔負けの変装技術を披露する訳にはいかないし。

いつも通り楽しめればいいや。

「それじゃあ各チームごと待機い——ごほつごほ！」

尋問科の綴が煙草でむせながら宣言する。

A・B・Cの3クラス合同のホームルームなのでバスカービルのメンバーは自然と集

まる。

「衣装を決めるのにクジ、クジねえ……まあ私は何でもいいんだけどね」

「そんなこと言つてめちやくちや面倒な職業だつたらどうするんだよ」
「何とかなる」

「お前のその意味の分からない自信はどこから来るんだ……」

しいて言うなら裏経験値的なものがあるから、私には。

いつものキンジとの軽いやり取り。

そんなキンジを見て、昨日の今日で切り替えが早い事に感心するよ。

私が立ち去つたあと、神崎の様子を見るに何かひと悶着あつただらうね。

そして微妙にだけど色金の力が漏れてる感じがする。

さては……色金と心が繋がらない安全装置である殻金を外されでもした？

ちなみにその殻金は私の場合ないんだけど。

なかつたらお父さん曰く、ヤバイ事になるらしい。

でも、そのあとで「ジル君なら大丈夫だよ」と笑顔で言われた。

理由は不明。

そもそも話してくれないし、知つても言わない人だから。

「実際、キーちゃんなら何とかかなりそうだからね。謎の説得力」

「困つたら遠慮なく頼つてもいいよ。貸しにするから」

「なら俺は遠慮する」

理子の言葉に私が答えると、キンジは即答。

そのままチラリとキンジが私を見る。

視線には不安の色。

目は、表情以上に雄弁に語ってくるものだよ。

あの言葉の意味、考えてるね。

—— 神崎に味方をし続ければ私が死ぬ。

それは本当にキンジの選択次第。

神崎に味方する、それは私の家族と敵対する事を意味してるからね。

何を犠牲にするかは—— その時になれば分かる。

そう考えてる間にキンジは視線を戻して、何故かレキのヘッドフォンを取って聞こうとしていた。

—— と、思いきや音量がデカくなって聞いていられなかったのかすぐさまヘッドフォンを耳元から離れた。

隣にはさり気なくすり寄ってる白雪。

そのまま待っていると、近くに手伝いの1年が箱を持ってきた。

って、

「風魔ちゃん、手伝い？」

「その通りでござる。ちなみにこの箱は男性用なので白野様は引かれないうように」
「つて事で、キンジ……運命のクジ引きが来たよ」

風魔の戦兄アミコであるキンジに向けて、そう視線を送る。

「ささ師匠、引いて下され」

風魔の“師匠”の部分でキンジは眉を寄せながらもクジを引く。

あんまりそう言う人に変な目で見られるようなフレーズは好きじゃないからね、キンジ。

箱に手を入れて引き上げた紙には、どれどれ……『神主』ね。

「いいんじゃない？ 信仰があれば神の恩恵で運は少しよくなるかもよ」

「作法が出来てなかったら祈りが届く前に召されそうだけどな」

キンジの言う祈りは神じゃなくて教師陣に向けるものだろうけどね。

まあ、半端な変装だと教師陣に色々とやられる。

本当の敵が身内なのはよくあること。

それはこのチーム内でも言える——誰とは言わないけど。

「チェンジだ」

そう言つてそのままキンジはもう一度箱に手を入れる。

「1枚目は無効。しかし、2枚目の衣装は強制でござる」

それは知つてることだろう、なのでキンジの顔も少し緊張が走つてゐる。さて、次は――

『警察官（警視庁・巡查）』ね。

今も公僕みたいなものでしょうに。

安堵の息を吐いてキンジはその場に座り込んだ。

そして、どうやらクジ引きはこの箱だけではないみたい。

この体育館のあちこちから他の生徒の悲鳴が聞こえてくる。

「師匠。ジャンヌ殿は本日欠席でござるが、本人がクジ引きの代理人として師匠を指名してござるよ。忍」

と、風魔が女性用のクジの箱を差し出した。

ジャンヌか……あのあとどうしたんだろう。

戻つてきてないって事はおそらく、『眷属』^{グレンダ}の連中を追い掛けてるんだろう。

キンジはそのままクジを引いたかと思うと、そのまま中身を確認して終わらせた。人のだからって適当にしたね。

「では、お次は白野殿」

「それじゃあ本日の運勢は……つと」

風魔に言われて引いてみる。

クジの中身は——『メイド』。

メイドね。

一瞬チェンジしようかなと思ったけど——ピコン、とばかりにそこで私はいらん事を思いついた。

それから、キンジが中身を見ようとしたので紙を手の中に隠す。

「変な職業だったのか？」

「いいや、別に……ただ単に内緒。すぐにお披露目する事になるだろうし、今じゃなくても良いでしょ？」

私はウインクしながらそれだけキンジに言つて、風魔に決定の意味も込めてそのまま紙を見せる。

一応、この1年達が誰が何をやるかも確認してるみたいだしね。

「私は先に準備してるよ、楽しみはあとにとっておきたいし。ふふ……」
それだけ伝えて、意味ありげに微笑んでその場を去る。

さあ、キンジ……首を洗って待っててね。

そんな訳であれから日が経って完成したメイド服。

エプロンドレスが主体のスタンダードな感じ。

理子みたいにフリルいっぱいとかアレンジはしてない。

あと、キンジ的にミニスカートとかすぐに見ないようにするだろうし、ロングスカートタイプにしてみた。

変装道具で衣装も用意しないといけないから私の秘密の衣装部屋が実はある。

メイド服は今まで着たことがないからあるか心配だったけど、組み合わせで何とかなったね。

思ったよりも早めに完成しちゃった。

×切の前日どころかその2日前だよ。

ちなみに衣装は自前。

いや、そうするように決められてるんだけどね。

潜入任務となれば衣装も装備品みたいなものだし。

装備品は自ら揃^{そろ}えるのが基本。

本来なら翌日に『仕上げ会』があつて、生徒達で集まって徹夜で衣装を仕上げて相互に完成度を確認する機会がある。

それより前に完成する人は少ないだろう。

つまりは……授業が終わって他の人達は衣装の準備で行動はバラバラ。

キンジの周りにいる可能性は低い。

なので計画を実行しよう。

人知れずキンジの部屋へ直行。

キンジの寮の玄関に辿り着き、インターホンをピンポイント。

すぐに玄関が開けられると同時に、

「お疲れ様です、ご主人様」

なんて言つてクール系のメイドを演じてみる。

「……霧か？」

「なんだ、少しは迷うと思つたのに」

開口一番にキンジにそう言われて、演技は早くも終了。

そのまま玄関を上がり、廊下へ。

「もう完成したのかよ……仕事早すぎだろ」

キンジは私の姿を見て、感心してるような呆れてるような、どっちともとれるような言い方をする。

「私にはお金と余裕があるからね」

「だろうな……で？　なんで俺のところに来たんだよ、誰かに見られたらどうするんだ」

「別に、最初にキンジに見せたかっただけ。それに見られるヘマはしないよ。それより、どう？　ミニスカとかじゃない本格メイド」

と いいながら 衣装を見せるように フリフリすると、キンジは 少しでも 顔を赤くする。

なに？ ロングでも ダメなの？

「お前な……そういう事は あんまり 言うなよ」

つて 事ではないらしい。

私の言葉の方に 照れてる っぽいね。

「勘違いして 貰って 間違い 起きちゃっても 構わないよ。メイドさんと イケない 関係になる 警察官（予定）。うーん、学校の新聞の 一面は 間違いなし」

「間違いなんて 起きて たまるかよ。社会的に 殺す気か お前は……」

「そう ならば 拾って あげるよ、首に ヒモでも つけて」

「お前の 冗談は 時折 シャレに ならん。肝心の 役になり きる 演技の方は どうなんだよ。お前の 性格上、無駄に 凝る だろうけど」

言いながら キンジは 先に リビングの方へと 向かい、私の 横を通り 過ぎる。

「では、証拠として お世話 させて 頂きます。ご主人様」

「いらん と言って 言っても 居座る だろ、お前」

振り返らずに そのまま 言葉だけ 返して キンジは 好きに しろとばかりに、それ以上は何も 言わない。

「よくお分かりですね。もちろん、ちゃんと仕事はさせていただきます」

なんて言いながら私はキンジのいるリビングに行く。

キンジの部屋は本人以外使用してる人がいないため、今ではバスカービルメンバーの女子達にほとんど占領されてる状態。

私物もそれなりに置かれている。

それは私も例外じゃないけど、それでも他の3人（神崎・白雪・理子）よりは少ない。私愛用のティーセットを取り出して取りあえず紅茶でも作る。

菓子は少しだけ凝った物にしよう、ビスケットのクラッカーにスライスしたハム、玉ねぎ、キュウリ、チーズを乗せて完成。

「どうぞ、ご主人様」

「……むず痒いからやめてくれ、充分に役をこなしてるのは分かったから」

私が言いながらソファアに座ってたキンジのテーブルの前に置くと、困ったような表情をする。

そのまま見ていたい気もするけど、あんまりやり過ぎると追い出されかねないからここで一旦やめてキンジの隣に座る。

「もうちよつと楽しもうよ。メイドがいるなんて滅多な体験出来ないんだから」

「何をどう、楽しめと……」

「うーん……色々触ってみる」

「却下に決まってるんだろ。服なんて触ってどうするんだ」

「布越しの感触でも味わってみる？」

その言葉を出した瞬間、少しだけキンジは私から視線を逸らした。

それから何かに気付いて、

「お前……俺で遊んでるだろ」

ジト目を返してきた。

「何を今更、もうそろそろ慣れてきたし分かってきたでしょ？」

「悲しい事にな」

言いながらキンジはクラッカーを一つまみ。

「……どう？」

いや、別に味に関しては心配してないけど何となく気になる。

だけどキンジは感想は言わずに、

「言わなくても分かるだろ？」

それだけ言ってきた。

「言葉に出してくれなきゃ伝わらない事もあるんだよ」

「……美味いぞ、この紅茶もな」

「それは良かった」

私がそれだけ答えると流れる沈黙。

久々の2人の時間。

普段はもう少し騒がしいから、何とも思わないんだけど——この雰囲気は少しだけ変な感じがする。

「あー……何か見るか？」

「もう少しゆつくりしたいから、このままで」

この雰囲気になんか耐えかねてキンジは提案するけど、却下した。

変だけど、嫌いではない。

もう少しこの感触を、雰囲気を、味わっていたい。

そう思った。

私の予定ではもっとキンジを弄^{いじ}る予定だったんだけど、今はどうでもよく思える。

キンジにとって今の状況は結構困^わってるだろうけど。

そのままコテン、と私は首をキンジの肩に預けてみたり。

すると、流石にキンジが唸り始めた。

「あー、霧さん？」

「却下」

「まだ何も言つてねえ……」

「どうせ離れてくれ、とか言うつもりだったでしょ？ 別に変な事はしてないんだから

……私を拒むの？」

「……………はあ」

その言い方はズルいだろとばかりにキンジは息を吐いた。

諦めたみたいだね。

「時に、また何か悩んでるんじゃない？」

「何でそう思う？」

「いつもならもうちよつと口数が多いからね」

私の言葉にキンジは一つ息を吐いた。

「悩んでると言えば悩んでる。だが、何をどうしていいのか分からないってだけだ」

「根本的な問題が具体的に分からないって事でいいの？」

「そんなところだな……謎ばかりが深まる。ある犯罪者に目はつけられるわ、厄介事に巻き込まれまくるわ。おまけに——」

そこで言いかけてキンジは言葉を止めた。

それから私を見る。

その言葉の続きはきつと、私の生死についてだろう。

「ともかく、問題はありますが今はアリアの裁判だな……それで一段落だろう」

「そうだね。久々にゆっくりしたし、私もそろそろ帰るよ」

ソファーから立ち上がって軽くスカートの乱れを直す。

「いつもいきなり来て、いきなり帰るよな」

「退屈なんだよ、こう見えて。たまにはキンジの方から私のところに来てよ」

レキの部屋に出入りしてたんだから問題ないでしょ。

「女子寮に行くのは勘弁だ」

「レキさんの部屋には出入りしてたのに……」

「あれは、お前——」

「冗談だよ、それじゃあ」

それだけ笑顔で言っただけ私は部屋を出る。

そのまま玄関を出て、扉を閉めてからうーんと伸びをする。

久々に水入らずでキンジと2人でゆっくりできたので、それなりに満足。

2人で任務クエストしてた時みたいな刺激が欲しいけど。

と、そこで体に違和感。

微弱だけど色金コソソナが、反応してる。

——『共鳴現象』。

猴コウではない、間違いなく。

あれは藍幫ランバンの監視下にある以上、彼らの傍から離れられないはずだ。だつたら——あのホームズの4世しかいない。

特訓でも始めたのか……私からしてみれば余計な事を。

「あ——」

キイイインと、少しだけ耳鳴りのような音がする。

ちよつとこれは、マズい……かもね。

つて言うか気のせいじゃなく、強くなつてる。

「う、く……」

勘弁してよ、色金の発現を抑えるのも簡単じゃないのに……！

パソコンの強制シャットダウンと同じ。

何らかの負荷が掛かる。

それを繰り返せばどこかで異常が出るに決まつてる。

軽く、人生の中で一番のピンチかもしれない。

熱い……！

冗談考える暇も、ない。

「あッ……はっ……くう……！」

壁に手をつけて膝をつかさざるを得ない。

ああ、もう………！

一瞬だけ力を込めて抑え込む。

無事に何とかそれで色金の発現は抑え込めたけど……

おかげで変な汗が出てきた。

高揚感が……そのまま湧き上がってくる。

本当に、勘弁してよ。

最近では携帯するようになってしまった精神安定剤のケースを出して、首の静脈に注射器を刺す。

「はあ………おいたがすぎると近いうちに解体すよ、ほんとに」

安定剤の副作用による虚脱感に包まれながらも使った物を回収して、そのままゆっくり立ち上がって私の部屋を目指す。

神崎が色金の力を制御出来るのも時間の問題かな。

偶然かもしれないけど、いきなり私の方の色金に接続しようとしたた。

お父さんの見込んだ後継者なんだから、センスがあるんだろうけど。

ここで発揮されるのは困る。

真剣に今後どうするか考えておかないとね。

灯台下暗し。

危険なお互い様かな……

81 : 過去のしがらみ

翌日の早朝——まず最初に問題が発生した。

調子が悪い。

精神安定剤なんて多用してるからどっかで不調になると思ってたけど。

どうしたものかな……

別に授業には出れるし、熱もなく、あるのは倦怠感だけ。

文化祭の準備の関係で授業は短縮授業だから……まあ、まだ何とかなる。

それに他の人達の役職も見えてないからね。

うん、大丈夫だと思いたいなあ……

正直な話、次に同じ事をされたら抑えられる自信がないし、一回ガス抜きしないと精神衛生上よろしくない。

また探さないといけないな

計画的じゃなくても見つからない自信はあるけど、段取りは大事。

楽しむ時間は必要だからね。

と、そんな訳でお楽しみ時間の時間である『仕上げ会』がやってきた。午後9時過ぎ。

名前の通り、仕上げに掛かる日なんだけど。

「お前、完成してるのに参加する意味あるのか？」

廊下で合流したキンジは至極当然な事を聞いてきた。

「他の面子の衣装も見てないから、見ておきたいからね。あと冷やかし」

「お前の場合、冷やかしの方がメインだろ」

「もちろん」

私の言葉にキンジは相変わらずだなどばかりに視線をやつて、それから教室へと向かう。

キンジが手に持つてる紙袋の中身は衣装なんだろう。

どうせ、特殊捜査研究科^Rの人達から購入したんだろうね、きつと。

一応は非推奨行為とはなってるけど、黙認されてる形だし。

まあ、自前で衣装を用意なんて職業によつては結構難易度高いから、仕方のないことなんだけど。

ちなみに私は既に完成してるので衣装を着用した状態でここにいる。

そう言えば、教室では最低1時間は役作りのために演技しないとイケないから……キ

ンジの時のクール系のメイドでいこう。

そのままキンジと一緒に教室に入ると、既に始まつてるらしく5、6チームぐらい教室で作業をしていた。

机は教室の後ろに並べられ、誰かが持ち込んだスピーカーから音楽が流れている。

何人か衣装が完成してるのもいるらしい。

着替えてお互いに完成度を披露ひろうしてるあたり、仮装パーティーでもやつてるみたいだよ。

教室の壁際にある衝立ついたては、おそらく着替えゾーンだろうけど……普通に更衣室で着替えだよ……もしくは他の教室。

呆れながらも他に何かないか観察していると、白雪とレキとお供のオオカミであるハイマキが一角にいるのが見えた。

それはキンジも気付いてるみたいだけど、向こうの衝立が気になるみたいでそつちの方へ行こうとする。

黙ってた方が面白いんだろうけど、ここはメイドらしくフオローしてあげよう。

「ご主人様、そちらはおそらく着替え場所ですよ」

その言葉にキンジが勢いよくこつちに戻ってきた。

「あぶねえ……助かったぞ、霧」

「いえ、ダメな主人をフォローするのもメイドの役目。別に覗きが趣味であるのなら私は見て見ぬふりをしますのでご安心を」

「俺にそんな趣味はないからな」

「ご主人様がそう言われるのであれば……」

「やめろよ、その含みのある言い方」

とまあ、演技に入りながらも軽口を叩きながら白雪達のところへ行く。

「あつ、キンちゃん。衣装、どのくらい出来ましたか？」

気付いた白雪がいそいそと隣を片付けて、キンジが座るスペースをさり気なく確保しながらも聞く。

黒縁のメガネを掛けて、ブラウスにタイトなスカートにこのいつもと違う丁寧な口調。

配役は『教師』かな？

白雪はそんな雰囲気だね。

「それと隣は……霧さん、でいいんですよね？」

いまいち私だと認識できてないのか、白雪が続けてそう聞いてくる。

そのまま私は少しだけスカートの端をつまんで軽く会釈する。

「はい、本日はメイドとして参加させていただきます。白野 霧で間違いありません」

「す、すごいですね。まるで別人みたいです」

「そういう白雪様も、よくお似合いで別人のようですよ」

と、私にこやかに言う。白雪は再び感心したような顔をする。

「わあ……本当にメイドさんみたいだよ、キンちゃん」

「ああ、そうだな」

白雪が嬉しそうに驚いてるけど、前回メイドを体験済みのキンジのリアクションは薄い。

あ、私が顔を向けると視線を逸らした。

体験済みとは言え、それでもキンジには毒であることに変わりないらしい。

「あと、俺の衣装はほぼ完成している。あとで違和感が無いか見てくれ」

「はい。ふふ……楽しみだね、キンちゃんのお巡りさん姿」

ニコニコとしながら白雪はキンジを見る。

うん、白雪は本当にはまり役だね。

元から母性がある感じの雰囲気だし……まあ、体つきからして母性は溢^{あふ}れてるんだけどね。

何よりも切り甲斐のある体してる。

シスターみたいなこの国の聖職者だし、きつとさぞかし中身も綺麗なんだろうな

ジャンヌと並べて比べてみたい。

ジャンヌも性格とかはアレでも聖女と呼ばれた者の子孫だし。

想像するだけでも楽しみだ。

——そう、ロンドンにいた時から生き汚いどんな人でも中身は一緒なのを知ってる。

8月31日の——

なんだろう……ズキリと頭の奥が、痛む。

8月31日？ 私が一番最初に殺した日なんて、私自身知らないのに何でその日が出てきたんだろう？

お父さんと出会うまで亡霊のようにロンドンの街を彷徨さまよって、肉を裂いてた程度にか覚えてない筈なのに。

「どうかしましたか、霧さん？ いきなり物静かになって」

「お気になさらず。メイドは目立たないものです……それに遠山様の警察姿をご想像し、覇気がなそうな警官だと思ひ考えていただけです」

頭痛を抑え込んで、白雪に対してそう返す。

するとキンジはリアリティを出すために警察の制服を揉んでシワなどをワザとつけて使用感を出す作業をしながらも、私を見上げてきた。

「悪かったな、根暗で」

「私はそこまで言っておりませんので、そのように卑屈っぽい目を向けられましても困ります」

と言うか自覚してるならコミュニケーションをだね……

って言っても聞かないというか、実践しないだろう。

人間、いきなりは変わらないものだし。

私は例外だけど。

そのままキンジは再び作業に戻るけど、数分も経たない内に立ち上がってレキのいる方へと向かった。

作業に飽きたのか……

視線を向ければレキはいつものセーラー服の上に白衣を着てる。

研究員か医者か……いずれにしても、そんな感じの格好だね。

私は私で白雪の隣に座る。

すると、白雪は役作りのための演技をやめていつもの感じで聞いてきた。

「これ、もしかして手作り？」

「まあね、ゼロからは難しいからある程度の原型に少し付け足してそれっぽく見せてる。そう言う白雪さんは素材から作ってるっぽいけど」

私もメイドの役を降りて普通に話す。

くすりとそのまま白雪が力なく笑う。

「私、これぐらいしか取り柄がないから」

「悲観しすぎでしょ。ジャンヌの一件からもう少し前に進んでると思ったのに」
「でも、アリアにも霧さんにも色々と負けたくはない……かな？」

「その言葉を聞いて前言撤回」

人の変化は見ていて面白い。

だから止められない。

なのに……

——ズキン。

頭痛は止まって欲しくても止まってくれない。

もつと”彼”を近くで見たいのに……

午後10時過ぎ、”彼女”が近付いてくるのが分かる。

「おはようー!」

理子が元気よく昼間と同じテンションで教室に入ってきた。

そんな我が妹はガンマン姿。

テンガロンハットを被り、革の薄手のブラウス。

へソを出して、デニムのショートスカートで靴も西部劇とかでよくある革製のブーツ。

革製のホルスターには骨董品のホルスターまで装備とは。

理子なりのこだわりを感じるよ。

そんな理子は私を見た瞬間、啞然あぜんとした。

メイドはリリヤで見てるでしょうに、あとそういうカフェとか行ってるのも知ってる。

私のメイド姿なんかでその顔をする意味はよく分からない。

人を色々と誘惑してる割には自分に向けられた感情が何なのか分からない時があるからね……

そこら辺は、キンジと似てるかな。

だけど理子はすぐに、

「おー！ キーちゃんのメイド姿とは、また超レアですな。男性の人気はうなぎ上り間違いなしだね」

なんて言いながらおどけて見せた。

「それはそうと、ほら早く！ 絶対にウケるって！ 可愛いは正義だよ！」
それから理子は教室の扉の裏側にいる誰かを引っ張る。

「~~~~~!」

声にならない悲鳴を上げてる。

どんだけの高音で喚わめいてるのかは知らないけど、そのままズリズリと扉の下から足が見えてきた。

さーて、あれだけ抵抗するって事は……相当屈辱的な姿なんだろうね。

実に楽しみだよ。

ワクワクしながら待つてると、見えてきたのはキッズサイズのフリルをあしらったブラウス。

次にミニ過ぎるスカート、こちらもフリル付き。

そして、遂に全貌が――

「~~~~~や~~~~~よ~~~~~!」

抵抗の言葉を出しながらも見えてきた姿。

それは、まさしく『小学生』。

真つ赤なランドセルを背負つてる上に、リコーダーがはみ出して入つてるのが分かる。

黄色の枠のネームには『4年2組 かんぎきアリア』の文字。

しかも、ちよつと子供っぽい崩れた筆跡が良い味を出してる。

「流石のあんたでもこの格好は——え？」

挑発して私を陥れようと思つてたんだろうけど、残念だね。

いちいち羞恥心を覚えてたら何も演じれないし、誰も騙せないんだよ。

「小学生ね……理子、衣装ある？」

「一応、試作で余つたのあるけど……」

……あるんだ。

という訳で衣装チェンジ。

理子から何故か持つてきたらしい衣装の余りを借りて、教室の端の衝立の裏側に。

しばし衣装替えの時間を、つてね。

神崎用に作ったせいかな少しサイズがアレだけど、ギリギリ着れるか。

つて、このプリーツスカート……短い。

で、黒のニーソックス。

それから上はちよつとした何かのロゴの付いたTシャツ。

着てみたものの……体格的に小学生では通じない気もする。

そこは演技力でカバーしよう。

この髪の長さでボブヘアは無理だから、ツインテールにして。

これで完成。

「初めまして、6年生になります。白野 霧です——なんちゃって♪」

と、私は出て早々にそんな自己紹介を交える。

周りにはレキ以外の人はポカンとした表情。

うむ、良いサプライズになったみたいで何より。

そのリアクションに少しは満足した。

理子は一つ提案をする。

「……キーちゃん、もうCVRに行かない？」

「いいかもしれないけど、遠慮するよお姉ちゃん」

色々と変装出来て楽しそうではあるけどね。

残念ながらそんな暇はなさそうだし。

そんな中で何を血迷ったのか、消防士姿の武藤が私に向かって見事な土下座をしながら滑り込んできた。

「霧さん、その姿でお兄ちゃんと呼んでくれ！」

公務員の風上にもおけないセリフだね。

しかし、そのプライドを投げ捨てる姿勢に感服したので、夢を見させてあげよう。

「お兄ちゃん、お仕事頑張ってね♪」

「よっしやああ！ 今なら、怖いものなんて何もねえ！」

「牢屋の中で」

「——え？」

武藤の間の抜けた言葉と同時にカチャ、と金属音がしたかと思うと、いつの間にか制服を着た遠山巡査が手錠を武藤につけていた。

「現行犯逮捕だ。話は取調室の綴先生に聞いてもらおうといい」

「おいそれ取り調べじゃなくて尋問・拷問部屋だろ!？」

なんてバカな事をしながらも夜は過ぎていく。

夜はさらに更けて1時になるうとしている。

既にほとんどの生徒は完成した衣装を持って退室している。

レキは「就寝時間です」と研究職っぽい姿をしてる割には健康的な事を言い出して退室し、白雪は生徒会の関係でまだまだキンジと一緒にいたかったのか未練がましく同じく退室、そして神崎はあのあと弄られたせいで、トボトボと疲れた感じで去った。

見知った顔は理子とキンジと、平賀さんだけ。

あとは顔見知り程度の女子が数人。

私はもう制服に着替えてるし、そろそろ帰ろうかな。

この雰囲気も嫌いではないけど、微妙に気分がまだ悪いし今日は安静にした方がよさ

そう。

「ふあーあ、私も先に戻るねー」

あくびをしながら言つてそのまま教室を去る。

◆

お姉ちゃんが帰つた。

◆

◆

メイド姿のお姉ちゃん、新鮮だったな。

おまけに小学生とは最高だぜ、なんてね。

アリアはお姉ちゃんにも恥ずかしい思いをさせたかつたんだろうけど……あの程度じゃ動じないだろうね。

そもそもお姉ちゃんが羞恥心を持ち始めたの最近だし、未だにレアな表情なのは間違いない。

数えるほどしか見たことないし。

戦役が始まったけど、お姉ちゃんいつ動くつもりなんだろ？

というかソフィーから指令も何もないしね。

このまましばらくは様子見なんだろうか？

ヤングガンガンのページをめくりつつもそんな事を片隅で考えてしまう。

もうお姉ちゃんも帰つたし、そろそろあたしも帰ろうかな？

制服には着替えてるし。

「いたいた……理子ちゃん、お友達が呼んでるよー？　なんか校外の人だけど、似たようなフリフリの服着た人」

と、考えてた矢先にクラスメイトが扉を開いてあたしを呼んできた。

「はぁーい。……校外の人？」

校外で似たようなフリフリの服着た人つて、リリヤぐらいしか思いつかないけど……まさかね。

ちよつとあたしは、急ぎ気味に教室を出る。

校舎の表玄関を出て、夜の中をそのまましばらく立ち尽くしていると。

「こつちよ、”4世”」

ただ一言、一瞬で全身に寒気が走った。

その……声で、あたしをそう呼ぶのは1人しかない！

すぐさま、両腕で銃を抜いて髪でタクティカルナイフを持つ。

街灯の届かない、校舎の陰に人影が見えた。

「何の用だ……ヒルダ。あたしを人質にしにきたのか？」

「そう怖い顔をしなくてよ。吸いたいとは思うけど、取って食う訳じゃないから安心な

か」

なんて言ってるが、あたしを城の中でオモチヤ扱いしてたヤツの言葉を信用する訳がない。

あたしが信じると思ってるならおめでたいヤツだ。

「交渉するなら顔ぐらい見せたらどうなんだ？」

「もちろん、いいわよ。私は話し合いをするために来たのだから」

校舎の陰から街灯の光が当たる位置まで、ヒルダは悠々と歩いてきた。

黒いゴスロリのせいで後ろの暗闇に溶け込んでる感じだが、白い肌と顔がちゃんと見えてくる。

不敵に、それでいて余裕そうな笑みを浮かべて、夜にも関わらず日傘をクルクルと回しながらあたしを見据えている。

「話し合い、だと？ お前の父親を倒した連中の一人に掛ける言葉じゃないな」

「そうかしら？ 宣戦会議バンディールでジャックに言ったけれど、父は愚かだったわ。ジャックと組んでいれば良かったものを、わざわざ敵対するなんて事をしたんですもの。だから、別に”その事”に恨みなんてないわ」

「だからどうした？ あたしは、お前の言う事には従わない」

足を少しだけ開いて”逃げる準備”をする。

（ここは武偵の校舎。）

この夜中に一発でも銃声が響けば、誰かがここに来る。ヒルダにとって勢力的にアウエーなのは間違いない。

ああ、クソ……震えるなよ、あたし！

あいつなんか、怖くない。

あいつよりも強いブラドを倒したんだ。

何を怖がる必要があるんだッ。

そのあたしの恐怖心を見透かしたように目を細めながら、さらに近付いてくる。

「そうかしら？ お前はジャックを慕ってるようだけれど……ヤツの秘密、私は知っているわ」

「——あの人の何を知ってる？」

お姉ちゃんはイ・ウー内でもその素性を完全には明かしてはいないし、そんな簡単に尻尾は掴ませない人だ。

そんなお姉ちゃんの秘密なんて簡単に——

「……ヒヒイロカネ。ジャックはその保有者、そうでしょ？」

「——ッ!？」

なんで、その事を……

お姉ちゃんは基本的に色金の力を使うことを嫌っていた。

あたしですら、一度も使うところなんて見たことがない。

使えば、色金の侵食によって寿命が減るであろうハイリスクなデメリット。

その色金の侵食で、お姉ちゃんは殺人衝動で家族にすら凶刃を向ける可能性がある。

お姉ちゃんがヒルダに色金の発現を見られるなんて、そんな迂闊なこと……

そう思っていると、ヒルダは答えを見せるようにして一つの緋色の欠片かけらを手元に取り出した。

「からがねしちせい殻金七星——本来であれば、色金を心と結び付けないための壁の一枚。これは色金と

の共通因子を持つてる。つまり、これを軽く刺激してやれば色金も連鎖的に反応するのよ」

——連鎖的に反応。

その言葉に嫌な予感⁴は確実に湧き上がる。

「まあ、結論から言わせて貰うとジャックは「ここ」にいる。そうなのでしよう？」

「世」

「……あたしは知らない」

ここで動揺すれば付け込まれる。

落ち着け、落ち着け……そもそも考えろ。

「ここでその事をあたしに話す意味はなんだ？」

人質にでもするつもりか？

「あら、そう？　でも、分かった事があるのよ……ジャックつてばどうやらこの殻金、持つてないみたいね。まさか、あれ程までに反応するなんて……侵食も結構進んでるんでしよう？

——とつても、そそる表情をしていたわ」

ねつとりとした言葉で漏らしたヒルダに、悪寒が走った。

コイツ——！

逆だ……”あたしを”人質にしに来たんじゃない。

”お姉ちゃんを”人質にしたんだッ。

しかも、理由は分からないけど……お姉ちゃんがここにいるって確信を持つてる。

「私もバカじゃないわ。ずつと、考えてたのよ……ホームズの小娘に敗れ帰ってきたあの日。私が脅おどしても生意気に意地でも答えなかった写真の少女は誰なのかを。今でも覚えてるわ、ブラウンに混じったブロンドピンクの髪。ホームズの小娘と同じような”色”を、ね。それに吸血鬼は処女の匂い分かる……少なくともジャックが女というのは分かってたわ」

——ッ。

ハイジャックでアリアに負け、イ・ウーに戻ったあの日……

なんだよ……迂闊うかつだったのはあたしじゃねえかッ!

「それに理由は知らないけど、トオヤマとか言う下等なサルを大層気に入ってるそうだし……もしかしたら、と思ったのよ。期待はしていなかったけどこの学園に私の使い魔を放ち、人間をくまなく観察すれば……どういふ訳か私好みの苦悶に満ちた反応をする少女がいるじゃない、ほほほほほ。玉藻が結界を張る前に見つけられてよかつたわ。
F i i B u c u r r o s」

遠くに聞こえるヒルダの声。

ヒルダがお姉ちゃんに辿り着いたのは偶然。

でも、そのきっかけを作ってしまったのはあたしだ。

あたしのせいだ……また、あたしのせいだ……お姉ちゃんが。

「それで、4世。私の話を聞いてくれるわよね?」

ヒルダは勝ち誇ったように、斜はすを向いて聞いてきた。

その言葉に実質選択肢なんてない。

ここまですると、また奪われるのかって自嘲じみた笑いがこぼれそうになる。

ああ、でも……

お姉ちゃんを守るなら、それでいいかな。

「——いいよ。あたしをどうするつもりか知らないけど、あの人に手を出さなければそ

れで」

「恐い、恐いけど……覚悟は出来た。」

「だから、大丈夫。恐くても進める。」

「つまらないわね……おび怯えてるお前の表情は結構気に入ってたのだけれど」

「実際につまらなさそうにヒルダは目を細めた。」

「父親に似てのサディストめ。」

「だけど、まあいいわ。物分かりがいいのは好きよ、4世」

「それで？ あたしは何をすればいいの？」

「それはまだ計画中よ。でも、そうね——」

「そのままゆっくりヒルダはあたしに近付き、自分の耳に付いてたコウモリ型のイヤリングの片方をあたしの耳に付けた。」

「友愛の証にあげるわ」

「ブラドに比べれば気品のある丁寧な対応。」

「やってる事はそれよりも悪辣だ。」

「それじゃあ、また会いましょう4世」

「それだけ言っただけヒルダは優雅に闇に消えた。」

「確実に遠ざかった、よね？」

聞こえるのは教室に残っている人が生み出す雑音。

それ以外は、何も聞こえない。

……誰もいない。

張り詰めてた何かが切れたように、膝から崩れ落ちる。

両手を見れば、自分でも分かるほどに震えてる。

お姉ちゃんに認められて、ブラドを倒して、前に進めている。

そう思ってたのに……！

あたしは！ あたしの”過去”は、まだ続いているッ。

なんで……どうしてッ……!?

——もし今度同じような事があつたら私が助けに行くよ。”約束”する。

あの時のお姉ちゃんとの約束、こればかりは果たせないよ。

きっと……あたしを助けに来たらお姉ちゃんが死ぬ。

そんな気がするから……

◆ ◆ ◆

とまあ、理子はまたしても不幸な目というか過去のしがらみに囚われている訳だけ
ど。

残念ながらお姉ちゃんはまるっとお見通しです。

いや、それは嘘だけど。

調子が悪くて部屋で休んでたらソフィーお姉ちゃんから電話が掛かってくるものだから、何事かと思つたよ。

で、指示通り校舎に戻ってきたらなんとヒルダが妹を脅してゐる現場を発見。

吸血鬼はなに？ 学習能力がないの？

「で？ 私にこれを見せてどうするつもり？」

『決まつてるわ。気付かれたのなら、手駒にしてしまえ……そういう事よ。そのための計算も出来てる』

「タイミング、あるんでしょ？」

『ええ、あの医者の子孫が近々そこに来て、アクションを起こすでしょう。そのあとは――』

お姉ちゃんから計画を聞き、私はそれに歓喜する。

それから電話は切れた。

うーん、実に楽しみだ。

つて言うか、最初から話は聞かせてもらつたけど……ヒルダのせいだったんだねえ、突然に色金が反応したの。

いや、でもあの殻金はきつかけであつて指向性はない筈だよな？

例えるなら殻金はスピーカーでただ発信するだけ。

電話のように色金と繋がるのは色金のみ。

だったら考えられるのは……ヒルダが殻金によって色金の力を発現させ、同じ色金を持つ神崎が私と同じように反応し、何となく色金が近くにある事を感じ取って私に接続しようとした。

考えられるのはそんなところかな？

どっちにしても父親の教育不足だよね。

私の家族に手を出した挙句、私と敵対しようなんて。

一緒に組織に属しておいて、そう言った連中の末路がどうなったか知ってる筈なのに……何も理解してない。

世間知らずというか恐れ知らずというか……

だからこそ、”私達”が代わりに娘の教育をしてあげよう。

ダイジヨウブだよ、理子。

”約束”はちゃんと守るからね♪

それに……私も最近”捌け口”が欲しいと思つてたところなんだから。

久々に切り裂き甲斐のあるオモチヤにワクワクする。

吸血鬼だし、中身がある程度出そうとも多分大丈夫。

どの程度耐えられるのかも試そう。

道具も出来るだけ銀製にして、教会から聖水とかも拝借して、あとは何を試そうかな？

取りあえず、道具は紅鳴館に集められるようにしよう。

あの吸血鬼の別荘だけあって、物騒な秘密の部屋もあるし。

「ふ、ふ……ふ……♪」

理子には悪いけど、お姉ちゃんはすごく楽しみだよ。

ああ、こんなに胸が躍るのは久しぶり。

今でも誰かを切り裂きたくて、中身を見たくて仕方ない。

油断してるとつい、つまみ切りしちゃいそう。

まあ、それもこれもヒルダが色金を刺激したからなんだけどね。

自業自得って事で。

あ、良い事を思いついた。

——串刺し公の娘として相応しい末路をね。

82 : 気の長い話

神崎の母親の裁判が行われる日。

私は同行せず別件で席を外してゐる。

場所は紅鳴館。ちなみに変装はしてゐる……いや、そもそも白野 霧の姿でいたらマズいし当たり前なんだけど。

イメーজは新社会人っぽい女性かな。

今となつてはこの館の管理者は牢屋の中で、今はあの娘が跡を継いでいる。

しかし、不在みたいなのでちょっとばかり場所を拝借。

ヒルダは大方、神崎の裁判が終わるまで待ち伏せしてゐるんだろう。

携帯に連絡が入る。

送り人はリリヤ。

”例の医者”の娘”が不穏な動きをしてゐる……か。

携帯に送られたメッセージを見て、すぐに閉じる。

無人機による偵察、光学迷彩による潜入。

リリヤは結構働きものだよ。

そして、情報を制する者はってね。

って言うか最近知ったんだけど、リリヤはほとんどこっちにいるらしい。

だからって学園島の地下倉庫を拠点にしなくてもいい気がする。

まあでも、色々と助かってるし無人機のおかげで正体をそんなに知られる事もない。

それから帰ってきたリリヤが――

「……………どうするの?」

と、小首を傾げて聞いてくる。

何をするかはまだ言っていないからね。

計画はお姉ちゃんから聞いてるっぽいけど、具体的な段取りは私に任せるみたいだか

ら……………

今いるここは無機質な壁に囲まれた陰湿な部屋。

監禁・拷問部屋って感じ。

たまに使ってたんだろう道具とか手枷とか、色々置いてある。

「ここに理子お姉ちゃんを苦しめる子連れてきて、ちよつとばかり教育をする。その

ための道具とかを取り寄せて欲しいんだ」

「……………分かった」

粛々とリリヤは頷く。

その反応に私は少しだけ目をやる。

ふむ……ちよつと違和感を覚えるけど、すぐに私は次の指示を出す。

「具体的にはこの紙に書いてある感じの配置でお願い、ざざつとね。多分、1週間前後で実行に移さないといけないだろうし」

吸血鬼解剖・再教育プログラムとでも名付けようか。

種族で劣等だの優秀だのなんて知った事じゃない。

まあ、その価値観はそれぞれ……

私の中では下らないと思ってるけどね。

そして、それを叩き折るのが最高に楽しい。

「……悪い顔」

「割と見てるでしょ?」

「……怖い」

無表情なリリヤが少しだけ眉を寄せて引き気味。

前にもこんなことあったね。

ふーむ、どうも理性が削られてる感じがする。

ちよつと今回はいつもより慎重にならないと……油断してたら意識が持っていかれるかも。

それもこれもヒルダが余計な事をするせいだ。
それから電話。

ワイズか……一応、声は変えておこう。

中性的な男性の声に変えて、出る。

「珍しいね、君から電話なんて」

『マスターの組織に属した以上は連絡をと思つてね。それに僕をスカウト役に任命したのは

マスター
師匠だろう?』

「じゃあ収穫はあつた訳だね」

『運命の出会いがあるとは知つていたけどね。その人物に僕達の事を紹介したら喜んで
いたよ』

「名前は……流石に知らないか……」

『そうだね。そこまでは聞けなかつたよ。だけど通称は「何者とも判らぬ者UNKNOWN」と呼ばれてる
よ』

「ああ……なるほど。イギリスで有名な犯罪者の1人。正体不明なのによく分かつた
ね」

『言つたらう? 運命の出会いだ、つて。偶然であり必然だよ』

その偶然を必然だと言わんばかりに引き当てるのがすごいよ、君は。

「是非ともお会いしたいものだね」

『そう言うと思つて師匠マスターの姉上にお伺いをしてね。居場所をリークしたよ、彼女にね。今頃はそこら辺にいるんじゃないかな?』

そこら辺にいる、ね。

ワイズがそう言うつてことはかなり近いところにいるんだろう。

この悪趣味な部屋の中に既にある可能性もある訳だ。

ふむ、向こうから会いに来たつてことは少なくとも何もしいつてことはないだろう。

それにその通称の犯罪者の犯行の話を聞いてる限りだと、クローズド・サークル——閉鎖空間での殺人がお好きなようだし。

外界との交流手段を断ち、その場にいる人間に疑心暗鬼を埋め込ませ、互いに殺し合うか自ら死に、最後には”誰もいなくなる”。

誰も残らないのに同じような事件は続いている。

まるで誰かが舞台を設定して、登場人物がいなくなれば新しい話を作り出す脚本家のように、何者かが背後にいる。

そう思わずにいられない犯行がイギリスでは続いてる訳だけど。

誰もいないんじゃない、話は続かない。

結局は犯行現場に残した物が全てで、その中に犯人に続く物はない。

つまりは……殺り方は違うだけで私と同じような部類な訳だ。

「分かった、ありがとうワイズ。引き続きよろしくね」

それだけ言つて電話を切る。

「なるほど——UNKNOW何者とも判らぬ者、それはつまり逆に言えば私みたいに”誰にでもなれる

”訳だ」

声を変装してゐる女性のものに戻して、流暢りゆうちやうな英語で言いながら私はそのままリリヤに目を向ける。

「そうでしょう？」 初めまして”、と言ふべきかな——ミス・アンノウン」

「ウワーオ、一瞬で見破られた。流石は天下の殺人鬼様、格が違うね」

リリヤではない声で、その人物は陽気に自分の正体をすぐに明かした。

正直、理子が苦しめられてる事に関しての下りで反応が薄すぎたのが違和感だった。

あの子ならもうちよつと感情が表に出るからね。

どれぐらい観察してたかは知らないけど、時間的に長くはないだろう。

とは言え雰囲気まで似せるとは、私もちよつと驚いてる。

かなりのやり手、なんだろうね。

直接的な戦闘とかじゃなくて、やはり私と同じで搦め手を使う部類。

それにかなり情報に関して素早く入手できる腕があり、観察力もあると見える。

そもそも一体全体、リリヤに関してどうやって知ったんだか……

リリヤが彼女を迎えに行つたとも考えられるけども。

まあ、お姉ちゃんの許可が出た以上さして重要ではないから置いておいて——

「会えて嬉しいよ」

「こつちこそ、お会いできて光榮。自己紹介としては、そうだね……アンノウンつて言うのも味気ないから、仮の名でウルスラとでも名乗つておこうかな？」

「本名でないと言つてるようなものだね」

「お互い様、だろう？」

「これは一本取られたよ。正体は……別に明かすつもりはないんだろう？」

私がそう言うと、彼女はふむ、と顎に手をやって考える。

それからすぐににこやかな顔になって、

「私のアイデンティティだから、その言葉に甘えさせて貰うよ。あなた達ならきつとすぐに私の正体に辿り着くだろうけど……蛇の道は蛇だものね」

彼女もまた私と同類なんだと思わせる言葉を紡いだ。

シンパシーつてヤツかな？

何となくお互いの事が分かる。

「さて……挨拶に来てもらって申し訳ないが見ての通り歓迎の準備は出来ていなくてね」

「別にいいんだよ。ただの興味本位で来ただけ、だからさ。そして実際に会ってみて私以上に君は——」

——人でなし。

そんな分かりきつたことを言うつてことは、

「なるほど、初対面でそこまで言うとは……やはり同類だね。君もまた”観察”するの
が好きな訳だ。特に人の本性を見るのが愉しみだと、そんな目をしている」
そう指摘すると、一般人なら底冷えする瞳を開き、そして微笑んでいる。

——狂っている。

素人でも判断できるような泥のように重苦しい、死の気配。

実に良いね。

「ようこそ、エニグマへ」

歓迎の言葉をそこで私は紡いだ。

それから軽く握手をする。

正気であるからこそその狂気。

きつと君にも”表の顔”があるんだろうね。

などと考えながらもリリヤの顔で彼女は、疑問を投げ掛けてくる。

「ようこそつて言ってるけど、方針なんてないって聞いてるよ。」

「まあね、好き勝手にやってる。ただ単にお互いの欲望を満たす舞台をたまに協力して用意しよう的な感じの集まりであり、シンポジウムの様な事も出来ればと考えている」

「Oh. : それは、刺激的な提案。でも、私の通り名を知ってるなら殺り方も知ってるんだらうね。ええつと……Mr. ? Ms. ? ジャック」

「女性の時はジルなのだけだね。まあ……ジャックの方がよく知られてるしどちらでもお好きなように。それと、君の殺り方なら存じ上げているとも……10人のインディアンになぞらえたような殺し方。君の場合は、その10人のインディアンの中の”1人”になり、その中で殺していく」

つまりは、集まった時点で10人のインディアンの1人は既に死んでいる。

で、その中で疑心暗鬼の種を植え込み、育てていく。

単純な話ではあるけれど、簡単ではない。

「けれど君が直接的に殺すのは多分だけれど、毎回”1人”だけ。違うかい？」

私がおそいまで言ったところで、彼女はクスクスと笑い始めた。

「アハハ、おそいまで分かってしまうなんて。イイね、実にイイよ。君に会えて良かった」
そう言つて彼女は喜んでいた。

見破られて悔しがるとかではなく、似た価値観——共通の認識を持つ人を見つけたとばかりに、歓喜してる感じだった。

それから何かを思い出したように、私を見つめる。

「ところで、私を誘った人物から聞いたんだけど……メンバーを募集中だった？」

「まあね。今のところ君を含めて4人だよ」

「それなら心当たりが1人。都市伝説的な感じでニュースにはあまりでないけど、その人物は“アリス”と呼ばれててね。……噂だと刺激的な殺り方をするらしい。そう、私と同じようにある”物語”になぞらえてね」

それは良い事を聞いた。

早速、メンバーの当てが出来るとは……やっぱりは友を呼ぶってヤツかな？

だけど、その人物に関しては直感的に嫌な予感がする。

童謡や童話は思ったより残酷だからね。

アリスなんて呼ばれてて真っ先に出てくる物語なんて1つしかない。

その話は後回しにしておくか。

自然と耳に入るかもしれないけど、ワイズへはその人物との接触は避けるように釘を刺しておこう。

私が直接行かないと死ぬような人物かもしれないし。

まあ、そもそも平気で人を殺せるヤツが常識を持つてるかどうかは別問題。

倫理的に破綻はたんしてるのは間違いないし、共通事項だけだね。

「興味深いね、だけど今は少々イベントが控えていて話の真相はまた今度確かめさせて貰おう」

「イベント？」

「ああ、イベントさ。吸血鬼を解剖する予定だね」

私がそう言ったところで彼女はうーん、と唸る。

「私の趣味ではないね」

「まあ、そうだろう……君の場合は私みたいに人間の”中身”じゃなくて”内面的”な方に好奇心があるようだし」

「会って間もないのにそこまで分かるとは、ちよつと驚きだね」

と、彼女は少しだけ複雑そうな声音で言う。

理解されている事に不満はなさそうだけど、あまり理解され過ぎるのもそれはそれで複雑なものなのだろう。

あまり踏み入った事は言わない方が良さそうだね。

それに彼女について大体分かったし。

もうそろそろお開きって感じかな。

「これからよろしく頼むよ」

「ええ、こちらこそ。それじゃ、また」

私の言葉に彼女は快く答えて、その場を去った。

本当に私と会うためだけにわざわざ来るとは……酔狂な人物だよ。

それにお姉ちゃんが私の居場所を簡単に教えたつてことは、問題は無い”つてことなんだろうね。

色々と環境は整いつつある。

そして、やっぱりぼちぼち私は覚悟というか……一つの選択をしないとイケない。

ただ、正直なところ迷ってるんだよね。

私の方に来る可能性は低いけど、それでも——

必要か必要でないかと言えば、仕事上は必要ない。

だけど私の精神の安定のためには必要で、私にとつては初めて持つことができた殺人以外の欲望。

もし叶わないのなら……多くの人が必要になる。

「すうー……ハア……」

ため息なのか深呼吸なのかも分からない息を漏らす。

ああ、この湿気に混じる微妙な血の空気は心地が良い。

同時に今の私には毒だけ。

——殺したい。中身を……見たい。

あの吸血鬼が早く間違いを起こして欲しい。

私の欲求を満たすためのオモチャになって欲しい。

魔臓がなければきつと、吸血鬼の伝承にある弱点に対しての痛みを感じる事が出来るはず。

その痛みに悶える様子を見れば、私のこの熱も冷めるだろう。

薬による倦怠感も晴れるだろう。

だから、早く……ハヤク——

このままだと、私は”歪んで”しまう。

狂ってるのは知ってる。

その狂いが歪んでしまうのが私にとっては困るんだよ。

だからこそ私は——なあってね♪

——エル・ワトソン。

黒板に達筆な英語の筆記体で書かれたあとに女子の黄色い声上がる。

あまりの音量に高天原先生が教壇から足を踏み外した。

昨日の時点で何かしらやってたのはリリヤを通じて知ってはいたけど、まさか転校してくるとはね。

しかも”男子高校生”として、とは。

女性であるのは既に知ってる。

ワトソン家の事情により、男性として育てられたその経緯も把握済み。イ・ウーにも生徒としていたし面識はある。

まあ、彼女の事はどうでもいい。

あまり興味はない。

気になると言えば、妹である理子が欠席でいない。

あのコウモリ女の絡みだろうけど、準備が整うまでは我慢我慢。

最近是我慢してばっかだね……私。

だけど、もう少しの辛抱。

それともう一つ気になるのはさつきから変な空気を出してる神崎とキンジ。

また、ひと悶着もんちやくあったかな？

ホントにトラブルには事欠かないね。

雨降って地固まる。

いつも通りぶつかりながらも仲直りするでしょ。

「エル・ワトソンです。よろしく」

中性的な顔をしたワトソン「ちゃん——じゃなくワトソン」君はそう男性にしては高めの声で、自己紹介した。

その瞬間にキヤー！ と再び教室からの女子の歓声上がる。

ふーむ……相変わらず男装としては70点。

子供の頃から男子として育てられた点からして、それらしい振る舞いは出来てる。

だけど、やっぱり年を重ねるごとに積もる女性らしさを押し殺すことは出来ないよ。

顔や声は中性的で通せるとしてもね……もうちよつと体は少しだけ男性らしいゴツゴツした感じ出した方が良いんじゃないかな？

まあ、そう言う体格の男性もいるけどさ。

と、馬鹿正直にダメ出しなんてするつもりはない。

言ってしまうえば敵なんだし。

塩を送る必要もない。

ワトソン君が一番後ろの席に着席したところで、ホームルーム終了のチャイムが鳴ると同時に女子達がワトソン君の席を歓声を上げながら取り囲んでいった。

いつも通り私はキンジのところへ。

「なんだ、お前はあつちに興味ないのか？」

開口一番、キンジはそんな事を聞いてくる。

「悪いけど、私のタイプじゃない」

優等生っぽいのは見えていてつまらないからね。

「なんだそりゃ……女子から見てああ言うのは、一般的に興味があるもんじゃないのか？」

「じゃあ私はその一般的とは違うってことで、ちよつと散歩でもする？」

居心地が悪そうだからキンジにそんな提案を試してみる。

私の気遣いに気付いたのか、キンジは神崎をちよつと見てから息を吐いて——
「そうしよう」

すんなりと提案に乗ってくれた。

そのまま席を立てて私と二人で教室を出る。

神崎は、複雑な……追い掛けようか迷ってる感じの顔をしていたけど、結局腰が上がることはなかった。

「まあた、トラブル？ キンジも好きだね」

「お前な……気晴らしに誘つといて的確に地雷を踏むなよ」

教室を出たところで私が軽めに話題を振ると、機嫌悪めにキンジは返してきた。

「地雷は爆破処理に限る」

「普通に避ける」

私のボケに対して、的確なツツコミ。

「そして私の考えが正しければ、ワトソン君に関係があると見た」

いや、知ってるんですけどね。

「正解だ」

「ホームズにワトソン……ね。ま、お似合いなんじゃない？」

「……そうだな」

間が空いて返すキンジの言葉に少し不機嫌さが残ってる。

「どうやらワトソン君が気に入らないらしい。」

ま、あつちはあつちでキンジの事が気に入らないだろうけど。

ホームズと言えばワトソン、ワトソンと言えばホームズ。

そんな切っても切れない関係だからね。

で、そんなワトソンのポジションにいるのがキンジ。

長年の関係の中に突然に割り込んできた第三者なのだから、嫌悪を抱く理由は分からないでもない。

まあ、付け加えるなら割り込んできたというより神崎が選んだんだけど。

「とは言え、どうも個人的にワトソン君は気に入らないね」

私がそう言うのとキンジは少し驚く。

実際のところ気に入らないのは本当。

「いきなりなんだよ。別に前から知ってる訳じゃないだろ？」

「うーん、女の勘かな？ きな臭い感じがするんだよね」

「勘かよ」

「神崎さん程じゃないにしても、私の勘もそれなりに信じれるでしょ？」

「まあな……」

笑顔の私にキンジは少しだけ、微笑み返してくれた。

今まで貸しだとか借りだとか色々あったけど、やっぱりキンジに頼られるのは悪い気がしない。

その後の一般授業でワトソン君は見事な秀才ぶりを見せた。

今日転校してきたにも関わらず、授業の内容を理解している。

まるで、今まで一緒に授業をしてきておまけに予習復習を欠かしていないかのような感じだよ。

先生から出す問題に全て正答するし、英語はもちろん本場のネイティブな発音。

しかも貴族らしい、上品なイギリス英語。

まあ、日本人にその違いは分からないだろうけどね。

ともかく、海外から転入して初日にここまで勉強が出来るのは流石に驚いてる事だろう。

日本の歴史に詳しいのはイ・ウーにいた事と色金が関係してる事は無縁ではないだろうけどね。

何にしてもワトソン君は優等生として十分な印象をアピールできたことだろう。

授業の休み時間に、もてはやす女子達に向かつて、

「少し予習してきたからね」

と言いながら苦笑いしている。

さて、第一印象は好印象で成功。

早くもワトソン君はこのクラスに自分の城の壁を一つ築き上げた訳だ。

ワトソン君の目的がアリアとキンジの関係の切り離しであることは既に知ってる。

さて、『^{ヴェ}西歐忍者』の異名を持つリバティー・メイソンの若き諜報員の次なる手は……

おそらく相手の外堀を埋めていくことだろう。

キンジの交友関係は狭いからね、そこを攻めるのが定石だろうし。

自分に有利な状況を作りつつ、相手の弱点を突いて徐々に攻める準備をする。

悪いとは言わないけど、優等生だからこそ読みやすい。

その内、私にも何かしらのアプローチがあるかもしれないけど。そこはゆつたりと待っているでしょう。

あの医者の子孫だ。

読み易い性格をしているのは知ってる。

曾お爺さんであるジョン・H・ワトソンはあの子供っぽい性格のお父さんの生涯の相棒だったのだし。

真面目な常識人の側面が強いらしいけど、前にお父さん曰く『あれほど愉快で退屈しない生涯の友人は彼一人』だと言いつけるからね。

その子孫であるあのワトソン君が面白いのかどうかはこれから、だけど。

ちなみに私の中で気に入らないのと面白いかは別問題。

それは置いておいて、キンジと神崎の仲は険悪とまではいかないけどお互いに避け合ってる感じだから、この後も別行動するだろう。

折角だし有効活用させて貰おう。

「さて、次は専門科目の時間だけど……よければ送っていくよ？」

「今日はやけに親切だな。また貸しにでもする気か？」

「ただの善意だよ」

キンジは私の言葉に怪しいとばかりに目を細める。

思惑がないと言えば、嘘になるけど……ぼちぼち私の秘密を話す皮切りを作っておかないとね。

まずは交渉。

そして、交渉が上手くいけば私と神崎の”どちらも失わない”で済む。

それにお姉ちゃんの目的はともかく、その方法は神崎達にとっても最善で、悪くない話だろうからね。

「それで、どうするの？」

「……巡回バスで行く」

「疑ってるの？」

「あんまり世話になるのもどうかと思っただけだ」

と、言っただけでキンジはそのまま席を立つ。

一緒に行くことについては何も言っていないので私はそのまま後ろをついて行く。

何かを話す事もなく、そのまま2人でバス停へと向かう。

だけど時間になってもバスは来ない。

いつもなら神崎の自転車か私の車で2人、ないしは3人で強襲科へと向かってその強襲科から探偵科へと徒歩でキンジは向かう。

しかし、渋滞もないのに巡回のバスが時間からずれているのは……何かトラブルかな？

「……はあ」

と、何に対してかは分からないけどキンジは疲れたような息を吐いた。

その時に一目で高級車と分かる黒い車が目の前にハザードを点けて停まった。

何だったかな？ ポルシェのカレラ・カブリオレ……だったような気がする。

詳細は覚えてない。

価格が1000万ぐらいするのは覚えてるけど。

幌ほろが自動的に開きながら、外国車であるため歩道側にある左の運転席の窓が開いて、

「やはりトオヤマか……それと、ミス・シラノだったかな？」

サングラスを軽くおでこの方へと外して顔をのぞかせた。

「どうも、ミスタ・ワトソン」

そのまま私は軽くワトソン君に挨拶をする。

「2人とも、バスを待っているようだけれどバスなら来ないよ。この前の交差点で

強襲科アサルトの生徒達が車内で乱闘して、騒ぎを聞きつけた蘭豹がバスを素手で横転させたか

らね」

相変わらずのゴリウー系教師だよ。

「またしても男の寄り付かない武勇伝を作り出してしまおうとは……」

ワトソンの説明でキンジは顔が引きつる。

でもまあ、時間的に充分徒歩でも間に合う。

「仕方ない、歩いて行く？」

「そうだな」

と、私の提案にすぐにキンジは同意する。

「ただどこにワトソン君は待ったをかけた。」

「乗りたまえ、ミス・シラノ。英国紳士として送っていくよ」

紳士的な対応痛み入ると言いたいところだけど……そんな親切心で動いているような目には見えないね。

ドアのロックが解除された音が鳴ってからキンジの顔を見れば、何か嫌な感じを覚えている風に見える。

「またあとでな」

「ただどこでそれだけ言ってキンジだけは先にその場を去って行った。」

さて、正直なところイジリ甲斐がありそうというだけで、ワトソン君自身に興味はないので切り捨ててもいいんだけど。

「ここは一つ、観察させてもらいましょうか。」

「じゃあお言葉に甘えまして」

運転席と助手席しかないその漆黒のポルシェに私は乗り込み、そしてドアを閉めればそのまま幌が自動で閉まっていく。

完全に閉まったところでワトソン君は手慣れた感じで車を発進させた。

「こんな高級車に乗るなんて生まれて初めてだよ。なんだか、物怖じしちゃうね」

最初は当たり障りのない話題を出す。

おそらくだけど、何かを知りたいなら向こうからアプローチしてくるはず。

これに対してワトソン君は、爽やかな感じで普通に返してきた。

「そう緊張する事はない。所詮は道具だよ」

「それは庶民的な感覚じゃないね」

「ボクと君とじゃ住んでる環境が違うからね。それはそうだよ」

私を下に見てる訳でもなく、かといって対等には見えていない。

まるで値踏みしているような言い回しを感じる。

仕方ない、イ・ウーでも肝心なところは掴ませない感じだったし……私から少し踏み出すか。

「キンジのこと、気になる？」

「……どうしてそう思うんだい？」

ワトソン君は前を向いたままそう返す。

「英国紳士関係なく、君があつたワトソンの子孫であるなら……目的は神崎さん、そしてそのパートナーであるキンジだろうからね。で、私を乗せたのも彼のことが聞きたかつたから……私を車に乗せたのはそういう意図があると踏んでただけで、違つたかな？」

「……キミは聡明だね、ミス・シラノ」

隠すつもりはないらしい。

ワトソン君はそのまま言葉が続けた。

「なるほどね……キンジのこと、気に入らない？」

「逆にキミはどうなんだい？ 彼と元はパートナーだったのに、アリアにその立ち位置を許しているのは何故なのか……ボクはそこが疑問だよ」

質問に質問で返されるのは困つたものだね。

だけど、キンジに対して好印象を持つてないつてのは分かつた。

まあ元々真面目でお堅いエージェントつて感じだったから、女たらしのキンジが気に入らないのは別段不思議ではないけど。

義理堅いつてだけで、キンジは真面目か不真面目かで言つたら不真面目な部類だからね。

筋は通す、けれどもそれ以外には無頓着。

と、キンジのことは今は置いて——

「今は彼女に彼が必要つてだけ。だから私は一步引いてるだけだよ。結局のところ家柄的に長年の付き合いがあるワトソン君としては、キンジに対して不満かな？」

「——勿論だとも」

どうやら感情も隠すつもりはないらしい。

ハンドルを握る手に力が微妙に入ってるのが分かる。

相変わらず感情的なんだから……イ・ウーで私にからかわれた時もよく手が出そうになつてたし。

ただまあ、腐つてもエージェント。イ・ウーにいた時は潜入目的もあつたから大事な一線は越えなかつたけど。

そのまま交渉とばかりにワトソン君は口を開いた。

「不満はあるけどそれとは別に、ちよつとした事情があつてね。キミに協力して貰いたいんだ」

何かを切り替えるように冷静になり始めたね。

お得意の工作か。

イ・ウーでは私には負けるけどその根回しの良さと陰湿さは認めてるよ。

「込み入った話をする、イギリスでの問題だね。アリアをこちらにいさせることに対

して不満の声が高まっている。だから一度、こちらに戻ってきて欲しいのだけれど話をする機会がなくてね」

そして、早くも私の察しが良い事を利用するか。

「つまり、キンジと神崎さんを一時的に遠ざけてその機会を多くして欲しいと」

「少しだけで良いんだ。ボクもこちらに来て日が浅くてね。まだ”やること”があるんだ」

「まあ、イギリスの問題なら仕方ないね。やってみるよ」

私がそう話をしめたところで、強襲科の近くへとちようど停車した。

扉を開けて、ワトソン君に一言。

「送ってくれてありがとうね」

「英国紳士として当然だよ、ミス・シラノ。タダで頼むのも何だから、今度お礼をするよ」

さつきまでの怒りの混じった表情はなく、ワトソン君は柔らかな笑みを浮かべてそれだけ言った。

「別にこれぐらいお安い御用だよ」

私も柔らかな笑みを浮かべて扉を閉め、私が車から離れたのを見てからワトソン君はすぐに車を発進させた。

さてと……具体的に何をするかは知らないけど。

というか具体的な話はしてなかったね。

色々掘り下げようと思えば、掘り下げられた。

でも、どういう根回しをするかは予想がつく。

だからと言って、別に邪魔をするつもりはない。

むしろ、私もキンジと話をする機会が欲しいとは思ってたからね。

気の長い先の話にはなるかもしれないけど。

いつも通り、私はこれからの楽しみ方を考えながら強襲科へと向かうのだった。

83・目は口ほどに

さて、ワトソン君に頼まれはしたものの。

要は神崎とキンジが一緒になる時間を減らせばいい訳で……

まあ、今は神崎と顔を合わせづらいキンジのことだから私が誘えば素直に付いてくるだろう。

と、いう訳で4時間目が終了して昼休みになったのでキンジを探す。

渡す物もあるしね。

食堂前にいけば来るかなと思い、待ってみれば案の定。キンジが来たけど、何故か鼻をさすりながら来た。

どっかでぶつけでもしたのかな？

そして、キンジも私に気付いて軽く手を挙げてアピールする。

「こんなところで何してんだよ。昼飯の待ち合わせか？」

キンジにしては珍しく勘の良いことで。

ちよつとクス、と笑いながら私は――

「まあ、そんなところ」

と言ってキンジに一つ包み袋を見せる。

しかし、本人は何だこれ、と首を傾げる。

「……何だよ、これ？」

「何って弁当だけど？ 中学の時もちよいちよい作ってたでしょうに」

「いや、そうだが……また急だな」

「誰かさんの財布の中身が潤ってるなら別に用意する必要もなかったんだけどね」

私の言葉にキンジはぎくりと、顔が少し強張った。

やっぱり、予想通りの金欠だったね。

イ・ウーでお父さんと戦って、レキの狙撃拘禁によって依頼も受けられずに修学旅行に突入し、そのままココ三姉妹達と戦闘して出費ばかり。

ここ最近はキンジが依頼をやっているところを見たことがないから、金欠に陥るのも当然の帰結だよ。

「最後に任務受けたのいつだったの？」

「あー、カジノ警備の時だな……」

「……話を色々和省くけど、結局いるの？ いらないの？ 貸しとかにしないから」

「ありがたく頂くよ」

キンジはそう言つて私から包みを受け取る。

周りの男子は恨めしそうな視線がちらほら。

キンジはこのまま食堂に行くのに少し嫌な予感がしてるのか、歯切れ悪く提案してきた。

「あー、場所を移すか？」

「その案内はキンジに任せるよ。人目につかない場所は私より詳しいでしょ？」

「さり気なく馬鹿にしてやがる……」

「ぼつちは事実でしように」

いつもみたいに軽口を叩きながら私達はその場を離れる。

——で、屋上に到着。

まあ、昼休みで屋上に来る人はそんなに多くないだろう。

次の授業とかも控えてるし。

適当に端の転落防止柵の近くに腰掛けて、私が気付いた事を聞いてみる。

「ところで、鼻が赤いけどどうしたの？ どつかぶつた？」

「ちよつと体育の時にバレーボールをぶつけられてな……」

「ワザとじゃないんでしょ？ まあ、故意に出来るほど器用ならそれはそれで感心するけど」

と言ったところでキンジは少し黙る。

その反応だと、故意にやられた感じかな？

誰にやられたのかは……何となく予想は出来る。

「まあ、ともかく食べてよ。金欠であるのを見越して作ってきたんだから」

「財布事情まで見透かされてることに、俺は悲しみを覚えるけどな」

哀愁漂う感じで言いながらキンジは包みを開ける。

何を今更って感じだけどね。

しかし、ワトソン君の陰湿な工作がもう始まってるとは。

工作というかただの嫌がらせだけどね

陰湿って言えば私も人のこと言えないけど。

「そう思うんなら金銭管理ぐらいしつかりしといてよね。どうせなら財布の管理も私がしてあげようか？」

「お前に任せると財布の紐と同時に俺の首も締まりそうなんだが……」

と、キンジが目を細めて言ってきた。

ふむ、それもいいかもね。

「いつそのこと、私に何もかも任せて——いや、それじゃあ人形になるだけだからやっぱり却下だね。」

「そう思うんなら、さっさと金銭関係の処理は済ませなよ。前も言った気がするけど、本格的に金欠って呼ぶよ?」

「勘弁してくれ」

キンジは嫌そうな顔をしながら、そのまま昼食をとる。

私もそのまま用意してたもう一つの弁当を隣で静かに食べて、昼は過ぎた。

——翌日。

武偵校では2学期でも月に1回はプールがある。

それは女子でも例外じゃない。

男子とは時間をずらして、2年A組の面子でいつも通りの準備体操。

そう言えばワトソン君は男子組だけど、プールはどうするつもりなのだろうか?

神崎みたいに泳げないで通すつもりかな……

ま、どうでもいいんだけど。

「あー……」

ダメだなく、やっぱり色金のせいで若干しんどい。

泳ぐ気も起きない。

薬で誤魔化し過ぎたかな。

衝動はこなくても、虚脱感がヤバい。

仰向けで屋内プールの天井を見ながら、水の揺れに身を任せる。

水泳の授業は終わり、今は水泳の自習みたいな感じ。

何してるかって聞かれたら、海とかに投げ出された時に長く水面に浮かぶ練習としておこう。

実際に重りもつけて、少ない力で浮けるように工夫しながら手とか足を上手く使ってるし。

「器用ね、アンタ……」

ツインテールを解いた神崎がプールサイドに立って私を羨ましそうに見降ろしてる。

「空気を吸ってれば沈むことないハズなんだけどね……何でいつもホラー映画みたいの水の中に引きずり込まれる感じで沈むのか不思議だよ」

「人は浮かぶように出来てないのよ！ あんた達がおかしいの！」

なんとという暴論。

神崎は恥ずかしそうに声を荒らげて主張する。

「おや、自分はおかしくなくて私達がおかしいと……つまり自分は普通って言いいたいんだ」

「そ、そうよ。あたしは普通よ」

「じゃあ、お手本を見せて欲しいな〜」

少しにんまりと笑いながら、私は提案すると神崎が身を少し引く。

「絶対に浮き輪無しじゃ入らないわよ……」

「人が浮かぶのがおかしいなら浮き輪無しで入っても問題ないでしょ？」

「浮かぶのがおかしくても沈みたくはないわよ！」

ふむ、神崎にしてはいい返し方だ。

……あ、そうだ。

そこでもいつも通りに私はいらん事を思いついた。

一芝居してみよう。

「ヤバ、あ、足が——」

と、私は足がつった演技をしてそのまま沈む。

「え、ちよつと霧?！」

沈む間に神崎が少しだけ驚く声を上げるのが聞こえて、そのまま私は水の中へ。

ちよつと空気を抜けば重りで自然にプールの底面へと私は沈んでいく。

水面の向こうで神崎がそのまま何やらあわあわしてる。

段々と水底に沈んでいって、水の天井が遠くなる。

ふふ、驚いてる驚いてる。

この屋内プールは中央に行くほどに深く作られてる、まあ、2メートルぐらいで別にそこまで深い訳じゃないけど。

溺れるには十分な深さだね。

そのまま水底に背中がくつつく。

ちよつと水圧が微妙に心地よくてこのまま寝てしまいそう。

まあ、今の私の状態からすればその可能性があるのがシャレにならないんだけど。

そろそろ出よ。あんまり時間を掛けると変に大騒ぎになりそう……というかしそうだし。

そう思つて水底で起き上がろうとすれば何かが飛び込んでくる。

と思えば、我が妹の理子だった。

水でぼやけてるけどちよつと必死な感じで、何かを恐れてる感じの表情をしてる。

余裕がないのが丸わかり。

そして、理子が飛び込んだことで私は困ったことに演技だと茶化すことが出来なくなつた。

救出されて、演技でしたなんてとても言えない。

理子の表情からして絶対に怒る。

他の連中が怒ろうが構わないけど、妹が怒るのはちよつと勘弁かな。

なので私は手足の重りを外して理子の手を握って、そのまま引き上げられる。ここからは手だけでも充分に泳げる。

そのままプールサイドに身を乗り出して、顔を出す。

「危ないところだった」

「バカじゃないの！ 全く、手を貸しなさい」

口ではきつくそう言いながらも、差し出された神崎の手を握る。

それからプールサイドへと引き上げられる。

「すぐに保健室に行きなさい、歩けないなら送っていくわ」

「あたしが行くよ」

プールサイドに上がってきた理子がすぐに名乗りを上げた。

近くに置いてあったタオルを拾い上げて、軽く体と髪を拭き始める。

「そう、なら任せるわ」

「悪いね、理子」

で、私が言葉を返すと――

「お安い御用だよ♪」

いつもの調子で理子は笑顔で答えようとしていた。

だけど、お姉ちゃんには分かっちゃうんだよね

微妙にぎこちないよ。

他の人は気付いてないだろうけど。

そして、2人きりになった瞬間――

「……………」

この無言だよ。

だけどまあ、ここはちよつとしたカマを掛けよう。

さっきのはそのための演技ってことで。

「最近余裕ないけど、またお姉ちゃんに隠しごと？」

肩を貸してる理子がピクリと反応する。

うーん、動揺の具合からして精神的に結構病んでるね。

平気なら理子はこの程度の問い掛けで反応はしないし。

まあ、知ってて聞いているから私の場合、性質たちが悪いんだけど。

妹の口から色々と聞きたいって部分はある。

でも、今は問い詰めるべきじゃない。

むしろ必要なのは――

「約束を守るまで、私は死にはしないよ」

そんな安心させるための言葉だろう。

私がいつもの笑顔を向けて理子の顔を見ながら言つてあげる。

そのままこつちに顔を向けなかった理子に届いたかどうかは分からない。

けど……横から少しだけ見えた。

細められた目が、嬉し気で、少しだけ潤んでいるのが。

目は口程に物を言う、つまりはそれが答えなんだろう。

それからワトソン君は変装食堂リストランテ・マスケのクジで『女子制服（武偵高）』を引き当て、あえてそれを見せて自分が女性であるというのを怪しまれないようにした。

と、同時に最近は女子の人気を持つていつている事に嫉妬している男子の態度も軟化した。

男だろうと可愛ければ何でもいいんだらうか……

男心のよく分からない部分だよ。

理子の持つてる漫画やアニメで女の子みたいな可愛い男——『男の娘』なるジャンルが存在するのは知ってるけど。

というか日本人、変態率が高い気がするのには気のせいかな？

とまあ、そんなこんなで本格的にワトソン君はクラスの注目の的で、信頼や信用を獲得した。

対して社交性のないキンジは、言うまでもなくクラスに居場所をなくしつつある。金欠で装備の補充もままならず、ご飯も満足に食べられてないキンジは色々と弱体化してるね。

今この状況でキンジがワトソン君に対して、怪しいだの疑念の声を上げたとしてもそれは嫉妬から出た言葉だと流されるだろう。

この状況はある意味では私にとつては感謝すべき状況かな？

キンジとの時間が多く取れるし。

まあ、何にしても安らぎの時間は必要だよね。

◆ ◆ ◆
夜、俺の玄関の扉を開けようとすると。

なんだ……？

カギは確かに閉めたはずなのに、開いてるぞ……

こんな時に空き巣か？

と、俺はベレッタを構えて静かに玄関を開けるとそこにあるのは見覚えのある綺麗にそろえられて置かれた靴。

思い当たるのは——アイツしかいない。

そのまま銃を仕舞ってリビングに向かい、扉を開けてダイニングの方へと目を向ける

と。

「お帰り」

いましたよ、霧お母さんが。

昼の弁当の件と言い、本当に母親みたいになってきてやがる。

今は調理中なのか、キッチンでエプロンを着けてる。

「何でここにいるんだよ?」

「いない方がよかった?」

「そういう訳じゃないが……どうやって入った?」

「私も実は、合鍵持つてるからね。白雪さん達が持つてて私が持つてないと思っただけ?」

言いながら霧は、キッチンから俺に向けてどこからともなく指先に引っ掛けられた鍵を見せつけた。

俺のプライベートはどこに……

いや、ほとんど霧には筒抜けで、プライベートなんて無いようなもんだけどその現実を思うと悲しくなってくる。

「それに部屋主がいらないのにお邪魔するのもあれだと思つて、使わないようにしてんだけどね。ちょうど出来たから手伝つて」

言いながら霧が何やら良い匂いの鍋を持ち上げた。

仕方ないとばかりに食器棚から大きめの皿と他にもご飯用のお椀と箸を出してテーブルに並べる。

それから皿に盛りつけられたのは、肉じゃがだ。

随分と家庭的なのが出てきたな。

そして、さらに出てきたのは豚の生姜焼き。

おまけに豆腐のサラダ。

「美味そうだ」

「缶詰よりかは健康的でしょ?」

「……………」

「何で知ってるのかって感じだね。購買では野^{レシ}戦^ン食の半額セールをやってた。しかも、それはカップ麺を買うより安い上につき最近見た時、一角が結構減ってたからね。長期間の任務を受けてる感じの人はいなかったし、この時期にそれが必要な人は自然と限られてくる。どうかかな?」

相も変わらず頭の良いことで。

凶星なので黙秘を決めてちよつと呆れた顔を見ると、霧はいつもの笑顔で返してきた。た。

「とまあ、そんな推理は置いて、ご飯にしよう。独り飯も缶詰も飽きてきた頃だろう

しね」

そのまま霧がお椀を2つ持つと、ご飯を盛って、きてくれた。

「いただきます」

久々のまともな飯に舌が唸る。

ちよつと濃いめだが、俺の好みだ。

こういうところ白雪みたいだよな……姉っぽいというか。

「最近のニュース、ロンドンの話題多いね」「みたいだな。イギリスの犯罪率が微妙に上昇してるらしいな」

と、食事をしながらテレビを見て、他愛もない雑談をする。

食事が終わり、食器を霧が片付けてるところで俺はソファに座ってベレッタの整備をする。

金欠なので壊れたら整備に出すお金がない。

しかも完全分解の整備とかになったら値は張るだろうし、今の内に整備しておこう。いざという時に使えないんじゃ、目も当てられない。

特に俺の場合はベレッタを違法改造してるので通常の物より部品数も多い。

それこそ、精密なプラモ並だ。

なので時間もそれなりに潰せる。

「その様子だと、お風呂はあとでいい?」

と、霧が聞いてきたので――

「ああ……」

整備に集中してた俺はそう生返事気味で返す。

「じゃあ、先に貰うね」

「ああ……」

………。

――待て、今さっき霧は先に貰うって言ったが……

まさか――!?

そう思った時には既に遅かった。

風呂場からシャワー音がする。

あ、あいつ?! まさか、今日は泊まるつもりか!?

ま、まあ霧のやつならそんなに俺に危ない事はしてこないだろうが……

それでも風呂上りの女子なんて俺のヒス要因の中で危険な部類に変わりはない。

しかも、女子が入った後の風呂は特有の匂いスメルがして、これもまたヒス的によくない。

今日は諦めて朝風呂にするか……

そう決め込んで俺が完全分解したベレッタを組み終わって、一息つく時に考えてしま

うのはワトソンの事だ。

言いたくはないが、あいつは男の癖に女の腐ったような嫌がらせをしてくる。

バレーボールの時もそうだし、俺以外の連中をホームパーティーに誘ったりしてはクラスでの好感度を上げていつている。

それにより、俺はクラスで孤立しつつある。

まあ、元からネクラなんてあだ名がついてたし浦賀沖の事故以来、武偵から身を遠ざけようとは考えてたからそこは別にいいし、独りには慣れてる。

だが問題は、俺は段々とサポートしてくれる仲間との交流を断たれつつあるのは間違いない。

アリアとも遠ざかるばかりだ。

『眷属』^{グレナダ}との戦いが控えてる今は、仲間割れを起こしてる場合じゃないつてのによ。

『戦役』——未だに霧にはこの事を話してはいない。

バスカービルの一員ではある。

だが問題は、あいつにはアンダーグラウンドな関係や因縁が一切ない。

あつても、ジャンヌを逮捕した時ぐらいだろう。

だからこそちよつとばかり気掛かりなんだよな……

正直に話しても問題ないと思う。別に話さか話さないかで迷ってる訳じゃない。

旅は道連れなのって言って普通の手助けしてくれるだろう。

ただ、それにあまり巻き込みたくないって言うのが俺の本音だ。

いずれにしても頭のいいあいつのことだから、バレるのも時間の問題な気もするが。

「キーくん、怖い顔」

そんな鈴を転がしたような声に、ちよつとだけため息を吐く。

それから真横を見ると、やつぱりだ。

「霧と同じで神出鬼没だな、理子」

「動じないね。キーちゃんてだいたい慣れてる感じ……理子としてはもうちよつとリア

クションが欲しいところ」

そのまま、俺の隣にぼふつと腰掛ける。

「しかも、そのキーちゃんはお風呂にいるみたいだし。覗かないの?」

「覗かねえよ。俺を武藤達と一緒にするな」

一度だけ霧の着替えを覗こうとして武藤含め見事に罠にハマられた時があったな。

で、霧はそれを脅しの材料にして……まあ、あいつらのその後はひどく哀れだった。

装備とか弾薬とか車の燃料代とかは武藤達持ちで、しばらくは霧のサポーター(自腹)

をやらされていた。

しかも、霧は遠慮せずに任務を受けまくってた割には報酬の取り分は全部自分だけと

か意外とえげつない事をしてやがった。

結局は武藤達の自業自得だから、同情はしなかったけどな。

「何しに来たんだよ……慰めなぐさならいらぬぞ」

「それはキーちゃんに間に合ってそうでもんね」

「別に慰められてねえ」

「でも、食事は堪能してみたいだけ」

チラリと理子がキッチンの方に顔を向け、干されている食器に注目してる。

目ざといな……相変わらず。

ちようどその時、霧が風呂上がりで部屋に入ってきた。

「理子、来てたんだ。いらつしやい」

「どうも、お邪魔シマウマ」

なんだその挨拶は……

しかも霧は『いらつしやい』なんて言ってるが、ここはそもそも俺の部屋……

もうやめておこう、これ以上は考えるだけ不毛だ。

「夕食は食べたの？」

「ん〜？ 今、ビニ弁をチンしてるところ」

と、霧に対して理子が答えたところでキッチンから電子レンジのチン、という音が聞

こえる。

いつの間にいれてやがった……全然気付かなかったぞ。

そのまま理子は「お、できたできた」と言つてソファーからびよいんと立ち上がつてキッチンの方へと走つて行く。

「作り置きだけど、肉じゃが食べる？」

「食べるー」

霧の問いかけにそんな気の抜けた返答が聞こえた。

「冷蔵庫にあるからねー」

「はーい、ママ」

ものすごい自然にママつて言つたな、理子のヤツ。ワザとだらうけど。

今の一連の流れは確かに母親のそれっぽかったな。

やれやれつて感じで、そのまま霧は俺の隣に腰掛ける。

同時にきましたよ、風呂上りの女子特有のシャンプーの匂いが……

しかもちやつかり霧はパジャマを着てやがるから、最初から泊まるつもりだったな、こいつ。

チラリと横目で見れば、風呂上がりで上気した頬に微妙に濡れた髪が艶めかしい。

それからちよつとだけ「ふう」と息を吐くと、こてんと俺のいる方向とは逆に倒れた。

「寝るならベッドにいけよ。風邪引くぞ」

「なんだ、心配してくれてるの？」

霧はそのまま起き上がらずに顔だけこっちに向けて聞いてくる。

「俺の部屋に病気で寝込まれたら困る、色んな意味で」

「だろうね……でもま、大目に見てよ。こう見えて実は調子が悪かったり」

「なおさら自分の部屋で休めよ……」

「いつも世話してるんだから、たまには私の世話も焼いて」

「いつお前に世話になった、と反射的に言い掛けたが……結構世話されてるな、俺。色々と気を遣ってくれたり、こうして飯を作りに来てくれたり。」

「なら、それで貸し一つは帳消しか？」

「今日のご飯の分で差し引きゼロだよ」

「だろうな……まあ、そう来ると思ったよ。」

それから霧は少しだけいたずらっぽく微笑み――

「ベッドに連れて行ってってくれたら、そうだね……入学試験に遅れそうになった時に送った貸しをチャラにしてあげるよ」

ニンマリしながら提案してきた。

「つーか……入学試験って……」

「お前、あれ一年前だぞ」

「その一年前の貸しにようやく突入なんだよ」

ついに明かされる貸し借りの返済状況。

おい、まだ一年分も残ってるのかよ。

「別にいいよ？ やりたくないならやりたくないで」

と、霧は勝ち誇ったように笑みを浮かべた。

「やらないとは言ってねえだろ」

言うと同時に霧をそのままお姫様抱っこする。

うう、やべえ……せっかくの返済チャンスとばかりに勢いでやったが……

やっぱり柔らかい脚の感触とか、微妙な胸の感触がしやがる。

しかも風呂上がりだから熱っぽい体温を感じるのが、微妙にヒステリアの血流を刺激

されるな……

霧は俺が断ると思ってたのちよつとだけ驚いて、すぐにニヤリと悪い顔をした。

いらん事を考えてるな、こいつ。

この顔の霧は危険だ。

不意にどんなことをするか分かったもんじやない。

なので、何かされる前に2段ベッドの下に放り込む！

と言つても投げる訳にはいかないので素早くベッドに寝かせてすぐさま、離れる。

「そこまで警戒しなくてもいいのに……」

「するに決まつてる」

「布団は被せてくれないんだ」

「自分で被れるだろ？」

そのまま俺は霧に背を向けて、一度リビングに戻って整備し終わったベレッタを回収してからパジャマに着替えて寝る準備をする。

それから2基ある2段ベッドの右の下——自分がいつも寝てるポジションのところ
で横になる。

明日も早いし、すぐに寝よう。

すぐに布団を被ったところで、ウトウトし始めた俺だが——きし。

ベッドに手を掛ける音にすぐに覚醒して振り返る。

「気付いてももう遅いよ」

そのまま霧が俺の隣にダイブしてきやがった。

「お、お前……狭いだろッ」

「っーか、近いっ。」

お姫様抱つこの時に何かしてくるかと思つてたが、狙いはこつちか。

ベッドの出入り口は霧が今いる一方しかない。もう一方は壁だ。つまり、既に袋のネズミ状態。

そのまま俺の隣に横たわる霧がじりじりと寄ってくる。

「寄ってくるなお前、調子悪いなら寝てろよ」

「私が悪い顔してるのに無警戒なキンジが悪いんだよ。私が殺人鬼ならもう既に首を二気にやってるね」

などと、親指で首を切るジエスチャーをする。

「お前が殺人鬼なんて末恐ろしいが……それとこれとは話が別だろー！」
「そうだね〜」

目を細めてにひ、と笑いながらも近付いてくるのは止まらない。

や、やばい……壁際に追い詰められたぞ。

「どうしたの？ そんなに怯えちゃって」

いたずら気質が働いてやがる。

かなり上機嫌な笑顔だ。

理子のいたずらに比べてこいつのは性質たちが悪い。

直接的に俺に触ったりはしないが、挙動で色々と誘惑してきやがる。

俺は霧からの情報を遮断するために背を向ける。

「それは甘いねーキンジ」

などと言いながらも、霧はこっちに近付いてくる感じはしない。

……あきらめたか？

「ちよつとだけ、真面目な話をしてもいいかな？」

いきなり切り替えるように霧は、そう切り出した。

さっきの発言からして何か裏があるんじゃないかと思つたが、ここは素直に聞いてみるか。

口調もいつもの陽気そうな軽い感じじゃない。

「私の秘密を少しだけ、話そうかなってね」

「秘密？」

俺は霧の方を向かずに背中越しで聞き返す。

「私は探してるものがあるんだよ。それが家族を救うのに必要なモノで……それがあればお姉ちゃんは、助かる」

「なんでそれを俺に話すんだ？」

「そりゃあ、関係があるからね。神崎さんも助かるかもしれない」

「それなら、別に普通に協力してやるよ。お前の家族を救えてアリアも助かるっていうなら、それこそ一石二鳥だしな」

「まだ探しモノが何か言っていないのに安易に承諾していいの？」
「貸し借り以前に他でもないお前の頼みだからな」

と、俺は答えたものの……アリアが助かるつてのはどういうモノだ？

アリアの母であるかなえさん関係か？

アリア自身に問題があることと言えば一つ思い当たるのがあるが……

「ありがとう、キンジ」

霧は静かにそう言う。

まあ、こいつがそれを知ってるとは思えないしな。

「探しモノは何なんだ？」

「それはまだ秘密かな？」

肝心なところじゃないのか、そこ……

まあでも、いつもあんまり詮索してほしくない時は聞いてこない霧に倣^{なら}つて俺はそこ

で話をやめる。

まだ、つてことはいずれちゃんと言話してくれるだろう。

「それじゃ、私は戻るね」

その一言に俺は息を吐いた。

ようやく、女子と同じ布団なんていう危険なシチュエーションから解放される。

レキの時は未遂で終わったが、やっぱり生きた心地はあまりしなかったな。

そう思っていたら——チュ、と霧に頬に口付けされた。

「油断大敵♪」

思わず振り返ると霧がしてやったりの顔でそれだけ言って、ベッドから出ていった。突然のことで俺は目をパチクリさせてその背中を見送ったが……

段々と、顔が熱くなつてきやがった。

クソ……してやられた。

◆

あ、あま——い！

このネタ古いかな……

寝室に入る前に家政婦は見た状態で扉の隙間から様子を見てたけど、何とも言えない甘さだよ。

さつき食べた肉じゃがのあと味が、さらに甘く感じる。

見てるこつちが恥ずかしいことをしれつとやるよね、お姉ちゃん。

まあ、それを確信犯でやってたりする時が多いから、人が悪いとか言われたりするんだらうけど。

って言うか、お姉ちゃんが寝てるポジはあたしのところなんだけど……どうしよう？

ゆきちゃん（白雪）のところで寝るしかないかな。

そう思つて取りあえず扉を開けて、ゆきちゃんがいつも寝てる右上に行こうとしたら……左下で寝てるお姉ちゃんがちよいちよいと、こつちを手招きしてる。

だけど、あれはダメだ。

だつてお姉ちゃんの目が捕食者の目をしてる気がする。

優しげな顔をするようには見えるよ？

けど、あれはフェイクで……詐欺師的な感じの外は天使で中身は悪魔みたいな。

捕まったら最後、色々と吸い出されそう。

なのでここは逃げの一手だよ。

そのまま無視するのもあれだから、ゴメンつて感じでジエスチャーしつつ上のベッドに乗り込む。

もし乗り込んできたなら、掛け布団を防壁替わりにしつつ頭の方から逃げよ。

お姉ちゃんが人質じゃなかったら正直に話したんだけどなく……相変わらず、上手くいかない。

横になつて布団を被つて、このまま静かに――

あれ、この掛け布団こんなに重かつたつけ？

なんか重りでも入つてる感じが……

「……ッ」

「わーい、気付いたらお姉ちゃんがいつの間にか理子の上のに覆いかぶさってるー
 Qu'est-ce qu'il se passe?!
ど う な

マジでいつ来たんだよこの人?!

音なんてしなかったし、着地の衝撃とかなかったし。

「たまには一緒に寝るのもいいよね?」

いつもならいいけど、今はよくないです。

布団の上に乗っかってる時点で逃走プランが早くも破綻した。

変なところで無駄にアサシンスキル発揮しないで欲しいよ。

まさしく技術の無駄遣い……

なんて思ってる内に布団に入ってきた。

「それじゃあ、おやすみ」

と言うと、お姉ちゃんは普通に隣で寝始める。

何もしないんだ……

さっきの嫌な予感は一切。

理子の勘違いだったのかな……??

なんて思っていると唐突に後ろから抱き締められ、頭を撫でられる。

ちよつと、びっくりしたけど……優し気な手つきにリラックスしていくのが分かる。簡単に人の心を安心させたり不安にさせたりするんだから。

本当に、人が、悪いよ……

つかれてたの、かな？

すごく……ねむい……

そこであたしは、眠りの温もりへと落ちていく。

”約束”は守るからね

最後にそんな言葉が聞こえた。

84：希望を持たせるほど

早朝——気怠さが残る目覚め。

これは眠いかしんどいとか、そんな気怠さじゃない。

最近はいつもこれだからね。

無理して我慢してることなんだろう。

限界ではないけど、レッドゾーン手前のイエローゾーンであるには違いないね。

だけでもまあ、そろそろ色々と動き出す頃だろう。

——この我慢も、一つの楽しみとしておこう。

私は隣で小動物のように寝てる理子の頭を軽くなでる。

ふふ……お姉ちゃんが、ちよつとしたサプライズを用意してあげるからね。

心の中でそう呟いて、私は素早くベッドから降りてリビングへと向かい、着替える。

着替える途中で腕とかを軽く見る。

注射痕は目立たない位置になるべくしてんだけど……あんまり見られたくはないね。

特にキンジには——

女の子なら見た目には気を遣わないとね。それから素早く武偵高の制服に着替える。

もう、3年前かな……中学の3年生の時にお父さんに着物をもらった時は服なんて変装道具程度にしか考えてなかったけど。

今なら見た目に気を遣う理由は何となく分かる。

本当に何となくだけで……あとはまあ、あんまり心配かけたくないかな？

と、それは置いといてご飯を準備して行こう。

クラスで唯一、私だけがキンジの味方。

いや、理子やジャンヌもある意味では味方かな？

神崎は複雑な立場だけど。

どっちにしても、クラスの他の連中は見る目がないね。

ただワトソンの手駒として利用され、踊らされることに気付かないなんて。

まあ、それはそれで外から見てて面白いんだけど。

あとは……リリヤに連絡して、準備の最終段階に移行して貰おう。

実に、愉しみだよ。

「キーちゃんっ！」

寝起きとは言え、お姉ちゃんとは言わないあたりちよつとは精神的に余裕が出来たか

な？

理子が目をこすりながら寝室から出てきた。

「おはよ、朝ご飯食べたなら退散しよっか」

「うん……」

と、生返事気味に理子は答えて洗面所に向かう。

そのまま着替えた理子と共に朝食を食べて、キンジへの朝食について書置きしたところで部屋を出る。

そして、男子寮の1階の出入り口付近で神崎と出くわした。

「おはよ、神崎さん」

「霧……理子も、なんでここにいるのよ」

目をパチクリさせたと思ったら、私の挨拶に不機嫌そうな顔をして返した。

「何でいるって言われたら、簡単な話だけどね」

私はそれだけ言って、明確には答ええない。

ただ付け加えるとすれば――

「私はキンジの味方だから」

笑顔でその言葉を告げると、神崎は何かを後悔してるような顔。

貴族の立場とワトソンの方を優先してる事実にどこか気付いてる感じだね。

こういう時、身軽な人は有利なものだよ。

「そう言う自分こそ、なんでここに——聞くまでもないよね」

「別に、何でもないわよ……」

何もなかったら女子が男子寮に来る訳ないでしょうに。

相変わらずウソが下手だね。

この先そんなので生き残れるのやら……

まあ、仮に生きてても心が先に折れちゃうかもね。

「それじゃ、私達はこれで。早めに問題は解決しておきなよ。キンジと神崎さん、いつものごとくどつちにも原因があるだろうけど」

それだけ気軽に告げて私と理子はその場を去る。

神崎が遠ざかったところで理子が聞いてくる。

「ねえ、キーちゃんは結局いつまでキーくんの味方でいるの？」

と、どこで敵対するのかを遠回しに聞いている感じだね。

チームを組む時もそんな話した気がするけど……

実際問題、神崎がお姉ちゃんの要求を呑む気がないのならそれが明確な宣戦布告。

ただまあ、それは“敵対する理由”であってキンジの味方を“やめる理由”じゃない。

本人は覚えてるかどうかわからないけど、パートナーである限りキンジを守る約束はあの夏で終わった。

チームは組んだけど、パートナーとは違う。

いつまで味方であるかって言うのだったら、そうだね

”私”が死ぬ時、かな？”

『バンディ宣戦会議』でも明確に忠告したし。

「ま、そこは気にしないで良いよ」

まだ先の話だからね。

それに彼らは”謎”にすら、まだ辿り着いていない。

今は謎が起きるまでの予兆と言ったところかな？

その私の言葉に理子は不安げな視線を向けている。

いや、別に私が死ぬんじゃないよ”白野 霧”が死ぬっていう意味で言ったつもりなんだけど……

この様子だとその意味で通じてないっぽいね。

ついこの間には約束を果たすまで死なないって言ったのに。

仕方ない……自殺願望がある訳じゃないけど、”証拠”を見せるしかないか。

ちよつとしたネタバレ演出をしてあげよう。

今まで証拠を出さない私が証拠を見せる、ね。
まあ、それも良いでしょう。

◆ ◆ ◆
相変わらずお姉ちゃんは何考えてるか分かんない。

いや、自分が楽しくなる事に関して余念がないのは知ってる。

特に人を観察し、精神的あるいは物理的……どちらの中身もお姉ちゃんはいつも見たがつている。

人間、人外問わず善であれ悪であれ、なぜ中身は一緒なのか？

腹黒いという言葉はあれど、実際に人の腹は黒くない。

拷問なんてするのはこの地球上で人間だけ。

人の残酷さを分けるものは何なのか？

なんて……妙に哲学っぽいことを過去に語って、それがお姉ちゃんにとって人を切り裂いて中身を見る理由だと答えた。

なんであたし……こんな関係ない事を思い出してるんだろ。

まあでも、肉体的なものから精神的なものを見出そうなんてのは狂った考え方なのは間違いない。

お姉ちゃんが言ってるのは、悪人の血は黒くて、善人の血は綺麗な赤色をしている。

考えが歪んでる人は頭蓋骨が歪んでいて、頭のいい人は綺麗なのだ。

極端に言えばそんな感じのことを確かめようとしてるんだからね。

意味なんてない、そう言われてもお姉ちゃんは「だからなに？」って返すだろう。

好奇心で動いてる人だから、自分が納得しなかつたら誰に何を言われても止まること
はない。

どんな姿でも、自分を見失っていない。

ま、ちよつとした憧れなのかもね。

りこりんって、他人の持つてるものを欲しくなっちゃうし。

人が持つてるからこそ価値がある。

——逆に持つてる人がいなくなったら？

そんなのは落とし物を拾うのと一緒。

盗みじゃない。

なんて……盗みの美学を一人で考えてみたり。

……。

……。

ダメだね。あたしってば……キャラがブレブレだよ。

何もかも中途半端。

あたしがいるこの建設途中のスカイツリーみたいに、大事な部分が欠けてる。分かつてるよお姉ちゃん。

お姉ちゃんがよく言ってるように、自分に素直になるよ。

あたしは——お姉ちゃんを失いたくない。

家族を失いたくはない。

もう、独り置いてかれたくなんてないんだよ。

”たとえ自分を失うこと”になっても……

450メートル付近の鉄パイプと鉄板を組み合わせた簡素な階段で待っていると、誰かが上がってくる音がする。

そして見えてくる人影。

やっぱり来たんだ、”キンジ”。

なんとなくそんな気はしてたけどね。

「——キンジ」

あたしがそう呼びかけると、キンジが振り仰ぎ、鉄骨の陰にいるあたしに向かって声を掛けてくる。

「アリア」……！

そのままキンジは話しながら階段を駆け上り、あたしは下る。

「お前、大丈夫か？　ワトソンに薬を飲まされたらしいが——」

「平気よ。ここに着いた時には寝てたから、何が何だかって感じただけだね。あんたこそ、平気？　ここに来たってことは……戦ったんでしょ？」

お互いに階段の途中で合流して、あたしはキンジを窺うように見て、話を進める。

「あんたとワトソン、どっちかが上がってくるとは思ってたけど……そう。負けたのね。上がってこないってことは……まあ、ヒルダとの取引に失敗したんだから仕方のないことなのかもね。そこら辺の話も、もう聞いたんでしょ？」

外堀通りでの戦いから既にワトソンとヒルダは取引をしていた、アリアごと『眷属』に鞍替えするという取引を。

その前にあたしはお姉ちゃんを人質にされ、脅迫されてる。

そして、ワトソンとキンジの戦いを監視していたヒルダは敗れたワトソンがすぐにキンジに助力する素振りを見せた時点で無力化した。

ワトソンは人外との戦いに精通し、慣れている。

何より、イ・ウーでお互いを知ってるんだから最優先で潰すに決まってる。

「……ああ。ある程度はな」

「そう」

あたしは一つ瞬きをして、キンジの袖を掴んで軽く上に引っ張る。

「来て。ヒルダと話すわよ」

「話すつて。俺とお前はヒルダの親父を殺し……ちやいないが、仇かたきなんだぞ？　話が通じる相手なのかよ」

「通じるわ。それに最終的に止めを刺したのはジャックでしょ？　どちらかという恨みはあたし達より、向こう寄りぽかったわ」

実際問題、ヒルダはお姉ちゃんを目の敵にしている。

表向きは自分の実力が上のように振舞っているけど違う。

頭が良いと実力差もそれとなく察してしまえる。それがヒルダの悪いところでもある。

下等だと思っている存在に手も足も出ない。

それ以外でもプライドをそれなりに傷つけられてる。

本命はジャックで、キンジやアリアはお遊戯のつもりだろう。

「それに彼女は計算高いの。シャーロック・ホームズ……曾お爺さんを倒したキンジをそれなりに警戒してらしいわ」

「……買い被られたもんだな」

キンジはそう言つて息を吐く。

買い被りじゃないとは思うけどね。

「来て、キンジ。ただ戦うだけが武偵じゃないわ。交渉の余地があるならして、『師団』^{デイトン}に寝返らせることまでは出来なくても、不可侵条約くらいは結べるかもしれないわ」

そう言っただけであたしはキンジの袖口を引いて階段を上る。

でも、あたしはこの時には思いもしなかった。

あの人を失うことになるなんて。

◆ ◆ ◆

吹きさらしのスカイツリーの第2展望付近からさらに上で、私は高見の見物。

リリヤを連れてくるのはやめた。

前の時は我慢出来たけど、今回は暴走しかねない。

そのために準備だけ進めておくように指示を出して紅鳴館で留守番してもらってる。

私の我慢もここまで……

本来なら成長の機会を奪うっていうのは、あんまりしたくないんだけど。

妹の苦悩してる姿を見て、ちよつとだけ愉しんでる自分がある。

私の切つても切り離せない、悪心、嗜虐心、好奇心。

でも、それ以上に今の状況を気に入らない自分がある。

悪いね、理子。

君の過去との決別の機会、ちよつとだけ奪わせて貰うよ。

本来なら見守ってるのがベストなんだろう。けど、”約束”したからね。

同じようなことがあればあたしは助けに行くって。

既にヒルダは第三形態になっている。

雷を纏い、蒼い稲妻が槍からほとばしっている。

髪をメデューサのように揺らめかせるさまはまるで悪魔だね。

本人は雷を操る神にでもなったつもりだろうけど。

だけど、悪いね。

今の私は神すらも殺すつもりだよ。

人を殺す鬼ではなく、神をも殺す、殺”神”鬼ってね。

そのまま私は作りかけの第2展望台へと向かって飛び降りる。

◆ ◆ ◆

ヒルダの先端の槍の青白い電球が徐々に大きくなっている中、漆黒の人影が俺達の前
に降り立つ。

「クライマックスのところ、水を差すように申し訳ないね」

そんな場違いなタキシード姿で降り立ったのは、あの切り裂きジャック。

上から降りてきたところを見るに、どうやら今までこの作り掛けの第2展望台より上

にいたらしい。

しかし、今になってどうして降りてきた。

「あ、あんたは!？」

アリアも降りてきた人物を確認して目を見開く。

理子も同様だ。

「すまないね。今まで特等席で見えていたが、ちよつとばかり個人的な用がヒルダにあつてね」

などとジャックは気軽に語り、ヒルダに目を向けた。

その瞬間に、ヒルダは肩を揺らし。

「ふふ、はは……ほーっほほほほー」

上品に手の甲を口にやって高笑いを始めた。

その間にも稲妻がまるで風のように俺達に吹きすさぶ。

「今までどこにいたかは明白。だけど今になってどうして来たのかしら？ それも私の

この第3態^{テルツァ}——神となった時に！」

「神……か。古代の話だと、そういう神を殺してきたのはいつでも人間らしい話を聞いたが、さて一介の殺人鬼ははたして神を殺せるのか……うむ、面白い題材だね」

などと、ジャックは面白そうに語り掛ける。

「お前……何しに来た？」

俺も流石に意図が分からず、そう尋ねる。

「なに、借りを返しに来ただけさ。こう見えて英国紳士なものでね」

だがヤツは、表も裏もないとばかりに肩をすくめて簡潔に答えた。

確かに横浜ランドマークタワーでそんなことを言っていたが……マジで返しに来るとはな。

「どうするつもりだ？」

「それを言つては面白くないだろう？」

ジャックに俺は打開策があるのかと聞いてみたが、答える気はないらしい。

だが、ヤツは悠々とヒルダに向かって歩き、立ち止まって両腕を広げる。

「さて、神であるというのなら慈悲というものがあるだろう。私の命一つでどうだ、手打ちにしないか？」

その言葉に誰もが驚愕する。

何を、言つてるんだ……？

自分の命をまるでゴミを捨ててするような感覚で、ヤツは語った。

ただ一つ言える、この状況そんな事を言い出せるコイツは間違いなくイカれていると。

まさかこれが打開策だともいうのだろうか？

俺達にはその心意は理解しようがない。

そんな中でヒルダは再び笑い出した。

「ほほ、ほほほ……ほーっほっほっほ！ 随分な心掛けね！ 遂に私のこの姿を見て、諦めたのかしら！ 私から理子を取り戻すことに……！」

「いいや、別に諦めたわけではないよ。だからこうしてチャンスを待っていたわけだ」
ジャックの言葉に理子が言葉を失っているのが分かる。

——なんで……？

そんな感じの、やり場のない疑問が心の中で渦巻いてるような顔だ。

俺達には既に”謎”しかない。

このジャックという男の存在自体に。

「それとも、こうしてあっさり終わってしまうのは心外かな？」

「ええ、そうね。あまりにあっけな過ぎで、私の憤慨をどこにぶつければいいのか……そのあとを考えてしまうわ。お前には散々にコケにされた事だし、拷問の後に惨たらしく殺してやろうと思っていたの！」

ヒルダは槍を向けて、稲妻をはしらせながら怒っている。

その怒りに呼応して俺達の方にも電気が軽く襲い掛かる。

一体、どれだけの事をされたのかは分からないが……ジャックに恨みがあるのは間違いないみたいだな。

「じゃあ、やらないのかい？」

「まさか……折角の機会よ。不本意だけど——」

そう言つてヒルダは理子の方に槍を向け、

「お前は、最後、よ」

躊躇なく槍の先にある雷の星を理子へと向けた。

そして——

バチ、シューウウー！

そんなよく分からない高音と共に星が閃光となつて理子に襲い掛かる。

「理子！」

俺とアリアが叫ぶと同時に、星は落ちた。

まるで落雷のように星は弾け、理子は閃光に包まれた。

コイツ……やりやがった！

そう思つてヒルダを睨み付けるが、ヒルダは茫然とした顔をしている。

俺はその様子に疑問を覚え視線を再び理子の方へとやると、理子の前に別の人影が見

えた。

そのままシューと、白い煙を立てて倒れる人影。

俺でも、アリアでも、理子でも、ヒルダでもない人影。
ジャック以外の他にない。

あれだけの電撃を受けて生きてるのは絶望的。

脈を確かめる必要もなく、誰もが直感で分かる。

——ジャックが死んだ。

世界的な犯罪者は、呆気なく終わりを迎えたのだと。

「……ヤだ、イヤだよ……ウソだ」

ただ一人、理子だけが悲しんでいる。

この殺人鬼の最期を。

師弟関係なのはジャンヌやブラドの言葉で分かっていた。

だが、理子からすれば涙を流すほどにこの殺人鬼との関係は浅いものではないらしい。

などと俺は、この状況で冷静に分析している。

何故、冷静でいるかは俺自身……分からない。

ただ単純に理解と実感が追い付いていないだけだろう。

どこか、他人事のように感じてしまう。

続いてアクションを起こしたのはヒルダだ。

「ふ、ふふ……ほーっほっほっほー！」

再び高笑いをしだす。

「バカね。死んでしまえば、何も出来ないと言うのに！ ああ、でも……ちよつとだけスツキリしたわ。ちよつとだけ、だけど。もつと苦しめてお前の顔から道化のような笑みを奪って、血を抜き取りながら生きた輸血パックにでもなつてもらおうと思つていたのに。まあいいわ……その役割は4世、あなたにしてもらおうかしら」

などと、ヒルダは蒼い雷の中から理子に目を向ける。

だが、理子には既に誰の言葉も届きそうにない。

何か大事な家族を失つたような、そんな顔をしている。

瞳に生氣はない。

もう、どうでもいいとばかりにジャックの死体の傍に近寄り、頭を垂れてる。

「ウソツキ……」

ただ一言、それだけ言った。

その言葉と同時に再び変化が起きる。

ジャックの体が、なんだ……光り、始めてる？

しかもその光は段々とピンクから緋色へと輝きを増していく。

その色に俺は見覚えがある。

そんな、バカな。

この色は……ボストーク号でも、バンデイヤール宣戦会議とやらでの会合場所でも見たこの輝きは――

そのままジャックの体を光が包み込んだかと思うと、ヤツの指先が動き始め、そのまま両手を地面につき、ゆっくりと立ち上がる。

マジかよ……

そのまま体の調子を確かめるように軽く首を回して、ジャックは再びヒルダを見る。

「まさかとは思っていたけど、やはりお前――」

「なるほど、そう言うということは……予想はついていたのか」

ヒルダは確信を得たとばかりに言葉を発し、ジャックは死んだとは思えない感じに話し出す。

「まあ、つまりはそういうことだ。私は保有者だよ。これが緋々色金の不老不死の秘密、時間を巻き戻し、自分が死ぬ前――生きていた時間へと戻る。まあ、私も初めて使ったのだがね」

それはつまり、こいつは何をしても死なない。

ある意味こっちにとっては絶望的な話を普通に語り明かした。

立ち上がったジャックは、さつきとは打って変わって変わって笑みが消えている。

その表情にヒルダは雷をままとつてるにも関わらず後ろへと下がった。

ヒルダと同じように俺も少しばかり震える。

雷に照らされるジャックの表情を見ていると、まるで自分が直接対峙してるような錯覚を受ける。

雷以上に肌がざわつくこの感覚は、殺気……なんだろう。

クソ、死んで復活するなんて今までで一番非現実的な光景を目にしたが……これは思っていた以上に奇妙な光景だ。

キリストみたいな神々しい復活劇とは遠くかけ離れてる。

不気味の一言に尽きる。

「さて、君の出番は終わった」

ジャックは無表情にそう告げ。

「My turn」

瞬間、ジャックの姿が消え――

ヒルダの周囲にナイフが球体のように取り囲み、全方位からヒルダに向かって飛翔し、串刺しにする。

「――うあっ!？」

一瞬でハリネズミのように全身がナイフだらけになったヒルダが、片膝をついた瞬間。

「キヤアアアアアアあアっ!」

身にまとっていた雷が彼女に襲い掛かり、断末魔を上げる。

まさか、今ので魔臓が全て刺されたのか!?

ヒルダが無限回復を失ってるのが分かる。

「おや、どうやら運がよかったようだ」

と、一瞬消えたジャックはさつきと同じ位置に現れて言ってるが……一体、コイツは何をした。

何もしてないのにナイフが一気に現れたぞ。

まるでアニメや漫画の技みたいだ。

「あ、ああ……そんな、ウソ……これは悪夢……あうう……私が、私が、こんな奴に……」
そのままヒルダは呻きながらズルズルとジャックから逃げるように、這いずり回っている。

だが雷は炎となって襲い掛かり、前が見えないのか……ヒルダはそのまま、展望台の外を目指している。

「お、おい! そっちは外だぞ?! ヒルダ、そっちに行くな!」

流石に見かねて俺は声を掛ける。

だが聞こえていないのか、そのままヒルダは止まらない。

救出してやりたい、が燃える炎には近寄れないッ。

そのままヒルダは展望台の縁に手を掛け、そのまま雨でその手を滑らせる。

「あうっ……い！」

ヒルダは一声あげて、そのまま絶叫と共に展望台から落ちた。

それからすぐに、静かになる。

雨音だけが……この場に残った。

そのままジャックはゆっくりと展望台の外へと歩き出す。

「これで借りは返した。次はもう少し別の機会でお会いしよう。そして、君たちは知るだろう。本当に恐ろしいのは“人”である、とね」

「ま、待ちなさい！」

アリアはいち早く捕まえようと動き出したが。

ヤツはすぐに飛び降りた。

貸し借り、俺はその言葉に微妙に引つ掛かりを覚えるのはなぜだ。

それは、誰も答えちゃくれない……俺自身が解き明かすべき謎だった。



色金の時間を逆行する力。

脳が死ぬ前に自分自身に使えば死ぬ前に戻る理論はこれで証明された。

問題は二度と使いたいとは思わないってこと。

やり直せる人生に、私は楽しみを見出せない。

それに、諸刃の剣でもあるし。

生き返れても侵食は進んでるなんて本末転倒にも程があるよ。

寿命が削れてるのに変わりはしない。

さて、黒焦げになったヒルダを追い掛けて落ちてみたけど、どうやら第1展望台へと落下したらしい。

それでも100メートル以上落ちてるんだから瀕死には違いない。

生きてたらラッキー程度だったけど、まさか本当に生きてるとは。

まあ、彼女からすればこのまま死んでた方がマシかもね。

だけど……折角の楽しみなんだし。

ここで死んで貰っては困るんだけどね。

「そこにいるのは誰だ!？」

おや、どうやらワトソン君が近くにいららしい。

見つかる前に退散させて貰おう。

ヒルダを抱えて、そのまま私は再び展望台から落ちる。

すぐにワイヤーでターザンのように下の階層へと移り、スカイツリーを降りた。

それから人に見つからないように変装をして、ヒルダを近くに停めてあるレンタカーのトランクに放り込み、そのまま紅鳴館へと向かう。

どうやら気絶してゐるらしい。

その方が好都合。

まあ、ついでに麻酔と睡眠薬を打ってるからそう簡単には目を覚まさないだろう。

吸血鬼の無限回復はなくなってるし。

そのまま紅鳴館へと着いたところで、玄関先でリリヤがお出迎え。

「準備は？」

「………出来てる」

無表情に扉を開けて保持してくれているリリヤと同時に私はヒルダを抱えて、地下の秘密の部屋へと向かう。

その一角には病院のような手術台と、携帯系の心電計、輸血装置、それから手術道具と簡易的な手術場所がある。

久々に解体じゃない手術だね。

まあ、そんなに失敗する気はしない。

見たところバイタルは安定してるし、黒焦げとは言え……魔臓まで焼けてはいない。何より生命力が人間と違う。

見た目は瀕死だけど普通には耐えられるだろう。

問題は血液、B型のクラシーズ・リバー型。それは理子の血液型と同じ。

だけど、この血液型は170万人の内の人ぐらいしかいない貴重なものだからね。

何でヒルダの血液型を知ってるのか……知ってるというよりは、逆説的に考えたただけだね。

ブラドやヒルダが理子に執着する理由を。

なので準備は万端。

まあ、私は闇医者のなこともたまにしてるから、日頃解体しながらもそういうストックをしてあるんだよね。

——さて、始めようか。

とまあ、そんなこんなで手術をしてたら夜明けの時間帯。

補佐をしてくれたリリヤのおかげで、普通に終わった。

ナイロンの手袋を取って、手術エプロンや帽子を取り、そのまま私は学校へと行く準備をする。

「それじゃあ、私は学校に行ってくるね。目を覚ましたら暴れるだろうし、拘束してるけど危なかったら麻酔でも打ち込んで、どギツイやつを」

リリヤにそれだけ指示して、私は私でいつも通りの日常へと戻る。

学校に行く途中で私は理子が入院したことをキンジからメールで知らされた。

返信をしつつ、そのまま私は学校へと向かい授業を受ける。

放課後にお見舞いでも行こうとか考えてたら普通に理子は登校してきた。

ある意味、都合が良いのか悪いのか……

文化祭の準備で今日は短期授業なので、昼には終わる。

きつと、理子……怒ってるだろうな

絶対に授業終わったら、”お話し”が待ってるに違いないね。

「ねえ、キーちゃん。お昼、”空いてる”よね?」

そんなこんなで授業が終わっての妹の第一声。

当然だけど目が笑ってない。

空いてるよね?　なんて、聞いてはいるけど実際に選択肢なんてない。

「いいよ、別に」

「そっか……早くいい」

なんてにこやかに言ってるけど、言葉の裏に黒いものが見えるなあ……などと思いつ

つ、そのまま理子に連れられて屋上に。

「あー……理子？」

流石にこういう時はおちやらかなるのは悪手だつて分かる。

取りあえず声を掛けてみるけど、理子は私の目の前で背を向けたまま。

それから理子は肩で息を吐いて意を決したように振り返る。

「バカ」

目を潤ませて、ただ一言。

泣きそうになるのを堪えながら、理子は私を見据えていた。

「なんで……いつも、そうなの。お姉ちゃんは、もつと自分を大事にしてよ……！」

そう言われてもね。

理子には悪いけど私は元々、生死にあまり興味が無い。

生きる執着もないけど、死ぬことに恐怖もない。

ただ単に楽しみのために生きてるだけで、自分の中に生きる理由がない。

私が生きてるのは自分に楽しみがあるんじゃない、周りに楽しみがあるから。

それだけ。

”個”じゃなく”他”に生きる理由が寄ってる。

だから、私は周りから楽しいと思えることが消えたらそのまま死んでもいいと思つて

る。

まあ、自分から楽しいと思えるようにいつも努力はしてるけどね。

「私は死なないよ」

”楽しみがある間は”。

それに、今回ので理子は私がそう簡単に死なないと分かってくれたはず。

十分に安心できる理由だと思うんだけど、そうじゃないっほいね。

この様子を見るに。

「ウソだよ。色金を使って侵食してない訳がない、そうでしょ？」

ありやま、バレてる。

当然と言えば当然の帰結だよ。

「長くはないかな〜……」

バレてるなら隠す意味もない。

私にはこやかに答える。

「ああ、でも……今すぐにどうこうなるって訳でもないし。お姉ちゃんを救えれば問題

ないからね」

「方法は……？　ないの？」

「方法はある。焦ってもダメだよ、計画はちゃんとあるんだから」

「……本当だよね？」

「本当だよ」

私の言葉に理子は心配そうな顔をしてる。

どうやら前回の選択は失敗だったらしい。

私が死ぬのを怖がってるから、死んでも問題ないというのをアピールしたつもりだったけど……逆に不安を増長させただけだね。

見通しが甘かったかな？

「——約束して」

「何を？」

「この前みたいに死んだりしないって」

そして、今はちよつと怒ってるっぽい。

理子は約束してと言うけど、正直に言うとは保証は出来ない。

なぜかって言うくと時間はないし、私の未来には不確定要素がありすぎる。

お姉ちゃんの計算上であつたとしても、それは安全を保証するものではないからね。

私は出来ない”約束”はしない。

希望なんて持たせるだけで残酷になる時もある。

”善処”するよ」

私のその言葉に理子は何とも言えない表情をした。

嘘でも約束しておけばよかったかな？

今にも泣き出しそうで、私の言ってる意味を理解してるんだろう。

約束してくれなかった。

それが何を意味しているのかをね。

「お姉ちゃんの……バカ！」

それだけ言って理子は私の横を通り過ぎて、屋上を降りていった。

うーん……泣かせちゃったかな？

ブラドとの戦いの後に、妹に心配かけたらダメだよ的な説教をしたけど……私も人のこと言えなくなっちゃったね。

今までは色々と上手くいなくても戸惑いだとかあまり感じることはなかったんだけど。

今回ばかりは言葉に表しにくい。

変な気分だ。

理子のことは……あとで考えよう。

あの様子だと、しばらくは口をきいてもらえないだろうし。

ヒルダの手術をして2、3日。

さすがは吸血鬼と言うべきか、回復力は目覚ましい。

未だに魔臓は修復してないけど、それでも黒焦げになつてた皮膚は肌色を取り戻しつつある。

「お前、どういふつもり？」

こちらをキツとにらみながら手術が終わつた12時間後には意識を取り戻したヒルダは高圧的にそう聞いてくるけど、彼女は何もできない。

手術台もかねたベッドの支柱には超能力封じの手術ステルスが両腕と両足に繋がれている。

影になることも電気を発することも出来ないヒルダはただの丈夫な被験体でしかない。

ちなみに彼女と会つてゐる時の私はいつも通りの英国紳士。

タキシードではないけど、ラフなシャツとタイトなズボンを穿いて彼女の正面に優雅に座つてゐる。

「見ての通りさ、君を治療してその経過を見ているだけだよ」

そして、柔和な笑みを浮かべながらヒルダの質問に答える。

だけどヒルダは冷や汗を流しながら、少しだけ身をよじつた。

「そんな親切心で動くようなヤツではないのは知つてゐるわ。目的を言つたらどうなの

「？」

ある意味信用されてるね。

まあ、彼女の言う通りなんだけど。

椅子から立ち上がって、

「それでは単刀直入に、私達の実験の被験体でもと思つてね」

そのまま私のやりたいことを簡潔に述べた。

「……………」

その言葉にヒルダは顔を青ざめさせる。

私はその反応に楽しみを覚え始めた。

いいね、やっぱり君のように優位に立つた人物が一気に転落する様を見るのは本当に気分が良い。

「頭の良い君のことだ。選択肢などないのは想像通り。ただ、それだけでは面白くない

……チャンスをあげよう。理子にもそうしたようにね」

「何をするつもり？」

「なに、私達の実験に耐えきつて自力で屋敷を抜け出せればそれで終わりさ。簡単な条件だろう？ 期間は3日、私は他に用があるのでね。24時間やる訳ではない。そのあ

とは、私を殺そうとしても構わない。まあ、やっても無駄だしタダでやられはしないが

ね」

とまあ、説明はこのぐらいで早速……解体させて貰おう。

「まずはそうだね……身体構造は人間と同じなのか、私は前から気になっていてね。私
が思うに、君は吸血鬼ではあるが……純粋な吸血鬼ではないと私は予想している。なぜ
ならブラドは君が生まれるまで唯一の吸血鬼、その唯一の吸血鬼が子を設けたのなら必
然的にその相手は他種族であるのは明白だ。それに、人型であることから十中八九人間
だろう。まあ、推測の域を出ない話だがね」

言いながら私はそのまま、ヒルダの病院とかで見る患者用の手術服を胸下まで手で上
げてその白い素肌を露わにさせる。

「お、お前……… 無礼者、触れるな！」

顔を少し赤らめながらも、ヒルダは身をよじって激しく抵抗する。

まあ、手元が多少狂っても大丈夫ですよ。

それに治療したのは黒焦げじゃあ”表情”を見れないからだしね。

「さて、どこから切り裂いたものか……。いつも通り胃腸のある付近から行くとするか。
……さて、しばらく静かにして貰おう」

近くにいたりリヤにジェスチャーで指示してヒルダの口にタオルを噛ませる。

これで多少は静かになった。

「~~~~ツ！」

叫ぶなくても唸ることは出来る訳だけど。

それは流しておこう。

手術用のマーキングペンで白い腹の上に十字に線を引いて、さらに腹筋に合わせて格子状に線を書き足していく。

久しぶりの肉を裂く感触を楽しみにして、心が躍る。

台の上のメスを手に取り、マーキング通りに裂いて行く。

麻酔？ そんなもの使う訳がない。

そのまま血が出てもお構いなし。

「~~~~！ ツ~~~~！」

さつきから超能力ステルスを発動させようとしてるけど、そんなの無駄に決まってるのに。

微妙に電磁波は出てるけど完全な発動までには至ってない。

これって痛みは感じてるのだろうか？

傷つけられ、嫌がる素振りは見せてるんだけど、イマイチ痛覚があるのか分かりにくい。

「さて、ご開帳だ。一応、人間でも麻酔無しで腹を裂かれても生きてるし意識を保てるのも分かってる」

ショック死する可能性はもちろんあるけどね。

手を血塗れにしながらも、順調に裂くことが出来た。

ふむ、見た感じ人間と変わったところは何も無い。

胃腸も人体標本通りだし……女性器の位置も変わりなし。

「さてさて、ここからが本番だ。例えば——摘出した臓器は再生するのか？」

と、言ったところでヒルダはさらにその顔を歪ませる。

首を切り落とされても死なないみたいだし、可能性としてはありえる。

もし、回復するならそれはそれでいい臓器のドナータンクになりそう。

適合率とかあるけど。

いや、そもそも人外だし人間に合うかどうか分からない上に移植したら人外化したり

しないかな？

ちよつとした吸血鬼のハーフ的な感じで。

その考えはどうでもいいか。

まずは臓器の摘出だね。

「それにしても腹黒い君にしては綺麗な中身だ」

ああ、久しぶりの解体。

やつぱりこの中身をかき回す感触は心地が良い。

ヒルダは引き続き声にならない声をあげてもらってるが、それも私には心地が良い。そう言えば血液は無制限回復の対象にはならないのだろうか？

でも、実際輸血しなかったら危なかったし……魔臓がない状態だしね。

今はこれで楽しんで、次もし同じことがあったら魔臓があった状態を観察しよう。

なんてあれこれ考えてる間にも無事に胃を摘出、アルミの台の上に乗せる。

「摘出して普通に残るのか。てつきりフアンタジー的な感じで本体から切り離せば灰になったりするかと思っていたが、違うようだ」

だとしたらこれは紛れもなく肉体の一部。

仮初とかじゃない……この超回復には肉体の何かを代償にしてる。

無難に考えられるのは血液かな？

それだと吸血を食事の一環とかじゃなくて合理性のある行為とも考えることができるし。

吸血鬼を解体するなんて貴重な体験だね。

世界中に2人しかいないんだから当たり前だけど。

いや、決めつけるのは早計か……私達が知らないだけで埋もれた真実の裏に実は生き延びてるのがあるかもしれない。

ジャンヌがそうだったようにね。

「この調子なら子宮も取り除いて良さそうだな。高貴な君のことだ、使う機会などないだろうし」

うーん♪ やっぱり私のアイデンティティと言えばこれだよな。

今までもそうだったけど。

だけど、ここ最近はお無沙汰だったし……我慢を重ねた上での楽しみだ。

「それじゃあ、ちよつとチクツと——するよ」

……。

……。

……。

肉を裂く音が小さく響く。

既にヒルダの中身は、窮屈な箱に衣服を詰め込んだようにとところどころはみ出ししている。

意識はあれども本人の目は死んでいた。

折れるの早いな

てつきり処刑される前に拷問とか受けてるとか思ってたから、これは予想外。

耐性がほぼないっほいね。

まあ、それに？　こういうプライドが高い傾向の人って案外折れるの早かったりするしね。

さらに、その中で立ち直るのに時間がかかるタイプと切り替えの早いタイプがいるけど。

ヒルダはどっちかな？

って言っても、どっちにしても根元は折らせて貰うんだけど。

知られたのなら手駒にしてしまえ、っていうお姉ちゃんの指示だし。

従順にするには尊厳を根元から折って、それからこちらに依存させるように仕向ける。

言葉にすれば簡単な話。

手術用のハサミ——クーパーを道具がそろえられた台の上に置いて、白地のタオルで軽く手を拭く。

「今日は取りあえず満足だ。あとは、リリヤ……君に任せるよ」

ずっと部屋の片隅で無表情でいたりリリヤが、何かの台を押しながら静かにこちらに歩み寄る。

メイド服じゃなく、汚れてもいいように白衣を身にまとった彼女は……静かなる怒りに満ちてるみたいに見える。

さて……あとは紅茶でも飲みながら見学でもしようかな？

ロシアの研究施設でリリヤが拷問に対する講義も受けてたのは知ってる。その実技もね。

見た目白いけど、リリヤの中身は真っ赤だよ。

共産的な意味じゃないけど。

ちなみに台の上には銀製のナイフとかガラス製の容器に入った『Holy Water』^{聖水}の文字。

色々と吸血鬼に有効そうな道具が台の上に置かれてる。

取り寄せるの結構苦労したよ。

純銀とか高いに決まってるし、こういう退魔的な物を売ってるのってほとんど教会がバックについてる訳だから手続きとか面倒だし。

まあ、怪しまれないようにするために合法的に取り寄せただけだね。

リリヤは聖水の容器の蓋を外すと、中身が飛び出してるヒルダの上に垂らした。

ジュウと、何かが焼ける音がしたかと思うとヒルダはのたうち回る。

ガシャンガシャンと揺れる手術台。

硫酸を臓器に掛けられてるようなものだろうか？

何にしてもとてつもない痛みだろうけど。

それからリリヤはヒルダの手を手術台の側面にベルトで固定したかと思うと、指一本に向けて銀ナイフを突き立てる。

当然ながら魔臓のないヒルダに純銀は有効。

聖水で意識を覚ませたあとに痛みを与えるか……

合理的だね

それに吸血鬼と言つても所詮はこんなものか。

知性があつて意思があつて痛みを感じるなら価値観と見た目の違う人間と変わりないね。

「~~~~ツ!!」

一回止血しないと3日ももたないかもね。

希望は持たせてあげないと。

そんな訳で1日目は終了。

切り裂いた腹部を縫合して体を拭いて、清潔にしつつ道具の手入れも終わった。リリヤも血塗れの白衣から着替えていつものメイド服。

切り落とされたり、真ん中から縦に半分になったりした指はどうしようもないね。魔臓が復活した時の回復力に期待しよう。

ヒルダ本人は目から涙を流して失神してる。

「案外、精神は修復不可能かもね〜
手駒になるように善処はするけど。」

2日目——学校が終わって今日も拷問タイム。

かと思えばリリヤが既になんかしてた。

っていうか、この部屋にアイアンメイデンなんてあったんだ……

ともかく中にある針の内側に何かを塗ってる。

「何をしてるんだね？」

男の声で声を掛けると、こちらを少しだけ振り向いてすぐに作業に戻りながら——

「……銀の粉末をつけてる」

と簡潔に答えた。

「ああ、なるほどね」

そのあとの展開は言うまでもなく、拘束されたままヒルダは中に放り込まれ絶叫しながら血を流し続けた。

体だけで頭は出てるタイプのアイアンメイデンだったから、何ともまあ……情けない顔をしてたよ。

しかもリリヤはそのあと、ブラドの時に使った法化銀弾ホーリィの余りの在庫処分とか言っ

アイアンメイデンの上から撃つし。

貴重品だからそのまま置いとけばいいのに。

まあ、使うってことはそれほどに怒りがある訳だろうけど。

少なくとも2マガジンくらいは撃ったかな？

「あ……う」

アイアンメイデンから解放されたヒルダはその場に倒れてうわ言のようにつぶやくだけ。

思考は停止してると見える。

もはや抵抗しようとも思っていないのか、力なく地べたに伏せるだけ。

昨日も思ったけどビックリする程に脆いね……

理子の監禁期間に比べれば微々たる、たった3日なのにそれも耐えられそうにないとか。

支配するものは支配されることに慣れてはいないんだろう。

「まあ、限界だとかは関係ないんだがね」

そのまま脱力したヒルダを何とか抱えて、再び手術台へ。

血を流しすぎたのか、彼女は何かもしない。

それでも生きてはいる。

死に体には違いない、だけど彼女の気持ちなどは関係ない。

せっかくの機会だからね、私の欲望を思う存分にぶつけさせて貰おう。

昨日は一先ず満足したけど、それだけ。

五体と顔は残してあげよう。

首を深く切り込み。

腹を縦に裂き。

中身をくり抜き。

性器を除去する。

これだよ、これ♪

私がいつもしていた仕事。

女を切り裂いて、解体する。

ただそれだけ。

殺す理由なんて女だから、だけしかない。

前に理子に哲学っぽいことを言った気がするけど、あれは二の次。

着意はあつても殺す理由に高尚な目的なんてない。

ロンドンの時は無意識ながらも楽しかったな。

また、あの時に戻りたいとも思う事も何度か。

だからこそ『N』に共感することもある。

あくまで共感であって同調ではないけどね。

思い出に浸りながらも私は手を休めない。

明日はどうなるかな？

そして3日目。

「Uc殺iderしea……Uc殺iderしea……」

手術台ベッドの上でルーマニア語でうわ言のようにつぶやくヒルダ。

本当に意外に早く折れた。

軽く手を彼女の前で振ってみるけど、視線は追う動きをしない。

完全に何も見えていない。

今では純銀関係や教会の道具を見せるだけで発作のようなものを起こし始める。

完全な心的外傷後ストレス障害。

PTSDってやつだね。

だけど、残念ながら約束の時間だよ。

現在の時刻でちょうど監禁して3日目だからね。

「さて、約束通りに君を解放しよう。あとは何もしない。出口を目指したまえ」

言いながら手錠を外し、ベッドの拘束も外す。

それから私は部屋を出る。

◆ ◆ ◆

「さて、約束通りに君を解放しよう。あとは何もしない。出口を目指したまえ」
ヤツが……去って行く……

おわたったの……？

わからない……何も……

ただでぐちを、みつけないと。

からだが、軽い。

「あう……」

ふっとする浮遊感。

物音をたてながらしめつぼい床へおちてしまったみたいね……

だけど、私にはそれすらも認識できない。

それよりも……はやく、そとへ。

見上げた先に、台の上にわたしの”中身”が積まれてあるのがみえる。

からだが軽い理由をどことなく理解しながらも、それよりも先にそとへの扉を開く。
ぶこつな鉄製のとびらを開けて……かいだんの上へ。

からだは軽くても足取りは軽くはない。
もう、あのさつじんきには二度と——

2つ目のとびらを開ければ廊下にでた……あと、もう少し……
ようやくよ。

ようやく私は、じゆうに……

エントランスには誰もいない。

ふらつく足、とびらはあと十歩もない。

とびらをあげれば、そとへの光りが……

扉を手に掛けようとした瞬間。

——ピッ。

「……え？」

下からなにかが——

「ぐツェっ?!」

わたしになにか起きたか、わからない。

そとが……光が……

みえない。

どう……して……？

◆ ◆ ◆
「くふふ、あつはははー！」

いやー、良い見世物だった。

エントランスに悠々と私は笑い声をあげて素顔で歩き出す。

もう彼女は何も見えてないだろうからね。

私はそのまま玄関の扉の前で”串刺し”になったヒルダに近付く。

絢爛なエントランスは血で染まりつつある。

闇に生きる吸血鬼が光を求めて外を目指す。

愉快的な光景だったよ。

そして、串刺し公の娘である彼女が串刺しによつて希望を奪われる。

皮肉めいた最期の光景を想像して、独りでワクワクしてたよ。

股の間から直径8センチほどの一本の串がヒルダを貫き、うなじあたりから先端が出ている。

中身を抜いてるからさぞかし通りは良かっただろう。

「か、あ……」

呻きながら痙攣けいれんで全身が小刻みに動いている。

頭は力なく脱力していて、瞳孔が小さくなっている。

なんだ……かろうじて生きてるのか。

生かすつもり半分、殺すつもり半分だったけど。

何にしてもイベントは終了、だけど。

今回は二本立ダブルイベントてなんですね。

まだまだ利用させて貰うよ。

85 : 文化祭1日目

二本立てのイベントは日を置いて数日。

文化祭の前に理子を紅鳴館に呼び出した。

もうそろそろ来る頃だろう。

「お邪魔しまーす」

なんて、勢いで押し気味な理子には珍しい控えめな入りだね。

それにどうやら制服ではなく私服で来たみたい。

私は出迎えに行こうとエントランスに向かっていて、ちょうど着いた時に出くわしたらしい。

ちなみに今はハウススキーパーつぽい感じで金髪碧眼メイドで出迎え。

という訳で軽いお辞儀で挨拶をする。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

「いきなり呼び出して、なに？」

以前に“約束”をしなかったから拗ねてるのか、理子は少しトゲがある感じで聞いてきた。

顔もちよつとだけ斜めに向けてる。

「機嫌直して欲しいと思つて、ちよつとしたサプライズをね」

あんまり遠回しに言うか帰りがねないから演技をやめて、仕方ないので単刀直入に私はそう伝える。

それに、持ち主が失脚したとはいえ紅鳴館に呼んだのは微妙だったかな？

「まあまあ、見ていつてよ」

と、半ば強引に私は理子の背中を押す。

そのまま案内したのは例の秘密の部屋。

拷問部屋か監禁部屋とも言い換えてもいい。

気味の悪い無骨な鉄の扉の前に理子を立たせ、私はその脇から見えるように扉を開ける。

「……………」

まあ、驚くよね。

扉を開けた先の光景。それは檻の中にいる奴隷のようなぼろ布を着せられ、手枷を掛けられているヒルダの姿。

髪は乱れ、高貴とはかけ離れた姿になつてる。

いつぞやに聞いてた理子の状況にそっくり。

私はニコニコしてるけど、理子は息を一つ吐いて続ける。

「……いつもだけど、悪趣味だよね」

「機嫌は？」

「よくなると思う？」

「どうしろ、とは考えるところだ」

「じゃあ、あえて聞くけど。どうしろって言うの？」

ちよつとうんざりした感じで理子は聞いてくる。

「状況としては、ヒルダは現在進行形で衰弱してる。血液も不足していてそれには理子の血液が必要」

そこまで言ったところで理子は再びヒルダを見る。

ちなみに精神状態はほぼ擦り切れてる。

修復は可能か不可能かで言えばまだ可能。

人格はどうなのかって？ それは保証できないし、どうでもいい。

私の興味としては理子がどういう選択を取るかだけ。

「……………」

理子は私の考えを察したのかそれ以上は何も言っていない。

理子が檻に近付いたところでヒルダは気付く。

だが、すぐに視線を逸らし始めた。

何も見ていない。

そんな雰囲気だね。

私はそこまで追い詰めたつもりはない——いや、リリヤのせいか。

特殊部隊仕込みみたいな拷問してたし。

アメリカのロスアラモス・エリートの人材とは違う。

あつちは兵士、ロシアは工作員と殲滅兵器を兼ねた複合兵器。

そんな感じだからね。

ともかく、このままではヒルダは衰弱死するだけ。

「どうするかは理子に任せるよ。私にとつては生きてようが死んでようがどうでもいいからね」

それに丈夫な素材だって言ってもやっぱり繰り返し返していれば新鮮味に欠ける。

反応も鈍くなるし。

実際のところヒルダの扱いについては本当にどうでもいい。

私の意識と興味は戦役に向かつてるからね。

”謎”は深まりつつある。

あとはイギリスの方だね。

”アリス”を探すために穴に飛び込まないといけないかもしれない。私はそのまま一旦、その場を離れる。

実はこの紅鳴館、既に所有者は私のお姉ちゃんもといモランに変わっている。

それに警察や武偵の調査は既に終わっているから、なおさら好きに使っても問題ない。

部屋の一室は私の資料室になっている。

調べてるのはイギリスの怪事件。

事件の中心はオックスフォード周辺。

そこでは時折、失踪者が出るらしい。それも10歳周辺の少女ばかり。

そういう性的倒錯者の仕業か、それとも組織的な犯行なのか……

失踪者の所有物くらいしか現場に残されていないので事件解決の進展はない。

犯人を”アリス”と名付けたくらい。

どちらかというところ犯人の通称は”白ウサギ”の方がしっくりくるんじゃないかな、って思ったけど。

最近、ようやく入った目撃情報として失踪する前のある少女の近くにエプロンドレスを着た少女がいたらしい。

それからその少女がエプロンドレスを着た少女を追い掛けた直後、少女は消えた。

まるでどこかに連れていかれたかのように。

なので、アリスという通称もつい最近名付けられたらしい。

子供の犯行にしては鮮やか過ぎる。

もちろんオカルト的な捜査もしてるようだが……それも難航してるらしい。

原因は深く調べてないけど、現地にいるワイズが言うには『よくない気配が満ちてる。

それも冒^{ぼう}瀆^{とく}的な、何かに背いてるような気配だよ』とのこと。

かなり得体がしれない存在がオックスフォードにはいるらしい。

そして、それが超能力的な捜査を阻んでいることも。

気になるね。

念のためお姉ちゃんにアドバイスを頂いたら『ウサギの穴を探しなさい。犯人がアリスだと言うなら不思議の国に行く入口があるわ』と、半ば確信めいた感じで言ってきた。

答えは分かった。

問題はその道筋。

答えから問題と解答方法を考えるってもなかなか難しいね。

殺人鬼が言えた義理じゃないけど。

ウサギの足跡は少し見えた。

だけど不思議の国に行くには色々と足りないね。

◆ ◆ ◆
お姉ちゃんは部屋を去り、残されたのは檻を隔てたあたしとヒルダ。

この構図は子供の時のあたしの立場と逆だね。

滑稽……と言えば滑稽かな。

実際、少しだけ嘲あざけるような笑いがこみ上げる。

どうするかはあたしに任せるつてお姉ちゃんは言ったけど……正直なところ困っちゃうよね。

思い起こせば色々とやられたもんだよ。

純潔は奪われなくても色々もてあそと弄ばれたし。

復讐心がないと言えば嘘になる。

あたしは檻を開け、ヒルダに近付く。

「ヒッ……」

開けた瞬間、捨てられた小動物のように怯え始めた。

高貴を謳うたって、スカイツリーであたし達を追い詰めていたヒルダの面影はない。

金色の髪はボサボサで乱れ、赤い瞳は濁っている。ぼろ布しか与えられず、枷かせにつながれたまま檻の中で一人。

本当にあの時のあたしみたいだよ。

ヒルダとの戦いから1週間も経ってない筈なんだけど……よくここまで心を折つたよね。

何をしたかを聞く勇氣はない。

どうせ、えげつない事しかやってないだろうし。

それこそ聞いただけで寒気や吐き気を催すような感じのね。

ともかく、どうしよう……正直なところ復讐心以前にヒルダのこの状態を見てると過去の自分をいたぶるみたいでやりにくい。

やっぱり中途半端だね、あたし。

お姉ちゃんがコイツのせいで一度は死んだっていうのに、憎み切れない。

復讐心に身を任せる事も出来ない。

いっそのこと戦闘による高揚状態のままであられば、すんなり殺せたかもしれない。

本当にどうしよう。

サプライズなんてお姉ちゃんは言ったけど、面倒なプレゼントをしてくれたもんだよ。

その時、また扉が開く。

戻ってきたのかな、と思ったらそこにいたのはリリヤ。

「……………」

すっかりメイド服が板についたね。

ただ、妖精的な可憐な見た目とは別にその目はどこまでも機械的で冷ややか。

もちろんあたしに向けられた視線じゃなく、ヒルダに向けてるっばいけど。

「どうしたの?」

「……殺さないの?」

ストレートに聞いてくるね。

まあ、強化人間で工作員兼兵器的な感じで育てられてるからそういうのに抵抗がないのは当然だけど。

そのままリリヤは黙って檻の中に入ってくる。

そして、おもむろにスカートに隠れてたレッグホルスターから拳銃を抜いた。

MP-443——ロシアの結構新しい拳銃だね、いつの間にそんなの……って——

「ちよちよ、何してるの?!」

あたしが突っ込むとリリヤは少しだけ不思議そうな目をする。

「……代わりに殺そうと」

そして、淡々と告げた。

余計な気遣いだよ。

ヒルダに向けていた拳銃の上から手で押さえ、下ろさせる。

「……どうして？ お姉ちゃん、酷いことされた」

「まあ、そうなんだけど」

「……なら、用はない敵は殺すべき」

ヤバい、うちの妹が思ったより無慈悲な件。

殺すことに躊躇ちゅうちゅうがない。

まだ色々と整理がついてないのに！

どうしよう、ここで殺されても正直なんて言うか……後味が悪い。

マジでどうしようツ。

なんか良い感じの言い訳……口実、なんでもいい。

「あー、ほら……色々と便利な能力があるし、殺すには惜しいかなって」

「……精神、壊れてる。使い物にならない」

再び銃口を上げ始めるリリヤ。

ちよつと?! お姉ちゃんの話をもう少し聞いて!?

あー……もうツ！

”家族”にしようと思ってるからちよつと待つてー！

びたりと銃口は止まり、代わりにリリヤの顔があたしへと向く。

「……正気？」

正気なのかどうかは今まさに殺そうとしたリリヤの方……いや、もういいや……

「お姉ちゃんは正気です。だから、しばらくはヒルダの面倒を見る」

「……分かった。もし、お姉ちゃんに何かあったら……シベリアで赤い雪にする」

それだけ言つて、リリヤは部屋を出て行った。

なんでわざわざシベリアなの……

ロシア生まれだから？

リリヤが時折、従順なのかどうなのかよく分からない。

逆にそれだけ機械的じゃなくなつたつて事なんだろうけども。

しかし、あたしも随分なことを口走つたね。

コイツを家族に、なんて。

でも、今はお姉ちゃんを救うのに力が必要。

そう思えば利用するだけの価値はあるはず……

あたしは、少しでも自分にそう言い聞かせる。

◆ ◆ ◆

10月30日。

文化祭が始まった。

「~~~~~♪」

そして私は絶好調。

久々に解体できて楽しかった。

ロングスカートのメイド服を着て、華麗に廊下でターンをする。

テンションもそれなりに高いのが自分でも分かる。

色金を使用した副作用とかあるかと思つたらそうでもない。

代償は支払つてるかもしれないけど、今が良いならそれで問題なし。

「ご機嫌だな」

食堂に到着早々に遠山巡査がお出迎え。

ふーむ、気怠そうな見た目と雰囲気からしてどうも頼りのない警官。

「おや、ネクラ警官のご登場だね」

「いきなり嫌味か」

「だつたらもうちよつとキリつとしてみたら？ いい男なんだし」

「いい男ならネクラだつたりしないだろ」

キングジは頭を搔きながらそう反論する。

それ、自分でネクラだつて認めてるようなもんだよ。

「お前、随分と機嫌がいいな？」

何かに気付いたのかキンジは唐突に言ってきた。

「そう見える?」

「ああ……ここ最近は少しだけ空元気に見えたからな。良い事でもあったか?」

「ちよつとね。機嫌がいいから、今なら私に良い事をするとお礼があるかもしれないな
」

なんて言ってみる。

女子を忌避してるから、女子からのお礼なんて欲しがらないだろうけど。

「なんだそれ」

そもそもキンジのことだしお礼なんて別に興味はないだろう。

と言うより、平穏な生活以外にあんまり欲がないもんね。

今だってそんな感じだし。

「別に、恩を売るなら今の内って話」

もう少し私に構ってもいいのにな。

と、なんだかんだ話してる内に『変装食堂』リストランテ・マスケの開始時間が迫っている。

その前に蘭豹の事前点検を受け、充分な変装が出来てるかを判定される。

蘭豹がズカズカと食堂に入り、

「ようし、お前から仕上がりを見たる。中途半端な奴は裏に回すからな!」

開口一番にそう宣言した。

裏つて、つまり厨房？

厨房係がいるなんて話は聞いてない。

まあ、今更だけど……武偵高は任務以外は基本的に無計画だよな。

この間の修学旅行の計画もA4のプリント一枚で時程と課題と提出期限くらいしか書いてないものだし。

なんて考えてる内にも蘭豹はジロジロとその獣みたいな眼を光らせている。

そして、私に目が合ったので私は手を腰前で組み優雅に一礼する。

それから私に近付いたかと思うと、

「よし、遠山。お前は厨房に行け」

隣にいたキンジにそう告げた。

ああ……ご愁傷様。

「何ですか……？」

「そんなネクラそうな目つききのポリ公はおらんやろッ！」

叫びながら同時にゲンコツを一発。

わーお、痛そうな鈍い音。

レンガをグーで割るって話だし、シャレにはならないだろうね。

「おお、頭が……割れる」

そのままキンジは沈んだ。

「それと、武藤！」

次はシルバーの消防服に身を包んだ武藤がターゲットに。

「消防士は命懸けの仕事やぞ！ そんなヘラヘラ奴がおるか！」

「ごはあ〜〜!!」

そのまま鋭い横蹴り。

武藤が食堂の出入り口へ吹き飛ばされ、叫びながらそのまま食堂の外へ。

3メートルつてところかな。

早くも退屈のしないイベントの幕開けを予感させるよ。

◆ ◆ ◆

『リストランテ・マスケ変装食堂』のシフトが終わり、自信がないジャンヌの背中を押して、進軍をさせた

あとにようやく武偵高の制服に着替える事が出来た。

そして、夕焼けの中を帰る。

この文化祭の期間中はバスが運行しないので、徒歩で寮に帰る。

霧と一緒に帰ればよかったか？

ついでに送ってもらえるし。

「遠山の」

戦闘訓練用の廃墟ビルから声がかげられた。

戦場みたいで見た目が悪いので今は青いビニールシートが外壁に掛けられ、今は立ち入り禁止区域になっている。

今の声。聞き覚えがあるぞ。

謎の狐耳少女——キツネの妖怪だか化生だかの『師団』^{「アイシ」}の味方である玉藻^{たまも}だ。

「玉藻、帰って来たのか。よりによってこんな日に」

青いシートをめくって廃墟ビルに入ると……

弾痕だらけの壁に、割れた窓から入り込む風でホコリが立ついかにも紛争地域の廃墟って感じの部屋だ。

シートや窓の隙間から差し込む光がサーチライトのように薄明るく部屋を照らす。

「——今日は友引じゃからの、仲間を増やすには良い日じゃ」

玉藻の声がする方へと藁^{やっせきよう}藁やガラス片を踏みながら向かう。

「今日はテレビも来てるんだぞ。捕まって『珍獣ハンター』で放送されても知らないからな？」

などと言いながら見上げると、高い所に横向きにされた鉄骨の上にいた。

武偵高のミニサイズ・セーラー服を着た、玉藻が。

「儂^{わし}とて、民に興味本位で引つ張られたりしとうないわ。じゃから、ほれ。生徒に見えるような服を着てきたぞ」

光の筋の中で言う玉藻だが……

頭にフリルつきのベビーキャップみたいな帽子をかぶってて、帽子にキツネの耳型の突起が上に出てるのはいいのか？

帽子の一種で通せるだろうけど。

「ときに遠山の。ヒルダを追い払ったようじゃな、でかした」

「追い払ったのは俺じゃないけどな。あの殺人鬼がおいしいところを全部持って行ったよ」

「ふむ、”切り裂きじやつく”とか呼ばれる人間か……人間かどうかは怪しいところじゃがな」

などと不穏な事を言いながら玉藻が動物的な身のこなしで降りてくる。

ふわつとした感じに降りるまでの途中で見えたが、スカートの中の尻尾は隠せないんだな。

言ったらなんか怒りそうだから言わないけど。

「なににせよ、『眷属^{ブレンナダ}』との戦闘は一つ勝ち星じゃ。納得はせんでもな。リバティー・メイソンの長からも『師団^{ディン}』への帰属を連絡してきた。充分な吉報じゃ」

リバイター・メイソン……

なるほど。ヒルダのあとすぐにワトソンが連絡したのか。

「ヒルダが生きてるかどうかは分からなんだ。東京近辺には少なくともおらぬじやろう」

ジャックはヒルダと共に姿を消した。

その行方は誰も分からない。

理子なら、あるいは——

あのあと厄介な事態になりかけたが、無事なんと切り抜けることが出来た。

少女誘拐説で通報されるかと思っただぞ。

その後で玉藻が「白雪の所へ連れていけ」と言うので仕方なく連絡を取ったところ

……どうやら超能力捜査研究科・略称SSRにいるようだ。

リストランテ・マスケ
『変装食堂』の仕事のあとで自習をしてたらしい。

相変わらずの優等生だよ。

「……苦手なんだよな、(´・ω・´)……」

と言うのもカオスな空間が広がってるからな。

まずビルの入口までトンネルのように続く朱色の鳥居。

そして、入口付近をみると右は狛犬で左は小さなスフィinks。文化を統一しろよ……

おまけにその周辺にはトータムボールやら人間大のモアイまである始末だ。中はさらに異文化のテーマパークになっている。

それも悪い意味で。調和も何も無い。

——「無用の物 立ち入りを禁ず 超能力捜査研究科^S」——

という立て看板があるが、俺は用があつても来たくはなかつたぜ。こんな所なにせここは、俺の苦手なオカルト・魔術の研究科。その巣窟^{そく}だからな。

「何をしかめつ面をしておる。良い雰囲気ではないか」

玉藻が化したボールというか毬^{まり}がそう言ってくるので、

「神様同士ケンカしそうだろ、これ見たら。冒瀆^{ぼうとく}だとか思わないのか？」

「そんな時代でもない。どの神も真に目指すところは一緒じゃ。それに『みんな仲良く』を人に説いておいて神同士でケンカしておつては示しがつかんからな」

「そういうもんか……？」

まあ、神の一種であるこいつが言うならいいか。

と、俺はステンドグラスが嵌められたドアを開け、SSRに入る。

このロビーがまた、冷や汗を誘う。

生徒達がお祈り出来るようになっていた広いホールには椅子や座布団が点在している。

周囲の壁やドーム型の天井に至るまで古今東西の宗教画が密集して飾られている。やっぱり俺にはよく分からん世界だ。

「……だからオックスフォードの事件がだね……」

「……”アイ”を探す。アイってなんだ？」

まどと、ホールの一角で語り合う生徒の声が聞こえる。

そいつらの服もバラバラ。天狗みたいな格好をして、弓と矢筒を装備した女子。

ターバンを巻いたインドの留学生はヨガみたいに体を知恵の輪みたいな複雑な体勢のまま話してるし。袈裟けさを着こんでる奴は、何で経典を片手から揚げを食ってるんだ

……

「ほれ見い。みんな仲良くしとるではないか」

などと尻尾だけを出して生徒達を示す玉藻の毬。

突っ込むのも疲れる光景に俺は溜息を吐きながら玉藻を片手に階段を上がる。

SSRは生徒が少ないので、2階以上にそれぞれの個室が用意されている。

目的地は5階。

廊下を歩いて探していると、扉に掛けられた絵馬型のプレートに『星伽白雪』という文字が書いてある扉をようやく見つけた。

あんまりSSRに来ないから部屋がどこかなんて知る訳がない。

そもそも女子の部屋自体ダメだからな。

取りあえずノックをすると――

「は、はーいー!」

声が出た後にとたとた、と足音がして扉のロックが解除される。

扉を開けると白雪、ではなく五芒星ごぼうせいに陣笠の星伽の家紋が描かれた襖ふすまが目に入る。

それを開けると――

「ようこそおいで下さいました。キンちゃん……!」

などと三つ指を指してお出迎えする白雪の姿が。

相変わらず他人行儀というか、折り目正しいというか……

奥にある三面鏡をみると、その鏡の前に化粧品らしき小道具。

化粧を直して出迎える準備をしたのか?

そこまでしなくていいのに……

などと俺が渋い顔をしていると、

「あつ……巫女の服。キンちゃん……あんまり好きじゃなかったよね。SSRではいつ

も——」

「おっと、そこまでだ。そこまで気を遣わなくていい。ちよつと話があつてきた」
よくない感じがしたので白雪の話の腰を折つて俺は靴を脱いで室内へと上がる。
霧から学んだ白雪対策の一つ——暴走される前に強引に行く。

こいつ色々と考えて自分ですぐにテンパるからな。

だから余計な事を考える前にこちらから話を切り出す。

部屋は十畳敷じきの和室で、漆塗りの棚の上にはダルマが置いてある。

6つに並べられた竹筒には、妹たちが作つたらしい風車が大切に挿さしてあつた。

いかにも大和撫子っていう感じの部屋だなと、冷静に部屋を見ていると、

「星伽の白雪。大きくなつたの」

俺が持つてきた毬が勝手に俺の腕から落ちてそのまま、ぼんと白い煙と共に元の玉藻に戻つた。

瞬間、白雪が——

「た、たたた、玉藻様?!」

驚きと同時にびよん、と正座のまま飛び上がり着地してそのまま土下座へ。

「ご無沙汰しておりますです。いらつしやるとは露知らず！ 何のお出迎えの準備もせ

ず……！ 申し訳ありません！」

上司がいきなり家宅訪問して来たみたいな取り乱しっぷりだな。

玉藻は「よいよい」と手を振り、

「謝り癖は相変わらずじゃな。ほれ、おもて面を上げい」

白雪の膝と胸の間に入って、胸を掴んで上半身を上げさせた。

驚掴みじゃねえか、このエロギツネめ……

そのまま普通の正座体勢になった白雪の膝の上に玉藻が背中を向けてちよこんと座る。

こうして見ると、子供の相手してるお姉さんにしか見えないな……

子供の方が年上だけど。

「玉藻様もお変わりなく……」

「うむ、お主は随分大きくなったの」

さっきの胸を掴んでからその発言は微妙に意味が違って聞こえる。

やめよう、思い出したらヒス要因になるかもしれん。

「どうやら共学でも通えているようだなによりじや。白雪、琴は上達したか？ 自転車

には乗れるようになったか？」

「そんな。子供の頃の話をされないでください……」

「儂わしらからすれば、人間の時などあつという間だな。儂わしぐらいの身長だったことなぞ、つ

「この間のように思える」

まあ、そりやそうだろうな。

700年も生きてるなら時間の価値観も人間とは当然に違ってくるだろう。

それに、そんな話をしてるってことは昔からの知り合いだったらしいな。この2人。

と、俺は食卓の傍そばであぐらをかいて座り、白雪が用意してくれたであろう緑茶を飲む。

「それにしても佳よいことじゃの、遠山侍と星伽巫女が同い年とは」

玉藻は言いながら俺を指し――

「それで、星伽よ。こやつの子供は産んだのか？」

再び飲みかけたお茶を盛大に吹いた。

そんな明日のお天気みたいに気軽に聞いてきた玉藻に、白雪はへにやへにやと顔を赤くしながらタコみたいに軟体化していく。

「そ、そんな、私は……いつでも、どうぞ……」

またこのパターンか！

「おい、白雪……キツネに化かされてるぞ」

「儂をそこいらのいたずらキツネと一緒にするでない！」

と、玉藻は俺に反論してくるが一体どう違うのかよく分からん。

キツネはキツネだろうに……

「ね、ねえ……どうしよう、あなた。娘が、弟か妹が欲しいって……きやあ……」

上目遣いで畳の上に『の』の字を書きながらボソボソ呟いてる。

俺も……その仕草に顔が赤くなりつつ、

「し、白雪！ 玉藻のトンチンカンな話に一々反応すんな」

「パパ！ 子供は、何人、何十人にしましょうか！ ああ、そしたら名前は——」

「誰がパパだ！ ち、血走った目を向けるな。玉藻、早く本題に入れッ」

「うむ」

俺がイラつとした感じで言うと、玉藻はそのまま尻尾を立ててハイハイしながら食卓まで移動してくる。

白雪は俺の隣に思い切り正座をしてきて、肩に触れ合うほどに近いので少し距離を離してもすぐに近寄ってきた。

さすがに俺が諦めたところでちょうど2人して玉藻と対面する形で話は始まる。

それから玉藻は……

まず、白雪に『極東戦役』が始まった話をした。

そして俺がバスカービルのリーダーとしてそれに巻き込まれた事も。

さらにヒルダとの戦いについても話し、

「ジャック・ザ・リップパー……あいつは緋々色金の保有者だった」

俺がそれを告げると白雪はともかく玉藻までもが狐耳を動かして反応した。

「遠山の、それは真か？」

「嘘を言つてどうする」

「ふむ……」

玉藻が何かを考えるようにそこで黙り込んだ。

俺はそのまま話を続ける。

「それから、そいつはヒルダによつて一度死んだと思つたが生き返つた。他にもまるで物理を無視した攻撃もした」

「まさか、儂にも分からん事が起きようとはな……」

玉藻が先ほどと違い、深刻そうな顔を始める。

白雪も……玉藻の表情を見て不安そうな顔になる。

「切り裂きじやつく」とやらが人間ではないと半分は冗談で言つておつたが……いよいよもつて、嘘から出た真になりそうじやの」

などと玉藻は不安が残る言葉を呟いた。

「半分は冗談つてことは半分は何か確信があつたのか？」

俺は引つ掛かつた部分を疑問に出すと、玉藻は、

「まあ……」ばんでいーれ——自らの陣を決めるあの会議で出逢うた時から奇妙な

感じはしておったがな。まさか、保有者とは……しかもどういふ訳か色金を使いこなしておる」

狐耳をピコピコと動かして答える。

「ともあれ、その場でお主らを殺めんかったということは少なくとも今すぐに敵対するつもりではないのじやろう」

死んでたとしても俺はここにいないんだがな……

などと俺は心の中で突っ込む。

「……鬼払結界は都の湾岸、ほぼ全域に張ったでの。鬼の類が中に入れば式神が儂に報せ、儂の印一つで攻めることができる」

「となると次は打って出る道も考えられますね」

などと、白雪は参戦に前向きな案を出してくるので……

「おい白雪。お前は怖くないのか？ こんな戦いに巻き込まれて」

「……『戦役』に関しては前から星伽で聞いたことがあったし、本当は数年内にそれが来ることも占いで分かってたから」

「随分前向きだな。ヒルダとの戦いからして、この戦いはかなり厳しそうだぞ」

俺が覚悟はあるのか、再確認するように言うと白雪は――

……微笑んだ。

いつもの穏やかな笑顔で。

「星伽の巫女は守護^{まも}り巫女。私達はずっと何かを守って戦ってきたの。国の混乱や、戦争、それと何度かあった『戦役』からも、ずっと、ずっと……それを私達もするだけのことだから。それに——」

そこで白雪はすこしだけ表情を曇らせ、すぐに何かを決意したように勇ましい顔になった。

「もう、私は“自由”だから」

自由、か……それは自分の意志で決められるって意味なんだろうな。

根っこの部分は変わらないが、白雪は前みたいに周りに振り回されたりはしない。

自分で何をしたいのか、もう決められるだろう。

ジャンヌの一件以来、成長したな……白雪。

白雪はいつも通り、味方でいてくれるんだろう。疑っていた訳じゃないが、それが少しだけ嬉しかった。

◆ ◆ ◆

久々に気分の良い気持ちで一日を終える事が出来そう。

そのことに私は望外のハイテンションで気分は上々。

今すぐにも誰かをメチャクチャにしたい。解体的な意味で。

ヒルダで満足？ まさかする訳がない。

私の欲は満たされない。

穴の開いた容器に延々と欲望を垂れ流してるだけ、だから満たされない。

とは言え、気分が乗ってるからと無計画に衝動で殺す訳じゃない。

犯行動機は衝動でも私の犯罪はいつだってエンターテインメント。

常に謎を残し、それに頭を悩ませる人を楽しく観察してるだけの役者兼観客。

なんてね……いや、本当に私自身が驚く程に気分が良い。

気分が良いのでキンジをこれからいじり倒す。

本人も本気で嫌がってはいないはず、そもそも本当に嫌そうだったら私がそこで止め

るし。

キンジは避ける事はあってもあんまり”拒絶”はしてこないからね。

なんだかんだ、人が自然に集まる。

武偵高に入ってから2人の時間が出来ないのが難点だけど、まあそれはそれで面白い

人が集まるから退屈しないでいいし。

考えながら私は男子寮の階段を静かに上がる。

時間は夜の10時。

女子が男子の部屋に行く時間じゃない？

別にピンクなショートタイムが始まる訳じゃないし問題ない。

頭がピンクでも脳内がピンクじゃない。ピンク頭もいる訳だし。

私とかね。

キンジの部屋がある廊下に辿り着いた瞬間に扉が開く音が聞こえた。

別に隠れる必要はないけど神崎だったら面倒な事になりそうなので、一旦降りて階段の途中にある窓から外へ出てそのまま窓枠に掴まる。

10月の終わりだから冷える……

そして、足音が遠ざかったところで再び窓から侵入。

風で聞き取り辛かったけど、足音からして神崎。

身長が小さいから足音も軽めなんだよね。

理子も同じだけど、あの子は落ち着きのない足音だからすぐに分かる。

などと適当に考えながらもキンジの部屋に到着。

鍵は……掛かってない。

不用心な。

油断していると殺人鬼が侵入しますよ

扉を開けてリビングへ向かうと、

「来ないと思ってたが……来たんだな」

ソファーに座ってテレビを見ながらも、キンジが待ち構えてた。

「なんだ……この時間なら寝る準備をして、油断してると思ったのに」
「機嫌が良いとお前は何か仕掛けてくると思ったからな」

読まれてる。

もしかしたらとは思ってはいたけどね。

「で、どうしたんだよ？」

「いじりに来た」

「……帰れ」

「冷たいなく、明日どうせ暇なんでしょ？」

言いながら私はキンジの隣に座る。

「悪いが、先約で明日はアリアと文化祭を見て回る予定だ」

神崎と回る、ね。

むう……それは少し面白くないな。

割り込んでもいいけど、私は空気が読めない人じゃないからね。

せいぜい楽しんでおきなよ、今の内に。

なんて内心思ってるけど流石に小物臭いかな。

私はキンジとそのままテレビを静かに見る。

「お前、明日は空いてるのか？」

「空いてるけど……なに？」

唐突に聞いてきたキンジに私は静かに答える。

「いや、午前中はアリアと回るだろうが……午後なら空いてると思うからどうかと思っただけだ」

その言葉に私はきよんとする。

私から誘うことはよくあっても、キンジからとは意外だね。

「別にいいけど……」

「じゃあ、決定だな。アリアも午後には用事があるって言ってたし、終わったら連絡する」

「楽しみにしてるよ」

キンジからのお誘いを受けて、そのまま私はシャワーに向かう。

その途中で後ろから声が掛かる。

「泊まってくのか？」

「今日は何もしないよ」

「本当か？」

キンジからジト目が返される。

信用ないな

まあ、当然と言えば当然だけど。

というか女子を泊めるのに抵抗はしないんだ。

もしくは無駄だと思って諦めてるのか……

そのまま洗面所に向かい、衣服を脱ぐ。一瞬だけカラーコンタクトを外して鏡に映る瞳の色を確認する。

片方が神崎みたいな赤紫色、もう片方はまだ紫に近いかな。

目立つほどじゃないけどオッドアイみたいな感じになってる。

やっぱり……侵食は進んでる。

今は調子が良いけどすぐに衝動が襲ってきそう。

ある程度、見繕っておかないと。

それは後でいいとして……

キンジからの誘い、か。

出来れば神崎よりも私を先に選んで欲しかったな……

もしかしたら神崎の方から迫ったのかもしれないけど。

それでもやっぱりそう思っちゃう。

流石にキンジに期待するだけ無駄かな？

むしろ誘うだけ成長したといえれば成長したって言えるかもしれない。

それでも人間は贅沢ぜいたくで、やっぱり高望こうぼうみしちやう。
うん、でも悪くはないね。
明日が楽しみだよ。

86 : アフターパーティー

——翌朝。

さて、文化祭の仕事は昨日で終わつた。

ここからはある意味、自由時間。

キンジとの約束まで当然に暇はある。

どうしようか……

と思つた矢先にいい暇ワトソンつぶしを見つけた。

彼（彼女）とは約束もあるし。

「やあ、ワトソン君。こんなところで何してるのかな？」

と、人ごみの中で男子制服でいるワトソンに私は声を掛けた。

「ああ、ミス・シラノ。今日はいい天気だね」

などとイギリス人にありがちな無難な天気の話から入るワトソン。

「そうだね。イギリスだと晴天は珍しいかな？」

「はは、そうでもないよ。イギリス……特にロンドンには曇つてる日が多いのは事実だけ

「どちやんと晴れる日もあるからね」

ワトソンはそう言いながら接しやうい感じに微笑む。

ふうむ、一部の女子を魅了する笑みだ。

イ・ウーでも中性的な美少年であつたのは認めよう。

まあ、一部にはバレてたけどね。

ヒルダは女、というか処女の匂いが分かるし。

変装がデフォルトの私は言わずもがな、同様に理子にもバレてる。

カナ……金一にもバレてたかな？

あつちは男装じゃなくて女装だけだ。

「そうなんだ。で、話は変わるんだけど今は特に何もしてない感じ？」

「そうだね。日本の学園行事に出てきてみたはいいけど、よく分からなくて」

なるほど、それは好都合。

少しだけ困った感じのワトソンに対して私は表はニコニコとしながらも、内心ではニヤリとする。

「よければ一緒に回らない？ 午後に予定があるけど、それまで時間を持って余しててね。」

一人で回るのも味気ないかなって思ってたところだったから」

「本当かい？ それは助かるよ」

「それにきちんと仕事はやったしね」

「英国紳士として約束はちゃんと守るよ」

それだけで通じたのかワトソンは当然とばかりに返した。

さて、どうしようかな？

自分で催促したみたいないな感じだけど、見返りなんて正直どうでもいいんだよね……

「つて言っても大したことはしてないけど」

「遠慮はしなくてもいい。先払いの報酬もなしに君はきちんとボクの期待に伝えてくれたからね」

などとワトソンは紳士的な返し方をする。

「うーん、これと言つて望む報酬はないんだけど……あともいいかな？」

「勿論だよ。あまりに度が過ぎるのは用意できないけど、出来る限りのお礼はするよ」

「それじゃあ取りあえずは、先にイギリス紳士をエスコートさせてもらうよ」

「うん、すまないね」

ワトソンを連れて私は文化祭へ。

とは言つても去年は私もないなかったので、特におすすめとか何をやってるとかは知らない。

一応、一般の人向けに配られてるパンフレットを一部貰つてるので案内に困る訳じゃ

ないけど。

「どこから行こうかな……気になる場所はある?」

「パンフレットがあつたんだね」

「配つてる子に話しかけたら普通に貰えたよ」

言いながらも私はワトソンに見えるように広げる。

「専門科棟別でも色々とやつているんだね」

ワトソンの言うとおり、パンフレットには武偵高全体的の見取り図にどこに何があるか、それからそれぞれのエリアを拡大した詳しい出店の位置などが記されている。

あとはイベントの時程なんかも掲載されてる。

去年私はいなかったから去年はどうだったのか他の生徒に聞いてみたら、話によると人気なのは強襲科アサルトの射撃体験コーナー。

銃社会が浸透しつつある日本だけど撃てる機会が多い訳じゃないからね。

他にも——超能力捜査研究科——SSRでは占いをやつてたり、何かスピリチュアルな体験コーナーもあるらしい。

たまにそれで超能力の素養のある子が反応したりするとかないとか。

まあ、そんな感じで平和なイベントそのもの。

私は退屈のぎをさせてもらうから、ワトソンにとっては平和なイベントにならない

かもね。

「決めかねてるなら、色々と見て回ってみる？」

「そうだね。まずは甘いものでも売つてるところはあるかい？ 食べ歩き、というのをしてみたいんだ」

庶民的な事が気になるのか、ワトソンは楽しみといった感じに少しだけ弾んだ声で言う。

しかし、甘いものとは……

微妙に女子力を感じる。

甘いものと言えば女子が多い学科、CVR——特殊捜査研究科——の近くにあるはず。

パンフレットにもそうあるね。

「うん、それじゃ案内するよ」

私はそう言つて胸を当てるようにワトソンの腕を組む。

「随分と大胆だね、ミス・シラノ」

ちよつと驚いた顔をしたけど、すぐにワトソンはにこやかに対応する。

流星にキンジミみたいに取り乱したりはしない、か。こういうのに慣れてる感じすらある。

「こうしておけば悪い虫は寄ってこないからね」

「なるほど。騎士の役目、任されるよ」

私の一言で察したのかワトソンは笑顔で答える。

それから私とワトソンはカップルのように目的地へ。

ほどなくしてCVRの専門科棟近くに到着。

スイーツの出店、カフェっぽい出店。

屋外フードコートみたいな感じになってるね。

それに女性だけでなく男性、カップル、様々な客層に対応してる出店があるのは流石はCVRってところだよ。

汚い話、ある意味これも実践学習みたいなものだし。

客をどれだけ誘惑して金を落とさせるか。

場合によっては業績で単位加点もあるみたい。

さて、そんな話は置いといて……

「なあにやっつてんのかな？ ライカ」

「し、白野先輩!?!」

出店の1つに私の戦妹であるライカがいた。

しかも執事服で。

そして、ライカがいるってことは――

「いらっしやいのですの!」

当然、麒麟ちゃんもいるよね。

彼女はフリフリのエプロンドレスで店の奥から出てきた。

金髪によく映える。さながら不思議の国のアリスのよう。

アリスと言えば私の中ではホットな話題。

「知り合いかい?」

勿論、私とライカ、麒麟の関係を知らないワトソンはそう聞いてくる。

「ああ、そっちが私の戦妹アミカで隣の子が戦妹の戦妹」

「なるほど。しかし珍しいね、戦妹の戦妹なんて」

まあ、そうだろうね。

最近は色々あつて面倒を見れてない部分はあるけど、ちゃんとアドバイスはしてあげている。

だから少なくとも成長はしてる。

心境の変化もね。

別に今のところこっちの陣営に引き込むつもりはない。

ただ単に私の個人的な趣味観察だからね。

「まあね。でも、神崎さんの戦妹にも妹がいるし。それはそれとしてライカは随分と——」

「……何ですか？」

私の視線に気恥ずかしそうにライカが頭をかく。

「うん、似合ってるよ。さぞかし人気じゃないの？」

ニヤニヤした感じで出店のカウンターの端の麒麟ちゃんに問い掛ける。

「はいですの。お姉さまのおかげで売り上げは急上昇。ジョナサンの首も長くなる勢いですの」

ジョナサン——ああ、麒麟ちゃんが持つてるデフォルメされたキリンのぬいぐるみの名前か。

っっていうか、それ持ちながら接客してるんだ。

「売り上げ、売り上げねえ……」

この店の周辺にいる客層としては幼女、幼女、ロリ、つまりは見た目が小さい女の子が多い気がする。

男もいるけど、狙いとしては……まあそういうフェチの人なんでしょう。

なんて観察していると、私の脇から人影が。

「すみません、スペシャルジョナサンパフェを1つ」

そう言いながら中学1年くらいの少女が足早に店頭で注文する。

そのメニュー考えたの絶対に麒麟ちゃんでしょ。

どんだけそのキリンのぬいぐるみ気に入ってるの……

そして、ライカが注文に対応する。

「はい、お待たせ。こちらお釣りで。またのお越しを」

接客できたんだ。

パフェを受け取った少女は惚けた顔で受け取って、一礼して足早に店頭を去っていった。

流石は王子様タイプ。

小さな姫を初見で魅了とは。

「……先輩、買わないんですか？ それと隣の人は、初めて見る人ですね」

私の視線に呆れたようにライカがジト目をしながら聞いてくる。

「はじめまして、紹介がまだだったね。ボクはエル・ワトソン。最近、転校してきたばかりだね」

「え、ワトソンってあのワトソン?!」

「そのワトソンで違うないよ」

隠すことでもないのか、ワトソンはライカに普通に答える。

「まあ！ どうりで気品のある方と思いました」

「ハハ、ありがとう」

その手のお世辞は言われ慣れてるのか麒麟ちゃんの言葉をワトソンは素直に受けとる。

おっと、ここでライカが嫉妬の視線ビーム。

「ところで何を注文されますの？」

「そうだね。食べ歩きながら見て回りたいんだけど、手軽でオススメなのはあるかな？」

「こちらのクレープなんてどうでしょう？ 今、売れてる逸品ですよ」

などと麒麟ちゃんも気付かずに——いや、気付いてるね。

店頭に立て掛けられた看板のメニューを指し示してる時に視線が動いた。

流石は理子の元戦妹、人の気の引き方が姉に似るね。

「ということだけど、どうだい？ ミス・シラノ。君の好きなものでいいよ」

「ありがとう。それじゃあ、そのクレープを2つ貰おうかな？」

ワトソンの様子だと奢ってもらえそうなのでそのまま注文する。

「はい。毎度ありがとう、ですよ」

そのまま笑顔で麒麟ちゃんは店の奥へ。

「ライカ、視線があからさまだよ」

「え……な、何がですか?」

私の指摘に自覚はあるのかライカは言葉を詰まらせる。

相変わらず分かりやすいんだから。

「お待たせですの。クレープ2つで400円ですの」

「まとめて払うよ」

そう言つてワトソンは高そうな財布を取り出す。

しかもヴィトンの財布だし。

フランスの商品をステータスにするのはイギリス貴族つて感じだね。

しかし、ヴィトンの財布から日本の小銭が出るのはシニールだ。

「ありがとう、麒麟ちゃん。それとライカをあまりイジメないようにね」

「ふふ、相変わらずお見通しですの。流星は理子お姉さまの友人でAランク武偵ですのね」

それから少しだけ麒麟に近付いて小声で話す。

読唇術で言葉が読み取られないように角度を考えて――

「ライカ、CVRに自由履修させてもいいかもね」

と、耳打ちする。

あれだけ王子様気質なら十分に素養はありそう。

長身でスタイルも良いし、磨けば化けるのは間違いない。女性としてもね。

要はどっちでもいけそう。

実は私も密かに誘いを受けてるのは内緒。

「それは素敵な提案ですの」

「やるなら2学期末かな？ 体験入科のシーズンだし」

私の提案に麒麟ちゃんは満足そう。

「それじゃあね、二人とも頑張って」

後輩たちと別れて、ワトソンとクレープを片手に再び文化祭へ。

そして、入れ替わるように小さな女の子がまたライカ達の店へ。

本当に人気だね。

「32の王様ゲーム。あなたの王様はイスにすわったお姫様。くるりと回ってチクタクチクタク。遅刻はいけ^生けない、穴に落ちてさようなら」

などと先程の少女はそんな不思議な事を言いながらライカ達の店へ。

レキ以上に電波な子もいたもんだね。

不意に気になってその少女を見ると、金髪にエプロンドレス。

麒麟ちゃんと同じような格好をした少女。

私の視線に気付いたのか少女が振り返り、小さな碧眼が私を捉える。

「穴の先は不思議な深淵、狂ったお茶会へご招待♪」

最後にそう言つて私が瞬きをすると。

——少女は消えた。

「どうしたんだい？ ミス・シラノ」

私が呆然としてるとワトソンが声を掛けてくる。

考えるまでもない。

どうやら深淵に魅入られたみたいだね。

しかもどうあれお茶会に招待された。

まあ、願つたり叶つたりなんだけど。

しかし、まあ……正直ビックリした。

お父さん以外の誰かに驚かされるのは久しぶりかもしれない。

「何でもない」

フラグっぽいセリフを言いながら、再び私とワトソンは文化祭へ。

ワトソンをいじるつもりだったけど、さっきの出来事で十分に退屈は紛れた。

好奇心は既に移つてる。

そのあとは普通に文化祭を見て回り――

「いいのかい？ あのクレープだけがお礼なんて」

私の予定の時間が近付いてワトソンがお礼はどうすると聞いてきたので、私はあのクレープで十分と答えた。

そして、それに驚いてさっきの言葉。

「いいんだよ、私の望みなんて多くないし。捻り出した願望じゃあ意味がないでしょ？」
「そういうものなのかい……？」

「そういうものなの。だから、さっきので十分。納得がいかなければ貸し一つで」
「分かったよ。今日はありがとう」

と、それだけ言ってワトソンとはあっさり別れる。

さて、お次は――

キンジも神崎とのデートが終わったのか連絡が来た。

場所は探偵科棟^{インクレスト}の屋上。

相変わらず屋上が好きなことで。

期待はしてないけど、楽しみに待ってあげよう。

私は一足先に屋上へ。

いつも通り待ち伏せ……いや、たまには普通に待ってあげるか。

折角キンジが珍しく誘ってくれた訳だし。

ちよつとだけは期待してあげよう。

期待を込めて、簡単だけどメイクアップ。

軽い変装道具はいつでも常備、化粧も例に漏れず。

こんなでも専門科は強襲科アサルトな霧です。

と、出来た。

コンパクトミラーでチェックして、これで準備よし。

「早いな。まだ集合まで15分あるぞ」

「お互い様でしょ?」

声がして、答えながらコンパクトを閉じて振り返ればキンジがいた。

「神崎さんとのデートは楽しかった?」

「なんでそうなる……ただ単にアリアと文化祭を見て回ってただけだ」

それを世間一般では以下略っと。

「じゃあ私が本命のデートってことでいいの?」

ニンマリと聞いてみると。

「はあ……そういうことしておいてやる」

疲れたような息を吐きながらキンジは否定はしなかった。

まあ、及第点としておこう。

「それじゃあ、今日はどんな風に楽しませてくれる？」

「難易度が高い注文だな、つてくつつくな!!？」

「もう慣れたでしょ？」

言いながらも私はキンジの腕に肢体を密着させる。

「つて言うかお前、それ化粧か？　いつもより色々とパツチリしてるぞ」

「意外だね。そういうの気付かないと思ってたのに」

「兄さんの関係で多少はな……」

「そういえばそうだった。」

金一の女装はガチだからね。

化粧を使ってるのも知ってる。

「うーん、金一さんが金一さんだからキンジも女装の才能ある気がするな」

「恐ろしいことを言うな」

「文化祭だし、ちよつとくらい羽目を外して——」

「やめろ」

「あー、キンジの女装が気になるなー。見たら貸しが減る気がするなー」

「そういうのはズルいだろ!？」

ちえ、本気でイヤっぽいやから下がるか……

「仕方ないな」

「あとは離れて歩いてくれないか？」

「それは却下。ちゃんとエスコートして欲しいからね」

私が密着してから目に毒なのか、キンジは必死に現実逃避をしている。

やれやれ、対応は出来てきたけど耐性は相変わらず皆無なんだから。

まあ、いつでも新鮮なりアクションしてくれるのは楽しいからいいんだけどね。

その後は普通に文化祭を見て回った。

主にキンジの財布で。

ただでさえワトソンとの戦い以来から金欠が加速してるキンジには泣きっ面に蜂な

訳だけど。

「平和だったね」

「……そうだな」

文化祭の店が終わる17時、正門の近くで私がそう一言で締めくくる。

キンジは遠い目をしてるけど。

仕方ない、また何か差し入れてあげよう。

「あとは打ち上げだね」

「なあ……霧」

キンジは少しだけ深刻そうな顔をする。

珍しくキンジから誘うから何かあると思っただけど……ようやく本題か。

「なに？」

「お前はここのまま武偵を続けるのか？」

藪から棒だね。

「それは状況次第かな」

嘘は言っていない。

それにお父さんの頼みであるパートナーをやめろとは言われてないしね。

最初にお父さんはただ単にパートナーになって欲しいって言った。

武偵としてっていうのは成り行きだし。

まあ、武偵を続ける執着は特にない。

何が言いたいかというと……

「キンジはどうするの？」

「俺は……」

そこまで言ったところでキンジは言葉を詰まらせる。

全く……私の勘違いじゃないなら”一緒に来て欲しい”って素直に言えばいいのに。言われなくてもついていくけど。

「ま、何となく分かるけどね。だけど、私にも都合があるんだよ」

「……分かったよ。悪いな、霧」

「いいんだよ。それじゃあ、打ち上げの準備をしてくるね」

「ああ、夜の7時にな」

と、私とキンジはそこで別れる。

夜の打ち上げに必要なものは部屋に置いてあるし、このまま部屋に戻ろう。

女子寮の3階にある私の部屋にたどり着き、扉を開ける。

「いらつしやい、チェシヤ猫さん」

そこには客人が、いや……午前に見た”エプロンドレスの少女”がいた。

ここは私の部屋——ではないね。

なら、私の方が客人か。

扉を通つたら”異空間”とは、どういう門を通ってしまったのか……

エプロンドレスの少女は、白く丸いティーテーブルの前の白いイスに座っている。

そして優雅に一人お茶会。

見たところ、私の分も用意はされてる。

「さて、初めましてだね。私は白野 霧」

「本当かしら？ あなたの名前は誰もが知ってる。だって名付けたのはみんなだもの」

まあ、その解釈は間違ってるじゃないね。

私は世間みんなにそう呼ばれた。

だから、誰もが知ってる。

それはそうと、目の前の少女は無邪気なようでなかなかヤバい存在なのは間違いない。
い。

なかなかどころじゃないね。

私が出会った誰よりもヤバいって感じる。

常人なら冷や汗だらけだろう。

私は危機感よりも好奇心が勝りまくってるけどね。

「ジル、ジル・ザ・リップパー。ジャックの方が通りがいいけど。これでいいかな？」

「ええ、もちろんよ♪ 次は私ね。私はアリス——アリス・I・ウイリアムズ」

——狂ったお茶会へようこそ——

87 : 師団会議 (ディーンカンフ)

さて、打ち上げに行くつもりがとんでもないアフターパーティー二に誘われてしまった訳だけでも、どうしよう？

連絡しようと思つたけど、電波は圏外。

位置ぐらい分からないかと思つたけど……この奇妙な空間。

結界的なもの？

外界と隔絶されてる的な感じかな。

一応、どこかの一室っぽい感じではあるけども……雰囲気はどうもよろしくない。

ただまあ、ここで警戒したところで恐らくは何もない。

目の前の少女は言葉通りに茶会に招待したのでろうし。

ティーテーブルには紅茶に必要な道具は一通りそろつてる。

ケーキスタンドまであるとは本格的だね。

私は普通に彼女に向かい合う形で座り、まずは観察。

ティータイムで使われるセット、紅茶を入れるカップと受け皿のソーサー、ポットに

ティースプーン。

ケーキスタンドには下からサンドイッチ、スコーン、ちよつとしたお菓子。

フルティーと呼ばれるヤツだね。

このティースェット……彼女が一人で用意したにしては本格的すぎる気がする。

さて、ほぼ確定的に例のアリスだと思われる少女は既に紅茶を優雅に飲んでる。

少女とは思えない、美しさを感じる所作だ。

まあ、それは置いといて飲んでるってことは毒とかはないだろう。

「いいカップだね。しかもウエツジウツドのカップなんて」

「まあ！ ブランドまで分かるなんて、嬉しいわ」

カップを褒めると子供ののようにキラキラと顔を輝かせた。いや、子供のようになってい

うか子供なんだけども。

「じゃあ、カップの名前はご存知かしら？」

「クイーンオブハートだったかな？」

紅茶を嗜んでるからそれなりにブランドとかの知識もある。

イギリス出身としてはおさえとかないとね。

しかし、ものの見事にアリス関連で来てるね。

「素敵だわ、素晴らしいわ♪」

お茶会にこだわりがあるのか、アリスは私の答えに嬉しそう。

自分のこだわりを人に理解してもらうのは嬉しいことではあるからね。

完全に反応は十代の少女のそれ。

だけど、この違和感はなんだろう。

「イギリスの淑女だからね。ところで、私のことは知ってるような口振りだったけど

……」

「ええ、知ってるわ」

迷いなく言う辺りハツタリではないらしい。

そもそもそんな風に腹の探りあいが出るような精神をしてないように見える。

取り敢えずは紅茶を淹れて、一杯。

茶葉はアツサム、か。

イギリス人の好みの茶葉なのは違う。

ふうむ、10歳前後の少女が1人でこれだけの物をどこから持ってきたのか……

保護者がいるわけもない。

「チエシヤ猫さんが私を探してるのを知って、我慢できなかったの。今までトランプ
ばっかりで遊んでて飽きちゃって」

しゅんとした顔で引き続き語るアリス。

言い回しというか、さつきから不思議の国のアリスになぞらえた単語があるのが気になる。

私をチェシヤ猫って、そう言えば以前にジェームズがチェシヤ猫呼ばわりしてたけど、こんなところで伏線回収しなくても……

「こんなところにいたら窮屈でしょうに、国を出てみればいい。」全ての冒険は、最初の一步が必要。だからね」

「そうなのね！ でも、どっちにいけばいいか分からないの」

私がチェシヤ猫のセリフの1つを言ってみると、彼女は食いついてきた。

「それは君がどこに行きたいかによるね」

「どこでもいいのだけれど」

「なら、道を聞く必要はないわけだよ」

これもアリスとチェシヤ猫の問答の一つ。

この問答にどれ程の意味があるかは知らないけど。

「ふふ、良かったわ——」

——あなたもマトモじゃないのね。

満足げにアリスがそう言った瞬間、空間が歪む。

どこかの一室としか分からなかった曖昧な空間の全容が見えてくる。

ティータイムには似合わない死臭がまず鼻についた。

どうやら狂ったお茶会は今から始まるらしい。

周りにはトランプ紙のように引き裂かれた死体がそこかしこにある。

特に慌てることもなく観察してみれば死体は子供ぐらいの体格に見える。

私の予想が間違いじゃなければ、十中八九イギリスで行方不明の子供だろう。

死体は腐敗の具合からして……2カ月前後より古いものはないっぽい。

2カ月ぐらい前に何かあったっけ？

色々あったけどあり過ぎて何が切欠なのかよく分からない。

しかし、もつとワンダーランドな死に方をしてるかと思えば……思ったより雑だね。

この時点で彼女が普通の精神状態じゃないのは明白。

って言っても正気かどうかなんて本人次第だからね。

チエシヤ猫も『俺がおかしいんじゃない、ただ俺の現実があんたの現実と違ってる

だけなんだ。《I'm not crazy, my reality is just

different than yours》って言ってるし。

まあ、それは置いておこう。

この惨状を見て言葉遊びをするなら不”死”議の国つてところかな。

「それで？ どんな黒魔法を使ったのかな、アリスちゃん」

「黒魔法だなんて、とんでもないわ。お友達と遊んでただけよ」

お友達……私が言うのもなんだけどロクな友達ではないだろう。

「そのお友達はどこに？」

「クスクス、いつでも私の傍にいるわ。詩うたで出てきてくれるの」

詩……アリスになぞらえるなら、簡単に思いつく怪物はいるけども……

好奇心はあるけど、今呼ぶのは得策じゃないね。

余計な遊戯に付き合うことになったら面倒だし。

ここは話題を変える。

「ふーん、なるほどね。ここでもいつもお茶会を？」

「そうよ。でも、飽きちゃったの。だから、チエシヤ猫さんに道を尋ねてみようかなって思ってる」

私がいっつ、そんな重要な配役のポジションになったのかは分からない。

それはともかくとして……彼女の言葉に偽りはないだろう。

子供らしく純真で、好奇心に身を任せ、そして飽きれば次の興味へ。

何というか子供のある種の残忍さを具現化したような感じではある。

向上心、好奇心、復讐心、研究心、探求心、自立心。

そう言ったものは全て残酷に繋がる。

まあ、私の勧誘したのってそういうの拗こじらせた連中ばかりだし。

「だけど、どの道を通つてもいいのならチェシヤ猫さんについていってみようかしら」
それは願つたりかなつたりで案外すんなり。

拍子抜け、ではある。

別に苦勞をしたくない訳ではないんだけどね。

大分ヤバイ予感はしてただけど見当違いだったかな？

「それは君の自由だよ。私達の邪魔をしなければそれで」

「邪魔はしないわ。遊びを邪魔するのはマナー違反なもの」

そこら辺の常識は一応あるのか……

トランプ遊びに関してはノータツチだけど。

アリスは引き続き静かに紅茶を飲む。

そしてカップを置くと、

「それじゃあ。行きましようか」

無邪気に言いながらぴよんと、イスから降りる。

「どこに？」

「チェシヤ猫さんの遊び場によ」

と、彼女は笑顔で言うが。

別の意味で嫌な予感がしてきた。

「ほら、早く行きましょう」

お茶会はお開きとばかりにアリスは私の手を引いて先程の扉を潜る。すると——馴染みのある雰囲気のある場所に出た。

というか私の部屋なんだけど。

「ここがお部屋なのね。飼い主さんのお部屋だと思つてたのだけれど、違うみたい」
本当に私の部屋に戻ってきたみたい。

なに、どこでもドア？

空間を跳躍できちゃう感じか……原理は分からないけど。

明らかに色金を使った感じじゃないし。

これには私も驚きを隠せない。

「それで？ 私のお部屋に来て何も提供できないよ」

「それでもないわ。私、今日からココに住むことにしたもの」
無邪気な笑顔でとんでもない事を言い始めた。

……私でも分かる。

この子とはとんでもない厄ネタだつて。

外から見て愉しむつもりだったのに……

まあ、話した感じからして精神構造は子供そのものの扱いやすいようで扱いにくい存在なのは間違いない。

思考を切り替えてこの子をどうするかを考える。

ダメって言ったところでヘソを曲げそうだし。

今まで尻尾が掴めていなかったことから考えて、彼女一人でも変に見つかったりはないだろう。

見つかったとしてもこんな少女がイギリスの事件の容疑者だとは思わないだろうし、日本にいるなんて誰も想像してはいない。

機嫌を損ねなかったら私がトランプ兵の代わりになることもないでしょう。

「仕方ないね。あんまり見つからないようにしてくれると嬉しいのだけれど……流石にお城暮らしは退屈するよね？」

「当然よ。ハートの女王にはなりたくないもの」

そりゃ、好奇心旺盛な子供に閉鎖空間で暮らせと言うのも酷な話だよな。

私もそういうのは真っ平御免だし。

「もちろん、見つからないようにするわ」

こうして話してる分には良い子に見えるんだけどね。

「そうしてくれるとチャシヤ猫的にもやにやした笑顔のままでもいいから助かるよ」

言いながら私が携帯を不意に見ると、外は元に戻ってる。それどころか着信が一件来てた事が画面に表示された。

電話の相手はキンジ。

私は着信履歴からリダイヤルしてみると、2回コール音がする前にキンジは出た。

『霧、大丈夫か?!』

携帯を耳に近付けてもしもしを言う間もなく、大声が鳴り響く。

思わず携帯を耳から少し遠ざけてから、もう一度近付けて用件を聞いてみる。

「大丈夫だけど、その慌てよう……何かあった？ 念を押して言っておくと私は部屋にいるから大丈夫」

『ああ……そうか。……よかった』

安堵したような息遣い。

続いて告げられたのは、

『アリア達が襲われた』

そんな唐突なイベントの話だった。

退屈しない日々がまた続きそうだね。

取り敢えず武偵病院にいるというので、キンジと合流して私がお茶会に参加してる間

に起こった事態の詳細を聞いた。

簡単に言えばロスアラモス・エリートジニオンの『人工天才』であるジーサードとジーフォースがこちらに戦闘を吹っ掛けたらしい。

主にやったのはジーフォース。

バスカービル——理子、白雪、レキ、神崎——の4人がやられた。

その後、ジーフォースは武装解除して何故かこちらの陣営に一時預けられる事になったというのがキンジから聞かされた事態の内容。

それから愚痴るように「俺の妹なんて名乗りやがる。意味が分からん」と私には零こぼした。

血の繋がりが無い訳じゃないけど、同じ母胎から生まれた訳ではないしね。

しかし、ジーサードか……ここで関わってくるということはキンジを取り込んで戦力増強を狙ってるを見た。

アメリカも今じゃマッシュルームみたいな頭の人工天才とジーサード陣営で小競り合いしてるみたいだし。

キャシー達も上手くやっていると良いんだけどね。

アメリカのことは取り敢えず置いておこう。

お姉ちゃんや私の影響はあつちの方じゃ弱いし、それはあとで考えることだからね。

で、間も置かずに翌日には招集が掛かった。

どうやら『師団』^{ディーン}による会議が行われるらしい。

微妙な立場ではあるけど、話を聞かない訳にはいかないよね。

さて、私の家族に手を出した落とし前をどうしたものか……

別にジーフォースが死んでも私やお姉ちゃんは困らないし……ジーサードがそれで本気になって私を追い掛けて来るなら、釣りやすいし排除もしやすい。

ジーフォースの排除はシエースチで充分でしょ。

理子の件を話せば淡々と処理してくれるに違いはないね。

その前に仮装をしないと……ハロウィンが休日だったから、振替えて今日はそれっぽい仮装しろって教務科から通達も来てるし。

仮装はミイラ男ならぬミイラ女で行こう。

裸に包帯なんて流石に痴女じみた事はしないけど。

アリスは何か知らないけど、私の部屋で茶会を開き始めたので置いていく。

集合場所はファミレス・ロキシー。

今は楓並木の道にオーブンテラスを張り出しており、夜風にあたりながらのディナーを楽しめるハロウィンキャンペーンをやってるようだ。

まあ、今はディナーじゃなくてティータイムな時間帯だけどね。

そこには『師団』^{ディーン}の面々が既に集まってる。

キンジは……まだ来てないみたい。

3時の集合にはまだ時間があるから問題ないか。

私はあるゲームのナースのカクカクした動きを真似しながら近付く。

実際に格好はナース服。勿論、包帯も顔に巻いてる。

ハロウインのミイラ女ではない気がするけど、気にしない。

「何をしている白野……」

冗談を言うでもなく直球にツツコんでくるジャンヌに私は、少し萎えた。

普通に近付く。

「もう少し遊び心を持とうよ、ジャンヌさん」

「生憎あいにくそんな気分ではない」

「その格好と一緒にヒネリがないね」

「余計なお世話だ。ハロウインと言えば魔女はメジャーだろう?」

メジャーだけど魔女が魔女の格好をしてもね〜

キンジも同じ感想を抱きそう。

そのままジャンヌは怪訝そうな顔を私にそのまま向ける。

「ところで、何故貴様がここにいる?」

「何故、って私もバスカービルのメンバーだし。それに君や、あの中華のツイントールのチビツ子に関わってる時点でもう無関係で知らぬふりでいる方が危険だと思うけど？」

「確かにそうだね。ミス・シラノの言うとおりだよ、ジャンヌ」

ジャックオーランタンを脱いだワトソンが、そう横槍をいれてくる。

君は仮装の方向性が少し違う気がする。

下は白い雨ガッパみたいなの着てるから洋風のとてる坊主かと思った。

「そう言えばミス・シラノは打ち上げに行かなかつたのかい？」

と、ワトソンは聞いてくる。

当然の疑問ではある。

私がお茶会をしてる間……つまりは打ち上げの後に襲撃があつたみたいだし。

「私は文化祭の時に知り合つた少女に気に入られてね。ちよつと拘束されてたんだよ。

それで行きそびれちゃつて」

「そうなのか。幸運だつたね」

ワトソンは疑いもせずに返してくる。

嘘は言つてないしね。

「幸運というよりは偶然って感覚だよ。ところで、そのキツネの仮装の少女は何者かな？　ここにいろつてことは通りすがりつて訳じゃないんでしょ？　多分」

空き地島——『宣戦会議』^{バンディール}で見掛けたキツネ耳の少女に目をやる。

人外なのは間違いない。

色金関連のアドバイザーだったら、私の中のモノに感づいてしまうかも。

空き地島の時は接触時間が短かったし、まだ安定してたからね。

今まで以上に色金は抑え込まないと……

バレても回避する設定は考えてる。

だけどバレない方が面倒がなくていい。

「ふむふむ」

キツネ耳の少女が鼻をスンスンさせながら私を見極めるような視線をしている。

そう言えば、この子の名前知らないな。

「不思議な感じじゃな。お主、只者ではないな」

なに、その漠然とした子供の感想みたいな評価。

「ねえ、この子ってジャンヌと同じ類いじゃないよね？」

「私と同じとはどういう意味だ？」

どういう意味って言われても……残念属性というか、パトラっぽいというか。

「お主、そこはかとなく儂をバカにしておらんか？」

「私の方が新参っぽいっけど、正直胡散臭い」

「遠山といい、お主といい！ 最近の人間は信心がないのか！」

キツネ耳の少女はその頭の耳をピコピコ動かしてブンブンしている。

信心と言うあたり、神仏関係の化生なんだろう。

などと考えてると、唐突にキツネ耳の少女は冷静になる。

「ふむ、考えてみれば自らを明かしておらぬのに信心を話しても仕方がないことではあつたな。儂は玉藻たまも。建仁の時より生きとる、いわば年長者じゃ。敬うがよい。白雪から聞いてはおるが白雪と遠山のとは親しい間柄のようじゃの」

しれつと敬えつて言つたけど、そこはスルー。

化け物関係が自分勝手なのは何となく分かつてるし。

「3、4年の付き合いになるしね。私は白野 霧。初めまして、玉藻様……ちなみにキンジとは寝所を共にしたこともあるよ」

「ぶっ!？」

ジャンヌは私の一言でコーヒーを吹き出す。

ワトソンもあんぐり。

新鮮なりアクションをどうもありがとう。

私は満足だよ。

ジャンヌは信じられないとばかりの表情。

「寝所を共に……だと?!」

「思春期つてのは怖いよね。でもまあ、キンジは紳士だから」

ちよつと意味深に視線を逸らす。

「白雪め、先を越されとるではないか……。それとお主……嘘は言っておらぬが、誤解するよう言っておるな」

流石は年の功か、この程度のこととはバレるか。

「まあね。まだ手は出されてないし」

「一緒に寝たのは事実なのかい!?!」

ワトソンも興味はあるらしい。

身を乗り出して聞いてくる。

「勿論だよ。あれでキンジって結構締まった体をしててね。傍にいと男らしい安心感に包まれる感じで、少しだけ弱い自分を見せちゃいそうになるんだよ。私もちよつと、ね」

適当に話してるつもりだけど、アレ?

何かちよつと、頬が熱くなってきたかも。

変な気分になってきた。

「……………」

想像か妄想か……ジャンヌとワトソンも興味はあるらしく、少しだけ熱に浮かされてる感じだった。

うん、からかうつもりが変な雰囲気になってしまった。

「ああ、もうこんな時間だ。会議の準備をしないと」

「私もコーヒーのおかわりを頂いてこよう。この席はウエイトレスがなかなか来ないしな」

ワトソンはノートパソコンの準備をし、ジャンヌは席を離れて現状を離脱した。

ああ、私でも分かるほどの気まずい感じ。

こんなつもりじゃなかったのに……

そんな事があつたとは露知らず、話の中心である本人は遅れてやって来た。

何か魔法使いっぽいフード付きのローブを着てる。

魔法使いの男——ウィザードかと思っただけ。

ワイズのタロット関連で思い出した。

「ハーミットとはね」

「何で分かる……って顔に包帯巻いてるナースは霧か？」

私が思い当たるのを答えるとドンピシャだったみたい。

キンジはフードを取りながら答えた。

「そうだよ。キンジにピッタリだね。占いのカードであるタロット、キンジは知ってる？」

「名前だけはな。カードの意味とかは知らん」

「それはアルカナの9番目、隠者のカードの姿だよ。意味は思いやり、精神、慎重、神出鬼没、思慮深い。まさしく隠れる者って感じ」

「なるほどな」

特に興味はなさそうに答えながらキンジは丸テーブルの席に座る。

「でも、今のはカードが正位置の意味。逆位置は、閉鎖性、陰湿、消極的、無計画、誤解、邪推」

「ふ……」「くく……」「なんじゃ、遠山のことではないか」

ジャンヌはバカにするように、ワトソンは堪えて、玉藻に至っては完全に同意。

キンジは内容に抗議する。

「おい、何で良さそうな意味より悪い意味の例が多いんだよ」

「キンジに当てはまりそうなのを挙げてみた」

「笑顔で言うな」

「遅刻した仕返しだよ」

「それは悪かったよ」

「どうせ衣装の關係で遅れたんでしょ？ あと、膝も痛めてる？」

私の言葉にキンジではなく、ワトソンが驚く。

「ミス・シラノ、よく分かったね。彼は前日の戦闘で膝を痛めてる。もしや医療知識があるのかい？」

「病気持ちの家族のお陰で多少はね」

「お前、ワトソンだったのかよ」

キンジは膝のことよりもジャックオーランタンをかぶった人物の正体の方にツツクむ。

ワトソンは話してる途中でカボチャを取る。

『まあ皆さん、禍々しい。でも、かわいらしいですよ。ふふっ』

私の師匠であるカツエの宿敵であるシスター・メーヤがノートパソコンの画面に映像通信で映っている。

その視線は子供の世話をする穏やかな母親のような笑顔だ。

「では、メンバーが集まったので性急ではあるが師団会議ディン・カンフを始める。先日『師団』のバスカービル——1名はウルスの所属でもあるが——その4人が『無所属』だったはずのジーサードと、手下のジーフォースに討たれた」

相変わらず進行役が板についてるジャンヌが、現状を再確認する。

キンジが来るまでにジャンヌ達から先日の襲撃の内容については聞いてある。

ジーサードの事情を知ってる私にはその狙いも想像できた。

「昨日、車で帰りながらジーフォースから聞き出したんだが——ヤツらがジオ品川を拠点にしていたのは、単にそこでレキを発見したからだそうだ。レキを含め、アリア達はそれまでジーサードに一切のコンタクトはされていない。完全な奇襲だよ」

ワトソンはジャンヌの言葉を補足する。

「——いくら寡兵かへいとはいえ許し難いな」

碧眼を少し鋭くして、ジャンヌはパニエで膨らんだスカートの下の足を組み替えた。

ジャンヌの策ではめるのとあんまり変わらない気がするけど、話が進まなささそうなので言わないでおく。

「なるほどね。で、そのジーフォースって少女を預けてるってことは交渉の余地はある訳だね」

私がそう言うとキンジはちよつと待て、とばかりに立ち上がる。

「何でだよ、ジーサードとジーフォースが別れてる今が狙うチャンスだろ?!」

その言葉に私と玉藻以外の全員が視線を逸らす。画面の向こうのメーヤもだ。

キンジってば、本当に逆位置の隠者になつちやうよ。

「キンジってば、実にバカだね」

「今はお前の冗談を聞いてる場合じゃない」

「冗談じゃないよ。冷静に大局を見なよ。私はジャンヌ達から事のあらまししか聞いてないけど、ジーフォースは奇襲とはいえ、Sランク相当の武偵4人をたつた1人で無力化した。その上役であるジーサードはそれ以上の実力があるって考えてもいい」

私の言葉にキンジは黙り込む。

「しかもジーサードの勢力は未だに不明。ジーフォースクラスの配下が何人もいるかもしれない。よしんば、ジーフォースを今倒したとしてもバスカービルの4人を倒した時以上の勢力をこちらに向けられれば……想像は出来るでしょ？」

私の言葉に玉藻は何かを考えるように目を閉じながらメロンソーダを飲み、

「うむ、その小娘の言うとおりじゃ、遠山の。仲間をやられて熱くなるのは分かるがの、冷静に大局を見るのじゃ。現状で勝ち目はあるのか、具体的な方法があるなら申してみよ」

人外特有の鋭い眼光をキンジに向ける。

「それは……」

そして、問われたことにキンジは言い淀む。

なら、それが答えだよ。

認めたくないかもしれないけどね。

まあ、私も家族を傷つけられて黙ってるつもりはないんだけど……
今はまだ、ね。

「それに連中はその場でキンジやワトソンを屠^{ほぶ}ることも出来たのにしなかった。それどころか、ジーフォースを武装解除の上でこっちに人質みたいに寄越したつてことは、別の狙いがあるんじゃない？ 何かわかんないけど」

私の言葉に玉藻は頷く。

「うむ、なかなかに聡いの、白野とやら。褒美をとらそう」

「じゃあその尻尾をモフモフしても良い？」

「それはダメじゃー！」

すごい勢いで自分の尻尾を背中に隠した。

どうやら弱点っぽい。

それから玉藻はだめ押しとばかりに説明する。

「それにの、遠山の。ヤツらは進んだ科学を御するという。それは儂等、魔性や化生と相性は最悪じゃ。加えて、今は璃々色金の粒子もある」

「璃々色金……？」

冷静になったキンジは座りながら玉藻の言葉を繰り返す。

ジャンヌがキンジの方に振り向き、

「——理解しづらい事だろうが、璃々色金は超能力者の能力を弱らせる粒子を撒くことがある。チャフを撒いてレーザーを使用不能にするようにな。問題はその効果範囲だ。これは地球の表面の1/3程度の広範囲に影響する。文化祭の頃にまた粒子の強度が上がって、今も日本はその影響下にある」

ジャンヌの言葉に全てではないが、キンジは理解した様子だ。

現状、白雪やジャンヌは戦力ダウン。

今戦えば負けることは理解できただろう。

「じゃあ……どうしろってんだよ。あいつらの狙いが何にせよ野放しにするのか?」

「じゃから……取り込む」

「……は?」

玉藻の言葉にキンジは目を丸くする。

「合理的だね。キンジが納得出来るかは別にして」

「霧も何を同意してるんだよ?!」

「あのね……将棋と一緒だよ。相手の駒をそのまま自分の戦力に出来るならこれ以上ない戦果。戦わずして勝つのが最上の勝利だって孫子に書いてあるでしょ?」

「確かにそうかもしれないが、どうやって仲間にするってんだ」

「糸口はあるんでしょ、ワトソンさん」

私が話題を振ると、ワトソンがカボチャ頭を取った。

「その、えつとだね。ジーフォースという女は……昨日の話を聞く限り、こつちが恥ずかしがるくらいにキミと出会えた事を嬉しく語っていたんだ。キミに心酔して気を許してる雰囲気すらある」

「なんだよ、寝首でもかけてののか？」

「かけるなら寝技にしなよ。まあ、つまりは籠絡ろうらくしろつて事だね」

「——籠絡？」

あれー？　もしかして、日本人なのに籠絡の意味知らないのか……

それとも、具体的に何すればいいのか分かってないのか。

「ロメオをしろつてことだよ」

「ロメオっ……!？」

私が具体的な単語を提示するとキンジは絶句した。

語源はロメオとジュリエットのあのロメオ。

武偵としての意味は——男版のハニートラップ。

キンジは得意だろうしね。

「ふぎけるな、霧」

「遅刻したツケだよ」

私がそう答えると、全員が視線を閉じる。

「コイツら……」とばかりにキンジは辺りを見回す。

キンジが遅いから空いた時間で方針は既に決まっていた。

恨むなら要領の悪い自分を恨むんだね♪

「別に実際に色仕掛けをしろって訳じゃない。簡単に言えば情報が欲しいんだよ。戦力でも目的でも、味方になる条件でも何でもいい。遅刻したツケなんて言ったけど……現状、唯一の糸口であるジーフォースと接触して話せるのがキンジしかないんだよ」

私の優しげな言葉にキンジは耳を傾ける。

「お願い、キンジ。気は進まないかもしれないけど……私も助けになるから」

最後に少しだけ包帯を外して素顔で、キンジに迫りながら頼む。

真っ直ぐにただ見つめて、懇願するように。

「分かった……」

「うん、ありがとう。本当に出来るだけのサポートはするよ」

諦めたようにキンジは答えた。

「こう頼めば聞いてくれると思ったよ。」

『私も遠くではありませんが、サポートさせて頂きます。危険な相手には変わらないで

しょう。なので聖騎士団パラディーンに許可をいただき、まずはアリアさんとトオヤマさん宛に支援物資の作成・送付を手配しました」

あまり話してなかったメーヤが私に続くように入ってきた。

キンジはパソコンに対して聞き返す。

「支援物資……？」

『はい。倒すことはできなくても身を守る程度にはお役に立てるか』

「良い話も聞いたことだし、方針は決まった。今日は解散だね。このまま夕食でもしようか」

「うむ、そうだな」

メーヤの言葉から畳み掛けて私のあとにジャンヌが続く。

「はあ、俺は帰る……引き受けちゃったし。今日は別の意味で疲れた」

キンジは足早に女子空間から逃げ出したいのと、疲れたのとどぼとぼとその場を去った。

そして、女性陣だけが残されて……

「お主、かなり魔性の女じゃな」

じと目で玉藻に呆れられた。

「魔性だなんてとんでもない。そんなつもりはないんだけどね」

「じゃが、遠山のがああ頼めば引き受けてくれると知っておったのじゃろう？」
「まあね。キンジつてば分かりやすいから」

私が少しばかり笑うと、他のみんなは何とも言えない表情をしていた。
そんなに恐ろしいかなあ、私。

88 : ジーフォース

そして会議が終わって部屋に戻り、武偵病院に向かおうと思った矢先、困った事になった。

「……理子お姉ちゃん、傷付けた相手、肅清」

リリヤがどこから聞いたのか、物騒な武装を持つて私の部屋の前で待つてた。襲撃は昨日だけど、まだ1日は経つてない。

到着が早すぎる。

「……どい？」

機械的に聞きながらも早く情報を寄越せとばかりの視線。

言葉と表情以外に感情をのせすぎだよ。

「あー、持つてるのつて電磁^{レイル}投射^{ガン}砲？」

「……ソフィーに知恵を借りた。……出来た」

簡単に言つてるけど、とんでもないよ。

それで何を撃つつもりなのかな？

流石の私も冷静ではいられない。

レールガンは電磁力で物体を高速で投射する装置、簡単に言えばそんな感じ。クリアする問題は色々とおあるけど、実際に目の前にあるんだから完成しちゃってるんだらう。

銃身はリリヤの身長よりは若干小さい、といってもデカイけど。

直方体の形をしてる。

パツと見は直方体の合金と思われる物体に引き金と電源を供給するケーブルがあるだけにしか見えない。

直方体のある一面の真ん中に四角い穴がある。おそらく銃口。そして、コレ自体が銃身らしい。

辺が長い方がレールなのだらう。

「もう、実験したの?」

「……もうしてる。……実戦投入可能」

なんでお姉ちゃん協力したの。

しかも数学お化けのお姉ちゃん知恵を貸したならこれ以上ない兵器じゃん。

「……計算上、連発も可能。……電力が問題」

兵器は計算された武器だからね。

有効射程とか、必要な素材の重量、比重、熱量と実際に数値だらけだし。

「それで、私のところに来てもすぐに敵討ちはしないからね」

「……ソフィーも似たこと言ってた。……でも、最終的に始末するとも聞いた」

お姉ちゃんつてばそこも計算済みか。

ならリリヤを寄越したのも、計画通りだね。

元々リリヤに任せようとも思ってたし。

仕方ない……か。

「あら、お客様かしら?」

私の部屋からとてとて、とアリスが出てくる。

今日は黒のゴスロリっぽいエプロンドレスを着てる。

金髪に黒は無難に似合う。

基本的に服はエプロンドレスっぽいんだよね、彼女。

どこから取り寄せてるのか知らないけど。

「……誰?」

リリヤは怪しいとばかりに目を少し細める。

まあ、当然の疑問ではあるよね。

「お茶会仲間だよ。気に入られちゃってね」

「初めまして、私はアリス。あなたのお名前は？」

そんな簡単な自己紹介をするアリスに対して、リリヤは静かに警戒しながらも名乗る。

「……リリヤ」

「良いお名前ね。チエシヤ猫さんのお友達？」

「私の家族だよ。お茶会はいいけど、ランプ遊びは駄目だからね」

「はあい、分かったわ。でも残念。今日のお茶会はおしまいなの。だからまた今度ね」

そう言つて、アリスは部屋に戻る。

かと思えば突然に足音は消えた。

音で表すと、ととと——つと不自然な感じに足音が途切れた。

同時に部屋にいる気配も消えた。

奇妙な雰囲気だよ。私ですら少し不気味さを覚える程にね。

まあ、どこか出掛けたんだろう。

また戻つて来そうだけど。

「必要になつたら呼ぶから、部屋でもどこでも自由にしていよ。特にお姉ちゃんから何も言われてないでしょ？」

コクリと、リリヤは頷く。

「それじゃあ、私は武偵病院に行ってくるよ」

「……………」

リリヤは何も答えず、私の背中を見送っている感じ。

背中から視線を感じる。

変な行動しなきゃいいけど。

そんなこんなで制服で武偵病院へ向かう。

病室の場所は303号室。

病室にもうすぐ辿り着くかと思ったら、

「家に家族でもない女がいるなんて、”ありえない”。家においていいのは家族だけだ！だから——二度と来るな！お兄ちゃんは、あたしが真人間にするッ！」

激昂をしながら病室の扉が歪む程に蹴り閉めた彼女——あの栗色の髪に顔立ち。

イギリスでも見たジーフォースだね。

随分と荒れてるみたいだけど。

感情的なった表情はどことなく遠山兄弟に似てなくはない。

だからこそ、歪ませたいとも思っちゃったり。

金一が良い表情してくれるのが悪い。

「霧……」

私に気付いたキンジが助けを求めてる。

そんな表情しないでよ、あえて見捨てたくなくなるから。

ジーフォースも気付いたみたいだけど、すぐに敵意を剥き出しにしてくる。

「嘘まれそうだから近付けないんだけど、どうしたらいい？ あと、扉は蹴り閉めるもの

じゃないし病院は静かにするものだよ」

「お前も、あの病室に送るつもりだったのに。運の良いやつ……お兄ちゃんに近付くな。

お前は特に胡散臭い」

胡散臭い、ね……

経歴でも調べられた？

お父さんの書類偽装はかなりの腕前だと思うから、その線は薄いと思うんだけど。

直感的なものなら良い勘してると感心するよ。

「お兄ちゃんって……あー、キンジに妹がいるのは初耳なんだけど？」

「俺も知らねえよ！」

「つて、キンジは言ってるよ？ 私を胡散臭いって言うなら君も相当に胡散臭い存在だ

と思うんだけど？」

「黙れ！ あたしは妹だ！」

頭の良い人工天才^{ジニオン}にしては随分とサイコな思考してるね。

エニグマへ招待される素質はありそう。

いらないけど。

サイン……読まれるか。

マバタキ信号もハンドサインも正面でやったんじや意味がない。

とりあえず――

「その病室に入ってもいい？ お見舞いしたいんだけど」

一応、見舞いの品もあるし。

どうしようもないと思ったのか、キンジは諦めたような表情をしながら私の方へと歩いてく。

すれ違い様に何かサインでもと思ったけど、ジーフォースは私とキンジの間に陣取ってる。

キンジにこれでもかとかつついてる。

私はそのまま病室に入ると、いきなり銃口が向けられた。

しかも、何か理子以外はみんなコスプレしてるし。

神崎は妖精、白雪は天使、レキはオオカミのコスプレをしてる。

見た目の割には物騒なの向けられてるし、白雪に関してはM60だし。

「何よ、霧じゃない」

「さっきの廊下での会話、聞こえてなかったの？」

話してた場所からこの部屋までそんなに距離なかったと思うけど。

神崎が真つ先に銃を下ろし、白雪は私に銃を向けたことにおろおろ。

理子はそもそも向けてない。

レキは……向けてたのか知らない。

「見舞いの品を持ってきたのに……いきなり銃口向けられて、ショックだよ」

「ごご、ゴメンね霧さん！ てつきりジーフォースが戻ってきたのかと思って」

「冗談だよ。はい、見舞いの品」

それぞれの好物を私は袋から投げつける。

様子的になんか既に食べてるっぽいけど。

「あら、気が利くじゃない」

神崎が受け取りながらも、私は私でキンジにメールで連絡する。

「そりゃ、どうもってね。私、キンジが心配だからもう出るよ」

「あ、ちよつとー」

素早く病室を出る。

神崎の引き留める声がしたけど、無視。

さて、連絡ではまだ病院の中らしいけど……

「おい、お前……」

と、発見。

物陰に隠れる。

何故か間宮 あかりと佐々木 志乃がいるけど。

恫喝どっかつするように間宮に迫ったジーフォース。

「あたしのお兄ちゃんを呼び捨てにしかけたろ」

まあた、それか。

間宮の子も学習能力がないね。

以前に注意したのに。

「——死刑」

一言と共に爆発する殺気。

見下す視線はリリヤと同じで機械的な印象を受ける。

殺るときは、殺るね……これ。

実際にジーフォースが殺したことがあるかは知らないけど、障害を無慈悲に排除する

覚悟はあるみたい。

それに対して反射的に2人は武器を構える。

「お兄ちゃん、離れて……血とか、飛び散るから」

「やめろお！」

流石のキンジもこれには叫び止めた。

ジーフォースはくるりと回ってキンジに向かってケンケンで近付き、

「ツパ♪」

最後に笑顔で言った。

「なーんちゃってだよ。お兄ちゃん」

さつきとは打って変わって、花のような笑顔でキンジに冗談をアピールしてる。

今のは本気だった癖に、猫をかぶるのが上手いことで。

「さ、一緒に帰ろ♪」

ジーフォースはそのままキンジの腕を引っ張って病院の外へと向かう。

やれやれ……と、ばかりに私が近付く時には間宮の子は膝から崩れ落ちる。

緊張の糸が切れたらしい。

「全く、バカなことまで死にかけるとはね」

私もあんなつまんないことで死にたくはないものだよ。

「白野先輩……？」

呆然と私を認識すると同時に間宮の子は私に訴えるように迫る。

「白野先輩、聞いてください。あの子は——」

「知ってる。危険なんですよ？」

「そうなんです。あの子が星伽先輩達を——」

「それも知ってる。だから、この件は関わらない方がいいよ。君達の手におえる相手じゃないからね」

私の言葉に2人はどうして、という感じの表情。

「それに武偵は自立せよ。関わるなら、それなりの覚悟は持つておきなよ。それじゃあね」

私はそれだけアドバイスを残してキンジ達を尾行する。

本気で尾行したら実力の不釣り合いを疑われそうだからしない。

マジな変装も無し。

理子的に言うならゲームの縛りプレイやってるみたいだよ。

あ、逆にコソコソするのやめようかな？

私に何かあれば大義名分が出来るわけだし、そっちの方が合理的な気がする。

病院を出てしばらく尾行してたけど、キンジは男子寮に戻るためにバスに乗るからどのみちバレル。

私もキンジ達が待つてるバス停に普通に近付く。

「そこそこできるみたいだけど、あたしにはバレバレだからなストーカー」

近付くなり、ジーフオースから鋭い視線と敵意。

大体、ストーカーっぽいのはそっち……

言っても家族だからとかでゴリ押しそうだけど。

しかし……随分と感情豊かではあるけど、いかんせん自分は人間じゃない感を出して
る気がする。

そう刷り込まれて開発されたんだから当たり前だろうけど。

「あー、ハイハイ。どうせバスで一緒になるから尾行するのはやめたよ」

「あたしのお兄ちゃんに、3メートルは近付くな」

バスの中で3メートルはしんどいんだけど？

「キンジから近付いたら？」

「そんなのあたしが許さない！ ダメだよ、お兄ちゃん」

私の言葉に反応してキンジに絡めてた腕を強くしたのが見えた。

キンジに話す時には普通の口調に戻った。

腕を絡められてる本人は困った表情をしてる。

キンジに胸が当たってる当たってる。

私より何気に大きいね、ジーフオース。

14歳ぐらいじゃなかったっけ？

年齢の割には発育が良すぎるのでは……人工天才は肉体の発育具合も調整出来るのかな？

ふと、そんな疑問が浮かんだ。

なんてどうでもいい事を考えてると、そんなこんなでバスが来た。

微妙に混んでる。

「次のバスに乗れ、これには乗るな」

人の多さからジーフォースは3メートル以内に近付くと思っただのか、そう命令してくる。

だが断る、ってね。

むしろ私に手を出せばキンジの評価が地に落ちるのは君の方だし。

「待つ時間があったくないから、先に失礼するよ」

先に私が乗って、キンジ達が乗る前に距離を取れば3メートルは取れるでしょ。

ちよつとばかり人混みをかき分けて、バスの出口付近に進む。

すぐにキンジ達も乗車してきた。

と思えば、こつちに近付いてくる。

せつかく面倒な制限を守ってるのに、何でこつちに来るの……

向こうとこつちで何が違うのか観察すれば、入り口付近は男子が多く、こつちは女子が多いのが気付いたこと。

言動からしてキンジ至上主義っぽいから、それ以外の男は嫌なんだろう。

はい、ジーフォースに鼻の下伸ばして男子諸君は御愁傷様つと。

仕方ないのでススーつとキンジ達とポジションを替える。

再び入り口付近に移動すれば、見知った2人が近くの座席にいるのに気付いた。

「やあ、ライカに麒麟ちゃん」

「白野お姉さま」「先輩?!」

麒麟ちゃんは普通に挨拶してるのに、ライカはなんで驚いてるのか……

ヒントは麒麟ちゃんのスマフォの画面にあった。

可愛らしい意匠の衣服が映ってる。

ワンピースとかウールコートとかにフリルがついてるヤツだ。

理子が好きそう。

「ライカってばやっぱり興味あるんだ〜?」

携帯の画面を示しながら、顔を近づける。

「そんな訳ないです。あたしは、全然、興味なんて……」

目が泳ぎまわってる。

この子も相変わらずだね。

「ちよつと失礼。服選びなら、ライカはこういうのが良いと思うけど」

麒麟ちゃんの携帯の画面を触って、社交ダンスにつかうスラツとした感じの服のページにする。

身長高いんだからきつと似合う。

「お姉さまのスタイルからして間違いはないのですが……麒麟的にはやはりこういうのを着せたいんですの」

そして再びふわふわした感じの衣装のページに戻る。

麒麟ちゃん的には敢えてギャップのある服にしたいんだろう。

ううむ、髪を下ろせばライカも幼く見せることもできないことはないね。

私のところにお邪魔してるアリスみたいに。

なんて考えてるけど、キンジ達の動向はしつかりチェック。

会話の内容も何とか聞き取れる。

エンジン音で内容は断片的だけど。

なんか、転校生って聞こえた。

「うん、それっていいアイデアだよ。お兄ちゃん」

今度は随分とハッキリと聞こえた。

さては、ここでキンジの妹であることをアピールするつもりだね。

そんな意図はなくて普通にお兄ちゃんって言っただけの線もありそうだけど。

何にしても『ネクラのキンジに妹が!』と、バスの中は大騒ぎ。

「今、お兄ちゃんって言いました?」

「言ったね……」

ライカは確かめるように眩き、私は事実であると答える。

「霧先輩、遠山先輩に妹がいるってあたし初めて聞いたんですけど」

「事実、いるみたいだよ」

私は静かにライカに答えながらも視線はキンジ達へ。

何も知らず、マスコミみたいにジーフォースに群がる人達を見ると少し滑稽に見える。

それは置いといて、色々な質問にジーフォースが答えることで、それは周知の事実となってしまうてる。

特に、「キンジに妹がいる」っていう事実がね。

「——お名前は!」

女子の1人がその質問をしてきた。

ジーフォースなんて名前、流石に名乗る訳にはいかないでしょ。

「遠山じーぶおもい」

キンジがすぐに口を塞いだ。

普通にジーフォースって名乗ろうとしたね。

もし、そのまま名乗ろうものなら説明不明な状況どころか収拾不可能な事態になつてただろう。

ジーサードリーグで活動してる時になんか偽名とかなかったのかな……

「ちよつと遠山君！　なんで妹さんに名乗らせてあげないの！」

「壁新聞にも書くんだから、ちゃんと聞かせてよ！」

野次馬連中からはブーイングの嵐。

必死に考えてるね、キンジ。

「こ、コイツの名前、は……！」

苦悶してるしてる。

仕方ない、助け船でも出すか。

私が割って入ろうとしたその時――

「こ、こいつは――遠山　かなめ、だ」

その瞬間にジーフォースは驚きの表情をして、キンジを見上げるが、それをキンジは手で覆い隠す。

あーあ、物に名前なんて付けちゃって、愛着わいても知らないよ、つと。
しかし、バスの中はキンジの自称妹に大盛り上がり。

「かなめ!」「かわいい!」「遠山かなめ!」「かなめ!」「かなめ!」「かなめ!」
と、アイドルのライブ会場みたいになつてゐる。

いたたまれなくなつたのか、キンジは次のバス停ですぐに降りた。

私も降りると、そこは車^コ輛科^ジの立体駐車場前だった。

私達以外にベンチで寝てる男子生徒が1名いるだけ。

随分と汚れてる。

ケンカでもしてたのかな? リボルバー銃をホルスターに仕舞わずに寝てるのは
ただけないけど。

キンジはジフオースを正対させ、

「お前、どういうつもりだ。さっきのでアイツらは、てつきり——」

と、なにやらキンジが説教モードに入り始めたところで、ぎゅ。

ジフオースがキンジに抱きついてきた。

14歳にしては女性らしい曲線を描く肢体に、キンジはたじろいでる。

「かなめ……あたしは、かなめ……」

嬉しそうな涙声でキンジの胸に顔を埋めている。

人間兵器の扱いなんてどこも似たり寄ったりみたいだね。

というか、ロスアラモスの施設にも忍び込んでるから知ってるけど。

私のことを欠片も見ないくらいには嬉しいらしい。

「かなめ……って、名前だよね？ 人の名前だよね？」

「あ、当たり前だろ。お前が、名付けざるを得ない状況にだな——」

「嬉しい、嬉しいよ……お兄ちゃんがつけてくれた、名前。ほんとうに……うれしい……ふえ……」

「何だよ。何で泣くんだよ」

「うれしいから」

「何が嬉しいんだ」

「名前。人間の名前。今まで、無かったから。お兄ちゃんは……あたしに名前をくれた。あたしを初めて、人間扱いしてくれた」

「あー、そっか……キンジは自覚ないだろうけど得体の知れない”物”じゃなくて”者”の感覚で見てるからね。」

キンジは物体を見る視線じゃなく、普通に人扱いで拒絶してるだけ。

例えるなら不良品の商品を拒むのと、出来ない人間を疎んじるのとは違うって、感覚かな？

アメリカじゃあ人の形をしても彼らは物品扱いだったからね。リリヤでのロシアの扱いも同じ。

改造に失敗すれば死んで、即廃棄処分。

おぞましいよね〜

私のやつてることと何の違いがあるのか教えて欲しいものだよ。

「よかった……よかったよ……ずっと夢見た通り……あたしのお兄ちゃんは……とつても優しい人だったんだね……」

キンジに非情なんて言葉は無縁だよ。

頭のどこかで認めなくても、心はざわついているはず。

まあ、たまにキンジは直感より強引に理性で押し通そうとするから空回りするんだけど。

「お、……」

今も何か言いかけて言葉を詰まらせてるし。

きつと『妹なんかじゃない』みたいなセリフなんだろう。

ん？ 何か視線を感じる気が……

と、立体駐車場の方……さらにその向こうの建物の上にいるのは……リリヤ？

あ、ヤバイ。

レールガン持ってる。

照準は当然、ジーフォースだろうけど……

ちよつと待って、その破壊力は想像はできても実際知らないんだけどお姉ちゃん！

それ間違いなく撃つたら衝撃とかあるよね？

角度的に着弾したら周囲にも被害あるよね!?

今は駄目だってツ！ キンジもいるし！

ジーフォースやキンジは私を見てないので密かにサインを送る。

今すぐやめて、お願いだから。

数秒——静寂。

そして、何か光ってる。

いや、何で充電してるの!?

と思つたら携帯に連絡のメールが入った。

『……邪魔。……離れて』

こんなときに反抗期とか勘弁して欲しいんだけど。

キンジ連れ出そうにもジーフォースが邪魔だし。

久々にピンチだ。

しかも原因が妹の反抗期って……私らしい危機ではあるけどね。

キンジやジーフォースが何か話してるけど、内容が入ってこない。

理子を呼ぼうと思つて携帯を開く瞬間、ベンチで寝転んでた生徒の体の上からリボルバーが落ちそうなのが見えた。

角度的にキンジの方だし、ジーフォースはまあ心配してないけども何やら感動の場面っぽいから、私が空気を読もう。

反射的にジーフォースが振り返り銃口の正面に立つのと、ジーフォースの正面に私が銃口に背を向けて立つのは同時。

——ドオンッ！

轟音、そして背中に衝撃。

私だつて痛みはある。

——ツ……あー、マグナムの弾でマッサージは推奨しないね。

衝撃でジーフォースに少し寄りかかる形になった。

3メートル以内に入ちやつたけど、これは勘弁して欲しい。

「えっ……？　——大丈夫ですかッ?!」

銃の持ち主である男子生徒が、私の背後から動揺した声を出す。

「安全装置セーフティないんだからー発目を抜くなり、ちゃんと安全管理しなよ。全く……たまたま外れたからいいけど。今日は見逃すから、すぐに帰るんだね」

顔だけ生徒の方に向けてそう説教すると、彼は何度も頷いてあらぬ方向に落ちてたり
ボルバーを拾った。

やっぱりS & Wか……気付いた時点で床にでも置いとけばよかったよ。

「大丈夫か?！」

キンジが少し慌てた様子で心配してくれる。

「久々に撃たれた……。我慢できるけど、ホント洒落にならない。で、今はかなめちゃん
だっけ?」

私の行動に驚いてるのか、ジーフォース——かなめは目を丸くする。

私は寄りかかってたかなめから少し距離を取る。

「なんで……あたしを守ったんですか?」

「まあ、恩を売っておこうかと。ってのは冗談で、何やらお取り込み中だったから私が動
かないとマズイかなって、思ってたね」

「あたしは、敵なんだよ?」

「本当に君が敵なら今頃みんな倒されてるよ。君が私をどう思ってるか知らないけど、
少なくとも私は“人間的”に嫌いじゃないし」

変わる前のレキよりは全然興味ある。

彼らは兵器であろうとしてるけど、足搔いて苦悩する様は実に人間的で私の好奇心を

刺激する。

最終的には排除するつもりだけど。

「見た目通り、子供だね。私はお邪魔みたいだし……そろそろ帰ることにするよ」

これ以上キンジの傍にいたところで進展は無さそうだし。

そう言えば、リリヤは帰ったのか……

私が離れないから埒らちがあかないと思っただろう。

隙があつたら狙つてきそうだな

やれやれだよ。

部屋に戻って、一息。

少しばかり疲れたかもしれない。

ベッドに横になって背伸びして、そのまま腕を頭の上で脱力。

最近ホントに、キンジとの時間が少なくなつた。

キンジの傍に人が増えすぎなんだよ、全く。

个性的だから観察してて楽しいんだけどね。

「ただいま。チャシャ猫さん」

予想通り、アリスが戻ってきた。

相変わらず気配なく現れるね、君。

そして、随分と汚れてる気がするけど……臭いからして気のせいじゃないんだろうな。

「トランプ遊びでもしてきた？」

「ええ、そうよ。チャシャ猫さんは何してたの？」

「お友達とお茶会して、チェスをどう動かすか考えた」

「そうなの？ 私もチェスに参加してみたいわ」

この子が参加したらとんでもないバランスブレイカーになりそう。

私は起き上がってアリスに面と向かい合う。

予想通り、金色の髪は赤黒く染まつてる。

少し暗くて見えないけど、臭いからしてエプロンドレスは血だらけ。

随分と散らかしたみたいだね。

「良いと思うけど、お友達ってたくさんいるの？」

「うん、一杯よ」

「じゃあ呼べる友達は一人数までにしないとね。みんなで遊んだらすぐに終わっちゃうかもしれないし」

「そうね、そうするわ♪ トランプ遊びもいいけどたまには他の遊びも楽しまないとね」

「よし、じゃあお風呂に行こっか。たくさん遊んだみたいだし」

「ええ♪ 今日はず一枚一気にやってみたりしたの」

「本当に？」

などと、アリスがどんな事をしたのか話しながら夜は更ける。

89 : 人間と兵器の境界

そして、翌日。

キンジはげんなりした感じで登校してきた。

まだ神崎達は入院中なので久々にキンジと2人で話せそう。

いつも通り、軽口の挨拶をする。

「おやロメオ。どうして君はロメオなんだい」

「お前が配役したんだろうが……」

机に突っ伏すキンジは、恨めしい視線を私に向けている。

「で、進展は？」

「まあ、最初から俺のことは信頼してるみたいだしな。色々の意味の分からん事を話してくれるよ」

なるほどね……

キンジにとっては意味の分からない事でも、ちゃんとした情報だよ。

「じゃあ、例の物をちょうだい」

「あまりこういうやり方は好きじゃないんだがな」

私はキンジからボイスレコーダーを受け取る。

情報の取得のためひっそりと渡してたんだよね。

「キンジ、どうでもいい情報はあまり覚えなくていいでしょ？ 主に女性関連。まあ、聞いてる

以上は頭のどっかに残ってるんだろうけど……HSSにしたら引き出せそうだし」

「そんな事のためにアレには絶対にならないからな」

心底嫌そうな顔をするキンジ。

「どうせかなめちゃん……部屋に泊まったんでしょ？」

「泊まったよ」

「一緒に寝たりした？」

「してねえよ。というか普通に寝ないだろ？」

「まあ、普通はね。世の中には近親相姦って言葉があつて——」

「俺でもその言葉は絶対にくくでもないモノだって分かるぞ」

「何にしても、あとで聞いてみるよ」

ボイスレコーダーを見せて、自分の席へと戻る。

会話って結構色んな情報があるからね。

声量や言葉選び、話す間隔。

それらでどれだけ本気とか、何が真実で何が嘘か分かる。

まあ、私ぐらい人間観察してたら結構な精度で絞り込めたりもする。

ミアも出来るだろうね。

そう言えば、以織やキアは元気かな？

3人とも、仲良く暮らしていると良いけど。

時間は流れて、昼休みに入った。

キンジが学食に行くつもりで席を立ったところで、

「あの……お兄ちゃんを呼んでくれませんか？ 私、遠山 かなめつていいいます」

後ろのドアから彼女が入ってきた。

私に敵意剥き出した時と比べて、随分としおらしいことで。

すごい勢いでキンジは振り返った。

ビツクリマー
『！』が見えそうなくらいのいいリアクション。

女子は既にかなめを小動物に触るような感じで「カワイイ」と言いながら撫でてる。

見た目チワワぶってるけど、中身はドーベルマンだよ。

私もキャラ作ってるけどね……

いや、白野 霧つていうキャラはほぼ素の私だけ……まあ、少し化けの皮はかぶつ

てる程度のキャラ作りだし。

男子も自称キンジの妹に目の色を変えた。

「お、おいッ……！ 何しに来たんだよ?!」

キンジが慌ててかなめのところに行くとき、そろそろとアヒルの行進みたいに他の男子もついていった。

こういうところ……男は単純だよな。

扱いやすく助かるけど。

「もう！ お兄ちゃん、お弁当を忘れちゃダメだよ！」

さつきまで大人しかったのに、身内には遠慮なくいく。

家族っぽい一コマではある。

キンジは家族と認めてないけど。

小さなバスケットを押し付けたかなめだが、キンジは困惑してる。

さては……キンジの反応からお弁当の話なんて初耳だね。

届けに来るって、今朝は言っていないだろう。

そもそも来るって分かってるなら、昼休みになつて席を立つたりはしないだろうし。

「出た！ 噂の妹！」「ホントにいたのか!?!」

などと男子は囁し立ててるけど、狙いが分かってきた。

かなめは、より一層に自分の存在を周知の事実として確固たるものにしようとして

る。

キンジの妹としての立場も確立しようって魂胆だね。

っていうか、騒がしいね。

キンジには悪いけど、仕方ないので場所を移す。

ボイスレコーダーの会話の内容も聞きたいしね。

キンジつてば、本当に私を飽きさせないね。

今回もちよつと呆れてるけど。

屋上で1人、昨日のキンジの部屋でのかなめとの会話をボイスレコーダーを聞いてみた感想は、そんなところ。

キンジが他の女子に触ったりしないなんて無理な話だよ。

そういう引力でもあるのかってぐらいに、女性トラブルの事態はキンジに収束していきんだし。

で、会話の内容からしてかなめは自分以外の女性を排除すれば自分を愛して貰えると思ってる。

あとはキンジの傍にいる限り、他人の乱暴へは禁止って約束、それって”キンジが傍にいなかったら”問題ないってことだよな。

交渉の下手さが垣間見えるよ……

そして、キンジの部屋には遠山家の者しか……家族しか入れない、か。さて、どうしたものか……

色々と過程をすつ飛ばして早々に排除しても良いんだけど。

まあ、今は結構幸せみたいだししばらくは夢をみさせてもいいでしょう。

私思うに……一番残酷なものだね、幸せつて。

「つていうわけで。しばらくは人間観察したいから、肅清は最後でお願い」
誰もいないはずの屋上で独り言をすると、

「……非合理的」

それだけ聞こえて、足音が遠ざかる。

非合理的、かなめの口癖だね。

やっぱり似てる部分はあるもんだよ。

リリヤはしばらくは自由にさせてみるか……

きつと人間らしい行動に出てくれるはず。

私は私で引き続き情報でも集めようかな？

こういう感じで裏で動くの好きだし。

あの様子からして、転入してきた設定だろうから……中等部、いやインターンで1年

にいる可能性もあるから先に後輩に聞いてみるか。

と言うわけで放課後。

ライカと会う約束をして、アサルト強襲科の体育館っぽい専門科棟で待ち合わせ。

「やつほ、呼び出してゴメンね」

「別に良いですけど……珍しいっすね。組み手以外に呼ぶなんて」

「まあ、ね！」

素早いナイフ投擲。

ライカは「い”ッ!?”と驚いたあと、手持ちのナイフで上に弾いて、私に警戒しながらも落ちてきた刃の潰したナイフをキャッチした。

「お見事」

「いきなり何するんすか!?”

本人はおっかなびっくりって感じだけど、今の不意討ちは回避を選択する人が多いんだだけだね。

そしたら肉薄するチャンスだったのに。

ちよくちよく組み手やってた時に教えてた、瞬時に次の行動を考える癖が出来てる。

無意識だろうけど。

「知ってる人でも油断しなかったね。いい反応だったよ」

「先輩の戦い方って本当にいやらしいですよね……」

「まあ、つい試したくなっただけど成長してて良かった良かった。戦姉あねとしては嬉しいよ」
対してライカは呆れた顔をする。

「で、お話ってなんですか？」

「いや、この間インターンで入ってきた。キンジの妹についてね……学校ではどんな様子かかって」

「バスで見かけた、あの子ですか？　どんな様子って聞かれましたもクラスが違いますし。C組に転入してきたってのは、聞きましたけど」

ライカはA組だったね、確か。

間宮の子と佐々木と同じクラスだったはず。

「何でそんなことを聞くんですか？」

当然の疑問か、ライカは聞き返してくる。

「ちよつとばかりお兄ちゃんが好きすぎて暴走する可能性があつてね。まあ、愛は人を狂わせるって事だよ」

「はあ？」と、首を傾げるライカはいまいち状況が分かってないだろう。

転入して初日じゃあそんなに大した情報は持っていないか。

「ああ、もし何かあったら相談してね。それと、遠山かなめにはあまり関わらない方が良
いよ。聞きたかったのはそれだけ、呼び出してゴメンね」

私はそれだけ言つて投げたナイフを受け取り、ライカの前から立ち去る。
仮の姉としてちよつとだけ面倒はみてあげるよ。

ふーむ、今のところは大きな変化はない。

問題は、キンジがかなめと約束をしてしまったこと……

約束を守るつて大事だよね。

そこはかなめに同意してあげよう。

つて訳で——

「ボイスレコーダーの中身は聞かせて貰ったけど……キンジ、約束は守ってる？」

「女子に触れたりしないつてヤツか？　そもそも俺が女嫌いつて、みんな忘れてないか
？」

男子寮の近くでキンジを呼び出して、少し距離を置いて話す。

お互いに壁を背にして、夜空を見上げながら。

「女嫌いでも事故でくんずほぐれずで触つたりしてでしよ？　そういうトラブルに遭
遇する性質は間違いなくあるんだから……。私とこうして話す前にそう言ったトラブ

ル、起こしてないよね？」

「……………」

「キンジ、まさか…………」

「いや、何も無いから…………ッ！ 大丈夫だ」

「私、約束を破つたり心配してるのに嘘を言われるのは嫌いだからね。本当に何も無いの？」

「……………」

キンジさん、暗闇で分かるほど冷や汗出てるよ。

今、多分結構考えてる。

これはトラブルとは言え、手を出したね。

正直に話してバスタービル唯一の仲間になってくれる私まで敵視されて孤独になるのが嫌なんだろう。

長い付き合いでしょうに…………そろそろ分かって欲しいものだね。

その程度で見放す訳ないでしょう？

「それじゃあ私は帰るよ。サポートがなくてもやっていけそうみたいだから、進展があつたら教えてね」

「頼むからそれだけは勘弁してくれ！」

懇願するようにキンジが頼み込んでくる。

余程にかなめと2人きりが恐ろしいらしい。

キンジの話を聞く限り……彼女のスキンシップは異常に近いみたいだ。

キンジは観念して真実を話した。

自分なりになめめの動向を探るために風魔に依頼をしたらしい。そして報告を受ける際にアクシデントが起こった……と。

詳しい内容は流石に話してくれなかったけど……早くも1アウトじゃん。

「キンジ、悪いことは言わないから慎重に行動しなよ。かなめはきつと、根に持つタイプだから」

「分かってるよ。ところで何でさつきから若干距離があるんだ？」

「念のため、だよ。彼女鼻が利きそうだし……あんまり近くにいと匂いが移っちゃう。早くも2アウトにしたいの？」

「別に風魔の件は見られてねえよ。多分」

自信なさげに反論するけど、多分私は見られてると思うな……

かなめが転入して翌日。

まだ大きな変化はない……観察も兼ねてかなめが所属する1年C組を覗いてみたけ

ど、他の女子と何やら談笑してゐたみたいだった。

馴染めてる。不自然なほどに。

遠くから見れば普通の学生だね。

まあ、私は何か行動を起こすって確信があるけどね。

あれだけキンジに固執してゐるなら何かしらの準備はしてゐてしょ。

自分以外の女性を排する準備をね。

しばらくは様子見かな。

私はそのまま、自分のクラスへと帰る。

そして昼休み。

キンジにはあまり近付かないようにする。

私の都合で約束を破らせる訳にはいかないからね。

久々に一人で学食でも行くかな。

「白野先輩……一緒にお話、いいですか？」

呼び止められて、振り向いてみれば……かなめがいた。

目の光はどつかお出掛けしてゐたいだね。

こうして見ると、雰囲気がりりやに似てなくはない。

普通なら冷や汗を流して変な声が出そうな視線だけ……そこは私、どこ吹く風って

ね。

「どうしたの、かなめちゃん。お話って」

かなめはついてこいと言わんばかりに、私に背中を向けて階段へと向かった。

仕方ないのでお話に付き合っただけよう。

私に手を出した瞬間、命運は決まっちゃう訳だし。

どうやら屋上へと向かったらしい。

人目につかない場所のチョイスがキンジにそっくりだね。

「お前……何者なんだよ」

屋上へたどり着いての第一声がそれとはね。

キンジの感情的な口調と似てる。

造られた存在とは言え、血は争えない……か。

でも、血縁だけじゃあ家族にはなれないと思うけどね。

「その様子だと私の経歴は調べたみたいだけど、ファイルのまんまだよ。中学にキンジと出会ってパートナーをやった白野 霧。強襲科^{アサルト}所属のAランク武偵、バスカービルのメンバーの1人——」

「違う！ あたしが聞きたいのは、家族じゃないのにどうしてお兄ちゃんにそこまで信頼されてるの!? 意味分かんないよ！ 家族でもないクセに！」

ヒステリックに叫ぶかなめの胸中は嫉妬か、羨望か……

キンジってば、かなめに私に関して何か余計なことを話した？

じゃないとこの敵愾心てきがいしんは異常なんだけど。

「お前について聞いたとき、お兄ちゃんが言ったんだ『かけがえのないパートナーだ』って。私はお前は得体が知れなくて、気味の悪い存在だって言った。そしたらお兄ちゃんは『あいつの悪口を言うなら出ていけ』って……怖い、顔を、して……。病院に送った連中の時も怒ってたけど……それ以上に、怒ってた」

私を貶めようとして、キンジに拒絶されかけたか。

義理難いキンジのことだから、昨日の暴発でキンジ含めてかなめを守ったのに対しても怒ってるんだろう。

守ってもらったクセにその言い方はないだろう、てね。

涙目になりながらも、私に敵意を向けたまま立ち向かう姿は……嗜虐心をそそる。

そんな歪ませがいのある表情までキンジに似なくていいのに。

「お前は、お兄ちゃんにとつての何なんだ？」

私にとつてキンジは何かって聞かれても答えは決まってる。

「かけがえのないパートナーだよ」

もつとも、私とキンジじゃ言葉の意味合いは違うかもしれないけどね。

私にとっては退屈しない日々の象徴で、唯一、私の衝動を緩和できる人物。人を殺すのは嫌いじゃないけど、衝動であまり行動はしたくないんだよね。まあ、それに……私が理解出来ない感情がキンジの傍にある気がしてる。それを確かめたいってのもある。

「ふざけないでよ……お兄ちゃんとおあたしの間には、入ってこないでよ！」

どこから出したのか、かなめは剣を一振り構えた。

ただの剣じゃない。

ノイエ・エンジエ・エツジ

先端科学刀——文字通り科学の粹すいが詰まった剣。

確か、かなめは13種類の剣を持つてたはず。

高周波ブレードとか、磁力で形成する剣とかあったはず。

あれはどのタイプかは知らないけど。

「やっぱり、お前はおかしい……こんな状況なら普通は武器の1つでも構えるのに、どうして構えないの?!」

「——何を焦ってるの?」
「ジーフォース」

私は敢えて、製品名プロダクトネームで呼んだ。

今の言動で私は確信した。

彼女は焦ってる。

異常にキンジと自分の間に誰かがいることを嫌い、独占したがってもある。その目的も、大体分かった――

「!?!」

かなめはいきなりのことと言葉を失い、目に光が戻った。

それは恐怖の色。

私に見透かされるのを恐れてる感じだった。

「得体が知れないって言うなら……教えてあげるよ。キンジの前ではあまりこういう事はしたくないし、強襲科^{アサルト}のやり方じゃないしね」

人の追い詰め方はよく知ってる。

どうすれば恐がってくれるか……とかね。

「ジーフォース……あなたは、キンジの周りから女性を排除しようとしてる。それはなぜ? お兄ちゃんのため? それとも、”自分だけを愛して貰うため”?」

「黙れ……」

「そんなやり方したって非合理的なのは分かってるでしょ? それとも、心の中で気付いちやってる? 誰かがいると自分の力じゃキンジを振り向かせられないって」

「やめろ……」

「そりやそうだよ。キンジの仲間を傷付けた挙げ句に妹です、なんて。得体が知れな

いのはどっちだと思う？ 君か、私か……考えるまでもないよね？」

「Shut up!」

「いいや、黙らないよ。キンジが言ってるでしょ？ ”お前なんか、妹じゃない” って。君はキンジの家族なんかじゃないんだよ」

「……あ、う……」

カタカタとジーフォースが構えた剣が震えだす。

今の言葉は結構効いたでしょ。

「私を排除したいならすれば良いよ。キンジがそれを知ったら、君はどうなるんだろうね？ 目的も果たせず、棄てられちゃうのかな？」

「やめて……」

かなめは私から意識を逸らした。

視線はこっちに向いてるけど、動揺しすぎてきつと何も見えてない。

酸欠で視界が狭まるのと一緒。

私はそれを利用してするりと移動し、かなめの傍に笑顔で近寄る。

「はい、おしまい。気に入らないからってあんまり排他的になっちゃダメだよ」

そして、終わりを告げた。

このまま潰すのはもったいないからね。

楽しみは最後までとっておかないと。

まあ、変な疑惑を植え付けちゃったかもしれないけど、彼女一人程度なら大丈夫でしよ。

◆ ◆ ◆

お兄ちゃんの元パートナー、白野 霧。

書類上ではお兄ちゃんと同じ武偵中学に3年の時に転入してきた。

その関係が今でも続いているだけの話。

でも、あたしには邪魔でしかない。

双極アルカナム・デユオ兄妹を完遂させるには、お兄ちゃんがあたしを愛してくれないと——あたしだけを見てくれないと、ダメ。

だから周りの女を排除しようと思った。

目の前でキスをして、関係が最悪になるように仕向けて……あたしだけはお兄ちゃん
の味方で。

でも、1人だけ……お兄ちゃんが気を許してる女ひとがいた。

家族でもないのに、兄妹でもないのに。

そこまで信頼されてるのが理解できなかつた。

得体が知れない。

その人をバカにするような事を言ったら、お兄ちゃんは怒った。

今まで以上、それこそあたしを追い出そうとするくらいに。

どうして？

非合理的過ぎるよ。

血の繋がってない他人なのに、どうして……

それをあたしは、確かめたかった。

実際に会ってみても評価は変わらなかった。

あたしを助けた意味も分からないし、それは今でも分からないまま。

「っは、あ、う……」

気味が悪いよ……吐き気が、する……

あたしが先端ノイ・エンジエ・エツジ科学刀を構えても、あいつは何もしなかった。

それどころか……笑って――

怖いよ……

体が、震える。

ジーサードに逆らえないのとは別に、恐怖が出てくる。

今までこんなことはなかった。

お兄ちゃんの事は、何でも分かる自信はある。

けど、アレに心を許す気持ちだけは理解できないよ。

——守らなきや。

きつとお兄ちゃんは、あの女に騙されてる。

だからあたしが守らなきや。

早くこの学校で軍隊を作らないといけない。

あたしの同性へのカリスマ——人工女人望アイドルフェイクで学校の女の子を兵隊ともだちに変えて、お兄ちゃんに近付く女を排除する。

あの女を排除するには基盤が必要だ。

強固な基盤が。

そのためには、間宮 あかりのグループを排除しないといけない。

あいつらは既に女人望アイドルの影響にある。

既に影響のあるヤツはあたしの人工女人望アイドルフェイクの影響を受けない。

お兄ちゃんとの約束で乱暴な事はしない。

だから、お友達同士で仲良く死んでもらうしかないよねえ。

「うん、切り替えなきや」

キャラメルを一口に放り込み、考える。

まずは間宮のグループの仲を険悪にして、最後はグループの中心であるあかりを排除

する。

まずは外堀を埋めて、最後は本丸。

あは♪ 合理的だよね。



危なかった。

あまりにかなめがいい反応をしてくれるものだから、本性を出しかけた。

遠山の一族は私のニーズによく応えてくれるから困ったものだよ。

まあ、キンジがかなめを家族と認めないなら普通に排除するけど。

本人も迷惑してるみたいだし。

さてと……かなめは私をどうにかして排除しに来ると思うから、今の内に目をつけられそうな後輩に注意でもしておくかな？

別にあまり手を貸さないけど、観察はしとかないとね。

1年の教室があるところへ降りてみると、何か騒がしい。

「聞いた？ また転入生が来るらしいよ」

「マジで？ そんなに転入生って来るもんだっけ」

廊下ですれ違いざまに、1年の女子生徒からそんな会話が聞こえた。
転入生多すぎ。

絶対に教員達は違和感とか気付いてるだろうけど、まあ政治的に手が出しにくい部分もあるだろうね。

しかし、かなめが来てすぐに転入生か。

案外、知り合いだったり――

「……………」

いや、知り合いどころか身内だった。

見覚えのあるプラチナブロンドの髪に、微妙に濁ったエメラルドグリーンの瞳。

人形みたいな顔立ち。

ファンタジーのエルフ、あるいは妖精のような雰囲気のあるこの感じは間違いなくリヤ。

彼女が武偵高の制服を着て廊下に立っている。

いやはや……自由にしてていいよとは言っただけど、まさかここまで自主的に行動するとは思わなかった。

「……………あー、初めまして？ 見ない子だね」

当然、武偵高の中で会ってないのでそんな挨拶をする。

「……初めまして」

「私は、白野 霧。あなたは？」

「……リリヤ」

「そっか、初めましてリリヤ。顔を合わせる事が多くなるかもね。これからよろしく」
それじゃ、と私は挨拶をそこそこに立ち去る。 ふふ、兵器であろうとする人間と

……人間へと近づく兵器。

この対比は興味深いね。

これを分け隔てるのは何か、これは観察しなくちや♪

90：ロシアより家族愛をこめて

「良かったね、理子。家族で仲良く学校生活出来るよ」

『暢のんき気に言ってくれるよね……』

早速まだ入院中の我が妹にリリヤの事を携帯で知らせると、呆れた返答。

『つて、キーくん達に顔が割れてるんだからここにいちやダメじゃん?! 絶対に調べられちゃうよ?! 間接的にあたしもピンチだし!』

「あ、今更気付いた?」

『気付いてるなら何で止めないの?! このままじゃリリヤまでキーくんのフラグ構築に巻き込まれちゃうよ!』

心配するのそつちなんだ。

でも――

「恋愛感情まで芽生えるなら、それは良いことじゃん。お姉ちゃんなら喜んであげなよ」

『出来る訳ないでしょ! 理子は絶対に反対だからね!』

「何で? キンジは別に悪くないと思うけど」

見てて面白いし……あーでも、それは私の観点の話だから理子の観点では別か。

『確かにキーくんは、別に、悪い男って訳じゃないけど……』

何だかんだ認めてはいるのか。

理子もそれ以上は強く言ってこない。

『でも、本当にどうするの？ お姉ちゃん——ジャック・ザ・リツパーに繋がってるなん

て知られてるリリヤは……』

「ああ、大丈夫だよ。予防線は既に張ってるから」

散々に警告はしてるしね。

念のためにメッセンジャーも確保してるし、シナリオは既に伝えてある。

だから問題はない。

「お姉ちゃんに任せて♪」

◆ ◆ ◆

「……初めまして、リリヤ、です」

「はい、ご紹介ありがとうございます」

武偵高の制服に身を包んだリリヤが、ペコリと一礼する。

お姉ちゃん、誰が病室にリリヤを呼んでって言った？

言ってるよ？

あたし言っていないよね？

しかも何でお姉ちゃんが嬉々として紹介しにきてんの？！

「霧、これはどういうことよ!? なんでシエースチがここにいるのよ?!」

アリア、白雪、レキに囲まれてるリリヤはただ黙ってる。

患者服のアリアが立ち上がって、当然の疑問を投げ掛けた。

そして、レキが密かに銃を動かした。

ヤバい、今すぐ排除とまではいかないけど……妙な動きがあつたら一戦始まってしま
う。

「どうやら今日、転入してきたみたいだね。1年でたまたま見掛けたから連れてきた」

「連れてきた、じゃないわよ！ 無用心にも程があるでしょ!? コイツは、ジャックと繋がってる凶悪な犯罪者の一味じゃない！」

ほら、アリアが叫んでる通りやっぱりそういう話になるじゃん！

お姉ちゃんのバカあ……

あたしは今すぐにこの場からリリヤを連れ出して逃げたい。

このままで絶対によくない。

コンコンコン、とノック音がしてまたこの病室に來客。

「ミス・シラノから重要な話があると聞いてやって来たが……彼女は何者だい？」

「ふむ、話に聞くロシアの少女か？」

わーい、ワトソンにジャンヌも来た。

先生、理子はお腹が痛いです。

別室で入院継続しても良いですか？

「おい理子、何をしてる」

「リコ、ココニハ、イナイ」

ジャンヌ、話し掛けないで……しばらくは現実逃避させて。

「オハナシ、オワツタラ、オコシテ」

理子は布団と言う檻に閉じ籠ってるから。

閉じ込められるのは嫌いだけど、今だけはこの柔らかい檻の中で過ごしたい。

「理子……もう我慢の限界よ。散々に焦らされたけど、ここまで来たら色々と話して貰うわ！ アイツが来るなら迎え撃って逮捕してやる」

アリアがあたしの布団を剥ぎ取ろうとするけど、あたしは離すまいと抵抗する。

構図的には引きこもりを外に連れ出す親のよう。

「やめて！ 理子はしばらく営業終了するの！ 情報は品切れだから！」

「ウソおっしゃい！ その頭のどつかに在庫あるでしょ！ いい加減に売らないと風穴空けてでも聞き出してやるんだから！」

「それってただのごうと〜う〜！」

「みぎゃ!？」

変な声が聞こえたかと思うと、布団が引つ張られる感覚がなくなった。

「……………ん、リコお姉ちゃんいじめるの、ダメ」

両手を広げて、あたしを守るようにリリヤがベッドの前に立っている。

「お、お姉ちゃん……………ですって?」

リリヤに投げ飛ばされたか、引つ張り飛ばされたか……………アリアが向かいのベッドの上に仰向けになつてる。

これには病室の全員が目を丸くする。

未だに感情豊かとは言えないけど、リリヤには何か意志を感じる。

つて、姉が妹に守られてどうすんの!

あたしはリリヤをベッドの上に抱き寄せて、みんなから守るように腕の中に収める。

もう、ここまで来たら引き返せない。

お姉ちゃんがどういうつもりか知らないけど、正直に話すしかない。

「そうだよ……………この子は血は繋がってなくてもあたしの妹。家族がいなくなったあたしにとつては唯一の妹だよ」

だから奪わせはしない。

あたしは、自分でも分かる程に必死な顔をしてるだろう。

あたしのそれを見てか、他のみんなは互いに「どうする？」という視線を合わせる。
お姉ちゃんだけは少しだけ笑ってる。

「唯一の妹だつて言うなら……奪う訳にはいかないよね」

「ちよつと、霧。それはいくらなんでも危険よ。あの殺人鬼と繋がってるヤツがいるなら……」

「だったら、神崎さんは理子から彼女を奪う？ そしたらこの陣営は内部崩壊すると思
うけど」

当然だ。

家族を奪われるくらいなら、今すぐにここで敵対してもいい。

もう、あたしは家族を失う悲しみを感じたくはない。

「……メッセージがある」

腕の中でリリヤがそう言つて1つの白い、リンゴぐらいの球を取り出した。

中が割れて、カメラのレンズのようなものが出ると……光り出した。

まるでSF映画のホログラムみたいに、映像が映し出される。

そこには19世紀のイギリスみたいな服装をした青年が立っていた。

シルクハットをかぶり、ステッキを持っている。

『久しぶりだね、師団デイルンの諸君。まあ、この姿で現れれば分かるだろうが、一応名乗っておこう、ジャックだ』

ジャックだ、つて……お姉ちゃんそこにいるし。もしかして録画映像？

『おっと、これは録画とかではないから気を付けてくれ。テレビ電話のようにリアルタイムの映像だ』

演技がかったジエスチャーをしながら彼は話す。

その事にレキ以外の誰もが息を呑む。

お姉ちゃん、誰か役者でも雇ったね。

「あんた……シエースチを学校に寄越して何のつもり？」

『ふむ、アリア君の疑問ももつともだ。短気な君のために直球でこう答えよう。ジーサードの件に協力してあげよう、とね』

「狙いはなんだ？」

ジャンヌがすぐに眉を顰めて聞き返した。

『狙いと言うほど、大したものじゃない。シエースチ、いや本名はリリヤと言うのだが……彼女に学校生活を満喫させてあげたくてね』

マジで？

殺人鬼とは思えない言動にあたしを含めて、誰もが目を丸くする。

レキは変わらず黙って見てるだけ。

あたしとみんなとじゃあ目を丸くする理由は別だろうけど。

「信用できると思うかい?」

『常套句じょうとうくをありがとうワトソン君。だが、君達も困ってるんじゃないかい? 先端科学ノイエ・エンジエ

の使い手であるジーサードとの間には埋められないテクノロジーの差がある、と。ロシアには……ソヴィエト時代の研究を色濃く継いだ研究施設があつてね、彼女はそこの人工天才ジニオンだよ。先端科学ノイエ・エンジエには先端科学をとノイエ・エンジエいう訳だ』

理屈は分からないでもないけど。

ジャックのメリットは? 　　つて話になるよ。

「あたし達に協力してあんたに何の意味があるのよ!」

ほらね。

アリアが再び嘸みついてもジャックはどこ吹く風。

病室を歩きながら説明を始める。

『いいや、私はリリヤに学校生活を経験させただけだ。教育は大事だろう? 　　だから取引の内容としては協力する代わりにリリヤに手は出さず、生徒……あるいは後輩として接して貰いたいだけだ。それとも、メリットらしいことを言おうか? 　　ジーサードはよく私を追いかけるからね、しばらくは戦闘不能にでもなつて貰つて、ゆつくりする休

暇の時間が欲しいんだよ』

「天下の殺人鬼だからもつと怖い人だと思ってた。意外にフランクなんだね」

『人は見た目に依らないだろう？ 君が、白野 霧だね。初めまして』

「初めまして」

『ジャックだと知ってなお、その冷静さ。随分と胆力があるね』

「まあ、私もそこそこに経験があるってことで」

自演乙ってツッコみたい。

お姉ちゃん、マッチポンプ好きだよね。

今、映像に映ってるジャックって絶対にお姉ちゃんの知り合いでしょ？

『ともかく……リリヤの協力がいらないうのであれば、別にそれでも構わない。彼

女に危害を加えなければね。それでは、また』

それだけ言って映像のジャックは消えた。

「元イ・ウーとしてどう思う？ ワトソン」

「嘘は言っていないと思う。ジャックは損得で動くヤツじゃないからね」

ジャンヌの問いに、ワトソンは冷静に答える。

お姉ちゃん、基本的に嘘を言わないからね

喋ってたのは別人だけど、あの言葉自体はお姉ちゃんの本音だろう。

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!」　ワトソンあんた、イ・ウーにいたの?」

「すまない、アリア。組織の捜査でね……イ・ウーに潜入してたんだ。もう崩壊した今は隠す意味もないけどね」

「潜入って言うってたけど、ジャックやシャーロックに秒でバレてたよね?　そのあと公開処刑みたいにな所属とか目的とかもバラされてたし」

「相手が悪すぎるんだよ……。ボクも諜報員の端くれなのに自信を無くしたな、あの時は」

あたしの言葉に頭を抱えるワトソン。

確かに相手が悪かった。

どっちも観察スキルが飛び抜けてる2人だし、情報収集能力も抜群だからね。

引き続きワトソンは補足する。

「ともかく、ジャックを知ってる身の上では多分だけど彼は嘘は言っていないと思う。取引や約束は律儀に守るからこそ信用していい」

「でも、コイツはレキを襲った張本人よ。また狙うつもりなんじゃないの?」

「……終わった話」

アリアの言葉にリリヤは反応して立ち上がり、みんなの中心へ。

それから武偵高の制服の上着を少しだけはだけ、三角ブラを覗かせながら白い肌の

左腕を袖から出した。

右手で左腕を掴み軽く捻ると、左腕が伸びた。

ケーブルが出て、ターミネーターの腕みたいに金属の棒が見える。

義手なのは知ってたけど、精巧に出来てる。

当然にその光景に誰もが目を奪われる。

あたしはちよつと見てられないけど。

「……左腕、なくした。お互い様」

レキを見ながらリリヤは告げて、すぐに左腕をしまつてあたしの膝の上に座る。

理子より背が高いから膝の上に座られるとあたしが隠れるんだけど……

「……どうするかは、任せる」

命令を待つようにリリヤはただ告げた。

◆ ◆ ◆

そして、後日。

アリアを含め、全員が退院した。

元々の負傷具合的にはそんなに大したことはなかったけど、武装を整えたり強化合宿なるもので病院に居座つてた部分もあるからね。

リリヤの扱いは保留になった。

当然だけど、信用しきれなくて当然ではある。

警戒しつつもまずは、ジーフォース——かなめの件に目を向けることになった。

リリヤは取り敢えず1年に無事に転入したようだ。

実際、理子達の1つ下だからね。

この間来てたのは校内見学だったらしい。

神崎はSSR——超能力捜査研究科に向かった。

どうやら色金の制御について教えを請いにいくらしい。

余計なことを……あんまり色金使うと共振作用があるから勘弁して欲しいんだけど。

「大丈夫かな、リリヤ。コミュニケーション力高くないし、あたし達以外にはあまり喋らないと思うんだけど」

「まあ、そこは身の上話でもして同情でもさせればいいよ。事情を知ってるなら人間、理解はしてくれるものだし。それにこの学校は、間宮 あかりみたいなお人好しもそれなりにいるだろうし」

理子は妹が心配らしい。

学校だとイジメつてもものがあるからね。

しかも女子のイジメつて陰湿な傾向があるし。

「そう言えば……クラスはどっ？」

「1年A組だったかな？」

「アリアの戦妹いもうとがいるクラスだよね……。お姉ちゃんの言うお人好しの本人がいるじゃん」

理子が呆れて、あたしを見てくる。

実は、リリヤの様子を見にその1年A組に向かっているところなんだよね。

リリヤの設定として専門は装備科アムド。ランクはAランク。モスクワの武偵高からの留学生、まあそんなところ。

お姉ちゃんがそういう設定にしたっぼい。

強襲科アサルトや諜報科レザドの所属でもよかったんだけど……。絶対に加減を間違えて殺しかねないので、後方の専門科にしたんだろう。

だって格闘術がシステムの時点でヤバいからね。

整備や武器の知識としての能力は、お姉ちゃんのアドバイス込みだけどレールガンを生み出しちゃったし……。独自に言えば、ココの時に出したドローン兵器なんかも作ってる。

開発力は平賀さん顔負けだよ。

なんかお姉ちゃんの屋敷の地下がトニー・スタークの工房みたいになってるらしい。

ドローン兵器からして、本当にアイアン軍団作りそう。

まあ、つまりは専門技能はかなりあるけども目立つのはあれなので、セーブしてアラック。

本人にも自重するように私も言い含めてある。

なんて考えてる内に着いた。

普通にドアを開けて教室の中を覗いてみれば、

「……………」

まあ当然と言えば当然だけどポツン、とリリヤが席に座ってた。

こつちに気付いてリリヤを含めてクラスの何人かがこつちを見てくる。

「白野先輩だ」「何の用だろう？」

いきなり先輩が来たらそんな反応になるよね……

意外にも自分が有名人なのを忘れる。

ヒソヒソ話してる子もいるけど、すぐに意識は私達から逸れた。

「ちよつと失礼しまーす」

言いながら私はそのまま理子と一緒に入る。

真つ先に気付いたライカが、席を立てて私に近付いてくる。

「珍しいですね。先輩が教室に来るなんて」

「そうだよね。だけど、用があるのは私じゃなくて理子の方だね」

「峰先輩、ですか？」

「新しい転入生、来たでしょ？ ロシアの子」

「ええ、まあ……無口な子ですけど」

「あれ、理子の妹だから」

その瞬間、ライカと理子が同時に私を見る。

後ろにいる間宮と佐々木も立ち上がった。

「え……峰先輩の妹なんですか?！」

「ちよちよーつと失礼！」

あかりが声をあげると同時に理子はすぐに私の手を引いて教室を出る。

ライカが呆気にとられて立ち尽くしてるのを見ながら私は教室の外へ。

「この間といい今日といい、お姉ちゃん何してんの!？」

「社会復帰をと思ってね。お友達でも出来れば少しは変わるかな、と」

「いくらなんでも急すぎるよッ」

「こう見えても、私は結構社会復帰させてるよ？ ミアは歌で成功してるし、ワイズもマ

ジシャンで成功してる。以織はボディガード関連で今は働いてるんだったかな？ ほ

とんどミアの護衛だけ……ともかく、急かもしれないけど変化は大事だよ」

それに、と続ける。

「妹って事実をこうしてアピールすれば、何かと動きやすいでしょ？ 妹の理由を話せば、まあ……同情は誘えるね。卑怯なやり方かもしれないけど。もちろん、伝える内容はぼかす」

「でた……お姉ちゃんの嘘は言わないけど真実はつきり伝えないやつ」
理子がじとつと見てくる。

下手に嘘を言つて追及されるよりかはマシだよ。

それに真実を言つて今は話せないのなことを言えば、普通は事情があるんだろうと勝手に想像で付け足して自分で納得してくれる。

その内容が衝撃的なものであれば効果は絶大つてね。

「ともかく教室に戻ろう」

「分かったよ……話す内容は任せるから」

諦めて理子は私と一緒に教室に戻る。

「リリヤ、こつちおいで」

理子が呼ぶと、リリヤは素直に立ち上がって姉のところへ近寄る。

それから制服の袖口を掴むと、その身を寄せた。

人見知りする子供みたいに。

子供にしては理子より若干背が高いから、シユールな画えになつてる。

「あー、何て言うか不思議な子だね」

あかりがいつの間にかライカの傍にいて、率直な感想を述べた。

「まあね。妹つて言ったけど、見た目から分かるとおり本当の姉妹じゃないよ」

「そうですよね……義理の妹さんとかですか？」

私が軽く説明をすると、探偵科インヴェスタの佐々木がそう聞いてくる。

姉妹なり兄弟なり、見た目は何かしら遺伝で似るものだからね。

瞳の色は遺伝性だから、そこだけでも家族関係かどうかは判断できる。

理子とリリヤは明らかに瞳の色が違うから、佐々木がそう判断するのも無理からぬこと。

「まあそんなところ。詳しい説明は省くけど、この子は監禁されてた経歴があるらしくてね。そこから救いだされて……理子が面倒を見てなつかれて、成り行きで妹について感じらしい。私は以前にも会ったことがあるんだけど、見ての通り精神的に未成熟な部分があるから……まあ、よろしくお願いね」

と、私が言うのと3人は何とも言えない表情をする。

いきなり転入生が監禁されてた過去があるなんて知ったら、そりや微妙な顔もするよね。

だけど、これで変に過去に触れたりすることはないだろう。

でも、一度不信感を持てば秘密がバレるのは時間の問題かもしれない。

けれども、家族の為なら多少の面倒は何とかしよう。

誰しも表の顔は持つておくべきだしね。

「りんりんのお友達みんなのクラスに入るつて聞いてね。お姉ちゃんとして、出来れば気に掛けて欲しいかな……お願い」

理子は誠実に頭を下げる。

お姉ちゃんしてるね。

「大丈夫ですよ、峰先輩。任せて下さい！」

それに対してあまりが真つ先に声をあげた。

他の2人も顔を見合わせて任せて下さいとばかりの表情。

お人好しだね

だけど、そういうところ嫌いじゃないよ。

リリヤの話が済んだので、私は別件。

キンジと放課後に定期報告をする。

キンジも何やら用事があつたらしく、少し遅れて教室にやってきた。

「で、いつも通り進捗は？」

「大丈夫だ、問題ない」

「フラグくさい発言だね」

「報告って言つても特に何もないぞ」

「それを決めるのはキンジじゃないよ」

ボイスレコーダーで指差すようにヒラヒラしながら私は言う。

今朝、受け取ったボイスレコーダーの内容は既に拝聴済み。

正直、聞いてて笑っちゃった。

話し方からして完全にバレてますよ。

キンジは女性関連の話となると途端に鈍くなる、あるいは見て見ぬふりをする。

その傾向があるのは出会ってからそんなに日が経たない内に分かっていた。

それがとんでもない事態を現在進行形で巻き起こして、ジエンガ方式で積み重ねられている

のが私にはイメージ出来た。

私はちよつと呆れ気味に言つてあげる。

「会話の中から情報を取捨選択するのも捜査の一環、探偵科インケスダに限らず探偵なら最初に習

うことですよ？」

「まあ、そうだが……」

「それで忠告しとくよ。女の子にこれ以上近付くのはダメ。話があつても通信機器を介

したほうがいいよ」

「何だよ、いきなり」

「端的に言うよ、会話の内容からして風魔の一件はバレてる」

「何で分かるんだよ……」

「女の勤かな……根拠があるなら、キンジが約束を守ってる確認をしてたかなめちゃん
の口調がどうも約束を破ってるのを確信してたっぽい感じがしたからね」

間違いなく見てたんだろう。

風魔の一件を見られてるかどうかは以前確認出来なかつたけれども、会話の内容から
して確信に変わった。

もしかしたら、今も……

ちよつとだけ周囲に意識を向ける。

けど、今は見てる感じはなさそう。

「何にしても、敵だろうが味方だろうが約束は守らなきゃ自分が不利になるよ？ それ
と、私も約束を守らない人は好きじゃないしね」

「おいおい、かなめの肩を持つのか？」

「違うよ。単純に約束したなら守らなきゃって話。それじゃあね」

押し付けるようにボイスレコーダーをキンジに渡して、私は教室を出た。

まあ、あとこれは私自身の気持ちの問題だけ……兵器であろうとする人間モドキが誰かを理解しようなんておこがましいんだよね。

要は気に入らない。

人間らしい生活に憧れてるのに、最初からそれを諦めてる。

なのに誰かに愛しては欲しい。

中途半端にも程があるよ。

ただ単に人形だったレキはつまんないから消そうと思ったけど……かなめはその在り方が気に入らない。

別に興味がない訳じゃない。

ただ、気に入らない。

それだけの話。

かなめ本人も自分の在り方に迷ってるんだらうけどね。

そこら辺の事情はどうでもいい。

キンジを一番理解してるって感じを出してるのも私は気に入らない。

私の方がまだキンジを理解してる自負があるよ。

嫌だと本当に思ってるならしないし、理不尽な事をしたりもしない。

当の本人は迷惑してるけど、かなめをイマイチ突き放せない感じっぽいし。

私が一肌脱いであげよう。

脱ぐって言うより、剥いてもいいけど。

家族ってキンジが認めないなら消しても問題ないもんね♪

やるのはリリヤの役割になるだろうけど。

さてと、どうしたものかな……

91：物事の本質

うーん、どうしよう……

「……………」

転入してからリリヤちゃん、ものすごく話しづらいんだけど!?

授業中もずーっと、ノートとかとらずに座ったままで、でも先生に当てられると普通に問題を答えちゃう。

もしかしてすごく頭がいいのかな?

授業が終わって昼休みになっても、リリヤちゃんは動かない。

「お腹、空かないの?」

席に近付いて、あたしが聞くとコクリと静かに頷いた。

一応、反応はしてくれるんだけど……

会話が續かない。

「えっと、一緒にご飯いかない……? ってお腹空いてないんだっけ」

ちよっと恥ずかしくてにははと、笑って誤魔化しちゃう。

「……ちよつとだけ、空いた」

そう言つてリリヤちゃんは席を立つた。

「……食べる場所、分らない」

あ、そつか。

転入したばかりで食堂の場所が分からないんだ。

「うん、案内するよー」

リリヤちゃんの手を引いて教室を出る。

こうして見ると大きいね。

ライカよりは小さいけど、それでも身長は大きい方だと思う。

でも、気持的に小さい子の面倒を見る感じがするよ。

食堂に着いて、

「お、来た。おーい、こつちだ」

ライカがすぐに気付いて声を掛けてくれた。

席も6人席にしてくれたんだ。

ライカ、志乃ちゃん、麒麟ちゃん、桜ちゃん、あかし、そしてリリヤちゃんまで6人。

でも、桜ちゃんは来ないかもしれない。

急に志乃ちゃんと仲が悪くなつて、顔を合わせないようになつちやつた……

本当に2人ともどうしちやっただらう。

聞いても答えてくれないし……

「……初め、まして。リリヤです」

リリヤちゃんがいるから、今はやめておこう。

席に座ってリリヤちゃんは転入してきた時と同じようにたどたどしい挨拶をした。

「あたしは火野 ライカ」

「佐々木 志乃です」

「麒麟は麒麟ですの」

「間宮 あかりだよ」

と、それぞれ自己紹介をする。

それからリリヤちゃんは座ったままペコリと一礼する。

「あー……リリヤは、ロシアの方から来たんだよな」

「……Да。」

「えっと、今のって」

「ロシア語で『はい』って意味ですね」

ライカが聞くと、志乃ちゃんが答えてくれた。

本当にロシア人なんだ……

間近で見えるのって初めてだよ。

「……ロシア以外にも大丈夫」

「そうなんですか？　ちなみに何か国語を」

「……30」

『え……!?!』

みんなの声が重なった。

さ……30?!

英語とか以外にも色々ってことだよね？

フランス語とか、ドイツ語とかイギリス語とか……いや、イギリスは英語だっけ……

イギリス語なんてないよね。

リリヤちゃんってすごく頭がいいのかな？

あたしは英語ですらちんぷんかんぷんなのに……

「す、すごいね」

「……別に」

あたしが素直に驚いたけど、リリヤちゃんは何だか哀しそうだった。

そして、すぐに沈黙する。

うう……どうしよう。

会話がやつぱり続かない。

「えっと……何か注文しましょう」

志乃ちゃんがそうすかさず提案してくれる。

そう言えばご飯食べに来たんだ。

リリヤちゃんを誘うのに夢中で忘れてたよ。

あたしのお腹もちよつと鳴った。

みんな少し笑ってる。

さすがに恥ずかしい。

「……………」

リリヤちゃんは……笑ってはくれないか。

でも、一緒に来てくれたから一歩前進だよね。

中等部の麒麟ちゃんとは別れて、あたし達は自分達の教室に戻る。

結局、リリヤちゃんとはあまり会話が続かなかった。

何て言うか……楽しいとか嬉しいとか哀しいとか、そんな当たり前の感情をどこかに置いてきちゃったみたい。

この間白野先輩が言ってた監禁されてたことが関係してるのかな？

気になるけど……流石に聞けないよね、そんなこと。

あたしも里が襲われたこと、あまり話たくないから。

きつとりリヤちゃんもそういう振り切れない過去があるんだろう。

少しでも前に向けるように、何とかしてあげられないかな……

「そう言えば麒麟ちゃん。ランク考査試験、受かったんですね」

「ああ、CVRのインターンでCランク取るのって難しいんだぜ」

志乃ちゃんの言うとおりそう言えば、麒麟ちゃんランク上がったんだね。

ライカも嬉しそう。

あたしもアリア先輩に追い付くためにもランク上げないと。

「あかりも負けてられないな」

「そう言われると立つ瀬がないな」

ライカにランクのことを指摘されちゃった……

でも実際にランクが低いと任務クエストにも制限が掛かるし。

上げない訳にはいかないよね。

教室に戻って席に座ったら、何か紙が机の中からはみ出てる。

手紙……かな？

手に取ると裏には間宮 あかり様って——これってもしかしてツ?!

ラ、ラブレ……

隠そうと思つて周りをつい見ちゃうと……志乃ちゃんとライカにも同じっぽい手紙が手元にある。

そしてみんな、息を吐く。

思つてたのとは違つたみたいだね……

中身は何だろう？

開けてみると、内容は司法取引の注意事項について。

イラスト付きで分かりやすくなつてる。

でも、何でこんな手紙が……

すぐにその理由は分かつた。

先生が入つてきてH ホームルームRが始まり、一言。

「はい、いきなりですけど転入生を紹介します」

また転入生？

クラスみんなが同じような声を出してる。

実際、リリヤちゃんが来たばかりだし仕方ないと思う。

そうして入ってきた人にあたし達は目を見開く。

現れたのはあたし達を毒を使って苦しめ、ののかの命を奪おうとした夾竹桃。

だけど彼女は黒板に鈴木 桃子と書いて、

「どうぞ、よろしく」

ただ無感情に淡々と答えた。

夾竹桃が来るから逮捕したあたし達3人に司法取引のこれが……

すぐに紹介が終わって、夾竹桃が席に座ると、そのままみんなが転入生恒例の質問をする。

「専門は？」「鑑識科」^{レビ}「部活は？」「入らないわ」「趣味は？」「マンガ」

そんな感じで無視はしてないけど、冷たい感じ。

一体、どうして夾竹桃がここに？

そして、放課後。

校舎から出て、下校する途中。

校舎の脇の陰に見覚えのある人影が見えた。

キセルを吸いながら壁に背を預けて……こちらを見る夾竹桃。

あたしを見た後に志乃ちゃんとライカを見て、

「間宮 あかりに用があるの。他は帰ってよし」

あたしだけにしか用はないとばかりに言ってキセルの種火を地面へと叩き落とす。

「——見過ごせない危機が迫ってるわ」

「危機イ？ それはお前の事だろ、桃子ちゃんよ」

「私達はあなたに用はありません。帰ってください」

ライカと志乃ちゃんが、あたしを守るように前に出て身構える。

でも、するりと2人の間を通り抜けてあたしの近くまで迫って来た。

は、速い……!?!

目の前にいたのに、一瞬で詰められた。

ママの鳶とびうがち穿みちたいに。

そのまま右手であたしの手を掴まれる。

「行くわよ。この子達じゃ話にならないわ」

あたしに何の用があるかは分からない。

でも、このまま2人になるのはイヤだ！

「放して!!」

手を振りほごうとした瞬間に、夾竹桃の背後に人影。

そして、素早く左手を捻って背後へとやったのは……陽菜ちゃん？

それを見逃さずライカが動いて、側面からハンドガンを構える。

あの銃、名前は忘れちゃったけど白野先輩と同じやつだ。

射線上に誰もいない、上手い位置を取ってる。

「意外に冷静なのね」

「仕込みがありそうなヤツには近付くな。先輩から教わったんだよ」

夾竹桃は少しだけ感心したような言葉を言つて、ライカは銃を見せるように構える。

「でも残念。世の中には毒を飛ばす生き物もいる。イモガイとかね」

「そつからどうやって飛ばすつもりだ？ 手で投げるには辛そうな体勢だぜ？」

夾竹桃は器用に口の中を動かして、舌の上で針を見せた。

「含針……ここからなら飛ばせない距離じゃないわ。それに、私は体内に83種の毒を

持つてる。それを”分泌ぶんびつすること”出来る。甘い物を浮かべる唾液と酸っぱい物を

浮かべる唾液では成分が異なるように、意図的に葉や毒の舌を作ることが出来る。そし

て、それを針に絡ませれば……」

毒針が自分で作れるつてこと、だよね？

「二度も毒されたら——中毒になつちやうかもね」

言いながらライカに視線を向ける夾竹桃の眼は、獲物を狙う動物みたい。

ライカはそれに吞まれかけてる。

ダメだよ、ライカ……！

油断しちやつたらダメ！

「Well well. 何てね、随分と怪しい現場に出くわしちゃった」

陽気な声でそう語りかけてきたのは……白野先輩。

「ふーん……」

それから状況を冷静に見るようにつつ唸って、先輩はポンと何か分かったとばかりに手を叩く。

「かつあげはダメだよ、キミ達」

何でそうなるの!?

全員が思わず呆れた目になる。

白野先輩ってこんなに抜けてたっけ?

「状況証拠的にはまあ、そんな風に見えるんだけど……それで? 司法取引して、転入して、早速問題でも起こすつもりかな? 鈴木 桃子さん」

先輩はすぐに核心を突くように目が少しだけ真剣になる。

「別に、私は間宮 あかりに用があるだけよ。でも、興が削がれたからもう帰るわ」
そう言つて、夾竹桃はあたしの手を離れた。

全員が夾竹桃から距離を取るように間合いをとる。

「皆さん、これは一体……」

それから麒麟ちゃんが合流した。

でも、妙な雰囲気困ってる感じ。

「養分を取り合う花が2つ、あなた達^{せんでい}剪定されかかってるわよ」

それだけ言って、夾竹桃は静かに去っていった。

どういうこと？

誰も、その意味は分からなかった。



夾竹桃が転入してくるとはね。

しかし、24歳の筈なんだけど何で高校生に交じれてるんだか……

本人が童顔つてのもあるんだけど。

日本人自体平均的に童顔だから実年齢より低く見られるのは、まあよくある話。

どうやら夾竹桃は何やら遠山 かなめの件に多少なりとも干渉するつもりらしい。

女の友情に水を差されるのが嫌いな、彼女らしい理由ではあるかな。

「さて、どうも今のは忠告っぽいね。良い機会だし言っておくよ。かなめちゃんの動向には気をつけておいてね。何やら、不穏な気配があるっぽいしね」

「それって一体、どういうこと何ですか？」

「私もまだ全部分かつてる訳じゃないよ」

あかりがそう聞いてくると、私も正直なところを答える。

かなめの目的が、キンジに愛して貰えるように全てを仕向けていることなのは分かった。

でも、それはあくまでも目的というよりは狙いであり、手段。

最終的な目標は何となく分かるけど、それを達成してそれからどうするかは私も分かってない。

私の予想では……きつと”かなめの望んだ結果”は得られないと思うからね。

「だから、変に刺激しないで。あと何か不穏なことがあっても冷静に状況を整理して対処してね。目の前の事実ばかり追ってたら本質を見失うよ」

私はそれだけを告げて、その場を後にした。

麒麟ちゃんは何か思うところがある反応をした。

きつと何か行動を起こすだろう。

それにどうやら、1年はかなめを中心とした派閥……コミュニケーションみたいなものが形成されつつある。

それは、人の心理を利用して捜査する特殊捜査研究科の人間は敏感に感じとってるだろう。

リリヤもどうやらそこら辺は分かってるらしい。

流石にこの学校で短絡的に行動はしない、とは思いたい。

前はレールガンを撃とうとしてたけど。

まあ、多分……大丈夫。

リリヤは変化しつつあるから、正直ちよつと行動を予想出来ない。

注意しておこう。

◆ ◆ ◆

状況は複雑。

アメリカの人工天才——ジーフォース、現在は遠山 かなめを名乗り1年A組に転

入、在籍。

リコお姉ちゃんを傷付けた、最優先肅清対象。

対象は現在、コミュニティを形成。

周囲に好印象を意図的に与え、独裁者のような立場を確立しつつあり。

現状での直接的な肅清は周囲に被害が発生、自己の立場を不利にし……家族に何かしらの接触が起こる可能性が有り。

対象は暗殺で肅清することが望ましい。

しかし、対象は遠山 キンジと行動をほぼ共にしており……ジル様の機嫌を損ねる被

害が出る可能性有り。

現在、対象を被害なく排除する機会は無し。

現状を維持し、動向を観察。

対象が周囲に誰もいない時期を予測でき次第に行動を開始する。

対象の武装は先端ノイ・エネンツェ・エツジ科学刀に次世代UAV。

種類、具体的な機能は調査中。

だが武装的に中、近距離に特化しているため遠距離からの圧倒的な火力による制圧、狙撃が有効と思われる。

……思考、終わり。

「リリヤちゃん、何してるの?」

接近する人影、間宮 あかり……武偵高でのランクはDランク。

しかし、暗殺術の使い手であり不殺の制約がなければかなりの能力を秘めているとの
ジル様の情報。

彼女は私との交友を望んでいる、と思われる。

……私には理解出来ない行動。

対象を排除するために潜入しただけ。

「……考えごと」

「そうなんだ、いつも何を考えてるの？」

「……返答、できない」

「あーうん、普通考えごとってそうだよね……あはは」

私の言葉に彼女は笑う。

非合理的な行動。

でも、ジル様もそのような行動をする。

彼女も同じ、なのかは不明。

でも、分かること、ある。

「……そのUZI」

「あたしの銃がどうしたの？」

彼女は銃を見せる。

「……少し、確認」

「え、うん、いいけど……」

困惑しながら渡された物を手にとって、分析。

各種動作に問題は無し。

整備状況、ライフリングに多少の不備、引き金の重さに不備。

分解に3分、整備に2分、結合に3分、作動点検に2分。

簡易的な整備で完了出来ると推察。

昼休みの時間は20分。

十分に間に合う。

「……整備に不備」

「え……ウソ。撃つたあととはちゃんと整備してるのに」

「……丁寧、けど甘い」

トランク型、整備モジュールを展開。

道具一式を並べる。

「……すぐ終わる」

分解を開始。

弾倉を外し、薬室に弾丸がないことを確認。

ストックと銃身部を分離。

バレルを分離、中を点検。

油脂類の不足、多少のゴミを確認、除去、塗布。

トリガー部を点検、同じく清掃不足、バネの多少の劣化。

部品は無しのため清掃と点検だけに留める。

整備は完了、結合し、点検。

作動点検をし、現在のトリガーの重さを確認。

現段階で射撃に異常は無し。

しかし、トリガーに関しては早めの交換を推奨。

「……整備、終了。トリガーのバネに多少の劣化。近日に故障する可能性は低い。しかし、交換を推奨する」

「あ、ありがとう」

持ち主に返却。

時間は10分、定刻。

「でも、スゴいね。あんなに手際よく出来るんだ」

「……肯定。ほとんど、出来る」

「ほとんどって……他の銃も、つてこと？」

頷き、肯定する。

間宮 あかり、感心している様子。

「本当にスゴいよ、リリヤちゃん。……あたしもそんな風に色々出来たらいいのにな」

「……………」

彼女に不安な様子を確認。

疑問、彼女には人並みの幸福があると思われる。

私のような廃棄される可能性の低い存在。
不安になる要素、不明。

解明出来る点……自らを欠陥品と認識している。

「……………」

何かを言いたいと、思考。

しかし、明確な言葉は分からない。

この思いは不明。

間宮 あかり……リコお姉ちゃんと同じものを感じる。

「あ、もうすぐ昼休み終わっちゃう。ありがとう、リリヤちゃん」

そのまま間宮 あかりは去る。

あれが、人……なの？

◆ ◆ ◆

全く、あつちこつちで状況が動いて私は忙しいね。

爽竹桃は来るし、かなめはなんやかんやしてるし、キンジは相変わらずおバカだし、ライカは麒麟ちゃんのランク昇進祝いをするって言ってたし。

まあ、最後はかなめの件と関係ないんだけど。

麒麟ちゃんは戦妹であるライカの戦妹^{アミカ}なんで私の妹でもある訳だから、お祝いしても

別に問題はないよね。

というわけで、サプライズ突撃ピッキング!

「お邪魔しまーす」

「だーツ!? 白野先輩、どうしてここに?!」

そこにはフリフリの白いロリポップなワンピースを着たライカが、女の子らしくない驚き方でベッドの上にいた。

「その格好、色々と見えるよ……」

「……………ツ!?!」

バツと、素早く正座になってスカートを隠す。

そこら辺の恥じらいは残ってるようで。

「じゃなくて、先輩。不法侵入ですよ」

何かに素早く気付いて、ジト目で指摘してきた。

頭の回りも悪くないことで。

「それは失礼。代金は、この差し入れでどう?」

私は袋からチキンのバスケットと、デザートのカークの箱を見せる。

「先輩、それって……」

「今日、お祝いするつもりなんでしょ? 麒麟ちゃんのランク昇進の。で、私からもお祝

いとしてね。戦妹アミカの妹は私の妹でもある訳だし。その格好を見るに……服の方にお金を使つちやつたみたいだから、ちようどよかつたよ」

「ありがとうございます！」

気持ちのいいお礼だね。

だけど、その格好で土下座は似合わないけど。

「はっはっは、苦しゆうない。しかし、ライカも随分カワイイ格好だね。悪くない、ギャップ萌えつてヤツかな？」

「えへへ、そうですかね」

「うん、麒麟ちゃんが来る間に楽しんでもいいかもって思えるほどにね」

「先輩、そういう冗談は笑えませんか……」

「冗談かどうか、試してみる？」

意味ありげに舌なめずりしてゆっくり近付く。

私ってばイタズラ気質だから……誰かの困ってる顔とか結構つい見たくなるんだよね。

知ってる、とか家族には言われそうだけど。

「だ、騙されなせんからね」

動揺してるし、噛んでるじゃん。

「相変わらず初心うぶだよね。どこまで本気にするか試したくなるよ」

「あ、あたしには麒麟きりんがいるんで」

ほほう……語るに落ちたね。

まあ、これ以上乱して私が2人の仲を引き裂くなんて無粋なことは出来ないし。

取り敢えずはこれまでだね。

「ま、突然の訪問だけど私も祝ってあげたいしね。もちろん、二人きりになりたいなら適當なところで失礼させて貰うけどよ」

ニタアと、笑いながらライカの傍によるとポフって感じで真っ赤になった。

なんだかんだ、あわよくばその気はあるんだね。

そんな中でライカの携帯に着信が入る。

パングロックな曲が流れるとは……ライカらしい。

「連絡ですネ、遅れるのかな」

ライカがそう言いながら携帯を開く。

耳に持っていないあたりメールの着信か。

しかし、本人は開けた直後に固まる。

内容に絶望するように。

「なんだよ、これ」

失礼して脇から携帯の画面を見させてもらえば……そこには麒麟ちゃんにベッドで押し倒される夾竹桃の姿。

しかも下着姿で。

他にも何枚も写真がある。

タレコミ、にしても胡散臭いね。

「ライカ……目の前の事実にはシヨックかもだけど、冷静に状況を分析しなよ。そのメールはどこから？」

「匿名です……このアドレス、あたしは知らない」

慎重に質問しながら私は誘導する。

今のライカは精神的な動揺が大きい。

目の前の事実から目を逸らさせないと。

「匿名の人物？ そんなメールを送って相手は一体何のつもりだろうね？ それに、ライカのアドレスを知ってるくせにライカは相手を知らない」

「先輩、これってどういうこと……何ですか？ あたし、あたし……」

今にも泣きそうでライカは目の前の事実を受け止めようとしてる。

「落ち着いて。私の考えだとこれは、2人の仲を裂こうとする工作だと思う」

「……工作？」

「匿名って言うのがまず怪しい。夾竹桃のところに行つた理由は麒麟ちゃんに聞けばいい話。だから誰が得するか、それをまず考えることだね。ここだけの話、かなめの動向が怪しいのは前も言つたけど、最近……かなめに好印象を持つ1年が多くてね。どうも胡散臭いんだよね」

「かなめが、これをしたつてことなんですか……？」

「まあ、端的に言えばね。証拠はないけど……どうもかなめは1年で独裁者になろうとしてるっぽい。あかりの周囲では、かなめに好印象を持つてる人はいない。つまり、かなめにとつて何かしらの邪魔になるらしい君達を排除しようとしてるのかもね」

「でも、コレ……」

ライカは麒麟ちゃんが信じられないらしい。

携帯に目を落とす。

「あとで確かめればいいよ。一先ずは、見ない」

私がライカの携帯を取り上げる。

変に直視するからダメなんだよ。

「お祝い、してあげるんでしょ？ 普段はがさつなのにこういう時は繊細なんだから」

「うるさいですね」

と、ライカは少しだけ軽口が叩けるようになった。

それから少し雑談をして、気を落ち着けているとすぐに誰かが来た。この軽い足音は、麒麟ちゃんか。

ライカが暗い顔を少し見せたので、

「戦姉あねなら信じてあげなよ」

と軽くアドバイスする。

「お待たせですの、つて白野お姉さま？」

「やつほ、お邪魔してるよ。昇進おめでとう」

「まさか、お祝いに来てくださったのですか？」

「まあね。私にとつても戦妹いもうとみたいなものだし」

麒麟ちゃんと私がそんな話をしてる間も、ライカは微妙な表情。

仕方がない、私が聞いてあげよう。

「ところで麒麟ちゃん、桃子さんのところに行つた？」

「はい、行きましたけど……何故ご存知ですか？」

「こんな匿名の写メが送られきてね」

と、私はライカの携帯に写つたモノを見せる。

するとすぐに顔を赤くして否定する。

「これはっ、その、浮気とかではありませんの！」

「弁明の第一声がそれはどうかと思うけど……まあ、タレコミにしてもこれは盗撮だし。彼女のところに行つたつてことは何か確かめたかつたんだよね？」

「はい、その事でお姉さまにお話が……」

ライカは少しだけ俯いてた顔を上げた。

「何で夾竹桃なんかのところに行つたんだよ」

その悲痛そうな表情は悲しみすらあつた。

それを見た麒麟ちゃんは、何となく分かつたらしい。

「すみません、お姉さま……一言でも申し上げるべきでした。ですが、分かつて欲しいんです。このお話は確証のないお話。内輪で語るには危険と思つたんですの……」

ふむふむ、確かに麒麟ちゃんの判断は正しい。

確証のない話は変な疑念を生むからね。

お父さんもそんなことを言つてたし。

私は麒麟ちゃんに尋ねる。

「夾竹桃の言葉に引つ掛かりを覚えたんだね」

「はい、それで実際にお話をして確証を得ましたの。かなめさんは学校を支配しようとしています。佐々木様と乾様が仲違いしてしまったのはおそらく、仕組まれて……」

確信がある麒麟ちゃんの方。

目もそれを物語ってる。

流石にウソじゃないって素人でも分かる雰囲気。

「ライカ……これでも信じられない?」

私がそれを聞いて、ライカは首をふる。

「先輩の言うとおりであったよ……あたし、麒麟を信じれなくて」

「人は信じたいから疑うものなんだよ。言ったでしよ、目の前の事実ばかりにとらわれちゃダメだって。それはそうと……今はその話も重要だけど別にして、本題があるでしよ?」

そこでハッとライカは気付き、麒麟ちゃんは少し待ってたとばかりに息を吐く。

「そうだったッ。遅れたけど、麒麟……ランク昇進おめでとう」

「はいですの。ありがとうございます、お姉さま方♪」

ライカの祝いの言葉に花を咲かせる麒麟ちゃん。

美しきかな女の友情ってね。

さて、やはり地盤を固めてきたみたいだから……迂闊^{うかつ}に飛び込むのは下策ってね。

2人きりになったら何かしらの罠だとは思っておこう。

うーん、ここは一転攻勢でキンジのところにお邪魔するかな。

流石のかなめもキンジの傍じゃ変に動けないだろうし。

問題は……家族以外部屋には近寄らせないっていう制約だね。

何か良い方法ないかな？

多少のこじつけでも、良い方法。

少し考えてみよつと。

と、思ったら後日にキンジから呼び出し。

しかも尾行がないようにって、かなめの事は私も警戒してるから言われるまでもないんだけど。

いきなりなんなんだか……

あまり近付かないようにしてたのに。

あと、かなめが感付いて変ないちやもんとかつけられないように私はあまり直接的に監視とかをせず、間接的にしか情報を得てない。

大体の情報源はキンジとのやり取り。

もしかして何か進捗でもあったのかな？

もしくは何かをやらかしたか……

やらかしたならまた貸しが増えるよ、やったね。

なーんて……少しは驚くような呼び出しだといけど。

待ち合わせの海浜公園かいびんに到着。

肝心の呼び出した本人は、ベンチに座ってる。

何故か赤いバラを持って。

キンジが花束を持つてるのは意外だな

あの様子だとロクに花言葉とか調べてないと見えるよ。

バラって大体、告白の代名詞みたいなものなのに……誰に渡すつもりなんだか……

数を見るに101本だと思う。

実は本数でも意味が変わってくるんだよね。

「お待たせ。珍しく花束なんて持ってどうしたの？」

と、私は普通に芝生の方からベンチに近付く。

目があったキンジは座りながら、

「尾行は……聞くまでもないよな」

と聞いてくる。

私は呆れて答える。

「あのね、素人じゃないんだから分かってるよ。だから、尾行対策のセオリー通り広い場所と呼んだんでしょ？」

「まあな。流石、元パートナー」

「今は現チームだけどね」

「それもそうだな」

「で、重要な話の前に右足を診^みせて貰える？ さつきから右足を変に動かしてるし、意識がそつちを向いてるから気になるんだけど」

「お見通しだよなあ……」

言われて渋々と言った感じにキンジは右足を見せる。

打撲、かな。

銃弾を受けた打撲だけど。

適当に処置した感じ……さてはケチったね。

「サポーター外したでしょ？ 出してよ、巻き直すから」

何も言わずにキンジはぼつが悪そうにサポーターを差し出す。

それからちゃんと巻いて、ちよちよいのちよいつてね。

「はい、終わり。違和感は？」

少しキンジは立ち上がって軽く動かす。

「大丈夫みたいだ。自分でやるより大分マシになったな」

「ようやく本題に入れるね。で、やらかしたんでしょ？」

「何でやらかした前提なんだよ」

「え、違うの？ 膝を撃たれたみたいなの打撲してるくせに？」
「すみません、そのとおりです」

折れるの早い。

結局、そうなったかゝって感じだけだね。

ある意味予想できてた。

多分、注意しててもキンジはそういう運命なんだろうね。

「で、私を呼び出した理由は？ その花束と関係あり？」

「まあな、ただ適当に話せる内容じゃないんだ。場所を移そう」

場所を移す、ね。

……あの教会がよさそうだね。

遠方からの監視も遮断出来るし、教会の周りに何も無いから窓に人影が見えればすぐに分かる。

「あの教会？」「その教会だ」

考えてることは一緒だったのか、同時に言う。

少し笑って、そして私達は教会へ。

密談場所に教会なんて、普通は選ばないけどね。

教会は一般開放されていて鍵は掛かっておらず、扉を開き、同時に足を踏み入れる。

ステンドグラスに新郎新婦が立つであろう台に、来賓のための木製のベンチ。

一般的な教会つて感じ。

「私には縁遠いと思つてたんだけどね」

「なにがだよ？」

「いや、教会に入ることなんてないと思つてたつて話」

「その、俺にはよく分からんが……女子つて教会とか憧れるものじゃないのか？」

「普通はね。私は家族のことがあるし、それにあんまり興味もないんだよね」

結婚か……

正直、考えたこともない。

実際興味すらもない。

それよりも私は面白おかしく人を観察する方が良い。

誰かと一緒にの時を過ごす……まあ、キンジならそれも悪くないんだけど……本人が望んでると思えないし。

私から誘う？

どうせキンジのことだし冗談だと取るに決まつてる。

期待するだけ無駄だからね。

それに……なんか私から誘うのつて負けた気がする。

何にって言われたら、まあ分かんないんだけど。

2人で奥まで行って、神父の台のところに向き合う形で立ち、私から話を持ちかける。

「それで重大な話ってなに？ 単刀直入にお願いね」

「ああ、そうだな」

「——霧。遠山 霧になつてくれ」

「……………え？」

バラを差し出されて、突然にそんな事を言われて……………おまけに教会の鐘も鳴り出した。

なに、このシチュエーション。

告白？

単刀直入には言ったけど……………いやいや、キンジに限って絶対にありえない。

何かの勘違いとか冗談……………冗談……………だよな？

だって、そんな風な素振り一個も無かったし。

私が見抜けない訳がない。

でも、キンジの目は真剣そのもの。

久々にすごい不意を突かれたけど落ち着こう、取り敢えず。

って言うか、お父さん推理外したね。

何がこの先、私が動揺することなんてない、だよ。

私、自分でも分かるほどに動揺してる。

「……………あー……………キンジ、説明して貰える？　いきなり遠山　霧になってって言われても。

流石の私も……………」

「お前しか頼れないんだよ」

あ、う……………ちよつと待って……………

そんな風に畳み掛けられたら……………！

今は結構変な気分なんだけど。

こんなに乱されたの初めてかもしれない。

「それって家族になって欲しいってこと、だよね？」

「ああ、そうだ」

力強い返事。

絶対に何かがおかしい。

だって、だってキンジがそんなことを言うはずがない。

でも、バクバクと何故か脈が早い。

自分の耳の中で響いてるみたいに聞こえる。

耳鳴りもしてきた。

頭も、くらくら、する。

なに、この……感情？

感情、なの、かな？

体が、熱い。

この高揚感は、初めて解体したとき……いや、それ以上の……

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃないよ……いきなり、すぎるよ」

「突然過ぎたよな……この花束じゃ足りないのも分かつてる。だけど、今の俺に出来る精一杯なんだ」

キンジは情熱的に言ってくるけど、やっぱり絶対に勘違いしてる。

勘違いしてるって分かつてる。

でも、冷静になれない。

まるで待ち望んでたみたいに、体だけが、精神が、先走る。

ああ、もう……ホントに、これで勘違いするな、なんてムリだよ。

花束、受け取っちゃったら……私は、わたし……は。

ああ、そっか……これが……

仕方ない、よね。

ズルいかもしれないけど、キンジが悪い。

これまでのツケ、だし。

キンジから”家族になろう”って言ってきたんだし。

「うん……分かった。いいよ、家族になっても」

「安心したよ。本当にありがとう」

「お礼なんていいよ、家族……なんだし」

家族だから、きつと守^{殺し}つてあげる。

勘違いのままでも良い。

騙されたままでも良い。

都合の良い話かもしれないけど、やっと分かったよお父さん。

花束を受け取って、少しだけ匂いを嗅ぐ。

ああ、きつとこれが、恋の匂いだ。

92：家族のために

……霧の言うとおりであった。

まさか、かなめがあんなにもヤバいとは思ひもしなかった。

まあ、そうなった原因は俺自身にあるんだが……正直かなめがここまでとは。早急に対策をたてる必要がある。

俺の身の安全の為にもな。

と、俺は翌日――

土曜日朝、かなめの目を盗んで台場の海浜公園へ出た。

前は海、後ろには広い芝生の広場の間にあるベンチで……人を待つ。

俺には全く似合わない、バラの花束を抱えてな。

まあ、花束は包まれてるから別に持つても恥ずかしくはないんだけどな。

こんなものを持つてるのは割と入り組んだ理由があるのだが。

単純に俺の『護衛』を雇うための依頼料、ということになる。

かなめは、俺の部屋に『誰も一緒に住んではいけない』と言った訳ではない。

——『家族なら一緒に住んでもいい』。

そう言ってるのだ。最初から。

つまり、信頼のおけるヤツを俺の『家族』という事にして、俺の部屋に常駐させればかなめという恐ろしいイベントが起きても、バッドエンド寸前で助けて貰えるだろう。

そこで『師団^{ディン}』の中でリストアップしたのだが……正直選択肢は1つしかなかった。
”霧”だ。アイツしかない。

まず俺の家族とするからには、純日本人じゃないとおかしい。

アリア、理子、ワトソンは家庭的に無理がある。ジャンヌもダメだ。

しかも演技ができて、俺の話に合わせられそうなのがアイツしかない。

白雪も考えたが演技力に難アリだ。

となれば、霧しかない。

霧は白雪程ではないが黒髪ロングで、黙っていればいかにも日本人って感じの見た目をしている。

それに身長も小さめで『妹』っていう設定が不自然じゃない。

名字が違うのは母さんが亡くなったあと、生活費の関係で仕方なく養子で行って

て、実は遠山家だったから戻ってきたという事にする。

正直無理がある。色々と苦しいのは重々承知だ。

これでも必死に考えて矛盾がないだろう程度の設定に持ち込んだつもりなんだよ。

霧は、引き受けてくれるだろう……多分。

いや、微妙かもしれない。

俺はアイツの警告を無視……した訳じゃないが、それでも半分くらい気にしてなかったしな。

霧の言うとおりあの時は情報を得るのに必要なこととは言え、女子の接触を控えれば良かったぜ。

まあ、そんな訳で理由を聞けば自業自得だとバツサリ切られるかもしれない。

仮に引き受けるなら、この貸しは間違いなくデカイ。

なので俺は依頼を受けて貰えるようにと、あとは貸しを軽減するためにプレゼントでご機嫌を取ろうというわけだ。

自分で思つて悲しくなるな……

ともかく、霧が何をプレゼントすれば喜ぶのかよく分からんで女子のカスタマーサポートセンターことジャンヌに電話をしたところ『花だ。花を贈られて喜ばない女性はいない。これは世界の法則だ』と、自信満々の回答を頂いた。

霧は……花とかより紅茶の方が喜びそうな気もするが、紅茶の種類とか分からんな。
な。

それにジャンヌも少女漫画とか読んでるみたいだし、そこだけは一般的な価値観があるだろう。

なので俺はアドバイス通りに花を選択し、今朝早くに外出して台場の一度も入ったことのない花屋に入ったのだ。花なんて菊やチューリップしか知らない俺だったが、花屋のお姉さんが『花を贈るならバラに限ります』と自信満々に言うので……それを購入して霧を待っているわけだ。

花屋のお姉さんが『サプライズで出してあげて下さいね』と言ってたが。タイミングが分からん。

そもそも霧を相手にサプライズなんてあんまり成功するイメージがない。

アリアの勘とは別に、霧は察しが良いからな。

もしかしたら、俺のやろうとしてることも話してる内に気付かれるかもしれない。

その時は開き直ろう。

しかし、にしてもデカイなこの花束。花束の相場なんて分からなかったからなけなしの最後の万札を叩いたんだが……重たいくらいだ。半分くらいにしときやよかつたよ。

などと今朝のあれこれを思い出しつつ、俺は右膝を少し触る。

昨日、かなめに撃たれた部分だが……鞆帯じんたいまでいつてるかもな。

手当てしたから、動けるには動けるのだが……

強襲科アサルトでのサポーターの巻き方がウロ覚えだったせいか、痛みが抜けないな。

チクシヨウ、余計に動きづらいから外しちまおう。

右裾を上げてサポーターを外して少し後に、

「お待たせ。珍しく花束なんて持ってどうしたの？」

待ち人が背後の芝生の方から近付いてきた。

「尾行は……聞くまでもないな」

霧はそこまで迂闊うくわんじゃないし、かなめをアリア達とは別の角度で警戒してくれてるしな。

本人も呆れた顔で、

「あのね、素人じゃないから分かってるよ。だから、尾行対策のセオリー通り広い場所に呼んだんでしょ？」

そう言ってくる。

まあ、聞くだけ野暮だったな。

実際に誰かと密談する時にはこうして、一度広い場所を集合場所にするといい。

周りに遮蔽物がなく身を潜める場所がなければ、尾行者を確認出来るからな。

そして、遠方からの監視を警戒して話をする時は建物の中へ行く。

ここまでが密談のセオリーだ。

やっぱり、霧で正解だな。

「まあな。流石、元パートナー」

「今は現チームだけだね」

「それもそうだな」

「で、重要な話の前に右足を診せて貰える？ さつきから右足を変に動かしてるし、意識がそつちを向いてるから気になるんだけど」

「お見通しだよなあ……」

そこまで気付かれるとは……

まあ、自分でも多少気にしてた自覚はあるが。

ここで変に意地を張っても仕方ないので右足を見せる。

それから霧は観察するように見て、軽く触ったりする。

それから一つ息を吐いて、

「サポーター外したでしょ？ 出してよ、巻き直すから」

と呆れたように言った。

そこまで分かる、よな。

医療知識は兄さんの話についてけてるぐらいだし。

渋々俺は外したサポーターを霧に渡すと、それから慣れた手つきで巻き直してくれ
た。

「はい、終わり。違和感は？」

ベンチから軽く立ち上がって、動かしてみれば。

自分で巻いたのより断然に動きやすく、違和感がなかった。
痛みがあるにはあるが、これならしばらくはもちそうだ。

「大丈夫みたいだ。自分でやるより大分マシになったな」

「ようやく本題に入れるね。で、やらかしたんでしょ？」

ズバツと聞いてきやがる。

俺はつい誤魔化した。

「何でやらかした前提なんだよ」

「え、違うの？ 膝を撃たれたみたいな打撲してるくせに？」

その一言で詰みです。

撃たれた理由の言い訳が一つも思い浮かばない。

というか、誤魔化しきれぬ予感がしない。

「すみません、そのとおりです」

なので素直に認めざるを得ない。

こいつ、変に意地を張ろうとすると見捨てるからな。

それから霧は切り替えて本題に入ってきた。

「で、私を呼び出した理由は？ その花束と関係あり？」

「まあな、ただ適当に話せる内容じゃないんだ。場所を移そう」

俺は花束を持ったまま周囲を見渡し、芝生の先の白いチャペルが目についた。

あれは新しく建てられた、別館のチャペルだ。

流石のかなめも神聖な場所を襲撃したりしないだろう。

「あの教会？」「その教会だ」

奇しくも霧も同じ考えだったらしく、言葉が被る。

そして、お互いに少し笑う。

そのまま俺達はチャペルへと向かう。

チャペルは教会と同じように一般開放されているらしく、中には誰もいない。

天窓から覗く光が白い壁を反射し、明るく、暖かい。不思議な空間だ。

それから霧は、

「私には縁遠いと思ってたんだけどね」

どこか遠いものを見る感じで語った。

「なにがだよ？」

「いや、教会に入ることなんてないと思つてたつて話」

「その、俺にはよく分からんが……女子つて教会とか憧れるものじゃないのか？」
「普通はね。私は家族のことがあるし、それにあんまり興味もないんだよね」

相変わらず、家族が好きだな。

いや、良いことだと思う。

それにこれからする話も『家族』に関する話だしな。

きつと霧なら分かつてくれる。

ただ下手に追及されると困るから、少し押し気味で行こう。

自分でも無理のある作戦だとは思ふ。

だが、あのかなめの事を考えると一人の方が危険だ。

最早、多少の貸し借りなどと言つてられない。

理子で言うところのバッドエンドを回避するには、致し方ないんだ。

「それで重大な話つてなに？ 単刀直入にお願いね」

教会の奥、神父が立つ台の前で俺に向き合つた霧が腰に手を当てて言う。

大丈夫だ、霧。俺も単刀直入に言うつもりだよ。

「ああ、そうだな」

花束を使うのはここだ！

「——霧。遠山 霧になつてくれ」

俺は依頼料金であるバラの花束を差し出して、単刀直入に伝えた。

そして、その言葉と同時に教会の鐘が。

リーンゴーン……リン、ゴーン……

と、鳴り始めた。

時報だろうか、ともかくこれで会話の内容は聞かれなくてすみそうだ。

聞かれたとしても鐘の音が誤魔化してくれるだろう。

「……………え？」

霧はというと、いかにも予想外と言った感じだ。

珍しいな、お前がそんな豆鉄砲を喰らったような顔をするなんて。

なんて珍しがってる場合じゃない、俺もここで引き下がる訳にはいかないんだ。

俺の安全の為に、ここで霧を押しきるしかない。

真剣になるに決まってる。

霧はその日本人らしい黒目をパチクリさせて、手を落ち着かない感じで微妙に動かし

てる。

「……………あー……………キンジ、説明して貰える？ いきなり遠山 霧になつてって言われても。

流石の私も……」

霧は困惑してるみたいだ。

チャンスだ、畳み掛けるしかない。

今回ばかりは理由を話せば受けて貰えないかもしれないからな。

「お前しか頼れないんだよ」

俺のその言葉に霧はさらに目を大きく見開いた。

それに気のせいかな言葉を詰まらせてるように見える。

いける、いけるぞ。

いつもならのらりくらりでボロを出させられるが、今回はそんな感じはなさそうだ。

だが霧は持ち前の察しの良さからか、

「それって家族になつて欲しいってこと、だよな？」

とカウンターをしてきた。

やっぱり分かるか。

霧はテープレコーダーを聞いてたんだ、抜け道に気付いてもおかしくはない。

「ああ、そうだ」

ここは素直に認めるしかないだろう。

霧は胸に手をやって俯く。

呆れるよな、そりや。

俺ですら無理があると思うほどだ。

アリアのゴリ押し気味な作戦を笑えないな。

霧はあまりのシヨックか、少しふらふらし始めた。

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃないよ……いきなり、すぎるよ」

だよな。

だが、お前以外にこの依頼を達成出来るヤツがない。

「突然過ぎたよな……この花束じゃ足りないのも分かっている。だけど、今の俺に出来る

精一杯なんだ」

俺のなけなしの依頼料だからな。

あとはいつもの貸しにするしかない。

命には代えられん。

それから霧は、いつもより少しだけ熱っぽい息を吐いて、

「うん……分かった。いいよ、家族になっても」

何故か少しだけ赤い顔を上げた。

その少し目を細めた笑顔は不覚にも妖しさと恐ろしさを同時に持っていて、一番魅力

的に見えた。

しかし、何だろうな……この寒気は。

霧の笑顔はいつも見てる筈なのに、どうしてか胸騒ぎがする。

安心感の裏返しか？

「安心したよ。本当にありがとう」

「お礼なんていいよ、家族……なんだし」

霧は俺から花束を受け取ると、静かに匂いを嗅ぎ始める。

それから霧は、ふふ、と少しだけ嬉しそうに微笑んだ。

……花束がそんなに嬉しいのか。

ジャンヌもたまには役に立つな。

しかし、珍しい霧だらけだったな……

驚き顔もそうだし、いつもは楽しそうな笑顔しかしらない霧が嬉しそうな顔をするなんて。

「それで？ 私はどうすればいいの？ 随分前にお姉ちゃんって呼んでもいい、みたい

な話をしてたし……それでもいいけど」

「ああ、その話なんだが……」

内容をどう話したのか。

俺が思案してる間に霧は花束を抱えながら、アドバイスをしてくる。

「簡単に言えば、かなめちゃんから守って欲しいでしょ？ なら簡単だよ」

「そうなのか？ 俺としてはお前がいてくれるのが安全策だと思うんだが……」

「うん、簡単。キンジがこう言えば良いんだよ」お前なんか妹じゃない”って”

それは何度か言った気がするが、どうもそれは気が進まない。

っていうか、霧……結構な辛口だな。

「案外、拒絶の言葉って傷付くもんだよ。特にキンジみたいに普段はキツイ言葉を使わない人の言葉はね」

まあ、それは何となく分かる気がする。

「だからさ、○○は心を鬼にして拒絶しちゃいなよ。私も一緒に手伝うよ。せつかくの情報源だけど、命の危険があるなら仕方ないよね？」

時に情報は命より重いつて話だが、命の危機以上のものをかなめから感じたしな。

確かにこれは、考えどころかもしれない。

しかし、俺が拒絶したらかなめが暴走する可能性が大きい。

俺を理由にアリア達を殺そうとするからな。

危険かもしれないが、俺が結局はストッパーなんだよな……

今更ながら会議に遅れなければよかったよ、本当に。

「いや、流石にそれはやめておこう。俺が傍にいなかったら逆に何をやらかすか分からないしな」

「邪魔なら消せば良いのに」

「……あの……霧さん？」

思わず敬語になる。

今、さらっと物騒な事を聞いたような。

「……なんてね、冗談だよ。いきなり過ぎて驚いた？」

霧はいつもみたいに笑顔だ。

相変わらずあれこれ驚かせにきやがる。

「流石の私も、かなめちゃん相手に正面で戦える気がしないよ。って考えると、キンジのプランでしばらく様子を見るしかないね」

「やっぱりそうなるよな……」

「問題はかなめちゃん、だね。認めるかな？」

「そこは多分、大丈夫だとは思う、が……」

何度も思うが、ゴリ押しな設定だしな。

しかし、本当に霧に頼んでよかった。

話が早くて助かる。

他の連中だところは上手くいかないからな。

詳細を話す前に暴走したり、引つ掻き回したりするし。

主にアリアと理子だが。

「取り敢えず……私が行くまで生きててよ」

霧はそのまま準備があると、バラを持って微笑みながら去っていった。

まあ、かなめ相手だしな……それなりに武装とか着替えを持ってくるつもりだろう。

霧は俺の部屋に私物を置いてないからな。

まあ、女物は俺にとって爆弾みたいなものだからそこら辺配慮して貰ってるのはありがたい。

さて、あんまり遅いと怪しまれそうだし……腹を括って部屋に戻るか。

……そもそも、何で自分の部屋に戻るのに覚悟がいるんだろうな？

◆ ◆ ◆

……リリヤ、上手くやってるかな？

そんな心配をするりこりんではあるが、それとは別にこつちの問題もある。

そう、ヒルダだ。

「それで？ 高貴な私をどうするつもり——」

「虚勢張るのやめたら？」

「虚勢なんかじゃ……」

「あ、ジャツク」

「ゴメンなさいゴメンなさいゴメンなさいもう二度とあなたの所有物を取りません二度と触れませんからお願ひ赦して」

あー……キャラ崩壊もいいところだよ。

暗闇の隅っこに隠れるコウモリキャラが定着してるじゃん。

実際に影の中に沈んで隠れてるし。

一応、比率的に人格は8割取り戻した感じ。

ただ、2割はトラウマで歪んだ。

最初は幼児退行気味だったしね。

3日でマジで何したの、お姉ちゃん……

そう何度も考えずにいられなかった。

考えるだけで聞く勇氣なんてある訳ない。

ともかく、お姉ちゃんが絡まなければ私の知ってるヒルダには戻ってきてる。

「ハイハイ、悪かったよ。理子の冗談だってば」

「……本当にしようね？」

影の中から顔だけ覗かせてヒルダが聞いてくる。

お姉ちゃんの一件以来、サデイスティック成分が抜けてきてる……

「それで、私に何の用かしら？ もうお前と関わるのはイヤなだけけれど」

言いながらヒルダはソファアーに脚を組んで座る。

「面倒見たの誰だと思ってるの？」

「まあ、それには感謝してるわ。それで、さつきも聞いたけど高貴な私をどうするつもりでここに来たのかしら、理子？」

「正直、気が進まないけど……家族になって欲しいんだよ。その為に面倒を見たんだしね」

わざわざホテルの一室を借りてまで同居して、怪しまれないように夾竹桃こと夾ちやんの手も少し借りながら、学校へ行って、戻って面倒を見る。

その繰り返しの日々。

そこまで日にち経ってないけど。

「家族？ この高貴な私に対してお前が対等だとも？」

分かっただけでいいけど……人格戻ったら流石にウザいね。

あたしは仕方なくソファアーから立ち上がる。

「いいよくだ。理子が家族にしなかつたらヒルダはそのまま永遠に解体人形にされるだけだろうし、ジャックからしてみればオモチャが増える認識程度なんだから。それはど

うかと思つて何とかしようと思つたのに、理子の親切心は余計なお世話だったね。さようならヒルダ、今度は串刺しのままバーベキューにならないことを祈るよ」

「ちよつと待つて下さらない？ 私は別に実際に釣り合いが取れないとは言つてないわよ。」

「素直じゃないのが嫌いな人が多いからね、あたしの家族。あーあ、残念だなく。今なら仲良く出来そうなのに」

「そこまで言つたところでチラリとヒルダを見ると、背中の小さなコウモリの羽をパタパタさせてる。」

犬の尻尾的な何かにしか見えない。

面倒を見たのは良いけど……変になつかれちゃつたな。

「ま、まあ……お前がそこまで言うのなら特別に家族とやらになつてやつてもいいわ。それに人間ごときに貸しがあるのも癪しやくだし。ただ、アレの話は別よ」

ヒルダの言うアレっていうのは、あたしの血の事……

ヒルダはあたしと同じ血液型で、好みでもあるらしい。

それで精神崩壊してた最初の時は安定剤みたいにあたしの血を与えてたんだけど

……

思つたよりも依存してしまつたみたい。

デザートみたいに要求してくるのは勘弁して欲しいんだけど。

最近は貧血気味だし。

でも理不尽な程に吸われる訳ではないし、問題はないかな……今のところ。

「いいよ、別にそれぐらいなら」

「ええ、分かったわ。あとーっだけ誤解して欲しくないから言っておくけど、私わたくしはお父様みたいに契約を違える程に不誠実ではないわよ。あの時の言葉は全て真実。それだけは理解して貰いたいわ」

などとヒルダは真つ直ぐに言ってくる。

お姉ちゃんを殺した相手だから、ただ利用するだけのために引き込むつもりだったけど……あたしも甘いよね……

別に同情とかじゃなくて非情になりきれない。

「その信用を得るのはこれからだね。それじゃ、あたしは戻るよ」

それだけ言ってあたしはホテルを離れる。

ヒルダはお姉ちゃんの正体に気付いてるし、引き込むのは悪い手ではないはず。

そんなことを考えながら帰っていると、まさかのお姉ちゃんを歩道で発見。

バラの花束を胸に抱えて、いつもと何やら雰囲気が違う。

楽しそう、っていう感じじゃない。

いつも見てきたから楽しそうかそうじゃないかの区別は出来る。だから……何だろう……？ 嬉しそう、に見える気がする。

なんとなくだけど。

交差点で合流できそうだね。

お姉ちゃんの進行方向の横断歩道の信号が赤色になって、あたしの方が青になる。

そうして信号を渡ってお姉ちゃんに合流。

「キーちゃん、こんなところで会うなんて奇遇だね」

「ん？ 理子、いつの間に隣にいたの？」

……あれ？ 何か今の違和感が……

いつもはお姉ちゃん、知り合いが近付く前に気付くのに……今のはあたしが隣に行くまで気付いてなかった？

思わず聞いてみる。

「理子に気付いてなかったの？」

「まあ、恥ずかしながらね」

「珍しいね、キーちゃんが周りに気付かないなんて」

「うん、自分でも思ったより浮かれてるのかもね」

少しだけ照れ臭そうに笑った。

うわーお、お姉ちゃんの照れ笑いとかレアな表情ゲット。

しかし、浮かれてる？

信号が青になって、横断歩道を渡りながらあたしは何気なく聞く。

「何か良いことでもあったの？」

「キンジがね、”家族”になってくれて言ってくれたんだよ」

と、お姉ちゃんは弾んだ声で言う。

へー、キンジがね……

……………。

……はい？

何かとんでもない文章をしれつと聞いた気がするんだけど……貧血気味で疲れてるのかな？

「ねえ、お姉ちゃん……誰が家族になってくれたって？」

「キンジだけど？」

「誰を？」

「私を」

「お姉ちゃんを？」

「そうだよ？」

………。

思考放棄………したいなあ………

もう帰って寝たい。

でも、それでも聞きたいことはある。

「何でそうなったの？」

「かなめちゃんが恐ろしい子だつて気付いたんでしょ。それで私に助けを求めてきたんじゃないかな？」

「なんだ………そういうことね」

安心したようなそうでないような。

恋する前に家族とか順序が逆だしね。

「まあ、でもキンジの誘いだし………熱烈に告白されちゃったから………仕方ないよね」

あれ？ お姉ちゃんの様子が………

なに、その表情。

頬を染めてバラに少しだけ顔を埋もれさせちゃつて。

何か理子の方がドキリとしちゃうんだけど。

「それじゃあ、私は用事があるから先に帰るね」

そう言つてお姉ちゃんは歩いてるあたしを置いてトタトタと小走りで去つていった。

完全にこれって、まあそういうこと……だよな？

勘違いかと途中で思ったけど、どうもそうではないらしい。

「あー……」

思わず頭を軽く抱える。

素直に喜んでいいのやら……

これで少しは衝動とかマシになるといいけど。

それとファミキチ（〇イ）なお姉ちゃんだから、なんとなく嫌な予感がするんだよね

……

◆

◆

◆

バラを部屋に飾って、私は準備をする。

このまま枯れさせたくはないし、ドライフラワーの作り方でも学んでおこう。

それとかなめは私を排除するつもりだろうし、先手は打っておかないと。

私は家族で、向こうは自称妹。

家族じゃないならキングジの部屋にいる資格はないよねえ？

まあ、せめて人としては殺してあげよう。

その前にリリヤだね。

理子の件の落とし前はつけたいだろうし、リリヤが失敗したら私が機会を見て殺ろ

う。

なので、シンプルな内容を伝えるためにリリヤに電話する。

すぐに電話は繋がった。

『……なに？』

「ああ、リリヤかい。機会があつたらジーフオース、殺していいよ」

軽く声を男性に変えてゴーサイン。

『……分かった』

リリヤは何の疑問もなく承諾してくれた。

そして通話は切れる。

んー、楽しみだね。

久々にテンションが上がってきたよ。

93:Welcome to the family

……。

……………。

……………。

あたしは、やっぱり欠陥品。

あたしとお兄ちゃんエレクトロニックで相互に性的興奮によりHSSで強化されるアルカナム・デユオ双極兄妹は机上の

空論。

HSSで強くなるのはお兄ちゃんだけ……女であるあたしは……弱くなるっ。

何で、どうして……

ジーサードの力にもなりたかった。

それすらも叶わないのッ。

……………。

……もう、どうでもいい。

でも、せめて……あの女白野だけは排除しないと。

あたしの邪魔ばかりしてくるし、島 麒麟と火野 ライカを仲違いさせるプランも実際に妨害された。

それにあいつはイヤな感じがする。

危険を証明する証拠はない。

ただ、あたしにはどうしても邪悪なものに見える。

お兄ちゃんの周りにいる女連中の中でも、何か異質に感じる。

どうしてかは分からない。

非合理的で感情的な判断。

お兄ちゃんに本気で嫌われるかもしれない。

お兄ちゃんはあたしのことを妹だなんて思っていないだろうけど、それでもあたしは家族だっと思ってる。

だから、せめて守らなきゃ。

もう、アメリカらしく強引に行く。

あたしの邪魔になる間宮 あかりのグループを八つ当たりで排除して、早々に学校を支配して白野を孤立させて排除する。

当初の目的が果たせなかった以上、周りのことなんて知ったことか。

あたしは間宮の携帯をハックしてメールを送る。

仕返しのチャンス、そう銘打って挑発する。

何もかもが気に入くない。

あいつもあいつも……あたしの邪魔をした連中の全てが。

回りくどい工作もおしまい。

ここからはあたしが一方的に攻撃してゲームセット。

本気で潰す、けど全力は出さない。

あいつら程度に手の内を全部見せるわけにもいかないから。

準備を整えて、指定した羽田空港のターミナルに着いた。

そして、荷物を受け取るバゲージクレームに――

「一人で何しに来た、夾竹桃」

座っている夾竹桃を見た。

「女子同士の友情を毒する者を毒牙に掛けにきたのよ」

「友情？ そんな幻想のために戦うの？」

「それを愛でるのが生き甲斐だから」

淡々と答える夾竹桃。

そんなもののために首を突っ込んでくるなんて。

それに元イ・ウーだろうが、お前じゃ相手にならない。

その事をお前は何となく分かっているはず。

ボードを入れるようなケースから先端ノイエー、エンジエー、エツジ科学刀を一本出して切っ先を向けて構える。

「人と人の間には支配と被支配の関係しか成り立たない。自分より強い者に刃向かうの

は——非合理的」

「——毒を以て毒を制す。イ・ウーダイイオ・ノマド研鑽派残党『魔宮の蠍』まきゆう さそりがお相手するわ」

スカートの端を上げて挨拶をするカーテシーをする。

ひざまずくつもりはないクセに。

まあいい、八つ当たりの相手にはちようどいい肩慣らし。

勝敗は見えてる。

約束の0時。

F滑走路のトラックの上であたしは待つ。

やつぱり相手にならなかった。

ミニガンを持つてくるとは思わなかったけど……毒を使う虫が毒を使わないならた

だの虫けら。

ミニガンなんて室内で使うなんて非合理的。

取り回しがきかないし。

ほぼ近距離戦闘するスタイルのあたしに遠距離を挑む選択は合理的だったけど、相手はそれ以上に自分の持ち味を殺していた。

死人に口なし。

終わつた以上はそれ以外に何も無い。

——来たか。

見たところ一人だけだ。

「あたし、何人でも連れて来ていいって書いたけど？」

間宮 あかりは振り返りトラックの上にいるあたしを見上げる。

あたしは眼中になく、あかりを視界の端に留めるだけで遠くを見つめる。

「そつちこそ……大好きなお兄ちゃんと一緒じゃなくていいの？」

……思い出させるな。

「フラれたとこだよ、バーカ」

聞こえない程度に独り、呟く。

そして哀しみと怒りが込み上げる。

ああ、そうだ……あたしはお前が嫌いだ。

お前みたいにかくなクセに、何も分からないクセに人から好かれる人間が。

「あたしは米軍アメリカの施設で育った。お兄ちゃんアキラと組んで最強の兄妹になる計画だった。……でも、それが……うまくいかなかった」

もう、あたしの感情を合理的に片付けるには壊すしかない。

お前も……白野も。

「だからもうヤケ。暴力も解禁。八つ当たりさせてよ、こんなザコでもいいから」
剣の腹で”それ”を足元に寄せて、蹴り落とす。

あかりの上に落ちて、そのまま”冷たくなった夾竹桃”の下敷きに。

あかりは夾竹桃を手で触れてどういふ状態か分かっただろう。

お前もそれと同じようにしてやる。

「あたしの剣を避けて遠距離を挑んできたけど、それは選択ミス。毒を使わない蠍は——
——ただの虫けら」

レシプロが一機、あたしの頭上を飛び抜ける。

見上げるあかりは、何かを待ってる感じだ。

あたしの頭上を見上げて……

分かりやすい。

あたしは何かが近付く前に跳び上がる。

そして同時にあたしのいた場所が抉れた。

やっぱり、仲間がいたか。

着地して振り返れば褐色で短髪のボーイッシュなヤツがあたしに迫ってくる。

武装は右手のガントレットのみ。

剣の間合いに入ってくるつもり？

そのままあたしは横薙ぎで迎え斬るッ。

「——ッ!?!」

「科学剣破れたりッ」

肘と膝で白刃取り!?

そのままあたしの剣を弾いたかと思うと、跳び上がり回転。

手が切れる。

スカートにカミソリみたいな刃が付いてるのかッ。

怯んだところであかりがあたしに向けて背後から撃ってくる。

すぐに磁気推進織盾^{P.フエアィバィ}2機を背後に回り込ませて防ぐ。

そこそこやるヤツみただけど……

ここからはあたしも本気だ。

「磁気推進織盾^{P.フエアィバィ}はあまりの扱いの難しさに不良品とされた次世代UAV」

次世代のヘッドマウントディスプレイ『テラナ』とヘッドセットみたいな

磁気推進織盾の制御装置を着ける。

「計画通りに運用できなかった兵器も不良品……グレてやる」

今日は兵器らしく無慈悲にただ障害を排除する。

あたしは褐色の女に目を向ける。

「お前、あかりの親戚あたりか？　なんとなく似てるよ。頭の悪そうなところとかさ。

……今日はあの時みたいに機嫌が良いわけじゃない……お前を片付けたら別のヤツを片付ける仕事があるんだ」

「また誰かを傷つけるつもり?!」

「これから死人になるヤツに答える必要はない。さあ……気を付けな」

スカートに潜ませた磁気推進織盾を出す。

あたしが同時に操れる限界の7機。

背中から伸びる手のように切っ先を2人に向ける。

「あかり!」

「うんッ!」

あかりと褐色の子がこっちに駆け出す。

タイミングをずらしての波状攻撃か？

馬鹿正直に正面から来るなんて、非合理的。

磁気推進繊維盾の一本を迎撃に出す。

そして、あかりは回転しながらその手を槍のように突き出した。

何が狙いか分からないけど、表情からして目論見が外れたのか強張る。

すぐにその手を巻き付け、投げ飛ばす。

「わあっ!?!」

間抜けな声を上げてあかりはそのまま空中へ。

褐色の子がすぐにブレーキを掛けて、あかりの飛ぶ直線上に方向を変える。

そして正面であかりを受け止めて勢いを殺せず、タラップ車に背中を打ち付けた。

打ち所が悪かったのか、気絶した。

「ひか……ちゃん!」

あかりは褐色の子のおそらく名前を叫んでる。

だが、あたしにはそんなの関係ない。

「触れなば斬れん」

剣を構えて、磁気推進繊維盾の切っ先を全て2人に向ける。

8本の剣でお前らを貫く。

「謎の転校生は、学校中に友達を作り強固な軍事基盤を築きました。友達になれなかった主人公ちゃんはケンカの末に命を落としました」

それでゲームセット。

お前らに延長戦なんてない。

バラバララッ！

あかりは、突然に滑走路の地面に埋め込まれた誘導灯を撃つて周りを暗くした。

どういふつもりだ？

さてはこの単分子^ツ振動刀^{ニツ}の発光を目印に撃つてくるつもりか？

それは非合理的だぞ、あかり。

あたしのこのヴァイザー……テラナには暗視機能もある。

そんな小細工は無意味だ。

いや、違う。

……銃を収めた？

そしてあいつはそのままタラップ車の階段を上がる。

「かなめちゃん」

……かなめちゃん？

「何？」

「かなめちゃんは『友達』の意味を間違えて覚えてる。どこかで悪い大人が嘘を教えただと思う」

髪留めを外しながら階段を上がって、何をするつもりだ？

「二つ約束して。この戦い、あたしがもし勝ったら……やりなおそう」
「？」

どういう意味だ？

「転入してきたかなめちゃんみんなと本当の友達になるの。友達ってどういうものか分からなければ、まずは……あたしとなろう」

階段を上がりきり、柔らかい顔であたしに提案をしてくる。

非合理的。

「友達？ 今こうして戦ってるのに？」

あたしはお前らを殺そうと思ってるのに……

どうして、そんなことが言える。

「うん、友達って……ぶつかり合う事もあるものだから」

……。

お人好し、だな。

ますます気に入らない。

「……いいよ。どうせあかりが勝つことはないからね」

剣を構えて、再び対峙する。

だけど、もし本当にそんなことが叶うなら。

あたしは、兵器じゃなくて済むのかな……

そんな事をつい考えて――

「……危ないッ!」

突然に横から声と共に衝撃が走る。

さつき気絶してた筈の褐色の子があたしを突き飛ばした。

同時にあたしがいた場所に走る、一筋の閃光。

それは、延長線にあるあかりのタラップ車を貫いた。

今のは……

そして、テラナが異常な熱量を観測した。

さつきの閃光の熱で、タラップ車の燃料に引火しかけている。

「あかりッ、それから降りろ!」

「えっ?」

思わず叫んだけど、間に合わない。

すぐに爆炎と轟音。

あかりは状況が分からないままに、爆発に巻き込まれた。

そのまま飛んでいく。

「きゃああつ?!」

「磁気推進織盾ッ!」

すぐにあたしは磁気推進織盾を操作して、ネットように交わらせて地面に落ちる前にあかりを確保した。

「あ、ありがとう。かなめちゃん」

つい助けてしまった。

爆発の真下だったのに目立った外傷はない。

しかし、こんな時にお礼なんて……変な気分。

それよりも今のは、電磁投射砲?

米軍でも実験段階でしかないはずなのに……

あたしの計画の失敗が知られたにしても早すぎる。

「かなめちゃん、今のは」

「……あたしにも分からない」

あかりの疑問に正直に答える。

色々と水を差された。

今ので終わり?

いや、違う。

テラナにいくつもの反応が、これは……ドローン？

飛行ドローンがレールガンが飛んできた方向の空からくる。

20、30……?!

反応が多いッ。

しかも速い！

イヤな予感がして、磁気推進織盾^{P:フアイバI}で先行して飛んでくる一機を迎撃すると——
ドオオン！

車一台は壊せそうな爆発が起きる。

自爆兵器……あれが、全部ッ。

あたしの磁気推進織盾^{P:フアイバI}は銃弾は防げるけど、爆発物相手だどこまでもつか……

何者の襲撃か分からないけど、今はあかりを排除するとか言ってられる状況ではなく
なった。

「あかり、その褐色も、勝負はお預けた」

吐き捨てるように言って、あたしは駆ける。

一体、誰だッ。

標的は確実にあたし。

ターミナル方面、遠距離から狙撃してきた。

別に自爆ドローンを利用してあかり達を排除する事も出来る。

でも、お兄ちゃんと約束した。

卑怯なことはしないって。

奇襲は合理的だけど……その卑怯者を片付けて、それからあかりと決着をつける。

自爆がある以上、斬るのは無理。

あの数相手に近付けるかは分からない。

でも、水を差されてあたしは余計にイラついてる。

だから近付いて確実に始末する。

距離は1キロ近い、だけど関係ない。

暗視装置でドローンはハッキリ見える。

散開した……9時と3時、おまけに背後にも回り込んでる。

四方からの攻撃。

あれだけの数を操るには、事前のプログラムがあるはず。

つまり単純な動きしか出来ない。

あたしの磁気推進繊維P.ファイバ盾バみたいに複雑には動けない。

さつき迎撃したときも避けようとしなかった。

狙撃を考えて左右に避けれるように道を確保する。

左に2機、右に2機、前方に2機、あたし自身を守るために1機は護衛。それぞれUAVを飛ばす。

演算で少し頭が痛くなるけど、そうも言ってられない。

左右を優先的に破壊。

糸を縫うように、ドローンを破壊していく。

両脇で轟音と閃光が弾ける。

遅れて前方でも、爆発。

多少の爆風はあるけど動けなくはない。

だけど――

『6、5、no signal』

テナナがUAVからの信号が無くなったのを知らせる。

やっぱり、無傷とはいかないッ。

750メートル、距離はまだある。

だけどドローンに指令を送ってるだろう電波を捉えた。

確実にいるッ。

『1、7、no signal』

あと500……もう少し！

『3、no signal』

数も減った。

ドローンは背後の残り数機だけ。

2機の磁気推進織盾^{P.フアイバ}で対処出来る。

……いや、テラナにまた反応が。

ドローンが増えている。

前方、数は15。

Shit……

用意周到みたいだな。

確実に仕留めに來てる。

打開は、無理。

近づく前に自爆兵器の物量で押しきられる。

残り2機の磁気推進織盾^{P.フアイバ}じゃあもたない。

背後からも近付いてる。

ここまで……なの？

まだ、あたし……何も成せてないのに。

こんなところで——終わる？

「諦めないでッ！」

あかり………？

「ひかちゃん！」

「当初の目的とは違うけど、行くぞあかり！」

褐色の子が足場を組んで、それからあかりは飛び上がった。

そして、どこからかサーチライトが照らされて空中のあかりに光が……集まっている。

そして、輝き出す。

眩しいッ………！

テラナを思わず外して見上げれば、ドローン群の中央をあかりは飛び抜けた。

同時に何か電磁波……パルス的な何かを放出する。

完全に通り抜けた瞬間、ドローンはショートを起こしたのか一気に爆発した。

同時に何かの発砲音が聞こえたかと思うと、背後でも爆発。

一体、何が。

「あかりッ」

あたしが呆然としてる間に、褐色の子が落ちてきたあかりを滑るように受け止める。

あたしも思わず傍に駆け寄る。

「あはは………名付けるなら『鷹落』、かな」

「土壇場で新技とはね。流石だよ、あかり」

褐色の子に受け止められて、あかりは少しだけ笑った。

見たところさっきの技の影響か、消耗してるのが分かる。

「どうして、あたしを助けた……？」

何もかもがメチャクチャ。

あたしはお前達の敵で、お前もあたしを敵視してた筈なのに。

「約束、だからね。まだ決着はついてないから」

あかりは笑顔でそんな事を行ってくる。

……とことんバカだな。

「必ず戻る」

「うん、待ってるよ……かなめちゃん。あ、でも相手が誰でも傷つけちゃダメだからね、

武偵なんだから」

それに対してあたしは答えず、^P磁気推進織盾^イを使って建物の屋上を目指す。

反応はここから出た。

近くにいるはず。

剣を構えて、辺りを警戒。

^P磁気推進織盾^イも周囲に待機させて迎撃の構えを取る。

銃撃が暗闇から、来たッ。

すぐに磁気推進繊維盾^{P.F.A.バ}で防ぐけど、2機とも何故か地面に落ちた。

バチバチと電気的な音が鳴ってる。

磁気を乱された……テザー銃的な何かを撃つて来たらしい……

本当に用意が良いね。

ともかく、これで盾を失った。

ここまでの装備……先端科学^{ノイエ・エンジエ}なのは間違いない。

機関があたしを始末しに来たにしては早すぎる。

あたしの計画がダメだったのは今夜の話。

サードすら、まだ知らない。

誰だ？

考えてる直後、背後から気配。

大きく横に斬りながら、振り返る。

相手はしやがんで回避した。

そのまま人影に回し蹴り。

手応え的にガードはされたけど、相手が見えた。

黒いマスクをして、黒のジャケットみたいなのを着てる。

銀のような白い髪。

あたしよりも一回り大きい女だ。

見たことない相手。

「何者だ……お前？」

剣を構えながら聞くけど、

「……………」

何も答えない。

機械的にこつちを見てるだけ。

いかにも刺客、つて感じ。

こつちは剣一本。相手は用意周到。

ここであたしを逃してはくれないだろう。

相手が動いた。

銃を抜いて、こつちを狙ってくる。

銃はMP443——ロシアの銃を使うのは大体コミユニストの影響のある国だ。

テラナに銃口の向きから予測される弾道が表示される。

剣しかないけど、それなりに刀身と幅があるんだ。

謎の女の手で予告もなく放たれる銃弾。だけど、剣の腹で普通に弾ける。

撃ちながら相手は手榴弾を左手に持つ。

有効なやり方で容赦がないッ！

そして、投げた。

そのままガードしながらすぐに角に隠れるように横に回避。

近くの空調機を斜め切りにして遮蔽物にする。

充分に体が隠れる事が出来るサイズ。

それを盾にしてしやがむと、すぐに爆発する。

破片と爆風からは守れたけど、きつとあれは注意を引くためだけ。

すぐに辺りを警戒すれば、上にいるッ。

頭上の一段高い段差から飛び降りると同時に回避すれば、機械音と共にあたしのいた場所に左腕が振り下ろされる。

……そいつが降り下ろした左手をあげると、硬い石の屋上にヒビが入ってる。

ただの特殊な訓練を受けた”人間”ってだけじゃない。

飛び道具がある以上は向こうが有利。

今は距離を取る。

すぐに転進して、角を曲がって空調機の配電盤、取っ手がある扉を開いて蝶ちようつがい番の部分
を斬る。

簡易的な盾。

銃弾は防げなくても貫通力は抑えられるし、格闘でもある程度は防げる。使えるものは使う。合理的に。

それからあたしも有利を取るために室外機を足場に、高所へと上がる。相手も同じ事を考えてたのか鉢合わせになった。

そして、左の拳が振り下ろされる。

扉の盾で、防ぐ。

ガイン、そんな甲高い金属の音と共になんとか防御はした。

だけど、押しきられるッ。

このパワー……人の力じゃない。

油圧を相手にしてみたい。

そのまま上から徐々に押し潰されそうになる。

膝を突いたら……終わるッ……

苦し紛れに剣を振るって、何とか距離を取らせる。

そして、体勢を立て直される前にフリスビーのように扉を、投げるッ！

相手が回避したらその先に剣を叩き込む。

同時にあたしは間合いを詰めるために駆けた。

だが刺客は回避せず、左手一つで、止めた。
結構なスピードがあった……けどそれがいきなり止まった。
相手があたしと同じようにそれを投げ返してくる。

速いッ。

単分子振動刀^ツを正面から振り下ろして両断。

両断された扉は地面に落ちて音をたてて、さらに後ろへ、そして下へ落ちた。
さっきのやつがいない。

今の気が逸れた一瞬で消えた。

また奇襲？

……。

……いや、どうやら撤退したみたいだ。

遠くからサイレンの音が聞こえる。

あれだけ爆発音がすれば警備も気付くだろう。

見逃されたみたいで気に入らない。

でも、一先ずは退散するのが先決。

さっき磁気を乱されて動かなかった磁気推進織^{P: ャァイバ}盾も復旧してる。

長居は無用だね。

あかり達は、何とかするだろう。

あたしはアメリカの立場もあるから下手に見つかるとか、訳にもいかない。
磁気推進繊維P.F.A.イバ盾を使って屋上から降りる。

「礼は言わないからな」

そして、背後の建物の陰に隠れてる人物に語り掛ける。

「別に、そんなつもりで助けた訳じゃないから」

返答が来て、振り返れば死んだと思ってた夾竹桃がいた。

涼しい顔で煙を燻くゆらせてる。

「どうやった？ 確かに脈はなかったはずだけど」

「ふぐ毒から作った仮死薬よ。その飛ぶ剣には勝てなさそうだったから、死んだフリをしたの。もっとも……間宮から奪った技だからあの子達は気付いてただろうけど」

そういう小細工か。

後方の自爆ドローンが破壊されたのも、きつとコイツの仕業だ。

「あつそ、生きててよかったね。あたしは警備に見つかる前に退散するよ」

「あかりとの約束はどうするつもり？」

背中を向けたところで、夾竹桃は核心を突くように聞いてくる。

その問いの答えは、決まってる。

「……無理だよ」

あたしにどの道、未来はない。

使えない道具は棄てるのが人の常。

「守る気はあるのね」

爽竹桃に言われて、気付く。

それでも――

「知ってるんでしょう？ あたしは米軍アーミーに殺される」

「あなたは どうしたいの？」

「それは……」

あたしは、選びたい。

生き続けたい。

お兄ちゃんの傍にいたい。

たくさんやりたい事がある。

支配・被支配の関係じゃない、友達にも……

「かなめ。約束を果たしたいなら、生き続けなさい。あなたにはその権利と義務がある
と、私は思うわ」

生き続ける。

夾竹桃に言われたことは酷く魅力的で、でも同時に残酷だった。胸を打たれる言葉には違いない。

お互いに殺し、殺されのやりとりをしたばかりなのに。

まさか説教されるとはね。

非合理的な原因と結果だよ。

東の地平線へと視線を向けると夜明けが見える。

色々と思うところはああるけど、悪くない夜明け。

お兄ちゃんとかんな夜明けを迎えたいな。

あ白の女野は抜きにして、だけどね。

◆ ◆ ◆

キンジの部屋に行く準備をしてると、リリヤが部屋に入ってきた。

なんか、黒の防弾ジャケットに黒の鉄製マスクでいかにも刺客つて感じの格好をしてる。

うーん、様子を見る感じ……排除は出来なかったみたいだね。

「期待してたんだけどね」

「……ごめん」

「別に責めてる訳じゃないよ」

リリヤはしゅん、とした感じ。

まあ、私が解体する楽しみが残ったとも言えるし。

結果オーライって訳じゃないけど、問題はない。

「しばらく待機で、用があつたら連絡するよ。理子と学校生活を楽しんでね」

「……どうするの?」

「うん? かなめならいずれキンジの傍から消えて貰うよ。アメリカに排除されたって感じだね。人知れず消えるなら大して心の傷にならないでしょ」

荷物をまとめてこれで準備完了。

宿泊準備はバツチリ。

「気にしないでよ、リリヤ。お姉ちゃんにお任せってね」

それだけ言ってあたしは荷物を持ってリリヤの隣を通り抜ける。

私が一緒に住むことになって、かなめはどんな表情してくれるかな?

良い反応を期待してるよ。

◆ ◆ ◆

部屋に戻ってきて、すっかり陽は昇った。

ベランダに出て潮風を浴びる。

爽やかな潮の香り……

少し肌寒いけど、スツキリした風が頬を撫でる。

そこへカモメが一羽、ベランダに舞い降りてくる。

「朝から人の傍に来るなんて、物好きだね」

そう語り掛けると、カモメは返事をするように短く鳴いた。

——そうでもない。

そんな感じに言った気がする。

動物と会話できる訳じゃないけど、ニュアンスは何故か分かる。

驚いてるのか、警戒してるのか……その程度。

すると他のカモメも、次々とベランダに降りてくる。

確かに物好きはこの一羽だけじゃないらしい。

「おはよう、かなめ」

お兄ちゃんがベランダに来て、驚いて飛び立とうとするカモメを宥める。

「大丈夫、怖い人じゃないよ」

そう言うと、カモメ達は飛び立とうとした翼を畳んだ。

その様子に——

「お前、鳥と話せるのか?」

と、お兄ちゃんは話せること自体を変に思わず素直に聞いてきた。

「何となくだよ」

答えながら振り返って、朝日を背にお兄ちゃんを見る。

その顔は心配そうな色だった。

「落ち着いたか？」

「うん。お兄ちゃんは押しきられると断り切れない性格だと思ってたけど、しつかりしてたんだね」

「……何がだ？」

「実は、昨日の事、途中からほとんど覚えてないんだけど——お兄ちゃん、あたしに何もなかったみたいだから。自分の体を調べて……すぐ分かったよ」

そう、あたしは昨日のお兄ちゃんとHSSになろうとして……なった直後の出来事を覚えてない。

ただ、望んでない形で発現したのは分かった。

だからこそ憤いきどおつたし、ヤケにもなった。

それも今は落ち着いたけど。

「——ヒステリアモード時には、大脳皮質が二重人格みたいに使分けられることがある。程度は人によるみたいだけど、あたしはハッキリ分かれるタイプみたい」

それを言うとお兄ちゃんは何か思い当たるところがあるのか、考える表情をする。

お兄ちゃん、顔に結構出るから分かりやすいね。

あかりとの一件であたしは頭が冷えて……分かったことがある。

「……お兄ちゃん、ごめんね」

あたしは結局、本当の妹にはなれなかった。

目の前に見える母なる海からって訳じゃないけど、実際私は母親から生まれた訳じゃない。

ただ遺伝子を使つて創造されたまがい物。

「気持ち悪かったよね、きつと。あたしみたいなのが突然現れて——好き、好き、なんて言われたら」

HSSは確かに不発に終わった。

でもそれは、肉体的な面での話。

思考速度は確かに加速していた。

何かを見通せる予知に近い事象にまで。

それであたしは……お兄ちゃんのこととも考えると同時に、あの白野っていう女がやっぱり危険だつて事がなんとなく分かった。

屋上で話したときは危険な予感、程度だったけど……

HSSになった時にそれは危険が予測出来る程度にまで上がった。

どう危険かまではまだ正直分らない。

お兄ちゃんが白野を信頼していて、きっとあたしの話を聞いてくれないことも分かっている。

下手に動けばあたしは殺されるってことも。

そんな予測が、あの時には出来た。

……今考えることじゃないね。

「昨日、初めてHSSになつて……あの数十分で思考が何年分も進んだようになった。それでお兄ちゃんのことを考えてる内に分かったの。あたしは、お兄ちゃんにとっていない子だったんだなあ……って」

白野の言葉通り、あたしは周りの女を遠ざければ……自分だけを愛してくれると、思い込んでた。

あいつはあたしが無意識に思ってたことをそこまで見透かしてた。

それが何よりも……

「うん、あたしは間違ってた。恋愛なんてどうすればいいか分からなくて……自分だけを見てくれるには、他の女を排除すればいいと思ってた。でも、お兄ちゃんの心にはいつも誰かがいた」

「……かなめ」

「ねえ、お兄ちゃん。あたしは何のために生きればいいのか？　あたしは優秀な兵士になるために創られた。でも、結局は失敗作だった。サードの力になりたいとも思ってたのに、こんな……」

「生きる理由なんて、ただ生きたいから。それで充分だろ」

「それじゃあダメなんだよ！」

あたしが叫ぶと、カモメ達は驚いて飛び去っていく。

「お兄ちゃん、『ロスアラモス・エリート』って知ってる？」

「ああ、知ってる。俺の方でも少しは調べた。科学的な方法で育成された天才だろ？」

確か、人工天才ジュニオンとかいう……」

「それは表向きの名称だよ。ロスアラモスが作ろうとしたのは——人間兵器ヒューム・アモ……新しい、最終兵器の一つだよ」

「……最終兵器……?」

「超人的な戦闘力を持つ人間。1人で1個大隊を相手に出来るような人間を何人も敵国に送り付けて、破壊工作、要人暗殺を繰り返してその国を滅ぼす。土地をダメにするような戦略兵器はその国の生産能力を低下させるから、併合や管理下に置く際には非合理的だと思つて考えられたのがそんな生きた兵器。それが人工天才ジュニオンの実態だよ」

お兄ちゃんは軽く言葉を失つてる。

そんな目的で作られた人間なんて、気持ち悪いに決まってるよね。

「核軍縮や軍備費の切迫、政治的な煽りもあって、アメリカでは色んな新兵器の開発が盛んなんだよ。ロスアラモス・エリートはそんな新兵器の開発に関わる92ある研究機関の1つに過ぎないの」

虚空を蹴りながらあたしは続ける。

「あたしはその機関で遺伝子から造られた『G』ってシリーズのIV号……兵器、製品モノなの。物心ついた頃には、もうナイフを握らせられてた。戦争映画がお遊戯に思えるくらいのことでしたよ。それこそ物の性能テストをするみたいに、毎日、毎日……」

「そこから……逃げ出してきたのか」

「サードが逃がしてくれたんだよ。他の人工天才ジュニオンと一緒にね。逃げた人工天才は、開発に失敗した故障品ってことになって……所外で『破棄』か、連れ戻して『修理』する事になってる」

だから、私に未来はない。

夾竹桃に生き続けなさい、なんて言われたけど……それも叶いそうにない夢。

「サードを中心にあたし達は戦い続け、生きてきた。時には倒した相手がサードのカリスマに惹かれて仲間になる人もいたよ。あたしは開発中の素体だったから大して役には立たなかつたけど、HSSで強くなる可能性があったからサードはあたしを捨てな

かったの」

「HSS……ヒステリアモードか」

「そのHSSを使いこなせるようになって……役に立ちたかった。そうじゃないとあたしは無価値なまま。彼の下にはいられない、いてはいけない。それが、サードのルールだから」

「……」

「あたしはサードのことを知りすぎてる。だから、無価値だって分かったら……サードはあたしを殺す。そして……あたしはそれを受け入れるよ。あたしは自分より強い者には絶対逆らわない。それは、非合理的だからね」

「ジーサードは……ジオ品川で、武偵を気取ってたぞ。人を殺さないような話もしてた」
お兄ちゃんの言葉に、優しさがみえる。

それが嬉しくて小さく笑う。

同時に自嘲っぽくも続ける。

「——あたしは人間じゃないから。それに……サードに捨てられたら、あたしの力だけじゃアメリカの追跡者から逃げ切れない。きつと、捕まって『修理』される。いや、HSS目的で作られたから……それが弱くなるHSSなんて知られたら、『破棄』になるんじゃないかな」

「破棄、つて……さつきも言ってたが、それは……」

「殺されるんだよ。毒ガスか何かで安上がり」

「お、おい……」

お兄ちゃんは、何とも言えない表情をした。

きつと、哀れんでいるんだろう。

なんとなく分かる。

「そんな顔しないで。これは運命だったんだよ」

お兄ちゃんを安心させるために、あたしは受け入れる覚悟があることを伝える。

どつちにしても終わりなんだって。

お兄ちゃんに近付けばおそらく白野に殺され……お兄ちゃんから離ればあたしは

サードに捨てられて廃棄される。

それでゲームセット。

逆転はない。

「かなめ」

お兄ちゃんがあたしの名前を呼んだ時に、不意に海に向けていた視線を戻す。

……ああ、いつものお兄ちゃんの目だ。

お兄ちゃんはそんなつもりないのかもしれないけど、いつもあたしを視てくれる。

「1人の“人間”として。」

「お前——俺に名前をもらった時、泣いて喜んでただろ。それは、自分が人間兵器じゃないって思ってたんじゃないのよ」

「思いたかつたんだよ。でも、過去は変えられない。植え付けられた価値は覆せないんだよ」

「過去じゃない。今話してるのはお前の未来の話だ！」

お兄ちゃんは真剣に怒ってくれてる。

あたしのために。

「過去だとか、自分の価値だとか……そんなことで人間の運命は決まらねえッ。そういうのを覆せるのが人間なんだ！ それに、お前は俺より運動神経もよくて頭もいいだろう……サードの力なんかなくなっちゃって——」

「人の扱いをされてないのに人権や国籍があると思う？ あたしに居場所なんてないんだよ」

「なら俺が認めてやるよ！ お前は、人間だッ！ それにな、兵器だなんて思ってるやつはそんな風に悩んだりしねえ！ 誰かに必要とされたいと思うのは人として当たり前なんだよ……」

それにな、とお兄ちゃんは続ける。

「運動神経とか、頭とか、色々と言ったが……あれはお世辞じゃない。本音だ」
お兄ちゃんの言葉にあたしは胸を打たれた。

サード以外にあたしの価値を認めてくれる人はいなかった。
それ以外はビジネスライクな関係で仕事上での信頼でしかない。

「……お前はサードがいないと生きられないみたいなことを言ってるけどな。そういうのは、依存っていうんだ。誰か頼る人間がいるのはいい、でもいずれは自立しなきゃいけない時が来る。それがお前にとっては今なんだ。きつと」

最後には優しげに諭すようにお兄ちゃんは言った。

それは同時に自分にも言い聞かせる感じだった。

「……お兄ちゃんの言うことは正しいよ。でも、あたしはこれからどうすればいいの？
もう、何も分からないよ……どこへいけばいいのかも、あたしが何なのかも」

あたしは、あたし自身が分からなくなった。

それがどうしようもなく悲しくて、不安や寂しさが溢れてくる。

それは、涙になって流れてきた。

思わず手で覆う。

見られたくなくて、現実を見たくなくて。

「俺は見捨てるなんて器用な事は出来ないらしいからな。だから、ここにいろよ。答え

が見つかるまで」

でもお兄ちゃんのその言葉であたしは、すぐに胸が熱くなった。

ああ……やっぱりお兄ちゃんは優しく暖かい人。

家族とは認めてくれないけど、それでも……あたしを人として見てくれる。

「お兄ちゃん——お兄ちゃん……！」

温もりが欲しくて、衝動的にお兄ちゃんに抱きつく。

今度は抵抗せずにあたしを受け入れてくれた。

大きくて、何かに包まれてる感じがする。

お兄ちゃんは困ってる感じだけど、それでも引き離そうとはしない。

「お、お前のヒステリアモードの事は、黙っておいてやるから。というか、そもそも俺はヒステリアモードのこと自体を隠してるんだ。だから、昨日の事は俺とお前だけの秘密だ」

何故か言葉を詰まらせながら、お兄ちゃんがそう言ってきて、嬉しくなる。

「お兄ちゃんと、あたしだけの、秘密」

お互いにしか知らない事があるっていうのは、とても甘美な響き。

それでいて、特別なんだって思える。

その事が嬉しくて、お兄ちゃんの胸に顔を埋めて思わず頷きながら、噛み締める。

そのまま抱きついたらままだいと、優しくぼん、ぼん、と撫でてくれた。

そんな風に優しくされたら、あたし……もつとお兄ちゃんを好きになっちゃう。

「……お兄ちゃんは、優しい人。お兄ちゃんだけは、あたしの存在を否定しないでくれる……あたし、あたし……」

見上げてお兄ちゃんの顔を覗き込めば、何でか少し顔が赤くなってるお兄ちゃんに釣られて――

……かあ……

と、あたしも顔が熱くなる。

ああ、ダメ……やっぱり抑えられない。

お兄ちゃんに対しての好きが、溢れてくる。

「――お兄ちゃん……」

「なんだ。ほら、離れて部屋で朝飯でも――」

「あたし――片思いだつて分かつてる。分かつてるけど、お願い。もう一度だけ、言わせて。もう一度だけ、させて?」

お兄ちゃん何かを言おうとしたけど、それを遮って、思いのままに迫る。

そして、そのまま……

「――ほんとは、ほんとに、好きだからね?」

背伸びをしてキスをした。

鼻がぶつからないように少しだけ、顔を傾けて。

数秒だけど、それでもかけがえのない時間。

この想いは作りものじゃない。

それだけは、誰にも譲れない。

お兄ちゃんが、終わりとばかりに離れて、片手で口を覆う。

その子供っぽい仕草に少しだけからかう。

「お兄ちゃん、真っ赤。かわいい」

それで少しだけ落ち着いて、少しだけ晴れやかな気分。

いつの間にか戻ってたカモメ達が、安心したかのようにベランダを飛び立った。

だけど、何羽かが少し残ってる。

置いていかれちゃうぞ、と目を向けると、急にカモメがその場から逃げるように急に

翼を飛ばたかせ、飛び去った。

なんだろう……？

そう思った直後、肌になんかだけ寒気が走る。

何か、怖いものが近づいてくる。

そんな気がする。

……ピン、ポーン。

チャイムが鳴って、思わず玄関へ目を向けた瞬間に悪寒に襲われる。

なに、これ……

怖いよ。

地の底から引きずりこまれそんな感じがする。

なんで……こんな気持ちになるんだろう。

「こんなに朝早くなんて……誰だ？」

お兄ちゃんが玄関へ向かおうとしたところで、思わず袖を引つ張る。

「どうしたんだよ？ もうお願いは聞いただろ？」

「違う、違うよ。お兄ちゃん、扉を開けちゃダメ」

「……？ なんでだよ、まさかもう追っ手がきたのか？」

「……そうじゃない。けど、怖いの」

震えてる言うあたしに眉を顰めながらも、お兄ちゃんはベレッタを握って、玄関へと向かう。

行かせちゃいけない。

そう思っても、どうしてか足が動かない。

それから玄関が開けられる音が響いて、聞き取れないけど話し声が少しだけ聞こえ

る。

お兄ちゃんが、

「何もなかったぞ」

頭を掻きながらリビングに戻ってきた。

違う、絶対にいる。

お兄ちゃんの後ろに――

「おはよう、かなめちゃん」

あいつが……白野がお兄ちゃんの背後から顔を出した。

な、なんで……

「キンジ、かなめちゃんに説明ってしたの？」

「したぞ」

「それって私が来るって言った？」

「……………」

「しつかりしてよね、”お兄ちゃん”」

やめて、お前がお兄ちゃんなんて言わないで。

それから白野があたしに目を向けて……

「これから私も”家族”だから、よろしくね。かなめちゃん」

残酷なことが無邪気な笑みで告げられた。

94：仮初めの生活

私の家族宣言に顔を青くするかなめ。

あー、空気が美味しい。

思わずニヤニヤ顔になりそうなのを我慢する。

そんなかなめちゃんは反射的に声をあげた。

「ダメだよそんなの!」

「ダメって言われても……。かなめちゃん自身が家族以外部屋にいちやダメって言ったのをキンジから聞いたんだよ? なら、逆に家族ならいてもいいって話なんだからそれをダメって言われても、ねえ?」

私が言いながらキンジに流し目を見ると、キンジも頷く。

「そうだと、自分の言ったことだろうか?」

「そう、だけど……。でも」

歯切れ悪く、かなめは視線を逸らす。

今の彼女に屋上で話してた時の敵視する雰囲気はない。

それどころか、私に恐怖を抱いてる。

ふーん……本能的に私が危険だって感じてるね。

まあ原始時代の名残か、女性の危機察知能力は男性よりも高い。

そりや子供を守るのに必要な能力だからね。

これまで、なんとなく私が危険だって思われることがなかった訳じゃない。

それでも今まで上手く警戒をされないように立ち回ってきた。

だけど、かなめは私を確実に警戒してる。

神崎や白雪、レキといった面々に比べて接触した時間は少ない筈なのに……一番警戒してる。

なんでだろうね？

と考えると、キンジを見てすぐに気付いた。

……ああ、なるほど。

なんとなく分かってきたよ。

——HSSだ。

思考速度や反射速度を高めるヒステリアモード。

それは男性なら戦闘的な面や、女性に対して魅力的な男性としてアピールする方に特化してる。

では、逆に女性なら？

ロスアラモスの研究施設でかなめがどういうコンセプトで設計されたかは知ってる。相互にHSSSになって強化兵士として比類なき戦闘力を持つ双極、『アルカナム・デユオ双極兄妹』。

だけど、HSSSの仕組みが男性と女性の本能、本質を高めることでしかない事を彼等は理解してなかったんだ。

女性の本質は子供を守ることや、情報収集をしてリスクを回避する能力、そして強い男性に守ってもらえるように魅力的な女性としてのアピール。

それらをHSSSは強化する。

だから、仮説として女性に戦闘面では弱くなる可能性が高い。

代わりに身内を守る方に特化する。

だとするなら……かなめが私の本質を理解してる可能性がある。

私と出会ったあとにHSSSに一度なったんだらう。

そう推理すればこの変化は納得できるからね。

となると、だ。

レキ以上に私を警戒してる訳だね。

今後の邪魔になることは大いにあり得る。

元からそうするつもりだけど、やっぱり——

キンジが変な愛着を持つ前に消えてもらおう。

なんてことはおくびにも出さず、私はニコニコと笑顔。

すぐに行動したら怪しまれるからね。

友好的に接しておいて、周りが私を怪しまないような関係を築きあげとかないと。

別に人間的にはレキより好きだし。

対してかなめは胸を片手で抑えて、女の子らしく怯える仕草をしてる。

そんなに怖がらなくてもいいのに。

「いきなりだけど、これからよろしくね」

何でもないように私は笑顔で話す。

生い先短いかもだけど。

とまあ、かなめとキンジと私の家族生活が始まった。

かなめは学校内でも私を監視するようにチラチラと見てる。

そんなに見ても何も出てこないのに。

学校内での私は武偵——白野 霧。

それ以上でも以下でもない。

それから昼休みに急に神崎達から呼び出しがあった。

現状でも知りたいのかな？

そう思つて、集合場所に指定されたのは強襲科アサルトの専門科棟。

体育館に似た様相の2階部分にバスカービルのみんなはいた。

ここを指定したのは、昼休みでも練習とかで銃撃音がするから会話が聞かれにくいからだろうね。

私が2階に上がると神崎が真つ先に、

「遅いわね」

と腕を組みながら理不尽なことを言ってくる。

逆だと思ふんだけどねえ。

みんなが早すぎる。

それにすぐに集合と言われたけど、時間までは指定されなかったし。

と、屁理屈をこねることは出来る。

けど、周りに針を刺すような雰囲気があったのでやめた。

それ以前に妙にピリピリしてませんか、皆さん。

あと、ジャンヌも何故かいるし。

「白野、遠山とかなめの様子はどうか？」

真つ先に現状確認をジャンヌはしてきた。

「まあ、いい感じに引き込めてるんじゃないかな？　かなめちゃんは最初からキンジに心酔してるみたいだし。あとは何だろうね……憑き物が落ちたみたいなの、ともかくキンジが何かしたのか少し丸くなった気がするよ」

「そ、その何かってま、まさかアレじゃないでしょうね!？」

私が様子を伝えてると神崎が急にこつちを向いて食い付いてきた。

けど、アレってなに……？

なのでそのまま私は疑問を口に出す。

「アレってどれ？」

「その、アレと言えば……アレよ！　バカキンジの得意分野の、その……ロメオ的なこと

よ」

神崎は直接的な表現は恥ずかしいのか、武偵用語で答えてくる。

ロメオ的なことねえ。

見たわけじゃないけど、キスとか辺りはしてそう。

神崎の言い方からしてキス以上のことも含んで聞いてそうだけど。

「さあ？　私はそこまで踏み込むつもりがなかったからね。ナニをしたかまでは知らない

」

「下ネタ……」

理子がジト目でぼそりとツッコんでくる。

「ただ、他のメンバーは気付いてない。」

「まあ、そういうことを知ってるの理子だけでしょ……この面子で。」

「ていうか……」

「ジーサードの陣営を引き込む方針って、ちゃんと伝えてるの？ ジャンヌ」

神崎がロメオって言った辺り知ってはいるんだろうけど、説得出来るかは怪しい。

私が軽くバスカービルの面々を指差しながら聞いてると、ジャンヌは腕を組んで胸を

軽く張った。

「もちろんだ。遠山がどういった手段で懐柔しているか、ちゃんと説明もしたし分かり

やすく想像図も描いてのだから。抜かりはない」

「抜かりしかない。」

「ポンコツ聖女に期待するだけ無駄だった。」

「なんで知能は高いはずなのに頭は悪いのか……」

「ジャンヌに限らず、神崎も似たようなものだけだ。」

「あんた、何か失礼なこと考えてない」

「そして勘は冴えてる神崎。」

「私は笑顔であえて肯定する」

「うん、考えてる。聞きたい?」

「相変わらず性格悪いわね、そういうところ。聞いたら余計にムカつきそうだからやめとくわ」

珍しく冷静な対応だね。

「それで? 本題は状況を聞きたいわけじゃないんでしょ?」

私としては本題が別にあるとみてる。

じゃなかったらこんなにも集まる必要もない。

情報の交換なんて最低限の人員でいいわけだし。

ジャンヌは少しだけ疲れたように息を吐いた。

「その、だな……バスカービルの面々はかなめの懐柔まで待てないらしい。私としては白野の報告からして順調に進んでるのだから少し待て、と言ったのだが——」

「だーかーら、まだるっこしいのよ! 相手がなんの目的でかなめを寄越したか知らないけど、あまり時間をかけたら相手も情報の収集とかしてるかもしれないし、戦略の基盤とか築いてるかもしれないでしょ?!」

神崎はまくし立てるように説明する。

言いたいことは分かるし、一理ある。

かなめを通じて私達が懐柔しようとしてるように、向こうもかなめを通じて何かして

るのかもしれない。

実際、かなめは1年をまとめあげて独裁者じみたことをしようとしてるし。

その神崎の説明に対して珍しく白雪が同調する。

「そうだよ、霧さん。それに兄妹でもやつぱり男と女だし……イザナギとイザナミ的な事になるかもしれないから！ うん、やつぱりダメだよ！ 兄妹でもそんなことしちゃダメ！」

イザナギとイザナミ……日本の神様でアダムとイヴ的な存在だったね、確か。

で、白雪は軽く暴走気味。

レキと理子に関しては無反応。

理子は、どちらかと言うと私を心配してるような感じ。

しかし……もつともらしいことを言ってるけど、要はだね。

「キンジがかなめちゃんに独占されてるのが気に入らないという理由じゃなくて？」
と、私はにんまりと笑いながら聞いてみると、

『……………!?!』

神崎と白雪は顔を赤くして反応。

レキも珍しく、ピクリと動いた。

理子も2階の転落防止の柵に腕を乗せながらも、ちよつとだけ動いている。

なんだ、理子も好きとかまではいかないけど気にはなってるんだ。

「……否定はしません」

珍しくレキが口を開いて答えたことにさらに神崎と白雪が反応する。

いかにも、マジで!?! って感じの表情だね。

「しかし、霧さん。それよりもあなたはキンジさんと同居しています。それは、何故ですか?」

これまたレキが私がキンジの部屋に住んでもを何故か知ってる。

まだ1日しか経ってないのに。

さては監視してたね……

レキの部屋からキンジの部屋は一応見えるし。

神崎はわなわなと震えながら私を指差して聞いてくる。

「ちよ、ちよつと……どういうことよ?」

「まあ、成り行き? しばらくキンジの部屋で世話になることになってね」

「ま、まま、まさかあんたまでキキ、キンジに変なことされたんじゃないでしょうね!?!」
変なことじゃないけど、まあ、何かされたというか……なんというか……

どう答えよう?

開き直ってもいいけど、キンジに嫉妬の八つ当たりが行って迷惑をかけたくないし。

説明すれば神崎は間違いなく暴走する。

それを面白半分で見たくもあるけど、家族の迷惑にはしたくない。

なので、それとなくはぐらかす。

「いや、かなめちゃんが手に負えなくて助けて欲しいって言われたから……仕方なくね」
「だったら、なんでそんな嬉しそうな顔してるのよ!」

嬉しそう?

神崎がそう指摘してくるので、思わずコンパクトミラーを開けて見る。

妙に熱っぽい顔をして、頬を緩ませてる私があった。

そんなつもりはないんだけどなあ……

自分の意思とは関係なく顔が緩くなる。

確かにキンジとの生活は退屈しなさそうで楽しみなんだけど、嬉しそう……か。

嬉しいって感情、なのかな。

キンジが私を選んで、家族になって欲しいって言われて。

選んでくれた事にすぐ安心や満足感があつたとは思う。

それが嬉しいってものなのかはよく分からないけど。

とりあえずコンパクトミラーを閉じると同時に私も一度深呼吸して目を閉じる。

感情をリセットしないと。

「……何でもないよ」

私はそのまま続けてはぐらかす。

しまった……今の言い方は失敗だったね。

変な間があるし、何かあるって言ってるようなものだよ。

「絶対にウソでしょ?!」 言いなさい! キンジに何をされたのよ!」

すごく焦った感じで神崎が詰め寄ってきた。

想定通りのリアクション。

ああ、もう……どうやって答えよう……

いつもなら平気で事実を織り交ぜながらも肝心なところは伝えず有耶無耶うやむやにできる

ような言葉の1つや2つ思い付くのに、何も出てこない。

こうなったら神崎の苦手な話題で話を逸らす。

「本当に何も無いよ。そういう神崎さんも妙にキンジに固執するようになったね。先

日、何かあった? ”屋上”で」

ちなみに屋上で神崎がキンジとキスしてたのは知ってる。

全部、あの手この手で観察してるからね。

成り代わる予定だし。

すると神崎は分かりやすく、ぼふ、と煙が出そうなほど真っ赤になった。

相変わらず、瞬間湯沸し器みたいな顔色の変わりようだね。

「にやにや、にやんで知って……」

あわあわしながら私を問い詰めてた神崎の指先が今度は震え出す。

「いや、屋上で何があつたかは知らない。けど、屋上から降りてくるところを見掛けて妙にご機嫌だったし？ そのあとにキンジが降りてきたから何かあつたのかな？ ってね。そつちこそ、あの時に何をされたのか聞かしてもらいたいな。そしたら教えるよ」

神崎のことだから絶対に答ええないし、こんな他人がいるところならなおさらだろう。

勝ったね。

神崎はフリーズしてる。

火が出そうなほど真つ赤なのに凍つてるとは……なかなか器用な反応だよ。

「そこまででいいか？」

ジャンヌが話が進まないとはばかりに遮る。

「白野、実際にお前はどうかんだ？ お前以外のバスカービルの面々は実力行使に賛成している。神崎の言葉も理解出来なくはないからな」

と、冷静な見解をジャンヌはしながらもこちらの判断を聞いている。

今のところかなめを實力で排除するのは、まあ、私的にはアリかな？

って言っても私個人で考えてる”排除”の方なだけだね。

しかし、理子も賛同してるのは意外。
何か狙いでもあるのかな？

「確かにあんまり時間を掛けるのもよくないね。まあ、ここらで一回かなめちゃんに交渉の余地はあるのか聞いてみるよ。それでダメなら、別でアプローチしていこう」

「……分かった、それでいこう。バスカービルもいいな？」

ジャンヌが私の言葉に少しだけ頷くと同意を求めた。

「霧さんがそういうなら」「りこりんも異存はありません」「……分かりました」

そして神崎以外に同意は得られた。

肝心の副リーダーは未だに固まってる。

「神崎さーん……。ダメだ、完全に固まってる……」

「……まあいい。白野、直接奇襲されていないお前ならかなめに対してそれほど嫌悪感もないだろう。実際、同じ空間にいれるのだしな。お前も糸口になれるかもしれない。頼んだぞ」

神崎に対してジャンヌは呆れがちに言いながらも、冷静に進める。

私はいいけど……向こうの方が警戒心マックスなんだよね。

どうしようかな？

2人きりになったら余計に警戒されかねないし、キンジを置いてワンクッション挟ん

だ方がいいね。

私がキンジをどうこうするつもりがないことをアピールすれば少しは態度が軟化……するといいなあ。

あの警戒心を下げるのは少し厳しいかもしれない。
まあ、何とかしてみよう。

そして、私がキンジの部屋に同居して2日目の夕方。

普通に男子寮に入っていくことに関しては考えないことにした。

合鍵を使って玄関から入って、

「ただいま〜」

と言う。

いかにも日常の一コマって感じ。

靴を脱いで、リビングへ行く。

キンジはまだ帰ってないみたい……かなめもない。

ご飯でも作ろうかと思っただけど、帰ってくる時間も分からないのに今作っても冷めちゃうし。

軽く部屋を見て回ると、一室は既にかなめの部屋になってるみたい。

無用心に鍵が開いてるとは思わないけど、入ろうとも思わない。

家族と言えどプライベートは大事だしね。

さて……何しよう？

荷物は昨日の内に整理したし、洗濯物がある訳でもない。

本格的にやることが、ない……

そうだ……キンジがいつ帰ってくるかメールで聞いておこう。

それで逆算して、夕食の準備とかすればいいし。

メールで聞いたなら『もうすぐ戻る』とのことだから。

今から準備しておこう。

ちようどその時、玄関先に人の気配。

足音の軽さからしてかなめだろう。

ここは家族らしく出迎えてもしてあげよう。

かなめからしたら嫌な感じかもしれないけど。

それに、さつきから私がいると思ってるのか入ろうとする感じがしないし。

私が鍵を開けて、ドアを開くとそこにはやっぱりかなめがいた。

案の定、微妙な表情をしてる。

対して私は視線を軽く合わせてにっこりと笑顔で迎える。

「お帰り、ちようどよかったよ」

「……………」

かなめは何か反応に困ってる感じで、視線を泳がせる。

先日の屋上での嘯みつき具合はどこへやらだよ。

私を排除しようとする躍起にもなってたのに、あかりと一戦交えてからそのための基盤もどこかへ流れた。

進退窮まるって感じだね。

「そう警戒しなくてもいいのに。キンジがもうすぐ帰ってくるから、一緒にご飯の準備をしてくれると、お姉ちゃん助かるな」

口調は柔らかく、笑顔は忘れず。

ここでは家族なんだから。

それから切り替えるようにかなめを一度目を閉じて、

「変なことしたら……許さないから」

気丈に、自分を奮い立たせるように私を睨んだ。

かなめは意を決したように玄関へ私を押し退けるように入った。別にキンジには何もしないのに。

玄関を閉じて、そのまま私はキッチンに向かう。

メニューは、と……

キンジがカレーばかりって話をしてたから、違うメニューにしよう。

カレーの材料のニンジン、玉ねぎ、じゃがいもがそれなりにあるからこれを活用して、鶏も肉もあるから……チキンコンソメピラフにしよう。

それでコンソメスープも一緒にして、カレー粉があるからこれも活用して、じゃがいもをスライスしたカレー風のサラダにする。

うん、これでいこう。

「ねえ、かなめちゃん。この材料使ってもいい？」

用意してるのはかなめちゃんだから、材料を見せて許可を求めるけど、ソファアに座ってる本人はいかにも苦虫を嘔み潰したような顔をしてる。

「キンジの好みの味付けとか教えてあげるから」

私がそれを付け加えると、少しだけ表情が変わった。

むすつとした感じは変わらないけど。

「……別にいいよ。ただ、あたしもやる」

かなめは私の腕を盗んでやろうって感じだね。

監視もあるだろうけど。

キンジが好きなものを全部取り込もうとしてる。

貪欲なこと……まあ、ハングリー精神は大事だしね。

キツチンにいる私の隣にかなめは来たけど、我慢してるんだろうなあ……こつちに視線を合わせてくれないし。

他の人が見たらあからさまにギスギスしてるって分かるだろう。

しかし、そこは私。無視して進める。

かなめと会話らしい会話は無いけど、私の言葉に反抗するほど意地を張ってはいないみたい。

素直に私のアドバイスを聞いてくれてはいる。

反応もしないけどね。

それからお互いに料理をしながらも途中でかなめが唐突に口を開いた。

「……一っ聞きたいことがある」

「んー、なに？」

「お兄ちゃんをどうするつもり？」

自分のことより、キンジのことか……

かなめの包丁の音が不自然に止まる。

私の言葉次第ではその包丁がこつちに向きそうな雰囲気だね。

って言うか、どうもこうも――

「何の話かな？ 別に、かなめちゃんが私をどう思ってるのか知らないけど……キンジに何かすると思ってるならそれは誤解だよ」

実際、何もしないし。

「……胡散臭いよね」

「よく言われるよ。かなめちゃんが私をそこまで警戒するのはよく分からないけど……世の中、生理的嫌悪ってのもあるから、そこは気にしないでおくよ。お姉ちゃん的には仲良くして欲しいけどね。じゃないとキンジも居心地悪いだろうし」

これは全部本音。

命狙ってるのに仲良くするって意味分からないって思われるけど、別に矛盾はしてないと思うんだよね。

まあ、そこは私のポリシー的な？

相手のことを何も知らずに殺すなんて可哀想だと思ってるし。

「それに、私はキンジの……家族の味方だからね。そこは信用して欲しいかな」
私はかなめにいつも通りの笑顔を向けるけど、かなめはやっぱり反応しない。

焦らずにいこう。

◆ ◆ ◆

霧を俺の家族として護衛役にしたお陰で今日の足取りは幾分か軽い。

部屋に帰るのが最近では恐ろしかったからな。

それに何だかよく分からんが、かなめは霧が苦手らしい。

気持ちは少し分かる気もするがな。

俺的にも敵にはしたくないタイプだ。

あの手この手でこつちの苦手な部分を突いてこようとす。

あいつの戦い方は強襲科アサルトよりも諜報科サドよりのやり口だ。

だからこそ、味方でいるのは頼もしい。

さて、部屋の玄関まで帰ってきたはいいが……かなめとは上手くやってるのかが心配だ。

苦手でもアリア達同様になめは霧もあまり俺に近付けたくないらしいな。

扉を開けたら部屋がメチャクチャになってる覚悟くらいはしておこう。

その方が、まだ俺の胃のダメージは少ない。

結局意を決して俺は玄関を開ける。

銃撃とか、刀剣の音とか……しないな。

まず、そこは安心だ。

よし、次は戦闘が終わってるパターンをイメージしておこう。

武偵憲章7条……悲観論で備え、楽観論で行動せよ。

何か微妙に違うが、とりあえずリビングへ進む。

だが俺の悲観的なイメージとは別に……何か良い匂いがするぞ。

硝煙の火薬臭い感じはしない。

そのままリビングの様子をこっそり見るように入ると、そこにはテーブルを囲んでるかなめと霧がいた。

「それでね、キンジは匂いに結構敏感で……案外好きな匂いの際は微妙に距離を離すんだよね。例のアレを発動させたくないからか、本人は無意識だろうけど」

「……そうなんだ。好みってどんな匂い？」

「クチナシの匂いっぽいんだよね……神崎さんがそんな匂いだっただけかな？」

「やくつぱりそうなんだッ」

「ここだけの話……あ、キンジお帰り」

お前ら、何で俺の好みの匂いの話をしてるんだ……

かなめに何か言おうとしたところで霧がこつちに気付いた。

それからかなめは俺を見つけると、途端に表情が明るくなった。

「ここそしてる意味がなくなったので普通にリビングへ入る。」

「お兄ちゃん、お帰り！ 今日遅かったね」

「ちよつと買いい物にな」

主に薬局。

胃薬的なのを買いだめしておかないと、いつ戦闘とかで買い物にいけなくなるか分からんからな。

「で、かなめはさつきから何をメモってるんだよ……」

霧と話してる最中も何かノートに書いてたし。

「これはお兄ちゃんノートだよ。お兄ちゃんの好きなモノとか嫌いなモノとか、クセとか書いてるの」

「やめろよ、そんなの」

アサガオの観察日記じゃないんだぞ。

「そうだよ、かなめちゃん」

ここで霧がかなめに、

「そういうのは本人に気付かれないようにしないと。警戒されたら観察できないよ」
注意する訳ないよな。

かなめも『あ、そっか』みたいな顔をするな。

こいつら、普通に何故か連携してやがる。

霧はともかくかなめは俺に女子を近付けたくなかったんじゃないのか？

「それじゃあ、ちようどキンジも来たところでご飯にしよつか。今日はかなめちゃんと

一緒に作ったしね」

霧が言いながらキッチンからカレーじやないメニューを持って来たぞ。

最近はず日に一度はカレーだったからな。

別に美味しいからいいんだが、飽きがあるのも事実。

しかし、かなめと一緒に料理したのか。

俺が思ったよりもそんなに仲が悪いわけではないみたいだ。

少し安心した。

最近はず女子同士で殺伐としてたからな。

「そうか、上手くやってみたいで安心したぞ」

俺がそう言うとかなめと霧は顔を見合わせて、何も言わずにニコリと互いに微笑ん

だ。

なんだ……？

何故か悪寒がするぞ

「うん、大丈夫だよ……お兄ちゃん。上手くやって”みせるから」

と、かなめが言い――

「いきなりのことだから、もうちよつと時間が必要なんだよ。お互いに」

霧も何か曖昧あいまいな感じなことを言う。

「それよりも早く席に着いてよ、料理が冷めちゃう」

「うん、お兄ちゃんにあたしの作ったの先に食べて欲しいな。」お姉ちゃん「よりも絶対に美味しいから」

などと妹設定の霧と、自称妹のかなめがぐいぐいと来る。

さりげなくかなめが霧を姉って言ったな。

まあ、そういう設定なんだが……

そうして霧は俺の正面、かなめは俺の隣は譲らないとばかりにテーブルを囲う。

『いただきます』

そうして食事の挨拶をして、まずは俺はピラフを頂く。

霧とかなめの料理の腕は知ってるから疑う必要もないんだが……ゆつくりと口に運ぶ。

まずコンソメの味がした。それに鶏肉がある。

ご飯に程よく油があつてそれとコンソメがよく馴染んでいる。

そして、濃い目の味付けが食欲をさらに刺激する。

酒が欲しくなる味ってヤツだな。

もちろん、飲んだことなんてないが……

「相変わらず美味しいな。おかわりってあるか？」

「気が早いね。まあ、少し多く作ってるからおかわりはあるよ」

霧は少し苦笑して答える。

がつついてると思うが、美味しいものは仕方ない。

好みの味だし。

「むう……お姉ちゃんの料理ばかりじゃなくて、あたしのも食べてよ」

隣でかなめが子供っぽく頬を膨らませて抗議する。

何で霧に対抗してるんだお前は……

だが、せっかくの美味しい料理を機嫌を損ねて取り上げられたくないので素直に聞く。

「かなめが作ったのはこのサラダか？」

「うん、いっぱい食べていいからね」

これは、スライスされたじゃがいものサラダだな。

じゃがいもの色からしてカレー風味。

ここでもカレーか……

俺が好きって言ったからって、何でもカレーと合わせるのはどうかと思っただが。

これも美味しい。

カレー風味のじゃがいものにしやしやしきのレタスとかの野菜が良い感じにマッチし

てる。

それに、ドレッシングをかけてからじゃがいもを載せた感じだな。

カレーの味を邪魔しないように、そこもよく考えてる。

「美味しいな、これも。カレー風なのにちゃんとサラダだ」

「作ったのはかなめちゃんだけど、レシピ教えたの私なんだけどね」

「余計なこと言わないでよ」

霧が茶々を入れて、かなめが不機嫌そうに言う。

本当に不機嫌そうにな。

俺は釘を刺す。

「頼むから食事中に暴れるなよ」

「なら食後の運動はいいんだ」

「そういう問題じゃない」

「というか霧が煽るなよ。」

「冗談だよ、家族で争うつもりなんてないしね」

「ならいいんだがな……」

それから食事が終わって片付けをしたところで霧がいつも通りに食後の紅茶を淹れ

てる。

そのままティータイムになった。

すっかり俺も紅茶を飲むようになったな。

もつとも……自分じやあ淹れる気にもならないが。

一度調べてやってみたが、案外紅茶を淹れるのは難しい。

淹れ方で味が変わるとは思わなかった。

まあ俺のは……うん、霧ほど美味しくはなかったとだけ言っておく。

それから食後の紅茶を楽しみながらも霧が、

「ところでかなめちゃん、ジーサードの望みってなに？」

などと突然にぶっ込んできた。

俺は思わず紅茶を吹き出しそうになる。

「お前、いきなり何を聞いてるんだよ?!」

「元々そういう方針だったでしょ？　で、どうなのかな？　こつちとしてはあまり事を

構えたくはないけど、必要とあらばって感じでね」

にしても唐突過ぎる。

かなめも少し面喰らってる。

だが、かなめはすぐに霧の淹れた紅茶をテーブルに静かに置いて切り出した。

「サードの望みはただ一つ、だから他に望みがあると思うならそれは楽観的だよ」

そして、切り替わるように目付きを少し鋭くする。

だが、霧はいつも通りにどこ吹く風だ。

「なるほどね。でも、かなめちゃん個人としてはどうなのかな？ キンジとサード……」

2人に争って欲しくないんじゃない？」

そして何か確信があるように霧は言い放った。

それに対してかなめは顔を少し俯うつむかせる。

「どうやら、当たりらしいな。」

「どうなんだ？ かなめ」

俺も紅茶を置いて問いたただすように聞いてみる。

もしかかなめが戦いたくないって言うなら、何か糸口があるかもしれない。

「……確かにお姉ちゃんの言うとおりだよ。でも、私は兵士として開発された身だから、私情を挟んだりほしくない。だから、交渉なんて非合理的」

「交渉に応じないと困ることになるよ？ キンジが」

「俺がかよ!？」

かなめの言葉に対して霧が返したと思ったら俺に矛先が来たぞ。

しかもかなめが交渉に応じないと、俺が困る事って何だよ？

「誰かさんの性格、忘れてない？」

霧が俺に軽く目を向けてそれだけ言ったところで、俺は考える。

霧がそんな風に言うつてことは、俺が知ってるメンバーの誰かだ。それでなんとなく、予測出来た。

まさか……アリアか？　俺が困るつてことはアイツ、ここに突撃するつもりじゃないだろうな。

アリアのことだから、交渉なんて回りくどい事に業を煮やし始めてもおかしくはない。

そして、俺がその女子同士の争いに巻き込まれる……と。

いかん、容易に場面が想像出来るぞ。

「お兄ちゃん困ってるの？　あたしが解決してあげるよ」

かなめが無邪気にそう言うてくるが……

「だったら交渉に応じてくれないか？」

一番の解決法はそれしかないだろう。

だが、かなめは渋い顔だ。

「あたしを伝つに交渉しようとしてるみたいだけど、多分、サードは耳を貸さないと思う」

部下の言葉に耳を傾けない。

なんとなくだが、それはあいつが譲れない部分があるから耳を傾けないのかもしれない。いと、俺は思った。

何故そう思ったかは分からないが。

「サードは、頭が固いとかじゃないんだよ。こればかりは譲れないことだから……。仕方ないから教えるよ……サードの望みは“イロカネ”、つまりはアリアが目的なんだよ」

その言葉に俺は目を見開き、霧は落ち着いた感じだが、少しだけ視線を鋭くした。
アリアが目的、だと？

そのまま核心を突くような眼をして、かなめは続けた。

「逆に聞いてあげるよ、お兄ちゃん。交渉の取引……出来る？」
交渉は、互いにメリットがないと成り立たない。

当然、何かを差し出すならそれなりのデメリットもある。

誰しもロースク・ハイリターンで済ませたいと思うだろう。
少なくともウイン・ウインの関係にならなければ意味がない。

この場合、俺達は圧倒的な戦力であるジーサードと敵対するのはリスクが大きいと判断した。

だから、逆にこれを戦力として『師団^{ディン}』の陣営に組み込めばこっちの戦力が大きく増す。

戦役でも大いに役に立つだろう。

だが、相手がこつちにつく条件はアリア……もとい『色金』。

色金が超常的な力を持つのはシャーロックとの戦いで既に聞いてるし、見てもいる。

そして玉藻が言うには色金は心と結び付く金属。

俺なりの解釈だが、心臓と色金が融合してるんだろう。

その色金を狙つてるとなると……アリアの命は――

「はあ……取引は不成立だね。だったら残る選択肢は1つ」

霧が俺の思考を遮るように言葉を放った。

確かに取引するかどうかは言うまでもないんだが、まさか霧……ここで戦^やるつもりか

？

その言葉にかなめも何かを身構えてる。

いきなり一触即発かと思いきや、

「妥協案がないか、しばらく家族で考えよう♪ 家族会議、良い響きだね」

両手を合わせてにつこりと微笑んだ。

無邪気な笑みに俺もかなめもポカンとする。

なんだよ、そのマイペースな提案は……

「なに2人とも、私の建設的な提案に不満？」

「別にそうじゃないが……お前こそ誰かさんの性格を忘れてるんじゃないか？」

意趣返しとばかりに俺がツツコムと、霧は任せなさいとばかりに胸を少し張った。

「別に、舌先三寸でなんとかなるからね。せつかくなめちゃんとも家族になつたんだから、一緒に一回食事したくらいで終わりなんて寂しいでしょ？」

と、よく分からんことを言い始めた。

だがまあ、確かに今日みたいな食事は懐かしい感じが少ししたな。

家族で飯を囲うあの感じが少しだけな。

かなめは不満そうだが、それでも嫌とは言わない。

ここで霧に退場されても俺が困る。

期間が1日とかどんな護衛だよ。

とは、言えないな……俺は今この瞬間でも貸しを作つてる状況だから文句とかは言えない。

「それで、取り敢えずは先にお風呂にしようか。さっぱりしたら、その方が何か良い案が浮かぶかもしれないし……あ、キンジが先に入った方が——」

霧が色々と話して居る途中で、金属がいくつも積み上がるような派手な音が玄関から聞こえる。

考えたくはない。考えたくはない、が雰囲気だけで何故か分かるぞ。

玄関から発せられるこの怒気は——

「バーカーキーンジーツ!!」

やっぱりアリアだツ!

おいおい、マジで突撃してきやがった。

アリアに関しての悪い予感は大抵当たるな、俺。

「はあく……キンジ、ちよつと私が出てくるよ」

盛大にため息を漏らしながら言う霧の表情を見た瞬間、

「ヒツ……!」

思わず人生で今まで出たことない声が出た。

「あの、霧、さん……?」

「んー……どうしたの?」

「怒ってません?」

敬語になりながらも俺が聞くが霧は、いつも通りの調子で、

「私が怒るなんて、滅多にないよ。……でも、今回ばかりは空気読めって思ってるかな?」

なんて言ってるが、顔は無表情だ。

黒い瞳が別の意味で黒く見える。

それから張り付けたような笑みを浮かべた。

「大丈夫だよ。手荒にはしないから」

それだけ言って、霧は玄関に向かつていった。

普段怒らないヤツが怒るとヤバいって話を身をもって体感した。

追いかけることが、出来ない。

すまん、アリア……俺には止められそうにない。

◆ ◆

せつつかくの家族団欒かぞくだんらんが出来て、キンジともゆつくり話でも出来ると思つたのに……

どこかの我慢が出来ないお子ちゃまのせいで台無し。

こんなに楽しみを台無しにされたのは久々だよ。

廊下を静かに踏み鳴らしながら、私は玄関へ近付く。

今までは衝動の抑制のためと業務的、そして個人的な趣味で殺してたけど、”感情的

”に殺そうと思つたのは初めてかもしれない。

「霧、あんた……何して——ッ?!」

私と顔を合わせた瞬間、蹴破られたドアの上に立つてる神崎は喉を詰まらせた。

何をビビってるんだか。

そのまま気にせず私は続ける。

「神崎さんは我慢って言葉を知らないのかな? 純粋なイギリス人じゃなくてクオー

ターだけど、頭の大半はフィッシュユアンドチップスでも詰まってる？」

「い、いきなりご挨拶ね。あんたこそ、何を食事しながら和氣藹々わきあいあいとしてるのよ！」

この言い方……監視してたんだ。

まあ、そんな気はしてたけど。

「かなめちゃんと距離を縮めて妥協案でも探そうと思ってたのに……大体、家族じゃないのに部屋に入ったらダメだよ」

「そういうあんたも違うじゃない！」

と、神崎はツツコミをいれてくる。

先日は迷惑になるかと思っただけど、性格悪いって言われたし……

もう開き直ろう。

「私はキンジに”家族”になってくれって言われたからね。だから問題ないよ」

「な……なんですってツ……!?!」

わなわなと彼女は震え出した。

私は改めてハッキリと言う。

「今の私は遠山 霧つてことで、書類とかは出してないけどそういうこと。残念だったね」

まあ、本人はそんなつもり微塵も考えてないだろう。

私じゃなくても誰かを家族って事にしておけば、部屋に入れる条件と護衛役が満たせるって考えだと思ふし。

でも、私は騙されたままでいるって決めちゃったからね。

私は結構しつこいから、キンジには覚悟してもらわないと。

もし私以外を選ぶなら……まあ、その人に成り代われればいいや。

神崎さんになる予定も全然あつたし。

「それで……どうしたのかな？　もう少し待つて欲しいって言うのに、2、3日も我慢できない精神年齢小学生さん？」

「あ、あんた、そこまで性格が悪いとは思わなかつたわッ」

「神崎さんよりはマシだよ。いきなり銃を乱射する暴力女が迷惑じゃないと思つてるなんて、何の冗談なんだか……。それで、どう言つた用件かな？」

私は笑顔でお帰り下さい、と言外に示しつつも神崎は毅然と言つた。

「——決闘よ」

「かなめちゃんど？　実力で下して、奇襲じゃなかつたら勝てるって証明でもするの？」

まあ、対等だと示すのは大事だと思うけど、合理的かな？　それ」

相談無しにやつてない？

流石のジャンヌも今回は頭を抱えてそう。

私は淡々と考えを述べるけど、神崎は私に対して指を向けた。
なに、その指。

「違うわ！ あんたとかなめ、両方ともに対して決闘よ！」

……本気で解体していいかな？

95：勝利の形

はい、毎度お馴染み峰 理子です。

最近は何苦勞人ポジションに移りつつあります。

どうやらこの間、アリアがお姉ちゃんとかなめに決闘を申し込んだそうです。

かなめはいいよ……元より交渉が長引きそうなら実力で一度下す予定だったし。

でも、なんでそこでお姉ちゃん？

関係ないよね？

ジーサードの件と何の関係もないよね？

どうしてそうなったのかとお姉ちゃんに聞こうかと思いましたが、お姉ちゃんの部屋を訪ねて出会った瞬間に聞くのやめました。

だってお姉ちゃん……久々に真顔で無表情だったもん。

見た瞬間にイ・ウーでのトラウマを再発しそうになった。

雰囲気はもっと底冷えする感じだったけど、あたしを殺しかけた時がそんな表情だった。

何故かあたしの影の中にいるヒルダも微妙に震えてたし。

アリアめ、お姉ちゃんの機嫌を損ねたね。

お姉ちゃんがご機嫌斜めになるって相当なんだけど。

流石に学校にいる時はいつも通りだった。

そこら辺の切り替えはお姉ちゃんって感じ。

まあ、そう簡単に家族以外に尻尾は出さないよね。

ソフィーの言うとおり、キンジの傍でお姉ちゃんの感情は芽生えつつある。

もしかしたらそれがお姉ちゃんの寿命を延ばす鍵になるんじゃないかとは思うんだけど……確証はないんだよね。

お姉ちゃんの寿命が延びる代わりに誰かの寿命がゼロになりそうな感じがプンプンする。

って、そんな場合じゃない。

「キーちゃんとお戦うの……やめた方がいいんじゃないかな？」

決闘をカミングアウトされて少し間があって、バスカービル＋ジャンヌでファミレスのオープンテラスで緊急会議。

あたしは真っ先に提案する。

アリアが考えも無しって訳じゃないんだろうけど……感情的に突き進んだのには違

いがない。

理子的には穏便にかなめだけ適度にボコって終了、って想像してたのに。

ボコるって言っても限度はあるけどね。

「今更撤回できないわよ。それに……最近は妙に胸騒ぎがするのよ、霧に対して」
などとアリアは言って目を少し落とした。

緋々色金は戦と恋を好む性質。

昼ドラ的な修羅場が起こりそうな設定だとは思ってたけど……

な〜んか……お姉ちゃんの色金と無縁じゃなさそうな反応なんだよね、アリア。

「私は頭が痛いぞ、アリア。身内で決闘など……一体、この状況で何の意味があると言うんだ？」

ジャンヌは呆れて額に手を当ててる。

アリアは反論した。

「しょ、しょうがないじゃない！ バカキンジが何もせずにバカみたいなのんびり……その、家族みたいに食事してるのが悪いのよ！」

「遠山に関してはともかく、白野は少なくともコチラの意図を汲んでくれていたというのに」

キンジ、デイスられまくりワロスw

いや、そんな事を考えてる場合じゃない。

「でも、どうするの？ キーちゃん結構ドライだから敵対したなら仲間でも平気で戦うよ。」

ドライなのはほとんど素の性格でもあるけど。

「私も、霧さんとはあんまり……」

流石の白雪もキンジが絡んでもお姉ちゃん相手には気が進まないらしい。

「それにだ……家族の設定はかなめの家族しか部屋に入れないという制約をクリアするためだけの話ではないのか？ 少なくとも私は白野にそう聞いたが……」

話の分かるジャンヌには言ってる辺り、根回しの上手さが際立つ。

ワトソン辺りにも言ってるだろうなく

お姉ちゃん相手に考えなしで突っ込むのは無謀すぎると思うよ？

「……私は、アリアさんに同意見です」

意外なところから同意の言葉が出てきたね。

まさか、レキがお姉ちゃんとの決闘に賛成なんて。

「以前の彼女にはありませんでしたが、最近は確かに妙な感じですよ」

色金の保有者、間近で過ごした者には感じ取れるモノがあるらしいね。

お姉ちゃんの秘密、バレそうなんだけど。

助けて！ ソフイエもん！

うん、聞いたところで教えてくれる訳ないよね……ソフィーは。

「誰が妙なのかな？」

『ッ!』

レキ以外の全員が息を呑み、あたしの後ろに視線を向けるとお姉ちゃんが背後でニコニコとしながらこちらを見てた。

わあい、気配を消してたこの人。

つて……そのスキル使っていいの？

ますます妙だつて思われないかな……

アリアが指差しながら、

「あ、あんたいつの間に」

と驚き顔。

「みーんな会議に夢中だったからね。私の話で大盛り上がりなんて、よつぽど楽しいお話なんだね？」

そして、いつも通りに笑顔だけど皮肉を言うあたりやつぱり機嫌は悪い。

敵味方の判別はドライだけど……この辺りはねちっこいよね。

特に自分の楽しみを邪魔されたら機嫌を損ねるのは何とも子供っぽい。

「それで？　神崎さんと誰が組むのか決まった？」

「私です」

と、ここでレキが真つ先に声を上げた。

周りも、質問したお姉ちゃんも意外そうな顔をしてる。

「ふうん……で、どんな決闘にするつもり？　今なら神崎さんがプライド捨てて『一時的な感情での行動なんです、ゴメンなさい』で土下座して撤回するなら私は水に流してもいいんだけど？　それと、こつちに変に干渉しないっていう条件付き。監視までは許すけど流石に一々横槍をされたんじやたまったもんじやないよ。あと、その子ライオンは首輪でもつけといて」

お姉ちゃんその言葉にアリアがこめかみを動かし始めた。

雰囲気も険悪に。

めつちやギスギスしてきた……

「言ってくれるわねッ。いい機会よ、あんたとは一度白黒ハッキリさせておきたかったのよ」

「神崎さんと正面で戦っても私が負けるのはあらかじめ言っておくよ。でも、武偵は常在戦場って言うならこつちにも勝ちを拾えるような状況にしてみたいね。プライドがあるなら自分だけホームで戦うなんていう調子に乗って優越感に浸る子供みたい

なことはしないよね？」

うわあ……アリアのプライドを的確に刺激してる。

やっぱり、お姉ちゃんに口で勝てる訳がない。

「いいわよツ。そつちの条件で戦ってあげるわ」

あーあ……言質げんちとられたよ。

お姉ちゃんに決闘の選択権を与えちゃったし。

もうどうなつても理子はしーらない。

「そりゃよかった。そうだね〜種目は『SD』で」

SDか〜

レキがいるからつてお姉ちゃん嫌なところチョイスしてきたね。

SD——武偵用語の略称で正式名称は『Save or Defence』

ガンダ○フォースじゃないよ？

簡単に言えば屋内の目標を強襲チームと防衛チームに分かれて競う、人質救出を想定した訓練科目。

制限時間は30分。

防衛側は当然、事前の準備をして待ち構えている。

それに対して強襲チームはあらゆる手段を講じて目標に到達し人質を保護、あるいは

防衛側のチーム全員を捕縛する事で勝利する。

FPSゲームでもありそんな科目ではあるけど……まあ、当然ながらゲーム程甘くないよね。

防衛側は待ち受ける時間が設定されてて開始する30分前は色々と罠とかを仕掛ける時間がある。それ以降は遊撃により強襲チームを全員倒せば勝利、もしくは制限時間を過ぎてても勝ち。

まあ、そんな設定だから当然防衛側が有利に決まってるよね……

お姉ちゃんのことだから防衛側を選ぶだろう。

しかも屋内だからレキの狙撃できるポイントは限られてくるだろうし、実質2対1。強襲に関してかなり実力があるエリアではあるけど……今回ばかりは分が悪いかもね。

「私は防衛側で、そっちの得意な“強襲側”は譲ってあげるよ」

あ、これ完全に正面からへし折りにきてる。

わざわざ強調して言ってるし。

「いい度胸じゃない。あたしに強襲を譲るなんて」

腕を軽く組んでエリアは威勢よく答えるけど、お姉ちゃんはいつも通りに笑顔で挑発的な言葉を放つ。

「神崎さんの見せ場くらい譲らないとね」

「ふん……あんたこそ、ボロをださないようにね。最近は何か隠してる」みただし」

「アリアがそう言った瞬間、お姉ちゃんの目が細められた。バカにならないよね……アリアの直感。

それよりもお姉ちゃんが若干ヤバかった。

人殺しの眼になりかけてた気がする。

まあ、あたしがちよつと感じた程度なだけどね。

お姉ちゃんに接してる時間が理子はそれなりに長いから、少なくとも読める部分はあ
る。

他の連中からすれば気付けないだろう違和感だけど。

「そりゃ、味方でも手の内は全部見せるつもりはないよ。私ってば弱いからね」

どの口で言ってるんだか……

直接的な戦闘力で言えばお姉ちゃんって、ヒスったキーくんと同等ぐらいだけど。

そういうことじゃないでしょ……お姉ちゃんの強さは。

今回の決闘でもいやらしい戦い方をするのは何となく分かった。

「絶対に勝つわ。化けの皮を剥いであげる」

「吠えると負けたら惨めだよ。私はそうだね……キンジを思うならさっさと前言撤回し

て欲しいな。それじゃあ、決闘は3日後で。申請もしないといけないしね」

それだけ言ってお姉ちゃんはアリアの挑発に対して流しつづ去っていった。

残されたあたし達は微妙な雰囲気になる。

「ふむ、アリアの直感がバカにできないのは分かっているが……今回は手を貸さない。お前達の問題だからな」

ジャンヌはお姉ちゃんが去つたのを見てそう冷静に返す。

そりやそうなるよね

「理子もパース。どっちが正しいって訳でもないしね」

うん、アリアのやり方も間違つてはいないんだけど……どうしても強引さがあるからね。

「えと……」

「ゆきちゃんも不干涉にした方がいいよ。これは2人の問題だからね」

おろおろし気味の白雪に対してあたしはそうアドバイスする。

どうなるやら……

◆

◆

◆

どうすんだよ、これ。

まさかのバスケール内での決闘。

俺は何する訳でもなく決闘の立ち合い人としてここにいる。

武偵高が管理している10階建ての訓練用の廃ビルの前でかなめと霧、アリアとレキのチームに分かれてそれぞれ対峙している。

そしてそれを眺める残りのバスカービルのメンバーである白雪、理子、俺。それから様子を見に来たジャンヌ。

決闘をする4人はそれぞれ武偵高の通常の制服だが、雰囲気は臨戦態勢。

どこに武器を隠し持つてるかよく分からんぐらいのギスギス具合だ。

話を聞いてくれそうな霧も今回は聞いてくれそうにない。

「ルールの再確認だ。これから30分……防衛側は罫を張り巡らせるなど防御態勢を整える。そして強襲側は30分後に突撃を開始して目的の部屋に辿り着き、人質を保護すれば勝ち。目下……人質の場所は5階としか分かっていない。装備は非殺傷のゴム弾ゴムスタン。刃も安全装置セイフティがある。爆発物の使用は禁止。それ以外の手段は問わない。他の者はモニターで監視、通信などの支援サポートは一切なしだ」

と、俺が何故か進行役をする。

「かなめちゃん、よろしくね」

「馴れ合いはしないからね、お姉ちゃん」

「もちろん、一時休戦ってヤツだよ。今回は貴族かぶれのお嬢さんに惨めに恥をかいて

もらいたいんだだけだからね」

かなめは剣を一本持って例のヘッドマウントディスプレイ——テラナを装着している。

武装としてはそれだけだ。

霧も特に何かを持つてる様子はない。

それよりも霧はいきなりの挑発だな。

コイツがこんなに人を罵る^{のし}ように挑発するのは初めて見るかもしれない。

対してアリアは、軽く額に筋が出てやがる。

「最近は何に引つ掛かる言い方をしてくれるわね」

「なら、論理的な思考のできない神崎さんのために感情的にストレートに言っただけか？」

「いらぬわよ。お互いに気に入らない部分があるのはバスジャックの時に分かりきってたことよ」

バスジャック……アリアと一緒に初めて仕事をした時か。

何だかんだ白雪とは別のベクトルで霧とアリアって根本的どころが合わないよな。

今まで上手くやってきたように見えたのは……霧が譲歩してたっていうのがあるからな。

それは俺でも何となく分かる。

「そっか、神崎さんも人の気持ちに関心があつたんだね。That's great!」
霧が笑顔でその言葉を放った瞬間にピシ、と空気が凍り付いた。

「うわあ……メツチャ皮肉ってる」

理子がドン引くように言う。

「何がだよ?」

今のどこに皮肉があつたのか分からん。

そんな俺に理子は呆れたように言う。

「キーくんあのね……イギリス式の皮肉は回りくどいんだよ。今のは別に本心で素晴らしくないと思ってるのに素晴らしいって言ってるの。それもわざわざ英語で」

「そうなのか。前から皮肉は結構言う方だと思うが、あいつ人を煽る方に知識が偏ってないか?」

「まあ、キーちゃん相手を手玉に取って主導権を握るタイプだからね。下手に突っ込んだら多分、やられるよ」

理子の言うとおり、霧の挑発に乗ったら間違いないで負ける。

それは俺もよく分かつてる。

何せ、霧は頭が回るからな。

それで中学の時に何度か助けられたこともある。

「ジャンヌ、アリアに勝ち目あると思う？」

「微妙だな。彼女自身が強い訳ではないが、相性が悪い」

理子の質問にジャンヌは冷静に答える。

相性は、悪いだろうな……そりゃ。

だからこそチームとしては良かったとも言えるが。

「それじゃあ時刻になったし、お先に失礼」

霧がそう言つて午前11時、防衛側である霧達が先に廃ビルへと軽く走つて入つていく。

「レキ、あたし達も準備するわよ」

アリアは別で突入の準備をするようだ。

すぐにレキを連れてどこかへと向かつていった。

「我々もモニター室へと向かおう」

ジャンヌもアリア達が向かったのを見てすぐにこの廃ビルの中を監視するモニター室へと向かった。

それはこの廃ビルの傍にあるプレハブ。

その中に入ると、

「やあ、みんな。待ってたよ」

ワトソンが先にいた。

俺は少し面を食らって当然の疑問を口に出した。

「お前……来たのか？」

「まあね。何だか妙な事になってしまったみたいだし、気になってね」

ワトソンは言いながらモニターに目を向けると、霧とかなめが廃ビルの中を奔走し色々と仕掛けているのがカメラの映像で表示されている。

それから途中でカメラに向かって霧が投げキッスをしてきた。

俺は思わずドキリとすると同時に呆れる。

余裕だな、あいつ……決闘の最中だって分かってるのか？

「相変わらず思考の読めんヤツだ」

ジャンヌはその様子を見て、俺と同じように呆れてる。

「何だか、楽しそうだね。霧さん」

「その時の状況を楽しみむからね、キーちゃん。まあ、どうやってエリアに一泡を吹かせるか考えてそうな……腹黒い感じがするけど」

白雪が様子を見てそう感想を述べて、理子は流し目をした。

霧を見て、俺は一抹の不安が少しだけする。

◆ この決闘……無事で終わりそうにない気がするな。

◆ 神崎が突入してくるまでもうすぐ。

レキは……狙撃手だから建物に突入してこないだろうね。

この廃ビルを2キロメートル以内で狙撃できるポイントは調べて分かっている。

◆ そして、その有効範囲もね。

だから立ち回りを間違えなければレキはスコープを覗いてるただの置物になる。

それに……こっちが”自由”に動けるための備えもしてある。

上手くいけば速攻で潰せるだろう。

腐ってもSランク武偵……上手くいけばっていうのは希望的観測。

相手も場数は踏んでる訳だし、油断はしない。

私はあの身勝手な行動でキンジを束縛するのは気に食わないから、負けるつもりもないからね。

「さてと、お姉ちゃん頑張りますってね」

性格的に神崎がどう来るかも予想できる。

だから罠を仕掛けるポイントも既に決まっている。

そして、時間になった。

『アリアが来たよ。予想通りに建物の外壁からロープで5階に直接乗り込んでくる』

「だろうね。30分しかないんだし、お得意の強襲だからね」

かなめちゃんとインカムの通信機越しにそう連絡する。

「ポイントは？ 南の方？」

『そうだね。あのだんまりがいる方向』

かなめちゃんの言うだんまりはレキのことだね。

そこも予想通り。

ただまあ、こつちが何を仕掛けてるか分からないのにクリアリングせずに来たのは間違いだったね。

時間がないから仕方ないだろうけど。

「非合理的いつてね」

かなめちゃんの口癖を真似しつつ私は手元のスイッチを押す。

それからすぐに建物の南の方へと向かう。

ガスマスクを着けつつ、私は南の方へと向かう。

この廃ビルはコンクリート造りで、四方にはガラスがなく窓枠だけが残ってる。

頭に簡単に思い浮かべられるシンプルな感じのビルを想像してもらおうと分かりやす

いかな？

階段は西と東に2カ所、表玄関は北に。

中央付近に非常階段の名残があるものが2カ所。

南の方はオフィスみたいな広いスペースが多い。

まあ、つまりは……”罨を張りにくいポイント”な訳だ。

広いと罨も見えるし、見えないように偽装とかしてたら30分なんてあつという間だよ。

あからさまな感じで罨を仕掛けて牽制けんせいすることも出来るけど、だったら防衛目標付近を手厚くしたほうがより時間を稼げる。

神崎もただのバカじゃない、そこは評価するよ。

連続で強襲を成功させてるだけはある。

なので、私はもつと手っ取り早く5階全てが罨になるような仕掛けをした。

防衛側は人質に罨を仕掛けて殺害とかしてはいけないけど、安全を考慮しないといけない訳じゃない。

プシューと、部屋のあちこちから白い煙が吹き出す。

”催涙ガス”——コレを大量に5階に配置した。

窓がないから普通に時間経過でガスは流れていくだろうけど、こんなところに対策も

せずに5分もいたら気管がやられるだろう。

後遺症が出ない、主成分はトウガラシとかのカプサイシン。市販されてる物だけど……それで充分。

機動力を削げるし、レキもこれで見えない。

煙がなくなるのを待ってたら今度は時間が無くなる。

たった1つの方法で相手の選択肢を狭める。

合理的かつ効果的な方法だね。

あれ……待てよ。訓練とは言え強襲成功のタイ記録を持つ神崎を下したら色々目立つかも。

と思ったけど——ま、いつか。

負けるつもりはないし、私のやり方がまだキンジの意に沿ってるし大義名分はある。

今頃は目も喉も多少やられてるだろう。

何らかの対策をしたとしても、ただの付け焼刃だろうからね。

さーてと、煙がある内に神崎を弄もてあそぼう。

次に神崎が行く場所は大体決まってるし。

M500をクルクル回しながら、目的地まで私は鼻歌交じりで向かう。

足音は立てない。

「コホ……ッフ」

咳を我慢するような声が聞こえた。

袖でも口に当てて耐えてるんだろう。

そして、やっぱり階段付近にいた。それも東の階段に。

神崎の侵入をかなめちゃんが私に報告したら私が罨を起動、そして煙が出たと同時に

西の階段をかなめちゃんが、東の階段を私が向かうように段取りをした。

窓から下の階層とか上の階層に行くことも考えたけど、どっちにしてもこの目的地で

ある5階を探索しないといけない以上そんな悠長に上り下りしてる暇はない。

それから煙は空気より重いから下の階層へと向かっていくだろう。

なら、選択肢は自然と限られる。

それに神崎は私が挑発してたおかげで思考も単調な感じになってるからね。

なおさら私の思い通りに動いてくれるだろう。

これはかなめちゃんの出番もないかな。

実質、私と神崎の決闘みたいなものだし。

それに敵に塩を送る訳じゃないけど、精神論とか感情論で動く連中つてのは時に美し

く時に醜いんだよね。

私みたいに悪知恵働く相手だと、周りが迷惑するんだよね……そういうの。

これもキンジのためだと思つて学習して貰いたいものだよ。

ま、情けは掛けないけど。

ピンを抜いて、閃光手榴弾フラッシュ・バンを階段を上る方に投げ捨てる。

すぐに何が来たのか分かったのか、煙の塊が1つ私の方へと向かつてくる。

反応が早いね。

しかも避けるじゃなくて私が投げた方向へと真つ直ぐに向かつてくるあたり、速攻をかけないと負けるのがよく分かつてるらしい。

だからこそ、私はそのままバックステップで後退する。

そして私のいた場所に風を切る音。

得意の二刀流で私に斬りかかってきた。

「この……ひきよう、な」

片目だけを閉じて、苦しそうな声で神崎は言ってくるけど——

「実戦で卑怯も何もないでしょ？ 条件を呑んだのはそつちなんだし。あ、それとも今からそのチャームポイントの額でも地面に擦り付けて無様に降参する？」

そう言つた瞬間にすぐにガバメント2丁を構えて連射してきた。

すぐに横に跳んで部屋の中へと回避する。

どうやら片方ずつ目を閉じて休ませてるみたいだね。

だけど命中率は当然に悪い。

「神崎さんは何のために戦うの？　そもそもこの決闘に意味はある？」

「ある……わッ」

私の問い掛けに律義に答えてくる。

この催涙ガスのせいでモニターしてる連中も何が起きてるか分からないだろうけど、そんなのは関係ない。

放送するためのスピーカーはあってもここに私達の会話を聞くための收音装置はない。

だから、言いたいことも言える。

やりたいように出来る。

キンジにはあんまり見せられないしね。

「へー……そうなんだ。ちなみに私はチームのことを、キンジのことを思っただけで行動してるよ。そっちはどうなのかな？」

「あたしだって……かんがえてッ」

「そうは見えないね」

私のいる部屋に向かって横っ飛びしながら神崎が再びガバメントを構えて連射してくる。

すぐに煙の塊が濃い方へ跳んで身を隠し、部屋を出る。

「あんだ、こそ……コホッ。一体何を隠してるのよっ！ コソコソして、何を企んでるのよー！」

「何が？ 秘密はいくつかあるけど、誰しも秘密の1つや2つ抱えてるものだよ。そんな野暮なことを聞くの？」

答えながら今度は神崎が通路の壁を蹴って、横から斬りかかってくる。

正面から変に相手にする必要はない。

時間が経過していけば向こうが不利になるだけ。

それで良い。

私に何もできず、彼女に敗北を突き付ける。

しかもランクの低い私に。

現状の私で出来るこれ以上ない屈辱だろう。

神崎達には私とかなめちゃんの両方を捕縛するか、目標に辿り着かなければ意味がない。

試合にも勝って勝負にも勝つ。

みんなに見せるのは、私の勝利という事実だけでいい。

条件を吞ませるにはそれで充分。

しかし変に手掛かりも尻尾も掴ませたつもりはないのに、私を妙に疑ってくる。勘が良いのはコレだから面倒なんだよ。

「それに、かなめも……あんたは上手くやるって言うけど、それだけじゃあッ……きつと、ゴホッ——ダメよ！」

ダメ、ね。

確かに私に対して彼女の警戒心は高い。

ただまあ、そんな事は神崎の知るところではないから……もつと別の、私が見落とし
てる事でもあるのかな？

「こっちは慎重に事を進めようっていうのに、強引にこんな決闘に踏み切って何か解決
できるの？」

「そうよ。交渉なんてしてもッ……こっちが下に見られてたんじゃあ対等な話し合いな
んで出来ないわ！ 認めさせるのよッ」

「そうかなあ……結構私情を挟んでた気がするんだけど？」

キンジが独占されるの気に入らないって感じだったし。

だけどもあ、それは理由の1つであって全てじゃないって訳なのかな？

神崎は目から涙を流し、咳込み息も荒くなってきた。

だけど、目は死んでない。

……この程度じゃあ折れないか。

分かってはいたけど。

「だけど、私はかなめちゃんとキンジの味方をするよ。家族だしね」

それは決まってる。

キンジがかなめちゃんを認めるのか認めないので、結末は変わるけどね。

どっちの結末でも良い。

ただ、失ってから分かったんじゃあ遅いって気付いた時の反応をどちらかという見たい。

「ゲホッ……ゴホ」

「喋りすぎだね。悠長にしてる時間はないでしょ？」

もう既に15分は経過してる。

ここに入って10分前後は経過してる。

催涙ガスも回ってきてるだろう。

「ぐっ……！」

まだ片目で撃ってくる。

すぐに煙に紛れて部屋に入って回避する。

瞬間――

パアンと、ガスマスクが撃ち抜かれた。

「——やってくれたね」

慢心はしてないし、油断してたつもりもなかったけど……

まさか誘導されてたとは。

こういう戦闘に関しては頭が回るクセに何で周囲の状況に考えが及ばないのか不思議だよ、本当に。

私は誘導されてた、レキが狙ってる南側——煙が薄くなる風通しの良い大きなオフィスの部屋に。

「ゴホゴホッ……ふふ」

神崎も煙から出てきて、私の正面に来るように立つと咳き込みながらも不敵に笑った。

なにその、やってやったみたいないな感じ。

一矢報いられたんじやあ屈辱的な敗北を飾らすことが出来ない。

それは少しばかり不満、だよねえ……

「かなめちゃん」

「攻守交替だね」

名前を呼ぶと、神崎の横から言葉と共に煙の塊が飛び出す。

「ぐうッ！」

神崎の苦しそうな声と共に鏢競り合い。

神崎の日本刀とかなめちゃんの先端科学剣ノイエエンジンエ・エッジがぶつかり合う。

すぐに私は姿勢を低くして足刀蹴りを神崎の脇腹にめり込ませる。

その勢いに彼女は軽く5メートルほど下がった。

同時にレキからの狙撃。

だけど、かなめちゃんが剣で防いでくれた。

流石は人工天才ジニオンってところかな。

「ナイス」

「ふん……」

褒めてもかなめちゃんはまともに会話してくれる訳じゃないらしい。

そんな事もお構いなしに私はグロツクを抜いて、神崎に向けて撃つ。

すぐに彼女は自ら催涙ガスの煙の中へ逃げた。

私が追ってこないと思ってるのならそれは間違いだよ。

かなめちゃんレキの方を警戒しながらも聞いてくる。

「マスクなくもいいの？」

「ある程度は何とかなる。予備でゴーグル持ってきててよかった。そっちもマスク無

しつぽいけど？」

そう、かなめちゃんもバイザーを装着してるだけでマスクはしてない。

「別に、無呼吸で戦闘する訓練もしてるから……こんな煙の中でも活動できる」
なんて言ってるけど、あれは訓練って呼べる代物かな？

ほとんど拷問っぽい感じだったけど。

「それじゃあ、挟み撃ち。さっさと神崎さん黙らせて家族の時間作らなきゃ」
「それは合理的だから同意してあげる」

なんて言ってる私は水泳で使うようなゴーグルを装着して煙の中へ。

かなめちゃんも同時に入る。

ここまできたら私達を捕縛するくらいしか勝ち目はない。

部屋を探索してる余裕はないだろうからね。

だけど窓のない風通しが良すぎるこのビルじゃあガスももうすぐ流れていく。
時間がないのはある意味こつちも同じ。

レキが見えるようになる前に決着をつけないと。

西と東で回り込むよう二手に分かれる。

そして、私が背後を先に捉えた。

予備を取りに行ってる暇はない。

こっちに気付いたみたいだけど、ガスのおかげで対応が遅い。
遠慮なくその背後にM500を撃ち込む。

「ガハ……ッ」

非殺傷弾ゴムスタンとは言え、かなりの衝撃。

呼吸しづらいのに更に更に肺から強制的に空気を出されるのはなおさら辛いだろう。

煙に紛れて視界から外れ、今度は正面を向いたところで鳩尾みぞおち、脇腹に一発ずつ撃ち込む。

銃声を聞きつけてかなめちゃんもすぐに来る。

だけど——これで終わりにしよう。

と思つたら、唸り声と共に私に何か飛び掛かってくる。

白い毛並みの……デカイ、オオカミ。

ここでハイマキが飛び出してくるとは。

いやまあ、武偵犬……動物は人数に含まれないし。

ハイマキの存在を考慮してなかった訳じゃないけど、ガスがある間はいたとしても来ないと思つてた。

見積もりが甘かったかな？

でも、レキがまだ見えてない以上は2対2。

「うわあ……でっかいワンちゃんだね」

なんて言いながら私に飛び掛かったハイマキをタツクルでかなめちゃんに飛ばした。

しかし、フルアーマーだね……ハイマキ。

中世の鎧みたいな感じ。

飛び掛かられたら鎧の重さと合わせて抜け出すのは難しそう。

ハイマキ自体大型犬レベルでデカいし。

「……ハイマキ、助かったわ」

神崎の言葉にハイマキは『ワウ』と短く吠えて、その後にくしゃみをした。

嗅覚の優れてる犬科の動物にこれはキツイだろう。

なのによく飛び込んできたね。

だけど、もうすぐ時間。

こっからどう逆転するつもりなんだか……

逃げれば勝ちだから無理に追い打ちする必要もないや。

「しようがない、ここまでだね」

「あたし大して何もしてないんだけど？」

「任務達成すれば少なくともキンジとの時間は作れるよ」

「釈然としないなあ……」

と、かなめちゃんは納得してないけどキンジとの時間の方に天秤が傾くから私の言う事にもある程度は納得してくれる。

私の指示なのは気に食わないだろうけど、本人の口癖通り合理的な判断は出来る。

何をもって勝利とするか、だね。

あいにく生憎と私はそんなプライドはないつもりだから、勝利の形に固執する気はない。

逃げれば勝ちってね。

「……逃げる気？」

「そりゃあね。逃げれば少なくともこっちの勝利……条件を呑ませるにはそれで充分」

「あたしは、犯罪者を逃したことは一度も、ないわ。たとえ……訓練でもね」

ホント、プライドだけは一丁前だね。

こんな状況でもよく啖呵がきれるもんだよ。

ジャックとして会った時もそうだけどき。

早死にするか、後悔するよ？ 本当に。

それはともかくさっさと逃げよう。

煙も晴れてきたし。

「レキ、5階……東側の吹き抜け」

神崎が何かを呟いた瞬間に、察した。

こういう時だけはッ!!

「かなめちゃん、通路の脇に隠れて!」

叫んで南の方の窓を向いたと同時に光るスコープの光。

すぐに2人で横つ飛びに避ける。

かと思いきや、ハイマキの鎧から音が鳴ると同時に腹部に銃弾。

——エル・スナイプ跳弾狙撃ッ。

立て続けに2発目の狙撃がかなめちゃんを襲う。

流石に屈曲した銃弾には対応出来なかったか、かなめちゃんも銃弾を受けて怯む。

神崎もこれを逃すまいとばかりに、私の上に飛び掛かり……自分の手ごと手錠を掛けた。

まさか自分を囿に、レキが狙撃できる吹き抜けになつてる通路に誘い込むとは。

吹き抜けだから多少は煙も薄くなつたしね。

こつちが少しでも見えたらそれで良かったんだらう。

「……ゲームセットよ……」

馬乗りになつた神崎が私の手を押さえつけてくる。

かなめちゃんもハイマキに襲われて、動けないみたいだし……

時間もちようど来てしまった。

……最悪な気分だね。

だけど私はにっこりと笑う。

「今回は神崎さんの勝ちだね」

こうして決闘は終わった。

96：体育祭（ラ・リツサ）前編

ほとんど煙で何も見えなかったが、結果だけを見ればアリアのチームが勝利して霧が負けたらしい。

だが、負けた霧の方が無傷でアリアの方がボロボロなのは何でなんだろうな？
それを問いかけたらどっちの機嫌も悪くなりそうなのでやめた。

特に霧は負けた割にスゴい笑顔だ。
圧を感じる。

いつも柔らかい雰囲気霧がここまで威圧感を放っているってことは、負けたのが不満なのだろう。

かなめも不満げだ。

「……それで？　気は済んだのか？」

ジャンヌが霧とアリアを交互に見る。

「負けは負けだからね。それより神崎さんは医務室でも行ってきなよ。効果は薄めてるとはいえ、催涙ガスをモロに吸ってるんだから」

「ゲホツ……そうさせてもらうわ……ホント、あんたつてやりにくい戦い方するわね。分かってはいたけど」

「それが売りなんでね」

アリアの言葉に霧は淡々と返す。

さつきまでの威圧的な笑顔が消えて、今は冷めたような感じだ。

どうやら落ち着いたっぽいな。

「それでは私はアリアさんを医務室へ連れていきます。ハイマキも診てもらわなければならないので」

と、レキとさつきからくしゃみをしてるハイマキを見る。

オオカミというか動物の嗅覚で催涙ガスはヤバイだろう。

確かにそれは診てもらわなければならないな。

「ああ、分かった。こっちは任せてくれ」

俺がそう言うのとレキがペコリと一礼してアリアとハイマキを連れて去っていく。

さて、問題はこっちな。

「かなめも納得したか？」

「腑にはおちないけど、勝者には従うよ。あと実力と諦めの悪さも認める」

かなめの様子は半分納得、半分不服って感じだな。

「ごめんね、かなめちゃん。アレだけ啖呵きつて勝てなくて」

「別に……どうでも良いよ。お兄ちゃんに害がないのは分かったし」

霧の謝罪にかなめは何ともよく分らない回答をした。

そしてクルリと科学剣を回して仕舞う。

「それで？ 私はキンジの部屋から出ていっても良いけど……かなめちゃんはそのままでいいでしょ？」

と、霧がそう言ったところで俺はぎよつとする。

え、そういう話だったのか?!

ここで霧に離れられると困るッ。

かなめは最近少し大人しくなったが2人きりになると何が起こるか分からん。

「ああ、それなら別に問題ないよ……キーちゃん。問題はアリアがそつちの部屋に入つてもりつてところなんだけどね」

理子の言葉に俺は少し眉間を押さえる。

それもある意味で困る。

しかし、霧がいるなら少なくともマシ……なのか？

かなめの行き過ぎた兄妹愛よりは、アリアの方がまだ対応出来る。

それにプラスに考えればボディガードが増えたと考えられる。

もしかしたら、矛先がこっちに向く可能性もあるが……

「そのあたりはアリア本人に聞いてくれ。今回の件は遠山、白野とかなめ……そしてアリア。お前達4人の問題だからな」

ジャンヌがそう締めくくる。

あとは関係ないとばかりに逐次解散していった。

冷たい奴等だ……

残された俺達は何とも微妙な雰囲気で見合わせる。

「とりあえず……帰る？」

「そうだな……」

霧の提案に俺は頷く。

ここにいてもしょうがないしな。

そして俺は失念していた。

アリアのホームズ由来、いや探偵ゆえの行動力を。

ピンポーン！

こんな夕方に来客。

珍しい、と思いつつ俺は思い当たることを考える。

荷物とか別に頼んでないしな。

かなめや霧が頼んでる線もあるが、それなら荷物が届く時間帯とか把握してるだろうし、真っ先に反応するはず。

その2人は今日も仲良くキッチンで料理中だ。

だったら来客の可能性。

ピンポーン、ピピピ、ピンポーン！

……うるせえよ！

早足気味で玄関に向かう途中で気付いた。

どこか既視感のある、この力強いチャイム音はツ……！！

扉を開ける前に分かってしまった俺はドアスコープを覗く。

いる……！！

アリアが、いつぞやのトランクケースを持ってドアの前にツ。

「キンジ〜、アリアが来たなら通してもいいよ〜」

キッチンから霧がそんな風に言ってくる。

予想してたみたいだがアリアをこの空間に置いて大丈夫か？

そんな一抹の不安と共に霧から再び言葉が投げ掛けられる。

「早くいれないとドアがまた壊れるよ〜」

アリアならやりそうだ……

そう思つて素早く俺はドアを開ける。

「5秒以上経つてるんだけど？」

腕を組んでアリアがフンスと、息を吐きながら偉そうに立っていた。

そう言えばチャイムが鳴つたら5秒以内に開けるとか言つてたな。

「それじゃあ荷物、運んどいて」

言いながらずけずけとアリアは玄関を上げる。

このトランクも俺の部屋に押し掛けた時のヤツだな……

大丈夫かよ……本当に。

余計な面倒が増えた気がしてならない。

荷物を居間へと仕方なく運ぶが、その前に中をチェックだ。

アリアが入ってきたことにより、また家の中が台風の目になつて可能性がある。

そして恐る恐る中を覗くと、

「……………」

「……………」

「……………」

3人の間でバチバチと火花が散つてやがる。

霧は相変わらず表情が読めない笑顔だし、かなめは目から光が消え掛かっている。

アリアはそれに対して臆することもなく勝者だとばかりに仁王立ちだ。

他の部屋に移動しようかな。

武藤、不知火辺り泊めて……くれるか微妙だな。

あいつら女子が絡むとあまり手助けしてくれなさそうだし。

「やめよ、不毛だし。キンジが入りづらそうだよ」

「……でいち早く俺に気付く霧が雰囲気を柔らかくした。

「そうね。別に争いに来たわけじゃないもの」

「ふう……分かったよ、お姉ちゃん。ただ、お兄ちゃんは譲らないから」

「別に、キンジはどうでもいいのよ!」

いきなり部屋に押し掛けてどうでもいいって……

相変わらず俺の扱いの雑さにある意味では安心するよ。

「それで、いきなり来てどうしたんだよ?」

一触即発とはならなかったみたいなので、俺は安心して居間へと入る。

「……確かめたかっただけよ。もう帰るわ」

いきなりトランクまで持って押し掛けてまさかの帰る宣言。

理子は部屋に居座るみたいなのニューアンスで言ってた気がするんだが、安心していいの

やら……

流石に変に思つて俺は呼び止める。

「まあ、その……なんだ。飯ぐらい食つていけよ。俺が作った訳じゃないけど。霧もかなめもいいか？」

霧は少し息を吐いて、

「少し多めに作つてるから別に私はいいよ。かなめちゃんは？」

「お兄ちゃんがそう言うなら……」

かなめはダメつて遠慮なく言うと思つたが、何だか大分丸くなつたな。

俺的には喜ばしいが。

案外敗北したのが効いてるのか。

それに双極アルカナム・デユオ兄妹も破綻してるし実質兵器としてかなめは、言い方としてはアレだが失

敗だ。

だが、それでいいと思う。

兵器だの存在意義だの、そんなのは普通じゃない。

こうして普通に食事して、日常を送るのが良いんだ。

「まあ、あんたがそう言うんじゃ……仕方ないわね」

アリアは胸を張つてツンとした言い方をしてるが……どこことなく嬉しそうなのは気

のせいかな？

そのあとは普通に食事をして、食後の紅茶を飲んでアリアは帰ろうとする。本当に帰るのか。

一体何で来たのか分からないが、何となく感じたことはある。

「見送ってくる」

俺はそれだけ言って、玄関へと向かったアリアを追い掛ける。

靴を履いたところでアリアはこつちに振り返った。

「何よ、見送り？」

「そんなところだ。お前、心配して見に来てくれたんだろ？ ありがとうな」

「ちち、違うわよ。別にあんたを心配してなんか……」

あれ？ かなめの心配じゃなかったのか？

って言いそうになったが、多分聞いたらダメな予感があったのでそういうことにしておく。

「それで、一体何を確かめたかったんだ？」

「ああ……それね。何でもないわ、前にも言ったか言わなかったか知らないけど、かなめとあんたは絆みたいな何か繋がってる。言葉では言い表しづらいんだけど、それと、最近霧にも何か違和感を感じるようになったの」

「霧から?」

「突拍子もない話で、あんたは信じないでしょうけどそれを確かめに来たつてのもあるわ。結局何も分からなかったけどね。それじゃあ、せっかくの家族水入らずだからあたしは帰るわ」

「家族じゃねえつて。まあ、気をつけて帰れよ」

アリアはそのまま帰っていった。

結局のところ、これは家族ごっこなんだからな。

「まだ認めないんだ。かなめちゃんのこと」

廊下に出てきた霧が唐突にそんなことを聞いてくる。

「妹とはな。あいつは普通の女の子だ」

「それはそれで口実与えそうなんだけどね」

「……どういう意味だよ?」

「いや、別に。ただかなめちゃんの要望の1つや2つは叶えてあげたら?」

それだけ言って霧はこつちに背を向けて居間へと戻ろうとしたところで、

「ねえ、キンジ。かなめちゃんは本当に家族じゃない?」

顔を向けずにそれだけを聞いてくる。

やたら確かめてくるな。

霧はかなめが気に入ったんだろうか……？

「さつきも言っただろ？ 普通の女の子だって」

「そっか」

霧はそのまま短く答えると、そのまま居間へと入っていった。

◆

◆

◆

体調は微妙。だけど気分は遠足を楽しみにしてる子供のよう。

早く体育祭終わらないかな

久々にキンジの部屋を離れて、理子の部屋で私は文字通りゴロゴロしてる。

「お姉ちゃんがウキウキしてる……これは誰か死ぬフラグ？」

「やだなく、私の上機嫌だからっていつも血生臭いことを考えてる訳じゃないよ」

「エグいことは考えてそう」

理子がベッドの上で漫画を読みながらこつちに視線を合わせずにやり取りをする。

そんな理子の上に私はうつ伏せでのしかかる。

特に反応はしてくれない。

何かイタズラしたい衝動に駆られて、思わず理子の耳にしゃぶりつく。

「ひゃうッ?!」

流石に唐突過ぎたのか、肢体が跳ねる。

良いリアクションいたadaki。

「何やってんの!? 本当に!」

「お姉ちゃん落ち着かないんだよ。もどかしくて、もどかしくて。ねえ、理子おく私なんだかキャラ崩壊しそう」

「キャラ崩壊どころか理性崩壊というか命の危機をすごく感じるんだけど?!」
「大丈夫だつて先つちよだけだから」

「絶対にダメなやつ!? しかもお姉ちゃんの場合は刃物が貫きそう!!」
別にそんな顔を青ざめさせなくても良いのに。

妙なテンションなのは事実だけど、そこまで命の危機を感じなくても。

明日の日曜日には体育祭。

まあ、それは私にとっては前座。

キンジは今頃は雨天中止を願っていることだろう。

しかし、世の中そう上手くいかない。

天気は見事な快晴。

いやー、運動日和だね。

朝5時に集合してリハーサルしなければ純粹にそう思えたんだらうけど。

捜査や強襲で出掛けるせいで事前の練習はほとんど出来ない武偵高。

なので大体は当日の早朝に練習してそのまんまぶっつけ本番。

体育祭に限らずほとんどの行事はそんな感じ。

夏以降いなかったからメインの行事は去年ほとんど参加してない私だけど、情報は

しっかり収集してる。

「私たち選手一同は、武偵憲章に則り、最後まで競技を諦めずにやることを誓います！」

1年の高千穂がそう宣誓する。

確か、間宮にお熱の子だったね。

あと結構な目立ちたがり。

有名な武装弁護士が親で、令嬢でもあるからお高くとまろうとするのは観察しなくて

も何となく分かる。

しかし、それはともかくとして異様な光景だよ。

生徒の全員が武装解除なんて。

まあ、私は仕込みが1つや2つあるんだけど。

ともかく武装が義務付けられてる武偵高で武装なしで行事をやるのは、どうやらこの

国の教育委員会絡みらしい。

色々と説明を省くと過去にフリーダムにバイオレンスし過ぎて児童虐待的なレッテルを貼られてしまったから、健全に学校生活やってますよアピールをしてる。

そんな感じ。

本番はその教育委員会の人達が帰ってから。

なので体育祭は2部構成となっている。

最初は普通にリレーやら玉入れやらよくある運動会の競技を普通にやってる。

武偵高の生徒からしてみれば刺激が足りないだろうけど。

前半は普通の競技をして、後半には教務科にそれぞれ指定された個人競技をやる。

個人競技をやる理由は教育委員会の接待にリソースを割くためである。

つまり教師はそつちで忙しくて見ないから勝手にやってくれて感じて。

訓練とかには注力するけどこっちの行事関係の方は相変わらず雑だね。

私の個人競技は『パルクール』。

建物の壁とか屋上を華麗に走り抜けるあれ。

何でこんな競技があるかは知らない。

とりあえず学園の敷地内を走り抜ける。

スタートからゴールまでの一方通行で、周回するタイプじゃない。

あと、ただ走り抜けて1位になればいい競技じゃない。

一応はフィギュアスケートみたいに華麗にパフォーマンスを決めればそれもポイントになるから、多少は遅くなっても魅せる技が多かったら逆転も出来る。

他にはこんな場所を犯人が逃げても全然追いつけられずよ的なアピールもあるらしい。

そこら辺は裏事情だね。

プロテクターを肘や膝につけて、落下した時のためのエアクッションもコース上にはある。

難易度の高い競技だから、選ばれてるからにはそんなへまをする人はいないだろうけど。

「位置について、ヨーイ……ドーン！」

合図と共に一斉にスタート。

まずは体育館に似た強襲科アサルトの専門科棟。

壁を使ったり街灯を使ったりして出入口の廂ひさしへと登り、それから窓から中へ侵入。柵から飛び降りて私は空中2回転してから受け身を取り、そのまま走り抜ける。

中から外へ出て、続いてはガレージ兼整備工場になっている細長い車輛科ジャンの専門科棟へ。

中では様々な車輛、バイク、それを整備する工具が乱雑に置かれてる。

これコースの配置じゃないでしょ？

まあいいや……

私は車のボンネットの上を滑り、乗り越え、さらに車体の下を整備するキャスターのついた寝板をうつ伏せで飛び乗り、勢いで車高の高いクルーザータイプの車の下を滑り抜ける。

そのまま腕立ての要領で地面を押し出して、足をストッパー兼起き上がる軸にする。そのまま跳び上がって工具箱をバク転で飛び越え、着地して一気に反転して、走る！
しかし……結構な人数が普通に走り抜けてる。

順位的には中の上くらいかな。

競技的にパフォーマンスも必要だから順位はあんまりこだわる必要はない。

そのまま淡々とコースをクリアして最後に空き地に設営されたエクストリーム・スポーツのゴールへとたどり着いた。

微妙な体調にしてはよく動けてたかな？

順位。プラスチックポイントで10人中の4位つてところだね。

まあ、こんなものでしょ。

「ん〜！」

背伸びをしてるとキンジが背後から近付いてくる。

「今ゴールか？」

声をかけられて振り返り、キンジはスコアシートを持っていた。

「そんなところ。キンジはスコアの収集係？」

「まあな」

「どうせ個人競技が面倒だからって適当な雑用を買ってでたんでしょ？」

「否定はしない」

どうせ見破られると思って開き直ったね。

しかし、そうだと堂々とは言わない。

「別にいいんだけどね」

「それはそうと4位か。パルクールとかお前も運動神経いいよな」

「神崎さんには負けるよ。彼女、壁走るし」

実際に神崎はパルクールの要領で壁を走る。

あとゲームみたいに狭い通路なら壁キックして移動や上にも登ることが出来る。

話しながらもキンジはスコアの集計をする。

「あいつは規格外だからな。さつきもインラインスケートでフラットスピンとか決めてたし」

「プロ顔負けの運動神経の武偵なんてザラにいるよ」

言いながら髪を少しかきあげて、動きやすいように結わえてた髪をほどく。

多少汗で濡れてた髪が落ちた勢いで少し雫が飛ぶ。

それに見てキンジは顔を少し逸らした。

こんなでも反応するとか。

いい加減私から視線を逸らしたら余計に追い討ちが来るって学べばいいのに。

「キンジのエッチ」

「言いながらシャツをパタパタするな」

「暑いんだから仕方ないでしょ？」

「せめて俺のいないところでやってくれ」

「断る」

キンジはすぐに背を向けて、

「まだ競技が残ってるから俺は行くぞ」

やれやれって感じでどっか行った。

ふう……あの反応じゃあ何人か自分に魅力がないと勘違いする女子が何人かいそう。

別にどうでもいいけど。

そう言えば、キンジってば結構匂いに敏感だった筈だけど変な匂いしてなかったかな？

もうちよつと意識しとけば良かった……

97：体育祭（ラ・リッサ）後編

そして、教育委員会の関係者が帰って時間的にも体育祭などやる時間帯ではない午後5時。

“ここから”第2部”が始まる。

つまりは武偵高特有のドンパチが始まる訳である。

男子は実弾サバゲー、女子は水中騎馬戦。

競技名を聞いただけでキンジは卒倒しそうになってることだろう。

ちなみにバスカールビルの女子はやる気まんまん。

全員戦闘員で出るつもりで誰もセコンドをやりたいとは言わない。

私？ 決まりきったことだよ。

面白そうな方をやるに決まってる。

ただ騎馬戦は4人1組。

別で組むしかない。

生憎と交流関係は私はそれなりにあるから、問題ない。

バスカービルのメンバー5人中2人はコミュ障、1人はお嬢様って言うか高嶺の花的な感じで誘われない。

私という殺人鬼が精神的にはアレでも一番生活的にまともなのは毎回皮肉だよな。前も考えてた気もするけど。

そして、キンジはこういう時に運がないのは分かりきった話。

どうやらセコンドがいない件についてキンジが蘭豹に電話したら「お前がやれや!」とぶちギレられたらしい。

どうやら機嫌が悪かったらしい。

なのでキンジがセコンドに来る。

普通の男なら鼻の下を伸ばしまくりなラツキーイベント、だけどそこはほら……キンジだから。

なので私は全力で目の毒にするつもり。

かといって痴女みたいな水着は着ない。

あからさま過ぎたら間違ひなくキンジは見てくれないし、避けるからね。

女生徒は更衣室でそれぞれの水着へと着替える。

水着の指定はないからみんな思い思いの水着を着る。

正直、私もキンジみたいに持病持ちみたいなものだからある意味この空間はダメだ。

目の前に……いい感じの柔肌が。

ああ……こういうの見てるとやっぱ殺りたくなる。

……別のことを考えよ。

白雪さん、いくら女子しかいないからってマイクロビキニはいくらなんでも際どすぎ……

乳の肉がはみ出してる。あとお尻も……

それを見て、着替えてる途中の神崎は歯ぎしりしてた。

分かりやすい嫉妬をしてるので肩を叩く。

「諦めなよ……」

「いきなり話し掛けてなによ!」

だって高校生の割に悩殺ボディ過ぎる白雪さんと一部の性的嗜好にしか刺さらない体型の神崎では比べ物にならない。

「キーちゃん、黒ビキニってセクシーだね。誰を悩殺するつもり?」

スクール水着というニッチな格好の理子が話し掛けてくる。

理子の言うとおりシンプルに黒ビキニ。

動きやすいようにポニーテールに髪を結わえて、私は答える。

「そんなの決まりきってるよ」

私はそこでにつこり笑う。

「お熱いね……」

理子は呆れたように言うのだった。

さて、プールサイドへと行けば案の定キンジがいた。

しかも大きなバリステイクシールドを持って。

流れ弾対策と視線をカットするための策で先生——高天原先生辺りに貰ったんだろ
う。

他の先生は気合いで避けろとか、当たるところにいるなとか言ってきたきそうだし。

準備体操も終わったところで、色々と作戦タイムやら騎馬を実際に組んだりして動き
の確認をしている。

しかし、準備体操中はキンジこつちを全く見なかったね。

当たり前と言えば当たり前前だけど。

いの一番で私はキンジの正面へ行く。

シールドには覗き窓的なスリットがある訳だけど、位置的には腰辺りの高さ。

それから面白半分で盾をノックする。

「入ってますか〜」

「正面に来るな……頼むから!」

「いい機会だし耐性でもつけたら？」

「いくらなんでも無理だろ、ここは俺にとっては最後の楽園なんだ」

キンジは言いながら微妙に盾を動かして主張する。

「随分と無機質なオアシスだね」

「うるせえ……。既にここはアフガンみたいな紛争地帯だよ」

「まだ誰も撃つてないよ」

「どこもトラップだらけだろ……」

いい感じにジョークが冴えてるね、キンジ。

「でもせっかくだし私の水着の感想でも聞かせてほしいな？」

言いながらちよつと腰を突きだして、盾のスリットを覗き込む感じ。

お腹周りとか腰周りには結構自信あるよ、私。

レキもなかなかだけど、あつちはシャープって感じで私はセクシーって感じ。

「あー……似合ってるよ。ヒステリアモード病ヒステリアモード気になりそうなほどにな」

と、キンジはさっさと感想を述べてやり過ごそうとしてる。

でも、本音で言ってるので良しとしよう。

適当に流すかと思つたら真面目に答える辺り、堅いというかなんというか。

まあ、素直に感想を言ってくれたので私はその場を離れる。

「よろしい。それじゃあセコンド頑張つてね。まともに見えるか知らないけど」

「そう言えば……お前は誰と組むんだよ？　バスカービルは5人だろ？　つて言うか

お前がセコンドやつてくれればよかつたんじゃねえか」

「ただ見てるだけじゃあ面白くないからね。いつもみんなと一緒にいるけど私は交遊関係広いんだよ」

それだけ言つて私はそこを後にする。

それから背後でギヤーギヤーと騒ぎが大きくなる。

どうやらバスカービルのメンバーがキンジに絡んでるみたい。姦しいね。

そして、私のところにメンバーが集まつてくる。

すっかり影の薄くなつてしまった私をライバル視する女生徒、東海林しやうじ 夏海なつみ、いつぞ

やに試験で戦つた百地ももち 桃子ももこ、あと1人は同じクラスの女子で名前は

名取なとり。

「白野さんと同じ騎馬とは感激です！」

彼女はキャラが濃いというか、私を見る視線が熱つぽい。

今も微妙に鼻息が荒いし。

ジャンヌ程じゃないけど、私も何故か一部の女子に人気がある。

何でも子供っぽい無邪気さと、時に真剣な目になる時のギャップに惹かれるらしい。

ふ、我ながら罪な女だね。

と内心でおちやらけてみたり。

「それでどうすんだよ？」

競泳水着姿の東海林が男勝りな感じで聞いてくる。

「うーん、私が上がかな。この中じゃあ一番小柄だし。東海林さんが前なのは決定で、あと2人の左右は……右側が百地さんで、左が名取さん。安定性は崩れるけど片手でも騎馬は組めないことはないし、名取さんは左利きだもんね」

「なんで知ってるんですか?!」

「まあ、人間観察が好きだね。なんとなくーくクラスの人の癖とか、そういうの見てるんだよ」

嘘は言っていない。

ちなみに2年生全員の観察はほとんど済んでる。

だから誰でもなれる。

家庭事情、筆跡に指紋、声調に肌の質感まで私は記録してる。

「だから利き腕の方側に配置しておけば弾倉マガジンとか取りやすいでしょ？」

「なるほど、理にかなっております」

と、百地はサラシにフンドシという水着じゃないマニアックな格好できた。

言ってる本人は理にかなってない格好してるんだけど大丈夫かな？

それなりに身体能力高いからそこは安心してるけど……

「で、どのように動くんですか?!」

さつきから名取がグイグイと私に迫ってくる。

ワンコっぽい無邪気さで何とも騙し甲斐のある感じ。

別に何もしないけど。

こういう無垢な人を絶望に叩き込んだり、都合のいいように使ったりするのもそれはそれで興奮するんだけど……

私はどちらかと言うと変にプライドが高かったり、自分の思うとおりに世界を動かしてると思ってる役人とか小悪党染みた人を絶望に叩き込む方がいいリアクションをしてくれるというか……興奮するというか……そんな感じ。

あとは闇深い感じも好きだね。

……何を考えてるんだか。

ともかく、今は騎馬戦の作戦を私は説明する。

「ちよつとした道具を使うよ。手堅く行こう」

◆ ◆ ◆

「使用弾は非殺傷弾、粘着弾、潤滑弾や。弾倉に入れてぎょうさんバラまいたから好きに

ゴムスタン

ステイッキ

アンカケ

使え！ 1年入水！ 続けて2年いけや！」

とうとう蘭豹の怒声……ではないがデカイ号令と共に競技が始まってしまった。

屋内プール棟の外から銃声。

つまりは実弾サバゲーも始まってしまったらしい。

今思えば不知火辺りに頼んで軽く撃たれてリタイアした方が楽だったかもしれない。

女子達は「きゃー！」とか「冷たい！」とか黄色い声を上げながら入水している。

しかし、これはありがたいぞ。

騎馬の上の騎士はともかく下の女子達はプールの水で危険な水着姿が見えなくなつた。

あと競技に夢中なのと俺の存在感が薄いお陰でこつちに注目することもない。

恥じらいを見せられるとヒスる可能性が何故か高まるからな。

そして、あまり見たくはないが何となく俺は白組であるバスカービルのチームの様子を見てしまう。

試合の行方は少なくとも気になるからな。

見つけたのは霧だ。

黒ビキニでポニーテールという運動しやすい感じの霧だが……見るんじやなかった。

白雪ほど暴力的ではないがレキよりも女性らしい曲線が目映る。

「残念だけど、このハチマキは安くない、よー！」

いつもの軽口を叩きながら霧はグロックで応戦している。

流石にフルオートは禁止らしい。

こんな機動力がとれない騎馬戦で連射できるサブマシンガンやアサルトライフルを持ち出したら、そりゃ競技にもならないただの戦争になるだろう。

あと、霧は左腕にビート板をバンドで装着して盾にしている。

あいつのことだから事前に先生に有りか聞いて他に情報は回さなかったな……。ちやつかりしてやがる。

あ……俺が見てるのに気づいたみたいだ。

そして、霧はニツコリ笑ってウインクしてグロックを持つてる右手で投げキッス。ドクンと、俺は見事にやられた。

……完全にはならなかったが、ほぼ今ので血流が来る一歩手前までやられた！

お前は……マジで……！

前までは俺の病ヒステリアモード 気を配慮してあんまりそういうのしてこなかったのにツ……。

最近は妙にアピールしてきやがる。

別の、別のことを考えるんだ！

「フハハハ！ 蹂躪せよ！」

アリアではないアニメ声に視線を向けると、あれは……2年の課報科レザドの鐘撞友美かねつきともみ。
アニメーション同好会の会長だ。

小学生みたいな小柄な体格を生かしての潜入が得意らしい。

アニメーション同好会は専門科や学年を越えて繋がりがあある一大勢力だ。

その周囲にはおそらく同じ同好会のメンバーであろう赤組の騎馬複数が霧に向かっている。

ビート板のシールドなんて持つてるから目をつけられたらしい。

「仕方ない、転進！ 敵の射線を利用して味方と合流！」

分が悪いと判断したのかすぐに霧は後退した。

流石の判断力だな。

そして敵の射線を被らせたりしながら、撃てない位置取りを指示しながら霧は後退していく。

まるで密林を抜ける蛇のような素早さだ。

しかし、それを遠目で霧に対し狙撃主が狙っていた。

マズイ気づいていない。

叫ぼうとしたがすぐに霧はニヤリと笑って、ビート板を自分の腰辺りに動かすとその場所に着弾する。

相変わらず立ち回りが上手い。

「今だ！ 撃ちまくれ！」

と思いきや狙撃を防いで硬直した瞬間、誰かが叫んだのを合図に一斉に霧に撃ちにかかった。

流石に面倒だと思つたのか本格的に潰しに掛かつてきたようだ。

「キヤアア!」 「これはヤバイ！」

一斉掃射に霧の騎馬を組んでる女子たちが悲鳴を上げる。

つておい、何だか段々とあられもない姿になってつてるぞっ?!

潤滑弾の比率がやたらと多いせいかわランスが悪くなつてるのもそうだが……霧が

その影響でテカテカになってエロい感じになってしまつてる。

「もらつたー!!」

諜報科レザドの騎士が背後に忍び寄り、そのまま霧のハチマキを取ろうと肉薄する。

霧は滑り落ちないよう大きな動きをせずハチマキを狙う手を払った。

瞬間、その手は霧のハチマキの方向を逸れて黒ビキニ引つ掛かりー2つの丘が

……つてあぶねえ?!

今のはマジでヤバかった。

とつさに下を向いたお陰で直視せずに済んだが……とにかく今のはヒスるの確定な

光景が目に見え込んで来るところだった。

ここでプールを見るのは危険だ。

しばらく下を向いてー

「おいコラ、遠山！ しつかりセコンドやらんかい！」

と、蘭豹から後ろから蹴られる。

くつ、無防備な背後から蹴るとは卑怯な。

つて言うか痛いぞ普通にツ。

蹴られた衝撃で盾のスリットからプールが見えてしまった。

しかも霧の方向に。

そこでの霧は……今まで見たことない表情だった。

腕で布がない胸の部分を隠しながら、俺の方を少し見て、悩ましげな顔を少し隠した。

照れてる、のか？

「今よー！」

「合理的に包囲殲滅ってね」

アリアの合図でいつの間にか白組が赤組を包囲している。

かなめもアリアの隣で奪ったらしい豊和M1500・ヘビーバレルを構えている。

そして霧の背後にいる騎馬を組んでる手とかを的確に狙撃して崩させる。

「貸しーつだよ、お姉ちゃん。しっかりしてよ」

かなめは霧に対してイヤミっぽい言い方をする。

それに対して霧は、

「生意気な妹だこと」

言いながら落ちたビキニを拾って何とかけ直す。

それからすぐに霧はクロックで素早く左右から迫って挟撃してくる騎馬を撃ち抜き、崩した。

そのまま包囲を突破してアリア達に合流する。

「あんた……べちゃべちゃね。それでよく崩れなかったわね」

「気分は崩れたけどね。もう手も今なのでヌルヌルだよ」

アリアに言いながら霧は実際に手の方にまで潤滑弾が来たのかグロックをぼちやんとプールに落とした。

さっきの射撃が最後の抵抗だな。

「あとはこっちに任せて」

「もう終わりでしょ……散々引つ掻き回して良い感じにまとまったことだし」

アリアの言葉に霧は終わりだとばかりに返した。

「我らが寡兵として恐れるな！ 敵は既に包囲されまとまっている。側面から突撃ー!!」

と、ジャンヌがどこで売ってるかも分からないデツカイ真紅の薔薇が描かれた白いハイレグを着て、果敢に突撃する。

ノリノリだなあ、あいつ。

ご先祖の真似事か、鼓舞して指揮してるがやってることはあられない騎馬戦なのが何とも間抜けだ。

さてあれからジャンヌの鼓舞により士気が上がった1年生軍団の側方の突撃と同時に散々に赤組を打ち負かした白組。

サバゲーでも白組が勝利したこともあって、2倍以上の得点差で白組は勝利した。

プールサイドで勝利の歓声を盾の裏で聞きながらも俺はそそくさとその場を立ち去る。

不意に止まってアリアとかなめを遠目で見てる分に、あいつらは問題ないようだ。

そして、霧と視線もあつたがあいつから視線を外して、ちよつとだけ腕を組んで胸を隠すような仕草をした。

ちよつと呆れ顔で視線を外し、見てないアピールをする。

俺が自分からヒステリアモードになる要因を作る訳がない。

さっきのは事故だ、事故。

又メリが扇情的で若干ヒスリ掛けたのは内緒だが……霧にも恥ずかしい気持ち

残ってるのは分かってよかった。

理子と一緒にで平気に触らせてきたり見せてきたりするからな。

そういう羞恥心が全くないかと思ってたが、それが普通だよな。

そう考えながら俺は今度こそその場を後にした。

◆ ◆ ◆

ロッカーで着替えながら私はさっきのアクシデントを思い出す。

事故とは言え、さっきの姿はあまりにもあられもない姿だとは思う。

何てことはないと思ってたんだけどね。

今までキンジに対してあの手この手で誘惑してきたし、今更何を恥ずかしがる必要が

あるのか。

そう思ってたんだけど……思ったよりも私は熱に浮かされてるらしい。

ロッカーの鏡を見て、霧じやなく”私”を見る。

あーあ、女の表情だよ……完全に。

思い出すだけで少し赤くなる。

今までに知らない感情。

観察ばかりで体験したことはなかったから、どんなものかと楽しみにしてたけど

……こんなに困惑するものとは思わなかった。

ハアとため息交じりに吐いた息も熱っぽい。

霧じゃなく、私を見て欲しいって思っちゃう。

ロッカーをパタンと閉じて取り敢えず落ち着く。

だけで、殺したい、欲しい、そんな感情が微妙にうずく。

最近はどうも安定しない。

何とかしないと、と思つてたら連絡が来た。

かなめから集合の連絡。

話したい事があるって内容だけど、おそらく自分の出自を打ち明けるつもりなんだろう。

何だかんだバスカービルのメンバーというかこの国の特有というか、誰も出自とかかなめがどういふ存在かなんて微塵も気にしないだろう。

場所は14区の廃車置き場。

食事は基本的に競技の合間に食べるものだけど、「戦闘中に食事するやつがあるか」とか言う女教師の方針で体育祭後に食べるという訳の分からない習わしになってるから、みんな食事を持ってくるだろう。

まあ、こうなると思つて部屋に作り置きしてるから温めて持つてこよう。

コンビニやら周辺の店は弁当を確保しようと他の生徒で混雑してる上に品薄になっ

てるだろうしね。

で、キンジはおそらく出遅れておにぎりすらないコンビニを見てたかりにくる、と。容易に想像できる。

これでまた貸しが増えるね。

そうと決まればさっさと用意して行こう。

という訳で私は温め直した弁当を詰め込んだピクニックケースを持って廃車置き場へ。

「キーちゃん、こっつちこっつち」

フォルクスワーゲン
Volkswagenのバス、タイプ1とはまた骨董品だね。

その車の扉の陰から理子が手招きする。

中には既にバスカービルの女子メンバーが既にそろってる。あと、かなめも。

そのかなめの表情は少し暗い。

まあ、彼女からしてみれば自分の出自なんて普通と違いすぎて気持ち悪いと思われ
るって考えてるだろう。

「本格的だね、霧さん」

「人のこと言えないでしょ。バスケットなんて持つてきて……見越してるね、白雪さん」

「お互い様だよ」

と、白雪は言い返してきた。

張り合う訳じゃないけど、白雪も結構なお手前だからね。

そんな中、理子がぶーと面白くなさそうに顔を膨らませる。

「またキーくんの為に作ったでしょ？」

「ちゃんと皆の分も作ってるよ。どうせキンジのことだから弁当類が買い漁られるのを予想できずにこっちにたかりにくるだろうとは、思ってるけどね」

「出た、キーちゃんの行動予測」

「キンジの行動を予測しても面白くないでしょ？」

神崎は既にももまんを放りながら言う。

「面白くないとかじゃなくて、ただ貸しを作りまくって私の言うことを聞いてもらえるようにしてるだけだよ」

「あんた……その内刺されるんじゃないの？」

ジト目を向けてくる神崎。

失敬な……私は刺される方じゃなくて、どちらかと言えば刺す方だよ。

性別的には刺される……これは下ネタ過ぎるからやめておこう。

「それより、本題はかなめちゃんでしょ？」

さつきから俯いてるかなめに私は話を振ると、全員が視線を向ける。

仕方ないから助け舟は出しておこう。

一応はお姉ちゃんだし。

「かなめが私をどう思ってるかは分からないけど、これだけは言っておくよ。かなめはかなめで、それ以上でも以下でもないってね」

「たまには良いこと言うじゃない、霧。あたし達はかなめの話を否定するつもりは最初からないわ。話したいなら話しなさい。話したくないならそれでもいいわ、あたし達はそれを受け入れる」

と、神崎はカリスマ性のある言葉を掛けた。

何だかんだキンジとは別で妙に器が広いんだから。

キンジに対しては狭いけど。

それから意を決したかなめが静かに話し出す。

「あたし……あたし、はー」

かなめは自分の全てを話した。

自分の出自、どういう存在かを。

こっちが欲しい情報はそう簡単に話さなかったけど。

ジーサードの目的とか。

まあ、それは私は知ってるから正直どうでもいいんだよね。

かなめが全てを話し終え、

「あたしは、人間じゃないの」

自分が思い悩んでる事を吐き出した。

「それは違う。そんな訳はないわ！ あんたは人間よ」

アリアが真っ先に否定した。

しかし、かなめは自信がなさげだった。

「だって、あたしは普通じゃないんだよ……」

「だからどうしたって言うのよ。兵器だって言うならそんな風に悩んだりしないわ。人

間だからこそ悩んでるんじゃないの？」

なくんか、誰かさんも言いそうなセリフだね。

神崎の言葉にかなめは目を見開いてる。

瞬間、神崎の携帯に着信があった。

すぐに神崎は出てなにかを話してる。

「武偵憲章の悪用は禁止よ、ハイエナさん。あたしたちなら14区の廃車置き場にいるから。かなめもいるわ」

そして電話を切った。

予想通りキンジが弁当を買いそびれてたかりにきたね、おそらく。

「ま、取り敢えずは食事にしようか。はい、かなめちゃんにはクルミ入りキャラメルマフィン」

と、私はピクニックケースをいれてる袋の中からキャラメルマフィンを渡す。

「……ありがとう」

警戒しながらも受け取っては貰えた。

なあなあで心を開いたりはしてくれないよね〜そりゃ。

しばらくしてようやくリーダーがお出ましみたいだね。

車内に顔を覗かせたキンジを見てかなめちゃんが声を上げる。

「あ、お兄ちゃん」

「……お前ら、リーダーである俺をハブるんじゃねえよ」

「女子会に参加したいの？ あと、弁当がなくなることくらい予想したら？」

と、私が言ったところでギクリとした顔をする。

凶星だからじゃない。

このあとの流れが分かっているからキンジは動揺してる。

「たかりにきたなら、見返りぐらいあるよね〜。まさかリーダーだからって手ぶらじゃ

ないよね〜」

「そうだそうだ。ただ飯なんて都合よく貰えないんだぞ〜」

理子も私の悪ノリに便乗する。

「飯ぐらい少し分けてくれてもいいだろ……別に」

「別にいいけどね。そんなことだろうと思つて用意したわけだし。さて、次はどう返して貰おうかな〜♪」

「白雪、すまんが少し分けてくれ」

あー、そういうことするんだ？

貸しを作りたくないからつて白雪を頼るなんて、酷い話だよ。

しかし、意外なところから助け舟が出る。

「う、うん。いいけど……霧さんも食べて上げてね」

「知らないのか、白雪。霧に貸しを作るとあとが怖いんだぞ」

「でも、せっかくキンちゃんのために作ってくれたんだから勿体ないよ」

ここら辺はキンジを想う者ならではの気持ちを汲んでくれたみたい。

仕方ない、白雪に免じて折れてあげよう。

「分かったよ、貸しにしないから。みんなも遠慮なく食べて」

と、私は中身を広げる。

鶏の唐揚げとかフライドポテト、それからマッシュポテトにおにぎりが何個か。

神崎はいつもの勘が働いたのか、目を細めて笑う。

「あたし達とかなめが同じテーブルにいるのが不思議そうね。キンジ」

「まあな。前は銃やら剣やら向け合う仲だったし」

「いつものことでしょうに。それ言ったら白雪さんと神崎さんどうなるの」

私のツツコミにキンジはそれもそうだと呟き、私に目を向ける。

「お前もかなり不機嫌だったろうに、もういいのか？」

「うん、神崎さんが空気読めないのはいつものことだし」

「よし、もつと空気読めないこととしてあげるわ」

ここで神崎が撃鉄ハンマーを起こす音がした。

相変わらずだね。

「おいバカ、食卓で撃鉄ハンマーを起こすな」

キンジは焦る。

しかし、私はどこ吹く風でご飯を渡す。

「はい、キンジ。おにぎり」

「ありがたいが、今そういう流れじゃないよな？」

対して神崎は冷静になる。

というか呆れてる。

「まったく……ともかくもう遺恨はなし」

「そうか。まあ、仲良くしてくれるならそれに越したことはない。しかし、こんな穴場をよく見つけたな」

「ここには、かなめえが呼んでくれたんだよ。自分の事を話すために」

神崎と共にハンバーガーやらポテトやらを広げてた理子が、キンジとかなめを見る。

「……自分の事？」

キンジがそれを聞き返して、

「かなめは人工^{ジニオン}天才^{ニオン}オーロスアラモスの研究所から逃げてきた人間兵器^{ヒューム・アモ}」

神崎の言葉に少し面食らう。

ワトソンとは情報を共有してたけどそこら辺は、キンジに一任されてた。私にもね。

キンジとかなめは何かアイコンタクトしてる。

おそらくは自分達の体質に関しては話してないというアピールだろう。

「……どう思った。お前らは？」

「どうもこうも『ふーん、で？』って感じね。本人からしてみれば重要な事かも知れないけど、かなめはかなめ。それ以上でも以下でもないわ。自分のことを人間じゃないなんて言ったらそこは否定したけど」

他のメンバーもそれに同意してる目をしてる。

私？ 私には割と最初からかなめは人間扱いしてるよ。

「……一番大事なこと、まだ、言っていなかったけどね……みんなのこと知らなくて、急襲した夜のこと……」

かなめが少し振り絞るように言った言葉に神崎達が振り向く。

そして、意を決したように顔をあげて瞳を潤ませ、

「……ごめんさい」

謝罪した。

しかし、襲われた敵に謝罪されるなんて展開に困惑して神崎達は顔を見合わせる。

「誰も気にしてないよ。私襲われてないけど」

「あんたこそ空気読みなさいよ」

私がおちやらけて言うのと、神崎がジト目を向けてくる。

「わざと茶化したんだだけだね。みんなお互いに変な雰囲気を作っちゃって」

「いつもそんな感じだろ……ある意味では空気読んでるけど」

私の言葉にキンジもおにぎりを食べながらツツコミが入る。

それから、ピクニックみたいな感じになって色々と話した。

かなめに仲直りの印としてバスカービル女子合作のキメラレオポンを渡して、それが嬉しいのかなめが泣いて。

彼女の色々な表情が見れた。

そして、神崎と白雪は何やらバチバチと静かに女の戦いを繰り広げていた。意識すればどっちが正妻に相応しいか的な内容だったけども。

キンジは嫌な予感がしてただけでそれがどういう意味の争いなのかまったく理解してないのはいつも通り。

その後――

神崎とレキは何やら仕事で、白雪は生徒会の用事、我が妹の理子はニコニコ生放送があるからと帰った。

3人だけがバスに残り、すっかり日も落ちた。

キンジが武偵手帳に挟んでいたLEDライトを天井から吊り下げて灯りにする。

私は一番後ろのシートで横になり、かなめとキンジは頭を合わせてL字になる形で別のシートに横たわってる。

「キンジ、少し焦ったでしょ？　かなめとみんなが一緒にいるって聞いて」

私が話を振ると、キンジはまあなと答えた。

「お前も珍しく機嫌悪かったし、何か起きると思って身構えたぞ」

「私でも虫の居所が悪い時はあるよ。神崎さん、空気読まずに独断で突撃してくるし」

「そりゃあまあ、アリアだしな〜」

もう既に慣れたような感じの言い方してるけど、またどうせ爆発しそう。

「お兄ちゃん……あたしのこと、心配してくれたの？」

「そりや色々とあつたしな。お前らが問題を起こしたらリーダーである俺が責任とるハメになりそうだし」

かなめの言葉にキンジは最後に保身に走った事を言った。

相変わらず素直に言わないね

そつちも本心なんだろうけどさ。

「ちなみにお姉ちゃんも心配してたんだよ？」

「お姉ちゃんはどうでもいい」

バツサリ。

やっぱりなあなあで心は開いてはくれないか。

一緒に料理をしてキンジの話で盛り上がったのに。

かなめは私を気にせずに話を続ける。

「ー白雪さんは鋭いね」

「……鋭い？」

「お兄ちゃんが来る前にね、こつそり話してたの。『私には分かるよ』って」

「何をだ？」

「あたしとお兄ちゃんが、兄妹って事」

「……」

そう言えば白雪、何か人を見ただけで性格とか素性を判別できる能力があったね。写真でもいいらしい。

ハッキリと見える人と見えない人が分かれるらしいけど。

波長を読み取ってるみたいな感じだから、私には通用しない。

超能力^{ステルス}方面の対策もしてるに決まってる。じゃなきゃ、グレードの高い能力者がいたら見破られるしね。

「お前なんか……妹じゃない。誰が何を言おうと認めんし、信じないから説明もいらん」

不機嫌そうに言うキンジ。

そして、かなめの心が動揺してるのが私には分かる。

半ば諦めている感じではあるけど、それでも傷付くものは傷付くんだろう。

「えへ。ツンデレお兄ちゃんと2人。あたし、嬉しいな」

あのく私もいるんだけど？

と思ったけど、私は敢えて何も言わずに静かにする。

がさりと何かがこの車の近くで動く音がした。

「かなめちゃん」

「分かってる」

私が名前を呼んだところで、何も余計なことを言わずにそれだけ答えた。

キンジだけは少し分からない感じの顔をしてる。

もう一度がさりと音がした瞬間にかなめは横のドアから転がり出て剣を抜き、私は車の後ろのガラスがないところから天井のLEDライトをかつさらいながら飛び出てグロックとライトを音のした方に向ける。

撃鉄を起こして、かなめもテラナとか言うヘッドマウントディスプレイを装着する。

「おい、どうしたんだよ」

何も構えずにキンジが素人みたいに車から出てきた。

し、と私は静かにするようにキンジに人差し指でジェスチャーすると、キンジは黙る。

しばらく構えても、リン、と鈴虫の音しかない。

「誰もいない。逃げたみたい」

暗視装置もあるだろうテラナを外してかなめは答える。

「最近は何騒だね。まあ、物騒な争いに首を突っ込んでるんだから当たり前だけど」

私とかなめのやり取りにキンジは流石に気付いたのか。

「誰かいたのか？」

「多分ね。少なくとも動物じゃない」

私が照らしたところには足跡がある。

それも人の足跡が。数は1人分だけだ。

「もう帰ろっか」

「そうだね」

私の言葉にかなめは同意して剣を仕舞う。

キンジも何も言わず頷く。

「ふふ……」

唐突にかなめは何かを思い出して、少し笑う。

キンジは不思議になり、聞いた。

「どうしたんだ？」

「ううん……今日みたいに、明日も過ごせるかなって。最後に少し台無しにされちゃっ

たけど」

「ーこんな時間、これからいくらでも作れるだろ。メシをダラダラ食うのは大得意だ

ぞ、みんな。なんなら明日も一緒に食べばいい。俺も来てやるから」

「それよりも家族水入らずで過ごしたいけどね」

「家族じゃねえって」

私の言葉にキンジはこれほごっこ遊びだと続きそうな顔をしてる。

「ま、人生って楽しいものだよ」

私は気にせずに言葉を続ける。

「人生……か……ふぁ」

かなめは眠いのか、少しあくびをする。

今日は嬉しかったり楽しかったり忙しかったしね。

無理もない。

「背負ってあげたら、お兄ちゃん」

私の言葉にキンジは少し困りながらも、ま、いいかと言った感じでかなめに背を向け
てしゃがむ。

「ほら、疲れてるならさっさと来い」

「いいの?」

「いいんだよ。甘えるぐらいはな」

かなめは嬉しそうにしてキンジの背中に乗って腕を回す。

そしてキンジはゆっくり立ち上がって帰路についた。

「ふふ……おつきいねお兄ちゃん。それに温かい。……お兄ちゃん、ありがと」
すぐに安心したように秒でかなめは寝た。

そのまま歩きながら、私はニシシと笑いながら話し掛ける。

「流石はお兄ちゃん。妹であろうと女の子であれば手玉にとるとは」

「人聞きの悪いこと言うな」

「それはそうと、明日はかなめちゃんと一緒に2人で過ごしたら?」

「唐突に何だよ?」

「さつきもそうだけど、怪しい感じだからね。かなめちゃんが誰かに狙われてないとも限らない。楽しいことは楽しめる時にやつといた方が良いつてことだよ。望みの1つや2つ叶えて上げてもバチは当たらないでしょ?」

「……そうだな」

そうして私達は家族のように家へと帰った。

キンジの背中にいるかなめを見て、私は笑顔になる。

明日のことを考えて、楽しみに、笑顔で。

ーいつまでも、笑顔で。

98: Good for —

楽しめる時に楽しんだ方がいい。

せつかくの振替休日で図書館で勉強をと思ったが、かなめに関して少し思うところがあつた。

なので俺は霧のアドバイス通りにかなめの望みを叶えることにした。

「かなめ、ちよつといいか?」

「あれ、どうしたの兄ちゃん? 今日図書館で勉強するって出ていったのに」

キッチンで料理をしているかなめを見て、俺は声を掛ける。

「ああ、あれな……今日はやめたんだ。たまには家族水入らずでどこか行こうかと思つてな」

「それって……デートってこと?!」

「違う。ただ単に出掛けるだけだ。買い物したりな」

意味の分からん食い付き方をされる前に否定しておく。

安易に思い付きで行動したのは間違いだったか? と、思ったが……もうかなめは既にルンルン気分だ。

まあ、今更撤回するつもりはないがもう少し言葉を選んだ方がよかったかもしれない。「ちよつと待つてね。もう少しで仕上がるころだから」

と、カレーをまたかなめは作ってる。

今日は少しハーブを変えたのかニオイが少し違う気もするが、カレーに変わりはない。

「よし、と。お待たせ、お兄ちゃん！」

かなめは少し味見して、カレー鍋に蓋をする。

それからエプロンを解いて俺の腕に抱きついてくる。

「家の中でまでくつつくなよ……」

「いいの、兄妹なんだからいくらでもベタベタしても」

猫のようにすり寄ってくるかなめを見て、俺はため息を吐く。

まあ、これくらいはいいか……。

若干、大目に見てやろう。

「それで、どこに行くの？」

「ああ……特に決まってるない。昨日霧に言われて今朝決めたからな。どこか行きたいところはあるか？」

「お兄ちゃんの行くことならどこでもいいよ！」

あれだ、一番返答に困るパターンだ。

メシで何が食べたかって聞かれて何でもいって言われるのと同じ。

女子の喜ぶモノなんてよく分からん俺からしてみれば、さらに難題になるやつだ。かなめの場合、俺が何やつても喜ぶだろうけどな。

しかし、どうしたものか。

いつもの霧は頼れんぞ……

なので、俺が知ってるなけなしのスポットに取り敢えず行くことにした。

それは霧を家族に誘った海浜公園。

軽い菓子と飲み物をコンビニで買って、公園のベンチに座る。

「ふふ、お兄ちゃんからお誘いなんて嬉しいな♪」

「別に、ただのお出掛けだぞ」

「お兄ちゃんから誘ってくれたのが嬉しいんだよ」

と云うかなめはその深海色の瞳で嬉しそうに見上げる。

その表情に俺は少しだけ呆れる。

自称妹ながらその考えは分からん。

趣味とかの話は結構分かるんだがな。

公園をボーッと何となく見ている。

他の人は会社やら学校やら行ってるんだらう、公園には誰もいない。

見掛けてもジョギングするおじいちゃん、おばあちゃんや子供を連れた主婦っぽい人だけで、閑散としている。

「あむ、外で食べるお菓子って少し違うね」

「そうだな。いつもこんな日常が続けばいいんだがな」

俺はキャラメルを放るかなめを見て、そんなことを呟く。

かなめは足をぶらぶらさせて唐突に提案する。

「なら、一緒に逃げちゃう？」

「どうしたんだよ、急に」

「ううん、何となくだよ。前に依存って言われて……私でも、もしかしたら生きられるのかもって思ってたね」

「確かに逃げ出したいが、それは……色々と終わってからだな」

俺の言葉にかなめは、少しだけ寂しそうな表情をする。

実際、まだ終わってない。

ジーサードの問題もアリアの問題も。

「心配するな。俺ももうすぐ転校する。そうすれば昨日みたいな時間や、今日みたいな時間は増えるだろ」

多分な……

自分で自信を持ってないのは何故か嫌な予感が微妙にするからだ。

転校しても俺の家とかに突撃してきそうなのが何人かいるからな。

「……………」

かなめは、何やら浮かない顔だ。

どうも様子がおかしい。

「どうした、かなめ？」

「ううん、何でもない」

尋ねてもかなめは首を振って、変に笑って空元気を出してる感じがする。

それから唐突に別のところに目を向ける。

「あれって教会？」

「ああ、そうだな。一般公開されてるから入れると思うぞ」

「ふーん……お兄ちゃん、あんまり近寄りそうにないところなのに何で知ってるの？」

「…………ツ」

飲もうとした午後ティーを思わず吹き出しそうになった。

女の勘ってやつか、鋭いところを聞いてきやがる。

「もしかして……誰か他の女の人と一緒に入ったの？」

「おい、バカやめろ。白雪みたいな目をするんじゃない！」

スウト、瞳孔が開きかけてるかなめに俺は待ったを掛ける。

「依頼であそこを待ち合わせ場所にしたただけだ」

依頼したのは俺だけだ。

その言葉にかなめは疑い深く聞いてくる。

「本当？」

「嘘言つてどうする」

「前に約束破つたし……」

その言葉に少し詰まる。

風魔とかワトソンとか色々あった時か。

それを言われたら信頼される要素はない。

俺はごり押し気味に話を切った。

「もう終わった話だろ。それより、どこか別のところに行くか？」

「ううん、せっかくだし行ってみよ」

かなめは上機嫌にベンチから立ち上がって教会へ向かって走っていく。

特に見るものもないと思うが、やっぱり女子はああいうのに憧れるものなんだろう
か。

と、考えながら俺はかなめの後に続いていく。

教会に入ったかなめは目を輝かせてクルクルと回りながら中を見ている。

ステンドグラスからの光で照らされた教会を進むかなめは天使のような感じだ。

美少女だから絵になるな。

言ったら色々と面倒なことになりそうだから言わんが。

「スゴいね、お兄ちゃん。教会なんて初めて入ったよ」

「それは良かったな」

「ねえねえ、お兄ちゃん！　ここで誓いのキスをするんだよね？」

「……多分な」

そういうのに詳しくない俺はそう答えるしかない。

神父が立つであろう壇上の前でかなめは、その壇上の先のステンドグラスを見上げる。

楽しそうだな、かなめ。

「ねえ、お兄ちゃん。こっちに来て」

「ああ……」

かなめのお願いを聞いて俺は壇上の前に立つ。

霧ともこんな風に立ったな、隣同士で。

俺は隣にいるかなめを見ると、何か意を決したようにこっちへ向き直る。

「ねえ、お兄ちゃん。あたしのお願ひ聞いてくれる？」

「無理のない範囲ならな」

元々そのつもりだしな。

「じゃあ、ここでキス……して欲しいな。新郎新婦みたいに」

「何でだよ……」

自分から病ヒステリアモード 気になりに行くだけじゃねえか。

「でも、お兄ちゃん。無理のない範囲なら良いって」

「それは無理な範囲だ」

「……………」

俺がそう言うとかなめは悲しそうな顔をする。

悪ふざけで言った……訳じゃなさそうだ。

息を吐いて、俺は聞く。

「かなめは、それが望みなのか？」

「……………うん」

まるで思い残す事がないようにしてる感じだ。

何となくだが、そんな感じが伝わってくる。

かなめじゃなりにくいのは分かってる。
嫌だが……多少は我慢することにする。

「分かったよ。目を閉じてくれ」

「ほ、ホント？」

「いいから、早く目を閉じろ。俺の気が変わらない内に」

かなめは言う通りに目を閉じた。

それから俺はゆっくりとかなめの肩を軽くもって、口を近付ける。

そして、恋人みたいなキスをした。

I Good ^よ for ^{かっ} you ^た ^ね

それから何かえぐる音がして、かなめは目を見開く。

口を離して、ゆっくりと離れて……私”とかなめの間に来た血だまりをかなめは

見る。

きよとんとした顔で。

「え……う？」

「悪いな、かなめ。お前は”家族”じゃないんだ」

もう、キンジの思考で考える必要はない。

かなめの胸には緋色のメスが深く突き刺さっていた。

心臓には届いてる。

もう終わりだね。

ポタリポタリと胸から足元へと血が垂れる。

未だに状況を理解できずかなめはただ、私と血を交互に見るだけ。

「……あ、ウソ……おにい、ちゃん」

「ああ、嘘だな。お前は本当の家族じゃない。俺は何度も言った。だけどせめて人として殺してやろうと思った」

私はキンジの顔でキンジではしない笑顔で告げる。

「さようなら、かなめ」

「あ……アハ」

深海色の瞳で涙を流しながら笑顔を浮かべる、かなめ。

全てが理解できず、感情がぐちゃぐちゃな感じが表情に出てる。

ああ、最高だよ……その表情。

君は兵器じゃなくまさしく人間だったよ。

それだけ、だけど。

「おにい、ちゃ……」

何かを追い求めるように私に手を伸ばす。

そのままかなめの目から光が消え、前のめりに倒れて……横たわる。人の死なんて、こんなもの。

脆く、夢い。

静寂の後に私は笑いが段々とこみ上げる。

「ふふ、ハハハはははは……アハハハハハはははははははははは！ あーあ、悲しいなあ。妹になれたかもしれないのに。でも仕方ないよね？ キンジが認めないんだもん。仕方ないよね？」

キンジの顔を剥がして、私はやりきった気持ちと達成感に満ちる。

私は、”血の繋がり” さえ騙せた！

あれだけかなめは私を警戒してたのに、それでも騙せた。

そして1つの確証も得た。

ヒステリアモードの状態じゃなければあの時みたいに警戒されることはない。

気付かれたらその時はその時で、すぐ殺るつもりだったけど。

見事に私はやりきった。

やっぱり血の繋がりだけじゃあ家族とは呼べないね。

「さて、次の楽しみの準備をしないと」

余韻も程々にして、私は次の演目に移る。

「ヒルダ」

私が呼ぶと、教会のベンチの影からズズとヒルダが現れる。

「吸血鬼を昼間からこんな神臭いところに呼び出すなんて……とんだ恥知らずね」

昼間でしかも教会に呼び出したせいで機嫌が悪い。

けど、そんなことは知った事じゃない。

「さつさと死体を運んで貰える？ 私は次の準備で忙しいからさ」

「死体は別にいいわ。血が吸えないのは残念だけど。だけど私が素直に聞くと思っ
て？」

わざわざ呼び出しに応じといてここで断るとか……

立ち直ったのはいいけど、立場は分かかってないのかな？

「ねえ、ヒルダ。理子は君を許したかもしれないけど、私は許した覚えはないよ？」

私は笑顔で、でも冷ややかな目でヒルダを見据える。

途端にヒルダは硬直した。

「……………ッ」

「今の君は理子が家族と認めたから手を出してないだけ……また躰が必要なら、いつでも歯向かっていいんだよ？」

「あ、う……すみません。分かったわ……だからやめてちょうだい」

言いながら私は幽霊みたいに気配なくヒルダの背後に回り込む。

ヒルダからしてみれば少し意識を逸らしたら、消えたように見えるだろう。

「なんなら、ここで少し遊んでく？　平日とは言え、人が来るかもしれないからあんまり長く遊べないかもだけど。ねえ？」

ゆつくりと肩に手を回して耳元で囁く。

「あ、ああ……やめて。悪かったわ。調子に乗らないから……」

そんなに怖がるくらいなら最初から言わなければいいのに。

元の精神状態に戻ったと思ったのかな？

だとしたら残念。

もう君は既に一回壊れたんだから歪みは戻らない。

意識では思っても奥底ではもう、恐怖を覚えてしまってる。

ここらで勘弁して上げよう。

「うん、それじゃあよろしく。丁重に扱ってね」

「分かった、分かったわ」

ヒルダはそう言つて死体を持つていった。

さて、もちろん証拠は隠滅しておこう。

掃除は得意だからね。

次は第二幕。

◆ ◆ ◆
カレーを食べて、眠くなった俺はベッドでひと眠りしていた。

その時に図書館で理子に強制的マウントポジションをとられて見せられたゴヤの『裸のマハ』がなぜか『裸のアリア』になつてゐる悪夢に魘うなされて飛び起きると、すっかり夕方になつていた。

夢むヒスになつてないか心配だったが……だ、大丈夫だな。

安堵して、顔を洗いに洗面所へと向かい顔を洗う。

かなめはまだ帰つてないのかと思つて、部屋をノックするが反応がない。

HMDテラナの充電器の位置が動いてる辺り、一度は帰つてゐるみたいだ。

顔を洗い終わり、キッチンも見るが……カレーの残りに手をつけてる感じもない。

その時だった。

玄関の鍵を開け、扉を開ける音と同時に――

「キンジー！」

霧の声がした。

それも珍しく慌てた様子で。

それから廊下を靴も脱がずに上がってくる。

「単刀直入に言うよ、ジーサードが攻めてきた」

その言葉に俺は一気に覚醒する。

続けて霧は聞いてきた。

「かなめちゃんは？」

「一度は部屋に戻ったみたいだが、どこにもいない」

「まあ、そうなるよね……上官が帰ってきたんだし」

それから霧は、何故かキツチンに向かつてカレーを見る。

それから指先につけて舐めた。

「一服盛られたね、キンジ。睡眠薬……しかも結構な量だよ。ニオイが違うと思わなかったの？」

霧はすぐにそう呆れたように言った。

いつもとニオイが違うとは思ったが、睡眠薬……かなめがどうしてそんなものを……すぐに準備して。もう状況は動いている」

「ッ、ああ……！」

考えてる暇はなさそうだ。

防弾制服に銃、^{マガジン}弾倉を持てるだけ持った。

すると霧はベランダを開けて飛び降りた。

思わず霧の落ちたところを見てみれば、下にはモーターボートが停めてある。

あれは、車輻科のレンタル可能なモーターボートだろう。

俺も取り敢えずベランダから飛び降りて、ボートへと降りる。

「出すよー！」

俺が乗ったのを確認して、霧はすぐにボートを走らせる。

そのまま霧は状況を説明する。

「ジーサードが品川火力発電所の東南東に現れたみたい。まるでみんながバラバラな時を見計らったような感じだね」

「じゃあ、かなめは……」

「そういうことでしょ。ジーサードの所に戻った。キンジを眠らせて、それを悟られないようにしてね」

霧は冷静に考えられる事を述べた。

俺は携帯を見ると、セルフモード……携帯の電波を止め、通話やメールを使用できなくなるモードになってることに気付いた。

(かなめ……一体、どういうつもりだッ……)

俺は焦りを覚える。

あんなに楽しそうしてたのに、どうしてなんだ。

霧は隣でインカムで誰かに連絡をとってる。

「もうすぐレインボーブリッジを通過する。到着まで10分以内」

霧の言うとおりレインボーブリッジを通過すると品川火力発電所が見えてきた。

そのまま発電所の南側の沿岸部にボートを停めて、素早く降りる。

その時に霧は俺にインカムを渡してきた。

「回線は繋がってる。かなめちゃんはこの先だよ」

走りながらインカムを装着する。

「到着した。今、現場に向かっている。予想通りにキンジは盛られてたよ」

『相変わらず迂闊だな、トオヤマ』

『まあ、仕方ないよね。キーくんだし』

霧が状況を報告するとジャンヌ、理子の順番で通信が入る。

切迫した状況なのに好き放題に言ってくれる。

「今はどうなってる?!」

『かなめちゃんなら、発電所の南側……公園みたいな芝生のところにいるよ。その先の

海の上にジーサードが立ってる』

俺が説明を求めると、理子が説明してくれる。

海の上に立ってる……?」

どういう意味かはすぐに理解できた。

通信で言つてた公園みたいな芝生がある場所に到着した。

そこになめは、確かにいた。

漆黒のプロテクターにHMDを装着して、腰には左右に二振り、背中にもクロスするように二振りーー合わせて四振りもの先端科学兵装の刀を装備してる。

今までにない程の重装備だ。

”そのかなめの視線の先には、確かにジーサードがいて文字通り”海の上に立つてる”。

安定感からして足場みたいな物があるらしいが、透明なのか見えない。

ジーサードもかなめと同じようにサングラスみたいなHMDと漆黒のプロテクターを装備してる。顔は宣戦会議の時みたいにペイントされていた。

それに合わせたであろう黒いコートは、金や金糸で飾られてる。

相変わらず派手好きな野郎だ。

そんなジーサードは怒つたような顔で、かなめに何かを話している。

「HSSにはもうならないってのは、どういうことだ？ フォース!!」

「そのままの意味だよ。もう、あたしはHSSにはならない。それにもう、師団は……：……バ
スカービルは敵じゃない」

「これは命令だフォース。今すぐに戻れ」

説得しようとしてるかなめに、サードは聞く耳を持つ気はないとばかりに命令する。サングラスみたいなHMDで目は見えないが、冷ややかな視線をしてるのは何となく分かる。

俺はかなめを守るように前へ飛び出す。

「かなめ、今すぐに逃げろ」

「おにい、ちゃん？　なんで……」

「兄に一服盛ったのは、あとで叱ってやるからな」

見なくても分かる。

後ろでかなめが、不思議そうな顔をしているのが。

「どけ、キンジ。お前に今は用がない。フォースっ！　俺の命令を聞かんかア！」

「かなめ、ここから逃げろッ」

俺とサードの同時に放たれた言葉にかなめは、ビクツとする。

「あたし、は……」

困惑してるかなめの隣でいきなり3発の発砲音がしたかと思えば、ジーサードは軽く腕を払っておそらく銃弾を弾いた。

「悪いけど、もう始まってると認識でいいよね？」

霧はグロックを抜いて、そう軽口を叩く。

「勝手に入ってくるな、女。俺はフォースに用がある」

サードは撃たれたっていうのに、涼しい顔で返す。

「もう、彼女はフォースじゃない。かなめって名前だからね」

「……人間に成り下がったか、フォース」

霧の言葉にサードは更に冷ややかな目を向ける。

俺も反論する。

「コイツは兵器なんかじゃない。最初から、人間だ。キャラメルが好きで時に変な普通の女の子だ」

「……All ^分right ^た」

サードは英語でそう言ってる

「殺してくれて意味だな、フォース？」

凄まじい殺気が叩きつけられる。

海の上から水しぶきが上がる程に跳躍したサードは、弾丸のように水平にこつちに向かってくる。

は、速いッ。

そこへジャンヌと白雪が挟み撃ちにするように飛び出した。

お互いに剣を振りかざし、完全な挟撃。

だがサードは体をクルリと回転させると、バキツ！ と車にはね飛ばされたみたいにジャンヌと白雪が吹き飛んだ。

霧も反撃で撃つが、サードはさつきみみたいに腕で払う。

致命傷にならないところはプロテクターに任せて、突っ込んでくる。

俺もかなめを守ろうと、銃を抜くがその前にサードは俺をそのまま通り抜けた。

「あうッ！」

霧も吹き飛ばされて、サードはかなめの前に仁王立ちする。

強い、強すぎる……

何とか銃を抜いたが、サードの射線にはかなめがいる。

プロテクターがあるとは言え、下手に撃てない。

かなめは、サードの前から動けないでいる。

まるで百獣の王に睨まれたように。

「フォース、最後にチャンスをやる。今俺が吹き飛ばした連中をやれ」

サードはかなめに殺せと命令する。

サードは、修理しようとして……ッ。

かなめを兵器へ、フォースへと戻そうとしてる。

「あたしは……強者には、逆らわない。それは……非合理的、だから
 「そうだ。よく分かっているじゃねえか」

かなめは、サードに屈服しようとしてる。

俺にも分かる。

兄さんに逆らえないあの感じに。

「だけどーあたしは、かなめだあああッ！ うあああああ！」

かなめは、左右の腰の刀を展開したかと思うとそのまま下から上にサードを斬ろうとする。

雄叫びを上げて、サードに人間だと主張するように。

「哀れだな……」

サードが一言呟いた瞬間、衝撃と共にかなめは吹き飛んだ。

プロテクターがガラスみたいバラバラになりながらかなめは、10メートルくらい飛んでいく。

「ーかなめっ」

俺はサードに目もくれずにかなめの元へ駆ける。

仰向けに倒れたかなめを抱き抱えれば、胸には深い傷がある。

見えなかったが、おそらくは素手でプロテクターをぶち抜いた上で傷付けたんだろ

う。

「あたし……ニンゲンに、なれた、かな……？」

血にまみれた顔で、かなめは虚空を見る。

「お前は、初めから人間だッ」

「ふふ、そうだよね……お兄ちゃんは、最初から……いや、みんなも……あたしをニンゲン扱いしてくれた……」

うわごとのように呟いてる。

もう、やめろ……喋るな！

ハンカチで傷を押さえて、圧迫止血を試みるがそれでも無理だ。

血が、止まらない。

「あたし……みんなに会えて、良かった……」

『最後までいいこと言わないの！』

俺のインカムからアリアの声が聞こえたかと思うと、

『キンジ、かなめを守ってなさい！』

瞬間、サードのいた所から爆炎が何回も上がる。

まるで空爆みたい。

凄まじい風圧と爆風で少しだけ俺とかなめは吹き飛ばされそうになるが、何とか自分

の身を盾にしてかなめを守る。

すぐに、アリアが俺達を守るように上空から降ってきた。

「お前……なんだよ、それ」

防弾制服のスカートの背部、側部の外側にもう一つのスカートみたいなものが広がる。

可変翼が7枚あるように分かれた機械の下端から、噴射炎が見えた。

おそらくは推進器と姿勢制御を兼ねた翼。

形からして小型のジェットエンジンみたいな物だろう。

「これはホバー・スカート。さっき納品されて文字通りに”飛んで”きたんだから」

などと言うアリアは、ガバメントをすぐに構える。

「あたしが引き付けるわ、すぐにあんたはかなめを連れて逃げなさい。手遅れになるわよー」

ゴオオオオ、とエンジンが唸りを上げて炎が吹き出すと、アリアは空中に浮かんで斜めに飛んでいった。

爆炎の中からソードは軽く首を回しながら現れる。

ターミネーターかよッ。

アリアはそのままソードに向けて銃弾を空中から撃つが、ソードはいつの間にか抜い

たUSPのマッチモデルをアリアに向けて放った。

瞬間、両者の間の空中で激しい爆発。

あれは……アリアが武偵弾DAELを使っているらしい。

フレアグレネード、炸裂弾、飛散弾……威力としてはそんなところだろう。

それが空中で爆発したのは、俺がヒステリアモードでやる銃弾撃ちをしたからだろう。

俺の出来ることは大体出来ると考えた方がいい。

そのアリアも、一気に跳躍したサードに叩き落とされた。

「キンジ……」

「霧、大丈夫だったか？」

いつの間にか俺の傍にいた霧に目を向けると、少しだけ苦しそうだ。

「何とかね。容赦なく腹パンされたけど……それよりもキンジは神崎さんの援護、いや

……サードの相手をして」

「軽く言ってくれる……」

「でも他に相手できる人がいない。HSS相手じゃあね。かなめちゃんは私が診るし、ワトソンも近くにいるはず」

……霧の言うとおりで。

それに、どうやら俺の体の中心・中央に何か異様な血が流れてくるのが分かる。

かなめを連れてサードから逃げるつもりだったが、もうそんな気持ちはなくなつた。

「くっ……キンジ、何してるのよー」

地面スレスレでホバーしながらアリアは、サードから逃げてる。

アリアが足で地面を横に蹴り、ホバー・スカートで水平に移動すると、サードがその場所にかかと落としをしてくる。

ブーツにも何か仕込んでるのか、地面が少しえぐれた。

それからアリアへの興味をなくしたように俺を見たサードが、そのまま猛禽類のように笑つた。「ああ、やつとか。おめエが”そうなる”のを待つてたんだ、俺はよー」

ジーサードが言いたい事はー

完全にはないが、分かる。

俺は、なっている。

HSS……それも派生系、ベルセじやない似て非なるものに。

それよりも強い。遥かに強いものを感じる。

「来いよキンジ」

サードは、ばっ、とコートひるがえを翻す。

ついて来いということらしい。

「いいのかジーサード。こうなるともう、俺は優しくないぞ」

霧は俺を見て、静かに頷く。

自分でも危険な雰囲気をしてるのが分かる。

だが、それでも霧は怖じ気づくことなく真っ直ぐに俺を見てる。

「キンジ……」

対してアリアは、俺に驚きの顔を向けている。

今の俺は兄さんが怒ってる時や、死んだ父さんがキレた時のような、底知れない殺気を放ってるだろう。

「あ、あたしも……」

「神崎さん。ここは、キンジに任せよう」

霧は、アリアを止めた。

心配するような顔をしているアリアに対して、霧は信じてるって顔をしてる。

「おにい、ちゃん……」

「待ってる、かなめ。あのバカにお灸をすえてくるからな」

意識が朦朧もうちろうとしてるかなめにそれだけ言って、俺は背を向けてサードの後を追う。

「キンジ」

アリアは俺に何か声を掛けようとして、少しだけ間をおいて、

「死なないで、お願い」

すがるような弱々しい声で、言ってきた。
か弱い、女性的な感じで。

◆ ◆ ◆
いい感じに盛り上がってきたね。

さて、このままだとキンジの勇姿が見れない。

ああ、あの底冷えするような殺気。

思わずゾクゾクしちやった♪

でも、このままじゃあ味気ないよねえ？

だったらやることは1つ。

既に足元で気絶してる2人を見て、私は歩みだす。

◆ ◆ ◆
これからの演出を考えて、楽しみにする。

◆ ◆ ◆
俺とサードは既に近未来的なVTOLリーガリオンに乗って、高度は既に1000メートル。

やはり俺の予想通りにサードはほぼ、俺と同じことが出来る。
どうする？

このガリオンはステインガーマイスイルが翼の内部で爆発したせいで長くはない。

「運動するには酸素が薄すぎる。そろそろ話し合いで解決しないか？ 民主主義的に」

暗に俺は降参しろと言ったが、ソードは断りをいれる。

「おいおい、やつとあつたまつてきたのにお開きか？ ちようどいい温度だろ？ 寒いなら、そこにいい感じの焚き火があるだろうが」

「お前がデカイ種火を撃つからだろうが」

「だがまあ、分かつたろ。俺達にはこんなもの効かねえ……結局はこれよオ」

そう言つてソードは左翼から中央へと歩き、右拳を握つて見せてくる。

「そうかな？」

聞いたことのある声が聞こえたかと同時にソードの左脇から光の刃が一瞬、いきなり貫く。

「……ツ、かは！」

いきなりのことにソードは前のめりに倒れた。

大きく吐血して、機体の床に這いつくばる。

ジーソードの背後にいたのは、

「かなめッ?!」

かなめだった。

「やったよ、お兄ちゃん。あたし、サードを……」

さつきサードにボロボロされた筈のかなめが無事なのはいい。だが、違和感を覚える。

この状況に。

何でかなめがここにいます？

アリアや霧と一緒にいたのに何故？

姿も声もかなめなのに、ヒステリアモードの感覚が告げてる。

「お前は……誰だ？」

その俺の問いに、ソイツは小首を傾げるだけだった。

不気味に、笑顔で。

99：どうしようもない真実

「お前は……誰だ？」

俺の問い掛けに、小首を傾げながらも笑顔でいる……かなめ、の姿をした誰か。そいつは悲しそうな顔をする。

「どうして、そんなこと言うの？ あたしは、かなめだよ……？」

ああ、そうだ。

かなめの姿で、顔で、声で……雰囲気も同じだ。

でも、何かが違う。

部屋で過ごしたあのかなめと何かが。

「お前、ジーサードには恩義があつて。恐怖もあつたが……尊敬もしてただろう！」

それをかなめは手に掛けた。

「そうだよ。でも、もう……2人が争うのを見たくなかった」

「なら今までどうして、黙って見てた……？」

「それは……チャンスを待ってたんだよ。2人を止められるチャンスを……」

話の流れに違和感はない。

かなめが決起したんなら考えられない行動じゃない。

「もう、終わりにしよう。サード……サラ博士はこんなこと、望んでないよ」

サードは脇を押さえながら立ち上がる。

それから、笑った。

「おい、フォースの皮を被った誰か。さっさと出てこいよ……」

何か確信があるのか、力強く睨んだ。

「サードまで、あたしを疑うの？」

「今までフォースは気をつかって俺にサラ博士の話は一度もしなかった。今まで一度も、だ。引きずってた訳じゃねえが、あいつは変なところで俺を心配しやがる。だから、

ここでサラ博士を引き合いに出したのは……間違いだったなアツ！」

恫喝するように、サードは素早い拳を繰り出した。

ヒステリア・レガルメンテのお陰でその拳が今は確実に視認が出来る。

パン！

しかし、かなめはそれを難なくそれを弾いた。

おかしい、さつきはそれで吹き飛んで重傷を負ったのに……捌きやがった。

それから距離をとって、笑った。

「あーあ、調査不足とは言えもう少しバレないかと思ったんだけどな」

かなめの声だが、雰囲気がいきなり変わった。

残念とばかりにそいつは、両手を上げてやれやれをする。

サードは再び問い掛ける。

「てめえ、フォースはどこだ？ 何が目的でここにいる？」

「慌てないでよ、サード。うーん、そうだね……目的はお兄ちゃんに話したいことがあつてね」

「何だよ……」

俺が聞き返すと、ソイツは言った。

「あたしね、死んじやった♪」

……。

……死んだ？

かなめが？

何を、言ってるんだ……コイツは。

一瞬、その言葉に真つ白になるが……ハツタリに決まってる。

いや、そうでなくちゃいけない。

かなめが、せつかく人として歩みだそうとしてたんだ。

そんなこと……そんなことがあつてたまるか!!

「信じない？ まあ、そうだよね……でもお兄ちゃん、言つてたよね。お前なんか妹じゃないって」

俺の様子を見て、クスリとソイツは嗤つて言つた。

確かに俺は言つた。

それをコイツは何故か知ってる。

誰だ？ 俺達の近くに誰がいた？

「だから、家族じゃないなら別に消えてもいいかなつて思つて……殺したよ。迷惑だつたでしょ？ 消えてよかつたでしょ？ ね、お兄ちゃん♪」

「信じないぞ……俺は」

「俺もだ。お前みたいいな意味分からん三下にフォースが負ける訳がない」

意見が合ったのか、かなめが死んだことにサードも否定する。

「まあ、そうだよね。いきなり言われても信じないよね。じゃあ、これなくんだ？」

ソイツが取り出したのは、バスカービルの女性メンバーが合作で作り出した仲直りの印であるキメラレオポン。

そして、かなめが作つた俺とかなめの人形。

……やめろ。

ヒステリアモードの頭が、最悪の可能性に気付かせようとする。

目の前のコイツはおそらく嘘を言っていない。

人形に付着してる血は、誰のものなのか……

そうピースを勝手に当てはめようとする。

「どつちにしてももう終わった話。真実を見るまでは生きてる可能性が残ってるかもしれないもんね。お兄ちゃん♪ まあ、そんな希望なんてないんだけど」

希望なんてない……それが今に分かるとばかりに嘲笑する。

「おい、キンジ……ゴホ……手を貸せ」

喀血かっけつしながらもサードは、立ち上がる。

手を貸せてことは、やるつもりだろう。

一時休戦つてやつだ。

実際、ここで俺とサードが戦っても意味はないし俺にも聞きたいことがある……いや、出来た。

かなめの姿をしているが、そんなのは関係ない。

「お前、明らかに重傷だぞ」

「いいや、こんなのはハンデだ。それに暑かったからな……冷えてちようどいいぜ」

サードはまだやれるとばかりに、獰猛な笑みを浮かべる。

さつきの光の剣……おそらくはSF映画で出てくるような熱で焼き斬るものだろう。

それで傷口はそのまま熱で塞がったんだろうが……それでも血の気が引いてる。

「寒いなら、暖めてあげるよ」

かなめの姿をしたソイツー偽かなめはバイザーを着けて言いながら腰に装着された1つの剣の柄を出すと、その柄から光の刃が伸びた。

ライトセーバーみたいなそれはさつきサードを貫いたやつだ。

あれに防刃制服は役に立たないだろう。

焼き斬れるのが目に見える。

ブンブんと、剣舞のように回転させながら偽かなめはサードに向かって斬りつける。

サードは既のところ回避してるが、明らかに動きが鈍い。

ブンつと大振りでも横に一閃した剣をサードはしゃがんで避けた、が偽かなめはそのま
ま回転して回し蹴りを食らわせる。

「……グッー」

サードはガードが間に合ったが、少し後ずさりした。

今、サードは硬直してる……追撃が来る。

そう思った俺は、デザートイーグルで偽かなめに向かって銃弾を2発放つ。

しかし、そこにあの飛ぶ布の剣が盾となつて銃弾を防いだ。

カチャカチャと、機体の上に防がれた弾が落ちた瞬間、偽かなめはバツと光の剣を

ソードに向かって槍のように投げる。

「あぁッ、クソ……！」

ソードは悪態を吐きながらも剣を体を横にしてかわした。

そのまま自分の正面に来て通りすぎようとしてる剣の柄を右手で掴み、追撃にきた飛ぶ剣を正面から斬った。

「フォースより使い方が上手いってのは、癪に障るな……偽物さんよオ」

「さっすがソードだね。お兄ちゃんも絶妙なところで邪魔してくるし」

邪魔をされた割には楽しそうな反応だ。

偽かなめの周りに飛ぶ剣がクルクルと3つ、螺旋を描くように回ってる。

ソードは光の剣の刃を消した。

「あんまり長くはもたないのか?」

「ああ、コイツはプリズム……中の結晶が光を集めて刃にしている。あまり長く展開すると結晶が溶けて焼けるんだよ」

俺の質問にソードは律儀に答えた。

何となくそう思ってた聞いてみたが……SF映画みたいに都合の良い兵器じゃないみたいだな。

「まあ、正直……剣なんてガラじゃねえ」

サードは口の端の血を拭いながら言う。

サードが拳を構えると、一斉に飛ぶ剣の剣先がこちらへ向いた。

偽かなめも身長と同じくらいの大剣とも言うべきそれを構える。

「もうやめにしようよ。無駄に命を散らしたいの？」

遠回しに降伏しろって言ってるみたいだが、それに対してのセリフは決まってる。

「ー散らせるもんなら」「ー散らしてみな」

俺の言葉に合わせるように、遠山家伝統の言葉をサードが続けた。

ジリジリと偽かなめから殺気を感じる。

決闘のような緊張感が、冷気と共に肌を包む。

ー来るッ！

そう肌で感じとった瞬間に飛ぶ剣が蛇のように、蛇行しながらこっちに向かってくる。

同時にさつき落ちたデザートイーグルの弾丸を偽かなめが剣の腹ですくい上げると。

ーパン！

と、テニスみたいに剣の腹で打った。

しかも俺とサードにー発ずつ。

絶妙なコントロールしてやがるッ！

「キンジ！ 飛ぶ剣は先端についてる菱形の部分を破壊しろ！」

言いながらサードは手甲の拳でアッパーのようにして粉碎した。

すると、飛ぶ剣は布のように空中へ飛んで消えた。

俺もサードと同じように蛇行する剣の動きを予測して、飛ぶ剣と菱形の接続部分をバタフライナイフで斬る。

見えない拳——『桜花』の要領で出来たな、見えない斬撃。

名付けるなら『桜閃』。

しかし、暢気のんきに名付けてる場合じゃない。

そのまま偽かなめがこっちに迫ってくる。

「——あは」

あいつがしない笑い方で偽かなめは、サードの方に行った。

しかもこっちにいきなり銃弾が飛んでくる。

いつの間にか、銃を握ってこっちに発砲したらしい。

通常のヒステリアモードでもギリギリ反応出来ない距離。

だが75倍なら——！

俺はそれを銃弾スプリット斬りで難なく対処できた。

反応速度がいつもよりも速いのを感じる。

「サードー！」

それでも、対処しながら援護は出来ない。

いつの間にかサードが、飛ぶ剣に腕を拘束されてるかと思いきや偽かなめに剣の柄で殴り飛ばされた。

(このままだと落ちるッ)

俺はすぐに駆け出して、空中に浮かんだサードの左腕を掴む。

何とか、機体の外に出る前に掴めたが……この状況は万事休すだぞ。

サードは俺が腕を掴んで空中でぶら下がってる。

俺は半ば機体の端に腹ばいで身を乗り出してる状態。

「お兄ちゃん達、ピンチだね。まあ、サードはほとんど満身創痍だし……しようがないよね」

偽かなめが剣を軽く振りながら話し掛けてくる。

また、機体から火の手が上がる。

このままだと……爆発する。

「お前は……何者で、何が目的だ!？」

不利な状況。

それでも俺は聞かずにいられなかった。

偽かなめは、クスリと笑う。

「その質問をするには合理的な状況じゃないよね？ うーん、答えてもいいけど……あえて教えな〜い」

それだけ言つて偽かなめは、俺達に背を向ける。

絶好のチャンスなのに、何故だ？

「HSS相手に2人はこれ以上しんどいし、お兄ちゃんが本気になられても困るから帰るよ。この飛行機ももうすぐ爆発しそうだし。それじゃあ部屋で待つてるね♪」

それだけ言つて、偽かなめは飛ぶ剣に掴まって飛び降りた。

このままだと、爆発に巻き込まれて2人とも死ぬ。

機体は既に火の玉だ。

光学迷彩も解除されてきている。

ジーソードは呆れたように笑う。

「……はッ、横槍を入れられたと思つたら逃走か。不粋な話もあつたもんだな」「んなこと言つてる場合か！」

この状況で軽口が叩けるなんて余裕だな?!

機体が軋きしむ音が聞こえる。

マズイ……今度こそ本当に万事休すぞ。

「もういい……キンジ、離せ」

何かを悟ったような顔をして、サードは言う。

「離せるかよ……！」

俺はいつもそうだ。

家族に何かがあつて、後悔して……

今までたまたま何も失わなかったただけだった。

それを俺は理解してなかった。

「もういいんだよ、”兄さん”」

サードの言葉に、俺はすぐに分かってしまった。

お前も、かなめと一緒にだ。

俺の兄弟だ。家族だったんだ。

それを俺は……理解できないものとしてどこか分かりつつも否定ばかりしてた。

サードはまた、何かを諦めた顔をする。

「不本意な終わり方だが……これでもいいのかもな」

「何を言ってるやがる。何もかも中途半端だろうがッ」

「決着をつけようにも、もう手遅れだ。兄さんだけでもー」

その時、通信が入る。

『キンジ、生きてるならさっさと飛び降りなさい！ 爆発しそうなんですよ？！』
アリアか……！

その言葉を俺は信じて、ソードに笑いかける。

「悪いが、家族を見捨てはしないぞ」

そのまま機体の床を蹴りだしたところで、2人でガリオンから飛び降りた。

それに対してソードは空中で俺に怒声を浴びせる。

「バカか！ 何もねえのに、飛び降りてどうする!? 兄貴だけでも何とかしようと思っ
てたのによ！」

兄貴呼びになったなソード。

確かに、パラシュートもなしにスカイダイビングなんて馬鹿だろうな。

だが、アリアがいるなら大丈夫だ。

「まあ、そう言うな。俺も死ぬ気はない」

「この状況で言うなんて、正気じゃねえな」

「お迎えがくるらしいからな」

ソードと軽口を叩いてると、雲を突き抜けて海が見えてきた。

その海の上にポツンとボートが浮いてる。

それを見た俺としては、やっぱりなって感じだった。

すぐに予想通りの人物の通信とのやり取りがインカムに入る。

『あー、神崎さん。現在、パッケージが降下中……ちなみに荷物は2つ』

『はあ!? これ、2人も運べないわよ! そもそも設計的にそういう意図で作られてないの!』

ボートの近くにいる飛翔体、もといピンク色の頭が見えた時点でサードは察したようだ。

「そういうことか。愛されてるな、兄貴!」

「愛されてはねえよ! 妙なことを言うな!」

『バカキンジ! 飛び降りたつてことは聞こえてるんでしょ!? 何で2人で降りてきてるのよ!』

「色々とあつてな。悪いが、着水の瞬間だけでもいい。一瞬だけ引き上げてくれ」

『ああ、もうツ! 燃料も少ないのに!』

言いながらもアリアは俺達の近くに飛んでくると、ホバー・スカートの噴射を切つて俺達の落下速度に合わせるように急降下する。

初めて扱うらしいが、やっぱり天才的な身のこなしだな。

すぐに俺の腕を掴み、続いてサードのところへ手を伸ばそうとする。

「別に俺はいい。自分で何とかなるからな」

ジーサードが言いながら着ているロングコートがフワリと不自然に動く。あの浮き方はかなめの空飛ぶ剣に似ている。

すぐにジーサードは失速した。

まるでパラグライダーか紙飛行機みたいに滑空してる感じだ。

あいつ、あれがあるなら俺を置いて飛行機から飛び降りればいいのに。

と思ったが、そうしない理由は何となく分かった。

この後にどうなるかも。

「いい!? あたしがホバー・スカートを逆噴射させてボートの上に降ろすわ!」

「ああ、頼む!」

既にボートが拳くらいの大きさで見え始め、だんだんと近付いてくる。

高度的に150メートルくらいになったところで逆噴射をし始めた。

そのままゆっくりと高度を下げていき、無事にボートの上に降りれた。

アリアがボートの上に降りたところでホバー・スカートからプシューと白い煙が出る。

「ギリギリね。今ので燃料はすつからかんよ」

腰に手を当ててふう、とアリアは息を吐いた。

「助かったよ、アリア。それに霧も」

俺は2人にお礼を言う。

アリアは少し何故か照れて顔をそらし、霧は運転席で別にいいって感じでヒラヒラと左手を振る。

「それより、決着はついてない感じだけど？」

「ああ、そうだな」

霧の言うとおり決着はまだついていない。

ボートに降りてきたジーサードは、相変わらず瀕死だ。

霧が何とか応急処置をしてくれたが、それでも脇腹に風穴が空いてるのに変わりはない。

そのままボートは戻り、学園島の向かい側にある……俺とアリアが飛行機で不時着した空き地島に停まった。

全員が一度降りたところで、サードは俺に向き直る。

「じゃあ、続きといこうじゃねえか？」

そんなことだろうと思つたよ。

その言葉にアリアが前が出る。

「あんた、それ以上は命に関わるわよ？」

「知つたことじゃねえよ。変な横槍が入つてあの時は仕切り直そうとは思つてたが、早

くも機会が訪れたんだ。なあ？ 兄貴」

「兄貴……あんた弟がいたなんて言っただけじゃないわよね？」

まあ、サードの言葉に疑問を持ったアリアが聞いてくるが、俺はそうだと答えるしかない。

「言っただけじゃないが、どうやらコイツは俺の弟らしい。今は、兄弟ゲンカの最中だ」

「そういうことだ」

言いながらサードは構える。

あれは……俺の構えとは違うが、音速の拳——『桜花』だ。

まじいな。

あれは、受け身技である『絶牢』ぜつろうでも受けきれない。

「別にケンカに茶々いれる訳じゃないけど、不毛じゃない？」

「兄弟のケンカはそんなもんだ。何でケンカしてたかもその内分からなくなる。今回は男としての意地もあるけどな」

霧の軽口に俺はそう答える。

アリアは心配そうな顔をする。

俺はそれに笑顔で返してやる。

「心配するな。何とか勝つさ」

「べ、別に心配してなんて……でも、信じてるわよ」

「ああ」

照れながら言うアリアに俺は静かに答えて、サードの間合いに入る。

相手は通常のヒステリアモードの100倍、こっちは75倍。

倍率的には不利だが、相手は瀕死。

加えて動きは鈍い。

しかし、直接的な動きだけなら間違いない俺の体の一部をその拳で吹き飛ばせるだろう。

なら、対応策を今ここで考えるしかない。

「いいのかよ。わざわざ間合いに入って。女の前で命を散らしにきたのか？」
「散らせるもんなら、散らしてみな」

本日二度目の決めゼリフを言ったところでサードは動いた。

低い姿勢、ヴェイパーコーン円錐水蒸気が放たれる右拳。

受ければ吹き飛ぶ。

流そうにも通常の受け流し技じゃあ、受け流す前に千切れる。

(きっか橘花——絶牢——桜花ツ！)

拳が右足に触れた瞬間に同じ速度で引き、左足で軽く跳ぶ。

そのまま空中での前方宙返り、サードの拳の運動エネルギーを利用して右足の桜花に乗せる！

ーバスンツツツツツ！！

ジーサードの肩に、宙返りした俺の踵落としが炸裂する。

黒と金の肩部のプロテクターが弾け飛ぶ。

「ーうがアアアアアア！！」

衝撃が伝導してるのか、地面に突いた膝のプロテクターも砕けていく。

足は、痺れがあるがくつついてるツ……

立ってるぞ。何とか対応出来た。

そして、新しい技……橘花。

これは桜花の要領で衝撃が加わる前に逆のベクトルに変化させる技だ。

それを絶牢で防御と攻撃を入れ換え、桜花で再加速。

自損しない桜花だ。

「ーああ、クソ」

サードはそのまま倒れた。

脇腹に風穴空いてるのに無茶するからだ。

「そのまま寝てろ」

決着はついた。

俺には確かめれないといけない事がある。

今までは戦闘で気にしてる暇もなかったが、終わって胸騒ぎが段々と強くなる。

「兄貴、ジーフオース……」かなめを頼む」

同じ胸騒ぎがしてるのかサードはあいつを、名前で呼んだ。

「霧、ボートを借りるぞー！」

「ちよ、ちよつとどこ行くのよ!!」

アリアが俺を呼び止めるが、それどころじゃない。

停泊してるボートに飛び乗り、まずは俺の部屋に戻る。

部屋で待ってる。

偽かなめはそう言った。

罠かもしれないが、ヒステリアモードが続いてる今なら多少の奇襲には対処できる。

学園島の近く、寮の近くの岸に停泊してすぐに男子寮に入り、階段を駆け上がり、部

屋の扉を開け放ち、銃を構えてゆっくりと玄関を上がる。

かなめツ……

「かなめ、いるのか!?!」

頼む……返事を、無事だと言ってくれ。

人の気配はしない。

廊下の途中中の部屋を覗いて見るが、誰もいない。

最後にリビングの扉を静かに開けると、ソファーに誰かが座っている。

あの後ろ姿は、かなめだ。

偽かなめ……じゃなさそうだな。

あの感じだと俺を待ち構えてる感じだったし。

声を掛けても反応がないのは、少しおかしい。

「かなめ？」

リビングに入りながら名前を呼ぶが、反応がない。

いつもなら嬉しそうな声を上げて反応するはずなのに。

かなめはそのままズズ、とソファーに横たわる。

寝てる……のか？

胸騒ぎがまだする。

俺はゆっくりとソファーに近付き、かなめの正面にしゃがむ。

眠るように、かなめは目を閉じてる。

寝てるだけ、だよな……？

「はッ……はッ……」

息が荒くなる。

そのまま、ゆっくりかなめの頬に触れた瞬間。

「ツ…………!？」

全身を寒気が、襲う。

嘘だ…………

両手でかなめの頬を持つが、体温が…………ない。

「かなめ、起きろ」

なあ、頼むよ…………起きてくれ。

嘘だよな？

あの偽物野郎の悪い冗談だっけ言ってくれ。

「なあ、かなめ。バカにお灸据えて兄ちゃん帰ってきたぞ」

…………返事はない。

生きてる証が、ここには何も、ない。

体温も、鼓動も、呼吸も。

ウソ、だ。

「かなめ…………かなめえ。なあ、起きてくれよツ…………」

抱き起こして、抱き締めるが…………全身が氷のように冷たい。

——死——

もう、その言葉が頭に浮かんだ瞬間には実感してしまった。

「かなめえええええ!! う、ああ……ああああ!」

俺は部屋で泣き叫ぶ。

ここにかなめはいない。

どうして、なんだ?

何でかなめが死ななきゃならない。

そして俺は後悔してる。

ずっとかなめを否定してたのは、俺自身だった事に。

本当は気付いてた、分かってたはずなのに……俺は!

「ああ……ああ……クソ」

「様子がおかしいから追いかけてみれば……キンジ」

いつの間にか、霧がそこにいた。

かなめを抱く俺の様子を見て、すぐに察した顔をする。

目の前の光景に動揺せず、静かに霧は息を吐いて俺に問い掛けた。

「ねえ、キンジ。何を後悔してるの?」

「……かなめを認めて、やれてなかった。妹、だって。俺は……ッ。人間だって認めてて

も、かなめ自身を認めてはなかったんだ」

「今は？」

「ああ、認めるよツ。かなめは、俺の妹だった……家族だったんだ」

「遅いよ、今更」

霧の言葉が胸に刺さる。

そうだ……遅かった。

本当に今更だった。

失ってから気付くなんて……

兄さんの時に、既に分かっていたのに。

「……私が探してるもの話、覚えてる？」

唐突に霧がそう聞いてきた。

ヒルダと戦う前の夜にそんな話をした気もするが、何故そんな話を、今？

俺の近くに来て、霧はかなめの頬を撫でる。

姉が妹を可愛がるように。

「これから起こることは秘密ね」

ふう、と息を少し吐くと霧の体から光が……徐々に出てくる。

見たことのある緋色の光。

それに俺は目を見開く。

この光は、まさか……!?

シャーロックやアリアが持つてるものと同じ力。

色金のー

少しかなめから俺は離れると、霧がかなめに触れて緋色の光が体を包み出す。

ベランダの窓の外に光が漏れそうなほどに強くなったかと思うと、光が段々と小さくなっていく。

光が消えて、かなめには血色が戻ってるのが分かる。

「すう……すう……」

そして息遣いが聞こえる。

かなめが、生きてる……いや、生き返った。

思わずかなめの手を握れば、多少は冷たいがさつきは感じなかった体温がある。

「霧……ありがとうッ」

どうしてとか聞く前に俺は、感謝した。

「感極まつてるのは分かるけど、自分から抱き締めてくるなんて熱烈だね」

「……………あ、ああすまん！」

我に返って、慌てて離れる。いつの間にか霧を抱き締めてたらしい。

霧は少し申し訳なきような顔をする。

「その前に、ごめんね。今まで黙ってた」

「驚いてるよ」

「そうだよね……」

珍しく霧がしゅんとしてる。

「だけど、俺としては色金を霧が持つてるのは意外だったが、正直そんなのはどうでもいい。」

「白野って名前なのに、私の中には真っ赤なものがある。それにー」

「真っ赤な嘘も……か？」

霧が言おうとしてることを予想して俺が言おうと、霧はクスリと笑った。

「当たり前だったらしい。」

「うん。嘘っていうか本当のことを話してない。実は知ってたんだよ……イ・ウーも、色金も」

「……………」

体育座りをしてる霧に、俺は隣にゆっくり腰掛ける。

「でも、言えば色々面倒な事になる。日常から離れていく。キンジなら、分かるでしょ？」

「ああ」

そうか。

お前も、振り回されてたんだな。

似た者同士だったんだ。

俺も、アリアも、霧も。

「キンジと出会ったのも、偶然じゃないの……本当は。ある人に言われて。出会って、パートナーになって欲しいって」

「……お父さんか、お姉さんか？」

「まあね。理由は聞いてないけど、今なら分かる気がする。キンジとなら色々と解決するんじゃないかって」

霧は、少し笑う。

ただどいつもみたいな明るい感じじゃない。

無理に笑ってる感じだ。

「……ね、キンジ。もし、神崎さんも私のお姉ちゃんも助かる方法があるって言ったら、どうする？」

その言葉に対する俺の言葉は決まってる。

「協力するに決まってるだろ」

ただ、一つ、ヒステリアモードの今なら気付いてる。

「お前も、助かる方法を探した上でな」

その言葉に霧は、ビクツと体を震わせた。

やっぱりな。

霧は、自分に関して何も触れなかった。

アリアと自分の姉が助かる方法はある。

じゃあ同じ色金を持つてるお前はどうなんだ？

俺の言葉は当たりだったらしく、霧はフフと笑う。

「ヒステリアモード、ズルいね」

「誤魔化すなよ。俺は、お前にまだ何も返しちやいないんだ」

「……無理だよ。私は、どうしようもない」

「諦めるなよ。俺はお前を見捨てたりしないぞ」

「ありがとう♪」

にへつといつもの無邪気な笑顔に俺はヒステリアモードなのにドキツとする。

ズルいのはそつちだろう。

そう思いながら、俺は顔をそらす。

「それじゃあ帰るよ。神崎さんと一緒になめちゃんを探してたからね。何もなかつ

たつてことで、話は合わせておいて……余計な混乱は避けたいし」
「そうだな」

霧は立ち上がって、スカートを直しながらそのままリビングを立ち去ろうとする。
その途中で振り返り、

「大事なモノは傍に置いておきなよ」

それだけ言つて今度こそ去つて行つた。

大事なモノ……か。

その言葉に俺は殺人鬼の言葉が脳内に響く。

『今後もホームズの4世に味方をし続ければ——君の元パートナーは必ず死ぬ』

俺は、守れるだろうか？

そう思つてしまう。

◆ ◆ ◆

キンジの部屋から出て、階段を降りる。

「ふ、フフ……」

それから寮の出入口に向かう途中で、押さえてた笑いが込み上げる。

「あハハハは……ハハ、ふふ」

キンジ、ごめんね。

私は本当に”どうしようもない”女なんだよ。

ああ、良かった。

思わずゾクゾクしちやって、リビングに入った瞬間に笑みが出そうだった。

ポーカーフェイスも楽しじゃないね。

慣れてるけど。

これでキンジは本当に失う怖さを目の当たりにした。

きつと私を失わない為なら殺しとか以外なら何でもしてくれる感じ。

私の為なら何でも。

ん、特別な響き♪

何かの天秤が傾いてるように感じる。

かなめちゃんを生き返らすかどうか迷ったけど、家族だって言うなら仕方ないよね。

遅すぎるし、私が誘導した感じなんだけども。

余韻が体に響いて、まだゾクゾクしてる。

もつともつと、バラ^恋して、殺^愛してあげないと。

「楽しそうだね」

寮を出たところで、後ろから声が掛かる。

振り返れば扉の近くに”もう一人の私”がいた。

「やあ、ウルスラちゃん。協力ありがとうね」

ウルスラー—UNKOWNの通り名を持つ殺人鬼。

今回は彼女に協力して貰った。

私がかなめになってる間にウルスラは白野に化けて貰って、それっぽく振る舞って貰った。

「いや、なかなか楽しめたよ。私のガラじゃないけど……あと気絶のフリとか少し笑いそうだったし」

「それは良かった。はい、報酬ね」

私が渡したのはUSBメモリ。

中身はかなめちゃんが死んだ瞬間の動画。

実は録画してた。

自前のビデオカメラで、パソコンで音質とか映像とか良くした上でデータを移した。

「うん、コレコレ。見るのが楽しみだよ」

観察が好きな彼女は、これで良いと快く引き受けてくれた。

私も同じ考えだから、何となく分かるけど。

「今度はどうする？」

「未定。サスペンス映画みたいに私が屋敷の中で切りまくるとか？」

「うーん……私が楽しめないから無し」

私の提案にウルスラは却下する。

まあ、そうだよな。

「決まったら連絡して、喜んで協力するよ」

「そうするよ。それじゃあね〜」

部活の帰りで別れるような気軽さで、ウルスラは帰っていった。

神崎さんに何事もなくなめが見つかって連絡したら、私も帰って見よ。

そう言えば……かなめはこれからもキンジを今まで通りに信じれるかな？

私に変装してたとは言え、キンジに殺されたショックは大きいはず。

トラウマになったら突っついてみようか。

死んで、生き返って、なおも遊ばれる。

うーん、我ながら鬼畜。

でもキンジが家族って認めちゃったから、かなめに手を出すのは駄目だね。

残念だな〜

サードの反応も見なかったのに。

まあいいや。

これで色々やり易くなった。

あとはお姉ちゃんのタイミング次第だね。

いずれ円卓で交渉が始まるだろう。

その時にどっちに交渉が傾いても私は楽しめる。

お姉ちゃんからすれば、答えは分かりきってるだろうけど。

それよりもかなめが起きた時に何を思うのか、今はそっちが気になるな

◆ ◆ ◆

『お前は家族じゃないんだ』

お兄ちゃんの顔で、声で、そう言われて……胸が、赤く。

『さようなら、かなめ』

そして貫かれた。

「うあ!?! あ……あれ?」

ここは、お兄ちゃんの部屋?

あたしに……何が。

跳ね起きれば、酷い汗。

そう……あたしは、確か……

思い出して、ぞわりとする。

変な気持ち悪さが体を駆け巡ってる。

あれ？ あたし、死んだ……よね？

手を見て、握り、開く。自由に動く。

……夢？

ならあの感触は？ あの光景は？

ハツとして制服の前を乱暴に開けて、貫かれた胸を見る。

けど、何も無い。

嘘だったみたいだ。

「かなめ……」

声を掛けられてドキリとする。

後ろにお兄ちゃんが、いる。

「おにい、ちゃん」

姿を見て思わず、涙が出る。

「あたし……あたし、し……」

確かめたい、けど……声に出す勇氣はない。

「いいんだ。何も言わなくていい……何もなかったんだ」

お兄ちゃんが安心させるようにあたしをすぐに抱き締めた。

『お前は家族じゃないんだ』

けどそんな幻聴が聞こえた。

違う……あれは偽物ツ。

でもー

「お前は、”妹”だよ……かなめ。俺の家族だ」

……ッ。

ずっと認めて欲しかったこと。

言つて、くれた……ようやく。

あたしの、お兄ちゃん。

「あ、ああ……お兄ちゃん！ お兄ちゃん！」

そのまま子供みたいに泣いた。

忘れるように、いつまでも。

100：それぞれの日常

翌日には中間テストであつたことをすっかり忘れていた俺は、部屋で死んでいた。精神的に。

最悪だ……テストの結果は惨敗の一言。

ジーサードと戦つて、かなめを慰めて……テストの事なんて欠片も考えてなかつた俺が勉強をしているはずもない。

保健体育の選択問題なんて鉛筆を転がして答えを決めた。記述問題はなけなしの知識を掛け合わせて適当に埋めた。

そのテストが終わつた時に霧はニマニマしてやがった。

あいつ……俺が絶望的な顔をしてるといやらしい顔をしやがる。

そんな俺はジーサードとの戦闘での傷をいやすために自宅療養で霧のお手製弁当でテストの傷心を癒している最中だ。

ああ、相変わらず美味い。そして同時に惨めだ。

何でテストで笑われたヤツに飯を作ってもらつてるのか……

まあ、お互い見下しているとかじゃないから大して気になる事でもないんだがな。

「何やってやがんだ、兄貴」

「どわあああッ!?!」

反射的にデザートイーグルを引き抜いて俺は声のした方に銃を向ける。すぐに声が誰かは分かったので、名前を呼びながら銃を左右に向ける。

「おい、ジーサード！ バカやってないでさっさと出てこい」

「人工^{ジニオン}天才をバカ呼ばわりすんじゃねえよ。テスト赤点の兄貴よ」

「てめえ……勝手に人のテストを採点すんじゃねえよ」

見てたのかよ。

しかも自分でも絶望的だと思ってたがジーサードのネタバレでそれが確定してしまった事に俺は膝が崩れ落ちそうになる。

ああ……また霧に貸しが。

ただでさえ、つい最近一身分の貸しを作ったところなのに。

銃をしまうと例の迷彩のコートを解除したのかジーサードがジジジ、とノイズ音と共に俺の目の前に現れた。

「よお、この間ぶりだな」

今日は派手なプロテクターじゃない。派手な私服だ。

ゴテゴテしてる。

どこの成金ホストだって感じに黒と金のスーツみたいな恰好だった。

「お前、大丈夫なのかよ？ 瀕死寸前だったろ」

「俺はRランク武偵だぞ。何度死地に追いやられたと思ってんだよ」

言いながらジーソードはどっかりと俺のソファアーに座る。

用も無しに俺のところに来たって訳じゃないだろう。

なので俺はソファアーに座りなおして対面するように弁当を食べながら話を聞く。

「それで？ いきなりノックも無しになんだよ」

「ああ……色々と確かめに来た。それと俺は兄貴について行くことにする」

それは願ったり叶ったりだ。

ジーソードの先端科学兵器はかなりの戦力。

今後の戦役でも有効な手段だろう。

「かなめ」のことだ」

その言葉に箸が止まる。

ジーフォースとは呼ばないってことは、認めては貰えたらしい。

「なあ、兄貴……空の上であの偽物野郎はああ言ってたが。実際かなめはどうだったんだよ？」

その言葉に俺はどう伝えるべきかを迷う。

真実を話すかどうか。

兄弟とは言え、ジーソードは緋々色金を狙ってる。

つまりまだアリアや下手をすれば霧が狙われる可能性がある以上、俺は確かめる必要がある。

「お前こそどうなんだよ？　アリアを狙うのか？」

「諦めちやいねエよ。ただ、少し他の手段を考えてみようとは思ってる。兄貴とは戦いたくねえしな」

その言葉に俺は安心した。

ジーソードは文字通り諦めてはいないだろう。

ただ少なくとも、俺の身内を狙うような真似はしない。

だが……霧に関して俺は巻き込みたくはない。

そう思つて、少なくとも真実は言わないことにした。

「そうか。だが、俺を見てるならかなめもどつかで見てるんだろ？　つまりはそういうことだ」

「そうかよ。つまりかなめは“生き返つた”んだな？」

その言葉に俺は動揺する。

知ってやがったのか？

ジーサードはソフアーに両腕を広げ、もたれて座りながら笑う。

「悪いな、兄貴。部下のバイタルサインぐらい確認するに決まってるだろ？ 兄貴が

ボートに乗り込んだあと、俺は確認した。かなめが死んでるのをな……」

「だったら合流する前に死んでるのを確認できたはずだ。偽物だって、知ってたんじゃないのか？」

「ああ、それな……不可解なのは俺と戦う前にかなめは確かに生きてた。詳しい説明は省くが本人の認証が必要な高度なセキュリティがあつた。それが電気信号を送つて、無事かどうかを判別してたんだが……それをどうやら誤魔化されたらしい。先端科学ノイエ・エンジンをハッキング出来る頭の良い野郎だったのか……もしくはそれが出来る協力者がいた可能性がある」

つまりは天才の犯罪者がいるってことか？

あんまり考えたくねえな。

「使われてたかなめの装備を回収したが……指紋も体液の一滴すらも出やしねえ。装備が使われた履歴も綺麗さっぱりないんだ。何もなかったみたいにな」

「だが、かなめを殺したんだ。絶対に逮捕してやる」

「それは俺も同じだ、兄貴。人工天才ジニオンが簡単に遊ばれたまんまじゃああの人も浮かばれ

ねエ。この雪辱は必ず果たすさ」

お互いに敵討ちをするのは決まってるらしい。

義理堅いのはやっぱり遠山家って感じだな。

「それはそうと、誰が生き返らしたんだよ？俺の調べじゃアリアには絶対に無理だ。そこまで色金を使いこなしてねえのは知ってる。兄貴を追い掛けたのは一人だけだ。だからまあ、ほとんど分かっちゃいるんだが……正直俺も半信半疑なんだ」

誤魔化すのは無理なようだ。

だが、俺は絶対に名前を言わないし兄弟だろうと教えるつもりはない。

「答えねえぞ、俺は」

「だろうな。だがな、兄貴……俺はお前の身の回りを調べてんだ。信じたくないのは分かるが、”白野 霧”。あいつははっきりと言うと怪しい」

そのサードの言葉に俺は少しイラつく。

かなめを生き返したのは他の誰でもない、霧だ。

それを疑われるのは気分の良い話じゃない。

「どいつも経歴はハッキリしてやがるが、白野だけどうも不透明な部分がある。もちろん、あいつの書類にも目を通した……普通なら不審なところなんてない一般的な経歴だが、色金が絡んでるなら話は別だ。普通過ぎるんだよ。どうしようもねえ違和感だ」

「だから霧を疑うってか？　悪いが、俺はそんなことを考えたくもない。そもそも殺した相手を生き返らすか？　普通」

「そう言われたら俺としても反論しようもねエ。殺してといてわざわざ生き返らすなんて、何のメリットもねえしな」

俺は霧が作ってくれた料理に目を落とす。

イタズラ好きの変わったヤツだが、それ以外はバスカービルの中では比較的まともだ。

今までに何度も助けられた。

確かに色金の件については驚いたが、それがどうした？

霧は霧だ。

「惚れてんのか？　兄貴」

唐突に聞いてきたサードに俺は面食らう。

「なんだよ、藪から棒に」

「いや、兄貴の身の回りには女ばかりだからな。その中で白野が一番距離感も近いみてエだし、そうかと思つてな。アリアか霧のどっちかだとは思つてんだが……」

「惚れるだどうだなんて関係ないだろ」

「色金が恋と戦うんぬんって話を聞いてない訳じゃねエだろ？」

確かにそんな話をポストトーク号、イ・ウーでシャーロックが話してた気もするが。「それが何だつてんだよ？」

「いや、女は怖えつて話だ。嫉妬で人を殺す事件もあるんだ。兄貴は特に気を付けた方が良いと思うがな」

「いつでも死にそうな目にあつてるよ」

アリアなんか、よく銃をぶつ放すしな。

霧なんかも社会的に殺そうとしてくるし。

「まあ、なんだ……しばらくは療養も兼ねてこっちにいるからな。また遊びに来るぜ」
「来るな」

俺がそう言うと、サードは再び迷彩のコートを起動したのか部屋の風景に紛れた。それからドアの開く音がした。

どうやら出ていったらしい。

静かになって、部屋にいるとジーサードの言葉が引つ掛かる。
確かに霧は何者なのか……少しだけ気になった。

◆ ◆ ◆
久々のスッキリ気分。

かなめを殺して、金一が死んだと思つてた時以来のキンジの表情に身が震える。

何度思い出しても良い。

あんなの見ちやつたらもう1回くらい、とは思ってしまおう。

今度は生中継とか。

なんて考えは、取りあえずはやめにしよう。

私が我慢できなくなる。

武偵高では4時間目までが一般の科目で5時間目からは専門科目。

なので昼食を兼ねて専門科棟への移動がある。

キンジはサード戦の疲れとテストでの疲れとかなめの件での精神的な疲れもあって、

まだ教室で休んでるだろう。

私は一度教室を出たが、仕方ないのでキンジに差し入れをしに行く。

栄養ドリンクと好物の鰻^{うな}まんを添えて。

たまには優しくしないとね。

いや、いつも優しいか……

私は残酷なようでこれでもキンジに何が大事かは教えてるつもりだし。

大体は気付いたら手遅れだけど。

教室に着いたところで私は人の気配を感じて扉の手前で止まって、扉の脇に隠れる。

「あんたに」褒美をあげるわ。これから1勝することに、1段ずつ内容をレベルアップ

させてあげる。最初は何がいい？」

神崎の声が聞こえる。

肝心な時に邪魔だなあ。

空気を読まずに入ってもいいし、荷物を置いて移動してもいいけど……何故かその場を去る気にならなかった。

「じゃああと5分寝させてくれ」

「何がいい？ ほら、時間もないんだから。好きなこと頼みなさいよ」

どうせキンジのことだから弾代くらいしか考えてないよ。

「ちなみにお小遣いはあげないからね」

神崎がそう言うときンジのため息が聞こえる。

やっぱりね。

「何もいらねえよ。モノなんかもらっても置き場所ねえし」

神崎の言い方からしてプレゼントなんて持ってないでしょうに。

もつと他に――

考えたところでズキンと、心が痛む。

「あたしが何かプレゼントの箱でも持つてるように見える？ モノ以外でも、もつと他

に……何か、その……あ・る・で・しょ!？」

神崎が興奮してるのが分かる。

これ以上聞いても何も良い事はない。

いや、違う……別に私は何とも思っていない。

でも何故か離れられない。

「でも、でも一定程度までよ。場所が場所だし。ほら早く！ 敵前逃亡は校則違反よッ」

この状況は校則違反に引っかけられないと思うけどね。

「……本当は、心配してたの。……霧が行こうって言ってくれて、でも……信じてたから。キンジは帰ってくるって」

さっきまでの食いつくような話し方じゃなく、甘い女性的な言い方。

引き込まれるような、誘い方してる。

扉1枚の向こう側見えなくても分かる。

だけど少しだけ教室を見れば、2つの影が1つになってるのが見えた。

その瞬間――

「ツ………！ あ、ぐ」

思わず胸を押さえる。

痛みがツ。

私の心を何かが蝕んでる感じがする。

気付かれたくない。

神崎にだけは、私の中にあるものは絶対に。

私とキンジ、家族だけの秘密だから。

「フ、フー。んッー」

袖を噛んで何とか耐える。

音を出さないように、その場をゆつくりと離れる。

ふらふらとしながら壁に手をつけて。

ある程度離れたところで女子トイレに入る。

あの一瞬だけで冷や汗が止まらない。

同時にとてつもなく冷めた気持ちが始まる。

「あー……気分、悪いなあ」

今ならかなめや白雪の気持ち分かる気がする。

いつもなら誰と何をしようが何も感じなかったのに。

神崎だから、かな。

それとも私がキンジに恋しちゃったからか。

これが妬み、なのかな？

……やっぱり色金使っちゃったせいで反動が来てる。

でも、キンジの為だったし仕方ないよね。

「あは♪」

そう思うと、この気分の悪さも多少は意味があったって嬉しくなる。

でも神崎を選び続けるとどうなるか……もう少し分らせる必要はあるかもね。

昼休みももう少しのところまで終わりそうなので、私は専門科棟へと移動する。

その場で頭を下げたところで大きな風がさつき首のあったところを通り抜けた。

「お義姉さん。どうしたの？ いきなり人の首を取ろうなんて♪」

「義姉呼ばわりされる言われはないって私は言ったはずよ」

私の背後から鎌を振ったのか正面へとそのまま通り抜けて、金一……”カナ”が対峙する。

「このタイミングで来るなんて、珍しいね。どうしたの？ 私はもう、授業始まるんだけ

ど？」

「調子が悪い今が狙い目だと思ったのよ。それにその姿じゃあ、本気も出せないでしょう？」

どうして分かったのかな？

「女装に慣れすぎて女の子の日とかも分かっちゃったりするの？ とんだ変態だね」

「軽口に付き合う暇はないわ」

銃を抜く気はないのか、鎌だけをブンブンと回して構える。遊び心のないことで。

私は1つだけ聞きたいことがあったので聞く。

「廃車置き場でゴソゴソしてたのは、何？ 私の寝首を掻こうとも思ってたの？」
そう、あの廃車置き場にいたのはおそらくカナで、多分私を監視してた。

足跡が見覚えのあるブーツだったし。

なんの為かは知らないけどね。

「いいえ、見たくもないけど観察が必要だっただけよ。敵を知り、つてね」
私を観察したところで何も無いと思うけどね。

しかし観察、ね。

「行動とか分かるの？ お父さんみたいに」

「別に。どうでもいいでしょ、ここであなたは死ぬの」

「正義の味方はどこ行つたの？ もうやめて、カナさんはそんな人じゃないでしょ！」
私が説得する感じの演技をするとカナの手に力が加わるのを感じる。

それと同時に歯軋りが聞こえる。

「あなたが、捨てさせた癖にッ」

「そうだね。でも、選んだのは結局自分だよね？ それと、私をあの人に殺しておけば

キンジの悲しみも一瞬だったのに」

「今からでも遅くは、ない！」

今にも飛び出しそうな雰囲気。

本調子じゃないし、正直ここでやりたくはない。

キンジでも助けに来てくれないかな？

なんて思っていると、

——ビシユン！

カナの脇腹を何かが貫いた。

「ぐッ……あ」

そのまま痛みを持っていた鎌をゆっくりと下ろした。

同時に私の使い捨ての方の携帯が鳴る。

出てみれば、一言。

『さっさと日常に戻りなさい』

お姉ちゃんだった。

しかもそれだけで通話が切れた。

この為だけにレアちゃん辺りでもわざわざ寄越したの？

と、思ったけど……お姉ちゃんの言葉からして私はまだ日常に溶け込めという話らし

い。

まだまだしばらくは武偵、か。

「つて言うことだから、私は授業に行かないといけないからじゃあね〜」

「待ちな——ッ」

今度はカナの左足が貫かれる。

防刃・防弾の服でしように……それを貫くつてことは徹甲弾^Aでも使つてるんでしよう。

カナはそのまま膝について崩れた。

心臓くらい射貫けるのになんか事はないって事は、まだお姉ちゃんの計算上は死んで貰ったら困るつてことだよ。

それが私が不機嫌になるか。

まあ、実際キンジの家族には手を出さないつもりだし。

別に手を出さないつてのは、何も傷つけない訳じゃない。ただ単に殺さないつてだけ。

あとは……せいぜい五体満足に回復する程度につてところかな？

と思つたけど、今思えば死んでも復活させれば問題ないんじゃない？

それやったら文字通りに私の寿命が削れる羽目になるけど。

カナを置いて私はそのまま授業へ向かう。

私を狙うことに躊躇いが無いのはいいけど、私の命を取るなら文字通り手数が足りないね。

私もお姉ちゃんにとつては盤上の駒の1つ。

だけど常に相手の二手、三手先の位置にいる。

他の連中は戦役なんてモノに目を向けてるけど私達は既にその先の戦いの準備をしてる。

たとえ戦役の後のことを考えてる連中がいたとしてもそれは自分達が上手くいった時のことしか考えていない。

浅はかだよな。

だからこそ、高みの見物を出来るしいいように引つ掻き回せる余裕があるんだけど。

さて、次はどこが動くかな？

そんなことを楽しみに考えながら私は日常へと戻る。

その後、私はキンジの退学を耳にするのであった。

第10章：幻想の日常（ア・ライフ・レス・オリジナリー）

101：ようこそ一般社会

日常に戻った私はいつも通りに過ごしている。

教室では何故かキンジがない。

任務でもある訳じゃないのに。

違うクラスだけど、レキもないらしい。

……待てよ。

確か転校手続きは出してたはずだけど……早すぎるし……

うーん、でも何だかそんな予感がする。

なので私は何となく準備をする。

別に私は転校届を出すつもりはない。

何故って？ どうせキンジは帰ってくるって分かってるから。

でもまあ……隣にいないのはどうも落ち着かない。

という訳で、職員室で1つの経過観察任務に私は自ら志願する。

これは武偵高から退学あるいは転校した者が社会的に馴染めていくかを武偵高に報告するもの。

単位的には何の旨味もないし、報酬もそんなにないので時間の無駄とは言われるが……教育組織的には助かるために一応は任務として残されている。

あとは、いざとなれば武偵高にそれとなく引き戻す役目を任されることもある。

優秀な人材を武偵がおいそれと辞めさせる訳がない。

そして自分はそんな任務だと観察対象にバラしてもいいし、バラさなくてもいい。

要はどっちでもいい。

経過観察であつて、監視ではないからね。

そしてこの任務では他校への潜入スリッパが出来る。

代わりに学校の警護もその期間は引き受けるつてことになるけど。

まあ、対価つてヤツだね。

そんな訳で私の予感的中したのか、マスタイズ教務科に早速お呼ばれしていた。

「タイミングがいいね、白野ちゃん」

「女の勘ですよ、先生♪」

高天原先生に言われて私は笑顔で答える。

経過観察については問題なく了承されたようだった。

「いつかは出るとは思つてましたけどね。まあ、キンジなら大丈夫だと思ひますよ。人間、身についた習慣はそう簡単に消えませんが……普段の生活に違和感を覚えて帰つて来るに決まつてますよ」

「まだ経過観察する対象は言つてないんですけどね」

先生の言葉に久々に墓穴を掘つた感じがする。

「そうでした。それで、対象は？」

「自分でも分かつてるくせに。遠山くんとレキさんよ」

先生が2人の書類を渡してくる。

転校する学校の名前とか、場所とか。

余計なのが……いや、レキはキンジと共にいるみたいな騎士的な誓いを立ててたはずだし、不思議ではないか。

「でも、白野ちゃんは相変わらず遠山くんが好きなのね」

先生から意外な言葉が飛んできた。

「……そうですよ」

そう勘繰られても仕方ないと思つてたけど、改めて言われると照れる。

神崎みたいに否定はしないけど……うん。

「初々しいわね。先生もそんな時期があればな」

あんまり深く聞いちゃいけない先生なのでノーコメント。
いや、知ってるけどさ。

私みたいに笑顔のまま極刑犯罪者は問答無用で殺してたゆとり先生。
現役時代のランクもそこそこ高かったはず。

ヒエラルキー的にも割かし教員の中では上だもんね。

「ともかく、重要な授業のみ参加でそれ以外は東池袋高校の生徒で問題ないですね」
「うん、しつかりと情報は送ってね。一応は任務だから」

と、高天原先生に笑顔で念押しをされて私は職員室を出た。

……待ってれば帰って来るって分かっているのに。

神崎に待つ女がいい女って説教した私がバカみたいだよ。

「キーちゃん」

「なに、理子？」

職員室を出たところの廊下で私にいつの間にか近寄ってた理子に目を向ける。
ものすごいジト目をしてる。

別に色金の件はバレてないので話す必要もない。

それとは別っぽい。

バレてるなら多分、理子は怒るだろうし。

「……惚けすぎじゃない？」

「何が？」

「メスの顔してる」

「失礼な」

「分かったよ。肉食のメスの目をしてる」

いや、何が分かって言い直したの？

肉食ついただけだよね。

「私はまだ何もしてないと思うけどね」

「自分で気付いてないだろうけど、キークンを見る頻度が多いよ。あと時折、アリアを殺しそうな笑顔で見てる」

「……………」

どうしよ、自覚がない。

それはマズイね。

「どうしたの本当に？ 情緒不安定過ぎない」

「かもね」

原因なんて分かりきってる。

色金を容易に使いすぎだよね。

この2、3カ月で2回も使ってるし。

「どうせなら、理子が私の精神安定に付き合ってくれたり——」

「……痛いのがやなかったら考える」

つまり私の切り裂き癖以外だったらしい、と。

理子は少しだけ羞恥に顔を斜めにする。

ははーん……さてはいつぞやの暗示の続きでも期待してるんだね。

しかし、それよりも私はキンジが優先。

「聞いたってなんだけど、私は別でやる事あるから……それじゃあね」

理子に軽く手を振って、私は背を向ける。

先生の情報によるとキンジ達が出るのは11月の終わり。

私にもお別れの挨拶に来るだろう。

こういうとき武偵高では、適当に長期任務に行くことになった的な感じで言っただけで自然消滅するのが普通らしい。

死んだ場合も同様。

その方がダメージが少ないから……割と鬼畜な発想な気はするけど、理には適ってる気がする。

11月29日。

11月の最後の日曜日に私はキンジの部屋でくつろぐ。どうせ、帰ってくるだろうし。

そう思っているとキンジは普通に帰ってきた。

「お帰り〜」

「ただいま」

私の声が聞こえた瞬間にキンジは諦めた感じで答えた。

レキは、足音の数からしていない……なので良し。

「それで？　いつまで出張？」

私がそれを聞くと、キンジは素っ気ない感じで返す。

「さてな……長いとだけ言っておく」

「ふーん」

私がソファアールで横になってたにたにたしながら見ると、キンジはすぐに何かに気付いた顔をする。

「内容を聞きたいか？」

「言いたくないならいいよ」

と、私の答えにキンジは確信を得たとばかりに溜め息を吐く。

「お前がそう言うことは、もう気付いてるんだろ？」

「何のことか分からないね」

「で、俺から話すまでがワンセットだ。じゃあ、お前だから、話すが、俺は退学だ。一般の高校に俺は行く」

その言葉に思わずドキリとする。

全く、この天然の女誑しは。

「おめでどう」

「素直だな、随分」

「私はキンジの幸せを願ってるからね」

「絶対に嘘だろ」

まあ、半分本当の半分は嘘。

絶望も見たい気持ちはある。

それとは別に私は質問する。

「内容を伏せて長期任務ってことは、自然に消えるよう言われてたんじゃないの?」

「まあな。お前はどっちしても気付いたろうけど、ていうか実際に気付いてるだろ?」

「バレてるんなら話したところで問題ない。いたずらに話すつもりもないんだろ?」

そりゃあね、と私は肩を少し上げる。

話したところで暴走しそうなものいるし、私は……この秘密は別に共有しなくていいと

思ってる。

とか私だけの秘密にする。

神崎達には絶対に教えてあげない。

レキ以外に邪魔者はいないってことだし。

それに――

「前にも話した気はするけど、キンジの性格じゃあ……戻ってくる方に私は賭けてるし」「誰と何を賭けてるんだよ」

キンジはツッコむ。

以前、ベランダのロッカーの中で似たような話をしたような気もするし。

私はうーん、と伸びながらソファァーから起きる。

「それで？ ついてきて欲しいとは言わないの？」

「俺の事情だしな」

「ああ、そう……私を置いていくんだ」

「その言い方はズルいだろ。貸し借りならちゃんと返すって」

「どうやって？」

「それは……卒業して会社で給料を貰って美味しい物食べる、とか？」

「何も考えてないんだね」

私の指摘にキンジは苦い顔をする。

相変わらず行き当たりばったりなんだから。

「悪かったな」

今度はうつ伏せでソファーに横になりながら、キンジの方を向く。

……どうしよう、経過観察とはいえついて行くのに……離れるってことにどうしても心がざわつく。

普段から素直に、とは言ってる私。

いつでも本心は言ってる。

だから――

「私、寂しいな」

それだけ言ってるあげる。

案外、依存してるのかもね。私。

「……ッ」

私の言葉にキンジは顔を真っ赤にする。

意図してやった訳じゃないけど、その反応に私は嬉しくなる。

何だかんだ意識はしてくれてるんだ。

「べ、別に離れ離れになる訳じゃないだろ？」

「そうだけど、近くにいてくれないのは寂しいって話」

私の言葉にキンジはまた赤くなる。

にへらと笑うと、キンジは視線を逸らしてまだ荷物をまとめてるのか部屋に戻ってしまつた。

……まあ、逃がさないんだけどね。

◆ ◆ ◆

少しだけ心残りがあるが、無事に俺は12月1日を迎えた。

この日を境に一般人となる。

我ながら未練がましく思うが、霧の言葉が引つ掛かる。

(寂しい、か)

確かに霧を置いて武偵高を去つたのは数少ない未練だ。

だけどまあ、あいつの姉を救うのとアリアの問題が解決するまで……それまでは付き合おう。

そう決めてるからな。

武偵じゃなくても出来ることはあるだろう。

それに武偵免許や武装関係をすぐに返納、解除することは非推奨行為。

なので何かあっても武力的な助けにもなれる。

本来は犯罪者からの報復があつた際に自衛手段が無いなんて事態を防ぐための処置なんだけどな。

ともかく、俺は一般高校生だ。

校舎は武偵高みたいに秘密基地みたいな感じじゃない。素晴らしい。

新生活に年甲斐もなくワクワクしながら、俺は新しい下駄箱へ行き、上靴を履く。

途中まで一緒に登校していたレキと共に刀剣も銃もない、職員室へと入り――

2年2組に配属された俺は、1組のレキとしばし別れ。

引率してくれる担任は……すれ違う生徒たちの会話を読唇したので分かったが、『ゴリ』というアダ名らしい男性の体育教師。気難しそうな顔をしてはいるが、どこの女教師にみたいにバスを横転させそうな感じはしない。普通のガタイの良い体育教師って感じだ。

「そうだ。もう1人転校生がいるんでしばらくここで待つてくれ」

「あ、はい」

ゴリに言われて、俺は教室の前で少し待つ。

まさかこの時期に俺と同じ転校生がいるとはな。

転校生と聞いて、霧やアリアを思い浮かべるが、あまり普通な転校生に会ったことがないと思いつながら、待つていると――

「どうやら来たようだな」

ゴリがそう言つて、こちらに向かつて来た転校生の顔を見て俺はギョツとする。

(き、霧?!)

印象こそ違うが……どう見ても霧に瓜二つの女生徒。

霧にそっくり、なのだが俺は少し冷静になる。

いやいや、レキはともかく霧は退学を言い渡された時にあの場所にいなかった。

つまりは武偵高にいるんだ。

だから、この人はそっくりさんと霧とは何にも関係ない。

そう思つてはいても、流石にそっくりな顔の人物を見てしまうと気になってしまふ訳

で……つい俺はそちらをチラチラと見てしまふ。

体型も似てるし、髪型はポニーテールだが長さに黒髪のセミロングだ。

だけど目元は少し鋭いし、霧に比べて気が強そうな印象を受けるな。

と、俺は武偵高での癖で観察してしまふ。

「何見てんの？」

俺の視線に気づいたのか、言いながら鋭い目で俺を睨んでくる。

「いや、すまん」

まあ、ジロジロ見られたらそら不愉快だよな。

そう思って謝罪するが、どうも他人のような気がしない。

雰囲気はちよつとヤンキーって感じだな。

そして――

ガラガラ、と、ゴリが2組のスライド扉を開く。

彼について、ざわつく教室に入り……

「HRを始めるぞ、静かにしろー。まずは今日は、転校生を紹介する」

などと学園ドラマの始まりみたいな事を言ったゴリは、チョークを取り、黒板に俺と隣の女生徒名前を書いていく。

『遠山金次』

『赤桐亜金』

俺は隣の子の名前が気になって、視線だけ黒板の方を向ける。

名前は……あかぎりあかね？ おそらくそんな名前だ。

同時に名前を書き終わったところで新しいクラスメートたちの視線が、こっちに集中する。

「質問があれば後で挙手。じゃあまずは遠山からだ。自己紹介しろ」

と言われたので俺は、

「は、はい。えつと……遠山キンジです。よろしくお願いします」

武偵は不特定多数の前で自分の事を語るべからず——と叩き込まれた習慣が出て、黒板を背にとりあえず名乗り……それだけにしておいた。

「続いて赤桐あかぎり」

言われて隣の女生徒も続いて自己紹介を始める。

「赤桐 亜金あかね。イギリスの生まれだけど、育ったのは日本。なので英語はあんまり。好きなものは紅茶、嫌いなのは退屈。趣味は人間観察で、得意なのはちよつとした小細工かな？ よく手癖が悪いって言われる」

お手本のような自己紹介をしながら赤桐が右の手のひらを出してくるりと回転させると、人差し指と中指の間に500円玉がいつの間にか挟まってる。

す、スゲエな。

クラスメートも一瞬、何があったかよく分からない感じで目を見開く。

それからクルクルと指の上で500円玉が転がす……カジノでもマジックをしてるテーブルがあつて似たような動作を見たな。

コインロールとかいう技法だったはず。

そうしていつの間にか転がしてる内に2つに増えて、動きが止まると今度は薬指と中指に500円玉が挟まってる。

それを全員に見えるように見せて一気に2枚とも手の中に握って軽く振ると、500

円玉が2つとも消えた。

「こんな感じだ」

『おおく!』

一気に釘付けだな。

俺もだけど。

同時にますます霧みたいだな……って印象が強くなる。

好きなものとか趣味とか。

それにあいつはいきなり人の背後に立ったりする変わり者だが、多芸だったな。ナイフでジャグリングしたり、空中でリボルバーのリロードしたり。

物騒な芸だったが、面白くはあった。

「それじゃあ、質問あるやつは挙手していけ」

ゴリがそういうと一気に手が上がる。

「遠山は何か一発芸とかあるの?」

1人の男子生徒が当てられてそう言う。

まあ、今の流れからして俺の方にもくるよな。

別に俺はそんなに多芸じゃない。

せいぜい出来るのは白雪も絶賛してたバタフライナイフの高速開閉ぐらいだ。

しかし、そんな危ないものは校則違反なので持ってきてはいない。

いや……あるわ。

スリッパ潜入のために声色を変える練習を霧としてたから、小声ではあるが変声術が使える。

ただまあ、別に目立ちたい訳じゃないしな。

「ちよつと、そういうのはありません……」

なので俺は視線を逸らしつつ無難に答える。

「趣味は？」

「いや、特に……テレビで映画を見るとか……」

「特技は？」

「特技……別に……」

ずっと俺は面白い回答のできない質問ばかりされた。

対して赤桐はと言うと、

「好きな音楽は？」

「オペラかな？ 私の友人が好きなんだ。あとメジャーなアーティストは一通り聞いて

る」

「部活は？」

「特にはしてないね。私が好きそうなのがないんだ。料理は得意なんだけど、どうしよ

うかなくて感じた」

「さっきのマジックみたいなのって他にもあるの?」

「あるけど、お金ないって言っても疑わないでね」

色々と質問責めにあっている。

なんかこう、比べられるとあれだな……俺って何も無いんだな。まあ、知っちゃいたけど。

HRが終わり――

ゴリは「学校のこととて遠山が分からないようだったら、教えてやれ」と、俺の隣に座ることになった女子にそう言い残して去っていった。

で、俺は指示された窓側の後ろの席についていた。

赤桐は同じ転校生ってことでまとめられた感じで同じ後ろの席の俺の右側。

するとすぐに赤桐のところにも早速何人か生徒が集まってくる。

そりやそうだろうな……なんて考えていると、くるっ。ゴリに言われた女子が、笑顔で振り向いてくる。

「先生も言ってたけど、何かあったら聞いてね。私、望月萌もちづきもえ。クラス委員なの。他のクラスにも望月さんがいるから、萌って呼ばれてるよ」

さっきの俺の躓つまずきをフォローするような優しい言い方だ。

ていうか、普通にカワイイな。俺の場合はツイてない部類の顔立ちだ。

「あ、ああ」

「さっそく何かある?」

サラサラのボブカット、色は茶色がかっているが眉毛の色からして地毛だ。穏やかそうで大きなふたえの目。色白で、身長は158cmくらいか。中空知や白雪ほどではないがグラマーな体型だ。ダイナマイトボディ……意味合いは違うが、俺には爆発物に変わりない。

探偵科インクレストの習慣で外見をパーツごとに観察してしまったが、

「いや、特に……」

俺にはそれぐらいしか会話が続かない。

だが、せつかくの好意を無駄にするような感じがして俺は何とか話題を絞り出す。

「萌は……クラス委員なのか?」

「あ、うん。そうだよ? 困ったら何でも聞いて」

「そうか、しつかりしてるな。妹とかいるからか?」

「え……? そうだけど、何で分かったの?」

「勘だよ。俺も妹とかいるからな」

本当はさつき振り返った時に筆箱の中身が見えて、プリクラの写真があつたからだ。

萌と似た感じの一回り小さい子の顔と一緒に萌が写ってる。

姉ではないだろうし、写真の顔の下に名前もイニシャルでM・MとM・Sってあった。
望^{MochidukiMoe}月 萌だから、望月なんちゃらって名前だろう。

霧のせいで変に観察力が俺も上がっちゃったな。

探偵科インケスタとの授業とは別で。

「そうなんだ。遠山君の妹さんってどんな感じかな」

「あー……一言でいえば、天才だな。あとカレーを作るのが得意だ」

「て、天才？」

「ああ、アメリカから帰ってきたばかりなんだ」

人工天才ジニオンだし、間違っではないない。

その俺の言葉に萌はほえー、とした感じで目を輝かせる。

そんな時だった。

「ねー萌く。亜金ちゃんすごいよ」

などと萌と親しいクラスメートなのか、男女混成のグループがこっちに来た。

転校生の亜金アキが、やれやれって感じで引っ張られてきた。

「ねえねえ、さっきのやつだよ」

「同じネタなのに飽きないな。はい、じゃあ右手に500円玉があります」

言いながら亜金は指に挟まれた500円玉を見せる。

「これを握ると、あら不思議」

こつちに手の甲を向けるようにして握った。

それからすぐにパツと手を開いてこつちに見せると、手の中にあるだろう500円玉が消えた。

「すごい」

素直に萌は驚いてる。

亜金は萌を見て、

「ちよつと失礼」

左手で萌の首筋の後ろ辺りの髪を触り、引くと――

「ゴミがついてたよ」

なんて言いながら500円玉が亜金の左手に握られていた。

『お〜』

鮮やかな手つきで周りには感心する。

さっきの自己紹介の時のネタは分からないが、これは分かったぞ。

そんな俺に気付いたのか、亜金はフツと笑う。

「気付いたの？」

「……ネタバレしていいなら」

「ふふふ」

「簡単な手口だ。右手に握ったヤツは袖の中にある。原理はこうだ、こつちに手の甲を見せることで手首に滑る500円玉を見られないため。今、彼女の右手の中には腕を下したと同時に袖から落ちた500円玉がある」

亜金は正解とばかりに右手の中を見せる。

その手には確かに500円玉があつた。

「で、みんなが右手に注目してる間に左のポケットの中の500円玉を握って他の場所から出てきたように見せた」

俺も同じようにたまたまポケットにあつた小銭を握って萌の後頭部から10円玉が出たように見せかけた。

「ミスディレクションってやつだ。マジックとかでもある視線誘導。大げさな感じで注目させてその間に別の事をする」

俺が少し実演してみせると、周りも『おー』と驚いてる。

「詐欺とかスリでもある手口だから気をつけた方が——」

しまった、つい癖で犯罪の方に結び付けそうになつた。

なのでそこで俺は言葉を止める。

亜金は、

「序の口だけで、正解」

つまらなさそうに口を尖らせていつの間にかトランプ束を握ってた亜金。

「あ。こういう道具つて校則違反だった」

しまったとばかりにパン！ と、トランプの束を両手で挟むと消えた。

これは……分かん。

しかし、本当に多芸だな。

霧だって言っても俺は驚かないぞ。

◆ ◆ ◆

はい、どうも赤桐 亜金こと白野 霧です。

経過観察と言うことで知られないように偽名です。

名前の由来？ それは秘密。

ふふ……疑わしい感じでキンジは私を見てるけど、確証は得られてない感じ。

結構な時間一緒にいるけどこの程度も見破れないなら、しばらくは安心だね。

つて言うか、本当にあんまり白野 霧っていう人物のベースは崩してないんだけど。

せいぜい変えたのは目元というか、霧は丸っこい目だけど、こっちはツリ目。

それでいて雰囲気をギャルっぽい感じにしただけ。

別に色黒とかにはしてない。

ああ、あとポニーテールか。

ともかく変えたのは目元と髪型と雰囲気と、喋り方。少し男勝りな感じ。

そもそも私が隣に来るとは思わないでしょう。

なので今の私はちよつと手癖の悪いギャル女子高生。

しかし、キンジつてばやっぱり私の言うとおりになった。

話題にもついていけず、コミュ障も相まって全然交友関係が広がらない。

生活音も銃や刃物の音、戦闘の音に聞こえてるんだろう。

授業中も全く集中できてない。

しかもチンプンカンプンって感じで、無駄に疲弊してきてる。

切り替えが大事って話もした気がするんだけどね。

授業も終わり、私に色々と遊びに行こうと他のクラスメートに誘われたけど断った。

片付けがあるって理由をつけてね。

それよりも私は先回り。

目指すはキンジの実家。

久しぶりだし、ご挨拶に行かないとね。

服装は変えとこう、まだネタバレには早い。

適当な公衆トイレで着替えて、私はJR巢鴨駅に近いキンジの実家へ向かう。
実家に訪れるの1年ぶりくらいかな？

そう思つて楽しみで向かっていると――

「あア？」

「……あ」

正門前、ロック歌手みたいな男が箒で石造りの門前を掃除してる。

お互いを認識した瞬間に私は、

「ぶ、くく……」

笑いながらも写真撮影。

「オイ……肖像権つて知ってるか？」

「君つて治外法権じゃないの？」

「俺はこれでもアメリカの武偵だ。まだな」

「そつか、それは残念。君のお兄さんに送りつけようと思つたのに」

ジーサードに言いながら私は見えるように写真を消してあげる。

「なんでテメエがここにいる？」

「経過観察。キンジが退学しちゃつたし、上手くやつてるかなつて」

私の言葉にジーサードは怪しんでいる。

だけど、すぐに何か結論を出したようですぐに掃除に戻った。

「かなめを救ってくれたのには感謝してやる。だが、俺はお前を信用しちやいねエ」
それだけを言って黙々と掃除をするジーサード。

なるほど。

私に中にあるものを知っていると、そう言いたい訳だね。

キンジは私かなめを救ったとは言っていないだろう。

そして、色金のこともちろん話したりはしていない。

キンジは約束を破るような人じゃないね。嘘は時折言うかもしれないけど。

ともかくあの時のことは私とキンジだけの秘密なんだから勝手に知られたと見るべきだね。

ちよつと迂闊だったかな

まあ、いいや……別に知られたからつてすぐに状況が変化する訳でもない。

キンジの家族には手を出さない。

でも私の家族の邪魔になるなら、それは話は別だしね。

「バ」自由

私はそれだけ言ってトントンと玄関をノックして、

「お邪魔しまーす」

入る。

誰か来ないかと待っていると、そろりとかなめが私を居間の陰から見てる。

「何でここにいるの？」

半分顔を覗かせた状態でジト目で見てくる。

お互いに言えるセリフではあるけど、そこに関しては触れない。

「ほら、私ってばキンジの……何だろう？」

うーん……プロポーズ的な告白をされたとは言え、あつちはそう認識してないだろうし。

恋人？ ファイアンセ 婚約者？ でも家族宣言されたとは言えまだ距離感が近い訳じゃないし。

ああ、そうだ。

「そう、人生のパートナーだからさ」

しつくりくるね。

私はキンジがいないとダメ。キンジもおそらくリードしてくれる人物がいないとダメ。

ある意味では運命共同体とも言えなくもない。

瞬間、かなめの顔がすごい形相になる。

「……ふーん。あ、ふーん。そんなこと言うんだ」

「妹はお呼びじゃないよ。かなめちゃんの場合は愛が重いし」

「ストーリーカーの癖して……」

「お兄ちゃんのアルバム作ってる人に言われたくないね」

「あれは成長記録です。あとは記念日とかまとめてるだけだから」

「なんで成長記録を妹がしてるの……」

「どこの世界にキャラメル貰っただけで記念日にする妹がいるんだか」

「お姉ちゃんだって、お兄ちゃんの洗濯物嗅いでる癖に」

「ちゃんと洗濯出来てるか確認してるだけだから……」

人を臭いフェチみたいに言うのはやめて欲しいね。

しかもそれしてるのかなめの方だし。

無駄な話をしてるとキンジの祖父——遠山 鐵まがねが着流はなてんしに半纏はんてんというラフな姿で出

てきた。

「ふむ、誰じゃ？」

「どうも、初めまして。白野です」

何だかんだで初対面。

家に何度か訪れたけど、会う機会はなかったからね。

「おう、お主がキンジのコレという噂の」

小指を立てていやらしい笑みを浮かべるお爺さん。

第一印象はただのスケベジジイだね。

「まあ、そんなところですか」

「だけど悪い気はしないので乗せられる。」

「キンジならまだ帰つたらんぞ」

「そうですか。授業も終わつてると思つて様子を見にきたんですけど」

「まあまあ、そういうことなら上がりなさい。待つておれば帰つてくるじやろう」

という訳で上がらせて貰う。

鐵さんはそのまま、台所がある方へと向かつていった。

私は居間の方でかなめと2人。

「……はむ」

キャラメルを頬張りながら、かなめは私をジトーとした感じで睨んでる。

と、思いきやかなめが口を先に開いた。

「何で黙つてるの?」

「何が?」

「あたしを生き返らしたの」

「サード経由で知ったか。」

まあ、キンジは話さないだろうね……そりゃ。

「別にお礼が欲しい訳じゃないからね」

「なんで色金を持つてるの？」

「私にも分からない。物心ついた時には保有者だったからね」

実際、私は自身の事は何も分からない。

お父さんに拾われるまでは色金が体内にあることすら知らなかった。

それにどうやら私には殻金なんて上等な物はない。

なのに心結びはされてないのが不思議なくらい。

融合してるかもしれないけど、自我が失われてる訳じゃない。

それはそれで謎だけ。

「もうこの話はいいかな？　色金の話は正直したくないんだよね」

どこで誰が聞いているとも分からないし。

「私のことを怪しむなら別にいいよ。信用がないのも分かっている。でも、私はキンジの

味方……それは信じて欲しいな」

にっこりと私は微笑む。

「その、お礼だけは言っておくよ。助けてくれて、ありがと」

かなめは少し照れくさそうに言う。

「どういたしまして」

私はそれだけ答える。

実はキンジの為のエサにしようかなとか考えてたし。

サード？ あつちはちよつと戦鬪力的にも手こずるからダメ。

別に弱みがない訳じゃないから殺りようはあるけど。

ともかく、お礼を言われる立場じゃないからね。

変なところで律義？

まあ、そうかもね。

◆ ◆ ◆

玄関先で妙な光景を見た俺は疲れながらも久々の実家に心が安らぐ。

「ただいまー」

そう何となしに言った俺の言葉に、

「お帰りー」

と言葉が返ってきた。

……聞いたことある声が居間から聞こえてきたな。

気のせいだろ。

疲れてるんだな、俺。

居間の方へと歩みを進めると、

「ども」

いるんだよな

居間のこたつでくつろいでる霧がいた。

座椅子に背を預けてる。

しかもせんべい食ってお茶まで飲んでるし。

「サードとかなめに加えて何でお前までいるんだよ」

「様子を見にきた。新生活は馴染めてる？ お友達はできた？」

「母親みたいなことを言うんじゃねえ」

「だってキンジ、神崎さんのこと言えない程コミュ障だし」

「共通の話題がないだけだ」

「モノは言いようだね」

なんて話してる内に俺は少しホツとする。

まだ1日しか経ってないが、こっちの方が気楽だ。

お茶を飲みながら霧はニヤニヤしてる。

「それで？ 実際のところお友達はできた？」

「別に、お前が心配する事じゃないだろ」

「そう言うってことは出来なかったんだ。友達じゃないけど知り合いはできた感じかな？」

「そうだな、転校生でお前に似てるやつがいたよ」

と言うと霧はふーんと、特に興味もなさそうな感じだ。

それからゆつくりと立ち上がりながら、

「ともかく元氣そうで何より、私は帰るよ。様子を見にきただけだし」

「もう帰るのかよ？」

「こっちも授業があるんだからそりや帰るよ。寂しいなら、いつでも帰ってきていいんだよ〜♪」

最後に小バカにしたような感じで言ってくる。

1日だけの転校生とかどんなヤツだよ。

そう心の中でツツコミつつも俺は、はいはいと手を振る。

「お邪魔しました〜」

そのまま霧は普通に帰っていった。

本当に様子を見にきただけなのか……

あいつもあいつで心配性だな、と思ったが。

実際問題、霧の言うとおりになってきたままでいるあたりが笑えない。

もうちよつと何かやった方がいいな、俺。
そう実感するのだった。

102：空虚な日常

東池袋高校の高校生として既に何日か経過した。

私はクラスで既に何人か友達が出来た。

紅茶仲間がいたらしく、紅茶に合うお菓子の話とかで盛り上がってる。

それから男子にも分け隔てなく接してる。

もちろん、人の嫉妬を買わない程度の付き合い。

誰が誰のことが好きとか、そこら辺の情報も収集した上で立ち回る。

人の嫉妬は怖いからね。

……私も最近嫉妬なんて覚えちゃったし。

気持ちは分からなくもないし。

「亜金ちゃんどうしたの？ 笑顔が怖いよ」

「何でもない。ポーカーフェイスが得意だから、笑顔でいれば何も分からないでしょ。

はい、コインがあるのはどっち？」

言いながら私は両手に握った500円玉が最終的にどこにあるかを当てるゲームを

してる。

「それじゃあ、こっちー！」

言いながらその女子生徒は見事に当てた。

「正解。だけど残念、消えたから私の勝ちね」

一回机の上で見せて、再び手を置いて見せると消えた。

「なにそれ〜！」

「そんなのアリ〜？」

他の子はそんな声を上げる。

でも笑ってるから本気で不満を持って言ってる訳ではないらしい。

「最終的にどこにあるかって話だし。ちなみに正解は……君が手を握って開いてみて」

私が指名した子が不思議がって右手を握って開いた瞬間、500円玉が机の上に音を立てて落ちてきた。

「え、え〜?!」「すごい!」「今のどうやったの?!」

男女関係なくマジックに夢中な声を上げる。

こうして私はエンターテイナーなクラスメートの立場を確立してる。

チラリとキンジを見れば、休憩時間でどこのグループに所属する訳でもなく一人だけでいた。

孤独だね

今頃、武偵校での日々が恋しくなっていたり……あわよくば私を思い出してくれたり、なんて。

昼休みには1人だろうし、そこを狙うか。

いつも通り最終的には屋上に行くだろうし。

やってきた昼休み、キンジが教室の空気に耐えきれなくなつて席を立つたと同時に私はゴミを捨てるついでにトイレに行つてくるとだけ言つて尾行する。

ここで無駄に尾行スキルを使う訳にも行かないので、いかにも素人な動きで追い掛ける。

廊下の途中のトイレで手を洗うフリをしてすぐに出てきたり、図書室に入って本を探しながら別の出口から出たり。

最終的に予想通り屋上に向かう階段を上り始めたキンジ。

仕掛けるならここだね。

屋上の扉を開けると、キンジはいない。

ちよつと武偵の動きを出し始めたね。

まあ、素人ならここで引き返したり裏側を搜索するだろう。

そうしてる間にキンジは撒けるスキルはある。

仕方ないので私は一旦諦めた感じで、屋上の扉を閉める。

5秒、10秒……うーん、追っ手を確認する時間としてはこんなものかな。

そう思つて音が鳴らないようにこっそりと扉を開ける。

目立たないように扉の陰のフェンス沿いにいるだろう。

そう思つて扉を開けると……

やっぱりいた。

寝たフリをしようとしてるらしく、こつちを見ていない。

私はキンジから見えて扉の陰で見えないようにしつつ、階段がある建物の裏側に回る。

それからゆつくりとキンジに近付く。

「何やってるんだよ」

「あ、なんだ。バレたのか」

目を閉じたフリをしたキンジが諦めて声を掛けてきた。

ふふ、狙い通り……なんてね。

「なんで俺を追いかけてくるんだ？」

「いや、ほら私と同じ転校生じゃん。独りで寂しそうですさ」

「……………」

あ、面倒なのに絡まれたって目をしてる。

今の私は別人設定だから、もっと面倒にしてもいいんだけどね。

「随分と楽しそうじゃないね。普段からそんな不愛想なの？」

と、私は陽キャのギャルっぽい感じでちよっと押し気味で聞く。

「そんなつもりはないんだがな」

「ふーん……遠山は何か理由があつて転校したの？」

「まあ、そうだな。前の日常が俺と合つてない気がしてたから環境を変えてみようと思つたが……違和感が、な」

「それってさ。つまんないってこと？」

「いや、別に……」

そんな筈はない、とキンジは内心で言い聞かせるようにしてるだろう。

だけど空虚な思いをしてるのは丸分かり。

「変だね。楽しくないなら、自分で何か新しいことを始めてみるとか……環境がダメなら別の変化を求めればいいのに」

言いながら私はチュッパチャプスのキャンディを出して舐める。

それからコインロールで遊びながら、500円玉を2枚に増やしたり1枚に戻したりする。

これやるのいい大ききなんだよね。

「ともかく、俺のことは放っておいてくれ」

面倒臭そうにキンジは言い放つ。

「冷たいなく。非社交的って言われたい？ 友達とかいないの？」

「……いるよ。前の学校に」

「へへ、いるんだ」

「ああ、出て行く前に寂しいとか言われたよ」

それ私だね。

「そこまで言われるってどんな関係な訳？」

呆れるようなポーカーフェイスをしつつ、私は聞いてみる。

「……」 大事な人”ではあるな」

手元が狂ってチャリンと、500円玉を落つことした。

同時に心臓が跳ねあがる。

ああ、もうッ。

その不意打ちは卑怯だよキンジ。

……どうしよ、顔が緩む。

キンジ自身は別の意味で言ってるかもしれないけど、ワード的には誤解されかねない。

実際問題私が動揺してる。

私も魔性だなんだって言われてるけど、こっちもある意味では魔性と言うか……自覚がないだけタチの悪い男と言うか。

前の私なら誤解してるんだろうな、で終わったのに。今では変に意識しちゃうよ。

「落としたぞ」

「ああ、うん。ありがとう」

寝転びながらも500円玉を拾ってくれたキンジが私に手渡ししてくる。

お礼を言いつつも私の動悸は激しい。

表情を崩さないようにしないと。

「熱でもあるのか？　こんな寒いのにスカートで屋上に出ない方がいいぞ」

ジャンヌが持つてる少女漫画の鈍感彼氏役にありがちなセリフを吐きやがる。

今なら撃ちたくなる神崎の気持ち少し分かる。

そう考えてると私の携帯電話が鳴った。

こんな時に誰かと思えば、我が妹の理子からだった。

仕方ないので私は、

「心配ごうも。電話もきたし、また今度ね」

とだけ言つて屋上を去る。

それから階段の踊り場で電話をする。

「はい、もしもし」

『お姉ちゃん、どこにいるの?』

「なに? 急ぎ?」

『別に……どうせキンジを追いかけたんでしょ?』

流石にそこは読まれるよね。

「詳しくは言えないけど社会復帰中の人を経過観察中」

『そうですか。お姉ちゃん自覚ないけど最早ストーカーじゃん』

「大体私が殺る前の行動をひつくるめたら全部それでしょ?」

『確かにそうだけどさ。お姉ちゃん、最近はどうなの?』

「何が? 別に動悸が激しいだけけど、どうかな?」

『ああ、はい……不整脈ですね』

何かを諦めた感じで適当な結論を出す理子。

『それはそうと、こつちにアリアを止めれる人員がないから早く戻ってきて』

「理子なら何とかなるでしょ」

『いや、無理だよ。キーくんいなくて割かし最近は生理みたいな感じの荒れ模様だから』

どんだけカリカリしてるの。

それって私より神崎の方がよっぽど不安定じゃないの？

こっちは一欠けらも殻金が無いって言うのに。

無い状態が馴染み過ぎたのかもしれないけどさ。

「ともかく、私は私でよろしくやってるから。空いた時に話は聞くよ」

『……分かった。早く帰ってきてよ』

何だかんだ理子も寂しいだけでしょ。

と、思ったけどそれは口に出さないでおく。

それよりも飴^{あめ}、甘いなあゝ

この甘さはそれだけじゃないかもしれないけど。

放課後になった直後も部活に入ってる訳でもないし、どこかのグループに入ってる訳

でもないのでキンジは1人。

私も適度に遊んでるグループからの誘いを今回は私用があると断る。

そして、校舎を出たところで背後から声を掛けてキンジを捕まえる。

「お兄さん孤独で暇？」

「おい、孤独なんて使うな。惨めに聞こえるだろ？」

背中から喋り掛けると、無視するでもなく普通に反応した。

本人的にはしまったと思ってるだろう。

こういう軽口は白野である私と何回かやってるから反射的に答えてしまった感じだろう。

「バカにしてる訳じゃないけど、転校してからずっと陰キャムーブだよ。私のネタを見破った時の鋭い感じはどこいったの？」

その私の言葉にキンジは少しマズイなって感じの顔をした。

武偵の癖が出てるとか思ってるんだらう。

「それより、ちよつとは勉強進んでるの？ いつもチンプンカンプンな顔を隣でしてるから見てる私が心配になってくるレベル」

「……あんまりだ」

だらうね。

キンジは頭が悪い訳じゃないけど、学がある訳じゃないしね。

神崎は逆で学があるけど、頭が良いとは言えない。

「Shall I teach you how to do it？」

「何だつて？ と言うか、英語はあんまりじゃないのかよ？」

「別に出来ないとは言つてない。今のはやり方を教えようか、つて言ったの。私に付き合ってくれるならね」

「……やめておく、貸し借りはしないようにしてるんだ」
丁重に断られたか。

まあ、貸し借りについては身をもって体感してるし、これ以上は増やしたくないんだろう。

私以外。

「あ、そ」

ツレないなるとばかりに校門近くに来たところでまたチュツパチャプスのなキャン
デイを舐めだす。

その時に何か言い争うような声が聞こえて、私もキンジを足を止める。

校庭の片隅、自転車置き場の方だね。

私はキンジにも聞こえてると思うから、聞いてみる。

「何か聞こえたね」

「そうだな。ケンカでもしてるんだろ」

この流れ、キンジは無視するつもりだね。

でも私の鋭敏な聴覚は誰の声かまで分かっているから、キンジは無視できないはず。

「——バイクの登校は禁止されてるし……！ 騒音が他の人の迷惑だし……！」

「人の迷惑う？ 何それエ？」

「俺たちや登校してねエつつてんだろ！ 停学中なんだしよオ！」

隣でキンジが舌打ちした。

望月 萌の声に気付いてしまつて、すぐにオラついてる不良であろう声がどんな状態かを分析してる。

何だかんだ……正義の味方だよね。

自分ではそんなつもりはないだろうけど。

それから、

「赤桐は先に帰つてくれ。どうやら面倒ごとみたいだ。俺が様子を見てくる」とキンジはちよつとヒーローっぽいセリフを言う。

だけど、何となく分かるよ。

赤桐が白野と似通つてる点が多いから変に意識しちゃうんだろう。

だから私を遠ざけようとしてる。

だけど、そうはいかない。

私は自転車置き場の方へと駆け出す。

「あ、おい！」

走り出した私を引き留めるようにキンジは声を上げる。

あはは、捕まえてごらんさくい……なんて。

そんな寒いセリフを心の中でふざけながら考えてると、自転車置き場でメチャクチャに倒された自転車が目映る。

「藤木林君、朝青君、せめて蹴り倒した自転車は元に戻して……」

と、望月が自分の自転車を起こしつつ言ってるのが目についた。

そしてその近くにいるのはいかにもチンピラって感じの小物臭のする男が2人。

派手に染めた金髪の小さめの色付きサングラスに、いくつものピアスを着けた痩せ気味の男。

もう1人は幾何学模様みたいな剃り込みを入れた丸刈りの頭、チェーンをやたらと腰にジャラジャラと言わせてダボついたズボンを穿いて、金属バットを持った太った男。

太った方は片手でフライドチキンを食いながら、痩せた男が威圧してるのを薄ら笑いしながら見てる。

望月の視線からして痩せてるのが藤木林で太ってるのが朝青だろう。

「よし望月。お前、俺に無礼なこと言った罰金10万な。出せなきゃ、犯っちゃうかと、藤木林はチャチな飛び出しナイフをポケットから出して脅してきた。

えらく現実的な数字だね。

頭悪い奴なら100万とか言いそうだけど。

そう考えると何度か同じ学生相手にカツアゲしてる経験はあるらしい。

まあ、小物に変わりはないけど。

しかし既に職員室がある窓の方からクラス担任の教師が見てるんだよね……私のことを学校側は知ってるからここで動かない訳にはいかないし。

ここでバレルにはちよつと早すぎるんだけど……どうしようかな？
と、私は少し算段を立てる。

仕方ない……見えないところに連れ出してキンジのいないところで武偵権限を発動しようか。

一般の人に武偵がいるのを知られたらあらぬ噂が立つから、学校側に配慮した上で仕事をしないといけない。

もしかしてこの高校の関係者に犯罪者が？ とか、凶悪な犯罪者が潜んでるとか。後者、私だけ。

こんな一般高校にジャック・ザ・リッパーがいるなんて誰も夢にも思わないでしょう。なんて余計な考えはこれぐらいにして。

「お兄さんたち、そこで何してるの？」

「ああん？ 何だよ、テメエ。お前も俺達のやることに文句でもあるんですかア？」

藤木林が出てきた私にナイフを向けて威嚇する。

私はキャンディを舐めながら悠然と近付く。

「いや、別に。文句じゃないけど、ちよつと遊び慣れてる感じがあつて声を掛けちゃつた。どう、お兄さんたち？ そんな冴えない子より私と遊ばない？」

軽く制服を崩して、スカートを軽くつまんでチラチラとアピールをする。

藤木林はナイフを向けつつも少し顔がにやついた。

「この程度で釣れるのか……警戒心も何もないね。」

「何だア？ 誘つてんのかよ？」

「誘つてるよ。いやー、ここら辺転校してきて知らないからさ。いい感じに遊べるところ紹介してくれる人を探してたんだよねえ」

「おい、どうする？」

「いいんじゃないね？ 金はないぞオ。あと、俺達は優しくねえからな」

藤木林が朝青に問い掛けると、野太い声で答えた朝青も私にターゲットしたらしい。

「いいよ。私もちよつと欲求不満でさ、お金はいらないから。ただお金持つてそんな人を紹介してくれたらサービスするよ」

ベロつとキャンディ出して舌を出しながら左の指で輪つかを作つて右手の人差し指でその穴に挿入するジェスチャーをする。

それを見た2人は「おほウ！」って感じで盛り上がってきた。

望月はそんな私の姿を見て、何の話をしてるか分からないって感じの顔をしてる。

目が合ったので取りあえずウィンクしてあっち行けって感じで逃げるようジェスチャーをする。

そんな私の意図を理解したのか、望月は少しおろおろとした。

「ちよつとトイレに行こうぜ。あっちに汚くてあまり使われてねエ古いトイレがあるからよ」

藤木林が私に近付いて誘導しようとする。

よしよし、このまま人知れずに連れて行って現行犯逮捕。

なんて、キンジが黙ってる訳ないよね。

「……おい」

「……と、遠山君つ……?」

望月の恐怖で潤ませた視線の先に、キンジがさり気ない感じで立っていた。

「あア? 何だおめエ、何ガン垂れてんだア?」

唐突に出てきた男に藤木林は変に眉を寄せて威圧する。

「えーつとだな。光ってるモノ、しまえよ」

出来る限り穏便に済まそうとキンジは穏やかな感じで話しかけた。

が、この手のヤツは変に逆上してすぐ取りあえず雰囲気で圧倒しようとするから——
「関係ねえだろおめエは! 俺に意見するなんて百億光年早えんだよ!」

予想通り、意味の分からないキレ方をした。
光年って距離だし。

キンジ以上にバカそう。

「そうそう。俺達は合意の上でこれからこの女と遊ぶんだ。だからさっさと消えな」
朝青がくちやくちやとフライドチキンを食べ、その骨を捨てながらバットを軽く見せるように肩に担ぐ。

「そういう訳だから遠山。望月さん連れて帰ってよ」

何でもないって感じで私は言う。

キンジはその私の言葉に何か考えてる。

まあ、女1人に男2人……相手が乱暴しなさそうな人相じゃないからね。

そこら辺をどうしようか考えてるんだろう。

「や、やめて！ 赤桐さん、ダメだよ！ 私の代わりに……」

言葉を詰まらせながらも望月が流石にそれは看過出来ないのか、引き留める。

あーあ……せつかく私1人で何とかかなりそうだったのにそんな口を挟むから――

「じゃあ、委員長さんも一緒にくるかア？ 罰金はいいいから、一緒に楽しいことしよう

ゼエ」

ほら、食いついた。

ベロりとナイフを舐めて下卑た笑顔を浮かべる藤木林。

それからナイフと視線が距離の遠い望月の方に向いた瞬間に、隙だとばかりにキンジが動いた。

「だから、それをしまえって」

キンジは藤木林が刺せるようない感じの間合いに歩いて自然に入った。

「——あア？」

刺そうとしたら腕を何とか押さえるつもりだったんだろう。

だけど藤木林に刺す度胸がないのか、キンジに向けようとした刃物を反射的に上に向けた。

素人だから予想外の動きをすることに多少、戸惑いつつもキンジは機転を利かせて体を寄せた藤木林にもつれた感じをしつつ……

「おっと……！」

腕を軽く押さえて上げさせて朝青の方に刃物を向けさせた。

拳1つ分の距離まで刃物が迫ったところで朝青は「うおおッ!」と驚いて金属バットを落とした。

驚きすぎでしょ。

いや、予想外に刃物が迫ったら焦るけど。

そのままナイフを軽く落とさせて、金属バットとナイフの両方をもつれた感じの足でキンジは軽く蹴り飛ばした。

ナイフは側溝に落ちて、金属バットはコロコロと転がって少し遠くにいった。案外器用な事するね。

「ちッ！ もういい、やっちまえー！」

「てめえなんざ、ワンパンで殺せるぜ！」

武器がなくなつて逆上した2人は、数に任せてキンジを殴る蹴るの暴行をする。

1人がキンジの相手をしてもう1人がバットを拾いにいけばいいのに。

と、まあ……そんな考えが素人の彼らにあるはずもなくそのままゴリ押ししている。

しかし、殴られたり蹴られたりしてると全然ダメージ入ってないね。

鈍い音しないし、パシ、ペちつって感じ。

そもそも重心が変だし、腰も入ってない。

キンジも相手がケガしないように殴られた瞬間に引いてるし。

顔を殴られればパンチが当たった瞬間に抜けるように顔を逸らしたり、そんな感じ。

「も、もうやめてえー！」

見てられないとばかりに望月は叫んでるけど、私は若干笑いそうになる。

すんごい茶番だよ、これ。

私なんか取り残された感じが半端ない。

キンジも内心笑いそうになってるんじゃないかな？

そう思いつつも、私は興奮で視野が狭くなってるチンピラ2人に分からないように望月を連れ出す。

「望月さん、逃げよ」

「そ、そんな……遠山君が！」

「いいから。死にはしないし、先生に言いにくいこう」

「あ……う、うん」

私の言葉にハツとなつて望月は助けを呼びに言った。

それから望月が去つたのを見て、キンジの方を向くと――

「……………」

派手に蹴り飛ばされた感じを演出して自転車の集団の中で倒れた。

「藤木林イ！ 朝青オ！ —— 停学中に何をやつとるかア！」

そこでさつき窓から見てたクラス担任が怒声を上げる。

「……………朝青、バックれつぞ。おい遠山。覚えてろよ。罰金はお前だ」

息切れしつつ藤木林はそんな捨て台詞を吐いて、朝青と2人でやたらと変に改造したステッカーだらけの原チャリに乗ってフラフラと去って行った。

妙な原付が近くにあるから2人のだろうとは思ってたけど、ちゃんとした改造してないね、アレ。

エンジンの掛かりが遅い割に騒音だらけ。

武藤が見たら怒るだろうね。

なんて思いつつも、私はキンジのところへ。

「なんか、余裕そうに見えるんだけど……気のせい？」

「気のせいだ。いやあ、痛かった」

殴られたところをさすりつつ、よろけたフリ。

白々しい。

痣あざにもなっていないのに痛かった、ねえ。

まあ、一般人にはそんなの観察する余裕ないか。

手を出すとキンジは私の手をとって、立ち上がる。

「それはそうと、勝手に入るなよ。あの手のヤツは危ないんだからな」

「私なりに助けたつもりだったんだけどな。望月さんが変に叫ぶから」

「お前は……怖くないのか？ あんな男2人に囲まれて」

「乱暴されるのは……慣れてるから」

私はキンジの言葉にちよつと遠い目をする。

最終的には私が乱暴する側なんだけど、まあ、これまで血みどろの戦いを何度かやってるから間違いいではない。

そもそも私の場合はほぼほぼ暗殺だから戦いになることは少ないんだけど。

誤解をされるような言い方してるのはワザとです。

「……もう少し自分を大事にしろよ。まあ、萌を連れ出してくれて助かったけどな」

「どうも。それはそうと、終わったしもう帰るよ。カツコよかったよ、遠山」

私のその言葉にキンジは少しだけ笑った。

大して何もしてないとか思ってるんだろうけど、道化を演じるのも案外楽じゃないからね。

実際、それで大きなことにならずに済んだ訳だし。

そこで私はキンジと別れた。

さて、学校側にどう言い訳しようかな？

◆ ◆ ◆

亜金が去って、俺もカバンを持って萌が来る前に去ろうと動く。

絶対に心配するだろうからな。

ある程度自転車置き場から離れたところで、

「……おい兄貴、あいつら殺つちやっついていいか？」

などと、物騒な耳打ちをする光屈折迷彩のコートで透明人間状態の我が弟に、
「お前は子供のケンカに大砲でも持ち込むのか？ あいつらも人間なんだ。人を殺す
な」

独り言のように警告する。

実は途中からいたのだ、ジーソードも。

俺の行動が意味分からなくて壁際で立って見てただけだけど。

「読めなさすぎるぜ、兄貴の奇行は。何やってたんだよ」

「お前には教えてやるが、”学校生活”だ。邪魔したらシメるぞ」

「けツ。なんだそりゃ」

「こつちは一般人になろうとしてるんだ。血生臭い話とは無縁のな」

「無理だろ」

「オイ」

この弟、生意気にも即答しやがった。

「俺をぶつ倒しといて隠居には早えだろ。女に手を出すのは早えのに」

「女に手を出してるってどういう意味だよ？ 別に、俺は何もしてない」

「……兄貴、あんまりそういう事は言わない方がいいぞ。俺もこの手の話は疎い方だが、

多分その内変な敵を作るぜ」

呆れるように言う、ジーサードだが俺には意味が分からん。

「それはそうと、俺を尾けるな。兄に過保護な弟なんて聞いたことないぞ」

「べつ、別に兄貴が最近元気がねえから気掛かりで来たワケじゃねえからな。絶対違
ぜ」

「お前らツンデレ族は理由でも言わないといけない病気なのかよ……」
と尋ねると……ダダダダッ……バツ。

足跡だけ残して壁を越えて校外へとどつか去って行った。

しかし、トーシロー以下だったな藤木林と朝青。

足跡が増えるのにも気付かないなんて。

普通はそんなの気にしないか。

なんて考えながら俺が校外の門を出たところでレキが待っていた。

「随分と手が早いですね」

レキが珍しくトゲのある感じ。

いきなりだな。

「お前も途中、見てただろ？」

距離を詰めてお互いに歩きながら話す。

レキも何故か見てた。

家政婦は見たみたいな感じで。

「はい。望月萌さんの近くにいたあの女性は誰ですか？」

「ああ……亜金の事か？俺と同じ転校生だよ」

そう言えば、亜金とは会ってないな……レキ。

「そうですか」

「何だよ、何か気になるのか？」

「はい、あれは白野さんだと風が言っています」

出た、レキの脳内人物の風さん。

しかし……亜金が霧ね。

そう言われても不思議と違うと言えないのが妙なんだが。

あいつも何だかんだで俺のことを尾行してたりするからなく

似通ってる点が多いし、別人なようで別人な気がしない。

もし、そうだったとしても俺は驚かない。

だけどそうなると、なんでここにいるのかって話になるんだが……

うーん、分からん。

違和感を感じないが、雰囲気が違うからどうも霧だって言い切れない。

妙な感じだ。

「そうか」

「驚かれないのですね」

「何となくな。違和感はあるが、不思議でもないなって」
ぺしっ。

おい、何故蹴る。

「あまり女性に近付かないで下さい」

淡々とした感じでレキが言いながら、きろつと睨んできた。

俺は何もしてないんですけど。

ていうか、ちよつと恐いんだが。

俺の周りには変な女が多すぎる。

103：平和な日常

学校側に停学中の生徒が問題を起こした件について報告して、銃刀法違反の現行犯逮捕をしようとしたが他の生徒に見られたために追い払う形で見送ったと言いつつをした。

実際問題、逮捕者が出たら学校側も困るだろう。

どこぞの学校で犯罪者が出た、なんて評判が悪くなつて受験に来なくなる可能性もあるからね。

なのでこの手の生徒の逮捕には少し注意が必要。

あくまでメディアとかに取り上げられないよう、生徒達の耳に入らないようにこつそりする必要がある。

そこら辺は分かっているのか校長や教頭も特に何も言わなかった。

小耳に挟んだ何人かの気の短い教師は少し不満そうだったけど。

しかし、何やら嵐の前の静けさって感じで大きなことが何も無い。

キンジの事だからその内どっかで巻き込まれるだろうけど。

ちよつとしたケンカがあつた翌朝。

私とキンジが教室で視線が合い、

「昨日はありがと。余計なことしなくて助かったよ」

「あ、ああ……殴られてただけだけどな」

短くそれだけ言つて、席に着いた。

望月も教室に入つてきて授業が始まる前にキンジに声を掛ける。

「と、遠山君。……昨日は」

お礼を言いたいんだろうけど切り出せずにいる。

キンジは大して記憶してなかったのか――

「昨日？」

と、とぼけた顔をしている。

「あの、自転車置き場で……あの……」

望月が自転車置き場のワードを出したところでキンジは「ああ」と思い出した表情をする。

武偵高で日常茶飯事に殴られ慣れてるせいで忘れかけてたね。

「……………」

望月はその大きな目を潤ませて、感激してる感じだね。

……………。

その様子にピキント、私は勘付いた。

……あの、ちよつと？

キンジのこといいかも、みたいな感じに思つてない？

また女が^{メス}1人。

いや……人のこと言えないけど。

でも、キンジに惚れたのは私が最初……でもないか。

恋を自覚したの最近だし、中学の時に既に惚れてるのいたし。

なんか、高校2年に入ってから飛ぶ鳥を落とす勢いで女を落としてない？

……どうしよう。

このままだとキンジが無駄に無自覚ハーレムを結成してしまう。

私との時間が少なくなるのはちよつと……困る。

最終的にみんな不審な死を遂げて貰う計画でも立てようかな？

最初はキンジが好きになりに成り代われればいいと思つてたけど、私自身に恋して貰いた
いし。

そうすればキンジと一緒にいれるし。

不審な死とは言つても事故とか、戦役を利用して敵の組織に殺されたとか自然な流れ
で死んで貰つて……

ざっくりした計画としては内輪揉めになるように裏切者がいるとか情報を流して疑心暗鬼になつて、誰かが一人になつたところを順番に消えて貰う。そうなると、まずは狙うのはレキ辺りかな？ 色金の声が聞こえるのは邪魔だし。ワトソンとジャンヌもいいかも。でもジャンヌは理子の友達だし、あんまり傷つけないしなく。どうせならジャンヌがこつちに寝返るように仕向けなければいか。理子を人質にして、理子を失いたくなければ協力的な脅迫をして、それでレキをおびき寄せて貰つて、片付ける。優先順位はどうしようかな？ ジャンヌを除いてレキ、ワトソン、白雪、神崎、つて感じかな？ お姉ちゃんがどう動くかが問題だけど、多分、そろそろ一度くらい交渉すると思うんだよね。

うーん……何も考えずに殺るのは簡単なんだけど、家族の命が掛かっているから個人的な計画は考えるだけ無駄かな？

お姉ちゃんが一言ゴーサイン出してくればあとは楽に終わるのに。

ああ、でもせつかく出来た遊び仲間が活躍できないのは楽しみに欠けるか。

そう言えばエニグマのみんなは今日も元気で殺つてるかな？

何となくそう思つて、私は携帯の画面を開く。

ニュースを検索『逆位置の魔術師』——先日イギリスのブライトンにて殺人事件。被害者は40代の夫婦。被害男性はマジックで使われる剣刺しボックスの中で串刺しの

状態で発見される。その刺された剣の一本にアルカナの『皇帝』が逆位置になるように刺さっていた。被害女性は離れた位置で同じくマジックで使われる水槽に手足を縛られた状態で溺死しているのを発見される。水槽の外側にアルカナの『力』が逆位置で貼られていた。警察はこの事件を逆位置の魔術師と称される凶悪犯の犯行と見ており――

ふむふむ、なるほど。ワイズは絶好調つと。

R. I. P^ッは……ニユースに載ってないか。そもそも彼女の殺し方って証拠があんまりないんだよね。事件にもならず衰弱死で片付けられることが多いから……フランス、衰弱死で検索——フランスにて謎の衰弱死体。2週間前にオルレアンにて謎の衰弱死を遂げた70代の男性の死体が発見された。男性は持病があり、通院生活を送っていたため持病の再発により病死かと考えられていたが、担当医によると急死するような重病ではなかったとコメントしている。フランスの各所で謎の衰弱死を遂げた者がいるため、何者かの同一的な犯行ではないかと懸念する声も上がっている。

ほうほう、頑張ってるね。

次はキアとミア。

キアはほとんど健全なニユースしかないから、どちらかって言うミアの方がニユースになってるかもね。

ロンドンの死神、また現る——11月前からロンドンに姿を見せなかった死神がまた現れたと通報があった。通報をした青年によるとフード付きの黒いローブに大鎌を持った人物をトラファルガー広場周辺で見たという。警察や武偵が現場に向かったが周辺に特に不審な人物は見当たらなかった。が、同日に男性1名が行方不明になっている。警察と武偵は何か関連性があるとみて調査を行っている。

ミアも相変わらずの男性嫌いだね。

キア……お姉ちゃんのストーカーでも殺したかな？

あんまり関連性がないように殺りなさいとは教えてるから、そう簡単にキアに辿り着かないようにしてはいるだろうけど。

ウルスラはどうか？

イギリス、ワイト島にて集団心中……1週間前か。

記事には——ワイト島に観光に来ていた10人の若い男女が集団で死んでいるのが発見された。被害場所は田舎のあるホテルで、被害が気付きにくい場所である。死体は死後1週間が経っており、かなり遅れての発見となった。被害者は共通して携帯が破壊されており、連絡が取れない状態で何らかの事件があったとみている。イギリスでは集団で死ぬ事件が1年の間に何度か発生しており、UNKOWN何者とも判らぬ者と呼ばれる者の犯行ではないかと噂されているが……閉鎖空間でヒステリーを起こして死んだだけではないか

と言う話も上がっている。

通称のついてる同士はみんなバレずに頑張ってるね。

エニグマじゃないけどアリスは——日本で行方不明の少女の報告相次ぐ。2、3カ月の間に少女が行方不明になる事件が6件、報告で挙げられている。イギリスで少女が行方不明になる点と状況が似ているために何らかの関係性があると見て、ロンドン武偵局とロンドン警視庁の双方と連携を取り調査を進めている、か。

私の部屋でちよいちよいどっかに行っては帰ってくるアリス。

部屋にいる彼女の様子は至って普通。

年相応の少女って感じで、たまにイタズラで私の危ない刃物とかを興味深そうに触ったりしてる。

だけど聞き分けはいいのか注意されたらすぐにやめるけど。

エニグマに誘ってもいいんだけどね。

ちよつとばかり彼女の力を少しは見ないと何とも言えない。
バレない辺りまあ……やり手ではある。

実力は心配してないけど、割かし得体が知れないからね。

別に子供だからそんなに気にしなくてもいいかもしれないけど。



放課後、レキが美術部でいないので1人で帰る。

(アイツ、絵上手いんだよな……油絵でも描いてんのかなあ)

珍しくちよつかいを掛けてくる赤桐もいつの間にかいない。

アリアや霧、バスカービルのみんながいれば何かしら誘ってきたり話しかけてくれただろうに。

……なんで残念がってるんだよ、俺。

武偵高での日々の方が気が楽だったなんて、何を考えてるんだ。

俺は正義の味方に絶望して、嫌だからこつちの世界にきたのに。

考えたらダメな気がして俺は、心のバランスを取るために……子供くらいしかない東池袋中央公園のベンチで夕暮れの時間を潰すことにした。

ここは都市部の公園の割には人が少ない。ぼつち的には穴場だ。

落ち葉が舞う公園。風につけて地面を滑るさまは自由な感じがして風情がある。

って何を俺は老人みたいなお事を考えてるんだ。

「ビアンカ、だ、だめだよ！」

ほんわかする……困りつつも優しげな声。

あー、心当たりがある声だ。

なんでこんな所にいるんだよ……

つい振り向いた視線の先には、毛のふさふさしたコリー犬。ふさふさつて言うかもつきもさだな。冬毛なんだろう。

だが不潔さを感じないから、手入れはしているんだろう。飼い主は相当に世話好きだな。

などと思いつつも、そのコリー犬を引つ張る飼い主さんと目が合った。

暖かそうなコートとロングスカートという私服姿の萌と、ドラマのように目が合ってしまった。

これじゃ即退散って訳にはいかないな……まあ、苦手な女性だからって変に避ける必要もないが。

多少は霧に^{なら}做つてコミュニケーションを取らないとな。

「よっ」

「と、遠山君!？」

俺が声を掛けたとところで飛び上がるように萌は驚いた。何をそんなに驚いてるんだか……

そんなに奇跡が起きた! みたいな表情をしなくても。

まあ、でも奇跡的か。

こんな都市部で知り合いと出会う可能性なんて低いし。

「散歩か？」

当たり前障りのない話題を振る。

まあ、見ての通りだろうけど。

「うん、そうなの」

「近くに住んでるのか？」

「うん」

「じゃあ、あまり奇跡じゃなかったな」

と俺が言うと、

「と、遠山君も思ったの？ ちょっと奇跡っぽかったよね、今の。ねっ」

いい笑顔だ。朗らかで、温かく無邪気な感じだ。

霧もい笑顔するんだが……時折恐いんだよな、アイツの笑顔。

なんて考えてると、

「あ、あの、遠山君っ、ちょっとここで待ってて！ ビアンカ、おすわり！ おすわり、

おーすーわーりー！」

と、あまり言うことを聞かないビアンカをなんとかベンチ前に座らせ……

女の子らしい、可愛らしい走り方でちっこい毬まみたいなのがついた毛糸のマフラーを

跳ねさせながら、サンシャインシティの方へと走って行く。

「……」

まあ、待つてやるか……

こんな車の通りが多いところで犬を置いて退散する訳にもいかないし。しばらくビアンカを眺めながら待つていると……たつたつた。

運動神経をあまり感じさせない走り方で萌が戻つてきた。

見れば、マツクのセットを2袋買つてきてる。

「これ、あげるね」

「……？」

唐突な贈呈品に俺はハテナ、だ。

飯を奢られるようなことはしてない筈なんだが……

「と、遠山君、お昼食べてなかったから。私も今日はもう1食、食べちゃう」

と、萌は温かい紙袋を片っぽくれた。

昼は確かに食べてなかったが……隣の席だし、様子ぐらい分かるよな……しかしよく見てるな。

なんて思つてると隣の席さんは、ほすん、とベンチでも隣に座つてきた。

「……」

公園で、マツクか。そういえばアリアとも初めて会つた頃、一緒に食べたな。

だが、そのシチュエーションは今回とは全く異なる。

あの時は奢らされた上に、ぶん殴られた。あの凶暴女に。

今回は奢られた。天地がひっくり返っても人を殴らないであろう菩薩ぼさつみたいな子に。

マツクのニオイのおかげか、全く湧かなかった食欲がようやく出てきた。

好意を無下むげにするのもあれなので素直に貰っておく。

「じゃあ、いただくよ。ありがとう」

俺が袋を開けると、それを見届けてから萌も袋を開けた。

貴族みたいに育ちがいい子だな。

いや、リアル貴族育ちであるアリアは真つ先に開けてたから、生まれは関係ないかも

な。

そういう意味では霧も何だかんだ俺が食べるまで先に食事をしないよな……

今思えば霧も白雪に並んでバスカービルの中ではいい子だったんだな。

今更ながら実感する。

何だかんだ俺が食事に困ってたら何も言わずに弁当とか用意してくれるし。

なんて考えながら食べ始めると、横から――

本当に済まなさそうな顔で、萌が語り掛けてきた。

「昨日は……助けを呼びに行っただけ、いつの間にか終わっちゃって。お礼も言

えなくて、ごめんね」

「気にするな。俺がさっさと帰ってたかっただけなんだ」

「でも……あんなに殴られたり蹴られたり……亜金さんも、私を助けてくれたのに何もできなくて……」

何やら萌はあのチンピラ2人を注意したせいで俺とか亜金が巻き込まれた事に負い目を感じてるらしい。

別に気にしなくてもいいのに。

赤桐はどう思ってるのか知らんが、あいつもあんまり気にしてなさそうだったしな。

「でも、助けを呼びに行ってくれたんだろ？ それで充分だ」

「で、でも……」

「自分で何とかしようと思っただけケガするだけだ。他人を頼るのもある意味では何もしないよりはいいことだ」

霧みたいなこと言ってるんな、俺。

でも、あいつならそんな事を言いそうだよな。

「まあ、くだらない喧嘩に付き合う必要はない。多少痛い目に遭っても、大事にならない方がマシだよ」

「……大人、なんだね」

大人というか何というか……

ある意味では悟ってるな。

むやみに銃を振り回したところで穩便に済むはずが状況が悪化するケースもあるし。つて、何を武偵的なケースに当てはめて考えてるんだ……

食べ終わったので紙ナプキンで指の油を拭き取る。滑ってトリガーを引き損ねたら困るから……いや、もうそんなことを考えなくてよかつたんだ。帯銃してないし。「食べるの早いね。お腹減ってたんだね」

クスクス笑う萌は……困つたなこれ。ほんと、笑顔が温かくて可愛らしい。

こんなピュアな子は武偵ではまず見ない。

本当に別の世界の住人みたいだ。

◆

◆

◆

……何を困ってるんだか。

つていうかキンジ、本当に女に手を出すの早いね。

向こうから釣れたのかも申しないけど。

私はキンジ達が見える向かいのベンチで変装して雑誌を読みながら監視中。

今の私はちよつとオフのお洒落なキャリアウーマンの感じ。

茶色のコーデを着て、ジーパンを穿いて、画家が使いそうなベレー帽を被ってる。

あーあ……楽しそうにして……

私も空気を読んでこんなところでストーカーみたいなことしなくてもいいのに。何でこんなことをしてるんだか……

しかし、監視してるのが私だけじゃなく1人……2人。

レキと、まさかの不知火^{しらぬい}。

まあ、前から不知火は胡散臭いとは思ってはいたけどただの武偵じゃないね。

私も微妙にマークされてるし。

キンジに安息は訪れそうにないね。

まあ、神崎や私が傍にいる以上はそんな日は来ないのかもだけど。

望めば私は叶えてあげるけどね。

邪魔なら心の傷にならない程度に消えて貰えばいいんだし。

傷になったのなら私が癒す。

今のところそんな予定が来るのか全く分かんないけど。

相談ならいつでも乗るってメールしたのに、キンジってば全く私を頼ってくれない。

気にはしていないけど、ちよつと悲しいな……

もしくは自力で何とかしようとしてるのか。

それよりも問題は、あの萌って子。

完全に”ほ”の字だよ。

今だつて読唇術で読み解く限り『遠山君と矢田^{やだ}さんはつきあつてるの?』的なことを聞いているし。

矢田つて誰? つて思つたらレキだった。

何で矢田なのか私も聞いた時には意味が分からなかつたけど、多分……キンジに苗字を決めて的なることをレキが言つてキンジは『ヤダ』つて言つたんだろう。おそらく。

それでヤダ↓矢田みたいな。

レキも案外、頓着しないというか自分のことなのに適當だからね。

もういいや……これ以上見てもつままないしキンジの家に先回りしーよお。

いつもの武偵高の制服で私はキンジの実家へ。

「おじゃましまーす」

ノックして、お邪魔する。

するとキンジの祖母——遠山 セツが出迎えてくれた。

「おやおや、白野ちゃん。いらつしやい」

「また様子を見に来ました」

「いつも精が出るねえ」

「まあ、好きでやつてることですから」

「お入んなさい。もうすぐご飯が出来るからねえ」

「じゃあ、手伝います。待つてるのも暇なんで」

「そうかい、なら頼もうかねえ」

腰が少し曲がつてるセツさんの後に続いて私も台所へ。

そしたらかなめが既にいて、私を見るなり苦虫を噛み潰したような顔をする。

「——げっ」

「げっ、て何？ 私はかなめちゃんに何もしてないでしょうに」

「それはダウト。屋上では怖かったからね」

ああ……そんな時もあったね。

もつと言えば殺したの私だけ。

うん、まあ……別人が殺^やったって認識になってるっぽいから別に問題なし。

そんなこんなでセツさんの手伝いをしつつ、料理の腕を観察する。

敬老精神があるのかって？

老害は嫌いだけど、普通に年上は敬うよ。

何度か味見をさせて貰ったけど、これが家庭の味つてもものなのかな？

まあ、私はおそらくイギリス人なのに日本の家庭の味つてのを語るのもおかしい話だ

けど。

メニユー的に健康には良さそうだけど、キンジの好みには少し外れてるかなって感じはする。

もうちよつと濃いめのおかずを増やしてもいいと思うんだけど。

「おや、白野ちゃん。キンジの好みを知ってるような顔だね」

年の功ってやつかな？

あんまり表には出していないはずだけど。

「ええ、まあ……でも私が口を挟むのも悪いかなって」

「そうかい。相手を考えて献立を立てる……いいお嫁さんになるねえ」

そのセツさんの言葉にかなめが私を射殺いころしそうな目で見てくる。

ふふ、これが女子力。いや、嫁力なんて。

これはお義母かあさんと呼んでもいいのかな？

思いつつも私はかなめを勝ち誇った顔で見て、煽る。

それに対してかなめも笑顔で反論する。

「でも性格悪いよ。きつと相手の方から愛想を尽かされるだけだつて」

「ちゃんと一線を越えないようには見極めてるから。行き過ぎた想いは迷惑だつて知っ

てるし、誰かさんと違ってね」

「へー……過保護なのは行き過ぎた想いには入らないんだ？」

「手間が掛かる人ほどカワイイものなんだよ」

母性？ 違うね。

私の場合は積み木を積み上げたけど壊したくなる……そんな残酷で純粋な人間の残酷性かな？

それが今でも続いてて拗^{こじ}せてるだけ。

だからどつちもあるんだよね。

キンジを幸せにしたいし、壊したい。

矛盾した感情を抱えてたら普通は葛藤するものなんだけど、私は不思議とそれがどつちも同じに思えるからよく分からない。

「……ふーん」

私にあまり同意したくないのか、それとも理解できないのか分からないけどかなめは疑わしい目を向けてくる。

そんな目を向けても私はそう簡単にボロは出さないよ。

……キンジの前だと分かんないかもだけど。

夕食を作ってしばらく。

後は温め直すだけというところで、かなめと私は将棋をしてる。

セツさんが暇潰しにかなめにルールを教えたせいで私がターゲットにされた。

頭は回る方だけど……んん……本気で考えても勝負は微妙。

相手を陥れるのは確かに得意だけどさ。

全体的な話となつたら、何か違うんだよね。

ギャンブル的な駆け引きは得意だけど、交渉の駆け引きとかこういう戦略の駆け引きとは違うと私は思う。

応用というか、使えない部分がない訳ではないけど。

盤上は結構力オスな感じになってきた。

もうちよいで王手とれるんだけど、お互いに一手足りない感じ。

喉元にナイフが来てる感じはするんだけど、届かないみたいな状態だね。

「面倒くさい盤面にしてくれたね」

「お姉ちゃんが穴熊しようと思つたら、桂馬とか飛車とか角とかで乱すせいだよ」

「そりやかき回して当然。内側から崩すのはセオリーだよ」

「いやらしい。そうやってお兄ちゃんも内側から誑かそうと……」

「そうだね。既に胃袋も財布も握つてるようなもんだし」

「盤外戦術なんて卑怯だよ」

「H A H A H A、既に勝負は戦う前に始まつてるんだよ。別の意味で私は歩を進めて

いる。盤上に立つて勝負を始めたのでは遅いのさ！」

「FAQ」

「女の子が汚い言葉を使わない」

「皮肉じゃ伝わらないと思って」

「うん、別の意味で負けてるからね。吠えてもそりや伝わらないよ」

「今日のおかずを増やしてもいいかな？ お姉ちゃんで」

「それこそ盤外戦術じゃない？」

いつの間にか帰ってきたキンジが私達を見て変な顔をしてる。

何やってるんだこいつら？ って感じで。

「お帰り、キンジ」

私がすぐに見つけてそう言った瞬間に「余計なことを」って感じの顔をする。

やり過ぎそうとか甘い考えだね。

「お前、いつもいるな」

呆れた感じの目をするキンジ。

私はちよつと上目遣いで聞く。

「え？ ダメ？」

「ダメに決まってるよ」

キンジに聞いたのに何でかなめが答えてるの？

「ダメじゃないが、怪しまれないか？」

キンジはかなめを無視して話を進める。

無視されてかなめはぷくーっと顔を膨らませる。

こういう所は子供なんだから。

まあ……神崎のことを危惧してるなら確かにそろそろ変に勘づく可能性はあるけどー

「うーん、大丈夫じゃない？」

「適当だな」

キンジ関係の話をしたら極端に思考が変になるし、うやむやに出来る可能性はある。

ジャンヌやワトソン辺りは冷静に気付くだろうけど。

そもそもー

「キンジが帰ってくれば丸く収まるんじゃない？ 授業についてこれなくて中退する前に帰ってきた方がー」

「おいやめろ」

「んフフ♪ いつまで保つかなく？」

「……………」

私の言葉が現実味を帯びてるせいでキンジは笑えないらしい。
私はニマニマしながら提案する。

「勉強を教えて欲しいなら協力はするよ」

「遠慮する。あとが怖い」

「じゃあお兄ちゃん、あたしが教えてあげるよ」

「……………」

「何で黙るの!？」

かなめの提案に関してノーコメントなキンジ。

何となく危険を感じてるんだろう。

「とりあえずご飯にしよっか」

「あ、ああ…………」

将棋はこれ以上やっても決着がつかないので、私はご飯を提案する。

だけどキンジはキンジで真面目に少し悩んでるのか生返事。

誰を頼るのか分かんないけど、この様子だと私をあまり頼ってくれなさそうな気配だね。

とりあえず、ご飯食べたら帰ろっかな。

そして食事後、私は多少片付けをして遠山家をあとにした。

武偵高に帰ってきてきて自室……ではなく、理子の部屋へ。

「お邪魔しマンボウ」

「お姉ちゃん、いつからそんな親父くさいキャラになったの？」

唐突な訪問に驚くこともなく理子はベッドの上で漫画を読みながら横になって出迎える。

傍には武偵高の制服のリリヤもいる。

リリヤはリリヤでカチャカチャと何やらドロロンの改良でもしてるのか、ラジオペンチと圧着ペンチ、ハンダごてを布が敷かれたテーブルに置いて傍で作業している。

配線作業でもしてるのかな？

「私に本当のキャラなんてないし……」

「急にシリアス声で反応しにくいこと言わないでよ」

「それは置いといて……最近の神崎は？」

「ん〜。彼氏が構ってくれなくて痲癩起こしてる彼女」

「要はめんどくさい訳ね」

「お姉ちゃんがキンジにかまけてるから……」

「キンジが構ってくれないんだから、私から絡みに行くしかないんだよね〜」

「……微妙に惚気のろけに聞こえる」

呆れた感じで言いながら漫画を閉じてベッドの上であぐらをかく理子。

「それで？ 転校生活は楽しいですか」

「うーん、どうだろ？ みんな刺激に飢えてるって感じ」

「まあ、一般高校なんてそんなものだよね。それは置いといてキンジを落とすしちやええいいのよ。今がチャンスじゃないの？」

チャンス……まあ、チャンスなんだろうけどね……

何か私から想いを伝えてもいまいちな感じがするんだよね。

キンジも意識してない訳じゃないんだろうけど、あんまり響かない気がする。

相棒と異性の狭間って感じ。

それに――

「私から伝えるのってなんか負けた気がする」

「……………」

「今、私のことちよつと面倒くさい人だなんて思ってる？」

「うえ?! いや、理子はそんな……はい……ちよつと思いました」

私が目を細めた瞬間に見破られると思ってるのか理子は素直に認めた。

素直でよろしい。

「……………標的ならすぐ殺すべき」

会話に交じって来たと思ったらリリヤは物騒なことを言い出した。

キラームシーンな感じが時折出るね、君。

「そういう話じゃないよ、リリヤ。男と女の恋愛感情的な話だから」

「……つまり性欲処理？」

その発言に理子はグラスで飲むとしてたジュースが器官に入ったのか咳き込む。

「え” つふ……げほげほ……リリヤなにを言ってるの!？」

「そりゃ、ナニ的な回答じゃない？」

「お姉ちゃんは黙ってて！ だ、誰にそんなこと吹き込まれたの？」

あー……純粋な妹だと思つてたりリリヤから急にシモなワードが出たから理子が動揺してる。

理子はベッドから這いずるように降り、すり寄ってリリヤに苦笑いしながら問い質した。

特に躊躇うこともなくリリヤは答える。

「……施設で。男を落とすには合理的」

「は、ハハ……」

理子はとんでもない妹のカミングアウトで顔がひきつってる。

何か理子の反応が面白いから爆弾を落とすところ。

「ちなみにリリヤはもう生娘じゃないから」

「Hein?」

フランス語で「えっ?」を素で言ってる理子。

相当に動揺が激しいらしい。

「……?」

リリヤが小首を傾げた瞬間に理子は幻想が打ち砕かれたように横に倒れた。

「純真な妹だと、思ってたのに……」

ダバーとギャグマンガみみたいな涙を流す理子。

リリヤは対照的に何が問題なのか分かってない。

「キンジで言うところの普通の人なんてウチの家族にはいないよ」

私が事実を述べたところで「あんまりだあ」と理子そのまま横になりながら嘆いてる。

配線が終わったのかリリヤが部屋の中でドローン飛ばし始める。

コントローラーなんてないのに勝手に飛んでいくドローン。

リリヤにそういうインプラントが埋め込まれてるのは知ってる。

正気な人間が合理性を突き詰めた結果、人道を無視してリリヤみたいな子を生み出す

なら……この世界は普通じゃないって私は思う。

まあ、正気こそ狂気つてのはどこにでもある話だし私は楽しければ何でもいいんだけどね。

そう言えば、リリヤは間宮のグループとそこそこ仲良くしてるらしい。

1年生の中でも腕利きの武器職人。

あんまり喋らないから話し掛けにくいけど、意外に間宮達が緩衝材になってるおかげで孤立はしてないみたい。

いいことだよ。

そう言えば最近ライカはどうしてるかな？

ちよくちよく見てはいるけど、少し思い悩んでる感じが最近化する。

成長はしてるけど伸びが悪くなった感じ。

2学期も末だし、そろそろあの時期だろうから……純粋に手を貸してみようかな？

私の復習も兼ねてね。

104：可能性の日常

という訳で、

「最近何か悩んでる？」

藪から棒とばかりの私の言葉にライカは目をぱちくりとする。

「何ですか、いきなり……」

「そっか……最近麒麟きりんちゃんに会えないのが寂しいんだね」

「何も言っていないんですけど……」

「CVRの研修は忙しいもんね。でも麒麟ちゃんを襲ったりしたらダメだよ」

「一体何の話をしてるんですか?!」

NOSBURGERというジャンクフード店で私とライカは2人きり。

誘った私に対してライカは何故か怪しんだ。

私は奢おごるって言っただけなのに、どうしてそんなに怪しむんだか。

怪しみながらも普通にライカは好きな物を頼んで食べてるけど。

「とりあえずBランクなのは気にしなくてもいいと思うけどな」

私の言葉につまんでたポテトを戻しながらライカは視線を落とす。

「先生から聞いたんですか？」

「まあね。戦姉^{アマカ}ってそういうものだし。悩んでる後輩がいるなら必要な情報を聞いたうえでアドバイスする。ただ、最低限の情報だけで何を悩んでるかは私自身が聞かなくちやいけないけど。でも、何となくは分かるよ」

私の優しい気な言葉にライカは敵わないって顔をして、すぐに顔に影を落とす。

それから問い掛けた。

「先輩はどうやってAランクになったんですか？ Sランクに近いと言われる実力は

……」

「うーん、小細工かな？ どうしても正面の殴り合いには限界があるからね。だから諜報科^{レザド}寄りの戦い方なんだよ。実際問題、誘いもあつたけど私は——」

キンジと一緒にいたいからって言おうと思つたけど恥ずかしいからやめた。

ナチュラルに惚けるところだった。

「報酬の関係で断つたんだよ。手荒な依頼の方がお金もよかつたし、必要だった。今でもだけど」

あながち嘘ではない。

医療関係の製品は高いし、小細工のための装備はそこそお金を使うからね。

「なんて言うか……生々しいですね」

「そういう学校だしね。ちなみにこれは言つてなかつたけど、CVRからも誘いはあつたんだ」

「……マジですか?」

「嘘言つても仕方ないでしょ?」

私の魅力は誤魔化せないかゝ

なんて、ナルシスト気味におどけたけど……自然に人を手玉に取る性格をしてるせいで注目されたらしい。

罪な女だね、我ながら。

「まあ、結局のところ私は器用貧乏で成り上がったところはあるかな? だから何でもやってみるもんだよ。蘭豹^{らんびょう}先生にも似たようなこと言われたんじゃない?」

私の推測は当たりだったのかライカは目を逸らす。

未だにライカは自身が女の子らしくないってコンプレックスを拭えずにいる。

コンプレックスを乗り越えるってある意味では自分を乗り越えるって意味だから、難しくはあるよね。

「1人が怖いなら付き合つてはあげるよ。だけど答えは自分自身で見つけなきゃ。あと、ライカは私のことを何でもできるを買ひ被つてる」

「でも、先輩は実際……何でもできちゃうじゃないですか」

「ふっふっふ、確かに私は何でも器用にできちやう天才武偵。元Sランクであるキンジとパートナーも組んだ、優秀な相棒……なんてね」

「嫌味いやみにしか聞こえませんかよ」

ジト目でライカが睨む。

「だけど、私はそんなライカに微笑む。

「でも、勘違いしないで欲しいのは……私は実際に自分の得意と出来ることを関連付けて伸ばした。最初から何でも出来た訳じゃない。努力をした……ただそれだけだよ」

「自分の出来ること、ですか」

「ライカ。君は君自身が思ってるほど魅力がないんじゃない。私から言わせれば、ライカは十分に魅力的だよ。人としても女としても、ね」

少しだけ目は真剣に、口元は柔らかくして微笑んであげるとライカは顔を赤くする。

「な、ななな……」

「なに？ そんなに顔を赤くして」

「へ、変なこと言わないで下さいよ！」

「そう？ ライカつてばモデル体型だし、その細長い脚なんて私からすれば羨ましい限りだよ」

「うう……調子狂う」

何かを振り払うようにコーラを一気にライカは啜る。

やれやれ、言葉で励ますのはいつだって簡単だけど……本人がそれで乗り越えるかどうかはその人次第。

私よりも適任が来たみたいだし。

「だ〜れだ♪」

「ひゃあ!」

突然に手で目隠しされてライカは驚くけど、誰か予想はついているのかすぐに冷静になる。

「こら、麒麟〜。先輩も分かってたなら教えて下さいよ」

「いや〜見てなかったよ」

「平気でウソ言いますね」

「ウソじゃないよ。気付いてたけど見てはいなかった。ほら、ウソついてない」

ライカは私の言葉にジト目を返す。

麒麟ちゃんは私の言葉にくすりと笑う。

「相変わらずですのね」

「お邪魔なら帰ろうか? 2人きりで水入らず」

私にやけて尋ねると麒麟は受け流すように「まあ」と微笑んでいるが、ライカは顔

を赤くする。

が、いい加減に私のからかいかにも慣れたのかすぐに冷静になる。

「麒麟、無視してくれ」

「冷たいね」

ライカも最近では慣れてきたのか、冷静に対応してきた。

反応が面白くないからそろそろ攻め方を変えようか……

などどうでもいいことを考えながら、麒麟ちゃんに目を向ける。

「で、どうしたの？ ライカに用事？」

「ええ、お姉さまに少々お話がありました」

「お邪魔なら去ろうか？」

にまにましながら言うのと麒麟ちゃんは良い笑顔で、

「大丈夫ですわ。あとでゆっくり2人きりになりますの」

そう返してくる。

そして隣でむせるライカ。

思わせ振りの発言しちやつて……そんな気は少しはあるんだろうけど、今の時点では

本気じゃない。

まあ、本人は露も知らないだろうけど。

「なに言ってるんだよ?!」

復活して照れ隠しに怒鳴るライカ。

私がかかった時よりいい反応してる。

「それで本題は?」

「ええ、お姉さまには申し訳ありません……私^{わたくし}、CVRの急な依頼でしばらく不在にしますの」

私の質問に対して麒麟ちゃんはそう答える。

ライカは気落ちした感じではあるが、しようがないよな、と言った感じ。

「まあ、仕方がないよな……遊びに誘おうと思ってたんだけど」

「ごめんなさいですの。お詫びという訳でもないですが、奇跡的に手に入ったこれをお渡しします」

そう言つて麒麟ちゃんは一枚のチケットを来夏に渡す。

横から少し覗くように見て、なになに……『女の子ランド』?

見るからに甘酸っぱい感じのアミューズメントパークへのチケット。

なくんか、ただの娯楽施設にしては色々面白いことが起きそうな雰囲気だね。

そして、ライカの反応は――

「こんな妙なところ行くか!」

と声を荒げながらも、

「あとで捨てるっ」

無闇にそのまま返したり捨てたりせずには何だかんだにポケットにしまう。

捨てるとか言いながらも興味あるのは目に見えてる。

捨てる気はなさそう。

それを見て、麒麟ちゃんとは私は顔を合わせて笑顔。

これは面白いものが見れそう。

という訳で、私はある申請をした。

しかし……私ってば色々やり過ぎかな？

キンジの観察に、色々な趣味（暗躍）……そしてこれ。

先生の方からも少し大丈夫かと心配された。

まあ、依頼さえこなせば文句は出ないでしょ。

ともかく、何か面白いことが起こる予感がしてる。

これを見逃す気はないね。

さて、コンプレックスとは厄介なもので、大体は劣等感からくるもの。

人は自分がないものをねだり、そして妬む。

私の家族は誰しもコンプレックス……よりも酷い闇を抱えてるからね。殺人鬼はどうなのって？

そんなもの、あつてないようなもの。

ましてや私の友達は劣等感で殺してるんじゃない。

もつところ、単純に楽しみたいから殺してる。

人に安らかな眠りを、驚きを、醜さを。

色々と見たいから殺してる。

いつだって単純なものだよ。シンプルな理由で、誰かが邪魔とか羨ましいとかそんな感情じゃない。

人は醜いから美しい……ただそれを見たいがため。

と、話が逸れた。

そんなライカのコンプレックスは女の子らしくないこと。

男勝り、女子にしては170近くと高身長。料理が得意という訳でもなく女子力は低め。

女の子みたいなカワイイ服を着てみたいっていうらしい願望はあるんだけどね。

要は自分で諦めて周りの評価に流される。

そんな中で自身を変えたいと願う彼女はとても人間らしくて美しい。

つまりは面白い。

観察するのが私の趣味。

いつも通りの行動パターンで準備を始める。

◆ ◆ ◆

麒麟のチケットを持って、あたしは来ちまった。

新宿にあるこの『女の子ランド』に。

よく分かんないままに……

気にならないと言えば、ウソになるし……使わないのももったいないしな。

そうあたしは、自分で納得付けて受付へと向かう。

「チケットを拝見♪」

受付の人もどこことなくファンシーでロリータっぽいファッション。

綺麗だな

「ようこそ！ 女の子の夢と愛を大発展させてくださいね！」

眩しいほどの笑顔で、言われて声が上がずる。

「は……はひー！」

ど、どうしよう。

もう受付だけで、お腹がいっぱいになりそう。

っていかやっぱり今からでも帰ろうかとそんな考えが頭によぎる。
ま、待て……いったん落ち着こう。

そう思つて入口まで戻ろうとすると——
ぎゅつと、突然に手を掴まれた。

ななな、なに!?

そう思つて振り返れば、ほつぺにダイヤとスピードのペイントをしたボーイッシュなお姉さんがいた。

「まずはこちらへどうぞー♪」

何を言う暇もなく、勢いよくお姉さんに案内されたのは『ドレス・スタジオ』と書かれた部屋。

心の準備が?!

そんな事を思う前に扉が開かれた瞬間に、今までの戸惑いは吹き飛んだ。
「うわあ〜」

すっげー……色んな衣装がある。

ドレス、ワンピース、ロリータ、エプロンドレス。
まるでウィンドウショッピングみたいに並んでる。

あたしには手の届かないものがここにはある。

「お好みの衣装にお着替えくださいね」

さつきのお姉さんがそう言って、あたしは更に舞い上がる。

「ど、どれでもいいのか?!」

「はいー」

初めてかな、と言った感じで丁寧に答えてくれる。

それから、唐突に箱を差し出してきた。

「あと、識別のためにどちらかのチョーカーを付けて下さい」

出されたのは短いネクタイのようなチョーカーとリボンのチョーカー。

「識別……?」

初めてくる施設だから何のことかさっぱり分からない。

と思いつつも、

「お客様はこつちですわね! 一目で分かっちゃいました♪」

店員さんは、ネクタイのチョーカーをあたしに着ける。

……?

一体、何の意味があるんだろう。

先輩の言葉を借りるなら初めてのところほど全てに意味を見出させて言われたし、周りを観察してみればあたしと同じようにネクタイのチョーカーを着けてる人ともう一

方のリボンのチョーカーを着けてる人がいる。

同じ女の子なのに分ける必要があるのか？

って、何をあたしは考えてるんだ。

ここには楽しみにきたんだ。

こんな所まで武偵高の生徒は来ないだろうし……

旅の恥はかき捨てて言うしな！

衣装を選んでしばらく。

いっぞやの武偵高の文化祭に来た少女——あのアリスみたいな少女と同じエプロン

ドレスを来て施設を回る。

すごいな……デザートバイキングにステージもある、中央は噴水の大広間。

とても華やかであたしには縁のない場所だと思ってた。

何だかよく分からないところだけ——でも、すごく居心地がいい。

やっぱりあたしは、好きなんだと気付く。

昔っからカワイイものには目がなかつた。

だけど、あたしには手が届かないモノだと思ってた。

そう諦めてた、それに——

(きつと、武偵高のみんなはこんなあたしを見たら大笑いするんだろうな……)

どこかのスポットでポールに背中を預けながらそう思う。

同時に白野先輩がどう言うかも何となく想像できる。

(自分にないモノを求めて何が悪いの？ 笑わせとけばいいんだよ、そんなのは。もつと自分に自信を持つべきだよ、ライカ)

似たようなことも言われたからこそ、容易に浮かぶ。

先輩は強いよなくそういう意味でも。

たまにあの人のメンタルが何でできてるのか気になる。

いつでも笑顔で自信が溢れてるカッコいい先輩。

可愛くて、時折お茶目な先輩。

何かがあればいつでも冷静で、口調は軽くても動じない頼りになる先輩。

こうして考えてみるとあたしは先輩の背中に追い付けてもいないって、どこか感じる。

本人は伸びしろがあるって言うってくれるけど、あたしにはそんな実感はない。

「うわっ!？」

あたしがそんなことを考えてると、いきなり左手を握られて変な声が出た。

あぶな!! 危うくさつき買ったクレープを落とすところだった……

誰だと思つて、左を見ればショート黒髪で小さい女の子がそこにいた。見れば首にはリボンのチョーカー。

「……………」

手を払うようにしてしまつたのでその女の子は、困惑した感じだ。

あたし……何かしたか？

と、思つてあたしも何も分からないまま立ち尽くしていると、

「はいはいくちよつといいですか？」

さっきの頬にペイントをしたボーイッシュなお姉さんがこつちに来る。

「ここはお友達を作るスポット。モノガマスでもフェムトラさんがこんな所にいたらバリネコホイホイですよ」

確かにお姉さんに言われてポールに垂れてる幕を見れば『MEET—UP SPO
T』——出会いの場的な事が書かれてる。

「モノ……………バリ……………」

それよりもあたしには専門用語的なのを並べられてる事の方が気になる。

どういう意味なのかさっぱり分からない。

そんなあたしの困惑を店員さんは、

「あ……………ビギナーの方ですね？」

察したようにして対応を考えてる感じだ。

……勢いで飛び込みすぎたかな？

今更ながら、下調べくらいしとけばよかったかもしれない。

見ているもあたしは楽しいけど、流石にちゃんとした楽しみ方もしないんじゃないよな……

「それでは私がご案内します。どちらへ行きたいですか？」

唐突にそんなことを聞かれてもあたしとしては返答に困る。

とりあえずは――

「えーつと……トイレかな？」

その一言で小さい女の子は顔を赤く。店員さんは、驚愕した後眉間に指を当てて一息。

「ふ、普通にお手洗いつて意味ですよね？」

確認するように聞く。

トイレは、トイレだろうに……何をそんなに驚いてるんだ？

それから小さな女の子も逃げ出すようにどこかに行った。

「でも実際にそういうお客様もいたので、今はトイレが使用禁止で……風営法でガサ入れもありましたし」

最後辺りに小声で言いながら、店員さんは案内図を渡してくる。

穏やかじゃないな、ガサ入れ……そんな不健全なことをしてるような様子は見えないけど。

「すみません。ランド外のお手洗いをご利用ください！」

腰を折って謝罪するように頭を下げる。

そのまま取りあえず、表の受付とは別の出入り口に店員さんに案内してもらい施設を出る。

しかし、なんで驚かれたんだ……？

そう思った矢先だった。

「ライカ？」

——!? こ、こいつらは!?

あたしの、強襲科アサルトの同級生トリオ。

な、なんで……ここに!?

同時に自身の顔が赤くなるのが分かる。

それと秘密を見られたと悟って高鳴る鼓動。羞恥心。

「ぶっ、なんだそのカッ」

嘲笑するように眼帯の同級生が笑い始めて、

「とんだ勉強会もあつたもんだぜ！」

嘲笑が広がる。

あたしの秘密を、軽蔑するように。

「な、なんで……お前ら……」

こんな所に来るとは夢にも思っていなかった。

安全だと……本当のあたしを出せると……そう、思ってたのに。

「あれ。ボク言つてなかったっけ？　OGとの飲み会は新宿集合って……」

「こりゃスクープだぜ。無敵のライカの密かな少女趣味！」

「何の店だこりゃ？　調べてやろうぜ！」

あはははははは、と愉快そうに笑う3人。

何で……？　あたしがこんな夢を見ちやいけないのか？

そして同時にやつぱりとも思ってしまった。

似合わないんだ。

あたしには、こんな願望を持つちやダメだったんだ。

やつぱり武偵のあたしが本場で、彼女らにとつて女の子あたしは幻想……

でも、あたしは……やつぱり先輩や麒麟みたい……女の子らしくありたいって――

そう、思つて……

それを否定されて、何もかもがぐちゃぐちゃになる。

「……………」

あたしは逃げた。

逃げ出すしかなかった。

どっちが本当のあたしかも分からない。

扉を閉めて、届かない夢の場所に戻る。

施設に戻れば、あたしとは違ってカワイイ女の子達が談笑している風景。

あたしは……………あそこには入れない。

武偵あつちのあたしと、女こつちの子のあたし……………

どっちが、本当のあたしなんだよオ……………

「えぐつ……………ヒック……………」

「何でどちらか一方しか選べないなんて諦めてるの?」

誰……………?

そう思つて顔を上げれば目についたのは黒くて美しい長い髪。

日本人形みたいに童顔で、無邪気に微笑みながらも自信のある表情。

ニツ、と不敵に笑つたところであたしは気付く。

「せん……………ばい……………?」

「そうだよ。いつでも頼りになる君の戦姉^{あね}」

ワンピースのような黒を基調にしたドレスに身を包み、スリットからは細い脚が出ている。

そんな先輩はいつもの気さくな雰囲気だけど、

「まあ、こんな衣装よりもいつもの制服の方が気楽なんだけどね。今日は後輩の為に一肌……いや、一役買ったって言うべきかな？」

髪をかき上げて答える白野先輩は……雰囲気が違う。

無邪気な女の子じゃなく、淑女という感じ。

「涙を拭いて。ほらこっちに来なよ。夢を見たっていいでしょ、女の子ならね」

「どうして……なんに？」

差し伸べられた手を取って、あたしは立ち上がりながら質問する。

先輩がこんな所に来るようには思えない。

「私がこんな所に来るようには思えないって顔してるね。失礼な……」

ピンポイントで心の声を当ててきた!?

この洞察力の鋭さ……やっぱり先輩だ。

それでもなんて言うか、違う雰囲気で思わずどぎまぎする。

「言ったでしょ。やれることは何でもやってみるもんだって」

「そうですね。白野さんの言うとおりです」

白野先輩の言葉に同意するように、また一人誰かがこちらへ向かってくる。優雅な足取りで、紺色のロングドレスを着て一目で綺麗だと思える女性がこつちに來る。

「外で何かあつたんですね」

その女性は優しい気な手で、白い手袋であたしの涙を拭つて語り掛けてくる。

「さて麒麟ちゃん。どうかな？」

麒麟……？

白野先輩が呼ぶように言葉を投げ掛けるとさつきの女性の横から、

「よく来てくれましたわお姉さま♪」

麒麟だ。

イチゴ柄のロリータファッションに身を包んだ、麒麟がいる。

「き……麒麟?!」

「ご紹介しますわ。こちらはCVRの結城ゆうぎルリ先生。元女優さんですの」

さつき現れた大人の女性といった感じの人を麒麟は紹介する。

「せ……先生？」

こんな人が武偵高にいるんだと、驚く。

「よろしくね」

同時にあたしは先生に挨拶もそのままに手を取られる。

それから――

「今日は何もかも私に任せて」

「ひあ……!?!」

唐突にファンシーな目隠しをされて、思わず変な声が出る。

「それでは白野さん、わざわざありがとうございます」

「これも戦姉あねの務めですから♪ お気になさらずに。あとはよろしくお願いします」

そんな結城先生と白野先輩の言葉にあたしは困惑するしかない。

「え、え……!?! せ、先輩!?!」

「また後でね、ライカ」

そのまま白野先輩はどこかに行ってしまった。

あ、あたしはこれからどうなるんだ?!

◆ ◆ ◆

先生に連れられてライカと麒麟ちゃんパウダールームへ。

あとは……ライカが新たな一步を踏み出すの見届けるだけ。

うーん、愉しみ。

どんな変化するんだろうね。

「さてと……」

あとは先輩らしく教育の時間だね。

なーんか、私がこんなひょうひょうとした雰囲気だから後輩の一部は舐めてるみたいだし。

別に私自身舐められるの気にしてないしどうでもいいんだけどね。

それでキンジの事を大したことないと思われるのは癪だし。

そういう意味でこっちも先輩としての威厳は出しとかないと。

……まあ、当の本人はプライドなんて欠片もないけどキンジは勝手にカリスマ振りまいて人心掌握し始めるから性質たちが悪いと言えればいいのか……何とやら。

ともかく、私のせいで人の評判が落ちるのは我慢ならない。

特に気に入ってる人のことや家族の事なら尚更。

という訳で——私は表の受付のある方へと歩みを進める。

そこには武偵高の制服を着た3人の1年生。

あれは……ライカと同級生だね。

「何だ……」

「女の子ランドって」

「こりや傑作だぜ」

社会的な観点として帯銃を許されてる武偵高の制服着てる学生がウロウロしてたら周りが気圧される。

1年生だろうが3年生だろうが武偵は武偵だ。

しかし、施設と客の雰囲気ぶち壊しだね。

受付の人もアミューズメントパーク出入り口周辺のお客さんも困惑してる。

偶然出会ったとは言え、ライカの冷やかして待ち構えてるのか。

何で知ってるかって？ 見てたし。

しかし、偶然とは言えライカが変われるきっかけ……自分の気持ちを見詰め直すきっかけを作ってくれたのには感謝しよう。

「ちよつと、そこでたむろされるとご迷惑ですよ」

私は喋り方や雰囲気を変えて比較的穏やかに注意していく。

「ああ、ごめんなさい。ちよつと友達と待ち合わせで」

3人の内、眼鏡を掛けたツインテールの少女が温和に返してきた。

「そうですか。ですけど入り口でそんな物騒な物を持ってうるつかないでもらえますか？」

「いやーそうしたいんですけど、ボク達はその友達が気になってて」

ベリーショートな少女がこれまた温和に返してくる。

仕方がないな……誤解するように突っ掛かるか。

「へえ……ですけど同じ武偵として、周りの印象を悪くする行為は頂けませんね」

「何だよ……同じ武偵？　ここにいてるって事は大方CVRのヘナチョコなんだろう？」

私と同じ武偵と知るや眼鏡の子が、きつきとは打って変わって下に見始めた。

いくら私が神崎より身長が上とは言え、低身長Ⅱ同学年か後輩と見るのはいかがなもんかな？

簡単に引っ掛かったので私は雰囲気をもた変える。

「ああ、そう。私がCVRの人に見える……それは上々だけど、先輩への礼儀は教わらなかったんだね。1年？」

「な、何だよ先輩だからって……と言うか誰ですか？」

流石に先輩だと思つて敬語にしてきたが眼鏡の子は引き続き威圧的だ。

まあ、CVRは大つぴらに表に出る専門科じゃないからね。

戦闘的なランクで言うならDとCが平均。

Bでも高いって言われるし。

強襲科では下に見える風潮がある。

と、そんな内部事情は置いといて――

「白野 霧。^{アサルト} 強襲科2年」

私は堂々と名乗る。

「え？ 白野先輩——」

「気を付け」

誰かが口を開く前に私の静かで厳かな口調の言葉に1年の3人は背筋を伸ばす。

「それで？ 気付けなかったのは目をつむるとして……武偵として野次馬根性でこんなところで一般の人に迷惑を掛けた上にたむろしてる言い訳を聞くよ」

「あの、その……ライカのこと気がなつて」

マズイと思ったのか、眼帯の子がおずおずとした感じで答えだす。

「そっか……冷やかして待ってた訳ね。ゴメン、全部見てたから——それで面白い話はないよ。別々にライカのこと怒ってる訳じゃないから気にしないでいいよ。武偵憲章3条斉唱」

『つ、強くあれ。但し、その前に正しくあれ』

武偵憲章を斉唱できない強襲科はもれなく蘭豹に折檻コース。

銃声が耳から離れない程に弾を撃たされるといふ刑が待ってる。

ボーダーライン越えるまでね。

まあ、序の口だけ。

私？ そんな必要が無いほどには上手くやってる。

「そうだね。それで？ 君らは仲間を冷やかすことが正しいことなの？ それも民衆に迷惑を掛けてまですることなの？」

『い、いえ……違います』

3人は顔を青ざめさせる。

ああ、正論で人を追い詰めるのが何と楽しいことか。

それも犯罪者の権化みたいな私がそれを語る。

何とも愉快的な状況だね。

「全員、明日は楽しみしてるよ。蘭豹には言わないで置いてあげる……昼休み終了後に強襲科専門科棟に集合」

奴隷の1年、鬼の2年、閻魔の3年と武偵高ではそういうスクールカースト的なところがある。

そりゃ学年上がる度に貫禄がないとダメだしね。

そして私は鬼の2年。

『は、はひ……』

私の言葉に冷や汗をかいて声が上がする1年の3人。

「ただ、そうだね。ライカが出てきて、彼女を綺麗だと……目を奪われたと心から感じて

素直に謝れば、今回の件は不問にするよ。君らがバカにしてる人がどう変わったかよく見てるといいよ」

私の言葉と共に、そろそろだと思つて後ろを見れば——そこには男勝りで少女の夢を追いつける女の子はいない。

へえ、やつぱり逸材だったね。

少し化粧をして、髪を下ろしてゐるライカがドレスアップをして出てきた。まるでモデルだね。

少女的な衣装ではなくロングのタイトスカートにホルターネックにノースリーブ合わせたみたいなたツプス、ガールじゃなくレディつて感じの雰囲気。

「ライ……カ……？」

誰かがライカであるかを疑うようにライカの名前を呼ぶ。

同時に、

「……きれい……」

そんな感想も漏れるのが聞こえた。

その言葉に私は目を光らせる。

言つたね？

「その、ライカ……冷やかして悪かつたよ」

誰かが口に出し、他の2人も少し頭を下げる。

「いきなり何だよ。ま、行つてくるよ勉強会。お前らも飲みすぎるなよ?」

男口調は直らないけど、それでもさっきの印象とはまるで違うライカの言葉に同級生の3人は豆鉄砲を食らつたかのように呆然とする。

「それじゃあ、私達はこれで。人を笑うなら今度は自分が笑われるかもしれないことをよく考えて行動しなさいね?」

私は私でいつもの無垢な笑顔を向ける。

それから先生と麒麟ちゃんを交えて、私達は外へと出る。

あとは淡々としたもので、ライカは新しい自分への一步を踏み出すために兼科申請書への書類を申請し、麒麟ちゃんはそれを快く受け取つた。

「先輩がまさか一枚噛んでたとは思いませんでした」

落ち着いてみればライカは当然に引つ掛かることを言葉に出す。

私は当然とばかりに答える。

「そりゃあね。私は道を示すだけで、それを手に取るかどうかは本人次第だし。いい加減に踏ん切りをつけてもいい機会かなって麒麟ちゃんと何となく話はしてたんだ」

「ふふ、白野お姉さまのおかげですの。これでなかなか会えなかつた埋め合わせはさせていただきますね♪」

麒麟ちゃんは麒麟ちゃんていい根性してるよ。

それから麒麟ちゃんはライカの腕にしがみつく。

お熱いねえ……

「それに、戦姉あねが手本にならないと示しがつかないでしょう？」

言いながら私も自分の署名が入った兼科申請書をライカに見せる。

当然に目が点になるライカ。

「え!?! せ、先輩も?!」

「CVRからスカウトの話は出てるつて言ったでしょ。素養は充分に認めて貰えてる。何にしてもおめでどうライカ、君は自分の可能性を自ら広げた。それは先輩としても誇らしいよ」

素直に称賛を送る。

まあ、私自身……魅力は磨いても損はないと最近は感じてきたしね。

絶対にどんな鈍感ジゴロでも振り向かせてあげる。

私は執念深いんだから。

私も可能性は広がるかもしれないしね。

105：楽しい日常

引き続き武偵高を離れて一般校での私——赤桐 亜金に戻る。

そして相変わらずのキンジは授業中の様子がおかしい。

生活音には多少慣れたみたいだけど、授業の内容には慣れず。

微分積分とか普通でしように。

そっちの計算より犯人を捕らえる計算の方を重要視してるせいだけだね。

昼休みに入るところで私はいつも通りに棒付きの飴を舐めてキンジの傍に。

「本格的に勉強教えようか？ 何が目的かしんないけど見てらんない」

「そ、そうだが……大丈夫だ。ちゃんと当てがある」

声の震えがあるにしても当てがあるようには見えないんだけど？

「本当に？ 貸しとか借りと気にしてたらその内前に進めなくなるんじゃないの？」

「何でそんな心配してくれるんだよ？」

「言っただしょ、見てられないって。見てるこっちが恥ずかしくなってくる」

と、私が言ったところでキンジは顔をしかめる。

同時にキンジの携帯にメールが届く。

それからすぐにメールを見たところでどうしようか、キンジは悩む。

「ああ……背に腹は替えられないよな」

「何が？」

そう考えたところで望月が近付いてくる。

「赤桐さん、ちよつといいかな？ さっきの授業で聞きたいことがあって」

そしてここまであからさまだと私も気付く。

悪意はないけど、嫉妬してる感じ。

「いいよ、あつちで話す？」

そのまま私と望月はキンジから離れてさっきの授業で使ってた教科書を取る。

教科書を広げながらも私は本題に入る。

「なに、望月さん？」

「えつと……赤桐さんは、その……土曜日に予定あたりしないかな？」

「予定？ ないけど。その時に遠山の勉強を私が教えようかと思ってるし」

「へっ?!?!」

嘘が吐けない性格だね、本当。

それに正直に私ができるから邪魔しないで、と強引にいえる性格でもないし。

優しくて無垢だねえ……からかい甲斐があると云うか。汚したいというか……解体バラしたいというか……

——きつと中身も綺麗なんだろうな。

思わず萌の首に手を伸ばしつつもそのまま肩に手を置く。

……あつぶな……衝動マイナスに引つ張られるところだった。

影響が出てる。

それはそれとして——

「あー……望月さん、もしかして遠山に」

「な、な、何の話ツかな？」

「わあ、わっかりやすい」

ここまで分かりやすいのは神崎くらいだ。

まあ、あつちに比べて素直な反応ではあるけど。

でも同時に哀れに思う、キンジに関わるなら平穏な生活は終わって奈落に落ちるよう

な終幕を迎えるかもしれない。

その事を彼女は知らない。

実に……無知で、墮とし甲斐もある子だよ。

今は幸せな思いと夢を魅せてあげよう。

「仕方ないから土曜日は予定あることにしてあげるよ。その代わり、進展したかどうかは聞かせて貰おうかな？」

「うううう……複雑……」

望月は私の言葉に両手で顔を覆って赤くなりそうな顔を隠す。

「いいでしょ、それくらい？」

「……分かりました」

「それじゃあ、健闘を祈るよ」

私はそれだけを言って再びキンジの所へ。

それからキンジは申し訳なきような顔をする。

「その、亜金……さっきメールがあつてな勉強の当てが出来たんだが」

「そっか、私もさっきメールが来て土曜日に予定が出来てね。勉強なら学校にいる放課後でもできるし」

「あ、ああ……気を遣つてくれてありがとうな」

キンジがそう言つて私は席に戻る。

さて、少し暇が出来そうだけどどうしたものかな？

武偵高に戻つて少しは友達や家族の様子でも聞いておこう。

みんな頑張つてるかな？

「つてな訳で連絡してみたのさ」

私は少年の声に変えてある人と連絡を取る。

『相変わらず唐突ね。……私も暇ではないのだけれど?』

相手はR. I. P.

穏やかな口調で暇ではないと言いながらどこか嬉しそう。

「そう言う割には嬉しそうだな」

『それはほら、私は人気者だから……貴方とは別の意味でね』

「本来の意味なら確かにそこまで人気ではないさ。我々の意味では成功してると思うがね」

『それで? 本当にそれだけなの?』

「ああ、それだけさ。それとも雑談も出来ない程に忙しいのか? フランスの眠り姫さんは」

『眠り姫というより眠らせ姫なんだけどね。別にそういうことじゃないわ。息抜き出来てるのかな?』

さらつと本質を突いてくるね。

だからこそ彼女は恐ろしいんだよ。

私からすれば好ましい、だけど。

「そりゃあ、息抜きは出来てる。欲求は不満だが」

『なら大丈夫ね。ロンドンを“眠る街”にする日を楽しみしているわ』

私達の大それた話、お姉ちゃんの筋書通りの計画。

それを誰も知らない。

全てはあとのまつりになって気付くだろうからね。

「そうだな。幸せと最悪のシナリオは一緒にできるさ」

『そうね。それはそうと、私も息抜きを試みたいわね。貴方のお姉さんの話だと香港

は良い舞台になるって』

「ああ、なら好きにするといいき。いい前座になるだろう」

『そうね』

「助けは？」

『いらないわ。今まで”1人”だからこそ上手くいった。そうでしょ？』

確かにね。

その言葉に私は共感する。

「みんな我がままだからな」

『ええ、そう言うことよ。私の好きにさせて貰うわ』

それから体力的に手術を受けるのは難しい。なるほどね。

……この人はもうダメね。

「いいわよ。頑張ってみるわ……でも、どうしようもない時はどうしようもないものなのよ?」

「またまた……博士は薬剤界のパイオニアですよ」

「そうね、取りあえずは最善は尽くすわ」

それから一礼して助手は去る。

パイオニアね。

私は医学会の権威……って訳ではないわ。

それでも薬剤に関しては自信があるだけ。

私には大それた犯罪を企てる知能なんてとてもない。

ジャックにはいつもお世話になってる。

彼女の知識と財力……そのお姉さんの影響力は不可能を可能にする。

もう、私は人に苦しんで欲しくない。

苦悩、苦痛、病、寿命、差別、比較、血統。

最初の4つはともかく、そう言った人の醜いモノからも私は解放したい。

そうして思いついた結果……私の”救済”は完成された。

きつと世界の人は救われるわゝ

眠るように、二度と目覚めない夢のように。

童話のように眠るように死ぬるなんてきつと幸せだと思ふもの。

だからこそその私は R. I. P — Rest In Peace — 安らかな眠りを
与える者。

香港行きチケットは無事に取れた。

それに香港の方に用がない訳ではないのだしね。

きつと実りのある救済になるでしょう。

救済を持ち出すのはロクでもない存在？

そんなのとづくに私自身が知ってるわ。

ええ、^{ジャック}彼の言葉を借りるならきつと楽しく眠れるでしょう。

106：幻想の日常

遂に俺は勉強を覚えてくれる環境を手に入れたと思っていた。

今俺は萌に招かれ彼女の自宅、それも甘酸っぱい女子の匂いがする彼女の部屋にいる訳だが……

勉強は難航している。

「あ、あのね。私、小学生の時……」

何やらアルバムを出して急に思い出話をし始めた。

しかも、わざわざ俺の隣に座って。

そのおかげで俺は色々と目のやり場にも困っている。

胸が大きく開いてるブラウスからはまんまるのお胸の谷間が微妙に見えている。

で、でかい……白雪並みのデカさだぞ。

って俺は何を考えてる。

その後も何とか俺のロクでもない小学生時代を思い浮かべる事で何とかヒステリアの血流は抑えることが出来た。

そこにちょうど——携帯に電話が鳴る。
やった、助かったぞ。

この状況をリセットするにはちょうどいい。

「あー……すまん。ちよつと電話だ」

「え？ ああ、うん……」

萌は急な電話に何やら名残惜しそうだが俺はそそくさと彼女の部屋を出て廊下に出る。

相手は、霧か……バスカービルの中でこいつだけだよな、ある意味では俺を心配してくれるの。

俺が電話に出たところで、

『もしもくし、元気にしてるかな？ 勉強は大丈夫？ ご飯はちゃんと食べてる？』

そんなからかい口調で霧は言ってくる。

「お前は母親か」

『前はお姉ちゃんみたいって言ってたのに』

「いつの話してるんだ……」

『何なら私と家族にでもなる？ そしたらキンジの取り巻く面倒はきつと減ると思うけ』

『ど』

「丁重に断るよ。代わりにお前は面倒に放り込むだろ」

確かに面倒ごとをいくつか解決してくれるが、関わりとたまにロクでもない事と貸し借りが絶えずに発生するから困る。

『そうかなあ？ かなめちゃんの時も知らず知らずに自分からドブにハマったみたいだし？ もっと前なら白雪さんの時も——』

「あー……その話はやめてくれ。俺が悪かった」

お前が傷付いた時の話は割と心に来るんだ。

そう思えば、確かに俺がバカだったと諦めるしかない。

『ゴメンゴメン、今の話は意地悪だったね。それで？ 結局あれから勉強はどうなの？』

そこを聞いてくるか。

まあ、実際問題俺は困ってるしな。

何だか萌も様子が変と言えば変だし、勉強を教えてくれる雰囲気じゃない。

だけどなく……あいつにまた借り作るのか？

でも、将来的な意味でも俺にとっては死活問題なんだよな……

「それは……結構困ってる」

『さては、教えてくれそうな友達いないのかな？』

「そういう訳じゃない……」

ここで萌のことを話すと彼女は傷付くかもしれない。
今だつて扉越しになんか聞いている感じがする。

扉の下の隙間の明かりに影が差してゐるし。

素人だからこんなもんだろうが、盗み聞きするならもうちよつと上手くできる気はするぞ。

教えてくれるっていう好意の気持ちはおそらく本物だろうが、どうもそれ以外に目的みたいなのが彼女にはある気がする。

何かは分かんないが。

「……明日、空いてるか？」

『空いてるよ。なーに、勉強を教えるって欲しいって？　しょうがないな』

「話がはええよ。いや、実際そうなんだが」

今日は勉強できる気配がなさそうだしな。

『人目につかないところで勉強できるのがいいよね？　巣鴨つて図書館あつたっけ？』
「ある」

『また後でメールでいいから科目と都合の良い場所を教えてよ。それと授業料よろしくね』

ハ、ハ、ハ……ッ。

だが霧は真面目な時は真面目だ。

本来の目的から外れるようなことはしないからそこは信頼してる。

正当な対価と思えば、仕方ない。

武偵に依頼するなら報酬はきっちり、だ。

「分かったよ。いつもの紅茶でいいか？」

『分かるの？』

「好みぐらいは分かる。お前が紅茶にこだわってるのは知ってるし」

『嬉しいけど、私を買ってるのそこそこの値段するんだよね〜』

「だろうな……素人でも美味いって思うモノだからそんな気はしてたよ」

紅茶なんてどれも同じだろうって思ったたら霧の紅茶飲んだことのある今だとそんな事はとても言えない。

自販機の紅茶よりも美味しい。

しかも、何かしらブレンドしてるのか俺の好みの味だし。

『仕方ないからリーズナブルな価格で見積もってあげよう。あとでメールに送つとく』

「助かる」

『それじゃあ、また明日』

「ああ、また明日」

電話を切ったところで何やら扉の方から物音。

会話が途切れるような言葉を聞いた時点で萌は扉から離れたな。

一体、こんな会話の何が気になるんだ？

重要な任務のやり取りでもないのに。

俺が部屋に戻ったところで、萌はさつきと同じ座卓の位置にいた。

「悪い。ちよつと、前の学校の友達と電話してた」

「そ、そうなんだ……その人って……女の、子？」

と、何やら萌はもじもじとして勇気を出すように聞いてくる。

「ああ……そうだが？」

「彼女、さん、とか？」

彼女？ あれか？

一般的に言うガールフレンド的な。お付き合いとかそんな事を聞いてるのだろうか

？

この手の話題は苦手なのですっぱり終わらすために俺は答える。

「違う」

「で、でも……何だか、遠山君、とつても楽しそうに話すから……」

確かにあいつは女子にしては気兼ねなく話せる。

まあ、俺の大事な秘密を知った上で”利用”しないっていうのが一番大きいからな。というかやけに食いつくな萌。

そんなに霧というか俺の話し相手が気になるのか？

「気になるのか？」

そう思ってた聞いてみれば萌は酷く取り乱す。

「へっ?! い、いや……その、お付き合いしてたら、悪かったかなっ、て……。う、ううん、何でもないのっ」

付き合う？ やっぱり女子はよく分からんな。

さっき否定したつもりだったんだが、それでも何故か気になるらしい。

「まあ、ともかく俺と霧はそんな関係じゃない。色々世話になって今でも変に俺を気に掛けてくるヤツだよ」

「霧、さんって言っただ」

何故か妙に落ち込んでるぞ、萌。

い、いかなぞ……このままだと俺の数少ない学校で助けてくれる女神友達がいなくなる可能性が。

どうすりゃあいいんだ?!

「あ、あー……気になるんなら、会ってみるか？」

「え?!」

取りあえず萌は霧のことが気になるらしいので俺はそう提案すると飛び跳ねそうなくらい驚いてる。

実際に飛び跳ねはしてないが、すごい勢いで顔を上げた。

「明日、ちよつと会う約束をしてな。気になるんじゃないのか?」

「で、でも……邪魔じゃない、かな?」

「そんな事を気にするやつじゃない。そこは保証する。それに普通に話しやすいタイプだし」

「で、でも——う、うん会ってみる!」

お、おう……何か躊躇ったと思ったら急に意を決したように承諾したな。

ちようど雪もやんでるみたいだし、今日はここまでにするか。

何も勉強できてないけど。

「そろそろ帰るよ。雪もやんだみたいだし」

「う、うん……また明日ね。あ、見送るよ」

パタパタと慌ただしい感じで萌はカーデイガンを羽織り、外に出る準備をする。

しかし、何だろうな……俺は最近是一般常識のなさに致命的なミスを起こしてる気がする。

今でもそうだ。女子の心がよく分からないからこうして、何で悩んでるかも察することが出来ない。

避けてきた代償なんだろうが、それでも俺のトラウマがなくなつた訳じゃないからどうしても女子と仲良くすることに抵抗は多少なりとも出る。

そう考えるとバスカービルのメンバーとは普通に話せてるのが不思議だが、あいつらは普通じゃないからな、うん。

真面目に言うとか秘密じゃないが、多少なりとも一緒に修羅場をくぐり抜けて来た信頼から話しやすいってのはあるかもな。

そう思うと俺は萌とあまり関わらない方がいいのかもしれない。

一般の人と元武偵の俺じゃあ価値観が違い過ぎる。

「クツキー、あげるね。今朝焼いたのだけど」

「ああ、ありがとう」

これだからな。

女子力というのか……ともかく俺には眩しい。

俺はシマシマの紙袋に入ったクツキーをお土産にもらい、玄関の扉を開ける。

「明治通りまで見送るよ。その、迷ったらダメだし」

どこまでも親切なことを言いながら意を決した顔をして、ぎゅ。

萌は俺の手を握ってくる。

しかもこれは指と指を絡める恋人繋ぎじゃあ……

——その時。

「キンジさんは自宅までの道をしっています。案内の必要はありません」
そんな声がして俺と萌は驚き、思わず離れて道の方へ振り向く。

「レキツ……！」

門の前に、レキが立っていたのだ。

しかも、大分雪を被っていたのか溶けた雪でびしょ濡れだ。

俺は思わず駆け寄って、レキの手を握る。

つ、冷たい……これは10分、20分の冷たさじゃないぞ!?

「お、お前……何やってんだよ!？」

「待っていただけです。キンジさんを」

何で待っていたかどうかはともかく、この寒さですつと待っていたとなると肺炎になる。
凍傷もあり得るだろう。

俺は少し先の道路をタクシーが通りかかったのに気付き、すぐに停めるために駆け寄る。

◆ ◆ ◆
遠山君が、慌てた様子で走って行く。

多分、タクシーを停めに行っただろう。

それよりも私は矢田やださんから変な目を向けられてる。

「警告です。キンジさんに近付くのはやめて下さい」

そして、淡々とロボットみたいにそんな事を言ってくる。

いきなりの言葉に私は真っ白になる。

胸がキリキリと痛い。

今までそんな否定されるような言葉をハッキリ言われたことはなかったから。

同時に思う。

何で……そんな事を言われなさいいけないの!?

「矢田やださんこそ、出しゃばらないですよ！ 何でそんなこといきなり言われなくちゃいけないの!？」

”死ぬ”からです」

……死ぬ？

遠山君と一緒にいると、どうして死ぬことになるの？

意味が分からないよ。

「これはあなたを思つて言つています。キンジさんの傍には危険な風が渦巻いています。キンジさんが人と関わることでそれはキンジさん自身を傷つける事になる。自分を守る手段がないのでは、キンジさんの傍に”身を置く資格”がない。いえ、きつと死ぬことよりも恐ろしいことが起こるかもしれない。私はそんなキンジさんを見たくはありません」

守れる手段？

死ぬより恐ろしいこと？

さつきよりも意味が分からない。

言葉は分かるけど、まるで違う言語で喋つてるみたいに意味が通じない。

「矢田さんはヘンだよー！」

その言葉を発したところで遠山君が、戻ってきた。

それから困惑しながらも、矢田さんの手を取る。

「悪い、萌。また明日な！ ほらレキ、行くぞ」

そのまま遠山君は矢田さんを心配するように、手を引いて行った。

……台無しだよ。

せつかく、楽しい時間だったのに……

タクシーが去ったところで、私はトボトボと玄関に戻る。

「お、お姉ちゃん……？」

玄関で妹が、咲さきが心配そうに私を見てる。

「ご、ごめんね。怒鳴り声、聞こえてたよね」

「う、ううん……大丈夫？」

お転婆な咲が私を心配してくれてる。

だ、ダメだよね……お姉ちゃんがこんな風じゃあ。

「大丈夫、お姉ちゃん部屋で休んでる。ちよつとだけ、静かにしててね」

「うん」

取り繕った笑顔は余計に妹を心配させただけだった。

部屋に戻り、私は布団に身を投げ出す。

うつ伏せのまま、私は嫌な事を考える。

「……魅力、ないのかなあ」

眩きは布団の中に、静かに消える。

結局、遠山君は私をあまり見てくれなかった。

それとも楽しくなかったのかな？

それとも——霧さんが、本当は好きなのかな？

モヤモヤがずっと渦巻く。

……。

……。

……。

あーもう！ 落ち込むの終わり！

明日、絶対に霧さんがどんな人かを見て、それで遠山君の好きなタイプを見極めよう

！

矢田さんにあんなこと、言われたけど……初恋なんだもん。

絶対に諦めない！

……？

……なに、この寒さ……？

誰かに、見られてる？

思わず窓の方を見る。

夜の街の明かり、隣の家の窓にも誰もいない。

視線を感じるって、漫画やサスペンスドラマじゃないのに……

どうしてこんなに寒いんだろう。

体が冷えてるからかな、お風呂入ろう。

◆

◆

◆

さてさて、望月 萌。東池袋高校の2年所属、つてここは現地で知ってるから割愛つと。

家族構成は父、母、妹の4人家族。

ふーん……まあ、一般的なザ・一般女子つて感じの経歴だね。

血液型も珍しくはないし、何かしらの先天性の能力もない。

学力は……秀才には入るかな？ 偏差値は高めだし、頑張ればこの日本で有名な東大

は狙うポテンシャルはあるね。

学校で会ってるから人格とかは知ってるけど、ここまでアプローチしてるとは。

初めての恋にお化粧もしてる上に勝負下着もチョイス。

うーん、甘酸っぱいね。

初々しくて実に面白い。

本当に女になっちゃったか……お姉ちゃんからまだ派手に解体バラしちゃダメ、なん

て言われてなかったらやったのに。

若い子、最近はやってないんだよね。

というかキンジの近くで殺すのはダメだよ。

芋蔓的に疑われるし。

このムーブをいつまでやればいいのか分からない。

まあ、いつか……香港は否が応でも荒れるだろうし。

ライズシティ池袋という建物の屋上で私はリリヤお手製のドローンカメラと1000倍のスコープでプロフィールを見ながら望月家を少し観察。

「何をしてるのかしら？ チャシヤ猫さん」

いつの間にかアリスちゃんが私の隣に屋上の端に腰掛けてにている。

君つてば本当にどこでも現れるよね。

どこの門とか穴とかというか何を通ってるのか知らないけど、それ私も使いたいね。

それ使えば関係ない所で関係ない死体が出来る訳だし。

いや、そもそも死体すら出ないのか……

行方不明という淡い希望を抱かせる。まさに被害者の関係者にとっては死体を見る

までは夢^{希望}だね

「そうだね……何してるんだらうね？」

「遊びたいなら、好きに遊べばいいのに」

「それもそうだね。おつと……？」

不意に私はスコープを覗く。

倍率を下げてちょうど良さそうな人を見つける。

うーん……肉付きよし、顔もよし、彼氏いるけど、よし。

私はアリスちゃんに聞く。

「アリスちゃんって子供としか遊ばないの？」

「いいえ？ ただ同じくらいの方が話しやすいから」

「それはそうだね。ちよつとアリスちゃんの会場って借りれる？」

「いいわよ。どの人でお遊びになるの？」

「あの2人——出来れば女の人は貰いたいかなく」

「いいわよ。でも私にも分けて下さる？」

「もちろん」

◆ ◆ ◆

——日曜日。

今回こそは勉強が出来るであろうと、俺は意気込んでる。

取りあえずはまずは霧と合流だ。

霧には巣鴨にある俺の家に来るように言ってる。

萌に関してもメールで事情を説明して、霧本人も「いいよ」と言ってくれた。

それから途中で萌を拾ってそのまま図書館に向かう予定だ。

昼食を早めに済ませて昼には着くように向かうんだが、

「早すぎだろ」

「え？ 私の料理が食べたいんじゃないの？」

「そんな内容はメールに書いてなかっただろ」

霧は何故か10時くらいに俺の家に来て勝手に上がっていつの間にか料理してる。

ポニーテールに髪を結わえてエプロン着けて、おまけに食材まで持ち込んでる始末だ。

^{ばあ}婆ちゃんも気軽に台所を貸すなよ。

「今日は気分が良くてね。張り切っちゃった♪それに、こっちで食べた方が動きが合わせやすいと思って」

確かに鼻歌交じりに上機嫌で霧は俺の家に来た。

動きが合わせやすいのも同意するけど、何も昼食を作りに来る必要はないだろう。

「……何故ここにいますか？」

レキはレキで霧を変な視線で見てる。

しかも言い方にもトゲがある。

これは以前にも見たぞ。

霧を何だかんだレキはよく分からんが危険視してる。

まだ、続いてたんだな……アレ。

「あ、どうも。キングジよりお友達が多いと噂の居候さんいそうろう」

「さり気に俺をデイスるな」

しかもレキにも遠回しに嫌な言い方してるし。

「ここにいる理由って言われてもね〜……キンジが勉強と友達ができないからとしか言
いようがないし」

「頼むから余計なことを言わないでくれ」

お前は俺をどうしたいんだ。

いつもの2割増し位に軽口とデイスリが多い。

確かに機嫌は良さそうだ。

それが幸になるか不幸になるかは微妙なところだが。

爺ちゃんやんは競馬、婆ちゃんやんは霧と入れ替わるように琴の教室、ジーサードとかなめはよく分かんがどっか行つた。

家には俺とレキしかいない。

「それはそうと、お皿でも用意しといて」

霧は話しながらも手際よく、玉ねぎをくし型切りにする。

フライパンに油を引いた後に少し温めた後に玉ねぎを投入。

同時に味噌を出汁で解いて、みそ汁の準備をしてる。

手際がいいな……

そう言えば、霧の料理してる姿を間近でじっくり見るのは初めてかもな。

「キンジ?」

視線を感じたのか霧が振り返る。

それからいつものイタズラな笑顔で――

「どうしたの、旦那様♪」

「づっー」

――ドクン。

一発でヒステリアの血流直前まで持つてかれた。

お、おま……!?!

「なんて顔しやがる」

今の表情はおかしいだろ!?

お前はいつもそんな照れるみたいな表情しながら言わないはずなのに。

だからこそ、目を奪われたのかもしれないが。

「えー、だってキンジが私を舐め回すように見てるから」

「そんな目で見てねえ――いてッ!?!」

何かが後頭部に当たる。

おそらくはレキのドングリパチンコだろう。

そう思って振り返ると、案の定いつの間にかレキがパチンコを持って、居間の柱から半分だけ顔を出してる。

おい、なんだそのジト目は。

「スケベです、キンジさん」

見てただけなのになぜそう言われなきやならん。

俺はさっさと居間に戻る。

これ以上レキと霧の間にいたら挟撃されかねん。

俺は居間で勉強に持つていく教科書とかを準備する。

「何をしているのですか？」

レキはそんな俺を見て聞いてきた。

「勉強を教えて貰うんだよ、霧に。レキは教えるの得意じゃないだろ？」

俺の問い掛けにレキは首を縦に——振りかけたところで止めてフルフルと横に振った。

絶対にウソだろ。

そもそもレキが人に教えてる想像が出来ない。

ペチンと、俺の眉間にドングリが——！

「何すんだ?!」

「今、失礼なことを考えていたと感じたので」
妙なところで鋭い。

「じゃあ、例えば……to 不定詞ってなんだ？」

「英語ですね。名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法の3種類の使用方法があります。前後の文などで訳し方が変わりますので注意が必要です」

あれ？ 意外に普通に答えるぞ。

「じゃあ、例えばどんな風に使うんだ？」

「……………」

「レキ？」

「……………」

「まさか、分からないんじゃない？」

「違います」

そこは否定するのかよ。

「キンジさんが何を求めているのか、よく分かりません」

その言葉で俺はやっぱレキは人に教えるのはやっぱり向かないと分かった。

これはあれだな……先生というよりは辞書的な感じだ。

そんな事をしてる間にも早めの昼食となった。

「昼には早いから割と多めに作ったよ」

霧がそう言うってちやぶ台には肉入りの野菜炒め、小松菜のおひたし、しじみの味噌汁、ポテトサラダ。

この一般的な料理の感じ、相変わらず白雪に負けずレパートリーが多いな。

「さ、好きに食べて。レキさんにはこれもつけとく」

そして霧はレキの近くに置く。カロリーメイトを。

「いや、カロリーメイトはいらんだろ」

俺も流石にツツコむ。

しかしレキは何も文句を言わずに、唐突にまずはカロリーメイトを食べてからご飯を食べ始める。

「どういふ食べ合わせだよ!」

「レキ、カロリーメイトは別に一緒に食べなくてもいいだろ」

「キンジさん、カロリーメイトは万能です。普通の食事がとれなくてもこれがあれば問題はありません」

確かに手軽に食べられる上に携行食としては文句ないかもしれないけど、普通のご飯と一緒に食べる必要性はないだろ。

というかお前のそのカロリーメイトに対する妙な信頼感は何なんだ。

人数が減つても騒がしい食事を終え、片付けをして俺と霧は準備をする。

「私もついて行きたいところですが、萌さんと会うのでしよう？ 昨日は色々ありましたので」

レキも同行をしたそうだったが、そう言つてレキは静かに席を立つた。

やっぱりレキもそこら辺は考えるようになったのか……親じゃないが、感慨深くなる。

以前のレキなら有無を言わずに「私も行きます」と言いそうなのに。

「ただ、霧さんとはあまり距離を縮めないように」

とは言え霧への謎の警戒心は相変わらずだ。

それとは別の私情じみた何かを感じる。

「ああ……分かった」

霧に関して話すとこじれそうなので俺は適当に返事をした。

そのまま先に玄関の外で待つてる霧へと合流する。

「うう……着てるけど寒いね」

そんな霧はジーパンに縦セーターにロングコートと露出の少ない格好で防寒してる。

とは言え、露出が少なくとも油断はできない。

特にコイツの場合は。

俺も防寒でコートを着てるけど、確かに寒いな。

「冬だしこんなもんだろ」

「早いところ、図書館に向かっちゃおう。待つてる人もいるみたいだし」

そう霧の言うとおり萌を待たしてる。

俺と霧は、萌が犬の散歩で偶然に出会ったあの公園へと向かう。

◆ ◆ ◆

さてさて、”白野 霧として”は初めて出会う望月に私はどう対応しようか考える。

別にあからさまに私は彼の特別ですってアピールをするつもりはない。

そんな嫌なしゅうとめ姑め的な事をするつもりもない。

私を見た上でキンジを追い掛けるもよし、諦めるもよし。

どっちにしても私は観察するだけ。

公園でキンジと待っていると、確かに来た。

マフラーにダッフルコートを着た望月がこちらに来る。

「待った？ 遠山君」

「いいや、そんなに待ってない」

テンプレとも言える望月とキンジの待った、待ってないよのやり取り。

私は横から挨拶をする。

「初めまして、だね。君が望月 萌さん？」

一応キンジからのメールで知ってる、という体だ。

にこやかに私は言ったところで望月は答える。

「はい。初めまして、遠山君と同じクラスメイトの望月 萌です」

「ふーん……なるほどね」

顎に手を当てながら望月を見てキンジに意味ありげに視線を向ける。

キンジは私を不思議そうに見てる。

まあ、相変わらず無自覚だよね。

知ってるけど。

「それじゃあ、巣鴨図書館に向かうか」

私の行動に2人は疑問を覚えながらも私の一言でとりあえず図書館に向かう。

巣鴨図書館は無料で利用できる一般的な図書館。

自習にも向いてる。

そんな訳で私とキンジ、望月は図書館に入って自習できるスペースのある場所へと向かう。

「それで？ どっから始める？」

「ああ、数学からだな。この間やったここからなんだが」

どれどれとばかりに私はメガネを出す。

伊達だけど。

「お前、メガネなんてしてたか？」

私の視力が悪いなんて覚えがないキンジは当然に聞いてくる。

「雰囲気出すため。先生として呼んだんでしょ？」

「形から入るのは分かるが、その精神はよく分からん」

その私とキンジのやり取りに望月はそわそわとし始める。

距離感が妙に近いのが気になるだろう。

「2人は、いつから知り合いなの？」

「ん〜？ 中学3年生の春だね。今となっては放っておけない友達かな？ キンジって

ば、いざという時しか役に立たないし」

その言葉にキンジは軽く胸を押さえる。

うッ、って感じで。

ふふん♪ 何も言い返せないだろうね。

借りありまくりな上に自分の行動を見返してみても私を助けた経験なんてほぼ皆無

だし。

「知ってる？ こう見えてキンジって女性嫌いなんだよ」

「へ？ そうなの……？」

意外とばかりに望月は目を丸くする。

私の言葉にキンジは目を押さえて上を向き始める。

余計なことを言わないで欲しいって感じで。

「女子に弱みを握られてパシられてた時期があつたからね。女性不信になつてたんだよ。まあ、そこから私は救い出したキンジにとつてのヒーロー。いや、ヒロインかな？」
ウソは言つてないし、大事なことは喋らない。

「その割には女性と関係を持つんだから、よく分かんないんだよね。まあ、なんだかんだお人好しだから強く拒絶するほど冷徹にもなり切れないんでしょ」

「あの……霧さん、勉強を始めて貰つてもよろしいですか？」

キンジは心底から勘弁して欲しいとばかりに敬語で話し出す。

目的はそつちだし、仕方ないな

「望月さんも、いい覚え方があるならじゃんじゃん教えてね」

「う、うん……」

こうして両手に華という傍はたから見れば羨ましい状況でキンジの勉強会が始まる。

「これは……何だ？」

「微分です」

「遠山君、さっきの公式だよ。ここをまずは微分できる形に変化させないと」

「これは、to不定詞だよな」

「そうそう、頭に来てるから主語の方ね。You can do it」

「白野さん発音が上手い……」

と、順調に勉強は上手く進みいつの間にか時間夕方前。

休憩を挟んでたとは言え、キンジは思ったよりも手ごたえを感じてるみたいだけど……同時に遅れ具合を感じて焦りも出てきたみたい。

「今日はここまでだね」

「そうだな。2人共、ありがとう」

キンジの言葉に望月は申し訳なさそうにする。

「う、ううん……昨日は勉強するって言ってたのに、協力できなくてゴメンね」

「いいって、気にしてない」

と、キンジは何やら少し冷たい。

本当に気にしてはいないんだらうけど、同時に彼女とあまり関わらないようにしてる雰囲気がある。

まあ、普通の人ならそんな変化は感じ取れないだろうけど。

それからちやつかりと私は報酬の紅茶の茶葉を貰って、図書館前でキンジと望月から別れた。

さて……これからが本題つてところかな、”彼女”は。

帰り道の途中、駅に向かう人気のない通りで私は振り返る。

そんな電信柱に隠れるなんてジャンヌの少女漫画でしか見た事ないよ。

「話があるなら、普通に声を掛けてくればいいのに。それとも不審者で通報した方がいい？」

「まあ、待つてー！」

その言葉に望月は慌てて飛び出てきた。

「それで私に何か御用かな？ それとも、キンジの話でも聞きたい？」

「それは、気になる……けど。白野さんに、聞きたいことがあって……」

「聞きたいことね。今日が初対面だから、そんな気になる事もないと思うけど」と、私は分かかっていっつもはぐらかす。

……まあ、いつか。

はぐらかすにしてもどう選択するかは彼女次第だしスパッと切り込むことにする。

「……キンジのことが好きなのかどうかって話？」

「え……………」

望月は意外そうに顔をキョトンとさせる。

「あれだけキンジに熱心に教えてる上にコートの下も気合の入った服装だったら何となく察しはつくよ。私、これでも洞察力には自信があるから」

「はうっ」

照れてる。

「こういう反応も小動物みたいで愛らしくは思うけど、私としては歪んでる方が好きなんだよね。」

「そうだね。望月さんにとっては重要かもしれないからハッキリ言っておくと、私はキンジが好きだよ」

「そう、なんだ……………」

私の言葉に望月はあからさまに気落ちする。

気にせず、私は続ける。

「でも想いは伝えてない。ほら、キンジってば家庭含めて事情が複雑だね。だから、私はキンジが振り向いてもらうまで待つつもり。今ここで告白したところでキンジに想いに応えてる余裕なんてないからね」

「……………」

「別に諦めろとか言うつもりはないし、勝手に諦めてくれるならそれはそれでいいんだけど。どっちにしても望月さんも私の恋敵ライバルって話になるんだよね。別に邪魔をするつもりはないよ。誰を選ぶかはキンジ次第だし」

「いいんですか？ 白野さんは、それで」

「別に？ 言ったでしよ、選ぶのはキンジだつて。ただ覚悟しておいた方がいいよ。少女漫画で言うなら鈍感系主人公だから、無自覚に口説き落としてるし」

「そっか、そうなんだ」

どこか安心したような、それでいてどうしたらいいか分からなそうな複雑な表情を浮かべる。

まあ、初恋なんてそうだよね。

私もよく分からないし。

そう思えば多少なりとも親近感はあるけど……同情はしないね。

家族と友達とキンジ以外には興味もあまりないし。

「あの……連絡先、交換してもいいですか？ 白野さんともつとお話をしたくて。遠山君のこともつと知りたいの」

個人的にはすつごい嫌だって言いたい。

でも、同時に楽しみも増えるとも考えられる。

複雑だなく、交換するけど。

「いんよ」

それから望月と連絡先を交換して、私達は別れた。

望月は感謝してたけど、うーん……複雑。

どうしようか迷う。

解体するか、しないか……

コイントスで決めよう。

500円玉を親指で弾いて、手の甲の上に落ちもう片方の手で押さえる。

表^生か裏^死か——

そして見たところで溜め息。

運が良いことで……

それから家族用兼裏仕事用の携帯にメールが1通届く。

お姉ちゃんだ。

内容は——

『長城を落とす』

の一言。

なるほど、本格的に少し動く訳ね。

……

と言つても世界はそれを認識できないし、お姉ちゃんの仕業だと誰も知らないまま
ロマンあふれる犯罪は少しずつ計算されている。
いつしかこの平和な日常も幻想になるかもね。

『いや、そうなんだが……一番常識ありそうなのお前しかいないし』

「神崎さん達に言っておくよ。みんな非常識で相談できないから私がよく相談にのつてるって」

『油に火どころか、爆発物を放り込むような真似はやめてくれ』

まあ、しないけど。

言ったら私がキンジと頻繁に連絡をしてると勘付かれるし。

そしたら暴走しそうなのが若干2名いるんだよね。

「で、何の相談？」

『ああ、流石に毎回勉強会じゃあ霧達の時間をとることになるし、都合よく予定が合うとも限らないから塾に行こうと思うんだが、どう選べばいいと思う？』

「お金と移動時間じゃないかな？ あとは大手だったら間違いはないだろうし、そこら辺をどう折衷するかじゃない？」

まあ、キンジの場合はお金が一番ネックになりそうだけど。

『なるほどな。お金……装備でも売るか』

金欠ならそうなるよね。

いいのかな？ 自衛手段を放り投げても。

別に”私は”まだ何もしないけど。

何て電話しながら次はどうしようかと思いを馳せる。

◆ ◆ ◆

以前の勉強会で自分の今の学力の低さを思い知った俺は、塾に行くことにした。霧のアドバイス通りに放課後、明治通り沿いにある大手予備校『河合塾』を見学しにいった。

この9階建てのビルが丸ごと塾か。すごいな。俺の知らない世界だ。

「ていうか、なんでお前がついてくるんだよ……」

「キンジさんが歩く方について行っただけです」

と、相変わらずコミュニケーションが困難なレキがついてきてしまった。

仕方ないので、そのままパンフレットに従って塾についての説明を上階の面談ルームで2人で受けたりしていたんだが……

俺が言えた義理じゃないけど、似合わないよなあ。狙撃の天才児が学習塾とか。

(さて、どんなコースに通おうかな……)

パンフレットを見返して、とりあえず帰ろうとエレベーターに乗ると……

「？」

ん？ なんだ？

講義が終わったのか同じ階の生徒がいっぱい乗ってきたぞ。

パンフレットを少し下ろして見れば、女子、女子、女子。

しかもこの制服……東池袋高校の制服じゃねえか！

なんだこいつら。俺とレキを狙って乗ってきたのか？

「私達は『転校生カップル後押ししし隊』です」「2人とも、見ててイライラするの。いつくつつくの！」「今、くつつこう！ ほら！」

などと俺とレキに対して話して異常に盛り上がってるご様子。

っていうか何だ『後押ししし隊』って……理子並みのネーミングセンスだぞ。

「俺とレキはそんなんじゃない……」

と釈明しようとしても、「やっぱり名前で呼んでる！」「矢田さんも『キンジさん』って名前で呼んでるもんね」と逆に皆さん大フィーバー。

一般の高校では、男女が名前で呼び合うのもダメなのか？

助けて霧さん、俺に常識を教えてください。

このままで俺は可笑しなことばかりに巻き込まれる気しかない。

混乱してる間にも女子たちはレキと俺を押し付けて正面から向かい合わせにさせる。

この狭いエレベーターでは、逃げ場もなく、抵抗も出来ない。

そのまま、レキと正面で密着させられてしまった。

「ほら。遠山君、矢田さん、勇気を出して！」

何の勇気をだよ！

なんて心の中でツツコミを入れてる間にも女子たちは俺の右腕・左腕を掴み——
レキを俺が抱き締めるような姿勢にさせてしまう。

(一体何がしたいんだ、お前たちツ)

まったく意図が分からない。

講義が終わって誰も来ないエレベーターの『開』ボタンを押し続ける係の生徒までいる。

無駄に連携が取れてやがるツ。

こいつら、俺らがここに来たのを見て計画立ててやがったな。

押しくらまんじゅう係の皆さんは、俺をさらにレキを強く抱き締めるような体位に変えていく。

「……………ッ……………」

さらに無表情なレキの腕まで背中に回させて来ている。

完全に抱き合ってる形だよ。俺と矢田さん。

いや、大丈夫だ。レキの胸はアリア以上ワトソン以下の比較的安全な……………って……………

……………レキさん？ お前の最近、成長してないか。

そう気付いた瞬間には——ドクンツ——

し、した。来ちまったぞ、ヒステリアモードの血流。この異常な状況下でも……！
「チュー」「チューだ！」「ちゅうちゅう！」

お前らはネズミの集団か！

キスはそんなに安っぽいもんじやないだろ。

……多分。

それよりも今の状況は非常にマズい。

チューコールするネズミ娘どもに追い詰められて、俺もレキも帰宅出来ない。

それに——何よりもレキの胸が押し付けられ続けられると、危ない。レキと女子たちが。

俺がヒステリアモードになったら音速で大変なことをしかねない。全員に。

「レ、レキ、顔を上げて胸を反らせ……ッ！」

苦肉の策で顔を上げさせて胸の密着度を下げようと姿勢替えをさせるよう言う。

しかし、それを女子たちは『キス準備』と思つたらしく黄色い声を上げる。

レキも俺の意図を理解してないのか上を、向かない。

俺の胸に顔を埋めたまま、動かない。

「どうした、レキっ、言うことを聞け」

また周りのネズミっ子を沸かせるような事をレキに再命令すると——

レキは顔を横に逸らしてから……

ちらつ、と俺を上目遣いで見上げてきた。

みんなの前でキスすると誤解してゐるらしい。

そんなレキの表情が、恥じらっている。

……恥じらう、レキ。

修学旅行I以降、勘付いてはいたが、レキの中では微かに感情が萌芽ほうがしつつある。

この、恥じらい。

か……かわいい。

こういう違う一面を見せられるのは、破壊力がヤバい。

もうダメだ——ドクツ——！

(フツ——)

俺は小さく、苦笑いした。

レキ。レキはそんなにも……カワイイ女の子だったんだね。

でも知ってたよ。”こっちの”俺はね。君の魅力は。出会った時から。

恥じらう姿だけでヒステリアモードにしたご褒美に——

この場で何百回でもキスをしてあげたいところだが、色々と問題を片付けられないといかない。

「——君達の気持ちは分かった」

そう言つて俺は俺とレキを囲む周囲の女性達の力の流れを読み——

左右の人差し指を立て、失礼ながら女性の袖に触れさせて貰いつつ指だけで操作していく。自分達の体に入れてる力だけで、気を付けの姿勢になるように。

「あれっ?」「なにこれ?」「——?」「えっ?」

女の子達は、自分達がされたことに目を丸くしてるが……

ヒステリアモードの今なら合気道のように人の力を自由自在に変えられるんだ。

どんな姿勢だつて取らせることが出来る。君達自身の力だけでね。

「でも、女性の気持ちは全員等しく尊重されるべきだ。レキの気持ちもある——こういうのは2人きりの方がいいだろう? それとも、人前でこういう事をされたいのかい?」

レキを守るように抱き寄せつつ、顔つきが鋭く変わった俺が女子達に微笑むと——

ぼんぼんぼんぼん!

と、全員が等しく真っ赤になった。直立し、ポカーンと口を開けたまま。

俺も人のことは言えないけど、初心だね君達も。

案外、こういうのに憧れてたりするのかな?

霧も『人は自分がないものに憧れたりする』つて言つてたし、そうなのかもしれない。

中には、手を上げようとする子もいたので笑顔を向けながら、しー、と人差し指を口元に当てて制しておく。確か、市居いちいさんだったかな？ 自分を安売りしちやいけないよ。

そして俺は……

レキの頭を抱き寄せて、耳元に唇を寄せる。

ヒステリアモードの頭が通ってきた道を鮮明に思い出し、あることに気付いてしまったからだ。

俺とレキに、彼女達以外に”尾行者がいた”事に。

「大した相手じゃないが、レキは接近戦が得意じゃない。ここは俺に任せて、家にお帰り」

と言うと……

「……………」

俺に続いて状況を察したらしいレキは、心配そうに俺のブレザーの袖を掴んでくる。

「……レキのご主人様はそんなに弱かったかい？ それとも、夜遊びは許してくれないタイプだったかな？ ああ、そうだったら少しレキと過ごす将来は少し不安になる」

俺は目を閉じて刷り込むように言葉を掛ける。

すると、『過ごす将来』で期待するような反応したレキは、ふるふる、と可愛く首を振つ

た。

許可が下りた。

「嬉しかったよ、レキ。一緒に来てくれて。それじゃあおやすみ」

エレベーターを押さえる係だった子の指を優しく外してやり――

それから閉まるドアの間隙から、俺はウインクでバイバイした。

音で判断できたが卒倒した子もいたみたいだな。鼻血を出してる子もいたし。

ああいう子たちに、こっちの俺の視線は刺激的過ぎたかも。

そのままエレベーターでゆっくりしてけると嬉しいね。

もしくは俺が相手してる間に帰ってくれることを祈ろう。

そして、俺の中でレキの言葉の前半部分がリフレインされる――

（『狼は、狗いぬになれない』）

よくない予感がする。

十分な間を置いてから、階段で1階に降りてビルの正面玄関から夜の明治通り、それに沿う歩道に出る。

そのガードレールの向こうには――

「遠山あー！ 金だあー！」

「忘れちゃいねえだろうなー!」

案の定、例の改造バイクに乗った藤木林ふじきはやしと朝青あさおがいた。

安物のメリケンサックと鉄パイプを装備して。

素人がメリケンサックを装備しても大して脅威にはならないんだけどな。

あの装備を見てると中学にいた矢貫先生やぬきが懐かしい。

あの人、戦闘がヤンキースタイルなのに金属の壁とか凹くぼみます蘭豹らんびょうに劣らないパワー
だつたのを思い出す。

そんなことはどうでもいいな。

今、この周りの状況はあまりよくない。

塾帰りの生徒が多い。困ったことに、東池袋高校の生徒も何人か。

少しギャラリーは多いが……まあいい。

今回はヒステリアモードだが、やる事は同じだ。

ショートコント『強い不良2人に襲われボコられる俺』の第2幕。

レキが巻き込まれないよう、時間を稼ごう。

「危ないよ。ケンカになりそうだから」

などと、野次馬の女子達を人払いしていると……

「他人ひとごと事じゃねえんだぞオラァ!」

と、藤木林が俺の肩を掴んできた。

ので……振り回されたようにしつつ朝青の膝蹴りを喰らう。

角度が悪いので撫でられたような感じだが、そこで膝を折り曲げて『痛いよ』というアピールだ。

その後にイタズラ心で、藤木林の殴りを上手く誘導して同士討ちになるように上手く立ち回った。

別に俺は手を出していない。2人の力だけだ。

そんな中でまた3分も経たずに息が上がってきた2人を横目に――

(アレは……マズいな)

俺の目が車道を捉えた。

黒塗りのトヨタ・センチュリー。しかし、車の窓は中が見えないように全てスモークシールドが張られてる。

車内が見えないスモークシールドは違法だ。

透過率が70パーセントないと違法だと、武藤が無駄なウンチクで言ってたな。

それに、あの手の車が“ヤクザ”であることも授業で習った。

最初から道路の脇で停まって見ていたのは知ってはいたが、それが接近してきている。

……センチユリーは俺達の傍で改めて停車し、その後部座席の窓を顔が見えない程度に少し開ける。

「お前ら、よしな」

まさかヤクザが背後から来てたとは思っていなかったらしく、朝青と藤木林は揃って顔を青くする。

「その御方は、格が違うよ」

俺を知っているらしい、女の声。

そして、俺もその声を聞いて青ざめる。

ヒステリアモードの耳で気付いてしまったからだ。

成長してハスキーになってているが……間違いない、この声は。

いよいよ、マズいな。本格的に。

だがその声とは別に、

「オレにやらせな」

助手席から腕を出してた男が出てくる。

ガタイのデカく、ハードロッカーみたいな革ズボン。丸刈りの金髪頭。そして刺青タトゥーを見せつけるように黒のタンクトップを着ている。

(雑誌で見たことあるな)

確か、国際ボクシング連盟・環太平洋ライトヘビー級元王者、伊沢レオンだ。
コロンビア人とのハーフで肌黒く筋骨隆々とした日本人離れした体格。

明らかにヤバイやつが出てきてしまつて、周りの生徒も怖がるような声を重ね出す。

「——安心しろ。ご指名は俺らしいからさ」

近くでビビリまくつてる朝青と藤木林がパニックにならないよう笑顔で声を掛けてやる。

しかし、元王者がボクシングを引退してヤクザの子分とは。

俺にはよく分からない世界だ。

「おい、どつちを見てやがる」

ポキポキとレオンが拳を鳴らしながら近付いてくる。

そのまま俺の襟首を掴んで顔を上げさせ、眉を寄せて覗き込んできた。

威圧感は半端じゃないが、小さくてもヤバイ連中の方が多からな。

大型犬に飛び掛かれた程度にしか感じない。

「ああ、強いなこのガキは」

それが分かるなら、喋るなよ。

霧なら遠慮なく掌底をぶち込んで。

しかし、相手の実力を見抜く能力……無くはないんだな。

アマチュアとプロの間、セミプロってところだろう。

「やめといた方がいいと思うぞ」

一応、警告はしてやるが――

「心配すんな、オレも強えからよッ！」

ドスンッ――！ と、レオンのパンチがボディに一撃入る。

近過ぎて威力は半減してるが、体重と腰の入った本物だ。

俺は襟首から手を外させ、よろめくフリ――は誤魔化せそうにないので普通に距離を取る。

（朝青や藤木林程度のヤツだったら、誤魔化せたのに……）

中途半端に実力があるせいで誤魔化せそうにない。

やるしかない、みたいだな。

周りの生徒を巻き込む訳にもいかない。

（……チクシヨウ、一般生活に溶け込もうとしてたのによ……）

沸々と怒りが沸いてくる。

みんなが見てる前なのに――普通じゃないってバレちゃうじゃねえか。

だが、もう破れかぶれだ。ドッキリの撮影とか、無理矢理だが何とか誤魔化そう。

そう割り切ると、頭が冷静になってくる。

「……………」
相手から目を離さずにゆっくりと、自然体で構える。

「——おらッ！」

上手い体重移動で距離を詰め、バツ、とジヤブを繰り出して来る。だが、そつちはスポーツ技術で俺は戦闘技術だ。

あらゆるモノを使った戦い方や人体の急所の知識がある俺とは違う。そして、スポーツマンシップに則^{のつと}って戦うつもりは俺にはない。

確かに鋭いジヤブやストレート^{のつと}をレオンは繰り出して来るが——
「レオン、左から警察が来たぞ」

それを捌きつつ俺が声を掛けると、ハツとレオンは左を振り向く。その隙に前に出ようと思えば、

「やつほ、キンジ」

レオンの視線の先にポニーテールの^{あかね}亜金がそこにいた。
お前、何でこんなところにいるんだよッ。

「なんだあ、女」

レオンも眉を寄せていきなり現れた亜金に鋭い視線を向ける。

対して亜金がニコ、つと笑うと——

スパアン！ と、甲高い音が響く。

レオンの顔が上を向き、亜金の掌底が顎を撃ち抜いてる。

「暑苦しいのキライなんですけど」

と言いながら、本人はいつもみたいに飴を舐めてる。

明らかに素人の動きじゃない。

今のでレオンは脳震盪を起こしたのか、フラフラとよろめく。

しかし、すぐに根性で亜金に向かっていく。

「このアマア！」

左のジャブを亜金は右に身を躲して、そのまま左腕を掴んで軽く引き寄せた。

「うおっ!？」

パンチの勢いそのまま重心が前のめりになったところで、亜金が腕を引き寄せたと同時に

に飛び上がり、

「キンジ、パス」

左脚でレオンの背中を蹴って俺の方にバランスを崩したまま突っ込んでくる。

パスってお前……

仕方ないので合わせて俺は、軽く歩いて前に出ながら下からすくい上げるように体を潜らせてそのまま合気道みたいに投げ飛ばす。

「なッ!？」

そのままレオンは、進行方向にあるゴミ箱に勢いよく背中から身を投げ出した。

ゴミ箱じゃなかったら大怪我だな。

そして、そのまま歩いて亜金の近くまで来たところで俺は確信した。

亜金の正体に。

「何やってるんだ?」

「え? 夜遊びしてたら、面白そうなことやってると思って。ストリートファイトじゃないの?」

「全然、違う」

はぐらかしたな。

俺はそんな意図で聞いた訳じゃない。

まあ、そんなのも君の魅力ではあるんだが。

「そう言う話じゃないよ、霧」

「……誰それ?」

「この間、俺が買った紅茶は美味しかったかい?」

「うん、まあね」

しつこく誤魔化すかと思ったら俺が勉強会の報酬で買った紅茶の話を出した瞬間に

切り替えたな。

この間、俺が渡した紅茶の葉と同じ香り。

偶然だと言うことも出来るが、気付いたのはもう一つ――

「中学の夏祭りでも見たな、あの動き」

「ああ、そこでも気付いた訳ね」

レオンに掌底をした時の動きが中学の時と同じだった。

まあ、前から亜金は霧じゃないかとはレキも言ってたが本当にそうだとはね。

俺も半信半疑ではあったけど。

「だけど霧は悪い子だよ。女の子があんまり危険なところに出るもんじゃない」

「いやー、不良程度だったから見過ごしてもよかったけどヤクザ相手は流石にね」

もうすっかりいつもの霧だ。

「ところで何で一般高校にいるんだ？」

「経過観察任務」

その一言で俺は目を手で覆う。

よりによってそれかよ。

経過観察任務――それは武偵の教育途中の生徒が中退して、一般的な社会を歩めてるかを監視する任務だ。単位も報酬も大してないが、教育機関的には助かるってことで置

かれてる別名が暇つぶし任務だ。

それは同時に要注意生徒に対する監視でもある。

俺、そんなに問題起こした覚えがないんだが。

「クソツ……」

フラフラとしながら、ガシヤガシヤとゴミ箱をかき分けるようにレオンは立ち上がる。

が、すぐに膝を突いた。

霧の人体急所の一撃を受けたんじやあまともに行動出来ないだろ。

そのまま俺と霧を睨むように見上げてくる。おお、こわいこわい。

勝敗が決したその光景に生徒達は大盛り上がりだ。

自分のボクシングが通じないと分かったレオンが、背中に手を伸ばす。

革ズボンの尻の辺りに隠してある銃に手をかけようとしてるみたいだが――

「お探しはコレかな?」

霧が周りに見えないように、そしてレオンだけに見えるようにオートマチック拳銃――

――マカロフPMを出す。

さつき蹴った時にさり気に奪ってたな。

手際がいいな、相変わらな。

「て、てめえら……」

銃を出そうと思つてたレオンがモノを奪われてるのに気付き、顔を怒りに染める。

「キンジ、ほい」

さり気に霧が銃を渡してきた。

そのまま弾倉マガジンを抜いて、スライドを引いて薬室チャンバーの弾を排出、銃口を下に向けて撃鉄を上げて空撃ち。

やつべ、渡された勢いでついやつちまった。

これ5秒以内でやれつていう蘭豹ルールだったから身に染み付いてる。

5秒以内で出来なかつたら勿論ボコられる。

それを人前でやつちまったよ。

「アクション映画みたい。すごいね」

「同じこと出来るだろ、お前」

何故か霧は素人を今更装った。

その動作を見てたレオンは、舌打ちする。

「てめえら……プロだな？」

「なんのことかな」

霧とセリフが被つちまった。

そのことにお互いに視線だけ合わせる。

予備弾倉マガジンを持ってない様子なので、俺はレオンに膝を突いて周りが見えないように返しておく。

「だから言っただろ、やめといた方がいいって」

俺は軽くレオンの丸刈り頭を撫でつつ、割と最初から視界の隅に見えていたものに溜息を吐く。

萌が、いたのだ、ギャラリーの中に。

萌は今、ガラス張りの河合塾の玄関、その内側から――

『いま、私の目の前で何が起こったの?』

って顔つきで、こっちを見てる。

塾に通ってる、とは言ってたが……こことはツイてないな。

そんな無関係じゃない感じで俺達を見るなよ。

目敏いんだぞ、ヤクザは。自分が俺達の関係者だってバレたらどうするんだ。

「貴重なキンジの一般生徒友達が……よろしくないね」

霧も俺の視線に気付いたらしくそう言う。

だからと言ってここで何かしらのアクションを起こせばそれこそバレる。

「――あそこだア! こらア! 何をやっている!」

あ……

さつきはブラフだったが来ちまったよ、本物のお巡りさん。

駅方面から走って来てはいるが人混みでこっちに辿り着くには時間が掛かるだろう。

塾はこの騒ぎに知らん顔だったが、通報はしてたらしいな。

「ありがとうね。イキがつてる鉄砲玉ガキに薬をくれて」

そう分析してるとセンチユリーの後部から女のヤクザが出てきた。

現代風にかなりアレンジした和服をあえて着崩した服装。

明るい色の長い茶髪を花飾りで結い上げている。

少し目つきは悪いが、美人、というか美少女だ。大人っぽく見えるが、同じ16歳だ

からな。

「……俺は医者じゃない」

俺は、この美人さんを知ってる。

中学の時の腐れ縁だな。

名前は鏡高菊代かがたかきくよ——指定暴力団・鏡高組の姫君だ。

「遠山。デートしよ。今の遠山は、断らない遠山だよね？」

などと言う彼女は、俺を当然ながら知ってる。

ちよつとした因縁だな。霧と出会えた理由でもあるが。

「ちなみに誰だか知らないけど、アンタはお呼びじゃないから」と、菊代は霧もとい亜金を見て排除しようとする。

その言葉に霧は笑顔で、

「デートじゃ仕方ないね。それじゃあキンジ、鏡高さんとよろしく」

「アンタ、何でアタシの名前を——」

名前を呼ばれたことでジロリと菊代は霧を睨む。

ああ、まあ……今は変装で中学と見た目と雰囲気違うしな。

そもそも霧は菊代に会ってたか知らないが、名前を知ってるってことはそういうことなんだろう。

「もつと素直になりなよ。回りくどいやり方じゃなくてね」

「ツ！——アンタ、まさか」

何やら菊代は霧の言葉に覚えがあるらしい。

だけど、そこは霧だ。

菊代が言葉が続ける前に退散する。

「それじゃ、あとは任せてね♪」

俺は去り際の一言で霧の意図を理解した。

この場をただでは帰して貰えないだろうし、俺がデートを受け入れれば萌は霧が何と

かしてくれるだろう。

「それじゃあ、菊代。デートしよう」

◆ UZIを向けられてるんじやおちおち話も出来ないしな。

◆ やれやれ。同窓会か、つてね。

◆ 随分と懐かしいつて言っても3年くらい前か。

◆ 知らない間に中学を中退してたけど、こんなところで鏡高に出会うとはね。

◆ 随分と色気づいちゃつて。

◆ キンジが心配だな。

◆ 余計な女を増やす……いや、アレは既に堕ちてたね。

◆ ともかく、今は望月をどっかに逃さないで。

◆ 別に守る義理ないから放置してヤクザの慰みモノとかになってももらつても結構なんだけどね。

◆ キンジに任せてつて言つた手前では、そうもいかないよね。

◆ 案の定、キンジが乗せられた車を探しに塾から望月が出てきた。

◆ あんまり通りに出過ぎると見られるからすぐに引き止める。

◆ 「おつ、望月さん。一緒に帰らない？」

「赤桐さん……遠山君は？」

「ああ、心配しなくていいよ。知り合いとデートに行ったから」

「嘘、だよな？ 絶対、怖い人達に連れて行かれたんだよ！」

何とかしなきゃやって感じでキンジのことが心底心配そうな望月。

余計なことする方がキンジの迷惑なんだけどね。

「望月さん、関わらない方がいいよ。あの手の連中は鋭いからね。望月さんが遠山の関係者だつてバレたら、きつと怖い目に遭うよ」

「……赤桐さんは、遠山君と同じなの？」

妙に鋭いことを聞いてきたね。

まあ、賢い方だから気付くところは気付くか。

さつきも適度に遊んじやつたし。

「私？ まあ、別にヤクザとか知らない訳じゃないけど」

「じゃあ、遠山君は危ないことを……」

何か変な方に話が向かつてる気がするけど、修正する必要は……ないか。

「かもね。私も危ないことは前の学校ではいたけど」

嘘じゃないよ？

だって今は東池袋高校の生徒の私だし。

武偵高校の私じゃないし。

「きつと大丈夫だよ。あんなに強いんだから」

「……………ッ」

私は安心させるように言うけどそれでも心配なのか、望月は飛び出して行った。

何とか追い掛けて腕を掴んだけど、通りに出ちやっただよ。

キヨロキヨロと望月は周りを探してる。

私だけは黒塗りのセンチユリーの方を見てるけど、あれはミラーとかに映っただらうね。

「遠山君……………」

心配そうにキンジの名前を呼ぶ望月。

その顔は初恋の人を失いたくないって感じの表情で、自分の知らないところに想い人がいる寂しさを含んだ表情だった。

いい表情だね。

そういう複雑な感じの表情は好きなんだけど——

「ほら、もう帰ろ。不安なら一緒に帰ってあげるからさ」

「……………うん」

探してもどうしようもないと思ってしまったのか望月は素直に諦めた。

そのまま明治通りを通って、望月の家を目指す。

「……………」

とぼとぼと、重い足取り。

望月の表情は暗い。

明治通りで帰る誘いをしてからここまで一言も無い。

私も気が重い。

鏡高のことだから、きつと望月を狙って来るだろうな

あの手の女のやり口なんて想像がつく。

……でも逆にチャンスかな？

もしかしたら一気に2人片付けられるかも。

勝手に部下が暴走したら、その部下の責任は頭が取る。

ヤクザってそういうものだし。

もし望月が拉致されて何かあったら、それはつまり鏡高のせいになる訳で――

そうして一般人を巻き込んでしまつて、想い人に嫌われた少女は生きていく希望を失くし自ら命を断ちました。

——あは♪

そう考えると、ちよつとは楽しくなりそう。

でも、思い付きなんだよね〜

色々準備が足りなさすぎてお粗末になりそう。

かなめちゃんの時みたいには上手くいかないよね。

あの時もウルスラに事前に頼んでたし。

ただ単に解体するならどうとでもなるんだけどなあ〜

「あれ、ここだよね？」

望月の家の表札が見えて足を止める。

考え過ぎていつの間にか着いちちゃったよ。

「……うん、ありがとう。赤桐さん」

「遠山なら心配しなくてもいいんじゃない？ 結構慣れてそうだったし、上手いこと乗

り切ると思うよ」

「赤桐さんは……遠山君がどんな人か知ってるの？」

「さあ？ でも、何ていうのかな……私と一緒に危ないことをやってた感じはするね。

修羅場を抜けた人間ってそういうの何となく分かるもんだし」

これは経験則だけだね。

大なり小なり雰囲気が違うのは、素人でも分かる時ないかな？

例えば、夏で妙に雰囲気が変わった幼馴染みとか。

理子のギャルゲーとかそんな感じだけど。

私の場合だと以織が初めて人を殺した時がいい例かな？

どっちにしても望月からしたら非日常的な経験だろうしね。

「住んでる世界が、本当は違うの、かな？」

不安そうな声。

恋した人が実は自分の知らない世界にいる人だった。

うーん、悲恋だね。

そのまま勝手に届かぬ恋と思ってくれると嬉しいんだけど。

「さてね。私は何とも言えない。それじゃあね、望月さん」

そう言っつて私は離れる。

住んでる世界が違う、か。

まあ、私には関係ないけどね。

犯罪者が恋しちやダメなんて誰が決めたって話だし。

あ……明日から望月を迎えに行った方がいいかな？

もしそれで攫われたら、キンジが私を助けてくれるっていうシチュエーションが出来る。

それはそれでアリかもね。

キンジの日常は離れていくけど、私はまだまだこの日常を楽しめそうだよ。
と、ポジティブに私は帰るのだった。

108：日常と非日常

レオンは菊代に追い出されて自分の足で戻るよう言い渡され、フラフラと路地裏へ消えて行った。

「どうやら警察から逃げるのには慣れてるみたいだな。捕まる心配はないっぽい。」

「デートのお誘いなら、こんな手の込んだ事をしなくてもよかったんじゃないか？」
「拉致られた事の方が、遠山も楽かと思つて」

転回するために動いたセンチユリーのミラー越しに、菊代は――

萌の方を見ようとしてるみたいだが、何とか霧が止めてくれてるみたいだな。

と思いきや、すぐに2人して歩道に出てきてしまう。

様子を見るに、霧は何とか止めようとしたが萌が振り払って来てしまったらしい。

それを菊代は確認してしまった。

萌は明らかに俺を探すようにキョロキョロしてるが、霧だけは真っ直ぐにこっちを見る。
てる。

まあ、霧もそれを分かつてるだろう。

あいつのフォロー力なら何とかしてくれる。

メッセージは送らなくてもいいな。下手に俺が根回しするとややこしくなりそうな状況だし。

明日から萌と一緒に登校はしてくれるだろう。

菊代も、それが分からない程にそこまで馬鹿じゃないだろう。

俺は武偵高を退学したが、霧はしてない。

つまり武偵の権限を俺以上には大手を振って使える。

俺も武偵の免許は失効してないが、それでも退学してる以上、ワンテンポ遅れるだろうな。

「白野と一緒にすることは仲良く退学したの？ それと、白野の隣の女は遠山のコレ？」

と、菊代は2つ質問して後者の質問の時にイラッとした感じで小指を立てる。

「両方の質問の答えはノーとだけ言っておくよ。特に女性の方は知らない人だよ」

「昔から女を守る時のセリフは変わってないね」

そんな菊代はウツトリして俺にしなだれかかってくる。

昔を思い出す。ヒプノティック・プワゾンの香り——俺はあまり香水が好きじゃない。

鼻が利きすぎるからな。

だけどこれは嫌いじゃない。そして、それを菊代は狙っている。窓の外に自販機や、横断歩道、水商売の看板が流れる。

その中にポン引きの従業員がこの車が見えたとお辞儀をする。(ややくいしい事になってきたな……)

俺の肩に頭を寄り掛からせてる菊代に、

「事務所ですか、五代目」

額に大きな傷跡がある大柄な運転手が聞く。

「ちがう、紅寶玉^{ルビィ}。幹部は全員集合」

昔のクセ通り、菊代は少し斜^{はす}を向いて命令している。

そのスネるような仕草は案外カワイイので、俺はヒステリアモードが強化されないよう話題を逸らす。

「霧と面識があつたんだな」

「他の女の話はしないで」

菊代はブスつとした感じで不機嫌になる。

そうだね。確かに他の女性の話をするのは無粋だったかもしれない。

でも、少しは俺も駆け引きは上手くなったつもりだ。

他の女性の話を出して気を引きつつ、菊代のことを聞く。

「なら、菊代はどうしていたんだい？」

「跡を継いだのよ。先代は殺られたの。抗争でね」

「そっちの世界じゃあ珍しい話ではないだろう。でも、聞いて悪かった」

「許してあげるけど話の続き……白野とはどんな関係な訳？ さっきの質問でノーってことは、遠山は退学したけど白野は違うって話でしょ」

相変わらず頭は回るな。

しかも、どっちも東池袋高校の制服は着ているが……俺をよく知ってるからこそ俺が退学してる方で話を進めてるんだろう。

菊代は神奈川武偵高附属中学時代に俺のヒステリアモードに裏があると気づき、それを利用して独善的な『正義の味方』として利用した。

将来はヤクザ関係に明るい諜報科の武偵として育てられていたが、育成途中でドロツプアウトしたんだ。

転校したのは“家庭の事情”とされていたが、なるほどそういうことか。

「さてね。腐れ縁って言って納得はしてくれるかい？」

「しない。白黒はハッキリさせないと納得しないタチなの」

だろうな。

誰が敵か味方を見極めないと抗争ですぐにひっくり返る世界だ。

中学からの縁だが、霧との関係を説明するにしても菊代の機嫌は損ねたくない。

しかし、上手い言葉が思い付かないな。

「なら、どう言えば納得してくれるんだ？」

「……さあね。考えてみなよ」

菊代の方が話から少し下がった。

「ここはチャンスだな。」

「難しいな。複雑で一言で表せそうにないから、保留にしておくよ。目の前であんまり他の女性について考えて欲しくはないだろう？ 折角、再会出来たことだし今は」菊代のこと”を知っておきたいな」

甘く囁いた俺の一言に菊代はボフッと顔を赤くする。

それからクラつとした感じで少し離れた。

「そう……ね」

我ながら臭いセリフだったが何とか話をうやむやには出来たみたいだ。

「しかし、菊代に見つかるとはな」

俺は苦笑いでさらにお茶を濁し、話題を変える。

「ふふ。極道の情報網をなめてもらつちや困るわ。藤木林ふじきはやしと朝青あさおが、組の末端と知り合
いでね。ケンカの自慢話が耳に入ったの」

そういうことか。

菊代が俺を知り得た種明かしをすると、携帯電話でゴソゴソ話していた運転手がバツクミラー越しに聞いてくる。

「客人。レオンを既に捕らえてますがどうしますか？ 具体的には指を……」

「離しておいてやってくれ。そこまで気にしてはいないし、あの程度はうちの学校じゃ5分に1回は起こってる」

で、教師が介入してボコられて特別メニューをやらされるまでがワンセットだ。

うちは無駄に血気盛んで困る。

アイドルの推し論争で銃撃戦に発展するなんて武偵高校ぐらいだろう。

「はい。分かりました」

危なっかしいな。この人たちは。警察より耳が良いし、手も早い。

そして、俺は間接的にレオンを救ったことになる訳だ。

何で霧以外だと借りを作るのは早いんだろうな、俺。

「ふふっ。嬉しいな。アタシのヒーローとディナーだ」

艶っぽい笑みでまた俺に寄り掛かる菊代。

それから車は一軒の昼光色で照らされた看板の、けばけばしい中華レストランに停まった。

『紅寶玉^{ルビー}』。それは千石にある一見さんお断りのお店だ。

それもそのハズ……ここは地下から地上階に至るまでが怪しげな雰囲気にも包まれたヤクザビルなのだから。

つまりここにいるのは大なり小なりその手の関係者しかない。

「……」

店名通りのルビー色になっている店内。

とどころ金色の装飾が施されており、スリットが大きいチャイナドレス姿のウエイトレスや下着が見えそうな中華風のミニスカタイプメイドに、ノースリーブのロングドレスのホステスがニコニコと出迎えてくれる。どれもが美人揃いだ。竜宮城か、ここは。

竜宮城以上にタダでは帰してくれなさそうだけどな。

大きさが異なるが、金魚の水槽が各テーブルの近くにあるのは——『毒殺とかしませんよ。信用ならないならここで試してもらって構いませんよ』というアピールだ。

普通の人なら絢爛なレストランドが、俺からすれば剣呑の一言だ。

その様子に俺は眉を寄せる。

「お店、気に入らなかつた？ お寿司とかの方がよかつた？」

和服の袂をひらひらさせながら、俺の隣を歩く城主様が訊いてくる。

「いや、新旧の火薬の臭いがして落ち着くよ。でも……ちよつと女性が多いかな」
「——おいお前達、バックにいな」

俺が文句一言で、菊代は一気に人払いをする。

まあ、ヒステリアモードが強化される不安要素がなくなつたのはありがたい。

それから俺達は、これでもかと内装に金をかけた広い個室入ると——

大きな回転テーブルに所狭しと載せられた、豪華な料理や美酒が目に入る。

さつきもそうだが、気前の良さを見せるのはヤクザなりの親愛と歓迎だ。

つまり、俺をどうやら勧誘したいらしい。

こつちは元が付くがただの一武偵で今は一般人ですよ。

勧誘するほどに何か秀でてる訳じゃないのに勘弁して欲しい。

ココと戦つた時もそうだったが、何で俺がこんなに求められるのか意味が分からない。
い。

ともかくこの歓待を甘んじて受けないと彼らのプライドに関わる。

なので俺は、お待ちかねの表情で見えていた——揃いの金バッジを付けた鏡高組の幹部の皆さんと、同じテーブルにつく。

うわあ、怖いなあ。武偵高の教務科マスタースの3割くらいだけど。

それに白雪とかかなめとか霧とか、あつちの女子の笑顔の方が恐ろしく感じる。

「……………」

俺が座ると、じろりと一気に視線が強くなる。

それから「ああ」といった感じで納得し始めた。

勝手に納得しないでください。

（ヤクザはすぐに「見抜く」からなあ）

武偵用語で『彼我の戦力比較』と言うが、要は自分と相手の実力差を見抜くのが早く正確なのだ。彼らは。

いや、裏社会に生きる連中と言ったほうがいいな。

勝ち馬に乗れないと、ガチで死ぬ世界だからな。

はあ、こんなことなら霧も一緒に来てほしかったかもな。

こういう空気でのあいつのマイペースさには救われる。

あと出鼻を挫くの得意だし。

こういう閉鎖的な組織であるので、だからこそ“組”関係は潜入捜査スリツブが難しい。なので、この手の捜査はそういう専門の武偵があたる。

「——ね。いい男でしよう?」

隣に座った五代目組長・菊代は俺を笑顔で一同に見せるようにいう。

「ええ。いい目をしてます。客人はどうやら何度も修羅場を潜った雰囲気してる」

どうやら菊代のボディガードも兼務してゐるらしいさつきは運動手だが、爺ちゃんと同じような事を言ってくる。

「あつはー、ヤクザより怖いや。この少年」

ピンストライプのスーツを着た、軽い感じのホストみたいな美男子が頭の後ろで手を組んで笑つてる。女性がクラッと来そうな顔で。

「うん。ヤサイ顔してるけど、迫力あるぜ」

菊代の紹介によると、元レスラーのスキンヘッド。首まで刺青いれずみがある。

「そうですね。こんな子がいるとは。世間は広いものです」

組のブレンらしい、一流の商社ビジネスマンみたいな長身男。東大法学部卒。

俺を興味津々で見ている連中だが――

どうやら、実力差を理解してゐるらしい。

さつきのレオンはそこを見誤つたが、ここにいるのは、そんな間違いを犯さないプロだ。

”この俺”と戦つたら一分で全滅する事を、本当に理解してる。

まあ、そこは面倒がなくてよかつた。また実力が見たいとか言われても被害者が出て

困るし。

「悪いが、未成年だから酒もタバコも遠慮するよ」

菊代がブランドーの瓶を手を取った所で俺は先に制しておく。

「客人はお嫌いらしいわ。お前達も遠慮しな」

その言葉に東大卒も細葉巻シリガロに着けようとする前に火を消した。

五代目組長とは言え、年下の女性にやけに素直に命令を聞くな。

何か妙な違和感だ。

運転手はまだ古参で前の組長から続いでるであろう信頼関係が見えそうだが……若
い連中にそれがあるようには思えない。

「それと組長と大事な話をしたい。わざわざ、こんな歓待をしてもらったからには真剣
な話を、ね」

俺のその言葉の意図に菊代は気付き、

「お前達、帰りな」

今日は顔見せ程度だったんだろう。

幹部連中は大人しく席を立った。

やっぱりやけにおとなしい気がする。

いくら俺の腕が立つからって、若過ぎる俺に不満の一つや二つはぶつけてもおかしく
ないと思うんだがな。

そう観察するのは霧の影響だろう。

と、俺はいつもいつの間にか近くにいる元パートナーの姿を思い浮かべていた。

「遠山……どうかな。アタシ、その……中学の時より、美人になったでしょ」

ヒステリアモードの俺と2人きりになった菊代は――

幹部が出払ってから、さつきとは打って変わって大人びた態度からもじもじ……と、少女らしく恥じらっている。

「――事実を否定はしないよ」

と返すと、隣で菊代は顔を伏せながら「くうー、これよこれ!」と何やら嬉しそうだ。楽しんでるな……

それからゴキゲンな顔で、

「アタシのママがね、女優だったの。カナダ人の。最近、似てきたんだって」

「そうだったのか。だから髪の色が明るいんだな。だが中学の頃は誰もそんな話はしてなかったぞ」

「両親の話なんて、アンタ以外にしないから」

菊代は赤くなりつつ、ライチに手を伸ばす。

(しかし……うーん……食べるべきかな、このご馳走)

普通なら暴力団と食事なんて問題行為だが、武偵は別。そういう判例も出てる。

それに俺の武偵免許はまだ生きてるので……
問題にはならない。

それに全く手を付けないのも失礼ではあるしな。
爺ちゃんにも食べ物を残すなって怒られる。

というわけで、目の前のフカヒレに手を伸ばし、食べてみるが。
これが美味い。

調理人の腕も確かだろうが、素材も一級品だろう。
別に毒は入ってないが、体に毒なレベルで美味い。

しかし、こういう食事はたまにいい。
俺は一般家庭だから、素朴な味の方が合う。

「——じゃあ、まずはさっきの迷惑料。これぐらいいい？」
菊代は足元にあるトランクから3千万円くらいの札束を見せてくる。

「いいよ、この食事だけで」
暴力団の金なんて受け取れば色々と面倒になる。

本音としては1つ2つ持って帰りたいけどな。
ヤクザに貸し借りをすると社会的にヤバイ。

どんな返しを求められるか分かったものじゃない。

霧以上に警戒はしないとな。

それにさっきの高級車に、この豪華なレストランに、現金。

これはヤクザにとつての宣伝費用だ。

ウチはこれぐらい羽振りが良くて、いい思いが出来ますよつて感じのな。仕事が上手く行つてる証明でもある。

つまりは待遇の良さをアピールしてる。

看板とかで派手に宣伝出来ない代わりにな。

さっきの幹部達も名のあるブランドのスーツや、ダイヤモンドが散りばめられた口レックスの時計を着けていた。

ファッションセンスがないとかではなく、そういう派手なのを身に着けてるのもアピールの一種だ。

しかし、いささか儲かり過ぎてるような気がする。

暇つぶしに少し探ってみるか。

この皿を食べ終わるまでは返してくれなさそうだし。

「最近のヤクザは目立たないようにするんじゃないのか？」

「……ウチは古いからね」

ちよつと隠し事をしてる目つきで誤魔化したな。菊代。

「今は何をやってるんだ？ 菊代」

「さて、何でしょうね？ 麻薬、ヤツキョク守代、みかじめ総会屋、ヤミキン闇金融の取り立てはうちでは御法度にし

てるの。お祭りの屋台だったりしてね」

「はぐらかすなよ。自分が何のお金で食べてるかぐらいは知りたい」

俺がシラけた顔を見ると、菊代は烏龍茶を淹れつつ――

「――中国」

と、それだけ答えた。

これはホントらしいな。

そしてここからが本題らしい。

「アタシが継いでから、うちは国内で無視されるようになった。まあ、小娘が組長じゃあ見向きもしない。だから国外に目を向けるしかなかった。大きな組織みたいに太いパイプも仕事シノギもないからね。ヤクザは外国との提携に共存派と保守派がいたけど、鏡高組ウツタカは元々共存派だったからね」

まあ、そうだろうな。

極道は徹底的な男社会。さっきの幹部達を見てリーダー格になるやつがないのは何となく分かつてはいたが、菊代がやむなく継いだのがハンデになってるのか。

「知ってる？ 海外で人気なのは、アニメや、車だけじゃない。ヤクザもなの。どこの国

のマフィアも歓迎してくれるよ」

それ俺も知ってる。

ヤクザの社会じゃ資金力はそのまま力となる。

国際的にも日本円はまだ強いから潤沢に持っている組は多いだろう。

「それで、一発逆転を狙って中国の大手と手を組んだ。今あるのはマカオのカジノ経営で吸い上げたお金。だから合法。安心して食べていいよ」

「どこと組んだんだ？ チャイニーズ・マフィアならそれなりに知ってるぞ」

「すごい武闘派。遠山も気に入ると思う。じゃあ、会おうよ」

「悪いな。最近、似たような勧誘を蹴ったばかりなんだ。もし俺の知ってる組織だったら合わす顔がない」

思い出すのは『キャラバン・ワン修学旅行I』だ。

あの時の帰りに新幹線をジャックしてきたココ三姉妹。

チャイニーズ・マフィアかは分からないが、ランパン藍幫という中国のデカイ組織なのは間違いないだろう。

「もしそうだとしても、きつと気にしないわよ。なんかそこも世界的な抗争の真つ最中らしくてね。アンタみたいなスーパーマンとお友達になりたがってたし。たまたま中国側の幹部もこっちに来てるから、話だけでも聞いてみない？」

多少は引つ掛けてみたが、それでも菊代は組織名を伏せた。中国側を氣遣つてゐることは……

相当な大手だな。くわばらくわばら。

「それに、今はアメリカが厄介らしくてね。禁酒法時代の流れを汲むマフィアが妙に力を付けてゐるつて話よ。アル・カポネだかマシガン・ケリーだか、そこら辺の子孫か世話になつた連中が色々動いてゐるらしいわ」

なるほどな。

取り込まれないように色々とやつてる訳だ。

「どちらにしても遠慮するよ。中国語なんて喋れないし、俺はスーパーマンじゃない」

「アタシは知ってるんだから、誤魔化してもムダだよ。極道は氣負いの稼業。アタシ達も強い人が欲しい」

「……俺に組に入れてか？」

「そうだよ。義兄妹の杯さかすきを交わそう」

そうあつけらかんに言ってくるので……俺は苦笑いする。

「妹は間に合つてるよ。それに、借りが色々とあつてね」

「妹は初耳だけど、借りは白野のこと？」

鋭いな。

だけど、さつき別の女性の話はしないと云ったからあんまりしないでおう。

「色々さ」

と、適当な言い方ではぐらかす。

「……分かつてるよ。遠山を利用してたのは、アタシで……そこから救ったのは白野。あの時のことはごめんなさい」

本当に申し訳ないとは思ってるらしく、菊代は顔を俯かせる。

「よほどじゃない限り、女性の罪は問わないようにしてる。それとも、許さない方が気が楽かい？」

「その言い方はズルいわ」

「でも、菊代を見る限り……許した方が堪えるようだからね。許すよ」

良心に訴える方がよほど堪えるだろう。

少し意地は悪いけどな。

それに、俺が女にイジられるのはいつもの事だ。

理子とかアリアとか霧とか、受けてる被害を気にして記録したらそれこそノートが何冊あつても足りない。

恨み辛みやネガティブなことを気にするのは人生のムダだ。

実際、許すし忘れるつもりだ。菊代は謝ったし。

「あ……」

ヒステリアモード的な俺の言い回しに、嬉しさと恥ずかしさを交えたような表情をして……落ち着かないように足を組み替えた。

(……………)

い、いかん。今の一瞬でヒステリアモードが強化されてしまった。

改造された和服の都合上、菊代の股の正面まで高くスリットが入ってるから……

その辺りの艶めかしい部分が、見えてしまった。

そう言えば霧が和服では下着を着けないとか何とか言ってたような――

「……………あの頃のアタシ、イジメられてた。学校で」

菊代の話に合わせて、俺は変な思考に入る前に思い出すように目を閉じ、過去の追憶に逃避する。

元々は菊代は、斜に構えたところもあってミステリアスな一面を持つ美少女だった。

当時から、同じ学生とは思えない程に大人びていて男子からの人気は高かった。

女子連中はそれを僻ひがんだ。

菊代がヤクザの家系でもあったことから目の敵にはされていたし、イジメられるのも無理はなかった。

そこら辺は少し同情するな……

子は親を選べない。

「アタシ覚えてるよ。むかし水着をイジメつ子に切られたとき、遠山が仕返ししてくれた」

「俺も覚えてる」

それが菊代との本格的な出会いだったからな。

あの時は陰險な女子共が菊代の水着に細工をしていた。

菊代の水着を切ったあとに水溶性の糸で縫って、しばらく水に入っていると切れ目が開くように。コッソリとな。

武偵のイジメは余計な知識がある分、普通の学校より悪辣だ。あくらつ

それで水泳の時間、男女は別々だったものの半裸状態になった菊代は帰るに帰れず、シャワー室で夕方まで泣いていた。

そこをたまたま清掃係が通りがかって、まあ……見てしまった訳だ。色々と。

あまり思い出したくはないな。

瞬時に制服を持ってきて上げて、彼女をヒステリア的な感じで甘く、甘く慰めながら事情を聞き出してやり返した訳だ。

別に殴つちやいない、ヒステリアモードで全員を言いなりにさせてしまっただけだ。

それで全員を菊代に謝罪させたあと、俺の変わりようを不審に思った女子連中に調査

されて、便利な『正義の味方』君が誕生した。

で、そんな中で霧と出会い。霧のおかげで女子が近付かなくなり俺は救われた訳だ。

「1つ聞いていい?」

菊代は不安そうな表情をし始め――

「なんだ?」

「白野のこと、好きなの?」

そう真剣に聞いてきた。

よくその質問をされるが、答えは決まってる。

「ただの元。パートナーさ」

そのつもり、なんだがな。

周りはどうもそうには見えないらしい。

「じゃあ、アタシと付き合ってよ」

「な、なに……?」

何がどうして、じゃあ、なんだ?

「――武偵高を退学したんでしよう? だったらドロップアウト同士、付き合おうよ」

言いながら菊代は俺の手の上に自分の手を重ねる。

ヒステリアモードの頭ではぐらかそうとするが、相手はそれを知ってる菊代だ。霧や

理子に上手を取られてしまうのと一緒でやりにくい。

「いや、俺は——」

なるべく向こうを傷付けないように言葉を選んでいると——

「分かつてないな、遠山。アタシはアンタを脅迫してるんだよ」
ゾクリとするような声音と視線で言ってくる。

やつぱりワルだな、菊代は。

「秘密をバラされたら普通の生活なんて送れないでしょう？」

こつちが一番打ってほしくない手を打ってきた。

やつぱり、この手のはやりにくい。

霧を連れて来た方が良かったかもと、後悔が出てきそうだ。

ただ、駆け引きは俺もそれなりに学んでるつもりだ。

「別にいいさ。その時は、帰りを待ってくれてる人がいるからな。伝手を辿るよ」

ちよつとハツタリをいれる。

別に嘘でもない。

頼もしい元パートナーがいるからな。

今のところ世話になるつもりはないが。

「……………」

菊代は、自分の一手が決定打にならないことに少し黙ってしまった。

実際は無茶苦茶困るが、それを悟らせないようにする。

それから寂しそうに、

「アタシじゃ、ダメなの？」

「そういう訳じゃない。ただ、目指してるものが違う」

「本当は脅迫とかせずに、したかった。アタシと遠山じゃ釣り合わないって思ってた」

「そう思うなら、格を上げてからまたおいで」

少し俺は笑みを浮かべてやる。

足を洗うって言うなら、ある意味では喜ばしい話だしな。

「そういうところが……遠山っ……!」

何かに触れたらしく、たまらない、といった感じで菊代は俺に抱きついてくる。

密着されてヒステリアモードが昂揚するのを感じる。

年齢に似つかわしくない色気。その色気、少しはアリアに分けてやれないか——

ヒステリアモードなのに、慌ててしまった俺は目の前の光景から目を逸らすようにそんなことを考える。

「会いたかった。アタシのヒーロー……遠山を車から見たとき、奇跡だって、そう思った

……」

段々と興奮した口調で、菊代は目元を潤ませてくる。

本来なら、こんなことをされたら窓を突き破るくらいダッシュで逃げるところだが……

今の俺には出来ない。彼女を傷付けてしまうから。

(マズイ……)

戦闘の方に警戒してて、”こつち系”の警戒を怠った。

その隙を突かれた。

いや、それも計算の内だろう。相変わらずのしたたかさだ。

「車の中じゃ、平気な顔してたけど……ずっと胸が高鳴ってた。もう、遠山のことしか考えられない……!」

何とか傷付けないよう——言葉で対処しよう。

きっとできる。こういう時の『対処法』を兄さん、もといカナに教わってるからな。負けたら義兄妹の契りだ。こんなイスに跨がられた状態で。

「……じゃあ、菊代。質問させてくれ」

だがもう、この橋を渡るしかない。

一か八かだ。

「なに?」

「仮に付き合つたとして、俺に”何をさせたい”んだ？」

蠱惑的に、艶を含んだような声音で語り掛ける。

瞬間、覗き込んだ菊代の色味がかつた瞳が揺れる。

「それは……その。……そんなの……言えないし……」
よし。

顔を赤くして思い切り顔を俯かせて、言葉を詰まらせた。

「言つてごらん？」 菊代。 さあ……菊代」

俺から迫るような言い方。

これは以前にパトラと戦う前、ピラミディオン台場で水上バイクにアリアいたずらに徒で使つた『啄木鳥』という手法。

相手が答えにくいことを繰り返して聞いて、女性の羞恥心を煽あおるものだ。ただ即答されてしまえばアウトだ。

いつか霧に試したような気もするが全然通じなかった。

今回は勝率を上げるために『呼蕩』ことうという話術を使っている。

これは相手の名前を連呼して甘く囁やき、相手に言うことをきかせるという、一種の催眠術だ。

ただ、乱用は禁止だと我が家には仕来たりとして残っている。

実際に悪いことに使える技術だしな。俺はそんな風に使うつもりは微塵もないが。ともかく、俺の術中に填まり菊代は力なくもじもじして——

「それは、その……遠山が考えてよ……アタシは、なんでも——」

俺に主導権を渡しつつある。

そのまま俺は、花を手折らぬようにそつと菊代の体を離させる。

なんとか、なつたみたいだ。

危ない橋だったけどな。

菊代は体育座りで膝にオデコをつけている。

きゆう……といった感じで、うなじすら真っ赤になつてるほどだ。

色々と想像させちやつたかな？

だとしたらゴメンな。

優しく、菊代を甘く撫でてあげてから——

「それじゃあ、帰るよ」

俺は勝利宣言をしていく。

なんでも、つて言つたしな。

借りてきた猫みたいに大人しくなつた菊代は、心地良くて寝てしまったかな？

「——1つ言つてもいい？ 遠山」

寝てませんでした。

「なんだい」

この絢爛な広間から出るように、背中を向けたまま話す。

「アンタ、死んだ魚の目をして塾に行くより、ヤクザと会合しての方が活き活きとしてたよ」

その言葉を否定は、出来ないな。

霧は、どこまで俺を見透かしてたんだろうか？

一般高校の普通の日常は、俺にとって違和感しかなくて何より眩しかった。

それどころ馴染めなくて鬱屈した感じをいつも抱えている。

アンダーグラウンドな世界の方が気が楽にさえ思えてしまった。

「学校には何も言わないでおくわ。でも武偵崩れなんて一般の人からしてみれば社会不適合者。ヤクザと変わりはしない。だから、なろうよ。今ならアタシが居場所を、あげるから」

菊代は顔を伏せたまま、まだ俺の勧誘をまだ諦めてないらしい。

「俺は交渉はしない。ヤクザは裏切るからな」

「遠山だって、武偵高を裏切って一般人に降りた。お互い様、でしょ？」

これは一本取られたな。

「なので、俺は沈黙を返す。」

そのまま見事な不死鳥が彫られた扉を開けた時、

「知ってるよね？ アタシ、気は短い方だよ」

振り返ると、ゾクツとくる鋭い視線を俺に向けていた。

あの視線は一部の男子に人気があつて、悔しがってる時の菊代の目だ。

「……知ってるよ」

「諦めも悪い方なの」

「それも知ってる」

「でも、一途なの。これは知らなかったでしょう？」

「ああ」

「アタシも今気付いた事だから」

菊代は鋭い手つきで、何かを投げた。

それが俺の目の前の扉に突き刺さる。

同時に俺の髪の毛が1、2本、掠めて切れた。

別に当たらない事が分かったから、避けはしなかったが――

刺さった物はプラチナ色のクレジットカード、角が鋭く削られていた。

「――暗証番号1111だから。今日の迷惑料に好きなだけ使って」

「さつき要らないって言ったよ。それに、しつこい女性はあまり好きじゃないんだ」
俺は目の前のカードを取って、手裏剣のようにして返す。

扉と同じようにその角が菊代が座つてるテーブルの近くに刺さる。

「じゃ、じゃあ……しつこくしない。遠山……おやすみ」

また、きゆう……と小さくなってしまった菊代は体育座りのままバイバイと手を振る。

それを見納めて、俺はその場を静かに去る。

(とりあえず、何とかなったが……)

最初から最後までヒステリアモード頼みだったな。

一般人になろうと努力して、少しはなれたと思っていた。

でも、全部霧の言うとおりになってしまうている。

日常に違和感を覚えてる。

俺にとつて普通とは、何だったんだらうと……

結局、俺は俺から逃れられないのか？

武偵高や菊代から逃れても、俺は……

◆ ◆ ◆

はっ………！

キンジが何かよくないことに巻き込まれてる気がする。

同時に、私が好きそうな表情もしてるような気がする。

……なんて、天啓でも降りた訳でもないのに何を考えてるんだか。

望月を送り届けて、私は武偵高の寮内に戻ってきた。

そして自室で壁に掛けられたダーツの的に私はベッドに座りながらナイフ投げて遊ぶ。

貼られた望月と鏡高、2人の顔写真に向けて――

はあーあ……本当に女誑おんなたらしだね。

今までは何とも思ってたけど、ここまで来ると私も心穏やかではいられなくなっちゃう。

部屋の窓のドライフラワーにしたバラを見る。

キンジが贈ってくれた勘違いの恋。

私は、キンジに騙されたままでいる。

家族になつて欲しいという嘘に。

でも、キンジにとつてそれは難を逃れるための手段であつて、私を本当に家族にしようとは考えてもないことくらい分かつてる。

でもね、キンジ……そんな嘘でも私は好きになつちやっただよ。

望みを叶えてあげようって、いい女でいようって。
振り向いて欲しいな……って。

それで、色んな表情を見せてほしい。

私だけにしか見せない、そんな表情を。

「好き、キンジ」

言葉に出せば、いつも呼んでた名前が特別に感じる。

「好き、なんだよ……」

どうしよ、ちよつと乙女チックに考えてたら思ったよりのめり込んでる。

「はぁ……ん……」

自覚してから、キンジを思うだけで吐息が甘くなる。

同時に体を掻きむしりたくなるくらい、何かをメチャクチャにしたいという欲求。

肉の感触。性器を切り取る感覚。

また、誰か殺さないと抑えられなくなりそう。

後日――

悶々としながらも私は、望月の家の前で待つ。

何で何の面白みもない子を守らないといけないんだろうね。

私にとって特に観察する魅力を望月には感じない。
平凡過ぎる。

でも、仕方ないね。

私も彼女とお話はしたかったし。

ガムを噛み始めて、すぐに玄関が開く音がする。

物を噛むとストレスが軽減する分泌成分が、うんぬんかんぬん。

思ったより、疲れてるかな私。

そのまま望月が門から出てきたところで軽く挨拶。

「おはよ」

「赤桐さん？ どうしてここに」

「昨日の今日だからね。狙われてるかもって自覚してる？」

「……狙われる？」

キョトンとした顔で望月は首を傾げる。

知らないよね。そりゃ。

命のやり取りなんて縁のない生活してたらこんなものだよね。

「まあ、いいや。私も一緒に登校してあげるよ」

「う、うん」

困惑しながらも、望月は東池袋高校へと向かう通学路を私と一緒に向かう。

会話は特になく、明治通りに出ようとした人気のないところで――

黒塗りのセダンが、私達を追い越したところで停まる。

来ちゃったよ。

「望月さん、止まって」

「え？」

私の言葉に困惑しながら望月は足を止めた。

それから、額に傷のある男がセダンの運転席から出てきた。

そして彼が後部のドアを開けると、スラリとした脚を出してヒラヒラと改造された和

服をはためかせながら、彼女が降りてくる。

「初めまして、ちよつとお話いい？」

不敵に笑いながら鏡高が対峙する。

相手が出てきたことで私も微笑みを返す。

さて、望月にとっては非日常が、私やキンジにとっては日常が始まる。

109：変貌する日常

鏡高は、私と望月を舐め回すように見てる。

「昨日はあんまり話せなかったけど、イメチェンでもしたの？」

そして真つ先に中学と雰囲気の違いに声を掛けてきた。

「まあね〜」

「そういう飄々としたところは、昔から変わってないね」

鏡高が話してる間にも、ブランドのスーツを着た怖いお兄さん達が車から降りてくる。

数は2人。

って言っても、後ろにも1台いる。

だから鏡高を除いて5、6人つてところかな？

別にこの程度で私をどうにか出来るとは思ってないだろう。

私は一応は守るように望月の前に入る。

「赤桐さん、知り合い……なの？」

望月が呟いた私の名前を聞いた鏡高は、眉を動かす。

「赤桐？ ああ、なるほど……遠山と一緒に退学した訳じゃないのは聞いたけど、そんな制度あったわね」

鏡高も元武偵なだけで経過観察任務は知ってるらしくすぐに気付いた。

「別にアンタと事を構えるつもりはない——」白野」

わざとらしく私の武偵の時の名前を言ってきた。

軽い牽制のつもりだろう。

別にそんなの牽制にもならないけど。

でも、私の後ろにいる望月から困惑の声と息を呑むのが聞こえる。

自分からネタバラシする楽しみがなくなったのは残念だけだね。

「白野、さん？」

「そうだよ。別に隠すつもりは特になかったけど、まあそこは事情ってことで」

背中を向けたまま口調と声音を少し変えて、白野として振る舞う。

すぐに菊代に向き直り、

「それで？ 学校に遅れるから用件をお願いしたいんだけどね」

「そう急かささないですよ。遠山のことと一緒に話さない？ そうね、喫茶店でお茶でも

しながら」

「私だけなら付き合うよ。この子は関係ない」

一触発とまではいかないけど、段々と雰囲気は剣呑になってる。

望月もそれは感じてはいるかな？

このまま好きにどうぞ、と望月を差し出しても私は構わない。

別にどうなろうが興味ないからね。

でも、それじゃあキンジに任せてって言った意味がない。

せめて少しは、仕事しておかないと。

「そもいかないの。中国に腕の立つ人材を紹介することになってるからね。なんならアンタも来る？」

「朝からお仕事とは精が出るね。キンジが望むなら付き合うけど、そうじゃないでしょ？」

鏡高組が藍幫ランバンとパイプがあるのは知ってる。

だから、キンジを勧誘してる。

鏡高は別の思惑もあるだろうけど。

なんか、段々と腹が立ってきたね。

キンジはありのままが面白いのにそれを邪魔するのが気に入らない。

藍幫……私が目にかけていると知りながら、何で手を出してきたのかな？

ココは少なくとも、あまり乗り気じゃなかったはずなのに。

あの諸葛メガネの入れ知恵かな？

「待って赤桐、さん……じゃない、白野、さん」

と、望月は声を上げる。

出来れば大人しくして欲しいんだけどね。

何も知らないなら、口を出さないのが正解だよ。

って言っても、初恋キンジのことになればそうもいかない、か。

「白野はともかく、そっちの遠山の新しい女の子の方はどう？　アタシとお茶でもする

？」

「あ、新しい……どういう意味？」

「さあ、どういう意味だろうね」

気になるワードを出しておきながら、答えない。

弱いところを狙うのは、手慣れたるね。

私にはその手の駆け引きとか話術が通じないから、素人の望月を狙ってきたか。

「気になるなら、ついてきなよ。別に何もしないよ」

「……行きます」

その返事に私は頭を抱える。

「望月さん、考えて言ってる？」

「だ、だって……断ったら酷いことになるんでしょ？」

完全に目の前のヤクザのイメージで言ってるよね。

いきなりこんな住宅街でドンパチする訳がない。

むしろ抵抗されて困るのは向こうの方だよ。

素人じゃ、そんな状況判断を求めるのは無理か。

知ってたけど、面倒なこと受けちゃったな。

でも、キンジも私が迎えに行くのと信じてるだろうしやらない訳にはいかないよね

私は分かりやすく教える。

「ここで話に乗らない方がいいよ。どうせ、キンジを誘き出す餌にでもするつもりなんだろうし」

「言いがかりだよ」

「へー、そうかな？　じゃあお話はまた今度でもいいよね？　別に何もしないなら断つ

ても構わないでしょ」

「ええ、”アタシ”は別に何もしないよ」

クイ、と顎で何か鏡高は合図を出す。

すると額に傷がある運転席から出た男が、鏡高に携帯を持ってくる。

「そう言えば、アンタは妹がいるんだっけ？　丁度今は登校中だけど道中で事故が起き

るかもね」

わざとらしく、携帯を主張するようにヒラヒラと見せる。

これはボタン一つで連絡すれば実行できるっていうことだね。

脅し慣れてるし、手が早い。

これもブラフだろう。

本当に実行すれば、立場を悪くするだけ。

でも、必要ならやるだろうな」

手段を選ばないその姿勢は好きだけどね。

そして、ブラフなんて分からない望月は顔を青くする。

「そ、そんな……。……。わ、分かったから咲には手を出さないで！」

「つて言うことだから、白野。余計なことほしないで」

私に釘を刺して、鏡高は望月を連れ去る。

やっぱりこうなったかかって感じだけどね。

「はいはい、キンジにも連絡しないよ」

「よく分かってるじゃない」

どうせ、鏡高は自分のタイミングでキンジに連絡するだろう。

そのまま望月は鏡高と一緒に黒いセダンに乗り込んで去っていく。

ガムを口から出して、ある物を取り付ける。

そのまま後ろから車両が近付き、タイヤの進行方向に見えないようガムを指で弾いて地面にくつつける。

車はガムを踏んで、そのまま鏡高の乗ってる車両を追い掛ける。

完全に車が見えなくなったところで、私は東池袋高校の生徒が使ってる鞆かぼんから端末を出す。

追跡装置をつけてね。

リリヤ特性——耐久性抜群の発信機をガムに包んでタイヤに付けた。

これで本拠地かもしくは鏡高に関連する施設が分かる。

キンジにまた、貸しが作れる。

その点は感謝するよ。

いつでも頼れる元パートナーってね。

「~~~~~♪」

鼻歌交じりに無事に発信機が起動してるのを確認。

そのまま私は発信先を追い掛ける。

適当なところで武偵高の制服に着替えて、いつもの白野ちゃん、参上つと。

着いた先は西池袋の豪邸らしき場所。

ふむ、遠巻きから見てもただの豪邸って雰囲気じゃないね。

どうやら本拠地の方らしい。

ラッキーではあるね。

探す手間が省けたよ。

どつから侵入しようかな？

今回は完全にノープランだし、家の見取り図もない。

道具の準備はしたけど、それだけ。

豪邸の周りに見晴らしが良さそうな場所は……あつた。

池袋駅の近くのビルから見えるかな？

そう思い、すぐに屋上へと移動し侵入して鏡高の家を観察。

うー寒い。インナー着てるけど、屋上は冷える。

倍率の高い双眼鏡で見るに和風庭園に、広そうなガレージ。間取りも大体は分かった。

しかし、監視カメラやセキュリティはなさそう。

あれかな？ 常に組の人が詰めてるから特に必要はないって感じかな？

そんな中で物騒な物を携行してるのが見える。

……AK—47か。

言わずと知れたロシアのアサルライフル。

ま、大した脅威じゃない。

「さてと、カチコミに行こうかな？」

家の構造も見当はついた。

望月を探して、あとはキンジがピンチになったら私が登場しよう。

あそこから素人を連れ出すのは難しいだろうし、それが現実的。

鏡高のことだから、きつと手元に置いておくだろう。

問題はいつキンジが来るか、何だけどね。

その前に望月の場所だけは把握しとかないと。

下手に人数を減らすと侵入に気付かれる。

この程度なら難しくはないけど。

面倒なのは面倒なんだよね。

基本的に成り代わって堂々と潜入だから、あまり慣れてないんだよね。

出来ない訳じゃないけど。

とりあえずは扉から侵入して、素早く室外機を使ってベランダへ昇り、雪解けの屋根

へと飛び上がる。

さてさて、見回ってる連中から何か会話でも聞けないかなと思つて外回りを警戒してるヤクザに聞き耳を立てる。

普通なら、話し声なんて聞こえない距離。

でも私は、常時ヒステリアモードもどきだから集中すれば聞こえる。

「はーあ、ガキ相手に姐さんもよくやるよな」

「だが、それもすぐに終わるだろ。高値で売れる例のボウヤが来て、ふん縛れば姐さんは用済みだ」

何とも穏やかじゃないね。

どうやら、キンジを無力化したら鏡高を裏切るつもりらしい会話が聞こえた。

ホスト風の男にインテリ風の男の会話をもう少し聞いてみる。

「ところで猴先生達は？」

「くつろいで貰ってる。すぐにビジネスが出来るように奥の部屋でな」

……来てるんだ。

丁度いいや、私の家族になる予定の想い人に手を出す理由を聞かせてもらおう。

そのまま、裏口に降りてレッツピッキング。

鞆からピッキングツールを出して、5秒で開ける。

私、殺人鬼のハズなただけだね。

怪盗は理子なのに、とか思いながらもすんなり侵入。

侵入する前にビルの屋上で見た時に料理が運ばれてる部屋があったね。

だったら、こっち……。その前に白野のままじゃあ困るから変装しよう。

用意してた赤毛に変えて、ドイツ人っぽい感じに特殊メイクを変える。

さて、内容次第ではすぐに殺してあげるからね♪

何て思いつつ私は、堂々と中華風の扉の部屋を開ける。

そこには――

「ん?」「啊あ……」

バナナを食べてる猴と、桃を食べてるココ四姉妹の末妹でメガネを掛ける機嬢ジーニヤン、そして生レバーを食べてる諸葛静幻しよかつせいげん。

見つけたってね。

私が入るや否や、諸葛は静かに立ち上がり一礼する。

「お待ちしておりました。ジャック」

……この丸メガネ、私を待ってたね。

キングジに手を出したら私が出てくるのを分かっている、あえて手を出したのは私を呼び付ける策だった訳だ。

久々にハメられたよ。

それを瞬時に理解した私はすぐに聞く。

「それで？ 私が出張るのを分かかってて手を出した理由はなんだよ？」

カツエみたいな喋り方で私は真意を問いたです。

「いえ、少々お願いがございました。本来ならこのような周りくどいやり方ではなく直接連絡をしたかったのですが、神出鬼没な上に行方の知れない人ですからね。彼の近くにはいるとは思っていたので、こうした訳です」

「連絡先なら機嬢ジーニヤンが知ってるだろ？」

諸葛の説明に私はツツコむ。

イ・ウーで既に知ってるでしょうに。

「上海に目付けられててこっちの連絡は無理ヨ」
シャンハイ

本部の方が……

中国も一枚岩じゃないのは知ってる。

まあ、元々が多民族国家だし当たり前前だけど。

「わざわざ私を呼ぶなんて、物好きだな。遠山が来る前に用件を終わらせろ。私は楽しみを邪魔されるのは嫌いなんだ」

「では、単刀直入に。我々に手を貸して頂けませんか？」

「藍幫ランバンの問題を解決する気はないぜ」

私はすぐに拒否する。

そして私の言葉に凶星だったのか、諸葛はやれやれと首を振る。

「手厳しいですね」

「好きに生きて、好きに殺す。私は何なのか、知らない訳じゃないだろ？」

「ですが、彼に惹かれてるのでは？ 昔に比べて随分と丸くなったようですね。男か女か分かりませんが」

私の正体を絞ろうとしてる？

鏡高以上に頭が回るから、これ以上話すのは危険だね。

別にお父さんとお姉ちゃん以外に頭で負けるつもりはないけど、諸葛は私でも荷が重い。

私は、退室しようと背を向けながら話す。

「これ以上は雑談する気はねえな。ただ、私の目的を知りたいなら教えてやる」

「ほう？ それは興味深いですね」

諸葛は大層な目的があると、私に思ってるだろうけどね。

私の目的は今も昔も変わらない。

「——家族を救うこと」

それ以外の命なんてどうでもいいね。

もう1つ目的を付けるなら、キンジが私に振り向いてくれること。

いや、恋してくれることかな？

ともかく、私はそれだけ答えて部屋を静かに出る。

特に言葉を掛けてこないあたり、諸葛は私が交渉に応じないことくらい分かっていただろう。

きつと別の事を確かめようとした。

相変わらず食えないね。

まあ、相手からしてみれば私の方が食えないヤツと思われてるだろうけど。

白野に戻っていると連絡が来る。

敵地のど真ん中で余裕で連絡に出る。

穴が多過ぎるんだよね。

ヤクザって大体は正面から裏切るみたいな感じだったり、抗争とかも正面からみたいなどころもあるから、侵入してどうこうなんてあまりないだろう。

だから、施設の警戒に関しては正規軍とか政府に比べて意識が違う感じはある。

「はっ」

『霧、お前のことだからなにかしてるんだろ?』

キンジからの電話ですぐにそう聞いてくる。

別に私からは連絡してないから、これは問題じゃないでしょ。

以心伝心つてやつかな。

お互いに分かつてるから、それだけで伝わる。

「まあね。それとゴメン、任せてって言ったけど鏡高さんが思ったより意地汚くてね」

『ヤクザだからな。手段は選んでくれない』

「呼び出し?」

『ああ、西池袋の住所だ』

「もう当たりはつけてるし、その気になればキンジが着く前に片付けられるよ」

『俺が囷になる方が確実だろ?』

よく分かってる。

「ヒステリアモードじゃないのに、大丈夫?」

『何とかするさ。それに、お前がいるからな』

「また貸しね」

『分かってるよ。俺は、”お前がいないとダメ”みたいだ』

「っ——」

今のは大分……殺し文句が過ぎるよ。

前ならすぐに軽口返してたのに、今は無理だ……

なんか、悔しいな〜

同時に嬉しいって思ってる辺り、相当に入れ込んでる。

恋ってこんなに戸惑うものなんだね。

「もう一回言ってくれろ?」

ちよつとおねだりしてみる。

向こうは聞こえないフリしてからかかっていると思っただろうけど。

『なんでだよ』

「冗談。さっさと来てよ。潜伏するのも楽じゃないんだから」

『分かってる』

電話が切れてから、携帯を下ろして胸元へ。

冗談じゃないんだけどね……

また屋根の上でしばらく待機していると、何やら騒がしくなってる。

下を見れば、何やらカチコミな様子。

「オラア! どけや、望月さんを返せ!」

と先陣を切って突っ込んできているのは、この間ボコボコにしたレオン。それから後ろには、藤木林と朝青もいる。

騒ぎを聞きつけた鏡高が和風庭園に出てくる。

「なんだい、お前達」

「菊代さん、アンタが攫った人を返せ」

「藪から棒だね。攫ってなんかないよ」

相変わらず、堂々ととぼける鏡高。

しかし、レオンは言葉が続ける。

「喫茶店から張ってたんだ。しらばつくれるな、望月とか言う女がいるだろう」

「そうだ！ 返して、キ……ある人と一緒に平穏な生活をさせやがれ！」

「しらばつくれんなら、無理矢理でも連れ出してやるよオ！」

レオンに続けて藤木林と朝青も言葉をあげる。

レオンに比べて2人は声が震えてるけど。

ヤンキーじゃあヤクザは、荷が重いでしょうに。

しかし、どうやら様子を見るにキンジのために動いてるらしい。

荒くれ者に対して妙にカリスマ発揮するよね、キンジ。

ここで私が手を出しても意味ないね。

そのまま見ると、

「オラア！ 掛かってこいや！」

レオンが素手で奮闘してゐる。

しかし、すぐに――

「おとなしくしな！」

鏡高は部下に命じて銃を持ち出してきた。

流石に銃を持ち出されたら動ける訳がない。

「お前達、誰の差し金だ」

鏡高はゆっくり近付いてそのままレオン達を問い詰める。

「別に俺達が勝手にやってるだけだ。誰の差し金でもない」

男気ってやつかな？ 見てて気持ちがいい堂々さだね。

嫌いじゃないね、そういうの。

そこで私は気付く。

チャンス到来だね。

キンジに手間を掛けさせずに済むかも。

おまけに藍幫に接触させる必要もないし。

注意がレオン達に向いてる内に、リビングの方へと侵入する。

それからリビングの隣の部屋へお邪魔する。

「な、なんだテメエ！」

「カチコミです！」

言いながら、距離を詰めて顎に飛び膝蹴り！

サングラスの男はそれで一撃。

部屋には1人か2人しかいない気配だったので、普通に突っ込んだ。

そして、当たりだったらしい。

小さい寝室みたいな場所には望月がタオルを口に巻かれて、腕というか親指だけ結束バンドで拘束されてベッドに座らせられてた。

私を見て望月は驚いた顔をしてる。

「ひ、ひはのふぁんツ!？」

どうやら私の名前を叫んでるけど、こっちは急いでるからね。

さっさと用件を済ませる。

タオルと拘束を外して、すぐに笑顔で言う。

「さっさと逃げるよ。外にレオンとか藤木林もいるけど、望月さんを助けに来たらしいから3人と一緒に逃げて」

「白野さんは？」

「私も逃げるけど、時間は稼がないとね。ヤクザは手と足が早いから」
 「で、でも……」

「あのね、素人じゃないんだよ。あれぐらい何とかなるから。むしろ望月さんが残ると邪魔」

キツめに言っておかないと、いらん心配で足を止めそうだからこれぐらい言っておく。

「閃光弾を合図したら投げけるから、目と耳を塞いで4人で逃げて」

コクコクと望月は首を縦に振る。

そのまま望月の手を引いて、和風庭園を目指す。

そこには、

「オラア！ さっさと吐けや！」

「ゴフツ！」

ヤクザに蹴りを入れられてるレオン、銃床で顔面を殴られてる藤木林と朝青がいた。その光景に、望月は「ひ、酷い」と口を押さえてる。

それからレオンがこつちに視線を向けた瞬間、チャンスだね。

ヤクザ共はこつちを見てないので、目と耳を閉じて欲しいってジェスチャーをする。

何とか気付いてくれたらしい、それから見えるように閃光^{フラッシュユッケレネード}弾を見せる。

それからピンを抜いたところで、

「目と耳閉じて」

そう言うつてすぐに鏡高の前に落ちるように投げる。

「目と耳を塞げ！」

レオンも叫んだ瞬間に、バキイーン！ と閃光と音が弾ける。

「な、なんだ!?!」「クソお、目がああ！」

「走って！」

ヤクザ共が混乱してる間に望月の背中を押す。

「おらああ！」

レオンも目の前のヤクザを殴り倒したところで、

「藤木林くん、朝青くん！ 逃げて！」

望月と共にレオンは2人をすぐに立たせて走り去っていく。

「チツ、お前達——」

鏡高が指示を出す前に、私はM500で鏡高の足元を撃ち抜く。

同時にGLOCK18Cを抜いて、

「動かないで。全員を未成年誘拐、暴行、銃刀法違反で逮捕する」

安全装置を外しながら罪状を叩きつけて脅す。

誰も動かないで、鏡高だけがゆっくり振り返る。

「白野……」

「悪いね。デートの邪魔させてもらうよ」

私の一言に鏡高は珍しく、内心が穏やかじやなさそうな顔をしてる。

「好きな人には私もイタズラしたくなるけど、これはやり過ぎたね」

「たかが喧嘩とお茶してただけで逮捕するつもり？」

「この現状を見て、しらばっくれるのは胆力があるね。」

繊細な癖に駆け引きには凶太いのは知ってたけど。

「あつそ。君がどうとぼけようと勝手だけど、自分で格を落としてキンジに釣り合うと

思ってるの？」

「……………」

これには鏡高も思うところがあるのか、黙ってしまふ。

「格を上げて出直しなよ。キンジも似たようなこと言っただんじやないかな？」

予想だけど、キンジはしれつとそういうこと言うからね。

それにヒステリアモードのあの時ならなおさらね。

私の言葉に鏡高は胸を痛めたのか、悔しそうに下を向いて胸を両手で押さえる。

「つて、出直すのは私なんだけどね。流石に帰らせてもらうよ。改めて挨拶させてもら

うね」

銃を向けたまま、家を通って帰ろうと思つて屋敷の方へと下がる。

ふく、キンジが来る前に片付いてよかった。

藍幫なんかに接触させたくなかつたしね。

ドクン……！

突然に胸が高鳴つて、締め付けられる感覚。

さ、最悪……体調管理はちゃんとしてるのに。

「う、くう……」

我慢、出来、ないッ……

もうちよつとで、一件落着だったのにッ。

銃は離さないけど、痛みにうずくまるしかない。

膝について、息が荒くなる。

なん、で……

この痛み、色金の共鳴現象——

……まさか。

「すみません、何かありましたか？」

後ろから諸葛が悠然と歩いてくる。

「おや、初めましてですね」 白野「さん」

そして、私に今気付いたフリをする諸葛。

……やっつけてくれたね。

冷や汗を出しながらも、私は笑みを浮かべるしかない。

久々に、殺意を抱くよ。

110：騒がしくも楽しい非日常

望月達が逃げて、私が時間稼ぎをと思った。

無事に彼女を逃がすのがキンジにとつての望みだったから、いい女である私はそういう風に振舞ったんだけど。

ついでにまた貸しにしようとも思ってた。

だけど、ものの見事に嵌められたね。

「コウ猴がいる時点でこの可能性を考えておけばよかったよ。

しかし、私をこうまでしてお願ひしたい交渉は何だったんだろうね？」

最初は藍ラン幫の内部問題の解決に手を貸して欲しいのかと思っただけど、どうも本題はそこじゃないっぽい。

むしろ何かを確かめたかった？

もしかすると……諸葛は“白野”と呼んだけれど、本当は私が“誰か”に気付いてる？

いや、私の中にある“モノ”には気付いてるけど“何者”かまでは辿り着けてない。

そんなところかな。

うーん、ポーカーフェイスが上手いから読みにくい。

年季で言えばあっちが上だからね。

私はさつき突撃した無駄に広いリビングに念入り腕と足先を拘束されて、武装も解除されてフローリングの床に座らされてる。

周りにはさつき虚仮こけにされたことに不愉快そうな雰囲気きふきのヤクザ達。

そして、私を見下ろすのは諸葛と鏡高。

一方は読み取れない表情で、もう一方は不機嫌まげそうな表情で。

どっちがどっちかは言うまでもないけどね。

諸葛がやれやれ、とばかりに口を開く。

「出来れば遠山君には悪印象を与えずにこちらに来てもらいたかったです、これも致し方ないですね」

「そう思うんなら放して欲しいね」

「いえいえ、そういう訳にはいきません。人材の勧誘は優先事項ですので」

「私を解放した方が交渉しやすいと思うんだけど？」

「交渉の机に着かせることに意義があるので」

諸葛らしいね。

つまり同じ机に座ってしまえば、あとはどうにでもなると。

確かにキンジじや分が悪いよね……この手の人間は。

「ですので、すみませんが丁重にお願いします。貴方も愛しの人に嫌われたくはないでしょう?」

「……………」

諸葛の言葉に鏡高は黙ったまま。気に入らなさそうな目をしてるよ。

嫉妬でもしてるんだろうけど、その感情はお門違いだと私は思うんだけどね。

まあ、でも……恋を抱いてる人はそんなものだよね。

愚かだと分かってても、冷静ではいられない。

その点だけ気持ちちは分かるよ。

私も”同じ”だからね。

とは言え、私は分かっても人の色んな一面を見てみたいから……たとえ好きな人でもね。

憎まれるってことは、それは私に気があるってことだし。

より鮮烈であれば——私を追い掛けてくれる訳だからね。

犯罪者と探偵。まるでロミオとジュリエットだね。

立場は違う。けど追い掛けずにはいられない。

つまりは、私に恋してくれてると言っても過言じゃない気がするし。そう考えると、やっぱり今後が楽しみだよね。

ピンチなのに想像すると思わずドキドキする。

もつと、キンジも私を恋秘しにきてくれなかな？

甘い言葉で来てくれるなら、なお嬉しいんだけど。

「それでは、私はこれで」

そこで諸葛は去っていく。

残されたのは、鏡高とヤクザだけ。

諸葛……キンジに悪印象を与えたくないとか言っておきながら、私と鏡高だけに意味が分からない訳ではないでしょうに。

それとも人の心情を読み取るの上手なのに、感情は考慮しないのかな？

そんなことを考えながら鏡高とお互いに視線が合つて、

「それで、私をどうする？ ヤクザらしく落とすし前でもつける？」
軽く挑発する。

しかし、鏡高は鼻を鳴らしてすぐには乗ってこない。

「白野……中学の時からそういうところが気に入らなかつたわ」

「そう思うんなら、キンジに対して別のアプローチすればいいのに」

「アタシはそう振舞えない」

「諦めてるだけでしょ。それともヤクザだからとか理由つけて逃げる？」

「……………」

その一言に鏡高は黙る。

それから急にホスト系のが前に出てきて、

「お嬢ちゃん、ちよつと黙ってよーね」

軽い感じで言いながらいきなり蹴りをかましてきた。

初動で分かってたから何とか横に転がって回避する。

気の短いことだね。

それとも、俺は忠実な部下ですよアピールかな？

組長を舐めるなっで感じて。

「お前達、やめな！」

私に手を出せばそれこそキンジに嫌われることが分かっているのか、鏡高は怒声を上げる。

その言葉にホスト系は面白くなさそうな顔だ。

「でも、姐さん。落とし前はつけきそうよ〜」

「向こうが丁重にしな、と言ったんだ。手を出すんじゃないよ」

その言葉に鏡高に見えないよう何人かがアイコンタクトをし始める。

「姐さん、ご友人が到着したそうです」

「分かったわ。お前達、絶対に手を出すんじゃないよ」

部下の一人がおそらくキンジの到着を知らせにきた。

鏡高は残つてる連中に釘を刺すけど、どう考えても無理だろうなく

それから鏡高が去れば――

「姐さんに手を出すなどは言われたが、足を出すなどは言わなかった――なッ！」

「ぐッーえほッ」

別の男からお腹に衝撃。

まあ、こうなるよね。

大して鋭くはない蹴りだけど、衝撃を逃げす手段もない、からッ。

おまけに横に転がれないよう別の男がサッカーボール止めるみたいに足乗つけてるし。

――このあと私がどうなるかなんて、大体想像できるからどうでもいいけどね。

それよりも、キンジが私をどう心配してくれるかが気になる。

少しは私をもう少し大事にしてくれるといいな……

なんて思いながらも、ヤクザ風に言うなら落とす前をつけさせられる暴力が始まる。

◆ ◆ ◆
俺は呼び出しを受けた、菊代の示した住所へと目指す。

その途中――

あれは……萌?!

それに顔がボコボコになったレオンに藤木林ふじぎばやしに朝青あさおも、並走している。

「萌、無事でよかった。それにお前ら……」

萌は無傷っぽい、他の3人は打ち身や顔を殴られたような跡が酷い。

だけど、俺を見て3人は誇らしそうに笑ってる。

「へへ、みつともねえ姿だが拳銃チヤカなしでやってやったぜ」

「すみません、キンジさん。みつともねえ姿見せる前に何とかしたかったです……」

レオンは勝ち誇ったように、朝青は申し訳なさそうに言う。

でも、なんでそんな無茶をしたんだ。

「そんな顔しないで下さいっすよ。これは、俺達が勝手にやったこと……それにキンジさんは、平穏な生活を送りたがってた。だから、これは俺達なりの迷惑かけたケジメっす」

同じように青い痣を目の上に作ってる藤木林が痛々しくも笑ってそう語る。

「だが、ゴミはゴミだったってことだよな……」

「それは違う！ お前達は誰かのためになろうと！ 自分じゃなく他人ひとの為に戦った！ 恐れも飲み込んで立ち向かうなんてこと、クズには出来る事じゃない！ だから言つてやる、お前らは人間だ。もし、お前らをバカにするヤツがいたら俺がブチのめしてやる！」

俺は——武偵の言葉しか知らない。

だから、倒れた武偵の仲間に語り掛けるように俺は言つてやる。

そして同時にこれは俺に言い聞かせてる、謝罪だ。

俺は力を持つ者には責任があるのだと、学校の屋上でコイツらに語つた。

だけど、それを俺は実行できなかつた。

銃だけを持つ者が責任を持つんじゃない。

”力ある者が責任を持つ”んだ。

それを今、俺は悟らされた。

武偵高を出て、外の世界で初めて。彼らに。

「遠山君……白野さんを、早く白野さんを助けてあげて！」

ハッ、とした感じで萌は泣きそうな感じで声を上げる。

「……霧？ ——ッ」

そうだ、萌の言葉で俺は気付く。

霧は潜入していることを言っていた。

俺の頼みを聞いてた霧がどうするかなんて、分かりきったことだ。

俺がわとり囮になってから萌を救うつもりだったけど……どうやら、レオン達がヤクザの目を引き付けてる内に萌を救ったんだろう。

現状を思えば、それが妥当だ。

チャンスがあれば見逃さないのが、あいつのやり口だ。

そして、霧ならきつと無事に逃げてる——

「どうして分からないけど、霧さん……途中で胸を押さえて倒れてた。最後に振り返ったら、そんな感じだったから」

「……!?!」

萌の言葉に俺は胸が跳ねあがる。

俺は気持ちはやが逸るのを必死に抑えて、自分の背後に声を掛ける。

「——かなめ」

「あは、バレてたね」

などと、道の角からセーラー服姿のかなめがスキップして現れた。

尾行してたのは気付いていた。ただ、かなめは隠す気もなかったがな。

「時間がない。4人を頼む。3人は病院に連れてってやってくれ。あと、銃べしの整備、あり

がとな」

端的に俺が気付いた事に対してお礼を言う。

「お礼を言ってる暇もないんでしょ？　しょうがないから、ここは任せてよお兄ちゃん」

尾行してたかなめに俺は、お礼を言つてすぐに駆け出す。

愛らしくかなめはウインクしてくれるがそれに応える時間も惜しい。

懐かしい事件が起きた時の感覚。

心は焦るが、頭は冷静に。

そんな懐かしい感覚に戻つて行くのを俺は感じる。

霧、霧ツ……！！

頼むから無事でいてくれ。

まだ俺は何もお前に返しちやいないし、お前の家族を救う助けに何もなつちやいない

んだ。

「いんげんは」

古風なデザインの割には半自動だったドアが開くと……

例の改造和服を着て、おめかしをしてる菊代が現れる。

だが、俺はそんな余裕そんな菊代に穏やかじゃない口調になる。

「悪いが、挨拶をする気分じゃない。やってくれたな、菊代」

「……ッ。——安心しなよ、手を出しちやいないよ」

俺の劍幕に菊代は肩を震わせたが、すぐにいつもの斜はすに構えた顔になる。

それからついてこいとばかりに、俺に背を向けた。

雪の積もった広い和風庭園を歩き、一匹一匹が数百万はしそうな錦鯉がいる池を通り過ぎる。

そしてその向こうの——豪邸の玄関へ、入っていく。

歩きながら見えたガレージには、いくつもの高級車、大型ハイルバイク、牽引車に載せられたパワーボートなんかゴロゴロしていた。

「随分とおつかないね。そんなに、あの女が大事なの？」

「当たり前だ」

その言葉に菊代は余裕がなさそうな表情をする。

「そう。でも、嫌われたくないのは本当。だから手を出してない」

「萌さくらを攫さらっておいてか？」

「お茶しようって言っただけよ」

どこまでもシラを切るような菊代に俺は、段々と心がさらに穏やかじゃなくなる。

初めて、女性を憎むことになりそうだ。

そんな俺の雰囲気は菊代は、これ以上は俺の神経を逆なでると思つたのか黙る。壁に大型水槽が埋め込まれている廊下を抜けて、一〇〇平米へいべいはありそうなりビングに案内された。

壁には見事な油彩画、柱には青磁せいじの壺、それに阿修羅像。テーブルには見事なガラス細工のランプ。

まるで美術館みたいな感じだが、これらは全てヤクザなりのリスクヘッジ。

銀行の口座や金庫を押さえられた代わりの資金源。

つまりは現金を純金に換えるみたいな感じの代わりの資産だ。

だが、見るべきはそんな芸術品じゃない。

リビングのあちこちからこつちを見る、ヤクザたちだ。

まず、見覚えのある幹部……

カチツとしたスーツを着た、東大卒のノツポがソファーに腰掛けてる。

さらに部屋住みらしい黒服の組員が5人、全てのドアの脇で――

アサルトライフルを抱えて立っている。

(カラシニコフAK-47が、5丁も……)

これは、厳しいな。

旧ソ連で開発されて、中国でもライセンス生産されてたはずのソレは、ずば抜けた銃

じゃない。

命中率も悪いし、最近のモノに比べれば性能を劣る。

だが、実用性に長けたAKは割と悪環境でも作動することが有名で7.62mm弾を使用するパワフルな銃だ。

俺の拳銃と比べたら火力が違いすぎる。

素の俺でどうこう出来る状況じゃない。

「……裏銃ウラチヤカだな？」

愚問だが、武偵として聞いておく。

ショットガンなんかよりは通りやすいが、アサルトライフルは銃検じゅうけん——銃器検査登録を通りづらい。

1丁、2丁なんてレベルじゃなくここまで揃そろっているということは、公安の認可を通ってない違法銃だろう。

中国は違法銃密輸の王道ルートだ。

それと繋がりがある菊代は——

「まだ登録してないだけよ」

答えるのもバカバカしいと言った感じで俺に答える。

「じゃあ撃たないのか？」

「どうかしら」

などと、東大卒も吹き出すようなやり取りをしていた俺と菊代の視界に——
手足を拘束された霧が連れられてリビングの床に捨てられる。

「霧ツ?!」

すかさず駆け寄ると、俺に気付いた霧はいつもみたいに笑う。

「あはは……へましちゃった」

それから俺は気付く。

外傷はないが、足や少し見えたお腹に痣があるのを。

その姿に俺は怒りが再燃する。

「菊代、手は出さないんじゃないのか?」

「——ツ! お前達ツ!!」

俺の言葉に菊代は声を荒げて、周りのヤクザを恫喝する。

その様子を見るに、菊代は本当に手を出すつもりはなかったらしい。

しかし、周りのヤクザはヘラヘラと笑う。

「姐さん、手は出してませんよ。ヤクザを舐めてたんでちよつと”ヤキ”をいれただけです」

さっきの東大卒が冷静にそう返す。

「勝手するんじゃないよ！ お客さんが不快に思われたらどうするんだい！」
「黙ってりやバレないですよ」

東大卒の指示らしく、菊代は完全に蚊帳の外だったらしい。

だが、それでも……俺はその霧の姿に憤りを覚える。

「無茶しやがって」

「無茶じゃないと思っただけだね。貸しを作るつもりだったのに……ッ」

軽口を叩く霧は、喋ってる途中に痛みに体を震わせた。

相当に痛みつけられた感じだ。

「心配させるつもりじゃなかったのに……ゴメンね」

いつもみたいは何てことはないと言いつつ、霧は謝罪する。

お前は本当に、いつもそうだよな。

俺が間違ってるのに、俺を責める訳でもなく笑って。

いつも、いつもだ。

「菊代、これは暴行罪だ。どう言い逃れも出来ないぞ」

「……………」

目の前の事実には菊代も得意のシラを切ることも出来ないらしい。

何とも言えない表情をしてる。

「鏡高さんは関係あるけどないよ。しいて言うなら鏡高さんを裏切るつもりで任侠の欠片もないそのノツポとホストなヤツが主軸だろうけどね」

霧は菊代をフォローするように言葉を掛けた。

だけど同時に菊代にとって聞き捨てならないことを言つて、菊代は東大卒とホスト風を睨む。

「本当かい？ お前達」

「姐さん……勘弁して下さいよ。裏切るなんて出まかせです」

しかし、東大卒は嘘だと言い張ってる。

仮にそうだとしても裏切りだと素直にここで言う訳はないだろう。

「へー……キンジが来てふん縛れば、鏡高さんは用済み。そんなことを私は庭で聞いた気がするんだけど、思い違いだったかな？ 私が出まかせ言つて混乱でも狙ってるって見方も出来るけど、いちいち小物相手に出まかせ言うのもアホらしいのに……茶番に付き合うつもりもないんだけど——う”ッ!!」

霧が口からいきなり空気を吐き出すような苦悶の声。

同時に聞こえたのは、東大卒の近くにいた黒服がAKを撃つた銃声。

見れば、硝煙しょうえんが銃口から出ている。

「ぎ、霧！」

「何をやってるんだい!? 撃つんじゃないよ!」

菊代は銃口を遮るように横入りし、黒服に怒るように目を向ける。

俺はそれどころじゃなく、霧の撃たれた腹部を見る。

防弾制服で貫通はしてないものの、霧は声を出せずに悶えている。

「——ッは。あ……煽り過ぎちゃったかな?」

「おい、大丈夫か!」

「何てことはないよ。武偵だし、撃たれるのは慣れてるでしょ」

俺を心配させないように振舞ってるのか、霧はいつもみたいな軽口。ウィンクして笑顔まで見せる。

「バカ……この状況で相手を煽ってどうする」

「殺されないなら煽って情報1つくらいボ口を出して欲しいからね。まあ、ほとんど言ってるようなものだけだ」

俺の言葉に霧はいつもの調子だ。

少しは自分を顧みて欲しいもんだ。

「ところで、姐さん。銃は持ってますか?」

「いいえ、持っていないわ……」

東大卒が菊代に歩み寄り、警戒しながらも菊代は答える。

「じゃあ大人しくしておいてください」

東大卒の言葉と同時に、一部の銃口が菊代にも向く。

「お前達……ッ」

「悪いな、姐さん。ここにボウヤが来た時点でアンタは親分じゃないんだ」

き、霧の言う通りになりやがった。

クーデター……かよ……ッ。

菊代との交渉による離脱ルートの子が完全に途絶えた。

「知らないとは言わせねえぜ。女、それもガキが組長なんて俺らがどんだけ笑われてきたか。あーあ、本当に今まできつかったよー」

「でもまあ、姐さんが役に立たなかつた訳じゃないですよ？ それでそれで警察ヒネの目も緩くなつたし……先代は偉大な方でしたしね。その娘つて事シノギで仕事をくれた古い知り合い連中もいました。でも、そのセンも要らなくなつたつてことです」

東大卒とホスト風はそう順番に語る。

そのまま東大卒は細葉シリガロ巻に火を点け、フーツとその顔に煙を吹きかける。

それから菊代と俺は霧と同じように縛られて仲良く隣に座らされる。

「義理人情 だけ” じゃロクなことにならないね。義理も人情も欠片も感じてないなら 尽くす” 義理” も助ける” 情” もない訳だし」

霧は現状を呆れるようにそう漏らす。

その言葉に俺は今までの違和感の点が1つに繋がった。

そうだ……このヤクザ共は”素直に従いすぎてた”。

あの中華の高級レストランからだ。

煙草に火と点けようとしていた東大卒も、席を外せと命令された時も。

俺の実力差を見抜いたのだとしてもあまりにも菊代を守らなすぎた。少なくとも部外者と2人きりなんてことはしない。

席を外したとしても、誰かは菊代の近くに控えているはずだ……監視すらもなかった。

つまりそれは……あの時点で大事じゃなかったのだ。菊代が。

それよりも、よく見ていたのは――

「まあ、最後に姐さんには調子には波にあるみたいですけど、この危なっかしいボウヤー―遠山君を釣ってもらいました。私達だけじゃ拉致れない器の子ですからね。いやあ、猴先生、喜びますよ」

中国側が欲しがってる――戦闘員の……俺……！

くそ、相変わらずの後手後手だ。

後の祭り……レストランの時にヒステリアモードでその違和感に気付いていた。

でも、それを俺は軽視してた。
未然に防げてたのにまた俺はッ。

「……今回は私もミスったけど、キンジも相変わらず詰めが甘いね」
マジでな。

俺は霧の言葉に縛られた腕に力が入る。

「ああ、別に責めてる訳じゃないよ。私が言ってるのは別の話。ところで、いつまで隠れてるの？ ヒーローっぽい状況だよ」

そう虚空に向かって話す霧。

なにやってるんだ……視線の先に誰もいないぞ。

お得意のブラフか？

「——おい兄貴」

と思つたが聞き覚えのある声。

その姿なき声に飛び上がったヤクザ達は、幹部も組員も辺りをキョロキョロ見回して
た。

「き……気付かなかつたぞ。ジーサード。まだ尾つけてたのか」

「兄貴、かなめばかり見てたろ。しかも、なんで尾行されてた兄貴じゃなくてそつちの
胡散臭い女の方が気付くの早いんだよ」

と、少し拗ねたような声で言う透明ジーサード。

「さーて……なんででしょうね？ 私ってばミステリアスだから」

胡散臭いと言われた霧は軽い感じで返す。

自分でミステリアスって言うか、普通。

確かに霧は割と最初からミステリアスだらけだが。

「で、どうやってお兄ちゃんを尾行してたかな？ ブラコンエリート様は」

「電線の上を歩いてただけだよ。あと誰がブラコンだ。兄貴、やっぱりコイツだけその

ままヤクザに引き渡そうぜ」

お前からこんな時にコント始めるんじゃないやねえよ。

「で、菊代を何で優先するんだ？」

などと透明人間状態の弟と語ってる最中、菊代がふわふわと浮いていく。

ちなみにケーブルとか拘束は俺も霧も既に切れてる。

動けるぞ。とりあえず。

「美しい」からな。剥がして、いただくぜ。あと今日は寒い。運動するにはちようど

いいだろ」

などと――

ジーサードは、窓際まで運んだ菊代のケーブルを切り、和服の帯を……

って、なんで解いてんだよ!? シュルシュルつと!

「えっ……なにこれっ……いい、いやっ……!」

「あーれーってやつ」

霧の言うとおりに、まるで時代劇の悪代官がやるみたいな感じの空中バージョンで菊代が剥かれていく。

そのまま真っ赤になってる菊代は、空中で巻物の芯が放り投げられるように菊代が飛び込んでくる。

「きゃあああ!」

「うおッ!」

どしんっ!

俺に、ぶつかつた。菊代が。

やたら高そうな、真っ赤な刺繍の向こうが透けてるタイプのランジェリー姿で……

これには一同も心臓を破裂させそうなくらいに驚いてる。

——ドクンッ——

だが一番心臓に来たのは、俺だ。

俺はランジェリーというものに弱い。

これは菊代も知ってる事で、なぜ彼女が着ていたかは考えたくないが——
「……節操がないね」

そんな俺の変化に目敏く霧が呟いてくる。

まあ、確かに赤と黒と白に俺は弱い……最近では、金色も。

よく考えたら何色でもいい気がしてきた。確かに節操ないのかな俺。

「いい、いやっ!」

霧が言っていた『あーれー』的な町娘のシステム、その空中バージョンで下着姿にさせられた菊代は、要所を手で隠そうとしてるが……その全身を手で隠しきれぬわけもない。

「もういい? なってるなら片付けちゃうよ」

霧は素早く立ち上がり、脅威度が高いアサルトライフルを持つてる2人に突撃。

銃口を外して、背面で脇にアサルトライフルを挟み、パパーンと何発かそのまま当たらないように発射。

当然、ヤクザはその弾丸に怯む。

素早く頭で背後のヤクザの顎をヘディング、弾倉を抜いてそのまま弾倉をもう一人に投げつけてもう一度怯ませる。

「ほあちゃー!」

怯んだそいつにそのまま跳び蹴りで霧はカンフー的な叫びと共にヤクザの顎を蹴り抜いた。

「もう少しこの西陣織、堪能させろよ」

ジーサードが明滅する蛍光灯のような音と共に現れて、2人を常人では捉えられない拳で薙ぎ倒す。

レオン達から俺経由でもらった特攻服のコートをはためかせて、プロテクターと色眼鏡のようなH M Dをかけ、完全武装もしてやがる。

まあ……いいや。今日に限っては許す。それを着て戦え。

そして菊代は、さっきまで子分たちだった組員とジーサードを見回している。

その肩が、小さく震えていたので俺は優しく語り掛ける。

「……菊代。俺が前に言った事は、正しかっただろう?」

それからその乱れた髪を整えてあげながら微笑んでやった。

「——ヤクザは信用できない、って」

ようやくそこでヤクザ達は状況に対応し始めた。

「デメエー!」「このガキ!!」「どこの組だああ!」

複数のマズルフラッシュと銃声。

しかし、ジーサードのプロテクターは貫けない。

逆に、バカンスッ！ と次々にAK-47が破壊されていく。

それはジーサードが『捻転』——俺の『螺旋』と酷似した技でUターンさせた銃弾が、ヤクザ達の銃を破壊していく。

戦い慣れてるな、ジーサードは。銃の弱い部分、トリガー周りや弾倉の付け根を的確に破壊して射撃機能を奪っている。

「なってる」みたいだな、ジーサード」

「ならなきや失礼だぜ。ルノワール、エミール・ガレ、湛慶。ちよつとした美術展だぜ」
リビングの油絵、ランプ、仏像、数々の美術品を指して嗤うジーサード。

そのままドアをその周囲の壁ごと蹴破って、窓から見えていた庭に降りていく。
しかし……美術品なら何でもいいのか。困った病気の持ち主だな、お前も。

——俺よりは健全だろうけど。

「あの女で、兄貴もなれたんだろ？」

「ああ。ある種、焼けぼっくいに火が点いた形だな」

と、俺は……

菊代を庇いつつ、硝煙のする室内から庭へ避難させる。

「こんな討ち入りみたいな大立ち回りすることになるとはね」

あとから降りて来た霧は、やれやれとばかりに眩く。

それから目を細めて、

「落とし前はつけないとね」

やや殺気が含まれた鋭い目をした。

思わず、ちよつと恐く感じる。

最近、妙に不機嫌だつたり情緒がおかしい気がするが……気のせいかな？

「頼むから、武偵法に触れることはするなよ」

「しないよ。今までそんなこと私がしたことあつた？」

「まあ、そうなんだけどな」

少し釘を刺したが、杞憂だろう。

取りあえずはこの状況の打開だな。

◆ ◆ ◆

ヤクザ達に囲まれての大立ち回り。

予定ではもう少しスマートに事が終わる予定だったのに、諸葛達のせいで計算が狂つた。

「こ、殺せ！ たつた3人だ」

インテリ系のノツポが小物つぽいセリフを吐くと、そろそろとヤクザが出てくる。

手には短機関銃マシンガンやら散弾銃ショットガンやらを持って。

うーん、50人くらいかな？

でも射線の考慮もあまりされてない。

練度が低いのが見て取れる。

だけど数が多くて鏡高を連れて逃げるには、骨が折れるかな。

装備がなくて丸腰だし……癩だけど、”助っ人”頼みかな。

キンジも気付いてるみたいだし。

「万事休す、かな？」

「……ああピンチだ。お祈りでもするか」

「お祈り、ね。あの星に？」

「ああ、あの星に」

私が示す星を見て、キンジは肯定する。

お祈りするなら流れ星とかだろうけど、アレは星じゃなくて”弾丸”って形容してもいいと思う。

ジーサードも同じように一瞬見上げたところで、何が来るのか分かったのか、やれやれとした表情をしながらすぐにヤクザ共に意識を向ける。

そしてすぐに聞こえた。

——バカキンジいいいい!!

というアニメ声の怒声。

「家出がバレたか。結構、私は上手いこと誤魔化してたつもりなんだけどね。でもま、結局はキンジの事だからこうなる気もしてたけど」

「俺もだよ……いつになったら平穏な日常は来るのか」

「何言ってるの？ 平穏じゃなくてもこれが”日常”でしょ」

と、私はキンジと軽口を言い合う。

もう一度見上げれば、満月を背に二丁拳銃ガバメントを持つてる神崎。

ホバー・スカートという飛翔ユニットで滞空してたかと思えば、すぐに急降下。

庭の上で妖精のダンスのように飛び回り、銃声が鳴り響く。

的確にヤクザ共の銃を撃ち落とし、葉莢が雪のように落ちていく。

アサルトライフル、ショットガンと言った高脅威な銃器から叩き落していく。

一通り無力化したかと思えば、私とキンジの前に降り立って銃をクルクルと回してガンマンのようにホルスターに収めた。

「会いたかったわよ、キンジい。理由はあとで色々と聞かしてもらおうからねッ……」

それから二刀を構えて接近戦の態勢になりながら、背を向けたまま憤怒の声で言う。

「俺に会いたかった？ 奇遇だね」

「——何がよ！」

「俺もアリアに会いたかったよ」

優しい声音でそう語るキンジ。

「だけど、私は思わず聞く。」

「本当かな？ 一番、避けてた気がするけど」

「今、一番会いたかったのは紛れもないだろう？」

それは助つ人的な意味でしように。

「だけど、キンジは心の底から言ってる。」

「？ じゃないけど、本音でもない。」

「私もだけど、キンジも悪女ならぬ悪男だよ。」

「さて。アリアは、誰から聞いたのかな？」

「匿名の電話があったのよ。機械が連絡文を読み上げるような感じだったけどね」

「そんな事するのは理子くらいだろうね。」

「まあ、助かったと言えば助かったけど私からすれば余計な事って感じだけど。」

「妹の好意を無下^{むげ}に扱^むう訳にもいかない。」

「心の中で感謝はしておくよ。」

「ていうか霧とキンジ、あんた達何やってたのよっ」

「ちよつと社会見学をね」「私は仕事でたまたまだよ」

「社会見学に仕事ね……霧は胡散臭すぎるわ」

わーお、信頼されてるね。

「ひ、酷い。私はこんな真面目でどこかの誰かさんみたいに単位を落としたりしないのにつ」

「さり気なく俺をけなさないでくれ」

私の言葉にヒステリアモードとは言え、傷付いてる様子だった。

「じゃあ一般市民やってたの？ あんた」

「そのつもりだった」

と、アリアの問い掛けにキンジは少しだけ息を吐く。

そういうってことは、何となく一般市民は向かないとどことなく感じてたみたいだね。

「さて、積もる話もあるけどここは任せていい？ 私、丸腰だし鏡高と一緒に退避してるよ」

「なら返すぞー！」

と、ジーサードが遠くにいながら銃を投げて来た。

私のグロックとリボルバー、それらを受け取る。

「さっさと行きやがれ。俺なら余裕だが、守りながらなのはやりにくい」

「それはどうも……それじゃ、安全なところまで行ったら戻って来るよ」と、言い残して私はそのまま鏡高さんを連れて私は退散する。

庭を抜けて、豪邸の門を抜けて道路へ。

ここまでくれば大丈夫だと思つて、私は足を止める。

「さて、さつさと信頼できる連中のいるところに行つて大人しくしておいてね。裏切られたつて言つても、全員じゃないはずでしょ？」

「……白野、アタシ……」

鏡高は何かを言いたそうだけど、興味がないので私は背を向ける。

そもそも自業自得なんだから、落とし前は自分でつけて欲しいね。

泣きそうな声音。

今更になつて、自分のしてきたことを後悔し始めてる。

「……遠山に嫌われた、わよね。こんなことして……振り向いて貰おうなんて」

足を止めて耳だけ傾ける。

一息吐いて、

「ふう……今更だよね」

「だって、アタシ……分かんないんだものツ。好きな人に振り向いて貰う方法なんてツ

!! 今だけじゃなくて中学の時から酷いことしてきたのに、今更どんな風に振り向いて貰えばいいかなんて……」

……それこそ簡単な話で私はアドバイスしてきたつもりだった。私がいづも言ってること。”素直”になればいいって。

——それはそうと、もういいかな……”彼女”は。

キンジにとつてもそう思い入れがある子ではないと思うし。

ヤクザなんだから、不慮の事故なんていくらでも起きる。

私は振り返って、

「だったらやり直してみたら？ それに、キンジがそんな程度で見限らないよ」

笑顔で前向きな言葉^{ウツ}を掛ける。

「やり、なおす……?」

「そう。ちよつとだけ素直になつて。キンジを思つて行動が出来るようになれば自然と好かれるとおもうよ。それじゃ」

と、私はそれだけ告げて駆ける。

取り残された鏡高は、何かを考えるように道の上で空を見上げた。

それが少しだけ見えたところですぐに私は前へ向く。

さて、楽しみが増えたことだし……私も落とし前をつけないとね。

1111：さようなら日常

私は屋敷へと戻り、銃を持って角をクリアリングしながらキンジ達との合流を目指す。

もう終わってるかな。

と、思いつつ庭まで戻れば哀れかな、ワイヤーで足を縛られたヤクザ共が虫のように転がってる。

「惨めだね。年端もいかない子供連中に負ける大人……しかも裏切った挙句に成功もしていない」

思わず無意識に煽っちゃった。

でも、仕方ないよね……私を足蹴にしてくれたんだから。

殺さないだけマシに思っただけ。

まあ、何人かちよつとストレス解消に消えて貰うリストには入れるけど。

どうしようかな……ウルスラちゃんに協力してもらってゲームでも企画しようかな？

どこぞのサイコホラー映画みたいな感じで。

ま、それは置いてどうやら場面はクライマックスらしい。

邸宅の前で泡を吹いて倒れてる東大卒の横で、今まで隠れてたらしいホスト風が——
「お、お前ら一体何なんだよ……！　お、俺は今、副組長だぞッ！　分かってんのか!？」
膝をガクガクさせながら神崎とジーサード、あとから来たらしいキンジを威嚇して
る。

私はそのホスト風の横に回り込む。

左右に振るように構えながら持つてるのはキンジのベレッタ。

あれは金欠のキンジのだから破壊できないね。

まあ、最悪は破壊することも視野に入れないとだけど。

キンジも先に合流してらしいけど、ホストは私には気付いてない。

どうせ防刃・防弾の服だろうし撃っても問題ない気がする。

グロツクを構えて単発セミオートで撃てるように備える。

「帰れエー！　殺さないでやるからもう帰れよオー！」

無様に喚くホスト風は右往左往。

まあ、どう考えても誰を撃つてもすぐ対処されるのが目に見える。

そこでキンジがホスト風に歩み寄る途中で私は気付いた。

「……なんで戻ってきてるの」

思わず呟く私の視界の端、キンジの背後に望月と鏡高がいるのが見えた。

「——と、と、遠山君を撃たないで！」

勇気を振り絞って叫び出てきた望月の手にはオートマチック拳銃。

しかもベルギー製のブローニング・ハイパワー。

弾倉の構造上、握り易くて軽量の銃で女性に人気があつたはず。

自分でもキンジの何か役に立てないか……そう考えてしまったんだろうね。

無力な時ほど、何かをやらずにいられない。

ああ……なんて哀れで、いじらしい。そういうの大好きだよ。

鏡高も同じような感じだろうね。

キンジにやってきたことへの罪滅ぼし。あとはチャイニーズマフィアに対しての落

とし前つてところだろう。

でも、残念ながら私は別件の方で忙しいんだよね。

望月と鏡高には悪いけど……そう簡単にやりたいことはやらせない。

そのまま遠慮なく撃つ。

響く銃声——誰もが望月が撃つたのかと反応して、望月を見る。

でも、見られてる当の本人は不思議そうな顔だ。

同時にホスト風が痛みに膝を屈する。

銃口が完全に下を向いて持つ手が緩んだ瞬間を見逃さず、私は駆ける。

走って来た私にホスト風が気付くけどもう遅い。

銃を上げられる前に、左足の蹴りで手を払い、そのまま右の裏拳で顎を撃ち抜く。

「うぐ……あ」

脳震盪のうしんどうを起こし、そのまま倒れそうになったところでキンジのベレッタだけを倒れる

前に奪い取る。

「ほい。返すよキンジ」

そのまま、薬室チエンバーの弾だけ抜いてキンジに投げ渡す。

受け取ったのを見て、弾も返す。

「相変わらずいいタイムリングだ。おかげでヤバい状況にならずに済んだよ」

キンジはお礼を言う。

ヤバい状況というのは複数射撃線状況のことだろう。

複数人、誰もがお互いに銃口を向けた状況で誰も撃てなくなる状況。

マフィア映画とかである、交渉が決裂した時にお互いに銃を抜くアレって言えばいい

のかな？

ともかく、そうなればちよつとした動作で戦火が切られてしまう。

まあ、キンジの事だから何とかしたかもしれないけど。

「それはどうも。ちよつと、失礼していい?」

私はそれだけ告げて、望月に歩み寄る。

望月は体が緊張して銃を少しだけ下ろしてるけど、それ以上は下がらない。

私は静かに銃を取ると——スパアン!

彼女の頬に平手打ちをした。

誰もがその光景に目を見開いてる。

当の本人は動揺して目を見揺らしてる。

「なんで戻ってきたの……。戻ってきてまた人質や足手まといになるかもって何で理解できないの!」

と、柄にもなく感情的に叫ぶ。

まあ、演技なんだけどね。

でも演出は大事だよ。

望月は、少しか自分のかたことを理解し始めたのか、か細く声を出す。

「わ、わたし……」

「——分かってるよ。いても立ってもいられない……役に立ちたいって思うのは……」
それから優しい声音で語り掛ける。

「でもね……今の君じゃあダメなんだよ。理解できるでしょ？ 文字通り、住んでる世界が違う。」私達と君じゃあ……」

私達の部分で私はキンジ達を見る。

望月も、それを追うようにキンジを見る。

見られてるキンジは息を少し吐き、目を閉じる。

語るべき言葉は既に私が言ったから、キンジから改めて何かを言うつもりはないんだろう。

「それはそれとして、一件落着？」

「切り替え早いわね、アンタ」

私の雰囲気の切り替えに神崎がツツコむ。

「柄じゃないんだよ。感情的になるなんてね」

「まあ、俺もお前がそこまで感情的になるのは初めて見たよ」

「そうだよ、キンジにも見せたことないしね。」

……演技だけだ。

「鏡高さんも悪いね。落とし前をつける場面を奪っちゃって」

「本当によ。少しでも罪滅ぼしをしようと思つて考えたのに、相変わらず余計な事しかないわね」

見せ場を奪われた鏡高は、完全に不貞腐れている。

「命を対価にしたところで、得られるもんなんて少ないんだよ。見届ける事も、その先得られるモノもなくなる。落とし前だなんて言うけど、もったいなくない?」

「……一本取られたね。やっぱり、あんたは気に入らないわ」

と、鏡高は突っぱねた言い方をしながらもその声音は優しい。

「——ごめん、なさい。私……わたし……」

望月はそのまま、ようやく実感がわいてきたのか感情を溢れさせる。

その光景を見て、膝を折った望月にキンジは静かに近づく。

「萌……そもそもの原因は俺なんだ。住む世界が違うことをもつとよく考えてなかった。だから、君が気に病む事じゃない」

憂いを持たせた優しい表情で語り掛けるキンジ。

何とも、気障きざな光景だね。

「随分と、何て言うか……大人になったわね、アンタ」

神崎はキンジの雰囲気を感じ取ったのかそう述べる。

大人……まあ、責任とか少しは思慮深くはなったかもね。

自分の立ち位置とか何者であるかを知ったところもある。

「ところでアリア。この近所には俺の実家もある。だから一緒に帰って、アリアを家族

に紹介したところだが——」

何やら話題逸らし気味にキンジは語る。

一般社会でのあれこれをイジられる前に逸らしたようにしか見えない。

他は気付いてないみたいだけど。

しかし、神崎はカウンター気味に家族を紹介するなんて言われて前髪を整え始める。

相変わらず分つきりやすいね……

「——それは後日にしよう。どうやら、客人を待たせてるみたいだ」

と、キンジは鏡高の大邸宅の屋上を見上げる。

角度的には見えない。

だけど、確実にこちらを誘っているような気配。

今までは傍観してたみただけど、前座が終わったのを見てアピールしてきたってとこ

ろだね。

「で、どうする？ ジーサードと神崎さんがベストだと思うけど、私が一緒の方が良い予感がするんだよね」

私はそう提案する。

現実問題、猴コウがいる。今は孫ソかもしれないけど。

ともかく、色金で対抗できるのは私しかない。

あんまりやりたくないし、ジーサードに直接見られる訳だけど。

もう、どうせジーサードには半分バレてる。

だったら……ここで窮地でも救って貸しの一つにでもしてあげよう。

さながら人狼ゲームのように、白アピールだよ。

「……いいわ。霧、この2人はあたしが引き受ける。あたしも、勘だけど霧が行った方が
良い気がする」

と、珍しく神崎と意見が一致した。

キンジも一つ頷いて頼む、と視線を送る。

「そうか。なら、萌と菊代を安全なところまで頼む。俺じゃ、詰めが甘くて戻ってきそ
うだからね」

「ふーん。萌、菊代、っていうの。この子たち。それはともかく、色々と終わったら尋問
タイムよ。そ、それから！ あんたの実家、本当に行くからちゃんとして紹介しなさいよ？

スケジュール空けとくから」

「じゃあ、私が紹介しとくよ。お礼に」

「なんで霧が紹介するのよ!？」

「中学からの付き合いだからね。遅れてるね、神崎さん」

「あ・ん・た・ね〜ッ」

勝ち誇った表情をすればいつも通りのやり取り。

キンジはその光景を微笑ましそうに見てる。

「さて、それじゃあ行くぞ。ジーサード、霧」

「ああ、二度と俺ら兄弟に関わりたくなくなるようにしてやろうぜ。オマケは見ていていいぞ」

「はいはい、オマケは大人しくしてるよ。そのオマケに、助けられないようによろしく頼むね」

ジーサードはキンジに頼みにされて何だが嬉しそう。

さて、果たしてどう出るかな？

私が侵入した中国風の部屋を通り抜け、3人分の食事を確認した2人。

そのまま梯子はしごを伝って、屋上へ上がれば――

月光の下、雪解けの広大な屋根瓦の上にいる。

猴コウ、機嬢ジーニヤン、諸葛。

初見な猴に関して、キンジは警戒を強めてる。

それもそのはず、彼女は化生けしやう——つまりは人外だからね。

ストレートの黒髪を足下ぐらゐまで伸ばした、神崎といい勝負の体格の女の子。

カットオフ・セーラー……ヘソを出して、スカート丈がやたら短い武偵高の制服。

それは、いつぞやに来た間宮の親戚しんせきと同じ名古屋の武偵女子高の制服だ。

その制服のスカートの下から生えてるオレンジ色の尻尾に大きな紅い目。

大した殺気も何もないけど、存在感があるということは今は孫ソンか。

「ヘッターそのガキンちよが藍髻ランバンの代表か。極東戦役の」

ジーサードも同じように、人外である孫に警戒を強めてる。

「ええ、それはそうなのですが……」

そして、何とも煮え切らない返答の諸葛。

さては孫の制御が上手くいつてないね。

人外の上に、彼女の中には異星の存在がいると言つても過言じゃない。

はてさて、どうしたものか……また”使う”ことになりそうだよ。

知ったら、理子に怒られるだろうなく。

「俺は『無所属』から『師団』ディーンに変わってるからよオ。戦やる理由はあるんだぜ」

瓦屋根かわらやねをガシャガシャ鳴らして、ジーサードは前進した。

戦うつもりなので、キンジも進んでいく。

けど、突然に足を止めた。

誰かと話してるようだ。

さては、玉藻たまもかな？

あんまり探る気もなかったけど、やっぱりキンジの近くにいたんだ。

それから何かを言い争つてる様子。

キンジがシャツから何かを引っ張り出すと、ぼふんと姿を現して緊迫した表情でキンジにしがみついている。

「——猴の前には、銃も刃物も意味を為さぬ！ よさんかあお主ら！」

その必死な訴えの中で、ジーサードは不敵に笑う。

「ハハッ！ 銃？ 刃物オ？ そんなもん頼りはしねえよ。俺達には音速の拳がある」

音速の拳、ね。残念だけどあつちは「光速の矢」がある。

この時点でジーサードの音速の拳の間合い。

キンジもジーサードの構えに勝利を確信してる感じた。

しかし、金色をした細かい光の粒が孫ソンの頭上に見える。

いきなりそう来る？

早速、私に見せ場なんてキンジのパートナー冥利みょうりに尽きるね。

私は集中する。

想像するのはレンズ。

受け止めるのは……出来るけど、負荷が大きすぎる。
だったら屈折させるしかない。

孫の頭上の粒子が増えて、回転し——天使のような輪になった。

「き、きんごかん金箍冠……ッ！——猴！ 静まり給ええーっ！」

玉藻が、絶叫する前に私はジーサードの前に割り込む。

次の瞬間——紅い閃光。

それは私とジーサードへ、迫る。

私の五感が鋭敏でも、閃光は遅くは見えない。

だったら光つたと同時に、やるしかない。

その閃光は私の前、2メートル程で上空へ屈折して消える。

誰もが、何が起こったのか呑み込めずにいる。

私と孫以外は。

ふい……間一髪だったよ。

私の正面には紅い色のレンズが浮かんでる。

「お、お主……」

そんな私を見て、玉藻は驚いてる様子だ。

今まで確証がなかったことがここで明らかになった訳だ。

「どうも……色金と縁の深い方。色金の保有者、白野霧ホルダーです」

そう私が簡潔に事実を告げると、興味深く見る者、驚きを隠せない者、そして納得していた者。

そんな視線にさらされる。

「やっぱり、持ってやがったか」

ジーサードはかなめの件があるから、確証を得たとばかりに納得してる。

「救ったお礼もなしなの？ 私が隠してた乙女の秘密を使つてあげたのに」

「どうだかな……俺としてはお前の存在がグレイすぎて、素直に言う気がねえ」

「そんな！ 私は君のお兄さんの味方なのに、よよよ」

「胡散臭え芝居をすんじゃねエ！ まあ、何とかできたがありがとよ……」

というジーサードは本当に致命傷だけは避けられそうな感じだった。

でも、死にはしなくても結局は致命傷でしか済ませられないと言つた方が正しいんだろうけど。

「——ル・ラーダ・フォル・オル？」

と、孫はなんだがよく分からない言語を話す。

未だに私でもこの言語は本当に分からない。

「いくらやつても無駄だからね。防御は出来なくても、逸らすくらいはいくらでも出来

る。それに、私も”ソレ”は出来る」

さつき、孫がやったように私も粒子を出す。

これだけ見れば相手には伝わるはず。

「——キキ」

孫はいかにも面白いって、不敵に見てる。

ちよつと、圧を掛けてみるか。

色金は『全は一、一にして全』——英語で言えば『One for All、All for one』。

何度か君とは繋がってるんだからね。

それを覚えてないはずがない。

精神世界とも言うべき、色の白い謎空間。

いや、色金の世界かな？

そこで私は——彼女を殺す——

すぐに変化は訪れた。

孫はすぐに、目を見開く。

それから意識が途切れたように、その場に倒れた。

「なに？ 一体、なにが……」

流石の諸葛もこれには驚きだろう。

ふふ♪ いつもの澄ました顔が困惑に染まるのは、何とも気分が良いね。

私はちよつと、気分が最悪になりそうだけど。

精神の死は、人格の崩壊とかあるけど——命がないモノは殺せない。

あくまでも……一時的に死んだというよりは退去だね。

猴の中の孫を私は追い払った。

口で説明するのは簡単だけど、でもそれって色金の同化を自らしてるんだから、侵食がね〜

侵食と色金の人格は別物。

だけど、このままいけば……緋々色金にいる人格を殺して私になる可能性が高い。

何とも難儀な話だよ。

本当に、ヤバくなって、来たかも。

「お開きにしよ♪ お互いに、仕切り直しをするべきだと思うんだよね。私、も……ちよつと、やり過ぎ、た」

意識が途切れそうところで膝が崩れ落ちる。

何とか……倒れはしないし、意識は残ってる。

「だ、大丈夫か?!」

キンジが傍に来て、肩を貸してくれる。

「うん……なん、とかね。また、貸しを作っちゃつ、た♪」

いつもの、軽口。

「そのようですね。こちらも少々、予想外のことが多すぎました。藍幫にてお待ちしております」

諸葛がそういうと、ジーヤン機嬢が袖からスモークを出す。

そのまま一面が煙に包まれたところで、

「——待ちやがれ！」

ジーサードが音速の拳を振るう。

しかし、そこには人形のような何かが置いてあるのみ。

「チツ、サーモグラフィに反応するデコイかよ」

どうやら、ジーサードのH ヘッドマウントディスプレイM Dにも反応する人形だったらしい。

煙はすぐに晴れて、コウ猴もいなくなつた。

それ以前に——

ドクン、ドクン……と鼓動がウルサイ。

やつぱり、やり過ぎ、だよね。

「おい、霧？」

「うん……?」

「大丈夫か」

「休め、ば、ね……ちよつとだけ、寝るから。運んでよ、それでーつ、返済……」
そこで、私は意識を手放す。

◆ ◆ ◆
静かに眠るように意識を手放した霧。

それを俺は抱きかかえる。

何とか腕を回させて、お姫様抱つこの体勢だ。

冬空だつて言うのに、その体は熱を帯びてる。

あの超常の力のせいなのかは分からない。

「保有者……遠山、お主。知っておったのか?」

玉藻がそう俺を見上げて聞いてくる。

「まあな。本人は、あんまり使いたがってなかったし……俺も知ったのはつい最近だ」

「そうか……。しかし、その娘は危険じゃぞ」

「——分かつてる」

どういう意味の危険かは具体的には分からない。

だけど、俺は見捨てるつもりも霧を排除する気もない。

「どうすればいいのか、分からないが。俺は、霧を見捨てたくないんだ。借りがありません」

「甘いよな、兄貴。まあ、俺も借りがあるし……反対する気はねえけどよ。貸し借りばかりに気を取られんなよ？」

ジーサードも少なくとも、大きく反対はしてこない。

少なくとも、そのことに感謝する。

◆ ◆ ◆
——遠山達が帰った。

あたしの邸宅はボロボロで、何人か信頼できる連中を呼び戻した。

すぐに警察共も押し掛けてくるだろう。

白野の言葉が頭を反響する。

——命を対価にしたところで、得られるもんなんて少ないんだよ。見届ける事も、その先で得られるモノもなくなる。落とし前だなんて言うけど、もったいなくない？

結局、良い所なんて遠山に一つも見せられなかった。

……でも、やり直せるわよね？

そう、今度はもう少しだけ素直になる。

あたしは今まで、自分を虚飾で飾ってた。

遠山だけが、アタシの本当を知ってる。

そう思えば……何も怖くない。

だって、もうヤクザみたいに見栄を張る必要が無いんだもの。

ソファアの上で少しだけ縮こまる。

「バカね……アタシ、諦めが悪いって言ったんだもの」

自分の道も貫けなきや、極道の女じゃないわ。

うん。きつとヤクザよりも騒がしい日々になるんでしょね、遠山となら。

不意に電気が消える。

………停電？

雪はもう降ってないのに、停電になる要因があるとは思えないのだけど。

「誰か！ いないの！」

返事はなし。

全く、返事くらいして欲しいわね。

暗闇の廊下が不気味に、風を運ぶ。

おかしいわね……穴の空いた壁や窓からならともかく、廊下の方から風なんて来ない

はずなのだけど……

「いないのかい？」

廊下に、何か人影。

何かがいる。

「……誰？」

静かに銃を構える。

「誰だつて言つてんの!？」

その時に、電気が点いた。

けど、そこには……誰もいない。

気のせい？ いや、そんなはずない。

静かに、アタシはさっきのソファアームにまで戻る。

「遠山、遠山ッ……」

アタシは電話をすぐさま手に取る。

何かがいる。

怖い、恐い……何でこんなに寒気がするのか分からない。

また電気が明滅して、近くに誰かが……いる。

そこへすぐに銃を構える。

「私だよ、私」

電気が明るくなり、そこには白野が立っていた。

なによ、いきなり……

「いや、ごめんごめん。ちよつと忘れ物だよ」

いつもみたいに笑顔で、軽い雰囲気。

さつきまで恐怖があつたのになんだか気が抜ける。

でも、同時にまた寒気がする。

「で、何を忘れたのよ？」

何かがおかしい。

そう感じてはいるけど、白野はいつも通りに笑顔だ。

「いや、大したものじゃないよ」

——落とし前を、ね♪

112：移り行く日常

さて、最悪の気分の憂さ晴らしは済んでる頃合いだろう。

え？ 鏡高さん？ 転校したよ。

なんて、日常で消えた人はそうして事件にならないように日常の1つの出来事に当てはめられてなかったことにされる。

裏社会の人間なんてなおさら、ニュースの1つ程度にされて終わり。

深い関係者でなければ誰も真実なんて追い求めない。

私が消したのかつて？

答えはイエスでありノー。

私はキンジに恋^殺して貰^殺いたいののに、”ただ解体^殺だけ”で終わらせる訳がない。

もつと、キンジを見ていたいのにその程度じゃあ反応が想像できちやう。

だから、私はもつと見たことないキンジが見たい。

それを愉しみ^殺にしているんだから。

あー、楽しみだなく♪

お兄さんが亡くなったと思つてた以上の反応を見せて欲しいなくなんて思考をしながら、目を覚ます。

「ああ、もういいよ。いや……やっぱりこのままで」

意識を手放してそう時間は経つてないらしい。

私はキンジにおんぶされた状態で目を覚ました。

場所的には、まだ池袋の区域を出てはいないっぽいね。

「目を覚ましたなら降ろすぞ」

「えー……私、力を使ったせいで動けないんだけど」

「さつき、もういいよ、とか言つてなかったか？」

「寝言じゃない？」

「失神してた場合はうわ言な気がするけどな」

「じゃあ、それで」

「じゃあつてなんだよ、じゃあつて」

何て言いながらもキンジは下ろすつもりはないらしい。

神崎さんに劣らずのツンデレだね

「どうやら目を覚ましたようじゃの」

「どうも、私はどれくらい眠つてた？」

「^{一時間}半刻じやな。そう時は経つとらん」

玉藻が背負われてる私を見上げて、淡々と答えてくれる。けど、その目は聞きたいことがあるとばかりの鋭い視線。

人外特有の鋭い目だ。

まあ、ここでネタバラシした方がある程度は疑いを逸らせるでしょう。

それと、情報を一つ提供ってね。

「いいよ、キンジ。もうちよつと背負われて楽をしたかったけど、そうもいかないみたいだし」

「どういうことだ?」

キンジはこの雰囲気をつかかってないみたい。

相変わらず鋭いのか、にぶちんなのか……

ま、今になっての話じゃないけどさ。

「察しが良いではないか?」

「もう隠しておくのも無理な話だからね」

諦め半分という感じを出しつつ、私はキンジの背中から下りる。

地に足が着くと同時に、私は立ちくらむ。

あ……やっぱりやり過ぎたかな……

キンジがすぐに抱きかかえてくれる。

「大丈夫か？」

私は静かに頷いて、キンジ達に向かい合うように自分の足で立つ。

「でもここで話すの？ 雰囲気も何もないね」

「俺はここでも良いぜ？ いい加減に白黒させようじゃねえか」

ジーサードが撃鉄（クンマ）を起こす音と共に、後頭部に突き付けられる銃。

分かりやすいけど、やる気がない脅しだね。

まあ、キンジの手前そうもいかないだろうから当たり前か。

「おい、ジーサード!？」

「悪いが、兄貴。窮地を救ってもらったが、それとこれとは話が別だ」

ジーサードはキンジにそう言う。

さーて……お姉ちゃんの計算通りの展開な訳だ。

だったら、私のやる事は全部計算済み。

ふふ、キンジはどう感じて思ってくれるかな？

「私が何で持つてるかは分からない。私の幼少期の記憶はポツカリだからね」

「記憶にございませんってか？ 政治家みたいな言い分を信じられると思ってるのか

？」

「別に……真実を話しても信じないって言うなら、これも信じられない？ 私のお姉ちゃんが手を貸せば、神崎さんを助けられる」

「なに?!」

ジーサードと私のやり取りを聞いて、キンジは声を上げる。

「おい、兄貴。ますます胡散臭くなったのに、まだ白野の言葉に耳を傾けんのかよ？ さすがにお人好しが過ぎるぜ」

そのジーサードは背中越しでも分かるくらいに呆れ声。

「うーん、胡散臭いのは性分だし……だけどこれは信じて欲しいな。私は、キンジを“大”事に思ってるよ」

いつも通りに屈託のない笑顔。

そして、私の偽りのない気持ちをキンジに向ける。

「ただまあ、神崎さんがどう思うかだよね。きつと、相容れないから」

「霧の……姉？ それって、病気持ちって話してた姉のことか？」

思い出すようにキンジは尋ねる。

覚えてくれたんだ。

話を聞いてないと思ってた。

「そう、私のお姉ちゃん。すっごく頭が良いの」

「悪いが、天才は間に合ってるぞ」

と、ジーサードは反論する。

「どうかな？ 頭良くて、不器用で頭悪いようにしか見えない人を知ってるし」

「どういう意味だ」

少しだけ銃口が当たる強さが変わる。

やれやれ、短気な事で。

いや、間接的にサラ博士をバカにされた感じがして怒ってるかなジーサードは。

「神崎さんのことを言ったつもりだけど、なに？ 自覚あるんだ」

「てめエ……」

「ジーサードやめろ。霧もからかうな」

と、キンジから諫められる。

その様子には私は肩を竦められる。

「はいはい、分かったよ」

それから静かにジーサードは銃を下ろして、私はキンジ達に向き直る。

「そろそろ、私も色々と明かさないと訳にはいかなかったよ。まあ、遅かれ早かれこうなるとは思ってたけど」

「静かに暮らしたかったか？」

それは、キンジから同情にも似た感じの問い掛けだった。

普通じゃいられなくなるっていう話をした、かなめを助けたあの時の事を含んだ言葉。

でも、それも私の思い通りの反応。

「そうだね。キンジ達とバカやってそれなりに楽しく日常の問題を解決して過ごせる。それも……良かったんだけど」

ちよつと憂いを持たせた返答にキンジは、少しだけ目を伏せる。

「まあ、しようがないよね」

「悪い、霧」

「どうして謝るの？ ジーサードを助けたのは私の意思。特に後悔してないよ」

私の言葉にジーサードは少しだけ顔を横に向けて、「ケツ」と余計なお世話とばかりの表情をする。

血は争えないって感じだね。

クローンだろうが、素直じゃないところは何とも兄弟だよ。

「で、お主を拾ったかは知らぬがその姉とやらは。何者じゃ？」

「それについては、ひ・み・つ♪と、言いたいけど……今度連絡してみるよ。そうだね、ジーサードとキンジには紹介しておくよ。あんまり大勢に見られても困るし、神崎さん

は特に会わない方がいいと思うしね」

私の言葉に玉藻は少し視線が鋭くなる。

何かあるとは見てるだろう。

ここで、私のお姉ちゃんを見定めるべきかどうかを考えてる。

「……お主らに任せておこう。儂わは今回の一件、伏見と評議する。唐や天竺てんじくからも使者があるかもしれぬしな」

——そうなるよね。

人外の界限にも何やら複雑な情勢があるらしいし。

まるで第一次大戦や第二次大戦の欧州情勢みたいな感じに。

さて、私のお姉ちゃんを見たら君達はこういう反応をするのか楽しみだよ。

とりあえず、銃撃戦なんかやつちやつたからにはとつとと逃げるに限る。

という訳で私からまた連絡するということで、その場で解散となった。

「てことになったんだけど……どうっ？」

『どうもなにも、計算済みよ。ここから盤上は世界に移る』

部屋に戻って連絡をしてお姉ちゃんは抑揚もなく答える。

『ところで、いつあなたは“死ぬ”のか聞いておきたいのだけど』

「お姉ちゃんってば、サプライズ殺しだよね。分かつちやう？」

『別に……ただ変数になりえる事象は聞いておきたかっただけよ』

「うーん、何か良い感じのところ。目星はあるけどね」

『考えてないようで、計算しているのが怖い所ね』

「お姉ちゃんに怖い事ってあるの？」

『どうかしらね。感情は未知なものだし、誘導は出来ても数値で計算出来るものでもない。少なくとも未知な事を楽しめる性分ではないの。今のあなたみたいに』

それを言われると弱ったね。

誘導出来ても、計算は出来ない。

まったくその通りだね。

だからこそ、楽しいんだけども。

◆ ◆ ◆
霧から、姉の正体を教えると言われてすぐに連絡が来た。

爺ちゃんと色々と話して、俺は俺自身の答えを得た。

まだまだあやふやで、ハッキリしない答えだが……何となく見えた。

それに対して爺ちゃんは、何を言うでもなく暗に告げられた。

——改めて、ここから旅立てと。

なので、俺も少し自分の人生をもう少し見詰め直すことにした。

だからこそ、霧のことをもう少し知らないといけない。

それがアリアとお前を助ける事になるならな。

俺とジーサードは、霧に呼ばれた。

日時は夜の22時ごろ。指定された場所は武偵高のアイツの部屋だ。

何で女子寮に行かなくちゃならないと思ったが、転校したから俺の部屋なんぞないの
で仕方ない。

まあ、その転校した矢先にまた転校するんだから、俺としては何とも言えない。

しかし霧も男子をホイホイ女子寮に入れるなよ。

と、思ったが……レキの件があるので俺はその件に関しても何も言えない。

人のこと言えないことだらけだな、俺。

意を決して俺は霧の部屋のインターホンを押す。

『開いてるよ〜』

すぐに返事が返ってきて俺は玄関を開ける。

そう言えば、俺……霧の部屋に入るのは初めてだよな。

向こうから俺の元部屋に来るのはよくあったが。

と、思いつつも玄関から入る。

しかし、部屋は真つ暗だ。

このパターンは、分かるぞ。

「またイタズラか？」

答えるのは静寂。

さて、一体どんなイタズラを仕込んでくるか分かったもんじやない。

……どうする？

踏み込めば、間違いなく罠が待ってる。

電気を点けて何もなければジーサードが来るまで撤退だな。

と、考えて廊下の電気を点ける。

そこにいたのは、

「お帰り、あなた。ご飯にする、お風呂にする、それとも——」

俺は全体像が確認できる前にすぐに玄関を出た。

ああ、うん……見なくてよかった。

というか、明らかに肌色面積が多かった。

とつさに視線を下にしといて良かった。

裸足はだしな上に、艶めかしい太もも……エプロンと思われる下部分が見えてしまった。

「そこは最後まで見てよ」

扉を少しだけ開けて、声を出す霧。

俺は扉を背にして見ないようにする。

絶対にヒスリ要素が満載なので振り返らない。

「服を、着ろ」

「しようがないな……理子から決戦兵器になるって聞いてたのに」

「俺にとつての最終兵器だろうが。その……それでなつて襲われたらどうするんだよ？」

「別にどうにでもなるよ。まあ、でも、キンジなら……いいよ」

息がかった艶あでやかな声音。

思わず心臓が跳ねあがる。

「おおい!? 今ので反応しちまうか俺よ!？」

「ふふ……この程度で反応しちやうなんて、体は正直だね」

「色々とヤバ気なセリフを続けるな!」

「でもまあ、とりあえずキンジの性癖のストライクゾーンって割と広いよね。耐性つけた方が逆に良い気がするんだけど?」

「耐性つく前にお陀仏になるに決まってるんだろ」

最近の霧のイタズラは気のせいかエスカレートしてる気がしてならない。

それでも、俺が止めて欲しいと思う一線を越えてこないあたりがなんともいやらしくも思う。

「おい……玄関先でなにイチヤイチャしてんだよ」

と、蛍光灯が切れたようなジジジ、というノイズ音と共にジーサードが現れた。

迷彩スーツで近付いてやがったな。

その下は特攻服みたいなコートを羽織つて来やがった。

というか、それっていつぞやに貰った朝青達あさおの特攻服じゃねえか。気に入ったのかよ。

「別にイチヤイチャなんてしてねーよ」

そこにはツツコまずに俺は現状だけにツツコむ。

「なんだ……もう少し遊べると思ったのに」

「どうでもいいから、テメエの姉とやらにさっさと会わせろ」

ジーサードは霧ののりりく、らりした態度が気に入らないらしい。

機嫌が悪そうにポツケに手を入れて威圧してる。

ぱつと見、特攻服もあつてただのヤンキーにしか見えん。

こんなのがアメリカの人工天才人間というのだから、よく分からんもんだ。

「はいはい、準備するよ」

それから霧は、意に介していない感じで部屋に戻っていった。ほどなくして部屋に招き入れられた。

霧の部屋には初めて入ったが中はシンプルだった。

テーブルにキッチン……そして、50冊は入るだろう小さめの本棚。表に日用品と呼べるのはそう多くない。

窓辺の机の上には注射器とか、何故か医療器具がある。

医療知識があるとは言ってたが、道具まであるとはな。

「はい、それじゃあ通信を繋げるよ」

霧が薄型のノートパソコンを持ち出してきて、テーブルの上に置いて画面を開く。

それに対してイスを2つ並べて、俺とジーサードがパソコンに向かうように座る。

霧の姉、果たしてどんな奴なんだか……

すぐに画面が明るくなり、テレビ電話みたいに相手が映し出される。

どこかの屋敷みたいな書斎。

中央にはアンティークっぽい机、その先に座り心地が良さそうな革製のイス。

背もたれをこちらに向けたまま。

だが、小さく煙がそのイスの横から見えてるところを見るに、目的の人物はその背もたれの向こう側にいるらしい。

背もたれより小さいのか？ とか、観察できる範囲で俺は情報を分析する。やっぱり、武偵の癖が抜けないな。

それから静かに背もたれが回転したかと思うと1人の少女が、姿を見せた。

15歳くらいに見える女性。

目算だが、アリアと体型がいい勝負だな。

『悪いけど、ホームズと比べられるのは好きじゃないの。どうでもいいことなんだけど』と、画面越しに俺の考えを当てるかのようにその少女は口を開いた。

冷ややかな目……いや、その目に生気はあまりないように見えた。

何もかも知ってるって感じで、薄気味悪い視線だ。

画面越しでも分かるくらいだ。

『……初めまして。紹介はいらさないわ……私が何者かの方が重要だろうし』

「随分と話が早えな」

ジーサードが真っ先に会話をしだした。

早くも、何か怪しい雰囲気になってきたな。

『ええ、私はすぐに何でも導き出せちゃうの。まあ、性分だとも思っっちゃうだい』

「白野もそうだが、お前も胡散うさんくせえ臭いがプンプンするぜ」

『あら……画面越しでも分かるの？』

「仕事柄な」

『そう。でも、私はあなたの望む答えに協力できるわよ』

「ますます怪しいな。それで……名前はなんだ？」

それから少女は一息置いて、

『ソフィー……ソフィー・モリアーティ』

そう、簡潔に、自らを名乗った。

モリアー……ティ？

その言葉に、俺は思わず霧を見る。

「うん、そうだよ。私のお姉ちゃん、ソフィー・モリアーティ。あのジェームズ・モリアーティの直系の人」

……嘘……だろ？

ホームズの子孫とあれこれあったかと思えば……俺の元パートナーの姉は、あの犯罪界のナポレオンことジェームズ・モリアーティの子孫だつて？

その言葉に俺だけじゃなくジーサードも目を丸くしてる。

『こうして画面越しだけでも会うのは、分かっていたことよ。白野 霧——彼女の色金が見られるのも計算できていた。まあ、予想よりも早いだけだね。……けほ』

言いながら、彼女はせき込んだ。

病弱って話は聞いていたが、霧の話も嘘ではないらしい。

画面越しに分かる程に、彼女は色白だ。

あまり外にも出てないと分かる。

『さて、私はあなた達の知りたい情報を教えることが出来る。その過程も解も、なにもかも、ね』

「タダなんて訳ねえよな？ 知りたい事だけ教えてくれるなんて、都合のいい話がある

訳ねエ」

ジーサードと同じで俺も同感だ。

「対価はあるんじゃないのか？ 取引、とか」

『別に…… 必要ない』わ。いちいち求める意味なんてないもの』

しかし、ソフィーは俺の言葉にハッキリと不自然な程に返した。

「なんでだ？」

『大して興味がないからよ。私がこうして貴方たちと話すのは、ちよつとした計算修正みたいなもの。だから、知りたい情報だけ教えてあげる。ジーサードは色金を得る方法を。遠山 キンジ……あなたには、ホームズと白野 霧、2人を救う方法よ』

その言葉に俺とジーサードは顔を見合わせる。

あまりにも都合が良い話ばかりだ。

それを犯罪界のナポレオンと名高い、ジェームズ・モリアーティの子孫が協力する。どう考えても裏があると疑う余地しかない。

『ああ、ちなみに……モリアーティの子孫だからといって私が犯罪に手を染めてるなんて偏見はやめて欲しいわ。間違った解答を押し付けられるのは好きじゃないの』

「いきなり出会って信用しろなんて方が無理があるけどな」

『それもそうね。だったらこれはどう？ このままいけば白野 霧は死ぬし、ホームズも死ぬ。遠山 キンジ……あなたの選択によってね』

その言葉に、俺は胸が高鳴る。

「……どういふことだ？」

だが、こんなものは俺を動揺させる尋問に似た手法だ。

分かっている……けど、それを言われて言葉が挟まない訳にはいかない。

『ジャック・ザ・リッパー……100年前の再来と言われる彼は、あなたを気に入ってるみたいね。まあ、その感覚は私には分からないものだけど』

ああ、そうだな。

世界的な犯罪者になんて気に入られてるのは意味不明だよ。

命を狙うとかの目的じゃないのは間違いない。

だったら、俺はブラドと戦ったあとに出て来たあいつに殺されてる。

ソフィーは続けた。

『でも、彼の目的は分かる。人の反応を見たいのよ、様々な感情の機微……笑い、悲しみ、怒り、そして絶望をね』

なんだその質たちの悪い観察は。

「それが俺と、どう関係する」

『きつと彼は大切なものを奪った時のあなたの反応を見たがる。それに、遅かれ早かれ白野の寿命は短い。3年もあるかどうかかしらね』

なん……だって？

しばらくは、何を言われたのか分からなかった。

「……ウソだろ？」

ようやく出した言葉。

そして俺は静かに霧を見る。

霧は、ソフィーの言葉に頷くでもなくただ、ニコリと困ったような笑顔をした。

いつもの楽しそうな笑顔じゃない。

悲し気で、力のない表情だ。

そんな顔……今まで一度も見ることがなかった。

だからこそ、分かる。嘘じゃないことが。

「うん、まあ……そういうことだよ。色金のせいでね、生い先短いのは何となく分かってる」

『私にとつても、死なれたら都合が悪い。だから協力する。これでどうかしら？ 私の言葉に耳を傾ける理由としては十分な答えになると思うのだけれど』

確かにそうだ。

これ以上ないほどに、理由としては十分すぎる。

『まずは香港に遅かれ早かれ向かうことになるでしょう。答えは今でなくともいいし、聞きたいことがあればいつでも彼女に伝えなさい。ああ……ホームズには私の協力を伝えないことね。答えは分かりきってるもの』

それから画面が消える。

「……兄貴」

「ああ、しばらく考える時間が必要だ、な」

色々な情報があり過ぎた。

衝撃を受けるって言葉を身をもって体感したのは、初めてかもしれない。

「そうだね。今日は休みなよ」

部屋を出る前の霧はいつも通りの笑顔だった。

◆ ◆ ◆

2人が帰ってしばらく。

暗号回線にして、私はお姉ちゃんと通信する。

「お姉ちゃんも人が悪いよね〜」

『あなたほどではないわ。それに、対価が必要なのは本当なもの』

「それって、”勝手に支払わせる”から必要ないって話じゃないの?」

『そうよ。もう既に私の盤上なのだから、どこを動かせば私が望んだ場所に動いてくれるのか……それを考えるのが少しだけ、私は”楽しい”。血は争えないというやつね』

「なんだ、お姉ちゃんにも楽しみってあったんだ」

少しだけ意外。

そこは知らなかったな〜。

お姉ちゃんの計算は振る舞いも含まれてるから、私の観察でも奥底まで分かんないんだよね。

『少しだけよ。次は香港……ランパン藍幫の長城は既に崩落寸前。でも、それも香港にはあずか

り知らないことよ』

「いずれは、どうするの?」

『別に、計算したことを試したいだけよ。数学者として、当たり前でしょ?』

画面越しにお姉ちゃんは……久しぶりに笑った。

それは、世界の破滅を呼ぶようなうすら寒い笑顔で。

私なんかよりもよっぽど、悪意の塊だった。

ニュースに出てる犯罪者なんて、ちっぽけなものだって分かる。

悪の華っていうのは、どこまでも悪の華。

いや、私と同じで純粹なだけ。

そう……純粹であるからこそ、どこまでも残酷に。

113：日常からいつもの非日常へ

お姉ちゃんとの密会で、ジーサードとキンジのみにある種の情報提供をした。

それも、お姉ちゃんからしてみればただの布石。

お姉ちゃんの言うとおりに動けば、ある種のバタフライエフェクトが動いて望む答えに知らずの内に誘導される。

ま、そんなのは私も含まれてるだろうけどね。

「えー、短い間ではあったが、ロングホームルーム遠山と赤桐が転校する事になった」

数日後、下校前のLHRで担任の先生が2年2組のみんなにそう言う。

今回の一件でキンジは何かしら掴んだらしいし。

私はキンジがいらないなら残る意味もない。

そもそも、経過観察任務でキンジの様子を見てるんだし。

だったら御役御免というやつだね。

「えーつと……短い間でしたが、ありがとうございました」

キンジはそんな面白みもない挨拶で締めくくってる。

それ、担任の先生の挨拶を半分くらいパクったヤツでしょ。
さてと……私はどうしようかな？

武偵が一般校に潜入してたもんだし、それをバラすのは余計な不安をおおる可能性がある
ある云々かんぬん。

ちよつとサブライズしようかと思つたけど、余計なことで武偵に目をつけられること
もない。

私も何だかんだ、無難な挨拶をして終わった。

ただ一人、望月さんは複雑そうな表情をしてるのを私は見逃さない。

あの様子だとキンジを追い掛けてきそうだね。

それはそれで私は構わないんだけど、重荷になる自覚がない人つてのはある意味では
罪人より度し難いよね。

私からすれば楽しみが増えるんだから、とても助かるんだけども。

それよりもキンジに対しての反応は「遠山！」「遠山くーん！」と、別れを惜しむよう
なクラスの反応が絶えない。

中でも望月さんは、泣き出して近くの女生徒に宥められてる始末だ。

なんだかんだカリスマとか、面倒見の良さが出ちやつてるよね。

最初は遠ざけるように言つても関わつたら最後の最後まで責任を取るといふか。

お人好しって言われても仕方ない氣質。

だからこそ、冷たい言葉の裏側にも何となく気付いちやう人は多い。

朝青あさおと藤木林という2人の生徒に関しては、顔に絆創膏があつたりと見るからに怪我

だらけだが、身に着けた制服はピシツとしてる。

そのまま、

「俺らのこと忘れないでくださいね、遠山さんッ！」

と2人は遠山にハグをする。

それから、私に不意に目を向けて来たので一瞬だけウインク。

私の様子にちよつとだけ、驚いた顔をしてる。

その視線の先にはわざとちよつと広げた私のブレザーの内に顔を覗かせる閃光弾。フラッシュユグレネット

まあ、大々的とはいかないけどこれぐらいなら察せるでしょ。

それから内緒、とばかりに人差し指で「シー」とジェスチャーする。

でも、それだけでも何となく分かったのか2人は他の生徒には気付かれないよう静か

に頭を下げた。

私はそんな感謝される人じゃないんだけどね。

でも、ちよつとおかしくて苦笑する。

自分達が知ってる人が知らない間に1人消えてるのにな。

そうして放課後、すっかり夕方になって——私は校長室で経過観察任務の件のお礼を言った。

しかし、その校長は逆に「再び生徒が学ぶようにしていただきありがとうございます」とお礼を返された。

それから私は、私じゃなくそれはキンジのおかげだと言って、そこを出た。

そのままキンジとレキが下駄箱のある昇降口を出たところを見かけて追い掛け、合流する。

「なーに、やってるのかな？」

2人の間に割り込むように顔を出したところで、レキは私を面白くなさそうな視線をし、キンジは呆れた顔をする。

「お前な……経過観察任務なんてなんで受けてるんだよ」

「今更その話？ もう終わった話だよ」

「なんで追い掛けてきてるのが分からんから聞いてるんだが……」

「——それ聞いちゃう？」

私はその言葉に思わず詰まる。

まあ、気になってるのはあるし……観察的な意味もある。

だけどそれよりも——

「あー……」

素直に言葉に出そうと思って、私は出なかった。

いつもなら、何の恥じらいも臆面もなく自分の胸の内を言えた。

でも、何故か視線が合わせられなくて言葉が出てこない。

——寂しかった。

そう言えるはずだったのに、今は言えない。

だって……キンジにからかわれる口実を与えるのはちよつと癪な気がする。

「——そうらア！」

「いっせーの、せっ！」

どう返答したものか考えていたら、校舎の2階、2年2組の教室の窓から、さつきハグしてた藤木林と2年1組の窓からは女の子のかけ声が聞こえた。

みんな振り返れば、そこには校舎の窓から下へと落ちる垂れ幕。

遠山、赤桐、レキの偽名である矢田。

それをカタカナで書いて『アカギリ トオヤマ ヤダ』って感じで縦に垂れ下がってる。

上手く縦になるよう工夫してるね。

キンジを見れば、さつきの質問よりもこっちの方に心を奪われたらしい。

安堵と共に複雑な心境が少し混ざる。

……こういう日常も、もしかしたら案外良かったのかもしれない。

そう思えるくらいには……退屈じゃなかったよ。

校門を出たところでキンジ達とは一度別れる。

その別れた先ではどこかで見た金髪のツインテール。

まったく……カワイイ妹なこと。

わざわざ迎えに来るとは思わなかった。

電柱に背を預けて、横目でチラリと私を見る。

どこか呆れたような顔をしたかと思えば、少しでも目付きが鋭くなって私を睨む。

それはどこか怒気を含んだような、そんな目。

「なにか言うことがあるんじゃないかな、お姉ちゃん」

「ただいま」

「……………」

どうやら望んでいた答えではないみたい。

いや、分かっってはぐらかしているとバレてる。

この反応からして既に色金保有者であることが周知された……と見るべきだろう。

保有者であることがバレるのは力を使ったか公言したか、あるいは心臓をぶち抜いたかの主に3択。

そこに猴コウが関わって来るとなれば、消去法で答えは一番最初になるだろう。

「ゴメン、使った。ちようどいい機会だと思っただし、遅かれ早かれ神崎が近くにいなればいずれバレてる。まあ……王手チェックを掛ける大事な布石でもあるけどね」

「……布石なら分かったよ。心臓に悪いけど」

「心臓が悪くなるのは、私なんだけどね」

「なら最初からやらないでよ」

それはごもつとも、と私は苦笑する。

同時に私は質問する。

「怒らないの?」

「回りくどくて趣味に走るけど、何だかんだ必要なことしかしないお姉ちゃんだし……どうせ言っても聞かない。そうでしょ?」

「そうだね」

「ちよつとは悪びれない?」

「悪びれてたらもうちよつと自重するよ。それに約束する」

「ごもつとも……だね」

悲しみと呆れを交えたような複雑な表情で理子は肩をすくめる。

「私はそう簡単に死にはしないよ」

「そういうことじゃないんだけどね」

どこか少しイラつきを含めて言いながらも、理子は自然に私と肩を並べて歩く。

それから顔を覗き込むように、

「死んだら一生恨むからね」

そして頬を膨らませてる。

様子から見るにどうやら怒りはおさまったらしい。

「分かってるよ」

とは言え、納得はしないだろうね。

やれやれ……私の本性を分かっててなおこれだから、妹ながら物好きだと思うよ。

武偵高に戻って来た私は早速、経過観察任務終了の報告を高天原先生たかまがはらにする。

ついでにレポートも添えて。

そりゃあ、武偵が一般に戻るのに「はい、今日から一般人」とはいかない。

武偵ならではの技術、そして機密、合法的にしばらくは有効な武偵の武器使用許可証。

それらを悪用しないか、民間として問題ないかの素行調査も含まれてる。

普通なら1カ月ないし2週間でのちよつとした長期任務だからね。それらを提出と報告をし終えて私は戻る。

大した話は特にはしていない、キンジは学校でどうだったか程度の話。とはいえ、ちよつと生暖かい視線を向けられるのはどうかと思う。

そりゃあ、先生からすれば青春って感じでどことなく母性的な感情が湧くでしょうけど。

まだ、こつちは恋愛初心者……この感情の付き合い方は私には難しい。

新鮮ではあるのだけだね。

それよりも――

「やあ、どうも」

英国紳士の変装で私は1人の客人に話しかける。

「何者よ……」

そう、あのヤクザとドンパッチした夜に攫さらつて来た鏡高かがたか 菊代。

彼女を横浜にある紅鳴館へと招待した。

別に牢屋に入れたり身ぐるみを剥いだりなんてしていない。

ただ、連絡手段とかは奪わせて貰ってる。

リリヤに彼女を見張るようにして貰ってるので、変な事はできないだろう。

彼女を欺くのは並大抵の者では無理だからね。

応接室のような場所で革張りのソファで対面する彼女は、警戒心むき出しの中に恐怖をにじませる。

「さて、私が何者か……それよりも重要なのは自分がこれからどうなるかの方が心配ではないのかね？ ああ、紅茶はどうだい？ 彼女が入れるのはロシアンティーだが、なかなか美味しくてね」

扉を塞ぐように立つリリヤに少し目を向けて、私はスプーンでジャムを一つ舐める。

「ロシアンティーはジャムを紅茶に入れて飲むと思われがちだが、実際はこうして舐めてから飲むのが普通だそう。直接入れると紅茶が冷めてしまうからね」

そして、私はソーサーとカップを持ち上げて飲む。

鏡高は怪しみながら不安に揺れる視線をテーブルの紅茶に目を向ける。

「なに、毒なんて入ってないよ。そんな回りくどいことをするくらいなら、君はあの豪邸で死んでる」

「……アタシを利用でもするの？」

「利用と言えば、そうだな。ただ、君の裏社会関係のあれこれを利用するつもりはない」私の言葉に鏡高は少し眉を動かす。

自分が思っていたことと違う回答に疑問を持っていることだろう。

利用するならそこしかない。

残念だけど、私には特に利用価値もないし利用する算段が立てられたとしても組み込むほどでもない。

「私が君を連れて来たのは、ちよつとした趣味だよ。なに、用事が済めばいつもの通りに過ごしても構わない」

その言葉にポーカーフェイスをしていても、鏡高はますます分からないとばかりの目の色。

「極道だからと多少は肝が据わっていても、私の不明瞭さに不安は隠しきれないだろうね。」

「私はね、人を見るのが好きなんだよ。人の中身をね……それは内面であつたり内臓であつたり色々だ」

「……………」

「君の中身も興味深かった。裏社会に生きる人間の割にはキレイだったよ」

思わずにやけて放つた言葉に、鏡高は呼吸が少し荒くなる。

ぞわりとしたような目、そして何かの気味悪さを感じてしまった表情。

私の言い回しと、異常さに気付いてしまったみたいだね。

自分の服の中身を見るように、開きはしなくても着物の襟を掴んで視線を落とす。

「なに、女性の肌に傷が残るようにはしていないさ。そう心配しなくてもいい」
我ながら手術痕を残さないようにする技術はなかなか上手くなったと思う。

また解体するならキレイな方が気持ちいいからね。
よく見なければ擦り傷の痕程度にしか見えない。

「なにが、目的よ……」

「言っただろう？ ちよつとした趣味だよ。さて、あとは君が他言無用でいつもの日常に戻ってくれば構わないよ。途中までそのメイドに送らせよう」

「……………」

この場で逆らうのは得策じゃない。

だけど、ただで帰して貰えるとは思っていない。

メイドの少女——リリヤに何かされるかもしれない。

そんなところだろうね。

こういう状況でどういう風に考えるかなんて大体は予想がつく。

「1人で帰るわ」

だから、その答えも予想通り。

「——自由」

私はニコリと、朗らかに笑みを浮かべる。

◆ 謎の男にメイド、◆ 所
◆ 所持品もそのまま返されて、拍子抜けがする程に何もなかった。
意味不明な気味の悪さ。

目的なんて、何も分からない。

白野の顔をした何かにアタシはやられた。

もしかしたらと、アタシは考える。

でも……変装なのか本人なのか、それともグルなのかは判別が出来ない。

どういふことなの……？

ともかく、他言無用だなんて言つてた割には監視されてるような感じもしない。

それがなおさらに不気味でならない。

アタシが何かされたのは確か……それすらも、分からない。

さっきのことを忘れるなんて、無理に決まつてる。

それにあの男の雰囲気はアタシが見てきたヤクザ共よりも飛び切りヤバい何かだつた。

そんな男に、アタシは何かをされてる。

………遠山。

思わず、アタシのヒーローの顔を思い浮かべる。

もう少しで組の事務所の1つに辿り着く。古参で、父の信頼が厚かった重鎮。さすがにアイツなら裏切者ではないでしょう。

でも、その前に――

路地裏に移動して携帯で遠山の電話番号を選んで掛ける。

この不安をどうしても晴らしたい。

ただ声を聞くだけでもいい。

お願い……助けてよ。

「とおや——ッ!?!」

繋がって、声に出した瞬間に走る痛み。

なに、これッ……?!

胸が、心臓が苦しいッ。

締め付けられるような激しい痛み。

「はッ……あう……ああー!」

手が強張って携帯を落として、思わず膝から崩れ落ちる。

胸を押さえながらアスファルトを跳ね転がる携帯に目を向ける。

携帯の近くに、誰か、いる……?!

……誰？

「鏡高さん」

白野がそこにいた。

まるで待つてたかのように、アタシを見下ろして。

それから携帯を拾い上げたかと思えば、通話を切る。

「……アン、タ」

「他言無用つて言ったのに、早速キンジにお電話とはね」

しゃがんで、白野が笑顔で痛みにならずくまるアタシを見下ろしてる。

まるで愉快なものでも見るように。

「どうして痛いかわりたい？ 知りたいよね」

「……あ……は」

言葉が出ないアタシを待たずに白野は勝手に説明し始める。

「君の中を弄^{いじ}らせて貰^{もら}って、ペースメーカー^{ペースメーカー}つてやつを埋め込んだんだよね。心臓の動きが悪い人の補助をする機械で普通なら胸の上に機器が見えるんだけど、これは小型で肋骨の内側に入れてる。女の子の体だし見た目で何か違うのはいただけないからね」

「そ、んな……」

「人間の動きは結局は電気信号だからね。その電気信号を読み取ることが出来れば、鏡高さんが何しようとしてるか分かるってこと。詳細は省くけど、そのペースメーカーが君のNGな行動を検知したら自動的に心不全を起こすように働きかける。だから心臓発作と同じような痛みが出る」

「どう、し、て……」

「どうして？ そうだね、これが落とし前かな？ 彼の”傍にいてもいいけど、一緒になる”ことは許さない」

それから、にっこりとそいつは笑う。

純粹で残酷な程に邪悪なその笑顔は今まで見たことはなかった。

「君のヒーローの手は届かない。縫^{すが}りたいなら縫^{すが}ればいい……ま、何も出来ないんだけどね♪ それじゃあ、風邪をひかないように気を付けてね」

私は……望みを、ささやかな助け^{希望}すら、届かなくなるのが分かる。

——心は解体^{こわ}された。

◆ う、ああああああ!!

背中越しに聞こえる嗚咽^{おえつ}と、泣き声。

ん……スツキリ。

またしてもウルスラちゃんに協力をお願いすることになるとはね。

私が背負われてる間に鏡高を攫ったのは彼女。

やっぱり、誰にでもなれる子は使い勝手が良いね。

解体以外で晴れ晴れとした気持ちになるのは久しぶりだよ。

悪役らしく三段笑いでもすればいいかと思っただけど。

無様だからこそ、結果は真摯しんしんに見届けなきやいけないよね。

もうキンジの隣に立ってる資格なんて自分にはないと思っただ彼女はそれでもすが縋るのか、

どういう選択をするのかは非常に興味深い。

しかし、既に次のイベントはもう決まってる。

——キャラバン・ツアー 修学旅行Ⅱ。

修学旅行という名のチームの連携力その他、武偵として国際社会へのあれこれを学ぶ

社会体験。

それが差し迫ってる。

次の舞台は十中八九、ホンコン香港になるだろう。

ランパン藍幫と接触し、身近な敵対組織となればそうなる。

お姉ちゃんの計算通りに事は運んでる訳だね。

そして……エニグマのお披露目にもなるだろう。

R.^{リッ} I.^プ Pが香港で何かするつもりだろうし、きつと面白くなる。

という、私の予想通りにキンジが武偵高に復学してから早速だが招集が来た。

キンジが武偵ランキングにランクインして、銃会社であるベレッタ社から奨学金を貰ったうんぬんかんぬんの話は割愛しておこう。

本人、現実逃避気味だし。

そうして集められたバスカービルメンバー+ジャンヌ、ワトソンの外部協力者がキンジの部屋に集まった訳だけど。

部屋の主であるキンジは眉を寄せて頭が痛くなりそうな現実から目を背けてる。

だって、全員が体操服で集合ですからね。

私は淑女なのできちんとジャージを羽織っています。

キンジにとっては目の毒だろうし、あと冬なので寒いし。

ジャンヌと白雪と理子はブルマーというね。あとはハーフパンツみたいな一般的な体操服だけども。

一体、誰がこんな運動着を提案したのか……普及されたのはブルマーさんという方？でも、この形になったのは日本だという話を理子が前にしてた気がする。

変なサブカルチャーに詳しい妹だよ。

「なんで着替えてこないんだよ、お前ら……!」

と、キンジは現状によくツッコむ。

そこで髪を下した神崎が口をへの字にして――

「しようがないでしょ、女子更衣室が壊れてたんだもん」

そうぼやく。

文字通りに部屋ごと壊れたりするからね、ロケット弾の発射訓練とかの誤射で。建築会社は儲かるだろうけど、この手の学校は無駄に修繕費が掛かるよね。

という、裏話は置いといて――

「――作戦会議つてのは、極東戦役についてだ」

と、キンジは鋭い眼で切り込んだ。

しかし、キンジは暖房のついてるエアコンの風下で顔を微妙にしかめる。

さてはエアコンの風から運ばれるこの女子空間の匂いに、早くも危険信号が出てるんだらう。

キンジ、鼻が良いからね。

「打って出るつもり、なんでしょ?」

「話が早いな」

その通りだとばかりにキンジは答える。

「この間のあれやこれやで考えれば、何となくはね。藍幫ランバンは撤退した……なら態勢を整える前に叩く。基本的な話でしょ？」

私の言葉に鏡高邸の事件の当事者だった面子は同意するように頷く。

ただまあ、あつちのホームグラウンドである以上どうしても地の利的にはアウエーな訳だけど。

タイミングで考えればどっこいどっこいかなって感じかな。

私には関係ないけどね。ホームグラウンドだからこそ相手の隙がある訳だし。

そこに入り込めるから、誰も私に辿り着けてないんだから。

「霧の言うとおりに打って出るぞ、ターゲットは藍幫だ」

「なんで急に鼻声なのよ」

「うるせえなツ、人間の鼻は詰まる時には詰まるんだよ」

あまり鼻に刺激がいかないようにしてるキンジに神崎が指摘。

話を進めようとしたら、いきなり出鼻が挫かれた感じ。

「ああ、そうだ。トオヤマから調べるように言われてたココ達だが……拘置所へ輸送中のところ襲撃されたらしい。既に司法取引として金による賠償も済まされている」

そうジャンヌが三つ編みを揺らして、この面子には知らされていない件を告げた。

私と理子はリリヤのことだし知ってる。ワトソンは独自に調べて既に知ってるよう

な様子。

「……………どういふことよ?」

「既に済んだ話として情報はあまり公開されていなかったようだ。おおよけ公には出来ないが情報封鎖がされている訳でもなかった」

まあ、新幹線ジャックなんてしといて取引無しにお咎め無しはいかないでしょう。

とは言え、ココ達の藍幫での地位は下がったには違いない。

「しかし、どうも腑に落ちない。ココはおそらくだが藍幫で軟禁か何かしらの処罰を受けているはずだ。もう一度この日本に来るには賠償が済まされているとしても再逮捕されるリスクがある以上は、来る意味があまりないように思える。だとすれば——もしかすると、4人目のココがいるのではないかと私は予測するのだが——」

そのジャンヌの言葉に、一同は顔を少し曇らせる。

ココ程度と言えばアレだけど、3人で苦戦してたのに4人目なんて勘弁して欲しいだろう。

「いるよ、4人目。あたしはジャックから聞いてるけど」

「理子、知ってたのか?」

「よくイ・ウーで商売に来てたメガネのココだよ。あの子が4人目」

これには元イ・ウーメンバーだったワトソンと尋ねたジャンヌも目を丸くしてる。

3姉妹どころか4姉妹でした、と。

4つ子だからついていくら何でも全く同じという訳ではない。

それを見分けられるのは至難の業ではあるけども。

私？ 言わなくても分かるでしょ。

「なるほどな、3姉妹どころか4姉妹かよ……それと諸葛という男も得体が知れない。それと、^{コウ}猴という少女がいる。玉藻曰く——孫悟空なんだそうさ。如意棒とかいうレーザービームを放つ。これも強い。あれは一言で言つて必殺技だ。誰も勝てないだろう。俺以外”は”

などとキンジが攻略方法があるみたいに強調するのは牽制だろう。

ここにいる面子の。

割と血気盛んというか、鉄砲玉みたいな娘が多いからね。特に色金持ちのお嬢さんは。

「猴は俺に任せろ。また、誰かが傷付くのを見るのは御免だ。手助けがいる時は招集してやるから、そしたら来い」

イケイケなリーダーを気取ってる。

まあ、こうでも言わないと我先にと敵を目の前にしたら突撃しかねないもんね。

——ちよつとカツコイイって思つちやうけど、攻略方法が本当にあるのか微妙なところ

ろだよね。

本当の意味で言うなら私の方が適任ではあるんだろう。

ワトソンを日本の守備として残し、バスカービルは香港へ行くことが決定。

それから私とキンジ、それから神崎はもう一度、キンジの部屋に何故か集まった。

神崎はお呼びじゃないんだけどね。

「で、霧……あんた色金を持つてるのを何で隠してたのよ？」

「1、広める必要性がないから。2、聞かれるのが面倒だから。3、保持してるのが広まると危険が増えそうだから。好きなように解釈してよ」

ソファアーに足を組んで座る神崎の質問に対して私は対面するイスに座りながら面倒に指を3本立てて答える。

その言葉に神崎は真剣な顔をしてまくし立てる。

「そういう、話を煙に巻くような言い方はやめなさい！」

「逆に答えてどうするの？ 私に聞かれても色金関連で答えられることは特にないんだから」

これは本当。

私は力の使い方とか性質やらの知識はあっても、何故持つてるかとかどこで入手した

なんて質問には答えられないし、知らない。

お父さん——シャーロック・ホームズとの関係性とか言われても”白野_私霧”には関係のない話。

「お前のこういう場合は全部だろ」

思わず正解とばかりに答えたキンジに軽くウインク。

だったら使わなければよかつたんだろうけど、理子にも言ったように遅かれ早かれ気付かれると思つて使つた訳だし。

これで、私の寿命が少ないことの裏付けとなる理由を切り出す糸口にもなる訳だからね。

「今まで色金のこと知つてたつてことは、イ・ウーとかも本当は知つてたんじやないの!?!」

直感的とは言え、割と鋭い質問だよな。

「——名前だけだし、神崎さんよりも知らない。狙われるんだらうなとは思つてた。だから……あんまり直接的じゃなかつたんだよ」

あらかじめ考えてた言い訳を答える私。

その言葉に、神崎は今までイ・ウーと対峙してきた時を思い出すような顔をした。

ジャンヌの時は割とガツツリ直接対決だったけど、それ以外はそんなに、つて感じ。

ココの時なんてほぼ置物状態だし。

だけど確実に私は力を貸し、貸しを作ってきた。

この言葉の裏付けを否定することは、彼女のプライドの高さから出来ないだろう。

いや、誠実さでもあるかな？

「私が答えられるのは、どういう力があるのか程度だよ」

その言葉にキンジは表情に影を落とす。

お姉ちゃんとの問答で私がどういう状態かは知らされているからね。

私が多く答えられないとは分かっているだろう。

「俺も霧から色々と聞きたいことはあったが、秘密は誰にでもあるものだからな。俺は、

霧を信じたいと思う」

そのキンジの言葉に、嬉しさと同時に別の笑みがでそうになる。

——楽しいね、楽しみだね。

そんな感情を押しとどめて、私は「いつものように微笑む」。

「そういう訳だから、色金の話はまた今度にしよう。今は、藍幫に集中すべきだからね」

「……それもそうね」

神崎は、過去にキンジと言い争った時の話を思い出しているのか大人しく引き下がった。

「ところでキンジ……」

「なんだよ」

「レーザービームの攻略法なんてないんでしょ？」

「……ある」

キンジは間が空いて私の質問に目を逸らした。

今ここで、神崎がいるから無理矢理あるって言ったでしょ。

神崎がいなかったら絶対に「ない」って言ってたね、これ。

「本当にあるんでしょね？　なんか、あんた今怪しかったわよ」

早くも神崎さんが疑いの目。

「当たり前だ。ただ、漠然としてるだけでもう少し裏付けとか情報が必要だけだ」

私みたいなはぐらかし方してる。

その言葉に私と神崎を視線を交わして、それから神崎は息を吐いて、私は答えるように苦笑する。

「ま、あたしも霧みたいにキンジを信じるわよ。でも、いつでも頼ってくれて構わないわよ」

神崎は力強く答えた。

そうして、次の舞台への準備は進む。

舞台は『香港』へ――

これからが、第2幕。

『エニグマ』^謎はきつとすぐそこまで、だからね。

G
o
F
o
r
T
h
e
N
e
x
t
S
t
a
g
e
!!